

---

# 白き巫女と蒼き巫女

高階 桂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白き巫女と蒼き巫女

### 【Nコード】

N0563J

### 【作者名】

高階 桂

### 【あらすじ】

朝食寸前にいきなり異世界へと召喚されてしまった女子高生、森 夏希。彼女を召喚したのは、ジンベルと名乗る都市国家で魔術を操る巫女少女、エイラだった。夏希はそこで、進んだ文化と技術をジンベルに伝授する役目を負うように要請される。多額の報酬に釣られた夏希は、それを承諾。以後エイラやその使い魔である奇妙な魔物コーカラット、副官として宛がわれた女性軍人アンヌツカらの協力を得て、ジンベルの発展に貢献する……はずだったが、小さな都市国家の周辺は夏希らの思惑をよそに徐々にきな臭くなっ

てゆく。魔術も使えず、神から異能を授かったわけでもなく、魔法のアイテムも持たないチート能力ゼロの高校生たちは、はたしてジベルを救えるのか……。一見王道の異世界召喚冒険もの、開幕です。

【毎週土曜日夜 定期更新中】      ご注意    ガールズラブ・タグがついていますが百合シーンはほとんどありません。

## 1 愛想のいい魔物（前書き）

本作はごく微量ですが百合成分を含みます。耐性のない方はご注意ください。一応成分が濃厚な話は前書きで明記する予定です。【追記】ガールズラブ・タグは『小説家になろう』の規定により注意喚起のため付与されたものです。本作はいわゆるガールズラブ作品ではありません。ご注意ください。

## 1 愛想のいい魔物

「どこだ……ここ」

とりあえず落ち着こうと、森 夏希は手にしているコーヒーカーツプからお気に入りのモカをひと口飲み下した。

夏希が正座しているのは、どう見てもある種のトンネルの内部であった。幅は一メートルほど、高さはおそらく一メートル半程度だろう。壁面と天井は凹凸が激しく、なにかの道具を用いて掘ったか削った筋目のような跡が歴然としている。床面は一応均されてはいるものの、それでも不用意に歩けば蹴躓いてしまいそうなほど凸凹だ。

夏希は左手を伸ばして、壁面に触れてみた。……硬く締まった、粘土質の土のようだ。わずかだが、指先に湿り気も感じる。色は、かなり赤みを帯びていた。絵の具で言ったら、レンガブリックだろうか。

もうひと口コーヒーをすすった夏希は、ゆっくりと腰を上げた。身長百七十四センチなので、かなり腰をかがめないと頭が天井についてしまう。

穿いているホワイトジーンズのすねに着いた土ぼこりを払った夏希は、天井から二十センチほど離れてぶら下がっている照明に近づいた。ソフトボールくらいの大きさで、中に蛍光管でも仕込んであるのか柔らかな白っぽい光を放っている。トンネル内におそらく等間隔……二十メートルにつき一個くらいか……に下がっているので、あたりは結構明るい。

……あれ。

夏希は眩しさに眼を細めながら、照明と天井のあいだに左手を差し入れてみた。

ない。

電気コードはもちろん、吊るための紐一本たりとも天井と照明の

あいだには存在していなかった。

夏希は訝りながら照明の周囲をぐるりと回り、左手で空間を探った。支えになるような物も、電気を供給するためのラインも、吊り下げるための糸すらも、手に触れることはない。

電源が内蔵されているのであれば、コードがないことは説明がつくが、照明が事実上宙に浮かんでいるのは解せない。

しばし思索した夏希は照明に掌を近づけてみた。ほとんど触れそうなくらいに近づけても、熱さは感じない。夏希は指でそっと触れてみた。

指が、照明の中にめり込んだ。

てつきりガラスかプラスチックの硬質な感触が得られるものだと思いついていた夏希は、予想外の展開に驚いて思わず腕を引いた。

とっさに指先に眼をやるが、別段異常はないようだ。指先の感覚も、正常。

「ふむむ」

唸った夏希は、残り少なくなったコーヒーをひと口飲むと、もう一度照明に触れてみた。指先が、柔らかな光の中にずぶずぶと沈んでゆく。抵抗感どころか、何の感触も感じない。むろん、熱さなども皆無だ。掌が三分の一ほど照明の中へ入ったところで、反対側に指先がちよこんと飛び出した。

夏希は色々と試してみた。照明の中で握り拳をつくる。掌で光を包み込むようにしてみる。そのまま握りつぶそうとしてみる。

……って、遊んでる場合じゃないんだ。

夏希は照明から手を離すと、改めて最前までの自分の行動を振り返ってみた。今日は日曜なので、高校に行く必要がないから起床したのは九時過ぎであった。九時半近くになってから、冷蔵庫の野菜室に入っていた半端な野菜でグリーンサラダを作り、ハム二枚と鶏卵一個でハムエッグを作り、トーストを一枚焼いて朝食の準備をしたことは、はつきりと覚えている。そのあと、シティローストのモカを中挽きにして、ペーパードリップした香り高い一杯を手には、

イニングキッチンのテーブルに着こうとした……あたりで、なんとなく記憶が途絶えている。

夏希は右手のコーヒークップ……中学生の頃から愛用している、青く竜胆りんとんが染め付けられた有田焼の渋い品だ……のぬくもりを確かめた。まだ、冷め切ってはいない。彼女が知る限り、自宅の近くにはこのようなトンネルなどなかったはずだ。だから、突然記憶が途絶え、無意識のうちにふらふらと歩いてここにたどり着いたということはある得ない。

……歩いてと言えば。

夏希は自分の足を見下ろした。素足に履いているのは、室内用のサンダルだ。ほとんど、汚れていない。もし歩いてここにたどり着いたのならば、もっと土や埃が付着していなければおかしい。

夢の中なのだろうか。

夏希は自分の左手をじつと見つめてみた。夢か現実かを判断するには、自分の手を見つめるとよい、と以前に聞いたことがある。現実ならば普通に見えるが、夢だと指が異様に長かったり、妙にぼやけて見えたりするのだそうだ。

……しごくまともに見える。やはり、これは現実らしい。

さてよ。もしかすると……。

夏希は眼を閉じて想像してみた。このトンネル、実は自宅の地下に密かに掘られたものかもしれない。なにかの手違いで、ダイニングキッチンの床に穴が開き、夏希はそこへ落ちて頭か何かを打った。そこで一時的に記憶喪失となり、半ば本能的にトンネルをさまよい歩いていたところで記憶が戻った。それならば、合理的な説明となる。

……いや。それではコーヒークップの中身が無事だったことの説明が見つからない。夏希は運動神経に関して自信がある方だが、ギャグマンガならともかく穴に落ちながらコーヒーをこぼさないなどいうことはありえないだろう。

ふと空気が動いたような気がして、夏希は眼を開けた。

トンネルの先の方に、黒い影が見えた。  
人だ。

……いやな予感がする。

夏希は後ろを振り向いて逃げ道を探した。こんな不思議なトンネルにいる人物。まずまともな人物ではないだろう。

しかし、逃げるにしてもトンネルの中である。逆方向に走る以外に手立てはない。

近づいてきた人は三人ほどいるようだ。いずれも天井に頭をぶつけぬように腰をかがめた姿勢で、なおかつ小走りで接近してくる。

夏希は先頭に行く人物を見て息を呑んだ。

なんと時代錯誤のいでたちであった。膝丈のスクエアネック半袖ワンピース。腰に巻いた布ベルトは、太すぎてさながら男性用の角帯のようだ。素足には、サンダル。見た目は明らかに男性だが、三人とも黒髪を肩の辺りまで伸ばしている。顔立ちは東洋的なのだが、肌の色はやや浅黒く、どう見ても日本人には見えない。

男性が、夏希に向け笑顔を見せた。足を止めて振り返り、後に続く二人に話しかける。

歌うような抑揚。断じて日本語ではない。

夏希の生存本能が、ここから逃げ出せと喚きだした。その一方で、理性の一部がここに踏みとどまって何らかのコミュニケーションを取るべきだと主張している。

男性が微笑みつつ、異国の言葉で話しかけながら歩み寄ってくる。

……今まで聞いたことのない言語である。とりあえず、語調や表情に敵意は感じ取れない。

が……。

男性が布ベルトに挿しているものに、夏希の視線が吸い寄せられた。鞘に収められた、全長七十センチはありそうな剣だ。握りの部分は、二十センチ程度か。となれば、刃渡り五十センチはあるだろう。後に続く二人の腰にも、同じようなものが下がっている。日本であれば、まず確実に銃刀法違反でお巡りさんに捕まるサイズの刃

物である。

夏希は百八十度反転すると、お気に入りのカップを放り出して、走り出した。

幸いなことに、トンネルは一本道ではなかった。

常に前のめりで、しかも頭を下げるという苦しい姿勢で三分ほど走ったところで、夏希は脇道を見つけた。こちらにも、例の不思議な照明が点々と灯っている。夏希は脇道に入り込むと、さらに走った。再び分岐を見つけ、その中に飛び込む。二分ばかり走り、さらに別の分岐点に達したところで、夏希は足を止めた。荒い息をつきながら、耳を澄ます。とりあえず、気配は消えた。どうやら、追っては来ないようだ。

……しかし、連中何者だろう？ それに、この不思議な照明。

夏希が潜り込んだこのトンネルにも、例の宙に浮いている明かりがあり、穴の中を白っぽい光で煌々と照らしている。

とりあえず、出口を探さなきゃ。

一休みした夏希は、再び歩みだした。

「お腹すいた……」

夏希は壁面に背中をあずけると、座り込んだ。

謎のトンネルに迷い込んでから、三時間ほど経っているだろうか。あれから二回、例の三人組に追いかけられ、そのたびに逃げ切ってきた。朝食は採り損ねたし、夜食を食べない主義なので、昨晚の夕食……ちなみにメニューは金目鯛の煮付けと肉じゃがだった……以来固形物は口にしていない。コーヒーを一杯飲んだとはいえ、喉の渴きもかなりのレベルに達している。

……いつそ、あの妙な連中に捕まった方が楽かな。

夏希はそうも思った。武装しているとはいえ、抜き身の剣を手に追ってきたわけではない。言葉が通じそうにないのが厄介だが、とりあえずトンネルの外へと連れ出してもらえるかもしれない。頼め

ば、水くらいは飲ませてもらえるだろう。

「あ、いましましたあ〜」

聞こえてきた場違いな間延びした声に、夏希はぎょっとして顔を上げた。

げ。

見るからに怪しい生き物が、ふわふわと宙を漂いながら近づきつつあった。一見すると、海月くひげのように思える。ややピンクがかった白い肉まんのようなボディと、その下部から伸びている何本もの触手。だが……。

生首。

夏希にはそう見えた。ボディの前面にある、眼と思しき黒い丸。その下方にある、しまりのない小さな口。上部からは、青紫色の髪の毛のようなものがたっぷりと生え、ボディの両脇に垂れ下がっている。

化け物が妖怪の類、としか考えられない。

夏希は弾けるように立ち上がった。

「あ、逃げないでください〜」

怪しい生き物が、喋る。

日本語だ。明らかに、女性の声。ちよつとアクセントがおかしいので、外国人が喋っているように聞こえる。妙に間延びした語尾も、なんだか変だ。

夏希は躊躇した。異形の相手ではあるが、とりあえず日本語は解するようだ。言葉が通じない武装した三人組と、この怪しい生物と、どちらを相手にしたほうが利口だろうか？

「ど〜も〜。始めましてえ〜」

二メートルほどまで近づいた怪しい生物が、宙に浮かんだまま停止した。とりあえず、愛想はいいようだ。

……このまま逃げ回っていても、埒があかないか。いずれ、飢えと渴きで動けなくなることは確実だ。それならば、体力のあるうちになにか行動した方がいい。

覚悟を決めた夏希は、身体ごと怪しい生物に向き直った。いざとなれば、しばき倒すつもりだった。武道や護身術を学んだことはないが、格闘技のテレビ番組とかは結構好きなので、効果的な殴り方や蹴り方くらいは心得ている。

よくよく見ると、怪しい生物は生首には見えなかった。大きすぎるのだ。ボディの直径は六十センチくらいはあるのか。首に相当する部分はなく、ボディの底面からやや青みがかった半透明の触手のようなものが直接数本垂れている。太さは人参くらいで先細っており、長さは一メートルほどだ。青紫の髪はやや波打っており、あのボディを頭部に見立てるとソフトウェーブのミディアムボブといったところか。口には唇がなく、鼻のあるべきところには穴も隆起もない。ポーカーチップくらいの大きさの白目のない黒い眼が、ぱちぱちと瞬きしている。

「わたくし、エイラ様の使い魔で、コーカラットと申しますう」  
怪しい生物が、そう自己紹介する。

「エイラ様？」

「わたくしのご主人様である巫女ですう」

「……巫女が使い魔使うなんて、聞いたことない。それに、使い魔といったら猫とかカラスとかが相場でしょ」

警戒しつつ、夏希はそう指摘した。

「使い魔、なのですから魔物に決まってるじゃないですかあ」

コーカラットが、しまりのない口を震わせてくすくすと笑う。

「あなた、魔物なの？」

「もちろんですう。見た目でわかりませんかあ？」

コーカラットが、ぐるりと一回転してみせた。青紫の髪の毛先が、ふわりと広がる。軽い髪質なのだろうか。

「まあ、いいわ。ここ、どこなの？」

なおも警戒気味に、夏希は訊いた。

「鉱山の坑道ですう。わたくしのご主人様の能力が至らなかつたせいで、こんなところに召喚してしまったのですう。ご主人様に

成り代わって、お詫び申し上げます。」「

そう言ったコーカラットが、ボディを前に傾ける。……お辞儀のつもりだろうか。

「……召喚、て。ゲームやアニメじゃないんだから」

口ではそう言った夏希だが、頭の中ではこの自称魔物の言ったことがどうやら真相らしいことに気付いていた。これが現実だとすれば、異世界かどこかに召喚されたと考えると様々なことが合理的に説明できる。

「それでは、エイラ様のところへご案内します。」「

半回転したコーカラットが、先ほどやってきた方向へふわふわとトンネルを進み始める。

仕方なく夏希はついていった。

「ねえ、コーカラット……さん」

夏希は呼びかけた。

「なんででしょうか。あ、もしよろしければもっと親しげに『コーちゃん』と呼んでいただけませんかでしょうか。」「

前に行くコーカラットが、くるりと半回転し、夏希に顔(?)を見せて言った。

「じゃあ、コーちゃん。わたしを追っかけて来た三人組がいたんだけど、知らない?」

「あれは、防衛隊の兵士です。あなた様を探していたのです。」「

兵士か。道理で武装していたわけだ。

「それと……エイラ様だっけ? その人が、わたしを召喚したの?」

「そうですね。」「

「なんで? いい迷惑だわ」

「申し訳ないです。ですが、ジンベルはあなた様の助力を必要としているのです。」「

相変わらず夏希に顔を見せながら、コーカラット。……どうやら、

前を見ていなくとも前進(？)することは難しくないらしい。

「ジンベル？ 助力？」

「詳しくご説明いたしましょうかあ？」

「頼むわ」

ジンベル王国。人口一万三千足らずの都市国家である。

この国には、王家に仕える巫女一族がいた。名称は巫女であるが、実質的にはある種の魔術を行使する女性魔術師を輩出する一族である。

数世代に一人程度の割合で、この一族の巫女の中に図抜けた能力を持った者が現れる。コーカラットが仕えるエイラも、そのような優れた能力をもった巫女である。そしてその能力を以ってすれば、異世界から有能な人物を呼び寄せる、といったことも可能だ。ジンベル王国はそのように優れた巫女が出現した時代には、異世界から人材を招き、様々な事柄を学ぶことを常としていた。

「有能な人物、ねえ……」

「わがジンベルは豊かな国ですが、まだまだ遅れていますう」

コーカラットが、言う。

「あなた様の優れた知識と経験を活かし、ジンベルに恩恵をもたらして欲しいのですう」

「ふん」

夏希はなんとなく納得した。日本で言えば、十九世紀後半に幕府や明治政府によって雇用されたお雇い外国人みたいなものだろうか。でも、なんでわたしを召喚したわけ？」

夏希はそう訊ねた。通っている高校は地元では結構名の通った進学校だし、そこそこ頭がいいと自負しているが、所詮夏希は女子高生に過ぎない。知識や経験を活かしてもらいたいならば、学者だの技術者だの研究者だの、もっと相応しい人がたくさんいるはずである。

「それは、偶然ですう」。エイラ様の力を以ってしても、特定の個

人を名指しで召喚することはできませんですう。聡明で有能な方、という条件で召喚したら、たまたまあなた様が現れた、というわけですう。」

「迷惑な話だわ」

「申し訳ないですう。あ、出口ですう。」

コーカラットが、後ろ向きのまま前方を触手の一本で指す。

夏希の眼にも、小さな青い矩形が見えた。トンネルの出口から、青空が見えているのだろう。

「ねえ、コーちゃん。あなた、後ろにも眼が付いてるの?」

「魔物ですからあ。」

しまりのない口が、震えた。

## 1 愛想のいい魔物（後書き）

第一話をお読みいただいた皆様、ありがとうございます。お待ちいたしました。新作の連載を始めさせていただきます。ファンタジーです。異世界物です。主役は女子高生です。ほのかに百合っぽいです。狙ってます（笑）

えー、高階はもともファンタジー書きなのですが、ファンタジージャンルでの連載はこれが始めてだったりします。なるうの主流はファンタジーなのに、今までなにをやっていたんでしょうか、わたしは。

本作は異世界ファンタジーです。しかも召喚ものです。ぱりぱりの王道です……と言いたいところですが、すみません、王道じゃありません。最初はきつちりした王道ものを目指し、主役は男子高校生で、しかもハーレム化させて、なるう読者の主流派の皆様にご喜んでもいただけるような作品に仕上げ、しっかりとアクセス数を稼ぐつもりでプロットを立てたのですが……見事に挫折しました。残念ながら、高階に『らぶえつち』を書く才能はございません。仕方なく書きやすいように工夫していったところ、主役はいつの間にか女の子になり、ストーリー展開がスローテンポになり、妙な魔物まで出てきてしまいました。見事に主流から外れた作品ですが……こんな話でよろしければ、どうかお付き合い下さい。

本作の連載ですが、毎週土曜日に五千字超程度の一話を投稿するかたちで行きたいと思えます。ややスローペースですが、遅筆なので御容赦を。

【追記】全体の長さについて、当初は二十万字以上、四十数話との見積もりを立てておりましたが、書き進めたところストーリーが肥大化し、とてもその程度の字数では収まりきらないことが判明しました。現在の予想では全体で百数十話（アバウトで済みません）、字数にして百万字前後に達する可能性が大了。お読みになる場合

は、一応「留意」下せらる。

## 2 都市国家

トンネルの出口は、山の中腹に設けられていた。

「暑い……」

トンネルを抜けた途端に、夏希の身体はむっとする空気と眩しい日差しに包まれた。急いで着込んでいた薄手のセーターを脱ぎ、ドレスシャツ姿になる。気温は間違いなく、三十五度を超えているだろう。湿度は……パーセンテージはさすがにわからないが、ともかくむしむしする。お昼前に通り雨があつたあとの、真夏の午後二時といった感じだろうか。

「坑道は涼しいのですう」。地面の下は冷えていますからあ」

ふわふわと浮かびながら、コーカラットが夏希でも知っていることを解説する。

「そうだ。あの浮いている照明、魔術なの？」

「そうですね」。エイラ様が、以前に掛けたものですう」

夏希は納得した。魔術の明かりならば、電源コードがないこともうなずける。

……って、なに納得してんだろ、わたしは。

コーカラットに従って背の低い樹林の間に拓かれた狭い道を下りながら、夏希はそう思った。魔術が当たり前に使われている王国。愛想のいい奇妙な魔物。ここにむりやり召喚されてから数時間しか経っていないのに、すでに馴染みかけている自分に気付き、苦笑する。

「亜熱帯っばいわね」

左右の樹林を眺めながら、夏希はつぶやいた。樹の枝からは薄茶色の綱のような蔓植物が垂れ下がっており、濃密な下生えの中には羊歯のような葉が多く見える。空気は梅雨時の雨上がりのように少し生臭く、わずかに腐臭さえ含んでいた。地面もぬかるみとまではいかないが、明らかにたっぷりと水分を含んでおり、足を踏み出す

たびにサンダルの底にべちゃつとした感覚が伝わってくる。蝉の仲間なのだろうか、樹林のあいだから妙な唸るような鳴き声が重なり合って聞こえている。さながら、忙しい木工所で複数の電動鋸がいつせいに丸太を切断しているかのようなようだ。

「ねえ、コーちゃん。エイラ様のところに行くには、あとどのくらい歩けばいいの?」

「山を降りて、そこからしばらく歩きますう。大丈夫です、そちらの世界の単位で一時間掛かりません」

「一時間……」

夏希はがっくりと肩を落とした。

「どうかしましたかあ」

「いや、のど渴いちゃって」

夏希はそう答えた。最後に飲料を口にしてから、もう四時間近く経っている。かなり走り回ったうえ、この暑さだ。水でいいから、ひと口飲みたいところである。

「そうですかあ。よろしければ、一杯いかがですかあ」

停止したコーカラットが、触手の一本を夏希に向け差し伸べた。

先細りだったその先端の形状が、水飴のようにうにうにと変化して柄杓みたいな形となる。

半ば呆れて見守るうちに、コーカラットが触手柄杓のカップ部分を自分の顎下に入れた。じよるじよるといふ水音とともに、柄杓の中に液体が注ぎ込まれる。

「どぞぞあ」

液体を満たした触手が、夏希の眼前に差し出される。少しばかり白い泡が立った、黄色っぽい液体だ。

「……どう見ても、尿である。」

「え、遠慮しとくわ」

「おいしいですよあ。冷えてますしい」

触手が、勧めるかのように左右に揺れる。

「いや、ほら。慣れないところの水を飲むと、お腹壊すとか言うじ

やない」

「水じゃありませんよあ〜」

「あ、気持ちは嬉しいけど……」

「そ〜ですかあ〜」

コーカラットが、液体を満たした触手を自分の口にあてがった。中身を、一気に飲み干す。

樹林を抜けると、視界が開けた。

「この都市が、ジンベル王国ですっ〜」

コーカラットが、教えてくれる。

「きれいなところね」

足を止めた夏希は、そう評した。

眼下には、それほど広くはない……直径三キロというところか……多角形の盆地が広がっていた。全体をほぼ二分するような感じで、日差しを浴びて銀色に輝く一本の川が右手から左手へと緩くうねりながら伸びている。黒々とした低層の建物が密集した市街地は右手方向にあり、川はその中を真っ直ぐに貫いていた。平地の半分くらいは耕作地が放牧地らしく、柔らかな緑色をしており、そこかしこに小規模な集落が点在している。それ以外の平地と、周囲を取り巻いている低い山は、もつと濃い緑色の樹林に覆われているようだ。……一見すると、東南アジアあたりの田舎の景観に近いだろうか。山を下りる道はほどなく平坦となり、畑の中を突っ切る狭い道へと繋がっていた。夏希は畑の様子を見て眉をひそめた。植えられている植物は、細長い葉の形状からしてイネ科らしい。しかも、畑の中には水が引き込まれ、作物の根元を完全に覆っている。

……どう見ても、田んぼである。

「ねえ、コーちゃん。これ、何を作ってるの？」

「もちろん、お米ですっ〜」

「……ファンタジーっぽい異世界なのに、お米なんだ」

夏希は釈然としない思いのまま歩き続けた。

十五分ほど田んぼの中を行くと、ようやく市街地が近づいてきた。立ち並ぶ家はどれも丸太で下駄を履かせた高床式だ。板張りの壁と大きく設けられた開口部。屋根は藁や萱に似たなにかの植物で葺いてあるようだ。東南アジアの山奥か、南太平洋の鄙びた島嶼のような雰囲気である。

そこかしこを歩んだり、立ち働いたりしている人々は、いずれも質素な身なりだった。女性は膝上十センチくらいの半袖ワンピース姿で、太い布ベルトを締めている。男性も同様の身なりか、ノースリーブのシャツにだぶだぶのショートパンツ姿が多い。上半身裸の人もある。みな一様に髪が黒く、その顔立ちは東洋的だ。肌は浅黒い人が多いが、これが日焼けのためなのか元々の肌の色なのかは、よくわからない。日よけだろうか、多くの人が植物を編んだような陣笠みたいな被り物を頭に載せている。短躯の人種らしく、男性でも夏希より大柄な人はほとんど見当たらなかった。

彼らは夏希を見てもコーカラットを見ても、特に反応を示さなかった。夏希はともかく、コーカラットの存在には慣れていているらしい。しばらく市街地を歩んだ（？）二人は、かなり広い通りに出た。様々な物品を路上や出入り口の左右に並べた商店らしき建物が、通りの両側に密集している。人通りも、多い。おそらくは、この小都市の目抜き通りなのだろう。

夏希は歩みながら、日除けの下で商われている物品を注意深く観察した。大半は、食品のようだ。枘を使って量り売りされている玄米。何かの雑穀。小麦粉なのか、白い粉末も売られている。大豆。小豆くらいのも、きれいな緑色の豆。生鮮野菜は数も種類も豊富で、見慣れたホウレン草や大根、葉葱、人参といったところに混じってサッカーボールくらいあるサトイモや、トマトと見間違わんばかりの鮮やかな赤いナスなどが並んでいる。乾物をあつかう店もあり、加工して干した肉のようなものや、茸類、それに薄切りの根菜類などを並べていた。なにやら怪しげな色とりどりの粉末や粒を少量ずつ量り売りしていた店は、香辛料などの調味料を商う店なのか、あ

るいは薬屋なのか。

食品に比べると、その他の商品を商う店は少なく、またその品揃えもぱつとしなかった。目に付いたのは、布地を並べた店と、籠や桶などの木製品を商う店、それに皿や壺など焼き物を並べた店があったくらいだ。レストランや喫茶店に相当する飲食店も、ざつと見た感じでは一軒も見当たらなかった。外食産業が発展する段階まで、経済規模とその水準が達していないのだろう。自給自足からやっと抜け出し、分業を確立し、専門職も出現したが、まだ資本の蓄積とその活用段階までは至っていないようだ。日本で言えば、平安後期というところか。

「ここが、王宮ですう」

目抜き通りが尽きたところで眼前に現れた石造りの頑丈そうな建物を前に、やや自慢げにコーカラットが言う。

「ほー。さすがに立派ね」

夏希は石造二階建ての王宮を見上げた。規模としては、田舎の町役場くらいの大きさだろうか。一階部分には開口部が少なく、窓はいずれもかなり高い位置に小さく付いているだけだ。もちろん、ガラスなどは嵌っていない。二階部分には建物を取り巻くように狭いベランダのようなものが取り付けられている。王宮というより、城砦か要塞といった佇まいである。

「そうですう。その昔、蛮族対策で建設された砦がもとになっていますからあ」

夏希がそう指摘すると、コーカラットが身体を揺らしながら答えた。

「蛮族？」

「ジンベル川の上流にある高原地帯は、蛮族の領域なのですう。めつたに争いにはなりません、用心に越したことはないのですう」

「まあいいわ。とりあえず、何か飲ませてよ」

夏希は入り口らしい扉に歩み寄った。中に入れば、水くらい置い

てあるだろう。

コーカラットがすつと前に出て、触手の一本で木の扉を押し開けてくれる。……見た目より、ずつと力がありそうだ。

夏希は戸口をくぐり……慌てて外に飛び出した。

「なにこれ！ 冷たいじゃない！」

「王宮内部は冷やしてありますからあゝ」

「まさか、魔術か何かで冷房してるの？」

「もちろん、魔術の力ですうゝ」

さも当然、といった口調で、コーカラットが言う。

夏希は戸口に身体を置いてみた。戸外に出ている部分は熱い空気に触れているが、王宮内にある部分はひんやりとした空気を感じている。温度で言えば二十五度程度だろうか。あらためて感じてみるとそれほど低温ではないが、炎天下の戸外を歩いてきた身体にはそうとう冷たく思える。

しかし……。

夏希は驚いた。冷たい空気と熱い空気が触れ合っているはずなのに、そこに空気の流れが生じていないのだ。もちろん仕切りなどないし、エアーカーテンなどもない。

「どうなってるの、これ」

「王宮の建物自体に空気交換と冷却の魔術をかけてあるのですうゝ。外気の冷たい部分と内部の空気の熱い部分がここで交換されるのですうゝ」

「なにそのヒートポンプまがいは」

「外気と内部の空気の境界面に魔力を作用させ、熱を吸い込んで反対側に出すのですうゝ。逆に外気の冷たさを吸い込み、内部に放出する仕組みですうゝ」

コーカラットが解説する。

「むしろペルティエ素子っぽいわね。なんだかさらつと物理学の常識を否定された気がするけど……まあいいか」

夏希はそう言いつつ涼しい王宮内へと足を踏み入れた。ふわふわ

と宙に浮いている妙に愛想のいい魔物と親しげに会話しているくらいなのだから、魔術のひとつやふたつ素直に受け入れるべきだろう。「こちらへどうぞお〜」

ほとんど人気のない薄暗い通廊をしばらく歩んだところで、コーカラットが石造りの階段を下りるように促した。

「地下ね」

「そうですね〜」

階段には、魔術の明かり……たぶん坑道にあったものと同じだろう……が灯っていた。降り切った先から伸びている通廊にも、等間隔で明かりが点いている。床は切石がむき出しになっているが、壁と天井には丁寧な板が張られていて、地下らしさを感じさせない造りになっていた。

「ここでお待ち下さいい〜」

コーカラットが、一室へと夏希を招き入れる。

それほど広くない部屋だが、調度はなかなか豪華だった。黒光りする凝った作りのチェストや、金色に光る金属で装飾された書き物机、金属鏡なのか、鈍い光を放っている鏡台などが壁際に並んでいる。夏希はコーカラットに勧められるままに、詰め物が入った布張りの椅子に腰掛けた。目の前にあるテーブルの天板には、色の異なる木片を埋め込んだモザイク画が描かれている。モチーフは、鳥と蝶だった。どうやらこの世界、木工系の手工芸はレベルが高いらしい。

ほどなく戻ってきたコーカラットは、三本の触手で小さな盆を捧げ持っていた。ガラス製の美しいコップと水差しが、載っている。

「エイラ様はすぐに参りますう〜。もうしばらくお待ち下さいい〜」  
そう喋りながら、コーカラットがコップに水差しの中身を注いでくれる。夏希は水差しの中に氷が浮かんでいるのに気付いたが、黙っていた。どうせこれも、魔術で作ったのだろう。こんなことでいちいち驚いていては、身が持たない。

「ありがとう」

夏希はコーカラットが差し出したコップを受け取ると、中身を一気に飲み干した。味からすると単なる水だったが、驚嘆するほど旨く感じられた。夏希が握ったままのコップに、コーカラットがお代わりを注ぎ入れる。夏希はそれも一気に飲み干した。

三杯目をゆつくりと味わいつつ、夏希はコップをしげしげと眺めた。感触も見た目もガラスだが、透明度がいまひとつで、おまけに分厚く、かたちもややいびつだ。ガラスの加工技術は、まだまだ未熟なようだ。

「そうだ、コーちゃん。わたし、元の世界へ帰れるんでしょうね？」  
夏希は肝心なことをコーカラットに尋ねた。

「もちろんですう。希望すれば、エイラ様の魔術で帰ることができそうです。ただし、召喚とその取り消しにはかなりお金が掛かるので、頻繁に行き来したりするのはむりですう。」

「お金？」

「はいい。召喚の儀式に使う植物や金属、あるいは細工物などの中には、ジンベルでは手に入らないものが多いのですう。それらは高いお金を払って他所の国から分けてもらわねばならないのですう。」

「他所の国？ 外国が、あるんだ」

「もちろんですう。」

夏希はうなずくと、またひと口水を飲んだ。どんな国があるのだろうか。それらも、このジンベルと同様の文明レベルなのだろうか。

## 2 都市国家（後書き）

第二話をお届けします。事情によりいつもより早い時間となります。次回投稿は通常ならば一月二日の予定ですが、遅れる可能性があります。御了承ください。

### 3 巫女少女

不意に、夏希の耳に女性の声が届いた。慌てて顔を上げた夏希の眼に、歩み寄る妙な装束の少女の姿が飛び込んでくる。

純白の浴衣のような服は裾が長く、足首までを完全に隠している。腰にベルトのように巻いているのは、どう見ても荒縄である。年の頃は十三、四というところか。ごく淡い褐色の丸顔に、胸の辺りまである真つ直ぐな黒髪。頭天边には、白いスカルキャップみたいな被り物がちょこんと載っている。顔立ちはきれいだが、いまひとつ表情に生気がなく、小柄で華奢な身体つきも相まってどこことなく人形っぽい。

その少女が、立ったまま夏希に向かって丁寧に一礼した。夏希は座ったまま礼を返した。

少女が、何か言う。

……夏希にはまったく理解できない言葉である。

「エイラ様は、ようこそいらっしゃいました、とおっしゃっております。」

うるたえかけた夏希に向け、コーカラットが通訳してくれる。

「お名前をうかがってもよろしいか、とも訊いていらっしゃいます。」

「お名前……」

夏希はちよつと思案した。ここは偽名でも名乗るべきだろうか。いや、そんなことしても意味ないか。

「えーと、夏希でいいわ」

夏希の返答を、コーカラットが通訳する。わずかに笑みを見せたエイラが、数語喋る。

「エイラ様は、夏希様に対し魔術を掛けてよいか、とお尋ねです。」

「魔術？ だめよ、そんな」

夏希は即座に拒否した。

「言語の魔術ですが、それでもだめですかあ〜」

「言語の魔術？」

「これを掛けてもらえば、ここの言葉が自在に操れるようになりま  
すけどお〜」

コーカラットが、そう説明する。

「……それは便利ね」

夏希はしばし考えた。コーカラットという通訳がいるとはいえ、  
ここジンベルの人たちと言葉を通じるのは大いに利点があるだろう。  
わざわざ夏希の承認を得ようとしていることから見ても、エイラが  
危ない魔術をむりやり掛けたいとか思っている訳ではないらしい。  
「それならいいけど……その魔術、痛かったりやたら時間が掛かっ  
たり、変な副作用とか後遺症とか残ったりしない？」

「そういうことは、まったくないですう〜。ちよつと眩しいですが、  
すぐに終わりますですう〜」

コーカラットが、請合う。

「じゃ、いいわ。やってちょうだい」

夏希はコーカラットにそう言つと、立ち上がってエイラに近づき、  
正対した。そばに立つと、彼女の小柄さがはつきりとわかる。背は  
夏希よりも二十センチ以上低いだろう。おおよそ、百五十センチ  
よつとというところか。

「どうぞ。遠慮しないで、掛けていいわよ」

通じていないことを承知で、夏希はそう呼びかけた。同時に促す  
かのように、小さくうなずいてやる。

エイラが何かひとこと言ってから、胸の前で手指を動かし始めた。  
いわゆる印を結ぶ、とかいう動作なのだろうが、夏希には見えない  
糸で一人綾取りをしているようにも見えた。

と、いきなり夏希の視界が赤い光に包まれた。それは一瞬で消え  
る。回転赤色灯を眼前に突きつけられたかのような感じだった。

「いかがですか？」

エイラが訊いてくる。

わお。日本語じゃないのに、なに言ってるかわかる。

「すごい。ねえ、わたしの言ってること、わかる？」

「はい、理解できます」

夏希の喋る日本語を聞いたエイラが、こつくりとうなずく。

「まず最初に謝罪させていただきます。わたくしの未熟さゆえ、夏希殿を坑道の中などという妙な場所に召喚してしまい、ご迷惑をお掛けしました」

深々と、エイラが頭を下げる。……いささか愛嬌に乏しいが、悪い娘ではなさそうだ。

「おおよそのところはコーちゃんからお聞き及びと思いますが……いかがでしょう、夏希殿の知識と経験を我らジンベルの民に分け与えてくださいませでしょうか？」

「そう言われても、わたしここの事よく知らないし……」

夏希はそう言葉を濁した。

「ご安心下さい。夏希殿が望めば、いつでも元の世界へ送り返してさし上げます」

エイラが請合う。

「でも、元の世界の方で、親とか友達とか色々心配してるんじゃないかと……」

「それは、大丈夫ですう」

コーカラットが、口を挟んだ。

「お帰りになるとときには、召喚された直後に戻すことができるのですう。だから、心配ないのですう」

「そういうことなら、あなた方に協力してもいいと思うけど……」  
夏希は考え考えそう言った。とりあえず身の危険はないようだし、せつかく異世界に来れたのだから、すぐに戻ったりせず、色々見てまわったりもしてみたい。

「では、さっそく国王陛下に謁見していただきます」

エイラが、扉の方を手で指し示した。

「国王陛下？ ジンベルの、国王に？」

「そうです。契約内容を詰めねばなりません」  
相変わらず無表情なまま、エイラが言う。

「契約内容？」

夏希は首を傾げた。

「夏希様はジンベルに先進文化と技術を伝授するために召喚されたお方なのですか？」

コーカラットが、再び口を挟んだ。

「だから、契約しなければならぬのです。」

「わたくしたちは文明人です。労働と献身には、報酬をもって報いるのが、常識ではありませんか？」

エイラがその細い眉を上げて、夏希を見上げた。

「ようこそジンベルへ。夏希殿」

ヴァオティと名乗った国王が、明るい口調で歓迎の言葉を述べる。なんと気さくな『謁見』であった。ちよつと固い感触の詰め物が入った布張りのカウチに座った夏希の前には低い大きなテーブルがあり、正面に同じようなカウチに掛けた国王がいる。国王の左方にはエイラが、肩の上あたりにコーカラットを従えて座り、右方には王妃か王女か、それとも愛妾か、あるいはひよつとして高位の廷臣なのかも知れないが、髪の高いきれいな若い女性が座っている。

夏希と国王の目の高さは一緒だし、状況からして直答も許されるらしい。謁見と聞いて平伏とかさせられるのかと危惧していた夏希は、安堵すると同時に、いささか拍子抜けしていた。侍女らしい中年の女性が冷たい飲み物を注いでくれたので、貴人への謁見と言うよりはちよつと気取ったお茶会程度の雰囲気だ。

「……あー、お目にかかれて光栄です、国王陛下」

夏希はなんとかその場に相応しそうな返答をした。ヴァオティ自体も、目尻の下がった柔和な丸顔で小太りという威厳というものが微塵も感じられない中年男なので、なおさらお茶会度は高くなる。

「紹介しておこう。娘のイブリスだ」

国王の言葉に、長い黒髪の女性が微笑みながら夏希に向かって鷹揚にうなづく。年齢はおそらく夏希よりも少し上だろう。眼が細く、ややきつい顔立ちだが、なかなかの美人だ。夏希は座ったままぺこりと礼を返した。

「詳細はエイラから聞いていると思うが……わがジンベルは夏希殿がいた世界よりも相当遅れている。そなたの経験と知識を活かし、わが民を教え導いて欲しいのだ」

飲み物が入ったガラスコップ……オニオンスライスそっくりなものがたつぷりと底の方に沈んでいる冷水……からひと口飲んだ国王が、そう切り出した。

「わたしにそのような大役が務まるでしょうか？」

「謙遜することはない」

国王が、軽く首を振る。

「エイラの腕前は確かだ。高い知能と見識を持ち合わせた善良な人物を召喚してくれたはず。そうだな？」

「はい。もちろんです、陛下」

国王の言葉に、エイラがうなづく。

「当然ながら、待遇はそれなりのものを用意させてもらう。まず、夏希殿を貴族として迎えよう」

「……貴族」

夏希は面食らった。現在の日本には、皇族を別格とすれば貴族はいない。ジョークであれ何であれ、貴族を自称している人はいるが、一部の芸能人を除けばみんな痛い人たちだけである。いきなりそんなものに取り立てられても、別にありがたくはない。

「相応しい住居と召使も与える。もちろん、食費その他の経費も支給しよう。その上で、報酬だが……」

国王が、ぼんぼんと手を叩いた。すぐに二人の男性が現れ、テーブルに木箱を置いた。持ってきた様子と置いた時のテーブルの揺れ方からして、中身は相当重いものだ。夏希は見当をつけた。

「一年で、これを与える」

国王が手ずから木箱を開ける。

眩い輝き。

どう見ても金きんであった。ぴかぴかした光り方ではない、むしろやや赤みがかつたような、独特の輝き。延べ板というのだろうか、手のひらサイズのものが、ぎっしりと詰まっている。

夏希の眼が輝いた。やはり女性、光り物は好きである。大の男二人がかりで持ってきたと言うことは、低めに見積もっても十キログラム以上はあるだろう。となれば、総額数千万円は下るまい。いやいや。

夏希は自分を戒めた。江戸時代の小判の中には、金の含有率が二分の一程度の粗悪なものもあつたはずだ。この延べ板もそんなまがい物なのかもしれない。

「よろしければ、手にとつてご確認くださいい」

夏希の心を読んでいたかのように、コーカラットが説明を始めた。「純度に関しては、申し分ありませんです」。魔術で精錬しますから。フォーナインレベルです」

「フォーナイン……って、なんでそんな言葉知ってるの？」

フォーナインとは、純度99.99%の事実上の純金を指す用語である。

「魔物ですからあ」

夏希の突っ込みに、コーカラットがおなじみのフレーズで答える。一年でこの報酬なら、悪い話ではない。いや、むしろおいしい話と言つていい。時給に直すと一万円くらいになるのではないだろうか。

夏希は頭の中で電卓を叩いた。総額を控えめに見積もつて三千万円だとして、これを三百六十五で割つて……。

まてよ。

「あのー、陛下。一年って、何日ですか？」

夏希は遠慮がちに訊いた。異世界なのだから、暦が違っている可

能性は高い。こちらの一年が元の世界の三十年に等しい、などということならば、向こうでバイトでもしたほうがよっぽどお金になるだろう。

「うむ。一年は四百五日だ」

「やっぱり……」

夏希は安堵した。確かめて、良かった。

「ご安心下さい、夏希様あゝ」

コーカラットが、言う。

「確かに一年の日数はこちらの方が多いですが、一日の長さはこちらの方が短いのです。おおよそ、二十一時間半で、一日が終わります。ですから、一年の長さは夏希様のいらっしゃった世界よりも若干短いのです。うゝ」

「へえ。そうなんだ」

眩い金の輝きを前にして、長時間抵抗を続けられる者はそう多くないだろう。夏希もそれなりに俗物である。口頭での契約ではあったが、いつでも彼女の意向（意向内容の如何を問わず）で解消できるといふオプション付きで、夏希は一年間に渡り、双方の合意があれば延長可能との条件も入れて、ジンベルに文化と技術を伝える役目を担うことを承諾した。

「とりあえずお住まいなど決めねばなりませんね。担当の者を付けましよう」

王宮の通廊を歩みながら、エイラが言う。

「……その前にお願いだから、ごはん食べさせて」

夏希は搾り出すようにそう言った。国王の前では我慢していたが、もうそろそろ限界である。先ほどから腹は鳴りっぱなしだし、わずかだが胃痛さえ感じている。

「空腹でしたか。失礼しました。コーちゃん、夏希殿をお願いね。

わたくしは手続きをしてまいりますから」

「承知しました、エイラ様あゝ」

夏希に目礼してから歩み去るエイラに向け、コーカラットが高く持ち上げた触手の一本をひらひらと振る。

「では、小食堂のひとつを借りますですう。こちらへどうぞお〜」  
夏希はコーカラットに導かれるままに、一室へと足を踏み入れた。四人掛けくらいの角テーブルと腰掛が置いてあるだけの、簡素な部屋だ。

「しばらくお待ちくださいい〜」

そう言っただけ消えたコーカラットが、十分ほどで大きな盆を持った若い女性を連れて戻ってきた。コーカラット自身も、五本の触手で陶製らしいポットとカップ、それに果物らしい鮮やかな色彩の物体が盛られた籠を支えている。

若い女性が、盆から食器類をテーブルに移し、一礼してそそくさと出て行く。

「どうぞ、お召し上がりくださいい〜」

ポットから湯気の立つ液体をカップに注ぎ入れながら、コーカラットが勧める。

「……て、牛丼？」

夏希はメインらしい陶器の鉢を見て眉をしかめた。やや褐色がかった米飯が盛られた上に、加熱処理されたと思われる肉の薄切りが載っている。しかも、鉢の隅には紅生姜ならぬ『がり』にそっくりなものにかの薄切りが添えられている。

夏希は他の皿に眼を移した。パン皿ほどの平皿には、小ぶりな焼き魚の切り身が三つ載っている。小皿ふたつには、茹でた青物と得体の知れない黄土色のペースト。……ひよつとして、味噌か？

とにかく空腹である。夏希は添えられていた箸で食事を開始した。牛丼もどきの上に載っていた肉は牛肉の味がしたものの硬く、安い輸入牛の赤身を思わせた。味付けは塩と、なにかの香辛料を使ったと思われる辛味だけ。……焼き過ぎた安い焼きタン塩に山椒を軽く振った感じ、と言えば近いだろうか。米はいわゆる長粒種らしく、粘り気が少ないばさばさとしたものだったが、変な臭いもなく、普

通に食べることができた。『がり』らしきものはやはり味からして生姜で、おそらくは単なる塩漬けと思われた。

箸も曲者だった。竹製のようだったが、やたらと長いのだ。よく中国の庶民が握り箸でどんぶり飯を掻き込んでいるのを映画などで見かけるが、あのような感じに使うためだろうか。

夏希はコーカラットの注いでくれたお茶で喉を潤しながら、食事を続けた。お茶は色といい味といい緑茶だった。ただし甘味がほとんどなく、中途半端に花のような香りがする。茶葉自体の香りが良くないので、なにか混ぜているのだろうか。

焼き魚は川魚らしく淡白な味わいでそこそこおいしかった。青物はほうれん草に似た味だったがえぐ味が強く、また青臭さが鼻について食べにくかったが、黄土色のペーストを添えて食べると結構おいしく食べることができた。ペーストは細かく刻んだ大豆のようなものがたくさん入っていて、見た目や食感手作り味噌風だったが、味はまるやかな塩気と焦がした醤油のような香ばしい香り、それにこくのある旨みがあった。

「果物はいかがですかあ〜」

おおよそ平らげ終わったあたりで、コーカラットがそう声を掛けてきた。

「いいわね」

夏希は果物籠に眼をやった。柑橘類らしいオレンジ色の球体。それよりもやや小ぶりの真紅の球体。かぼすにしか見えない緑色の小球。小玉西瓜サイズのレモン。薄紫色の洋梨。淡いピンク色の胡瓜がバナナのように房状に固まったものなどが、盛られている。

「どれがおいしいの？ 甘いのが、いいな」

「それでしたら、これですねえ〜」

コーカラットが、触手を伸ばして薄紫の洋梨を取り上げた。

「ちよつと待っていてくださいい〜」

コーカラットが、二本の触手で洋梨を支え持った。伸びてきた別の触手の先端が、すつと紙のように薄くなる。

二本の触手が、洋梨をくるくると回し始めた。薄くなった触手がそれに触れると、洋梨の皮が削られ始める。ものの三秒ほどで、洋梨の薄紫色の皮は剥かれて、薄いクリーム色の果肉が露になった。

「……コーちゃんの触手って、便利ね」

あまりの早業と切れ味に半ばびびりながら、夏希はそう言った。

「魔物ですからあゝ」

コーカラットがもう一本触手を追加し、ふたつ割にした果肉の中心部にあった梅干大の種を取り除く。さらにもう一本の触手がテーブルから空いている小皿を取り上げる。先端がナイフ状になった触手が素早い動きを見せ、八切れくらいに分割された洋梨がきれいに皿の上に盛り付けられた。

「どぞおゝ」

コーカラットが、小皿を夏希の前に置く。夏希は礼を言ってから一切れ箸でつまんで食べてみた。食感のアボガドに似ていたが、味は洋梨と同じだった。

### 3 巫女少女（後書き）

第三話をお届けします。お正月特別体制につきやはり二日には投稿できませんでした。お詫び申し上げます。四話以降は通常どおり土曜日投稿に戻る予定です。

## 4 副官

「アンヌツカと申します。エイラ様から、副官としてお仕えするよ  
うに命じられました」

二十代半ばくらいに見える女性が、深々と頭を下げた。

「副官つて……軍隊じゃないんだから」

夏希は苦笑した。

例によって彼女も黒髪だが、ジンベルの女性としては珍しく短く刈っており、ベリーショートに近い。顔立ちもやや厳つく、ボーイツシュだ。背は百七十センチ近くはあるうか。これもジンベル女性としては、相当に高い方だろう。服装も普通のジンベル女性とは異なり、ボディラインがはっきりとわかるくらいタイトな半袖シャツと、ゆったりとしたハーフパンツというものだ。腕や脚もやや太めで、しっかりと筋肉が付いている。

「一応ジンベル防衛隊の士官ですので」

堅苦しく、アンヌツカが頭を下げる。

「まあいいわ。夏希よ。よろしく」

「さっそくですが、宿舎を決めねばなりません。王宮内にお部屋を手配することは可能ですが、空き部屋がほとんどありませんので、かなり窮屈なお住まいになってしまうと思われます。ですから、当面エイラ様のお屋敷に間借りされ、そのあいだに郊外に邸宅をお建てになるのがよろしいかと」

「邸宅？」

「もちろん、費用手続きその他は王国がすべて取り仕切ります」

生真面目な表情のまま、アンヌツカが告げる。

「邸宅ねえ……」

夏希は首をひねった。まあ、ジンベルの一般家屋の形状と規模からして、邸宅と言ってもたいしたものではないだろう。ちょっとおしゃれな貸しバンガロー、といったレベルに違いない。

「いいわ。そのあたりはお任せします」

「かしこまりました。ではエイラ様のお屋敷へ御案内します」

アンヌツカが、夏希を王宮の外へといざなう。

「暑う」

戸外へ一歩踏み出した途端、夏希は萎えた。しばらく魔術の冷房が効いた室内にいたせいで、暑気がきつく感じる。

「この暑さには慣れなきゃいけないわね。ねえ、アンヌツカさん。

ジンベルって、一年中こんなに暑いのか？」

街路を歩みながら、夏希はそう訊いた。周囲の山々に生い茂っている植物の様子からして、寒い冬が来るとは思えない。

「はいそうです、夏希様。一年に二回雨季がありますが、気温は下がりません。昼間はほぼ毎日、同じように暑いんです。……夏希様のいらっしやったところは、暑くないのですか？」

アンヌツカが、訊いてくる。

「こんなに暑いのは、せいぜい二十日から三十日くらいね。あとはもっと過ごし易いわ。ねえ、寒いって感覚、わかる？」

「わかりますけど」

アンヌツカが、怪訝そうな顔をする。

「わたしがいたところには、冬と呼ばれる時期があるのよ。その頃には、空気が冷たくなるの。王宮の中よりも、水よりも冷たくなるの。氷は知ってるでしょ？」

「はい、夏希様。魔術で造る硬い水ですね」

「それが、自然にできちゃうほど寒くなるのよ。雨が氷の小さい粒に変わって、空から降ってきたりもするわ」

「……そんな世界で、どうやって生きてゆけるのですか？」

アンヌツカが、首を傾げる。

「まあ、色々と方法はあるのよ」

夏希は適当なところで話を打ち切った。暖房や断熱、防寒具などの説明を始めたら、何時間掛かるか見当も付かない。

「それはともかく……夏希様って呼ぶのはやめてよ。堅苦しすぎる

わ

「しかし、夏希様は貴族でいらつしゃいます」

「じゃあ、その貴族として命令します。様付けをやめてちょうだい」  
夏希はきつぱりと言った。年上の女性に様付きで呼び掛けられていい気分になれるほどの虚栄心は持ち合わせていない。

「ご命令とあらば従いますが……僭越ながら意見を述べさせていた  
だいてよろしいでしょうか」

やや目を細め、遠慮がちに夏希を見上げながら、アンヌツカが言  
う。

「……いいけど？」

「ジンベルには他の貴族の方もいらつしゃいます。仕える市民に略  
式で呼ばれる貴族がいれば、他の貴族の方々は面白く思わないでし  
よう」

「なるほど」

社会のルールに従え、というわけか。

「わかったわ。夏希様でいいわよ」

「それから、わたしのことはアンヌツカと呼び捨てにしてください。  
よろしいですね？」

「了解。アンヌツカ」

エイラの屋敷の中は、思ったよりも涼しかった。せいぜい二十七  
度前後だろう。湿気があるから快適とは言いかねるが、運動でもし  
ない限り汗が吹き出るようなことはない。

「ここも魔術を掛けてあるの？」

「いいえ。魔術で冷やした水を流してあるだけです」

アンヌツカの説明によれば、ジンベル市街地にある家屋にはすべ  
てこの冷却水による冷房システムが備え付けてあるのだという。付  
近の五つの山の中腹から湧き出る水を魔術の力で冷やし、地中に埋  
め込んだ導水管によって街外れまで導き、そこから枝分かれした何  
百本もの管が各戸を巡って室内を冷やすのだそうだ。温くなった水

は各家庭や、市街地内に設けられた数十箇所共同施設で生活用水として消費される。比較的きれいな排水は周辺の田畑に繋がる用水路に流され、汚れた排水は川に導かれる。

「ほう。進んでるわね。でも、各戸に冷却の魔術を掛けた方が、効率がいいんじゃない？」

「それでは魔術の濫用になります。冷却の魔術を使えるのは、王宮と医学院だけ、と昔から決められているのです」

アンヌツカが言う。

「医学院？」

「病気や怪我を負ったものが收容され、医学を研鑽する者によって治療される施設です」

「……いわゆる病院の概念がないんだ」

おそらくは、医学関係の私塾兼治療所みたいなものである。夏希は苦笑しながら手を伸ばし、廊下の隅を走っている金属管に触れてみた。たしかに、ひんやりとしている。

「しかし立派な金属パイプね。これも、魔術で造ったの？」

「これは輸入品です。ニアンの品ですね。金属の加工に優れている都市国家です」

アンヌツカが説明する。

すでにエイラから連絡が入っていたようで、夏希は家令だと自己紹介した初老の男性に、すぐに一室へと案内された。畳を敷いたら十二畳くらいはありそうな角部屋で、二ヶ所に窓が付いている。調度は、寝台（ベッドと呼ぶにはあまりにもお粗末だった）がひとつ、小さなテーブルがひとつ、腰掛がふたつ。背もたれ付きの椅子がひとつ。隅の方には用途のわからない木箱が、ぼつんと置いてある。

「夏希様専属の侍女は、今手配しているところです。明日までには連れてまいりますのでもうしばらくお待ち下さい。なにか御用がごありの場合は、声を掛けていただければすぐに誰か参りますので、なんなりとお申し付け下さい」

白髪の家令が深々と礼をして、去ってゆく。

「何かご指示はございますか？」

とりあえず椅子に腰掛けた夏希に向かい、アンヌツカがそう問う。  
「立っている必要はないわ。座ってよ」

夏希は腰掛のひとつを指差した。アンヌツカが一礼してから、腰を下ろす。

「当たり前の話だけど、わたしジンベルのことをよく知らないのよ。いろいろと、教えてほしいわ」

夏希はそう言った。国王に、『民を教え導いてほしい』などと頼まれて契約したが、実際になにをどのように教授すればいいのだろうか。優先順位などの目星は付けておきたいところだし、中には伝えてはまずい事柄もあるだろう。例えば、住民に近代民主主義の概念を植え付けたりしたら、ヴァオティ国王は喜ぶまい。

「そうですね。では、まずこのジンベルについて御説明いたしまし  
ようか」

アンヌツカが、滔々と語り始めた。ジンベルの歴史の概略を述べたのち、歴代国王の業績に移る。

「ち、ちよつと待って」

夏希は慌てて止めた。とても覚えきれぬ内容ではない。

「ノート取らなきゃ無理だわ。紙とペン、ないの？」

「探してまいりますよ」

立ち上がったアンヌツカが足早に部屋の外に出てゆく。しばらくして戻ってきた彼女の手には、いくつかの品物があった。

「お待たせしました」

アンヌツカが手にした物をテーブルに置く。

「これが……ペン？」

夏希は木の棒を取り上げた。十五センチくらいの長さの細い棒で、尖った先端が青黒く染まっている。たぶん、つけペンみたいにして使うのだろう。

「これを」

アンヌツカが、小さな陶器の壺を差し出した。おそらく簡単に倒

れないようにする工夫だろう、妙に下膨れた重い壺だった。木製の栓を抜くと、油臭い臭いが夏希の鼻をついた。

紙は五枚ほどあったが、爪磨きに使えそうなほどざらざらしており、色も妙に黄ばんでいる。

「まずは紙とペンの改良から始める必要があるそうね」

ペン先（？）を壺に浸しながら……ちなみに中身はさらりとした液状ではなく、蜂蜜くらいの粘性をもっていた……、夏希はそうつぶやいた。

夕食の雰囲気は、ぎこちないものだった。

食堂のテーブルに着いているのは、両親ですとエイラが紹介してくれた中年の男女と、当のエイラ、それに夏希の四人のみ。それがジンベルの風習なのか、あるいはエイラの家習慣なのか、食事中は誰も喋らずに、黙々と食物を口に運ぶだけ。ちなみにメニューは塩気のきつい淡水魚と野菜のスープ、数種の塩漬野菜、香辛料で味付けした茸と野菜の炒め物、炊き込む時になにか混ぜ込んだのか、柔らかな辛味がついた米飯といったシンプルなものであった。飲料は、冷えた水と温かな緑茶だ。

エイラの母親は娘そっくりの、小柄できれいな人だった。父親も小柄……夏希よりも頭半分低い……だがハンサムな中年だ。ふたりとも礼儀正しく接してはくれたが、どうも態度がよそよそしい。居候として押しかけたことが気に喰わないのだろうか。

食事が終わると、両親はそそくさと食堂を出て行った。夏希は悠然と食後のお茶を楽しんでいるエイラににじり寄ると、両親の態度についてそれとなく尋ねてみた。

「それは、あなたが異世界の人だからです」

わずかに苦笑しつつ、エイラが言う。

「わたくしは召喚した張本人だし、陛下や軍人のアンヌツ力は感情を抑制する術すべを知っています。ですが、母はごく普通の巫女だし、父は中堅官僚です。異世界から来た人物と、簡単には打ち解けられ

ませんわ」

「……そうか」

夏希は納得した。

「では、わたくしはもう休みます。なにか用事があるときは、侍女のキャレイを呼んでください。夏希殿のお部屋を出て廊下を左に進んだ突き当りの部屋におりますので」

立ち上がったエイラが、教えてくれる。

「もう寝るの？」

「夜ですからね」

エイラが真顔で言う。

夏希の体内時計は、まだ午後七時くらいであった。眠気など、皆無だ。

……そういえば、この一日は短いんだっけ。

ジンベルの人々は、この短い一日に合わせて睡眠のサイクルを身につけているのだろう。これに慣れないと、不眠症で苦しむことになりかねない。

「勉強でもするかな……」

エイラのあとについて食堂を出ながら、夏希はそうつぶやいた。アンヌツカが語った内容を綴ったメモを、読み直すのもいいかもしれない。

「そうそう、明かりをお渡しするのを忘れていましたわ」

夏希の部屋の前で立ち止まったエイラが、手早く印を結びながら何かを唱える。すぐに、彼女の胸の前に光る球体が出現した。坑道や王宮内にあった、例のやつだ。

「どうぞ、お使い下さい」

「どうぞ、って言われても」

夏希は戸惑った。

「……そうでした。使い方もお教えしなければいけなかったのですね」

エイラが軽いため息と共に微笑を浮かべる。

「こうすると、持ち運ぶことができます」

エイラが球体の天辺に指を触れてから、部屋の中に入ってゆく。光る球体はエイラの指先にくっついたままだ。部屋の中が、白色蛍光管に似た白っぽい光で満たされる。

「離せば、任意の場所に浮いています」

腕を上になし上げたエイラが指をぱつと離す。球体は、光を発したまま床から百八センチくらいの高さに静止していた。

「面白いわね」

夏希は指を伸ばし、球体に触れた。腕を引く。

球体は動かなかった。

「あれ？」

もう一度やってみる。今度も、球体は動かなかった。

「触れる指は一本だけ。触れた瞬間に、軽く指の腹で押さえるようにしてください」

エイラがアドバイスする。

夏希は何度かトライした。五回目で、やっと球体指先にくっつく。

「離す時はどうするの？」

「置きたい場所で、他の指を使って強く短く押してください」

エイラが、指の動きを夏希に見せながら、説明する。

離すのは、簡単だった。何の抵抗もなく、球体指から離れ、宙に浮く。

「便利だけど……これ、消す時どうするの？」

「消せません。魔術の光ですから、半年は持続します」

「……眩しくて寝れないよ？」

「この箱を、使います」

エイラが、部屋の隅においてあった木箱を拾い上げた。蓋を開け、球体の中に収める。途端に、室内が薄暗くなった。蓋の閉め具合で、光量も細かく調整できるようだ。

「なるほど」

「では、わたくしはこれで」

球体を指に着ける練習をしている夏希に向かい軽く一礼したエイラが、部屋を出て行くこうとする。夏希は慌てて呼び止めた。

「ねえ、お風呂は？」

「……夜はありませんが」

「はあ？」

夏希はエイラに説明を求めた。……彼女の話によれば、ジンベルの風呂というものは昼間に営業する公衆浴場だけだそうだ。

「……そんな。お風呂がないなんて」

夏希はがつくりと肩を落とした。一時間くらいは長風呂のうちに入らない、と思っているほどの風呂好きである。入浴しないで就寝することなど、想像すらできない。

「水浴びならばできますが、普通夕方か朝に行くものですね。夏希殿は、夜に水浴びをなさりたいのですか」

エイラが小首を傾げつつ、眉根を寄せた。

「いいでしょう。コーカラットに頼みましょう」

#### 4 副官（後書き）

第四話をお届けします。

## 5 水浴び

「夜に水浴びをご所望とは、酔狂なお方ですう」

コーカラットが案内してくれたのは、庭の一隅にある小さな小屋だった。ちなみに、彼女の触手の一本の先に光る球体がくっついてるので、足元は明るい。

「どぞお」

小屋のすだれのような目隠しを触手で巻き上げたコーカラットが、ふわふわと中に入ってゆく。夏希もあとに続いた。

湿気を籠らせないためだろうか、なんとも開放的な小屋だった。太い四本の柱に支えられた屋根。壁は一面にしかなく、軒から下がすだれが三方に掛かっている。床は玉石が敷き詰めてあり、隅には排水用だろう、切石を組み合わせた溝が設けられている。中央には、直径一メートルはありそうな巨大な桶。

柱の一本からは、細めの金属パイプが二本延びていた。どちらの先端にも、木栓が刺さっている。木栓には紐がついており、パイプに結び付けてあった。

「こちらが温かいお水ですう」

コーカラットが、触手で右側の木栓を抜いた。パイプの先端から、水がほとばしる。おおよそ、薬缶から注ぐときくらいの勢いと水量か。

「邸内を巡って温くなったお水が出ますですう。もうひとつの方は冷たいままのお水が出ますですう」

流れ出す水が、徐々に桶に溜まってゆく。夏希は侍女が準備してくれた着替えやタオルの類を、壁に作り付けになっている棚の上に置いた。生成りのワンピースは手触りからして薄手の麻で、タオルも同じく麻だった。

「……ってこれ、タオルとは呼べないよね」

夏希は大判の布を広げてみた。単なる平織りの麻で、ループにも

なっていないし起毛もしていない。大きな手拭い、と呼ぶ方がふさわしいだろう。

十センチほど水が溜まった桶に指を浸してみる。……温水プールくらいの温かさだ。

「ねえ、コーちゃん。石鹸とか、ないの？」

「石鹸とは、なんででしょうかあ」

コーカラットが、戸惑ったかのようにふらふらとそのボディを揺らす。

夏希は小さくため息をついた。石鹸すら無いとは。まあ、手拭いでごしごしと擦れば、それなりに身体はきれいになるだろうが。

充分に桶に水が溜まったところで、夏希は服を脱ぎだした。水色のドレスシャツのボタンを全部外し終えたところで、コーカラットの存在に気付く。

「あの、コーちゃん。今から水浴びするから、外、出ててくれな  
い？」

「エイラ様からお手伝いするように言われてますですう」

小さな手拭いを触手に巻きつけ、背中を流す気満々で、コーカラットが言う。

「いや、あの、恥ずかしいから」

「わたくしは魔物ですう。恥ずかしくありません」

「わたしが恥ずかしいの。裸を見られたくないのよ」

淡いピンク色のブラを左手で隠すようにしながら、夏希は力説した。

「魔物と人間は違う生き物ですう。それでも、恥ずかしいのですかあ？」

そう問い返され、夏希はふと首をかしげた。たしかに、人間以外の生き物に裸を見られても、別段恥ずかしくはない。夏希自身、愛猫の『ミオ』の前で全裸になって着替えることなど、珍しくもない。犬や馬やペンギンの前でだって、恥ずかしくはないだろう。

裸を見られて恥ずかしいと恥ずかしくないの線引きはどこなのだ

ろうか。

そういえば、この世に……むろん夏希のいた世界だが……奴隷制度があつたころは、主人が奴隷に裸を見せることは羞恥心を覚える行為ではなかつたと聞いたことがある。要するに、奴隷を人間扱いせず、動物と同格としかみていなかったのである。

夏希は相変わらずふわふわと浮いているコーカラットのまじまじと見た。肉まんボディに青紫の髪。垂れ下がっている半透明の触手。まん丸の、大きな黒い眼。

彼女の人格を、自分と同程度に見ているから、恥ずかしいと感じるのだろう。

……彼女？

そういえば、その声質や口調から勝手にコーカラットのことを女性扱いしていたが、実際はどうなのだろうか？ 顔の造作も異形ながら慣れれば可愛いと言えないこともないし、全体の雰囲気はまさしく女性なのだが。

「ねえ、コーちゃん。あなた、女性？ それとも、男性？」

「魔物に性別はありませんですう」

何の意味があるのか、コーカラットが触手の一本をひらひらと振りながら答える。

「より正確に言うならば、魔物には人間の男性に相当する存在がないのですう。そういう意味では、わたくしは女性なのかもしれないかもしれません」

とりあえずコーカラットを小屋の外に追い出すことに成功した夏希は……光る球体は置いていってもらった……、手早く水を浴びた。小さな手拭いに水を含ませ、身体を擦る。高い気温とかなりの運動量でそれなりに汗をかいたから、念入りに各所を拭う。髪はぬるま湯のパイプの水を直接浴びながら、指で丹念に頭皮を擦るようにして洗い上げた。最後に冷たい水を全身に浴び、ようやく満足する。大きな麻の手拭いで身体を拭き上げ、着替えを手にする。侍女が

用意してくれた下着は、薄手のショートパンツのようなもの一枚だけであった。腰の部分に麻で織った細紐が通っており、縛って締めることができるようだ。生成りのワンピースを頭から被ると、着替えはあっさりと完了した。思ったよりも着心地は悪くなく、戸外でも暑苦しくない。

脱いだものや使ったタオルなどを抱え、光る球体を指にくつつけて……これは一回で成功した……外に出る。

「終わりましたかあ。では、失礼しますう。」

待っていたコーカラットがふわふわと小屋に近づき、すだれを三枚とも巻き上げた。次いで、桶の栓を抜く。夏希が使った水が、排水溝に流れ込んでゆく。

「汚れ物はお預かりしますですう。」

夏希は抱えていた物を、コーカラットの触手に委ねた。

「で、ついでに訊くけど、歯磨きとかできるかしら？」

「できますよあ。」

コーカラットの答えに、夏希は少しばかり驚いた。石鹸がないくらいだから、歯磨きもないのだと諦めかけていたのだ。もっとも、練り歯磨きなどないだろうし、歯ブラシのような気の利いたものも存在しないと思うが。

「待っていて下さいう。」

台所へ夏希を案内したコーカラットが消え、すぐに戻ってきた。

「どぞお。」

触手につかんだ品を、手渡してくれる。

小さな壺と木の棒だった。夏希は壺の蓋を取ってみた。……なにやらこげ茶色の粉末が入っている。よく見ると、白っぽい小さな粒も混じっているようだ。木の棒は、先端を石か何かで潰し、内部の繊維質をむき出しにした物のようだ。いわゆる房楊枝というやつだろ。

「この粉をつけて、歯を擦るのですう。」

コーカラットが、身振りを交えて使い方を説明してくれる。

夏希は房楊枝を壺に突っ込み、粉をまぶしてから口に入れてみた。途端に、口中に清涼感が広がった。ミント味を、さらに辛くしたような感じだ。同時に、舌にきつい塩気を覚える。白い粒は、どうやら塩の結晶だったらしい。粉末は、何らかの植物を乾燥させて砕いたものである。

夏希は房楊枝で歯を擦った。女子高生らしく、口内衛生には常日頃から気を使っている。素朴な道具立てながら、歯磨きができるのは嬉しかった。

「くっさー」

鼻の頭に皺を寄せつつ、夏希は寝台に寝そべっていた。

侍女が焚いてくれた蚊遣りの煙が、異臭を放っているのだ。メントールに似た臭いだが、あれほど爽やかではなく、油臭さを含んだ不快な刺激臭に思える。部屋の空気も、若干油染みているように感じた。

冷水管を使った冷房が効いているので、窓……と言うよりも、開口部……は板で塞いであるから蚊やその他の害虫は入ってこれないが、昼間のうちに侵入した虫を排除するために蚊遣りは必要なのだろう。気候的にみても、蚊などが怪しい伝染病や風土病を媒介している可能性は高いだろう。ここは我慢するしかなかった。

「網戸もほしいわね……」

夏希はペンを取り上げると、インク壺に浸し、メモ用の紙に『アミド』と書き付けた。漢字を使わなかったのは、このペンでは細かい文字が書けないからだ。『網』という字をはっきりと書くことになれば、必然的に字は大きくなってしまい、紙を無駄遣いすることになる。アンツカの説明によれば、紙はハンジャーカイという国からの輸入品であり、安価なものではないらしい。

紙が貴重であり、あまり流通していないということは、読み書きが普及していないことの証左でもある。アンツカに聞いたところでは、一般の市民のほとんどが、文盲だという。まともに読み書き

できるのは、王宮の役人と防衛軍の士官、それに一部の商人くらいだそうだ。

「欲しい物がありすぎるわね」

夏希はメモを読み返しながら、ため息をついた。

上質な紙とペン。ボディソープ。シャンプー。洗顔フォーム。ティッシュペーパー。トイレットペーパー。リップグロス。洗口液。綿棒。セロハンテープ。汗止め。防臭スプレー。殺虫剤。蚊取り器。または蚊取り線香。そして、網戸。

いずれもコンビニやドラッグストア、あるいは100円ショップで簡単に手に入る物ばかりである。

「はあ」

夏希はため息を……今日は何度目だろうか……ついた。今まで、自分がどれほど複雑な社会の一員だったかをいやというほど認識させられたのだ。どこにでもあるコンビニに陳列されている商品をすべて揃えるだけでも、おそらくは数十万人の人口を有する先進国レベルの工業都市が丸ごと一個必要だろう。一本五十円の安物ボールペンですら、高度な石油化学産業と金属産業の産物なのだ。

「ともかく……できることからコツコツやっていくしかないわね」  
なおもメモに書き足しながら、夏希はつぶやいた。とりあえず、自分ができるべく快適な生活を送れるような事柄から始めよう。自分が好ましい環境を作り上げ、それをまわりの人々に広めれば、きっと喜んでもらえるに違いない。そうすれば、いずれジンベルの人々に感謝されるようになるだろう……たぶん。

がんがんがん。

「なに……」

けたたましい騒音に、夏希の眠りは破られた。

半ば本能的に、サイドテーブルの時計に眼をやる。だが、見慣れた緑色の夜光デジタル表示は目に入らない。

そうだ。異世界に来たんだっけ。

夏希の脳が、いつぺんに覚醒した。

ががんといい、ブリキのバケツをハンマーが何かで叩いているような騒音は、なおも続いている。どうやら、窓の外から聞こえているようだ。

「なんなのよ、もう」

ぶつくさ言いながら、夏希は上掛け……がさがさという音からすると藁布団らしい……を跳ね除けて、身を起こした。光る球体を収めた箱の蓋は五分の一ほど開いているので、部屋の中は薄暗い程度だ。

とりあえず音の正体を探ろうと、夏希は寝台を降りた。扉を開き、廊下に顔を突き出す。

誰もいなかった。

しばし思索した夏希は、隅の箱から光る球体を取り出した。それで周囲を照らしながら、廊下を適当に歩む。一分ほどさまよったところで、同じように光る球体を指に付けた家令に出くわす。

「なんなの、あの音？」

「これは夏希様。どうぞお部屋にお戻り下さい。この屋敷は、安全です」

落ち着いた声音で、家令が告げる。

「戻れと言われれば戻るけど、あの音はなに？」

「ジンベル防衛隊の非常呼集です」

「防衛隊の非常呼集？ なに、戦争でも始まったの？」

「そのようなことはないと思いますが……」

否定した家令の語尾が、先細って消える。彼にも状況がよくわかっていないのだろう。心配になった夏希はややうろたえたようにあたりを見回した。ジンベルへ来てからまだ丸一日……二十四時間はもちろん、ジンベル時間の一日ですら経っていないのだ。右も左もわからぬ状態で戦争などに巻き込まれたら、悲惨な目にあうことは確実である。

「起こしてしまっただようですね、夏希殿」

廊下の陰から、エイラがひょっこりと顔を出した。おそらく夜着なのだろう、裾が太腿の半ばまでしかない薄手の白いワンピースを着ている。

「どうなってるの、エイラ？」

彼女の登場にちょっと安堵感を覚えながら、夏希はそう訊いた。

歩んできたエイラが、軽くうなずく。すぐさま、家令が一礼して歩み去った。

「案ずることはありません。あれは、ジンベル防衛隊の非常呼集の合図です。もうそろそろ、止むはずですわ」

エイラがそう言い終わったとほぼ同時に、がんがんといい音がびたりと止んだ。まるで、彼女の言葉を聞いていたかのようなのだ。

「ジンベル防衛隊って、この軍隊でしょ？ 非常呼集って、なにがあったの？ 敵が攻めてきたの？」

「攻められたのならば、違う合図があるはずですわ。非常呼集だから、予備的な行動でしょう。それほど気にすることはありません。防衛隊に任せましょう」

相変わらず無表情のまま、エイラが言う。

「こんなこと、よくあるの？」

夏希は眉根を寄せつつそう訊いた。身の危険があるのならば、契約解除……はやり過ぎにしても、危険手当くらい貰わねば割が合わない。

「いいえ。おそらく数年ぶりですわ」

そう言ったエイラが、夏希の腕をそつと取った。

「わたくしたちが案じてても意味はありませんわ。あとは防衛隊に任せ、眠りましょう」

「……まあ、エイラがそう言うのなら」

釈然としないまま、夏希はそう応じた。

## 5 水浴び（後書き）

第五話をお届けします。おかげさまで初評価が入りました。評価してくださったお方、ありがとうございます。お礼は活動報告でさせていただきます。えー、話がなかなか前に進んでおりませんが、今はまだ状況説明と初期キャラ配置を行っているところですので、もうしばらく御辛抱下さい。

## 6 ジンベル王国とその周辺の地誌について

翌朝。

巨大目玉焼き……黄身がCD一枚分くらいあった……四分の一と漬物添えの朝粥を平らげた夏希を、エイラが呼ぶ。

「専属の侍女を手配しました。気に入っていただけると良いのですが」

そう言いつつ、エイラが一室に夏希を連れ込む。

中で椅子に腰掛けていた小柄な女性が、二人に気付きぱつと立ち上がった。

「始めまして、夏希様。シフォネと申します」

緊張しているのか、やや性急そうに名乗って、ぺこりと頭を下げる。

身長は百五十五センチくらいだろうか。年齢はエイラよりも若干上だが、夏希よりも下だろう。ジンベル人にしてはやや色白だ。丸顔を縁取っている髪はちよつと長めで、肩を完全に覆っている。美人ではないが、年齢相応に可愛らしい。

「シフォネ。可愛い名前ね。よろしく」

夏希はにこやかに応じた。長い付き合いになるのだろうか、好印象を与えておくに越したことはない。

「では、王宮へ参りましょうか」

エイラが、きびすを返す。

「え、もう行くの?」

「夏希殿は陛下と契約を交わしたのです。払う分は、きちんと働いていただきます」

足を止め、振り返ったエイラが生真面目に言い放ち、すぐに悪戯っぽい笑顔を見せる。

「……もつとも、今日もアンヌツカのお勉強会でしょうけどね」

「おはようございます、夏希様」

澁刺たる笑顔で、アンヌツカが挨拶する。

「おはよう、アンヌツカ。……で、さっそくだけど昨夜の騒ぎはなんだったの？ ジンベル防衛隊の士官であるあなたなら、詳しく知ってるでしょ？」

仕事部屋としてアンヌツカが確保してくれた狭い一室に入るなり、夏希はそう尋ねた。

「真夜中過ぎに、ジンベル川で正体不明の川船が発見されたのです。軍人らしいはきはきとした口調で、アンヌツカが説明した。

「そこで、念のため防衛隊が非常呼集されたのです。上流側から接近してきた舟ですので、まず間違いなく蛮族のものでしょうか」

「蛮族ってというと……高原地帯にいますかという連中？」

夏希は昨日のコーカラットとの会話を思い出しながらそう訊いた。

「そうです。船は小さなもので、せいぜい四ないし五人程度しか乗れぬ大きさです。おそらくは、夜陰に乗じて偵察に来たのでしょうか、どうしたの？ 追いついたの？」

「こちらから川船を繰り出したところ、慌てて上流方向へ逃げてくださいました」

「上流ってというと、北だっけ？」

「いいえ。南になります」

わずかに首を振りつつ、アンヌツカが訂正する。

「昨日ざっと説明してもらったけど、いまひとつジンベルの地理が頭に入っていないのよね」

夏希は頭をかいた。

「では今日は、地理に関する説明からいたしましょうか」

アンヌツカが、そう提案する。

「そうね。お願いするわ」

「平原地帯にある都市国家は全部で十三。小さな地方村落は約八十ありますが、すべて近隣の都市国家に属しています」

夏希と向かい合わせにテーブルについたアンヌツカが、ジンベル周辺の地理に関し解説を始める。

「まず、ジンベルの北東、ジンベル川が主流であるノノア川に注ぎ込む場所にあるのが、フルームです。ここは牧畜が盛んで、ジンベルも多くの家畜を買い入れていきます。そこからノノア川を下って半日行程のところにあるのがイナートカイで、そこは……」

「ちよつと待った」

必死にメモを取っていた夏希は、アンヌツカの解説をやめさせた。

「口で説明されても、わかりにくいよ。地図とか、ないの？」

「地図ですか」

問われたアンヌツカが、考え込む。

「……って、考え込むようなことなの？」

夏希は半ば呆れた。アンヌツカは軍人のはずである。軍人にとってマップやチャートの類は、建築家と図面、あるいは音楽家と楽譜のように切っても切り離せない関係ではなかったのか？

「たしか、王宮の書庫には置いてあるはずですよ。探してきましょう」  
アンヌツカが言っつて、立ち上がる。

夏希はため息をつきつつ、それを見送った。おそらく、ジンベル人の大半はこの都市から一步も外へ出ることもなく一生を終えるのだろう。彼らにとつて、世界とはこの都市の内側だけであり、外側は存在しないも同然なのだ。商人などは当然ある程度の地理的概念を心得ているはずだが、それも都市とその間といういわば点と線ではないに違いない。まあ、日本ですら、二次元的……あるいは三次元的な地理の概念などを一般大衆が普遍的に持ったのは江戸時代に入ってからなのだから、仕方のないことだろうが。

やがて戻ってきたアンヌツカは、大小二本の巻いた紙を手にしていた。

「ついでに、ジンベルの地図も持ってきました」

そう言っつて、小さい方の紙を広げる。

地図と言っつよりも、絵図だった。一部がごく薄く彩色されている

だけの、シンプルなものだ。

ジンベルの街の広がり、三角屋根のついた家の連なりで表現されている。中央に走る一本の水色の線は、ジンベル川だろう。周囲には、薄く緑色に塗られた山々が控えめに描き込まれている。夏希の目は、すぐに王宮の位置を見出した。大きな灰色の建物に、三角旗がはためいている。アンヌツカが、主要な建物や広場の位置を、ひとつずつ指差して教えてくれる。

「この線は、なに？」

夏希は街の右手……おそらく南側……にある一本の線を指差した。ジンベル川と交差するように東西方向に真っ直ぐ伸びており、家屋はその左側にしか描かれていない。

「城壁です」

「蛮族対策？」

「そうです。蛮族に関しても、説明しておいた方がよろしいですね」  
アンヌツカが、大きい方の紙を広げる。

「蛮族は、その呼び名ほど、野蛮な連中ではありません。ここが平原地帯。これがジンベルです」

アンヌツカが、紙の左方に指で大きく円を描き、次いでそのほぼ中央やや右寄りにある赤い点を指差す。

「こちらが高原地帯。蛮族の、領域です」

彼女の指が右方に移り、淡い緑色に塗られている箇所を押さえる。夏希は興味深げに紙を見つめた。こちらはもつときちんとした地図っぽく描かれている。平原地帯はどうやら大河の中流域らしく、周辺の山々から伸びる水色の線が寄り集まりながら、北のほうへと流れている。ジンベル川も、その支流の一本だ。

赤い点は、全部で十三個あった。いずれも川沿いにあり、おそらくは河港……というほど大げさなものではないだろうが……も付随しているのだろう。特に集中している箇所はなく、平原全体に散らばっているようだが、いずれもジンベルよりは北側に位置している。「ここを見て下さい」

アンヌツカの指が、ジンベルから南へと伸びるジンベル川沿いに、高原地帯まで紙の上をなぞって行く。

「道は通じていませんが、川船を使えば多くの蛮族が平原地帯になだれ込むことができます。ごらんのように平原地帯と高原地帯は険しい山々で分断されており、獣道程度の山越えのルートはいくつかありますが、いずれも他の都市国家の領域に通じているうえ、その往来は非常に困難です。ジンベルは、いわば蛮族を防ぐ砦でもあるのです」

「でも別に、戦争とかしてるわけじゃないんでしょ？」

「はい。お互い敵視してはいますが、交戦状態にはありません。むしろ衝突を恐れ、接触を避けているのが現状ですね。先ほども言いましたが、蛮族はその呼び名に相応しいほど野蛮ではありません」  
アンヌツカが、続けた。

「我々ほど大規模な都市を作らず、主に狩猟と農耕で暮らしているだけです。高原地帯は平原よりも植生が密ではないので、狩りに適した動物が多いのです。他の都市の商人の中には、高原地帯へ赴いて蛮族相手に商売をしている者もいますが、あまり儲けは出ていないようです。なしにろ、商品を運び込むだけで大仕事ですから」  
「ふうん。で、この外は？」

夏希は地図の外側を指し示した。

「西と東は、無人地帯です」

アンヌツカが、肩をすくめた。

「密林ばかりで、川も細く、人が住むには適していませんから。ここを流れるノノア川は、はるか遠く海まで流れ下っています」

アンヌツカの指が、ジンベル川を始めとする支流が流れ込んでいる大河を指す。

「ノノア川の中流域は密林地帯で、国家はなく、ほとんど人は住んでいません。さらに北に行くと、海岸諸国があります。やや内陸にあるワイコウ、ノノア川河口にあるルルト、西群島との交易で栄えているオープアなどが有名ですね。我々平原諸国とは、ノノア川沿

いに設けられた街道と、川船を使って交易が行われていますが、その規模は小さいものです。海を隔てた北方には陸地があり、そこにはタナシスと呼ばれる大国があるようですが、ほとんど交流はなく、詳細はわかりません。あと、海の真ん中にラドームと言う大きな島国があるそうです。昔は独立国家でしたが、今はタナシスに服属しているという話です」

「南の方は？ 高原地帯の先は、どうなってるの？」

「聞いた話では、魔物の領域とされています」

「魔物の領域？ まさか、コーちゃんの故郷とか」

「その通りです。常に闇夜で、人はおろか、魔物以外のすべての生き物が棲めぬ領域です」

「生き物が棲めない？」

夏希は小首を傾げた。

「はい。雑草一本すら育たぬ、真つ暗な世界。あるのは硬い地面だけで、そこに少数の魔物が住み着いているのみです。人が入り込めば、数時間と持たずに死んでしまうそうです」

アンヌツカがわずかに顔をしかめながら説明する。

「コーちゃんの故郷ねえ」

ミニサイズのコーちゃんが群れていたりするのだろうか。それはそれで、可愛いかもしれない。

夏希がそんな想像を話すと、アンヌツカが苦笑して首を振った。

「いいえ。魔物は様々な形状を取りますが、同じ姿を持つものはいません。すべて、違う外見をしているそうです」

「じゃ、コーちゃんの両親とかいないんだ。……魔物って、どうやって増えるの？」

「増えないそうです。そのかわり、寿命もない。天地開闢以来、存在しているのだそうです」

アンヌツカが苦笑交じりに言う。

「コーちゃんなら、『魔物ですからあ〜』とか言つところね」

夏希も苦笑した。

昼食は、米麺だった。

きしめんのような平べったい麺で、コシがほとんどなく、伊勢うどんのような食感だった。ベトナム料理の米麺、フォーに似ているだろうか。ただし、スープの味付けはフォーのように肉や魚介の出汁ではなく、昆布出汁に似た味わいの明らかに植物系の出汁であった。アンヌツカに訊くと、都市国家イナートカイ特産の乾燥茸を使ったものだという。具は大きめに切った数種類の野菜で、薬味に生野菜の細切りが載せてあり、こちらは長葱に似た味だったが、噛むとライムを思わせる爽やかな柑橘系の香りが口中に広がった。レモングラスか何かの仲間なのだろうか。

食後のお茶を飲みながら、勉強会を再開する。夏希は真剣にメモを取りつつアンヌツカの話聞いていたが、一時間もしないうちに目蓋が重くなってきた。

「変な時間に起こされちゃったからなあ」

夏希は渋い表情で眼を擦った。昨夜は非常呼集の騒音で叩き起こされたあと、寝台に戻ってもすぐに寝付けず、二時間近く悶々としていたのだ。寝付けなかつたのは、睡眠周期がずれたことも原因だろう。身体は二十四時間周期に慣れきっているのだから、急に二十時間半周期に移行できるわけがない。

「では、目覚ましがわりに街を御案内しましょうか」

見かねたアンヌツカが、そう提案する。

「そうね」

夏希は立ち上がった。少し身体を動かせば、眠気も散るだろう。

冷房の効いた王宮に閉じこもってばかりというのも、良くない。

「川に沿って歩きましょうか。少しは涼しいはずですよ」

外に出ると、アンヌツカが言った。

「それがいいわね」

夏希はすたすたと街路を歩みだした。数歩行ったところで、アンヌツカが付いて来ないことに気付き、足を止める。

「あれ？ 方向間違えたかな」

照れ笑いしながら、アンヌツカを見る。

「いえ、そちらで合っています」

慌てたように歩み始めたアンヌツカが、夏希に並んだ。驚いた顔だ。

「どうかした？」

「いえ、夏希様は街に不案内のはずなのに、どうして川に至る正しい道がお判りになったのかと、不思議に思いました」

驚きを顔に張り付かせたまま、アンヌツカが言う。

「だって、地図見せてもらったじゃない」

夏希はくすくすと笑った。

「……それだけで、川への道を知ったのですか？」

「もちろん。東の市場があつちで、西の市場がこつち。ジンベル防衛隊の本部があへのへんで……」

夏希は矢継ぎ早に地図で見た主な施設がある方向を指差してみせた。

アンヌツカの表情が、単なる驚きから驚愕に変わる。

「……なんと聡明なお方……」

夏希は内心で苦笑した。現代の日本人にとって、地図はあまりにもありふれたツールのひとつであり、そのおおよその読み方は子供でも知っている。地図をざっと覚えてしまえば、自分の位置と方角さえ承知している限り、よほどの方向音痴でなければ目的地にたどり着けるはずだ。

……地図が普及していない以上、その効果的な利用法や読み方も広まっていないのだろうか……。

夏希は軽くため息をついた。

表面上、このジンベルという都市国家はかなり繁栄している国といえる。食物は豊かで、飢えている人はひとりも見かけない。みな健康そうで、にこやかに暮らしている。争いごと、蛮族の問題を除けば表面上はないようだ。規模の小さな地域社会であり、おそら

くは犯罪なども少ないだろう。一見すると、貧困や失業問題、犯罪、環境汚染などに苦しむ現代の日本より、良い国ではないかとすら思えてくる。

だが、その社会の保持している「知」のレベルには雲泥の差がある。現代日本では、幼稚園児さえ読み書きができるのだ。ホームレス同士が高度な政治談議を闘わせたり、宇宙開発の是非について論じたりできるのが、日本の知的レベルなのである。

そして社会全体が共有している凄まじいまでの情報量と、それに対するアクセスの容易さも見逃せない。古代や中世的社会にも、それなりに高い知識や文化は保持されていたが、その担い手はごく一握りの貴族や文化人、知識人だけであった。呆れるほど少数の人々が、情けないほどに限られた情報を、宝物のごとく後生大事に抱え込んでいる状況が、それら遅れた社会の「知」であったのだ。現代は違う。書籍、ネット上、映像媒体、その他。活字からデジタルデータに至るありとあらゆる情報が公開され、共有され、そして日々書き換えられてゆく。学術論文クラスの専門的情報を、ごく普通の市民がいとも簡単に、しかも無料かきわめて安価に手に入れることが可能なのだ。

ジンベルには、書籍はない。公文書は存在するが、それを眼にすることができるのは王宮の役人だけだ。情報はその場で消費されるだけのものが大半で、後に残るのは人々の頭の中だけ。それを他者に伝授する組織的な教育システムは皆無。これでは、人が育ちようがない。

……当初思っていたよりも、厄介な仕事を請け負っちゃったわね。夏希はそう思った。いったんは幕末や明治のお雇い外国人に自分をなぞらえたが、どうやら認識が甘かったようだ。江戸時代半ばから、日本の教育システムは徐々に整備されてきており、都市部住民の知的水準はヨーロッパ先進国のそれを凌駕するほどだったのだ。お雇い外国人が相手にした日本の学生や技術者は、かなり高いレベルの学習をこなし、論理的な思考訓練を受けた人々であり、新しい

知識や技術を速やかに吸収することが可能だった。

街路を歩みながら、夏希はジンベルの人々をやや冷ややかな視線で眺めた。

みな、いい人たちなのだろう。穏やかで、争いごとを好まず、礼儀正しい。だが、その知性のレベルは江戸時代の日本人以下である。おそらくは、平安時代の庶民レベルだろう。彼らに何の工夫もなしに知識を伝授しても、さながら乳児に硬い固形物を与えるようなことになりかねない。あるいは、サボテンに毎日水を与えるようなものか。いずれにせよ、受容できない上に害悪しかもたらさないだろう。

## 6 ジンメル王国とその周辺の地誌について（後書き）

第六話をお届けします。

## 7 魔力の源

市街地を流れるジンベル川の河岸は、切石を丁寧<sup>ていねい</sup>に積み上げて整備されていた。定規を当てたかのように真<sup>ま</sup>つ直<sup>ちか</sup>ぐに流れており、ここだけ見るとさながら運河のようだ。川幅は、十五メートル程度。下流方向からやってきた小さな川船が、のんびりと歩む夏希らを追い抜いてゆく。積荷は、樽<sup>たる</sup>が数本。艫<sup>かぶ</sup>に立つ船頭<sup>ふねづか</sup>が、竹竿<sup>たけざな</sup>をゆくりとしたペースで川底に突き立てて進んでいる。

心地よい風が、夏希の髪をそよがせる。風の通り道になっているのか、川沿いは爽やかな風が吹いていた。上流方向……南から吹いてくる風だが、気温よりはいくぶんひんやりとしている。

「高原地帯から吹き降ろす風が、川沿いにここまで届くのです」

夏希が風について質問すると、アンヌツカがそう答えた。日によって強弱はあるが、一年中同じように風が吹いているらしい。

いい機会なので、夏希は天候や季節についてアンヌツカに詳しく尋ねてみた。以前にも聞いた覚えがある一年に二回あるという雨季は、いずれも五十日くらい続くという。それはしとしとと雨が降り続く日本の梅雨のようなものではなく、滝のような豪雨が一日に七回から十回ほど降っては止むことを繰り返すといったタイプだそうだ。それ以外の季節は、雲の少ない良く晴れた日が続くことが多いが、数日ごとに天候が崩れて降雨があるので、稲作に要する水の確保には困らないという。

「ん？」

夏希は鼻をひくつかせた。なんとなく懐かしい匂いが、風に乘って漂ってくる。独特の香ばしい香り。そう、焼いた味噌の香りだ。

「何かしら、この匂い？」

「あそこの店ですね」

問われたアンヌツカが、数軒先の建物を指差す。

野菜を商う店の一角に火鉢が置かれ、その上で串に刺した芋のよ

うなものが熾火<sup>おきび</sup>で炙<sup>あ</sup>られている。芋には黄土色のペースト……以前に食べたことのある味噌もどき……が塗られているので、それが焼けていい匂いを発散させているようだ。商品の一部を加工し、その場で食べられるようにして販売するという、専門的な飲食店が出現する前の過渡期の形態なのだろう。近づいた夏希は、良い香りを吸い込んで目を細めた。

「味噌田楽みたいなものね」

「夏希様の世界にも、同じようなものがあるのですか？」

アンヌツカが、訊く。

「ええ。普通は豆腐や菟<sup>う</sup>菟<sup>う</sup>を使<sup>つか</sup>うんだけど……」

「一本、いかがですか？」

ベルトに下げた小袋から硬貨をつまみ出しながら、アンヌツカが勧める。

「いえ、結構よ。お昼食べたばかりでお腹空いてないし……あ、でも、その硬貨は見せて。ジンベルではどんなお金使ってるの？」

夏希の要請に応えて、アンヌツカが小袋からじゃらじゃらと硬貨を取り出した。四枚をより分け、夏希の手のひらに載せてくれる。

「この小さな銅貨が、一ジブ貨。一回り大きいのが、十ジブ貨。銀貨が半オロット貨で、六角形の銀貨が一オロット貨です。一オロットが、百ジブになります。銅貨は各国家独自鑄造ですが、銀貨は平原都市国家共通の通貨になります」

「へえ。結構進んでるのね」

夏希は硬貨をじっくりと観察した。銅貨は両方ともちやちな造りで、古びていわゆる青銅色に変色している。文字が刻まれているが、もちろん夏希に読めるものではない。銀貨の方はもっと出来がよく、きれいな輝きを保っている。半オロット貨には太陽を図案化したらしい紋章が刻まれ、一オロット貨の方には驚か何か、猛禽類が翼を広げたところが刻まれている。

「この上に、十オロット金貨がありますが……あまり一般には流通していません。商人や国家間の商取引に使用されるのが主ですね。」

それ以上の金額のやり取りは、純金を計って使うことが多いです」「ふうん。どのくらいの貨幣価値なのかな。あの食べ物、幾らなの？」

夏希は味噌田楽もどきを顎で指した。

「おそらくニジブでしょう。あの手の串焼き立ち食い食品は、そのくらいが相場です」

アンヌツカが答える。

夏希は店番をしている中年女性に近づいて、適当に商品の値段を聞いてみた。大根が五ジブ、芋が一山十二ジブ、葉葱が一束六ジブ……。

「野菜だけじゃ判らないわね」

夏希は中年女性に礼を言うと、別の店に向かった。こちらでも手当たり次第に、商品の値段を尋ねてゆく。数軒回ったところで、夏希は暗算を始めた。

「……うーん。食品を基準に考えると、一ジブが二十円から十五円、つてとこかしら」

一ジブが十五円だとして、一オロットが千五百円。夏希が一年間の報酬としてもらえる金きんが三千万円だとすると、二万オロットの報酬。

「計算しても、高いんだか安いんだかよく判らないわね」

握っていた硬貨をアンヌツカに返しながら、夏希は微笑んだ。

「あ、エイラじゃない、あれ」

ジンベル川の対岸を逆方向に歩む人影に気付いた夏希は、足を止めた。実際にはエイラではなく、その傍らでふわふわと浮いているコーカラットが目に残ったのだが。

「確かに、エイラ様ですね」

アンヌツカも、足を止める。夏希は、手を振ってみた。気付いたエイラが、小さく手を振り返す。

エイラが何か指示を出したのか、コーカラットがふわふわと川を

飛び越え、夏希らの方に近づいて来た。相変わらずのしまりのない顔で、挨拶してくる。

「こんにちはですう〜」

「こんにちは、コーちゃん。なにしてたの？ お散歩？」

「違いますう〜。エイラ様は巫女としてのお仕事をしていらっしやったのですう〜」

「お仕事？ どんな？」

「冷水をつくる魔術を掛け直していたのですう〜。魔術の効果はいずれ薄れてしまいますから、定期的に掛け直す必要があるのですう〜。詳しくは、エイラ様に直接お聞き下さいい〜」

「聞きたいけど……ここ橋がないわね」

夏希は左右を見渡した。川には何本か橋が架かっているが、運悪くここは橋と橋のあいだの中間地点に近く、最寄の橋まで行くのにかなり歩かねばならない。川越しに怒鳴りあえば会話できないこともないが、それはそれで恥ずかしいし、何より他人の迷惑になろう。「御安心下さいい〜」

そう言ったコーカラットの触手がにゅっと伸び、夏希とアンヌツカの腰にするりと巻きついた。

「ひっ」

次の瞬間、夏希の身体は宙に浮いていた。……コーカラットが、地面から持ち上げたのだ。

「では、まいりますう〜」

二人の女性を触手で支えたまま、コーカラットがふわふわと飛び始めた。夏希の足下五十センチほどのところを、澄んだ水を湛えた川の水面が流れてゆく。

十数秒でコーカラットが川横断を終え、待ち受けるエイラの前に夏希とアンヌツカを降ろした。触手が、腰から解かれる。

「……コーちゃん、力持ちなんだ」

やや引きつり気味の顔で、夏希は言った。

「魔物ですからあ〜」

しまりのない口元が、震える。

「冷却の魔術の持続期間は、おおよそ四十日前後です」

エイラが、説明する。

「これを切らすわけには行かないので、三十日ほど経過したところで、新たに魔術を掛け直すのです。今から北西の水源に魔術を掛けに行きます」

「面白そうね。一緒に行つていい？」

夏希はそう提案した。

「もちろん構いませんが」

「アンヌツカも、行く？」

「お供します」

さも当然、といった風に、アンヌツカが答える。

三人の女性は、コーカラットを従えて市街地を歩んだ。五分ほど進んだところで川沿いの道を外れ、郊外へ通じる道を辿る。水田の広がりを二分するように延びている道は細く、あまり使われていないようで雑草が繁茂しており、かなり歩きにくかった。水田が切れたところで道は登り勾配となり、やがてそれは丸石で補強した土の階段に続いていた。

「この上に、水源があります」

斜面の上のほうを指差したエイラが、先頭に立って階段を登つてゆく。

五十段ほど登ったところで階段は尽き、三人はバスケットボールコートほどの広さがある平坦な場所に立った。眼前には岩石質の崖があり、その下のほうに切り石を低く積み上げて造った水溜めのようなものがある。そこから伸びた金属パイプが、左手の藪の中へと消えていた。

エイラがすたすたと水溜めに歩み寄った。夏希も続く。水溜めの中には、澄んだ水がたつぷりと張られ、その水面はまるで生きているかのように脈動していた。岩の間から、水が湧き出しているのだ

るう。

「これ、飲める？」

夏希はそうエイラに尋ねた。暑い中階段を登ったりしたので、軽く喉の渴きを覚えている。

「もちろんですわ」

エイラが言い、水溜めの中に手を入れた。両掌をカップ状にして水を掬い、夏希に差し出す。

「えっと……」

夏希は戸惑った。差し出した以上、これを飲めということだろうが……こんなことをされたのは、記憶にある限り幼児のときに母親にされたのが最後である。

断るのも気まずいので、夏希はエイラの手口に口を近づけた。エイラの指先が、夏希の唇に触れる。夏希は水を啜った。魔術が掛かっているの、氷水のように冷たい。

水の減り具合に合わせて、エイラが手を傾けて夏希が飲み易いようにしてくれる。夏希は、ほとんどの水を飲み干した。

「……ありがとう」

戸惑いを隠せないまま、礼を言う。

「どういたしまして」

微笑んだエイラが、指をそっと伸ばし、夏希の唇に触れた。付いていた水滴を、指先で拭ってくれる。

「では、仕事にかかりましょうか」

例によって、エイラが胸の前で指先を複雑に動かし、ごにごによよと何かを唱える。

「これで、冷却の魔術が掛かりました」

エイラが言う。夏希が見た限りでは、水溜めに外見上の変化はない。

「今日はこれでおしまいです。七つすべての水源に魔術を掛けましたから」

「七つも。……ねえ、そんなに魔術を使って疲れたりしないの？」  
夏希はそう訊いた。普通、魔術を使うといつたら精神力やらなんとかがポイントやらを消費するのが、お約束だろうに。

「巫女が使う魔術は、自分の力を使うわけではありません。魔力の源から供給されるのです。だから、特に疲れたりはしませんわ。まあ、今日はすべての水源を回ったので、多少歩き疲れましたが、わずかに苦笑しながら、エイラが言う。

「魔力の源？」

「……そうですね。ここから遠くありませんから、御案内しておきましようか」

階段を降り、水田の中の道に戻る。

市街地の外れをしばらく歩むと、前方の畑の中にぽつんと石造りの建物が見えてきた。大きさは普通の一軒家……ジンベル基準の一軒家である……くらいだが、妙にがっしりとした造りだ。正面に、これまた重厚そうな木製の両開きの扉が付いている。

「魔術で閉めてありますから、少し待っていてください」

エイラが言い、呪文を唱えつつ手振りを行う。

「コーちゃん、お願い」

「承知しましたですう」

エイラの合図を受けたコーカラットがふわふわと進み出て、扉に付いている金属環に触手を撒きつけ、引っ張った。重々しい音と共に、扉が一枚だけ外側に引き開けられる。夏希は扉の厚さを目で測った。……たっぷり十五センチはありそうだ。

「アンヌツカ。済まないけど立哨をお願いします」

「心得ました」

エイラに頼まれたアンヌツカが、うなずいて扉の前に立つ。

「さあ、どうぞ」

光る球体をふたつ作ったエイラが、ひとつを夏希に渡した。残るひとつを指先にぶら下げ、戸口をくぐる。

「お先にど〜ぞお〜夏希様あ〜」

コーカラットが、促す。

ちよつと緊張を覚えながら、夏希は戸口をくぐった。光る球体の白い光に照らし出された建物の中は石壁がむき出しになっていて、いかにも殺風景だ。中央に下へと続く石段があり、エイラがその一段目に片足を置いた姿勢で待っていた。

「こちらです」

軽くうなずいてみせたエイラが、石段を降りてゆく。

ひんやりとした空気に包まれながら、夏希はエイラに続いて狭い石段を下った。十数段降りたところで、前下方が薄ぼんやりとオレンジ色に輝いていることに気付く。

「なに、あれ」

「魔力の源、ですわ」

歩みを止めぬまま、エイラがそう答えた。

石段は狭い踊り場が続いていた。そこを過ぎ、逆向きに折り返した石段に正対すると、オレンジ色の光はいつそう強くなった。……光る球体なしでも、足元が充分に見えるくらいだろう。

さらに二十段ほど降りたところで、オレンジ色を発する物体の姿が見え出した。なにやら巨大な玉のようなものが、光を放っている。階段を降り切ったところは、学校の教室くらいの広さがある広間になっていた。そこに、鈍くオレンジ色に光る球体が、浮かんでいる。大きさは、直径三メートルくらいだろうか。巨大なほおずきの果実、といった雰囲気だ。鈍く輝いているので、線香花火の『玉』に見えないこともない。

「この中に、魔術に使われる力が蓄えられています。……というよりも、この球体そのものが、魔術の力の塊なのでしょうけれども。だから、わたくしが魔術を繰り返し使っても、別に疲れたりはしないのです」

魔力の源の傍らに立ったエイラが、説明する。

「へえ。……触ってみても、いい？」

「いけませんわ」

エイラが、首を振る。

「火傷とか、するの？」

「そんなことはありませんが……これは、いわば我がジンベルの守り神のようなものなのです。人が手を触れることは、禁忌とされています」

「そうなんだ。ねえ、この力って、無限にあるの？」

「いいえ。有限ですわ。魔術を使うたびに、ほんの少しずつ小さくなっていきます。昔は、もう少し大きかったそうですから。だから、魔術の乱用は禁じられています。まあ、使い切るまでにはあと何千年も掛かるでしょうが」

「有限の魔力の源か……」

夏希はオレンジ色の球体を見つめた。気のせいだろうか、内部に蓄えられた膨大なエネルギーの影響で表面が脈打っているようにも思える。

「ジンベルを支えているのは、魔術なのです」

エイラが、続けた。

「主要産業である金鉱と銀鉱を維持するには、魔術が必要です。精錬にも、魔術がある。農産物も豊かですが、他の都市国家との交易ができるほど魅力ある産物は生み出せません。気候的にも他の都市国家よりも暑く、人々の健康を維持するためにはある程度魔術の力を使って冷やさねばなりません。ですから、これがすべてなくなる前に……」

傍らで鈍く輝いている球体を見やったエイラの顔は、右半分が魔力の源に照らされオレンジ色に、左半分が光る球体に照らされて白っぽく染まっている。光の加減か、夏希にはその顔がいつもより大げらげに感じられた。

「……このジンベルを、魔術に依存せずに生きていける国に作り変える必要があるのです。夏希殿には、そのお手伝いをしていただきたい」

言葉を切ったエイラが、半歩踏み出すと、夏希の手をそっと握った。

「もちろん、契約した以上全力を尽くすわよ」

夏希は内心の漠然たる不安を押し隠し、穏やかなつくり笑顔でそう応じた。

## 7 魔力の源（後書き）

第七話をお届けします。

## 8 風呂屋（前書き）

【GL警告】今回は百合臭が濃い話です。苦手な方はご注意ください。

## 8 風呂屋

石造りの建物を出ると、日は早くも西に大きく傾いていた。

「やっぱり、二十一時間半って短いわねえ」

先ほど昼食を食べたばかりのような気がするが、あたりの雰囲気はもう午後遅くだ。

「で、これからどうするの？」

コーカラットを従えて歩み始めたエイラに向かい、夏希はそう問いかけた。

「今日の仕事は、これで終わりです。このまま帰宅しても良いのですが……」

足を止めたエイラが、可愛らしく小首を傾げ、夏希を見る。

「今日はかなり歩き回って汗をかいたので、風呂屋にでも寄ってきたい気分ですね。御一緒に、どうですか？」

「お風呂？ いくいく、連れてって」

夏希ははしゃいだ声をあげた。振り返って、アンヌツカを見る。

「あなたも、行く？」

「もちろん、お供します」

相変わらず堅苦しく、アンヌツカが返答する。

「ここが、わたしがひいきにしている風呂屋です」

戸口の前で、エイラが説明する。

郊外に建つ、いくつかの建物と生垣の組み合わせだった。ひときわ大きな建物は一種の管理棟らしく、先頭に立って入っていたエイラが、待っていた中年女性に硬貨を渡し、人数分の……コーカラットは数に含まれなかった……手拭いを受け取る。

「こちらです」

エイラが、手を取って夏希を案内する。小さな高床式の小屋が、脱衣所になっていた。エイラが、さっそく巫女装束を脱ぎだす。

夏希もエイラに倣って着ているワンピースに手を掛けた。傍にはコーカラットが浮いているが、温泉にでも来たのだと思えば、裸体を晒すことにさほどの抵抗は感じない。

「あれ、コーちゃん、アンヌツカは？」

半ばまで脱ぎかけた夏希は、副官がいらないことに気付いてそう訊いた。

「アンヌツカ殿は、隣の平民用のお風呂に行かれましたあゝ」

「……やな差別ね」

夏希は小声でつぶやいた。ジンベルのルールには従うべきなのだろうが、どうも貴族制度というのは好きになれない。

「夏希殿、早く脱いでください。行きますよ」

「ああ、ごめんなさい……」

エイラの声に振り返った夏希は、そう言いかけて絶句した。

素裸のエイラが、立っていた。

きれいな身体だった。軽く日焼けしたような淡い褐色の肌には、染みひとつない。なだらかな肩のラインと、しなやかに伸びた細めの手足。控えめのバストには、可愛い乳首がちょこんとついている。頼りなくらいに細い腰と、形のいい縦長の臍。陰部は、無毛だった。

エイラの裸は胸と腰にポリウムがないことを除けば、完璧といえた。もちろん夏希にはその方の趣味はないが、思わず抱きしめて頭を撫でてやりたいくらいに可愛い。

エイラが、夏希の反応を訝ったのか、小首を傾げる。

「……ああ、今脱ぐわ。待っててね」

夏希は急いで脱衣した。脱いだものを簡単に畳み、小屋の壁に作りつけてある棚に置く。習慣から手拭いで股間を隠した夏希は、エイラに手を引かれるままに脱衣所から出た。入口とは別の階段を下りる。

風呂の様子は、夏希が思い描いていたものとは相当に違っていた。湯船がないのだ。おそらく目隠しの役割を持つと思われる生垣に囲

まれた、バレーボールコートくらいの空間があり、そこには玉砂利が敷かれている。セミダブルのベッドほどの木の縁台のようなものがひとつ。水が張ってある大きな桶がひとつ。おそらく水が出るであろう、木栓が填まっている金属パイプが三本。奥のほうには、石造りの大きな建物があり、木の扉が付いている。

「……お湯は？」

夏希はきよろきよろとあたりを見回した。

「こちらです」

エイラが夏希の手を引き、石造りの建物に向け歩んだ。先回りしたコーカラットが、扉を引き開けてくれる。

途端に、夏希の身体が熱気に包まれた。

サウナだ。

建物の中は、熱気と湿気に満ちていた。温度はそれほど高くはないが、湿度が高いため結構暑苦しい。壁際にベンチのような腰掛があり、そこには先客が何人か座っていた。いずれも、女性だ。奥のほうに扉がいくつも見えるので、おそらく脱衣所や洗い場は別だが、サウナは共用なのだろう。一隅に、石でできた棚のようなものがあり、そこから強い熱気が放射されている。どうやら、その裏側で薪か何かを燃やしているらしい。先客のひとりが、柄杓で石の上に水を少し掛けた。途端に蒸気が立ちこめ、蒸し暑さが増した。反対側の隅には、浴槽もあった。夏希はエイラに断りを入れてから浴槽に浸かってみた。がっかりするほど温い湯だったが、それでも気持ちいは良かった。

十分に汗をかいたところで、エイラに促されてサウナを出る。戸外の空気が爽やかに感じられるほど、夏希の身体は火照っていた。桶の冷水を浴びると、爽快な気分になった。

「身体を洗ってさし上げますわ。ここに横になってください」

エイラが言って、手拭いを手にした。

「そこまでしてくれなくとも……」

遠慮する夏希を無視し、エイラが夏希の背中を押すようにして、

縁台の上に横臥させる。背後にまわったエイラが、濡らしただけの手拭いで夏希の背中を擦り始めた。

「きれいな肌ですね、夏希殿は」

「そう。ありがとうございます」

色の白さと肌の肌理きめには自信がある夏希は、ちよつと自尊心をくすぐられながらそう答えた。

エイラの手拭いが、満遍なく夏希の背中を優しく擦りあげる。夏希は力を抜くと、眼を閉じた。やがてエイラの手拭いは夏希の肩を擦るようになり、さらにそのままの腕を包むように擦り始めた。

……え。

夏希は背中感触に戸惑った。いつの間にか、エイラがその身体を横たえるようにして夏希に寄り添わせている。背中に当たっている柔らかい感触の物体は、位置からするとまず間違いなくエイラの胸だ。

「夏希殿、立派な胸をお持ちですね。羨ましい……」

腕を洗い終えたエイラの手拭いが、前の方にも伸びてくる。濡れた布が、夏希のアンダーバストのあたりを擦り始めた。

「そっちは自分で洗うから……」

「遠慮はいりませんわ」

エイラの手拭いが、右胸全体を包む。指先が、布越しに乳首の辺りをまさぐっている。

「ちよつと、やめてよ、エイラ。……ひえっ！」

一瞬だが下半身に快感が走り、夏希は思わず小さく叫びつつ慌てて縁台から跳ね起きた。バストに意識が集中している隙に、エイラの左手が後ろから太腿のあいだに滑り込んできたのだ。

「どうかしましたの、夏希殿？」

手拭いを手にしたエイラは、横臥した姿勢のままきよとんとした表情で夏希を見上げている。頬は上気しているし、目もなんだかとりんとしているようだ。

……なに、この百合フラグ。

「ち、ちよつと待つてね」

夏希はどもりながらそう言つと、隅のほうで大人しく浮かんでい  
るコーカラットの元へ歩み寄つた。

「ちよつと、コーちゃん。今の見てたでしょ。どうということなの？」

小声で、訊く。

「エイラ様は、夏希様のことを気に入られたのですう」

「エイラって、レスなの？」

「違いますう。ですがこれは普通のことなのですう」

コーカラットが、説明を始める。

ジンベルが属す文明において、貴族社会の女性は婚姻するまで純  
潔を保つことが必須とされている。だが、性欲は人としての基本的  
な欲求である。そこで、未婚の貴族女性同士が擬似性交でお互いを  
慰めあふことは社会通念上認められており、道義的にもまったく問  
題がないのだという。ちなみに、一般市民でも、裕福な階層を中心  
に同様な習慣があるらしい。

「……えらいとこ来ちゃった」

夏希は肩を落とした。百合っ気は、毛筋ほども持ち合わせていな  
い。

「どつしたらいいの？」

真剣な口調で、聞く。

「普通に、お断りすればいいのですう。エイラ様が、気を悪くす  
ることはありませんですう」

コーカラットが、そうアドバイスする。

「ほんと？」

夏希は小首を傾げた。モーションを掛けたのに拒絶されれば、そ  
れなりに傷つくのではないのだろうか？ エイラのごときは……あく  
まで性的な意味を抜きにして……好きだし、今後とも良い関係を維  
持したいのだが。

「本当ですう。魔物は嘘をつかないのですう。エイラ様には、  
何人も恋人がいらっしゃいますから、大丈夫なのですう」

こともなげに、コーカラットが言い放つ。もちろん、同性の恋人である。

「……ならないけど」

夏希はややげんなりしつつ縁台に戻った。エイラは片膝立ちの姿勢で、熱っぽい視線を送ってくる。歩み寄る夏希ににこりと微笑んでみせたエイラが、立っている方の脚を大きく倒した。無毛の股間があらわとなり、さらに細かい部分までもが丸見えになる。

「……わざわざ見せんでいいっ！」

心中で突っ込みを入れながら、夏希はエイラから視線を逸らした。縁台の端の方を見ながら、説得口調で言う。

「ごめんね、エイラ。わたし、あなたの恋人になるつもりはないの。残念ですわ。夏希殿は、未婚なのでしょう？」

心底残念そうな口ぶりで、エイラが訊く。

「もちろん」

「元の世界に恋人がいらっしやるの？」

「いないけど、女の子同士でエッチなことする趣味はないから」

「そうなんですの。……では、どうやって慰めているのですか？」

諦めたのか、膝をそろえて座りなおしながら、エイラが訊く。

「わたしは……そんなに性欲が強い方じゃないのよ」

視線をエイラに戻した夏希は、そう言いながら縁台に座った。念のため、エイラと三十センチほど離れた位置である。

「そうですの……」

物足りないように言ったエイラが、何かに気付いたのか小さく息を呑み、わずかに赤面した。

「……わかりました。夏希殿は御自分でなさるのが好きでしたね。そうとは気付かず誘ってしまうなんて。謝罪させていただきますわ」

エイラが慌てた口調で言って、ぺこりと頭を下げる。

「御自分でなさるって……」

一瞬エイラの言葉の意味がわからずきよんとした夏希だったが、

すぐに指し示している事柄を悟り、思わず赤面した。

「ち、違っわよエイラ。わたし、そんな趣味は……」

「いいんですよ、夏希殿。ふたりで慰めあうよりも、ひとりの方がいいという方は結構いらっしやいますからね。判りましたわ。夏希殿の恋人になるのは、諦めます」

にこにこ微笑みながら、エイラ。

「だから、ひとりでもしないって……」

そのあとも夏希は散々誤解を解こうと務めたが、エイラは自分ひとりで納得して夏希の話をまったく聞こうとしなかった。

「だめだこりゃ。ま、今後何度も言い寄られるよりはましか」

そう前向きに考えることにして、夏希は誤解を解くのを渋々諦めた。

「疲れる風呂だったわ……」

ぼやきながら、夏希は歩んでいた。

エイラはコーカラットと共にそのまま自宅へ向かったが、夏希はいったん王宮へ戻ることにした。メモの類を持ち帰って、夜にまとめたり復習したりする必要があったのだ。当然、アンヌツカも一緒である。

「ねえ、アンヌツカ。あなた、恋人いる？」

風呂屋での一件からまだ立ち直っていない夏希は、そう訊いてみた。

「はい。います」

あっさりとして、アンヌツカが応える。

「男性？ それとも女性？」

「女性です。わたしは未婚ですし、結婚するまで純潔は守るつもりです」

至極真面目な表情で、アンヌツカが言う。

「……ひよっとして、わたしのことを恋人にしたいか思ったりしてたりして」

用心深く、夏希はそう訊いてみた。

「それはありません。身分が違いすぎます。たしかに、夏希様はおきれいですし、恋心を抱いていないといえは嘘になります……」  
アンヌツカが珍しく、視線を逸らしつつ歯切れ悪く言う。

……頬を染めるな、頬を。

心中で夏希は突っ込んだ。

「身分が違うゆえに恋人にはなれませんが、副官として夏希様が望めばいつでも喜んでお慰めする用意があります。どうぞ遠慮なくおっしゃってください」

さらに赤くなりつつ、アンヌツカが言い切った。

……どうなってるんだ、この国は。

「たぶんそんなことはないと思うけど……あなたの気持ちは嬉しいわ」

夏希はそう答えておいた。少なくとももこう言っておけば、アンヌツカも気分を害することはないだろう。

「お帰りなさいませ、夏希様」

エイラの家に帰ると、シフォネが深々と頭を下げて迎えてくれた。  
「……そうだった。専属メイドさん付けてもらったんだっけ。すっかり忘れてた」

夏希は勧められるままに椅子に座り、出てきたお茶をすすった。

シフォネは笑顔でかいがいしく世話を焼いてくれる。……とりあえず、侍女としては有能なようだ。

「他にご用はございませんか？」

「あゝ、用があつたら呼ぶから。あなたの部屋はどこ？」

「左隣の部屋をもらいました。お声を掛けていただければ、すぐに参ります。では、失礼します」

シフォネがぴよこんと頭を下げると、長めの髪がばさりと振られた。

……ちよつと鬱陶しいかな。

「待った」

部屋を出てゆくシフォネを、夏希は呼び止めた。

「なんででしょうか、夏希様」

「えーと、誰かに言っただけで布切れをもらってきて。なるべく明るめの色がいいわね。あなたが好きな色があればそれが一番いいわ。それと、……ジンベルにあるかどうか知らないけど、<sup>はさみ</sup>鋏も」

鋏は想像していたよりも切れ味がよく、造りもしっかりとしていた。金属加工を得意とする都市国家ニアンからの輸入品だという。金属パイプの輸入先と一緒に来た。

シフォネがもらった来た布は、淡いピンクだった。赤い染料でごく薄く染めたものようだ。これを鋏で細長く切る。長さが足りないので、夏希はシフォネに布の端同士を縫い合わせた。できた二本のリボンを持って、薄暗くなり始めた庭に出る。

夏希は手早くシフォネの髪を纏め上げ、頭の左右でリボンを使って括った。鋏で余計な髪を断ち落とすと、見事なツインテールが出来上がった。

「この方が可愛いわよ、ぜったい」

鋏を振りながら、夏希は力説した。

「そうですか……なんだか、恥ずかしいです」

ツインテールやりボンをいじりながら、シフォネが消え入りそうな声で言う。

「いいのいいの。わたしがいた世界じゃ流行ってたんだから」

左手で肩に付いた切り屑を払ってやりながら、夏希はそう言って微笑んだ。

## 8 風呂屋（後書き）

第八話をお届けします。

## 9 増員要請

「夏希様、起きてください。朝ですよ」

湯気の立つカップを盆に載せて入ってきたシフォネが、寝台に横たわる夏希にそう呼びかける。

「ん〜。……あと五分」

夏希は寝返りを打ちながら、ごによごによとつぶやいた。

「五分ですか。ってことは、六十まで五回数えればいいんですね」  
盆をサイドテーブルに置いたシフォネが、真剣な面持ちで数を数え始める。

「いち、にーい、さーん……」

……恒例となった、朝の儀式である。

夏希は枕を抱きかかえたままシフォネの可愛らしい声を聞いている。渋々ながら、脳が覚醒してゆく。

「ろくじゅう。いち、にーい……」

六十まで数え終わったシフォネが、また一から数え始める。彼女が数えられる数字は、百までなのだ。ちなみに、ジンベルには分という時間の単位は存在しない。『人が百まで数える』を一とするヒネという単位があるが、その長さはおよそ一分半から二分近くまでとかなりアバウトである。

上掛けを跳ね除けた夏希は、目蓋を半ば閉じたままのっそりと上体を起こした。数えるのをやめたシフォネが、すかさずカップを夏希の手に押し付ける。

夏希は両手で包み込むように持ったカップの中身をひと口飲み下した。温めの湯で濃く淹れた緑茶である。

……コーヒーが飲みたい。

二口目を飲みながら、夏希はぼんやりとそう思った。むこうにいた頃は、出かける予定のない日曜日などはドリップコーヒーを一日八杯くらい飲んでいたものだ。インスタントコーヒー一瓶を、同量

の金と交換してもいい。そう本気で思っているくらい、夏希はコーヒーに飢えていた。何度か大豆や根菜、植物の種などで代用コーヒー作りに挑戦したが、ことごとく失敗している。苦味や香ばしさはある程度得られるものの、味の方は本物の足元にも及ばぬ出来であったのだ。

「今日もいいお天気ですよ、夏希様」

シフォネが、おそらくこの世界唯一の窓用網戸……粗く織った麻布を張った木枠……を外した。眩しい陽光が、さっと室内に入り込む。夏希は眼を細めて窓外を見やった。

相変わらぬ風景が、そこには広がっていた。高床式の家屋と、田んぼ。所々に突っ立っている椰子の木が、鮮やかな緑色の葉をわずかな風に揺らしている。遠くに眼を転ずれば、濃い緑色の熱帯多雨林……平たく言えばジャングル……に覆われた低い山々が見える。

夏希専用の邸宅は、エイラの家からそれほど離れていない場所にあった。食堂と厨房、居間、それに寝室兼仕事部屋がみつつという結構大き目……ジンベル基準で言えば……の建物だ。狭い庭には、トイレと水浴び小屋も併設されている。

夏希がこの都市国家ジンベルに召喚されてから、二十日あまりが過ぎていた。

すでに彼女は、いくつかの発明品……というか、改良品を作り上げていた。先ほどまで抱えていた枕も、そのひとつだ。

ジンベルの枕は、籐とうに似た植物の茎を編んだものであった。熱がこもらないから涼しくていいのだがいささか硬く、柔らかい枕に慣れた夏希には寝苦しかった。そこで、籐殻もみがら枕を作ってみたのだ。流行らせようとエイラやシフォネにも勧めてみたが、反応はいまひとつだった。やはり、慣れている寝具の方が安眠できるのであろう。

「食事中に居眠りなさないで下さい、夏希様」

シフォネが、やんわりと注意する。

「……ごめん」

夏希は頭を軽く振って眠気を追い払おうとした。もともと、睡眠時間は長い方である。高校受験の時でも毎日七時間は寝ていたし、最近でも日曜日ともなれば九時過ぎ、十時過ぎに起きるのが当たり前であった。シンベルへ来てからは、色々と忙しくて平均睡眠時間は五時間足らずだ。眠いわけである。

昨晚も遅くまで寝台の上でメモを取ったり考えをまとめたりしていた。なまじ光る球体などという便利な明かりがあるから、ついつい夜遅くまで仕事をしてしまうのだ。

夏希は箸を手にした。これは細工師に作らせた、夏希専用の短めなものだ。テーブルに並べられた料理は、相変わらず代わり映えない。例の巨大目玉焼きの一切れと、付け合せの茹で野菜。フルーツの盛り合わせと、夏希好みにちよつと固めに仕上げられた米のお粥。野菜の塩漬けが少々。

「あゝ、醤油がほしい」

目玉焼きに塩をばらばらと振りかけながら、夏希はぼやいた。大豆は輸入ものだがふんだんにあるし、味噌もどき造りに使われているのはたぶん米麹なので、試しに適当に煮て漬した大豆に塩と麹を混ぜて樽にぶち込んであるが……さてどうなることか。

「糠漬けも食べたいなあ」

箸で塩漬け野菜をつまみ、粥の上に乗せる。米糠も塩もあるのだから、糠床くらい簡単にできるはずだが、時間がなくまだ取り掛かってはいない。

時間がない。本当に、時間が足りない。

一応、アンツカとは別に部下として自由に使える男女を数人宛がわれてはいるが、これがまた実に使えない連中である。みな読み書きはできるし、物覚えも悪くないのだが、基礎的な知識に欠けるのである。日本の小学校高学年のちよつと勉強のできる子の方が、よつぽど役に立つだろう。例えば、小学校六年生に定規と分度器を与えて、『もつとも長い辺を底辺とする直角三角形を紙に描け』と言えば、よほどおバカな子でもない限りすらすと描くであろう。

しかし、普通のジンベル人は『直角三角形』を知らない。いや、そもそもこの言語に直角三角形という単語がないのである。『直角』に相当する用語は直訳すれば『きちんとした角』であり、『三角形』は『このような形』と言いつつ左右の親指と人差し指を使って実際に作ってみせるやり方でしか正確には表現できない。一応、『三角』に相当する単語はないことはないが、それは正三角形や二等辺三角形を表す単語であり、直角三角形はその中に含まれないうえに、三角錐やおにぎり型を含めた広い意味合いを持っている。したがって、直角三角形は、『図形の種類で、角のひとつがきちんとしている、こんな形』（と言いつつ指で形を作る）という方法でしか他者に伝えることができないのだ。学術関係の単語が、決定的に不足しているのである。そしてもちろん、専門的な用語がないということは、それに関する知識も需要も存在しないことを意味する。

夏希はため息をつきつつ、緑茶の入った重いマグカップを置いた。これも、改良したい点のひとつである。さながら、小学生が紙粘土で作ったかのような、分厚く重いマグカップ。シーキンカイからの輸入品で、この地ではもっとも優れた技術で作られた品物のはずなのに、この程度である。もっとよい土を探し、高温で焼くことができれば、軽くて丈夫なものが作れるはずだ。

……エイラに頼んで、もう一人召喚してもらおうか。

粥を箸で口に運びながら、夏希はそう思索した。このまま仕事を続ければ、過労死しかねない。

すでに夏希の仕事ぶりは、ヴァオテイ国王の高い評価を受けていた。一番好評だったのは、ポケットの発明である。この世界の衣服にはポケットがなく、小物はみな小袋に入れてベルトから下げるか、ベルトそのものに手挟たはまむしかなかったのだ。おそらくは、暑い気候ゆえ衣服に裏地をつける習慣がなく、それゆえにポケットの発想も生まれなかったのだろう。

ポケットの普及ぶりは驚くほどで、わずか数日でジンベルの人々の衣服の多くにポケットが縫い付けられた。広めるにあたって夏希

は位置や形状に関してそれなりの助言をしておいたが、よく判らずに使いにくい箇所……酷いものになると絶対に手が届かない背中あたり……にポケットをつけてしまった例も散見されたが、これは「愛嬌というものだろう。」

「もう一人、召喚してほしいとおっしゃるのですか？」

夏希の依頼を聞いたエイラが、細い片眉をあげる。

「召喚にお金が掛かるのは知ってるし、もう一人との契約にもそれなりのものを支払わなければならないことも知ってる。でも、このままじゃわたしが身体壊しちゃっわ」

夏希はエイラを掻き口説いた。

「そうですねえ……。できればわたくしとしても、夏希殿にはこの調子で様々なことを伝授してもらいたいですし」

エイラが視線を落とし、腕を組む。

「でしょ？ 有能な助手がいれば、もっと効率よくいろんなことを伝授できると思うの」

夏希はすかさずそう売り込んだ。彼女が短期間で様々な知識や新案、有用な物品を生み出したおかげで、召喚したエイラの株も王宮内でそうとう上がっているらしい。

「よろしいですわ。わたくしから、陛下に言上いたします」

予想よりもあっさりと、エイラが助手召喚を承諾する。

夏希の活動実績を高く評価していたヴァオティ国王も、すぐに助手召喚を認可してくれた。ただし、契約のさいに支払われる金きんは夏希のときよりも少なくする、と申し渡された。……助手である以上、同額は払えないということらしい。

「ではさっそく、明日召喚することにしましょう。どのような方を希望しますか？」

エイラが訊く。

「どの程度細かいところまで指定できるの？」

夏希は訊き返した。

「そうですね。おおよその年齢、性別、それに、属している国、知性の度合い、性格の良し悪し、といったところですか」

エイラが条件を並べ立てる。

「年齢は……比較的若い方がいいわ。できれば、わたしと同じくらいか、少し上がいいな。性別は、やっぱり女性の方がやり易いと思う。母国語でやり取りしたいから、日本人がいい。わたしと同じ国の出身ね。知性はもちろん高い方が。性格は、穏やかな方で。とにかく、もっとも重要なことは、わたしとの相性の良さよ」

「相性ですか。努力します」

生真面目な表情でエイラがうなずく。

翌日。

早朝から、夏希はエイラと共に王宮に出向いていた。狭い一室に籠り、召喚の儀式の準備を整える。

「……って、魔法陣とか描くわけじゃないんだ」

部屋の中央に、簡素な木製の雛壇のようなものが設えられている。そこに並べられた四十枚ほどの小皿に、エイラとコーカラットが様々な『供物』を供えてゆく。きな粉のような黄褐色の粉末、切り餅くらいの白い塊、妙な斑点のついた鳥の卵のようなものがひと山、からからに乾燥させたスペアリブみたいな気持ち悪いもの、きれいな薄紫の鉱石、摘み取ったばかりの瑞々しい黄水仙に似た花、色も形も大きさも、臭いまでも正露丸にそっくりな黒い小球数十個、まばらに毛の残った何かの毛皮などなど。

「緊張しますね」

夏希の隣に立つアンヌツカが、言う。

「そうですね」

夏希はおざなりに同意した。今日も寝不足気味である。先ほどから、生あくびが絶えない。

「では、召喚の儀式を執り行ないます」

エイラが、厳しい面持ちで居並ぶ見学者を見渡す。コーカラットがふわふわとエイラのもとを離れ、壁際に寄った。

エイラの指先が、胸の前で複雑なダンスを始める。唇のあいだから洩れるつぶやきが、夏希の耳にも届いた。ジンベルの言葉とはまた違った、肉食獣の唸りを思わせる低く単調な声音だ。

ぼん。

どことなく間の抜けた爆発音と共に、雷光を思わせる紫がかった黄色い光が一瞬部屋を満たした。並べられた小皿から一斉に白い煙が立ち昇る。

夏希は慌てて手で口元を覆った。硫化水素のような悪臭が、部屋に満ちたからだ。

「終わりました。成功です」

そう宣したエイラも、顔をしかめている。彼女も臭いには閉口しているらしい。

控えていた王宮の侍女とコーカラットが、窓を開けてまわる。夏希は口元を覆ったまま、エイラに歩み寄った。

「ありがとう、エイラ」

「どういたしまして」

澄ました顔で、エイラが応じる。

「では、召喚した人物に会いに行きましょうか。……夏希殿の御要望通りの女性が召喚できたのであれば、良いのですが」

三人一組になったジンベル防衛隊の兵士が、召喚された人物を探しに散ってゆく。夏希のアドバイスを入れて、今回は全員非武装である。

「どこに出現するかわからない、つてのは厄介よね」

「済みません、わたくしが未熟なもので」

エイラが、わずかに頭を下げる。

「別にあなたを非難しているわけじゃないわ」

慌てて、夏希はフォローした。

しばらく座って待つうちに、報せがもたらされる。小柄な女性が、東の農地のあたりに現れたらしい。

「どうやら、お目当ての人物のようですね。参りましょう」

エイラが、腰をあげた。夏希も立ち上がり、そのあとに続く。少し離れたところで暇そうに浮いていたコーカラットも、すぐにやってきてエイラに従った。

足早に市街地を抜け、田んぼの中を抜ける道を進む。密林の際のあたりで、待機していたジンベル防衛隊の兵士が、エイラに状況報告を行った。どうやら、件の女性はこの奥に逃げ込んだらしい。

夏希はジャングルの奥を見透かそうとした。たぶん日本人なのだから、日本語で呼びかければ出てきてくれるはずだ。

と、いきなり四十メートルほど右手で、密林から人影が飛び出した。小柄な体躯、短い黒髪。チエックのミニスカートに、紺色のサイハイソックス。上半身に着ているのは、クリーム色の長袖トレーナーか。足には、白っぽいスニーカーのような履物。

女性のあとを追うように、密林から防衛隊の兵士が数名飛び出してくる。

女性が、田んぼのあぜ道を走り出す。あまり優雅な走り方ではなかった。長いとは言いかねる脚をばたばたと動かす、遅くかつぎこちない走りだ。

……どっかで見たことがあるような。

夏希は内心で首をひねった。あの不器用な走り方。体格。なんだから、よく知っている女の子にそっくりだ。

まさか。

ありえない、と思いつつも、夏希は脳裏に浮かんだその女の子の名を叫んでみた。

「凜！」

ばたばたと走っていた女性が、つんのめるようにして止まった。声の主を探して、あたりを急いで見回す。

……やっぱり。

「凜、そこにいて。大丈夫、追っかけてくる連中は危ない奴らじゃないから」

半ば呆れ返りながら、夏希はあぜ道を辿って早足で凜に近づいた。エイラとコーカラットも、あとをついてくる。防衛隊の兵士は、状況を見て取って凜を追うのを止め、成り行きを遠巻きに見守っているようだ。

「お知り合いですか」

エイラが、訊いてくる。

「知り合いも何も。親友よ」

藤瀬 凜。小学校の頃からの友人である。中学、高校も一緒だし、今は同じクラスだ。その人となりは、お互い裏の裏まで知り尽くしている。

「確かにわたしとの相性はぴったりだわね」

夏希はそつとつぶやいた。

## 9 増員要請（後書き）

第九話をお届けします。当話から第二部に突入です。

「……夏希なの？」

近づく夏希を見て、藤瀬 凜が目を見張る。

「そうよ。ここにいるのはみんな仲間だから、安心して」

夏希はそう声を掛けつつ凜に歩み寄った。

「……後ろで浮いてる生首も、仲間なの？」

「生首ではないのですう。わたくし、コーカラットと申しますう」

「

日本語を解するコーカラットが、すかさず挨拶する。

「まあ、いろいろとあってね」

そう凜に話しかけた夏希は、エイラに少し待つように手で合図した。怪訝そうな表情を浮かべている凜の腕を取って、少し離れた場所に導く。

「何なのよ。ここ、どこ？ なんであんたがいるの？ その格好、なに？」

「まあまあ。ともかく落ち着いて」

性急に質問を繰り返す凜を、とりあえず宥めにかかる。

「落ち着いてって言われても……」

「そうだ。凜ちゃん、中学の頃ファンタジー小説とか読んでたでしょ」

昔を思い出しつつ、夏希はそう言った。家に行くとは本棚に、電

文庫や富 見ファンタジア文庫などが並んでいたはずである。

「……読んでたけど」

訝しげに、凜。

「その中に、異世界召喚ものって、なかった？」

そう尋ねた夏希の顔を、凜がちよつと太目の眉を寄せて見上げる。

……身長差は、実に二十センチ近い。

「……まさか、ここが異世界で、あたしが召喚されたなんてことを

言いたいわけ？」

「ぶつちやけて言えば、そういうこと」

夏希の言葉に、文字通り凜の目が点になる。

「最初から説明するわ。まずわたしが召喚されたのがかれこれ二十日ほど前で……あ、二十日といってもこちらの時間でね。向こうとは一日の長さが結構違うから……」

夏希の説明は、二十分近くに及んだ。

「納得はしないけど、だいたい状況は呑み込めたわ」

額に湧き出た汗を指で拭いながら……ちなみに、トレーナーはすでに脱ぎ、腕に掛けている……凜が小さくうなずいた。

「そう。よかった。じゃ、とりあえず異世界の証拠その1ね。コーちゃん、ちよつと来て」

「承知しましたあ〜」

夏希の呼びかけに応じて、コーカラットがふわふわと凜に近づく。「どう？　こんな妙な生き物がいる世界なのよ。しかも浮いてるし、日本語喋るし、愛想はいいし。異世界以外に考えられないでしょ？」

「まあ……確かに」

渋々といった感じで、凜がうなずく。

「わたくし、コーカラットと申しますう〜。エイラ様に使い魔としてお仕えしている魔物ですう〜」

コーカラットが、改めて挨拶する。

「コーカラットねえ……。あなた、本当に魔物なの？」

「本当ですう〜。魔物は嘘をつかないのですう〜。それと、できればコーちゃんと呼んで欲しいのですう〜」

コーカラットが、持ち上げた触手をくねくねさせながら言う。

「じゃ、証拠その2。エイラ、凜に言語の魔術を掛けてあげて」

夏希の言葉にうなずいたエイラが、数歩近づく。

「なに？　なにをしようというの？」

「大丈夫。ここの言葉がわかるようにしてあげるだけだから」

慌てる凜に、夏希はそう説明した。

エイラが印を結ぶ。紅い眩しい光が、凜を包み、すぐに消え去る。  
「さあ、これでああなたの言葉もみんなに通じるわ」

夏希は微笑みつつそう言った。

エイラとの会話で、凜もようやく異世界の住人となったことを納得したようだった。

「でも、なんであたしが召喚されたの？」

状況を把握した凜が、夏希とエイラを見比べるようにしながら尋ねる。

「あゝ、掻い摘んで話すとね、わたしが助手を必要としたのよ。そこでエイラが召喚の魔術を使ったら、偶然あなたが選ばれちゃったってわけ。まあ、条件のひとつに、わたしとの相性がいい人物、つてのがあったから、それで召喚されたような気もするけど……」

「ってことは、原因はあなたにあるのね？」

凜が、厳しい表情で夏希に詰め寄る。

「……迷惑だったなら謝るけど、異世界に来れるなんてめったにないことよ。詳しいことはあとで話してあげるけど、報酬もたっぷりもらえるし。それにファンタジー小説読んでいたあなたなら、一度くらいは異世界に行ってみたいと思ってたんじゃないの？」

「夢見る少女だった頃はね」

凜が茶化しつつ認める。

「とりあえず、詳しいことはもつと涼しいところで話しましょう」

「賛成。暑すぎるわよ、ここ」

夏希の提案に、凜がもろ手を挙げて賛成した。

コーカラットの先導で、夏希らは市街地へ向け歩き出した。待機していた防衛隊の兵士たちも、少し間隔を開けてそのあとに続く。

「しかし暑いわね。ねえ、水とかもらえない？ のど渴いちゃって」

凜が、夏希に尋ねる。

「のどが渴いていらっしやるのですかあゝ」

耳聴く(？)聞きつけたコーカラットが、ふわふわと凧に近づいた。カップ状に変化させた触手を顎下にあてがい、例の黄色い液体を注ぎ込む。

「どお〜ぞ〜」

「ん、ありがとう」

凧が、差し出された触手カップをつかむと、中身を確認めもせず口に運ぶ。

「あ」

夏希が止める間もなく、凧がそれを飲み干した。

「……度胸のある娘だと昔から思ってたけど」

夏希は引きつり気味の顔でつぶやいた。

「おいしい。えーと、コーちゃんだっけ？ お代わりくれる？」

ドン引きしている夏希に気付かず、凧がコーカラットにそう要求する。

「もちろんですう〜。お待ち下さいい〜」

コーカラットが嬉々として、顎下に触手カップをあてがった。

ヴァオティ国王への謁見。貴族位の授与。正式契約。

凧の受け入れは、滞りなく進んだ。ちなみに、凧の報酬は夏希の三分の二と決められた。

「とりあえず、しばらくはわたしのところに居候させてあげるわ」

細々とした手続きを終えたところで、夏希はそう申し出た。

「そうさせてもらっわ。色々と教えてもらいたいことも多いだろうし」

凧が素直に応じる。

「じゃあ、今日の仕事はおしまいね。アンヌツカ、あなたももういいわ。あとは、よろしくね」

「承知しました」

夏希の言葉に、アンヌツカが一礼する。

凧を伴い王宮を出た夏希は、ゆっくりとした足取りで家路をたど

った。周囲をきよるきよると見回す凜に気を使つての、スローペースである。

「ほんとに異世界なのね。いまだに信じられないわ」  
行きかう人々や家屋の様子に目を奪われながら、凜がつぶやく。  
「そうそう。着るものと履物を作つといたほうがいいわね」

夏希は凜を大通りへと導いた。まずはサンダル職人のところへ行き、スニーカーを脱がせる。複雑に切れ込みが入った革を凜の足に押し当てて寸法を測ったサンダル職人に、夏希は一オロット銀貨六枚を払つて二足造るよう依頼した。

次いで、布地を扱う店に行き、上物の麻布をひと巻き購入する。  
「縫つてもらわなくていいの？」

麻布を肩に店を出た夏希に、凜がそう尋ねる。  
「大丈夫よ。シフォネっていう侍女がいてね。彼女、とってもお裁縫が上手なのよ。型紙なしで……つていうか、この世界にまだ型紙つて便利なものはないんだけど……ワンピースくらいさくさく縫えちゃうくらい。今着てるこれも……」

そう言つて、夏希は自分のワンピースを指でつまんだ。

「シフォネが縫つてくれたのよ。もちろん、手縫いでね」

「へえ。上手いじゃない。なんだかライバル意識が芽生えちゃうわね」

袖のあたりの縫い目をしげしげと観察しながら、凜が言う。運動神経は母親の胎内に置き忘れてきたと自称している彼女だが、手先だけはむちゃくちゃ器用で、夏希も丁寧に刺繍を入れたポーチダの手編みのマフラーだのを以前にプレゼントされたことがある。

自宅に帰りついた夏希は、とりあえずシフォネに凜を紹介した。お茶を入れるように頼んでから、食堂のテーブルに凜と向かい合つて座る。

「で、具体的にあたしはなにをすればいいの？」

お茶を飲んで一息ついた凜が、そう訊いてくる。

「まあ、わたしの手伝いね。助手つて言うのは名目上の話。あなた、

家政関係は得意でしょ？ 料理も上手だし。色々知識や技能をジンベルの人々が使いこなせるようにアレンジして、広めてほしいのよ」

「例えば？」

「そうね……あ、お菓子とか作ってくれない？」

夏希はぼんと手を叩いた。

砂糖は……正確に言えば精製前の糖蜜と、その結晶だが……イナトカイからの輸入品として流通しているが、ジンベルの人々はそれをお茶に混ぜたり、直接なめるくらいの利用法しか知らないらしい。ベッコウ飴のような単純な甘味も輸入されており、方々で売られているが、甘いばかりでたいして旨いものではない。若い女性らしく甘味大好きな夏希だったが、さすがに緑茶に甘味をつけるのは抵抗があったし、ただ単に甘いだけのお菓子は好まないたちなので、このところ夏希は甘味に飢えていた。

「お菓子……ねえ。それくらいなら、なんとかかなると思うけど」  
凜が腕を組む。

「……そうだ。話変わるけど、この世界に、レンズ研磨の職人さんって、いる？」

「いやあつて腕を解いた凜が、唐突にそう訊いた。」

「レンズ研磨？ たぶん、いると思うけど」

戸惑いつつ、夏希はそう応じた。

「いないと困ったことになるわ。あたし、コンタクトだから」

凜が、自分の目元に指を当てる。

「あ、そうだったわね」

小学生の頃から、凜が眼鏡っ子だったことを、夏希は思い出した。コンタクトレンズに切り替えたのは、中学二年の頃だったろうか。今付けているレンズも、適切なメンテナンスなしでは長持ちしないだろう。もちろん、ジンベルにコンタクトレンズなどないから、早晩眼鏡を作らないと、まともな生活が不可能になる。

「ハンジャーカイなら、居るはずよ」

「なに、それ？」

凜が、首を傾げる。

「都市国家のひとつ。たしか、望遠鏡とかも作ってたはずだから、レンズも当然あるでしょう。明日、問い合わせてみるわ」

「夏希様」

水を加えた米粉を練っていた夏希に、アンヌツカが声を掛けてくる。

「なに？」

「急で申し訳ないのですが、しばらくお時間をいただけますか？」

緊急招集が掛かりましたので……」

「緊急招集？」

夏希の向かいで茶葉をすり潰していた凜が、怪訝そうな顔をする。凜が召喚されてから、五日目である。すでに彼女は、糖蜜と小豆、米粉、それにサトイモもどきの大きな芋から取った澱粉などを駆使し、数種類のお菓子を作り上げていた。小豆餡の団子、米粉の蒸し饅頭、偽物羊羹などなど。今日は『いろいろ』作りに挑戦しているところだ。とりあえず、白ついろうの他に、抹茶と小豆ついろうの三種を作るつもりである。

「防衛隊士官全員出席の会議です。陛下もご臨席なさるそうですので」

済まなそうに、アンヌツカ。

「ふうん。じゃ、仕方ないわね。でも、緊急招集って……何事なの？」

左手でぼんやりと米粉をもてあそびながら、夏希は訊いた。

「……内密に願いますが、蛮族対策についてのようです」

やや声を潜めつつ、アンヌツカ。

「ジンベル川の上流域にいる蛮族は、十大氏族のひとつ、イファラ族です。他の都市国家からの情報によると、最近イファラ族が川船

を他の氏族から買い集めたり、自ら造ったりしているとのこと」「それが、どうかしたの?」

「ごりごりとすり鉢で茶葉を搗りながら、のんびりとした口調で凜が尋ねる。視線はアンヌツカの方に向いているが、コンタクトレンズを外しているのも、その顔はぼんやりとしか見えていないはずだ。「本来、蛮族はあまり川船を必要としないのです。氏族同士で貿易を行っているわけでもないし、高原地帯では川自体も浅いものが多く、交通手段としても不便です。利用法はせいぜい、川魚を取るために使うくらいです。それを、増やし始めたということは……」

「ジンベル侵攻を狙ってるってこと?」

「ありえない話ではありません」

夏希の言葉を、アンヌツカがやや厳しい表情で肯定する。「……まあいいわ。行ってらっしゃいな」

「ありがとうございます」

夏希と凜に対しそれぞれ一礼したアンヌツカが、仕事部屋を足早に出てゆく。

「何なの? 蛮族とかって?」

アンヌツカが消えたところで、凜が訊く。

「あとでいろいろ食べながら説明してあげるわ」  
米粉を練る作業に戻りながら、夏希は言った。

「うーん。もう少し固い方がいろいろうっぽかったわね」

蒸しあげたばかりのいろいろを包丁で切り分けながら、凜が言う。「とりあえず味見を」

夏希は一切箸でつまむと、かじってみた。たしかにふにゃつとした食感で、いろいろうらしくない。

「でも、おいしいよ。上出来だよ」

「……糖蜜を使ってるせいか、甘さもいささか品がないわね。雑味もあるし」

自分でも一切れつまみながら、凜が言う。

「じゃ、お約束どおり蛮族に関して説明してあげるわね」

「いろいろを食べ、濃く淹れた緑茶を飲みつつ、夏希は蛮族に関して知っていることを凜に説明してやった。

「じゃ、蛮族が攻めてきたらどうなるの？」

抹茶ういろうを切り分けながら、凜が訊く。

「ジンベル防衛隊が何とかしてくれるんじゃないかな」

「何とかって……アバウトな」

凜が、鼻で笑う。

「南側にある城壁見たでしょ？ あれがあれば、蛮族が攻めてきても大丈夫でしょう」

夏希はそう言いながら、開け放した窓……空気交換の魔術が掛かっているから熱気は入ってこられない……を指差した。

はるか向こう、市街地の南の端には、ジンベル王国が誇る堅固な城壁がちらりとその姿を見せている。盆地の南端近く、左右に山が迫って括れているところに設けられており、その全長は四百メートルほどだ。ちょうど中間あたりにジンベル川が流れ込んでおり、橋兼用の城壁がその上をまたいでいる。分厚い木製の扉を備えた城門はふたつあり、それぞれ川の東岸と西岸に設けられている。

「まあ確かに、槍と弓矢くらいしか持っていない軍隊同士の戦闘なら、あの規模の城壁は有効だろうけど……ねえ、防衛隊って、何人いるの？」

凜が、訊く。

「三百八十人とか聞いてるわ」

「たったそれだけ？ 何千人も蛮族が攻めてきたら、いくら立派な城壁があっても、負けちゃうわよ」

呆れたように、凜が言う。

「そんなに大勢で攻めてはこれないって、アンヌツカが言ってたわ。船が少ないから、せいぜい三百人ほど……」

「そこまで言った夏希は、アンヌツカが出席する会議が開かれる理由に気付いて言葉を切った。

蛮族……イフアラ族が川船を集めている。

「やばいんじゃないの？」

お代わりのお茶を注ぎながら、凜が訊く。

「でもまあ、わたしたちが気を揉んでも仕方ないでしょう」

小豆ついろつに箸を伸ばしながら、夏希は言った。

「まあね」

そう応じた凜が、急に目を輝かせる。

「そうだ。エイラに何とかしてもらえばいいじゃないの。異世界召喚できるくらいの魔術師……じゃない、巫女なら、蛮族の軍隊くらい蹴散らせるんじゃないの？」

「それは無理だつて」

軽く手を振って、夏希は凜の見解を否定した。

「魔術で人を殺めたり傷つけたりするのは不可能だそうよ」

「なんだ。つまらない」

凜がわずかにむくれる。おそらくは、ファンタジー小説などに良く出てくる電撃やら火炎やらの物騒な術を操る魔術師でも想像していたのだろう。

「さて、いろいろ作りには成功したし……このあとは、凜ちゃんのお勉強会にしますか」

自分の分を平らげた夏希は、お茶を飲み干すとそう言った。

「……めんどくさいわね」

凜が、鼻に皺を寄せる。

「ジンベルや平原地帯に関する基本的なことは覚えてもらわないとね。そうそう、昨日の宿題、ちゃんとやってきた？」

「都市国家全部覚えて来いつての？ 一応、覚えたけど……」

凜の語尾が、自信なさげに消える。

「じゃあ、問題です。鉄鉞で有名なのは、どこでしょう？」

夏希はさっそく質問を放った。

「えーと、ススロン」

「正解。じゃ、焼き物で有名なのは？」

「シーキンカイ」

「ほう。よくできました。麻織物が特産なのは？」

「ケートカイ」

「上出来。金属製品で有名なのは？」

「ニアン」

「素晴らしい。完璧に覚えたみたいね。地理オンチでこれだけ覚えられたなら、上出来よ」

夏希は鷹揚に微笑んだ。

「質問。なんとかカイって国、多いよね。意味があるの？」

軽く片手を挙げた凜が、訊く。

「昔の言葉で、市場の意味らしいよ。日本にもあるでしょ？ 四日市とか、八日市場とか。あれとおんなじよ」

「へえ。じゃ、もうひとつ質問。銅鉱山で有名なのがエボダよね。

鉄鉱山がススロン。でも、金属加工はニアン。なんでエボダやスロンが自前で金属製品を作らないの？ そんなに技術格差があるのかな？」

「それがあるみたいなの。針金の作り方とか、鋼の作り方とかはニアンが秘密にしているらしいの。簡単な鋳物くらいは、エボダやスロンでも作ってるけどね」

「鉱山のないニアンで、どうしてそんなに高度な技術が得られたのかしら」

凜が、首をひねる。

「ニアンは最も古い国のひとつで、昔は銅鉱も鉄鉱も取れたらしいの。だけど掘り尽くしてしまい、その後は精製された銅や鉄、錫なんかを輸入して加工する産業に転換したわけ」

夏希は以前アンヌツカに教えてもらった知識を披露した。

「なるほど」

納得した凜が、深くうなづく。

10 新人助手（後書き）

第十話をお届けします。

## 11 教育問題の解決法

「ねえ、夏希」

「ん？」

凜に呼びかけられて、夏希は夢中で食べていた炒飯から顔をあげた。どうやってかは知らないが、凜はジンベルにある香辛料や香草野菜、根菜などを組み合わせ、お店で食べるような本格的な中華料理の味わいを出せる万能調味料を開発してしまったのだ。これをたっぷりと効かせ、卵や乾燥牛肉、数種の野菜とともに米を炒めた凜お手製の炒飯の味は、まさに絶品であった。

「夏希は、ジンベルをどうしたいの？」

珍しく深刻な表情で、凜が訊く。

「どうしたいって……どういう意味？」

冷たい水でのどを潤しながら、夏希は訊き返した。

「ごめん。質問の仕方が悪かったわね。夏希は、契約期間が終わったらどうするの？ 一年で向こうへ帰るつもり？」

「うん。それは……」

そう問われて、夏希は悩んだ。

たしかに、ヴァオティ国王と結んだ契約は、双方の合意があれば延長可とはなっているものの一年である。

「まあ、もっと居てくれと頼まれたら、一年くらいは伸ばしてもいいと思うけど」

「そうよね。みんないい人たちだし」

『多国籍眼鏡』（ハンジャーカイのレンズ、ニアンの青銅フレーム、マリ・ハの天然樹脂を組み合わせる）のずれを直しながら、凜が言う。

「それは同意せざるを得ないわね」

夏希はうなずいた。エイラ。アンヌツカ。人ではないが、コーカラット。助手の面々。シフォネ。国王陛下。市民たち。

みないい人ばかりである。

「あたし、思ったの。彼らの好意に応えるには、もっと根本的な改革が必要だって。お菓子や便利な発明品をもたらすだけじゃ、足りないわ」

凜が、大げさな手振りを交えて、力説する。

「で、どうしようというの？」

「鍵はやっぱり、教育よ」

きっぱりと、凜。

「あ。そうきたか」

夏希も常々思っていることだった。鎖国していた封建国家が短い期間で国際連盟の常任理事国の地位にまで登りつめることが可能だったのは、江戸後期からの大衆への教育の普及と明治政府の文教政策が主因のひとつであろう。主要都市が焼け野原となり、餓死者が出るのが当たり前の状態から急速に国力を回復させ、アジアの工業国の地位をあっさりと奪回できたのも、国民の大多数にかなり高度な教育が施されていたからだと言っても過言ではあるまい。

「じゃ、学校でも作ろうというの？」

「そう。とりあえず、教員育成が先ね。それから小学校を作る。そこから優秀な生徒を選抜し、高等教育を受けさせる。そんなシステムを、作り上げたいのよ。そうすれば、もっとジンベルは発展できるわ」

「……何年かかるのやら」

夏希はわざとらしくため息をついた。

「最大の問題は、あたしたちには教員育成を行う素養も時間もないってことね」

冷静に、凜が言う。

「同意するしかないわね」

凜が仕事を手伝ってくれているおかげで、いまのところ夏希の睡眠時間は十分に確保できている。もし凜が学校作りに専念し始めたら、またしても過労死の恐怖に怯えねばならない。

「唯一の解決策は……もうひとり召喚してもらおうことよ」  
指を一本立てつつ、凜が言う。

「国王陛下が納得するかなあ」

夏希は苦笑した。

「納得させるわ。だいたい、お菓子でかなり儲けてるはずじゃないの」

「まあ……確かにね」

偽物羊羹や蒸し饅頭などの製法は、国王によって特定の商人に対し払い下げが行われ、すでにジンベル内で一般向けに販売が行われている。日持ちする米粉かりんとうもどきは、輸出品目のひとつに入っているくらいだ。夏希と凜のおかげで、ジンベルの国庫は多少は潤ったはずである。

「とりあえず、明日エイラに相談しましょう」

「また増員ですか。……なんだか、マルセル隊長を思い起こさせますわね」

王宮の一郭で話を聞いたエイラが、口の端を歪めて苦笑する。

「マルセル隊長？」

「四百年ほど前に、わたくしの御先祖様が召喚した方です。その頃、蛮族との戦いが激化していたので、防衛隊の指揮を取ってもらっためにお呼びしたのです。その方が、戦うには優秀な部下が必要だとおっしゃって、何人も異世界の戦士を召喚させたそうですわ」

「へえ。マルセル隊長ねえ。どこの人だろう？」

「ルーアン、とかいう街でお生まれになったそうです」

夏希の疑問に、エイラがそう答える。

「ルーアンっていうと、中国？ 韓国？」

凜が、首をひねる。夏希は凜の地理オンチぶりに思わず吹き出した。

「……たぶん、フランスのルーアンじゃないの？ マルセルって、いかにもフランス人っぽいし。四百年前という……こちらの一年

はやや短いから……十七世紀始め頃かしら。そのころのフランスで……」

「ブルボン朝が始まったところね。リシュリユーとかいた頃。地理には疎いが歴史には強い凜が、言う。」

「それで、蛮族との戦いはどうなったの？」

夏希はそう尋ねた。

「マルセル隊長率いる軍が、攻め込んだ蛮族を打ち破って追い返しました。南の城壁は、その時にマルセル隊長の指導で造られたものですわ。もつとも、それで降も何度か改修を繰り返していますから、原型は留めておりませんけど」

「……なんか話がずれちゃったわね。で、エイラは追加召喚に賛成してくれるの？」

凜が問う。

「もちろんです。凜殿のお菓子は、わたくしも大好きですから」

珍しくいたずらっぽいな笑みを浮かべたエイラが言って、こくんとうなずいた。

ヴァオティ国王の許可はあっさりと下りた。やはり、お菓子関連の臨時収入で、気を良くしていたせいだろう。ただし、増員分の報酬は夏希の二分の一、と契約前に決められてしまった。

「……まあ、そんなものね」

国王の前から辞し、王宮の通廊を歩みながら凜が肩をすくめる。

「蛮族対策で出費が高み、国庫も厳しいようです。最近、王宮でも他国の商人の姿をよく見かけますし」

エイラが言い訳がましく言う。

「仕方ないわ。ジンベルの人々の安全が最優先だもの」

夏希は本心からそう言った。

「召喚は明日とします。おふたりは、どのような人物を御希望ですか？」

足を止めたエイラが、夏希と凜を見据えた。

「聡明で知識が豊富。特に、歴史通だと嬉しいわ。教師タイプってわかるかな？ 学究肌の人がいい」

凜が、言う。

「今回性別は問わないわ。年齢も……高齡じゃなければ問題なし。でも、日本人限定でお願い」

夏希も希望を述べた。やはり外国人では、いくら言語の魔術があるとは言え緊密なコミュニケーションを取ることは難しいだろう。

「承知しました」

翌日。

王宮の一室で、召喚の準備が始まる。凜を呼び出した時と同じ供物が、エイラの手とコーカラットの触手で、雛壇の同じ位置に据えられてゆく。

「では、召喚の儀式を執り行ないます」

エイラが宣言し、印を結び始める。

ぼん。

紫がかかった黄色い光が部屋を満たす。夏希は素早く息を止めた。

悪臭を伴う白い煙が、部屋に立ち込める。凜が、げほげほと咳き込んだ。

エイラの指図で、ジンベル防衛隊の兵士が、召喚された人物を探しに散ってゆく。

「どんな人が来るのかしら」

まだ悪臭の影響下にあるのか、顔をしかめた凜が言う。

「歴史学の大学教授とか来てくれると、心強いよね」

夏希はそう応じた。

別室でしばらく待つうちに、兵士の一人が帰ってきて、エイラに報告を行った。それによれば、見つかったのは若い男性で、逃走することもなく大人しく防衛隊の兵士に保護されたという。

「普通、逃げるもんじゃないの？」

凜が疑わしげに言う。

「わたしも最初は逃げたけど……よほど度胸の据わっている人が、あるいは逃げてても無駄だと読み切った頭のいい人が……」

夏希も首をひねった。

「探しに行かなくて済むのは楽でいいですう」

エイラの頭上に浮かぶコーカラットが、くすくすと笑う。

十五分ほど待っただろうか。やって来た兵士が、保護した人物の到着を告げた。エイラが入室を許可し、下がった兵士が二人の兵士に挟まれた若い男性を連れて戻ってくる。

身長は、夏希よりやや低いか。女性的と言えるほど、整った目鼻立ちの細面。いわゆる、優男っぽい風貌だ。

顔に、思いつきり見覚えがあった。夏希にとっても、凜にとっても。

「宮原君……」

同じクラスの、宮原 駿だった。成績は学年でもトップクラスの知性派。だが、秀才タイプではなく、野球部のレギュラーだったりもする。もっとも、部員が二十人に満たない弱小野球部ではあるが。

「おやおや。森さんに藤瀬さんか。どうなってるんだ、これは？」

にやにやと笑いながら、駿が訊く。

「あー、エイラ？」

「なんででしょうか？」

「どうしてあなたは、わたしのクラスメイトしか召喚できないの？」

「この男性も、夏希殿のお知り合いなのですか？」

エイラが、驚きに目を見張る。

「まあ、とりあえず条件は満たしてるんじゃない？」

苦笑交じりに、凜がフオローする。

「とりあえずね」

夏希は、不承不承うなずいた。

夏希と凜は、交代で事情を説明した。

「異世界ねえ……」

駿が、皮肉めいた笑みを浮かべる。

「信じられないかももしれないけど、現実なの」

夏希は力説した。

「まあ、信じるしかないだろうね」

駿の視線が、夏希の頭上でふわふわと浮いているコーカラットに注がれる。

「こんな奇妙でかわいい生き物がある世界。異世界以外に考えられないじゃないか」

「お褒めいただき、恐縮ですう」

コーカラットが、触手をくねくねさせて喜ぶ。

「まあ、歴史好きとしてはこの状況は興味深いと言わざるを得ないね」

「じゃあ、わたしたちに協力してくれる？」

夏希は身を乗り出した。

「期間限定で報酬あり。かなりの好条件じゃないか。喜んで協力するよ」

駿が、力強くうなずく。

「ありがとう、宮原君」

「どういたしまして、森さん、藤瀬さん」

「あ、さん付けはやめてよ。夏希と凜でいいわ」

夏希はそう言った。

「じゃあ、僕のことも駿でいい」

白い歯を見せて、駿が笑う。

「ところで、なんで駿は逃げなかったの？ 普通、見知らぬところに飛ばされて変な連中が近づいてきたら逃げるもんじゃないの？」

凜が、首を傾げつつ訊く。

「これじゃ、逃げられないよ」

駿が、片足を上げてみせる。

……灰色のソックス履きだ。たしかに、靴なしで走って逃げるのはきついだろう。

「それに、現れた連中の姿が、いかにも役人らしかったからね」  
駿が、続けた。

「揃いの服。統制の取れた動き。地元の官憲だと考えて、逆らわないようにしたんだ。抵抗したり、逃走すれば犯罪者扱いされるだろうが、無抵抗でいれば不審者止まりで接してくれるだろうと期待したのさ」

「……知性派らしい対応ね」  
夏希は感心した。

「とりあえず、教員の育成が必要だと思う」

駿が、組織図を描いた『ホワイトボード』を手に説明する。

この『ホワイトボード』は、夏希と凜の共同発明品である。ハンジャーカイからの輸入品である紙の消費量が馬鹿にならないので、その代用品として作り上げたものだ。板切れに石灰塗料を塗り、その上からマリ・八産の半透明な樹脂を塗り重ね、表面をハンジャーカイ産の磨き砂で微妙な滑らかさ……インクを弾くほどではないが、湿らせた布でふき取ればきれいに消すことができるくらい……に磨き上げてある。

駿が召喚されてから、すでに三日が経っている。異世界人三人は、王宮の仕事部屋にある大きなテーブルを囲むように座っていた。

「まず、教員候補を募集する。ジンベルの水準から言えば、貴族の子弟が富裕層から募るしかないね。かなり名譽な職業だという前宣伝を行えば、それなりの数は集まると思う。彼らには、僕が直接指導する。いわば師範学校だね」

眼鏡を外しながら、駿が言う。彼もコンタクトレンズ愛用者なので、掛けていたのは凜が貸した予備の眼鏡である。度が合っていないから……凜の方が強度の近視である……長時間掛けていると疲れるらしい。

「とりあえず基礎的な知識を伝授したところで、初等学校を開設す

る。生徒は……こちらも富裕層に限られてしまっただろうな。ジンベルでは、幼い子供も労働力にカウントされてしまっレベルだから」「仕方ないわね」

夏希は軽く首を振りつつ言った。二十一世紀でも、発展途上国の大半では同じような状況なのだ。『貧乏人の子沢山』という言葉は、子供が経済的負担になる先進国やそれに準ずるライフスタイルを送れる国においてのみ通用するいわば『ぜいたくな』言葉なのである。本当に貧乏な国ならば、子沢山は労働の担い手が多いことを意味するのだ。……もっとも、そのような国ではいくら働き手が多くても貧困生活から抜け出すことは難しいが。

「とりあえず、初等学校の教員には師範学校生を充てる。ごく基礎的な教育内容……読み書きと加減算、道徳程度を教えるだけで事足りるからね。まあ、教育実習みたいなものだ。もう少し進んだら乗除算、物理と化学、生物なども必要になるね。国語教育もより高度なものにしたい。スポーツも広めたいね。地理と歴史も教えたいが、こればかりは僕の知識が不足しているからね。頑張つて勉強しないと」

駿が、白い歯を見せる。

「順調に行けば、美術や音楽なども教えたいが……これは中等教育になるだろうね」

「……こうしてみると、日本の教育システムって、凄かったのね」「しみじみとした口調で、凜が言う。

「同感ね」

義務教育をまともに受けてさえいれば、わずか九年で凄まじい量の知識を幅広く身に付け、そして応用することができるほどの能力を得られるのだ。そのレベルは、ジンベルならば賢者として認められてもおかしくないほどである。

教育が知識を貪欲に求め、さらに知を蓄積させる世代を育てる。進んだ知が更なる知恵と知識を生み出し、それを吸収した若い世代がこれを発展させる……。素晴らしく効率的な知の拡大再生産であ

る。

「問題は、時間だ」

駿が、言う。

「師範学校の卒業生が自らの手で教員を育てることができるようになるまで、下手をすれば一世代はかかるだろう。残念ながら、僕はそこまで付き合うつもりはない」

「まあ、ある程度形だけ整えてやれば、あとは自助努力してくれるんじゃないの？」

やや投げやりな口調で、凜が言う。駿が、呆れたように首を振った。

「それにしても、何年も掛かるだろうね」

「あと問題は、お金よね」

夏希はため息混じりに言った。ジンベルの主要産業は金鉱と銀鉱である。両方とも埋蔵量は潤沢なようだが、金きんに関しては商取引に使われている関係上、その流通量の上限が平原都市国家間で規定されているのだ。だから、採掘すればするほど儲かるというわけではない。銀の方はそのような制限はなく、細工物や高級食器類などが輸出されているが、その単価は金製品に及ぶべくもない。

学校建設の費用。その維持費。師範学校の学生も、小学校の教員兼任となれば、それなりの手当てを払わねばならないだろう。

「まあ、教育費は最も優れた先行投資であることを、ヴァオティ国王にわかっていただくしかないな」

駿が言って、ホワイトボードを静かにテーブルの上に置いた。

11 教育問題の解決法（後書き）

第十一話をお届けします。

## 12 蛮族対策

「残念だが、駿殿の提案は認められない」

ヴァオテイ国王が、厳かに言う。

夏希ら三人の異世界人は、謁見の間で国王と向かい合っていた。

国王の隣にはエイラの姿があり、その傍らには相変わらずコーカラツトの姿がある。

「畏れながら、陛下……」

駿が反駁しかけたが、ヴァオテイ国王がそれを身振りで遮る。

「いや、そなたの話は理解した。人が富を生む。まさにその通りだと思う。一部の者が知識を後生大事に抱え込んでいても、その量は増えない。学校とやらを作ることには、反対はしない。だが、我が国は喫緊の問題を抱えておる。余分な金かねはないのだ」

「……蛮族の問題でしょうか？」

夏希は遠慮がちに訊いてみた。

「そうだ。他国からもたらされた情報を勘案すると、イフアラ族は本気で我が国を狙っているらしい。早急に対処する必要がある」

「戦争つて、お金掛かりますものね」

凜が他人ごとのように言う。

「陛下。イフアラ族はなにゆえシンベルを攻めるのですか？」

夏希は素朴な疑問をヴァオテイ国王にぶつけてみた。戦争に踏み切る以上、その目的があるはずだ。それが何であるかを知り、何らかの手段で取り除くことができれば、開戦を阻止できるかもしれない。

「それが、よくわからぬのだ。他の平原諸国にも協力を依頼し、色々調べさせてはいるのだがな」

歯切れ悪く、国王が答える。

「……それはともかく、いい機会だから聞いておこう。そなたたち、シンベルの防衛に手を貸してはくれぬか？」

ヴァオティ国王が、三人の顔を順繰りに眺めながらそう切り出した。

「契約内容に、軍務は含まれていなかったことは重々承知している。しかし、今ではそなたらもジンベルの住人。そのよしみで、力を借りたい」

「そうおっしゃられましても……」

夏希は口ごもった。軍事知識など皆無に等しいし、剣や槍など触ってみたことすらない。凜も、同様だろう。

「なに、戦ってくれと頼んでいるわけではない。防衛隊や、市民軍の訓練を手伝ってほしいのだ。異世界には、優れた軍隊があると聞く。かのマルセル隊長のような、優秀な指揮官もある。そなたらの知恵を、借りたいのだ」

「あまりお役には立てそうにありませんね、陛下」

いかにも申し訳なさそうな表情で、駿が言った。

「僕は戦史には詳しいですが、戦略や戦術を研究したことはありません。まして、軍隊の訓練に関しては素人同然です。まあ、軍師の真似事くらいはできるかもしれませんが。陛下がお望みなのは、野戦指揮官タイプでしょう。お手伝いしたいのは山々ですが、お力にはなれないと思います」

「陛下、よろしいでしょうか」

黙ってやり取りを聞いていたエイラが、控えめに割り込んだ。

「なにかね、巫女殿」

「マルセル隊長の代役を、新たに異世界から召喚してはいかがでしょうか？」

そう、エイラが提案する。

「このところ、立て続けに召喚しているではないか」

国王が、渋い表情で指摘する。

「幸い、召喚の儀式に使う供物にはゆとりがあります。報酬の問題だけ解決できれば、お金はあまりかかりませんわ」

「むう。しかし、マルセル隊長の代理となれば、それなりのものを

払わねばならぬだろう」

「陛下、御提案があります」

駿が、口を挟んだ。渋い表情のままの国王が、訝しげな視線を駿に返す。

「……聞かせてもらおうか」

「成功報酬にする、というのはいかがでしょう。蛮族を追い払う、ないしは攻めて来れぬだけの精強な軍隊を作り上げることができれば、報酬を与えるという契約内容にするのです。後払いならば、国庫も楽でしょう」

「ふむ。その手があったか」

国王が愁眉を開いた。

「よろしい。巫女殿。明日にでも優秀な者を召喚したまえ」

「先に言っておくけど、もうクラスメイトは呼ばないでね」

夏希はそう釘を刺した。

「もちろんです。……で、召喚するのは皆さんと同じ国の方がよろしいでしょうか？」

エイラが、訊く。

「いいえ。幸いなことにわたしの属する国はここ六十数年ほど戦争していないの。どうせ召喚するならば、戦場に出た経験のあるひとを呼ぶべきだわ」

「陸軍の現役軍人で、士官教育を受けたものが適当だろうね」

駿が、アドバイスする。

「船乗りやパイロットを呼んでも、大して役に立たないだろう。叩き上げの軍人も、中世的な戦闘に関して知識が乏しいだろうから、相応しくない。まともな士官教育を受けていれば、戦史についても研究しているはずだから、即戦力になるはずだ」

「国で言ったら、どこかしら。やっぱり、アメリカ？」

首を傾げつつ、凜が訊く。

「実戦経験重視なら、そうだろうね。だけど、ウェストポイントの

戦史教育は近世以降が中心だからなあ。むしろ、サンドハーストやサン・シールの方がいいかもしれない」

駿が答える。

「なに、そのサンドなんかとか、なんとかシールつてのは？」

「サンドハーストが、イギリスの士官学校。サン・シールが、フランスの士官学校だ。両方とも欧州戦史を重視しているから、古代から中世にかけての戦史教育は充実してるらしい」

「じゃ、お勧めはイギリス人かフランス人で」

夏希はそうエイラに告げた。

「わかりました」

「久しぶりね、こんな格好」

ドレスシャツに袖を通しながら、夏希はつぶやいた。

隣では、長袖トレーナーを素肌の上に着込んだ凜が、袖を捲くり上げている。

あちらの服装に着替えておくというのは、駿のアイデアである。今回召喚される人物は、おそらく軍人だろうから、防衛隊の兵士が不用意に近づけば攻撃してきたりする可能性が高い。また、サバイバル能力にも長けているはずだから、密林の奥深く潜ってしまうことも考えられる。したがってなるべく早めに夏希らが接触し、説得する必要があるが、ジンベルの服装では地元住民と見分けが付かず、逃げられてしまうだろう。日本語はまず通じないはずだから、服装で同じ世界の者と悟らせ、警戒心を解かせてから近づくのが得策である。

「準備できたわよ」

夏希と凜は、待っていた駿と合流した。駿ももちろん、こちらへ召喚されていた時の服装だ。足だけは、素足にジンベル製のサンダルを履いている。夏希も、履物は同様のサンダルだ。

ほどなく、召喚の儀式が行われていた部屋から、硫化水素の悪臭をまわり付かせたエイラが出てきた。

「儀式は無事に終了しました」

「ご苦労様」

夏希はとりあえず労った。

「コーちゃん、皆さんをお願いね」

エイラが、遅れて出てきたコーカラットに言う。

「おまかせくださいい〜」

コーカラットが、身体を揺らす。道案内兼護衛兼通訳兼異世界の生き証人として、彼女も夏希らに同道するのだ。エイラによれば、コーカラットは……というか、魔物は凄まじく『強い』ので、護衛には最適らしい。もっとも、魔物は人間同士の争いごとには基本的に非介入の立場なので、自ら積極的に暴力行為に及ぶことはないという。夏希らの護衛も、あくまで『ご主人様のお友達』だからこそ、引き受けるのだそうだ。

待つこと二十分ほどで、報せが来る。今回は、北の方に現れたらしい。

三人と一匹(?)は、足早に市街地の北へと向かった。途中で出くわした兵士の話によれば、召喚された人物は保護されるのを拒否し、激しく抵抗しつつ逃走しているという。

「さすがに軍人だな」

駿が、苦笑いを浮かべつつ感心する。

「はやいとこ説得しないと、怪我人が出そうね」

凜が言う。夏希も駿も同意し、足をさらに速めた。

市街地の北の外れでは、大勢の兵士が右往左往していた。どうやら、件の人物は市街地に逃げ込んだらしい。夏希らは兵士の案内で家屋の間に入り込み、搜索を開始した。

ほどなく、三人はばたばたという人が走る騒音を聞きつけた。音からすると、一人らしい。単独と言うことは、搜索の兵士ではないだろう。まず間違いなく、召喚された人物だ。

「こつち」

耳聡い凜が、皆を足音の方へと導く。

と、いきなり一軒の家の裏庭から、人影が飛び出した。ブルージーンズにノースリーブのシャツを着込んだ、色白の若い男性だ。たいへん背が高く、右手に木の棒を握っている。ごつごつと曲がっているので、太目の枝から余分な小枝を折り取った物のようだ。

男性が、浮いているコーカラットに気付いた。

「化け物め！」

一声叫ぶと、凄まじい気合を込めて棒で打ちかかる。

コーカラットが、ひよいと動いてこれを軽々と躲す。

……え。

夏希の目が点になった。男性の叫びが日本語だったこともあるが、それ以上に驚いたのは、男性の顔に見覚えがあったからだ。

境 生馬。……またもやクラスメイトである。クラス一の高身長

……百八十七センチ……を誇る、剣道部副部長だ。

「はっ！」

裂帛の気合とともに、生馬がコーカラット目掛け突きを繰り出す。触手の一本を棒状に素早く変形させたコーカラットが、余裕を持って生馬の突きを受け流した。続いて生馬が数回打ち込んだが、いずれもコーカラットの棒状触手に軽くないなされてしまう。

と、生馬の視線が夏希らを捉えた。細い目が、大きく見開かれる。

「宮原か！ 森に藤瀬も！」

名を呼びながら、生馬が三人をコーカラットから庇うような位置に走り込んだ。

「ここは俺に任せろ！ 早く逃げるんだ！」

コーカラットに向け威嚇するように棒の先を動かしながら、生馬が叫ぶ。

「あゝ、境君。悪いんだけど……」

夏希は頭を掻きつつ生馬の背中に声を掛けた。

「宮原！ 女の子は頼んだぞ！ 俺はこの化け物を倒す！」

夏希の呼びかけを意に介さず、生馬がコーカラットを睨みながら言い放つ。

映画か漫画だったらまことに格好のいいシーンである。だが、事情を知る夏希らから見るとなんともお間拔けな状況だ。

「化け物ではありませんっ。魔物ですっ」

生馬の言葉に、呆れたようにコーカラットが応じる。

「魔物か。道理で禍々しい姿をしている。さあ、掛かって来い！」

生馬が、挑発する。

「境。落ち着け。その魔物は敵じゃない」

駿が、生馬の肩に手を掛けた。

「なんだと？ 奴は味方なのか？ じゃ、追って来た兵士が敵なんだな？」

なおもコーカラットに棒の先を向け、視線も逸らさぬまま、生馬が早口で訊く。

「いや、兵士も味方だ。ここには、敵はいないよ」

「なん……だと？」

生馬の顎が、がくんと落ちる。

「異世界召喚なんて、不可解だ」

夏希らの説明を受けた生馬が、顎を撫でつつ唸る。

「不可解なのはこつちも同じよ。イギリス人がフランス人が来るはずだったのに、なんであなたが来たのか……」

夏希は首をひねった。

「エイラの能力不足、ということだろうな」  
にやにやしながら、駿。

「もしかすると、最初に召喚した人物に関係する者しか召喚できないんじゃないの？」

疑わしげに、凜が言う。

「まあ、とりあえずクラス一の武闘派が召喚されたことは、確実に」  
が

にやにや笑いを続けながら、駿が生馬を見た。

「完全に同意するわ」

夏希はうなずいた。身長百八十七センチ。やや細身ながら、剣道三段の腕前。気質的にも、荒事は得意そうだ。

「で、俺は何のためにここに召喚されたんだ？」

生馬が、短く刈った頭を掻きながら訊く。

「それはね……」

夏希は縷々説明を始めた。蛮族対策に話が及んだ時点で、生馬の目が輝く。

「俺に軍隊を任せるといふのか、その国王は？」

「そこまでは言っていないけど、訓練に手を貸して欲しいらしいわ。指揮を執らせてもらえるかどうかは、訓練結果次第じゃないの？」

「そういえば、境は戦国マニアだったな」

駿が、苦笑する。

「ああ。異世界召喚じゃなくて、戦国時代にタイムスリップだったら、大喜びだったんだがな」

生馬が、どう見ても日本には見えない周囲の風景を眺め渡す。ちなみに、木刀代わりの棒ははまだ手にしたままだ。

「ともかく、面白そうだ。俺も仲間に入れてもらおうよ」

「ありがとう、境君」

夏希は軽く頭を下げた。予定した人物……現役の外国人土官……に比べれば物足りないが、それなりに頼もしい仲間が増えた。

「しかし……さっきから聞いていると、お前らずいぶんと仲がいいな。名前で呼び合ったりして」

三人を見比べながら、生馬が薄笑いを浮かべる。

「結構長く一緒にいるからね。境君も、名前で呼んで欲しい？」  
凜が、訊く。

「小学生みたいでちょっと気恥ずかしいが……生馬でいいよ。よろしくな、駿、夏希、凜。……おっと、もう一人いたっけ」

振り返った生馬が、背後で浮いているコーカラットに歩み寄る。

「さっきは済まなかったな。事情がわからなかったとは言え、いきなり打ち込んでしまって。謝るよ」

「誤解が解けてよかったですう。しかし、見事な太刀捌きでしたあ。かなりの使い手と、お見受けしましたがあ」

コーカラットが、嬉しそうに身体を揺らしつつ言う。

「いやあ、褒められるほどの腕は持ってないよ。むしろ、あなたの腕の方が上だ。まったく隙が無かったしな」

「腕ならいっぱい持ってますからあ」

コーカラットが、すべての触手を持ち上げてひらひらと揺らす。

生馬が、豪快に笑った。

## 12 蛮族対策（後書き）

第十二話をお届けします。

### 13 異世界の巨人

ジンベル防衛隊に、新たに教練隊長という役職が設けられた。言うまでもなく、生馬のために新設されたポストである。序列からいけば、防衛隊長、副隊長に次ぐナンバー3の地位になる。

軍隊というものは、通常きわめて保守的な組織である。まして、ジンベル防衛隊は小規模で、人事異動も少ない。いくら国王直々の任命とはいえ、いきなり余所者が上から三番目という枢要な地位に納まったことを快く思わない者が存在したことは、当然と言えば当然である。

これら不満分子に対する生馬の対処法は見事だった。主だった士官や腕自慢に、竹を使った模造剣での勝負を挑んだのである。割竹を紐で縛り、柄の部分に滑り止めの布をつけた、長さ百十五センチほどの模造剣……。何のことはない、即席の竹刀である。

士官の過半数は貴族の次男か三男で、プライドは高く教養もあったが剣の腕は並み以下であり、生馬の敵ではなかった。本職と言えるベテランの長剣兵も、常日頃振り回している両手剣よりも短く、そしてはるかに軽量の竹刀を扱いかね、あっさりと生馬に小手を決められた。

生馬の体格の良さも、その地位の確定化に貢献した。ジンベル成人男性の平均身長は、百六十センチ程度。防衛隊の兵士には体格の良い者が集まっているとは言え、百七十センチを超える者はそう多くはない。生馬の身長は、百八十七センチ。一般のジンベル人からすれば、巨人といって差し支えない高さである。

かくして、『妙な剣術を操る異世界の巨人』はあっという間にジンベル防衛隊でその地歩を固めたのである。

「なかなか優秀だよ、連中は」

市街地の北側、放牧地の一角で行われているジンベル防衛隊の軍事教練を見学に来た夏希と凜に、生馬が言う。

「基本的に各隊とも十名が一隊だ。弓兵が十隊百名、槍兵が十隊百名、短剣兵も十隊百名。長剣兵が、五隊五十名」

夏希と凜の眼前では、ちょうど槍兵の一隊が行進して行くところであった。横一列になり、長さ三メートルほどの竹製の槍……いわゆる竹槍ではなく、ちゃんと金属製の穂先が付いている……を水平に突き出して、歩調を合わせながら歩んでいる。黒塗りの陣笠に日除けの白い布をまとわせ、背中には長さ一メートル半ほどの剣。まとっている鎧は、名刺大の金属板を貼り付けたいわゆる小札鎧こはざよろいで、胴部と肩を完全に覆っている。腰から下の鎧は、ミニスカート状だ。凜に言わせると、その部分は草摺くさすりりという名称らしい。

「竹槍つてのが、どうにも安っぽいわね」

凜が、感想を述べた。

「そうでもないぞ。駿に聞いたが、アジアでは竹を使った槍はごく一般的だったそうだし」

生馬が、言う。

槍隊の向こうでは、弓を握った一団の兵士が、五十メートルほど離れた的に向けて矢を放っていた。弓は二メートルほどもある大きなものだ。面白いのはその射法で、弓の下端をサンダルに押し付け、足の指で挟みこんだ状態で弦を引いている。

「駿に言わせると、昔のインド人はああやって弓を射ていたそうだし」

「ふうん。面白いわね」

「ねえ、馬はいないの？ 騎兵は？」

凜が、訊く。

「それが、この世界には馬という動物が存在しないようだ」

生馬が、頭を掻く。

「そう言えば……一度も見たことないわね」

夏希がジンベルに召喚されてもうかなりの日数がたったが、馬は

一頭たりとも見たことがない。中世的な社会なのだから、存在するとすれば当然乗用や貨物輸送に広く利用されているはずだ。

「名前からして馬好きそうだなもんね」

凜が、生馬に突っ込む。

「まあな。騎馬隊があれば色々面白いことができるはずだがな。

まあ、敵も無いんだから文句は言えんが」

「で、その敵である蛮族はどんな武器を使ってるの？」

夏希はそう尋ねた。

「弓と投げ槍が主な兵器らしい。元来が狩猟民族だからな。弓はジンベルのものよりも小さいが、威力、射程ともに同じくらい。ジンベルの弓も、竹をベースにした複合弓だが、それよりも進化しているようだ。投げ槍もかなり上手らしい。その反面、鎧はあまり進歩していないようだ。金属鎧は使わず、せいぜい革鎧。接近戦よりも、離れて戦うのが得意らしい。土気は高く、度胸もあるようだ」

「気弱な狩猟民族って、聞いたことないものね」

夏希は苦笑した。獲物と正対してこれを屠らねば生きてゆけない民族が、ヘタレのわけがない。

「注目すべきは、その動員能力の高さだ」

生馬が、続けた。

「老人を除く成人男子のほとんど、年長の少年、それに女性の一部が、戦時には丸ごと動員できるからな。おおよそ人口の四割近くだろう」

「……ベルリン陥落前のドイツ状態ね」

凜が、鼻を鳴らす。

「で、攻めて来られたら勝てるの？」

夏希は、肝心なことを尋ねた。もし勝ち目が無いようならば、契約解除してここからおさらばすることも選択肢のひとつとして考えねばならない。

「工夫しないと、無理だろうな」

生馬が、顔をしかめた。

「ラツシ隊長……防衛隊のトップの話だと、イファラ族が集められる船の数は多くても百艘程度だそう。一艘に五人乗り込むとして、五百人。それぞれが筏を引っ張り、これも五人乗りだとして、五百人。食料なども運ぶ必要があるから、一度に攻めて来れる軍勢は千名程度が上限だろう」

「防衛隊が三百八十。まるで敵わないじゃない」

凜が、指摘する。

「だから、工夫が必要なのさ。まずは市民軍だ。一応、三千名ほどは動員できるらしい。ただし、ほとんどが素人同然の連中だ。このうち、体力のある者、適性のある者などを選抜し、千名前後をそれなりに使える部隊に仕上げる予定だ。とりあえずこれで、数の劣勢は覆せる」

「質の劣勢は？」

夏希はそう訊いた。にわか仕立てのパートタイム兵士と、普段から弓や投げ槍を扱い慣れている狩猟民族では、その質に差がありすぎるだろう。

「そこが問題だ」

生馬が、無精髭が浮いている顎を撫でた。

「ジンベル市街地の南にある城壁は立派だが、いささか長すぎる。そこを千四百名足らずの兵で守備するには、広く薄く守らなきゃならん。一箇所でも突破されたら、負ける。城壁は内側からの攻撃には脆いからな。駿とも相談したんだが、もう少し南……ジンベル川を遡った位置に、砦を築こうかと思っている」

「……そういえば、最近駿を見かけないわね」  
凜が、首を傾げる。

「地図を作ってもらってる。地形の把握は作戦立案に不可欠だからね……と、噂をすればなんとやら、だ」

生馬が、顎で右手を指す。

歩んでくるのは駿だった。トートバッグのようなものを肩から下げている。

「やあ、おふたりさん」

女性陣に挨拶した駿が、にやにやしながらトートバッグに手を突っ込み、紙束を引っ張り出す。

「お望みの場所が見つかったよ。盆地の南端から直線距離で八百メートルほどのところだ」

生馬が、紙束を受け取る。夏希と凜は、生馬の左右からそれを覗き込もうとした。

「……生馬、悪いけどもう少し下で見てくれる？」

凜が、注文をつける。

「ああ、すまん」

生馬が応え、手にしていた紙束を二十センチほど下げた。生馬と凜の身長差は、三十センチ以上ある。当然、生馬が立ったままごく普通に物を読む場合、その対象物の位置は凜の目の高さよりも若干上になる。

一番上の紙には単色の地図が描かれていた。荒く塗りつぶされたジンベル川が、紙を二分するようにやや蛇行しながら中央に走り、その両側に二本の線が波打つように引かれている。

「ここだ」

駿が、矢印を描きこんである箇所を指す。

南からほぼ真っ直ぐ流れてきたジンベル川が、東側に引っ張られたかのように湾曲している場所だった。

「おう。ここはベストポジションだな。さすがは駿だ」

生馬が、手放して喜ぶ。

「あの渓谷……便宜上、ジンベル渓谷と呼ばせてもらうが……は、ジンベル川の流れが長年かけて徐々に穿ったものだ」

駿が、夏希と凜に向けて、説明を始める。

「だから、渓谷の左右は切り立った崖だ。山岳地帯は険しく、植生も密で踏破するのは困難。渓谷自体も密林と化していて、移動は困難だ。蛮族が攻めてくるには、ジンベル川を船でやって来るしかない」

「それくらいは、知ってるわよ」

凜が、わずかに口を尖らす。

「問題は、どこで迎撃するかだ。理想的なのは、左右の幅が狭い箇所。迂回できないからね。その上で、川が屈曲しているところ。通るのに時間がかかるから、攻撃し易い」

「ここは実にいい場所だよ。崖が迫っている……特に東側は狭い。まず、この瘤にメインの砦を造る」

生馬が、地図上のジンベル川の屈曲部の内側……西岸に、指を置いた。

「そして対岸に、これを支援する小さな砦を造る。もちろん、相互に弓で援護できる距離だ。川の中にも、防塞を設ける。これで、砦を抜かない限り蛮族は北上できない。河沿いに道を造って、少し北に寄ったところで橋を掛け、双方の砦の連絡路とする。建設のために、盆地の南端からここまで細いものでいいから道も造りたいな。そうすれば、完璧だ」

「この瘤の部分は、固い岩盤らしい」

駿が、言った。

「それにぶつかって、川がむりやり捻じ曲げられたんだろうな。そのせいもあって、長年そこだけは流れが安定していたから、左右の崖が大きく削られることなく、狭い谷間になったらしい。ちなみに、その岩盤自体が高さ二メートル近く地面から盛り上がった形で残っている。砦の土台には、もってこいだ」

「なんだか時間が掛かりそうね。大丈夫？ 蛮族がやってくるまでに間に合う？」

夏希は気遣わしげな表情で駿と生馬を交互に見やった。かなりの規模の土木工事になるだろう。もちろんジンベルに重機などない。すべては人力で行わねばなるまい。

「間に合わせるさ」

生馬が言って、手にしていた紙束をぽーんと音高く叩いた。

翌日から、工事が開始された。生馬は市民軍の教練に掛かりつきりだったので、工事自体の監督は駿に任された。作業に従事するのは、国王の命令で動員された市民たちだ。城壁の東岸の門から、盆地南端に向け道路が造られる。別働隊が、密林の中に入り込んで木々や下生えを切り拓き、河沿いに道を造りながら進む。川船が往復し、砦建設予定地の整地が始まる。製材を主産業とするハナドーンから角材や板が、ハンジャーカイからはマニラ麻に似た植物で作ったロープが、ニアンからは釘や金具の類が大量に輸入された。

「ねえ、こんなことしていいのかしら」

粗製石鹼を溶かし込んだ桶をかき混ぜながら、凧が言う。

「どうするの？ スコップ持って作業に参加するつもり？」

数種類のハーブをすり潰しながら、夏希は訊き返した。

「そうは言わないけど……ねえ」

口ごもった凧が、手にしている大きなへらを桶の底に立て、その柄に顎を載せる。

今日のテーマは待望の石鹼造りである。前回の試作品はあまりにも油臭く、実用できる品ではなかった。今回は駿のアドバイスを入れて、鹼化（油脂をグリセリンと石鹼分に分離させること）に石灰だけではなく草木灰も加え、さらに塩斥（高濃度食塩水を使って溶液から有機化合物を析出させること）も二回行う予定である。さらに、臭い消しに大量のハーブ類……食用としては適さない茎や成長しすぎた葉の部分……を大量に混ぜ込む計画だ。

「いずれにしても、素人のわたしたちが出て行っても役に立たないわ」

先端が緑色に染まった搗り粉木を振り立てながら、夏希は指摘した。

「それより、石鹼作ってたほうがよっぽど役に立つもの。流行らせたら、それこそ儲けものよ」

原料であるヤシ油は、マリ・ハからの輸入品。岩塩もイナートカイからの輸入だが、両方とも食用に適さない低質かつ安価なものを

使っている。石灰は自給できるし、ハーブ類も同様だ。ジンベルの輸出品目に石鹼が加われば、国庫収入に大いに寄与することは間違いない。石鹼の効能は汚れを落すだけではない。殺菌や消毒効果もある。広まれば、食中毒や伝染病の予防にもつながるはずである。ジンベルのみならず、平原諸国の人々の幸福増進に貢献できるはずだ。

「これは……大成功？」

「そう言っていていいわね」

凜が同意する。

今回の石鹼の完成度は高かった。泡立ちは充分で、汚れ落ちもいい。夏希は泡まみれの手を鼻に近づけてみた。油臭さは微塵もなく、ハーブのいい香りしかない。

夏希と凜は、できたばかりの石鹼……まだ乾燥していないのでペースト状だが……を入れた小さな桶と、水の入った桶を持って、エイラの仕事部屋に向かった。扉のない戸口から、中を覗き込む。

「エイラ、いる？ ちょっと、試してもらいたいものが……って、なに慌ててんの？」

仕事机に向かっていたエイラが、珍しく焦った表情で口を押さえている。頬が動いているところを見ると、何か食べていたようだ。

「おやつが邪魔しちゃったかな？ ごめんごめん」

凜が謝りながら、ずかずかと部屋に入ってゆく。夏希も続いた。見れば、机上に小さな鉢が置いてあった。おそらく、エイラはその中のものを食べていたのだろう。

「なに食べてたの？」

そう訊きながら、凜が鉢に手を伸ばした。アーモンドほどの大きさの茶色い塊をひとつ、つまみ上げる。夏希もひとつ手にとってみた。おおよそ茶色く、見た目は焦がしたフキノトウ、といった感じだ。実際に焼いてあるのだろう、香ばしい香りがする。

「あ、食べないで下さい、おふたりとも」

咀嚼を終えたエイラが、なおも慌てた表情でわたたと腕を振る。「いいじゃない。今度米粉ロールケーキ一本丸ごと焼いてあげるから」

そう言った凜が、茶色い塊を口に放り込んだ。

「あ、おいしい」

咀嚼しつつ、凜が眼を輝かせる。

凜の感想を聞いた夏希も、指先につまんだ謎のおやつを口に入れてみた。歯で噛むと、さくつとした快い歯ごたえのあとに、とろみのある中身が口中に流れ出したのがわかった。味は……胡桃かなにかに似ている。かなり濃厚な味わいだ。

「おいしいね。木の実？ 山菜？」

「ああ、夏希殿まで……」

エイラが力なくつぶやく。

味が気に入ったらしく、凜が立て続けに謎のおやつを口に放り込んでいる。夏希もふたつ目を手にしたが、エイラが涙目で見つめていることに気付き、それを元に戻した。代わりに、凜のわき腹をつく。

「そのくらいにしときなさい。エイラが泣くわよ」

「……おやつ取られたくらいで泣くことないじゃない。それほど、好物だったの？」

食べるのをやめた凜が、からかうように言う。

「そうではないのです。異世界のあなた方には秘密にしていた食べ物ですから……」

エイラの語尾が消え入る。

「秘密？ 魔術関連の食べ物とか？」

「いえ、異世界の方が普通食べないものなので……」

「ふーん」

凜が、あらためて謎のおやつを手にした。しげしげと眺めてから、ぼそりと言う。

「ひょっとして、虫？」

エイラが、こくんとうなずく。

夏希の喉元に、苦いものがこみ上げた。

「……ねえ、エイラ。吐いていい？」

「ですから、食べないでとお願いしましたのに」

「吐くなんてやめなさいよ。もったいない」

凜が呆れたように言っつて、夏希の青ざめた顔を覗き込んだ。

「昆虫食なんて一般的じゃないけど世界中にあるわ。日本にだってあるし」

「そうは言ってもね……」

夏希は胃の辺りを手のひらで撫でた。昆虫を食するのは肉や魚を食べるとさほど変わらない行為だ、と頭では理解していても、嫌悪感は拭えない。

「異世界人の皆さんが気を悪くするといけないので、ずっと秘密にしていたのです。虫を食べるのは昔からの習慣みたいなもので……さすがに今では食事として食べることはありませんが、おやつやお酒のおつまみに食べることは珍しくないのです」

言い訳がましく、エイラが言う。

「その昔、平原地帯でまだ牧畜が発達していない頃には、昆虫は貴重な蛋白源だったのです」

部屋の隅でひっそりと浮いていたコーカラットが、すーっと近づいてきた。

「衛生的にも栄養的にもまったく問題ないのです」

「……たしかに、問題ないでしょうけどねえ」

夏希は口中に湧いた苦い唾液をむりやりに飲み込んだ。

「昆虫食がばれたからって気にすることないわよ、エイラ。あたしはこの味、気に入ったわ」

凜がまたひとつつまんで、口に入れる。

「……相変わらず度胸があるわね、あなた」

夏希は心底呆れて凜の様子を眺め……そこで自分が桶を手になげたままだということに気付く。

「そうそう。石鹸を試してもらおうと来たんだっけ。凜、お願い」  
「はいはい」

水の入った桶を机に置いた凜が、ポケットから木栓のついた小さな瓶を取り出した。エイラの手を取り、その手のひらに瓶の中身を慎重に一滴だけ落す。

「……油、ですか？」

怪訝そうな表情を浮かべたエイラに、夏希はハープでパステル・グリーンに染まった石鹸をひとつかみ千切ると手渡した。

「はい。これに水をつけて、擦ってから手を洗ってみて」

なおも怪訝そうなエイラが、夏希に言われた通りに桶の中で手を洗い出す。

「あら。油が落ちましたわ」

手のひらを見つめながら、意外そうにエイラが言う。

「どう？　これが石鹸の効能よ。お風呂で使うと、気持ちいいわよ」

「これが石鹸ですかあゝ。面白いですう」

石鹸の一片を千切り取ったコーラットが、触手を擦り合わせて泡立て始めた。魔物らしく石鹸の性質を早くも悟ったのか、触手の一本をリング状にして、そこに石鹸の膜を張って遊びだす。

「どう？　売れると思う？」

「……どうでしょうか」

エイラが、首を傾げる。

「売りたいのなら、不安にさせることだな」

駿が、言う。夏希は小首を傾げた。

「不安？」

「人間は安心を好むからね。まず消費者を不安にさせる。そこで、特定の商品を購入したりサービスを受けたりすれば、不安が解消されるとアピールするわけだ。女性誌によくそんな記事が載ってるだろう？　『これを知らない人は流行に遅れてる』『今の流行りはこれ！　なんとかはもう古い！』」  
「もってない人はおしゃれじゃ

ない！』みたいな。宗教屋もおんなじだな。まず不安にさせる。『先祖の霊が怒っている』『このままではさらに運気が下がり続けます』『前世の悪行の報いです』『……そのあとで、高価な壺や水晶玉を売りつけるわけだ』

「なるほど」

凜がうんうんとうなづく。

「じゃ、具体的にどうすれば……」

「汚いやり方だが、伝染病の恐怖でも煽るんだね。その上で、石鹸さえ使えば伝染病を予防できると宣伝するんだ。まず間違いなく、売れる」

「それじゃ、誇大広告じゃない」

夏希は呆れた。

「だから、汚いやり方なのさ。幸い、ここには消費者庁も国民生活センターもないからね」

にやにやと笑った駿が、続けた。

「……まあ、正直な商売はあってもきれいな商売というものは存在し得ないからな」

13 異世界の巨人（後書き）

第十二話をお届けします。

## 14 砦と寿司

完成した砦を見学して意見を聞かせてくれ、という生馬からの伝言を受けて、夏希と凜はアンヌツカを伴い川船に乗り込んだ。暇だつたらしいエイラも同行を希望したので、船には四名が座ることになる。船頭兼護衛の兵士が、竹竿を器用に操って、ゆっくりとジンベル川を遡り始めた。コーカラットは、川船の脇をふわふわと漂いながら付いてくる。

川船が、市街地南側の城壁に近づいた。このあたりの家々は中心部に比べるとやや小さく、街路も大通りを除けば狭めである。主に低所得者層の住まいが多いようだ。川岸で遊んでいた数名の幼い少女たちが、こちらに向け手を振ってくる。夏希と凜は軽く振り返しやった。数々の便利な発明品をもたらしたおかげで、異世界人はジンベルの一般大衆に好かれている。特に夏希は、もつとも古株であり、女性としてはひときわ目立つ長身ゆえに、一番人気であった。夏希は少女たちのうち二人の髪型がツインテールであることを見て取った。シフォオネに半ば強引に施した髪型は、いつの間にか『異世界で流行っている女性の髪形』としてジンベルでも流行し始めていた。……かなり高齢の女性までもが白髪頭をツインテールにしているのは、苦笑ものだったが。

夏希の眼前に、市街地南側の城壁が迫る。切石を丁寧積み上げたもので、高さは四メートル近い。基部の厚みは三メートルを超え、上部にいくにつれ徐々に狭まっていき、頂部は幅一メートル半ほどの歩廊となっている。壁面は面一ついでに仕上げられているので、垂直ではないがよじ登るのはほぼ不可能だ。歩廊には南側へ向け、丸太と板を組み合わせた胸壁が造られており、そこから矢を射たり槍を突き出したりすることができるようになっている。

川船が、ジンベル川を城壁が跨いでいる部分に差し掛かる。コーカラットが、橋桁にぶつからないように高度を下げた。アーチ型に

なっている橋兼用の城壁の中ごろには隙間が開いており、非常時にはそこから丸太を組み合わせた水門が落ちて来て、川船の進入を防ぐ構造になっている。

城壁が作り出す影の中から、川船が陽光のもとへと滑り出る。夏希は城壁を振り仰いだ。雑草が繁茂する平地に、巖のごとく立ちはだかつている城壁。いかにも頼もしい眺めだ。川岸から東西に五十メートルほど離れて設置されているふたつの大きな門は、主要部を金属で補強した分厚い木製で、簡単には破られそうにない。そこからは、門の大きさに不釣り合いな狭い小道が、真っ直ぐに南方に伸びていた。

城壁が設けられている狭隘部を過ぎると、盆地は東西にまた広がりを見せていた。通常は放牧地として使われているそうで、あちこちに茶色い牛や白い山羊の姿が見受けられた。西の方に、かなり大きな密林の塊がある程度で、開けた平地が東西の山裾まで続いている。このあたりの川幅は市街地よりも広く、ざっと二十メートルほどか。河岸は小ささまざまな石がごろごろしている河原で、葦のような植物の茂みが点在している。

二キロほどジンベル川を遡ったところで、盆地は終わっていた。川の両岸が、いきなりジャングルとなる。視線が通らないのでよくわからないが、左右の山裾も迫ってきているようだ。ジンベル溪谷に、入ったのである。

「ジャングル・クルーズを思い出すわねえ」

凜が、ぼそりと言う。

「ねえ、ジンベルに鰐とかいる？」

夏希はエイラにそう訊いてみた。

「鰐？ 生き物の名ですか？」

エイラが、きょとんとした顔で訊き返す。

緩やかに蛇行しながら流れるジンベル川を、川船は静かに遡っていった。少しでも日光を浴びようという魂胆なのだろう、両岸の木々は川の上にも枝葉を張り出している。その緑の天蓋から漏れた日

差しが、穏やかな水面にちらちらと光っている。多くの木が、根を水の中にも伸ばしていた。いわゆる気根というものだろう。いかにも亜熱帯らしい板のような平べったい根……板根……を張り出した木も多い。枝から垂れた蔓植物が、水面に触れてゆらゆらと揺れている。時折高所の枝を走る黒い影は、リスザルに似た小動物だろう。たいへんに臆病な生き物で、人の気配を感じただけで葉群の中に隠れてしまう。

密林のあいだを一キロ近く遡ったあたりで、前方に真新しい木の橋が見えてきた。その手前西岸に、簡易な船着場があり、川船が何艘か舫われている。船頭役の兵士が、巧みな竿捌きで川船をそこへと付ける。待っていた兵士が、アンヌツカが投げたとせじな艦綱を杭に結びつける。

「なかなか立派じゃない」

川岸に降り立った凜が、そう感想を述べた。

一帯の植物はきれいに刈り払われ、地面も整地されていた。正面には、何棟か小屋のようなものが建っており、その向こう側には幅百メートル以上ある低い岩山のようなものがどんと横たわっている。岩山の上には、主に丸太と板で造られた砦本体が見えた。

岩山によつて西側に膨らんだ河の流れは、大小の石がごろごろしている川岸まで含めても二十メートルくらいの幅か。東岸には川沿いに道が伸び、岩山の砦と対になる位置に小さな砦が築かれている。狭隘部自体の幅は、二百メートル程度だろうか。ふたつの砦の端はそれぞれ切り立った崖と河原に接しているから、蛮族の軍勢が迂回するのは不可能である。

「よく来てくれた。まあ、ゆっくり見学してくれ」

満面の笑みで、生馬が出迎えてくれる。

今日の生馬は、手拭いを巻きつけただけの頭部を除けば完全装備だった。金属製の肩当てが付いた小札鎧。サンダルに脛当て。腰には、特注品のニアン製片刃両手剣……刃渡り八十センチくらい……が下がっている。

「立派なものね。たった十日で、これだけのものを造っちゃうなんて」

夏希は素直に感想を述べた。

「国王が金も人も出し惜しみしなかったからな」  
歩きながらやや声を潜めて、生馬が言う。

「まあ、大半は駿の手柄だよ。全体の構想は俺。図面を引いたのが駿。軍事上のアドバイスをしたのが俺。建築の指揮を執ったのが、駿だからな」

「で、肝心の駿は？」

「国王に呼び出された。どうやら、別の仕事を任されるらしい」

「別の仕事？」

「他国からの情報だと、イファラ族が他の主要氏族に援助を求めているらしい。そこで国王も他の平原諸国に援助を求める肚を決めた。派遣される外交団に、駿も加えるそうだ。外務大臣補佐だか代理だかの肩書きをもらったらしい。明日出発だから、準備してるところだろう……ああ、ここが一番見晴らしがいい」

丸太を組み、板を渡した見張り台みたいのところへ、生馬が一同を導く。

川を挟んで建てられた東西ふたつの砦の前は、奥行き二百メートルくらいにわたって密林が中途半端に刈り取られていた。その向こうは、深い密林のままだ。

「密林のままだと奇襲を受ける。完全に刈り取ってしまうと、敵が動き易くなる。腰くらいの高さが一番踏破しにくいんだが、それだと遮蔽物になって、伏せると矢を避けられてしまう。おおよそ、二十から四十センチくらいランダムに刈り残してある」

生馬が、説明した。

「川の中にも、三箇所杭を多数打ち込んで防塞としてある。戦時には、こちらの主砦に四百名、副砦に百名、予備に五十名配備する予定だ。内訳は、防衛隊の弓兵が百、槍兵が百、短剣兵と長剣兵がそれぞれ五十、市民軍の弓が百、槍が百。二百の弓なら、かなりの

威力を発揮するはずだ」

「弓矢が、少ないんじゃないの？」

凜が、指摘する。

「市民でまともに弓を扱える者が少ないからな。この百名だって、特訓を重ねてようやくまともに矢を飛ばせるようになったレベルだ」

生馬が、肩をすくめる。

夏希は砦の前面を見ながら、想像してみた。主砦の正面を目指して南から密林のあいだを流れてきたジンベル川は、その手前百メートルほどのところで東向きに流れを変え、副砦の側面に向かってゆく。そこで北向きに曲がった川は、主砦と副砦の側面に流れを晒しながら、主砦の後ろへ回りこむように流れている。……蛮族の川船が突っ込んできても、防塞に遮られた上に両側の砦から矢を雨霰と浴びせられるだろう。徒歩で攻めようとしても、川岸に船を着けたところで矢を浴びるし、ジャングルから飛び出して無理に攻めようとしても、砦に取り付くまでに開けた走りにくいところを押し渡らねばならない。

「これなら、蛮族の攻撃を防げそうね。……どう思う、アンヌツカ？」

夏希は副官に振った。地元の専門家の意見も、聞いてみたい。

「素晴らしい砦だと思います。……欲を言えば、砦の前面に水濠が欲しいところですが」

遠慮がちに、アンヌツカが答えた。

「あー、それは予算と人手不足から断念した」

生馬が、苦笑いする。

「まあ、蛮族が来るまでにはまだ時間があるだろうから、防衛隊の兵士と市民有志でぼちぼちと掘るつもりだが」

「ところで……なんで蛮族が攻めてくるか、理由はわかったの？」

夏希は訊いた。それさえわかれば、戦争を未然に防げるかもしれない。

「いや。単なる領土拡大欲じゃないのかな」

生馬が、言う。

「それは考えにくいですわ」

エイラが、口を挟んだ。

「高原地帯は広く、土地は余っているはずですよ。平原諸国民と事を構えてまで、領土を広げようとするとは思えません」

「噂ですが、より南方に居住していた氏族が、居住域を北に動かしつつあるという話もあります」

急に丁寧な口調になった生馬が、エイラに向け説明を始めた。

「特にジンベルは他の平原諸国と違いさして広くは無い盆地にあります。いったん攻め取ってしまえば、防衛は容易でしょう」

「……さして広くないのならば、領土拡大にならないじゃない」  
凜が、生馬の論の矛盾を衝く。

「たしかに。だが、領土拡大欲は領土拡大そのものが目的ではない場合もあるぞ。ちつぽけな無人島や利用価値の無い川の中州を巡って、大国同士が戦火を交えた例なんていくらでもあるからな。イフアラ族や蛮族全体に、なんらかの政治的な意図や目的があるのかもしれない」

生馬が、言い返す。

「人間は数が多いからたいへんなのですう」

コーカラットが、身体を揺らしながら言う。

「魔物は数が少ないから楽なのですう。魔物の数に比べて魔界は広すぎて、寂しいのですう。もっと狭い方が、いいのですう」

「コーちゃんが味方してくれば、心強いんだがな」

軽く嘆息しつつ、生馬が言った。

「魔物は人間の争いには介入しないのですう。ご主人様とそのお友達はお守りしますが、それ以上のことはしてはならないのですう」

「まあ、下手に魔物に介入されるよりは、人間同士で争ってた方がいいわよね」

夏希はそう言った。空を自在に飛べ、剣道有段者を軽くあしらえ

る能力を持ち、さらに触手を切れ味の鋭い刃物に変化させることのできるコーカラットが本気になったら、凄まじい殺戮兵器と化すだろう。そのような力を持った魔物が何十体も敵味方に配されて戦いとなったら……阿鼻叫喚どころの騒ぎではない。

「凜が朝食を作ってくれるなんて、なにを企んでいるんだ？」

テーブルについた駿が、お茶を注ぐ夏希に訊く。

「ちょっとフライング気味だけどね。駿が外国に行っちゃうし、その前に食べてもらおうと思って。まあ、壮行会兼皆完成記念よ」

夏希はそう言いつつ、箸と小皿を配った。駿と生馬が、怪訝そうな表情でそれを受け取る。

凜の家の食堂に、異世界人四名は集まっていた。ちなみに、隣は夏希の家である。駿の家は少し離れたところがあり、生馬はそこに居候している。蛮族対策で人手が足りず、生馬の家の建築計画は予算さえついていない状態だ。

「はい。なんちゃって醤油だけど、我慢してね」

取り出した陶器の小瓶を、夏希は生馬に押し付けた。

「なんちゃって醤油？」

「煮た大豆に岩塩を加えて寝かせておいたの。その上澄みよ。塩気がきつ過ぎたんで、煮切ったお酒で薄めて、ジージャカイの川海老魚醤を混ぜてあるわ。まだ熟成が足りないんで香りはいまいちだけど、何とかなるでしょう」

生馬が、慎重な手つきで小瓶の中身を小皿に注いだ。小皿を持ち上げ、匂いを嗅ぎ、鼻に皺を寄せる。

「なんか、生臭いな」

「醤油の代用品か。ひよつとすると、あれかな？」

なんちゃって醤油を注ぎながら、駿が期待を込めた視線で夏希を見やる。

「おまたせ」

凜が、大きな平べったい桶を両手で捧げ持って現れた。テーブルの中央に、どんと置く。

「寿司か！」

半ば腰を浮かせた生馬が、桶の中を覗き込む。

桶には、握り寿司がぎっしりと詰まっていた。だが、その彩りは地味だ。大半が白っぽい魚介で、色鮮やかなのは出汁巻き卵の黄色と、何かの葉を使ったらしい緑色くらい。鮪の赤身や海老のピンク色などはどこにも見えない。

「川魚は全部昨晚から酢締めしてあるから、安心して食べてね」

凜が、解説した。

「わさびはホースラディッシュにハーブを混ぜてごまかした模造品だから、香りは悪いけど」

生馬がさっそく箸を伸ばし、酢締めされた川魚の切り身が載っている寿司をつまんだ。なんちゃって醤油を少し付け、口に放り込む。

「旨い。鮎寿司っぱいが、こっちの方が旨いぞ」

「どれ」

駿が、茹でた川海老が載っている寿司を食べた。顔をほころばせて、凜を見上げる。

「うん。旨いよ、凜ちゃん」

夏希も箸を伸ばした。座った凜も、食べ始める。

「結構いろんな種類があるのね」

イクラに似た、川魚の卵の醤油漬け。真っ白な蝦蛄しやいもどき。魚醬で煮付けた茸を載せたもの。焼き魚に川海苔の佃煮を塗り、軽く炙ったもの。酢締め川魚の切り身を、紫蘇のような香りのいい葉で巻いたもの。小指ほどの小魚を、甘辛い味付けで柔らかく煮たもの。

「どれも旨いが、巻物がないのが寂しいな」

生馬が、言う。

「ハンジャーカイから紙漉きの道具を取り寄せて、板海苔作りに挑戦したんだけどね。香りが良くなって。やっぱり、海苔は海のものでないとだめみたい。あ、これも食べてみて。うまく漬かっていると

いいんだけど」

凜が言い訳しながら、『がり』が入った小鉢を回す。

夏希は蝦蛄もどきに挑戦した。イヤーラからの輸入品として、茹でて軽く干したものを以前にも食べたことがあるが、これはもつと水分が多い。生きたまま仕入れて茹でたものだろうか。

なんちゃって醤油を付け、かじる。…… 蝦蛄よりも、寿司海老に似た味わいだ。おいしい。

「ま、今回一番苦労したのは、寿司酢に使う砂糖よ。米酢はイナートカイからの輸入品で間に合ったし、米から作るお酒もジージャカイから買えた。でも、雑味の無い甘さを得るには、糖蜜の結晶じゃ駄目なの。糖蜜の結晶をいったん溶かし、ろ過して煮詰めて結晶化させ、またお湯で溶いてからろ過して……。三回繰り返したら、やっと三温糖くらいのものできたわ。今度大量に作って、お菓子に使ってみるつもり」

みんなにお茶を注ぎ足しながら、凜が苦労話をする。

「お菓子より、ラーメンとカレーを作ってくれよ。久々に食べてみたいから」

生馬が、注文を出した。

「小麦粉が手に入らないから、ラーメンは無理ね。クミンとコリアンダーはあるから、カレーはできると思う。ターメリックもあるし。カレーはあたしも好きだし、暇があったら挑戦してみるわ」

凜が、確約した。

#### 14 砦と寿司（後書き）

第十四話をお届けします。当話で第二部「召喚編」は終了です。次回からは蛮族との戦いを描く第三部となります。

## 15 偵察行

「なんでわたしが一緒に行かなきゃならないの？」

夏希は生馬に食って掛かった。

「仕方ないだろ。駿は外国だし、凜ちゃんは地理オンチのうえ方向オンチ。地図描けるやつはお前しかないんだ」

諭すように、生馬が言う。

いまのところ、蛮族の奇襲対策として、砦の上流三百メートルほどのところに監視所が設けられている。その規模は川船が一艘と兵士四人、望遠鏡がひとつだけという、ささやかなものだ。蛮族の川船が接近してきた場合は、その多寡に応じて決められた数の狼煙をあげ、矢の届く距離に踏み込まれる前にさつさと下流へと逃げ去るのが任務とされた、いわば防犯センサー的な役割しか持たされていない小拠点である。

生馬と駿の構想では、少なくとも三キロほど上流に新たに監視所を設け、そこに少数の偵察隊なら追いつける程度の兵力を置きたいらしい。

「二キロくらい上流までは、駿が以前に地図を作ってくれてある」

生馬が、説明する。

「今回はその先を調べながら進み、監視所に適した場所も探す。できれば、十キロくらいまで遡りたい」

「危険でしょ？ 高原地帯まで、たしか二十キロくらいじゃなかったっけ？」

「そうだ。概算だが、二十から二十二キロくらいと見積もっている」

「じゃ、蛮族に出くわす可能性も高いじゃない」

不満顔で、夏希は指摘した。

「だから、護衛は充分に連れてゆく」

「でも……」

夏希は渋った。生馬の言いたいことはわかる。だが、危険な目に

はあいたくない。

「時間があまりないんだ」

生馬が、説得モードに入る。

「蛮族と商取引をしている商人がいる国からの情報では、すでにイアラ族はかなりの人数を動員しているらしい。完全動員がかかるまで、あといくらかもないだろう。ラツシ隊長やジンベルのお偉方の意見じゃ、十日後くらいが一番危ないという話だ。当然の策として、奴らは侵攻前にジンベル川の偵察を行うだろう。ぐずぐずしていれば、そいつらに出会う確率が高くなる。早い方が、危険が少ないんだ」

「夏希殿」

そばで話を聞いていたエイラが、夏希の腕に手を置いた。

「もしよろしければ、コーちゃんをお貸ししましょうか？」

「え、いいの？」

「もちろん結構です。コーちゃん、いいわね？」

エイラが、傍らで浮いていたコーカラットを見上げる。

「承知しましたあゝ。夏希様をお守りすればよろしいのですねえ」

「おいおい。俺は守ってくれないのか？」

苦笑いを浮かべた生馬が、コーカラットに突っ込む。

「生馬様はお強いのですう。わたくしが守らなくとも、心配ないのですう」

コーカラットが嬉しそうに言っつて、触手をくねくねさせた。

「そりゃ、コーちゃんがいてくれるのは頼もしいけど……」

夏希は愚痴りつつ、用意した手書き方眼紙を指でいじった。

五艘の川船は、砦駐屯の兵士たちの手によって、陸路船着場から砦の南へと運ばれていた。川の中に防塞が設置されているので、そのまま遡るわけにはいかないのだ。

五艘のうち四艘は護衛船で、ジンベル防衛隊の弓兵三名と市民の船頭、それに予備の竿を携えた槍兵がそれぞれ乗り込んでいる。残

る一艘は、船頭と弓兵一人ずつ、それに生馬と夏希に加えアンヌツ力が乗る。総勢二十五名プラス一匹の偵察隊である。生馬を含め皆が鎧を着込み、武器を携えている。丸腰なのは、夏希だけだ。

「がんばってね」

見送りに来てくれた凜が、手を振る。夏希は渋い表情で、力なく手を振り返した。

今日の夏希は、シフォネに縫ってもらったゆったりとした半袖シヤツと、サブリナパンツというスタイルだった。さすがにワンピースで長時間ボートに乗るわけにはいかない。頭には、日除け代わりに大き目の手拭いをゆるく巻き、首にも日焼け防止兼汗拭き用の手拭いを掛けてある。ベルトには、お茶を入れた竹筒が下がる。

「よし、出発だ」

生馬が命令を発する。川船が岸を離れ、縦に並んで川を遡り始める。夏希と生馬の乗り込む船は、前から三番目だ。

先頭の川船が、密林が刈り払われていないところまで進み、さらに遡ってゆく。濃密なジャングルに左右を、そして樹冠に上部を覆われた川に船が滑り込んでいく様は、さながら緑色のトンネルに吸い込まれてゆくかのようだ。水面を渡る風は涼しく、夏希の鼻にはすでにおなじみとなつた密林の生臭い臭いを運んでくる。

「ちよつと流れが速いみたいね」

水面を流れてゆく枯れ枝を見送りながら、夏希はそう言った。

「うん。わずかだが勾配があるからな。地図を描くときには、そのあたりも描き込んでくれよ」

「わかった」

しばらく遡つたところで、川岸に船が舫つてあるところに行き着く。監視所だ。本来は素通りする予定だったが、兵士が二人慌てた様子で手を振っているのを見た生馬が、すべての船に止まるように合図を出した。自分の乗り込んでいる船の船頭には、岸へ着けるように命ずる。

「どつした？」

「上流方向から、妙な音が聞こえています」

監視所の兵士が、緊張した面持ちで生馬に報告する。

「妙な音？」

「御自分でお聞きになられた方が早いと思います」

「そうだな」

生馬が、静粛を命ずる。夏希も、船縁をつかんだ状態で動きを止め、息をひそめた。

様々な音響が、耳に飛び込んでくる。流水が川岸や川船を撫でてゆく涼しげな音。木々が風になぶられるざわめき。虫たちが奏でるベース音。それらに時折、遠くで啼く鳥の甲高い声が混じる。

「よく聞こえないが」

しばし耳を傾けたのちに、生馬がそう言いつつ報告した兵士に目を当てる。

「先ほどまではかすかではありますが聞こえていたのですが」

兵士も首を傾げる。

「どのような音だったのか？」

「密林を切り拓いているような音でした」

「なんだと？」

生馬の声音が変わった。

「どういうこと？」

夏希は訊いた。

「……わからん。ひよつとして……。いや、即断は危険だ」

わずかの間考え込んだ生馬が、兵士にうなずいた。

「ご苦労だった。引き続き警戒に当たってくれ」

「はっ」

兵士が一礼する。……ジンベルに、敬礼という習慣は無い。

生馬が、護衛船に周囲に集まるように合図する。

「この先に敵がいるかもしれない。各船とも、静粛を保つように。」

先頭の船は、望遠鏡で前方を確認しつつ進むこと。前進速度はゆっくりで構わん。河岸への警戒も怠らぬように「

押さえ気味の声で、指示を出す。

「……なんか、やな予感がするんだけど」

再び川を遡り始めた川船の中で、夏希は生馬に告げた。

「やな予感は俺も同じだ。蛮族が予想よりも早く出張ってきているのかも知れない。いずれにせよ、調べる必要がある」

生馬が厳しい表情で言い切る。

監視所から夏希の見積もりで一キロほど遡ったところで、先頭を行く船が急に川岸に寄った。後続の船もそれに倣う。生馬が、船頭に船を前に出すように身振りで命じた。先頭に行く船の脇に寄り添わせる。

「どうした？」

「川岸に、船が舫ってあります。蛮族の姿もあります」

望遠鏡を手にした兵士が、小声で報告した。

生馬が、自分の望遠鏡を出した。身を低くしたまま舳先へ行き、覗き始める。その姿を眺めていた夏希だったが、しばらくすると好奇心を抑えられなくなり、生馬の背後ににじり寄った。

「どうなってるの？」

「見てみる。三百メートルほど先だ」

生馬が、望遠鏡を差し出す。

受け取った夏希は、接眼部を目に当ててみた。視野に、暗い緑色が飛び込んでくる。

「川岸に沿って動かしてみろ」

生馬がアドバイスする。

「……なんにも無いじゃない……あ」

そろそろと望遠鏡の先を動かしていた夏希の手が止まった。折り取った木の枝を被せて隠してあるが、明らかに人工的なものが川岸に見受けられる。川船だろう。

「どうするの？」

望遠鏡を返しながら、夏希は訊いた。

「まずは状況を探る」

そう答えた生馬が、他の船に手振りで静粛を命じた。

夏希も動きを止め、耳を澄ませた。密林と川が発する様々な自然な音に混じり、おそらくは人工的なものと思われる騒音が聞こえる。

「……何の音？」

「発生源はもつと上流だな。蛮族が何か企んでいるのは間違いない」

生馬が、唸る。

「生馬様。この音は、密林を切り拓いている音です」

アンヌツカが、言った。

「間違いないか？」

「はい」

自信ありげに、アンヌツカがうなずく。

「……ってことは」

「いや、即断はできません。……蛮族は何名確認した？」

生馬が、望遠鏡を携えた兵士に尋ねる。

「二名までは確認しました。革鎧をまもっています。得物は確認できませんでした」

「川船一艘とすると、おそらくは四から五名だろうな。その蛮族を捕らえてみよう」

「危なくない？」

夏希は疑わしげに尋ねた。

「危ないさ。だが、情報を得るための捕虜の獲得は、偵察の基本的な手段だ」

「しかし……開けている場所ですから強襲は難しいですね」

アンヌツカが言う。川船で近づけば容易に発見されてしまうし、密林を静かに押し進むのも無理だ。

「ちよつとした策が必要だな。……よし、お前囷になれ」

生馬が夏希を指差す。

「最初から荒事になる予感がしてたんだよねえ」

夏希はぼやいた。

「夏希様、背中が曲がっていますよ。困だと、悟られてしまいました」  
「やんわりと、アンヌツカが注意する。夏希は丸まっていた背中を伸ばし、きちんと身を起こした。」

生馬の作戦は、こうだ。夏希とアンヌツカ、それに兵士三名が乗った船と、護衛船の計二艘が、コーカラットを伴って先行する。もちろん、隠れている蛮族には気付いていないふりを装う。蛮族の目的は偵察か早期警戒だから、魔物が護衛に付いている船にわざわざちよっかいを出してくることはないだろう。通り過ぎたあとで、上流にいる味方に連絡……たぶん狼煙のぶを使って……するくらいが、妥当なところである。彼らの注意が、通過する夏希らに向いているうちに、生馬ら主力が下流から接近し、機を見て一気に突っ込む、という段取りになっている。

案の定、蛮族は夏希らの船がそばを通過しても手を出しては来なかった。三十メートルほど行き過ぎたところで、夏希はさりげなく振り返ってみた。

ちょうど、生馬が率いる三艘が波を蹴立てて突っ込んで行くところであった。弓兵を舳先に乗せ、槍兵にも竿を持たせるという高速仕様だ。生馬は抜刀して、先頭の船で仁王立ち状態。……なかなか様になっている。

川岸で慌てたような動きがあった。警告の叫びもあがる。

生馬が剣を振って、矢を射るように命ずる。弓兵が即座に矢を放った。蛮族が潜んでいると思われる茂みに、何本もの矢が吸い込まれる。複数の悲鳴があがった。

「戻して！」

夏希は船頭に指示を出した。直接戦闘には参加しないが、上流側の警戒と逃げ出した蛮族の捕獲という副次的な任務を生馬から与えられている。

突撃する船上の弓兵が、素早く矢を番えて二の矢を放つ。三本目の矢を放つ頃には、川岸がすぐそばに迫っていた。船頭が巧みに竿を操り、川岸に船腹を擦るようにして船を着ける。

すぐさま、生馬が飛び降りた。弓を置いて腰の片手剣を抜いた弓兵たちが、生馬に続く。槍兵も竿を手放して槍を手にし、周囲を警戒し始めた。船頭は竿を槍のように構えて、身を低くしている。

夏希はじりじりとして待った。作戦は成功なのか……。

二分ばかりして、生馬が茂みから出てきた。すでに、剣は鞘に収まっている。船に残っていた兵士たちに指示を出したあとで、夏希らの方に向けて安全確保の合図を送ってくる。

「うまくいったようですね」

アンヌツカが、安堵の吐息を漏らした。

「四人中矢で死んだもの二人。負傷したもの一人。そいつは何とか取り押さえた。無傷だったやつは激しく抵抗したんで、やむを得ず斬った」

生馬が、淡々と説明する。

「……まさか……あなたが斬ったの？」

「一太刀浴びせたただけだ。止めは他の者が刺した。ごく自然に、身体が動いたよ」

さばさばした表情で、生馬が言う。

「ごく自然に、って言っても、竹刀と長剣じゃ扱い方が違うでしょうに」

「ここだけの話だが、ガキのころからひい爺様の真剣を振り回してたからな。……それより、死体を見てみる」

生馬が、倒れている蛮族二人を、顎で指す。

夏希は鼻に皺を寄せながら、倒れ伏している死体に恐る恐る近づいた。

伏せているので年齢はわからないが、ターバンのような被り物の端からはみ出ている髪は黄色味の強い金髪だ。仰向けに倒れている方は髪は黒いが、顔立ちは明らかにヨーロッパ系だった。普通にイギリス人とかドイツ人とか自己紹介されても疑わないだろう。ただし、二人ともヨーロッパ人男性にしてはやけに小柄で、夏希よりも

どう見ても背が低い。ジンベル人と大して変わらない体格のようだ。

「蛮族って、かなり違う人種なんだ……」

「人種とは、なんですか？」

アンヌツカが、訊いてくる。

「身体的特徴で人を種別したもので……でいいのかな？」

「たしかに、平原の民と蛮族は見た目が異なりますが、それがどうかしたのですか？」

不思議そうに、アンヌツカが訊いてくる。

……この世界には人種差別とかないのだろうか。まあ、魔物であるコーカラットがジンベル市民からも別段忌み嫌われたりしない……それどころか、『異形のもの』としてすら認識されていないところからして、この世界には肌の色だの血統だのにこだわることはないのかもしれない。

夏希は首を振ると、生馬のあとについて茂みの中につけられた踏み分けを奥へと進んでいった。負傷して捕らえられた蛮族……こちららは中年の男性で、ウェーブした褐色の髪をしていた……が、抜き身の剣を手にした兵士に見張られながら、矢傷の手当を受けている。さらに奥に五メートルほど行ったところに、蛮族が生活していた跡があった。地面に折り取った小枝が敷かれ、その上に大きな革や布が広げている。矢筒や投げ槍などの武器も、きちんと揃えて置いてあった。

「……これは、やばいぞ」

キャンプ跡を調べていた生馬が、首を振った。

「どうしたの？」

「見てみる」

生馬が、拾った小枝で隅の方にあった塵芥の小山をつつく。

「……ゴミじゃない」

「ゴミは情報の宝庫なんだよ」

呆れた口調で、生馬が言う。

「一般家庭のゴミだって、ちょっと調べれば家族構成や生活レベル

くらいすぐにわかる。昨日の夕食のメニューさえ当てられるんだ」

「……蛮族の食事内容知ってどうするの？」

「こいつらの正体を知ることができる。いいか、よく見てみる。ゴミの中に骨がないだろ。獣のものも、魚のものもない。柑橘類の剥き滓はあるが、これはジンベルでも作ってる栽培種だ。自生しているものじゃない。つまりは、ここで自給自足していたわけじゃない、つてことだ」

枝の先でゴミをほじくり返しながら、生馬が続ける。

「火を使った形跡もない。穀類の滓もない。野菜屑もない。ここで調理はしていないと断言できる。ざつと調べたが、保存食の類も持っていないかった。ということとは、定期的に調理済みの食物を運んできてもらっていたんだろうな。おそらくは、近いところから。さつきから妙な音を立てている連中のとこに違いない」

生馬が枝を捨てると、夏希を見据えた。

「そいつらを探しに行くぞ。蛮族がなにを企んでいるのか、突き止めるんだ」

## 15 偵察行（後書き）

第十五話をお届けします。本話から第三部となります。

ジンベル川を遡るにつれ、謎の騒音は徐々に大きくなっていった。もう夏希の耳でも、個々の音が聞き分けられるほどだ。

ばきばきという、生木が折れるような音。ざくざくという、土を掻き分けているような音。ごろごろという、重い物を引きずっているような音。

土木工事だ。間違いない。

生馬が、前進中止の合図を送った。集合命令を受け、五艘が川の左岸に固まる。

一行は二十三名に減っていた。槍兵一名と船頭一名は、中間報告と捕虜移送の任務を与えられて、奪った川船で一足先に砦へと向かっている。

「これ以上は危険だ。一艘だけで前進する。残りの者は待機」

そう命じた生馬が、一艘から槍兵を降ろして、そちらに乗り移る。

「夏希様」

アンヌツカが、鋭いまなざしを夏希に向ける。

「わたしも生馬様にお供したいと思えます。許可をいただけますか？」

「……アンヌツカは夏希の護衛でもあるのだろうか？」

抑えた声で、生馬が言う。

「コーカラット殿がいれば、夏希様は安全でしょう。夏希様のお許しが出るならば、ぜひお供させてください」

「いいわ、アンヌツカ。でも、気をつけてね」

夏希はすぐに許可を出した。副官などやってはいるが、もともとアンヌツカはジンベル防衛隊の士官である。おそらくは、部下たちの前でいいところを見せたいのであろう。彼女の意を汲んでやるべきだ。

「ありがとうございます、夏希様」

「いいだろう。乗ってくれ」

生馬も納得し、弓兵の一人に船を代わるように促す。

生馬らに乗せた川船は、人が歩くほどの速度で静かに川を遡って行った。

五人全員、呼吸すら抑えて静粛を保っている。生じる音は、船頭の竿が立てる水音くらいだが、その程度なら川の流れて生じるざわめきが覆い隠してくれる。

生馬は舳先に這いつくばるようにして、望遠鏡を覗いていた。倍率はせいぜい八倍くらいで、集光率が悪いせいかかなり視野が暗いが、裸眼で見るよりは遠方まで見通せる。

いた。

生馬はすつと左手を上げた。即座に船頭が反応し、川船の流れに逆らって留める。

レンズの中に、蛮族の姿が見えていた。茂み越したが、何人もの人々が動き回っているのがわかる。

生馬はゆっくりと鏡筒を動かしていった。茂みが切れている箇所を見つけ、眼を凝らす。

やはり、土木工事だった。上半身裸の蛮族たちが、二人一組で『もっこ』のようなものを担ぎ、枝葉などを上流方向へ運んでゆく。土砂らしい重いものが入った『もっこ』を担いで戻ってくる二人組みが、その脇をすれ違ってゆく。その様子からすると、そこにはすでに道ができているようだ。少なくとも、人が楽にすれ違うだけの幅のある道が。

蛮族が、理由もなしに密林の中に道を造ったりするわけがない。この道は、ジンベル侵攻を目的とした軍用路だろう。となれば、高原地帯からここまで営々と工事を行っていた、ということになる。おそらくは、何十日もかけて。

生馬は慄然とした。彼と駿、それにジンベル防衛隊が立てた蛮族

対策は、その侵攻が河川および川船の使用に限定されていることを踏まえたうえでのものだ。それゆえ、敵兵力の見積もりはせいぜい一千、多くても一千二百程度と想定していた。

だが、陸路を使えるとなると、蛮族側はその数倍の兵力を容易に送り込めることになる。イフアラ族の人口は八万とも十万とも言われている。その動員能力から考えれば、少なくとも数千名規模の軍勢を楽々送り込めるだろう。兵站能力如何で、万単位の侵攻さえ可能だ。

……勝てない。どう足掻いても、ジンベルに勝ち目はない。

蛮族が一千名の兵力をすり潰すつもりで皆に攻撃を掛けてきたら、おそらくは一時間と持たずに突破されてしまうだろう。ジンベル南の城壁は立派だが、そこを充分に守備できるだけの兵力はない。こちらも、数時間で突破されるに違いない。いったん市街地に蛮族がなだれ込んでしまえば、対処は不可能だ。ジンベルは蹂躪される。

……俺では、蛮族に勝てない。

生馬は齒軋りした。

「大丈夫かな、生馬」

夏希はつぶやいた。単船で先行してから、すでに二十分くらい経過している。

最初に異変に気付いたのは、船頭の一人だった。あっと一声叫んで、竿を取り落とす。

「伏せろっ！」

弓兵の一人が怒鳴り、身を沈める。

夏希は思わず身をすくませた。

右岸の茂みの中から、何本もの鏃が突き出していた。……いつの間にか、至近に蛮族の弓兵が迫っていたのだ。

警告の叫びに応じて、すべてのジンベル人がすでに船底に身を横たえ、あるいは盾の陰に身を置いていた。

とつさに動けなかったのは、夏希だけであつた。顔だけは脅威が迫っている方向である川岸に向けたが、その状態で硬直している。当然のごとく、多くの矢が夏希を狙つた。

十本近くの矢が、相次いで放たれる。びゅんびゅんという弦の鳴る音が、夏希の耳にも届く。

夏希は大きく眼を見開いたまま、飛んでくる矢を見つめていた。脳の一部はすでに危険を察知し、身体に避けるように指令を出していたが、肝心の意識の方が不意を衝かれて反応停止状態に陥つていた。

「あぶないですう〜」

緊張感の欠片も感じさせない声をあげながら、コーカラットが夏希の前に滑り込んだ。

ぶすぶすぶすぶす。

五本の矢が、コーカラットのボディに深々と突き刺さつた。

くるくるぼてり。

矢を受けたコーカラットが、夏希の膝に落ちる。

「コーちゃん！」

遅ればせながら反応停止状態から回復し、身を低くした夏希は、落ちてきたコーカラットのボディを抱きしめた。

「コーちゃん！　しっかりして、コーちゃん！」

必死になつて、呼びかける。

コーカラットが、二度ほど瞬きした。

「ちよつと、痛かつたですう〜」

そう言つて夏希の腕から抜け出し、浮き上がる。

「エイラ様のお友達である夏希様に矢を射るとは、許せないのですう〜」

コーカラットが触手を広げ、水平に突き出した。その形状でくるくると高速回転しながら、普段の彼女の飛び方からは想像もできないようなスピードで川岸に向け突っ込んでゆく。

「ぱっぽーっ！」

奇声を上げながら川面を渡ったコーカラットが、茂みの中へと突入した。触手を刃物モードにしてあるのだから、枝葉が刈払機で刈られた芝草のように周囲に飛び散る。魂消る悲鳴と共に、血しぶきも飛んだ。人体の破片らしい赤黒い固まりも飛び、川面に小さな水柱を立てて落ちる。

伏せていたジンベル弓兵も反撃を開始していた。盾のあいだから、弓を放つ。

夏希は大人しく身を低くしていた。この状態で彼女にできることは、何もありません。

ほんの一分ほどで、コーカラットが戻ってきた。通常の、触手を下に垂らしているモードに戻っている。だが、刺さっている五本の矢はそのままだ。

蛮族の兵は逃げ去ったのだろう、ジンベル兵も射るのをやめ、矢を番えたまま川岸に警戒の目を注いでいる。

「コーちゃん、大丈夫？」

「大丈夫ですう。魔物は死なないのでですう」

コーカラットが、刺さっている矢の一本に触手を巻きつけた。逡巡の色も見せずに、それを抜き取る。開いていた穴は、まるで消しゴムに刺した鉛筆を抜いた時のようにすぐに塞がれた。

抜いた矢を川に投げ捨てたコーカラットが、残る四本の矢も同様に無造作に抜いてゆく。夏希はしげしげとコーカラットの顔というかボデイを観察したが、傷跡ひとつ残っていない。

「ともかく、ありがとう。おかげで助かったわ」

夏希は丁寧な礼を述べた。ジンベル兵の様子もチェックしたが、幸いなことに負傷した者はいないようだ。その主たる原因は、隠れ損ねたドジな一人に多くの矢が集中した為だという事に気付いた夏希は、自嘲の笑みを浮かべた。

背後で巻き起こった騒動は、生馬らの耳にも届いていた。

小さく舌打ちした生馬は、身振りで撤退を命じた。騒動の原因は、まず間違いない待機していた偵察隊と蛮族の接触だろう。下流に敵が現れたとするならば、急いで後退しないと退路を断たれるおそれがある。

船頭が、素早く船を反転させる。

「生馬様、あれを！」

アンヌツカが、息を弾ませて背後を指差す。

いつの間にか、蛮族側が複数の川船を繰り出していた。舳先に数名の弓兵が陣取り、矢を番えようとしている。こちらに気づいて追ってくるのか、それとも下流方向の騒動を聞きつけて駆けつけるのか。

いずれにせよ、追いつかれるわけにはいかない。

「アンヌツカ、盾だ！」

生馬は命じながら予備の竿を取り上げた。

「はい、生馬様」

生馬の意図を理解したアンヌツカは、弓兵の盾を取り上げると横向きに持って、艫に陣取った。彼女の両脇に弓兵が隠れ、矢を引き絞り始める。

生馬は身を低くし、船頭の反対側で竿を操り始めた。首を伸ばしつつ振り返り、蛮族の川船の様子を窺う。数は三艘。一艘に弓兵二人、船頭兼任の兵士二人くらいの構成らしい。

……逃げ切れるか。

生馬は歯を食いしばりながら竿を操り続けた。

「夏希様！」

上流方向を見張っていた弓兵が、叫ぶ。

二百メートルほど上流から、一艘の川船が下ってきつつあった。船上には、生馬の姿がある。

その後ろ、十五メートルほどの距離を置いて三艘の船が追っかけている。

追っ手の船から、間歇的に矢が放たれている。一本の矢が、竿を操っている生馬のすぐそばを掠めた。もう一本の矢が、弓兵の一人に当たる。兵士が手の弓を取り落とし、蹲った。

……まずい。

夏希は、追っ手の方が優速であることを見て取った。蛮族側の船頭は立ったまま竿を使っているのに対し、ジンベル側は矢を避けるために身を低くした不自由な姿勢である。これでは速く進めない。

両者の距離が縮まる。もう、十メートルほどだろう。並べられたら、盾で矢を防ぐことはできない。

「夏希様、いかがいたしましたしょう？」

同じ船に乗る弓兵が、急いた口調で訊いてくる。すでに矢を番え、いつでも放てる態勢だ。

……このままでは、生馬もアンヌツカも危ない。

夏希はそう判断した。こちらから矢を放てば、幾許かの牽制にはなるだろう。だが、まだ距離がありすぎて、船上の蛮族を仕留めるのは難しい。その前に生馬らが追っ手に追いつかれるのは確実だ。

……これしかない。数はこっちの方が上だ。

「船頭さん！ 上流に向けて！ 生馬を助けるわよ！」

そう決断した夏希はできうる限りの大声で言い放った。

すぐさま、船頭が舳先を川上に向けた。弓兵たちも、それに応じて戦闘態勢を整えた。船首に陣取り、盾の陰に隠れ、弓を引き絞る。夏希は自分が非武装であることに気付き、得物を探した。コーカラットが守ってくれるとはいえ、なにか持っていたほうが身を守り易いだろう。予備の竹竿を見つけ、それを拾い上げる。これなら、振り回しても相手を殺してしまうようなこともあるまい。

夏希は状況を見極めようと立ち上がった。川船はすでに上流方向へ向け動き出している。揺れにバランスを崩しそうになった夏希は、足を踏ん張った。

「生馬様！ 夏希様ですっ！ 夏希様が来てくれました！」

必死に竿を操っていた船頭が、苦しい息のあいだから歓喜の声を絞り出す。

「……無茶しやがって」

生馬は呻いた。竹竿を片手に、黒髪をなびかせながら船上で仁王立ちになっている夏希は、女性としては高い身長もあって実によく目立っている。

かつん、と音がして矢が船縁に突き刺さった。蛮族の船が、脇に並びかけているのだ。

生馬は遡ってくる味方の四艘との間合いを目で計った。……おおよそ百メートルか。

「よく狙って！」

夏希は弓兵を叱咤した。

ジンベル弓兵が、矢を放ち始める。蛮族が、これに応戦した。そのおかげで、生馬らの船に矢が降り注がなくなった。

舳先や弓兵の盾に、何本もの矢が突き刺さる。夏希は身を低くした。矢が刺さると、さしもの魔物も多少は痛みを感じるようだ。何度もコーカラットの世話になるのは忍びない。

「船を止めて！」

夏希は竿を振り回し、船頭たちに停船を命じた。目的は生馬らの船の収容である。無理に危険な上流まで遡る必要はない。

生馬らの船が、かなりの速度で近づく。蛮族の船も、速度を落さずそれに追隨している。

……まずい。このままだと、ぶつかる。

夏希はそう感じたが、いまさら衝突回避はできない。生馬らを助けるには、こちららも蛮族の船と近接しなければならぬ。

蛮族船との間隔が急速に縮まる。至近距離になり、双方が得物を矢から他のものに持ち替えた。蛮族は投げ槍と鉞、ジンベル兵は片手剣と長槍だ。

夏希も竹竿をしっかりと握り直し、腰の辺りで構えた。足を開き、腰をやや落とす。

突っ込んできた蛮族船が、夏希の乗る船の至近をすり抜けようとする。一本の投げ槍が、ジンベル兵の手にした盾を貫き、革の胴鎧に浅く刺さった。ジンベル兵も剣を振るって、すれ違いざまに蛮族の一人に手傷を負わせる。

夏希はタイミングを見計らって竹竿を突き出した。怖がっているゆとりも、ためらっている暇もなかった。ここで蛮族を撃退しなければ、ジンベル側に大きな損害が出てしまう。

竹竿の先端は、見事に狙った蛮族の胸を突いた。鉞を手にした男が、バランスを崩して川に落ちる。

状況は乱戦となった。

生馬は船を蛮族船に寄せると、アンヌツカを伴って飛び移った。投げ槍を手に向かってきた蛮族に対し、曾祖父仕込みの脇構え（右足を引いて半身になり、腰を落とし、剣を体側に沿わせるように後方に向け、剣先をやや下方に向けた構え）で待ち受ける。足場の悪い揺れる小船の上で、重心の高い構えを取るのは自殺行為である。突き出された投げ槍を踏み込みつつ長剣で払った生馬は、蛮族の左脚を蹴った。バランスを崩した相手に、返す刀で一太刀浴びせる。蛮族は概して勇敢ではあるが、他人を殺傷する訓練は受けていないらしく、剣道だけではなくより実践的な真剣を使うことを前提とした剣術を学んだことのある生馬から見れば、隙だらけであった。鉞を手に襲ってきた蛮族には、中段の構えから突きを喰らわせる。腕の長さも得物の長さも生馬のほうが上回っているので、蛮族戦士はなす術もなく喉元を突かれ、川に落ちた。アンヌツカの剣の腕もな

かなかのもので、鉈で挑んでくる蛮族をいとも簡単に切り捨てている。

夏希は必死で竹竿を振り回した。

寄せてきた蛮族の船を突き返し、泳いで乗り込もうとした蛮族の顔面に竿の先を叩き込む。近づいて来た別の船から槍を投げようとした奴は、フルスイングで首筋のあたりを引っぱたいてやった。大抵の蛮族よりも、夏希の方が体格がいい。打撃力は半端ではなかった。

ぜいぜいと息を切らしながら、夏希は立てた竹竿にもたれた。いつの間にか、蛮族の攻撃は止んでいた。いくつかの死体が、川を流れてゆく。残りの者は、泳いで逃げ去ったのだらう。

夏希の半袖シャツは浴びた水しぶきと汗でぐっしりと濡れていた。頭に巻いていたはずの手拭いも、失われている。

「わたくしの出番がありませんでしたあゝ」

コーカラットが、残念そうに言う。

「急いで引き上げるぞ」

生馬が、大声で命ずる。

ジンベル側は速やかに下流方向へと船を進めた。夏希はコーカラットの手を借りて、負傷した弓兵を介抱した。革鎧のおかげで傷は浅く、命に別状はない。

コーカラットが各船をまわり、損害状況を調べてくれる。二十三名中、二名が重傷を負っていた。軽度の負傷者は八名。幸いなことに、死者はいなかった。

追っ手が掛かることもなく、偵察隊は順調に川を下って行った。監視所も素通りし、臨時船着場に到着する。すぐさま、兵士たちが駆けつけて負傷者を運んでいった。皆の船着場で船に載せ、ジンベルへと搬送するのだ。

「ありがとうございました、夏希様。夏希様は、命の恩人です」

アンヌツカが、深々と頭を下げる。

「やめてよアンヌツカ。あの時はああするしか方法はなかったし、それに戦ってくれたのはこの人たちよ」

夏希は、疲れた様子でたたずんでいるジンベル兵や船頭を指し示した。

「いえ、お見事でありました、夏希様」

年配の弓兵が、感激の面持ちで言う。

「竹竿を振るって、次々と蛮族を倒してゆく夏希様。まるで、戦女神のようでありました」

ざわざわと、賛同の声が上がる。

「よくやってくれた、諸君。重傷者が出たのは残念だが、諸君らは合わせて三十名近い蛮族を撃退したのだ。見事な勝利だ。ラッシ隊長からも褒めの言葉があるだろう。今日のご苦労だった。任を解く。ゆっくり休んでくれ」

生馬が、解散を命じた。疲労の色は見えるが、兵士たちは皆勝利に晴れ晴れとした顔で、皆への細い道をたどって帰ってゆく。

「……三十人もいたっけ？」

「戦果誇張は士気鼓舞の常道だ」

ぶすりとして、生馬。

「初陣を勝利で飾ったのに、浮かない顔ね」

「当たり前だ……って、詳しく話してなかったな」

生馬が、蛮族の土木工事の内容について手短かに説明する。聞いていた夏希の顔色が、さっと変わった。

「じゃあ、万単位の敵が押し寄せても不思議はないってこと？」

「まあな。兵站の問題もあるから、そこまで大軍が来るかどうかは疑問だが。だが、俺の見積もりじゃ、三千以上の敵が来たら、まず勝ち目はない」

「逃げる？」

夏希は声を潜めて訊いた。もちろん、元の世界へ帰るか、という意味である。

「それも選択肢のひとつだな。だが、俺はジンベルの連中が気に入ちまった。なんとか助けてやりたい」

「じゃ、どうするの？」

「ひとつだけ、勝てる方法がある」

生馬がそう言って、皆の方へ顎をしゃくった。

「行くぞ。凜ちゃんとも相談する必要がある」

## 16 接触（後書き）

第十六話をお届けします。 追記ノ三件目の評価を入れていただきました。 評価してくださった方、ありがとうございます。

## 17 緊急召喚

「で、勝てる方法って、何なの？」

凜から借りた手拭いでシャツの水気を吸い取りながら、夏希は詰問口調で尋ねた。

砦の北側にある小屋のひとつに、夏希らは集っていた。小さい上にちょっと低すぎるテーブルを挟んで、彼女の正面に生馬、右側に凜。左側には、アンヌツカが座っている。コーカラットも同席していたが、話し合いの内容には興味がない様子で、部屋の隅でゆっくりと回転している。

「エイラに頼むしかない」

生馬が言って、自分の水筒から水をひと口飲んだ。

「ってことは、召喚？」

凜が、訊く。

「そうだ。この状況を打破できる人物を、エイラに召喚してもらおうんだ」

「そりゃ、プロの軍人とか呼べれば、うまく行くかもしれないけど……」

夏希は口を尖らせた。経験豊富で、なおかつ中世的な軍事に詳しい人を召喚できれば、ジンベル防衛隊と市民軍を率いて蛮族を打ち破ってくれるかもしれない。しかし、今までの経験からすれば、エイラが召喚できる人物は夏希のクラスメイトだけだ。まず期待薄だろう。

「ひとり、心当たりがある」

生馬が、薄く笑う。

「……まさか、桧山君呼ぼうってんじゃないでしょうね」

凜が、少しばかり尖った声で問う。

「そのつもりだ」

しごく真面目な顔で、生馬がうなずいた。

「桧山君ねえ……」

桧山拓海。彼も、夏希たちのクラスメイトである。成績はかなり上位だが、それほど目立つ存在ではなく、女子の間でも話題にのぼることのない男子ベスト3に確実に入る生徒だ。

「そういえば、生馬とは仲良さそうだったね」

思い出しながら、夏希はそう言った。昼休みとか、よくふたりで話し込んでいたし、下校する時に並んで歩いている姿も何回か見かけたことがある。背は生馬のほうが二十センチ以上高いから、吊り合いの取れない妙な二人連れということで、鮮明に覚えている。

「拓海は重度の軍事オタクだ。あいつの軍事知識は半端じゃない。

俺たちのクラスに、この苦境を救ってくれる者がいるとすれば……それは間違いなく拓海だ」

生馬が断言する。

「他に方法もなさそうだしねえ」

夏希からおおよそ事態を説明されている凜が、頭を掻いた。

「アンヌツカ。どう思う？」

夏希は副官に振った。

「生馬様が太鼓判を押しておられるのであれば、その拓海殿はきつと優秀なお方なのでしょう。僭越ながら意見を申し述べさせていただけののならば、わたしは拓海殿を召喚すべきと考えます」

控えめな口調で、アンヌツカが言う。

「コーちゃん……に意見を訊いても意味ないか」

「魔物は人間同士の紛争には非介入なのですう」

「なおもゆつくりと……三秒に一回転くらいか……回りながら、コーカラットが答える。

「なら決まりだな。エイラに拓海の召喚を依頼する」

生馬が、夏希と凜の顔を順番に見る。

「……いいわ。賛成する」

「同じく」

「他に方法はないと言うのか？」

「ヴァオティ国王が、生馬に問う。」

「はっ。蛮族が造っている道はおそらく小さな荷車が通れるほどの幅があります。武装兵が二列縦隊で行軍できるでしょう。この道が皆まで至れば、数千の敵が襲ってきます。現状で撃退するのは、ほぼ不可能かと」

「まことか、ラッシ隊長？」

「生馬殿の申し上げた通りと思われませう」

「ジンベル防衛隊長が、生馬の言葉を追認する。」

謁見の間には多くの人々が集められていた。夏希ら三人の異世界人。ジンベル防衛隊の幹部。国王の側近たち。エイラもいたが、コーカーラットはスペースの都合上通廊に待機させられている。

「生馬殿。その人物を召喚できれば、蛮族を撃退できるのだな？」

「国王が、再び問う。」

「戦に**確実**はございません。しかし、彼ならばやってのけると、それがしは確信しております」

言葉とは裏腹に、やや自信なさそうに、生馬が答える。

「国王が、エイラを見た。」

「巫女殿。召喚できるか？」

「生馬殿の言葉を拝借しますが……召喚に**確実**はございません。しかしながら、今までの召喚状況を鑑みますに……」

「エイラが、並んでいる三人の異世界人を見やる。」

「彼らの近しい人物が召喚される可能性は高いと思われませう。やってみる価値はあるものと、わたくしは確信しております」

「むっ」

一声唸った国王が、黙り込む。眉間の皺の深さが、その胸中の苦悩を如実に表しているかのようだ。

「陛下」

ラッシ隊長が、決断を促すかのように、身を乗り出した。

「よかるう」

国王が、断を下した。

「巫女殿。すぐに件の人物を召喚したまえ。ラツシ隊長。その者に防衛隊内で適切な地位を与えよ。生馬殿と協力し、蛮族撃退の策を練るように」

「……本当に松山君が召喚されたのかしら」

「まあ、エイラが失敗して優秀な軍人でも召喚してくれたのならば、それはそれで嬉しい誤算だがな」

夏希のつぶやきを聞きつけた生馬が、言う。

すでに緊急召喚は行われ、市街地に出現した人物は市民と防衛隊兵士によって保護されたとの報せが届いている。夏希ら三人の異世界人とアンヌツカ、エイラ、そしてコーカラットは、足早に保護された人物のもとに向かっているところであった。

「こちらです、皆様」

通りで待機していた兵士が、一行を路地に案内する。どうやら、一軒の民家に件の人物は保護されているようだ。

生馬が先頭を切って階段を上る。夏希はそのすぐあとに続いた。奥の部屋の前で立哨していた兵士が、戸口から退いて一行を通す。

「来たな」

生馬がにやりと笑って、戸口をくぐった。

「予想通りね」

夏希も入室した。小さなテーブルを挟んで、やや小柄な若い男性が二十歳過ぎくらいのジンベル女性と身振りだけで談笑している。銀色のメタルフレームの眼鏡。運動不足を物語るやや小太りの体型。間違いない。松山拓海である。

拓海が、物憂げにこちらを見上げた。夏希に目を留め、破顔する。

「おや、夏希じゃないか」  
え。

夏希は戸惑った。松山拓海とはあまり接した機会はない。何度か会話をした覚えはあるが、いつも『森さん』と呼んでもらっていたはずだ。

「おお。凜ちゃんもいるのか」

夏希に続いて姿を見せた凜に、拓海が笑顔のまま声を掛ける。エイラが入室すると、拓海が腰を浮かせた。アンヌツカが顔を見せたところで、完全に立ち上がる。

「おい、拓海」

生馬が、拓海の肩をつかんだ。

「なぜ、俺を無視する」

「あ、お前もいたか。まあいい。俺はあの娘が気に入った。あとはお前にやる」

拓海が、そう言いつつエイラを指差す。

「……なに言ってたんだ、拓海？」

「だから、他の女はお前の好きにしていいいから、邪魔するな」

「寝ぼけてるのか、お前？」

「寝ぼけてなんかいない。寝てるんだ。ここは俺の夢の中だろ？」

笑顔の拓海が、言う。

ようやく夏希は拓海のボケた発言を理解した。異世界に放り出された彼は、この状況を自分の夢の中だと解釈しているのだ。

「言っとくが、これは現実だ。お前の夢じゃない」

生馬が説得にかかる。

「馬鹿言うな。こんなきれいなお姉さんや、美少女、夏希に凜まで揃ってるのに、現実だとしても言うのか。アホか、お前は」

「アホはお前のほうだ。いい加減、目を覚ませ」

「じゃあ、現実と言うことにしておいてやる。だから、おれがあの美少女と楽しんでるあいだは邪魔するな」

拓海が生馬を押し退けようとする。

「やめんか！」

生馬が声を荒げつつ、拓海の腕をつかんだ。

「放せ生馬。そのあいだ、お前は夏希とでも遊んでる」

「あのねえ、桧山君」

頭痛がしそうな生馬と拓海のやり取りに呆れた夏希は、思わず一歩前へ踏み出した。

「ほら、夏希もやる気だぞ。相手してやれ」

拓海が、生馬を夏希の方へ押しやろうとする。

「よせ、拓海」

「遠慮するな。どうせ俺の夢の中だ。それに、お前夏希に気があるんじゃないかったのか？」

拓海の言葉に、生馬が思わず動きを止める。

「たしか二ヶ月くらい前、夢の中で夏希とやったとか……うぐっ」

生馬の大きな手が、拓海の口を塞いだ。

「ちよつと、男同士で話をつけてくる」

慌てた口調で言った生馬が、拓海を半ば抱きかかえ、引きずるようにして戸口に向かった。もちろん、口は封じたままだ。アンヌツカとエイラが、急いで道を開ける。

「……召喚したの、失敗だったかなあ」

凜が、頭を掻いた。

「かもね」

ため息をつきつつ、夏希も同意した。

いかなる手段を講じたのか不明だし詳しく知りたくもないが、生馬は拓海にこれは夢でないことを納得させたいらしい。

さらに、コーカラットの紹介とエイラの言語の魔術、さらにエイラやアンヌツカとの会話という状況説明三点セットで、ようやく拓海も自分が異世界に召喚されたことを納得したようだった。

「そうか。宮原もいるのか。で、なんで俺が召喚されたんだ？」

皆の顔を眺めつつ、拓海が訊く。

生馬が、蛮族襲来の危機について説明を始める。途端に、拓海が目が輝いた。

「ほう。俺に軍隊の指揮を任せようというのか？」

「いや。それは無理だ」

生馬が、首を振る。

「あくまで指揮を執るのはラッシ隊長だ。俺はナンバー3。あくまでラッシ隊長の部下だ。お前にはそれなりのポストを用意してもらうが……俺より格下なのは間違いない」

「まあ、仕方ないな。外部の人間を招請していきなり指揮させるなんて、まともな軍隊のやることじゃないし」

拓海が、納得したようにうなずきつつ腕を組む。

「とりあえずいったん王宮に戻ろう。詳しい説明は、そこでしてやる」

生馬が、言う。

生馬による状況説明は、一時間を越える長さとなった。地図や組織図、場合によっては実物を参照しながら、全般的な政治情勢、ジンベルとその南方の地形、ジンベル防衛隊と市民軍の編成、その使用する武器、蛮族の様子などを事細かに説いてゆく。

「とまあ、こんな感じだ」

喋り疲れたのか、生馬が首筋を軽く揉みながら、言う。

「どう？ 桧山君なら、勝てそう？」

夏希は訊いた。

「情報不足だな。やはり、現場をこの目で確認しないと、なんとも言えない……。その前に、桧山君ってのは、やめてほしいね。学校じゃないんだから。呼び捨てでいいよ」

「わかったわ、拓海」

「とにかくもつと情報がほしい。生馬、肝心なことを訊くが、蛮族の戦争目的はいつたいなんなんだ？」

「それが、よくわからんのだ」

生馬が、困り顔をする。

「これが蛮族による平原地帯侵攻の先駆けなのか、あるいはジンベ

ルにのみ局限した侵略なのか、または単なる略奪行なのか。ひよつとすると、蛮族内部の政治的理由で、派遣部隊を編成しただけかもしれない。蛮族に、常備軍はないからな。純然たる内政上の問題がからんでいる可能性も否定できない」

「戦争目的不明か。これは、厄介だな」

拓海が腕を組む。

「ねえ、戦争目的って、そんなに大事なの？」

凜が、訊いた。

「大事だよ、凜ちゃん」

拓海が丁寧な口調で答える。

「戦争目的がわかれば、戦略目的と戦略目標を予測できる。戦略目的と戦略目標がわかれば、戦術が予測できる。戦術がわかれば、敵の作戦内容が予測できる。作戦内容がわかれば、先手を打ったり弱点を衝いたり奇襲を掛けたり罠に嵌めたりできる。歴史の話をしようか。第二次世界大戦の太平洋戦域で、アメリカは日本の戦争目的およびその戦略が基本的に防勢であることを知っていたし、日本海軍の能力ではアメリカ西海岸を脅かすことが不可能なことも開戦前からの情報収集と分析で理解していた。だからこそ、主力艦隊やフリピン、グアムなどの要地を失っても慌てずに戦力再建を行いつつ、先にドイツを片付けるといふ戦略が取れたわけだ。当時のソ連も同様に、日本が極東で戦端を開く気がないことを知っていたから、全力をドイツに対し注ぐことができたし、ウラル以東に安心して軍需工場を移築できたんだ。敵の意図を知ることが、重要なんだよ」

「よろしいですか」

戸口に、アンヌツカが現れた。一枚の紙を手に行っている。

「いいわよ」

夏希は許可を与えた。アンヌツカが、一礼してから入室する。

「本日捕虜にした蛮族から尋問で得られた情報です。お聞きになりますか？」

「いいタイミングだな。頼む」

生馬が、報告を促す。

「捕虜の所属……イフアラ族ディーバ支族。姓名……オツカ・アサ。年齢……三十四歳。その他、個人的な事柄も供述しましたが、これは省略させていただきます。彼の任務内容……作業箇所前縁前方における警戒。作業内容……高原地帯北端から溪谷部密林を抜け平原地帯南端に達する軍用路の建設。動員人員……彼の推定で約一万名。軍用路完成後に行われるであろう軍事行動に関して……目的、不明ながら彼の推定ではジンベル攻略。規模、不明ながら彼の推定では数千。指揮官、イフアラ族氏族長サイゼン。なお、これも彼の推定ですが軍用路建設速度は一日につき九ないし十シキツホとのことです」

「ずいぶんと細かく聞き出せたものね」  
凜が、感心した。

「……尋問係が、優秀ですので」  
ややためらいを見せながら、アンヌツカが答えた。夏希は捕虜となった蛮族に同情した。推測だが、尋問にはそれなりに苛烈な手段が使われたのではないだろうか。

「一日十シキツホか。すごいペースだな」  
生馬が、唸る。

「シキツホって、何メートルだっけ？」  
凜が、首を傾げる。

「百歩で一シキツホよ。だいたい、六十メートルくらいね」  
夏希は教えてやった。ちなみに、一步の長さはキツホという単位である。Kの音を抜くと『一步』という日本語に驚くほど似ているが、どうやら偶然の一致のようだ。

「あの位置から砦まで、約三キロか。早ければ四日後、遅くとも五日後には、到達するな」

広げてある地図を睨みながら、生馬。

「スピードアップしちゃうんじゃないの？」

夏希はそう言った。

「たぶんな。かなり工事現場には近づいたが、騒音は思ったより少なかった。意図的に騒音を抑えていたに違いない。川沿いの工事だったにも関わらず、川を泥などで濁らせることもなかったし。それなりに、秘匿しつつ工事を進めていたのだろう。こちらにばれた以上、なりふり構わず作業を進めるに違いない。余裕はないな」

「じゃ、急いだ方がいいね」

拓海が、立ち上がった。

「この目で戦場予定地を確認したい。その上で、細かいことは決めようや」

市街地を足早に歩みながら、一行は南の城壁へと向かっていた。

地図を手にした拓海がきよろきよろとあたりを見回しながら進み、その両側に陣取った生馬とアンヌツカが、適宜注釈や解説を挟んでいる。夏希と凜は、聞き慣れない専門用語が頻出する会話についてゆけずに、やや後方を歩んでいた。

やがて一行は南の城壁に到達した。アンヌツカが、皆へ行く川船を調達しに行く。残る四人は、古びた石の階段を登って、城壁の上に立った。

「立派な城壁だな。蛮族に、攻城兵器はないんだな？」

拓海が、生馬に確認する。

「ない。馬鹿でかい斧や先を尖らせた丸太を別にすればね。まあ、破壊するより乗り越える算段をしてくるだろうな」

夏希は胸壁から身を乗り出して下を見た。城壁本体の高さは四メートル程度しかない。胸壁を加えても、せいぜい五メートル。短い梯子でも充分に届くし、数人掛りなら組み体操の要領で一人を上に乗し上げて、易々と登ってこれるだろう。

「門はふたつか。どんな感じだ？」

「あまり丈夫ではないな。弱点といえば弱点だ」

生馬が顔をしかめる。

「扉そのものは分厚くて頑丈。しかしカンヌキは金属製ながらいさ

さかしよばい。カンヌキ棒は木製だしな。ニアン製の鉄パイプがあるから、いざとなったらそれを何本かまとめてカンヌキ棒代わりに差し込むつもりだが。もしそこまで攻め込まれたら、さらに後ろにバリケードでも築いて抵抗するしかないな」

「門がむき出しだからな。構造的には、弱い城壁だ」

拓海が小馬鹿にしたような口調で、言う。

「しかしこつちへきてからもうだいぶ経ったんだろ？ なにか新しい兵器とか作り出せなかったのか？」

「馬鹿言うな。ゲームでも漫画でもないんだ。火薬発明したら国力ポイント30パーセントアップ、次のターンで領土倍増ってなわけにはいかん」

「まあ、火器は無理だろうな。この気候じゃ、硝石は取れまい」  
拓海が言って、大げさに空気の臭いを嗅ぐ。

「硝石って、なんだっけ？」

凜が、訊いた。夏希も聞き覚えがあるが、具体的にはよく知らない。

「硝酸カリウムを主成分とする鉱物だ。黒色火薬の主原料でもある。ここみたいな湿気の多い気候だと、天然硝石は産出しない。日本もそうだったから、戦国時代は土中の微生物を使って何年もかけて作り出すか、外国から輸入するしかなかった」

戦国オタクの生馬が、ざっと解説する。

「とにかくある戦力でなんとかせにゃならんのだな。生馬、望遠鏡貸してくれ」

拓海が言い、受け取った望遠鏡であちこちを眺め始める。時折地図に視線を走らせ、また望遠鏡を覗く。

「任せておいていいのかなあ」

凜が、つぶやく。

「とりあえず信用するしかないわね」

素っ気なく応じた夏希は、後ろ手を組んで立っている生馬に歩み寄った。身振りで少し離れた場所に誘ってから、小声で訊く。

「ねえ、さつき拓海が口走った話だけど……」

「あー、なんの話か忘れたな」

「夢の中でやった、とかいう話」

「……忘れてくれ。健全な青少年が健康的な眠りの中で見たしょーもない夢だ」

ほんのり赤面しつつ、生馬が答える。

夏希は生馬をまじまじと見た。イケメン、というほど男前ではないが……実際のところ、駿のほうがルックスははるかに上である……なかなか精悍な顔つきで、その高身長とスポーツマンぶりも相まって生馬は女子の間ではかなり人気が高い方だ。だが、夢の中では言えセックスの相手をさせられたと聞けば、夏希としては面白くない。

「わたしに気があったの？」

生馬が気圧されているのを見て取った夏希は、面白半分にそう問い詰めた。

「……お前は美人だし、気がなかったといえは嘘になるな」

赤面の度をやや深めながら、生馬が言った。

「だが、ぶつちやけて言えば男子高校生なんて、クラスの女子の半分くらいとはチャンスがあれば『やりたい』と思ってるような生き物だ。気に障ったのなら謝るが、夢の中でのセックスなんて、ありふれたことなんだ。……それくらい、夏希なら知ってるだろ」

「まあね。そういうことなら、忘れてあげるわ」

夏希は鷹揚さを装って言った。実のところ、夏希の男性に対する知識と経験はかなり限定されている。ここで突っ込んだ話をして、ぼろを出すのは避けたかった。

「よし。ここの視察は終わりだ。砦へ向かおう」

いいタイミングで、拓海が宣言する。

17 緊急召喚（後書き）

第十七話をお届けします。

一行はアンヌツカが準備してくれた川船で、ジンベル川を遡った。例によって拓海が、望遠鏡で周囲を覗きながら地図を確認する。

密林の中に入ってから、拓海の情報収集は続いた。川の屈曲の具合を地図と照らし合わせたり、密林の見通しを確認したり、船頭に水深や川底の様子などを詳しく聞いたりしている。

砦の船着場に着くと、真っ先に拓海が飛び降りた。生馬とアンヌツカを伴い、あちこちを見て回る。

「お茶でも飲んでようか」

その様子を眺めながら、凜がぼそりと言った。

「そうね」

夏希も同意した。付いて行っても、邪魔なだけだろう。

以前にも借りた小屋のひとつに入り、凜がお茶の準備を整える。

夏希は、砦の炊事場へ行って火種と焚き付けをもらって来た。火鉢に入れ、息を吹きかけて炭を熾す。凜が、重い鋳物の薬缶を掛けた。「……でもさあ。仮に拓海がなんとかして蛮族を撃退したとしても、それで終わるわけじゃないよね」

お湯が沸くのを待ちながら、凜が独り言のように言う。

「そうよね」

蛮族の目的がなんだかは知らないが、一回の失敗で諦めがつくようなものではあるまい。彼らの人的資源は豊富だ。第二回、第三回の侵攻もありえるだろう。何度となく繰り返される攻撃に、ジンベルは耐えられるのだろうか？ 特に、人とお金の面で。

「戦争なんて、無駄の極みだわ」

湯が沸くのを待ちながら、夏希はそうつぶやいた。人命、お金、資源、時間。それらが惜しげもなく注ぎ込まれ、乱費されるのが戦争だ。もっと生産的な活動に使えば、多くの人々が幸福を享受できるはずの、さまざまな資産の浪費。

「一概に、そうは言えないんだけどね」

凜が、穏やかな口調で異議を唱える。

「どういうこと？」

「箴言をひとつ教えてあげるわ。『戦争は紛争解決の手段としては愚かである。しかし、戦争を忌む人々はしばしばより愚かな選択をしてしまう』……。歴史を勉強していると、心底からうなずける箴言よ」

「そうなの？」

「そうなのよ。歴史上、戦争は様々な問題を容易に解決してきた。

歴史を学べば、それが理解できるわ。だからと言って、戦争そのものを積極的に肯定する気にはならないけどね」

凜が、少しばかり寂しそうな口調で言う。

夏希と凜が三杯目のお茶を飲み干し、退屈を感じ始めた頃になって、ようやく小屋にジンベル防衛隊の兵士が現れた。生馬が呼んでいることを告げ、案内に立つ。

ふたりは兵士に導かれるままに砦の中へと入り、木の階段を登った。以前にも来たことのある見張り台で、生馬と拓海が待っていた。「よし、全員揃ったな」

拓海が、満足そうに手を擦り合わせる。

「あれ、アンヌツカは？」

夏希は周囲を見回した。

「彼女は、席を外してもらった。ここは、異世界人だけの相談の場だからな」

拓海が、言う。

「なんだか、密談めいてきたわね」

やや皮肉っぽく、凜。

「ジンベル人には聞かせたくない話もあるしな。まず、確認しておきたい。ジンベルの連中は、信用できるのか？」

やや声を潜めて、拓海が問う。

「そりゃもちろん。一番長くいるわたしが言うんだから、間違いないわ」

自信満々で、夏希は応じた。アンヌツカにしるエイラにしるシフオネにしる、裏表のない人物である。……むしろ拓海の方が、よほど胡散臭い人物だろう。

「国王はどうだ？ 全面的に信用できるのか？」

「陛下は……たぶん」

夏希は口ごもった。ヴァオティ国王とは、数えるほどしか会ったことはないし、腹を割って話し合ったこともない。信頼が置けるかと改めて問われると、はつきりしたことは言えない。

「どうということなんだ？ ジンベルの様子に不審なところがあったのか？」

生馬が、訊いた。

「いや。だが、蛮族の侵攻目的が不明なのがどうにも腑に落ちない。二十キロメートル以上にわたって密林に軍用路を切り拓くなんて、蛮族にとっては大事業だろう。将来的には、それが平原地帯からの逆襲に使われるおそれすらある。それでもジンベル攻撃を強行するということは、確たる戦争目的があると思えん」

「それで？」

いったん言葉を切った拓海を、凜が促す。

「国王は何か隠していないか？ ひょっとして、蛮族の方が善玉という可能性はないのか？」

そう拓海に問われ、夏希ら三人は思わず顔を見合わせた。

「……それは、ないと思う。だいたい、ジンベルはろくな軍隊も持っていないし、よその国に迷惑を掛けてもいないはず。悪玉には見えないわ」

夏希は言った。結構な期間住んでいるから、それくらいは肌で理解しているつもりだ。

「もっと以前の因縁かもしれないぞ。もともとジンベル盆地が蛮族のものだった、とか。あるいは、蛮族にとって価値あるものをジン

ベルが奪ったのかもしれない」

拓海が、そう指摘する。

「いずれにせよ、俺たちは国王と契約した身だ。異世界人だが、ジンベルの住民でもある。この世界での身分と安全を、ジンベル王国に保障してもらっているんだ。蛮族が攻めてくるのなら、排除しないわけには行かないだろう。ここが絶対王政国家だということをお忘れちゃ駄目だ。手を拱いていては、俺たちの身が危ない」

生馬が、道理を説く。

「生馬の言う通りだわ」

凜が、同調した。夏希も、同意の声をあげる。

「わかった。お前らの判断を信じて、俺もジンベル王国を信用するでしょう。では、状況を再確認しよう」

得心したらしい拓海が、メモ書きを取り出した。

「蛮族軍の戦争目的は不明。戦略目標は、推定だがジンベル市街。戦略目的は、市街の攻略とみてほぼ間違いないだろう。当面の目標は、戦略目的遂行の最大の障害たるジンベル側野戦軍の撃破にあるものと推定される。侵攻規模は諸種の情報を勘案すると五千名以上質的には、ジンベル防衛隊よりはやや劣るが、市民軍よりははるかに上質と思われる。偵察隊との戦闘状況を鑑みるに、士気は高いと推察される。兵站状況は不明だが、充分なものと推定する。戦術としては、地形的制約からみて数の優位を活かした正面攻撃を行う公算が高い」

「……なんか難しい話になってきたわね」

夏希はぼやいた。

「ジンベル側の状況だが、兵力は精兵であるジンベル防衛隊が三百七十。生馬が訓練した優秀な市民軍……カテゴリーAと呼称するが……が約二百。そこそこ使えるカテゴリーBが約八百。あまり使えないカテゴリーCが約二千。合計で、三千三百七十名。実質的に、カテゴリーCは戦力とは言えないから、千三百七十名。戦力的には、敵の三十パーセント以下だ。士気は生馬の言葉を信ずれば、高い。」

兵站上の問題はない。しかしこの戦力では、敵野戦軍の撃滅は不可能だ。よって、こちらの戦略目的は敵の侵攻阻止に限定する。いいな」

言い終わった拓海が、生馬を見やる。

「妥当だな。賛成する」

「お二人さんは？」

拓海に問われ、凜が賛意を示した。

「なんか、よくわからないんだけど」

夏希は正直にそう言った。

「ジンベル側の戦略目的を、蛮族の侵攻阻止に限定することに、賛成するかどうかを訊いているんだ」

生馬が、説明する。

「……判断するだけの知識はないわ」

夏希は、さじを投げた。

「目的と手段を適合させるのは、戦略、戦術いずれにおいても基本だ」

拓海が、夏希に対し解説を始めた。

「手段……つまり、兵力、兵站状況、時間的余裕、地形や気象条件、士気、指揮統制能力、情報収集と分析能力、その他もろもろの状態をひっくり返して、実行可能な作戦を立案しなければならない。料理に例えれば、牛肉が手に入る見込みがないのにビーフカレーを作ろうとしてはいけないし、三十分しか時間がないのに、スパイスを混ぜてカレー粉を作る段階から始めてもいけない、ということだ。豚肉しかないのなら素直にポークカレーを作るべきだし、時間がなければインスタントのルーを使うべき。完成する見込みのない料理より、グレードや味が落ちてもちやんと出来上がって食べられる料理の方がはるかに価値がある。戦略や戦術も同じだ。どれほど精密かつ上質のよく練られた作戦でも、成功する見込みがなければ無駄であるのみならず、有害でしかない。ジンベル側は、明らかに兵力不足だ。映画や小説ではよくあるが、実際には少ない兵力で数倍の敵

を撃滅するなどほぼ不可能だ。作戦に無理があれば、柔軟性が損なわれるし戦術目的も曖昧化し、結局は戦力の分散化を招くことになる。手段に適合していない目的は、敗亡への一本道なんだよ」

「何となく、理解したわ」

夏希はうなずいた。要するに、身の丈にあつてないことはやるべきでない、ということだろう。

「では続けよう。いかにして蛮族の侵攻を阻止するか。兵站能力の破壊は地形的制約から不可能に近い。指揮統制の麻痺化も、蛮族軍の数と情報不足から現状では取るのが難しい作戦だ。ここは敵に分散を強いて、一部の野戦部隊に大打撃を与え、侵攻を断念させるしかないと思う」

「同意する」

すかさず、生馬が賛意を示す。

「で、この砦だ。たしかに強力な砦だが、五千の侵攻軍の前には持ちこたえられないだろう。だから、放棄する」

「なんだと！」

生馬が声を荒げた。

「お前、俺と駿がどれだけ苦労してこの砦を造ったか、聞いていなかったとは言わせないぞ。何百人もの市民が汗水たらして、しかも多額の予算をつぎ込んで……」

「それは、重々承知してるよ」

拓海が、宥めに掛かった。

「だが、ここで抵抗しても得られるのはわずかな時間だけだ。精銳五百を犠牲にして蛮族二千を倒しても、敵は退却せんよ。ここを突破してしまえば、眼の前にヘタレの市民軍が守るだけの攻略し易いシンベルが現れるだけだからな。切り札の投入は、敵が打撃を回避できなくなる状況まで待つべきだ」

「で、代案があるのか？」

生馬が、半ば睨みつけるような視線を拓海に浴びせる。

「ないことはない」

拓海が、薄く笑う。

「ねえ。昔読んだ小説にこんな戦法が載ってたんだけど、参考にならないかなあ」

凜が、言った。

「部隊を三つに分けて、横一線に並べるの。敵が迫ったら、中央の部隊がわざと少しずつ後退する。機を見て左右の部隊が攻め立てて、左右から中央に押し込むようにするの。そして、三方から一気に攻めて……」

「忘れてくれ。そんな安易な作戦は、大脳からきれいさっぱり消去するんだ」

拓海が言い放つ。

「高度な戦場機動ができる軍隊など、訓練に何年もかかる。それにその小説を書いた奴は軍事についてはど素人だ。たぶんカンナエかなにかをそのままパクったんだろう。よほど相手が能無しでない限り、そんな単純な罠には引つ掛からないよ。嵌めるのならば、もう少し高度な罠が必要だ」

「能書きはいいから、お前の作戦を早く説明しろ」

生馬が、焦れた。

「その前に、確認しておきたいことがある。平原諸国間に、紛争はないのか？」

「ないと思うが……」

そう答えた生馬が、問いかけるような視線を夏希に投げる。

「紛争、って言えるほどのものはないわ。仲の悪い国はあるみたいだけ」

「どの程度の不仲だ？」

拓海が訊く。

「経済上の対立程度ね。ススロンが鉄鉱石の価格を不当に吊り上げているとニアンが抗議したり、イナートカイがお酒造りに乗り出したのを、ジージャカイが製法を盗んだといって非難したり。深刻なものではないわ」

以前にアンヌツカから聞いた話を、夏希は披露した。

「ふむ。となると、蛮族が平原諸国のどれかと結んで派兵した、という線はないか」

「それは……考えにくいだろう」

「俺もそう思う。だが、ひよっとして蛮族の目的がジンベルに平原諸国の軍勢を集めることだとすると、戦争目的が不明なことの説明がつくと思つてな」

「なるほど。本国をがら空きにさせて、その隙になにかやらかそうつて魂胆ね」

凜が、言つ。

「どうやらその線はなさそうだ。では、作戦を説明しよう。鍵はみつ。ひとつ目は、ほとんど役に立たないカテゴリーCの二千名を、どうやって使うか。単純なことしかできないからといって、外してしまつたのでは、文字通り何の役にも立たない。しかし彼らでもできる単純な役割を与えてやれば、戦力の足しにはなる。ふたつ目は、こちらが意図する場所へ蛮族の一部を誘引すること。これは、餌が充分であれば可能だろう。三つ目は、こちらの意図を悟られないこと。これは、難しいができないことはない」

「能書きはいいと言つたる」

生馬が、急かす。

「わかつたわかつた。じゃ、これを見てくれ」

拓海が、一枚の紙を取り出した。三人が見やすいように、ささげ持つ。

取り出された紙を、夏希はしげしげと眺めた。

ジンベル市街地南端と、その南側を描いた略図だった。黒く塗りつぶされたジンベル川が市街地とその南方の平原を貫き、市街地の端には城壁が二重の線で描かれている。東西の山裾は単線で表現されていた。夏希にも見慣れた場所の略図だったが、一箇所だけ妙な描き込みがあつた。城壁の内側、ジンベル川東岸に接するように、破線で長方形が描いてある。

「なんだ、これは」

生馬が、謎の破線を指す。

「これが本作戦の肝だ。まあ、順を追って説明しよう。この砦を放棄すると言ったが、実際には多少の抗戦を行う。川沿いの道と船で安全に撤退できる人数は、三百程度だろう。この兵力でわずかの間抵抗し、時間を稼ぐとともにこちらの意図を隠蔽する。……無抵抗で明け渡せば、敵も畏を警戒するからな。むしろ敵を増長させ、勢いよくこちらを追撃してくるような対応を取らせることが望ましい」

やや得意げな口調で、拓海が説明する。

「敵の出入を予測してみよう。おそらく、蛮族は短期決戦を挑んでくると考えられる。生馬の話では、蛮族もそれなりに平原諸国に関する情報を得ているようだ。したがって、悠長に日数を掛けていては、他の平原諸国から援兵がやってくることを知っていると思われる。兵站状況を鑑みても、長期戦は不可能だろう。密林地帯で食料の自給はほぼ不可能だ。五千名に給養するだけで大事業だし、補給部隊にも飯は食わせなきゃならん。常備軍でない以上、恒常的な兵站組織も持っていないはず。おそらくは、ノウハウも欠如しているだろう。また、社会および経済的事情からしても、長期戦は難しいだろう。動員状態を長く続けたら、高原地帯が飢えかねない」

「たぶんそう来るだろうな。少なくとも、短期決戦をこちらに強いだけの兵力差はある」

顎をなでつつ、生馬が言う。

「砦には、小細工を使わず殺到してくると思う。夜襲の可能性もあるが、数の優位さを活かせない上に、同士討ちの危険性もある。おそらく、昼間強襲という手段を選ぶだろう。こちらは大きな損害を出さないうちに撤退し、砦を明け渡す。その後、敵はジンベル南方の平原に進出するだろう。こちらは、城壁を死守する構えを見せる。もし可能ならば、蛮族を挑発しておきたい。『城壁を越えられるものなら超えてみる』とね。蛮族軍は、常識的に考えて城壁の弱点である二箇所を同時攻撃し、呼応して他の数箇所を城壁を越えよ

うとするだろう。ジンベル側が兵力不足であることを見切った上での、同時分散攻撃だ。こちら側に兵力の分散を強いて、どこかひとつでも突破口を開き、城壁の守りを崩壊させようとするはずだ」

「妥当なシミュレーションだな」

生馬が、うなずく。

「そこで、城門のひとつ……東側の門を、わざと破らせる」

「正気か？」

眉根を寄せた生馬が、拓海の顔を見下ろす。

「いたって正気だよ。キルゾーンを形成したいんだ。カテゴリーCの二千名のためにね。それが、ここだ」

拓海が略図に描かれた破線の長方形を指す。

「あらかじめ東門の北側に、市街地を利用した幅七十五メートル、長さ二百メートルほどのキルゾーンを設ける。見ての通り、キルゾーンの西側はジンベル川だ。南側は城壁。もちろん城壁を占拠されるわけにはいかないから、ここには十分な兵力を置いて守る。北側と東側は、建物とバリケードで封鎖する。東門を突破した蛮族は、城壁を守るジンベル軍の背後にまわろうとして、バリケードに阻止される。西側は川だから、侵入した蛮族は北ないし北東方向へ進まざるを得ない。だが、そちらもバリケードで塞がれている」

言葉を切った拓海が、指先で紙を弾く。

「そこを、カテゴリーCの市民軍に叩かせる。基本は投石だな。これなら、十分な訓練をせずとも戦える。蛮族の数が減ったところで、掃討する。これで少なくとも一千数百……可能であれば二千近く敵を減らし、継戦意欲を失わせたい」

「そううまく行くかしら」

凜が疑義を挟む。

「餌は充分だがな。敵は城壁を突破したいはずだ。戦略目的を達するには、他に方法がないからな。門が破られれば、チャンスと見て後続部隊を送り込んでくるだろう。敵がバリケードを突破して背後にまわる可能性がもっとも怖い、これは精兵の予備隊を控置して

おくことで対処する。ようは城壁を利用して敵を分断し、当てにならないカテゴリーC市民軍を活用して各個撃破を狙いたいわけだ」

「いい作戦だが……蛮族が乗ってこなかったらどうする？」

生馬が訊く。

「代替手段は夜襲だ。蛮族がジンベル平原に出てくれば、陣形を観察できる。本営の場所もわかるだろう。夜間に同時多発的に夜襲を掛け、混乱に乗じて精兵に本営を衝かせる。……成功の確率は低い

が、それくらいしか思いつかん」

「畏に嵌めるのか……」

夏希は略図を眺めた。キルゾーンという用語は初めて聞いたが、たぶん敵の中に入れてやつつけるエリアのことなのだろう。まともにぶつかったら勝てない相手でも、その一部だけなら勝てるかもしれない。

「この作戦の弱点は、やはり情報漏れだ」

拓海が、言った。

「どんなに間抜けな蛮族戦士でも、城壁に登って市街地のバリケードを眼にしたら、こちらの意図を悟るだろう。だから、敵が畏に嵌るまで一兵たりとも城壁に登らせるわけにはいかない。そして、事前の情報漏れも防がねばならない。生馬、ジンベルの防諜は大丈夫なのか？」

「膨張？」

夏希は首を傾げた。

「そこまでは深く考えてなかったな。ラッシ隊長に確認してみるよ」

夏希の戸惑いに気付かぬまま、生馬が応じる。

「蛮族のスリーパーやシンパがいる可能性は？」

「それも、調べてみる」

生馬が確約する。

「スリッパ？ 審判？」

「ああ、あとで暇ができたら説明するよ」

なおも首を傾げる夏希を見かねた拓海が言った。

「ともかく、早急に機密保持の手立てを講じた方がいい。できれば、国境も閉ざすんだ。事情を知らぬジンベル市民がひとこと喋っただけで、本作戦が台無しになるおそれがある」

## 18 作戦計画（後書き）

第十八話をお届けします。おかげさまでPV300000越えを達成いたしました。ありがとうございます。

## 19 準備と訓練

ジンベル側に、あまり時間は残されていなかった。

ヴァオティ国王の裁可を得て大量の市民を動員した拓海が、ジンベル市街地南部のジンベル川東岸にキルゾーンを設定した。住民を強制退去させ、ありとあらゆる資材……材木、単なる丸太や木の枝、廃材、ロープ、石、錆びた鉄材などを使い、バリケードを造って囲い込む。その大きさは、幅が東西に七十一メートル、長さが南北に百九十七メートルほどになった。総面積一万四千平方メートル程度である。

それに先立って行われた防諜の強化は、単純だがきわめて効果的なものであった。すべての市民……これには、外国籍の市民も含まれる……の国外への移動を禁じたのである。川船の運航も休止され、他国からジンベルにやってきた船も抑留の対象となった。むろん商人層から抗議の聲が挙がったが、ヴァオティ国王は強権でこれを押さえつけた。

ジンベルは臨戦態勢を整えつつあった。

「で、なんでわたしが市民軍の訓練をしなきゃならないの」

王宮の一室で拓海の要請を聞いた夏希は、そう愚痴った。

「俺はバリケード造りや城壁の改良で忙しい。生馬はカテゴリーAとBの連中の訓練に掛かりつきりだ。凜ちゃんは防諜関係を統括してもらってるし、駿はまだ帰ってこれない。手が空いているのはあんただけだ」

「ジンベル防衛隊の誰かに……」

「おいおい。敵が眼の前に迫ってるんだよ。士官も兵士もみな忙しいんだ」

「でもねえ……」

夏希は渋った。軍隊の訓練など、見学したことすらない。自分にそのような役割が務まるとは思えなかった。

「最初は俺が手伝うよ。難しいことはアンヌツカに任せればいい。言つとくが、あんたの評判はかなり高いんだぞ」

「評判？」

「ジンベル川の戦いで教練隊長生馬様の命を救った女傑、つてもっぱらの評判だ」

「……なに、それ」

「長槍を振るって蛮族の首級六つを挙げた、とかいう話も伝わってるぞ」

にやにやししながら、拓海が続ける。

「竹竿しか振るってないわよ。誰も殺してないし。誇大もいいところじゃない」

「まあ、英雄譚に尾鰭がつくのは当然のことだ。それに、あの一件でジンベル軍の士気が上がったのは確からしい。結構なことだよ。とにかく、今は非常時だ。使える人材はすべて使いたい。あんたはすでにジンベル防衛隊兵士にも、市民軍の連中にも人気があるんだ。彼らに手本を見せてやってくれ」

「でもねえ……」

夏希は渋った。ジンベル川ときは生馬やアンヌツカ、そして自分を守るためにやむを得ず戦ったが、内心では戦争になど関わりたくない、と思っっている。

「仕方ないな。よし、やる気が出るものを見せてやるよ。とりあえず、来てくれ」

拓海が手招く。夏希はアンヌツカを伴って、渋々あとに続いた。王宮を出て、ジンベル川の方に向かう。

「キルゾーンに行くの？」

「そうだ。まだ工事中だからな」

ややぶつきら棒に、拓海が応ずる。

ほどなく、三人はキルゾーンの北端にたどり着いた。バリケード

造りは、かなり進んでいるようだった。建物の連なりをなるべく利用するようにして、資材を節約する工夫がなされている。作業には、結構な数の市民が動員されていた。女性や老人の姿も多い。皆汗にまみれながら、杭を打ち、丸太を組み、石を運んでいる。キルゾーン内部にある老朽家屋は取り壊され、廃材が資材として活用されていた。新しかったり、しっかりとした造りの建物は、開口部を板や丸太で塞がれて、内部に入れないようになっていた。

「彼らを見て、なんとも思わないのか？ 自分たちの街を守るために、必死になって働いている姿を？」

作業の様子を眺めながら、拓海が言う。

「そりゃ、助けてあげたいけど……」

夏希は口を尖らせた。ジンベルの人々は好きだし、恩義も感じているが……戦争はしょせん人殺しである。たとえ、それが自衛のためであっても。なるべくなら、加担したくはない。

「ほら。あんな子供たちもいるんだ」

拓海が、バリケードの一角を指差す。

六歳くらいの男の子二人が、その小さな身体に不釣り合いなほど太い丸太を力を合わせて抱え上げ、運んでいる。その先では、小さな手に鉛筆くらいの太さの枝を何本も握り締めた三歳くらいの幼女がしゃがみ込み、真剣な表情で枝を一本ずつ丁寧にバリケードの隙間に差し込んでいた。

「俺は、あの子たちの泣き顔を見たくはない。だから、蛮族と戦う」  
拓海がきつぱりと言った。

不意に、夏希はここへ召喚された当日の夜のことを思い出した。寝台の上で、ジンベルの人々に喜んでもらえることをしよう、そうすれば感謝されるはずだ、と考えたはずだ。

喜んでもらえる。感謝してもらえる。

今が、そのときなのかもしれない。拙くても、夏希にもできることがあるはずだ。バリケードに細い枝を突っ込んでいる幼女と同じくらいささやかな手伝いかもしれないけれど、ジンベルの人々と

って役に立つことが。……たとえそれが、他人を殺めることにながりがねないとしても。

「……わかったわ。市民軍の訓練、やらせてもらっわ」

拓海に連れられ、アンヌツカを伴って市街地北の牧草地……今は完全に防衛隊と市民軍の訓練用地と化している……まで歩く。

「基礎的な訓練はすでに済んでいるよ」

「基礎的なことって？」

夏希は訊いた。

「行進の仕方。上官の命令には服従すること。合図があつたら上官に注目すること。命令されていないことはやらないこと。勝手に持ち場を離れるのは罪だということ」

「……基礎的以前の問題だと思っけど」

「そう言っなよ。もともと米作つたり家具作つたり金掘つたりしていた人々だ。戦うやり方なんて、知っている方がおかしい」

「それ、自分がおかしい存在だと言ってるようなもんじゃない」

夏希は苦笑しつつ指摘した。

「平和な時代には、そういうマニアが流行るんだ。戦国オタクや侍オタクの発祥は江戸時代だというしな。三国志なんかがもてはやされたのも、江戸期だし。……あー、まずやらせるのは、これだ」

拓海が指す先には、地面に立てた十本の低い杭があつた。その上に、藁束のようなものが紐で縛り付けてある。

「あれを、これで突かせる」

地面から、拓海が長さ二メートルほどの竹の棒を拾い上げる。先端が、斜めに切り落とされていた。……いわゆる竹槍である。

「これで戦わせる気？」

「まさか。とりあえず、度胸を付けさせるだけだ。先進国の軍隊でも、いまだに銃剣突の訓練をやってるが、その主たる目的は敵を目の前にしてもびびらずに殺せるだけの度胸を兵士に持たせることにある」

「結局殺し合いなのね」

「戦争つてのは、そういうもんだ。棍棒で殴りあうのも、何千キロも離れたところに弾道ミサイルを撃ち込むのも、本質的に変わらないよ。争いを戦いで決着させるから、戦争と言うんだ」

冷笑を浮かべながら、拓海が言う。夏希はため息をついた。  
「なんで戦争になるのかしら。戦わなければ、みんな幸せになれるのに」

「逆だよ、逆。みんな幸せを望んでいるから、戦争になるんだ。人の幸せつてのは、突き詰めると個人が自分の希望、欲望を達成することに過ぎない。炬燵でアイスを喰うような小さな幸せから、実業家として天下を取るような大きな幸せまで、それは変わらない。戦争も、幸せを追求するから起きるんだ。幸せに背を向けている者は、他人と争う必要がないからな」

「なんか、納得できないわね」

「争うのは、生物の本質みたいなもんだ。遺伝子レベルで刻み込まれた、生存のための本能。コアラやナメケモノみたいに、他者と争わない形で生き延びてきた生物もいるが、あれは例外的だ。ほとんどの生物は、他者との競争に打ち勝って生き残った。人間は頭が良かったから、争わずに生きていける方法を色々考え出した。だが、頭の良さは社会性の肥大につながった。昆虫や獣なら巣だの群れだのの単位で争うのがせいぜいだったが、人間はその属する国家という巨大な社会単位で争いを始めるようになった。因果なものだな」

皮肉な笑みを浮かべた拓海が、手にした竹槍を肩に担いだ。

いわゆるカテゴリーCの市民軍総勢二千名は、生馬と拓海の手によって百名ずつの『中隊』二十個に編成されていた。さすがにすべての者を一度に訓練に駆り出したのでは、ジンベルの国家機能が麻痺してしまうので、今日集められたのは二個中隊二百名だけであった。

「なんか……おじさんばかりじゃない」

だらしなく整列した二百名を眺め渡しながら、夏希はぼそりと感想を述べた。全員が男性で、しかも若い人は誰一人としていない。

「中隊編成は年齢別にしたんだ。体力に差がありすぎると運用が面倒だからね。ちなみに、女性はひとつの中隊にまとめたから、十代の女の子から弓の扱いがやたらと上手なおばあちゃんまで混ぜてるが」

拓海のアドバイスを受けながら、夏希は訓練を開始した。まず全員に対し、作戦隊長……拓海がラッパ隊長からもらったはなはだ曖昧な肩書きである……から防諜についての説明と戦場の心構えが説かれる。続いてアンヌツカによる竹槍を使った槍術の基本演練。それが終わったところで、全員に竹槍が配られ、一中隊はそのままアンヌツカに預けられて先ほどの杭を突く訓練を、残る一中隊は夏希が投石の訓練を行うこととなった。

「投石？ やったことないよ、そんなの」

「中学の時、ソフトボール部だったと凜ちゃんから聞いたぞ」

「……たしかに、ボールを投げるのは得意だけど」

夏希は拓海から渡された石……テニスボールくらいの大きさ……を胡散臭げに見た。

「とりあえず正しい投石フォームを教え込むんだ。それから、的当てに入る。的は大きめに作るんだ。あたり易いようにな。まずは、自信を付けさせること。細かいテクニクはそのあとだ。水泳を人に教えたことはあるかい？」

「あるわ」

夏希は昔を思い出して微笑みながら答えた。凜が不器用ながらも泳げるようになったのは、実は夏希の特訓のおかげである。あれは、小学校二年の夏休みだったか。

「じゃあわかりやすいな。水に対する恐怖心をなくし、人間は水に浮くことを身体に覚え込ませる。泳げなくてもすぐに溺れることはないということのを会得させる。そして、水を掻けば前に進むことを

教える。同じ要領で、敵に対する恐怖心をなくし、投石で倒せると信じ込ませるんだ。ま、詳しいことはここに書いておいた。参照して訓練を進めてくれ」

拓海が、数枚のメモ書きを渡してくれる。夏希は、眉をひそめた。

「なに、この『明日のために その1』とか『その2』ってのは？」

「……ちよつとした冗談だ。流してくれ」

気恥ずかしげに、拓海が視線を逸らした。

ジンベル側の準備は続いた。

キルゾーンのバリケードは、わずか三日で完成をみた。手の空いた市民総出で市街地北方のジンベル川の河原から投げるに手ごろな石が集められ、バリケードの内側とキルゾーンを囲む建物の屋根に仮設された足場の上に蓄えられる。その間にも、蛮族は着実にジンベルに近づきつつあった。

「日没と同時に、工事を中断したようだ。皆からおおよそ二シキツホほどの処だな」

バリケード完成の翌日、王宮まで報告に戻ってきた生馬が、そう告げた。

「明日の午前か。準備は？」

拓海が、訊く。

「皆は万全だ。偽装工作の準備もできてる。今夜は念のため、俺も皆に泊まりこむつもりだ」

「偽装工作って、なに？」

夏希は訊いた。

「皆の放棄が既定方針じゃないと思わせるための工作さ。わざと米を残しておいたり、予備の武具を置いたり、そういうった類の偽装だ」

生馬が答える。

「ねえ、駿からの連絡は？」

凜が、拓海と生馬に訊く。

「とりあえずいくつかの都市国家から兵力提供の確約を取り付けたようだ。だがどうせ、今回の一戦には間に合わん。期待しないほうがいい」

軽く首を振りながら、生馬が言う。

「じゃ、明日攻め込まれるとの前提で、各自の配置だ」

拓海が、メモに眼を落す。

「生馬は防衛隊三百を率いて砦の守備。適当なところで退却。しつこいようだが、捕虜は出すなよ。残ってきていいのは死体だけだ」  
「任せろ」

生馬が厳しい表情でうなずく。

「凜ちゃんは西の市場の臨時救護所待機。資材は集まった？」

「救護用品は充分に。ただし、人手不足ね。だいぶ、市民軍に取られちゃったから」

不満顔で、凜。

「子供でも外国人でもいいから、集めてもらってくれ。で、夏希はキルゾーンの市民軍の統制……」

「ちよつと待って。わたしが指揮するの？」

「いや。統制だけだ。指揮は防衛隊の士官が……あー、うち一人はアンヌツカだが……執ることになる。夏希の役目は統制だ。攻撃のタイミングは俺が計るから、合図を受けたらそれを中継しろ。あとは、市民軍の連中に手本を示せばいい。あれだけ訓練したんだからな。あんたが石を投げれば、みんな真似して投げてくれるさ」

「簡単に言ってくれるわね」

「で、俺は城壁の上の見張り台に陣取る。主な役目は蛮族軍の観測とラッシ隊長からの命令伝達だ。名目上とはいえ、総指揮を執るのはラッシ隊長だからな。それを、忘れないでくれ。……命令伝達には、旗を使う。これが、識別表だ。しっかり覚えといてくれ」

拓海が、三人に紙を配った。赤青緑白の四色の旗を組み合わせた合図のようだ。

「夜間の場合には、光る球体を使った色つき灯火で代用する。意味は旗の場合と同じだ」

「……光る球体に色違いなんてあつたっけ？」

「色ガラスを仕入れた。これで、間に合わせだが角灯っぽいものを作ったんだ。昨夜テストしたが、充分使える」

「結局、戦争になつちやうのね」

ぼやき気味に、夏希は言った。明日になれば、大勢の死者が出るだろう。もはやそれを止める手立ては残されていない。

「ここまで来たら、計画通りやり切るしかない。あとは明日だな。とりあえず今日は充分に睡眠をとって、明日は早起きしてくれ。おそらく蛮族は夜明け前から工事を再開し、午前の早い時刻に砦攻撃を開始するだろう。勝負は……午後だな」

「なんだか楽しそうね」

拓海に対し、やや皮肉っぽく凜が言う。

「楽しいと言ったら語弊があるな。むしろ、十二分に試験勉強をした上でテストに望む心境かな。某マンガの主人公のセリフを借りれば、『オラなんだかわくわくしてきたぞ』ってところか」

笑みを浮かべながら、拓海が言う。

「……男って単純な生き物なのよね」

凜が、肩をすくめた。

「否定はしないよ」

拓海が言つて、からからと笑う。

「……おっと、忘れるところだった」

生馬が、部屋の隅に畳んで置いてあつた革のようなものを取り上げた。夏希に押し付ける。

「なに？」

「革鎧だ。何も着ていないよりは、ましだからな」

夏希は広げてみた。腰から上の胴体をすっぽりと覆つ、丸首のベストみたいな形だ。なんだかふにやふにやで、頼りない。

「矢を止めることはできないが、それなりに使える。お前には、怪

我をしてもらいたくないから」

生馬が、視線を逸らしつつ少しばかり気恥ずかしげに言う。

「ありがとう。着させてもらうわ」

夏希は素直に言った。気遣いはありがたい。

「それから、これだ」

生馬が、鞘付きの長剣を取り上げる。

「お前が直接戦うことはないだろうが……一応武器は持っておいたほうがいい」

「それは……いらないわ。使えそうにないし」

「筋力や体格も考慮して選んだ剣だ。万が一のために、持っておいたほうがいい」

生馬が剣を押し付ける。

「わがままに聞こえるかもしれないけど、人を殺したくないのよ」

ジンベル川の小競り合いではやむなく竹竿を振るったが、たぶん人は殺していないはずだ。自衛的な戦争における殺人は絶対的な悪ではない、と言うことは理解しているし、明日は戦いに参加する覚悟を決めたが、やはり直接自分の手で人を殺すのだけはしたくない。「抜かなくてもいいから、とりあえず腰に下げといた方がいい」

拓海が、言った。

「市民軍の面々に示しがつかないからな」

「わかったわ。でも、抜かないからね」

不承不承、夏希は長剣を受け取った。

19 準備と訓練（後書き）

第十九話をお届けします。

十三の都市国家が散在する平原地帯の南方に位置するのが高原地帯である。丈の高い草で覆われた広大な大地は、低くならかな丘が点在するくらいで、起伏に乏しい。人が住まぬ箇所は常に密林に覆われている平原地帯と違い、木々は少なく、ところどころに疎林が見受けられる程度である。空気は平原地帯よりも乾燥しており、標高が高いことも相まって暑さも凌ぎ易い。

ここに居住するのが、高原の民である。平原地帯の住人からは、『蛮族』と呼ばれている、狩猟と農耕の民だ。元來定住民族でなかった彼らは、いまだ国家と呼べる組織を形成してはいない。彼らにとって国家に相当する存在は、氏族である。これは、祖を同じくする人々の緩やかな連合組織、と言えるだろうか。氏族はさらにいくつかの支族に分かれる。支族は血縁ではなく、地縁によって結びついた互助組織であり、村や都市に相当するものだ。ほとんどの場合、ひとつの支族は同じ場所に大規模な集落を作り、そこを拠点として生活する。支族を束ねる者……支族長は、有力者の話し合いで選出される。

氏族の長は、血縁を重視し、氏族長を代々輩出してきた一族より選ばれるが、その地位は象徴的なものである。名誉を重んじ、個人の権利を尊重し、なによりも平等を尊ぶ社会なので、合議制が好まれる。氏族がなんらかの方針を決める場合には、支族長会議が開かれ、そこで討議が行われる。投票に類する行為は、基本的に行われない。なにことも話し合いで解決しようとするのが、高原の民の特徴である。

リダは、土間で愛用の鉈を研いでいた。

鉈は、高原の民にとって生活必需品である。狩りや農作業はもち

るん、ありとあらゆる場面で活躍してくれる頼もしい道具だ。親から子供用の小さな鉈を与えられたら、『半人前』と認められた証だし、成人の儀に際しては支族長から大人用の鉈を手渡される。ゆえに、高原の民は自分の鉈を愛し、常に身に帯びている。老人でさえ、鉈は手放さない。『鉈を持ってぬほど衰えたら、お迎えが来る』と信じられていたのだ。

鉈が砥石の上を滑るたびに、白っぽい金色の短い髪がわずかに揺れる。緑色の大きな目は、真剣そのものだ。いかなる時でも、刃物を扱う場合は真剣であらねばならない、というのが、高原の民の掟のひとつである。ふざけて鉈を振り回すような者は、子供であつても容赦なく大人にぶちのめされる。

彼女は桶の水を手にくうと、鉈に掛けた。持ち上げて、刃先をじつくりと見る。しっかりと研ぎあげられたことに満足したりダは、鉈を振って水気を切ると、ぼろ布できれいに拭き上げ、鞘に収めた。丸い砥石を片付け、桶の水を捨てたりダは、自室に戻ると普段着であるワンピースを脱いだ。十六歳という年齢の割には身体つきは生硬で、胸も腰も張りが無い。細身で手足が長いために華奢な印象を与えるが、実際には程よく筋肉がついており、狩りの腕にも自信があるほどだ。清潔な下着を着けると、その上から狩りの装束……タイトなショートパンツ状のボトムとノースリーブのシャツのようなトップ……を着込む。脱いだワンピースを丁寧に折り畳んだりダは、装備を身につけ始めた。普段締めている布ベルトを頑丈な革製のものに取替え、鉈の収まった鞘を下げる。胸部だけを覆う裏地付きの革鎧を着け、背に竹と革でできた円筒形の矢筒を背負う。入れている矢は、きっちり三十本。数に関して特に決まりはないが、大人たちは普通四十本くらい入れている。

リダは頭に布を巻きつけ始めた。ターバンに似ているが、帽子は伴わず、帯状の布を巻き上げてゆく高原の民特有の装束である。丈夫な荒織りの麻布で、いざという時にはロープの代用品から包帯まで幅広く使える便利な品だ。色は、リダの好きな色である深緑。あ

まった二十センチくらいの端を、左耳の前あたりに垂らす。端を完全に巻き込まないのが、未婚女性の証である。

巻き終わったりダは、ベルトにいくつかの袋などをぶら下げた。細々とした道具類が入った小袋。食料などを入れる大きなもの。狩りの際に得物などを入れる網袋。竹製の水筒。寝具となる、巻いた革と麻布は、矢筒と同様負い紐で背中に負う。

弓を手にする。もちろん、弦は張られていない。すべての支度を調べたりダは、兄のいる部屋に赴いた。戸口から、声を掛ける。

「兄上。そろそろ参ります」

寝台に腰掛けて瞑目していたベンデイスが、静かに目を開いた。褐色の長い髪と、薄茶色の眼。実の兄だが、容姿はリダに驚くほど似ていない。

「やはり、行くのか」

視線を妹に向けないうまま、ベンデイスが問うた。

「はい。わたしも支族長の娘。お父さまの代わりに、戦場に立ちたいと思います」

リダは兄をしつかりと見据えながら言った。

二人の父、アフザルはイファアラ氏族に属するツルジンケン支族の支族長であるが、二ヶ月ほど前から病に臥せており、現在支族は氏族長代理が率いている。名誉職でもある支族長の地位を退くのは、死んだ時か弾劾される場合のみである。ツルジンケン支族も当然、対ジンベル戦役に動員されており、すでに多くの者が軍用路建設のために集落を出ていた。

「無理することはないんだぞ。叔父上も、従兄弟たちも戦いに行く。一族の名誉は、守られる」

ベンデイスが、言う。彼自身は、有能な狩りのリーダーとして名が知られており、その聡明さを買われてサイゼン氏族長の本営に側近として仕えるように命じられている。一族とともに行動することはできない。

「いえ。わたしも一人前の戦士としての自覚があります。サーイエ

ナ様とも、お約束しましたし」

「巫女様が」

そう言ったベンデイスが、立ち上がった。身長は、リダよりも頭ひとつ分高い。

「いいだろう。戦って来い。だが、無理はするな。戦場は狩場とは違う。得物を仕留めたら終わりではない。狩人が瞬時に狩られる獲物に入れ替わってしまうのが、戦場だ。油断するな。気を抜いたら、狩られるぞ」

ベンデイスがリダに正対し、膝を曲げて眼の高さを妹と同じにした。鮮やかな緑色の瞳を、覗き込む。

「兄上」

リダが、弓を手にしたままベンデイスを抱擁した。

ジンベル川……高原の民は別の呼称を用いているが……が穿った溪谷の、高原側の出口からさほど遠くない集落に、本戦役の高原戦士たちの根拠地は置かれていた。周囲には急造の小屋がいくつも立ち並び、遠方の集落から運ばれた米や乾燥肉、芋類などが大量に納められている。

そのような小屋のひとつに、十数名の高原戦士が集っていた。本作戦の総指揮を執る氏族長サイゼンと、その側近たちによる作戦会議である

「では、敵の状況を概説してもらおうか」

禿頭と鋭いまなざしが特徴的な氏族長サイゼンが、先鋒を務めるレンルーム支族の有力者を促した。立ち上がった中年の男が、ジンベル王国が川の途中に設けた砦について詳細な説明を始める。

「かなり有力な砦のようだ。先鋒の兵力だけでは、抜けないだろう」

聞き終えたサイゼンが言って、居並ぶ側近に対し意見を求めるかのように見回した。今回の戦役には、イフアラ族を構成する支族十

七のすべてから、その規模に応じた数の戦士が参加している。その総数は、実に七千名を超える。これには、軍用路建設に従事した者や、兵站を担当する者は含まれていない。純然たる戦闘要員だけで、この人数である。

短い討議の結果、レンルームを含む五つの支族が協力して砦の攻略に当たることとなった。総兵力は、約二千八百。残余の主力は、ジンベル攻略に備えて待機となる。

「砦攻略の指揮は、ビレットに任せる」

サイゼンが、副将格の側近を指名した。有力支族バチーラの氏族長の甥にあたる壮年の男である。バチーラ支族の戦士は先鋒に加わっているから、妥当な人選だ。

「誰か、補佐役を選ぶといい」

サイゼンが言って、側近たちに視線を走らせた。

「では、ベンデイスを補佐としてお借りします」

ビレットがうなずきつつ言った。サイゼンが、わずかに顔をしかめる。

「……ツルジンケン支族は先鋒に加わっていないが、よいのか？」

「承知しております。ですが、わたしはこの若者を高く買っておるのですよ、氏族長」

笑みを湛えつつ、ビレットが答える。

サイゼンが、ベンデイスに眼を当てる。ベンデイスは、軽く目礼すると、ビレットを見た。

「光荣です、ビレット殿。喜んであなたの補佐を務めさせていただきます」

高原の民の戦士の隊列が、溪谷に拓かれた軍用路を進む。

長大な列であった。最後尾の者が溪谷に入った時には、すでに先頭が全行程の四分の一ほどを消化しているくらいだ。

その列の中ほどを、ツルジンケン支族の戦士集団が行軍していた。

総勢約八百名。リダの姿も、そこにはあつた。

弓と矢筒を始めとする自分の荷物他に、割り当て分の食料が入った重い網袋を背にして、リダは黙々と歩んでいた。支族長の血縁であろうと、女性であろうと、また成人の儀を済ませていなくても、従軍を志願した以上一人前の戦士として扱われる。それが、高原の民の決まりである。狩りに参加すれば、例えば子供でも……もちろんその能力に応じた働きが必要だが……平等に獲物を分けてもらえる。それと同様、人並みの戦士として認められたければ、他の戦士たちと同じ苦勞を分かち合わねばならない。

行軍中、休憩は一度も取られることはなかった。休息を挟んだ方が疲勞しにくいことは、狩猟民族である高原の民はもちろん理解している。だが、狭い軍用路に長大な隊列がひしめいている状態で休憩を取るのは至難の業だ。戦士たちは時折水筒でのどを潤すことはあつても、足を止めることはなかった。

歩き続けるリダもそれほど疲勞は覚えていなかった。行軍自体が比較的ゆっくりとしたものだったし、常日頃から狩りに参加して足腰は鍛えられている。汗はたっぷりとかいたが、樹木の天蓋で日差しが覆われているせいも、それほど暑苦しさは感じなかった。

しかしながら、軍用路自体は決して歩き易いものではなかった。啓開に要する日数を短縮するために、時間の掛かる木の根の掘り起しなどを行わず、枝などを敷き詰めた上に土を被せて踏み固めただけの道だからだ。とりあえず表面は均されてはいるが、まだ十分に土が締まっていないので軟らかく、踏み出すたびにわずかに足を取られるような感触がある。

午後半ばになって、隊列が止まった。先頭が、先行していた先鋒と接触したのだ。切り拓かれた密林は、ごく一部である。ジンベルの砦近くには、先鋒の戦士たちを収容するだけの余地しかない。本隊は、軍用路に留まるしかなかった。

何人かの戦士たちがさっそく愛用の鉈を抜き、軍用路の左側……川の方向……の下生えを刈り始めた。リダは鉈を抜かなかった。刈

り払っている人数が充分だと見て取ったのだ。狭いところで大勢が鉦を振るうのは効率が悪いし、第一危険ですらある。

リダは他の者とともに、刈り払われた植物を運び、分類する作業を行った。薪になりそうな細い枝や枯れた葉などを取り除け、蔓で縛っておく。柔らかいが水分の多いシダ類、下生えの茎、細すぎて焚き付けにすらならぬ細い枝なども、取っておく。残りは嵩張らないように小さくまとめる。これら一見役立たぬ刈り払い屑にも、重要な役目があるのだ。いずれも、狩りの時の野営準備で手馴れた作業だった。

スペースに充分なゆとりができると、鉦を持った戦士たちの半数ほどがそれを鞘に収めた。残りの者は、川への道を造り始める。リダら他のものは取っておいた柔らかい植物を地面に敷いて寝床作りに掛かった。一番下に水分を含んだ植物を敷き、その上に細枝を重ねる。さらに水分の少ない植物の茎や葉を乗せ、最後に持参の革を広げる。リダはすぐそばにもうひとつ寝床をこしらえた。むろん、鉦を振っている誰かのための寝床である。命令や指示がなくても、ごく自然に各人が役割分担をして、各自の仕事をこなすことが、身につけているのだ。

寝床を作り終わったリダは、自分の荷物から米の入った皮袋を取り出した。立ち働いている人々の間を回り、さらに米を集める。すでに、川へと通じる小道は完成していた。そこをたどって川岸に出たりダは、皮袋に入れたままの米を研ぎ始めた。左右の川岸には、同じように米を研いでいる戦士たちが点々と見える。水を汲みに来る者も多い。

リダは米の研ぎ汁を密林の中に撒いた。川を汚してはいけない。下流でも同じように多くの戦士が米を研いだり、煮炊きや飲用の水を汲んだりしているのだ。

研ぎ終わった米を持ち帰った頃には、すでに竈の準備ができていた。水が張られた大きな鍋が、石を三つ置いただけの簡素な竈の上に置かれ、すでに沸き立っている。リダは皮袋の中の米をその中に

一粒残らず注ぎ入れた。高原の民の米の調理法は、基本的に湯取り（沸騰した湯で米を茹で上げる方法）である。

別の鍋では、おかずとなるスープが作られていた。持参した芋や野菜、密林の中で採取された食用になる葉や木の実などが、煮込まれている。

リダは濡れた革袋を手近の木の枝に掛けて干すと、軍用路の方へと戻った。探しているものは、すぐに見つかった。密林の奥へ向け切り拓いたばかりの細い道がある。リダは地面に置いてある葉付きの枝を手にとると、それを道の真ん中に突き刺した。これが、使用中の合図となる。

細い道はすぐに横に折れ、地面に穴が開けられた狭い空間に続いていた。その脇に、先ほどまとめておいた刈り払い屑の塊が置いてある。

トイレである。

小用を足したリダは、刈り払い屑をひとつかみ取って穴に投げ入れた。臭い消しのためである。これも、狩猟民族の知恵と言おうか。狩りの獲物は人間よりも鼻が利くし、尿の臭いにも敏感である。

野営地に戻ったりリダは、自分の寝床の上に腰を落ち着けた。多くの者が、同じように休んでいる。残っている仕事は鍋の番くらいであり、人手は充分に足りている。やるべき作業がない場合は、努めて身体を休めておくことも、狩猟の際の基本である。

スープの煮えるいい匂いに混じって、蚊遣りの煙のきつい臭いが流れてきた。水袋を持った戦士が、各人の間を巡って水筒に水を足してくれる。リダも自分の水筒を満たしてもらった。米の鍋にしていた戦士が、箆で茹で上がった米をすくい始めた。人々が三々五々立ち上がって、自分の木椀に米をよそってもらう。リダも自分の木椀を出した。四つの木椀が入れ子になった、持ち運びに便利な軽い食器は、狩りに行く高原の民ならば必ず持っている道具のひとつである。一番小さな木椀だけきっちりと閉められる蓋がついており、

たいてい持ち主が好きな日持ちする食品や好みの調味料を入れてある。リダのそれに入っているのは、柑橘類の皮に果汁を混ぜ、糖蜜で煮たものだ。リダのお手製で、甘酸っぱく、兄のベンデイスの好物でもある。

大きな碗に米を、中くらいの碗にスープを、そして小さな碗に湯通しして柔らかくした干し肉をよそってもらったリダは、寢床に戻ると食べ始めた。いつの間にか、あたりは薄暗くなっていた。西の方に眼をやると、木々のあいだのかなり低い位置にオレンジ色の太陽の姿があった。

……ベンデイス兄さんも、この夕日を見ているのだろうか。

先鋒に属している兄に思いを馳せながら、リダは食事を続けた。

ジンベルの砦は静まり返っていた。だが、煌々たる魔術の明かりがいくつも灯っており、十二分に警戒していることをうかがわせた。「奴らめ。魔術の無駄使いをしている」「憤然として、ビレットが鼻を鳴らす。

「何としてもやめさせねばなりませんね」  
ベンデイスも同意した。

先鋒を率いる二人は、密林の際に半ば身を伏せていた。眼前には、ジンベル人によって中途半端に切り拓かれた平地があり、その向こうに魔術の白っぽい明かりに照らされた砦が、蹲る獣のような畏怖すべき姿を見せている。

「明日は多くの戦士が倒れるだろうな。奴らの戦術眼は確かだ。本当に厄介な場所に砦を築きおった」  
ビレットが、毒づく。

「致し方のない犠牲です。このままでは、高原の民に未来はないのですから」

ベンデイスはそう応じた。破滅が訪れるのは、まだまだ先の話だ。だが、早めに手を打たねば、いずれ高原の民と平原の民の全面戦争

に発展しかねない。今ならばまだ、それを防ぐことができる。きわめて少ない犠牲で。

「そろそろ戻ろう。よく寝ておかねばならない」

ビレットが、伏せたままそろそろと後退した。ベンデイスも続く暗い上に、密林に半ば隠れている状態だが、ジンベル弓兵の射程内である。用心に越したことはない。

砦の監視を続けている一隊に労いの言葉を掛けてから、ビレットとベンデイスは野営地に戻った。軍用路は、ほとんど完成している。あとは、明日の未明から工事を再開し、大部隊が待機できる大きさまで密林を広く切り拓く。そして、そこに先鋒二千八百を集結させ、一気に攻撃する。うまく行けば、一日で砦を落せるだろう。

20 高原の民（後書き）

第二十話をお届けします。すべて『敵側』視点の異色回であります。

## 21 砦、陥落

「間違いなく来る。伝令！」  
見張り台から望遠鏡を覗いていた生馬は、市民軍の少年兵を呼んだ。

「南の城壁まで伝令。発、教練隊長。宛、作戦隊長。蛮族の攻勢はまもなくと思われる。作戦計画に変更なし」

十三歳くらいの少年兵……腰に大ぶりの鞘つきナイフを下げていることと、伝令の証である土染めの褐色の腕章をつけていることを除けば、どこにでもいる若いジンベル人と変わらない……が、しっかりとした口調で復唱した。彼らは生馬自らが市民の中から募集し、聡明さと脚力を重視して選抜、訓練を施した伝令兵である。作戦の鍵は部隊間の通信にある、と言う点で生馬と拓海の考えは一致しており、連絡に関しては十分に気を使い、準備を整えてあった。

伝令兵が走り去ると、生馬は再び望遠鏡を密林に向けた。薄くたなびいていた朝靄が、日差しを浴びて急速に消えてゆくのが見える。その奥で、わずかではあるが動きが認められる。むろん、蛮族の攻撃準備だ。

すでに配下の兵三百は戦闘準備を終え、配置に就いていた。撤退支援の市民軍五十名も、砦後方で待機中だ。砦は引き絞られた矢弦のように、戦いに備えている。

生馬が覗く望遠鏡の接眼レンズが、曇った。

腰に吊るしていた手拭いを手にした生馬は、それで接眼レンズを拭いた。ついでに額に湧き出た汗も拭う。

太陽はいまだ東の低い位置にあったが、気温はぐんぐんと上昇を続けていた。いつもはジンベル渓谷沿いに涼風が吹いているのだが、今日は不気味なくらいに凪いでいる。

手拭いを腰に戻しつつ、生馬はつぶやいた。

「暑くて長い一日になりそうだな」

「ご苦労だった。この下のラッシ隊長のところで待機してくれ」

拓海が生馬からの連絡を伝えた少年兵を労いつつ、新たな命令を伝えた。一礼した少年兵が、身軽に梯子を伝い降りてゆく。

「……いよいよか」

夏希は肚を括った。こうなったら、じたばたしても始まらない。

拓海の作戦通りにことを進めて、蛮族が撤退することを祈るしかない。

「まあ、時間も人手も資材も不足していたが……なんとか間に合ったな。準備はすべて済ませた」

拓海が、ジンベル市街地を見下ろす。

ふたりは南の城壁の上に新たに建てられた見張り台の上に立っていた。高さ六メートルほどの、丸太を組み合わせた簡素なものだが、矢避けの板だけは四周にしっかりと張られており、曲射の矢を防ぐ屋根もついている。地面からの高さは、十メートル程度か。さすがに砦の様子は背の高い樹木が密集しているジャングルに遮られて窺えないが、ジンベル南平原はすべて見通せるし、背後に眼を転ずればジンベルの街も隅々まで見渡せる。

夏希も拓海に釣られるように市街地を見下ろした。苦労して作り上げたキルゾーンのバリケードの連なりが、はっきりと見える。

「おそらく昼前にはここも戦場になるだろう。頼んだぞ、夏希」

拓海が言つて、手振りで降りるように促した。

夏希はゆっくりと梯子を降りた。城壁の上で待っていたアンヌツカと合流する。

「いかがでした？」

「作戦隊長の見立てでは、昼前に襲ってくるそうよ。わたしたちも準備を進めましょう」

夏希は先に立って城壁の階段を降りた。

すでに、市街地はぴりぴりとした空気に満ちていた。ほとんどの家や商家が扉を閉め、のんびりと歩いているのは野良猫くらいである。何軒かの家では女性たちが集まって、炊き出しを行っていた。炊き上げられた米が大きな板の上に山盛りにされ、湯気をあげている。

「ついでに凧の様子を見ていきましようか」

夏希は西の市場へと向かった。市場と言っても築地や大田みたいなものではなく、広場の周囲に小規模な商店と差し掛け小屋が軒を連ねているだけだ。営業の権利は国家が管理しており、差し掛け小屋は商人たちがお金を払って借りている。それら商人は、自分の商品をそこで捌いたり、あるいは農産物を自ら直接売りたい農民や他国からやってきた商人に又貸して利益を得ている。広場は露店が営業したり、他の都市からたまにやってくる芸人や楽人などの興行場所として使われているが、今日はその広さを利用して凧が指揮を執る臨時救護所が開設されていた。

「どう？」

「とりあえず、準備は万端つてとこね」

手縫いした白いエプロンを着けた凧が、中途半端に胸を張る。

「……そうとう人手不足みたいね」

夏希はテントもどき……地面に突き刺した数本の棒に布を張り渡しただけの、単なる日除け……の下で待機している救護要員を見て、首を振った。ほとんどが、初老の女性と幼い少女だ。男性の姿もあるが、むしろあなたの方が介護が必要じゃないの、と突っ込みたくなるような老人だけである。

「まともに動ける市民は女性でもみんな拓海が引っ張ってっちゃったからね。人手が足りるかどうかは、どれだけ怪我人の数が出るかに掛かってるわ」

皮肉っぽく、凧が言う。

「何人くらいなら、対応できそう？」

「軽傷で百人、つてとこかな。重傷者は、せいぜい三十人ね。ジン

ベルの内科は、結構進んでるわ。漢方薬や薬用ハーブに使われているような植物が、医学院では薬として普通に処方されているし。でも、外科の方はさっぱりよ。消毒が必要なのは理解されているけど、その方法はお湯を使うのがせいぜい。石鹼が間に合ってよかったわ。あと、一応消毒用アルコールも作ってみたけど、ものになるかどうか……」

凜が、並べてあるガラス瓶を見やる。

「そんなもの、いつの間に用意したの？」

「蒸留自体は簡単。ジージャカイから輸入した米の醸造酒を熱して、飛んだアルコールを集めただけ。まあ、米焼酎よね」

「ここ、焼酎つてないの？」

夏希は訊いた。お酒はもちろん飲まないから、あまり興味はないが、焼酎が製造できるのならば輸出用の商売になるかもしれない。

「蒸留法は知られていないから、蒸留酒はないわ。醸造酒だけ。お米や芋から作る濁酒とどろくと、もう少し洗練された清酒に近いお酒、それに果実で作るワインのようなお酒だけね。蒸留酒の生産はできないことはないけど、あんまりやりたくないなあ」

凜が、渋る。

「どうして？」

「強いお酒が未成熟な社会に無秩序に入り込むと、ものすごい悪影響があるのよ。それこそ、麻薬に近いくらい。ヨーロッパのジン、ロシアのウォッカ。アメリカ建国前の北米のウィスキー。中米のラム。ジンベル人もお酒を飲むけど、酔っ払って道を歩いていたりする人は見たことないでしょ？ 弱い醸造酒でべろに酔うには相当の量を飲まなきゃならない。でも、蒸留酒ならすぐに酔える。心理的にも経済的にも、障壁が少ないの。強いお酒の流通は、注意して扱わないとアルコール中毒患者を大量に生み出すだけになりかねない」

「……って、ずいぶんお酒に詳しいわね」

「そこはあまり突っ込まないで」

凜が、わざとらしく眼を逸らす。

「じゃ、お酒輸出計画は封印ね……あら？」

夏希は脇の路地から歩んできたエイラに気付いて少しばかり驚いた。巫女の魔術は戦争に際しまった役に立たないので、今日はずきり自宅が王宮にこもっているはずだと思い込んでいたのである。「ああ、彼女？ 救護所を手伝いたいと言ってくれたから、加わってもらったの」

夏希の驚きと視線の先に気付いた凜が、説明する。

「お早うございます、夏希殿、凜殿」

「夏希様あゝ、凜様あゝ。おはようございますう」

エイラに続いて、後ろから飛んできたコーカラットが挨拶する。

夏希と凜も挨拶を返した。

今日のエイラの装いは、いつもの巫女姿ではなく、足首まである薄手のワンピース姿だった。かなり着古してあるようだ。汚れるのを覚悟の上で着ているらしい。

「コーちゃんも、お手伝いするの？」

「はいい。人間の争いには介入いたしません、怪我人の面倒を見るのは構わないのですう。わたくし、かなり器用なのでお役に立てますですう」

触手を振りたてて、コーカラットが主張する。たしかに、触手の先を鋭いメスや小さなピンセットに変形させることができるコーちゃんなら、名外科医になれるだろう。

「結局、戦争になるのを止められなかったわね」

悔しそうに、凜が言う。

「仕方ないよ。わたしたちの力じゃ、無理なもの」

わずかに顔をしかめ、夏希は応えた。貴族に任じられ、賢者面などしているが、所詮は女子高生である。規模が小さいとは言え、国の政治や国家間の外交の流れを変えることは不可能だ。

「ねえ、夏希。あんた、あたしになにか隠してない？」

顔を近づけた凜が、不意に小声でそう訊いてくる。

「隠しごと？ まさか。ないわよ」

「普通、異世界召喚された人物は何らかの特殊な能力を持っているはずよ。実は魔術が使えたり、超能力が芽生えてたり、ほんとはジンベルの生まれだったりしない？」

「……それ、小説とかの話でしょ？」

「まあね。でも、それがお約束というものよ。エイラから、魔法のアイテムとかもらってないの？」

真顔で、凜が問う。

「ないない。そんな凄い力があつたら、戦争止めに入ってるよ」

夏希は失笑した。ファンタジー小説のヒロインなら、ジンベル人と蛮族がにらみ合っているところへ出て行って、『流血は愚かだ』とかなんとか説くのだろうが……夏希がそんなことをしたらまず間違いない。全身に矢を浴びて絶命することだろう。

「あなたに期待したあたしが馬鹿だったわ。ま、とにかく、怪我しないだね」

凜が真剣な表情で夏希に言う。

「向こうなら救急車呼んで入院すれば三日で退院できるような怪我でも、こつちじゃ命取りになりかねないわ。特に骨折は要注意よ。皮膚を突き破るような形で複雑骨折でもしたら、まず命はないと思ってちょうだい」

「わかった。充分に気をつけるわ」

夏希はうなずいた。

「ついに来やがったか」

望遠鏡を覗く生馬の口から、つぶやきが漏れる。

密林の中から……より正確に言えば密林に隠された軍用路から、蛮族があふれ出てくる。ジンベル川にも、川船が現れた。蛮族戦士を満載し、川を下ってくる。

すぐさま、砦から多数の矢が飛んだ。弓隊の統率は、防衛隊の弓

隊長に任せてある。矢を惜しまずに使い、蛮族を砦に取り付かせないのが、当面の目的だ。

生馬は望遠鏡を下ろした。戦場全体を眺め渡すようにして、戦況を把握しようとする。

第一陣約七百の高原戦士が、一斉に突撃する。東岸に三百、西岸に三百、そして川船に乗るもの百。

全員が、投げ槍兵である。彼らが使う投げ槍は、長さ一メートル半程度。手槍としても使える重い物を一本、投げ専用の軽い物二本を持つのが基本である。もちろん、厳格に定められた軍規があるわけではないので、携行本数は各自の裁量に任されている。通常、投げ槍兵が持つ盾は接近戦で敵の剣や槍を防ぐに効果的な四十センチ四方程度の木製角盾だが、今回は弓兵より借りた高さ一メートル半、幅六十センチほどの大盾を手にかけている。これは木枠に厚手の革を二枚張ったもので、大きさの割りにきわめて軽量である。鏃の貫通を防ぐことはできないが、矢本体の勢いを削ぐことができるので、身体から離して支えている限り傷を負うことはない。

雄叫びをあげて突っ込んでゆく第一陣を、密林の中に半ば隠れた弓兵四百が援護する。投げ槍兵の頭越しに放物線を描いて放たれた矢が、砦に籠るジンベル兵に降り注ぐ。そのほとんどは、屋根と胸壁に防がれてしまったが、弓兵たちは黙々と十秒に一本ほどの素早いペースで矢を射続けた。目的は、味方突撃の援護である。近代銃器による制圧射撃と同様、精度よりも発射体の投射数が物を言う。

刈り残された切り株や下生えの根本、わざと置き去られた石などに蹴躓きながら、投げ槍兵の群れはいくつかの集団に分かれて突っ込んでゆく。掲げられた大盾に、ジンベル弓兵が放った矢が突き刺さる。足を取られて転んだ戦士には、容赦なく砦から矢が浴びせられる。高原の戦士は仲間の死体を踏み越えながら、しゃにむに砦に迫った。

……恐ろしい連中だ。

見張り台から戦況を観察しながら、生馬は蛮族戦士の勇敢さに畏敬の念を覚えた。

すでに、戦場には数十におよぶ蛮族戦士の死体が転がっていた。いずれも、矢を受けて倒された者だ。蛮族弓兵も盛んに射返しているが、ジンベル側はしっかりと守られた砦の中から反撃している。で、矢傷を受ける者はごく少ない。二百名の弓兵の半数は防衛隊の兵士だし、残る市民軍弓兵もかなり鍛えられた連中だ。士気も盛んで、果敢に反撃している。

かつん。

生馬が籠る見張り台にも、矢が突き立つ。

当たれば死ぬかもしれない、と頭ではわかっていたが、生馬は頭を引っ込める気になれなかった。眼前で、文字通りの死闘が繰り広げられているのだ。男同士……たぶん、蛮族には幾許かの女性も混じっているのだろうか……の、命がけの闘争。

生馬は息を大きく吸い込んだ。違う。空気からして、違っている。戦いに臨んでいる何百、いや何千もの人々が放つ殺気のような『気』が、大気中に満ち満ちている。平和な世界……生馬が暮らしていた時代の日本では、絶対に吸うことができない空気だ。

これが戦場の空気なのか。戦国時代の数多の合戦も、このような空気の中で行われたに違いない。信長も、信玄も、謙信も、政宗も、勝家も……。宗茂や幸村や忠勝や、生馬ごひいきの義弘公も、この空気を吸い、そして戦ったのだ。

……この瞬間のために、俺は今まで生きてきたのかもしれない。生馬の脳裏に、そんな言葉が浮かんだ。映画のセリフだったか、小説の一節だったか。

最初に耳にしたときには、いかにも陳腐なセリフだと思ったが、今は違う。間違はなく、境　生馬はこの瞬間のために生まれたのだ。そう彼は確信した。

ジンベル川水中の杭に引つ掛かった川船から、高原の戦士たちが次々に飛び降りる。

そこにも矢が降り注ぐ。河原の石に足を取られ、あるいは盾を掲げ損なつた戦士に、容赦なく矢が突き立つ。あがる悲鳴と、流れる血。傷を負つた戦士が、水辺に倒れ伏す。頭部に矢を受けて絶命した戦士が、船から弾き飛ばされるようにして水面に落ち、低い水柱をあげる。流された死体は水中の柵に引つかかつて止まるが、血液の細く紅い糸は柵にまとわりつくように流れながら、さらに下流を目指してゆく。

……そろそろか。

生馬は撤退命令を下すタイミングを計った。あまりに早く砦を放棄すれば、蛮族は罨を警戒するだろう。ごく自然に、支えきれないと判断しての早期撤退を装わねばならない。

盾を構えた数名の蛮族が、砦前面に取り付いた。張り出し歩廊から下に向け、長槍が繰り出される。穂先は、簡単に盾を貫き、蛮族に突き刺さった。矢避けの革盾では、槍は防げない。

蛮族の第二波が、雄叫びをあげながら突入してくる。その数、兩岸合わせてざつと四百か。第一波は勢いを失いつつあるが、それでも幾許かは砦に取り付きつつある。

潮時だ。

「伝令！ 撤退準備！」

生馬の声に、控えていた伝令少年兵四名が、弾かれたように見張り台を駆け下り、散ってゆく。伝令が命令を各隊に伝達してから、二ヒネ……約三分……以内に各隊が撤退を開始する段取りである。副砦には、旗を掲げて合図する手筈だ。

「ソリス。俺たちも行くぞ」

「はっ」

残っていた伝令兵が、短めの槍を手にすると生馬に従った。まだ十四歳だがジンベル人としては長身で、百七十センチを超える。他

の伝令兵と同じく集められて訓練された少年だが、飲み込みが早いに腕っ節が強く、将来性を見込んだ生馬は護衛兼用の伝令として彼を手元に置いて使っていた。

生馬は穏やかな表情を取り繕うと、見張り台を駆け下りた。撤退作戦の際に指揮官が必死の形相では、部下が浮き足立ってしまふ。危急の際に狼狽する上官は、場合によっては敵よりも厄介な存在になるのだ。

「負傷者は残らず連れてゆけ！」

何度も部下には徹底させたことを、さらに指示しつつ、砦の中を早足で歩く。

手筈どおり、まず市民兵が持ち場を離れ、砦の外へと出てゆく。重傷者は四人がかりで手足を掴まれ、軽傷者は自らの足で、または他人の肩を借りて、整然と退却する。

生馬は主砦の出口のひとつの脇に立った。作戦当初から、彼は自分が最後に砦を去ると決めていた。息のある部下は一人残らず撤退させることを徹底するためだったが、砦に対する感傷も少なからずあった。なにしろ、駿と二人三脚で作り上げた砦である。しかも、撤退を前提とした戦いであったが国王から正式に守備を任されたのだ。戦国マニアとしては、この砦は『自分の城』という意識があった。

かつんかつんと、矢が屋根に降り注ぐ音が聞こえる。蛮族の喚声は、驚くほど近い。

弓隊長の号令が掛かり、最後まで矢を射ていた防衛隊の弓兵が撤退を始める。負傷者が、半ば引きずられるようにして砦の外に出される。戻ってきた伝令兵が、生馬の横に集まった。ちらりと視線を走らせると、四人ともそうとう怯えたような表情だ。だが、ソリスだけは落ち着いている。顔に緊張の色は見えるが、怯んではない。

「左、残存者なし！」

「右も残存者ありません！」

「副砦、赤旗を視認！」

砦の左右の後衛を任されていた兵士と、見張りの兵士が相次いで生馬に報告する。

「よし、撤退！」

生馬は命じた。砦前面をよじ登ってきた蛮族は、早くも胸壁のあいだに顔を覗かせている。

すでにジンベル側の主力は砦を去り、ジンベル南平原へと続く細い道をひた走っていた。撤退援護の市民軍兵士大半が、そのあとに続く。

砦から出た生馬らは船着場に走り込むと、待っていた川船十艘に分乗した。市民軍の船頭が、すぐさま船を出す。

砦内に侵入した高原戦士は、速やかにこれを占拠した。一部の者が船着場に駆けつけた時には、生馬らに乗せた川船は疾うにニシキツホほど下流にあり、急速に離れつつあった。追撃しようにも川船は一艘たりとも残されておらず、何人かが悔し紛れに矢を射てみたが一本も当てることはできなかった。

21 峇、陥落（後書き）

第二十一話をお届けします。

## 22 城壁の攻防

「ちょっと待っててね」

橋を渡ったところで、夏希はそうアンヌツカに告げた。

「どうかなさったのですか？」

「武器を調達してくるわ」

「武器……？ お腰の物を、使われるのではないのですか？」

吊つてある長剣に視線を走らせながら、アンヌツカが不思議そうに訊く。

「これは飾りよ」

夏希はそう答えつつ、橋のたもとにある小さな船着場へと石段を降りていった。舫つてある小さな川船の中から、竹竿を一本拝借する。

「それで……戦おうというのですか？」

竹竿を肩に石段を上がってきた夏希を見て、アンヌツカが眼を丸くする。

「そう。川の戦いで使つて気に入っちゃって」

とりあえず身を守る武器はほしいが、人は殺したくない。竹竿は、そんな夏希にはぴったりの得物であった。比較的軽くて振り回しやすいし、長いから敵の懐に飛び込まずとも戦える。

「まあ、確かに川の戦いでの竹竿使いはお見事でしたが」

アンヌツカが、呆れながら言う。

「見事な戦いだった、ビレット」

占拠したばかりの砦の一室で、氏族長サイゼンが砦攻略を指揮した副将を労う。

「して、損害は？」

「各支族合計で死者四十六、負傷三十二、まだ戦える負傷戦士六十

です」

無然たる表情で、ビレットが答える。

「覚悟していたよりも少ないではないか。よくやってくれた」

「しかし、敵の遺棄死体は十体もありません。一方的にやられました」

「こちらの目的は砦の攻略だ。その目的は果たした。勝利を誇りたまえ。その顔では、氏族戦士の士気に関わるぞ。死んだ戦士も浮かばれぬ」

「敵が敗退したのであれば、わたしも胸を張れるのですが、明らかに敵は整然と撤退してゆきました。砦を死守するつもりは最初からなかったものと思われませう」

「予定通りの撤退か。それにしても、かなり慌てていたように見受けられるが？」

サイゼンが、傍らのテーブルを顎で指し示す。その上には皿が数枚置かれており、食べかけの米飯や漬物、干し肉などが載っていた。数膳の箸は投げ出されたかのように乱雑に置かれており、四つあるカップのひとつは倒れて少量の緑茶がテーブルを濡らしている。

「いずれにせよ、敵に大きな打撃は与えられませんでした」

ビレットが、わずかなため息混じりに首を振る。

「砦占領の目的は達してくれた。それで充分だ。では、わたしはジンベル市街の攻略に移る。諸君らはここで待機し、戦いが長引いた場合に備えてくれ」

「ほとんど無傷の氏族もおります。本隊に組み入れましようか？」

「うむ。そうしてくれ」

サイゼンがそう言い残し、部屋を出てゆく。

「どう思う？」

サイゼンが去ると、ビレットがベンデイスに問うた。

「色々と気に入りませんか。ジンベル人は城壁を頼りに戦っても無駄なことくらい理解しているでしょう。それよりも、この砦を死守してこちらに損害を強いる方が上策だったはず。なぜ、あっさりと

撤退したのか」

「……敵の指揮官が間抜けという可能性もあるぞ」

「あるいは、こちらよりも狡猾で、何らかの策があるのかもしれない」

ベンデイスはそう指摘した。

「いずれにせよ、次に鉈を握るのは氏族長だ。我々は命令通りに兵を休ませ、次の戦いに備えよう」

ビレットが、労うかのようにベンデイスの肩を叩いた。

砦から撤退してきた川船が、城壁をくぐってジンベル市街地へと入ってゆく。

殿の一艘が船着場に着き、そこから数名が降り立った。その中でひとときわ背の高い者が他の者になにか指示を与えてから、城壁の階段を足早に登ってくる。言うまでもなく、生馬である。

「ご苦労さん」

見張り台が上がってきた生馬を、拓海は労った。

「とりあえず作戦通りにいったよ。次はお前の出番だ」

疲れた表情で、生馬が告げる。

「おいおい。ひどい顔だぞ」

「精神が磨り減った。前へ出て剣を振るってる方が、まだ気が楽だ」  
「とりあえず予備隊を頼むぞ」

拓海はそう告げた。撤退した砦守備隊は、そのまま予備隊となり、当面キルゾーンを囲む市民軍を支援する手筈になっている。もちろん、指揮を執るのは生馬だ。最終的には、この予備隊がキルゾーン内部に投入され、蛮族戦士を掃討することによって、拓海の一連の作戦が完遂することになる。

「ああ。任せといてくれ。……こっちの準備はどうなんだ？」

「いまのところ不具合の報告はない。予定通りだ」

キルゾーンに到着した夏希は、そこで副官と別れた。アンヌツカには、市街地に侵入した蛮族を奥へと誘引する囿を率いる役目が課されているのだ。キルゾーンを有効な罠として機能させるには、ある程度まとまった数の蛮族を市街地へ速やかに引き込む必要がある。竹竿を手に、夏希はバリケードの巡回を行った。守備に就いているのは、いずれも市民軍の兵士だ。得物は、ほとんどが竹製の長槍とえられた仕事はバリケード越しに槍を突き出して、蛮族が乗り越えられないようにすること。単純だが、それなりに危険な任務である。夏希は一隊ごとに顔を見せ、労いと激励の言葉を掛けていった。戦い前の緊張からか落ち着きのない者や顔色の悪い者が散見されたが、夏希にはどうすることもできなかった。

投石要員は、数箇所にとめられて待機していた。ジンベルの一般的な家屋の屋根は藁葺きだが、すでにそこには細い丸太と竹、それに板を組み合わせた足場が築かれ、箱、網、籠、布袋などに入った石がたっぷりと蓄えられている。夏希は彼らの様子も見てまわった。実に、半数近くが女性だ。老人や、子供の姿も多い。手にした得物は、恐ろしく統一性がなかった。竹槍や鉞はまだいいほうだ。鎌、包丁、錆が浮いた金属パイプ、単なる木の棒、鍬にスコップ。丈夫な革紐の先に石を縛り付けたもの。ある中年女性が手にしていたのは、なんと大きな裁ち鋏であった。

高原の戦士五千二百が、ジンベル南平原の南端に布陣する。

彼らがまず行ったのは、斥候部隊の派出であった。待ち伏せを警戒し、平原の間までくまなく偵察を行う。平行して、橋の建設に着手する。川によって軍勢が二分された状況では、数的優勢を活かすことが困難であるという弱点を、解消しようとしたのである。

後方より運んできた杭を川中に打ち込み、その上に厚板を渡す。その先端部を足場にさらに杭を打ち、橋を伸ばしてゆく。わずか二

時間ほどで、ひと一人が渡れるだけの簡易な橋が、ジンベル川に架かった。ジンベル川の川幅はけして広くはなく、流れもそれほど速くはないが、水量が豊富なうえ深みがあるので、完全装備の高原戦士が渡渉するのはほぼ不可能である。この橋によって、イファラ族は控置した予備隊を分割することなく、東西どちらの岸にも素早く展開できるようになった。

氏族長サイゼンが、休息していた部隊に前進を命ずる。ジンベル川兩岸にほぼ同数の兵を配備したイファラ族の主力は、城壁から四百メートルほどの位置まで進んだ。士気は旺盛であった。すでに全員が、ジンベルの砦があつさりと落ちたことを知っている。ジンベル人恐れるに足らず、という認識が、高原戦士たちのあいだに広まりつつあった。

望遠鏡を駆使しながら、拓海は蛮族部隊の布陣状況を素早く紙に描き付けていった。

予想以上の大軍であった。さしもの拓海も、ざっと見ただけで軍勢の規模を把握するのは無理だが、ラツシ隊長の見解では軽く五千は越すという。整然と、かつ静かに隊列を組んでいるところから見ても、その士気や錬度が決して低いものではないことが知れる。

「あそこが本営かな？」

東岸後方に位置する、五十人くらいからなる方陣が怪しいと睨んだ拓海は、望遠鏡でそれをじつと観察した。本営であることを示す目立つ標識……旗や馬印の類……は見えなかったが、他に同様の小部隊による方陣は見当たらなかったし、位置的に言っても全体の指揮を取り易い場所である。

「では、確かめてやろう。伝令！ ラツシ隊長に合図。白と緑」  
控えていた伝令兵が、すぐさま白と緑色の小旗を取り上げ、振った。

一分もしないうちに、東の城門がわずかに開いた。鎧だけを身に

つけた非武装の兵士が一人、蛮族の隊列目指して小走りに駆け寄る。拓海は蛮族の状況をじっくりと観察した。

兵士は、蛮族隊列の二十メートルほど手前で立ち止まった。隊列から出てきた蛮族三人が、兵士に正対する。兵士が、懐から取り出した書状を蛮族の一人に手渡した。一礼し、きびすを返す。

三人の蛮族も、隊列に戻った。拓海はほくそ笑みながら状況を注視した。

ほどなく、隊列の中から一人の蛮族が走り出した。他の隊列を避けるように走りながら、後方の拓海が目をつけた方陣に走り込む。しばらく待ったが、出てはこなかった。

「本営、確定つと」

拓海は紙に描いた方陣に『本営』と記した。

「書状か」

氏族長サイゼンは、伝令が持参したジンベルからの書状を検めた。宛名は『イファラ族氏族長サイゼン殿、またはイファラ族戦士を束ねる方へ』と記されており、差出人は『ジンベル王国国王ヴァオテイ』となっている。

「国王からの書状とあれば、無碍には扱えませんか」

側近の一人が、言う。

「そうだな」

同意しつつ、サイゼンが書状を開いた。ざっと読んだ氏族長の表情が、強張る。

「いかがされましたか？」

「……侮辱された」

サイゼンが、書状を握りつぶした。

「仕掛けるぞ。各支族に伝令を走らせる」

強い日差しに焼かれた雑草を踏みしだきながら、高原戦士が一斉に前進を開始する。

取られた戦法は、皆攻略の場合とほぼ同一だった。矢避けの盾をかざした投げ槍兵が突進し、これを弓兵が援護する。ただし、規模ははるかに上だ。両岸合わせて二千名以上が城壁に向け突入し、千名を超える弓兵が矢継ぎ早に矢を射る。

ジンベル側の弓兵も射返すが、その数はわずかだ。高原戦士たちは、比較的容易に城壁にたどり着いた。

ジンベル側の反撃は、そこからが本番だった。

ありとあらゆるものが、城壁の上から下にいる高原戦士たちに投げつけられ、撒かれ、あるいは落とされた。石、焼いた砂、熱した油、鉄片に刃をつけただけの粗雑なナイフ、細かい砂、そして、糞尿までも。

石に頭部を打ち砕かれた者が血潮を撒き散らしながら倒れ、焼いた砂や熱い油を浴びせられた者が悲鳴を上げる。砂を避けようと眼を覆った戦士の腕に、ナイフが突き刺さる。糞尿を浴び、激昂した者の胸に、至近距離から放たれた矢が突き立つ。

妨害にめげず、高原戦士たちは城壁を登ろうと試みた。竹で作った粗製の梯子を掛けようとする者。フック付きロープを投げる者。手にした鉤爪で強引によじ登ろうとする者。あるいは数名で組んで、体重の軽い戦士を投げ上げようとする者たち。

高原戦士の投げ槍が、ジンベル兵を襲う。胸にまともに受け、城壁から市民兵がもんどりうって落ちる。身を低くした市民兵が、投石で対抗する。悲鳴と怒号が入り混じる中、双方の人々は必死の戦いを繰り広げた。

城門に向け、一塊となった高原戦士が突き進む。

中央にあるのは、二十名の戦士によって支えられた一本の丸太である。左右側面に穿った十個の穴に横木が差し込んであり、一本に付き二人の戦士が取り付いている。先端は鈍く尖らせてあった。粗

雑ながら効果的な破城槌である。

その周囲と前方に、盾をかざした戦士十数名が付き従っていた。彼らは飛び来る矢から破城槌の戦士を守る役目であると同時に、予備の人員でもある。

破城槌が、ジンベル南城壁東門に迫った。人と丸太が、一体となつて突進する。城壁の上から散発的に矢が放たれるが、さながら一本の巨大な槍の穂先となった破城槌を押し止めることはできない。

城門が、迫る。狙うは、両開きの戸の合わせ目。

破城槌の先端が、分厚い木製の戸にぶち当たった。伝わった運動エネルギーが、門に収まっていた横木をへし折る。

戸が弾かれたように開いた。勢いそのままに、破城槌とそれを守る戦士たちが、城門の内側へとなだれ込む。

「東の門を破りました！」

伝令が、叫ぶ。

「東の第二陣は前進、東の門を目指せ」

即座に、サイゼンが命じた。

「西の第二陣は東岸へ渡せ。他の箇所での攻勢は継続。敵を城壁防衛に拘束せよ。予備隊も東岸に集結。待機位置まで前進」

控えていた伝令にも、素早く命令を下す。

……最大の障害である城壁さえ突破できれば、勝利は確実だ。

城壁を攻めあぐんでいた高原戦士が、続々と破った城門から市街地へと侵入してゆく。

破城槌の部隊もそれを捨て、得物をかざして敵を探した。

彼らの当面の目標は、城門の確保だった。ジンベル側の予備隊によつて城門が奪回されることを防ぎ、一兵でも多くの高原戦士を市街地の中に入れ、城壁掃討を行わねばならない。

城門から市街地へとなだれ込んだ戦士のほとんどの脳裏には、最大の障害を突破した以上、戦いの帰趨はすでに決した、との思いが

あつた。

アンヌツカは見張り台を見上げていた。

緑の旗と、赤い旗が同時に振られる。

作戦隊長の合図だ。

長剣をすらりと抜く。心は落ち着いていた。

「行くぞ！」

路地に控えていた部下五十名……いずれも市民兵だが、かなり訓練を施してある……に命じ、剣を振りかざしながら走り始める。

城門奪回を試みる予備隊に見せかけて、蛮族をキルゾーンの奥へと誘き寄せるのが、アンヌツカの役目だ。

通りに出て、蛮族に姿を見せる。気付いて身構える蛮族に対し、弓兵が矢を放つ。十数本のうち半数以上が盾で防がれたが、何人かの蛮族が倒れる。

投げ槍兵主体の蛮族が、大盾をかざしながらアンヌツカから駆け寄ってくる。

「引くぞ」

アンヌツカは冷静な声音で命じた。投げ槍の射程に入る前に、退かねばならない。矢を番えたまま、弓兵が走り出す。長槍兵がこれを援護しつつ下がりはじめ。

東の城門に駆けつけた東の第二陣……約八百が、市街地になだれ込む。

すでに、七百名以上の第一陣戦士と、弓兵の一部も城壁の内側に入り込んでいた。城門の確保に成功したと判断した幾人かの上級指揮官が、配下の者に城壁の掃討を命ずる。

しかし、シンベル側の用意は周到だった。東の城門付近の城壁への登り階段は、ことごとく破壊されていたのだ。登り口を捜して西へと走った高原戦士たちは、シンベル川に突き当たって立ち往生し

た。東へと走った一隊は、バリケードと多くの弓兵に遮られる。

アンヌツカ率いる一隊におびき出された高原戦士たちは、通りを駆けた。しかし追いつけぬまま、囷のジンベル兵は前方のバリケードの間に逃げ込む。

罾を警戒した高原戦士たちは、矢が飛んでくることを予期して路地に入り込んだ。だが、ジンベル兵が守っているであろうバリケードは沈黙している。

東門近くの城壁とバリケードでは、激しい攻防が続いていた。

城壁から、雨霰と石が投げられる。角盾で石を防ぎながら、高原戦士たちが投げ槍で対抗しようとする。だが、巧みに胸壁の陰から投石するジンベル市民兵を仕留めるのは至難であった。

バリケードをよじ登ろうとした高原戦士は、隙間から突き出された長槍に突かれ、相次いで路上に転がった。周囲の建物の屋根からも、投石が繰り返される。

多くの高原戦士が、バリケードの背後にまわろうと街路を北へと走った。しかし、行けども行けどもすべての路地はバリケードで塞がれていた。しかも、建物の屋根に陣取ったジンベル人から、頻繁に投石を受ける。城壁から三キツホほど北上したところで、高原戦士たちは東西に伸びるバリケードにぶつかった。こちらにも多くのジンベル人が取り付いていて、盛んに投石される。

さすがにこの頃になると、多くの高原戦士が自分たちがある種の罾に嵌ったことに気付いていた。だが、後退命令を発する上級指揮官は誰もいなかった。いったん城門を確保した以上、イフアラ族は予備隊を無制限に市街に送り込むことができる。数的優位さえ確保してしまえば、急造のバリケードくらい突破できるはずだ。綻びの生じた罾ほど、脆いものはない。一箇所でも突破し、背後に回りこむことができれば、市民軍主体のジンベル人の抵抗など易々と打ち破ることができるはずである。

何人かの上級指揮官が、声を張り上げて戦士たちをまとめ始める。バリエードの弱点を見つけ出し、そこを一点突破しようという腹積りであった。

## 22 城壁の攻防（後書き）

第二十二話をお届けします。

## 23 弾ける罌

肚の底から湧き上がって来るような興奮を押さえ込もうと努めながら、拓海は見張り台の上から戦況を見守っていた。

こちらの思惑通り、蛮族戦士は続々と東の城門から市街地へとなだれ込みつつあった。予備隊らしい数百名からなる一隊も、東の門目指して接近しつつある。別の一隊は、蛮族の掛けた橋を使って西岸から東岸へと渡っている最中だ。

罌を本格的に発動させるタイミングが、重要であった。早すぎれば得られる戦果が少なく、戦術目標である『敵野戦軍に対し多大なる打撃を与える』を達成できないし、遅すぎれば罌自体を喰い破られ、分散配置している戦力を各個撃破されて決定的敗北を喫してしまう。

細い棒材を用いた手すりにふと眼をやった拓海は、そこに黒々とした自分の手形がついていることに気付いて当惑した。手のひらを指先で擦ると、濡れた感触が伝わる。運動嫌いの割には、拓海は汗をかかない方である。暑さにも強く、夏は好きな季節なので、ジンのベルの気候にもすぐ慣れた。

「冷静なつもりでいても、身体は正直だな」

冷笑気味につぶやいた拓海は、汗ばんだ手で手すりを握り締めながら、蛮族部隊の観測を続けた。

情勢は、拓海の決断が勝敗を分けると言っても過言ではない状態に移行しつつあった。

夏希が呆れるほど、市民軍の戦意は旺盛だった。

屋根の上の市民たちが、眼下に見える蛮族戦士目掛け、石を投げつけてゆく。その精度は酷いもので、命中するのはせいぜい十個にひとつくらいの確率だったが、なにしろ投げ手の数が多い。不用意

に近づいた蛮族戦士には一度に三十個ほどの石が集中し、瞬く間に打ち倒された。非力な老人や女性、それに子供の投げたものとはいえ、一キログラム近くの硬い物体を高所から何個も浴びせられれば、屈強な蛮族戦士といえども耐えられるものではない。

夏希は手にした竹竿を振り回し、声を張り上げて市民たちを鼓舞した。蛮族が倒れるたびに、喚声上がる。

だが、すぐに蛮族側も市民軍の実力を悟ったようで、投石が届く範囲には近づかないようになった。建物の陰や、かなり離れたところから矢を射って反撃してくる。

状況は膠着したかに見えた。

高原戦士が、続々と市街地になだれ込んだ。

ジンベル側が設定したキルゾーンの面積は、約一万四千平方メートル。ただし、そのほぼ三分の二は家屋で占められている。したがって、実質上その面積は五千平方メートル以下である。

その狭いスペースに、二千名を超える高原戦士が注ぎ込まれた。

混乱は、各所で生じた。退いて態勢を立て直そうとした隊が、後方から押し出してきた新手の部隊によって分断される。負傷者を門外へ運び出そうとした者が、入って来る戦士の流れに押し戻される。バリケードに阻まれ、いったん路地へ退いたある隊は、後ろからの人の圧力によって通りに押し出され、むざむざ投石の餌食となった。

指揮統制の難しさも、混乱に拍車を掛けた。低所得者層の多い地区なので、通りも路地も狭く、戦士がまとまって行動するのは困難である。しかも、ジンベル側はキルゾーン内にもいくつか簡易なバリケードを設置し、交通の妨げとしていた。高原戦士側は当然ジンベル市街地の地理など不案内だし、そもそも都市というものに慣れていない。あちこちで、本隊とはぐれた小部隊や戦士が、右往左往する姿が見られた。ただし、組織の柔軟さを欠いた正規の軍隊と違い、臨機応変に対処できるのが高原戦士たちの長所でもある。これ

らはぐれ戦士たちは、適宜手近な部隊に合流し、戦闘に復帰した。

その混乱のさなかに、リダはいた。

怒号と悲鳴、命令と叱咤、当惑の声と罵りが交錯する中、リダは必死になってツルジンケン氏族の者を探そうとした。だが、小柄な彼女では遠くを見通すことができない。

人ごみの中、様々なものが、リダの身体にぶつかってくる。肘や膝。投げ槍の石突き。先ほどは足を踏まれ、甲に激痛が走った。おもわず蹲りそうになったリダだったが、目尻に涙を浮かべながらぐつと堪えた。この状況でしゃがんだりすれば、たちまち踏みしだかれてしまうだろう。そうなれば、まず間違いなく命がない。

もはや敵と戦うどころではなかった。自分の身を守るだけで、精一杯だ。

……予想よりも蛮族軍の混乱が少ない。

市街地の戦況を見守りながら、拓海は内心で呻いた。

城門というボトルネックを抜けた蛮族軍が、家屋や障害物によって分断されつつ市街地に浸透し、バリケードを守る市民軍によって攻撃され、勢いを失う。そこへ後方から状況を知らずに送り込まれた増援部隊がなだれ込み、混乱が広がる。蛮族軍の指揮統制が乱れたところで、生馬率いる精鋭部隊が前進し、各個撃破を図る。キルゾーンが孫子の言う『死地』にならないように、蛮族戦士の逃げ場は残しておく……。これが、拓海の見論見であった。

蛮族軍は正規軍ではない。その指揮系統も近代軍のように整っているわけでもない。したがって、いったん混乱させれば速やかに回復することは難しいはずだ、と踏んでいたのだが、予想よりも彼らの適応力は高いようだ。

拓海は迷った。戦果が少なくなることを承知で、早めに罾を発動させるべきか。それとも、増援部隊の流入が更なる混乱をもたらす

ことを期待して、しばらく待つべきか。

……安全策を取るか。戦術原則に忠実にいくか。

敵が充分に対応手段を取れる段階でこちらの決定的打撃戦力を投入しても、効果は薄い。一発しかない銃弾を、ろくに狙いもせずに発射するのは愚かである。必ず命中するタイミングまで待つて放つのが、当然の策である。それが、急所を狙ったものであれば、さらに望ましい。

この場合の安全策……現段階での生馬率いる精鋭の投入は、いわば敵の手足を狙って撃つようなものだ。命中し、負傷させることはできるが、致命傷にはならない。もちろん、待ちすぎて銃を奪われたら元も子もないが。

額に矢が突き立つ。

石を握ったまま、ジンベル人おばさんが屋根の足場から転げ落ちた。

先ほど矢を肩に受けた少年は、足場を構成する丸太にもたれたまままじき喚いている。助けに行つてやりたいが、路地を一本隔てた屋根の上なので、夏希にはどうすることもできない。

先ほどから、夏希目掛けて何本もの矢が飛来していた。どうやら、蛮族戦士も夏希が指揮官級のひとりだと見抜いたようだ。幸いかなり離れた位置から射てくるので、身を低くしていればまず当たることはない。

と、夏希は自分が至近距離から蛮族弓兵に狙われていることに気付いた。いつの間にか二十メートルほどの距離まで接近した戦士が、民家の脇に陣取つて大盾の陰で膝をつき、鏃を夏希に向け弦を引き絞っている。

夏希はとつさに手近にあつた足場の丸太をつかむと、それに身体を引き寄せるようにしながら身体を倒し、さらに身を低くした。

一瞬遅れて、矢が放たれる。

飛翔した矢は、夏希の頭上わずか十数センチのところを通過した。夏希の急激な動きが、弓兵の狙いを狂わせたのだ。だが、彼女のその動きは、別なところで問題を生じさせていた。

「あ」

いきなり、夏希が握っていた丸太が傾いた。

それに伴い、夏希が乗っていた足場板もぐずぐずと崩れ始める。もとより釘など使っていない、急造の足場である。丸太や竹と板は縄で縛ってあるだけだ。体格のいい……つまりは普通のジンベル人より体重のある夏希が無理に力を掛けたので、接合部分が緩むか何かしたのだろう。

夏希はあわてて屋根にしがみ付こうとした。このままでは、崩れる足場ごと地面に落下してしまう。

これが、失敗だった。

夏希の左手が、屋根をつかむ……はずが、その指は藁の中に埋もれただけだった。勢いあまって、身体が屋根にめり込む。さらに慌て、なんとか屋根にしがみ付こうと夏希が暴れた結果、その身体は切妻屋根の天辺を突き抜けて反対側に飛び出してしまった。

気付いた時には、夏希の身体は通りに面した屋根の上を滑り降りていた。焦って落下を止めようとするが、手がつかむのは藁だけだ。必死になって握っても、すっばりと抜けてしまう。

大量の藁と埃を道連れにしながら、夏希の身体は通りに落下した。言うまでもなく、バリケードの外側、つまりはキルゾーンの内部である。幸いなことにジンベルの建物は短躯な住民に合わせて低く造られているし、勢いよく落ちたわけではないので、怪我をすることはなかった。

地面に叩きつけられた夏希は急いで身を起こした。落下した時に手放してしまった竹竿が眼の前にあつたので、本能的に手を伸ばす。

「夏希様が！」

「夏希様が落ちたぞ！」

頭上で、いくつもの叫び声があがる。

立てた竹竿を手がかりに立ち上がった夏希は、慌てて遮蔽物を探した。もたもたしていれば、矢に貫かれてしまう。

「夏希様をお助けしろ！」

声と共に、屋根の上からばらばらと人影が降ってきた。止める間もなく、夏希の周囲に人垣が出来あがる。

蛮族も動いていた。接近戦ならば有利と見たのだろう、投げ槍や鉞を手に、走り寄ってくる。

夏希は状況を見極めようと心持ち背伸びした。ジンベル人は短躯のうえ、ここに集められた人々は女性や老人、それに子供が多いので、夏希の視線の妨げにはならない。

周辺の屋根からは、続々と市民軍の人々が飛び降りつつあった。路地に築かれたバリケードからも、打って出る市民兵がいる。……

夏希を守ろうと飛び降りた人々を見て、そのような命令が出たものと勘違いしているのだろう。訓練不足の、素人らしい反応である。

……いまさら止めようがない。

夏希は肚を括った。ここで持ち場に帰るように命令を出しても、すぐに応じてくれるのはそばにいる数十人程度だろう。それに、速やかに屋根の上に戻るのも困難だ。もたついていれば、蛮族戦士に容易に屠られてしまう。

「固まつて！ 正面の蛮族を蹴散らすわよ！」

夏希は竹竿を構え直すと、大声で叫んだ。

理由は定かではないが、キルゾーン内の蛮族に混乱が生じたことを、拓海は見取った。東側のバリケードの真ん中あたりが、その混乱の中心地のようだ。

急いで望遠鏡を向ける。レンズの中に、キルゾーン内に入った大勢の市民軍の姿が入った。何かの手違いで入ってしまったのか、それともいったんバリケードを突破されたのち、反撃してここまで押し戻したのか。

市民軍は健闘しているようだった。身を寄せ合って固まり、様々な得物を振り回し、蛮族を寄せ付けていない。なかでも竹竿を振り回している背の高い女性が、ひときわ目立っている。

……って、どう見てもあの高身長は夏希じゃないか。無茶しやがって。

理由はどうあれ、蛮族軍が混乱しているのは確かである。そろそろ、潮時だろう。

「伝令！ ラツシ隊長と教練隊長に合図！ 赤と白！」  
命令を受けた少年が、素早く紅白の旗を手にする。

「行くぞ！」

生馬は抜刀すると、それを打ち振った。

市民軍の投石による援護を受けながら、兵士たちが北側のバリケードを乗り越える。ジンベル防衛隊の兵士を主体とする、五百名の精鋭である。

隊列を整えた兵士たちが、数隊に分かれると、南へ向け通りの掃討を開始した。先頭に大盾を構え、腰を低くした市民軍兵士、その盾の隙間からは、二列目に並ぶ槍兵が腰の高さで構えた長槍が突き出ている。さらに三列目の槍兵が持つ槍の穂先が、盾の上から前方を狙う。そのあとに続くのは、長剣兵と短剣兵、それに槍で武装した市民軍兵士だ。

近づくジンベル側部隊に対し、蛮族戦士が弓矢で迎撃する。しかし、矢は大盾で大半が防がれた。曲射で放たれた矢も、鎧で身を固めた兵士にはほとんど効果がない。投げ槍はとづくに使い果たしているうえに、矢の方も手持ちはすでに尽きかけていた。焦れた蛮族戦士たちが、鉞を抜く。

そこかしこで、接近戦が繰り広げられた。蛮族戦士は果敢にジンベル側精鋭に挑みかかったが、突き出される長槍の穂先に妨げられて近接することができない。むりやり突っ込んだ者は、三列目の槍

兵が突き出す長槍に貫かれた。何人かの蛮族戦士は突き出される槍を躲し、ジンベル側の隊列を乱すところまで接近したが、後ろに控えていた剣兵によってあっさりと屠られた。

バリケードを守っていた市民軍も、それぞれの得物を手に前進を開始した。精銳のあとに続きながら、路地に残っている蛮族戦士を掃討してゆく。

ジンベル精兵たちは蛮族戦士を着実に倒しながら、じわじわと南下していった。

高原戦士たちの統制がさらに乱れた。

すでに、各支族の小部隊は正規の指揮系統から外れ、独自の判断で戦わざるを得ない状態である。

北からの新たなる圧迫に対し、小部隊指揮官の下した判断はまちまちであった。その場に止まって迎撃を命ずる者。いったん後退して戦力を糾合しようとする者。城門の確保のみを図ろうとする者。そして、組織的抵抗を諦め、城門の外へと逃れようとする者。

キルゾーンの中には、西側の第二陣八百名と、さらに増援として送り込まれた予備隊三百名を含む三千名近くの高原戦士が入り込んでいた。そのうち戦闘可能なのは、軽度な負傷者を含めて二千五百程度。数だけはジンベル側の投入兵力を上回っていたが、最初に市街地に突入した戦士たちはすでに矢も投げ槍も使い果たしたうえに、分断されて組織的戦闘力を失いつつあった。いわば、完全に勢いを失った状態である。

攻勢中の軍隊がその勢いを失った瞬間というものは、サッカーで例えればキーパー以外の全員が敵陣内に入り込んだ状態のようなものだ。その攻撃をシュートで終わらせることができれば……たとえゴールを決められなくとも……時間を稼いでディフェンスを下げ、相手チームのゴールキックに備えることができるが、シュートに至る前にボールを奪われた場合は、得てしてピンチに切り替わる。

ジンベル側は、生馬率いる精鋭部隊の投入で、戦いの主動を掴みつつあった。シュートを打たせることなく、ボールを支配したのだ。逆襲の時であった。

南へ向け前進するジンベル精鋭部隊の攻撃に耐えかねて、一部の高原戦士たちが退却を開始する。

その動きは、すぐに各所に飛び火した。実のところ、高原戦士は勇敢だが、防御戦闘を苦手としている。基本的に狩りと言うものは攻勢だからだ。罾を仕掛けたり、獲物を待ち伏せたりすることもあるが、それらはあくまで攻撃の一種としての『待ち』の姿勢であり、純然たる防御ではない。ましてや、狩りの場合その主動は常に狩人の側にあり、数的劣勢で戦った経験のあるものなど皆無に等しい。勢いを得て、局地的とはいえ数的に優位を保ったまま前進してくるジンベル精鋭部隊を前に、一部の高原戦士が戦意を喪失し、後退を始める。

なおも踏みとどまる高原戦士たちは、連携の取れないままジンベル兵の隊列に挑みかかり、あっさりと跳ね返された。広い場所ならば、まだ高原戦士たちに勝ち目もあつたろうが、さして広くない通りの戦いでは、盾と鎧でがっちり固め、隙のない隊列を組んでいるジンベル側が圧倒的に有利だ。戦術的状况における数的優勢はすなわち、攻撃手段とその回数之多さと言い換えることができる。狭く、一次元的とも言える戦場では、いくら大兵力を集中しようとも一度に交戦できる部隊はごく一部でしかない。三次元的運用が可能な長距離砲兵や航空戦力などが実用化された現代ではそのような制約は弱まりつつあるが、依然としてそのことは兵法の基本原則のひとつである。

多数の高原戦士が、敵わぬと見て東の城門目指し、後退を開始した。そしてそれは、次第に壊走に近いものへと変化してゆく。

リダは躓いた。

だが、身体は倒れなかった。すでに、人の流れの中に完全に入り込んでいたからだ。もはや自分の意思とは関係なく、身体が運ばれてゆく。

完全な負け戦だ、とリダは理解していた。すでに彼女の手に、弓は握られていなかった。人ごみで揉まれるうちに、失われてしまったのだ。矢筒を始めとする装備も、いくつかなくなっている。

と、彼女の身体に激痛が走った。何か硬いものが、脇腹に打ち込まれたのだ。

思わず身体が折れる。

続いて、背中と腰にも打撃が来た。

一瞬、意識が遠のきかける。たまらず崩れ折れそうになったリダだったが、歯を食いしばって耐えた。ここで気絶でもしたら、生きて帰れない。

「城門だ！」

何人かの戦士が、叫んだ。

リダはわずかに安堵した。ここを抜けさえすれば、助かるのだ。

だが、ジンベル側は高原戦士を易々と逃がすつもりはないようだ。城壁の上に陣取ったジンベル人が、後退する高原の民に向けて石や矢を盛んに放ってくる。ほとんど隙間なく高原戦士が密集している状態である。石も矢も、必ず命中した。そして倒された者の肉体が障害物となり、後退する高原戦士たちの流れを阻害した。

リダは自分の背が低いことを秘かに感謝した。周囲の戦士がいわば盾になっているので、矢も石も当たらない。

だが、リダの幸運もここまでだった。

すぐ前にいた青年の頭部に、矢が突き刺さる。斜め前に倒れかけたその身体は、他の戦士たちの動きに突き飛ばされるようにして、リダにのし掛かってきた。

リダは避けようとしたが、右も左も他の戦士たちの身体によって阻まれていた。後退するのも無理だった。すでに、後ろにいる人た

ちよつてぐいぐいと押されている。

遅しい青年の死体が、リダに覆いかぶさつた。なんとか腕で受け止めたが、凄まじく重い。饅えた汗の臭いが、彼女の鼻をつく。

と、誰かの足か何かがりダの右膝の裏に激しくぶつかった。鋭い痛みが走り、右足から力が抜ける。

青年の死体に半ば抱きついたような格好で、リダは倒れた。すぐに、何本もの足によつてリダは踏まれた。必死になつて立ち上がるうとするが、青年の死体が邪魔になつてなかなか身を起こせない。

様々な箇所を踏まれ、蹴られる。左脚、右肩、胸部、頭部、そして、腹部。

脳に直接鈍を叩き込まれたかのような鋭い痛みが、リダの細い身体を貫く。

リダの意識が遠のいた。

23 弾ける罫（後書き）

第二十三話をお届けします。

## 24 それぞれの決断

機敏という言葉がある。

軽快かつ迅速に行動する、などという意味で使われる場合もあるが、これは誤用である。本来の意味は、わずかな変化も見逃さずにそれに対応した方策や行動を素早く行うことだ。つまりは、『機を見るに敏』という意味合いの単語である。

生馬は機敏であった。もとより戦国マニアとして、戦における勢いの重要性は心得ている。そしてもちろん、勝敗がしばしば指揮官の下す自軍が積極的攻勢に出るタイミング如何で決まることも、承知の上だ。

後退を続ける蛮族戦士の姿を眼にした生馬は、戦場の空気が激変したことを感じ取った。

……ここは無理にでも押すところだ。敵は完全に浮き足立っている。

生馬は部下を押しつけるようにして前に出た。

「俺に続け！ 隊形は崩れても構わん！ 蛮族を追い散らすぞ！」  
愛剣を振り回し、叫ぶ。

生馬が現在直卒している兵は、四十名程度。キルゾーン内の最も広い通りを、南に向かって後退中の蛮族部隊を追っている。その後ろには、三十名ほどの市民軍が路地を掃討しつつ、付き従っている。

「走れ！」

命ずると同時に、駆け出す。

雄叫びと共に、ジンベル兵たちが生馬のあとに続いた。

「蛮族が逃げるぞ！」

「逃がすな！」

市民軍の面々が口々に叫び、得物を手に走り出す。

「ちょっと！ 待ちなさいってば！」

夏希は慌ててその後を追った。

すでに、状況は夏希の手を離れていた。もはや、作戦も何もあつたものではない。素人丸出しの市民軍兵士たちが、退いてゆく蛮族を見て勝つた気になり、その場の勢いだけで追撃に掛かっている。さながら田舎町の中学生の喧嘩レベルである。

……それが、結果的に功を奏することになるのだが。

夏希の足は長い。気が付くと、彼女は市民軍兵士たちの先頭に出ていた。危険を感じて足を緩めようとした夏希だったが、すでにその背後には大勢の市民軍兵士が密集状態で続いており、足を止めるどころか速度を緩めるのも不可能な状態であつた。言わば市民マラソンのスタート地点のような状況であり、夏希はやむなく先頭を走り続けた。幸いなことに、蛮族ははかばかしい抵抗を見せずに、どんどんと逃げ去ってゆく。たまに立ち止まって逆襲に転ずる者もいたが、調子付いている市民軍兵士の敵ではなかつた。石を投げつけられて怯んだところへ、数名がかりで突かれ、叩かれ、斬り付けられる。ほとんど、髑り殺し状態である。

「みんな夏希様に続け！ 蛮族など、俺たちの敵じゃないぞ！」

走りながら、夏希の背後で若い男性が声を張り上げた。すぐに、いくつもの賛同の声があがる。

熱気に背中を押されるようにしながら、夏希は走り続けた。

イフアラ族戦士たちの、集団としての士気は崩壊した。

こうなると、個々の戦士の闘志がいくら高くても無意味である。戦力の相乗効果が期待できないからだ。組織的戦闘とは、それが歩兵分隊同士の小競り合いだろうと機甲師団の激突だろうと、各戦闘単位が情報を共有し、相互支援を行いつつ、戦術目的を達成するために協力することが基本である。仮に十名からなる軽歩兵分隊の戦闘力を一と規定すると、そのうちの一名の戦闘力は十分の一ではな

い。それよりも、はるかに下である。

一人の高原戦士が、数名の市民軍兵士に囲まれて鬨り殺されるシーンが、随所で見られた。鉦を振り回して必死に抵抗する者には、容赦なく石が飛ぶ。

すでに弱気になっていいる高原戦士たちには、喚声を上げて突っ込んでくる武装市民……市民軍ですらない……でさえも、畏怖すべき敵に見えている。優秀な士官に率いられた、十分な訓練を受けた誇り高き軍隊ならば、ここで踏みとどまることも可能だったろう。だが、所詮高原戦士たちは……その勇気と技量は高いものの……アマチュアである。

多数の死体や重傷者を置き去りにしながら、高原戦士たちは東の城門目指し後退を続けた。

「……何が起きたのだ、いったい」

城門から続々と吐き出される高原戦士たちの姿を眼にして、サイゼン氏族長はうめいた。

遠目にも、それら戦士たちが酷い状態であることは見て取れた。得物を無くし、血にまみれ、足を引きずりながら、前かがみになってよたよたと走ってくる。

サイゼンは弓隊に援護を続けさせながら、城門から脱出してきた戦士たちの收容を急がせた。弓隊は予備の矢を与えられたから、まだしばらくは射続けることが可能だ。

城門以外の箇所でも、イファラ族戦士たちの攻勢は続いていたが、すでにその勢いは失われていた。市街地に攻め込んだ主力が叩き出されたことを目の当たりにしているのだ。戦意が萎えるのは当然である。逆に城壁を守るジンベル兵は勝利を悟り、果敢に反撃を繰り返している。

夏希の足が止まった。

倒れ伏す蛮族戦士が邪魔で、走り続けるのが困難になったのだ。それでもぐいぐいと後ろから押されるので、夏希は竹竿を振り回しながら、大声で停止を命じた。

夏希は状況を探ろうと、数名の市民軍兵士の手と肩を借りて、手近の建物の屋根に慎重に……屋根が脆いことはつい先ほど痛い思いまでして学んだばかりである……よじ登った。ざつと見渡すと、戦闘はかなり下火になっていた。東の城門付近ではまだ盛んに戦闘が行われているようだが、その他の場所は静かだ。

通りや路地には多数の死体や重傷者が転がっていた。そのほとんどが、蛮族戦士だ。

不思議なことに、凄惨さは感じなかった。走ったことで脳内麻薬でも出ているのか、夏希は妙に多幸感を覚えていた。

「よし、門を閉める！」

拓海は伝令に命じた。まだ二百名ほど蛮族戦士が市街地に残っているが、その程度ならば簡単に掃討できると踏んだのだ。

拓海の予想通り、すでに戦意を半ば喪失している蛮族戦士はもはや脅威ではなかった。一人ずつ、あるいは少人数で狩り立てられ、屠られてゆく。得物を捨てて抵抗をやめた者も多かった。

「さて、これで敵さんはどう出るか……」

拓海は望遠鏡の筒先を本営に向けた。

氏族長サイゼンはすべての部隊に交戦中止を下命した。

とにかく、負傷者の救護を行わねばならない。続いて各支族に再編成を行わせる。

手ひどい打撃を受けたものの、市街地侵攻でジンベル側もかなりの損害を出しているはずだ。陣容を立て直し、もう一押しすれば勝

てる。この時点では、サイゼンはそのような状況判断を下していた。

「どうやら、終わったようですね」

アンヌツカの声に、夏希は下を見下ろした。

抜き身の剣を下げたアンヌツカが、夏希を見上げていた。

「なんとかね」

夏希は慎重に屋根を降りた。最後は竹竿を地面に突き、棒高跳びの着地のような要領で飛び降りる。

市民軍兵士たちは、自主的に残敵掃討に掛かっていた。死体をひとつひとつ検め、息があれば止めを刺してゆくのだ。降伏した者は、後ろ手に縛り上げられている。

「拓海のところへ行きましょう。蛮族が再度攻撃を掛けてくるか知りたいわ」

「お供します。でも、その前に」

アンヌツカが言って、懐から手拭いを取り出した。腰に吊るした竹の水筒で湿らせてから、夏希に差し出す。

「お顔を拭かれたほうがよろしいかと」

夏希は自分の頬に指を触れた。汗でべとべとの上に、ざらつきを感じる。砂だろうか。

「ありがとうございます」

手拭いを受け取った夏希は、肌を傷つけないように優しく丁寧に顔を拭いた。

「どう?」

「おきれいになりました」

アンヌツカが応え、にこりと微笑む。

夏希はついでに手も拭くと、礼の言葉と共に手拭いをアンヌツカに返した。

「では、参りましょうか。まだ、危険ですから、十分に注意して下さい」

手拭いを懐に押し込んだアンヌツカが、剣を抜いたまま夏希の先に立った。死体や血溜まりを避けるようにしながら、ふたりで通りを歩み出す。

城門に近づくとつれ、死体の数も増えていった。血の臭いも濃密になってくる。眼を背けたくなるような無残な死体も多かったが、夏希の多幸福感は続いていた。普段なら足がすぐんで動けないような眺めが広がっているのに、意外に平気で歩いてしまう。

見張り台に近づくと、目敏く二人を見つけた拓海が、上がって来るようにとの身振りをした。城壁の上にはいた兵士が、竹製の梯子を掛けてくれる。それを伝って城壁に登った夏希とアンヌツカは、続けて見張り台への梯子も登った。

見張り台の上には、拓海と伝令兵の少年の他にラツシ隊長もいた。夏希は丁寧にあいさすと、さっそく拓海ににじり寄った。

「どう？」

「とりあえず下がったが、退却するまでは行ってないな。俺が蛮族を指揮していたら、少なくとも皆まで退いて様子を見るがな」

「じゃあ、またすぐに攻めてくるかな？」

「わからん。とりあえず、現状のまま待機だ」

拓海が言って、望遠鏡を眼に当てる。

側近がまとめた損害報告を聞いたサイゼン氏族長の顔色が変わった。

負傷者八百。死者行方不明合わせて千七百。合計二千五百。

実に半数近くが、失われた。

残る二千七百のうち、五百名ほどは軽い負傷者である。

この状態でも、ジンベル側に深刻な打撃を与えたのであれば、まだ許容できる損失と言えよう。だが、市街地から生還した者の話を総合すると、はかばかしい戦果は挙げられなかったという。何人が倒したと報告する者もあったが、その大半は身なりからして武装市

民のようだ。常備軍であるジンベル防衛隊は、ほぼ無傷らしい。

「……虫食いどもめ」

側近のひとりが吐き捨て、地団駄を踏む。

「ビレットの部隊を合わせれば、まだこちらの方が有利です」

別の側近が、言う。

「数はな。だが、戦争は数だけでやるものではない」

低い声で、サイゼンは告げた。市街地から生還した戦士はみな心も身体も傷ついている。戦力にはなるまい。他の部隊も、すっかり戦意を喪失している。なにしろ、『弱い』はずのジンベル人に、しかも素人集団であるはずの市民軍に対し、一方的敗北を喫したのだ。意気の萎えた戦士をいくらつぎ込んでも、勝利はおぼつかない。

サイゼンは決断した。

「退却する。ビレットの部隊はそのまま動かさず、占領した砦を守らせる。主力は高原まで退く」

「……虫食いに背中を見せるのですか？」

側近の一人が、唇を噛む。

「矢も不足気味だ。戦士たちに命を賭けさせる以上、万全の態勢で望むべきだ。残念だが、今回は目的を果たせなかった」

「あと数日で、他の平原諸国の部隊がジンベルに駆けつけますぞ」  
別の側近が、指摘する。

「やむを得ん。サーイエナ様にはわたしからお詫び申し上げます。決定は変えぬ。引き上げだ」

「おお。蛮族が引き上げてゆく。やりましたな、拓海殿！」

望遠鏡を覗いていたラツシ隊長が、歓喜の声をあげる。

夏希の眼にも、やや雑然とした隊列を組みながら密林の中へと消えてゆく蛮族軍の姿が見えていた。

「……勝ったのかな？」

「とりあえず作戦目的は達したな。ラツシ隊長、市民軍に片付けに

入るよう命令を出してください」

望遠鏡を下ろした拓海が告げた。

「心得た」

ラッシ隊長が、控えていた伝令に命令を伝える。

「片付けて……なにをするの？」

「戦場清掃さ。まず死体を埋葬せにゃならん。この気候で死体を放つて置いたら、伝染病の元だ。武器の類も回収。使えるものは再利用。蛮族はまた来るよ。早ければ数日後。遅くとも数週間以内にね。それに備えないと。もう二度と、この手には引っ掛からないだろうからな」

拓海が、死の畏となった市街地のキルゾーンを見下ろす。

「拓海殿。陛下に戦勝報告に参りましょう。見張りは部下に任せればいい」

ラッシ隊長が、満面の笑みで拓海の腕を取る。

「夏希殿もどうぞ御一緒に。市民軍の先頭に立つての突撃。見事でしたぞ」

「……恐縮です」

夏希は気恥ずかしさを覚えつつそう応えた。後ろから押されたのでやむなく走り続けただけなのだが、そんなことを話してラッシ隊長の機嫌を損ねるのも大人気ない。

夏希らはラッシ隊長に促されるようにして見張り台を降りた。ラッシの副官も加え、五人で王宮を目指す。

「自分でやっておいてなんだが……酷いもんだな」

夏希と並んで歩みながら、拓海が鼻に皺を寄せる。

「彼らが死んでくれたおかげで、ジンベルの人々が助かったのだと思っしかないわね」

「……ほう。そう悟ったのか？」

「自分をごまかしているだけよ」

夏希はつぶやくように言った。彼女もこの殺戮に加担しているのだ。そうとでも考えなければ、やりきれない。

「見ろよ。あんな子供まで……」  
拓海が指差す。

せいぜい十四、五歳に見える女の子が、仰向けに倒れていた。濃緑色の被り物が解け、金色の柔らかそうな髪がむき出しになっている。頬の傷から流れ出した血が、その可愛らしい顔の三分の一くらいを赤く染めていた。胸を覆った革鎧の下からも、かなりの血が流れ、地面にパン血ほどの血溜まりを作っている。

「もったいない。美少女なのに」

心底惜しそくに、拓海が言う。夏希は突っ込む気にもなれずに、少女の死体を見つめていた。背格好が、エイラとよく似ている。年齢も、おそらく同じくらいだろう。そんな子が、槍だか弓だかを手に、攻めてきたのだ。……ジンベルを占領するために。

と、死体が身じろぎした。ごほごほと、力なく咳き込む。

「生きてるわよ、あの子」

夏希は死体だとばかり思っていた金髪少女に歩み寄った。苦しげな咳を続けていた少女だったが、夏希が近づくと急に静かになった。……気絶でもしたのだろうか。

「かなりの重傷だな」

用心深く、近くに落ちていた鞘付きの鉈を足で蹴り飛ばしてから、拓海が少女の傍らに膝をつく。

「ちよつと診てみましょうか」

ラッシ隊長が腰の短剣を抜いて、片膝をついた。脇腹にある革紐を断ち切り、少女から革鎧を剥ぎ取る。

「出血はかなりひどいですが、深い傷ではありませんな。いずれにしろ、苦しんでいる様子。早く楽にしてやった方がいい」

少女の腹部に指を走らせていたラッシが言って、短剣を逆手に持ち替えた。祈りの言葉か、それとも許しを乞うたのか、何か短くつぶやいてから、少女の胸の上で短剣を振り上げる。

「ちよつと待つてください、隊長。治療すれば助かる傷ですよね？」  
拓海が、ラッシを押し止める。

「まあ、致命的な傷ではありませんが……この少女を助けるおつもりですか？」

ラッシが、訝しげな視線を拓海に投げる。

やり取りを見ていた夏希は、思わず口を挟んだ。

「拓海。わかっているの？ 凜たちが対処できる怪我人の数には限りがあるのよ。この子を助ければ、確実にジンベル人の負傷者の命がひとつ救えなくなるわ。それでもいいの？」

「……それはわかっているが……こんなにかわいいのに」  
拓海が珍しく気弱そうにつぶやく。

「かわいいからって……子猫拾うんじゃないんだから」

夏希は半ば呆れながら倒れている少女をあらためて眺めた。苦しげな表情だが、顔立ちに鋭さがなく、とても戦士には見えない。呼吸のたびに、薄い胸が上下する。

「ふむ。かなり身なりはいいですね。それなりの家系の者でしょう。ひよつとすると、氏族長クラスの係累かもしれません」

いったん短剣を収め、少女の手首や首にある装身具……鈍く銀色に光る金属に、色鮮やかな石が嵌め込まれている……を検めていたラッシが、拓海を見た。

「拓海殿。どうしてもこの娘の命を助けたいのですか？」

「……はい」

ほんの一瞬だけ逡巡した拓海が、大きくうなずいた。

ラッシ隊長の目が、和らいだ。

「いいでしょう。此度の勝ち戦、一番の功労者は拓海殿です。褒美と言ってはなんですが、この娘の命、助けてさし上げましょう」

「ありがとうございます、隊長」

拓海が、膝をついたまま深々と頭を下げる。

隊長副官が、市民軍兵士二人を連れてくる。そのあいだに、ラッシ隊長とアンヌツカが少女に応急手当を施した。手拭いを折り畳んで出血のひどい腹部にあてがい、少女の被り物の布を使って胴をきつめに巻き上げる。

「まったく。拓海もなに考えてんだか」

市民軍兵士の手によって運ばれてゆく少女を見送りながら、夏希はぼやいた。

夏希のぼやきは聞こえていたはずだが、拓海の反応はなかった。呆けたように、救護所へ運ばれてゆく少女を見送っている。

「さあ、参りましょう。陛下がお待ちですぞ」

ラッシ隊長が、拓海の肩に手を置く。

24 それぞれの決断（後書き）

第二十四話をお届けします。

## 25 戦いのあとで

「すべて計算し尽くしていたのだ、敵の指揮官は」  
砦の一室で、ビレットが唸る。

「巧妙だ。実に巧妙な罠だ」

なおも唸りつつ、ビレットが狭い室内をうろつくと歩き回る。その様子を、ベンデイスは呆けた表情で眺めていた。

リダが、死んだ。

誰かが死体を確認したわけではない。だが、彼女がジンベル市街地へ入り込んだツルジンケン氏族の戦士たちに混じっていたことは、確実である。そして、生還した戦士たちの中にいなかったことも。

市街地で戦死したか、負傷して動けなくなったことは間違いない。こちらから攻め込んだ以上、ジンベル人の慈悲に期待するのは無理というものだろう。苦しまずに死んでくれたことを祈るしかない。

ビレットとベンデイスの手元に残された兵力は千八百程度。ジンベル南城壁攻撃に参加し、生き延びた戦士たちは、軍用路をたどって高原地帯へと戻っていった。そこで再編成を行い、新たに戦士を加えて、再度侵攻を目指すのだ。その足掛かりとなる砦を守り抜くのが、ビレットとベンデイスに新たに与えられた任務であった。

おそらく、再編成には最低でも数日かかるだろう。その間にジンベル側も他の平原諸国から集めた兵によって増強されるから、こちらもさらに多くの戦士を集めねばならない。場合によっては、他の氏族から戦士を借りる必要もあるだろう。食料を始めとする物資の集積と運搬も行わねばならない。

「サーイエナ様の思惑通りには行きませんでしたね」

ぼそりと、ベンデイスは言った。

「一人でも死者を少なく、というのがサーイエナ様の願いだったからな」

足を止めたビレットが、苦々しげに言った。

「戦いになるのは仕方ありません。ですが、イファラ族からもジンベル人からも、なるべく死人を出さないように」

サーイエナの言葉は、ベンデイスの脳裏にも焼きついていて、彼女の象徴とも言つべき蒼い衣を纏い、その美しい顔かんはせに心中の苦悩を張り付かせたサーイエナ様の姿も。

未曾有の危機を察知し、高原の民に解決策を示唆してくださいました巫女様。心優しき、希望の星。

「失礼いたします」

唐突に、声が掛かった。

「夕食の用意が整いました」

戸口に現れた戦士が、きびきびと告げる。

「わかった」

ビレットが一言答え、戦士を下がらせる。

「行こう、ベンデイス。腹が減っては何もできんぞ」

自分の荷物の中から専用食器を取り出しながら、ビレットが肩越しに言う。

「……そうですな」

ベンデイスも自分の荷物を開いた。

高原戦士の部隊に、従卒などは存在しない。自分の身の回りの世話さえできない戦士に、他者を率いる力量などあるはずがない、と考えているからだ。

したがって、一軍を率いる将たるビレットに対しても、料理が並んだテーブルが用意されているなどということはなかった。もちろん、食事の内容も他の戦士たちと質も量も同一である。一般の戦士よりも優遇されていることはふたつ。給仕係の前で並ばなくていい点と、今回のように建物のある場所で食べる場合は、専用の部屋で少人数で食べることができるということである。

ビレットとベンデイスは、高原戦士ならば誰でも持っている入れ子式の専用食器に夕食を盛ってもらうと、部屋へと戻った。メニユ

ーは、湯取りしたばかりで湯気をあげている米飯、干し肉入りのスープ、親指くらいの干した小魚数匹と乾燥果実一切れ、それに竹のカップに入った水であった。それらをテーブルに並べ、向かい合って腰を下ろす。

「さあ、食べよう。食べて力をつけるんだ」

いかにも芝居がかった調子で言ったビレットが箸を手にした。音高く、スープをすすする。

「うん。旨いぞ」

ベンデイスも箸を手にした。食欲はないが、体力を落さぬためには無理にでも食べねばならない。米飯を箸でつまみ、むりやり口に押し入れる。

ビレットが一番小さな木椀の蓋を開け、中の黒っぽい粉末を少量米飯に掛けた。乾燥させて細かくした川海苔をベースに、数種の香辛料を混ぜたある種の『ふりかけ』である。

ベンデイスの箸が止まった。自分の食器の、一番小さな木椀に入っているものを思い出す。

高原地帯ではありふれた栽培種の柑橘類。その香りのいい皮に果汁を混ぜ、糖蜜を加えて煮た甘く、そしてわずかに苦味のあるペースト。ベンデイスの好物。そして、リダが手ずから煮て、詰めてくれたもの。

ベンデイスの手から、箸が落ちた。湧き上がった涙をビレットに見せまいと、下を向く。

ベンデイスは長男である。兄弟は、妹のリダだけだ。母親はリダがまだ幼いうちに死んでしまったし、父は再婚もしなかった。父親は末弟として分家した身分なので、大家族が珍しくない高原の民としては稀といえる三人だけの小さな家族だった。

そして今、リダを失った。父親はいまだ病で臥せったまま。すっかりやせ細ってしまい、回復の兆しはない。

言いようのない寂寥感に、ベンデイスは包まれていた。

ベンデイスの様子に気付いたビレットの箸が止まった。もちろん、

彼もベンデイスの妹が行方不明となったことは承知している。

「ベンデイス……」

ビレットが遠慮がちに声を掛ける。

「失礼します」

やおら、ベンデイスが立ち上がった。

「米飯で火傷したようです。冷やしてきます」

顔を伏せたまま言い置いて、戸口から出てゆく。

その姿を無言で見送ったビレットは、深くため息をついた。彼自身の属するバチーラ支族は、ジンベル市街地攻略戦には加わっていなかった。その死傷者はごく少数で済んでいる。だが、他の支族戦士の大多数は、今日の戦いで誰かしら親しい人物……親兄弟、従兄弟、友人などを失っているはずだ。彼らの心は、深く傷ついていることだろう。

「数日で再編成を済ませたとしても……速やかな再攻撃は無理だろうな」

干し魚に箸を伸ばしながら、ビレットはひとりつぶやいた。

王宮の大食堂で開かれたヴァオティ国王主催の戦勝祝賀会は、その規模も長さもささやかなものであった。顔を見せたのは国王陛下とイブリス王女、国政に携わる大臣クラスが数名。ジンベル防衛隊の幹部数名、それに四人の異世界人だけ。軽食と酒を含む飲み物が響されたが、国王がほとんど料理に箸を伸ばさなかったこともあり、夏希はもっぱら飲み物だけを口にしていた。各人が国王から直々に労いを受けたが、最上級の褒め言葉を掛けてもらったのは、やはりラッシ隊長、生馬、それに拓海の三人であった。

祝賀会がお開きになると、異世界人四人はいったん夏希と凜の仕事部屋へ向かった。

「二次会が必要だな」

柑橘系果実酒を飲んで、色白の顔をほんのりと赤く染めた生馬が

言う。

「いいね。凜ちゃんところでやるつか」

同じく頬を染めている拓海が、同調する。

「だめ。さすがに忙しくて、なんにも用意してないし」

凜が、首を振る。

「ふたりともいい加減にしなさいよ。未成年のくせに」

夏希は赤くなっている男二人をねめつけた。

「仕方ないだろ。陛下直々に注いでくれたワインだぞ。飲まないわけにはいかない」

生馬が反論する。

「ワインじゃなくて果実酒ね」

凜が、素っ気なく突っ込む。

「だからと言って、お代わりする必要はないでしょ」

夏希も突っ込んだ。ふたりとも上機嫌で、ラッシ隊長や大臣たちから注いでもらったお酒を何杯も干していたのだ。

「お代わりは勢いだ、勢い」

生馬に代わって、拓海が言い訳を始める。

「戦と宴会は勢いが大事なんだ。空気を読んだというところかな。

それに、今日くらいは羽目を外しても罰は当たらないだろう。これで俺たちのジンベルにおける地位も、より強固なものになったわけだし」

「それは……そうだけど」

夏希は不承不承うなずいた。今のところ、夏希ら異世界人はジンベルの人々に厚遇されているが、それはヴァオティ国王の庇護下にあるからである。授与された貴族位など、平原地帯以外では通用しないだろうし、それすらヴァオティ国王が失脚すれば何の意味も持たなくなる。約束された報酬を手にし、元の世界へ無事に帰りたければ、ジンベルにとって役に立つ者であることを常に実証し、ヴァオティ国王の権力維持に協力していかねばならない。

「だいたい、ここはジンベル王国だぞ。日本の法律法規は適用され

ないんだ。……ジンベルに、未成年者の飲酒を禁じた法律があれば別だが」

拓海がなおも理屈を述べ立てる。

「そんな法律ないだろうな、たぶん」

生馬がにやにやと笑う。凜が、大げさに肩をすくめた。

「まあ、子供はお酒を飲むべきじゃない、という慣習はあるでしょうね。でも、ジンベル防衛隊で公的な役職に就いているこのふたりを、子供の範疇に入れるのは無理があるわね」

「な、問題ないだろ」

拓海がなれなれしく夏希の肩に手をやる。

「ちよつと。酔っ払ってるんじゃないでしょうね」

その手を邪険に払いながら、夏希は拓海を睨んだ。

「酔ってなんかいないぞ。……よし、その証拠に次回の作戦計画を説明してやろう」

拓海がそう言って、隅の棚から例のホワイトボードとつけペンを取り出した。

「次の……次の蛮族の襲来？」

テーブルに座り、いそいそとホワイトボードに図を描き出した拓海を半ば呆れたように眺めながら、夏希は訊いた。

「そつだ。案外あっさり退却したからな。ごく近いうちに、捲土重来とばかりに再度攻めてくるはずだ。早ければ三日くらい、遅くても数十日以内には」

「ずいぶんアバウトね」

「情報不足ゆえ仕方がない。一戦交えただけでは、敵の意図や士気は予測できても、兵站状況までは把握できないからな。補給物資が潤沢であれば、再編成して休養すれば数日で大規模侵攻が可能になるが、短期遠征のつもりで作戦計画を立てていたとすればすでに米すら不足しているかも知れない。そうなると、兵站組織の再編から始めなきゃならないからどうしても時間がかかる」

すらすらと図を描きながら、拓海が説明する。

「遅れてくれればそれだけこっちは楽なんだが」

生馬が顎を撫でる。

「まあみんな、座ってくれ。基本的なところから始めよう。通常、攻撃に失敗した場合は再攻撃に同じ手法をとることは避けるべきだと言われている。相手側は前回と同じことをすればいいだけだし、心理的にも余裕を与えることになるしな。だが、戦術的、戦略的状況を鑑みるに、同じ手を使わざるを得ない場合が往々にして存在する。そのような場合は、新たな因子を注入してから再攻撃を行わねばならない。その際に最も多く使われるのが、兵力の増強だ」

先が黒く染まったつけペンを振り立てながら、拓海が力説した。

「ジンベル南平原における戦いも同様だ。蛮族側が取ることでできる作戦は極めて限られている。迂回も包囲も不可能。実質上、強行突破しかない。当然、より強大な兵力を集中してくるだろう。今日攻め込んできた蛮族は、推定で五千ほど。次回は少なくともその数割り増し、場合によっては倍以上の兵力を相手にしなきゃなるまい」

「……お前のその回りくどい説明、何とかならんか？」

やや苛立った口調で、生馬。

「ど素人がいるんだ。一から説明しないと、理解してもらえないだろう」

拓海が、夏希と凜に流し目を送る。

「ま、生馬が焦れてるんで本題に入るが……先日届いた駿の手紙を信ずるならば、次に蛮族が押し寄せる前に他の都市国家の正規軍若干が、ジンベル防衛のために駆けつけてくれるだろう。数日以内に千数百名。時間を掛ければ、三千名以上集まるかもしれん。ジンベル防衛隊と同程度の錬度を持った兵士たちだ。これを活用しなければならん」

言葉を切った拓海が、テーブルのホワイトボードを示した。すっかりおなじみとなった、ジンベル南平原の線画が描かれている。

「蛮族は、二度と市街地を使った罠に引っかけられないだろう。だが、平原諸国の支援を受けたとしても、まず間違いなくジンベル側は数

的には劣位に置かれる。正面からぶつかれば、こちらに勝ち目はない。勝利するには、敵の弱点を衝かねばならない」

「蛮族の弱点って……なに？」

凜が、訊く。

「これさ」

拓海が言つて、ポケットから折り畳まれた紙を取り出して広げた。大小さまざまな四角形が描かれていた。正方形と長方形が十数個。「今日の蛮族軍の布陣状況を観察し、記録したものだ。たぶん、次の戦いの時も蛮族は似たような布陣を行うだろう。で、注目してもらいたいのはここだ」

拓海の指が、少し離れたところにある小さな正方形を指し示す。脇に小さな字で、『本営』と書き添えてある。

「本営を衝こうというのか？」

生馬が、拓海を見る。

「指揮系統の麻痺化を図る。そして混乱させた上で、野戦において各個撃破を狙うしかないだろう」

拓海が見返す。

「本営……っていうと、蛮族の指導者がいるところ？」

紙を眺めながら、夏希は訊いた。

「そつだ。司令部、本陣、HQ、指揮所、作戦本部、帷幄……。なんといい換えても構わんが、指揮を執る人物とその補佐がいるところだな。いわば軍隊の脳だ。ここを失えば、敵は混乱する。そこを衝けば、勝機はある」

「簡単には攻撃できないでしょうに。普通そついうところは、奥のほうにあって厳重に守られているんじゃないの？」

凜が疑義を呈す。

「その通り。多少工夫が必要だ。そこで、これを利用する」

拓海がホワイトボードに指を突きつけた。

ジンベル南平原西部にある小さな森。

「ラッシ隊長の見解では、この森に五百名ほど隠れることは可能だ

そつだ。ここに精銳部隊を隠す」

「すぐ見つかつちやうんじやないの？」

夏希はそう言った。いくらなんでも、蛮族がそこまで間抜けだとは思えない。単純な待ち伏せくらいなら、あっさりと看破して、対応策を取ってくるに違いない。

「普通なら。今日も攻撃態勢に入る前に、少人数の偵察隊を多数繰り出していたからな。そこでだ、ジンベル南平原に蛮族軍を急速誘引し、なし崩し的に野戦に誘い込む」

「……わかりにくいんだけど」

「イメージで言えば、廊下で相手にいきなり殴りかかるようなもんだな。殴り返されたら、パンチの応酬をしながら部屋の中に退く。相手がこちらを追い詰めようと部屋に入ってきたところで、扉の陰に隠れていた仲間がパイプ椅子を脳天目掛けてどーん、という寸法だ」

「ふん。悪くない手だな」

生馬が、唸る。

「できの悪いコントみたい」

凜が、そう評す。

「敵が南平原に近づいてきたら、こちらは平原の中央部に押し出して、野戦で決着をつけようとする姿勢を見せる。敵は喜ぶだろうな。城壁を使った罠を仕掛けられる気遣いがないのだから。そして敵が斥候を繰り出す前に、こちらから仕掛ける。蛮族は急いで陣形を整え、迎え撃つだろう。そこで小競り合いのち、一斉に退く。当然敵は押してくるだろう。主力と本営の距離が離れたところで、森に隠れている精銳五百を投入、一気に本営を蹂躪する。これで、敵は確実に混乱するだろう。そのあとは……臨機応変だな。基本的には強く押して、弱点を露呈させ、そこにこちらの戦力を集中させることだ。十分に勝機はある」

「質問」

凜が、小さく拳手した。

「どつぞ、凜ちゃん」

「西の森に精銳五百を隠すのよね。もし蛮族が本営をジンベル側の東岸に置いたらどうするの?」

「いい質問だ。一応対策として、城壁西門の前に馬出しを造る予定だ」

「旨出汁?」

「城壁の切れ目や出入り口を防御する目的で、その前方に造られる構築物のことだ。馬出しがあると敵はこちらの城門が直接視認できないし、攻撃も直線に行えない。加えて馬出し自体に兵員を配置すれば、それ自体が簡易ながら陣地となる」

「馬出しを見て蛮族が警戒し、主力を西岸に展開する。当然本営も西岸に置く。……だが、警戒しすぎて本営を東岸に置く可能性もあるな」

ホワイトボードを眺めながら、生馬が意見を述べる。

「そうだったら、精銳五百は直接敵の背後を衝くように使うしかない。本営を潰すよりインパクトがないが……仕方ないだろう」

拓海が顔をしかめて言う。

「馬があればなあ。あの森なら、二百騎は隠せる。歩兵五百より、騎馬二百の方が衝撃力は上だ。速度も速いし……」

生馬が嘆息気味に言う。

「馬、乗れるの?」

「……乗馬経験はないことはないが……乗れるとは言えぬレベルだな」

夏希の突っ込みに、生馬が情けない顔をする。

「ま、俺の立てた作戦計画はざっとこんなところだ。蛮族が再侵攻するまでにどれだけ平原諸国の増援が来てくれるかで細部は変わるし、詰めなきやならん事柄も多いが、馬出しは陛下の裁可を受け次第造り始めるつもりだ。なんかアイデアがあつたら、遠慮なく言うてくれ」

拓海が言って、他の三人の顔を順繰りに眺める。夏希はわずかに

首を振った。凜と生馬も、黙ったままだ。

「じゃ、今日はお開きということだ」

夏希は立ち上がった。すでに多幸感は消え、身体が妙に軽くなつたような気だるい虚脱感じみたものを覚えている。今日は早起きたし、さっさと帰って水浴びをして、寝たいところだ。

「おいおい。二次会は？」

「ふたりでやってよ。あたしも帰って寝るわ」

引き止めようとする拓海の手をすり抜けて、凜も立ち上がる。

「続きは生馬ん家でやるか。……おっと、忘れるところだった。凜ちゃん、救護所に運び込んだ金髪の女の子、どうなった？」

拓海が訊く。

「あの娘？ びっくりしたわよ。いきなりラッシ隊長権限で治療しろ、なんて伝言つきで運び込まれたから。そうとう重傷だったんで、腹部の傷はコーちゃんに縫合してもらったわ」

「縫合技術って、ジンベルにあるの？」

夏希は訊いた。

「ごく原始的なものはね。縫合糸は海岸諸国から輸入した絹糸を使ってるの。針はニアン製だけど。コーちゃんは自前で触手使ったけどね。最初は縫い針みたいにして縫おうとしてたけど、あたしの助言を入れて湾曲した形にして、すいすいと縫ってたわ。器用なもんよ。彼女がいてくれて助かったわ。二十人くらいは、コーちゃんのおかげで命を取りとめたんじゃないかしら。エイラが役に立たなかったのと、好対照だわ」

「エイラが？ 有能そうに思えたけど」

夏希は首を傾げた。頭もいいし手先も器用なはずだし、治療の手伝いくらいならてきぱきとこなせそうに見えたが。

「血がだめみたいだね。真っ青な顔しちゃって。仕方ないから、水運び役に任命したの」

凜が、苦笑交じりに言う。

「それで、女の子は助かるんだろうな？」

やや語気荒く、拓海が訊いた。

「腹膜が傷ついてないみたいだったから、感染症を起こさない限り大丈夫じゃないかな。打撲はたいしたことなかったし。頬の傷の縫合は後回しになっちゃったし、医学院の若い人にやってもらったから、たぶん傷跡がくつきり残るわね。気の毒だわ、かわいい子なのに」

修羅場状態の救護所の様子を思い出したのか、うんざりとした表情で凜が答える。ある意味、凜も他の三人と同様戦場で必死に戦ったのである。

「……なんだか俺だけ話が見えてないんだが」

生馬が口を挟んだ。夏希と凜が、話を繋げるかたちで『拓海が助けた金髪の女の子』について説明すると、生馬がにやにや笑いを始めた。

「そうか。命を助けて恩を着せた上で、あわよくば喰っちゃおう、って肚か」

にやにや笑いを続けながら、生馬が拓海の背中を大きな手ではんばんと叩く。

「そんなつもりはないよ。かわいそうに思って、助けたただけだ」  
弱々しく、拓海が反論する。

「おおかたちよつと小柄で、眼がぱっちりと大きくて、貧乳で、でも幼児体型じゃなくて、という感じの娘だろ？」

生馬が、夏希と凜に訊く。

「……そうね。そんな感じだったわ」

「よくわかるわね」

「やっぱりな。拓海の趣味と真ん中ストライクじゃないか。おまけに金髪。下心がないなんて、言わせないぞ」

生馬が豪快に笑い、拓海の背中を肘でどやしつけた。

## 25 戦いのあとで（後書き）

第二十五話をお届けします。本話で第一次ジンベル南平原の戦いを描いた第三部終了となります。

## 26 外交と情報と

いまだに正式に名称を与えられていない砦と、ジンベル南平原およびジンベル市街地の一部を戦場として行われた一連の戦い……後に第一次ジンベル南平原の戦いと呼称されることになる……におけるジンベル側の人的損害は、死者六十四名、負傷者百七十余名と判定された。遺棄された蛮族戦士の死体は千五百を超え、無傷か負傷して投降した者の数は百八十六名との報告がなされた。死体はまとめて埋葬されることになり、ジンベル南平原西岸の一角に大きな穴を掘る作業が始められた。主に作業に従事したのは投降した蛮族戦士であり、余った土砂は拓海が構想した馬出しを造る資材として活用されることとなった。

ラッシ隊長が数度に分けて送り出した偵察隊によって、敵主力は撤退したものの、蛮族側が依然砦に居座っていることは判明していた。その部隊規模は千数百名と見積もられ、単独でジンベルを侵す能力はなく、当面の危機は去った、との評価で拓海と生馬の見解は一致した。しかしながら、砦に残ったイファラ族部隊はそこを固守するに足る十分な兵力を有しており、ジンベル侵攻を行う際の戦略拠点といえる砦を放棄しなかったということは、蛮族側はイファラ族の……あるいはその他の蛮族氏族を加えた……再侵攻を近日中に行うつもりであることの証左と言えた。

駿が外務大臣と共に川船で帰着したのは、ジンベル南平原の戦いの三日後だった。

「うわ。焼けたわねえ」

下流側の船着場で凜と共に出迎えた夏希は、すっかり黒くなった駿の姿を見て驚いた。

「炎天下で旅してたからね」

駿が笑う。

「あ、眼鏡代えたんだ」

凜が、目敏く気付く。

「ああ。ハンジャーカイでレンズを作ってもらって、それをハナドーンに持って行って、フレームに入れてもらった」

「じゃあ、木製眼鏡なの？」

夏希は目を見張った。ハナドーンと言えば、製材や木製品で有名な都市国家である。

「そう。曲げ木を組み合わせて、漆に似た液を塗って仕上げである。フレームは太いけど、見た目より軽いよ」

「で、首尾は？」

凜が、期待を込めたまなざしを駿に浴びせる。

「とりあえず大臣閣下と一緒に陛下に御報告だ。そのあとで詳しく話してあげるよ」

「一応紹介しておこう。外務大臣補佐、駿だ。こっちが、ジンベル防衛隊作戦隊長、拓海」

改めて、生馬がジンベルにおいては初対面となる駿と拓海を引き合わせる。

「で、さっそくだがどういう状況なんだ？」

夏希と凜の仕事部屋……最近はすっかり異世界人の溜まり場……もとい、会議室兼控え室になってしまっている……のテーブルに五人全員が座ったところで、生馬が駿に尋ねる。

「うまく行った、と言い切っていると思う。十二ヶ国すべての平原諸国から、派兵と資金援助の約束は取り付けた。多少、高原戦士の脅威を誇張したけどね」

「高原戦士？」

聞きなれない単語に、夏希は首をひねった。

「それって、蛮族のことか？」

拓海が、やや怪訝そうな表情で駿に尋ねる。

「あー、外交用語では『蛮族』というのは政治的に不適切な用語なんだ。他の平原諸国の中には、高原の民と交易している商人もいるし、個人的に知己を得ている者もいる。下手に高原の民や戦士を蛮族呼ばわりすると、戦争目的がジンベルの自衛ではなく、異種族への憎悪に基づくものであると誤解されかねないしね」

「ふーん。まあ確かに、蛮族と呼びたくなるような人々じゃなかったわね」

拓海が命を救ってやった少女の姿を思い出しながら、夏希は言った。

「それはともかく、先に先日 of 戦いの模様を聞かせてほしいね」  
微笑を湛えながら、駿が話を請う。

生馬と拓海が、互いに話を補いながらジンベル南平原の戦いを活写し始める。凜が席を立ち、お茶を入れ始めた。夏希は生馬らの話をぼんやりと聞いていた。凜が各人の前に置いた湯飲みにお茶を注ぎ、自らも湯気の立つ湯飲みを手にして座る。

「……とまあ、おおよそんな感じで蛮族、いや高原戦士を撃退したわけだ」

ちよつと自慢げな口調で、拓海が話を締めくくる。

「さあ、今度はそつちの番だ。増援はどれだけ得られるんだ？」

生馬が、駿を急かす。

「提供兵力の具体的数字と、ジンベルへの到着予定は、これだ」  
駿が懐から、折り畳まれた紙を出して広げる。

B5くらいの大きさの紙に、ジンベルの……いや、正確に言えばこのあたりで使われている文字が、びつしりと書き込まれていた。表音文字で、を組み合わせたたり一部を欠けさせたり、そばに点を配したり直線を書き加えたりする意匠が多く見られるもので、駿の見立てによれば『ビルマの文字っぽい』ものだ。エイラの掛けてくれた魔術は会話のみしか翻訳してくれないから、もちろん夏希には読めない。

「……まさかとは思うが……お前、これ読めるのか？」

いささか間の抜けた当惑顔で、生馬が訊く。

「国名と数字、日付くらいは読めるようになった。と言うか、それくらいできないと外務大臣の補佐は務まらんよ」

なぜか迷惑顔で、駿が答える。

「ともかく各国とも正規軍総兵力の半分程度の提供は確約してもらえた。総計で約五千。いくつかの国では市民軍の編成と提供の言質も得た。数はまだわからんが、二千から三千くらいは期待していい。もちろん、すぐには戦力にならないだろうけどね」

「正規兵が五千か。そいつは凄いな」

生馬が笑みを浮かべる。

「とりあえず近場のイナートカイとフルームからの部隊は、明後日には到着するはずだ。合計で、四百名近く。そのあと、エボダ、ケートカイ、ニアンと続く。ニアンは一千を超える兵力の提供を申し出てくれたよ」

「一千か。太っ腹だな」

拓海が、満足げにうなづく。

「まあ、大きな国なものね。たしか、平原地帯で最大の国でしょ？」  
夏希はアンヌツカの『授業』を思い出しながら言った。駿が、うなづく。

「ああ。公称人口五万。街の規模も大きかったよ。ただし、いまひとつ活気がなかったけどね」

「活気がない？」

「不景気らしい。金属加工で栄えてきた都市国家だが、最近エボダやスロンが、かなりレベルの高い銅製品や鉄製品を自前で作るようになってきたんだ。工作精度の高い製品や、付加価値のついた製品はまだまだニアン製には及ばないが、鍋だのカップだのなら使い勝手は変わらないし、鉱石を産出するエボダやスロンの方がコスト的にも有利だ」

軽く肩をすくめつつ、駿。

「加工産業で喰ってる資源小国の悲哀だな」

拓海が薄く笑う。

「最近の日本みたい」

こう漏らすのは、凜。

「外務大臣も、陛下からお褒めの言葉をいただいたし、まずは外交的には成功を収めたといんじゃないかな」

いつものにやにや笑いをしながら、駿が言う。

「僕としても、各国の上層部とわずかではあるが個人的なコネを築けたことは大きいと思っている」

「個人的なコネ？」

夏希は首を傾げた。

「外交つてやつは、意外と古臭いのさ。給与所得者であり、公僕であるはずの現代の民主主義国家における外務官僚でさえ、他国の外交官との個人的なつながりや信頼を大事にしている。近世以前にいたっては、国益よりも外交担当者の友情が外交政策を左右した、なんて例も多い。この手のコネは、築いておいて損はないんだよ」

駿が説明する。凜がうなずいているところを見ると、歴史の上でも往々にしてそんなことがあったのだろう。

「とりあえず、みんなはこれら各国軍の受け入れ準備をジンベル当局と協力して早急に進めてほしい。一応、自前で野営の準備をしてくれるように頼んでおいたが、出来ればすべての兵を宿舎に収容してやりたい。幸い、ハナドーンを含む各国から、建築用資材の提供は受けられる。食料援助も、いくらか得られる手筈を整えた。なるべく、いい環境を整えておきたい」

「飯と宿が悪いと、戦意に影響するからな」

生馬が、野戦指揮官らしい物言いをする。

「……ってことは、俺の家新築計画はまた延期か？　いつまで生馬ん家に居候してなきゃいけないんだ」

拓海が不満げに下唇を突き出す。

「俺の家じゃない。駿の家だ。俺もまだ居候の身だ」

生馬が、訂正する。

「三人じゃいささか狭いわね。生馬か拓海、あたしん家に来る？」

唐突に、凜が言った。

「いいのか？」

拓海が身を乗り出す。

「ちよつと、凜」

夏希は凜をたしなめた。いくらなんでも、凜と同じ屋根の下に「の性欲過多男子のどちらかを住ませるなど、危険すぎる。」

「大丈夫よ。あたしなんて眼中にないでしょうし」

目を細め、にやにやしながら、凜が生馬と拓海を見比べる。

「そのことなら、僕が家に戻らなければ問題ないだろう」

駿が、口を挟んだ。

「外務官僚のひとりと仲良くなったんだ。ジンベルでは名家の出身でね。郊外だが、かなり大きい屋敷に住んでいる。頼めば、部屋くらい貸してもらえるだろう」

「よかった」

夏希は胸をなでおろした。厄介ごとと心配事だらけだということに、このうえ凜の貞操の危機にまで気使いする羽目にはなりたくない。

「そうだ。大事なことを聞いておかないと。指揮統制に関する問題は、どう処理するんだ？ 各国の部隊はジンベルの統制下に入ってくれるのか？」

急に思いついたらしく、生馬がやや大きな声で駿に訊く。

「それは大丈夫だ。名目上、各国の援兵は、ヴァオティ国王に貸し与えられた、という形になる。そのことに関しては、各国の元首から国璽入りの正式な文書を出してもらった。ただし、ジンベル防衛隊の直接指揮下には入らない。僕の構想としては、ヴァオティ国王の下に統合司令部のようなものを作り、そこに各国派遣部隊の指揮官を集め、その中からジンベル代表を含む少人数……三人ないし四人の人物に指揮権を集中させ、協議しつつ運用する、という形にすべきだと思う」

「いや、合議制による指揮権の分散はまずいだろう」

拓海が顔をしかめる。

「もちろん、実戦ではジンベル代表が指揮を執るよ。しかし、その前段階で各国部隊の意向を無視するわけにはいかない。ジンベルが小国なのを、忘れちゃいけないよ。外務大臣がどれだけ低姿勢で各国元首と会談したか、見せてやりたかったよ。さながら、小遣いの増額を要求する稼ぎの悪い恐妻家、といった風情だったね」

その様子を思い出したのか、にやにやしなから、駿が言う。

最大の敗因は、情報不足にある。

イファラ族氏族長サイゼンは、ジンベル攻略戦失敗を自己分析し、そのような結論に達していた。

例えわずかでも、ジンベル市街地の情報を得られていれば、あのような罠には引っかけからなかったはずだ。狩りに例えれば、狩るはずの獲物の数も生息域も、それどころか獲物の正体さえわからぬまま、闇雲に藪の中に踏み込んだようなものである。狩りにしくじった上に、ひと咬みされて慌てて逃げ出さざるを得なかったのは、当然と言える。

ジンベルの情報を得なければならぬ。

とはいえ、手の者をジンベル王国に潜り込ませる、などと言うことはできない相談である。高原の民と平原の民は、その顔立ちや髪の色に差がありすぎる。ジンベルに入り込んだ高原戦士は、さながら米粒に混じった朶もみのように目立つに違いない。

ここは、他の氏族の手を借りるしかない。

イファラ族と平原の民はほとんど没交渉だが、他の氏族の中には、平地帯と交易を行っている支族が存在する。彼らに働きかければ、ジンベルに関する情報を伝えてもらえるだろう。かなり時間はかかるだろうが。

……ま、いずれにせよ再侵攻はかなり先の話になりそうだな。

サイゼンは籠っていた小屋から出ると、新たに建てられている倉

庫群を見渡した。前回の侵攻で、イファラ族が保有していた備蓄食料の半分以上が消費されていた。消費分の三分の二程度は、遠征に参加した戦士や支援要員が食べ尽くしたのだが、残る三分の一は集落に残った者たちの腹の中に消えた。多数の働き手を動員したので、狩りに出せる者がいなくなり、イファラ族が日々集める食糧は激減してしまつたのだ。それを補うため、各集落は蓄えに手を付け、結果として非常時用の備蓄食料の量は減少した。

次なる侵攻には、他の氏族からの増援も加わるので、その消費する食料も当然増大する。その量は、とてもイファラ族だけで賄えるものではない。サイゼンは八方手を尽くし、周辺氏族から備蓄食料供出の約束を取り付けていたが、その集積は捗っていなかつた。基本的に氏族ごとの自給自足経済である高原の民は、氏族の境界を越えて大量の物資を恒常的にやり取りする手段とノウハウに欠けている。あまり使用されぬ細道を、人の背だけに頼つて米を運ぶのでは、充分な量を短時日で集めることは不可能だ。追加の食料は侵攻作戦中に平行して集めるとしても、最低でも事前準備として数日間程度全部隊に行き渡るだけの食料を備蓄しなければならぬ。それには早くても十数日は掛かるだろう。余裕を数日見込むとなると、再侵攻はおそらく、二十日以上先の話になる。

サイゼンはそれまでの日々を有効に活用するつもりだった。失敗は、二度と許されないのだ。

リダが意識を取り戻してから、丸一日が経過していた。

彼女が寝かされているのは、大きな天幕の下であつた。張り合わせた目の詰まつた麻布に、防水油……たぶん、海岸諸国から輸入された亜麻仁油……を塗つて雨漏りしないように加工した黄褐色の布が、中央に立つ太くて高い支柱とその周りにある八本の支柱で支えられている。その下には、まだ木の香りがする真新しい寝台が十二、並べてある。そのうちのひとつに、リダは横たえられていた。マッ

トレスは藁の量が少なくて寝心地が悪かったが、薄い掛け布は清潔で、乾いたよい香りを放っていた。

意識が戻った直後から、リダは自分がジンベルに囚われたことに気付いていた。まわりの風景……広がる田んぼと、その向こうに見える山並み、そして山裾に見える密林の様子は、どう考えても高原地帯の景観ではない。寝台に横たわる怪我人はみな肌の色と顔立ちからして平原の民だし、立ち働いている看護役の人々も、また同様であった。

不思議なことに、ジンベル人はリダに対しきわめて親切だった。痛みを和らげる薬……薬草を煎じたもの……もくれたし、頼めば水も持つてきてくれる。敵意を見せることなど、微塵もなかった。

リダは掛け布の下で手を伸ばし、腹の傷を覆っている布に触れた。詳しく見たわけではないが、治療の仕方も適切で、丁寧に思われた。野外で狩りを生業とする以上、彼女も簡単な外科治療のやり方くらいは心得ている。

おそらくは、あの戦いで双方合わせて一千を超える負傷者が出たはずだ。重傷者だけでも、数百名にのぼるだろう。ジンベル側の勝ち戦だったとはいえ、彼らにも多くの怪我人が生じたに違いない。そして、ジンベル程度の規模の小さな国家が対処できる負傷者の数は限られているはず。簡単な手当で済む軽傷者ならともかく、重い傷を負った高原戦士を救う余裕があったとは思えない。

なぜ自分は助けられたのか。

その答えを得ようと、昨日リダは看護人に積極的に話しかけた。だが、リダに対しては何らかの緘口令が敷かれているらしく、得られたのはジンベル防衛隊のラッシ隊長命令で治療が為された、という事実だけであり、肝心の『なぜ助けられたか』は誰も教えてくれなかった。隣に寝ている負傷したジンベル人青年……ありがたいことに、彼も敵意は見せなかった……にも話しかけてみたが、彼も看護人同様、捕虜に無用な情報を与えないように言い含められているらしく、当たり前障りのない会話には応じてくれたものの、リダが知

りたい事柄に関しては言葉を濁した。

リダはため息をひとつつくと、目を閉じた。命を永らえたことは、むろん嬉しい。だが、ジンベル側の意図が見えぬのは、解せない上に恐ろしくもある。

……彼らはいったい何を企んでいるのだろうか？

## 26 外交と情報と（後書き）

第二十六話をお届けします。新たに評価を入れていただきました。評価していただいた方、ありがとうございます。

## 27 侵攻理由

「魔力の源、ですって？」

アンヌツカの報告を聞き、夏希は思わず腰を浮かせた。

「はい。すべてではありませんが、多くの捕虜が、そう供述しました。ジンベル攻略の目的は、魔力の源の奪取にある、と」

冷静な表情で、アンヌツカが応じる。

蛮族……外務大臣の進言を入れて、高原の民という用語を公的に使うように国王が触れを出したが、いまだに夏希はこう呼んでしま……の再侵攻に備え、ジンベルは着々と準備を開始しており、異世界人たちはそれぞれ忙しく飛び回っていた。生馬と拓海は軍事面全般、駿は平原諸国派遣部隊……今では『救援軍』という呼び名が定着しつつある……対応関係、凜は防諜と衛生医療全般。夏希も、市民軍兵士に人気がある、という理由もあって、引き続き訓練担当を任されていたが、他の四人よりも多少余裕があったので、蛮族の『捕虜』を対象にした情報収集の統括も頼まれていた。ジンベル防衛隊の兵士が行った尋問を取りまとめて分析し、次なる戦いに役立つ情報を得るのが、その主な仕事である。

夏希がもつとも知りたかったのは、なぜイファラ族がジンベル侵攻を企てたかであった。これさえわかれば、再侵攻を未然に防ぐことができるかもしれない。だから、尋問に際してはかならず『ジンベル侵攻の目的』も聞き出すように、と尋問係には通達してあった。その結果が、これであった。

……ジンベル侵攻の目的は、魔力の源の奪取にある。

「だいたい、魔力の源って、持ち運べるようなものなの？」

「それは、存じ上げません。エイラ様なら、ご存知ではないでしょうか」

「まあいいわ。それはあとで訊いてみるとしましょう。で、蛮族……じゃない、高原の民は魔力の源を奪取して、それをどうしよう」と

しているの？」

「それに関しては、誰も知らないようです。ただ数名の者は、目的は奪取そのものではなく、それをジンベルが使えないようにするためである、という意味合いの供述をしております」

「ジンベルが使えないように……」

夏希は浮かせていた腰を下ろした。ジンベルという国家を運営するために、魔術は必須といえる。魔力の源が奪取されれば、当然魔術は使えなくなる。ジンベルは、滅びることはないにしろ、国家としては衰退するだろう。イファラ族は、それを狙ったのか。

いや、国力を削ぐだけなら、そんな迂遠な手段を使う必要はない。単純に攻め掛かっただけで、ことは足りる。戦費が高めば経済力は落ちるし、戦死者が生じれば生産力も落ちる。負け戦なら国王の権威も落ちるし、政治的混乱も引き起こせるだろう。

「とりあえずエイラを探しましょう。仕事部屋にいるかな？」

夏希は立ち上がった。

「魔力の源の持ち運びですか」

夏希の説明を聞いたエイラが、可愛らしく小首を傾げる。

「今まで誰も試したことがないでしょうね。必要性がないのだから。コーちゃん、どう思う？」

珍しく浮かばずに、エイラの仕事机の上に着地しているコーカラットを、エイラが見やる。

「わたくしの知識によれば、動かすことはできないはずですよ」

コーカラットが、自信ありげに答える。

「ただし、魔力を使い切った魔力の源ならば、持ち運べると聞いたことがありますですよ」

「使い切ったら、持ち運びできても意味ないような……。ねえ、コーちゃん。魔力の源って、結局なんなの？」

「わたくしも、よくは知らないですよ」

コーカラットが、戸惑っているのか眼をぱちくりとさせながら答

えた。

「魔界とも縁が深いものだと言った事はあるのですが、魔物は利用しないので、詳しいことはわからないのです。魔物の賢者ならご存知かもしれませんが、わたくしは知らないのです。」

「ふーん。魔物にも賢者とかいるんだ」

「はい。知識の探求と思索が好きな魔物は、賢者と呼ばれて尊敬されているのです。」

「ひよつとすると、高原地帯の魔力の源が枯渇したのかもしれないね」

考え深げに発されたエイラの言葉に、夏希は驚いた。

「え。魔力の源って、ジンベル以外にもあるの？」

「確実に知られているのは、ワイコウにあるものですね。あと、タナシスにも複数あると噂されています。高原地帯にも、あるという話です」

エイラが説明する。ワイコウは、海岸諸国に属し、やや内陸部にある都市国家。タナシスは、海の向こうにある大国である。

「なるほど。でも、真の目的はジンベルが魔力の源を使えないようにするためであって、魔力の源を奪いにきた、というわけじゃないみたいなのよ。どういうことかしら？」

「わたくしにも、わけがわかりませんわ」

エイラも首をひねる。

「うーん。もう少し地位の高い高原戦士を捕虜にできていれば、何かわかったかも知れないけど」

夏希は小さくため息をついた。あっさりと降伏した戦士は、いずれも身なりからしてかなり下っ端の戦士ばかりだったようだ。それなりに高位の戦士や、指揮官級の者は、誇り高く最後まで抵抗し、殺されてしまったのだらう。

「エイラ様。そろそろお時間なので、わたくしは凜様のところへ参ります。」

ふわりと仕事机から浮き上がったコーカラットが、エイラにそう

告げた。

「そうだったわね。行ってらっしゃい」

エイラがうなずき、小さく手を振る。

「夏希様あゝ。失礼しますですう」

エイラに向かい触手を振り返しつつ、コーカラットが夏希に暇乞いをする。

「凜のところ？ 何しに行くの？」

「先日わたくしが治療した方々の術後経過を見てほしい、と昨日頼まれましたので、凜様のところへゆくのですう。そろそろ、お約束の刻限なのですう」

夏希の問いに、コーカラットがそう答える。

「そう言えば……」

夏希の背後で黙って立っていたアンヌツカが、口を開いた。

「まだ尋問していない捕虜が一名だけいましたね。コーカラット殿が治療した、員数外の捕虜ですが」

「……あの娘ね」

拓海が気に入って、助命することになった金髪の女の子だ。ラツシ隊長の見立てによれば、結構いい身分の女の子らしいし、ひよつとすると下っ端兵士よりは事情に通じているかもしれない。とりあえず、話くらい聞いておくべきだろう。

「待って、コーちゃん。わたしたちも行くわ」

天幕に入ってきた一行を、リダは興味深く観察した。

なんとも奇妙な四人……いや、三人と一匹だった。もっとも目立っているのは、空中にふわふわと浮かんでいる生き物だった。生首を思わせる異形で、ひと目で魔物と知れた。

先頭をゆく女性は、顔立ちや髪の色こそジンベル人らしかったが、肌の色がやけに白っぽかった。顔に針金細工のような妙なものを付け、自信ありげな表情で歩んでくる。続く女性は同じように白っぽ

い肌の色だったが、たいへんに背が高かった。最後に続く女性は、顔立ちといい肌の色といいジンベル人らしかったが、背は……二人目の女性ほどではないが……かなり高く、腰に軽めの長剣を吊っていた。眼つきも鋭く、いかにも戦士風だ。

怪我人の世話をしていたジンベル人は、この一行を恭しく迎えている。白っぽい肌のふたりは、明らかに高い身分のようだった。魔物を連れ歩いているところを見ると、ジンベルの巫女なのかもしれない。とすると、最後尾のジンベル人は彼女らの護衛か。

寝台に横たわっていたジンベル人たちも、明らかにこの一行の訪問を歓迎していた。みな一様に笑顔を浮かべ、何人かは先を争うかのように積極的に話しかけようとしている。リダは耳を澄ませ、彼らの会話を聞き取った。どうやら、先頭の女性はリン、背の高い女性はずツキ、という名前のようだ。

「あの方ですねえ」

魔物が、リダに向けふわふわと近づいてくる。リダは、掛け布の下でやや身を固くした。魔物自体は、サイエナ様に仕える使い魔であるユニヘックヒューマを見慣れているから、別段恐ろしくもないが、この一行はどうかやらリダに用事があつて来たらしい。尋問だろうか？ あるいは、どこか別の場所へ移されるのだろうか。

「どくもおく。わたくし、コーカラットと申しますう」

愛想よく、魔物が挨拶してくる。

「先日、あなたのお腹の傷を縫い合わせたのは、わたくしなのですう」。術後の経過を、診察させていただきたいのですう」

魔物の言葉を聞いたリダは、若干安堵して力を抜いた。

「では、失礼しますう」

魔物が身体の底面から生えている触手を伸ばして、掛け布をめくる。上半身には胸部を覆う下着しか着けていなかったから、それだけでリダの腹部は露わとなった。

触手がリダの背中にまわり、胴体を持ち上げる。別の触手が、麻の包帯を器用に解いた。当て布が外され、そこで始めてリダは自分

の傷を見た。丁寧に、縫い合わされている。狩猟民族らしく、高原の民の外科治療レベルはそれなりに高かったが、リダにとってこれほどきれいな縫合処置を見たのは、初めてのことであった。

「順調に塞がってきているようですねえ」。臭いからしても、えそ壊疽の兆候はありませんですう」

「鼻がないのに判るの？」

背の高い女性が、魔物に訊く。

「魔物ですからあ」

魔物が応え、当て布を戻した。するすると包帯を巻き、元に戻す。

「じゃ、次行きましようか」

背の低い女性が言った。

「はいい」

魔物が応じ、リダから離れる。どうやら、別の怪我人の様子を見るようだ。

「じゃ、こちらを始めましようか」

残った背の高い女性が、リダの枕元に寄った。手には、紙束と小さな壺がある。戦士女性は、その背後で鋭いまなざしをリダに投げかけていた。

……やはり、尋問か。

リダは諦念し、わずかのあいだ目を閉じた。

「あなた、お名前は？」

そう問われたリダは、素直に自分の名を告げた。他にもツルジンケン支族の者が捕らえられているとすれば、嘘を言えばすぐにはれる。囚われの身である以上、下手に逆らわない方が利口だ。

背の高い女性が、答えを紙に書きつけながら次々に質問を放ってくる。リダは、それらに正直に答えていった。わからない事柄や知らない情報に関しては、素直にわからない、知らないと答える。

「イファラ族がジンベルに攻めてきた目的は、魔力の源にあったのね？」

女性が訊く。質問の形式をとってはいるが、口調は断定的だ。

「そうらしいです」

リダはわざと曖昧に答えた。女性が、わずかに身を乗り出す。

「イファラ族は、ジンベルの魔力の源をどうしたいわけ？」

「これ以上魔力が減らぬように、魔力の源をイファラ族が管理する」

これが、答えである。だが、リダはそう答えるのをためらった。

口調からしてこの女性は、そのことをまったく知らないと判断したからだ。

……なぜ知らないのだろうか。

リダは背の高い女性の顔をまじまじと見上げた。ジンベルの国王は、サーイエナ様からの書状を確実に受け取っているはずだ。だから、一般のジンベル人ならともかく、身分が高い上に公的なものらしい尋問を行うような立場の女性が、イファラ族によるジンベル侵攻の理由を知らないとは考えにくい。

リダは急いで頭を働かせた。この女性は、嘘をついているのだろうか。それとも、リダが判断した通りに、イファラ族の本当の目的を知らないのだろうか。

嘘をつく必然性はないように思われた。尋問の手管かもしれないが、わざわざそのような事柄を伏せる理由が思い当たらない。やはり、知らないのだと見たほうが自然だろう。

となると、ジンベルのヴァオティ国王は、イファラ族侵攻に関わる情報を意図的に統制しているということになる。

……なんのために？

「ええと、よく知りません」

リダは時間稼ぎも兼ねてそう答えた。

「よく知らない、ということは、多少は知っているのですね」

護衛役の女性戦士が、質問を放つ。言葉は丁寧だが、語調は鋭い。「サーイエナ様の意向で、ジンベルの魔力の源をどうにかする、という噂は聞いたことがあります。でも、具体的にどうするか、とかは知りません」

リダは事実も交え、曖昧に語った。

「サーイエナ様って、誰？」

背の高い女性が、訊く。

「高原の巫女様です」

「他の捕虜の供述にも出てきました。蛮……いえ、高原の民の高位巫女です」

女性戦士が、小声で補足説明する。

「やっぱり、高原の魔力の源が枯渇したのかしら。ねえ、そんな話聞いたことない？」

首を傾げつつ、背の高い女性が訊いてくる。

「聞いたことありません」

そう答えつつ、リダは素早く頭を働かせた。どうやら、本当に知らないようだ。そしてそれは何を意味するのか？

不意に、リダは真相に思い当たった。ジンベルのヴァオテイ国王は、サーイエナ様の提案を握り潰したのだ。自身の権力維持のために。そして、イフアラ族との軍事衝突を選択した。ジンベルの市民に、ことの真相を知らせないまま。もし市民が、サーイエナ様の提案内容を知れば、国王の政策に反対するものが出るであろう。それを恐れたのだ。

この女性に対し、曖昧な返答をしたリダの判断は正しかった。もしも本当のことを包み隠さずに話していたら、そしてそのことがヴァオテイ国王やその側近に知れたら、口封じされる可能性が高い。リダは改めて自分の立場がたいへん微妙かつ脆い状態にあることを意識し、慄然とした。

「やっぱり知らないか。仕方ないわね」

背の高い女性が諦め顔で言って、女性戦士と顔を見合わせる。

「あの……ひとつ訊いてもよろしいですか？」

リダは思い切って自ら口を開いた。この背の高い女性は、立場はどうあれそれなりに事情通のようだ。尋問の様子が高圧的でなかったから、それほど敵意も持っていないはず。幾許かでも、情報を得

ておきたい。

「ん、なに？」

「あなたは、ジンベルの巫女様なのですか？」

「違うわよ」

背の高い女性が、笑顔で否定する。

「では、あちらの方が巫女様なのですか？」

リダは、目顔で背の低い方の女性……今は四つほど離れた寝台に横たわるジンベル人の様子を、魔物と一緒に診ている……を示しつつ訊いた。

「彼女も違うわ。ああ、コーちゃんを連れていたから勘違いしたのね」

背の高い女性が首を振る。リダは少し待ったが、それ以上の情報を女性が漏らしてくれないことを悟り、新たに質問を放った。

「もうひとつだけ訊いてよろしいでしょうか。なぜわたしは、命を救ってもらえたのですか？」

「それは……話していいかな。タクミ、って男があなたのことを気に入ったのよ。同性として、一言だけ忠告しておくけど、タクミには用心しなさいね。油断しちゃだめよ」

微笑みながらそう言った背の高い女性が、筆記用具をまとめ始める。……どうやら、尋問を無難に乗り切れたようだ。

「じゃ、お大事にね」

笑顔のままそう言った背の高い女性が、横たわっているリダの肩にそっと手を触れた。体臭なのか、それとも何かをつけているのか、ほのかに甘い匂いが、リダの鼻をくすぐる。

リダの耳は鋭い。

優秀な狩人というのはそういうものだ。鋭い五感と、忍耐力。体力や弓の腕など、さして重要な事柄ではない。獲物を探し出し、確実に仕留められる瞬間を得るまで粘ることのできる者こそが、大地が育んだ肉を持ち帰ることを許されるのである。

奇妙な四人組が去ったのち、リダは寝たふりをしながら怪我人たちの会話に耳を傾け、様々なことを学び取った。

もっとも驚かされたことは……驚きのあまり身動きして、危うく寝たふりがばれるところだった……背の高い女性と顔に針金をくっつけていた女性が、異世界人だということだった。レベルの高い巫女ならば、異世界から人を召喚することができる、ということは聞いたことがあったが、まさかジンベルの巫女にそのような能力があるとは思ってもよらなかった。高原最高の能力を持つサーイエナ様でも、異世界召喚はまだ無理だ。それを超える力を持つ巫女が、このジンベルにいたとは。

驚きはそれだけではなかった。あの二人の女性以外にも、三人の異世界人がいて、いずれも男性だという。そしてそのうちの二名は、ジンベルの正規軍であるジンベル防衛隊に所属しており、イファラ族との戦いを勝利に導いたのは、その二人の貢献が大きいのと思われることでも知った。それに加え、リダを尋問した背の高いナツキという名の女性も実戦で『大いに』活躍したという。……確かに体格ははずば抜けて良かったが、優しい顔立ちでとても人を殺せるような女性には見えなかったが。

……これらの情報は、ぜひとも兄上に伝えるべきだ。意地でも生き延びて、ここを抜け出し、味方のところまで戻らねばならない。

リダはそう決心した。

そのためには、一日も早く傷を癒し、動けるようになること。そして、ジンベル人に協力的なところを見せて、油断させること。もちろん、ありとあらゆる機会を捉えて情報の収集にも努める必要がある。

リダは眼を閉じた。怪我人たちの噂話はおおかた終わり、天幕の下には静寂が訪れていた。睡眠が傷を早く治すことを、高原の民は長年の経験で知っている。リダは心を落ち着けつつゆっくりと呼吸して、眠りが訪れるのを待った。

## 27 侵攻理由（後書き）

第二十七話をお届けします。……コーちゃんの出番が多い回は書いていても楽しいです（笑）

## 28 再戦に向けて

第一次ジンベル南平原の戦い……この時点では単に『前回の戦い』と呼称されていたが……の十二日後、平原各国が提供してくれた正規兵力がすべてジンベルに集結した。その数、実に約五千百名。

懸念された指揮系統は、当面各国派遣部隊指揮官を代表とした『ジンベル救援軍組織委員会』を作り、諸問題を協議しつつ解決するという無難な形に落ち着いた。実戦の指揮に関しては、ジンベル防衛隊指揮官であるラツシ隊長を長とし、拠出兵力が多いニアン、スロン、エボダの三国の派遣部隊指揮官がこれを補佐する統合司令部を作り、その中に各国の代表が士官を連絡将校として派遣する、という案が採用された。

市街地の北にある放牧地にまだ建設途上の派遣部隊宿舎に収容された『救援軍』……一部の部隊は天幕暮らしを余儀なくされたが……は、順次演練を開始し、来るべき戦いに備えた。

「無理。絶対無理」

凜が、さじを投げた。

「交易も再開しちゃったし、これだけ人の出入りが激しいといちいちチェックするのも無理。だいたい、総人口の四割以上もの外国人がジンベルに入ってきているのよ。防諜なんて、ざる同然だわ」

「まあ、仕方ないね。各国の支援なしには戦えないし、長期間交易を差し止めておけば、ジンベルの財政が干上がってしまう」

駿が、肩をすくめる。

王宮の夏希と凜の仕事部屋。その大テーブルに、五人の異世界人は座っていた。すでに日は暮れているので、部屋の中央天井近くには、光る球体がぼかりと浮かび、白っぽい光を投げかけている。

防衛隊関連の仕事を共同で行っている拓海と生馬を別にすれば、

夏希と凜、それに駿は日中顔を合わせることはほとんどない。そこで、最近では夕食前にはここに集まって、仕事の進捗状況を報告したりお互い知恵を借りたりするための『プチ会議』（命名者凜）を行うのが慣例化していた。

「よい点があるとすれば、今回の作戦計画は前回のように見た目ではばれる、ということがない点だな。俺たちが黙っている限り、詳細が漏れることはあるまい。で、訓練はどうなってる？」

拓海が、生馬に振った。

「本営襲撃の打撃戦力五百は、すでに選定した。ジンベルから二百、ニアンから百五十、エボダ、ススロン、ハナドーンから各五十。まとめて、俺が率いる。一応表向きは、戦線の直後に控置して、機を見て敵戦線突破に使う機動予備、ということにしてある。作戦計画は、直前まで明かさない予定だ」

「市民軍の方は？」

拓海が、夏希に視線を当てる。

「訓練はほとんど進んでいないわ。みんな忙しくて。今回は、あんまり当てにしてほしくないわね」

夏希は諦め顔でそう言った。いまだ非常事態が続いているとはいえ、市民たちにも自分の仕事というものがあり、それを長期間ないがしろにするわけにはいかない。『救援軍』に与える食料や、宿舎建設費用その他の諸経費をジンベルが賄うには、市民たちに働いてもらうしか方法がないのだ。

「……しかし、何でこうなっちゃったのかしら？」

苦笑いしつつ、夏希は首を傾げた。いつの間にかやら、夏希にはヴァオティ国王から『市民軍隊長』の肩書きが付与されていた。戦時にはジンベル防衛隊の指揮下に入るが、平時には国王の直接命令を受ける立場にあるという、臨時ながらかなり高位かつ重要な役職である。

「ま、人徳がなせる業、とでも思っとけ」

生馬が、笑う。

「それで、高原戦士たちの状況はどうなんだい？」

駿が、拓海を見つつ質問する。

「いまだ動きなし、だ。しかしながら、各国部隊から上がってくる本国からの情報を総合すると、再侵攻は近いらしい。十日から二十日後には、来るんじゃないかな」

「ほう、規模は？」

意外そうな表情の生馬が、訊く。

「わからん。だが、氏族長サイゼン……解任されてなければの話だが……が馬鹿でない限り、一万は確実に超える規模だろうな。俺がサイゼンの立場だったら、一万五千以下なら絶対に仕掛けないがな」

拓海が指を一本立てて、一万という数字を強調しながら答える。

「ジンベル防衛隊が、欠員補充のうえ三百七十。市民軍が、約三千。救援軍が、五千百。もう少しすれば、各国の市民軍も若干到着するから、それが五百として……総計九千近く。守勢なら、互角以上の戦いができそうだな」

生馬が、そのいかつい顔に不敵な笑みを浮かべる。

「ところで、救援軍の様子はどうか？ 本気でジンベルのために戦ってくれそう？」

夏希は男性三人の顔を順繰りに見ながら質問した。同じ平原の民であり、友好的な関係にあるとはいえ、ジンベルは安全保障に関して他国と特に条約などは結んでないと聞く。兵力を提供してくれた方がいいが、まともに戦う気がないのであれば、役には立ってくれないうだろう。

「一応、士気は旺盛だがな」

拓海と駿の様子をちらりと横目でうかがってから、生馬が歯切れ悪く切り出す。

「幹部連中には、出世の糸口だと張り切っている奴も多い。一般の兵士は、なるべく怪我はしたくない、無事に祖国に帰りたい、と思ってるだろうな。それでも、市民軍よりは頼りになる」

「国によっても、意気込みの違いが感じられるね」

駿が、言った。

「一番張り切ってるのは、ニアン。それに次ぐのが、ケートカイとイヤーラ。まあ、この二カ国はニアンの隣国だし、規模も小さいからニアンに引きずられているようなものだろうけどね。ススロンやエボダ、シーキンカイなんかはあまり乗り気ではないようだ」

「位置が悪いわよね、ジンベルって。高原の民が平原進出を企んだら、真っ先に狙われるところにあるんだもの」

「おっ。地理オンチにしちゃまともなことを言うじゃないか」

凜の発言を、拓海が茶化す。

「さしずめジンベル川はモーゼル川、というところだな」

駿がうなずきつつ言う。

「じゃ、ジンベルはメツツか」

すぐさま、拓海が合わせた。

「そんなことより、次の戦い、勝てるんでしょうね？」

茶化されたことにいらついたのか、凜が拓海を半ば睨みつけるようにして問う。

「前回よりは、多少楽だと思う。兵力差が縮まったからね。平原で戦う以上、かなりの損害を覚悟すべきだけど。言うまでもないが、敵は前回の戦いを反省して慎重に攻めてくるだろう。言い方を変えれば、そこがこちらの有利な点のひとつだ。疑心暗鬼に陥った相手は、とかくミスを犯しやすいものだからな」

「むしろ厄介なのは、戦後かもしれないね」

駿が、穏やかな口調で語り出す。

「他に方法がなかったとはいえ、ジンベルは他の平原諸国も戦いに巻き込んでしまった。イファラ族も、他の氏族に応援を要請しているのは間違いない。下手をすれば、平原の民対高原の民という図式になりかねない。そうなると、長期化は避けられないだろう」

「いつそのこと、魔力の源をくれてやるか」

「冗談だとわかる程度にふざけた口調で、拓海が言う。

「それができれば、楽なんでしょうけど……」

夏希は小さく嘆息した。捕虜の証言から得られた情報は、すべてまとめて報告書にして……ちなみに書いたのはアンヌツカである……  
：ヴァオティ国王に提出済みだ。そしてもちろん、国王陛下はイフアラ族に対する強硬姿勢を変えてはいない。魔力の源は、ジンベルの国力の源泉とも言えるのだ。これを譲り渡すのは、絶対にできない相談である。

「あれ、三分の一くらい切り取って、イフアラ族に分けてやるとかできたらいいのに」

凜が、言う。

「三分の一でイフアラ族が満足するという保障はないぞ」

拓海が指摘した。

「それはともかく、敵の目的がはっきりしたんだから、そろそろイフアラ族と交渉してもいいんじゃないの？ 砦に居座っているのなら、外交使節くらいすぐに送れるでしょうに」

夏希はそう言って、外務大臣補佐である駿を見た。

「外務大臣もそう考えて、陛下に具申したんだが、却下された。時期尚早、というお考えのようだ」

「時期尚早？」

「もう一度くらい高原戦士の侵攻を退けて、相手の立場を弱くしてから交渉すべし、というお考えのようだ。基本姿勢は、魔力の源には指一本触れさせない、というところだからな。現状で使者を送っても、交渉決裂は眼に見えているよ」

駿が首を振りつつ言った。

「異世界人、だと？」

「思いもよらなかった情報に、ベンデイスは思わず大きな声をあげた。」

「はい。複数の異世界人が、ジンベル人に協力しているようです。なかでも、イクマ、という男と、タクミ、という男の二人が、先日

の戦いで多いに役立った、との噂です」

連絡役の若い男が、生真面目な表情で告げる。

砦の狭い一室で、ベンデイスはビレットと共にサイゼン氏族長から派遣された連絡役の報告を受けていた。口頭での報告内容を書き取っていたベンデイスは、もう一度連絡役に異世界人二人の名前を言わせて、その発音通りに文字を綴った。

「イクマ、にタクミ、か。これは厄介だな」

隣の椅子に座るビレットが、ベンデイスが書いた名前を読み上げ、渋面を作る。

「とすると、あの罫はジンベル人に入れ知恵をした異世界人のしわざか」

「ありえますな」

ベンデイスはうなずいた。

「続けてくれ」

ビレットが、連絡役を促した。

「はい。異世界人に関しては、それ以上の情報が入っておりません。続きまして、ジンベル側の兵力状況についてですが……」

連絡役が並べ立てる情報を、ベンデイスは手元の紙に続けて書き取っていった。敵に関する事柄を述べ終わった連絡役が、今度は味方に関する報告を開始する。

「……再編成中の本隊に関する件は以上です。これで報告を終わらせていただきます」

連絡役が一礼した。

「ご苦労」

ビレットが立ち上がり、労いの意味を込めてサイゼン氏族長が派遣してきた連絡役の肩を叩いた。

ベンデイスは取っていたメモを眺めて、内心でため息をついた。

とりあえず、戦士の数だけは、ハルシェ族およびオリーレ族から借りた四千名を含め、一万一千名を超える人数をかき集めることができた。ビレットの手元にある千八百名を合わせれば、一万三千

近い大軍である。

しかしながら、それを喰わせていくだけの食料が、まだ集積できていない。

当然といえば当然である。前回の七千名を越える遠征すら、短期でなければ食料が不足するであろう、という想定の元に行われたのだ。倍近い人数を食べさせるには、さらに準備に時間がかかる。

そしてもちろん、時間というものはいはたい守勢を取る者の味方となる。

「えー、これは正式な報告ではありませんが、サイゼン氏族長よりベンデイス殿に伝言があります」

連絡役が切り出した。

ベンデイスは、はっとして顔をあげた。

……氏族長からの伝言？

「ベンデイスに？ 個人的なものか？」

訝しげに、ビレットが問う。

「個人的といえば個人的なものですが、ビレット殿がお聞きになっても問題ないと思われます」

「聞かせてもらおう」

ベンデイスは立ち上がると、連絡役のそばに寄った。

「若干名のわが戦士が、ジンベルに捕らえられているのは、ご承知の通りです。ジンベル内の情報源によりますと、その中に特別扱いされている若い女性戦士が含まれているとのこと」

若い女性戦士。ベンデイス宛の伝言。

ベンデイスの脳裏に、鮮やかに妹の姿が浮かぶ。

「所属支族はツルジンケン。髪は金色で、歳は十四、五歳くらい。小柄だそうです。おそらくは、ベンデイス殿の妹御、リダ殿ではないか、とのことですよ」

……リダが、生きている。

ツルジンケン支族全体を見れば、前回の遠征に金色の髪を持つ女性戦士は何人か参加していた。しかし、これほど若く小柄な女性は、

リダだけだ。支族名に間違いがなければ、まず確実に、ベンデイスの妹であろう。

「良かったな、ベンデイス」

ビレットが、喜色もあらわにベンデイスの肩をばんばんと叩く。

「……確かに嬉しいのですが、戦士としては不名誉なことですね」

内心の喜びを無理に押し隠し、ベンデイスはそう言った。仮にも支族長の娘とある者が、事情はどうあれ敵に降伏したのでは、体裁が悪すぎる。

「そのことですが、別の情報源によりますと、戦い当日に重傷を負った若いイファラ族女性戦士が、特別の計らいで治療され、命を取りとめたということがあったそうです。おそらくは、その女性がリダ殿だったのではないかとサイゼン氏族長はお考えです」

「ならば、恥じることはない。リダは精一杯戦い、負傷して戦えなくなっただけだ。恥どころか、立派な戦士ぶりだ。とにかく、生きていて良かったな、ベンデイス」

ビレットが、ベンデイスの肩を力強くつかむ。

「では、わたしはこれで失礼します」

連絡役が、一礼した。

「氏族長に、ベンデイスが深謝していたと、伝えてほしい」

「承知しました」

「さて、これで次の戦いの目的がひとつ増えたな。リダの救出だ。かわいい妹のためにも、絶対に勝たねばならぬぞ」

ビレットが、ベンデイスの眼を覗き込むようにして言う。

「そうですね」

ベンデイスは力強くうなずき、心中で誓った。

……リダ。必ず助け出すからな。待っていてくれ。

「あー、夏希と凜ちゃん。ちょっと、いいか？」

『プチ会議』がお開きとなり、仕事部屋を出ようとした二人を、

生馬が呼び止めた。

「なに？」

凜が、面倒くさそうな表情で振り返る。

「ちよっと、相談があるんだ」

小声で、生馬。

「わたしたちに？」

夏希は小首を傾げた。

「そつだ。男どもじゃ役に立たない話なんだ」

「いいでしょう。聞きましよう」

「えーと、ジンベルで簡単に手に入って、なおかつ女性がもらって嬉しい品物って、なんだ？」

真顔で、生馬。

「……女性がもらって嬉しいって……それプレゼント？」

凜が、問う。生馬が、こっくりとうなずいた。

「どう考えても、もらえるのはわたしでも凜でもないわね」

夏希は苦笑いを浮かべた。

「好きな女性でもできたの？」

「ずけずけと、凜が訊く。」

「……正直に言つと、惚れられたらしい。あー、俺は硬派で通つてたから、こういうことは苦手なんだ。頼む、知恵を貸してくれ」

いつもの生馬らしくない物言いに、夏希は凜と顔を見合わせて微笑んだ。

「いいわよ。でも、相手が誰だか知らないと、的確なアドバイスは無理ね。ダイエット中の相手に甘いものを贈ったりしたら、一発で嫌われちゃうわよ」

「相手は……あー、イブリスだ」

「イブリスって……まさか、イブリス王女？」

「そのまさかだ」

イブリス王女。言うまでもなく、ヴァオティ国王の娘である。唯一の子であり、つまりは唯一の後継者だ。現国王が死去すれば、自

動的に彼女があとを継ぎ、女王となる。

「凄じじゃない。結婚しちやいなさいよ。女王の夫って、なんて呼ばれるんだっけ？」

「王妃、あるいは王婿ね」

歴史通の凜が、教えてくれる。

「生馬が王家の血縁となれば、わたしたちの地位も安泰でしょう。なにしろ、子供が将来のジンベル国王なんだから」

「……気が早すぎるぞ、夏希。一応コクられたが、プロポーズされたわけじゃないんだ」

迷惑顔で、生馬。

「生馬はイブリスのことをどう思ってるの？」

「色々話してみたが、いい娘だよ。恋愛経験が乏しい俺が言うのもなんだが、かなり初心だな。正直、気に入った」

「国王はどうなの？ 愛娘をたぶらかした罪で生馬が処刑、連座してあたしたちまで投獄、なんて話にはならないでしょうね」

真剣な口調で、凜が訊く。

「その点は心配ない。一応、陛下承認の上での付き合いだ。より深い仲になるかどうかは……彼女次第だな」

「結婚しちやいなさいよ。応援するわよ」

夏希はけしかけた。イブリスはちよつときつい顔立ちだが、けっこう美人だし、ジンベル人としては背も高い。生馬とは似合いの力ツプルだろう。

「あのねえ、夏希」

凜が、呆れたようにたしなめる。

「生馬が本当にイブリスの婿になったら、いろいろと大変でしょうが。国王が、娘婿が異世界に帰ることを、承認すると思う？」

「そっか」

異世界人五人は、期間限定でジンベル王国に雇われた身なのだ。

生馬が王室の一員となってしまえば、当然異世界へ戻ることはできなくなるだろう。

「まあ、そんなのは先の話だ。今は、とりあえず気の利いたプレゼントをイブリスに贈って、機嫌をとっておきたい。なにかいい案はないか？」

「プレゼントねえ」

夏希は首をひねった。金や銀の産出が主産業のひとつである国家の王女なのだから、光り物など見飽きているだろう。商業が未発達なのでブランド物があるわけでもないし、他に女性が喜びそうなものといえば……。

「やっぱり、花とかが無難なのかな」

自信なさげに、生馬が言う。

「あ、花さえあげとけば女の子は喜ぶ、ってのは男の妄想だから  
凜が言い放つ。

「以前デート前に花束渡されてむかついたことあったし。映画の上映中ずつと握ってるっていうの？ 気の利かない男は、嫌われるわよ」

「何かないかしらねえ」

夏希は首をひねった。小国とはいえ王女様なのだから、何不自由ない生活を送っているはずだ。そんな女性が喜ぶプレゼントと言えば、何だろうか。

「……多少卑怯だけど、食べ物で釣ってみますか」

「食べ物？ 俺、料理は苦手だぞ」

凜のアイデアを聞き、生馬がきよとんとした顔をする。

「あたしが作るのよ。米粉クッキーか何かを。それを、『仲間の異世界人に頼み込んで作ってもらった特製』とか言って渡すの。たぶん、喜ぶと思うよ。以前に試作のお菓子を献上した時に喜んでもらえたから、甘いもの好きはずだし」

「……かえって生馬と凜の仲を邪推して嫉妬したり、深読みして料理下手をつつかれたように感じたりしないかしら」

「ないない。今時の娘ならともかく、箱入り王女様よ。自分で料理などするはずないし、あたしなんて眼中にないわよ」

凜がからからと笑いながら、夏希の心配を一蹴する。

「じゃ、暇ができれば次第焼いてあげる。ということで、その時はシフォネ貸してね、夏希」

「……なんで？」

「うちのミュージーナは、最近ほとんどあたしの助手と化してるの。あたしも忙しいし、生地こねたりするのはシフォネにやってもらうわ。いいでしょ？」

「ならいいけど」

「すまん、二人とも。迷惑を掛ける」

生馬がその長身を折って、女性二人に頭を下げた。

「いいのよ。他人の恋路を手助けするのは、結構好きだから」

凜がそう応じて、意味ありげにやりと笑う。

28 再戦に向けて（後書き）

第二十八話をお届けします。

その男は、タクミ、と名乗った。

リダは眼に警戒心をあらわにしながら、枕元に立った男性をじつくりと観察した。背は他のジンベル人と大して変わりないが、肌の色は白っぽく、顔には先日の異世界人女性がつけていたと同じような針金をくつつけている。体型はやや太っており、ぽこんと突き出した腹の上で組まれている手は明らかに戦士のそれではない。針金の奥の眼にも鋭さがなく、どちらかといえば柔和だ。

リダの命を助けた男。そして、耳にした噂を信ずるとすれば、イアラ族のジンベル侵攻を頓挫させた男。

「あー、こんにちは」

気恥ずかしげに、男……タクミが挨拶する。

瞬時迷ったリダだったが、すぐに笑顔を作ると挨拶を返した。命を救った以上、この男はリダに好意を抱いていると踏んだのだ。囚われの身なのだから、それなりの地位にいる人物に媚を売っておいでも、損はないだろう。

それに、うまく行けば貴重な情報を搾り取れるかもしれない。

リダの笑顔に気を良くしたのか、タクミが相手を崩す。

「あなたがわたしの命を救って下さった方ですね。ありがとうございます。適切かつ丁寧な治療も施していただき、重ねてお礼申し上げます。看護人の方も皆親切で、優しい方ばかり。本当に、ありがとうございます」

リダは畳み掛けるように礼の言葉を乱発した。

「いや、きっかけを作ったのは俺だけど、実際に命令を下したのはラッシ隊長だし、手術したのはコーカラットだし、凜ちゃんも……」  
タクミが照れたように言って、わたわたと手を振る。

「ひとつお聞きしてよろしいですか？」

「なんなりと」

「どうしてわたしを助けたのですか？」

「……罪滅ぼし、かな」

意外な言葉に、リダは眼を見開いた。

「詳しくは話せないけど、イフアラ族との戦いで多くの死者が出た原因の一部は、俺に責任があるんだ。だから、一人でも助けたいと思っていたら、ちょうど君が倒れていた」

とつとつとした口調で、タクミが語る。

「それだけですの？」

「それだけだ」

そう短く答えたタクミの眼を、リダはじつと覗き込んだ。気恥ずかしげに、タクミが視線を逸らす。

……嘘だ。

そうリダは見抜いた。罪滅ぼしという理由が主なものだというのは、本当だろう。だが、それ以外にも思惑はあつたはずだ。例えば、いかにも男性らしい、若い女性に対する感情とか。リダも、自分が未熟ながらもかなり美しい部類に入る女性だということくらい、自覚している。

もつとも、今は頬の傷のせいで台無しになっているかもしれないが。

右頬の切り傷はとくに抜糸され、完全にふさがっている。引き攣れたような感覚はすでになじみのものとなったし、痛みも感じない。鏡を覗く勇氣はないが、縫合跡は敵のように盛り上がっており、指でなぞると縫い目まではつきりと感じ取れる。

「この傷、どう思います？」

半ば衝動的に、リダはそう問いかけた。首をわずかに傾け、右頬を突き出す。

タクミが強張った笑みを見せる。

「ええと……古強者の戦士みたいだね。若い女の子には、ちょっと似合わないかな。でも、それでも可愛いよ、君は」

……嘘は言ってなさそうね。

リダは安堵した。狩猟民族である高原の民、その中でも、主に狩猟にたずさわる狩人たちにとって、怪我は日常茶飯事だ。若く経験の浅い者はともかく、それなりに経験を重ねた者は、必ずといっていいほど古傷持ちである。顔や頭部など、目立つところに傷跡を持つものも少なくないし、それがあつて特別扱いされたり禁忌されたりするようなことはありえない。リダも集落に戻れば、顔に傷があろうとなかろうと、気にすらされないだろう。

だが、リダの感情は別である。高原の民だろうと、狩人だろうと、若い女性の顔に大きな傷跡が残れば、心にも同じくらいの傷跡が残るものだ。事実上初対面の人物とはいえ、異性から傷があろうとも可愛い、と言われたことは、リダの心の傷を多少なりとも癒す効果はあつた。

「えーと、今日来たのは、君の今後の処遇に関してなんだ」

言いにくそうに、タクミが切り出した。

「あ……家族のもとへ帰してはくれないのですか？」

「あやうく『兄上のもと』と言いそうになったリダは、急いで言いにくそうに、タクミが切り出した。

「戦時捕虜、という単語はこの世界にないと思うけど、一応君は囚われの身だからね。気の毒だけど、単純に帰すわけにはいかない。イファラ族との戦争が終われば、別だけどね」

「戦争が終われば……。いつ終わるのでしょうか？」

「それはこつちが聞きたいよ。イファラ族がジンベル侵攻を諦めてくれれば、終わるんだから。だいたい、なんで魔力の源なんて欲しがるんだ？ 持ち運べもしないのに」

「……この人も、知らないのか。」

怪我人たちの会話を丹念に盗み聞きしたおかげで、このタクミという異世界人に関するリダの知識はなかなか豊富だった。ジンベル防衛隊に属する高位の人物だが、自ら先頭に立って剣を振るうようなタイプではなく、作戦を立案し、指揮官に助言を与えるようなわば軍師のような役割だという。見た目はぱつとしないが、そのま

なざしはなかなか知的で、優しげだ。

悪い人ではないのかも知れない。

「ジンベルが魔力の源を諦めれば、戦争は終わるのではないですか？」

「そりゃ無理だよ。魔力の源を使わなきゃ、ジンベルの主要産業である金鉱と銀鉱が維持できない。例えて言えば、イファラ族に狩りを禁ずるようなものだ」

タクミが苦笑いする。

「本当は、戦争なんてやりたくないんだがな。まあ、君たちが攻めてきたおかげで、俺はこの世界に召喚されたし、重要人物として扱ってもらっているんだが……やっぱり人が死ぬのは良くないことだ。ジンベル人であろうと、イファラ族だろうとね」

……戦争を望んでいないのか、この人は。

「では、もし戦争を終わらせる手立てがあるとしたら……」

「ぜひ教えて欲しいものだね。君が思いついたら、真っ先に知らせてほしいね」

「冗談めかした口調で言ったタクミが、急に真顔になった。

「そうだ。君の処遇について話をしていたんだっけ。……看護人の話によれば、君の腹部の傷の回復具合は順調ということだ。もうそろそろ、起き上がっても構わない段階まで来ている。そこで、君を別の場所へ移す必要があるんだが……」

言葉を切ったタクミが、指を三本立てた。

「選択肢は三つある。ひとつは、他のイファラ族捕虜と同じ待遇を受けること。これは、お勧めしない。調べたけど、女性の捕虜は他にいなかったんだ。同族とはいえ、百数十人の男性の中に歳若い女性が一人だけ混じるというのは、トラブルの種だからね。それに、捕虜の待遇は決して良いとは言えないし。ふたつ目は、王宮預かりとなること。つまりは、一般の囚人と同じ身分だ。もちろん、待遇はそれよりもはるかにいいけど。三つ目は、ジンベル防衛隊預かり。これは、俺が個人的にいわば身元引受人となる。軟禁状態に置

かれるが、待遇はなるべく良くしてあげるつもりだ。どれを選ぶかは君の自由だが、俺としては三番目を選んで欲しいね」

選択の余地があるとは思えなかった。イファラ族の社会的規範は高度なものだが、戦に敗れて囚われの身となり、不遇を託<sup>かこ</sup>つている戦士たちならば、そうとうすすさんでいるに違いない。リダがその中に放り込まれば、不埒者の手に掛かることは火を見るよりも明らかだ。ふたつ目の、囚人扱いもできれば避けたい。

リダはタクミを見つめた。

……こいつになら、勝てる。

そう、リダは判断した。仮に貞操の危機に見舞われても、この男相手なら素手でも返り討ちにできるだろう。少なくとも、健康体ならば。

それに、なるべく好待遇のほうが、情報の収集にも都合がいいに違いない。軟禁状態でも、捕虜や囚人扱いより自由は利くだろう。

リダは決断した。

「ジンベル防衛隊預かりにしてください」

「結構」

タクミが、相好を崩す。

「で、俺が身元引受人になるんだが……ひとつだけ、約束して欲しい」

……来た。

リダは身構えた。何を言われるのだろうか？

「ジンベルの不利益になることは、一切しないと誓って欲しい。もちろん、解放されるまでの話だけどね。これを、自分の鉈に掛けて誓ってくれ」

「鉈に掛けて……」

高原の民のあいだでは、よく使われる誓いの言葉である。鉈は言うまでもなく、高原の民にとっては身近で頼れる道具であり、一生涯を共に過ごす相棒といい存在だ。愛用する鉈に掛けての誓いは、それなりに重みを持っている。誓いを破ったとしても、社会

的にペナルティーを課されるようなことはないが、少なくとも評判を落すし、それが頻繁であれば誰からも信用されなくなってしまふ。「わかりました。わたしの鉈に掛けて、解放されるまではジンベルの不利益になることは一切いたしません」

リダは本気で誓った。情報収集そのものは、ジンベルの不利益になりようがない。その内容を活用するのは、解放されたあとの話だ。誓いは守られる。

「それで、損害は？」

「行方不明三名、負傷二名です。行方不明は二名がおそらく死亡、一名は不詳です。負傷者二名はいずれも軽傷、命に別状はありません」

部隊指揮官が、きびきびと報告する。

「ご苦労だった。下がってくれ」

ビレットが命ずる。一礼した部隊指揮官が、部屋を出て行った。

「何か企んでますな、敵は」

手書きのジンベル南平原の地図を眺めながら、ベンデイスは腕を組んだ。

ジンベル側は、南平原はもとより、その南方の密林にもかなりの兵を潜ませていた。先ほどの部隊指揮官も、偵察隊を率いて密林を北上中にそれらジンベル兵と遭遇し、交戦して撃退されたのだ。

「またよからぬ罖を、今度は平原で仕掛けるつもりなのかも知れぬな」

ビレットが、言う。

「困ったものです」

相手が平原の民であれば、その思考を読むことも可能だろう。住んでいる地域や生活様式、肌の色などが異なるとはいえ、同じ世界の人間同士なのだから。だが、異世界人の頭の中身や考え方など、想像すらできない。そのような頭脳が作り上げた作戦や罖を、どう

やって事前に察知し、対処すればいいのか？

きめ細かく偵察を繰り返し、情報を集めるしかない。そう、ビレットとベンデイスは判断していた。手強い猛獣を狩るときのごとく、丹念に足跡や糞を探し、踏み分け道をたどり、餌場を突き止め、寝床を見つけ、油断する時と場所を探り出すのだ。

しかしながら、その努力は報われていなかった。ジンベル人が市街地南方に築いた城壁……その西門の前に妙な土塁のようなものを新たに建設中であることはわかったが、詳細を調べようと偵察隊を派遣すると、平原に出る前に阻止されてしまう。

明らかに、ジンベル側は平原を詳しく調査されたくないらしい。

「しかし、前回の戦いの時のような罠を平原に作れば、すぐにわかりますし……やはり、西門の前の土塁が気になりますね」

地図を見つめつつ、ベンデイスは言った。

「罠にしても、部隊の動きで仕掛けるような罠なのか」

ビレットも、地図を睨んで考え込む。

「いずれにしても、情報不足ですな」

ベンデイスは苦い顔でこぼした。ビレットが、同意するかのよう  
に唸る。

「はい。発表します」

プチ会議の席に皆がつくと、凜が芝居がかって挙手した。

「どござ」

いつの間にもやら議長役と皆が看做すようになっていた拓海が、討論番組の司会者張りの大げさな身振りで凜を指名する。

「例のクッキー、今日の午前中に焼いて生馬に渡しました！」

凜が生馬の横顔を見つめながら、嬉しそうに報告する。

「ほう。それで、首尾はどうだった？」

拓海が身を乗り出す。すでに生馬とイブリス王女が付き合っているという話は、拓海や駿はもちろん、王宮関係者ならば誰もが知る

噂となっている。

「あー、とりあえず喜んでもらえた。凜に礼を言っといてくれ、とのことだ」

生馬が言い、改めて凜を見据え、ぺこりと頭を下げる。

「それだけか？　なんだ、つまらん」

「そういうお前はどうかんだ？　困っている金髪少女との仲は進展したのか？」

からかうような拓海の物言いに、生馬が反撃に出る。

「困っているとは人聞きが悪いな。保護しているだけだ」

「で、どうした？　手ぐらい握ったのか？」

「いや。指一本触れてないよ」

「……律儀だな。お前らしくもない」

生馬が、笑う。

「ということで、世話好きの凜ちゃんが、拓海君にもいい物をあげましょう」

そう言い出した凜が、ごそごそと小さな布袋を取り出した。テーブルに置き、拓海の方に押しやる。

「なんだ？」

「クッキーよ。イブリスにあげたのと基本的にはおんなじもの。形が悪かったり焼き色が濃すぎたりしてるやつだけど、味は変わらないわ。明日その娘に持って行ってやりなさい」

「ああ……すまん」

戸惑ったように言った拓海が、布袋におずおずと手を伸ばす。

「羨ましいねえ。生馬にも拓海にも春が来て」

駿が、にやにやしながら言う。

「ほんと、羨ましいわ。こんな非常時だというのに、恋愛だなんて夏希も皮肉めいた口調で言っちゃった。毎日忙しく、眼の前に突き出された問題をひとつひとつ解決してゆくだけで精一杯の夏希には、彼氏を作る余裕など物理的にも精神的にも取りようがない。

「生馬はともかく、俺のほうは断じて恋愛じゃないぞ」

拓海が主張する。

「でも、その娘に惚れられたいと思ってるんでしょ？」

凜が突っ込む。

「……まあな」

「その娘が実はイフアラ族の氏族長の孫娘、とかだったら面白いね」  
駿がにやにやしながら言った。

「悲恋物語が書けそうね。ジンベルの軍師と、高原戦士の指揮官の孫の恋愛」

夏希も笑った。

「許されざる恋。引き裂かれるふたり。まるでできの悪いラノベだわ」

凜も笑う。

「本題に入るぞ」

不機嫌そうに言った拓海が、テーブルの上に数枚の紙を置いた。

おなじみのジンベル南平原の地図だったが、方眼紙のように縦横に多数の線が等間隔に引かれている。

「なに、これ」

「ジンベル南平原に二次元座標系を設定した。東西のグリッドと南北のグリッドで、特定の位置……この場合は升目だが……を表現する。東西は城壁が00、最も南が99。南北は東から00だ。先に東西の数字、あとに南北の数字を言う。例えば、西の城門の位置を表すには、00-62となる。この方法なら、四桁の数字だけでジンベル南平原の任意の場所を正確かつ簡潔に伝達することが可能だ」

「へえ。面白いアイデアね」

「……軍用地図の基本だがな。本来はライトアップだから、数字は西から東、南から北へと増えていかなきゃおかしいんだが、感覚的には城壁を手前側にして見るほうがわかり易いからあえて逆にしておいた」

拓海が説明する。

「戦争映画なんかでよく見るやつね。仕組みはわかったけど、何で

こんなものが必要なわけ？ 大砲でも発明したの？ それとも無線で呼ぶと爆弾抱えたジェット戦闘機が飛んできてくれるのかしら」

凜が、皮肉めかして訊く。

「主に生馬のためだな。俺が敵の本営を見張り台の上から見つけても、指差して教えるわけにはいかないからな。で、小道具その一だ」

拓海が、小旗を三本取り出す。白と青と緑だ。

「また旗？ 覚えきれないよ」

凜が、愚痴る。

「簡単明瞭だから覚えてくれ。白が一、青が五、緑が区切りおよび終了だ。先ほどの00-62を表すには、緑、緑、青、白、緑、白、白、緑二回、となる。56-78なら、青、緑、青、白、緑、青、白、白、緑、青、白、白。白、白、緑二回だ。緑と白同時は、再送せよ。青と白同時は、了解」

「緑と青は？」

「未設定だ」

「ひとつ訊きたいんだが……見張り台の上から目標の位置を正確に測定するのはどうやるんだい？ ま、拓海のことだから手立ては考えてあるだろうが」

駿が、訊く。

「良くぞ訊いてくれた。小道具その二、方位板を作ったんだ」

「方位板？」

聞きなれない単語に、夏希は首を傾げた。

「まあ、分度器の親玉だと思ってくれればいい。城壁の東端と西端に、これを置く。城壁を基線長とした三角測量をするわけだ。要員の訓練もすでに開始した。念のため、見張り台にも同じものを置き、俺が角度を測って誤差を修正する。敵本営を識別できれば、かなり正確に位置をグリッド上で特定できる」

「確かにこれなら、方角と距離で示されるよりわかりやすいな」

地図を手にして、生馬が言う。

「通信は簡明が原則だからな。夏希も一枚持つとけ。市民軍を率い

るのなら、使うことがあるかもしれん」

拓海が、地図を夏希の手に押し付けた。

天幕に現れたタクミは、二人の兵士を伴っていた。

寝台から降りたリダは、ペこりと一礼した。すでに、看護人から渡された服に着替えてある。ジンベル人女性がよく着ているような生成りのワンピースだが、いささかオーバーサイズで、裾はふくらはぎの半ばまである。

「じゃ、行こうか」

タクミが、手招いた。リダは着替えの入った布袋を持つと、素直に従った。

「俺が持とう」

タクミが、布袋に手を伸ばす。

「作戦隊長。わたしが持ちます」

兵士の一人が言ったが、タクミが首を振りつつ、リダの手から布袋を取った。

「諸君らの任務はこの娘の護送だ。気を遣わんでいい。では、行く」

リダの歩みは、遅かった。

昨日から歩く練習を始めていたが、二十日以上も寝たきりだったので、脚の筋肉はそうとう衰えており、加えて体力も戻っていないので、どうしてもぎこちない歩き方になってしまふ。寄り添うように歩くタクミは穏やかな表情だったが、護送役の兵士二人はあからさまに不機嫌な表情を浮かべていた。

そんな中、リダはなるべく周囲を観察しようと努めながら、とつとつと歩みを進めていた。前方には市街地が見え、結構広い道の両側には田んぼが広がっている。どうやら、市街地東側に設けられた天幕に收容されていたらしい。

「大丈夫か？」

タクミが、訊いてくる。

「大丈夫です」

リダは作り笑顔で答えた。親切にしてもらっているとは言え、敵なのだ。安易に手を借りるわけにはいかないし、狩人としてのプライドもある。もう傷は塞がっているのだ。高原の民の基準で言えば、リダはすでに怪我人ではない。

市街地に入ると、ジンベル市民の姿が目につくようになった。多くの人が、通り過ぎるリダの姿を眼で追っていたが、その視線に敵意はなかった。むしろ浴びせられたのは、哀れみのこもった眼差しであった。惨めな敗北を喫した囚われ人、と看做されているのである。

やがて一行は、市街地の一角にある一群の建物の前にたどり着いた。戦士らしき人々が、大勢出入りしている。何らかの軍事施設なのだろう。リダはその中の一棟に連れ込まれた。狭い廊下を抜け、一室に案内される。

「ここが君の部屋だ。食事は一日三回運ばせる。運動は……当面はいらないだろう。何かあったら、大声を出せば誰か来てくれる。悪いが、これで失礼するよ」

寝台の上にリダの荷物を載せたタクミが、腰に下げていた小さな布袋を外す。

「そうそう、これを受け取ってくれ。ちょっとした、贈り物だ」

ぎこちない口調で言っ、その布袋をリダに渡してくれる。礼を言っ、リダは受け取った。

「じゃあ」

タクミが去る。扉が閉められ、さらにカンヌキが外から掛けられる音が続いた。

リダは部屋を見渡した。狭苦しいほどではないが、小さな部屋だ。寝台がひとつに、腰掛がひとつ。テーブルはなく、一辺の壁に作り付けの長く低い棚がその代わりをしている。窓はあったが、太い角

材が十文字に打ち付けられており、細身のリダでも抜け出すことは敵わないだろう。もちろんトイレもなく、蓋付きの壺が置いてあるだけ。棚の上にある壺には、きれいな水がいっぱいに入っていた。リダはタクミがくれた布袋を置くと、さっそく壺から竹の柄杓で水を汲み、久しぶりの運動で乾いた喉を潤した。

……何をくれたのだろうか。

リダは寝台に腰を下ろすと、布袋を開いてみた。中には、リダの手のひらより一回り小さいくらいの平べったい焼き菓子が十数枚入っていた。一枚とって、匂いを嗅いでみる。甘い香りが、リダの鼻をくすぐった。思わず、口中に唾液が湧き出る。

いや、食べてはいけない。

リダは自制心を発揮すると、焼き菓子を袋に戻した。

水分が少ないので、この菓子は日持ちするだろう。ここを抜け出したあとで、この菓子は貴重な行動食になってくれるはずだ。脱出できる日が来るまで、これは大事に取っておかねばならない。

兄上に会うためにここを抜け出す、その日まで。

## 29 囚人と軍師（後書き）

第二十九話をお届けします。また新たに評価点を入れていただきました。ありがとうございます。

### 30 平原の激突

第一次ジンベル南平原の戦いから二十七日後。サイゼン氏族長が率いる一万一千七百名の高原戦士が、ついに動いた。丸一日をかけ、軍用路を使い砦とその周辺に集結する。その間にも、多数の川船がジンベル川を往復して、食料を中心とする大量の補給物資が最前線に運び込まれた。

この動きは、当然ジンベル側にも察知されていた。ラツシ隊長が放った偵察隊が順次帰還し、高原戦士の集結状況を報告する。

「やっと来たか。待ちくたびれたぞ」

プチ会議の席で、生馬が不敵な笑みと共に両手を擦り合わせる。

「ねえ。あと半年くらい高原側が侵攻を手控えたら、ジンベルって自滅しちゃうわない？」

凜が、訊く。

「……可能性は、高いな」

ぶすりと言った拓海が、意見を求めるかのように駿を見た。

「確かにね。派遣部隊諸経費は建前上各国の予算持ちだが、いちばん嵩む食費はジンベル持ちだからね。放置すれば、財政破綻は確実だ」

「何か手はあるの？」

夏希は眉をしかめながら訊いた。高原戦士を撃退したはいいが、ジンベルが国家破産して、約束の報酬がもらえない、などということになったら、目も当てられない。

「戦時債の発行を考えていた。担保は金鉱と銀鉱だ。この採掘権を細分化し、担保として各国の政府や個人に対し低利で債権を発行する」

「債権の概念があるのか？」

生馬が、訊く。

「初歩的なものはある。政府が王命で富裕な自国民から低利の融資

を受ける程度だがね。商取引における債務は普通に発生し、処理されているし、原始的ながら貸金業者も存在するから、外国向けに戦時債を発行しても受け入れてもらえるはずだ。一時しのぎの方法だが、数年は戦えるだろう」

「やっぱり、根本的に戦争を終わらせなきゃだめね」

夏希は肩をすくめた。

「どうやって終わらせるつもり？」

凜が、夏希を見る。

「戦争が終わる方法は三つしかない。その一、どちらかが戦争遂行能力を喪失する。その二、講和が成立する。その三、戦争目的そのものが消滅する」

拓海が口を挟む。凜が、首を傾げた。

「一や二はわかるけど、三はどういうこと？」

「限定戦争の場合だな。戦争はあくまで政治的行為であり、外交の延長に過ぎない。例えば、ある島の領有権を巡って戦争になったとすると、どちらかの勢力がその島を完全占領して支配権を確立し、もう一方の勢力が軍事力の行使による島の奪還を諦めた時点で、双方の戦争目的は消滅する。たいていは、そこで終戦だ。戦いは、軍人から外交官へと引き継がれるわけだ」

「その一による戦争終結は難しいな。イファラ族に他の氏族が協力しているとなると、これを滅ぼすのはジンベルの力じゃ不可能だ」

腕を組んだ生馬が、言う。

「その三も、無理よね。魔力の源を捨てちゃうなんて、考えられないし……そもそも、簡単になくなったりしないでしょう、あれ」

凜が、苦笑いを浮かべる。

「無駄に魔術を使い続けても……何十年も掛かりそうね」

夏希も釣られたように苦笑いした。

「講和はすなわち政治的妥協だ。要点を整理しよう。イファラ族の戦略目的は、魔力の源の奪取。ジンベルの戦略目的は、イファラ族の侵攻阻止にある」

拓海が指を立てる。

「外交交渉によって、イファアラ族側の真の目的を聞き出し、こちらが譲歩するのがもっとも早いだろうね」

駿が言った。

「あちらが強硬でなければな。魔力の源はイファアラ族が管理、ジンベルには一切使わせない、とかになったら、ジンベルはおしまいだ」  
首をゆっくりと振りつつ、生馬。

「何らかの理由でジンベルとイファアラ族の利害が一致しない限り、いずれにしろ争いになるのね」

夏希は考え考えそう言った。駿がうなずく。

「社会というものは、対立の連続だからね。コンビニでの買い物にしても、商品やサービスの代価が適切だと客が考えるから商取引が成立するんだ。適切でない、つまり高いと客が判断すれば、対立となり、商取引は成立しない」

「コンビニなら他の店に行けばいいけど、国家間同士じゃそうはいかないものね」

凜が、諦め顔で言う。拓海が、ぼんぼんと手を叩いた。

「とりあえず、今日は早めにお開きにしよう。明日は夜明け前に起きる必要があるからな。各自、準備は整ってるな？」

「俺の方はほぼ完璧だ」

生馬が言う。

「僕も問題ない」

駿がうなずく。

「市民軍はさつき陛下に動員令を発してもらったわ。明日早朝には、準備が整うと思う」

夏希はそう言った。いささか訓練不足だが、明日の主役はジンベル防衛隊と救援軍だ。市民軍の出番は、少ないだろう。

「救護所も同じく、準備が整うのは明日早朝ね。下準備は今夜のうちに関わらせとくわ」

凜が自信ありげに言った。

「よし。じゃあ解散だ。明日は頼むぞ、みんな。特に生馬。お前さんの部隊が、勝敗を分けると言っても過言じゃない」

立ち上がった拓海が、生馬の肩に手を掛ける。

「任せろ」

生馬が、親指を立てる。

最初に動き出したのは、生馬率いる精鋭五百名だった。

西の城門に通じる大通りに集められた五カ国混成の部隊は、長剣兵を主力に槍兵、短剣兵を加えて編成されている。夜明けまでは異世界の単位で三時間半はあり、空では未だ星が瞬いていた。あらかじめ開かれていた城門から、夜目の利く短剣兵数名に先導され、精鋭部隊は馬出しを迂回してジンベル南平原に出る。そのあとから、背に大きな荷物を負った市民軍兵士五十名が続く。

一行は見通しを良くするためにあらかじめ刈り払われている草地を踏みしめ、やや西側へと迂回するようにして西の森へと向かった。事前に潜んでいた偵察隊に安全を確認してから、森の中と陰に隠れる。灯火の類は一切使わない。音も、なるべく漏らさぬように留意する。亜熱帯の夜は、かなり静かであり、遠くまで音が届いてしまふのだ。

市民軍兵士たちは背中の荷を降ろすと、すぐに西の城門目指して帰って行った。荷物の中身は、二食分の食料と一日分の水である。戦況によつては、長時間の待機が必要とされる。暑さ対策の水はもちろん、体力を維持するための栄養補給もおろそかにはできない。

生馬は部隊に休息を命ずると、士官全員を呼び寄せた。そこで始めて、作戦内容を詳細に説明する。驚きの吐息はいくつか漏れたが、皆プロの軍人である。すぐに生馬の意図を飲み込んでくれた。

「では、俺たちも休憩するか」

ささやき声で、生馬は控えていたソリスに告げた。

「はい、生馬様」

ささやき声で返したソリスが、生馬が地面に座るのを待ってから、腰を下ろす。

生馬が訓練した伝令少年兵は二十人近くに上るが、今回の精鋭部隊に組み込んだのはソリスだけであった。かなり危険な任務であり、性根の据わった者でないと足手まといになるおそれがある。その点、ソリスは度胸もあるし、槍の腕前もなかなかのものだ。そばに置けば、生馬の背中を守ってくれるだろう。

夜明け前に、高原戦士も動き出した。盛んに斥候を放ちながら、ジンベル南平原を目指す。

呼応するように、ジンベル側も動いた。東西両門から兵を繰り出し、槍兵を前面に押し出した方陣を作り上げる。

「……平原で決着をつける気か？」

斥候からの報告を聞いたサイゼン氏族長は、首を傾げた。

「こちらの予想よりも敵は兵を集めたようですね。おそらくは、一万に近いかと」

報告をまとめていた側近の一人が、言う。

「どう思う、ビレット？」

サイゼンが、意見を求める。

「こちらに前回のように、川に橋を掛けさせたくないのでは？」

「それも考えられるな」

一応、密林の中に橋を掛けてあるが、そこを利用しての兵力移動は、遠回りになるので時間が掛かってしまう。前回掛けた橋はジンベル側によって撤去されているので、予備隊は東西両岸に二分せねばなるまい。

「何か意見は？」

サイゼンが、側近を見回した。

「西の城門前の土盛りが気になります。なにかの罠ではないでしょうか」

「前回のこともあります。ここは慎重に行くべきでしょう」

「同感です。焦る必要はありません。じっくり攻めましょう」

いくつか進言がなされたが、いずれも消極策であった。

「うむ。いずれにしろ、敵が積極的に出てきたのはなにか策があったことだろう。数百名におよぶ精鋭からなる予備隊を組織していたという情報もあつたからな。それで、東西どちらの敵が多いのだ？」

「城壁の外に出てきた兵は、明らかに西岸の方が多いです」

サイゼンの問いに、斥候の報告をまとめていた側近が即座に答えた。

「わかった。計画を変更せず、わたしが直接西岸の部隊を率いる。

ビレット。君は東岸を頼む」

「心得ました」

「よろしく頼むわね」

夏希は副官の肩を優しく叩いた。今回は、アンヌツカと行動を共にすることになる。

「お任せ下さい。夏希様の身はしっかり守ります」

「まあ、今回は矢面に立つことはないと思うけど」

夏希は願望も含めてそう言った。拓海の作戦がうまく行けば、戦いは救援軍に任せて、市民軍はせいぜい残敵掃討くらいの役目で済むはずだ。そのような訳で、夏希自身も今日は、革鎧と腰に吊った長剣、それに水筒だけという軽装である。

夜明けにはまだ間があるが、空はすでに白んでおり、星々は暗いものから順番にその姿を隠しつつあった。空気は重苦しい湿気を含んではいるものの温度は低めで、爽やかだ。

夏希が直卒する兵力は、市民軍一千名。これを、二百名ずつの五隊に分けてある。得物は四隊が長槍、一隊が短剣だ。武器は長さや質がほぼ同じものを支給できたが、防具に関してはばらつきが多く、

中古の金属鎧をまとった者から普段着に革を縫いつけただけの者までバラエティに富んでいる。いずれにせよこの一千名は、比較的若い男性が中心の、市民軍にしては錬度の高い部隊である。以前の呼称を用いれば、カテゴリーAとBに相当する。

市民軍大部隊は、市街地の通りに密集して待機していた。救援軍部隊は、もうすでに門を出て平原に展開し、方陣を築いている。救援軍が前進を開始したら、市民軍も速やかにジンベル南平原に進出し、陣形を整え、追従しなければならない。今回の作戦、高原戦士側に時間的余裕を与えたら、失敗である。

「夏希様！」

いきなり、路地から声が掛かった。夏希が訝りつつそちらに眼をやると、十名近くの少女たちが立っているのが見えた。みな小柄で、年齢は十三、四というところか。ぺこぺこ頭を下げつつ、こちらを上目使いに見ている。

「何か用かしら？」

戦闘前でちょっと気が立っていた夏希は、少しばかりぶっきら棒に尋ねた。

「どうぞ、これをお使い下さい！」

一人の少女が進み出て、夏希に向け両手で捧げ持ったものを突き出した。

竹竿である。

夏希は生じかけたためまいをぐつと堪えた。

「いや、あの、今回は必要ないから」

「わたしたち、まだ子供だから、戦わせてもらえないんです」

別の少女が、両手を胸の前で組み合わせ、哀願口調で言った。

「でも、なんとかして夏希様のお手伝いがしたくて……」

「みんなを選んで、丁寧に加工した竹です！」

「お願いです、使ってください！」

「気持ちだけでも、夏希様と一緒に戦いたいんです！」

「お願いします、夏希様！」

口々に、少女たちが哀願する。

……これって、ファン、ってこと？

夏希は強張った笑みを浮かべたまま手を伸ばし、竹竿を握った。少女たちの表情が、一挙に明るくなる。

「ありがとうございます、夏希様！」

口々に礼を言い、ぺこぺこ頭を下げる。中には、嬉し泣きしている娘さえいた。

「竹竿は使わせてもらうから、みんな決められた場所に戻って。城門近くは危ないから」

「はい、夏希様。わたしたち、凜様の救護所でお手伝いすることになってるんです。すぐに、戻ります」

笑顔を見せながら、少女たちが路地を奥へと駆け出す。夏希は手を振ってやった。気付いた少女たちが、嬉しそうに手を振り返す。

「……疲れた」

少女たちの姿が消えると、夏希は竹竿にもたれて大きく息をついた。

「人望がおりになるのは、よろしいことです」

頬をびくびくと痙攣させながら、アンヌツカが言う。笑いを堪えているのだろう。

「ま、せっかくだから持っていてあげましょう。今回は、使う機会はないだろうけど」

夏希は苦笑いしながら、アンヌツカにそう言った。

予想は間違っていた。

東の門から繰り出された兵は、救援軍千八百と、ジンベル市民軍五百。門の内側には、さらにジンベル市民軍五百が控え、城壁には救援軍市民部隊八百が守備についている。

西の門から出撃した兵は、救援軍三千。こちら門の内側にジンベル市民軍一千が残り、城壁と馬出しは別のジンベル市民軍一千が

守る。そしてもちろん、西の森には生馬率いる多国籍精鋭部隊五百が潜んでいる。

総指揮官であるラッシ隊長は西側の救援軍を直接率い、拓海は東の城門近くにある見張り台の上で待機。夏希は、西門内側の市民軍一千と共にあった。

夏希は城壁の上に登ると、前方の様子をうかがった。百人ごとの方陣を築いた救援軍が、二段になって左右に広がっている。前段は矢避けの長盾を持った短剣兵、重武装の長剣兵、それに長槍兵が主力で、後段は弓兵とそれを援護する長槍兵で構成されている。

西岸と同様、東岸でもジンベル側部隊は整然たる方陣を築き、待機していた。両岸の方陣の列は、片側を要害であるジンベル川にびたりと着けるようにして布陣している。もちろん、両翼包囲を防ぐための方策である。

夜明け間近なので、すでにジンベル南平原は明るかった。朝靄が薄くたなびくそこに、いまだ高原戦士を見出すことはないが、偵察結果からするとすでに密林内を北上中であり、あと少しで先鋒がその姿を現すはずだ。満足した夏希は、竹竿を肩に階段を降り、アンヌツカのところへと戻った。

早朝の平原で、様々な音が重なり合う。武器や鎧が発する金属音、革の擦れる音、緊張をほぐすための小声での雑談。

朝の爽やかな空気が、徐々に硬質なものに変化してゆく。居並ぶ兵士たちの醸し出す、緊張と恐れと逸り立つ心が入り混じった体臭を吸い取ったかのように。

やがて、朝日が方陣を形作る兵士たちを照らし出した頃、偵察隊からの報告を受けたラッシ隊長が、伝令に合図の旗を振らせた。

西岸のジンベル側方陣が、一斉に南下を始めた。ゆっくりとした歩調で、陣形を保ったまま前進する。これに呼応して、城門から市民軍部隊が続々と現れた。城壁前で二百名ずつの横に長い長方形の方陣を作ると、救援軍部隊のあとを追い始める。

東岸でも、やや遅れながらも同様の動きが見られた。

『敵部隊緩歩にて前進開始』の報告は、すぐにサイゼン氏族長の元に届いた。

戦闘開始前から、サイゼンは重大な決断を迫られることになった。選択肢はふたつしかなかった。本日の交戦を断念し、後退すること。前進して密林を出て、速やかに陣形を整えて迎撃準備を整えること。

妥協案は愚策と言えた。様子を見ながら前進などしては、平原南部にジンベル側が強固な陣形を保ったまま展開する余裕を与えてしまう。そうなれば、密林から出てきたばかりで陣形の整っていない高原戦士たちの小部隊が、各個撃破されることになる。まさに敵の思う壺である。

なんとも極端な二択であった。戦わず退くか、急いで前に出て、戦闘態勢を整えるか。

前者ならばリスクは零だが、士気的大幅な落ち込みは避けられない。なにしろ、前回は一方的敗北を喫しているのだ。後者のリスクは大きい。いずれにせよジンベル側とは戦わねばならない。むしろ、正面切つて戦えるのならば、好機と言える。

怯懦きょうたとも言つべき安全策を取るか。無謀かも知れぬ強行策を取るか。

行くしかない。

そう、サイゼンは決断した。やはり狩人である。巢穴を飛び出し、牙をむく獲物を前にして、背を向けることは難しかった。

サイゼンはすべての部隊に急速前進を命じた。速やかに密林を抜け、ジンベル南平原南端で陣形を整えさせるのだ。むろん、罨を警戒して多数の偵察隊を放つよう命ずることも忘れなかった。

ジンベル南平原南部では、双方の偵察隊同士の静かな死闘が繰り

広げられていた。

むろん、ジンベル側の思惑は西の森に隠れる精銳五百の存在を敵に悟られないことにある。一方の高原戦士側は畏の兆候を探りながら、ジンベル側主力の布陣状況を調べ、味方の展開を妨害しようとする散兵を阻止するのが目的である。

身を低くし、遠距離で弓を射ち合いながら、両者は必死に与えられた任務を続けていた。

「敵方陣、東西両岸とも速度を上げました！ 速歩で前進中！」

伝令からの報告を伝達した側近が、やや上擦った声で報告する。

……やはり敵の狙いは平原南端での迎撃にあったのか。あるいは、他の方策があり、この行動はその布石に過ぎないのか。

サイゼン氏族長は密林内に設けられた進撃路を足早に歩みながら思案した。

……いや、仮にジンベル側が何かしらの策を考えていたとしても、今現在こちらが取れる手はひとつしかない。

東岸でビレットが率いている兵力が、主力四千四百と予備隊千八百。西岸でサイゼンが率いる兵力が、主力四千六百に予備隊二千。なんとか、数の優位を活かせる状態に持っていかねばならぬ。

「全軍に伝達。可及的速やかに平原南端に到達し、陣形を整えよ。交戦開始は各指揮官に委任する。ただし、他の部隊との連携に留意せよ」

サイゼンは新たな命令を発した。

前進を続けるジンベル側方陣が、待ち構える高原戦士弓手の射程内に入り込んだ。

命令一下、一斉に矢が放たれる。だが、その数は多くない。高原戦士主力はまだ半数以上が密林内におり、陣形を整えていないのだ。

前に立つジンベル側短剣兵がかざす長盾に、次々と矢が突き立つ。曲射された矢を受けて倒れる者も出たが、救援軍の方陣は崩れることなく前進を続けた。

陣形前縁の高原戦士が、一斉に投げ槍を構える。

と、そこに曲射された多数の矢が降り注いだ。矢の射程距離に達した二列目の方陣が停止し、そこから矢の速射を開始したのだ。高原投げ槍兵の持つ角盾は、格闘戦時に敵の槍や剣を防ぐのに適している小さく丈夫なものであり、矢を防ぐには有効とは言えない。多数の投げ槍兵が、矢を受けて得物を取り落とす。

長盾を前面に押し立て、一列目の方陣がはまだ陣形を整えていない高原戦士たちに迫る。投げ槍の投擲を受けて損害を出しつつも、ジンベル側は近接戦闘を目論んで速歩で前進を続けた。

両者が、激突した。

長盾を持つジンベル側短剣兵が停止し、前に出た長槍兵が槍衾を形成しつつ歩調をそろえて前進する。高原戦士は重い投げ槍を振るって対抗したが、槍衾の前では分が悪い。何人もの高原戦士が長槍の穂先に刺し貫かれ、絶命した。

歩兵が緊密な陣形を保ちつつ、集団戦闘する場合は、先に陣形が崩れた方が負けである。最初から時間不足でしつかりとした陣形を組めていなかった高原戦士たちは、瞬く間に圧倒された。生じた綻びから重装備の長剣兵が切り込み、高原弓兵に襲い掛かる。血しぶきがあがり、叩き折られた手足が地面に転がる。悲鳴をあげて倒れた高原戦士を容赦なく踏みつけながら、長剣兵が前進し、無傷の弓兵に斬りかかる。

高原戦士側は早くも戦線崩壊の危機を迎えていた。

続々と、高原戦士が密林から出て、陣形を整える。投げ槍兵、弓兵とともに、二百名を基準とするかなり大きな方陣である。

サイゼンはこれら新たな部隊を、戦闘準備を整えた順に前線に送り込み、代わりにばらばらに戦っている戦士たちを下げ、再編成を

行わせた。

その結果、かなりの犠牲を出したものの、高原戦士たちは戦線を崩壊させることなく立ち直り、ジンベル側に対し逆襲に転じた。数的に劣勢であるジンベル側が、不利を悟ったのか後退を始める。

サイゼンは迷った。常識的に考えれば、ここは勢いに任せて押すところである。ジンベル側に与えた損害はいまだわずか。今後の展開を考えれば、多少無理にでも追撃して更なる戦果をあげておくべきだ。

だが、これは罠なのかもしれない。調子に乗って追って来たこちらを、何らかの罠に嵌めてしまう策の可能性もある。

サイゼンはジンベル南平原の地形を頭に浮かべた。そこに高原戦士側とジンベル側の部隊を付け加える。北へ向け後退するジンベル人と、その味方である平原諸国の軍隊。それを追う高原戦士たち。

この状態で、ジンベル側が罠を仕掛けるとすれば……。

……西の森か。

ジンベル側が、地面などに何らかの大規模な罠を仕掛けたとは考えにくい。妨害を受けたとはいえ、こちら側も断続的に平原の偵察は行っている。だが、西の森に夜陰に乗じてある程度の部隊を隠すことは可能だったはずだ。

もしジンベル側が西の森に精強な部隊を潜ませているならば、このまま高原戦士たちが追撃を行えば、伏せている敵に対し脆弱な側面や背面を晒すことになる。

「西の端にある森の偵察結果は？」

サイゼンは偵察担当の側近に語気鋭く尋ねた。

「派遣しましたがいまだ帰還しておりません。敵と交戦し、未帰還となったと思われます」

……自重するか。いや、罠が杞憂であった場合、それではせつかくの好機を無視することになる。

ここは慎重かつ大胆にいくべきだ。予備隊の一部を割いてでも、西の森対策をすべきだろう。問題は、どれだけの兵力を指向するか

だが……。

サイゼンはしばし考えた。予備隊には余裕があるとはいえ、手元には一兵でも多く残しておきたいところだ。敵が伏せていなかった場合は、その兵力は遊兵となってしまう。西の森に隠せる兵力は、最大でも四百から五百程度であろう。とすると、方陣二個四百名なら対抗可能だ。予備隊の二割に当たる兵力である。

「各部隊は敵を追え。陣形を保ちつつ圧迫せよ。西の森に敵一隊が伏せている可能性を考慮し、予備隊の方陣二個をその対策に割く。前進して、搜索に当たらせる」

30 平原の激突（後書き）

第三十話をお届けします。今週も評価を入れていただきました。評価してくださった方、ありがとうございます。

### 3 1 指揮官の矜持

事前の作戦通り、ジンベル川西岸に展開した救援軍主力は、押し退くる高原戦士たちを引き連れるようにして、抗戦しながら北上していた。

両者とも、延翼運動（戦線の端で行われる、敵戦線側背へ回り込もうとする運動と、それを阻止しようと戦線を横へと延ばす運動）を行っていたが、正面の戦力を薄くしないためにそこに注ぎ込まれた戦力はわずかであった。そのため、戦線の西端は西の森に触れることなく、北上を続けた。

拓海の思惑通りであった。……この時点までは。

「まずいな」

湧き出る汗をぬぐいつつ、生馬はつぶやいた。

拓海の作戦通り、イファラ族の軍勢主力は後退する救援軍部隊に釣られて北上しつつある。敵本営の位置は、すでに見張り台からの旗によって伝えられ、生馬の頭の中に納まっていた。このままあと少し敵主力が北上してくれば、妨害を受けることなく一気に戦術目標である敵本営を衝けるはずだったのだが……。

予備隊らしいおよそ三百から四百名ほどの高原戦士が、方陣を形作ってこちらへ接近しつつある。

生馬の指揮下にあるのは五百名。しかも、選りすぐった精鋭ばかりである。この程度の人数相手なら、確実に打ち破れるだろう。だが、まともに交戦したのでは時間を稼がれ、控えている予備隊から本営防衛のための兵力を引き抜くゆとりを、あるいは、本営自体が密林の中へと逃げ込む余裕を与えてしまう。

そうなれば、作戦は失敗である。

「まずいな」

湧き出る汗をぬぐいつつ、拓海はつぶやいた。

高原戦士側は、ほぼ拓海の予想通りの動きをしてきていた。今現在、西の森に向け進んでいる一隊を除けば。

あの部隊を、生馬の部隊と交戦させるわけには行かない。切り札は一枚しかないのだ。絶対に『切り返されない』瞬間に、使わねばならない。

拓海は西岸の戦況をじっくりと眺めた。

何とかして、あの邪魔な一隊を生馬の前から退かさなければならぬ。そのためには……。

いささか損害が増えそうだが、この手しかない。

拓海は手旗の束を抱えて待機している通信兵を身振りで呼んだ。

「ラッシ隊長に手旗連絡。右翼で攻勢。予備投入準備」

……悪いな、夏希。どうやら、あんたの手を借りる必要があるようだ。

「まずいわね」

ぼやきながら、夏希は小走りしていた。

『救援軍は右翼で一点突破を発起する。市民軍は三個部隊をもってこれを支援。状況により敵前線後方へ機動せよ』

ラッシ隊長からの伝令が伝えた命令はこうだった。

すでに救援軍は攻勢に転じており、一部で高原戦士を押し戻していた。夏希はラッシ隊長が派遣した士官の誘導に従い、救援軍が一点突破を目論んだ箇所の直後に長槍隊二個を張り付かせた。短剣兵はその後ろに置き、予備隊とする。

「まずいな」

サイゼンはつぶやいた。

本営は、当初は密林の際に置かれていた。だが、戦線が北上したことにより、しばらく前に密林から数シキツホの位置にまで移動していた。指揮せねばならぬ部隊との距離が開きすぎれば、当然指揮統制は難しくなるからだ。

それからさらにジンベル側が後退したために、本営と指揮すべき部隊の距離はシキツホほども南北に離れた位置関係にあった。これでは、伝令が走るだけで一ヒネ以上掛かる。

さきほどサイゼンは、ジンベル側の攻勢激化の報告を受け、予備隊方陣二個の戦線投入と、予備の弓隊すべての前進を下命していた。しかしながら、その命令を携えた伝令はまだまだ疾走の最中で、主力部隊には到達していない。これでは、流動的な戦況の変化に対応しきれず、重大な失策を犯しかねない。

「もう一度本営を前進させるぞ。準備せよ」

サイゼンは側近と護衛の者に命じた。少なくとも、戦線後方の五シキツホ以内に本営を置いておきたい。

「突撃！」

半ばやけくそで、夏希は叫んだ。

救援軍方陣二個が開けた敵戦線の穴に、市民軍長槍隊二個四百名が突っ込む。

いや、正確には穴とはいえない。まだ、浅く穿たれた窪みだ。押し込まれ、薄くなった戦線は、反撃や他の部隊からの支援、そして予備隊の投入により急速な自己回復能力を發揮し、常態へと戻ろうとする。これを防ぐには、砂地に穴を掘るがごとく、容赦ない攻撃を間断なく継続する必要がある。こちらも予備隊を投入し、攻撃の規模を拡大しつつ窪みをより深くしてゆくのだ。

このような横一線の戦線を挟んで、比較的戦力の似通った大軍がぶつかり合うような戦いでは、予備隊の多寡が勝敗を分けることが

多い。ギャンブルやビジネスにおいて、苦しいときに余剰資金を惜しげもなく投入する方が有利となり、勝利を収める場合が多いのと同様、戦場においても手詰まり状態からある程度の有力な新規戦力を投入するのは、きわめて効果的なのだ。

夏希は伝令を走らせ、残る市民軍長槍隊四百名も前進させて、短剣兵隊の直後に配置した。

「ここが勝負どころ、とサイゼンは判断した。

戦線を突破されれば、勝利はおぼつかない。なんとしても現状を維持し、敵に圧迫を加え続け、出血を強いるのだ。そのような膠着した戦いになれば、数が多いほうが断然有利となる。

「残る予備隊すべてを左翼戦線に投入しろ。なんとしても、敵を押し返すのだ」

「西の森に派出した四百名はいかがいたしましたしょう？」

側近の一人が、訊く。

サイゼンは瞬時考えた。もし西の森に敵が潜んでいなければ、この四百名は完全に遊兵となってしまう。方陣二個分の兵力が。

すでに、弓隊六百と投げ槍兵四百は、戦線に投入済みだ。今の命令で、方陣三個六百名も投入を決定してしまった。もう、手元に兵力は残っていない。

呼び戻して待機させるか。あるいは迂回包囲を意図させて機動し、敵兵力の分散を強いた方が得策か。……いや、やはりここは慎重に行くべきだ。

「西の森の部隊はそのまま。残りの予備隊はすべて投入だ」

「だめだったか」

生馬は流れ落ちる汗を指で拭いながら毒づいた。

敵の予備隊はすべて戦線直後に張り付くか、戦線そのものを増強

するために投入されたが、西の森を目指していた四百名ほど……近付いたのでより正確に兵力を見積もれるようになった……の敵兵は、そのままこちらに接近し続けている。もうその距離は、二百メートルを切った。

しかしながら、幸運なことに敵本営は戦線から三百メートルほどの処まで前進してくれていた。ここからは、十シキツホ……六百メートルほどの距離だ。接近する四百名に妨害されることなく、かつ敵の不意を衝けば、十分に捕捉できる位置である。

生馬は手早く部下に指示を与えた。五百名の兵は、各国混合で五十名ごとの小隊に編成されている。軽装で長盾を持つ短剣兵が三個、長槍兵が三個、そして重装備の長剣兵が四個。短剣兵一個と長槍兵一個のみを生馬が直卒し、ひたすら敵本営を目指す。長剣兵一個小隊は、敵本営と戦線のあいだに割り込むように機動し、本営が北に退避するのを妨害する。残る七個小隊は、接近する四百名の敵方陣を迎え撃ち、これを打ち破る。その後、この部隊は敵予備隊に背後から攻撃を掛け、敵本営への救援部隊が派出されるのを防ぎつつ、救援軍と連携して戦うことになる。

生馬は剣道の面を着けるときの流儀で手早く手拭いを頭に被ると、その上から鉄製の冑を被った。無理に笑みを浮かべてから、振り返って待機している兵士たちを見る。

「よし、行くぞー！」

生馬の命令で、ジンベル側精鋭五百名がわらわらと森を出て、突撃を開始する。

生馬は二個小隊を率いて走った。敵方陣の高原戦士は、突っ込んでくる七個小隊三百五十名を迎え撃つのに必死で、こちらには投げ槍一本すら飛んでこない。

生馬は長盾に囲まれるようにして走っていた。いささか格好が悪いが、死にたくはないので仕方がない。湿気が多い空気を吸い込みながら、視線を目標である敵本営に据え、走り続ける。流れ出る汗が、革鎧の下に着込んだ胴着を濡らしてゆく。

本営側に動きがあった。弓を手にした数名が並び、射掛けてくる。十数名が、南の密林方向へ走り出しているのも見えた。おそらく、指揮官とその側近だろう。

矢が降ってくる。一本が、生馬をカバーしている長盾に突き刺さった。誰かが矢を受けたらしく、生馬の耳に悲鳴が届いたが、構っている暇はなかった。走りながら長剣を抜く。

弓を連射していた高原戦士が、数歩下がって得物を鉈に持ち替えた。代わりに前に出た二十名ほどが一本の投げ槍を手に、突っ込むジンベル側短剣兵に向かい穂先を突き出す。

……勇敢な連中だ。

走りながら、生馬はそう思った。こちらは百名。相手は二十数名。ぶつかれば、瞬殺されることはわかっているのに、あえて捨石になるうとしている。

両者の距離が縮まる。生馬は一人の投げ槍兵に狙いを定めると、前に出た。もう矢の脅威はない。

狙った男が、身構える。燃えるような赤毛を、黒い布の被り物からはみ出させた、やや小柄な若い男だった。生馬は走りながら上段に構えた。男の目にわずかに怯えが走ったように、生馬には感じられた。

男が投げ槍を突き出す。その軌道を予測していた生馬は、それを避けるようにやや進路を変えながら、長剣を振り下ろした。

切れ味鋭い生馬の長剣が、投げ槍を握った男の左手首あたりをざっくりと切り裂く。男が突き出した投げ槍の穂先は、生馬の脇腹の左十数センチの空間を突いたに止まった。

投げ槍を突き出した勢いと、生馬に切りつけられた衝撃で、男の身体が右斜め前によるめく。そこにすかさず、後続していたソリスが槍の穂先を浅く突き入れた。すぐに引き抜き、生馬のあとを追う。二十数名の高原戦士は、数秒と持たずに全滅していた。

生馬による本営襲撃は、その時点では指揮統制上の打撃をさほど

高原戦士側に与えたわけではなかった。上級司令部たる本営からはそれ以前に命令が下されており、それに従い各部隊は行動を継続すれば事足りたからである。

だが、情勢が変転すれば、それに対応する手段も変化させねばならない。単なる戦術目標の転換や、戦闘方式の変更程度ならば、各部隊の指揮官が独自で行うことが可能だ。だが、複数の部隊の集中運用や、複雑な運動、予備隊の戦線投入タイミングなどを上級司令部の介在なしに行うには、方陣指揮官レベルの各部隊指揮官同士の緊密な連絡が必要不可欠である。これが近代軍隊ならば、暗号を使用した無線や衛星回線の使用により、カバーできたかもしれない。しかしながら、高原戦士前線指揮官が持っている最速の連絡手段は、音速ながら（笑）戦場の喧騒の中ではなはだ到達距離が短く、かつデータ欠損が多い大声であり、次善の手段である伝令は確実性は高かったもののはるかに遅い通信手段であった。そしてもちろん、ジンベル側の怒涛のごとき攻勢は、彼らに悠長な話し合いの機会など与えてはくれなかった。

高原戦士各部隊の連携が、徐々にではあるが乱れ始めた。

生馬の命令を受け、四百名からなる高原戦土方陣を粉碎し、戦線後方に突撃したジンベル側の長剣兵と長槍兵が、弓兵の方陣に背後から迫った。

言うまでもなく、弓兵は接近戦に弱い。ゆえに、野戦では槍などを有する部隊の援護を受けるか、ある程度後方に置かれて運用される。

各弓隊を指揮する指揮官が、陣形の変更と迎撃を相次いで下命する。これを受けて、短剣兵を先頭に接近するジンベル側に直射で弓が放たれる。大半は長盾で防がれたが、十数名が矢を受けてはたばたと倒れた。再び矢が飛ぶが、これも大半が長盾で防がれた。

高原弓兵が弓を捨て、鉈を抜く。そこへ、長剣兵が突っ込んでゆ

く。

平原諸国の長剣の切れ味は、鈍い。刃物と言うよりは、むしろ打撃兵器と言える。その重量と、打撃力を集中し易い平べったい形状を活かし、敵の手足を骨ごと叩き折ったり、頭部や胴体の内部に衝撃を与えたりするのが目的である。

風車のように振り回された長剣が、弓兵の腕や胴に喰い込み、血しぶきがあがる。

高原弓兵も必死に抵抗したが、鎧と鎧なしの彼らでは、胴や肩当てに板金を使った小札鎧をまとい、板金冑をかぶり、刃渡り一メートル三十センチにもおよぶ両手剣を振り回す長剣兵には近付くことさえ困難だった。

そこへ、ジンベル側長槍兵が突っ込んでゆく。さらに多くの弓兵が屠られ、混乱が倍加した。何とか予備隊の投げ槍兵が若干駆けつけ、弓兵を援護しようとジンベル側兵士に挑んでゆく。

弓隊が混乱し、支援の弓射が緩慢になったことにより、高原戦士投げ槍兵の戦列は危機的状況に陥った。

救援軍長槍兵の方陣を支えきれずに、戦線の一部が崩壊する。新たに投入された市民軍長槍隊四百名が、さらに突破口を広げる。

短剣兵二百名を率いる夏希の眼前に、さながら奇跡のように無人地帯が現れた。

「好機です、夏希様」

アンヌツカが、前進を促す。

夏希は軍事に関してはど素人だったが、折に触れ拓海や生馬、そしてアンヌツカの話聞いて、今ではごく基本的な事柄は理解していた。だから、アンヌツカの言わんとしていることはわかった。ここを抜け、敵の背後に廻り込むのだ。

「伝令！ 宛、ラッシ隊長。発、市民軍隊長。右翼中央にて突破成功。我、突入す。支援求む。以上」

夏希は付き従っていた少年伝令兵にそう命ずると、自分の竹竿を

振り上げた。

「短剣兵隊は前進！」

密林方向へ逃げてゆく高原戦士たちの足は、かなり速かった。

いったん長剣を収め、かなりの速さで走り続けている生馬は、ちらちらと左右をうかがった。ほぼ同速でついて来ているのは、ソリスを始め五名ほどのようだ。もちろん、あとの九十数名も続いているはずだが、少しばかり遅れている。

……なんとか足止めしないと逃げ切られる。密林に入り込まれたら、短時間で探し出すのは無理だ。

生馬は全力疾走に移った。一回だけだが、百メートル走で十二秒を切ったことがあるほどの俊足である。逃げてゆく高原戦士たちの背中が、見る見る大きくなる。

生馬の急接近に気付いた高原戦士の一人が、鉈を抜くと足を止めて向き直った。生馬はやや足を緩めて長剣を抜き放ちつつ、その男に向かって突き進んだ。高原戦士が、鉈を両手で握って身構える。生馬は男から視線を逸らさぬまま走り続け、直前で方向転換した。最初から、刃を交える気はなかった。いちいち相手にしては、向こうの思う壺である。

おそらくは刺し違える覚悟であつたらう高原戦士が、怒りの声をあげて生馬に追いつがろうとする。しかしその頃には、後続の短剣兵たちがばらばらと駆け寄りつつあつた。足を止めた二人の短剣兵に斬り付けられ、高原戦士が血しぶきをあげて絶命する。その両脇を、何十人もの短剣兵と長槍兵が息を荒げながら疾走してゆく。

……逃げ切れない。

サイゼンはそう悟った。

逃走を図った本部要員の中で、彼が一番の高齢である。狩人とし

てはまだ現役だが、若い頃に比べ体力は格段に落ちている。

むしろ、側近たちを逃がすべきだ。自分を犠牲にしても。

「お前たちは逃げる！」

足を止めたサイゼンは、そう部下に怒鳴った。走るのをやめ、戸惑いの表情を浮かべた者に対し、荒い息をつきながら絞り出すように告げる。

「これは氏族長命令だ！ 逃げる！」

狩りのリーダーには絶対服従、というのが、高原の民の掟のひとつである。側近とその補佐たちが、悲壮な表情で再び走り始める。

サイゼンは鉈を抜くと、追っ手に向き直った。ひととき背の高い、革鎧姿の若い男を先頭に、百名前後の兵士たちが走り寄ってくる。

「イファラ族氏族長サイゼンである！ 名のある戦士との戦いを望む！」

サイゼンはそう怒鳴った。部下を逃がす時間を稼ぐには、こうやって敵の指揮官級の者を足止めするくらいしか、方法はない。

先頭に行く背の高い戦士が、足を緩めた。おそらくは指揮官なのだろう、頭上で長剣を振り回し、周りの者に追撃を続行するように命じている。

……虫喰いどもめ。

サイゼンは内心で舌打ちした。自分が犠牲になることによって、追撃が中断することを期待したのだが、少々甘かったようだ。

背の高い戦士が立ち止まった。その後ろに、短い槍を持った少年が付き従っている。

サイゼンは鉈を握ったまま、背の高い戦士を睨んだ。

佇む三人を、ジンベル側の兵士たちが続々と追い越してゆく。

奇妙な戦士だった。背はサイゼンよりも頭ひとつ分高く、やけに肌の色が白い。顔立ちも、平原の民らしくない。少しばかり顔かたちが違う高原の民、と言っても通用しそうな顔つきだ。

「わたしはイファラ族氏族長サイゼンだ。名のある戦士とお見受けする。貴殿の名を聞こう」

追撃を阻止できなかったことに落胆しながらも、サイゼンは威厳を持ってそう問うた。

「ジンベル防衛隊教練隊長、サカイ・イクマ」

背の高い戦士が、名乗る。

「イクマ。異世界人か！」

報告にあつた異世界人の名前だ。サイゼンは納得した。平原の民と異なる風貌。身体の大きさ。異世界人ならば、当然か。

「一対一での勝負を申し込む、イクマ殿」

鉈を両手で構えつつ、サイゼンは言った。長剣と鉈では明らかにこちらが不利だが、いたし方あるまい。それに、死ぬのならば愛用の鉈を握つたまま死にたい。

「いや、降伏していただきたい」

イクマが言った。威圧感のない、優しいと言えるほどの口調だった。

「お断りする」

「俺はジンベル人ではない。高原の民に、悪感情は持っていない。

むしろ、高原戦士は尊敬に値する勇敢な人々だ。その長たるあなたを倒すのは、忍びない」

「今の言葉、侮辱か」

明らかに、サイゼンが倒されることを前提にした言葉だ。

「侮蔑に思われたのであれば謝罪する。俺は、あなたと戦いたくない」

「いや。勝負していただく」

イファラ族の名誉を守るためにも、氏族長として最後まで誇りを失うわけにはいかない。

「参る！」

一声掛けてから、サイゼンは猛然と踏み込んだ。繰り出される鉈を、イクマが飛び退いて避ける。

サイゼンは矢継ぎ早に鉈を振るった。避けてばかりいては不利だと悟ったのか、イクマが反撃に出る。サイゼンは突き出された長剣

を、鉈で払った。

息が上がる。かなり走ったせいで、サイゼンの体力はそうとう消耗していた。もはや、若くはないのだ。気力はいまだ充実していたが、身体の衰えは隠せない。

腕の力が弱まり、鉈を振るう速度が鈍った。それを補おうとして、つい大振りになってしまう。

鉈を構え直すのが、数瞬だけ遅れる。

好機と見たイクマが、踏み込んだ。

長剣が、サイゼンの腹に叩き込まれる。

サイゼンの身体が、くの字に折れた。手から鉈が落ち、膝が地面を打つ。

……いい腕だ、異世界人。

視界が暗転し、サイゼンの意識が飛んだ。

生馬は激しく呼吸しながら、長剣を鞘に収めた。

「お見事です、生馬様」

ソリスが、賞賛の言葉を贈る。

「縛っておけ。ただし、丁寧にな」

「は？」

生馬の命令に、ソリスが怪訝な表情をする。

「斬っちゃいけないよ。峰打ちというやつだ。俺の長剣は片刃だからな。刃の付いていない方で引つ叩いただけだ。この勇敢なおっさんを殺したくはなかったし、長剣と鉈じゃとうてい公平な勝負とは言えないからな。俺にも、侍の子孫としてのプライドはある」

「左様でしたか。では、さっそく」

ソリスが腰に下げた袋から細い麻縄を取り出し、倒れているサイゼンを後ろ手に縛り始める。

生馬はサイゼンの鉈を拾い上げた。見事なまでに使い込まれた鉈だった。持ち主同様、古強者の風格がある。

逃げ散った高原戦士を追っていた兵士が、三三五五戻りつつあった。生馬はそこから二人を選び、サイゼンの護送を命じた。「残りの者は俺に続け。背後から、高原戦士を叩くぞ」

### 3 1 指揮官の矜持（後書き）

第三十一話をお届けします。

### 3 2 迂回包囲

戦線、あるいは軍事用語における前線とはなにか？

端的に言えば、戦線は敵兵力と対峙している境界線およびそこに配備されている味方兵力のことである。

人間は、その眼の配置、腕の可動範囲などの制約から、正面に対する対応能力は優れているが、背後に対する能力は甚だ劣っている。軍隊も同様である。全周への万遍ない対応は、リソースの無駄遣いと言える。持てる能力を最大限に発揮するためには、警戒と打撃力行使の方向をひとつに集中させる必要があるのだ。したがって、各部隊が互いの弱点をカバーし合い、最も脆弱である背後に敵が廻らないように工夫すると、必然的に横一線（地形的、戦略的制約から直線になることは稀であるが）に部隊が並ぶことになる。こうして、彼我のあいだに戦線が形成されるわけだ。

……その戦線が、ジンベル側によって喰い破られた。

アンヌツカの指示にしたがって、夏希は短剣兵隊を左側……突破口の東側の敵戦線後方へと導いた。

すでに一帯は、混乱の極みであった。双方の死体はごろごろ転がっているし、負傷して倒れ伏している者も多い。高原戦士弓兵は数多いものの分断され、組織的戦闘を諦めて鉦を手に必死の抵抗を続けている。背後から襲い掛かったジンベル側長槍兵は、数こそ少ないものの陣形を保ったまま高原戦士を圧迫している。

夏希は手近の高原戦士投げ槍兵隊に、指揮下の市民軍短剣兵隊を突っ込ませた。敵を混乱させるのが目的である。戦果は二の次だ。敵が混乱さえしてくれれば、正面から圧迫している救援軍部隊が何とかしてくれる。

戦闘部隊が壊滅する様は、激烈な地震に見舞われた建物が倒壊す

る様子と酷似している。徐々に崩壊するのではなく、強い揺れに耐えていた建物の枢要な一部……耐力壁や柱の結合部など……が破壊されたことをきっかけにして、わずかな時間でその他の部分も揺れに耐えられずに壊れてゆき、あつというまに瓦礫の山と化してしまふ。

夏希らが目標とした高原戦士投げ槍隊の方陣も同様だった。それまで激しく抵抗を続けていたにもかかわらず、正面から救援軍長槍兵隊、左側面から市民軍長槍兵隊、そして背後から市民軍短剣兵隊に押しまくられた結果、いともた易く壊滅したのだ。

夏希はすぐさま指揮下の市民軍に新たな目標を与えた。戦術目標を与えられないまま、各兵士が目についた敵を攻撃しているのでは、組織戦闘の優位が相殺されてしまう。敵が混乱している今こそ、統制の取れた戦術で、これを圧倒しなければならぬ。

ジンベル川西岸に展開した高原側左翼部隊は、崩壊の危機に晒されていた。すでに弓兵部隊は支援射を行える状態になく、投げ槍兵部隊も方陣二つが壊滅。頼みの綱の予備部隊も、半数はすでに戦線に組み込まれて苦戦中、残る半数も連携の取れぬままジンベル側部隊と交戦中だ。

このような中で、威力を發揮したのは救援軍弓兵隊だった。ラツシ隊長の指示に従い、戦線を形成する高原戦士の方陣に続々と矢を浴びせてゆく。この時点で、高原側左翼部隊の弓兵隊はすべて混乱状態にあり、組織的応射のすべはなかった。文字通り雨のように降り注ぐ矢が、軽装備の高原戦士に容赦なく突き刺さってゆく。

高原戦士側左翼部隊二千二百のうち、いまなお健在なのは最も東側にいる投げ槍兵方陣一個のみ。死傷者はいまだ数百名に止まっていたが、戦士たちは分断され、その戦闘力は大幅に低下している。

順次投入された予備部隊も、弓隊の援護を受けられぬまま損害を増やし、健在な方陣は三つになっていた。

右翼部隊は善戦していたものの、正面の敵を抑えるのに手一杯で、左翼部隊の増援に回せる兵は一人もいなかった。

対するジンベル側は、かなり変則的ではあったが教科書通りの突破に成功していた。だが、戦線を突破しただけでは勝利とは言えない。サッカーに例えれば、ドリブルとパスで中盤を突破し、ディフェンダーをすべて振り切り、ペナルティーエリア内へオフサイドなしにボールを持ち込んだとしても、得点は認められないのだ。シュートしたボールがゴールネットを揺らして始めて、得点となる。

得点する……つまり高原戦士側に大損害を与えるには、ここから迂回包囲に持ち込む必要があった。戦線で戦う高原戦士たちの背後に深く廻り込み、退路を断ったうえで脆弱な背面に攻撃を仕掛け、正面からの攻撃との相乗効果で殲滅させるのだ。

すでに、夏希率いる市民軍短剣兵隊一個と、長槍隊一個は、完全に戦線後方奥に入り込み、高原戦士部隊に対し攻撃を開始していた。さらに、南方から駆けつけた生馬率いる精鋭短剣兵隊二個と、本営の退路遮断を命じられていた長剣兵隊一個も、これに加わりつつあった。

一方、ジンベルによる突破によって孤立し、最西部で抵抗を続けていた高原戦士三百名ほども、救援軍方陣二個と市民軍長槍隊一個によって挟撃され、ほぼ壊滅していた。これにより、ジンベル側は西岸戦線の西側三分の一を完全に制圧し、側面の安全を考慮することなく、余剰の部隊を戦線後方奥深くへ送り込めることとなった。

同時刻の東岸では、ジンベル側の攻勢ははなはだ消極的であった。距離をとって、矢を盛んに射掛けてくるだけだ。

ジンベル側東岸部隊の目的が、高原側東岸部隊の兵力拘束でしかないことを見て取ったビレットは、指揮下の予備部隊千八百名すべてを、西岸へ展開するように命じた。詳細はわからなかったが、西岸部隊の苦戦振りは明白だったからだ。

「奴らめ、今度はどんな手を使ったんだ」  
ビレットが、毒づく。

「こちらの予備部隊が間に合うことを……そして兵力が足りることを願いますよ」

ベンデイスはそう言った。

翼側が一方的に破られた戦線は、脆い。

仮に戦線が突破されたとしても、それが一箇所だけであり、左右の戦線が強固で、なおかつ十分な予備軍を控置してあるならば、その対処は容易ではないが単純である。予備軍を敵侵入部隊正面ないし側面に投入して打撃を与え、これを押し戻しつつ、あるいは殲滅の後、左右の戦線の支援で修復を図ればいい。

だが、翼側が完全に破られた場合は、たとえ十分な予備軍を拘置していたとしても、その対応は困難を極める。単なる戦線の突破口よりもはるかに安全で、幅広い進撃路を相手に与えてしまったことになるからだ。守備せねばならぬ箇所は飛躍的に増大するし、敵の戦術的、戦略的選択肢も増え、防御側は対応が後手に回りやすくなる。主動をつかめねば、消極的防御を繰り返さざるを得ず、そしてそれは防御側の劣勢を意味するのだ。

通常、翼側を大規模に破られた防御側の選ぶべき効果的な戦術は、三つある。ひとつは言うまでもなく後退である。有利な防御戦闘を行える位置まで退き、防備を固めるのだ。もちろん攻撃側は追撃を意図するから、強力な後衛を配したり、遅滞行動を取ったり、欺瞞行動を行ったりする必要があるが、後退そのものに成功すれば損害を僅少に喰い止めることができる。もちろん、その代償に少なくともい土地を失うわけだが。

もうひとつの選択肢は、新たな戦線の形成である。戦線後方へ侵入した敵が、戦線を構成する味方の背後に廻り込めぬように、予備軍を使って既存の戦線の端を基点とする新たな戦線を構築するの

だ。

最後の選択肢は、機動防御への戦術転換である。固定した戦線で侵入部隊を迎え撃つのではなく、機動力に優れた部隊を侵入部隊の弱点である側面や背後に機動させ、積極的に叩くという方法である。言うまでもなくこれには、機動力に優れた強力な予備軍を控置しておく必要がある。残念ながら、すでに高原側はすべての予備部隊を戦線投入した後であり、この手は使いようがなかった。

サイゼン氏族長の本営が健在ならば、この危機的状况を見て取って、後退を命ずるか、あるいはそれ以前、まだ予備部隊に余裕があった時点で、第二戦線の構築を命ずることができたかも知れない。だが、サイゼンは縛られたうえに気絶中であり、その側近たちも戦死するか密林の中へ命からがら逃げ込んだ状態であった。戦線の各指揮官も、部下を叱咤して眼の前の敵と戦うことに手一杯であり、高原戦士の中に戦場全体を見通している者は一人もない状況であった。

敵本営を潰し、指揮統制の麻痺化を図るという拓海の作戦は、実を結びつつあった。

またひとつ、高原戦士の方陣が崩れた。

抵抗を続ける戦士たちに、容赦なく長槍が突き立てられる。槍衾に追い立てられた数名が、待ち構える短剣兵の方陣に押し付けられ、瞬く間に死体となる。その鎧の固さを活かして突っ込んでいった長剣兵が、得物を振り回して逃げる高原戦士を一人、また一人と着実に屠ってゆく。悲鳴と怒号が飛び交い、汗と血しぶきが飛び散る。金属同士がぶつかり合う激しい音、金属が肉体に食い込む鈍い音。常に響いている地面が鳴動しているかのような低い唸りは、何千名もの人々が駆け回ることによって発せられる音響だ。

夏希もいつの間にかやら、乱戦に巻き込まれていた。とにかく目に付く高原戦士を、片っ端から竹竿で突いてゆく。背後にはアンヌッ

力と、三人ほどの短剣兵が付いていてくれるのである程度安心できるが、正面の敵は自らの力で追い払わねばならない。

と、夏希の前に一人の高原戦士が飛び出してきた。赤毛に近い茶色い髪をした、小柄な少年だ。なかなか可愛らしい顔をしているが、その手にはしっかりと投げ槍が握られている。

少年の視線が、夏希を捉えた。顔に、わずかに怯えの色が走る。

夏希は心を鬼にして、その少年の横つ面を竹竿で叩いた。血反吐を吐きながら、少年が宙に浮く。

……いちいち同情などしてられない。

ここは戦場なのだ。油断していれば、夏希も命がない。あの少年には悪いが、命を取られなかっただけでもありがたいと思ってもらわねば。

ようやく包囲されつつあることに気付いた高原戦士西岸右翼部隊の一部が、ジンベル川沿いに後退を始める。

しかしこれは、最悪のタイミングであった。残っている右翼部隊がジンベル川を背にした馬蹄状ないしは半月状の新たな陣形を築き、頑強な抵抗を継続すれば、ビレットが派遣した東岸からの予備軍千八百名によってかなりの兵力が救出されたかもしれない。……もともと、正確に戦局を見極めている指揮官が一人もいない状況では、無理な相談ではあったが。

一部が後退を始めたことによつて、右翼部隊正面の抵抗が弱まり、対峙していた救援軍の圧力が強まる。相変わらず機敏な生馬は、長剣兵部隊を後退を始めた高原戦士方陣の隙間に突っ込ませ、ジンベル川までの回廊を切り開いた。これにより、後退中の方陣二個四百名が、主力と切り離された形でジンベル側によつて包囲された。

それ以降は、典型的な包囲殲滅戦であった。矢も投げ槍も使い果たした高原戦士に、ジンベル側が容赦なく矢を浴びせて弱らせる。長槍兵の方陣が槍袞を作つて圧力を掛けると、高原戦士の方陣はあ

つさりと崩壊した。

ずると、高原戦士たちが押しまくられる。主力から離れ、孤立した小集団の中には、抵抗を諦めて武器を捨てる者が出始めた。武器装具の類をすべて投げ打ち、ジンベル川を泳いで対岸へと逃れようとする者も出る。

東岸から派遣された予備部隊先鋒が、西岸の密林を抜けて姿を現したところには、包囲殲滅戦はほぼ終結していた。先鋒からの報告を受け、残っているジンベル側兵力は三千以上と判断した予備部隊指揮官は、速やかな撤退を命じた。

西岸に差し向けた予備部隊が撤退したことを見て取ったビレットは、指揮下の東岸部隊も素早く撤収させた。西岸のジンベル側部隊が再編成を終え、南下することを危惧したのだ。千八百名の予備部隊では防げない可能性が高く、そうなるに敵に東岸部隊の退路を断たれてしまう。西岸部隊が事実上壊滅した以上、東岸部隊まで失う危険は冒せなかった。

ラッシ隊長も、部隊の再編成は行わせたものの、追撃は断念した。敵に与えた損害は大きかったが、味方の損害もかなり酷く、追撃の余力はないと判断したのだ。

昼前に、すべては終わった。第二次ジンベル南平原の戦いは、前回同様ジンベル側の勝利であった。

「あゝ疲れた」

夏希は竹の水筒を手にした。水を含み、口の中をゆすいでから吐き出す。

あたりは死体だらけであった。上流方向から涼しい風が吹いているにも関わらず、銅に似た鮮血の臭いが埃臭さと混じってしつこく漂っている。

「見事な指揮振りだったぞ、夏希」

汗で体中を輝かせた生馬が歩み寄ってきた。後ろには、穂先はもちろん柄の方にまで紅く血がこびりついた短めの槍を携えた少年が、付き従っている。

「お互い怪我しなくてよかったね」

棒読み口調で、夏希は言った。精神的にも肉体的に疲れて、言葉に感情がこもらない。生温いを通り越して温かな水筒の水をすすって、ほうつと息をつく。

「で、これからどうなるの？」

「そうだな。拓海を見習って、倒れている美少女でも探すか」

「……王女殿下に言いつけるわよ」

「冗談だ、冗談。ま、少なくとも敵侵攻軍の半分は撃破したんだ。

しばらく、高原側は立ち直れないだろう。これで、魔力の源を諦めてくれればいいんだが……」

「なんで魔力の源を欲しがっているかわかればいいんだけど」

「それなら、わかるかも知れんぞ」

生馬の意外な返答に、夏希は少しばかり驚いた。

「……どうやって？」

「高位の高原戦士を捕らえたんだ。本営襲撃の時にな」

自慢げに言った生馬が、片目をつぶってみせる。

「すごい。大手柄じゃない。で、そいつはどれくらい偉いの？」

「敵のトップさ。氏族長サイゼン。上官を逃がすために部下が詐称した可能性もあるが、おそらく本人じゃないかな。尋問が楽しみだね」

「勝ちました！ 凜様、ジンベルと救援軍の勝利です！」

歳若い市民軍兵士が、西の市場に駆け込んでくる。

「……これからが地獄ね」

重傷者の腕に包帯を巻きながら、凜はそつとつぶやいた。

すでに臨時救護所には、処理しきれないほどの負傷者が運び込まれていた。担架……凜の指導で今回始めて導入された器具……に載せられたり、市民の肩を借りて、あるいは地力で歩んできた負傷者たちは、まず最初に医学院の看護係数名によって仮診察を受け、色付きの麻紐を右手首に……右手首がない場合は左手首に……巻かれていた。混乱を極めてしまった前回の救護活動を分析し、改善点を洗い出した凜は、トリアージ（識別救急）の手法を導入していたのだ。

もっとも一般的なトリアージ・タグは四種類である。死亡、最優先治療、待機治療、保留だ。それぞれ黒、赤、黄色、緑で表され、赤のタグを付けられた者……早期に治療を受けないと死亡するおそれがある……が最優先で治療を受けることになる。

凜が導入した『ジンベル式トリアージ』は、六種類に負傷者を分別する過酷なものであった。黒……死亡者。赤……安楽死推奨者。

橙色……要高度治療者。黄色……要低度治療者。青……待機治療者。緑……保留となっている。

黄色は適切な治療を施せば命を取り留める者。青は心急手当を施せば当面命に別状はないが、いずれ本格的な治療を要する者。緑は、軽傷者である。

問題は、橙色であった。高度な医療を施せば命は取り留める者を、積極的に助けるべきか否か。

救護所にそれだけの余裕があれば、もちろん助けられる命である。実際、すでに何人もの『橙色』が、コーカラットを始めとする手術スタッフの手で治療を施され、医学院や仮設天幕に収容されていた。

だが、ここへきて運び込まれる負傷者の数が急増し、傷の縫合などの高度な医療技術を持つ人員の不足が生じていた。すでにコーカラットは寝台二つを並べて、その上に浮かび、一度に二人の負傷者の縫合手術を同時に行うという、某無免許天才外科医も真つ青の離れ業を演じていたし、連続して怪我人を捌いている医学院スタッフの顔にも疲労の色が濃くなってきた。

やむなく凜は、『橙色』の負傷者に対する治療を諦めるように通達を出した。『橙色』一人助けるのと同じ労力で、『黄色』が三人救えるとなれば、見捨てるのも致し方ない。

そして今、戦闘終結の報せが届いた。これ以上負傷者が出ないというのありがたいが、戦闘が終われば当然戦場に転がっている負傷者の搬出が本格化する。おそらくは、何百名もが一斉に運ばれてくるだろう。もちろん、それだけの負傷者を治療する能力は、ここにはない。そうなれば、『黄色』の中からも安楽死処分を行わなければならぬ者を選ばねばならなくなる。

「あたしが一番、業くわうが深いことをしているのかもね」

凜はつぶやいた。拓海が立てた作戦で多くの人々が死に追いやられ、夏希の率いる部隊もたくさんの人を殺しているだろう。生馬に至っては、自らの手で何人もの高原戦士を殺めている。だが、死んでゆくのはみな敵だ。

怪我をして身動きさえままならぬ味方に下される死の宣告。より多くの者の命を助けるためとはいえ、なんと罪深いことか。

「ま、それに動じていないあたしも、我ながら凄くと思うけど」

冷笑を浮かべつつ、凜は次の負傷者に包帯を巻き始めた。

## 32 迂回包囲（後書き）

第三十二話をお届けします。今回は試しに予約掲載を利用してみました。

### 33 膨張する魔界

イファラ族がジンベルに再侵攻した。

軟禁状態であつても、そのくらいはリダにもわかつた。数日前から、周囲が慌しかつたし、今日は夜明け前からやたらと騒々しかつたのだ。朝食はいつも朝日が昇ってからだったが、今回はまだ薄暗いうちに与えられたし、メニューは通常よりも簡素で、炊き立ての米とスープだけ、しかも量が倍くらいあつた。

夜が明ける頃には、誰もいなくなつたのかこそりとも物音がしなくなつた。いつも日中なら聞こえる街の喧騒も、ほとんど聞こえない。……ジンベルが、臨戦態勢を整えたのだ。

夜明け後しばらくすると、喧騒が戻つてきたが、これはいつもとは異なる雰囲気だつた。少なくとも、高原戦士が市街地へと攻め込んだ音ではない。イファラ族が前回同様城壁を突破し、自分が救出されることを期待していたリダは、落胆した。

お昼ごろになると、軟禁部屋の周囲にも人氣が戻つてきた。時折聞こえる笑い声から、どうやらイファラ族はまた敗北したのだと、リダは見当をつけた。朝に食べ残した米を昼食として噛みながら、リダは今後の身の処し方を思案した。

高原戦士の遺棄死体と放置された重傷者……全員が慈悲深く止めを刺された……の概数が出たのは、日没直前であつた。

その数、実に五千百三十余体。内訳は、東岸で百八十余体。西岸で四千九百五十余体である。さらに軽傷者を含め、千二百三十九名が、西岸で捕虜となつた。

対するジンベル側の死者は、安楽死処分された者を含め、両岸合わせてジンベル防衛隊が三十八名、救援軍が六百三名、市民軍が百八十一名に止まつた。合計、八百二十二名である。

「かなりの痛手だが……仕方ないな」

光る球体が照らす中、死体の片付けを行っている高原戦士捕虜を見守りながら、拓海が言った。

「で、次はどうするの？」

地面にしゃがみ込んだ夏希はそう尋ねた。市民軍は再編成ののち、捕虜の管理と負傷者救護の役目を仰せ付かったので、指揮と調整に大童だった夏希は相当疲労していた。昼食は立ったまま岩塩を舐めつつ冷めた米を頬張っただけだし、そろそろまともな食事をしてから水浴びしたいところだ。

「とにかく勝利を飾れて、平原諸国軍の機嫌を損なわなかったのは大きいね。これで、ジンベルの財布が続く限り味方に留まってくれるだろう」

「いつまで財政が持つものやら……」

ため息混じりに、夏希は言った。市民軍にも、多数の死者が出てしまった。彼らはジンベルの労働人口の中核である。今後は戦いの度に、ジンベルの経済規模は玉葱を剥くように小さくなってゆくだろう。

「そろそろ俺や生馬でなく、瞬の出番かもしれないな」

「外交手段で解決するってこと？」

「生馬がイファラ族の氏族長と名乗る男を捕虜にしたのは知ってるな？」

拓海が訊く。夏希はうなずいた。

「複数の捕虜が、気絶しているその男を見てサイゼン氏族長だと認めた。間違いない、本人だ。うまく懐柔すれば、ジンベル侵攻を断念させることができるかも知れん」

「懐柔ねえ。具体的に、どうするの？」

眼を細めて拓海を見上げながら、夏希はそう訊いた。生馬の話を聞く限り、サイゼンはかなり頑固でプライドの高い戦士のような。簡単に懐柔できるとは思えない。

「その役目をあんに頼みたい」

「わたし？　なんで？　瞬でいいじゃない」

「生馬と瞬とも相談したんだが、適役はあんたなんだ。ジンベル人でも平原の民でもない、という事で異世界人ならば中立的立場を装うことができる。瞬は外務大臣補佐だし、すでにジンベルの利益代表とし動きすぎている。凜ちゃんは軍事に関わっていないから、なめられる」

「どついうこと？」

「高原の民は誇り高き狩猟民族で、サイゼンは戦士だ。戦士でなければ、対等の立場には見てもらえないそうだ」

夏希を見下ろしつつ、拓海が説明する。

「なら、なおさら生馬が拓海でいいじゃない」

夏希はそう主張した。拓海が、渋い顔をする。

「俺は見た目で侮られるよ。どう見ても、歴戦の戦士タイプじゃないからな。生馬は直接刃を交え、しかも負けた相手だ。誇り高き戦士としては、簡単には心を許すことはできないだろう。あんたは異世界人で、戦士で、サイゼンとは初対面で、押し出しも良い。おまけに女性で、しかも美人だ。懐柔役にはぴったりだろう？」

「……なんかごまかしがあるような気がする」

夏希はうめくように言った。

「とにかく、明日からサイゼンの尋問を進めてくれ。うまくいけば、イファラ族がなぜ魔力の源を求めているかがわかるし、戦争を止める方策も思いつけるかもしれない。このままじゃ、ずるずると死人が増えちまうばかりだ。こんなむなししい戦い、一刻も早く終わらせるに限る」

「同感ね」

口元を手で覆いながら、夏希は応じた。風向きが変わり、死臭がこちらへ漂ってきたのだ。この気候である。死体は生理機能が停止した次の瞬間から、腐敗を始めてしまう。

「ジンベルの未来のみならず、俺たちの将来も掛かっているんだ。頼むぞ」

拓海が手を伸ばし、遠慮がちに夏希の肩に手を置いた。

戦勝祝賀会は、前回と違い派手であった。

救援軍を構成する各国への顕彰と慰労の意味合いが強かったため、ある種の外交ショーとなったためだ。異世界人も当然全員が出席を強いられた。

水浴びだけ済ませた夏希は疲労を押し隠し、シフォネ手縫いの一張羅のドレスを纏って出席した。空腹だったので、恥も外聞もなく出された料理をぱくつく。

今回の主役は生馬であった。なにしろ、敵の総指揮官を生け捕りにしたのだ。各国の指揮官クラスが、よってたかつて生馬に酒を押し付ける。

夏希も色々な国の人から言葉を掛けられたが、それらはドレスや容姿を褒め称えるものではなく、武勇を賞賛するものであった。しかも、いつの間にか『竹竿女将』だの『竹竿の君』などという恥ずかしい二つ名まで奉られている始末。

「もう竹竿以外の武器は使えないな」

引き攣った笑みを浮かべている夏希を、拓海が茶化する。

「いつそのこと、防具も竹にしたら？ 某貧乏パーティのお人よしファイターみたいに」

「なに、それ」

凜の突っ込みに、夏希は怪訝な表情で応じた。

「愛嬌を振りまいてくれよ。君の株は急騰中なんだから」

夏希の耳に、瞬がささやく。

「指揮官クラスはもちろん、平の兵士にも人気が出ている。今後とも同盟諸国の参戦を継続してもらうには、君の存在は大きいんだ」

「……人気ねえ」

「人気は重要だぞ」

真顔で、拓海が言う。

「カエサルがどれだけ民心を掴むのに腐心したか。現代の民主主義国家の軍隊なんて、敵よりもマスコミの方が手強いと思ってるくらいだし。ともかく、あんたと生馬はいまやジンベルの二枚看板、ツートップだ」

「三枚看板じゃないの？」

夏希は、ちよつと首をかしげて横目で拓海を見やった。

「いや。俺は裏方に徹するよ。参謀の匿名性つてやつだな。俺みたいなタイプがしゃしゃり出るとろくなことにならないことは、歴史が証明しているしな」

拓海が苦笑いして、手にしていたグラスに口をつけた。

シフォネの声にむりやり起こされ、代わり映えのしない朝食を摂った夏希は、アンヌツカを伴ってジンベル防衛隊本部へと出向いた。そこに、サイゼン氏族長が拘禁されているのだ。

「おはよう、夏希」

出迎えてくれたのは、生馬だった。

「大丈夫？ お酒残ってるんじゃないの？」

「寝たら抜けたよ。……準備は整っている。尋問にはこの部屋を使ってくれ」

案内されたのは、本部棟にほど近い棟の一角にある狭い部屋だった。テーブルひとつに椅子が二つ。隅の棚の上には、供述調書用の筆記用具が一式。明り取りの窓はあるが、薄暗く陰気な部屋だ。冷水配管が通っているので、けっこう涼しい。

「デスクライトはないの？」

「ない。ついでに言っておくと、昼になってもカツ丼は出ないぞ」

夏希のポケに、生馬が苦笑しながら付き合ってくれる。

「サイゼンは別の離れの一室に拘禁されている。ついでに言つと、その隣には拓海が拾った女の子が入ってる」

「それなら、その拘禁されている部屋で尋問する方が面倒がないじ

やない」

「尋問の際に、専用の部屋に連れ込むというのは基礎的なテクニクだよ。たとえ囚われの身であっても、寝起きする場所はホームグラウンド的な感覚を持つものだ。常にアウエーの感覚を与えてやるのさ。まあ、今回はあまり追い込んで意味ないが」

「なるほど」

「警備には、兵士二名、市民軍兵士一名を手配してある。アンヌツカもいることだし、サイゼンも面倒は起こさないだろう。お前さんは座って待っていてくれればいい。大物ぶってね」

生馬が、顎で椅子のひとつを指す。

「サイゼンの調子はどうなの？ 昨日、生馬が気絶させちゃったんでしょ？」

夏希はそう訊いた。後遺症が残っていたりすると、尋問に差しさわりがあるかもしれない。

「……かなり酷い打撲を負わせちゃった。ま、俺の腕もまだまだ未熟というところだな。しばらく腹が痛むと思うが、奴も武人だ。たぶん弱音は吐かんよ」

「弱音を吐かない武人なら、懐柔するのも難しそうね」

「お前が先に弱音を吐いてどうする。じゃ、後は頼むぞ。尋問が終わったら、警備の兵に言って部屋に戻させてくれ」

「その前に。ここでおいしいお茶飲めるかしら？」

生馬を引き止めた夏希は、そう尋ねた。懐柔させるのならば、それなりにサービスすべきだろう。とりあえずお茶ぐらい用意しておきたい。

「わかった。先に厨房の誰かを寄越すよ」

「わたしはイファラ族氏族長サイゼンだ。貴殿は？」

市民軍兵士に先導されて入ってくるなり、サイゼンが昂然と言い放って、座っている夏希を見下ろした。

「わたしはジンベル市民軍隊長、夏希です。どうぞお座り下さい、

氏族長」

夏希はサイゼンの視線を受け止めつつ、慇懃に言った。  
視線を夏希から逸らさないまま、サイゼンがテーブルを挟んだ向かい側に腰を下ろす。

サイゼンに続いて入ってきた武装兵士二名が、扉の両脇に立った。市民軍兵士は夏希に一礼してから、廊下に出て扉を閉めた。邪魔が入らないようにそこで立哨するのが、彼の役目である。

アンヌツカは例によって、夏希の背後で後ろ手を組み、静かに立っている。

夏希はしばしサイゼンを観察した。禿げ上がった頭と、力強くかつ知的な眼。いかにも精力に溢れた中年男、といった風情だ。

……これは手強そうな。

夏希は眼を逸らさないまま、にこりと微笑むと、言った。

「お茶は好きですか？」

「嫌いではないな」

夏希はわずかに横を向くと、うなずいた。合図を受けてアンヌツカが、棚の上に置いてあった茶道具を使ってお茶を淹れ始める。

……お世辞とか通じそうな人物じゃないわね。

お茶が入るのを待ちながら、夏希はそう判断した。むしろ、単刀直入に話し合ったほうが、いい結果が得られそうな気がする。

アンヌツカが、湯飲みを夏希とサイゼンの前に置く。

「どうぞ」

自分の湯飲みを手にしながら、夏希はお茶をサイゼンに勧めた。

「うまい茶だ」

ひと口味わったサイゼンが、表情を変えぬまま言う。

「外見でお判りかとも思いますが、わたしは異世界人です」

湯飲みを置いた夏希は、そう切り出した。

「つまりは、ジンベル人でも平原の民でもありません。ジンベル王国に雇われて、協力しているだけです。この戦争においては、きわめて中立的な立場にあります」

「ほう」

「わたしはこの戦争を終わらせたいのです。ご協力いただけますか？」

「ジンベルが魔力の源の管理を我々に任せれば、戦争は終わる。簡単な話だと思うが？」

やや皮肉めいた口調で、サイゼンが答える。

「魔力の源は、ジンベルには必要不可欠なものです。イフアラ族に譲渡するわけには参りません」

「くれと言っているわけではない。魔力を減らさなければいいだけだ」

「しかし、魔術を使わねばジンベルの産業は……」

「魔界に飲み込まれてしまえば、産業どころの話ではいただろう。ジンベルを滅ぼしたいのか、貴殿は？」

「はあ？」

話の脈絡がつかめず、夏希は啞然としてサイゼンの顔を見つめた。夏希の表情に気付いたサイゼンが、噛んで含めるように説明を始める。

「サーイエナ様が主張された通り、このままでは数十年以内に高原地帯が魔界に飲み込まれてしまう。言うまでもなく、魔界で人間は生存できぬ。いずれ、平原地帯も飲み込まれることは必至だ。だがその前に、高原の民が生き延びるために平原地帯に押しかけるだろう。平原の民はそれを受け入れないから、間違いなく全面戦争が勃発する。そのような悲惨な未来を防ぐために、ジンベル人は一刻も早く目を覚ますべきなのに……」

「ち、ちよつと待って下さいます？」

夏希はサイゼンの説明を押し止めた。

高原地帯が魔界に飲み込まれる？ それと魔力の源がどういう関係なんだ？

「お話を整理させてもらいますが……高原地帯が魔界に飲み込まれるそうのですか？」

「そうだ」

「で、魔力の源を……」

「貴殿らが魔術を使えば、魔力の源が減ってしまう。魔力の源が減れば、魔界が広がる。それだけの話じゃないか。サーイエナ様は以前からこのことをヴァオテイ国王に警告し、魔術の使用を抑制するように何度も親書を送ったが、ことごとく無視された。だから自衛のために、わがイファラ族は各氏族の依頼を受けてジンベル侵攻を行ったのだ。強制的に、ジンベルの魔力の源を管理するために……それくらい、承知していなかったのか？ ああ、異世界人だからな。知らされていなかったのか。しょせん、貴殿らも国王に雇われた他人でしかないのだな」

言い終えたサイゼンが、腕を組んで上体を反らした。冷ややかな視線で、夏希を眺めている。

「本当なのでしょうね？」

「嘘をついてどうする。そんなことをしても、わたしに利益はない」  
「御自分の鉈に掛けて、嘘は言っていないと誓えますか？」

夏希はサイゼンの眼を覗き込むようにして尋ねた。

「無論だ。わたしの鉈に掛けて、嘘は言っていない」

即座に、サイゼンが応じた。口調は、力強くかつ落ち着いている。魔界。雑草すら生えていない、荒涼たる不毛の地。魔物以外の生命の存在が許されぬ領域。

……それが本当に膨張しつつあるとすれば、大問題である。

「今回の尋問はここまでとします」

勢いよく立ち上がった夏希は、警備兵二名につかつかと歩み寄った。

「ここで見聞きしたことは他言無用です。漏らせば厳罰に処せられます。いいですね？」

声に威厳を込め、兵士を見下ろしながら通告する。

「承知しました、市民軍隊長」

「もちろんであります、夏希様」

二人の兵士が、熱心な口調で応じる。

「では、サイゼン殿を元の場所へ戻すように」

サイゼンを引き連れて、二人の兵士が出てゆくを見送った夏希は、黙って立っている副官を見やった。

「アンヌツカ。あなたもこの件に関しては口を閉ざしていてももらえるかしら」

「むろんです、夏希様」

とにかく仲間と相談せねばなるまい。

王宮に集まるのは気が進まなかった。サイゼンの証言が嘘偽りのないものだとすれば、ヴァオティ国王は夏希らを騙していたことになる。

結局夏希が会合場所に選んだのは、市民軍本部であった。本部と言っても、市街地の空き家を改装した小さなもので、臨時に雇われた庶務員が三人交代で詰めているだけだが、市民軍隊長たる夏希なら好き勝手に使うことができる。アンヌツカを連れそこへ向かった夏希は、庶務員に命じて数名の市民軍兵士を集めさせた。彼らに緊急招集の旨を書いたメモを渡し、他の四人を探させる。

やがて文句を垂れながらも集合した四人の異世界人に、夏希はサイゼンが語った事柄を詳しく話して聞かせた。

「サイゼンの話、信用できるのか？」

聞き終えて最初に質問を放ったのは、拓海だった。

「それはわからないわ。とりあえず、自分の鉦に掛けて真実だと誓ったけど。初対面のおじさんの嘘を見抜けるほど、人生経験豊富じゃないし」

「とりあえず、話の辻褄はあってるね」

瞬が、うなづく。

「おい、瞬。外務大臣はこのことを知っていたのか？」

拓海が今度は瞬に向け、質問を放つ。

「それはわからないな。あくまで僕は補佐だからね」

「でも、仮に氏族長の話が本当だとしても、どうしようもないでしょう。魔力の源を使うのをやめたら、ジンベルは干上がっちゃうわ」  
大げさな身振りを交え、凜が言う。

「確かにそうだ。しかし、魔力の源が魔界の広さと関係しているとはな。どういう仕組みになってるんだ？」

生馬が首を傾げる。

「まったくの当てずっぽうだけど、もともと魔力の源は魔界の広がりを押さえるためにあったんじゃないかしら」

自信なさそうに、凜が言った。

「で、後年誰かがそこから力を引き出す技、つまり魔術を編み出した。その結果、魔界は徐々にかつ密やかに広がっていった。最近になって人間の居住域にその境界が迫り、魔界の膨張が知られるようになった。そのことに気付いたサーイエナとかいう巫女が、イファラ族を焼き付けた、と」

「そんなところかも知れないね。それよりも問題は、国王陛下が僕たちを騙していたことだよ。イファラ族の侵攻理由に心当たりがない、と説明していたからね」

瞬が難しい顔で言う。

「そうよね」

夏希はヴァオティ国王に謁見し、なぜイファラ族がジンベルを攻めるのかを尋ねた時のことを思い起こした。あれはまだ生馬が召喚される前のことだ。……なんだかずいぶんと昔のことのように思える。

「サーイエナの親書が届かなかった可能性はないのか？」

「何度も出したのなら、届いたと考える方が自然だね」

生馬の意見を、瞬がやんわりと否定する。

「側近の誰かが握り潰したのかも知れないぞ」

拓海が見解を述べる。

「提案。まずは傍証を固めるべきよ」

凜が小さく拳手して、そう主張した。みな視線が、凜に集中す

る。夏希は訝しげに問うた。

「どうしようというの、凜ちゃん？」

「魔界についてなら、すぐ近くに専門家がいるじゃない。生まれ育った……かどろかは定かじゃないけど、魔界出身者が」

「だが、彼女に相談すれば、必然的にエイラも巻き込むことになるぞ」

拓海が指摘する。

「ちょうどいいわ。エイラも仲間にしちゃいましょうよ。彼女は信頼できるでしょ？」

凜が言って、期待を込めた眼で夏希の顔を見る。

「……そうね」

夏希はゆっくりとうなずいた。夏希が個人的に信頼しているジンベル人を挙げるとすれば、上から順にアンヌツカ、エイラ、シフォネといったところだろう。

「今頃はたぶん王宮にいるはずね。あまり行きたくないけど、王宮に場所を移しましょうか」

「それがいいわ。ここ、暑いし」

手で首筋のあたりを扇ぎながら、凜が賛成する。空き家改装の臨時本部なので、冷水の配管が設置されていないのだ。

「エイラの仕事部屋に全員で押しかけるのか？」

生馬が、訊いた。

「それよりも、わたしと凜の仕事部屋に呼び出したほうがいいですよ。とりあえず、移動しますか」

夏希は立ち上がった。

### 33 膨張する魔界（後書き）

第三十三話をお届けします。来週より作者は恒例の夏休みに入りますが、更新は予約掲載を利用していつも通り毎週土曜日夜十九時前後に行う予定です。ただし感想など頂いた場合の返信等は大幅に遅れることがあります。ご了承ください。

### 34 インドシナ戦争

「魔界が広がっているなんて、初めて聞いたのですう」

エイラと共に仕事部屋に呼び出され、ことの次第を聞かされたコーカラットが、戸惑っているのかボディを小刻みに揺らしながら言う。

「ただでさえ魔界は広くて、寂しいところなのですう。これ以上広がっても、意味がないのですう」

「コーちゃんでもわからないか」

夏希は小さく嘆息した。

「もし本当だとしても、最近のことであれば、わたくしには知りようがないのですう。最近、魔界には帰っていませんからあ」

「ほう。何年くらい里帰りしていないんだ？」

拓海が訊く。

「かれこれ二百年近くになりますでしょうかあ」

「……二百年で最近なんだ。時間の概念が違いすぎるわね」

凜が、呆れる。

「ねえ、コーちゃんって何歳なの？」

ふと疑問に思った夏希は、そう尋ねてみた。

「魔物には、年齢を数えるという習慣がないのですう。だから、わからないのですう」

「そりゃそうだな。誕生日もなければ寿命もないんだから。歳なんか数えても、無意味だ」

生馬が笑う。

「本当に魔界が広がっているのならば、棲んでいる魔物はみな気付いているはずですよ。魔物の賢者なら、このことについて詳しく知っているかもしれませんがあ。お役に立てなくて、申し訳ないのですう」

そう言ったコーカラットが、ぺこぺこボディを前に傾ける。

「どう思う、エイラ」

夏希は、コーカラットの主人おんじに話を振ってみた。

「もしサイゼン氏族長の話がすべて真実とするならば、おそらく陛下はその親書の内容を信用しなかったのではないでしようか」

考えながら喋っているのか、ゆっくりとした口調でエイラが言った。

「あるいは単にジンベルを陥れる罠、またはジンベル侵攻を正当化するための口実と看做したのかもしれませんが」

「その可能性は、高いね」

瞬が、言った。

「無理難題を吹っかけて、断られたり反発の姿勢を見せたりしたところで、理はこちらにありとして開戦、なんてやり口は古代からの常套手段だし」

「いずれにしても、戦争が終わるのならば喜ばしいことですわ。わたしでお役に立てるのなら、みなさんのなさっていることに協力するのはやぶさかではありません」

エイラがそう言って、夏希の手をぎゅっと握った。

「ありがとう、エイラ。あなたが仲間になってくれるのならば、心強い限りだわ」

「まったく。さて、当面の問題は、陛下が受け取ったはずの親書をどうしたかだな」

笑顔を見せた拓海が、難しい顔になって腕を組む。

「真相は、陛下に直接訊いてみるしかないわね」

夏希は、その視線を生馬に向けた。

拓海、瞬、凜の視線も、生馬に集まる。

エイラとコーカラットの眼も、生馬を見つめた。

「俺か？俺が訊かなきゃいけないのか？」

自分を指差しつつ、生馬が当惑げに問う。

「だって、今回の戦いの最高殊勲者だし」

「俺よりも地位は上だろ？」

「イブリス王女というコネもあるしね」

「なんなら、手土産用にクッキー焼いてあげようか？」

「生馬殿は、陛下のお気に入りでしょう」

「生馬様なら、安心なのですう」

皆が口々に、生馬を推す。

「わかったわかった。聞いてくりやいいんだろ」

諦め顔で、生馬が言う。

「ずいぶん遅かったわね」

戻ってきた生馬に、夏希は不信の念がこもった視線を浴びせた。

「いくら俺でも、陛下にアポなしでほいほい会えるわけじゃない。

かなり待たされたよ。その上、しばらくイブリスに捕まってお茶飲んでた。……と言うわけだから、凜ちゃん、お茶淹れなくていいよ。胃が水分でたぶたぶだ」

気を利かせて茶を淹れようとした凜を、生馬が止める。

「それで、どうだった？」

「ほぼエイラの予想通りだ。親書は来たが、内容が信用できなかつたそう。もし本当ならば、手紙ではなく外交使節を送ってくるはずだ、と考えていたら、侵攻準備を進めているという情報が入ってきた。あとは……知つての通りだ」

「本当かどうかは、確かめようがないわね。……って、別に陛下を疑つてるわけじゃないけど」

凜が、エイラに視線を走らせつつ言い訳する。

「外交使節を高原に送れば、確かめられるかもしれないけど、陛下にその気がないからねえ」

瞬が、ぼやく。拓海が、指を立てた。

「整理しよう。魔界膨張うんぬんが、高原の謀略なしでつち上げだとするれば、こちらは別に手を打つ必要性がない。これからも侵攻してくるであろう高原戦士を、肅々と撃退するだけだ。むろん、戦争終結に向けてイフアラ族と交渉する余地はあるがね。しかし、も

し真実だとすれば、それなりの対策を考える必要がある。サイゼンが言った通り、平原の民の生活圏が魔界の膨張によって脅かされれば、彼らは押し出されるように平原進出を企むだろう。何年後、あるいは何十年後になるかは知らないが、大戦争になるのは間違いない」

「密林を切り拓けば、平原の民の入植地くらいできそうなものだけだ」

夏希はそう言った。地図で見ると、平地帯はかなりの面積がある。そのうち、人が住んだり耕作地に利用しているのは、ごく一部でしかない。

「先住民と移民が共存する社会というものは、成立が難しいんだよ」瞬が、説明を始めた。

「強制的な同化政策を取れば、いずれは対立が解消され、平和な共存社会が作れるが、その場合先住民にしろ移民にしろその文化的独自性は著しく破壊される。北米やオーストラリア、中央アジア東部なんか、いい例だよ」

「北米やオーストラリアはわかるけど、中央アジア東部って、そんなことあったっけ？」

夏希は首を傾げた。

「あのあたりは昔から、多民族が混住する独自の文化をもつユニークな地域だったんだ。だが、東から中国の各王朝の圧迫と支配、それに漢民族の移民の波を受けて変質していった。今じゃほとんどが中華人民共和国の版図だ。……今のチベット問題の根も、その延長線上にあると言ってもいい。特に、あそこがいわゆる中国の一部になったのは、清王朝からだからね。……話を元へ戻すと、平原と高原の場合、人口は高原のほうが多い。入植地ができれば、そのライフスタイルは平原の民のそれに近くなるだろうが、高原側は多数者である自分たちのやり方を変えないだろう。文化的には相容れないまま、政治的に対立することになる。良くて冷戦状態、悪くすれば民族浄化が始まるだろうね」

「ぞつとしない未来ね」

夏希はうめいた。民族浄化となれば、市民同士の殺し合いになる。ここには国連も、軍事介入してくる超大国も、和平を仲介してくれる人道的なNGOも、悲惨な状況を世界中に発信してくれるマスコミも存在しないのだ。いったん始まれば、どちらかが事実上根絶やしになるまで続くに違いない。

「ベンデイス。決心は変わらぬか？」

肯定の言葉が返ってくるのを承知で、ビレットはそう訊いた。

「はい。申し訳ありませんが」

荷物の整理をしていたベンデイス立ち上がり、わずかな日数ではあったが上官だった男に向かって、深々と頭を下げる。

二度目の戦いも、イフアラ族側の惨敗であった。総兵力一万三千五百。戦闘に投入した兵力一万三千三百。死者行方不明六千四百。負傷者一千百。

半数以上が死傷。作戦目的未達成。おまけに、総指揮官サイゼン氏族長行方不明。

とりあえずビレットを総指揮官代理に据えた高原戦士たちは、皆まで後退しつつ負傷者の救護と後送を急ぐとともに、その防備を固めた。幸い、今のところジンベル側は皆奪回に動く気配を見せてはいない。ビレットは手元に三千の兵を残し、他の兵は負傷者に手を貸しつつ高原まで戻るように命じた。

今後の方策は決まっていなかった。氏族長が失われた以上、支族长会議で氏族長代理……死亡が確認されていない以上、新氏族長を選ぶわけにはいかない……が決まるまでは動きようがない。

そんな最中であった。ベンデイスが、補佐役の辞任を願い出たのは。

ビレットは、即座にその願いを聞き入れた。強い決意を秘めたベンデイスの眼を見て、慰留をあっさりと諦めたのだ。有能な補佐役

を失うのは痛い、仕方ない。

「……まさかとは思うが、リダを助けに行くのではあるまいな？」  
ビレットの問いかけに、私物をまとめていたベンデイスの手が、  
ぴたりと止まる。

「やはりそうか」

苦笑いしつつ、ビレットは言った。ベンデイスの気持ちは、理解  
できた。東岸の本営は、ジンベル南城壁から十数シキツホのところ  
まで迫ったのだ。おそらく、リダはそこから三十シキツホと離れて  
いない場所に捕らえられていただろう。子供の足でも、容易にたど  
り着けるほど近くに。

最愛の妹を目前にして、引き返さねばならなかった兄の苦悩。

「で、目算はあるのか？」

「ツルジンケン支族に、平原の民との混血が二人います。二人とも  
農民ですが、信頼できる男です。彼らと共にいれば、平原地帯でも  
目立たないでしょう。それに、ハンゼイ氏族の商人に、友人がひと  
りいます。小規模ですが、平原と商取引している彼なら、いろいろ  
と便宜を図ってくれるはずですよ」

ビレットから視線を逸らしたまま、ベンデイスが言った。

「……止めても無駄だろうな。」

ビレットはそう思った。短い付き合いだったが、そのことがわか  
るくらい、この若者とは親しくなった。

自らジンベルに赴いて妹を救出する。あまりにも危険な計画であ  
る。むろん、ベンデイスのことだから、それなりに成算があると踏  
んでいるのだろう。自暴自棄になって無茶をするような男ではない。  
……少しばかり手を貸してやるか。この有能な若者を、簡単に死  
なせるわけにはいかない。

「バチーラ支族に、平原との混血の女性がいる。若すぎるので戦に  
は参加しなかったが、狩人としては優秀だ。見た目は、平原の民と  
ほとんど変わらない。もし良かったら、一緒に連れて行ってやって  
くれ。役に立つだろう」

ビレットは、淡々とした口調で言った。ベンデイスが、顔に驚きを浮かべて振り向く。

「よろしいのですか？」

「ああ。手紙を持たせてやろう。彼女なら、喜んでついて行くはずだ」

「ありがとうございます、ビレット殿」

ベンデイスが姿勢を正し、深く頭を下げる。

「妹御を救い出すついででいいから、土産も欲しいな。ジンベルの内部事情も探ってきてくれ。何人か、ジンベルの異世界人も攫ってきてくれると助かる」

ビレットは冗談を飛ばした。だが、真に受けたのか、ベンデイスが困り顔をする。

「冗談だ、冗談。ともかく、気をつけてな。無事戻ってきたら、また手伝ってもらおうぞ」

「はい、ビレット殿」

ベンデイスが、深くうなずいた。

「まず僕から報告させてくれ」

プチ会議の場で、珍しく瞬が最初に発言を求めた。

「外務大臣からイファラ族との和平交渉について陛下に意見具申がなされたが、その場で却下された。高原戦士がいまだ砦を占領中だというのが、表向きの理由だ」

「裏の理由は？」

夏希はそう尋ねた。表があるなら、裏もあるはずである。

「それは、拓海か生馬から説明してもらった方がいいだろう」

瞬が、両脇に座る仲間二人を、代わる代わる見る。

「……あー、救援軍は、この戦争を終わらせる決定的な作戦として、高原侵攻計画を策定中なんだ」

「なんですって？」

生馬の言葉に、夏希は思わず驚いて身を乗り出した。

「正確に言えば、救援軍の中の積極派が、だな。慎重派は乗り気じゃない」

拓海が、補足する。

「高原に攻め入っても、戦争は終わらないでしょうに。イファラ族を追い散らしても、他の高原氏族に攻撃されるだけだわ」

凜が、指摘する。夏希もうなずきで同意した。

「それに関しては、イファラ族が造った軍用路を使って高原地帯に至り、ジンベル川沿いに要塞都市を建設するという案が積極派から出されている。つまり、前線を高原地帯に押し進め、守り易い拠点を作ってしまうおうという算段だな。そうして、軍事的優位を得てから、和平交渉に入る」

テーブル上のホワイトボードに略図をさらさらと描きながら、拓海が説明した。

「うまく行きそうにない案ね。すべての平原の民の怒りを買っちゃいそう。それに、時間もお金も山ほど掛かるんじゃない？」

夏希はそう意見を述べた。時間はともかく、今のジンベルにそのような大規模軍事行動を起こせるほどの金銭的余裕はないはずだ。

「それに関しては、スポンサーがつきそうなんだ。積極派の中心が、ニアンでね。資金も兵力も出し惜しみしない、と言っている」

「その計画に、陛下が乗せられたわけ？」

凜が、辛辣そうな口調で訊く。

「それはどうか。陛下の考えまではわからないが、前回の戦いでニアンには世話になったからな。ここでニアンの機嫌を損ねて、派遣兵力の引き上げ、なんてことになったら、同調する国も出てくるだろうし、ジンベルはまずい状況に置かれるはずだ」

そう言った拓海が、同意を求めるかのように瞬を見た。瞬が、うなずきで応ずる。

「生馬と拓海は、この計画がうまくいくと思ってるの？」

凜が訊く。

「俺は乗り気じゃない。高原戦士の度胸と粘りはたいしたものだ。おまけに、誇り高い連中だ。侵攻などしたら、怒り狂って攻め寄せてくるだろう。それに、連中の土俵で戦うのもぞつとしない」

戦いの様子を思い起こしたのか、心底嫌そうな表情で、生馬が首を振る。

「俺も絶対に反対だ。わざわざ新たな戦争目的を高原の民に与えてやるなど愚かなことだ。それに、恐ろしいことに高原の民にはその重心と言える適切な戦略目標がない」

拓海も同調する。夏希は聞き慣れない言い回しに首を傾げた。

「なに、その重心と言える適切ななんとかって？」

「戦争の帰趨を決定付ける戦略目標だ。たいていの場合、それは敵の軍事力となる。軍隊を失えば、当然継戦能力を失うからな。軍隊がない場合は、政治中枢を制圧するしかない。普通は、首都の占領だ。具体的な政治中枢がない場合は、政治指導者を狩るしかない。言わば、アフガニスタン状態だな。こうなると厄介だ」

拓海が説明する。夏希はうなずいた。

「なるほど。それは理解できるわ」

「高原の民は、知つてのとおり常備軍を持たない。したがって、動員を解いてしまえば継戦能力を失わないまま戦略目標たる戦力を隠すことができる。このような場合の対抗手段は、政治中枢の破壊か地域社会の制圧ないし破壊を行うしかない」

「地域社会の制圧というと、占領すること？」

凜が、訊いた。

「占領と、それに伴う新たな支配体制の確立だ。アメリカがイラクで行つたような」

「じゃ、破壊は？ 住民虐殺とか？」

凜が、さらりと恐ろしい単語を口にする。

「それも地域社会の破壊の一種だが、そこまで極端でなくとも破壊は可能だ。アメリカがベトナムの一部で行つたような、戦略村の建設なんかも破壊だな」

「千百村？」

聞き違えた夏希は、きよとんとした表情で拓海を見た。

「第二次インドシナ戦争……いわゆるベトナム戦争で、NLF……ベトコンという蔑称の方が通りがいいが……の跳梁に悩まされたアメリカは、NLFを支援している敵対的な住民と、それ以外のいわば『消毒済み』の住民を区別しようとして、後者を戦略村と称する防備の固い小要塞に移住させようと試みたんだ。ゲリラ戦術を取るNLFは、地域住民であるベトナム農民から切り離されたら、干上がってしまうからね。アメリカ軍と南ベトナム軍が、親北的な農民を締め上げていけば、NFLの活動を封じ込められる、という寸法だ」

「でも、うまく行かなかつたんでしょ？」

夏希はそう言った。現代史は詳しくないが、ベトナム戦争の映画くらい見ているから、最終的にアメリカがベトナムから追い出されたことくらい知っている。

「まあ当たり前の話だがな。農民から先祖伝来の田畑を取り上げたりしたら、反発されるのは当然だ。アメリカは戦略村以外にも、親北的な村落を破壊して農民の移住を半ば強制するようなこともやっている。地域社会を自分たちに都合のいいように丸ごと作り変えようとしたわけだ。一種のスクラップ&ビルドだな。いかにもアメリカらしい手法だ」

「酷い話ね」

夏希は眉をひそめた。

「何のこれしき。同じようなことは、強国ならどこでも大なり小なりやってるよ。中国の各王朝。帝政ロシア。大英帝国。新大陸におけるイスパニアとポルトガル。……なんか話がずれたな。高原の民の場合は、幸いなことに政治中枢がある。これは各氏族の長と、それを支えている各支族長だ。俺が聞いた話では、氏族長が死ねばすぐに代わりの者が新氏族長となり、後を継ぐそうだ。社会制度も素朴で、誰でもが指導者になれる素質を持っていると言える。例えば

悪いが、ヒュドラーみたいなものだ」

「ヒュドラーって、なんだっけ？」

なにかの伝説や神話に出てくる化け物か怪物、ということだけはなんとなく知識として、夏希の頭の隅に入っている。

「ギリシヤ神話の多头蛇ね。頭を切り落としても、新しいのが生えてきて復活しちゃうのよ。ヘラクレスに退治されちゃったけどね」  
ファンタジー小説好きのせいかな、神話や伝承にも強い凜が、ざつと説明してくれる。

「そんな連中のホームグラウンドに入り込んで、戦争するなんて自殺行為だ。要塞都市など造っても、ディエンビエンフーみたいになるぞ」

拓海が、憤然として言い放つ。

「……天秤風？」

「第一次インドシナ戦争。フランス軍が、大敗したところよ」

「これまた歴史通の凜が、教えてくれる。

「とにかくこの計画は中止させた方がいいよ。まだ構想段階だが、この手の計画は早めに潰しに掛かった方が効果的だ。みんな、それぞれの影響力とコネを使って、中止させる方向に働きかけてくれ。いいね」

瞬が、他の四人を見回した。

### 34 インドシナ戦争（後書き）

第三十四話をお届けします。今回は予約掲載になります。感想などいただいた場合返信が大幅に遅れる可能性が高いです。ご了承ください。

### 35 皆奪還作戦

「突然で悪いが、明日からちよつと旅に出る」

『プチ会議』の席で、唐突に瞬が発表した。

「旅に出るって……出張でしょ？」

眉をひそめた凜が、瞬を軽く睨む。

「まあね」

「で、目的はなんだ？」

気のない様子で、拓海が訊いた。

「最近のニアンの動き、おかしいとは思わないか？」

質問に正面から答えずに、瞬が遠まわしな質問で返す。

「……言われてみれば、少し変よね」

凜が眼鏡のずれを直しながら、言う。

「たしかにおかしいな。平原一の大国とはいえ、今回の戦いに力を入れすぎてるしな」

生馬が言う。夏希もうなずいた。抛出した正規兵力一千。市民軍三百。無償食糧援助もしてくれだし、最近では無担保の借款まで申し出てくれている。

「高原侵攻作戦の主導もニアンだ。俺も、裏に何かあるんじゃないかと勘繰っていたが……」

拓海が、腕を組む。

「色々と情報を集めているんだが、ジンベルには集められる情報に限りがある。エボダ、ススロン、ニアンと廻って、色々と嗅ぎまわってこようと思う」

「明石元二郎あかしげんじろうみたいでかつこいいな」

瞬の説明を受けて、拓海が軽く笑いながら言う。

「誰、それ？」

聞いたことのない人名を耳にして、夏希は拓海にそう尋ねた。

「帝国陸軍軍人だ。日露戦争の時にヨーロッパに行つて、反ロシア

帝国を標榜する組織に工作資金を提供して革命気運を煽ったんだ。戦争に日本が勝ち、ロシア革命が成功したから英雄と言われているが、日本が負けただうえに革命が不発に終わってたら、単なるテロ支援の煽動家呼ばわりされたらどうな」

「人物の歴史的評価は結果がすべてだものね。勝てば官軍、よ」  
皮肉っぽく、凜が言う。

数日前から、リダには散歩が許可されていた。

もちろん、逃走防止のために監視付きである。リダも逃げ出すつもりは毛頭なかった。隙を見て走り出したとしても、すぐに大勢のジンベル市民に取り押さえられてしまうのがおちだ。仮にその場からは逃走できたとしても、深夜でもない限りジンベル市街地の外に無事に出ることはできないであろう。彼女の容貌と金色の髪は、ジンベルでは銅貨の中に混じった金貨のごとく、目立ってしまう。散歩のルートは決められており、ジンベル市街地の大きな通りをぐるぐると巡るだけだったが、立ち止まって商家を見物したり、市民と会話を交わしたりしても咎められない程度の自由はあった。

二度目の戦闘で二百人を超えるジンベル人が戦死したことを聞かされていたので、リダは市民によるむき出しの敵意に晒されることを危惧していたが、意外なことにそのようなことは少なかった。すでにリダはジンベルにおいてかなりの有名人と化しており、最初の戦闘での捕虜であることはあまねく知れ渡っていたのだ。また、異世界人であるタクミの庇護下にあることも、大きいと思えた。一度身内をイファラ族との戦いで亡くしたらしい老婆に食って掛かられたことがあったが、監視の兵士が割って入る前にその場に居合わせた数名の市民が老婆を取り押さえてくれた。五人の異世界人はいずれもジンベル市民に人気があり、捕虜とはいえその後ろ盾があるリダに対しあからさまな嫌がらせはまずいと、市民も判断しているの  
であろう。

もうひとつ見逃せない要因が、リダの外見であった。まだ若く、比較的小柄な体躯。整った顔立ち。しかしながら、その愛らしい風貌を台無しにしている、右頬に走る長く醜い傷跡。このいかにも敗者然とした姿が、ジンベル人の敵意を和らげている理由のひとつである、リダは確信していた。

情報収集のために、リダはこちらに興味を持ったらしい人を見つけると、老若男女問わず積極的に話しかけていた。もちろん、監視の者が聞き耳を立てていることは承知していたので、当たり障りのない話題しか持ち出さなかったが、それでもジンベル人の言葉の端々から、『救援軍』と呼ばれている平原諸国派遣部隊についての情報や、ジンベルの指導層に関するちょっとした噂話などは聞き出すことができた。

「で、族長さんには会ったのかい？」

その日三人目の話し相手……人の良さそうな、よく日に焼けたいかにも農夫然とした中年男……が、明日の天候予測に関してのちょっとした知識披露のあとに、そう訊いてきた。

「は？」

「生馬様が捕まえた、族長さんだよ。サイゼンだかザイゼンだかいう名前の」

……サイゼン氏族長が捕らえられた？

「なんだ、知らなかったのか。……教えちゃまずかったかな」

リダの表情から初耳であることを知った中年男が、顔をしかめて手を口に当てる。

「いえ、教えてくださってありがとうございます」

監視の兵士をちらりと見やりながら、リダはそう言った。会話は聞こえていたはずだが、別段慌てたようなそぶりは見せていないところを見ると、この件に関してさらに話を聞いても構わないのだろう。リダは中年男に詳しい話をねだった。中年男が、監視の兵士を気にしながら、様々なことを話してくれる。捕らえた経緯、その後の処置。市民の反応、などなど。

リダが驚いたのは、サイゼンの監禁場所であった。中年男によれば、ジンベル防衛隊本部の、リダの軟禁部屋と同じ棟にあるという。リダは中年男に丁寧な礼を述べた。

……氏族長に会わねばなるまい。

「サイゼン氏族長に会わせてください」

翌日、手土産……薄切りの燻製肉……を持って尋ねてきたタクミに、リダはそう願いだした。

「まあ、会わせるくらいなら問題ないと思うけど……会ってどうするんだ？」

「氏族長とは面識があります。お互いの無事を確認しあっただけです」

リダはそう言った。もちろん、嘘である。ここから逃げ出すときは、氏族長も一緒に連れ出すべきだ。その下準備のために、会うつもりであった。

タクミがしばし考え込んだ。リダは少しばかり卑怯な手を使った。いきなりタクミの手を取って、その眼を覗き込んだのだ。

「お願いします、タクミ殿」

少しばかり口を開き、上目遣いにタクミの茶色い瞳を見据える。

……兄ベンデイスに何かをねだる時に、かならず成功させることができたポーズである。

「……あ、わかったよ。でも、会うだけだよ」

「ありがとうございます、タクミ殿」

リダは内心でほくそ笑みながら、爽やかな笑顔を作った。

警備の兵が、どんどんとやや乱暴に扉を叩いてから、カンヌキを外した。内開きの扉を押し開けてから、半歩下がってリダが通れる隙間を作る。

リダは警備兵に軽く会釈してから、戸口をまたいだ。すぐに扉が閉められ、カンヌキが掛けられる。

「君は、たしか……」

腰掛に座っていたサイゼン氏族長が、驚いた表情で立ち上がった。  
「ツルジンケン支族長の娘、リダです。久しぶりにお目にかかります、氏族長」

リダはそう名乗ると、深く一礼した。

「そうだ、ベンデイスの妹御だったな。負傷して、捕まっていたそうだが……傷はもういいのかね？」

「はい。ジンベルの人々に、丁寧に治療してもらいました。まだ本調子とはいきませんが」

「まあ座りたまえ」

サイゼンが、自分が座っていた腰掛を持ち上げ、リダの前に置く。  
「ありがとうございます、氏族長」

リダはサイゼンが寝台に腰を下ろすまで待った。中腰になって腰掛を持ち上げ、座っているサイゼンのすぐそばまで運ぶ。

「ジンベル人が聞き耳を立てているかもしれないかもしれません」

リダの行動に戸惑っているサイゼンの耳元で、そうささやく。

「……そうだな。用心深いな、君は」

同じく声を潜めて、サイゼンが応じる。

しばらくのあいだ、ふたりは小声で近況やお互いの持っている情報を交換し合った。

「……なるほど。君を保護しているその異世界人は、戦争を望んでいないのか」

タクミに関する説明を聞いたサイゼンが、小さく何度もうなずく。

「はい。そのことに関しては、嘘偽りは申していないようです」

「わたしを尋問しているナツキという異世界人も、同じようなことを言っていたな」

「背の高い、きれいな女性ですね」

「君も会ったことがあるのか？」

サイゼンが少しばかり驚いたような表情で、リダを見た。

「はい。まだ臥せているときに、一度尋問されました」

「他の異世界人は、此度の戦争こたひについてどう考えているのだろうか？」  
サイゼンがリダから視線を外し、自問するように言った。

「そこまではわかりません」

五人いる異世界人のうち、リダが会った事があるのはタクミ、ナツキ、リンの三人だけだ。そのうち、性格や考え方がつかめるほど会話したのは、タクミだけである。氏族長が会ったのは、尋問役のナツキと、一回だけ刃を交えたイクマのみ。残るシユンという名の異世界人は、ふたりとも顔さえ知らぬ。

「タクミを通じて、他の異世界人の考えを探ってみます」

リダはそう告げた。サイゼンが、うなずく。

「そうしてくれ。わたしも、ナツキに働きかけてみる。囚われの身とはいえ、氏族と高原の民の幸福のためにできることはやらねばならぬ。……しかし、君はずいぶんとタクミに気に入られているようだな」

「はい」

気恥ずかしげに、リダは返答した。いまだ手さえ握られていない……先ほどはこちらから握ってしまったが、タクミがリダに抱いている『好意』が、男と女のそれであることくらい、初心的彼女でも察しがついている。

「なんとか、異世界人を排除できないものかな。君の集めた情報では、二回目の戦いでも異世界人が活躍したということだし。奴らがジンベルからいなくなれば、わが方の勝利の目が出てくる」

「そうですね。排除……は無理かも知れませんが、異世界人に対し高原の民の心証をよくすることはできると思います。彼らを味方につけることは不可能でも、こちらの立場を理解させてジンベルに魔力の源の放棄を働きかけることは可能かもしれません」

リダは考えつつそう言った。

ジンベル救援軍組織委員会の定期会議は、大荒れとなった。

ニアン代表が、独自作成した『高原侵攻案』を正式に提示し、これに各国の賛同を求めたからである。

積極的に賛同したのは、ケートカイ、イヤーラの二ヶ国。ススロ、エボダ、シーキンカイの三国は、真っ向から異議を唱えた。残る七ヶ国は、消極的ながら同調したジンベルから慎重論を唱えたハシジャーカイまで、その程度は様々であったがどっちつかずの曖昧な姿勢に終始した。

そのように紛糾した会議ではあったが、ジンベル代表が主張した『可及的速やかに砦を奪回する』案は、全代表一致で可決された。これを受けて、統合司令部はさっそく作戦の立案と所要兵力の見積もりに入った。

「とにかくニアン主導の高原侵攻作戦は阻止しないと」

プチ会議の席で、凜が真剣な表情で言う。

「そのことに関してなんだけど……」

夏希は、おずおずと挙手した。

「サイゼン氏族長を、交渉役に利用できないかしら」

「懐柔に成功したのか？」

生馬が、片眉をあげて訊く。

「それはまだだけど、ここ数日の尋問で歩み寄りが図られたのよ。

例の、魔界膨張説が正しいとした上での話だけど、ジンベルが魔術使用の抑制に極力努めることを確約してくれば、侵攻は行わない、という方向で話がまとまりかけてるの」

「捕虜となつて実質的な権限を何も持っていない元氏族長と、外交的解決を今のところ軽視している国王に雇われている異世界人との約束か？ ずいぶんと心もとない話だな」

拓海が茶化す。

「単なる叩き台かも知れないけど、停戦に至る道筋のひとつではあるわ」

「問題山積ね。ジンベル側では、国王の説得と、魔力に頼らない産業構造への転換か、鉾山技術のブレイクスルーが必要。イフアラ族も、他の氏族を巻き込んだ以上、政治的に複雑な問題を抱え込むわね」

凜が、言う。拓海が、呆れたように首を振った。

「むしろこのままずると戦争を続けた方が、頭痛がしないで済みそうな気もするな」

「まあとにかく、夏希の意見をもう少し聞こうじゃないか」とりなすように、生馬が言う。

「ありがと。いずれにしても、戦争をこのまま続ければジンベルは財政破綻で滅びるわ。魔術の使用が多少抑制され、経済規模が縮小しても、滅びるよりは数段ましよ。イフアラ族側も、連敗したし、死者も山ほど出している。戦争目的が不十分ながら達成されたとなれば、矛を収めると思うの」

「で、その交渉役にサイゼンを使おうというわけか」

うなずきつつ、生馬が言う。

「そう。高原侵攻作戦の前に、陛下の名代とサイゼンをイフアラ族のところへ行かせて、交渉させるのよ。うまく行けば、有利な条件で停戦できるわ」

「陛下が外交交渉に乗り気でないからねえ」

凜が、言う。

「サイゼンはやる気なのか？　そして、信用できるのか？」

身を心持ち乗り出した拓海が、夏希に問う。

「依頼すれば、やってくれるはずよ。これ以上高原戦士を死なせたくない、と本気で思ってるはずだし。信用は……していいと思う」

「軍の指揮は執っていたが、特に優秀な軍人でもないからな。仮に逃がしてしまっても、こちらの痛手にはなるまい」

生馬が言った。

「たしかに、使節だけを送るより、はるかに印象はよくなるでしょうね。交渉も、スムーズに行くと思う」

凜が、同調する。

「この案、反対するものは？」

拓海が、訊く。

「良案だと思うな」

生馬が言った。凜も、首を振って反対しない意を告げる。

「よし。さっそく明日から始めよう。夏希はサイゼンの了解を取り付けてくれ。凜ちゃんは、瞬に代わって外務大臣周辺への根回しを頼む。俺は高原側の反応を予測するとともに、平原諸国への説得工作をするよ。生馬は当然、国王陛下へのご説明と、同意の取り付けに全力をあげてくれ」

「俺が一番難しそうだな」

生馬が、ぼやく。

「これがうまく行けば、もう死人を出さずに済むんだ。気合を入れて行こうや」

「なるほど。ナツキ殿のお考えは、十分に理解した」

夏希による『サイゼン氏族長を使ったジンベル・イフアラ族間の停戦交渉案』の詳細を聞いたサイゼンが、穏やかな表情でうなづく。「もともとサーイエナ様のご意思は、理を説いてジンベルに魔術の使用をやめさせることにあった。侵攻は、交渉に応じなかったからに過ぎない。目的が達成されるのであれば、矛を収めることに異論はない。……ただし」

言葉を切ったサイゼンが、尋問部屋で相對して座っている夏希の眼を、しっかりと見据える。

「まず、貴殿ではなく、ヴァオティ国王による言質が必要だ。魔術使用を制限する具体的目標値や、管理体制に対する情報も欲しい。名代はなるべく高位のジンベル人がいい。それに加え、大幅なジンベル側の譲歩がなければ、停戦は難しいだろう」

「……大幅な譲歩、ですか？」

「すでに何千名もの高原戦士が命を落としている。形の上だけでもジンベル側が譲歩の姿勢を見せなければ、イファラ族の者たちが停戦に納得しないだろう」

「たとえば？」

「名目上で構わないから、魔力の源の管理をイファラ族に任せる、とかだな。つまり、イファラ族側が戦争に負けたわけではない、という形を作りたいのだ」

「それは……難しいかと。失礼ながら、実際にあなた方は二連敗しているわけですから」

「いや。譲歩ない限り、わたしには氏族の意見を纏め上げる自信がない」

サイゼンが、ゆっくりと首を振る。

「困りましたねえ」

夏希は頭を掻いた。魔力の源の使用を抑制することだけで、ジンベルは最大限の譲歩をしたと言えるのだ。それ以上歩み寄るのは難しいだろう。

「貴殿が国王やその側近を説得し、以上の条件を整えてくれれば、わたしは停戦に全力を尽くすと誓おう。もちろん、自分の鉈に掛けてだ」

厳かな口調で、サイゼンが宣言した。

「わたしもこれ以上氏族の者を死なせたくないし、すでに多くの者を死なせてしまったことに責任を感じている。貴殿の提案は、大いに魅力的だ。力を合わせて、停戦を実現させ、魔界の膨張を防ぎ、高原の民と平原の民の未来のために尽くそうではないか」

「……お気持ちと同じですわ」

夏希は本心からそう言った。何回もの尋問……と言うよりも、実質話し合いであったが……を通じ、夏希はこの中年男のことをかなり理解できたと自負していた。サイゼンというのは、悪く言えば単純、よく言えば裏表のない真っ直ぐな人物と思えた。高原の社会は、平原よりもかなり単純である。そこで権力を握る者は、政治的に巧

緻に長けた知恵者や切れ者の野心家ではなく、他の者に信用され、敬意を集めるリーダーシップのある人物に過ぎないのだろう。

第二次ジンベル南平原の戦いから九日後の早朝、ジンベル防衛隊と救援軍、それにジンベル市民軍は皆奪還作戦を開始した。投入兵力は、ジンベル防衛隊二百、救援軍四千百、市民軍一千の合計五千三百。総指揮は、もちろんラツシ隊長が執った。生馬はその補佐として参加、夏希は例によって市民軍の指揮を任された。拓海は今回は自重し、政治的配慮から手柄を救援軍に譲るために参加を見送った。

すでに前日から偵察活動によってジンベル側の動きを察知していたビレットは、部下に迎撃準備を整えさせるとともに、撤退の準備も進めていた。勝ち目があるのなら、徹底して抵抗を行う。勝ち目がない、あるいは大きな損害が出ると予想される場合は、戦わずに退く腹積もりであった。

前進してくるジンベル側兵力を、各種報告から約四千と見積もったビレットは、皆の放棄を決意した。この皆に、死守するまでの戦略的価値を見出せなかったからだ。すでに前日のうちに、手元にある川船に備蓄食料の大半を積み込んである。それらが、命令を受けて続々と川上を目指し船着場を離れた。

高原戦士たちも、隊列を組んで続々と軍用路を南下した。二百名の戦士が、皆の要所によく乾いた薪などの可燃物を手際よく積み上げてゆく。皆の機能を一時的にせよ麻痺させるために、放火する手筈なのだ。ビレットは、後衛となる精鋭四百とともに、偵察隊が帰還するのを待ち構えた。

すべての偵察隊が帰還すると、ビレットは火を放つように命じた。十数か所で同時に着火が行われ、薄灰色の煙の筋が川風によって北へと流されてゆく。

「よし。我々も退くぞ」

精銳四百を引き連れたビレットは、撤退中の本隊を追った。

「……俺の城があ……」

がつくりと膝をついた生馬が、頭を抱える。

救援軍先鋒が砦に迫った時には、すでにその八割方が炎に包まれていた。高原戦士の姿はとうに無く、煙と熱気に阻まれて追撃することも不可能だ。

「ま、ここを焼かれたからって、こちらの戦略的状況は変わらないでしょ。むしろ高原側がジンベル攻略の足掛かりを失ったという意味合いの方が、大きいはずだわ」

朱色の炎を見つめながら、夏希は言った。

「だいぶ学んだようだな。その通りだ」

なんとか立ち直った生馬が、同意する。

偵察隊同士の小競り合いで数名の死傷者が出たが、事実上損害なしでジンベル側は作戦目的を達したのである。

「心配せねばならぬのは、今後のニアンと親ニアン国の動向だな」  
生馬が、腕を組む。

「そうね。今回の戦いで損害が無かったから、次の作戦に速やかに移行できるものね」

ニアンが主張する高原侵攻作戦。ススロンやエボダは、この作戦が強行されるならばジンベルから兵を引き上げる、とまで主張している。このまま行けば、救援軍は瓦解しかねない。

「板ばさみよね、ジンベルは」

ニアンには大いに世話になっているし、ススロンやエボダにも同様に世話になっている。ジンベルとしては、どちらに付くか悩みどころではあるが、夏希ら異世界人の工作にも関わらず、ヴァオティ国王を始めとするジンベル指導層はニアンに協力し、高原侵攻作戦に参加する意向を固めつつあるようだ。

「すでにニアンは増援部隊を本国で編成中と聞く。おそらく、あまり猶予はないぞ」

生馬が言う。夏希は彼の顔を見上げた。

「サイゼンは停戦する気にいるわ。本気でね。あと必要なのは、  
アオティ陛下の裁可だけ。生馬、頼むわよ」

「……努力するよ」

自信なさそうに、生馬が応える。

### 35 峇奪還作戦（後書き）

第三十五話をお届けします。今回も予約掲載になります。感想などいただいた場合返信が大幅に遅れる可能性が高いです。ご了承ください。

### 36 敵地潜入

「起きてください、シュロツツ」

優しく肩を揺さぶられて、ベンデイスは目覚めた。

眼の前に、微笑を浮かべた少女の顔があつた。浅黒い肌の丸顔。こげ茶色の大きな眼はいささか離れ気味で、美人とは言えないがいかにも人の良さそうな、好感の持てる顔立ちだ。

……エワ……じゃない、ラマラか。

「着いたのか？」

ベンデイスは樽の上に横たえていた身を起こした。

「あと十ヒネほどです。起きて、ローアンと交代してください」

エワが言つて、艫で竿を操っている男の方を見る。

「わかつた。ありがとう」

中腰になったベンデイスは、服装を整えると、日除けの防水布の下から抜け出した。笠を目深に被り、艫に近付く。

「代わろう」

「お願いします、シュロツツ」

手を止めたローアンが、丁寧に竹竿を差し出す。

シュロツツというのは、ベンデイスの偽名である。平原地帯では、ありふれた名前だそう。ベンデイスが率いてきた三人の高原の民も、今はそれぞれ平原の民らしい名前を名乗っている。

「おいおい。この船ではわたしが一番の下っ端のはずだぞ」

薄笑いを浮かべながら、ベンデイスはローアン……これも偽名である……にそう言った。

「そうでした。では改めて。……手え抜いたら承知しねえぞ、シュロツツ！ ……これでよろしいですか」

「結構」

竹竿を受け取ったベンデイスは、艫に立つとそれを上手に操り始めた。もともと器用な方だし、ここまでの旅のあいだにかなり長く

竿を操つたから、コツは充分に飲み込んでいる。

平原の民との混血男性二人と共に高原地帯を旅立ってから、すでに二十日の時が流れていた。

旅自体は、覚悟していたよりも楽なものであった。ビレットが推薦してくれたバチーラ支族の混血女性エワは、ふたつ返事で同行を承諾してくれたし、ハンゼイ氏族の友人も快く協力を約束してくれた。平原地帯への侵入も滞りなく行えたとし、ジージャカイにいる協力者との接触も順調であった。

そのジージャカイの協力者が紹介してくれたのが、いまベンデイスが乗っている船の船長であるアララックだ。いわゆる個人船長で、商人に船ごと雇われて都市国家間で商品を運ぶだけであり、出入国の際に税金を払ったりする必要がなく……支払い義務があるのは売買った商人である……積荷を詳しく調べられたりすることがないので、秘かにジンベルに入国するには都合がいい。ちなみに、今回の積荷はジージャカイ産の米の酒である。

船に乗り組んでいるのは、五人。船長のアララックと、その助手を装っているセイエル。雑用係のラマラことエワ。残るシュロツツことベンデイスとローアンは、推進要員兼荷物係りとなる。もちろん、アララック以外は高原の民である。

竿を操りながら、ベンデイスは黒髪に産んでくれた両親に秘かに感謝した。顔つきはどうしようもないが、意図して日焼けするようにしたので、肌の色は平原の民とたいして変わらないよい色になっている。日除けの笠を目深に被っていれば、一瞥したくらいでは高原の民とは気付かれないだろう。

ベンデイスは、周囲に眼を転じた。すでに、とくに意識しなくても手が勝手に竿を操るくらいに上達している。

船はすでにジンベル盆地の北端に入っており、それまで両岸を覆っていた密林は疎となり、高原のそれとは違う丈の低い下草が密生した平地が広がり始めていた。前方に、多数の小屋が見え始める。ジンベルを救援するために派遣された平原諸国兵士たちの宿舎だろ

う。訓練なのか、長槍を携えた二百名ほどが整列しているのも見える。さらに近付くと、十数名の兵士が河原で洗濯しているのに出くわした。エワの姿を眼にしたのか、何人かが大きく手を振ったり口笛を吹いたりする。ベンデイスは心持ち顔を伏せた。

しばらくすると、両岸に田んぼが見え出した。人家も増え、市民の姿も多くなる。ベンデイスは竿を水平にしてしゃがみ、一本目の橋をやり過ごした。

アララックの指示に従い、ベンデイスは市街地手前の船着場に船を寄せた。差し掛け小屋に待機していた役人が、身軽に船に乗り込んでくる。

アララックが積荷に関する書状を役人に提示しているあいだ、ベンデイスは竿を握ったまま大人しくしていた。船頭など役人には船の付属品だと思われる、と聞いている。目立つことをしなければ、高原の民だとは気付かれないはずだ。万が一気付かれても、混血だと言い逃れる手筈になっている。

書状を検めた役人が、酒樽を目の子勘定で数え始めた。満足したのか、アララックと握手を交わすと、岸壁に上がる。

「よし、シユロツツ。出せ」

アララックが、めんどろくさそうに手を一振りしつつ命ずる。むろん、演技である。役人はまだ岸边にいて、こちらを注視しているのだ。気は抜けない。

ベンデイスは無言のまま竿を岸壁に突き、船を出した。

散歩中のリダに近づいて来た少女は、ごく普通のジンベル市民に見えた。

ありきたりの挨拶を交わし、世間話に興じる。しばらくして、その少女が横目で監視の兵士をちらりとうかがった。リダも釣られるようにそちらに眼をやった。任務に飽きたのか、兵士は眠そうな表情だ。

少女が、さりげなくリダに身を寄せた。世間話を続けながら、握っていた手のひらを開く。

小さく折り畳まれた紙片が入っていた。

リダの視線が紙片を捉えたことを確認してから、少女がごく小さくうなずいた。なおも世間話を続けながら、ごく自然な動きでリダの手を取って撫でさする。

すぐにリダは、自分の手の中に紙片が押し込まれたことに気付いた。戸惑いながら、少女の顔を見る。

「ところでさあ、あなた、お兄さんとかいる？」

少女が話題を唐突に切り替え、意味ありげに微笑んだ。

……まさか、兄上の手紙？

リダは紙片をしつかりと握り込んだ。監視の兵士の視線が逸れた隙に、服の中へと押し込む。

高原の民の識字率は高くない。だが、リダは支族長の娘として、狩人としては例外とも言える高い教育を施されていた。当然、読み書きには不自由していない。

本当に兄上の手紙なのだろうか？

リダは少女をじつと見つめた。少女が、意味ありげに片目をつぶってみせる。そして、やや指を開いた手を自分の腰に当て、心持ち指を閉じてから胸の前に持つてくる。

……この少女は高原の民だ。

リダは確信した。平原の民が見たならば、何のことはない無意味なしぐさだが、高原の民ならば今の少女の手の形と動きは、自分の鉈を抜いた行為そのものであった。しかも、その動きは不自然なところが微塵も見受けられぬほど滑らかで、すでに何年も自分の鉈を扱いなれていることをうかがわせた。間違いなく、子供の頃から鉈を愛用していた者の手つきだった。

散歩から戻ったリダは、扉の外に人の気配がないことを確認して

から、懐にしまいこんであつた紙片をそつと取り出した。わずかに震える手で、ゆっくりと開いてゆく。

……間違いない、兄上の字だ。

読み進めるリダの視界が、みるみるぼやけてゆく。自分が生きていることを、兄が知っている。そして、自分がどこに居るのかを、兄が知っている。それだけで、リダの心は温かいもので満たされた。リダは涙があふれ出る目を閉じて、開いた紙片を胸に押し付けた。そうしていると、書いた兄の温もりが、伝わってくるような気がする。

しばらくそうやって気持ちを落ち着けたリダは、涙を拭くと手紙を再び最初から読み始めた。最後まで読んでしまうと、もう一度丹念に読み返し、内容を頭に刻み付ける。

ベンデイスは、すでにリダの居場所も、同じ棟にサイゼン氏族長が監禁されていることも知っていた。現在は情報を収集しつつ、二人を救出する算段を検討している最中だという。詳しいことは書かれていないが、いったんジンベル市街地を脱出してしまえば、高原まで安全に帰還する手段は確保してあるらしい。

紙片を折り畳み、服の中に隠したリダは、水を飲んで気分を落ち着かせてからじっくりと考えてみた。兄に再会し、高原に帰りたいたいのはもちろんだが、それだけでよいのだろうか？

すでに彼女は、サイゼン氏族長からナツキの提案……氏族長を仲介役とした停戦交渉案……について詳しい説明を受けていた。それ自体は、とてもよい案だとリダは思っていた。だが、肝心のヴァオティ国王が外交交渉を拒否しているという。いくら異世界人とはいえ、国王には逆らえない。ナツキの提案が、実現する可能性はなかった。

……このわたしでも、兄上や氏族長に手を貸してもらえば、サイエナ様のお手伝いができるかもしれない。イファラ族とジンベル王国との戦争を終わらせること。そして、魔界の膨張を防ぐことが。

不意に、リダは閃いた。ベンデイスがリダとサイゼン氏族長を救出し、高原まで連れ帰ることができれば、数人くらい余分に連れ出せることも可能なのではないか？

リダは指の背を噛みながら……熟考する時の彼女の癖である……考えをめぐらせた。いや、異世界人だけではだめだ。もつと影響力のある人物を巻き込まなくてはならない。しかし、大臣クラスがほいほいここまで出向いてきてくれるとは思えないし……。

巫女だ。

再び、リダの脳に閃きが走った。ジンベルの筆頭巫女ならば、人々の尊敬を集めているはず。国王の信頼も厚いだろう。なにしろ、異世界召喚を行えるほどの腕前なのだ。彼女を、サーイエナ様に引き合わせることであれば、あるいは……。

ベンデイスは、市街地郊外にある新しい差し掛け小屋のひとつに身を潜めていた。

派遣軍駐屯地に程近いこの場所には、臨時の村とも言うべき外国商人たちの街が出現していた。最初に住み着いたのはジンベル王国と契約して派遣軍に食料を供給する商人とその雇われ人たちだったが、すぐに様々な外国商人や小商人などが儲けを期待して流入し、街の人口は百人を越すほどに膨れ上がった。なにしろ五千人以上の人々が派遣軍駐屯地で暮らしているのである。基礎的な食料以外にも、茶や酒などの飲料、新鮮な果物や甘味類、被服や寝具、その他の消耗品類、様々な娯楽……これには賭博や売春も含まれる……の提供など、商売の種は多かった。

不意に、戸口のすだれが揺れながら巻き上がった。強い日差しとともに、エワが入ってくる。すだれを下ろしたエワが、隙間から外の様子をうかがった。安全を確認してから、座っているベンデイスの前に跪く。

「リダ殿に書状を届けてまいりました」

小声で、エワが告げる。

「ご苦労。で、リダの様子は？」

「お元気でした。負傷は完全に癒えたご様子です。ジンベル側の扱  
いも、良好なように見受けられました。ただ……」

エワが言葉を切る。

「頬の傷か」

「はい。わたしが想像していたよりも、大きな傷でした。右目尻の  
あたりから、口の端近くまで、くつきりと」

ベンデイスは目を閉じた。脳裏に浮かぶ妹の顔には、傷ひとつな  
い。

「……可愛いそうに。だが、命が助かっただけでもよしとしなけれ  
ば。」

「傷ぐらい、どうということはない。戦士にとっては、むしろ誇る  
べきものだ」

目を開けたベンデイスは、無理に笑顔を作るとそう言った。

「そうですね」

エワがそう応じたが、その口調と寂しげな表情から、ベンデイス  
は自分の本心が見抜かれていることを悟った。

「ローアンたちが戻るまで、休んでくれ」

「はい」

エワがこくりとうなずき、立ち上がった。水の入った壺から柄杓  
で二杯飲んでから、小屋の隅で膝を抱えてうずくまる。

ローアンとセイエルの二人は、以前から高原側に情報を流してく  
れている者との接触を試みている。ベンデイスはあらかじめ、ジー  
ジャカイの協力者を通じて手持ちの金塊を処分し、平原地帯の十才  
ロット金貨をかなりの量手に入れていた。これを適切に使えば、妹  
の救出は可能である、とベンデイスは判断していた。平原の民は、  
高原の民ほど誇りを重んじない。金さえ積みめば、属する組織を裏切  
つてくれる者は多いはずだ。

……待っていてくれ、リダ。あと数日の辛抱だ。

自ら積極的に動けない悔しさを噛み締めながら、ベンデイスは心中でつぶやいた。愛する妹と同じ都市にいるにもかかわらず、姿を見ることもままならぬ状況は、彼の神経を苛立たせたが、それを表に出してしまうほどベンデイスは愚かな男ではない。重く暑い空気がこもった小屋の中で、ベンデイスはじっと仲間が帰って来るのを待った。

手紙を秘かに受け取った翌日、リダはさっそく口実を設けてサイゼンの部屋へ入る許可をもらった。

「兄から手紙がまいりました」

見張りの気配が消えると、リダは小声でそう言っ、懐から小さく折り畳まれた紙片を取り出した。

「ベンデイスから？」

驚いたのだろう、サイゼンの声はいささか大きかった。リダは慌てて扉の方を見やった。もちろんそんなことをしても、外で聞き耳を立てているかも知れぬ兵士の姿は見えるはずもなかったが。

「すまん。声が高かったな。で、どうやって？」

声を潜めたサイゼンが、問う。

「お読みになった方が、早いと思います」

紙片を丁寧に広げたリダは、それを渡した。素早く眼を通したサイゼンが、一声唸ってからそれをリダに返す。

「間違いなくベンデイスの手紙なのだな？」

「はい。わたしと兄上しか知らないことも書かれていますし。字も、見慣れた兄のものです。間違いありません」

「ジンベルに潜入するとは。豪胆と言うか無謀と言うか……。だが、さすがにビレットが見込んだ若者だけあるな」

感心したのか、あるいは呆れたのか、サイゼンが苦笑する。

「この通り、兄は氏族長とわたしをここから助け出すつもりですよ」

紙片を折り畳みながら、リダは言った。

「ああ。そのようだな」

「氏族長が無事高原にご帰還なされれば、喜ばしいことですが、わたしが帰っても、それだけではイフアラ族の利益にはなりません」

リダはきつぱりと言った。

「……言いたいことがよくわからんが」

「どうでしょう。ナツキという異世界人が提唱する停戦交渉を、イフアラ族主導で行うという案はいかがでしょうか」

訝しげなサイゼンに対し、リダは昨日考えた自分のプランを説明し始めた。

「兄も肝が据わっているが、妹も若いのにさうとう大胆だな」

聞き終えたサイゼンが、禿頭をつるりと撫で、嘆息交じりに言う。「ご賛同いただけますか？」

「魔界の膨張を止められるのであれば、わたしは自分の命など惜しまぬ。とりあえず、君の案をベンデイスに伝えたまえ。ベンデイスがお膳立てを整えることができれば、わたしも協力は惜しまんよ」  
「ありがとうございます」

エワが差し出した紙片……散歩途中のリダから秘かに預かった手紙……を読み始めたベンデイスの表情が、見る間に強張ってゆく。

「どうされましたか？」

凶報でも書かれていたのかと危惧したエワが、遠慮がちに訊く。ちなみに、彼女は文字を読むことはできない。

「大胆すぎる。あまりにも危険だ。だが、成功すればイフアラ族主導で戦争を終わらせることができるかも知れぬ」

エワの存在を無視したかのように、視線を宙にさまよわせながら、ベンデイスがつぶやく。

「どうかしましたか、シユロツツ」

セイエルが訊いた。一応、シンベルにいるときは用心して、普段

でも偽名で呼び合うことになっている。

「ローアンが帰ってきたら、説明する」

それだけ言つて、ベンデイスは皆に背を向けて目を閉じ、黙考の態勢に入った。その背中を眺めていたエワとセイエルが、戸惑いを浮かべた顔を見合わせて首を傾げる。

やがて、食料の買出しに行つていたローアンが帰ってきた。黙考をやめたベンデイスが、残る三人に近くに座るように促す。

声を潜めて、ベンデイスはリダの手紙の内容と、自分の考えを仲間伝へた。

「難しい仕事ですね。簡単にはいかないでしょう」

話を聞き終えたセイエルが、唸る。

「しかし、氏族長が命がけでやるとおっしゃっているのであれば、やるべきです。俺は、どこまでも付いていきますよ」

ローアンが、ベンデイスの目を見据えて言い切つた。

「俺だつてびくついたらわけじゃない。難しいから、慎重にやるべきだと言いたいだけだ」

ちよつとむつとした表情で、セイエルが言い返す。

「二人の勇気と度胸のほどはわたしが知っているよ。セイエルの慎重論はもつともだ。……ラマラ、君はどう思う？」

「ジンベル王国の只中でこれだけのことをやってのける。成功すれば、さぞ痛快でしょうね。お供させてください」

エワがきつぱりと言つて、爽やかな表情を浮かべた。

「済まん、ラマラ。ツルジンケン支族の者でもないのに」

「いえ。氏族長を救い出し、この戦いを終わらせるのはすべてのイアラ族の願い。そして魔界の膨張を防ぐのは、高原の民全員ひとの斉しき願い。命など、惜しみません」

「ありがとう。では、行動の細部を詰めよう」

ジンベル防衛隊本部の中で、リダとサイゼンが監禁されている建物は、すでに特定されている。内部の見取り図も、協力者に金を払つて描かせた。そこでの具体的な救出手順は未定だが、いったん市

街地の外へと連れ出せば、ジンベルからの脱出はすでに手筈が整っている。徒歩でジンベル盆地北端まで行き、ジンベル川のほとりに潜んでいけば、タイミングを合わせて空荷でジンベルを発ったアララックの船に便乗させてもらえる。そのあとは、ジンベル川を下り、ノノア川に入ってこれを遡り、さらにジージャカイ川をたどってジージャカイ郊外で上陸し、徒歩で高原地帯を目指す、という段取りである。

四人は長い時間小声での話し合いを続けた。ただでさえジンベル防衛隊本部からの救出は困難なのに、リダの計画を実行するとなるとその難易度は急上昇する。充分な下準備が必要不可欠と思われた。「異世界人はともかく、巫女が厄介だな」

ベンデイスは唸るように言った。筆頭巫女エイラは、常に魔物を連れ歩いている。下手に手出しをすれば、こちらが簡単に切り刻まれてしまうだろう。

「巫女の安全を保障することが大前提ですね。そのうえで、これはあくまで人間同士の争いであることを主張し、不介入の姿勢を取らせるしか、方法はないでしょう」

セイエルが、言う。  
「いや、むしろ魔物の存在はこちらに有利かもしれませんよ」

ローアンが、眼を輝かせた。

「魔物が付いていけば、ジンベル人の身の安全を保障したも同然でしょう。かえって、事がうまく行くかもしれません」

「そうかもしれないな」

ベンデイスは同意した。

「いずれにしろ、防衛隊本部へ入り込む手段が必要だ。ローアン、セイエル。悪いが協力者のところを廻って、さらに情報を集めてくれ。金はいくらばら撒いても構わん」

「承知しました」

「では、行ってまいります」

男二人が立ち上がり、小屋を出てゆく。

「リダ殿は勇気ある方です」

静かだが、心のこもった口調で、エワが言った。

「度胸に関しては、わたしよりあるかも知れんな。かく言う君も、立派な勇気の持ち主だ。命がけの企てに、参加してくれたのだからな。改めて、礼を言おう」

エワに向き直ったベンデイスは、笑顔を浮かべて彼女の手を握った。エワがわずかに赤面し、恥ずかしげに視線を逸らす。

「ちよつと、いい？」

エイラの仕事部屋に首を突っ込んだ夏希は、そう呼びかけた。

「よろしいですよ。どうぞ、お入り下さい」

机についているエイラが、にこやかにうなずく。

「ありがと。実は、お願いがあつて来たんだけど……。あれ、コーちゃんは？」

入室した夏希は、魔物の姿が見当たらないことに気付いた。高いところに浮いているのかと思つて天井を見上げてみたが、そこにもいない。

「ちよつと、お遣いに出てもらつてますの。で、お願いつて、何ですの？」

「それはね……」

夏希はサイゼンとの交渉の様子を手短に説明した。

「……で、高原まで行つて停戦交渉をする外交使節団の中に、エイラも入つて欲しいのよ」

「わたくしでお役に立てるのでしょうか？」

「最低一人は、魔力の源の専門家たる巫女が必要だ、とサイゼンが主張してるの。それに関しては、わたしも同感だわ。一緒に行つてくれない？ あなたが来てくれるのなら、当然コーちゃんも一緒にしょ？ 色々と、心強いし」

「そうですね。他にどなたが加わるのですか？」

「まず陛下の名代。外交実務担当者として、瞬を含む外務関係者が数人。わたしももちろん行くつもりよ。まだ話してないけど、アンヌツカも行きたがるでしょうね。あと、必要であれば書記役や護衛、庶務担当者が数名ってとこね」

夏希は指折り数えてそう言った。

「わかりました。戦争を終わらせるためなら、喜んで協力させていただきます。コーちゃん共々、高原へ参りますわ」

「ありがとう、エイラ」

「どういたしましたして。夏希殿と旅するなんて、面白そうですもの」  
くすくすと笑ったエイラが、急に真顔になった。

「ところで、陛下の許可は下りそうなのですか？」

「それが一番の問題なのよね。サイゼンはやる気充分だけど、陛下にその気がないから。生馬が説得し続けてくれてるんだけど、はかばかしくないのよね、これが」

夏希は肩をすくめ、そう愚痴った。

「駄目だな。陛下は外交使節を送る気はないそうだ」

生馬が投げ遣りに言っ、どすんと椅子に腰を下ろした。

「手詰まりか」

拓海が、大げさに肩をすくめる。

「こちらの準備は、着々と整ってるのに。エイラにも使節団参加を承諾してもらったのよ」

夏希は不満げに口を尖らせた。

「どうやら、ニアンが陛下に圧力を掛けているらしい。交渉は無用だよね」

生馬が、続ける。

「なぜそこまでニアンは高原侵攻作戦にこだわるのかしら？」

凜が、問う。

「ま、そのあたりを探りに瞬が出かけたわけだが……」

そう言った拓海が、北向きの窓の外を見やった。

「ジンベルの一員である限り、陛下に逆らうわけにもいかないしねえ。これ以上、動きようがないわね」

凜が、諦観した口調で言って、お茶をひと口すする。

### 36 敵地潜入（後書き）

第三十六話をお届けします。今回より投稿は通常パターンに戻ります。

### 37 いわゆるひとつの拉致

「あら。珍しいわね。朝早くから会えるなんて」

朝イチでジンベル防衛隊本部に向いた夏希は、そこで拓海とばったり出くわして少しばかり驚いた。

「昨日リダと約束してね。一緒に散歩してくれと頼まれたんだ」

夏希同様驚いたらしく、少しばかり上擦ったような声で、拓海が応ずる。

「へえ。デートまでこぎつけたの。えらいえらい」

夏希は棒読み口調で言っつて、気のない拍手を送った。

「そういうあんたはどうしたんだ？」

アンヌツカににこやかに挨拶したあとで、拓海がそう訊いてくる。

「こつちも約束よ。サイゼンが、エイラに会いたいと言っつたので、彼女も来ることになってるわ。使節団のメンバーに内定してるからね」

「ほう。顔合わせか。あとは陛下の許可さえ下りれば、ってところだな」

「ま、お互い『進展』があるといいわね。うまくやんなさいよ」

夏希は拓海の脇腹に、控えめに親しみを込めた肱打ちを入れた。

「が、頑張るよ」

薄く頬を染め、戸惑いの表情を浮かべた拓海が、どもり気味に返答する。

「おはよう、エイラ。朝早くから、ごめんね」

眠そうな顔の巫女少女を見て、夏希はそう詫びた。

「おはようございます。いえ、謝る必要はありませんわ。これも巫女としての仕事ですから」

「夏希様、おはようございますう。アンヌツカ殿も、おはよう」

ざいますう〜」

眠気とは無縁なコーカラット……魔物は睡眠をとらないそうだが、いつものように快活に挨拶してくる。

「で、わたくしは何をすればいいのですか？」

いつもの巫女装束のエイラが、可愛らしく小首を傾げて問う。

「ま、使節団の顔合わせ、というところね。この部屋にサイゼンを連れてくるから、一緒に話を聞いてほしいの」

夏希はエイラを尋問室に案内した。扉を開け、招じ入れる。

「あらら。まだ準備してないじゃん」

室内を一瞥し、夏希は呆れた。昨日のうちに、朝一番で追加の椅子の搬入と、エイラ用の筆記用具の調達、それにお茶の支度をしておくように指示を出しておいたのだが、そのいずれもが準備されていない。

「ごめん、アンヌツカ。厨房棟に行つて、お茶を運ばせるように言つてきて。帰りに、椅子が腰掛けもひとつと、筆記用具一式もお願い」

「承知しました」

軽くうなずいて、アンヌツカが尋問室を出てゆく。

「夏希殿は、サイゼン殿を仲介役にすることによつて、戦争を終わらせることができるかと確信していらつしやるのですか？」

唐突に、エイラがそう訊いてくる。

「他に気の利いた手段が思いつかないから、取り組んでいるだけよ。このままずると戦い続けても、戦死者が増えるわお金は掛かるわで、いいことはないわ。どこかですつぱり終わらせないと」

「それはもちろんです。しかし、魔術を使わずにジンベルが立ち行くことは難しいですし」

エイラが困り顔でうなずいた。その背後、少し離れた部屋の隅で、コーカラットが斜め四十五度くらいに傾いて、ゆっくりと回転している。

「巫女にとっては、死活問題よね」

夏希は苦笑いした。魔力の源を使って魔術を使えるからこそ、巫女の存在意義があるのだ。

「ともかく、ある程度サイゼンは信用していいと思うの。あとは、陛下のご裁断待ちなんだけど……」

「そちらの方は、望み薄ですね」

エイラがゆっくりと首を振る。

連日の生馬の努力にもかかわらず、ヴァオティ国王はイフアラ族との交渉開始を渋っていた。ニアン主導による高原侵攻作戦の準備は着々と進行中。それに反発するスロン、エボダの両国は、派遣兵力引き上げを強く匂わせ、作戦中止を迫っている。

「ともかく、早めに手を打たないと……」

夏希は腕を組んだ。異世界人と言えども、ジンベルに雇われている身に過ぎない。かなり高い地位を与えられているものの、その権限が通用するのは主にジンベル国内だけだ。事態がこれ以上拡大したら、夏希らの手には負えなくなるだろう。

と、いきなり尋問室の扉が開いた。市民軍兵士らしい男性が一礼しながら入ってくる。そのあとから、サイゼンが現れた。さらに後ろから、市民軍兵士二名が続く。

「あれ？ 今日には防衛隊の人じゃないの？」

夏希は当惑の声をあげた。

「よくわからんが、違うようだな」

やや不機嫌そうな声でそう言ったサイゼンが、エイラに視線を当てて軽く会釈する。

「イフアラ族族長サイゼンだ。ジンベルの巫女、エイラ殿とお見受けするが」

「その通りです。お初にお目にかかります、サイゼン殿」

エイラが折り目正しく言って、一礼した。

そのあいだに、市民軍兵士三人が、扉の前に立った。うち一人が、少女といってもいいくらい若い女性であることに、夏希は気付いた。いずれも見覚えのない顔だったが、市民軍兵士は動員時には三千名

を越える。顔を知らぬ者がいても、別段不思議はない。

「後ろで浮いておられるのが、噂のコーカラット殿ですな」

サイゼンが、見上げる。

「わたくし、エイラ様の使い魔でコーカラットと申しますう。よろしくお願ひしますう」

回転をやめたコーカラットが、いつもの調子で挨拶し、ボディを前に傾ける。

「コーカラット殿。少しお話したき事柄があるのだが……よろしいかな？」

「構いませんですう」

サイゼンの提案に、コーカラットが快く応ずる。

「もう少し、近くに寄ってはくれまいか」

「わかりましたですう」

コーカラットが高度を落とし、サイゼンのすぐそばまで漂ってゆく。

「サイゼン殿。なにをされるおつもりです？」

夏希は訝しげに問うた。

「いや、気にせんで下され、ナツキ殿」

そう言ったサイゼンが、コーカラットの側頭部に口元を寄せ、小声で何かを告げた。……耳打ち、に近い格好だが、もともとコーカラットに耳はない。

「はい。もちろんですう」

「何をなさるつもりなのですかあ」

「むりやりはいけないのですう」

「エイラ様と夏希様が自ら行かれるのであれば、止めようがないのですう」

「もしそうだとしても、わたくしがお守りするのですう」

「ちよつと、何の話をしているのですか？」

夏希は焦れてそう言った。サイゼンの声が聞こえないから、傍で見ている限りではまるでコーカラットが携帯で喋っているかのよう

だ。

いきなり、コーカラットの触手の一本がサイゼンの手首に巻きついた。

「本当かどうか、確かめるのですう。絶対に、エイラ様と夏希様に危害は加えない、と誓っていたのですう。」

「エイラ殿と夏希殿には、決して危害を加えない。その安全は、このサイゼンが保障する。」

コーカラットの触手に手首を巻かれたまま、サイゼンが厳かに宣言する。

「ちよつと、コーちゃん。何してるの？ どういう意味かしら？」

エイラも苛立ったような声をあげた。

「申し訳ありませんですう。今からご説明いたしますう。」

コーカラットがサイゼンのそばを離れると、エイラと夏希の前に漂ってきた。

「サイゼン殿が今からあることをなさるそうですが、それは人間同士の争いごとに関するものなので、わたくしに介入しないようにと告げられたのですう。また、おふたりには絶対に危害を加えないと約束しておいでですう。サイゼン殿は、嘘はついていないのですう。」

「はあ？」

事情がわからぬまま、夏希は当惑の声をあげた。

そのあいだに、控えていた三人の兵士が、そろそろと部屋を出て行った。驚く夏希とエイラを尻目に、扉がぱたんと閉まる。

「さて、これで人払いはできた。本題に入ろう。エイラ殿、ナツキ殿。唐突で申し訳ないが、わたしに拉致されていただけないだろうか」

生真面目な表情で、サイゼンがふたりに告げた。

「あ、あの、サイゼン殿？ 冗談にしては、不謹慎すぎると思いますが」

数秒の沈黙のあと、強張った笑みを浮かべた夏希はそう言った。

「冗談ではありませんぞ。わたしは本気です。もつとも、拉致というのは建前ですが。お二方を高原にご招待したいのです」

サイゼンが、慇懃に一礼する。

「どういふことですか？」

鋭い語調で、エイラが問うた。

「なに、単純な話です。わたしとナツキ殿の思惑は、ジンベルの外交団が停戦交渉のために高原に行くべきだという点で一致している。しかしながら、ヴァオティ国王がイファラ族との外交交渉を禁じておられるので、動きようがない。そこで、わたしに拉致されたという形で、高原にご招待しようというわけです。まず魔界膨張の様子をその眼で確かめていただく。その上で、双方が納得できる停戦条件を検討する。先ほど出て行った三人の兵士は、みなわたしの部下です。すでに、お膳立てはできています。どうぞしよう、拉致にご同意いただけますか？」

わずかな笑みを湛えて、サイゼンが淀みなく説明する。

「お、面白い提案ですね」

夏希は引き気味にそう言った。サイゼンがやりたいことは、ようやく理解できた。停戦に持つてゆくためには、外交交渉が不可欠だ。だが、現状では使節の派遣すら、国王によって禁じられている。夏希なり誰なりがほいほいと高原に出向けば、王命に反したということとで厳罰に処せられるだろう。場合によっては、利敵行為で死罪の可能性すらある。しかし、拉致されたということにしておけば、不注意を咎められる程度で済むはずだ。

「しかし、急にそんな提案をされても……せめて何日か前に予告していただければ、こちらとしても準備とか……」

「それでは、拉致になりませんぞ」

夏希の発言を、サイゼンが遮った。

「あなたやエイラ殿が、ヴァオティ国王から処断されるようなことがあってはならないのです。下手に準備などしたら、拉致が偽装で

あることがばれてしまう」

「確かにそうですね。……夏希殿、ここはサイゼン殿を信じて高原に行ってみませんか？」

エイラがそう言っつて、夏希を見て微笑む。

「ちよつと、エイラ。本気で言っつてるの？」

「サイゼン殿のおっしやることは筋が通つてますわ。巫女としては、魔界膨張と魔力の源の関係も調べてみたいですし」

「でも、色々危険が……」

「コーちゃんがいれば、平気ですわ。もし夏希殿かわたくしに万が一のことがあれば、コーちゃんが仇をとつてくれます。イフアラ族くらい、半日もあれば殲滅できますわ。そうでしょ、コーちゃん」

「お言葉ですが、半日ではいささか無理なのですう。二日くらいは、掛かると思つのですう」

「コーカラットが、触手をくねらせながら言つ。」

「どうかわたしを信じて欲しい」

サイゼンが、軽く頭を下げる。

「噂に聞く高原侵攻作戦が行われれば、他の氏族が黙つてはいないだろう。戦争は拡大してしまう。わたしはイフアラ族の氏族長に過ぎない。他の氏族への影響力は、限定的だ。高原の民と平原の民の全面対決に発展してしまつたら、わたしの手には負えなくなる。その前に、せひとも停戦に持ち込まねばならない。今ならまだ、イフアラ族の総意をまとめ上げるだけで、停戦できるだろう」

「いいですわ。わたくしは高原地帯へまいります。これも、巫女としてジンベルのために尽くす道のひとつですわ。夏希殿、一緒に行つてくださいますね？」

エイラが、期待を込めた眼差しを夏希に注いだ。

「待つてよ、エイラ。状況がほんとにわかつてるの？ もし拉致が偽装であることがばれたら、王命に反抗したことになるのよ？」

サイゼンにちらりと視線を走らせつつ、夏希はそう言つた。

ジンベルの法律には詳しくないが、ヴァオティ国王に逆らつるのは

重罪だろう。下手をすれば、死刑だ。拉致が偽装であることは、当然サイゼンも知っているのだから、彼がジンベル政府に密告すれば、夏希とエイラは断罪されるだろう。高原行きを選択すれば、ふたりの命運はヴァオティの手に握られてしまうも同然となる。

「いざとなったら、ジンベルを捨てて亡命でもすればいいことですわ」

こともなげに、エイラが言い放った。

「亡命って……」

「ワイコウなら、魔力の源がありますから巫女として受け入れてくれるでしょう。あんまり評判のいい国じゃないから、気が進みませんが。夏希殿。わたくし、凜殿のお手伝いをして、何百人という怪我人を見てきましたの。痛みと苦しみと、悲しみによってゆがんだ何百という顔を。あのような人々をこれ以上出さないためなら、国を捨てることくらい、厭いませんわ」

きつぱりと言ったエイラが、その漆黒の眼で、夏希を見据えた。

おもわずたじろぐくらい、強い光を放っている。

……本気モードに入ってる。

夏希はそう判断した。ここまでの覚悟がある以上、エイラを翻意させるのは難しいだろう。

「……気が進まないけど、付き合うわ」

夏希も覚悟を決めた。エイラに万が一のことがあれば、元の世界へ送り返してもらえなくなることに気付いたのだ。ひとりで行かせるとよりは、夏希が付いていた方が、まだ安全に思える。コーカラットが守ってくれるのであれば、とりあえず命を落すようなこともあるまい。拉致はさすがに想定していなかったが、すでに外交使節団の一員として、高原地帯に赴く覚悟はできていたのだ。それが、多少早まったと思えばいい。

「結構だ。さっそく、出かけよう」

サイゼンが、扉に歩み寄って軽く叩いた。すぐに、兵士の一人が顔を見せる。。

「置手紙とか、書かせてほしいわね」

夏希は、手元の筆記用具を取り上げた。

「それはまずい。拉致ではないとばれてしまうぞ」

サイゼンが、渋い顔をする。

「大丈夫。異世界の文字で書くから。仲間の異世界人にだけは、真相を伝えておきたいの。すぐ終わるわ」

夏希はさらさらとつけペンを走らせた。文末に名前だけ書き添える。

「できた。じゃ、行きましょう」

「いつもと違う場所を歩いてみたいんです」

そう言って、リダはタクミと手を繋いだ。

「ああ……構わないけど」

当惑した様子で、タクミが許可を出す。

リダは計画通り、タクミを市街地の北部へと連れ出した。周囲の建物に気をとられた風を装って、わざとゆっくりと歩く。

日除けの笠を目深に被った男性が、監視役の兵士を伴ったリダとタクミを足早に追い抜いてゆく。その背格好と歩き方は、リダには馴染みのものであった。

実兄ベンデイスである。

リダは湧き上がる喜びを噛み締めつつ、タクミを見た。その笑顔の意味を勘違いしたらしいタクミが、笑顔を返してよこす。

ベンデイスが、一本の路地に消えた。わざと足を遅らせたリダは、一ヒネほど待ってから、その路地へとタクミを連れ込んだ。

手筈通り、その路地の中ほどにくたびれた麻紐の切れ端が落ちていた。そこまでタクミを連れて歩んだリダは、サンダルに石が挟まったと偽って、しゃがみ込んだ。逆方向から、笠で顔を隠したベンデイスが歩んでくるのを横目で確認しながら、建物のあいだを手探りする。指先に、革の感触があった。素早くつかみ取る。

革の鞘に収まった小さなナイフが、リダの手に握られた。タクミに気が付かれないように、そっと鞘から抜く。

湿った砂に重いものを落としたような音が聞こえた瞬間、リダは勢いよく立ち上がった。状況を把握できていないタクミに半ば抱きつくような感じで寄り添い、ナイフの切っ先を首筋に突きつける。

「静かにしていただきます、タクミ殿」

「……え」

当惑した表情のタクミが、大きく見開いた眼でリダを見返す。

「助けを呼んだら、刺します」

リダは本気でそう言い切った。色々と親切にしてもらい、タクミには好意を抱いていたが、ここで大声を出されたらベンディスマでもがジンベルに捕まってしまう。リダにとっては、愛する兄のためなら、タクミを殺すことなど造作もないことだった。

「大人しくしてくれたまえ、タクミ殿」

兵士の始末をつけたベンディスマが、タクミの肩をつかんだ。

「自己紹介させていたどころ。リダの兄、ベンディスマだ。わたしと一緒に来てもらおう」

「……どこへ？」

「ジンベルの筆頭巫女と、君の仲間のナツキという女性のところだよ。安心してくれ、抵抗しない限り危害を加えるつもりはない。無益な殺生はしない主義でね。兵士も気絶させただけだ」

「何を企んでいる？」

怯えを含んでいるのか、かすれたような声でタクミが問う。

「停戦です。タクミ殿、わたしは自分の銃に掛けてジンベルの利益になることはしないと誓いました。その誓いは、まだ生きています。兄上がなさろうとしている事は、ジンベルの利益になるのです」

首筋からナイフの切っ先をやや離しながら、リダは真摯な表情でタクミに告げた。

最初に異常事態に気付いたのは、アンヌツカであった。

夏希はもちろん、エイラとコーカラットまでもが尋問室から消えていることに気付いた彼女は、すぐさま周囲を捜索にかかった。殴られて気絶している兵士一人を発見したアンヌツカは、即座に警備室に駆け込み、当直警備の士官に警報を発令させた。これに伴い、ジンベル防衛隊本部のすべての門が閉ざされ、警備が強化された。アンヌツカの勧告を受けた当直士官は数名をサイゼンが監禁されている部屋に派遣したが、そこにはサイゼンの姿はなく、代わりに縛られた二人の兵士が閉じ込められていた。

連絡を受けたラツシ隊長……このときはたまたま救援軍駐屯地で統合司令部の面々と打ち合わせ中であった……はすぐさまジンベル防衛隊と市民軍に対し緊急招集を掛け、サイゼン氏族長とエイラ、夏希の両名を捜索するように命じ、救援軍各部隊にも協力を要請した。市街地を捜索していた一隊に、頭に大きな瘤をこしらえた兵士が助けを求めたのは、昼前のことであった。そこで初めて、拓海とリダの姿も消えていることが発覚した。

ジンベルは大混乱に陥った。

「申し訳ありません、わたしが付いていながら……」

アンヌツカが、唇を噛む。

「あなたを責めるつもりはないわ。防諜担当者として、あたしにも責任があるんだし」

さばさばとした表情で、凜が言う。

「俺もジンベル防衛隊の一員として、責任を感じている。気に病むな、アンヌツカ。夏希は必ず無事に帰ってくる。なにしろ、コーカラットが付いているんだからな」

生馬もそう言って、アンヌツカの肩を慰めるようにぼんぼんと叩いた。

「今日はもう任を解く。家に帰って、休め」

「了解しました、生馬様」

なおも悄然としたまま答えたアンヌツカが一礼した。凜にも頭を下げてから、すぐすごと仕事部屋を出てゆく。

「……凄い落ち込みようだな。夏希もいい部下を持ったものだ」

羨ましそうに、生馬が言う。

「真相を教えてあげたいけど、ねえ」

凜が、夏希の置手紙を手にする。

『ラチギソウ 高原ユク 心配ナイ 夏希』

汚い字で走り書きされた紙。

尋問室に残されたそれを目にした瞬間、生馬と凜は夏希らの意図とことの次第を理解した。脱走の手際から見ても、主導したのは夏希やエイラではなく、イファラ族側だったのは間違いない。おそらくは、事前にサイゼンの部下が複数潜入していたのだ。彼らを利用してジンベル脱出の手筈を整えたサイゼンが、夏希とエイラに拉致を装った高原行きを提案、停戦交渉の好機と見た二人がそれに乗ったのだろう。

「まあ、夏希はともかく拓海がいるんだから、ドジは踏まないとと思うが……」

生馬は頭を掻いた。

「ま、あたしたちはこちらでできることをやりましょうよ」

「そうだな」

前向きな凜の発言に、生馬は深くうなずいた。夏希と拓海、それにエイラがどのような交渉をイファラ族と行うかは定かではないが、その内容を受け入れる準備……もっと正確に言えば、ジンベルが譲歩する気になるような根回しをしておかねばならない。状況証拠からすれば本当に拉致されたい拓海はともかく、夏希とエイラは拉致が偽装であることが発覚すれば、処刑されるかも知れぬことを承知で、高原へと向かったのだ。その覚悟を無駄にするわけにはいかない。

「いいのかなあ」

ジンベル川を下る川船に揺られながら、夏希はぼやいた。

「コーちゃんがいれば、問題ありませんわ」

夏希の隣で船縁に座り、通り過ぎる景色を眺めているエイラが、素っ気なく応ずる。

「いや、コーちゃんのことには信用してるわよ。むしろ心配なのは、後始末ね」

「凜様たちに置手紙も書きましたし、大丈夫じゃないでしょうか」

「拉致偽装がばれなかったとしても、陛下に怒られたりしない？」

「わたくしたちは外交交渉に出向くわけではありませんわ。あくまで拉致されたのです。不可抗力ですわ。責めを負うべきは、ジンベルの治安維持を統括するジンベル防衛隊ですわ。つまりは、ラッシ隊長の責任ですわ」

エイラが屁理屈を述べ、くすくすと笑う。

「まったく、酷い目にあった」

ぼやきながら、拓海が船縁に寄ってきた。

「どう？ 拉致された感想は？」

にやにやと笑いながら、夏希は訊いた。すでに、拓海拉致の事情は、サイゼンから詳しく聞かされている。

「美少女に刃物を突きつけられるというのは、なかなか快感だね。癖になりそうだ」

真顔で、拓海が言う。

「……マゾなの？」

「否定はしない。ただし、相手が美少女限定だがな」

拓海が真顔のまま返す。

川船はすでにジンベルの領域を過ぎて、フルーム目指しかなり早い速度で進んでいた。両岸は平坦だが、密林に覆われており、人家はない。時折、ジンベルを目指す川船と行き違ってくるくらいで、寂しいところである。川幅はやや広がっており、流れもいくぶん穏やかな

ようだ。

「いつまでこうしていなければならぬのですかあ」

積荷のあいだから、コーカラットが情けない声をあげる。

「ごめんね、コーちゃん。暗くなったら、出てきていいから」

エイラが、宥めた。

コーカラットがふわふわと飛んでいては、エイラの居場所を幟ほしでも立てて触れ回るも同然である。そこで、コーカラットは川船に積み込まれている幾許かの積荷のひとつに偽装されていた。さながらヤドカリのように、蓋を取った木箱を、頭(?)から被っていたのだ。他人に見られそうなきには、木箱の中にすっぽりと入り、触手を引っ込めて動かずにいれば、ごく普通の積荷のひとつにしか見えない。

「そうしていると、意外と可愛いわよ、コーちゃん」

夏希は褒めた。

37 いわゆるひとつの拉致（後書き）

第三十七話をお届けします。

### 38 旅行く者たち

ジンベル川は、平原地帯をほぼ南から北へと流れる大河ノア川の支流である。

その合流点まで、他の都市に寄港することなく一気に下った川船は、今度は舳先を南に向け、ノア川を遡り始めた。

「大きい川ねえ」

夏希は船縁から川岸を眺めた。川幅は、百メートルはあるだろうか。水量も豊富で、日本の河川によく見られるような中州などほとんどない。

「この川を下れば、そのまま海に出るのよね」

アンヌツカの地理の授業を思い出しながら、夏希はエイラに尋ねた。

「そうです。平原地帯の北にある山岳地帯の狭隘部を抜ければ、海岸平野が広がっています。そこにあるルルト王国を貫いて、海に注いでいますわ」

夏希は艫の方に視線を転じた。いま竿を操っているのは、リダの兄ベンデイスだ。日除けの笠を目深に被り、日焼けした顔に汗を滴らせながら、一定のペースで竿を突いている。

「なかなかイケメンだよな、ベンデイスは」

「そうね」

拓海の言葉に、夏希は気のない返答をした。

「なんだ、二枚目に惹かれないたちのか？」

拓海が、意外そうな表情で夏希を見る。

「べつに、興味ないし」

たしかにベンデイスはハンサムだとは思うが、ヨーロッパ系の濃い顔立ちの男性は、夏希にとって趣味の対象外である。

「そういう拓海は、あんな男性が好みなの？」

からかいの口調で、夏希は訊いた。

「うん。いい男だと思う」

「……まさか、両刀だったの？」

夏希は引き気味にそう訊いた。

「違うよ。だが、近い将来『義兄さん』と呼ぶことになるかもしれない相手だからな」

しごく真面目な表情で、拓海が言う。

「勝手にやってなさい」

夏希は呆れて言った。やり取りが面白かったのか、エイラが慎ましく手を口元にあて、くすくすと笑う。

「それにしても、腹が減ったな」

腹部を撫でさすりながら、拓海がつぶやく。

「それには同意ね」

夏希は空を見上げた。太陽はすでに低い位置にあり、周囲の風景は徐々に赤味を帯びつつある。昼食抜きで船旅を続けているので、かなり空腹だ。

「すまんが、夜になっても停まらんぞ。時間が惜しい」

ジンベルの三人に寄ってきたサイゼンが、告げた。

「それは構いませんが……危なくないのですか？」

夏希はそう訊いた。川船のことはよくわからないが、夜間の航行は危険なのではないだろうか。せいぜい屋形船サイズのこの船では、水面下の岩などにぶつかったら、たちまち転覆だろう。

「心配ない。舳先に角灯を点けて、見張りも置く。船主のアラックにとつては、この辺りの流れは自分の庭みたいなものだそうだ。

あなた方は、安心して寝てくれ」

「それより、飯を喰わせてもらいたいな、サイゼン殿」

拓海が、口を挟む。

「もう少し上流の村で、何か買い込むらしい。十ヒネくらい、辛抱してくれ」

平原地帯には、十三の都市国家に属さない人々もいる。主に川沿

いに小さな集落を形成し、慎ましく生きている人々である。

彼らの生活の主たる糧は、やはり農業である。密林を切り拓き、米や野菜、芋類などを栽培する。その様は、各国家に属している農民の生活と大差がない。川から魚などを採取する者もいるが、こちらも同じような暮らしぶりである。

そんな彼らには、副業がある。川や川沿いの街道を使って行き来する商人や旅人相手に、宿や食事を提供する商売だ。交通量はそれほど多くないので、いまだ専門の宿屋や旅行者向けの食堂などは発達していない。宿といっても空いている部屋や離れを貸す程度だし、食事も余分に炊いた米に、自分たちがいつも食べているおかずを付けて売るのがせいぜいである。

そのようなわけで、ベンディスの部下が買ってきてくれた食事も、いかにも地元の人々が普段食べていそうなものであった。大きな木椀に盛られた米に、シソのような香りのするふりかけが掛かっており、それに小魚の佃煮のようなものと漬物、辛し和えみたいな味が付いている茹で野菜が少々添えられている。

「これで幾らするんだろう？ コンビニ弁当くらいかな」

旺盛な食欲を見せて食べながら、拓海が言う。

「一オロットくらいでしょう」

上品に箸を使いながら、エイラが答えた。

「高いわね」

小魚の佃煮……これは塩気がきつかったが、なかなかおいしい……をつまみながら、夏希はそう応じた。日本円に換算すると、千五百円くらいか。

「これで一オロットはぼったくりだな」

拓海が、しかめっ面で漬物を載せた米飯を口に放り込む。

「それでもありませんわ。碗と箸は、売れますから」

「売れる？」

エイラの説明によれば、食べ終わった後に木椀と箸を洗い、乾かしておけば、同じような商売をしている集落で引き取ってもらえる

のだという。その値段は、だいたい半オロット程度。

「それはエコロジーな」

「というか、現代における工業製品の価格が低すぎるんだな。結局は人件費の問題だろうが」

拓海が、食べ終わった木椀をひっくり返し、底の方の木目を撫でる。

「いい仕事してるじゃないか。これ。天然木を轆轤ろくろを利用して削り出している。向こうで買ったら安くても五千円くらいする代物だぞ。半オロットで売っちゃうのはもったいないくらいだ」

ジンベルの筆頭巫女と異世界人二名の拉致という重大事件が発生したにも関わらず、ニアン主導による高原侵攻作戦は着々と準備が進められていた。

そんな中、ついに救援軍は分裂した。ススロン、エボダ、シーキンカイの三カ国が、高原侵攻作戦への不参加を公式に表明したのだ。それを受けてニアンは、救援軍への自国民軍の増派を発表した。

その翌日、ジンベルのヴァオティ国王はニアンからの緊急借款を受け入れることを宣言、さらに救援軍各国に対し、高原侵攻作戦への積極的参加を希望するという談話を発表した。

生馬と凜の努力にもかかわらず、流れは確実に、高原侵攻作戦開始へと傾いていた。

ノア川に別れを告げた川船は、ジージャカイ川を遡り始めた。

勾配がややきつくなり、流れも速くなったので、船足は極端に落ちた。人が歩くほどの速度で、ゆっくりと上ってゆく。暇をもてあましていた夏希は、予備の竿を借りて艫かに立ち、遡航を手伝った。「やっぱり、竹竿握ると画になるねえ」

拓海が茶化す。

食品加工で有名なジージャカイ王国へ上陸したのは、ジンベルを発つてから三日目の早朝であった。郊外の船着場でアララックと別れた一行は、人目を避けて市街地を迂回し、畑の中に設けられた狭い道を南東へと向かった。

夏希とエイラは、コーカラットが入った木箱に縄をかけ、二人で持っていた。中でコーカラットが箱ごと飛んでいるので、実質的な重さはゼロである。

夏希の見積もりで三キロほどで、まともな道は終わっていた。そのあとは、手入れの悪い登山道、といった程度の細い山道が、密林のあいだに延びている。九人と一匹に減った一行……夏希と拓海の二人の異世界人。エイラと、コーカラット。サイゼン氏族長。ベンデイスとリダの兄妹。見た目は平原の民と変わらない、ベンデイスの部下三人……は、その歩きにくい山道を登っていった。

人気のない山道に入ったところで、『箱入り』だったコーカラットもようやく解放された。久しぶりに飛べることが嬉しいのだろう、控えめに奇声をあげ、いつもより速い速度であちこちを飛び回っている。

一行は、水場での休憩を挟みながらゆっくりとしたペースで山道を辿った。昼食休憩……ジージャカイで購入した炊いた米と、煮魚それに茹で野菜……を摂ってから一時間ほど歩いたあたりで、ついに拓海が脱落する。

「だめだ、こんなサンダルじゃ」

座り込んだ拓海が革のサンダルを脱ぎ捨て、足の裏を揉み始める。

「こんな山道、トレッキングブーツが必要だよ」

「情けない……と言いたいけど、わたしもそろそろ限界ね」

夏希は拓海の横に腰を下ろした。体力にはそこそこ自信があるが、この暑さの中、山登りはそうとうにきつい。

「わたくしも、疲れましたわ」

エイラも、夏希に寄り添うように座り込んだ。

「ほら、拓海。愛しのリダがつめたーい眼で見てるわよ」

「構うものか。こちとら農耕民族だ。先祖代々平らなところで米作  
つてたんだから、狩猟民族に敵うわけない」

夏希の揶揄を含んだ指摘に、なおも足のマツサージを続けながら、  
拓海が憤然として言い返す。

「狩猟民族って、さすがね」

熱を帯びているふくらはぎをさすりながら、夏希は同行する高原  
の民を見やった。まだ若いベンデイスやその部下はもちろん、中年  
のサイゼンや歳若いリダも、食料や簡易食器などを収めた荷物を背  
負っているにもかかわらず、平然としている。夏希らも、自分の私  
物……買い与えられた着替えなど……は荷物として背負っていたが、  
実質手ぶら状態で歩いていたのに、このさまである。

「もう歩けぬのか。拓海殿や巫女たるエイラ殿はともかく、夏希殿  
は戦士のように」

三人の前にしゃがみ込んだサイゼンが、冗談口調で言う。

「竹竿を握ってないと、力が出ないんです」

夏希も冗談で返した。

「弱りましたね。一刻も早く高原に至り、停戦交渉を行わねばなら  
ぬのに」

近寄ってきたベンデイスも、困り顔で言う。

「仕方ありません、コーちゃんにお願いしましょう。三人分、頼む  
わ」

エイラが見上げて、高いところで浮いていたコーカラットに依頼  
する。

「承知しましたあゝ。お易いご用なのですう」

すると低いところへ降りてきたコーカラットが、夏希らが見  
守る前で二本の触手をそれぞれ前後に伸ばした。

「またいでくださいいゝ」

「はあ？」

「拓海殿は前へどうぞ。こうするのです」

エイラが、後方へ伸びているコーカラットの触手にまたがった。

うつつと触手の一部が変化して横棒が生み出され、エイラのお尻を支えるように伸びる。

夏希もエイラの後ろで触手にまたがってみた。横棒にお尻を預けるようにすると、結構安定するし乗り心地も悪くない。足の置き場がないのが乗り物としてはちょっと違和感を覚えるところだが、簡易な観光用リフトか何かに乗ったと思えばいいのだろうか。

「では、まいりますですう」

コーカラットが、三人を乗せたままゆっくりと動き出した。坂道だが、水平を保ってくれているので、背もたれがなくとも後ろにのけぞったりすることはない。揺れもなく、快適である。

「これは楽でいいけど……なんか間抜けに見えそう」

夏希は苦笑いを浮かべながらつぶやいた。傍から見れば、いい歳をした三人の男女が児童遊園のメルヘンチックな遊具にまたがって遊んでいるようにも見えなくはない。

高原地帯に出るまで、丸二日かかった。

平坦となった大地に伸びる、獣の踏み分け道とたいして変わらぬ小道を日暮れまで歩いて、ようやく小さな集落に到達する。

「今日はここまでだ。ゆっくり休んでくれ」

宿舎となる小屋に案内してくれたベンデイスが、そう告げる。

「イファラ族の居住地まで、あとどれくらい掛かるのですか？」

旅疲れか、いささか冴えない表情のエイラが、訊く。

「四日だな。だが、安心してくれ。そこへは行かない」

「行かないのですか？」

「ああ。時間が惜しい。あと一日南へ歩けば、ハンゼイ氏族の本拠だ。そこに、サーイエナ様が出向いてきてくれたと連絡が入っている。イファラ族の主だった者も、来ているそうだ。そこで交渉しよう」

「……たしかに、イファラ族の本拠には行き辛いわね」

夏希はそう言った。ジンベルはすでに何千名ものイファラ族戦士を敗死させているのだ。ほとんどのイファラ族は、身内や友人知人を最低でも一人は失っているだろう。きっと、もの凄く恨まれているにちがいない。

「そうだな。俺なんて、後ろから刺されるかもしれん」

拓海が渋面で言う。

「それはあり得ないよ、タクミ殿」

穏やかな声で、ベンデイスが言った。

「高原の民は誇り高い。客人を殺めるなど、あり得ない。もしそんなことがあれば、その者を出した支族は永遠に氏族から追放されるだろう。たとえ親の仇だったとしても、氏族の客人である以上笑顔で接する。それが、高原の民の慣わしだ」

「……それはありがたいですが……なんか不自然な感じが」

遠慮がちに、夏希はそう言った。誇りのために自然な感情を抑制しすぎるのも、良いことではないと思う。

「高原には、平原の国家のような細かい法律はないのだよ」

語りかける調子で、ベンデイスが続けた。

「そのような社会が、個人の感情を優先させていては、收拾がつかなくなってしまう。狩りの時に、各自が違う獲物を追ったのでは、一匹も捕らえることができないだろう。民ひとりひとりの意思は尊重するが、支族や氏族がことに当たる場合は、厳しい掟で縛るのが、高原の流儀なのだよ」

「高度に発達した原始共産制というところかな」

拓海が、つぶやくように言う。

翌早朝、一行はハンゼイ氏族の本拠に向けて出立した。

それまで歩んできた道は、高原の外縁部であり、地形的には平坦であってもその特徴は山岳的だったが、ここから先はまさに高原、とでも言うべき景観が広がっていた。すなわち、ただっ広い草原地帯である。

「さすがに高原だな。平原よりも、だいぶ涼しいぞ」

あたりをきよるきよると見回しながら、拓海が言う。

「そうね」

夏希は同意した。強烈な日差しに晒されてはいるが、空気はからりと乾いている。気温はたいして変わらないのだろうが、平原地帯の水分をたっぷりと含んだねっとりとした空気よりも、ずっと爽やかに感じる。

交通量が少ないせい、歩んでいる道自体は、獣の踏み分け道よりはいくぶん増し、といった粗末なものだった。周囲には、細い茎と稲によく似た葉を持つ腰高くらいの草が密生している。随所に禿げて赤茶色の土がむき出しになっているところが見受けられるが、そこは土壌かなにかが影響して草の生育を阻んでいるのだろうか。ざっと見た感じでは、数百平方メートルに一本くらいの割合で、小さな黄緑色の葉を茂らせた背の低い木が、盆栽の松を思わせる半ば地を這うような格好で生えている。

「あ、なに、あれ」

その低木の陰に隠れるようにして、大きな獣らしきものがこちらをうかがっていることに気付いた夏希は、思わず足を止めた。

「セレンガですね」

すぐ後ろを歩んでいたリダが、足を止めて教えてくれる。

「いきなりサファリパーク状態か」

拓海も寄って来た。小手をかざして、獣の様子を見物する。ちょうど草が茂っていないところが手前にあるので、観察するのに都合がいい。

そのセレンガが、こちらを注視しながら木の陰からのっそりと出てきた。その形状と体格は、雌ライオンによく似ている。だが、胴体部分は薄茶色と白の縦縞だった。……さながら、トラ猫のようだ。「危なくないの?」

夏希はリダに訊いた。

「セレンガは強くて獰猛な動物ですが、馬鹿ではありません。人間

を襲うことは、めったにありません。お互い、不干渉ですわ。狩りの時に、獲物の取り合いをすることはありますが、いつもすぐに諦めて譲ってくれます。狩人とやり合うよりは、新しい獲物を追いかける方が、楽ですからね」

狩りの様子を思い出したのか、楽しそうな表情で、リダが説明する。

見守るうちに、セレンガが木のそばで箱座りした。首を伸ばし、こちらを注視しつつ、耳をぴくぴくと動かしている。ライオンやトラのような丸耳ではなく、上方にぴんと立った三角形のいわゆるネコ耳なので、箱座りなどしていると痩せ気味の巨大なトラ猫にしか見えない。

「悪いが、先を急ぐぞ」

サイゼンが、背後から声を掛けてくる。

夕暮れまでに、一行は目的地であるハンゼイ氏族の本拠に到着した。

かなり大きい集落であった。おそらく、戸数は千戸を確実に超えているだろう。大きさからすれば都市と呼ぶにふさわしい規模なのだが、立ち並ぶ家々はジンベルを始めとする平原都市のように整然と立ち並んでおらず、町並みはかなりアバウトだ。周縁部には、畑の中に十数戸が肩を寄せ合うように集まっていることが多く、家々が密集している中心部では一応街路が形作られているものの、くねくねと蛇行したりいきなりかぎ型に曲がっていたりする。都市計画といった単語は、高原地帯には存在しないものらしい。

「とりあえず宿舎に案内しよう」

ハンゼイ氏族の有力者らしい初老の男性となにやら打ち合わせたサイゼンが、そう言ってエワを手招いた。

「接待役に彼女をつける。自由に使ってくれ。本格的な交渉は、明日からだ」

「宿舎はありがたいのですが……時間が切迫しているのでは？」

エイラが言う。夏希も同意した。早めに停戦交渉をまとめないと、ニアンを主体とする救援軍が高原侵攻を開始しかねない。

「悪いが、ここは高原だ。高原の民の流儀でやらせてもらう」  
笑みを湛え、サイゼンが言った。

「旅で疲れた客人に対し、いきなり難しい話を吹っかけたりするよ  
うなことは礼を失するからな。まずは歓迎の宴だ。そして、一晩ぐ  
つすりと休んでもらう。交渉は、明日の夜明けから行うとしよう」  
「宴か。悪くないな。でも、交渉メンバーの顔合わせくらい、今晚  
中にさせてもらえるんだろうね？」

拓海が、訊いた。

「もちろんだ」

サイゼンが応ずる。

38 旅行く者たち（後書き）

第三十八話をお届けします。

### 39 高原の蒼き巫女

夏希らに宿舎として宛がわれたのは、さして広くもない一軒家だった。土間になっていて玄関兼台所兼納戸がひとつと、板敷きの狭い部屋がふたつ。トイレは、近くにある共同トイレを使うようだ。

「製材加工技術は平原の方が上だな」

台所の板壁や柱を検分していた拓海が、言う。

「それはそうでしょう。樹木自体、高原には少ないのですから」

乱れた髪を直しながら、エイラがそう応じる。

「ハナドーンの製材を持ってくれば、よく売れるだろうな」

「停戦交渉が始まってもないのに、もう商売の話？ いずれにしても、ジンベルの儲けにはならないじゃない」

早くも皮算用を始めた拓海に、夏希は揶揄を込めた言葉を投げた。

「いやいや。そうでもないぞ。地図を見るとわかるが、高原から平原へと流れている川で、まともに川船が運航できるのはジンベル川だけなんだ。主流のノア川でさえ、山岳地帯を縫って流れているから急流はあるは滝はあるわで船は使えない。つまり、平原と高原が交易しようとするれば、すべての物資がジンベルを通過することになるわけだ」

「中継貿易を企んでるの？」

「単なる物流拠点だけでも、経済効果は間違いなく大きいよ」

拓海が、真剣な表情で言う。

「高原に売れる物は、たぶんかなりの品目に上るだろう。例えばさつきも言ったが、ハナドーンの製材。あそこのチークに似た各種製材は、素晴らしい品質だ。高温多湿でも腐食しにくいし、比較的軽く丈夫だしな」

「銅は売れそうにないわね」

台所の隅の台の上に置いてあった鈍く光っている銅製の壺から、竹の柄杓で水を汲みながら、夏希は言った。

「色からすると、純銅だな」

近寄った拓海が、壺をこんこんと叩く。

夏希はこれも銅製らしいカップ三つに水を注ぎ入れた。拓海とエ  
イラに渡し、自らもひとつを手にする。

「ニアン製品に比べると粗雑だが、なかなかの加工技術だ」

ごくごく水を飲み干した拓海が、言う。

「なんか意外ね。狩猟民族って言うから、もつと技術的に遅れてる  
かと思っただけど」

「意外じゃないよ。武器に関しては、平原と比べても遜色のない加  
工技術を使ってたしな。鉈なんて、見事な鍛造品だった。あと三百  
年もしたら、日本刀を生み出せたんじゃないか」

にやにやしなから、拓海が銅のカップを差し出してお代わりを要  
求する。

「よろしいですか、皆様」

戸口から、控えめに声が掛かった。

顔を見せたのはエワだった。旅のあいだはつけていなかった高原  
の民女性特有の被り物を、頭に巻いている。色は、芥子を思わせる  
くすんだ黄色だった。

「なにかしら？」

エイラが、問う。

「サーイエナ様が、お見えになりました。皆様にご挨拶なさりたい  
そうです」

「噂の巫女さんか」

拓海が、同意を求めるかのようにちらりと夏希に視線を走らせた。  
「いいわ。入ってもらってちょうだい」

夏希はそうエワに告げた。拒む理由はなにもない。

「承知しました」

エワが引っ込む。すぐに、戸口に人影が現れた。

宿舎に入ってきたのは、なかなか印象的な人物であった。

高原の民の女性にしては上背があり、おそらく拓海と同じくらいの身長だろう。年齢は、二十代後半といったところか。面長で、優しげな眼差し。薄茶色で、緩くウェーブした長い髪。纏っている衣装は、エイラのそれと同じような浴衣を思わせるものだったが、色はややくすんだようなシーグリーンだった。被り物は、高原の民らしく布を巻き付けていたが、こちらの色は深い青。身体つきはがちりしており、胸部は豊かに盛り上がっている。

「色っぽい姐さんだな」

拓海が、ささやく。

「高原へようこそ、皆様。わたくしは高原の蒼き巫女、サーイエナと申します」

女性としてはちょっと低めの声で、サーイエナが挨拶する。エイラから順に、三人と一匹は自己紹介した。

「そう。あなたがエイラ殿の使い魔なのね」

コーカラットに、サーイエナが微笑みかけた。

「そうなのですよ」。よろしければコーちゃん、と呼んでいただきたいのです」

嬉しげに、コーカラットが触手をくねらせる。

「じゃあ、わたくしの使い魔も紹介しましょう。ユニちゃん、いらつしゃい」

振り返ったサーイエナが、手招く。それに応え、魔物が戸口を越え、とことごと入ってきた。

コーカラットと比べると、こちらの方がはるかに人間に近い形状だった。胴体の上に頭が載っているし、手足も二本ずつある。そのうえ、服まで着ている。

とはいえ、それはあくまでコーカラットと比べて、の話である。身長は、一メートルほどと小柄だ。頭身は三頭身。大きな頭部には、コーカラットのそれと同じような黒い円でしかない眼がふたつと、しまりのない口がある。鼻がないのも、コーカラットと似ているが、こちらには眉があった。もっとも、毛が生えているわけではなく、

さながらギャグマンガのキャラのような一本の黒い線だけだったが、頭の頂部からは青緑色の長い髪が生えており、先端は腰の辺りできれいに刈り揃えられている。

着ているのは、黒とグレイを基調にしたドレスのようなもので、裾は足首までであった。その小柄さに合わせて腕は短く、右手には長さ三十センチくらいのも、黄緑色のステッキのような物を握っている。脚の長さはドレスに隠されてよくわからないが、腰の位置から考えるとこちらこそとうとう短いようだ。履物は履いておらず、素足だった。

衣装と手にしたステッキのせいか、なんとなく女兒向けマンガかアニメに出てくる魔法少女をデフォルメしたようにも見える。

「この子が、わたくしの使い魔であるユニヘックヒューマです。ユニちゃん、ご挨拶なさい」

「みなさん！ あたいは、サーイエナ様にお仕えする使い魔、ユニヘックヒューマであります！ ユニちゃんと呼んで欲しいのであります！」

サーイエナに促され、デフォルメ魔法少女……ユニヘックヒューマが、手にしたステッキをぶんぶん振り回しながら、元気よく自己紹介する。声は少女のように甲高く、コーカラットに比べるとはるかに早口だ。

「わたくし、コーカラットと申しますう。ユニちゃんと呼んでいただきたいのですう。同胞とお会いするのは、久しぶりなのですう」

触手を振りながら近づいて来たコーカラットが、そう挨拶する。

「あたいも同胞には久しぶりに会ったのであります！ 会えて嬉しいのです、ユニちゃん！」

喜びの表現なのか、ステッキを器用にくるくると回しながら、ユニヘックヒューマが言う。

「……えらくシユールな光景だな」

拓海が、ぼそつと言った。

「そつね」

夏希も同意した。生首風海月状魔物と、三頭身魔法少女風魔物の交歓など、めつたに見られるものではない。

「では皆さん、そろそろ宴の支度が整う頃合です。ご案内いたします」

サーイエナが言い、にこりと微笑みつつ、戸口の外を指し示す。

宴の会場は、近くにある小さな広場であった。沈みゆく太陽に照らされ、紅に染まったそこには、すでにいくつもの篝火かがりびが焚かれていた。埃避けだろうか、地面には控えめに水を撒いた跡があつた。

サーイエナに促されるままに、夏希ら三人の客人は地面に敷かれた莫蔭もくえんのような敷物に腰を下ろした。エイラの隣には、ちゃんとコーカラットの席も設えられている。

すぐに、数名の女性がやってきて、飲食を必要としないコーカラットを除く各人の前に、食物が盛られた盆を置いた。金属のカップに、飲み物も注がれる。

「さあ、遠慮なくどうぞ」

夏希の隣に座ったサーイエナが、飲食を勧める。

夏希はカップを取り上げて、中身を啜ってみた。

お酒だった。果実酒らしく、桃のような香りがする。

「……おいしいけど、他の飲み物いただけませんか？」

「お酒は苦手でしたか」

サーイエナが、給仕役の女性を手招く。夏希のカップが下げられ、代わりにカップが置かれる。今度の中身は、麦茶によく似た味がした。もちろん、アルコールは入っていない。

夏希は箸を取り上げると、盆に盛られた食物をつつき始めた。メニューは、ジンベルで食べていたものとそう変わりはなかった。味をつけた米飯、茹で野菜、焼いた芋や根菜などなど。味付けは平原地帯のものより淡泊で、塩味中心の素朴なものらしい。

「高原の蒼き巫女か。ありふれてるがなかなか格好いいふたつ名だ

な

断りを言つて中座したサーイエナの後姿を眺めながら、拓海が言う。

「対抗して、エイラも何か名乗ったら？ 平原のなんとか巫女つて冗談口調で、夏希は言った。」

「そうですね。『蒼き』というのはおそらく装束の色から来ているのでしょうか、わたくしが名乗るとすれば『白き巫女』でしょうか」

真顔で、エイラが応じた。

「白き巫女と蒼き巫女ねえ。……売れないゲームのタイトルみたいね」

夏希は苦笑した。

「……なんか、やな予感がするんだが」

カップを握った拓海が、夏希にそつと耳打ちする。

広場の真ん中に、鹿のような動物が運ばれつつあった。首に縄を掛けられ、口と前後の足首も縛られている。

「……ひよつとして、本日のメインディッシュ？」

夏希は箸を握ったまま硬直した。

「どうやらそのようだな。狩猟民族の宴なのに、肉料理がないからおかしいと思つてたんだが……」

拓海が、苦笑いしつつ盆の料理をつつく。

見守るうちに、大きく平べったい木桶が運ばれてきた。

「なに、あれ」

「血を受けるんだらう。狩猟民族だからな。獲物の血液一滴すら無駄にしないんだよ」

「後ろ向いてても、失礼には当たらないわよね」

「たぶんな」

鹿を運んできた高原の民の一人が鉈を抜いたところで、夏希は身体ごと後ろを向いた。ちらりと横目でうかがうと、エイラも同様に広場の中央に背を向けている。

一方拓海は、料理を口に運びながら、畜殺の様子を眺めているようだ。

「よく平気ね」

「グロ耐性は結構あるほうだからな。結局、食文化の違いでしかないだし。あんただってクロマグロ解体するシーンは、よだれを垂らしながら食い入るように見つめるんじゃないのか？」

「確かにね」

夏希は認めた。

解体された鹿の肉が、中央の篝火で炙られ始める。

そのころになると、広場の宴席に三三五五人が集まり始めた。入れ替わり立ち代り夏希らのところにやってきて、丁寧にあやまらせてゆく。大半は、地元であるハンゼイ氏族の有力者だった。挨拶を終えた人はそのまま宴席に戻り、酒盃を手にする。

それが終わると、給仕係りの女性たちが焼きあがった肉を配り始めた。夏希の盆にも、部位は不明だが一キログラムはありそうな塊がでーんと載せられる。そのあとから、鞘付きの小刀も配られた。どうやら、これで切り分けて食べるのが作法らしい。

「削ぎ切るようにすると、食べ易いですわ」

夏希らが戸惑っているのを見たサーイエナが、右手に小刀、左手に箸を持って、見本を見せてくれた。箸で肉を抑え、薄片を器用に切り分けてゆく。

夏希は真似してみたが、慣れぬせいでどうも上手く行かない。

「そりゃまあ、幼いころから鉈を振り回してりゃ刃物の扱いも上達するんだろっつな」

拓海も苦労しているようだ。ぼやく声が聞こえる。

「駄目ですわ。おいしそうなのに。コーちゃん、ちょっと手伝ってくれる？」

匙ならぬ箸を投げ出したエイラが、使い魔を呼ぶ。

「おまかせくださいい〜」

漂ってきたコーカラットが、刃物モードにした触手を二本ほど素早く振り回した。二十秒足らずで、盆の上の肉の塊は骨と薄片だけになった。

「コーちゃん、俺のも頼むよ」

拓海が、手招きする。

「承知しましたあゝ。夏希殿も、いかがですかあゝ？」

「お願いするわ」

「さて。そろそろ、仕事の話をしようじゃないか」

拓海がカツプを置き、サーイエナを見た。

「そうですね」

サーイエナも箸を置く。

「まず、あなたの立場を確認しておきたい。あなたは、高原の民にとって、どういう存在なんだ？」

「調整役、とでも言いましょうか。氏族としては、ずっと南方に住んでいるスリッツ氏族に属しています。高原の魔力の源は、そこにあるひとつだけです。巫女の一族が存在するのは、スリッツ氏族だけです。ご承知でしょうが、高原の民の各氏族の結び付きは、きわめてゆるやかなものです。そのような中で、スリッツの巫女一族は、いわば氏族を超越した中立的な存在として、各氏族間で利害の対立があった場合に、その調停に当たってきた歴史があるのです。現在のところ、一族の中でわたしがもつとも技量の優れた巫女になるので、巫女一族の代表としてみなさまにお会いしているのです」

「つまり、政治的な権力は持っていませんが、高原の氏族すべてに対して強い影響力は持っているということね」

夏希は確認した。

「そういうことになります。少なくとも、どの氏族であれわたくしの言葉には耳を傾けてくださいます。魔界の膨張に関しても、同様でしたし」

「では、高原側の交渉の窓口はあなたでいいのですかな？」

拓海が、訊く。

「はい。イファアラ族を除くすべての氏族長から、本件に関しての交渉権は一任されています。わたくしとサイゼン殿が納得するだけの譲歩をあなた方がしてくださいませば……もちろんジンベル側がその譲歩を確実に履行してくださるとの条件つきであります……戦争は終わります」

「ですがその前に、問題の魔界の膨張についてお聞かせ願えませんか？ 詳しい経緯を知りたいのです」

エイラが割り込んだ。

「巫女としては、当然ですね。もちろん、お話しますわ」

サーイエナが、身体ごとエイラに対し向き直った。高原と平原、二人の高位巫女の視線が、絡み合う。

高原の民が魔界の膨張に気付いたのは、ほぼ一年前であった。

不変であると信じられてきた魔界と人間界との境界線が、ごく僅かずつではあるが移動している……人間界が狭くなっているという驚くべき報告を受けて、サーイエナを始めとする高原の巫女一族はさっそく調査に乗り出した。魔界と魔術は関連があると見られていたし、ことは一氏族の手に余るレベルであると思われたからだ。

観測の結果、魔界は一日あたり八キツホほど（約4・8メートル）の速度で、人間界を侵食していることが判明した。ゆっくりとしたペースだが、一年となると実に三十二シキツホ半（約1950メートル）もの土地が失われることとなる。高原の民の居住域と、魔界との境界線の距離が離れているので、いまだ直接的な被害は生じてはいないが、このままでいけば、十数年後にはもつとも南方に居住する氏族は移住を余儀なくされるだろうし、おそらく五十年以内に高原地帯はすっかり魔界に飲み込まれてしまうだろう。

サーイエナらは打開策を見つげるために、魔界膨張の観察を続けた。その結果、魔術の大量使用と魔界膨張の速度に因果関係があることを発見した。スリッツ氏族の居住地で大量に魔術を使用した時

には、魔界膨張の速度が上がるのがわかったのだ。

サーイエナはただちに高原地帯での魔術使用を禁止した。その結果、魔界膨張の速度はやや鈍化したものの、なおも一日あたり七キツホ半ほどの速度で高原を蝕み続けていた。

高原以外に存在する魔力の源の使用を禁じなければ、魔界膨張を阻止することはできない。そう考えたサーイエナは、各氏族の長と協議したうえで、まず最も近い魔術使用国家である平原のジンベル王国に対し、魔界膨張を遅らせるために魔術使用の抑制を求める親書を送った。だが、何度送っても一向に反応がない。もちろん、魔界膨張の速度が落ちる気配は微塵もなかった。

業を煮やした何人かの氏族長は、ジンベルへ武力を用いて侵攻を行い、魔力の源を強制管理することを主張、サーイエナも気は進まなかったが、周囲に押し切られる形でこれを承諾。かくして、ジンベルに最も近いイフアラ氏族が、ジンベルに対する限定的軍事攻撃の準備を整えることとなる……。

「あとは、ご承知の通りです」

話し終えたサーイエナが、自分の飲み物を啜った。

「事情は理解したよ。で、次に為すべきは本当に魔界が膨張しているのかどうか、俺たちに証明してもらおうことだと思っが……」

拓海が、サーイエナを見据えて言う。

「よろしいです。明日、お目にかけますわ。魔界との境界まで参りましょう」

「お尋ねしてもよろしいですか？」

エイラが、身を乗り出した。

「なぜ魔力を使うと、魔界が膨張するのです？」

「わかりません。ですが、相関関係があることは確かです。何度も実験して、確かめましたから。これは推測ですが、もともと魔力の源の役目は魔界の膨張を押さえるものではなかったのではないでしようか」

「……そういえば、凜もそんなこと言ってたっけ。あ、凜って言うのは、わたしの仲間のひとりよ」

以前のブチ会議の席でのやり取りを思い出しつつ、夏希も口を挟んだ。

「しかし、高原やジンベル以外にも、魔力の源はあるんだろ？ そのすべてで魔術の使用を制限しない限り、魔界の膨張は止められないさそうだが……」

拓海が、首をひねりつつ言う。

「おっしゃる通りですね。ですが、ジンベルが魔術の使用を抑制してくれるだけで、魔界膨張の速度をさらに鈍らせることが可能でしょう。いずれは、ワイコウや海の向こうのタナシスにも親書を送り、協力を求めねばならないでしょうが、まずは出来ることから始めていかないと……」

「なんか、話が大きくなってきたわね」

夏希は頭をかいた。ジンベルとイファラ族との和平が成立したとしても、魔界膨張の問題は解決しないのだ。放置すれば、いずれ平原の民と高原の民は生活圏をめぐって衝突してしまう。それどころか、高原に続いて平原までもが魔界に飲み込まれる可能性も高いのだ。海岸諸国に所属し、平原と交流もあるワイコウはともかく、外交関係すらないタナシスの協力を得るなど、困難なことに違いない。「ここら。むやみに話を広げるなよ。交渉ごとを手早くまとめたかったら、条件をなるべく狭めるのが常道なんだから」

冗談めかして、拓海が夏希をたしなめる。

「ですが、魔界の膨張を利用してジンベルとイファラ族の和解を図るという手は使えそうですね」

エイラが言った。

「それは、俺も思ったよ」

すかさず、拓海が同意する。

「なるほど。共闘せねばならない懸案事項を強調して、手を結ばざるを得なくするわけね」

夏希もつなずいた。近代のヨーロッパ主要国や日本の戦国大名が、政治的な都合や損得勘定だけで、仇敵とあっさりと手を結んだようなものだろうか。

「仕事の話はこれくらいにしておきましょう。皆様には、宴を楽しんでいただけねばなりません」

にこりと微笑んだサーイエナが、酒の入った銅の壺を取り上げると、拓海とエイラのカップに注ぎ足した。

「そうだな。せっかくだから、楽しまないと損だ」

美人の酌に機嫌を良くしたのか、拓海が満面の笑みでカップの身を旨そうに干す。

「そうね」

同意した夏希も、コーカラットが切ってくれた肉を口に入れた。

懸念された獣臭さもなく、柔らかくて、少し塩をつけただけでもおいしい。

他の宴席についている人々も、それなりに盛り上がっているらしい。あちこちから笑い声が聞こえる。エイラの隣にいたコーカラットは、隅の方でしゃがみ込んだユニヘックヒューマと、なにやら熱心に話し込んでいるようだ。魔物同士、話が合うのだろう。

39 高原の蒼き巫女（後書き）

第三十九話をお届けします。ようやく『蒼き巫女』サーイエナ様ご登場です。

## 40 コーカラットの旅立ち

「では、魔界との境界までご案内します」

翌早朝、ユニヘックヒューマを伴って現れたサーイエナが、そう告げた。

「時間節約のために、魔物に手伝ってもらいます。エイラ殿、よろしいですか」

「もちろんです。コーちゃん、お願い」

うなずいたエイラが、コーカラットに頼んだ。

「お易いご用なですう」

低空に舞い降りたコーカラットが、ボディの前後に触手を突き出した。前に拓海、後ろにエイラと夏希がまたがる。

「では、あたいも！」

ユニヘックヒューマが、手にしたステッキを一振りした。するとその長さが数倍に伸び、さらに握りの部分に背もたれ付きの腰掛のようなものが現れた。サーイエナがそこに腰掛け、ユニヘックヒューマが棒の部分を飛脚のようなスタイルで肩に担ぐ。

「では、行きましようか。コーちゃん、ユニちゃんについてきてください。少し急ぎますよ」

「承知しましたあゝ、サーイエナ様あゝ」

サーイエナの言葉に、コーカラットが応える。

「ユニちゃん、お願い」

「合点承知であります！」

ユニヘックヒューマが、ドレスの裾をからげると走り始めた。それを追うように、コーカラットも飛び始める。

広い平原を突っ切るようにして、奇妙な一行は南下した。速度は、夏希の見積もりでは時速四十キロほどか。

「しかし……コーちゃんは飛んでるから乗り心地がいいのはわかるけど……ユニちゃんはどうやってるのかしら？」

夏希は首を傾げた。本来なら前に行くユニヘックヒューマに担がれているサーイエナは、激しい上下動に見舞われていなければおかしいが、まったく揺れていないのだ。

「悩むな。どうせ『魔物ですからあゝ』とか答えられるのがオチだ」  
苦笑交じりに、拓海が言う。

「いえ、ユニちゃんなら『あたいは魔物でありますから！』でしよう」  
う

エイラが、ユニヘックヒューマの口調と声を真似た。

二時間近く南下したところで、ユニヘックヒューマが足を止めた。コーカラットが、その傍らで浮かんだまま停止する。

「地平線に黒い筋のようなものが見えますでしょうか？」

サーイエナが、訊いてくる。

「なんか、あるわね。あれが……魔界？」

「魔界との境界です」

「黒い壁みたいに見えるな。ま、俺の視力は当てにならないが」

眼鏡の奥の眼を細めて、拓海が言う。

「あらかじめご注意くださいおきますが、決して魔界の中には足を踏み入れないようにしてください。わずかな時間では死ぬようなことはありませんが、身体に悪いですから」

コーカラットの触手にまたがる三人の顔を順繰りに見つめながら、サーイエナが念押しした。

「では、参りましょう。ユニちゃん、頼みます」

「承知であります！」

威勢よく返事したユニヘックヒューマが、その言葉通り勢いよく駆け出した。停止していたコーカラットも、あとを追って動き出す。「壁……」というよりも、堤防って感じね

近付くにつれて細部がわかるようになった魔界との境界を見つめながら、夏希は言った。高さはおそらく三十メートル程度だろうか。炭を思わせる漆黒の巨大な物体が、前方に立ちはだかっている。む

ろん、左右を見渡しても端など見つからない。

「むしろ、津波だな。ごくゆっくりと迫ってくる、漆黒の津波だ」  
拓海が苦々しげに言う。

魔界との境界から四十メートルほど手前で、ユニヘックヒューマとコーカラットが停止した。サーイエナが降りたのを見て、夏希ら三人もコーカラットから降りる。

「近くまで行きましょう」

誘うようにジンベルの三人を見やったサーイエナが、先頭に立って歩みだす。

ごく近くで見る魔界との境界は、寒気を覚えるほど禍々しい黒い絶壁であった。夏希はなんとなく足がすくむのを感じながら、サーイエナのあとについていった。

「ほう。まったくの黒い壁、というわけでもないのだな」

意外そうに、拓海が言う。

かなり近くまで寄ると、壁の内側がうつすらと見えたのだ。さながら外装に遮光ガラスを使った十階建てのビルが延々と連なっているという感じだろうか。

「まずは、魔界が膨張している証拠をお見せしましょう」

サーイエナが、懐から鮮やかな紅い布切れを取り出した。それを、魔界との境界から五センチほどのところに生えている草の根本に緩く縛りつける。

「お二人とも、もう少し近寄っても問題ありませんわ」

微笑を浮かべつつ、サーイエナがしり込みしている夏希と拓海に言った。エイラは興味津々で、境界に鼻をつけんばかりにして中を覗いている。

夏希も思い切って境界に近付き、内部に眼を凝らしてみた。

濃いサングラスを掛けて眺めたような光景だった。遠方は、暗いせいでよく見えない。視程は、せいぜい二十五メートル程度だろう。

一見、暗いだけで何の変哲もない草原の光景に見えたが、しばらく眺めるうちに夏希は植物の様子がおかしいことに気付いた。手前

の草はそうでもないが、奥の方に生えている草が萎しおれているのだ。見通せる距離ぎりぎりのあたりの草は、枯れてしまったのか地面にぺたりと倒れている。

「夏希。もつと手前を見てみる。もうちよい右、草が切れているところだ」

隣で同じようにして覗いていた拓海が、言う。

夏希は視線を転じた。草が切れているところに、小さな粒のようなものが見えた。夏希は瞬きして、眼のピントをその粒に合わせた。カナブンのような甲虫だった。脚を閉じ、ひっくり返っている。おそらく、死んでいるのだろう。

夏希の脳裏に、ずっと以前にアンヌツカがしてくれた魔界についての説明がよみがえった。『常に闇夜で、人はおるか、魔物以外のすべての生き物が棲めぬ領域』『雑草一本すら育たぬ、真つ暗な世界。あるのは硬い地面だけで、そこに少数の魔物が住み着いているだけ』

「恐ろしいわね。こんなものがゆっくりとはいえ迫ってきているなんて」

夏希は魔界の境界から一步下がった。もちろん妄想に過ぎないのだが、近くにいると、生気かなにかを吸い取られてしまいそうな気がする。

「サーイエナ殿。この上の方は、どうなってるんだ？ 空は、魔界に含まれないのか？」

上方を指で指しながら、拓海が訊く。

「ここでの魔界の高さは、せいぜい半シキツホほどですが、南下するにしたがって徐々に高くなってゆき、最終的には空まで届きます」  
よどみなく、サーイエナが答える。

「よろしければ、手など入れてみてください。魔界の恐ろしさが、実感できると思います」

サーイエナが、続けた。

「……身体に悪いんじゃないの？」

「何ヒネも入れていけば問題ですが、少しだけならば大丈夫ですよ」  
「試してみるか」

拓海が言つて、ひよいと右腕を肱の辺りまで魔界に突っ込んだ。  
途端に、表情が強張る。

「どうしたの？」

夏希の問いかけに応えないまま、拓海がゆっくりと手を引つ込めた。

「感想は？」

夏希は再度問いかけた。

「やってみる。やればわかる」

洪面の拓海が、それだけ言つて首を振る。

夏希は躊躇したが、これも仕事のうちと割り切つて、魔界に腕を入れてみた。

ひんやりとした空気が、肌を包む。それと同時に、ただならぬ心配が、腕どころか全身を包んだ。妖気、とでも言えばいいのだろうか。不安感と焦燥感をとり混ぜて増幅させたような、いやーな感情が、一気に湧き上がる。おまけに、手足と背中に顕著な蟻走感が広がった。

夏希は慌てて腕を引き出した。見ると、手首から肘にかけての内側が、一面の鳥肌になっている。

「こ、これは身体に悪いわね」

虫が死に、草が枯れるわけである。こんなところに入り込んだら、確実に健康を蝕まれるだろう。いや、その前に精神に異常を来たす可能性のほうが高い。

「そろそろ休憩にしましょう。ユニちゃん、皆さんにお飲み物をお配りして」

サーイエナが、後ろで控えていたユニヘックヒューマを呼んだ。

「合点承知なのです！」

早足で近づいて来たユニヘックヒューマが、ステッキをぽきぽきと折り始めた。折られたステッキが、勝手に変形してカップの形状

となる。ステッキの柄の部分は、ユニヘックヒューマの手の中で水差しのような形をとった。

ユニヘックヒューマが、カップを各人に配った。次いで、スカートを膝のあたりまでたくし上げ、水差しをその中に入れる。

じよるじよるといふ水音が、夏希の耳に届いた。

「魔物つて、みんな身体の中にジュースを蓄えてるのか？」

呆れたように、拓海が言う。

「……そうらしいけど……コーちゃんにしろユニちゃんにしろ、どうして怪しいところから出すのかしら」

夏希もげんなりとして言った。ちなみに、いまだに彼女はコーちゃんの出す飲み物を味わったことがない。何度か勧められたが、口にするだけの勇気がいまだに得られないのだ。

「どうぞー！」

ユニヘックヒューマが、エイラと夏希のカップに水差しの中身を注いだ。透明感のない、濃い緑色をしている。見た目は、青汁そっくりだ。

「いや、俺はいいよ。長丁場になると思って、水持ってきたから水差しの中身を勧めるユニヘックヒューマを押しとどめるようにして、拓海が腰に着けた竹製の水筒を外す。」

「おいしいですわ、ユニちゃん」

コーカラットの黄色い飲み物に慣れているエイラは、まったくためらうことなくユニヘックヒューマの飲み物を味わっていた。

「恐縮なのであります！」

ユニヘックヒューマが、喜ぶ。

「……やっぱ、飲めそうにないわ」

夏希はカップを持った手を鼻先から遠ざけた。匂いは悪くない……野菜ジュースっぽい……のだが、やはり出てくるところが怪しすぎる。

「それでしたら、わたくしにいただけますかあ」  
近づいて来たコーカラットが、言った。

「いいわよ」

夏希はカップをコーカラットの触手に委ねた。受け取ったコーカラットが、中身を一気に飲み干す。

「ユニちゃんの飲み物は、おいしいのですう」

「ありがとうございます、コーちゃん！」

褒められたユニヘックヒューマが、手にした水差しをぶんぶん振り回す。魔物は生命維持の手段としての飲食はしないが、味覚はあるらしい。

「よろしければ、わたくしの飲み物もご賞味ください」

コーカラットが触手カップを作ると、顎下から例の飲み物を注ぎ入れた。

「コーちゃんの飲み物、とってもおいしいのであります！」

ひとくち飲んだユニヘックヒューマが、感極まったのかぴよんぴよんとジャンプしながら水差しを振り回した。

「あら。わたくしにも一杯いただけます？」

サーイエナが、手にしたカップをコーカラットに差し出す。

「……なんか、向こうは盛り上がってるわね」

いささかげんなりしながら、夏希はうめくように言った。

「ほら」

拓海が、竹の水筒を差し出してくれる。

「ありがとう」

「ごらん下さい」

サーイエナが、先ほど草の根本に結んでおいた紅い布を指し示した。

結んだ時は魔界との境界まで五センチほど離れていたはずだが、すでにその距離は一センチほどまでに縮まっている。ちなみに、休憩していたのはせいぜい十分程度である。

「魔界膨張については納得した。だが、これと魔力の源との関連性、魔術使用との因果関係については、どう証明するおつもりですか

？」

「やや冷ややかな口調で、拓海が訊く。

「今からもう一度実験を行うこともできますが……時間と魔力の無駄になるので、気が進みませんね」

「サーイエナが、首を振る。

「これに関しては、わたくしたちを信用していただくしかありません」

「それは、虫が良すぎるような気がするが」

「拓海殿、夏希殿。わたくしは、サーイエナ殿の主張を全面的に信じてよいと思います」

「エイラが口を挟んだ。

「根拠は？」

「夏希は訝しげに問うた。

「わたくしの巫女としての能力、でしょうか。ここでこうして膨張する魔界を間近に観察して、理解しました。まさにこの場で、魔力と魔界とがせめぎあっているのを、はっきりと感知することができたのです。魔力が魔界の膨張を押しとどめているのは、まず間違いありません」

「自信ありげに、エイラが言う。拓海が、うなずいた。

「ふむ。それなら、信用してもいいと思うが……」

「問題は、それを他人にどうやって納得させるかね。結局のところ、魔界膨張が現実的な脅威であることを絶対に信じてもらわねばならない人は、ヴァオテイ国王なのでしょう？」

「夏希はそう指摘した。

「エイラ様あゝ。ご提案があるのですがあゝ」

「コーカラットが、エイラのそばに寄ってきた。

「なにかしら、コーちゃん」

「魔物の賢者なら、魔界膨張に関して詳しいことを知っているかもしれないですう。もしかすると、膨張を防ぐ手立てを考え付いているかも知れませんか。わたくしが、聞いてまいりますよ」

うかあ〜」

「それはナイスアイデアなのであります！ さすがコーちゃん！」  
すかさず、ユニヘックヒューマが賛同する。

「いい案ですね。どう思いますか？」

エイラが、サーイエナに振った。

「試してみる価値はありますね」

サーイエナも賛意を示す。

「たしかにナイスアイデアだと思うが……今まで思いつかなかったのか？ 魔物のくせに」

腰をかがめた拓海が、意地悪そうにユニヘックヒューマに迫る。

「えーと……あ、あたいはサーイエナ様の使い魔として毎日忙しい日々を送っているのであります！ だから、思いつかなかったのであります！」

ユニヘックヒューマが抗弁する。だが、普段よりも口は大きく開いているし、眉も八の字になっている。責められて、弱気になっているのだろう。

「魔物にも色々いるのね」

夏希はくすくすと笑った。常にマイペースでポーカークフェイス。何事があっても動じないコーカラットを見慣れているせいで、他の魔物も同じような性格だと思っていたが、どうやら違っらしい。

「どじっ子属性かもしれんな、ユニちゃんは」

腰を伸ばした拓海も、笑った。

「反対意見が出ないようでしたら、コーちゃんを魔界に送り出しますけど、構いませんか？」

一同を見渡しながら、エイラが訊く。

「ひとつだけ問題があるわ。コーちゃん抜きで、わたしたちの安全はどうなるの？ まあ、高原の民は信用していいと思うけど、万が一の時の切り札でしょ、コーちゃんは」

夏希はそう問題提議した。

「たしかにそうですね」

エイラが同意する。

「それでしたら、あたいが責任を持って、ジンベルからいらっしやうたお客様をお守りする役目を引き受けるのであります！」

すかさず、ユニヘックヒューマが名乗りをあげた。自信ありげに、ステッキをぶんぶんと振り回す。

「ユニちゃんが代わりにを務めてくれるのならば、安心なですう〜」

コーカラットが、嬉しげに触手を振る。

「魔物が約束してくれたのならば、問題ない……よね、エイラ？」

夏希はジンベルの筆頭巫女に確認を求めた。

「そうですね。ユニちゃんに守ってもらいましょう。では、コーちゃんに魔界に行ってもらいます」

「頼むぞ、コーちゃん」

拓海が、手を振った。

「行ってまいりますですう〜」

触手を振り返ししながら、コーカラットがふわふわと魔界に突入した。うつすらと見えていた姿が、すぐに闇に飲み込まれる。

「でも、よく考えたらあまり時間の余裕がなかったのよね。悠長に賢者に話を聞きに行かせて良かったのかしら？」

「おそらく、明日には帰って来るはずですよ」

エイラが、夏希の懸念を払拭する。

「え。魔界って、広いでしょ？ 魔物の数は少ないし、賢者なんてめったにいないんじゃないの？」

「たしかに数は少ないですが、魔物は他の魔物がどこにいるかくらいはおおよそ見当がつくそうです。あちこちで訊いて回れば、賢者の居場所程度はすぐに突き止められるはずですよ」

「でも、魔界の広さを考えると、往復するだけでも何日も掛かるでしょう。そうそう都合よく、近くに賢者がいるとも思えないし……」

今まで一番コーカラットが素早く動いたのは、たぶんジンベル川で川船に乗った夏希が高原戦士の弓に貫かれそうになった時のことだと思うが、その際ですらコーカラットの飛翔速度はせいぜい秒速

十数メートル程度であった。

「魔界に入れば、コーちゃんは全力を出せますから、普段よりも速く飛ぶことができるのです」

エイラが説明する。

「へえ。どのくらい速いの？」

「一ヒネで七百シキツホほど進める、と聞いていますが」

夏希は頭の中でざっと暗算してみた。一シキツホが約六十メートルだから、七百シキツホが……約四十二キロメートル。一ヒネを百秒として、一時間が三千六百秒だから……。

「……なにげに音速超えてる……」

夏希は軽いめまいに襲われた。

「ここで待っていても仕方ありませんね。いったん帰りましょうか」  
サーイエナが言つて、ユニヘックヒューマに合図した。すぐにステッキが、横一列に四人分の座席を備えた十字架のような複雑な形状に変化する。

四人がそれぞれ座席に座ると、ユニヘックヒューマがそれをひよいと担ぎ上げた。

「出発するであります！」

威勢よく宣言したユニヘックヒューマが、走り出す。

「どうして揺れないのかしら」

夏希は首を傾げた。行きでも気付いたが、疾走するユニヘックヒューマの身体は激しく上下動しているのに、座席の揺れはほとんど感じられないのだ。

「気にするな。俺としては、むしろあの短い脚でどうやってたらこれだけの速度が出せるのか、の方が不思議でならん」

隣に座った拓海が、言う。

「たしかにね」

夏希は同意した。コーちゃんの飛行原理も解明されていないし、そもそも食物を摂取しない魔物がどうやって活動するためのエネルギー

ギ―を得ているかすら、わかっていないのだ。

「でも、気になるなあ」

「気にしたら負けだ。俺たちの仕事は、この世界の謎を解くことじゃない。有るものはありのまま受け止めて上手に利用することだ。内燃機関について説明できなくても車の運転免許は取得できるし、インターネットの仕組みを知らなくても調べ物はできる。当面は、停戦成立に集中しようや」

諭すような口調で、拓海が言う。

40 コーカサットの旅立ち（後書き）

第四十話をお届けします。

## 41 魔界の賢者

「やあ、久しぶりだね」

瞬がジンベルにひよっこりと帰ってきたのは、ニアン主導による高原侵攻作戦開始前日のことであった。

「お前が留守のあいだにとんでもない事件が起きてな……」

とりあえず仕事部屋に瞬を引つ張り込んだ生馬と凜は、交代で『拉致偽装事件』について説明した。

「……暴走にもほどがあるな」

さしもの瞬も驚いたのだろう、呆れたように首を振る。

「で、瞬の方の首尾はどうだったの？」

凜が、訊く。

「裏事情はつかんできたよ。ニアンの主たる目的は、高原の鉱物資源だ」

「鉱物資源？」

「そう。高原は鉱物資源、特に金属資源の宝庫なんだそう。推測だが、高原地帯そのものが過去の地殻変動で隆起した地形なんじゃないかな。たぶんそのせいで、地表近くに各種の鉱床が豊富に存在しているようだ。ともかく、ニアンが狙っているイファラ族居住域最南部では、確実に鉄鉱と銅鉱の露天掘りが可能らしい」

「……ニアンってたしか、その昔は自前で鉄と銅を採掘して加工するのを商売にして発展してたけど……」

「……鉱脈を掘りつくして金属加工業に業態転換した国だな」

凜の言葉を、生馬が引き取る。

「高原侵攻を行い、ある種の植民地を造る。そこがニアンの直轄地になるのか、それとも侵攻参加各国の共同管理になるかはわからないけど。そこで高原の民に対する防備を固めつつ、域内で鉄鉱や銅鉱を採掘、おそらくはそこで粗く精錬を行ってから、ニアンへと運び出す。ジンベル川を使えば、輸送コストは低くて済むから、ス

スロンやエボダから買い入れるよりはるかに安上がりのはずだ。つまり、ニアンは過去の栄光を取り戻せる、というわけだ」

瞬がざっと説明する。凜が、首を傾げた。

「スロンとエボダは高原侵攻に反対したわよね。じゃあ、ニアンの思惑を知っていたのかしら？」

「感付いていたらしい。だからこそ、侵攻案にあれだけ反対したんだろうね」

「じゃあなにか？ ジンベルは、平原の大国同士の金儲けを巡る争いに利用されているだけなのか？」

生馬が、声を荒げた。

「いや、金儲けだけじゃないんだな、これが」

瞬が、にやにやと笑う。

「話は二十年前くらいに遡るんだ。ニアンの国王が、四十代半ばで病没した。息子は二人。よくある話だが、兄は阿呆で弟が優秀だった。慣例としては当然兄が即位すべきだったが、家臣団は弟を支持した。兄を支持したのは、国内の貴族たち。国王が阿呆なら、簡単に操れるとでも考えたんだろうな。キャスティングボードを握った国民は、弟を支持した。阿呆の元首は戴きたくないだろうからね。そういうわけで、兄の方は逐電。これを保護したのが、エボダだった。将来役に立つかもしれないと考え、とりあえず受け入れたらしい。それ以来、ニアンとエボダの仲はぎくしゃくしている。経済的に運命共同体といえるスロンは、エボダの味方を続けている」

「ふーん。結構いろいろあるのね」

凜が、感心したようにうなづく。

「金属加工技術の移転を巡っても、両者の争いは絶えないようだ。先日、ニアンの職人が弟子数名ごとスロンに亡命した事件があったそうだ。スロン側の見解は自発的移住だが、ニアンはスロン政府の一部局によって買収されたと非難している」

「生臭い話だな」

生馬が、鼻を鳴らした。

「どうも最近のニアンの国内情勢は良くないらしい。経済が停滞気味で、国王は貴族と国民の支持を失いかけていているという噂だ。そこで、高原侵攻を機に一気に国威発揚と産業振興を図ろうという腹積もりのようだ。ま、かなりの博打だと思うけどね」

「なおさら乗れないわね。絶対に、ジンベルが巻き込まれないようにしないよ」

凜が強い調子で言った。

「いや、高原侵攻は予定通り行ってほしいんだよ、凜ちゃん」

意外なことを、瞬が口にする。

「なぜだ？ 高原侵攻に失敗すればえらいことになるし、よしんば成功したとしても、ニアンにいいように使われた上にススロンやエボダを怒らせるだけだろう。ジンベルに益はないぞ」

生馬が怪訝そうに言う。

「実は、水面下でいろいろと話は動いてるんだ……でもその前に、これだけは言っておこうか」

瞬が丸まっていた背を伸ばし、生馬と凜を交互に見た。

「これは極秘事項だが……近いうちに僕はススロンに亡命する」

「……亡命……正気か？」

生馬が眉根を寄せる。

「他に方法がないんだ。ジンベル貴族のままでは、ススロンにもエボダにも信用してもらえないんでね」

瞬が、肩をすくめた。

「ちよつと待つてよ、瞬。亡命なんかしたら、ジンベルとの関係が切れちゃうじゃないの。エイラと離れちゃったら、元の世界に帰れなくなっちゃうわよ」

慌てたように早口で、凜が指摘する。

「ま、僕の思惑通り行けばジンベルとの関係は悪化しないんだけどね。むしろ、ヴァオティ国王には感謝されるはずだ……と思う」

「とにかく、その思惑とやらを説明しろ」

生馬が、急かす。

「その前に」

瞬が懐を探って、折り畳んだ紙を取り出した。丁寧に開き、テーブルに置く。

「……何が書いてある？」

例のビルマ文字に似ている文字がぎっしりと書き込まれている書状を眼にして、生馬が顔をしかめる。

「簡単に説明すると、ススロン、エボダ、シーキンカイ三カ国と、ジンベルが裏で繋がっていた事を証明するための文書だ。下の方にサインが三つ見えるだろ？ いずれも、三カ国の外務大臣クラスの署名だ。まあ、ジンベルがニアン陣営ではないことを証明するためのアリバイだな」

「なにを企んでいるの？」

凜が、疑わしげに訊く。

「僕の話聞いてからでいいから、ここにサインしてくれ。ジンベル政府当局者としてね。自分の名前と肩書きくらいなら、綴れるようになっただろ？」

「わかったわかった。だから、さっさと話してくれ」

生馬が、ため息混じりに言う。

「くどいようだけど、内容は他言無用だ。いいね。ばれたら、僕の首が飛ぶどころじゃない。下手をしたら、平原を二分する大戦争になりかねないんだから」

念押しした瞬が、話し始めた。

エイラの予想通り、コーカラットは翌日の昼前に帰ってきた。

「……数、増えてるな」

拓海が、ぼそりと言う。

「ええ。増えてるわね」

夏希もうなずいた。ふわふわと飛びながら近付いてくるコーカラットの傍らに、短い脚をせかせかと動かして歩いている魔物の姿が

ある。

身長は一メートル八十センチくらいはあろうか。小太りで、頭部が大きい。短い手足に、全身を覆う白い柔毛。顔にはコーカラットやユニヘックヒューマと同様に、丸く黒い大きな眼と、小さなしまりのない口がある。眼の上には、半月状の太い眉毛。なぜか、大きな麦藁帽子を被っている。ぽこんと突き出たお腹には、ドえんのそれを連想させる大きなカンガルーパーケット。やや猫背で、ちょっと陰気臭い雰囲気だ。

全体としての印象は、ちょっとくたびれた着ぐるみの熊か狸、といったところか。

「ただいま戻りましたあ〜」

コーカラットが、待ち受ける人々……夏希、拓海、エイラ、サイエナ、そしてユニヘックヒューマに向かって、ぺこぺこことボディを傾ける。

「ご苦労さま、コーちゃん。で、この方は？」

エイラが、訊く。

「ご紹介しますですう〜。魔物の賢者、ニヨキハンですう〜」

「ニヨキハンなんだな。物を集めたり調べたりするのが好きなので、賢者とか呼ばれてるんだな。よろしく頼むんだな」

コーカラットの紹介を受けた魔物……ニヨキハンが、挨拶した。

声は、低めで明らかに男性のものだ。やや暗いトーンで、ぼそぼそっとしゃべる。夏希は俳優の森レを思い出した。

「ニヨキハンは魔界の膨張に関しても色々調べたそうなのですう〜」

コーカラットが、言う。

「ということは、魔界が膨張しているというのは間違いなのですね、ニヨキハン殿？」

夏希は臆することなく訊いてみた。

「それは、間違いないんだな。でも、より正確に言うならばむしろ人間界が縮退している、とすべきなんだな」

「その原因は、ご存知ですか？」

拓海が、訊いた。

「知らないんだな。だが、ボクの考えでは、諸君らが魔力の源、と呼称している物の出力の減退、が原因ではないかと思うんだな」

「どうしてそのようにお考えになったのですか？」

今度はエイラが訊く。

「長年観察してきたが、人間界の縮退が始まった時期と、諸君らがいわゆる魔術を使い出した時期がほぼ同時なんだな。それに、近年タナシスと呼ばれる国で大量の魔術が使われだしてから、縮退のペースが速まったんだな。これらの相関関係から、ボクはどのように推論したんだな」

「……そもそも、魔力の源って、なんなんですか？」

根本的な疑問を、夏希はニヨキハンにぶつけてみた。

「それは、ボクにもわからないんだな。でも、昔はこの地に人間界はなかつたんだな。あるとき突然、魔界を押しつけるようにして人間界が出現したんだな。そのとき同時に魔力の源が現れたから、おそらく魔力の源は人間界を維持するための何らかの仕掛けであるという推論は成り立つんだな。ボクの知る限りでは、人間界の形は円形で、その縮退はすべての外縁部で同時かつ平均的に発生しているんだな。これも、ボクの推論の補強材料だと思うんだな」

「では、魔界の膨張……ではなく、人間界の縮退を止めるにはどうすれば……」

エイラが訊く。

「魔力の使用を行わないのが、唯一の方法ではないかと、ボクは考えているんだな」

「やはりそうですか」

「あー、ニヨキハン殿。魔力の源って、全部でいくつあるんですか？」

夏希はそう訊いた。

「確認した限りでは、七つあるんだな」

「高原にひとつ、ジンベルにひとつ。ワイコウにひとつ。あとは…

…タナシスにあるのかな？」

拓海が、指折り数える。

「タナシスには、みつつあるんだな」

「合計六つですね。あとひとつは？」

「ここにあるんだな」

ニヨキハンが、片手を腹部のカンガルーポケットに突っ込んだ。

「え」

夏希は意表を衝かれてあぐりと口をあけた。魔力の源は、動かさないではなかったのか？ それに、あんな大きな物が、ポケットに納まってしまっても思えない。

「これなんだな」

ニヨキハンが、ポケットから抜いた手を開いた。可愛らしいピンクの肉球がぶちぶちとついているちんまりとした手の上に、ゴルフボールほどの黒っぽい塊が載っている。

「これが……魔力の源？」

サーイエナが、かすれたような声で問う。夏希も首を傾げた。以前にジンベルを見た、オレンジ色の球体とは似ても似つかない。

「内蔵している魔力を使い果たすと、こうなるんだな」

ニヨキハンが、太い指で黒い球体をつまみ上げる。

「ニヨキハン殿。魔力の源は、動かせないはずでは？」

エイラが、訝しげに尋ねる。

「魔力の源は動かせない、というのは不正確で、本当は動かせるんだな。ただし、中の魔力を引き出すには土地に固定する必要がある、いったん固定すると魔力が無くならない限り動かせないから、事実上動かせない、ということなんだな」

「……じゃあ、動かせないと同じことでは？」

夏希はそう言った。

「魔力の源に蓄えられた力は、他の魔力の源を近づけると融通できるんだな。だから、空になった魔力の源に力の一部を移し変えれば、それを動かすことは可能なんだな」

「なるほど」

夏希はうなずいた。

「それって、凄い便利ですね」

エイラも感心したような口調で言う。魔力の源がふたつあれば、力を移し変えることによつてどこにでも持ち運ぶことができるのだ。

「ともかく、これはボクの大事なコレクションなんだな」

ニヨキハンが、魔力の源をカンガルーポケットに丁寧にした。これで、サーイエナ殿の主張が正しかったことが証明されたわけですね」

エイラが、言う。

「確かに。早いとこ停戦して、人間界縮退対策を行わないとえらいことになるぞ」

拓海が同意する。

その後もしばらく、夏希らはニヨキハンに様々な質問を浴びせかけ、魔界に関する幾許かの知識を得ることができたが、肝心の『人間界の縮退』に対する方策について有益な情報は得られなかった。

「ではボクはそろそろ帰るんだな。人間界はどうも居心地が良くないんだな」

ニヨキハンが言つて、くるりときびすを返し、すたすたと歩み始める。

「ありがとうございます、ニヨキハン殿」

サーイエナの礼の言葉に、背を向けたままのニヨキハンが軽く手を振つて応えてくれる。

「あ、コーちゃん。ニヨキハン殿をお送りしてさし上げて」

「気を使わなくていいんだな」

エイラが慌てて言つたが、ニヨキハンは立ち止まることなくそう返答し、歩み続けた。

「ありがとう、ニヨキハン殿」

夏希もそう言葉をかけ、軽く頭を下げた。変な……まあ、コーカラットもユニヘックヒューマもどう見ても『変』ではあるが……魔

物だったが、充分に役立つてくれた。

「これで本格的な交渉に臨めるな。だがその前に、ジンベル側だけで打ち合わせをおきたいのだが」

拓海が、サーイエナに要求する。

「宿舎をお使い下さい。わたくしとサイゼン殿は、会談を行える場所を待機しています。場所は、エワがご案内しますわ」

「結構」

そういつた拓海が、何かを企んでいる顔で夏希とエイラを見て、顎をしゃくった。

「行こう」

「まずは、あなたの覚悟を聞いておきたい」

宿舎に戻ると、拓海がいきなりそう切り出した。

「覚悟？」

問われた夏希は、首を傾げた。

「俺たちは、ジンベルに一年契約で雇われた身だ。魔界膨張……人間界縮退の直接的影響が、ジンベルに及ぶのはおそらく数十年先、間接的影響が及ぶのも早くても十数年先だろう。だから、この問題に関しては守備範囲外だと看做して眼をつぶったとしても、契約上も道義的にも責められることはないはずだ。だが、俺はこの住人が……高原の民も含めて、結構気に入っている。だから、人間界縮退問題に関して積極的に関与し、解決に向けて動きたいと思っている。そしてもちろん、あなたに俺に同調する義務も義理もないことも、理解している。で……どうなんだ？ あなたはこの問題に関してどこまで関与するつもりなんだ？」

「……いきなりそう言われても……」

夏希は口ごもり、ちらりとエイラに視線を送った。ジンベルの筆頭巫女は相変わらず生氣にとぼしい表情で、夏希の方をぼんやりと見ている。その頭上では、コーカラットが触手を三つ編みにして遊んでいた。

「まあ、すでに損得勘定抜きで動いてるのは確かね。戦場で市民軍率いて戦うなんて、お金と引き換えだけでできるものじゃないし。高原の民はともかく、ジンベルを含めた平原の民の将来が危ぶまれているのであれば、それを何とかするために努力することは吝かじやないわ。でも、人間界縮退問題はスケールが……時間的にも空間的にも大きすぎる話だと思つ。いくら異世界人だからといって、簡単に解決できる問題とは思えないし」

「つまりは、当面俺に同調して動いてくれる、ってことでいいんだな？」

拓海が珍しく鋭い眼差しで夏希を見据える。夏希は強いて視線に力を込め、拓海を見返した。

「そうなるわね。もう簡単には抜け出せないところまで嵌っちゃつてると思つし。ここまで来たら、もう少し付き合つてあげるわよ」

「結構だ。じゃ、サーイエナとサイゼンのおっさんに会いに行くか」  
急に目元を和らげた拓海がそう言つて、エイラに視線を当てた。

「そついたしましょう」

微笑んだエイラが、ちらりと夏希に視線を流してから、かすかにうなづく。

#### 41 魔界の賢者（後書き）

第四十一話をお届けします。久々に評価点を入れていただきました。評価して下さった方、ありがとうございます。

## 42 停戦条件

夏希らジンベル王国の非公式代表と、サーイエナおよびサイゼン氏族長の高原側代表による停戦交渉は、難航した。

両者とも、大枠では利害が一致している。人間界の縮退は、両者にとって共通の災厄であり、これに対処するためには協力体制を整えることが必須条件だ。当然、現在の交戦状態は速やかに終結させる必要がある。

だが、細かい部分では対立せざるを得ない。双方ともに面子というものがあるし、ジンベル側は参戦してくれた平原諸国に対し、そしてイフアラ族は支援してくれた高原の民諸族に対し、停戦に関して納得のゆく説明をしなければならぬのだ。

「要点を整理しよう」

いささか疲れた表情の拓海が、テーブルの上のメモを取り上げた。「双方とも、今後一致協力して人間界縮退問題に取り組んでゆくことに関しては、原則合意が得られた。即時停戦にも、ほぼ同意。ジンベルの魔力の源については、将来的に共同管理とし、魔術の使用を段階的に禁止する方向で一致。加えて、停戦成立および魔力の源共同管理体制確立後において、平原・高原間で通商条約その他の経済的な取り決めを成立させるための協議を速やかに行うことでも合意した。そんなところかな」

「ともかく、高原の民としては、此度の戦で全面的に敗北したことを公的に認めるわけにはいかないのだよ」

サイゼンが、肩をすくめた。

「……わたしとしては、当事者として敗北を認めているがね」

「こちらとしても、ジンベルおよび救援軍の勝利で終わった、という姿勢を崩すわけには参りません」

強い口調で、エイラが言った。

「行き過ぎた譲歩はジンベルが屈服したと看做されかねません。国

民の血を流してまで我が国を援助してくれた平原各国に対し、面目が立ちませんわ。下手をすれば、ジンベルが平原で政治的に孤立してしまいます」

「この点で、なんとか妥協点を見出さない限り、進展はなさそうですね。少し休憩にしませんか？」

サーイエナが言つて、同意を求めるかのようにジンベル側の三人を見渡した。

「いいでしょう」

拓海が同意する。夏希もうなずいた。

サーイエナが、隅の方で所在なげに立っていたユニヘックヒューマを呼び寄せて、飲み物の支度を指示した。一瞬またあの青汁もどきが出てくるのかと危惧した夏希だったが、部屋を出て行ったユニヘックヒューマがお茶のセットが載った盆を手にして戻ってきたのを見て安堵した。ユニヘックヒューマがポットからカップに茶を注ぎ、お手伝いしますう〜、と言つて寄つていったコーカラットがそれを各人の前に置いてゆく。

夏希は薄茶色の茶が入ったカップを取り上げ、ひと口すすった。昨晚の宴の時に飲んだものと……あの時は冷ましてあったが……同じだ。普通の麦茶より香りが薄く、甘味がある。夏希は以前に健康オタクの友人の家で飲まされた、はと麦茶を思い出した。

「なにかいい方法はないかしらねえ……」

ぶつぶつとつぶやきながら、夏希は茶をすすった。緑茶に比べればおいしくはないが、素朴で懐かしいような味がする。

「ともかく、対外的にはジンベルも高原側も勝つたことにしなければ都合が悪いわけだ」

小声で、拓海が言つた。

「いつそのこと、逆転の発想で双方とも負けたことにしたら？」

「……勝者なしの戦争は引き分けと変わらないよ」

拓海が、笑う。

「ねえ、コーちゃん。なにかいいアイデアないの？」

夏希は、天井付近まで上昇してゆつくりと回転しているコーカラツトにそう問いかけた。

「魔物は人間同士の争いには不介入なのですう。交渉ごとにも、不介入なのですう。」

回転を止めぬまま、コーカラツトが返答する。

「ということは、ユニちゃんに聞いても無駄か」

「残念ながら、お役に立てないのであります！」

ステッキを振りながら、ユニヘックヒューマが元気よく答える。

「なあ、ちよつと聞きたいんだが……」

遠慮がちに、拓海が口を挟んだ。

「魔物同士がトラブルを起こしたときはどうするんだ？ 話し合いだけで解決するのか？ それとも他の魔物に裁定してもらうのか？ あるいは、法律みたいな何らかの決まりごとがあつて、それに基づいて解決するのか？」

「魔物同士がトラブルを起こすことはないのですう。」  
回転を止めたコーカラツトが、座っている人々の目線まですうと降りてきて答えた。

「魔物には食欲も性欲も物欲もないのですう。だから、他の魔物と利害が対立することはないのですう。トラブルはないのですう。」

「そうなの？ ニヨキハンには物欲があつたように思うけど」

夏希は魔物の賢者の様子を思い出しながらそう訊いた。少なくとも、彼がコレクションである『魔力を使い果たした魔力の源』に対する態度は、いかにも大切な物を扱っているかのようにだったし、実際に大事なコレクションだと言っていたはずだが。

「あれは、自分の知識体系を保持しようという意図の現れに過ぎないのであります！」

やり取りを聞いていた、ユニヘックヒューマが口を挟んだ。

「魔物には欲求はありませんが、意思や意図がないわけではないのです！」

「人間は魔物ほど『できて』はいませんかね」

やり取りを聞いていたサーイエナが、苦笑いしつつ言う。

「なんとかして、双方が納得できる玉虫色の解決策をひねり出さなきゃならないわけだが……」

拓海が、頭の後ろで手を組み、天井を見上げた。

……玉虫色か。

夏希は腕組みした。要するに、双方がこの戦いに勝利したと、対内的に宣言できればいいわけだ。しかしながら、戦争である以上当事者のどちらもが勝者、などということはあり得ない。

いや、あり得ない話ではないのでは？ どちらも目的を達すれば、勝者面をすることは可能だろう。例えば……型落ちとなった商品を激安値段で売れば、買ったほうは得した気分になるし、売った方も不良在庫化を防止できて嬉しいはずだ。これも、玉虫色の解決の一種だろう。

光の当たり具合や角度によって、紫色や緑色にも見える玉虫色。そんな風に、この戦争も平原と高原という別の方向から見れば、双方が勝利したと言える状況を生み出せはしないだろうか。

「ねえ、拓海。戦争でも、双方が勝利するって形はありえるんじゃないの。例えば……A部隊がXという町を三日間守れと命令される。敵のB部隊は、Xを一週間以内に占領せよ、と命令される。A部隊は命令どおり三日間持ちこたえ、作戦目的を達成して退却する。B部隊はX町を占領し、作戦目的を予定の半分の期間で成し遂げる。これなら、AもBも勝利を宣言できるでしょ？」

「それは、戦術と戦略を混同しているからだ」

拓海が、言った。

「戦術的に見れば、確かに双方ともに勝利したと言える。だが、戦略的に見れば、どちらかは明らかに敗北しているんだ。もっとわかりやすく言えば、どちらかの作戦目的が戦略的勝利に結びつかないものだった、と後に判断されるだろうな。戦争は最終的に勝利した者のみが、勝者を名乗れるんだ。個々の戦闘における成果は、たと

えそれが勝利であつたとしても、マクロな視点で見れば手段にしか過ぎない。手段だけを積み重ねても、それが戦略的勝利に結びつかなければ、意味がないんだよ。ラーメン屋が美味しいラーメンを客に出すのはラーメン店経営の一手段であつて、決して目的ではないよ。うなものだな。そこを見誤ると、ラーメン好きが高じて脱サラした上に借金までして開業した奴の店が、味だけにこだわった拳句繁盛せずに半年で潰れるという悲喜劇となる」

「ふうん」

言い負かされた形になつた夏希は、ため息交じりの相槌を返した。

「そう言えば、こつちへ来てから一度もラーメン喰つてないな」

物欲しげな顔で、拓海が言う。

「そうね。さすがの凜でも、小麦なしじゃ中華麺作れないし。……」

蓬萊軒の半チャーハンセット、おいしかつたなあ」

「お、お前さんもあそこがひいきだったか」

拓海が眼を輝かす。

「うちの学校の近所じゃ、あそこが一番安くておいしかったもの」

「だが、半チャーハンセットは割高だったぞ。やるなら三人で行つて、ラーメン三杯とチャーハン大盛りを注文するんだ。あそこのご飯もの大盛りは、百円増しで五割増量だからな。それを三人で分ければ、一人当たり五十円お得だ」

「……せこいわね」

「半チャーハンにはスープがつかないが、チャーハンにはつく。これも大きいぞ」

「スープって言つても、ラーメンのお汁つゆと一緒にじゃない」

「……せこいわね」

「半チャーハンにはスープがつかないが、チャーハンにはつく。これも大きいぞ」

「……せこいわね」

「スープって言つても、ラーメンのお汁つゆと一緒にじゃない」

夏希はくすくすと笑つた。どこの店でも同じだと思つたが、醤油を控えめにしたり、多少具が入っていたりするけれども、基本的にはラーメンのスープと同一だ。

「セットメニューはすべてお得、と思われてるが、よくよく調べてみるとそうでもなかったりするんだよな。ハンバーガー屋やドーナツ屋でも、期間限定の安い商品を上手に組み合わせると注文すると、

定番のセットメニューよりも安く上がったたりするし……」

拓海が滔々と語る。

……セットで注文しない。

まてよ。

「ひらめいた」

夏希はぼんと手を打った。

「つまり、一括で処理するのを諦めるのよ」

夏希は説明した。

「わたしたちは、停戦、魔力の源の管理、今後の平原と高原の交流、人間界縮退対策などを一度に処理しようとして、袋小路に入り込んでしまったのよ。これらを適宜分割し、個別に解決すべきだわ。それも、双方の視点でね」

「具体策を聞かせてもらおうか」

難しい顔のサイゼンが、促す。

「まず、停戦に関して。ジンベル側は、高原側との停戦が成立し、高原の民が二度と平原に攻め込まないと確約したと発表する。これで、平原側が戦争に勝利したことになるわ」

「……高原の民はそれを認めぬぞ」

サイゼンが、指摘する。

「ちよっと待っていてください。高原側は、あとで説明しますから。えーと、停戦後、しかるべき時間を空けてから、ジンベルは人間界縮退に関して平原諸国に説明し、その対策としてジンベルの魔力の源をイファアラ族との共同管理とすることを正式に宣言する。そしてそのあとで、人間界縮退対策を、高原の民と協力して行うための準備に取り掛かると発表する。あくまでも、ジンベルおよび平原諸国主導と見せかけてね」

「で、高原側は？」

「うなずきながら、拓海が先を促す。」

「高原側は、停戦成立と同時に、ジンベルがイファアラ族との魔力の

源の共同管理を認めた、と発表するの。これで、戦争目的は達成できたのだから、勝利したと主張できるんじゃないかしら。そのすぐあとに、平原側が人間界縮退対策について、高原側に協力する姿勢を見せていることも強調する。で、共同管理の正式宣言が行われる。その後、平原側と人間界縮退対策や経済協力に関して色々取り決めが行われることになるけど、すべて高原側の主導であるかのような顔をする、という段取りよ」

「玉虫色と言えば聞こえがいいが、つまりは双方の民を口先でごまかすわけだ」

拓海が遠慮なくそう評する。

「民は騙せるかも知れないが、これでヴァオティ国王が納得してくれるかね？」

サイゼンが、夏希を見据えた。

「どう思う、エイラ」

サイゼンの鋭い視線から眼を逸らした夏希は、ジンベルの筆頭巫女に振った。

「時間も限られていますし、これで納得してもらうしかありませんね。少なくとも、この案でジンベルが損をすることはないと思いますし」

「皆さんがヴァオティ国王を納得させる自信がお有りでしたら、わたくしはこの案で他の氏族長を納得させてみせます」

サーイエナが、深くうなずきながら言い切った。うなずき返した夏希は、視線を転ずるとサイゼンを見つめた。

「どうでしょう、サイゼン殿。イファラ族の皆さんは、納得してくれませんか？」

「わかった。なんとかやってみよう。平原の軍勢が高原を侵したら、早期停戦は不可能になるからな。ここは無理矢理にでも停戦に持ち込まねばならん」

うなずいたサイゼンが、夏希に齒を見せた笑顔を向ける。

「よし、俺も賛成だ。そうと決まれば、ぐずぐずしては居られん。」

「コーちゃん、ジンベルまでひとつ飛びしてくれるか？」

「ほんと手を打った拓海が、振り返ってコーカラットに頼む。」

「いくらわたくしでも、皆様をお乗せして長時間飛ぶのは無理なものです。人間界では、そこまで力がでないのです。それに、わたくし高いところも苦手なのです。だから、山岳地帯を飛び越えるのもできないのです。」

「なんだ。じゃ、また歩きと船で時間をかけて戻らなきゃならないのか。ここからなら、イファラ族の居住地を経由してジンベル川を下った方が早いのかな？」

「いや、来たルートを戻った方が、二日は早く着くだろう。」

サイゼンが首を振る。

「いずれにしろ、そろそろ日が暮れてしまいますわ。出立は明日になさるべきでしょう。それに、いろいろと準備もありますし。」

サーイエナが、言う。夏希は怪訝な顔をした。

「準備？ なに、それ」

「忘れたのかね。皆さんは、拉致されたのだよ」

苦笑しつつ、サイゼンが説明する。

「そのまま帰したのでは、偽装だということがばれてしまう。こちらの提案した停戦条件をジンベル側に渡すために解放された、という形にするのが適切だと思う。わたしとサーイエナ殿の連名でヴァオティ国王宛の親書を書こう。それを、持って行ってくれ」

「それがいいですね。解放が不自然に見えませんか」

エイラが賛意を示す。

「俺、ここに残ろうかと思うんだ」

朝食の席で、拓海がいきなりそう切り出した。

「……ごめん、拓海。もう一度言ってくれ？」

「ぼんやりと米飯を口に運んでいた夏希は、とろんとした眼を拓海に向けた。一日でも早くジンベルに帰還するために、日の出とも」

に出発する計画なので、今はまだ夜明け前である。テーブルの上には、植物油を使った灯明のようなものが置かれ、黄色く弱々しい光であたりを照らしている。ちなみに、高原の民が普段使っている明かりは狩猟民族らしく獣脂を使ったものだそうだ。燃烧の際に不快な臭いを発するので、気を使って貴重な植物油を融通してくれたらしい。

「俺は、ここに残る。拉致されたんだから、全員が一度に解放されたんじゃおかしいだろ？ 一人くらいは、人質……とまではいかないが、残された方がリアリティがある。そうじゃないか？」

「……それは、確かにそうですが」

冷肉の薄切りを箸でつまみながら、エイラが言う。朝食のメニューは炊き立ての米飯、何の動物かはわからないが、牛肉っぽい味とする冷肉、鮭肉に似た色と味のスモークした魚肉、茹で野菜と漬物といったところで、ジンベルで食べていたものとたいして変わりはない。

「まさか、リダと別れたくないから、って理由じゃないでしょうね？」

あくび交じりに、夏希は訊いた。昨夜は早めに就寝したが、早起きしたのでそうとう眠気が残っている。

言われた拓海が、一瞬動きを止めた。灯明の弱々しい光でも、赤面したのがわかる。

……凶星か。

「まあいいわ。拓海の言うことは筋が通ってるし。二度の戦いで活躍した軍師が敵に捕らわれているとすれば、ヴァオティ国王も軍事的冒険をためらうかもしれない」

「それは、望み薄だと思えますね」

エイラが、夏希の言葉を否定する。

「で、ここに残って、そのあいだ何をするつもり？ ただ単に、リダとの親交を深めようってわけじゃないんでしょ？」

夏希はそう訊いた。拓海のことだ、たぶんなにかしら企んでいる

に違いない。

「高原について、もっと調べてみたいんだ。我々は、高原とその民について無知すぎる。人間界縮退対策には、高原との協力が不可欠だからな。できれば、有力者とのコネも築いておきたい」

「……言動が瞬っぽいわね」

「そうだな」

拓海が苦笑いした。

「まあ、瞬が平原諸国に対して行ったことを、俺は高原でやりたいんだ。あとで絶対に役に立つからな」

「親書は二通用意しました。これが、表向きの親書、つまりは公表用のものです」

宿舎を訪れたサーイエナが、テーブルに折り置まれた紙を置いた。「こちらがいわば本物の親書です。これを公表なさった場合は、停戦の意思なしと看做しますので、ご注意ください」

もうひとつ紙を置いたサーイエナが、少しばかり凄みを感じさせる笑みを浮かべ、夏希と拓海を見やる。

「一応、中身をご確認下さい」

サーイエナに促され、エイラが紙を開き、いまだこちらの文字を読めぬ……というか、読めるようになるうという努力すら怠っている異世界人ふたりのために小声で音読してくれる。本物の親書の文面は、前日の会議で合意した内容に沿ったものだった。公表用は、かなりジンベルに阿た表現おもねが多く、素直に解釈するとイフアラ族側が一方的に譲歩したようにも取れる。末尾には、サーイエナとサイゼンの署名があった。

「どうですか？」

読み終わったエイラが、夏希と拓海を見やった。

「いいんじゃない？」

「問題ないだろう」

「ご同意いただけたようなので、お持ちいただきます」

親書を回収したサーイエナが、後ろで控えていたユニヘックヒューマから大きめの紙を受け取り、一通ずつ丁寧に包んだ。次いで懐から棒状の蠟を取り出し、灯明で炙って溶かしてから紙に垂らし、封蝋とする。

「封筒つてものにはないんだな」

サーイエナの作業を見守りながら、拓海が顎を掻く。

「封筒が広く使われるようになったのは、郵便制度が発達してからの話よ。配達人が直接受け取って、配送先まで丁寧に運んでいた時代なら、中身を保護する必要がないし、表書きもいらないんだから……凜の受け売り知識だけどね」

小声で、夏希は返した。

「封蝋三つが公表用、四つが本物です。お間違えのないように」

「お預かりします」

サーイエナが差し出した親書を、エイラが恭しく受け取る。

「道案内には、エワを付けます。昼食も持たせましたので、よろしければお召し上がり下さい。あと、念のために」

再びサーイエナが懐を探り、折り畳まれた紙と小さな革袋を差し出した。

「平原でなにか不都合があれば、この手紙を見せれば、どこの集落でも便宜を図ってくれるはずですよ。こちらは些少きんですが金が入っています。ジンベルまでの路銀としてお使い下さい」

「お心遣い、痛み入ります。ありがたく頂戴します」

エイラが丁寧に言って、手紙と革袋を手にした。夏希も礼を言うておいた。

「そろそろ日の出ですね。すぐに出立なさいますか？」

充分に明るくなった戸口の外を見やりながら、サーイエナが言う。

エイラが、確認するかのようになら夏希を見た。

夏希は短くうなずいた。準備はできているし、一ヒネでも早くジンベルに戻り、ヴァオティ国王を説得しなければならぬ。

「道中無事でな。頼んだぞ」

拓海が、遠慮がちに夏希の手を握る。

「そちらこそ。リダとうまくやんなさいよ」

拓海の耳に口元を寄せ、夏希はからかい気味にそうささやいた。

「高原の民の動きは、サーイエナ殿と協力してなるべく抑えておくから」

夏希の言葉を無視し、拓海が言った。

「そうね。お願いするわ」

ニアン主導の高原侵攻が、夏希らのジンベル帰着前に行われたとしても、両者の直接交戦が行われなければ、まだ停戦に持ち込めるはずだ。

「拓海様のことをお願いしますですう」

「合点承知であります！」

隣では、魔物二匹が別れの挨拶を交わしている。

見送りの人数は少なかった。サーイエナとユニヘックヒューマ、サイゼン、ベンデイス、リダ、それに居残る拓海だけだ。ベンデイスは、夏希らに同行するエワに対し、なにやら小声で細々とした注意を与えているらしい。

「では、参りましょうか」

挨拶を終えたエイラが、エワを促した。うなずいたエワが、先頭に立って歩み始める。夏希は一回拓海に向け手を振ってから、そのあとに続いた。エイラも歩み始め、殿にコーカラットがゆっくりと飛ぶ。

「間に合いますかな」

居残った異世界人……拓海に聞こえない程度の小声で、ベンデイスはサイゼンにそう尋ねた。

「間に合ってもらわねば困る。高原の民と平原の民の全面戦争にな

れば、おそらくはこちらに勝ち目はないぞ」

「……まさか。数はこちらの方が上ですぞ」

サイゼンの言葉に驚いたベンデイスは、思わず声を高めてしまった。リダやサーイエナが、何かとベンデイスに注目する。

「戦争は数だけでやるものではないよ」

なぜだか相好を崩したサイゼンが、ベンデイスの眼をまともに見据えた。

「彼らに捕らえられ、そして停戦交渉を行ったから、異世界人のことは君よりもよく理解したつもりだ。彼らの知識の量は半端ではない。ナツキ殿の話を信ずるとすれば、彼女の属していた国では、貧民の子供ですら、読み書きができるそうだ。しかも、寝小便をする年頃からな。そんな世界の聡明な若者と知恵比べをして、勝てると思うか？」

「しかし、高原戦士の力量は……」

「高原の民の戦士としての能力は高い。それは間違いない。だが、我々は戦争慣れしていない。戦士としての伝統に欠ける」

「戦士としての伝統……」

「タクミ殿に聞いたが、戦場でわたしを倒したイクマという異世界人の家系は、千年を超える戦士の家系だそうだ。そんな人材相手に、付け焼刃で挑もうとした我々は、愚かだったとしか言い様がない……」

……

言葉を切ったサイゼンが、ベンデイスから視線を逸らし、すでに豆粒ほどの大きさに見えている旅立った一行を眺めた。

「異世界人を敵に回してはならんよ。できることなら、友人とすべきだ」

「それは、同感ですな」

ベンデイスは認めた。

## 42 停戦条件（後書き）

第四十二話をお届けします。今週も評価点を入れていただきました。ありがとうございます。

### 43 帰還報告

夏希らのジンベル帰還の旅は、順調に進んだ。

山道を歩み、あるいはコーカラットに乗って、ジージャカイまでたどり着いた一行は、そこでエワと別れると、川船を一隻乗員ごと借り上げた。別口で船頭も二名雇い、昼夜兼行で先を急がせる。

ジンベルに到着したのは、なんと真夜中であった。眠い眼をこすりながら上陸した夏希とエイラは、とりあえず王宮に出向いて夜番の役人にことの次第を報告し、翌朝にヴァオティ国王へ謁見することを願い出た。それが終わったところで、コーカラットを伴ったエイラは家族に無事を知らせるために帰宅。夏希も異世界人仲間を集めるために、自宅へと向かった。

予想通り、自宅は静まり返っていた。シフォネの部屋を覗くと、寝台の上にならずやすやすと寝息を立てている侍女の姿があった。起こすのは忍びないので、夏希は自室に戻ると手早く着替えた。家の中は不在のあいだもきちんと手入れがなされており、掃除も行き届いていた。シフォネが起きたら褒めてやろう、と心覚えした夏希は、新しいサンダルに履き替えると隣の凜の家に向かった。親友とはいえ真夜中に無断で忍び込むわけにはいかないから、戸口のところで呼びかける。

「な、夏希様！ ご無事だったのですね！」

光る球体を指につけ、おぼつかない足取りで出てきた凜の侍女…  
…ミュジーナが、目を見張った。

「起こしてごめんね。早急に、凜と話し合う必要があるの。起こしてきてくれない？」

「は、はい！ かしこまりました」

慌てて下がったミュジーナが、夜着姿の凜を引きずるようにして戻ってくる。

「あら、夏希。こんな夜中にどうしたの」

「……拉致された友人が無事に戻ってきたのに、その言い草はないでしょう」

「……そうだったわね」

拉致偽装という設定を思い出した凜が、急にしゃんとなる。

「無事でよかったわ、夏希。エイラとコーちゃんと……もう一人はどうしたの？」

「エイラとコーちゃんも解放されたわ。拓海はまだ捕らえられているけど、待遇はいいわ。今のところ、安全よ。とりあえず、話し合いをしたいの。ここ、借りていい？ 生馬と瞬を呼んでくるから」

「その二人なら、ジンベルにはいいわ」

「いない？」

「生馬は高原遠征軍についていったわ」

「な……。もう戦争が始まっちゃったの？」

夏希は青ざめた。それでは、高原での苦労が無駄骨ではないか。

「今日の朝……というか、昨日の朝本隊が発したから、もう高原に侵入したはずよ。接敵の報告は届いてないけどね」

「なんとかして止めないと。瞬も一緒なの？」

「いいえ。瞬は……ススロンに亡命したわ」

「なんですつてえ！」

夏希の絶叫が、隣近所まで響き渡った。

「で、少しは落ち着いた？」

お茶を淹れてくれながら、凜が訊く。

「……とりあえず」

湯飲みを受け取った夏希は、ありがたくそれをすすった。

ある意味修羅場であった。夏希の声だと気付いて飛び起きてきたシフォネに抱きつかれたうえに胸で号泣される。騒ぎを聞きつけて、近所の人起き出してくる。どうやって知ったのかはわからないが、アンツカが駆けつけてきて、シフォネと並んで号泣する……。とりあえず泣きじゃくる二人の女性をなだめ、近所の人に詫びを述べ

る。一応高級住宅街と言える地区だから、住人は貴族や官僚、お金持が多い。

夏希はようやく泣き止んだシフォネを家に帰らせた。アンヌツカは説得しても帰りそうになかったので、凜の家の警備を命じておいた。

「……って、落ち着いてお茶飲んでる場合じゃないわよ！」

夏希は腰を浮かせた。

「早く生馬に連絡して、高原遠征軍を止めないと。直接交戦が始まったら、停戦が不可能になるわ」

「あー、それに関しては安心して。高原遠征軍は、高原の民と交戦することはないから」

「はあ？」

夏希は腰を浮かせたまま、凜の顔を凝視した。凜は、澄ました表情でお茶をすすっている。

「生馬はそのために、同行したのよ。実は、瞬の策謀があつてね。

まあ、正確に言えば、スロンとエボダの策謀だけ」

「策謀って……。説明して」

「その前に、高原での出来事を細大漏らさず聞かせて。今現在ボールを手元に置いているのは瞬と生馬よ。あなたの話によっては、計画を修正する必要があるかもしれない」

「じゃあ、話すわ」

しぶしぶ腰を下ろした夏希は、拉致当日のことから細かく語っていった。拓海の様子も、聞いた範囲で付け加える。途中で、凜が夏希の湯飲みに二回、お茶を注ぎ足した。

「じゃあ、ほぼ目的を達成したってことね」

「そうね。親書を陛下に渡して、高原側の本音を伝えて、説得するだけなんだけど……で、瞬の策謀って、なに？」

「簡単に説明すると、ニアンにおけるクーデターを成功させるのよ。現国王の兄がエボダに亡命しているから、彼のスポンサーであるエボダとスロンが私兵を若干与えて、国王追放、政権奪取をやらせ

るの。防衛隊が近くにいと、カウンタークーデターの恐れがあるから、主力が高原に行くまで待つていた、というわけ」

「カウンタークーデター？」

「クーデターが発生して混乱している状態で、第三者や旧政権の調査がさらにクーデターを起こすことよ。ニアンの場合だと、有力貴族や現国王寄りの防衛隊部隊ね」

凜が、簡潔に説明する。

「ふうん。で、そのクーデターは、成功するの？」

「まず間違いなく。すでに何人かの有力貴族は抱きこんであるそうよ。ニアンの現有兵力は、治安維持要員と王宮警護部隊だけ。無血は無理としても、短時間で制圧できるはずだわ。市民も抵抗はしないでしよう。クーデター勢力の後ろ盾にエボダやススロンといった大国がついているのが見え見えなんだから」

「じゃあ、わたしたちが高原でやってきたことは……」

「無駄じゃないわよ。瞬の計画が上手くいっても、高原侵攻計画が頓挫したうえに、ジンベルとススロン、エボダ連合との関係が劇的に良好化するだけなもの。高原側とは改めて停戦交渉をしなければならぬし、魔界膨張……人間界縮退か、その問題解決にはなにも寄与しないんだから」

「それはそうだけど」

「……ひよっとすると、もっと上手いシナリオ書けるかも知れないわね」

湯飲みを置いた凜が、腕を組んだ。

「どんな？」

「拉致偽装は、ヴァオティ国王承認の上だった、ということにするのよ」

「よくわかんないんだけど」

「ヴァオティ国王は、最初からニアンを裏切るつもりだった。だから、高原の民と秘かに和平交渉を試みた。ニアンにはれないように、高原の民に拉致されたと偽装してね。ニアンでのクーデター成功、

高原遠征軍撤退、ジンベル主導で高原側との停戦成立、ススロンやエボダを参与させた形での、人間界縮退対策としての平原と高原の協力体制の構築……という具合にいけば、ジンベルの株は上がるしススロンやエボダに恩を売ることができるとしよう」

すらすらと、凜が説明する。

「理屈の上ではそうだけど……」

「まあ、そのあたりはエイラとも相談する必要があるわね」

「しかし……なんだかばらばらになっちゃったね、わたしたち」

少しばかり寂しげに、夏希はつぶやいた。

「そうね。瞬は亡命。生馬は高原行き。拓海は高原で人質状態。まあ、事態がジンベル王国の枠を超えて推移しているからね。仕方がないけど」

「ねえ。高原で拓海にも聞かれたんだけど……凜、あなたは人間界縮退問題にどこまで関与するつもり？」

「どこまでって……。そりゃ、ジンベルに被害が及ばないように努力するわよ」

「高原の民は？ 彼らに被害が及ぶのは、許容範囲？」

重なるように、夏希は質問を放った。

「停戦が成立し、友好を結べれば、助けてあげるべきでしょうね」  
「問題は、今後のわたしたちの身の振り方よ。人間界縮退問題に関わろうとすれば、当然活動はジンベル王国内に止まらない。地理的にも、政治的にもね。ジンベル王国の貴族にして官吏、という立場では、おそらくやっていけないわ」

夏希はそう言った。

「じゃ、どうしようと言うの？」

凜が訊き返す。

「それが、よくわからないのよね」

夏希はため息混じりにそう答えた。ジンベルを含む平原の民、それに、停戦が成立すれば仲良くなれそうな高原の民を、助けてやりたいという気持ちはある。しかしながら、現状で夏希らの立場は非

常に曖昧かつ脆弱だ。人間界縮退問題に関しては、助言以上のことはできそうにない。

「瞬も同じようなことを言っていたわ。まあ、その時点では、人間界縮退に関しては良くわかっていなかったんだけどね。ともかく、あたしたちの知識その他をジンベルに伝えるだけじゃ効率が悪い、ってことらしいわ。彼の構想では、平原諸国を糾合した何らかの政治的組織を作り上げるつもりらしいし」

「統一国家作り？」

「まさか。瞬はそこまで野心家じゃないわよ。それに、フィクシオンならともかく、現実ではそんな試みが流血なしに短期間で成し遂げられるわけじゃないもの。もっと、緩やかな結びつきよ。EUとか、ASEANみたいな共同体構想ね。幸いなことに、平原諸国内に傑出した国力を持っている国家はないし、最小の国家であるジンベルもその国力はニアンやスロンの三分の一程度。共同体を作るには都合がいいわ」

「ススロン亡命も、その布石というわけ？」

「そうね。さすがにジンベルみたいな小国主導で共同体構想をぶち上げて、誰も乗ってきてくれないでしょうから」

自嘲気味に微笑んだ凜が、急に笑みを消すと、心配そうな表情で夏希を見つめた。

「まあ、あんまり先走っても仕方ないわね。ともかく、今日は寝たら？ 明日陛下に報告しなきゃならないでしょ？ 顔色もよくないわよ。旅で疲れたんじゃないの？」

「まあ、明日の主役はエイラだから、わたしは黙って座ってればいいんだけど……そうね、寝ておくわ」

温くなったお茶を飲み干すと、夏希は立ち上がった。

翌朝。

寝不足のまま、夏希はエイラとともにヴァオティ国王との謁見に

臨んでいた。

エイラが弁舌爽やかに拉致事件の詳細を国王に説明してゆく。打ち合わせ通り、夏希は黙っていた。異世界人である彼女よりも、以前から筆頭巫女として仕えているエイラの方が、国王の信頼ははるかに厚い。

「そのようなわけで、僭越ながら高原の民と停戦に関する話し合いを行ってまいりました。決して陛下の代理を名乗ったり、ジンベル代表を装ったわけではありませんが、越権行為であることは重々承知の上です。お咎めがあれば、甘んじて受ける所存であります」

エイラが神妙な面持ち……普段と変わりないといえば変わりないが……でそう言って、深々と頭を下げる。夏希もそれに倣った。

「いや、罪に問うつもりはないぞ。それよりも、交渉内容を聞かせてくれ」

ヴァオテイ国王が、エイラを促す。夏希は内心で安堵の息をついた。拉致自体が偽装であることを疑ってもいないようだし、勝手に交渉したことに關して無罪との言質も得た。

エイラがサーイエナおよびサイゼンとの交渉内容を説明し、懐から二通の親書を取り出して控えていた秘書官に渡す。ざつと外見を検めた秘書官が、封蝋がしっかりとしていることを国王に示してから、これを剥がし、紙を広げて国王に差し出した。受け取ったヴァオテイ国王が、読み始める。

「この、人間界の縮退というのは、まことなのか？」

国王が問う。

「まことでございます。ジンベルの筆頭巫女として断言させていただきます」

「夏希殿？」

「本当でございます、陛下。魔界から招いた魔物にも確認いたしました。人間界は、縮退しております」

強いて自信ありげに、夏希も答えた。

「余としては、停戦自体は喜ばしいことだと考えておる。人間界縮

退がまことであるならば、戦争などやっておる場合ではないからな。しかしながら、すでにわが防衛隊は高原遠征軍とともに高原に攻め込んでおる」

「進言させていただいてよろしいでしょうか」

エイラが、ずいっと身を乗り出した。国王が、身振りですく許可を与える。

「今回高原側が出した停戦条件は、本来ならば受け入れがたいものですが、人間界縮退の事情を考えますに、ここで一步退くのも国益かと思われます。幸い、高原側とは話がついており、国内外へはジンベルおよび派遣軍の勝利を謳うことができます。防衛隊を高原遠征軍から早急に引き上げさせるとともに、正式な陛下の名代を高原へ派遣なすることが最善の策と愚考いたします」

あくまでへりくだった態度で、エイラが意見を述べる。

「ふむ。いずれにせよ、ニアンや他の国々とも相談する必要があるな。拓海殿も早急に助け出さねばならぬ」

「お心遣い、痛み入ります」

夏希は沈痛な表情を取り繕うと、そう言って頭を下げた。……拓海のことだ、夏希というお目付け役がいなくなったのをいいことに、リダとよろしくやっっていることだろう。

ニアン本国でクーデター発生。

その報せがジンベルにもたらされたのは、その日の夕暮れ時だった。

事態を高原遠征軍へと報せる伝令使が発つたのを見届けた夏希と凜は、王宮へと向かった。そこでエイラと合流し、仕事部屋にこもって情報の収集と分析に当たる。

続報は、次々ともたらされた。各国が派遣した伝令使。商人の噂話。ニアン政府が慌てて派出した、各国に対し救援を求める急使も、ジンベルにやってきた。もちろんその前にエイラがヴァオティ国王

に対し根回しを行っていたので、急使が目通りできたのは外務大臣止まりであり、会見自体も『内政不干渉の原則』と『防衛隊主力の不在』を理由にあげたジンベル側が救援要請をを丁重にお断りする、という結果となった。

「どうやら、クーデターは成功したようね」

王宮内の食堂から取り寄せた遅い夕食を噛みながら、凜が言う。ちなみに、食しているのは夏希が初日に食べた牛丼もどきである。

「そうね」

ホワイトボードに書き散らしたメモを整理しながら、夏希は応じた。クーデター勢力がニアン市街地に侵入したのは、早朝のことだったらしい。その兵力は、ニアンに残留していた防衛隊の戦力を上回っており、抗戦を諦めた現国王は少数の警護部隊とともに王宮から脱出、友好国であるイヤーラに逃れたようだ。市街地を掌握したクーデター勢力は、現国王を廃し、その兄を新国王とする政権樹立を正午近くに宣言。情勢は、いまのところ落ち着いているという。「後ろ盾にスロンとエボダがいることを皆知っていますからね。他国も、下手に手出しはできないでしょうし」

含み笑いをしつつ、エイラが言う。親ニアン国であるイヤーラもケートカイも、防衛隊主力を高原侵攻作戦に参加させているので、手元にある兵力はわずかだ。ここでニアン救援に乗り出せば、それを口実にジンベルに駐屯しているスロンやエボダの兵力に本国を衝かれないとも限らない。動くのは無理だった。

「高原遠征軍の情報が入ってこないのが気がかりね」

お茶に手を伸ばしながら、凜が言う。

「まだ早いよ。川船で往復だから……真夜中までには、第一報が入るんじゃないかな。高原の民と接触してなきゃいいんだけど」

夏希はそう答えた。もう完全にこちらの時間……一日二十一時間半……に慣れたし、時計を使わない生活を長い間続けていると、時間の経過に対する感覚が鋭敏化するようで、自分でも不思議なくらい正確に今現在の時刻がわかるようになってる。

「まあ、生馬がうまくやってくれるのを祈るしかないわね」

お茶を飲み終わった凜が、諦め顔で首を振る。

「しかし……事前に図ったわけでもないのに、異世界人の皆さんはそれぞれ良い場所において活動していらっしやいますね。瞬殿がニアンの政変に関わり、生馬殿が高原遠征軍の動きを抑制し、拓海殿が高原の民の動きを抑える。凜殿と夏希殿がジンベルで、これらを調整する。まるで、なにか不思議な力が働いたかのようすわ」

エイラが言つて、微笑む。

「不思議な力つて……異世界召喚を行っちゃう巫女さんが言っせりフじゃないわね」

凜が、控えめに突っ込んだ。

### 43 帰還報告（後書き）

第四十二話をお届けします。

#### 44 和解（前書き）

【GL警告】今回は微量ではありますが、GL臭が嗅ぎ取れるお話となっております。苦手な方はご注意ください。

お詫び：活動報告で話が第一章の最終話となる、とご報告しましたが、ボリュームが一万字を大きく超えてしまいましたので、都合により二話に分割してお届けすることになりました。申し訳ございません。

## 44 和解

ニアン新政権は、成立当日にススロン、エボダ、シーキンカイの三カ国に承認された。翌日にはジンベルを含む平原諸国の大半もこれに倣い、親ニアン国であったケートカイ、イヤーラも三日後には……渋々、といった体ではあったが……承認を与えた。

ニアンにおけるクーデターの報に接した高原遠征軍は、一度も高原の民と戦火を交えないままに撤退した。高原遠征軍は解散したが、その兵力ははまだジンベルに居残っている。表向き、その理由は高原の民のジンベル再侵攻に備えるためであるが、本当のところはニアン防衛隊によるカウンタークーデターを警戒したススロンとエボダによって、強制的に留め置かれているのが現状であった。

ヴァオテイ国王は、派遣軍参加各国の承諾を得た上で、高原に向け外務大臣を長とした停戦交渉団を送り出すことを発表した。

「……ということ、一件落着かな」

「とりあえず、最初の関門は突破したな」

生馬が、夏希の発言を制限つきで肯定する。

「ニアン情勢が落ち着けば、瞬と連絡が取れるようになるでしょう。ススロンとエボダ連合と、ジンベルの仲も悪くなっていないようだし」

微笑みながら、凜が言った。

「瞬に署名させられた書状が効いているのかもしれないな。それにしても、先の読める奴だ」

感心したようにうなずきながら、生馬が言う。

三人の異世界人は、王宮の仕事部屋に集っていた。拓海は、いまだ高原で『人質』になったままである。

「瞬といえば、亡命問題に関して進展はあったの？」

夏希は凜に問うた。貴族位を返上するなど一応筋を通してからの亡命だったから、罪に問われることはないはずだが、ある意味ヴァ

オティ国王の面子を潰した形になるので、心証は大幅に悪くなっているはずだ。

「その辺は、スロンの方が非公式ながら詫びを入れたから、なんとかなつたみたいよ」

「このままうまく行けば、停戦が正式に成立する。とりあえず高原遠征に関しては、ニアンの前国王にすべての責任を擦り付けて平原、高原ともに納得する。そのあと、手に手を取って人間界縮退問題に対処する、つてのが、理想的なシナリオだろうな」

生馬が、相好を崩しつつ言った。

「まったく。ここだけの話だけど、ヴァオティ国王が最初からサーイエナの親書の内容を信じて、高原に使節を送ったりしていれば、戦争にならなかったし、こんなに事態がこじれることもなかったのに」

やや声を潜めて、凜が言う。

「たしかにね」

夏希も同意した。

「まあ、戦争なんて双方の思惑違いで始まることが多いからな」

笑顔を消した生馬が、そう言つて腕を組んだ。

「曖昧な外交が一番平和を害するのよ。少なくとも、歴史を見る限りはね。いまだに他国とトラブルになる度に、『大人の対応』なんて馬鹿なことをやって得意になっているどこかの島国もあるけれど、あれが最も危険なやり方なのよ。曖昧な意思表示と戦略なき譲歩は、相手を誤解させるだけ。……男女関係みたいなものね」

辛辣な口調で、凜が言う。夏希は苦笑した。

「男女関係といえば……イブリス王女との仲はどうなったの？」

凜が、生馬に振つた。

「変わりはないが……」

「ということは、順調に愛を育んでいる、つてどこ？」

「皮肉のような言い方はやめてくれ」

夏希の突っ込みに、生馬がわずかに赤面する。

「最近国内外がごたごたしていたからね。生馬も忙しかったし、イブリス王女も気ぜわしかっただろうし」

夏希はそうフォローした。

「思い切って結婚しちやいなさいよ」

凜が、煽った。

「仲間に王族の血縁がいるとなれば、それなりに箔がつくわ。これから人間界縮退対策を行うにも、都合がいいでしょう」

「他人ごとだと思って、簡単に言ってくれるなよ。男子として一生ものの決断なんだぞ」

渋面で、生馬が返す。

「だいたい、異世界に来たらその王女様や貴族娘と恋愛関係になる、ってのは王道展開じゃないの。さっさとゴールインすべきよ」  
凜がさらに突っ込む。

「お前、ファンタジー小説とか映画とかと間違えてないか？」

「……たしかに、小説なんかだとそんな展開が多いわよね。でもそういう立場のキャラクターは、普通主役じゃないの？」

夏希もそう訊いた。

「そう言えばそうね。じゃ、あたしや夏希は脇役？」  
凜がむっとした表情を見せる。

「ヒロインがイブリス王女なら、わたしと凜はその恋のライバルかしらっ」

夏希は笑った。生馬は結構かつこいいと思うし、信頼もしているが、少なくとも彼に対し恋愛感情は持っていない。

「むしろ夏希がヒロインじゃないのか？」

生馬が、突っ込み返した。

「最初に召喚されてるし。結構活躍してるだろ？ 他の四人は、お前の都合で引っ張り込まれたようなものだからな」

「……まあ、華はあるしね。少なくとも、あたしよりはヒロインが似合いそうだし。だけど、男が絡んできていないのはおかしいわ。

恋愛要素なしのヒロインなんて、ありえないじゃない」

疑わしげに言った凜が、ぽんと手を叩いた。

「そうか！ ガールズラブもののヒロインなら……」

「いい加減にしなさい」

夏希は凜の脳天を軽くしばいた。

ニアンクレーターから十二日後、ついに平原諸国と高原の民のあいだで停戦協定が結ばれた。これを受けて、翌日には救援軍の解散が正式に宣言され、ジンベルに駐留していた平原各国の防衛隊や市民軍兵士は、続々と本国への帰還を開始した。撤退は三日ほどで終了し、あとには多数の仮小屋と、膨大な量のゴミが残された。

魔力の源の管理について協議するため、高原側代表団がジンベルを訪れたのは、救援軍解散から五日後のことであった。代表団の团长はサーイエナであり、一行の中には『解放』された拓海の姿もあった。

ジンベル側と、高原側の主たる協議はわずか半日で終わった。ジンベルは魔術の使用の抑制に努め、半年以内にその使用をゼロにする、という確約がなされた。それを監視するために、高原側の人員がジンベルに駐留することも決まった。ただし、例外的措置として、今現在平原にいる五人の異世界人を元の世界に帰還させる場合は、各人一回に限り魔力消費が認められることとなった。

「これで、わたくしも失業ですわね」

その夜に王宮で催された高原側代表団歓迎パーティの席で、エイラが苦笑交じりに愚痴った。

「困ったわね」

「いえ、半分は冗談ですわ。ご心配なさらないでください」  
顔をしかめた夏希に向かい、エイラが微笑む。

「すでに、サーイエナ殿から人間界縮退対策を手伝ってくれ、と誘

われているのです。陛下も、他の平原諸国と共同で何らかの対策組織を立ち上げたい意向ですし、そこにわたくしを加えるという話も持ち上がっていますし」

今日のパーティは立食形式であった。元来、ジンベルにおいて…：平原地帯や高原も含め…：パーティに分類される宴は、座った状態で行われる。席次なども定められており、それなりに堅苦しい雰囲気で行われるのが常だ。しかしそれでは、交歓する相手が限られてしまい、今回のようにホストがゲストと親しく交わって、友好の度を深める、という趣旨の集まりには都合が悪い。そこで、凜の発案により初めてこのような形式の歓迎パーティが催されたのである。ちなみに、上座にはジンベル王族用とサーイエナを含む高原側代表団主要メンバー用の椅子だけは設えてあった。

部屋の中央に置かれたテーブルには、大きな陶器の鉢が五つばかり並べられていた。これも凜の発案で、数種類のフルーツポンチが振舞われているのだ。基本的に、平原でも高原でも異なる種類の酒を混ぜることはしないし、甘い果物で香りをつけたりすることもやらない。夏希は自分の飲み物をすすった。一番アルコール分が少ないものを選んだので、ほとんどフルーツジュース同然であり、飲み易い。

「俺がいないあいだに、ずいぶんと仲が進んだようだな」

拓海が、かなり離れたところで高原の民数名と談笑している生馬を見やる。その隣には、イブリス王女の姿があった。その手が、さりげなく生馬の腕に添えられている。

「仲と言えば、リダはどうなったの？ 代表団には、いなかったみたいだけだ」

「そのあたりは、ご想像にお任せする」

拓海が言う。眼が笑っているところを見ると、こちらもそれなりに進展があったようだ。

「ともかく、戦争が終わって本当によかったわ」

夏希は心底からそう言った。ジンベルを守るといふ大義名分があ

つたとはいえ、市民軍を率いて数多くの高原の民を殺害してしまつたし、自らの手でも竹竿を振るい、何人もの人を傷つけたはずだ。無残な死体や、生涯癒えないであろう傷を負つた者もたくさん見えてきた。

これ以上見なくて済むのだ。死体も、怪我人も、親しい人を亡くして嘆き悲しむ者の顔も。

「おっと。大物が接近中だ」

飲み物が入ったグラスを手に、拓海が目配せする。

先ほどまで何人かのジンベル人大臣と談笑していたサーイエナが、歩み寄ってくる場所であつた。かなり飲んでいるのか、目元がほんのりと赤らんでいる。

「こんばんわ、エイラ殿。お久しぶりですね、夏希殿」

「サーイエナ殿」

笑顔をはじめさせたエイラが、サーイエナの手を取る。夏希も笑顔で挨拶の言葉を述べた。

「すみませんサーイエナ殿。相棒が呼んでおりますので、失礼します」

拓海が断りを言つて、歩み去つた。どうやら、生馬が手招いていることに気付いたようだ。王女のそばに、ヴァオテイ国王の姿も見える。国王のお召しがあつたのだろう。

「協議はどうでしたか？」

サーイエナに向け、夏希は儀礼的にそう尋ねた。

「たいへん和やかな雰囲気でした。ほとんどの議題が、大きな対立点もなく、速やかに合意に至りましたわ」

「停戦成立、魔力の源の共同管理についても合意がなされたそうですね。あとは、平原と高原の今後の付き合い方と、人間界縮退問題ですか」

夏希は解決した問題と未解決の問題を並べ立てた。

「拓海殿にもご助言いただきましたが、高原の民としては臨時に族長会議を開き、近いうちに人間界縮退問題に対処する組織を立ち上

げる予定です。正式な決定はまだですが、その長にはわたくしが就任することになるでしょう。同様な組織を平原側でも作る構想が、ヴァオティ陛下におありのようですね。わたくし、明日の会談でヴァオティ陛下にその長にはエイラ殿がふさわしいと推薦させていただくことを決めましたの。よろしいですか、エイラ殿？」

サーイエナが、エイラに許可を求める。

「わたくしがですか？」

エイラが、喜びと戸惑いが混じった奇妙な表情を見せた。

「平原で最も優れた巫女。いえ、高原と平原を合わせてももっとも高い能力を持つ巫女ではないですか。人間界縮退対策を指揮するにふさわしいでしょう。それに……」

いったん言葉を切って、飲み物をひと口飲んだサーイエナが、続ける。

「ゆくゆくは、両者を統合した組織ができると理想的と言えます。共通の危機に対し、高原と平原が手を結べば、危機を回避できるはずですね。その際に、あなたとならばうまくやっていく自信がありますもの」

眩いばかりの笑みを湛えた表情で、サーイエナがエイラの肩に手を置く。

「いいわね。平原の白き巫女と高原の蒼き巫女がともに手を携えて人間界縮退問題に取り組むのね」

「あら。夏希殿。当然あなたにも手伝っていたきますわよ」

サーイエナが、夏希を見上げる。

「わたしが？ …… あんまりお役に立てる気がしないんだけど」

「異世界人の知恵の深さは、よく存じております。絶対に、必要ですわ。高原と平原と異世界人の英知を結集して、ことに当たらねばならないのです。今は、借りられるものならセレンガの手でも借りたい状況ですからね」

真顔で、サーイエナが言う。

「同感ですわ。わかりました。もし陛下からそのような地位への就

任要請があれば、喜んでお受けいたしますわ。いずれにせよ、この問題に関してはサーイエナ殿に全面的に協力するつもりでしたし」

エイラが、しっかりとした口調で言う。再び眩いばかりの笑みを浮かべたサーイエナが、肩に掛けていた手をエイラの腕に沿って下ろしていき、彼女の小さな手をきゅつと握った。エイラが、珍しくはにかんだような表情を見せる。その様子は、夏希には妙に性的な接触到思えた。

……ひよつとして、このふたり『できて』るんじゃ……。

サーイエナの性癖は知らぬが、エイラは女性の恋人もいるくらいである。以前に夏希に迫ったことがあるくらいだから、エイラは年上好きでもあるのだろう。サーイエナに夫がいるという話も聞いていないし、かなりの美人だ。ありえない話ではない。

「……とりあえず、ワイコウへの使節派遣ですわね。陛下は近日中に平原各国と連名で親書を送られるおつもりでしょうか？」

夏希の妄想をよそに、エイラとサーイエナは話し合っていた。エイラの言葉に、サーイエナが深くうなずく。ちなみに、まだ手は握ったままだ。

「問題はその後ね。タナシスとどうやって交渉するの？」

夏希はそう口を挟んだ。ジンベルはもちろん、平原諸国のどの国も、はるか北方に遠く離れたタナシスとは国交がないのだ。もちろん、高原の諸族も、タナシスとは無縁のはず。

「海岸諸国もタナシスとの正式な国交はありませんが、お互い何度が使節を送った経緯はあるそうです。ラドーム経由で、わずかですが貿易を行っていますし。その伝で、親書を送ることは難しくないでしょう」

ラドームは、こちらとタナシスを隔てる大海の只中……地図で見るとややタナシス寄りらしいが……にある島である。もともと独立国だったが、今はタナシスの属国だか保護国だかになっているらしい。

「案外、タナシスでもこちらと同じ状況かもね」

夏希は考えつつ言った。

「タナシスがどの程度の領域を支配しているか知らないけれど、ニヨキハンの推定が正しければ、向こうでも縮退が始まっているはずよ。案外同じこと考えていて、『海に向こうの国々に魔力の源を使わせないためにはどうすればいいか』とか悩んでるかもしれない」

「それは、どうでしょうか」

サーイエナが、懐疑的に言う。  
「推測に過ぎませんが、もしタナシスが危機感を覚えて魔術の使用を控えているとすると、もう少し人間界縮退の速度が遅くてもいいような気がします。実際、ここ数日ジンベルが魔力の使用を控えてくれたおかげで、縮退速度は一日あたり七キツホ近くまで落ちていくのですから」

「今ここで議論しても、あまり益はありませんわ。今夜くらい気を緩めて、少し楽しみましょう」

そう提案したエイラが、自分のグラスを大きく傾けた。

「そうですね」

同意したサーイエナが、同様に飲み物を大きくひと口やる。

「とてもおいしいお酒ですね、これは。夏希殿のお仲間の凜殿が作られたそうですが……」

グラスを軽く振って強調しながら、サーイエナが訊いてくる。

「そうです。この手のことが得意な娘で……」

「サーイエナ殿。あそこに凜殿がいらっしやいますわ」

エイラが指差した。ポンチの鉢のそばに、凜の小柄な……といったも、平原や高原の民と比べるとそれほど遜色はないのだが……姿がある。今日の衣装は鮮やかな浅黄色のドレスだ。海岸諸国のひとつニガタキから輸入した綿織物で、東群島産の染料を使って染めてあるという。平原では……高原でも同様だが……綿は採れないし、染色産業も盛んではない。

「凜殿にぜひともこの飲み物の作り方を教えてもらわねばなりませんね。お代わりをもらうついでに、訊いてまいりましょう」

グラスを干したサーイエナが言った。

「ご一緒しましょう。夏希殿、お代わりは？」

「まだ入ってるわ。ありがとう」

夏希はエイラの気遣いを丁寧にした。

夏希に目礼してから、ふたりの巫女が連れ立ってお代わりをもらいに行く。歩きながら、その腕や肩がさりげなく触れ合っていることに、夏希は気付いた。

……やっぱできてるよ、うん。

## 4 4 和解（後書き）

第四十四話をお届けします。

## 4 5 共同体構想

平原と高原の、人間界縮退対策は順調に進んだ。

高原の民は、族長会議を経て正式に縮退問題を受け持つ独立組織である『対策群』を発足させた。その長に推挙されたのは、やはりサーイエナであった。対策群は魔界との最前線で観測、研究などを行う監視部門と、サーイエナが直接指揮を執る外交部門に分かれており、人間界縮退問題に関してのみ、長たるサーイエナは全高原の民の全権として振舞えるだけの権限が、族長会議によって付与されていた。

平原において発足した同様の組織は、『人間界縮退対策委員会』と呼称され、その長である委員長に就任したのは、サーイエナとヴァオティ国王の思惑通りエイラであった。こちらの権能は高原の対策群より低く、その機能は主に平原各国との連絡調整と高原対策群との連絡、さらにはかなり限定された平原代表としての外交能力に止まっていた。エイラに請われたうえにヴァオティ国王にも要請された夏希は、委員長補佐という肩書きで、直属の顧問のポストに就くことになった。

「ようやく端緒についた、ってとこね」

凜特製の米粉蒸し饅頭を食べつつ、夏希は言った。

仕事部屋に、久しぶりに五人の異世界人が揃っていた。武人としての貫禄が漂うようになった生馬。眼光の鋭さが増したように思える瞬。以前よりいくぶん痩せて、そのぶん筋肉がついた拓海。それが魅力のひとつでもあったのだが、子供っぽいところが最近見られなくなった凜。そして、精神的にずいぶんと図太くなったと自覚している夏希。

「しかし……みんな出世したわねえ。瞬はススロン貴族でいまや国王の顧問。生馬はイブリス王女といい仲でヴァオティ国王のお気に入り。拓海は高原の民との交渉を一手に引き受けている感じだし、

夏希は委員長補佐。あたしだけ、無役だわ」

言葉とは裏腹に楽しげに、凜が言う。

「ポストが欲しければ、いくらでもあげられるよ、凜ちゃん」  
瞬が、笑った。

「僕の構想では、近いうちに平原共同体を立ち上げるつもりなんだ。すでにスロンとエボダ、シーキンカイ、新生ニアン、それにハンジャーカイには根回しを済ませてある。ジンベルの説得は簡単だと思うし、そうなれば他の国も同調せざるを得ないだろう」

「共同体って……目的はなんだ？」

饅頭をふたつに割りながら、生馬が訊いた。

「平原はもつと豊かになるべきだ。そのためには、対外貿易を促進する必要がある。人口がそれほど多くない以上、内需だけでは十分に豊かにはなれないからね。調べてみたが、海岸諸国には魅力的な産物が多いし、平原や高原から輸出できる商品も多いようだ。もつと物流を盛んにすれば、必ず富を産む。今後人間界縮退対策がどのように進むかは不透明だが、多額の予算を喰うことは間違いないからね。そのためにも、平原諸国は資本を蓄積しないと。これら経済振興策の調整役は、経済に通曉していない平原の民には無理だと思う。凜ちゃんなら、うってつけだよ」

「まあたしかに、ここの経済は原始的よね」

饅頭をかじりつつ、夏希は言った。米粉なのでいささか皮が柔らかいが、かなりおいしい。凜が工夫を凝らして、糖蜜からかなり上質の砂糖を得られるようになったので、中の小豆餡もどきの味も、まるやかな甘味を感じさせる上品なものになっている。

「ふたつ目の目的は、教育の向上だ。イファラ族との戦争でうやむやになってしまったけど、僕が本当にやりたいのは初等教育の普及なんだ。これを共同体で行えば、質の揃った教員の大量育成が可能になるし、各国のカリキュラムが統一できる。加えて、思想的に偏った愛国教育や宗教教育も排除できる」

珍しく、瞬が熱く語る。

「あー、それはいいわね。どこの国とは言わないけど、日本の周囲にはひねくれた愛国教育を行って子供を洗脳している国ばかりなものね。子供を素直に教育するのは、いいことだわ」

物憂げに、凜が合いの手を入れる。

「三つ目は、これは生馬と拓海にも手伝ってもらうつもりだが、集団安全保障体制の確立だ。将来的には、高原の民諸族も含めたい」

「集団安全保障って……どこと戦うつもり？」

夏希はそう訊いた。

「集団安全保障は、軍事同盟とは違うんだよ」

苦笑しつつ、瞬が説明モードに入る。

「基本的に、参加国同士で紛争が起こった場合には、参加各国が相互に協力して、これを平和的に解決する。参加国が武力侵攻などを行った場合には、参加各国が武力行使を含む制裁措置を行う。このような言わば非平和的な行動を集団で解決するのが、集団安全保障の概念だ。一番よく知られた集団安全保障組織は、国際連合だね」

「じゃ、よそと戦うんじゃない？」

「平原国家間、ひいては平原と高原の武力衝突の芽をあらかじめ摘んじまおう、って話だな」

拓海が、口を挟む。

「そこまでやる必要性があるの？ もともと、平原各国のあいだに争いごとは少ないんでしょ？ 経済が活性化して、諸国間の関係が深まれば、紛争なんて起きにくくなるんじゃないの？」

夏希はそう訊いた。

「それが逆なんだよ。むしろ、国家間の結びつきが強まるほど、紛争のタネは増えるんだ。何の付き合いもない他人と喧嘩する奴はいないだろ？ それと同じさ」

苦笑いしながら、瞬が言う。

「よく経済的に相互依存体制を作れば、戦争防止になると唱えている人がいるが、ありゃ嘘っぱちだ。1939年に第二次世界大戦が始まったとき、ドイツの一番の貿易相手国は、翌年に侵攻すること

になるフランスだった。日本が真珠湾を攻撃した時も、最大の貿易相手国はアメリカだったんだし」

皮肉な口調で言った拓海が、剽軽に肩をすくめてみせる。

「とにかく、平原国家間で争っている場合じゃないからね。できれば、各国共同で常備軍を作りたい。そうすれば、各国の防衛隊も大幅縮小できるだろう。高原も安全保障体制に組み入れることができれば、常備軍もさらに減らせるはずだ。海岸諸国との仲は悪くないからね。……ということで、その常備軍を作る段階になったら、二人にその組織と指揮を任せたいんだ」

瞬が、生馬と拓海を見た。

「……それは、いろいろとまずいんじゃないか？」

生馬が、言った。

「異世界人が手元に常備軍を掌握したりしたら、下種な勘繰りをする奴が現れんとも限らんだろう？」

「そこで、イブリスとの結婚でしょう」

すかさず、凜が指摘する。

「そうだね。一国の王族と血縁関係になってしまえば、平原の民も同然だろう。常備軍の指揮を生馬が執ったとしても、異論は出まいにやにやと、瞬が笑う。

「瞬の理想はわかったけど、とりあえずは人間界縮退問題が先でしょ」

夏希は強い語調でそう言った。

「たしかにな」

拓海が同意する。

「それについても考えてあるよ。海岸諸国へ使節団を送るべく根回ししているところだ」

瞬が説明を始めた。

「まずワイコウに行って魔術の使用をやめさせる。次いで海岸に出て、ルルトかラクトアスにラドーム経由でタナシスに親書を送らせる。同時に、海岸諸国との交易に関しても可能性を探りつつ、政財

界にコネを築いてゆく。代表団長は、どこかの国に外務大臣クラスを派遣してもらうつもりだ。実質的には、エイラ委員長がトップだろうが。当然、補佐も行ってもらいたい。経済関連は、凜ちゃんに任せるよ」

「瞬は、行かないの？」

「僕は共同体立ち上げに専念する。使節団には高原の代表も加えないだ。夏希、サーイエナ殿に話をつけておいてくれ。それと拓海、高原のお偉いさんと、商人にも話を通しておいてほしい。高原の産物をジンベル経由で海岸諸国に流せれば、ジンベルは潤うはずだからな」

「魔術使用禁止で、いずれ干上がりそうだなものね」

凜が、肩をすくめた。冷却や換気の魔術は、いまだ効力を保っている……効果を打ち消すために重ねて魔術を使ったりしたら本末転倒である……が、いずれ近いうちにその力は失われてしまうだろう。金鉱や銀鉱の産出量は激減するだろうし、市民生活にも多大な影響が出るに違いない。国家が財政破綻するのを防ぐには、何らかの形で人と資本とがジンベルに留まる方策を探さねばならない。

「共同体の本拠は、ハンジャーカインに置こうと思ってる。平原の真ん中に近いし、ノア川沿い。政治的にも穏健で中立だし、国王もまともな人物だ」

瞬が説明を続けた。

「あまり先走るなよ。根回しは構わないが。俺たちの立場は、まだ脆弱なんだ。派手に動いて敵でも作ったら、目も当てられん」

拓海が、控えめに忠告する。

「わかってる。これはあくまで僕の構想だよ。優先すべきは人間界縮退対策だ。しかし、双方の思惑違いがあったとはいえ、今回の戦争は高原が行った人間界縮退対策の一環だったことは留意すべきだと思う」

「……ってことは、今後人間界縮退対策を推し進めていった場合、戦争になる可能性もあると見ているのか？」

生馬が、訊く。

「準備はしておいた方が、いいかもしれない。共同体創設や、常備軍設立は、その役に立つはずだ。もちろん、平和的に事が進めば、それに越したことはないが」

瞬が、肩をすくめた。

「この話はこれで終わりにしましょう。せつかく五人揃ったんだから、味見してもらいたいものがあるの」

ぼんぼんと手を叩いて皆の注目を集めた凜が、立ち上がって仕事部屋を出て行った。しばらくして戻ってきた彼女の手には、小さな木桶があった。水が張られており、中に銅製らしい壺が入っている。「なに、これ？」

夏希は疑わしげに桶の中を覗き込んだ。

「お酒。というより、日本酒ね。ジージャカイの職人に作らせてみたの。なるべく日本酒の技法を模倣させてね。その試作品が、届いたの」

「おいおい。日本酒は難しいんだぞ。ここの連中に作れるのか？」

洪面の生馬が、言う。

「技術力は結構高いのよ。専門の麹職人もいるし。品質管理と温度管理さえ学べれば、そうとう高度なものができるはずだわ。とにかく、飲んでみましょうよ。夏希、悪いけどグラスを頼むわ」

「了解」

夏希は戸棚から人数分のグラスを出した。壺の木栓を抜いた凜が、中身をグラスに注ぎ入れる。

「ずいぶん黄色いな」

グラスを取り上げた拓海が、それを窓外からの光にかざしながら言う。

「濾過してないうえに火入れしていない生酒だからね。本来のサケは、こういう色合いなの」

夏希や瞬のグラスに酒を注ぎながら、凜が説明する。

夏希はグラスを持ち上げて匂いを嗅いでみた。……一応、それっ

ばい風味はあるようだ。

「ついでだから、乾杯しましょうか。音頭は……やっぱり先輩に譲るべきね」

グラスを持ち上げた凜が、夏希を指名する。

「音頭ねえ。何について乾杯しようか？」

「ここはやはり、イブリス王女と生馬の未永い……」

「却下だ」

拓海のボケを、生馬が即座に拒否する。

「ここは素直に、僕たちの友情あたりでいいんじゃないか？」

瞬が、にやにやしながらそう提案する。

「そうね。それがいいわ」

凜が賛成した。生馬と拓海からも、異論は出ない。

「じゃあ、五人の異世界人の友情に。乾杯」

夏希は自分のグラスからひと口飲んだ。もともと未成年ということもあり、お酒など飲んだことはなかった夏希だったが、こちらへ来てからは事あるごとに飲酒の機会があるので、様々な種類のアルコールを嗜んでおり、それなりに酒の良し悪しがわかるようになっていた。このお酒はなかなかの味であった。ちよつと強いが、香りも悪くない。

「少し荒いな。コシもないし」

半分ほどを空けた生馬が、顔をしかめて言う。凜が、肩をすくめた。

「試作品だからね。……ってなんでそんなに詳しいの？」

「ここだけの話、日本酒は曾爺様に結構つき合わされたからな」

生馬が言って、豪快に笑った。

「ともかく、平原の民と高原の民が仲良くなれてよかったのです」

「欲望の塊である人間が合い争うことは仕方ないとはいえ、やはり

平和が一番なのです！」

ステッキをぶんぶんと振りながら、ユニヘックヒューマがコーカ  
ラットの言葉に同意した。

二匹の魔物は、ジンベル市街地の上空三十メートルほどのところ  
をふわふわと漂っていた。いや、より正確に言えば、漂っているの  
はコーカラットのみで、ユニヘックヒューマはその触手の一本に片  
手でぶら下がっているだけだ。……おそらく、異世界人たちが見え  
ば『メリー・ポピンズ』を連想したに違いない情景である。

ちなみに、ユニヘックヒューマは空を飛ぶことはできない。魔物  
には空を飛べるタイプと飛べないタイプがあり、彼女は後者なのだ。  
飛べるタイプは魔物全体の三割程度であり、いわゆる『人型』に近  
い魔物は大多数が飛べないタイプである。

「やっぱり人間界は面白いのですう。魔界が広がって、人間界が  
なくなってしまうたりしたら、大変なのですう。」

「コーちゃんの言うとおりです！ 人間界ほど面白いところはない  
のです！」

ふたたびステッキを振り回しながら、ユニヘックヒューマがコー  
カラットに同意した。

実のところ、この二匹は魔物の中では変り種であった。退屈に弱  
かったのだ。

たいていの魔物は、実に忍耐強い。退屈にも耐え、長い時間をじ  
っと動かずに、思索だけで過ごすなどごく当たり前のことだ。

この二匹は違う。常に何か新しい刺激を求めるのだ。もともと、  
刺激といってもそれは魔物レベルの刺激であり、人間から見ればご  
く弱いものでも、彼女らにとっては実に興味深い強い刺激となる。  
なにしろ、魔界はただっ広いうえに雑草一本生えておらず、魔物の  
生息数も限られているのだ。刺激的な出来事どころか、感覚によっ  
て得られる情報量さえ、局限されている。

それに比べ、この人間界はなんと刺激に満ち溢れていることか。  
何千、何万という人間が、隙間なく繁茂する植物の中で、何十萬種

類もの動物や昆虫とともに暮らしている。こうして飛んでいる二匹の眼下にも、何百人もの人が働き、遊び、休み、そして眠っているのだ。立ち昇る炊事の煙。それを吹き散らす風。わずかに漂っている、稲穂の匂い。荷車に山と積まれている果実の、鮮やかな彩り。二匹を見上げて手を振っている子供たちの歓声。……こうしてのんびり漂っているだけで、処理しきれないほどの情報量が否応なしに飛び込んでくる。

エイラとサーイエナという二人の巫女にそれぞれ仕えている二匹だったが、強制的に仕えさせられているわけでも、何らかの契約を結んだわけでもない。使い魔を求める呼びかけ……召喚術の一種……を聞きつけ、自ら馳せ参じたのだ。ただひたすらに、『面白そうだから』という理由で使い魔をやっているに過ぎない。そしてこの二匹は、現状を大いに気に入る、そして楽しんでいた。

「特に異世界人の皆さんは面白いのです！ 普通の人間とは違うのです！」

「同意しますう。皆さん、変わり者なのですう。」

巫女に仕えているだけで、二匹は十二分に刺激を受けていたが、コーカラットは鉱山の中で夏希と出会って以来、ユニヘックヒューマはハンゼイ氏族の本拠地で夏希と拓海と出会って以来、さらに大いに刺激に晒されていた。

「そろそろサーイエナ様のご用事が終わる頃合なのです！ あたいは帰ります！」

ユニヘックヒューマが、ステッキを振った。

「このあと、サーイエナ様はどこへ行かれるのですかあ？」

「スロンとエボダに参るのです！ サージェナ様はお忙しい方なのです！」

「では、王宮までお送りしますですう。」

「それには及びません！ さらばです、コーちゃん！」

ユニヘックヒューマが、掴んでいたコーカラットの触手からぱつと手を離した。慎み深く、ステッキと手でスカートを押さえた状態

で、真つ直ぐに落下する。どしんという音とともに、あぜ道に小さく土ぼこりが巻き上がった。

「ユニちゃんは、やるのが派手なのですう〜」

もちろんユニヘックヒューマに怪我などない。元気にステッキを一振りしてコーカラットに別れを告げると、魔法少女型魔物は実り始めた稲に挟まれたあぜ道をとてとと駆け抜けていった。

「ではわたくしも、エイラ様のところへ戻るのですう〜」

コーカラットはくるりと半回転すると、エイラの自宅を目指しふわふわと飛び始めた。

## 45 共同体構想（後書き）

第四十五話をお届けします。本話で第一章完結です。次週からは第二章になります。今後ともよろしくお願いします。

## 46 ハンジャーカイ

平原と高原が完全に和解してから、二十日ばかりの時が流れた。

夏希は引越し準備を進めていた。『人間界縮退委員会』（通称委員会）の常設地が、ハンジャーカイに決まったからだ。委員長であるエイラも基本的にそこに常駐することになるので、委員長補佐たる夏希も同様にせねばならない。

「結構私物が溜まるものね」

シフォネとアンヌツカに荷物をまとめる作業を手伝ってもらいながら、夏希はぼやき気味に言った。家具や食器類などは、運搬が面倒なのでジンベルで売り払ったり、近所の人にあげたりするつもりだが、衣類や小物だけでも相当な量があった。

もちろん、この世界に引越し業者など存在しない。ほとんどの市民が、生まれた場所で生涯を過ごし、そして死を迎えるのが普通なのだ。商売で成功した人が郊外に邸宅を買ったり、小金を溜めた農民がより広い田畑を手に入れて引越したりすることはあるが、その場合もさして広くもない都市国家の中で移動するだけであり、臨時に荷車と多少の人手を雇えば済む。他の都市国家に移住することなど、きわめて珍しいことと言える。

ちなみに、移住にはシフォネとアンヌツカも本人たちの意向で付き合うことになっていた。シフォネはジンベル国籍のまま、アンヌツカもジンベル防衛隊に籍を置いたまま、委員会における夏希の公設助手という肩書きを得ての移住である。すでに夏希にとっては護衛兼秘書兼ガイド兼友人と化しているアンヌツカが、同行を望んでくれたのはありがたかつたし、侍女として夏希の『癖』を呑み込んでいるシフォネが、自ら同行を申し出てくれたのも、幸いであった。「とりあえずこんなところね。シフォネ、明日の朝まで暇を出すわ。ハンジャーカイに行ったら、そうそうジンベルに戻ってこれなくなりますからね。ご両親と過ごしていらっしゃい」

「お言葉ですが夏希様。引越しは明日ですよ。これからお掃除とかなければならないのでは？ それに、お忙しい夏希様のためにお食事とかもご用意しなければ……」

「掃除なんかはあとで凧が人を雇ってやってくれるわ。食事も凧のところまで世話になるし。大丈夫よ」

夏希は笑顔でそう言った。いささか不満げな表情のシフォネが、夏希とアンヌツカに丁寧な礼をしてから、部屋を出てゆく。

「アンヌツカ。あなたももういいわ。手伝ってくれてありがとう」

「では、失礼します。明日、船着場でお会いしましょう」

アンヌツカが出てゆくを見送った夏希は、殺風景になった部屋を見渡した。

「すっかり馴染んじゃったものね、ここに」

夏希は眼を閉じて、向こうの世界にあった自分の部屋を思い出そうとした。寒色系のインテリアで、女の子っぽいアイテムがわずかなメイク道具くらいしかなく、壁に雄大なカナディアン・ロッキーの自然を写したA0版のポスターがでかでかと張ってあるので、凧に『ぜえったいに住人は男の子だ』と揶揄されていた部屋を。

……だめだ。もう細部を思い出せない。

夏希は眼をあけた。窓辺に歩み寄り、すっかりおなじみになった風景を眺める。ジャングルに覆われた山々。眼に優しい黄緑色の田んぼ。高床式の家々と、すらりとした椰子の木。……カナディアン・ロッキーとは真逆の風景だ。

「ここに戻ってくるときは……たぶん向こうに帰るときよね」

人間界縮退対策が、数十日で終わることはまずありえない。この世界の通信の速度は、徒歩よりも若干速い、といった程度なのだ。タナシスに手紙一本送るだけで、二十日くらいかかるだろう。おそらく、あつという間に一年程度は仕事に費やしてしまうに違いない。この地の人々は気に入らず、彼らのために働くという現状も悪くはない。しかし、ここで生涯過ごす気は、いまのところ夏希にはなかった。

「さて、凜のところでティータイムにしましょうか」

夏希は窓の木戸を下ろすと、住み慣れた部屋をあとにした。

「雨季が始まりましたね」

鼻をつごめかしながら、アンヌツカが言った。

「……臭いでわかるの？」

「なんとなく、ですが」

夏希は鼻腔から大きく息を吸い込み、空気を味わってみた。……

いつもと変わらない臭いしかししない。強いて言えば、水っぽい臭いが混じっているが、これは船着場にいるせいだろう。

空を見上げてみる。普段より雲量は多めだが、真っ白な綿飴みたいなものばかりで、雨をもたらず雲には見えない。

船着場では、夏希が雇った船に、引越し荷物が積み込まれているところであった。荷車から下ろされた木箱や布包み、麻袋などが、次々と運び込まれる。シフォネの私物を詰めた小さな包みも、その中にはあった。

「ところで、あなたの荷物は？」

夏希はあたりを見回して、アンヌツカの引越し荷物を探した。

「これです」

やや自慢げに言ったアンヌツカが、腰に下げた大きな皮袋をぼんぼんと叩いた。

「それだけ？」

「軍人は身軽であれ、です。まあ、家自体はジンベルにあるわけですから、夏希様のように一切合財を持ってゆく必要もないですし。当面生活に必要なものは、すべて入っています」

「それにしても、少ないような……」

「別に野宿しに行くわけではありませんし。それに、ハンジャーカイはジンベルより大きな国です。必要なものは、買えばよろしいのです」

「まあ、そうだけど」

とりあえず納得した夏希は、見送りに来てくれた凜と生馬のもとに歩み寄った。ちなみに拓海は高原に出向いていて留守。瞬は例によって平原内をあちこち飛び回っているようだ。

「しばらく会えなくなると思うけど、元気でね」

「お前さんこそ、色々気をつけるよ。よその土地だからな。気候なんかも、変わるだろうし」

心配げに、生馬が忠告してくれる。

「ハンジャーカイはジンベルよりも若干涼しいそうよ。北にあるし」「瞬の企てがうまく行けば、あたしも近いうちにハンジャーカイに引越すことになりそうだけどね」

凜が言った。

「そうね」

平原諸国を政治的、経済的にまとめ上げる共同体構想。その実現のために、瞬は尽力しているのだ。彼の想定では、その本拠も平原の中心にあるハンジャーカイに置かれることになっている。将来構想が実れば、凜は経済部門で重要な地位を任されるはずである。当然、移住することになるだろう。

「失礼いたします、皆様」

礼儀正しくやや離れた位置から声を掛けてきたシフォネが、夏希が注意を向けるのを待ってから数歩近づき、一礼する。

「荷物の積み込みが終了しました。いつでも出発できます、夏希様」「ありがとう。……じゃ、行くわ。見送り、ありがとうね」

夏希は小さく手を振ると、川船に向かった。先に乗り込んでいたアンヌツカが、夏希が乗り込むのに手を貸す。最後にシフォネが乗り込んだ。夏希の合図を受けて、アンヌツカが船を出すように船頭に伝える。

船頭が、竹竿で岸壁を突く。川船はゆるゆるとジンベル川を下り始めた。

「そろそろ来そうですね」

アンヌツカが、西の稜線を指差す。

濃い緑色の山々を前景に、深く鮮やかな青空を背景にして、真っ白な雲がむくむくと立ち昇ってゆく。夏場の日本でもたびたび見られる入道雲にそっくりだ。

船頭が、川船を岸に寄せた。手近の木の幹に綱を結びつけて流されないようにしてから、日除けの屋根の周囲に防水布を張り巡らし始める。アンヌツカとシフォネが、すかさず手伝い始めた。夏希も手伝おうと腰を上げたが、アンヌツカに押しとどめられてしまう。

防水布は、目の詰まった麻布に海岸諸国からの輸入品の亜麻仁油を塗って乾かし、耐水性を持たせたもので、平原では広く使われている。雨対策が終わり、アンヌツカとシフォネが戻ってきて座る。

薄暗くなつた船の中で、夏希は船頭が船を出すのを待ったが、一向に動き出す気配がない。夏希は後ろを振り返った。船頭は、荷物の山の脇に座り込んで、のんびりと何かを食べていた。

「休憩？」

「雨のあいだ、船を動かすのは危険ですから」

夏希の戸惑いに気付いたアンヌツカが、小声で説明した。

「危険？」

「ほら、始めましたよ」

ぱらぱらと、雨粒が日除けを叩く音が始まった。次第にその音が重なり合うようになり、やがて轟音となった。

「ご覧下さい！」

アンヌツカが、激しい雨音に負けぬように大声を出しつつ、防水布をちよつとめくつた。

外は、激しい雨であった。いや、激しいという言葉では形容不足だろう。白いのだ。雨粒の量が多すぎて、まるで滝か何かを眺めているようにしか見えない。視程は、一メートルもない。

たしかにこの雨の中、川船を動かすのは無謀である。岸に乗り上げるならまだしも、岩にぶつかつたり、反航してくる船と衝突した

りすれば、死人が出かねない。

「しかし……凄まじい降り方ね」

夏希はつぶやいた。ジンベルに来てから、豪雨は何度も体験し、そのたびに『さすがは亜熱帯。日本じゃ台風が来たってこんな雨は降らないわ』と呆れていたのだが、この雨はそれをさらに上回る降り方である。時間雨量にしたら、百ミリどころの話ではないだろう。

しばらく待つうちに、急に轟音が消えた。雨音がまばらとなり、やがてそれも聞こえなくなる。雲が切れたのか、船内が明るくなった。

アンヌツカが、防水布を一枚だけ巻き上げた。復活した強い日差しが、ミルクコーヒー色に濁った川面を照らしている。

「他のは巻き上げないの？」

「もう少し乾かしてから巻きます」

夏希の疑問に、アンヌツカが答える。

船頭が、木に縛り付けてあった縄を解いた。川船は再び、水量を増したジンベル川を下り始めた。

ノノア川との合流点に達した船が、さらに下流を目指す。

「イフアラ族に誘拐された時は、ここから遡ったんだよね」

見覚えのある地形を眺めながら、夏希は目を細めた。

「あの時は申し訳ありませんでした。一生の不覚です」

悔しさを思い出したのか、アンヌツカが苦い声で言う。

「あれはあなたの責任じゃないわ。わたしと凜の不注意よ。それに結果的にはあれがきっかけで停戦に至ったんだから。気に病まずに忘れてちょうだい」

夏希はそう言って、アンヌツカの肩に手を置いた。いつか、拉致が偽装であったことを彼女にも話してあげたいが、今はまだその時ではないだろう。

ここまで来ると、すれ違う他の船の姿を結構見かけるようになって

た。みな一応に、日除け屋根に防水布を取り付けた雨対策仕様である。夏希らに乗せた船は、さらに三回激しい雨に晒されたのちに、無事目的地であるハンジャーカイに到着した。

船着場の役人に、ハンジャーカイ外交当局の添え書きのある人間界縮退対策委員会発行の文書を見せて入国手続きを済ませた夏希らは、瞬からもらった手書きのハンジャーカイ市街図を頼りに委員会本部へと向かった。

ハンジャーカイは、ジンベルよりひとまわり大きな都市であった。主要な輸出産業は、麻以外の繊維製品と紙、インクや染料などの初歩的な化学産業、それに植物性の各種薬品である。街中にも、妙な臭いを撒き散らしながら、怪しげな液体や粉末を商う店が目についた。夏希らはそれらを横目に眺めながら、中心部からは少しばかり離れたところに立つ委員会本部にたどり着いた。隣接するごく普通の民家を数軒まとめて借り上げただけらしく、改装工事が行われているのか路地裏には材木が山と積まれ、その前で数名の男性が鋸や鑿のみを使って作業している。

「いらっしやいませですう〜」

出迎えてくれたのは、一足先にエイラとともに引越しを済ませていたコーカラットだった。

「エイラは？」

「エイラ様はサーイエナ様とハンジャーカイの王宮にお出かけなのですう〜。皆様のお世話はわたくしがさせていただきますう〜」

「そう。お願いね。とりあえず引越し荷物を運ばなきゃならないけど……」

夏希は窓外を見やった。すでに夕闇が迫りつつある。

「手配はできておりますですう〜」

コーカラットが、外へと三人を誘う。近所にある商家にふわふわと飛んでいったコーカラットは、その使用人らしい男性に声を掛けた。心得顔の男性が奥へ引っ込み、二人の若者を連れて戻ってくる。若者たちはすぐに裏から荷車を引っ張ってきた。二輪式の、時

代劇などでよく見かける大八車にそっくりなものだ。

「彼らに運んでもらいますう。お金はもう払ってありますし、宿舍の位置もお教えしてあるのですう。ご提案させていただきますが、時間を節約するために、荷物運搬組と宿舍準備組に分かれるのが良いと思うのですう。」

「そうね。……アンヌツカ、悪いけどこの人たちと一緒に引越し荷物を回収してきてくれる？」

夏希はそう頼んだ。初めての都市で、あまり世慣れていないシフォネを使いに出すのはいささか心もとない。

「承知しました。シフォネ、夏希様を頼んだわよ。」

「心得ております、アンヌツカ様。」

にこりと笑ったシフォネが、軽く目礼する。

「では、わたくしたちは先に宿舍にまいりますう。」

宿舍に着いたときには、日はとっぷりと暮れていた。

「ここが夏希様のお住まいになりますう。しばらくお待ち下さい。明かりを灯してまいりますう。」

コーカラットが、戸口を越えてふわふわと中に入ってゆく。夏希は月明かりの下で周囲を見渡した。同じような造りの小さな建物が、十数軒固まるようにして立ち並んでいる。かなり郊外で、周囲は畑と田んぼばかりだ。おそらく、畑か何かを潰して建てたのだろう。

「お待たせしましたあ。」

コーカラットが、何本もの触手にそれぞれ灯明を持って現れた。

取っ手のついた素焼きの壺で、洒落た喫茶店などで見かける蓋付きのミルク差しに似ており、注ぎ口にあたる部分から植物繊維を織り上げた灯芯が突き出ている、そこにオレンジ色の炎が灯っている。

コーカラットがそれを夏希とシフォネにひとつずつ渡し、先に立て……いや、飛んで宿舍の中を案内する。

「部屋数は多いけど、広くはないわね。」

ざっと見回った夏希はそう感想を述べた。台所を含め、部屋数は

五つ。シフォネはもちろん、たつての希望でアンヌツカも同居することになっているから、結構手狭かもしれない。

「この部屋は食堂兼居間にしましょう。悪いけどシフォネ、その隣の部屋を使ってくれる?」

「お言葉ですが夏希様。この部屋はわたしには広すぎます。一番狭い部屋を使わせていただきます」

毅然とした態度で、シフォネが断る。

「だから悪いけど、と付け加えたのよ。物置にできる部屋がないから、とりあえず広いその部屋を使おうと思うの。仕切りかなにかを調達して、あなたはその部屋で寝起きしてちょうだい。狭い部屋はアンヌツカに。わたしは仕事部屋兼用だから、残った中くらいの部屋を使わせてもらおうわ」

「そうでしたか。失礼しました。わたしはまったく構いません。…ではさつそく、お掃除など始めます」

「その前に、食事にしましょう。おなか空いたわ。ねえコーちゃん、どこかでご飯食べられない?」

「それでしたら、エイラ様の宿舎へどうぞお〜。お隣ですう〜」  
「コーカラットが、言う。」

夏希らは灯明をすべて消してから、宿舎の外に出た。もちろん火災対策のためである。光る球体が一般的であったジンベルには、なかった習慣だ。ただし、マッチのような簡便な火熾しの道具はないから、台所に置かれた小さな壺の中の灰に、種火として熾した炭を埋め込んでおいた。こうしておけば、一日くらいならば火が消えることはないし、炭が燃え尽きることもない。

エイラの家で出迎えてくれたのは、居候時代にも世話になった侍女のキャレイであった。シフォネの手も借りて、てきぱきと食事の支度を整えてくれる。それをありがたくいただいているうちに、夏希の宿舎の方が騒がしくなった。引越し荷物が届いたのだろう。夏希とシフォネはそそくさと食事を終えると、宿舎へと戻った。

荷下ろしは、コーカラットが手伝ってくれたおかげできわめて短

時間に終わった。夏希はアンヌツカに食事を摂るように指示すると、シフォネと荷解きを開始した。とりあえず寝具と着替えだけでも準備しないと、眠ることさえできない。

「夏希様」

しばらくして、食事から戻ってきたアンヌツカが告げた。

「エイラ様にご帰宅なさいました。サーイエナ様も一緒です。ご相談があるので、いらしてください、と言付かりました」

「そう。じゃ、行かないとまずいわね。二人とも、荷解きはほどほどにして、休んでいいわ。今日は疲れたでしょ。あ、シフォネ。水浴びの支度だけは、整えておいてね」

「承知しました、夏希様」

宿舎を出た夏希は、隣戸へと向かった。キャレイに案内され、一室へと入る。

「お久しぶりですね、夏希殿」

相変わらずの蒼い衣装を纏ったサーイエナが、笑顔で出迎えてくれた。もちろん、白い衣装のエイラも一緒だ。

キャレイが、夏希の分のグラスをテーブルに置く。夏希が座るとすかさずエイラが銅製の水差しの中身を注いでくれた。水で薄めたトマトジュースのような色合いだが、二人の赤らんだ顔から察するに、お酒なのだろう。

「で、相談って、なんですか？」

とりあえず儀礼的に飲み物に口をつけた夏希は、そう訊いた。

「ワイコウに送った親書の返事が届いたので」

サーイエナが、懐から降り畳んだ書状を取り出し、テーブルの上で広げた。もちろん、夏希には読めない文字が並んでいる。ちなみに、平原と海岸諸国の言語は、多少訛りは違うものの同一であり、文字も共通のものを使用している。

「内容は？」

「魔術使用抑制の要請を、拒否することです」

「あらら」

「なぜでしょうか。疑うだけならまだ理解できますが、高原への巫女と外交使節の招待まで蹴るとは」

ため息混じりに、エイラが言う。

「それは仕方ないんじゃないの。ヴァオテイ国王だって、サーイエナ殿の親書を信じてくれなかつたくらいだし」

「それは比較になりませんわ」

サーイエナが、やや厳しい口調で指摘する。

「当時高原諸族とジンベル王国の交流は絶無でしたから。今回は、対策群と委員会が連名で送った親書と同時に、族長会議からと、平原諸国元首が連署した親書も送ったのです。高原の民は、ワイコウ王国との交流はありませんが、平原の数力国はワイコウと通商関係もあります。まったく信用されないというのは、考えにくいですわ」

「まあ、いろいろと評判の良くない国ですからね」

端正な顔をわずかにゆがめたエイラが、口を挟む。

「その、評判が悪いという話はよく聞くけど……具体的にどこがどう問題のある国なの？」

「ワイコウは海岸諸国の一国ですが、その中で唯一海に面していない国です」

エイラが説明を始める。

「距離的にも他の海岸諸国とは離れていますし、海岸山地の南側にありますから、文化的にも他の海岸諸国とはいささか異なっています。むしろ、平原諸国に近い感じですね。その地理的な位置ゆえに、海岸諸国では得られない産物が多く、それら売ることによって栄えてきた国です。ワイコウが評判を落としたのは、カキ国王が即位してからのことです。南方へ領土を広げ始めたのです」

「南方っていうことは、平原地帯に攻め込んできたわけ？」

「いいえ。ワイコウと平原の北端は、二千数百シキツホほど離れています。そこは大部分が湿原地帯で、利用できるような土地がほとんどなく、どの国にも属さない人々がごくわずか住んでいるだけでした。海岸諸国と平原諸国の間には暗黙の了解があり、その中間地

帯は相互不可侵の土地であったのです。しかしカキ国王は、ワイコウの南方に入植地を築いたのです。これが、平原諸国のみならず、平原との紛争を懸念する海岸諸国も怒らせているのです」「なるほど」

「いまのところ、平原側に実害がありませんから、各国とも静観していますが、これ以上南下を続けるようだと、軍事的緊張状態が生まれかねません」

「かなり虚栄心の強い人物でもあるようですね」「辛辣な口調で、サーイエナが言った。

「その入植地に作った小都市に自分の名前をつけたくらいですから」「カキつて街を作ったの?」

「カキ・セド。『カキの手になる』という意味の名ですね」「……なんとという俗物」

夏希は絶句した。「それらに加え、他の海岸諸国との経済上の揉め事もあるようです」「エイラが続けた。

「海岸諸国が必要とする品目のいくつかは、ワイコウの独占供給物です。具体的な数値までは存じませんが、カキ国王が即位してから、それら輸出品の多くの価格が上昇したり、供給が制限されたりしているようです。特に、船材に関しては、かなり深刻なようです。海岸地帯で採れる材木は海水に弱く、丈夫で長持ちする船は作れないそうです。海岸諸国の貿易はほとんどが海船を使って行われているそうですし、西群島や東群島との行き来にも海船は必須ですから」「そうなんだ。……で、どう対処するの?」

「海岸諸国への使節派遣を、前倒ししようと思うのです」「サーイエナが、言った。

「予定では、高原からの参加者がハンジャーカイに集結してから出発するつもりでしたが、この分ではワイコウ王国を説得するのに時間が掛かると判断したのです。とりあえず、委員会代表とわたくし、それに、平原各国の参加者だけでワイコウに行くつもりです。夏希

殿も、引越ししたばかりで申し訳ないですが、一緒に来ていただきます」

「それはもちろんいいけど。で、いつ出るの？」

「明後日を予定しています」

「わかったわ。準備しとく」

「それと、凜殿に手紙を書いていただけますか。早急に、ハンジヤ

ーカイに来ていただく必要がありますから」

「そうね。あの子も連れて行かなきゃ。すぐに書くわ」

## 46 ハンジャーカイ（後書き）

第四十六話をお届けします。当話より第二章となります。

## 47 谷間の都市

何隻もの川船が、連なつてノノア川を下つてゆく。

平原各国の代表と随員が乗つたものが六隻。参加を希望した有力商人たちが乗つたものが二隻。委員会のメンバーが乗つたものが二隻、サーイエナを含む対策群代表が乗つたものが一隻。荷物専用船が一隻。護衛や世話役が乗つたものが二隻。合計十四隻の堂々たる船団である。

夏希はエイラとともに、人間界縮退対策委員会の船の一隻に乗り込んでいた。凜は一応ジンベル王国代表団の一員だが、道中は異世界人同士がいいとわがままを言つて、夏希と同じ船に乗っている。ちなみに今回の合同外交団メンバーに、アンヌツカは加わっていない。人数に制限があるので、夏希の役職では個人的な助手を連れてゆくわけには行かなかつたし、護衛の枠も平原各国が精鋭を提供したので、残念ながらアンヌツカが入る余地がなかつたのだ。

川船の列は、すでに平原最北端の国家であるマリ・八を超え、いわゆる湿原地帯に入っていた。地形的にはきわめて平らなので、流れはごくゆつくりとしており、川幅も広い。緩やかに屈曲している箇所も多く、河岸に溜まつた泥には葦のような植物が繁茂している。ノノア川は時折極端に左右に広がって、沼地と言つても構わないほどの面積を持つ開けた湿地を形成していた。

「確かに、こんなところじゃ都市は作れないわね」

夏希はあたりを眺め渡しながらそう言った。木々も少なく、あつても盆栽のごとく低くねじくれたようなものばかりだ。家を建てられる乾いた土地を探すのさえ苦勞するだろう。田んぼなら作れそうだが、少しでも川が増水すればすべて水に浸かりかねない。

「あとどれくらいで、ワイコウなの？」

船旅に退屈したのか、物憂げな調子で凜が聞く。

「平原の北端から直線距離で二千五百シキッホ……だいたい百五十

キロくらい下ったところから、三百シキツホほど南西方向へ支流を遡ったところにあるのがワイコウよ。今日は途中で泊まる予定だし、雨が降れば停止してやり過ぎさねばならないから、到着は早くても明日遅く。普通にいけば、明後日になるわね」

「……どうもこのあたりの地理が頭に入らないのよねえ」  
地理オンチの凜が、愚痴る。

「日本に置き換えて理解すると、覚え易いわよ。瞬に教えてもらっただけど、関東地方と東北地方に当てはめるの」  
「なに、それ」

「ノノア川は、ほぼ北から南へと流れているから、これを南北を逆にした東北新幹線か東北本線に見立てるの。こうすると、ノノア川河口のルルトが東京になるわ」

荷物から地図を引っ張り出した夏希は、その北が凜に向くようにして差し出した。

「ワイコウはノノア川から東へ……実際には西だけど……外れているから、茨城の下館あたりね。そこからずーっと遡って、福島郡山あたりが、平原の入口。ジンベルがあるのが、福島市の少し北。高原地帯が、宮城県ってとこね」

「……意外と狭かったのね。この世界って」

「新幹線で日帰りできちゃう日本と比べたら駄目よ。ここの住人の大半は、生まれた国の外へ出たことがないんだから」

夏希は笑った。

「じゃ、ラドームとかタナシスはどのあたりになるの？」

「地図や資料によってかなり差異があるけど、瞬の推定ではルルト・ラドーム間が六百キロくらい。ラドーム・タナシス間が四百キロくらい、となっているわ。ルルトが東京だとすると、ラドームが鳥島あたり、タナシスは小笠原諸島くらいらしいわよ」

「……距離がイメージできないんだけど」

「東京から西の方へ六百キロといったら岡山の倉敷あたり。さらに四百キロ行くと福岡のあたりまで。結構遠いね」

「じゃ、こつちの陸地とタナシスの間の海は日本海くらいかな？」  
「もう少し大きいよ。瞬によれば、九州の南端から台湾までが約千キロだって。ラドームを沖縄に見立てると、近いんじゃないかな」  
「……何となく、イメージがつかめたわ」  
地図を凝視しながら、凜が言う。

「この支流を遡ったところにあるのが、例のカキ・セドです」

行程二日目のお昼前、エイラが西岸を指差して言った。川幅二十メートルほどの流れが、茶色く濁った水をノノア川に注ぎ込んでいる。

「じゃあ、ここから北はワイコウの領域になるの？」

「そうですね。このあたりのノノア川沿いに住んでいた人々も、カキ国王の治世が始まってから強制的にワイコウ臣民に組み入れられたと聞きますし。もちろん、平原諸国はワイコウによる新たな領有宣言を認めていませんし、海岸諸国も同様に公的には認めていないそうですが」

夏希の問いに、エイラが丁寧に答えてくれる。

「このあたりまで来ると、湿地が少なくなるわね」

周囲を観察しつつ、夏希はそう言った。そこかしこに、濃緑色のこんもりとしたジャングルが点在しているし、ノノア川の屈曲も緩やかになっている。

しばらく川下りを続けると、今度は西岸に街道が見え出した。それまでも川沿いには一応道らしきものがたびたび見えていたが、今日にしているものはそれらとは段違いに立派なものだ。カキ・セドへの街道だろうか。

「そうですね。もともとあった道を改修したもののようですが」

夏希の推定を、エイラが肯定する。

それからさらに数分後、雨に襲われた船団は西岸に見えた小さな村の船着場とその近くで船をもやった。ちょうど昼飯時だったので、

そのまま昼食休憩に移る。

夏希らは昨晚の野营地で今朝炊いた米を食べた。おかず類も、平原から日持ちするものを持参している。雨があがると、商売の匂いを嗅ぎつけた村人が、売り物になりそうな農産物を抱えて船着場に集まり始めた。

食事を終えた夏希は、村人たちを興味深く観察した。人種的には平原の民よりも高原の民に近い人々のようだ。ただし髪はほとんどの人が黒か黒褐色で、高原の民のような金髪や赤毛は見当たらない。肌の色もやや浅黒く、地中海東部沿岸やアラブ系の人々に近い風貌だろうか。身長も、平原や高原の民に比べると、若干高めのようにだ。

夏希は果物の籠を抱えている少女から、洋梨もどき……この世界へ来て始めて食べた果物……を三つ買った。支払いはハンジャーカの通貨で済ませたが、少女はためらうことなく受け取ってくれた。ここを通る商人や旅人相手の商売で、他国の通貨には慣れていないのだろう。ついでに、ちよつとおしゃべりをしてみる。村の名は、オランジというらしい。生計はおもに米作りで立てているようだ。

おしゃべりを終えた夏希は、コーカラットに果物を渡して皮を剥いてもらった。それをエイラと凜と分け合って食べる。

「なかなか豊かな村みたいね」

食べ終えた夏希は、立ち上がって村を眺め始めた。河岸からちよつと引つ込んだ高台のようなところに、五十軒ばかりの高床式の家々が立ち並んでいる。その西側に街道が走り、さらにその西側には水田が広がっている。村の北側も水田らしく、そこには川の増水対策なのだろう、土手のような堤防が築かれていた。

「景色をご覧になりたいのですかあ」

コーカラットが、夏希にふわふわと寄ってきた。

「うん。でも、ここからじゃたいして見えないわね」

「失礼しますですう」

いきなり、コーカラットの触手が夏希の腰に巻きついた。

「浮かびますですう」

声とともに、夏希の身体が宙に浮く。

夏希は慌ててワンピースの裾を脚に巻きつけた。一応、下にショートパンツを穿いているが、それでも下から覗かれるのは恥ずかしい。

「こんなところで、いかがでしょうかあ」

コーカラットが上昇を止めた。ワンピースの裾の始末に専念していた夏希は、顔をあげた。

高度は、十数メートルくらいだろうか。眼下には、なかなか魅力的な風景が広がっていた。村の家々が立ち並ぶ北側に、きれいな黄緑色の水田が、南北に三百メートル、東西に百メートルくらいの大きさで広がっている。その北端あたりには、ホットケーキを思わせる円盤状の低い岩山がぼつんとあった。

水田の西側には、よく整備された街道が、北から南へと真っ直ぐに走っている。そして、水田と対を成すように、街道の西には葦類に周囲を縁取られた楕円形の大きな灰色の沼地があった。その更に西側は、濃密なジャングルがある。

沼地の南側にも、規模は小さいが水田の広がりが見られた。さらに南側には、畑が広がっている。川沿いながら、乾いた土地に恵まれているところのようだ。だからこそ、村が形成されたのだろう。「もういいわ。コーちゃん、下ろして」

「承知しましたあ」

すると、コーカラットが高度を落とし、夏希を船の中へと戻した。そこで始めて夏希は、自分が村人たちの注目の的になっていたことに気付いた。……魔物すら珍しいというのに、その触手に巻かれて一緒に宙に浮かんだ女性など、一生のうちに一度見るか見ないか、というくらい希少な見世物だろう。

気恥ずかしさを覚えた夏希は、こそこそと日除けの下に逃げ込んだ。

三日目の朝、ノノア川に別れを告げた船団は、ワイコウに通じる支流を遡り始めた。

もはや湿地帯の面影はなく、川の両岸は濃密なジャングルに覆われていた。遡るにつれ、徐々に勾配が増してくる。周囲に山も増え、やがてそれらが連なり始める。川岸に水田や畑を伴った集落の姿も、頻繁に目に付くようになった。

昼近くに、船団の前方に巨大な岩山が出現した。川は、その中から流れ出しているようだ。

夏希が見守るうちに、先頭の船が川が岩山に穿った狭い谷間に滑り込んでいった。二隻目、三隻目が続く。夏希の乗る船も、谷間に入り込んだ。岩山に日差しが遮られ、日除けの下がさらに薄暗くなる。

「どうやら、着いたようですな」

ぼそりと、エイラが言った。

「着いた？ ワイコウに？」

夏希は素っ頓狂な声をあげた。

「そうです。もうそろそろ、ワイコウが見え出すはずですよ」

そう言われた夏希は、日除けの下から首を突き出して前方を眺めた。ちょうど船は屈曲部を通過しているところであった。左岸には大きな岩があり、視界を遮っているが、右岸には平地があり、日当たりに恵まれていないながらも畑地が広がっている。

船が流れに沿って向きを変え、いきなり視界が開けた。

「ここが……ワイコウ？」

夏希は啞然として顎を落とした。

さして広くもない谷間に、整然たる都市が広がっていた。ほぼ中央を貫くように川が流れており、その左右にみっしりと建物が立ち並んでいる。都市の左右の広がりや谷間を形作っている岩山のふもとまで達しており、一番端の建物など岩肌そのものを壁に利用しているかのようだ。

「なんでわざわざこんな狭い谷間に街を造ったの？」

ジンベルも狭い盆地だったが、それよりもはるかに狭隘な谷間である。家々の数はどう見てもジンベルの数倍はあるだろう。とすると、当然住民も数倍はいるはずだ。

「もともと鉱山都市として発展してきた国ですから」

エイラが、説明を始めた。

「魔力の源が、この場所にあつたせいでもあるでしょうね。そういう意味では、ジンベルと同じような成り立ちかもしれませんね。それと、数百年前にはこの都市と周辺の住民とのあいだで長きに渡る戦争があつたそうです。谷間ならば、守り易いですからね。ある種の城塞都市でもあつたのでしょう」

「なるほど」

左右に聳える岩山を越えて軍勢を送り込むことはおそらく不可能だろう。谷間の出口さえしっかりと守れば、この都市は難攻不落の要塞と言える。

やがて前方に現れた船着場には、すでに数名のワイコウの役人が待ち構えていた。警護役なのか、長さ二メートルほどの槍のような武器を携えた二十名ほどの兵士も待機している。

「妙な槍ね」

夏希は船縁から身を乗り出すようにして、兵士が手にしている武器を眺めた。長槍の刃の部分から側方に枝のようなものが突き出している。刃が十手のような形状を為している長槍、と言えばわかり易いだろうか。

「戟げきの一種ね」

凜が、言う。

「劇？」

「昔の中国で流行った武器よ。横棒の部分で敵の武器の刃先を防いだり、直接相手に叩きつけたりすることもできるいわゆる多刃兵器の一種ね。形状からして、あまり洗練されていないレベルじゃないかしら」

「ふうん」

「注目すべきは戟じゃなくて、出迎えの模様ね。ぜんぜん慌てた様子が見えないわ。あたしたちが来るのをずっと待ち構えていたはずもないし。何らかの、早期警戒システムのようなものが普段から機能しているのでしょうか。すでにかなり前から、船団が川を遡ってくるのが知られていたに違いないわ」

凜にそう指摘され、夏希はおもわず岩山の上のほうを眺めた。あの辺りに監視所を設ければ、川の様子は何十キロも先まで見張ることが可能だろう。……どうやって、この険しい岩山の上まで登るのかは知らないが。

船着場で、船団は停止した。すべての船が着けるだけのスペースがないので、半数ほどのみが着岸し、あとは船溜りでの待機となる。表向き使節団団長となっているススロンの外務大臣、人間界縮退対策委員会委員長であるエイラ、対策群の長たるサーイエナなどのお偉方が、護衛を伴って下船し、ワイコウ役人の挨拶を受けた。そこで短い話し合いが行われ、使節団の面々がそれぞれの船に戻ってきた。ワイコウ役人の一人が、先導する船の一隻に乗り込む。

「とりあえず宿舎に案内するそうです。近くの船着場まで、船で行くとのことですね」

夏希の隣に戻ってきたエイラが、そう説明した。

ふたたび動き始めた船の中から、夏希は街の様子を興味深く眺めた。ジンベルと同様、街中を流れる川の両岸は、切石を使って丁寧に護岸工事が施されている。両岸に等間隔に植えられているのは、葉の形状からして柳の仲間だろうか。

この都市の建物は、馴染みの高床式住居ではなく、切石を積み上げた基礎の上に柱を立て、壁板を張るという造りだった。屋根は、平原地帯と同じような藁のような植物で葺いてある。大きな建物の中には、壁をすべて石造りにしたものも多かった。異国人ばかりが乗った船団を、興味津々で眺めている人々の服装は、平原の民と大差なかったが、原色を使った派手な色使いの服が多く目に付いた。街の様子からして、平原諸国よりも多少は生活水準が高いように思

える。

やがて船団は、河岸に設けられた掘り込みのような水路に入ってしまった。一分ほど進んだところで、その水路は人工的に作られたと思われる池につながっていた。周囲には青々とした木々や茂み、花壇などが配置されている。何らかの庭園か、公園らしい。

池の一角には、簡易な船着場のような施設があり、十四隻の船はすべてそこへ集められた。ここでも着岸のスペースが足りず、各船は船縁を寄せ合うようにして停船し、人々は船伝いに下船した。

待ち受けていた役人の案内で、一行はそろそろと庭園を突っ切り、その先に見えている宿舎に向かった。切石の土台と板壁という典型的なワイコウ式の建物だったが、かなり広く、窓枠に透かし彫りが入っていたり、床板の上に柔らかな敷物が敷かれていたり、かなり豪華な印象だ。

「あれ、涼しいよ」

建物の中に入るなり、凜が頓狂な声をあげた。

夏希もすぐに気付いた。……冷却の魔術が掛かっている。

「……嫌味でしょうか」

エイラが、唇を噛んだ。

「おもてなしの心、と受け取っておきましょう。今のところは、ね」  
少しばかり凄みのある笑みを浮かべたサーイエナが、言った。

47 谷間の都市（後書き）

第四十七話をお届けします。

## 48 ワイコウの賢者

「……暇ねえ」

「暇なのであります！」

「たしかに、暇ですなえ〜」

一人と二匹は、暇を持て余していた。

合同使節団がワイコウに到着してから、三日目の朝である。

ワイコウ側の対応は、丁寧ではあったが冷ややかなものであった。宿舎は豪華そのものだし、出される食事は夏希が普段ジンベルで食べているものとは比べ物にならぬほど贅沢なものだ。代表や随員はもちろん、世話役や護衛の兵士にすら、専属の侍女が最低一人は宛がわれている。飲み物は酒を含め飲み放題だし、甘味や果物などもふんだんに用意されていた。

これら手厚いもてなしの反面、使節団メンバー個人の行動は極端に制限されていた。警備の為と称し、ワイコウ側との協議時以外外出は禁じられており、ちょっとした買い物や外食はもちろん、市街見物すらさせてもらえない。散歩も宿舎敷地と、隣接している庭園内しか許されておらず、一般市民との交流など望むべくも無い。

今日も朝早くから凜を含む各国代表団と、サーイエナ、エイラら人間界縮退問題担当者はワイコウ側との協議のため出掛けていたが、委員長補佐に過ぎない夏希と、使い魔であるコーカラットとユニヘツクヒューマは留守番であった。世話役の者たちは仕事が無いことを喜んで、干した果物などつまみながらカードゲームなどで暇を潰しているようだが、もともと好奇心の強い夏希と、魔物にしては退屈に弱い二匹は、なんらかの刺激を求めて、宛がわれた部屋で悶々としていた。

「ワイコウは閉鎖的よねえ。まるで共産主義国家みたい」

「共産主義とはなんなのですかあ〜」

触手をくねくねさせながら、コーカラットが訊く。

「そうねえ。教科書的に答えれば、財産や生産手段の私有を否定し、社会の共有とすることを目的とする主義、かな」

「その主義を採用した国家が、共産主義国家なのでありますか？」  
「いや眉根を寄せながら、ユニヘックヒューマが尋ねた。」

「そうね」

「そのような国が、どうして閉鎖的になるのでありますか？」

「色々理由があるのよ。でも最大の理由は、国民に情報を与えない為ね。為政者に都合のいい情報だけ与えていけば、国民のコントロールが容易だから。ま、これは共産主義国に限ったことじゃないけど。未熟な共産主義国家は官僚制が肥大化したうえに少数の個人に権力が集中しちゃうから、そうなりやすいんだけど」

「情報は広く共有されるべきなのです！ 各個人の情報格差は、誤解と反社会的な行動様式をもたらすだけなのです！ 閉鎖的な風土ということとは、ワイコウは色々と裏で後ろめたいことをやっているに違いないのです！」

「そう決め付けたユニヘックヒューマが、ぶんぶんとステッキを振り回す。」

「ユニちゃんは結論を先走り過ぎていると思いますぅ〜」

「いずれにしても、友好的とは言えないわよね」

夏希はそう言いつつ窓外を眺めた。低木に蔓植物を絡めた生垣の向こうに、高い板塀が設けられているので、街の様子をうかがうことはできない。その生垣の前を、腰に長剣を吊った二人の兵士がゆつくりと通り過ぎる。一応、警備の者ではあるが、その主たる任務が不審者の侵入を防ぐことではなく、ゲストが外へ出ないように見張ることにあるのは、明白であった。

「じつとしていると気が滅入るわね。散歩でもしましょうか」

夏希は勢いよく立ち上がった。出される食事が豪華かつ物珍しいものが多いので、このところいささか食べ過ぎている。太り易い体質ではなかったが、多少は運動の必要があるだろう。

「お供しますですぅ〜」

「あたいも行きます！」

二匹の魔物を引き連れて、夏希は宿舎に隣接する庭園に出た。散策ができるように、低木や花壇のあいだに縦横に小道が走っている。夏希はそこをでたらめに辿り始めた。ユニヘックヒューマが、そのあとをとことこと続く。コーカラットは、相変わらずふわふわと浮いたままついてきた。

地面は先ほど降った雨のせいですっきりと濡れていたが、小道には滑らかな黒っぽい小石が敷き詰められていたので、いたって歩き易かった。日差しを浴びて、花壇の柔らかい土からは、うっすらと白く蒸気が立ち昇っている。空気もじつとりと湿気を含んでいたが、ジンベルやハンジャーカイより気温は低めなので、それほど暑くはない。花壇に植えられている草花は見慣れないものが多かったが、咲いている花の半分以上が白い花弁を有していた。それがこの地方の花の特徴なのか、それとも庭園の管理者の趣味なのだろうか。

「待つのであります！」

十分ほど歩んだところで、急にユニヘックヒューマが叫び、夏希の前に立った。ステッキを前方に突き出し、威嚇のポーズを取る。

「どうしたの、ユニちゃん？」

足を止めた夏希は、ユニヘックヒューマの青緑色の後頭部を見下ろしてそう問うた。

「茂みの中に、誰か隠れているのですう。あやしいのですう。」  
すつと前に出たコーカラットが、説明する。

「不審者？」

夏希は身構えた。一応、外交使節団の一員である。可能性は低いが、誘拐や暗殺の対象になっていてもおかしくはない。

「出てくるのであります！」

ユニヘックヒューマが強い調子で脅す。

「あ、出ます出ます。乱暴はやめてください……。」

茂みが割れ、ひょいと男の顔が現れた。浅黒い肌に黒褐色のウェーブした髪、という典型的な海岸諸国人だ。年齢は……：中年の初め、

といったところか。眼つきは温和で、少なくとも暗殺者には見えな  
い。

コーカラットの触手がにゅっと伸び、茂みを掻き分けて出てきた  
男の身体を素早くまさぐった。着ているものは、髪と同じような黒  
褐色に染めてあるワンピースだ。腰には、同色の飾り帯を締めてい  
る。

「怪しい物は持っていないませんねえ」

身体検査を終えたコーカラットが、触手を引っ込める。

「そんなところで何をしていたのでありますか！」

ユニヘックヒューマが、手にしたステッキを威嚇的に振り回しな  
がら、詰問する。

「大声を出さないでください、魔物殿。警備の兵士に見つかったら、  
牢屋にぶち込まれてしまいますよ」

男が、おろおろと手を振りつつ言う。

「やっぱり、いけないことを企んでいたのではありませんね？」

「いえいえ。平原や高原の方に、会いたかったですよ」

相変わらずおどした態度だが、意外にきっぱりとした口調で、  
男が言う。

とりあえず、危険は無いようだと言ったと夏希は判断した。もし仮にこの  
男が偽装した暗殺者だったとしても、魔物二匹の前では無力だろう。

「とりあえず、身分を明らかにして欲しいわね」

夏希はそう要求した。

「失礼しました。わたくし、ワイコウ市民のキュイランス、と申し  
ます。賢者です」

丁寧に言った男……キュイランスが、ペコりと頭を下げた。

「あなた様は、異世界からいらした方とお見受けしますが……」

キュイランスが、夏希を見上げた。身長は十五センチばかり、夏  
希のほうが高い。とすると、ワイコウ人男性としては、やや小柄だ  
ろうか。

「……見た目でわかるの？」

「お噂はかねがね。顔立ちは平原の民のようだが、肌は白く、美しい。背が高く、髪は漆黒で長く、戦では竹竿を振り回し敵をなぎ倒す。ジンベルの竹竿の君、夏希様ではありませんか？」

「……そうだけど」

渋々と、夏希は認めた。このありがたくない二つ名が、こんな遠い国の市民にまで知れ渡っていたとは。

「お目にかかれて光栄です、夏希様」

再び、キュイランスが一礼する。顔をあげた中年男の視線が、なぜか夏希のおでこの辺りに集中していることに、彼女は気付いた。

「……わたしのおでこに、何か付いてる？」

「いえいえ。滅相ありません」

慌てた様子で、キュイランスが両手を振って否定する。夏希は不快感を覚えたものの、とりあえずそのことは放っておいて、浮かんだ疑問を口にした。

「しかし……よくここに潜り込めたわね。警備の兵士がいたでしょうに」

「雨のあいだに潜り込んだのです。兵士は建物の中に引っ込んでしましますし、雨で姿も消せますから」

こともなげに、キュイランスが言う。そこで初めて、夏希は彼の衣服の色を見誤っていたことに気付いた。びしょ濡れなので、黒褐色に見えるだけなのだ。実際は、もっと明るい色なのに違いない。

「ともかく、わたしたちもワイコウの一般市民との接触は制限されているの。あなたも、兵士に捕まりたくはないでしょう。お帰りなさいな」

夏希はそう勧めた。どうやら悪い人物ではないらしいので、兵士に捕まってしまうては気の毒だ。それに、一般市民と接触しているところをワイコウ側に知られたら、夏希が直接咎められることはないにせよ、エイラやサーイエナに迷惑がかかるかもしれない。

「せっかく異世界からのお客人にお会いできたのに、なにも知識を増やさぬまま帰ってしまったては、賢者としての沽券こけんに関わりません。

ひとつだけ、質問させていただいてよろしいでしょうか？」

丁寧な口調で、キュイランスが訊く。

「どうぞ」

夏希は許可を与えた。ひとつだけ、ならば問題あるまい。

「噂になっている人間界の縮退ですが……真実なのですか？」

真剣な表情で、キュイランスが問う。

「本当よ。このまま手を拱いていたら、二百年以内にワイコウも魔界に飲み込まれるでしょうね」

「夏希様のお言葉を疑うわけではありませんが……かわいい魔物殿、ワイコウは二百年以内に魔界に飲み込まれてしまうのですか？」

夏希を守るようにその前に立ちはだかっているユニヘックヒューマに視線を転じ、キュイランスが訊く。

「何年後かは定かではありませんが、確実に飲み込まれるのであります！」

ステツキを振りつつ、ユニヘックヒューマが肯定する。

「宙を舞うかわいい魔物殿も、同じご意見でしょうか？」

ユニヘックヒューマの返答に深くうなずいたキュイランスが、今度はコーカラットを見上げる。

「ユニちゃんに同意なのですう。放置しておけば、ワイコウどころか海岸諸国すべてもが魔界に飲み込まれることになりかねないのですう」

「それだけお聞きすれば十分です。夏希様、かわいい魔物のお二方ありがとうございます」

ぺこりと一礼したキュイランスが、がさごそと音を立てながら茂みの中に消えた。

「人間も魔物も、賢者には変わり者が多いのですう」

コーカラットが、感想を述べる。

「しかし……どこかで見えたことがあるような男だったわね」

つぶやくように、夏希は言った。高原で出合った誰かに、似ているのだろうか。

「わたくしは、拓海様に似ていらつしやると思いましたあゝ」  
触手を嬉しげにくねくねさせながら、コーカラットが言う。

「そうか、拓海ね」

夏希は納得してうなずいた。態度はともかく、体型や顔つきがなんとなく拓海を思わせたのだらう。

「夏希様、また雲が出てきたのであります！ 雨に降られぬうちに、屋根の下へ戻りましょう！」

ユニヘックヒューマが、ステッキで空を指した。もう何度も目にした、豪雨の先駆けとなる白い雲が、むくむくと湧き出しつつある。「そうね。戻りましょう」

キユイランスが消えた茂みを一度見やっってから、夏希はきびすを返した。

「明日、ワイコウを発つことになりました」

協議から戻ってきたエイラが、夏希の顔を見るなり開口一番そう告げた。

「じゃ、進展があったのね」

「いいえ。進展がないから、とりあえず諦めて発つことにしたのです。ワイコウへの説得は続けますが、先に海岸へ赴き、タナシス相手の工作を進めます」

「酷い話ね。こちらの説得に耳を貸さないなんて」

「……それが、一応人間界縮退については信じてくれたのです」

「覇気のない表情で、サーイエナが説明を引き取った。」

「じゃ、進展があったんじゃないの？」

「あつたと言えはあつたわけですが、余計に状況が悪化した、とも言えますわね」

サーイエナが、続ける。

「人間界縮退の脅威については認識してくれた。しかしながら、現状でワイコウを脅かすものではない以上、縮退対策に積極的に協力

することは難しい、というのが最終的なワイコウ側の回答なのです」「なにそれ。高原の民がどうなるかとワイコウは知ったことではありません、ってこと?」

憤然として、夏希は問うた。

「有体に言えばそうでしょうね。以前のジンベルほどではありませんが、ワイコウも広範に魔術を利用しています。他国に頼まれたからと言って、簡単に魔術の使用をやめることはできないでしょう。ため息混じりに、エイラが言う。

「代償は提示したんでしょ?」

すでに、委員会と対策群は、ワイコウから魔力の源をいわば『買い取る』ために、平原諸国と高原諸族から金銭や資源などの供出を受け始めている。お金や各種鉱物、農産物、加工品、さらには労働力の提供まで、ワイコウが望むならばかなりのものを与えることになっっているはずだ。

「それも、蹴られました。というよりも、折り合いがつかなかったのです」

サーイエナが、肩をすくめる。

「どうしようというのかしら、ワイコウは。このまま放置してれば、いずれはここも魔界に飲み込まれるというのに」

夏希は首を振った。たしかに、二百年後と言えば、寿命が短いこの世界の人々にとっては遠い未来でしかないだろう。しかし、いずれは破局が訪れるのだ。目先の利益だけを優先し、将来の脅威に眼を瞑るとするのは、愚かな選択ではないはず。

「いずれにしても、ワイコウは非協力的です。他の海岸諸国に働きかけて、ワイコウを説得してもらおうのも手だと思います」

エイラが、言う。

「他の海岸諸国は、ワイコウよりも聞き分けがいいかしら?」

「とりあえず、わたくしたちに協力しても失うものはありませんからね。さほど労せず数百年後の破局を避けることができるのであれば、手を貸してくれるのではありませんか?」

そう言ったサーイエナが、夏希の目を覗き込んだ。

「……そうであることを期待しましょう」

自信なさげなうなずきで、夏希は応じた。

「交渉決裂だというのに、ずいぶんどこ機嫌ね」

鼻歌交じりに荷物をまとめている凧を見ながら、夏希は嫌味な口調で言った。

「委員会や対策群は収穫なしだけど、将来平原経済の面倒を見なきゃならない立場から言わせてもらうと、大収穫だったもの」

服を丁寧に折り畳みながら、凧が言う。

「大収穫？」

「ワイコウの商人と接触して、海岸諸国の消費動向や輸出入品目を調べ上げたの。その結果、椰子油、錫、麻、数種の香辛料、一部の材木などは、有望な商品だとわかったわ。人件費は海岸諸国の方が高いから、木工品や焼き物、加工食品なんかも競争力が高いわね。

海岸諸国はいずれも人口が多いし、本格的に貿易が始まったら、かなりの儲けが転がり込むはずよ」

「へえ。それは凄いわね」

「ま、ワイコウの反発は買うでしょうけどね」

手を止めた凧が、にやにや笑いを浮かべながら夏希を見た。

「反発？」

「椰子油や麻、錫鉱石、それに丈夫で軽い材木なんかは、ワイコウの特産物でもあるのよ。他の海岸諸国への供給を独占して儲けていたのが、ワイコウなわけ。そこへ平原諸国が割り込めば、ワイコウにとっては大打撃よ」

「はるばる平原から輸出して、価格面で対抗できるの？」

平原からここまでの旅の様子を思い起こしながら、夏希は訊いた。「輸送コスト的には、近い分ワイコウの方が若干有利よ。でも、人件費は平原の方が安いし、近年はワイコウが独占供給先であること

をいいことに、商品価格を吊り上げていたみたいだしね。品質で差がなければ、こちらが有利よ」

「そうなんだ。……ねえ、これをワイコウに対する取引材料に使えないかしら。魔術の使用をやめないと、平原から安い商品を海岸に供給して、ワイコウの経済を弱らせちゃうぞ、って脅すの」

「悪いアイデアじゃないけど、経済担当者としては、却下したいな。せつかくのビジネスチャンスを、ふいにしたくないし」

凜が、夏希の提案を消極的に否定する。

「凜には悪いけど、委員会代表顧問としては、これは魅力的なアイデアだわ。もし他に手が無いようだったら、わたしはこの案をエイラに勧めてみるつもりよ」

「他に手がなければ、仕方ないわね」

意外とあっさりと、凜が引き下がった。

「でも、これだけは覚えていてね。一国の将来を左右するような国益が掛かった問題に対して、他国が経済的な圧力を加えて干渉した場合、思いもよらなかったような強い反発を受けて事態が悪化するって例は、歴史的には多いのよ」

夏希を真剣な眼差しで見据えて、凜が言う。

「わかった。覚えとく」

## 48 ワイコウの賢者（後書き）

第四十八話をお届けします。評価を入れてくださった方、ありがとうございます。

## 49 叔父と甥

「將軍、お食事の支度が整いました」

従卒のジエミが、窓辺で涼んでいたグリンゲ將軍を呼んだ。

「うむ。ご苦労」

うなずいたグリンゲは、のっそりと立ち上がった。眼光鋭い、瘦身の人物である。年齢はすでに当地の暦で七十を超えている。成人男性の平均寿命が五十歳そこそこのこの世界では、かなりの高齢者だ。

將軍、というのはワイコウにおける官位のひとつである。ワイコウでは……他の海岸諸国も同様だが……経験を積んだ高位の軍人に將軍の位を授け、いったん軍の指揮系統から外し、ある種の廷臣として重用する、という慣習があつた。むろん、戦時となれば彼らは王命により軍に復帰し、その知識と経験を活かして与えられた部隊の統合指揮を執ることになる。

部屋を出たグリンゲは、食堂へと向かった。狭い官舎だったが、すでに妻に先立たれ、二人の娘もとくに嫁いだので、従卒とふたりで暮らすには十分なスペースがある。

食堂のテーブルの上には、簡素な夕食が並べられていた。わずかな塩で味付けしただけの野菜スープと、米の粥。湯で戻した干し魚……川魚ではなく、海の魚である……に、茹で野菜に少量の魚醬をかけたもの。飲み物は、水だけだった。経済的に困窮しているわけではない。軍人として節制した食生活を送ってきた結果、このような食事を好むようになったというだけのことだ。それが、この年齢でも健康を保ち、現役の宮仕えをしている要素のひとつであるのだが……もちろんそこまで医学や栄養学の素養のないグリンゲには、知る由もない。

食べ始めていくらしもないうちに、食堂にジエミが姿を見せた。

「閣下。お食事中申し訳ありません。お客様がお見えです」

「キュイランスか。通してやれ」

微笑みながら、グリングゲは命じた。食事時に訪問するような無作法な知り合いは、甥のキュイランスくらいしかない。応諾して引っ込んだジエミが、すぐに中年男を連れて戻ってくる。

「たいへんですよ、叔父さん」

グリングゲの顔を見るなり、キュイランスがまくし立て始める。

「噂は本当でした。魔界が膨張し、人間界が縮んでいるのです」

「まあ座れ。ジエミ、お茶を淹れてやってくれ」

グリングゲは、キュイランスのために椅子を引いて待っている従卒にそう命じた。

「こうなれば、一刻も早くわが国も魔術の使用を抑制し、平原諸国と高原諸族に協力すべきです……」

「とにかく座れ。そばに立たれたままでは、落ち着いて飯も喰えぬ」

「それは、失礼しました」

ようやく、キュイランスが腰を落とした。

「で、使節団との会議はどうなりました？」

キュイランスが、急いた様子で訊く。

「陛下は人間界縮退について納得されたそうだ」

食事を続けながら、グリングゲは伝え聞いた会議の内容を甥に説明した。彼自身は会議に出席してはいないが、数名いる将軍のなかでも最古参なので、王宮内に友人は多く、自然と情報は耳に入ってくる。

「では、結局魔力の源はそのままなのです。それでは、人間界縮退を止められませんよ」

聞き終えたキュイランスが、ジエミが淹れてくれたお茶のカップを手に、首を振る。

「わが国に被害が及ぶのは何百年も先の話だ。急ぐことはあるまい」  
食事を終えたグリングゲは、目線で従卒に合図を送った。控えていたジエミが進み出て、空になった皿を片付ける。

「いや、叔父さん。高原地帯に被害が及ぶのは数十年後ですよ。そ

してすでに高原の民と平原の民は手を結んでいる。このままわが国が何の対策も取らなかつたら、両者の関係は決定的に悪化しますよ」「それはそうだが、わが国としても様々な分野で魔術に頼っているからな。簡単には、使用の抑制はできぬよ。それに、平原諸国と関係が悪化しても、当面大きな問題にはならぬと思うが」

「高原の民の一氏族は、ジンベル王国に戦争を仕掛けたのですよ。魔力の源を確保するために。同じ事を、いまや手を組んだ高原と平原の民がやらないと言い切れないでしょう」

半ば身を乗り出すようにしながら、キュイランスが主張する。

「そこまで愚かな連中ではないだろう」

グリングゲは、甥の意見を手を振って退けた。

ワイコウの人口は約八万。そのうち、王都であるワイコウに居住しているのは、約半数である。常備軍は約三千五百名。その歴史から、尚武の気風がある国なので、錬度は高い。

「手を組んでいるとは言え、平原は小国の集まりだ。それに、わが国はルルトおよびオープアと相互防衛条約を結んでいる。仮に平原と高原が手を組んで攻め寄せてきたとしても、この堅牢なる王都ワイコウは落とせないだろうし、わが国とルルト、オープア三国の正規軍を合わせれば、一万を超える軍勢となる。これに喧嘩を仕掛けるような愚か者はいないよ」

「伝え聞くとところによれば、ルルトもオープアも防衛条約を破棄したがっているようですが……」

やや遠慮がちに、キュイランスが指摘する。

「それは事実だな」

ぶすりとした声で、グリングゲは認めた。

「だが、一方的破棄はできない条項があるからな。わが国が破棄に同意することはないから、条約は安泰だよ」

「しかし、もし戦争になった場合、ルルトとオープアはわが国のために真面目に戦ってくれるのでしょうか？」

手にしたカップを振って、ジエミにお代わりを要求しながら、キ

キュイランスが問うた。

「両国とも、条約を反故にするようなことはあるまい。少なくとも、陛下が国防上の危機が生じていると判断した時点で、ルルトとオープアに対し派兵を要請することができるし、平原の軍勢がわが領土に侵入すれば、自動的にルルトとオープアも参戦することになる。

いったん戦端が開かれてしまえば、本国が危機に陥らない限り、派遣兵力は条約締結国に全面的に協力しなければならぬという条項もある。安心しろ」

「いえ。戦争になったら、勝てないかも知れませんよ」

キュイランスが、生真面目な表情で言う。

「根拠は？」

「今日、使節団の一員と会ってきました。噂の異世界人の一人です」  
「無茶をする。警護の兵に捕まったら、ただでは済まんぞ」

半ば呆れて、グリンゲは言った。

「わが国軍の兵を貶めるつもりはありませんが……出し抜くのは簡単でしたよ」

「まあよい。それで、誰に会ったのだ？」

「『竹竿の君』です。ナツキ、と呼ばれる女性ですよ。人間界縮退が事実であると直接聞きましたし、二匹の魔物にも確認しました。ほら、魔物は嘘をつかないでしょう？」

「そう聞くが……それで、どんな女性だったのだ、『竹竿の君』は？」

やや急いで、グリンゲは訊いた。軍人として、ジンベル対イファラ族の戦いは注視していたし、ワイコウ国軍もできうる限りの情報収集を行っていたから、ジンベル市民軍を率いて活躍した異世界の女性については、いくつか聞き及んでいる。

「まさに女傑、といった雰囲気でした」

少しばかり遠い目をしながら、キュイランスが語り出した。

「手入れの良い長い黒髪と、異国調ながら整った美しい顔立ち。立ち振る舞いにも、気品が感じられました。背は高く、立派な身体つ

き。二匹の魔物を従え、自信に満ち溢れた様は、ひと目でこの世界の住人ではないと知れました。……ただし、額に角は生えていませんでしたが」

「そりゃ、そうじゃろう」

グリングゲはくすくすと笑った。ここワイコウでは、なぜか『ジンベルの竹竿の君の額には角がある』という噂が流れていた。グリングゲ自身は、異世界人であろうとも魔物ではないのだから、角など生えているはずはない、と思っていたが。

「で、そのどこに戦争になればわが国が負けるといふ根拠が含まれているのだ？」

「異世界人は、みな膨大な知恵の持ち主だと聞きます。『竹竿の君』も、ひと目見ただけで知性にあふれた女性と知れました。軍師であるというタクミという男や、野戦指揮官であるイクマ、外交官らしいシユン、それに、外交使節団に参加しているリンという女性も、おそらく同様の知性の持ち主でしょう。彼らの知恵が結集したら、どんな手立てを考え付くか知れたものではありません」

「お前は確かに賢者だが、軍事には疎い」

苦笑しながら、グリングゲは言った。

「知恵を駆使した奇策など、実戦ではめったに通用しないものだ。戦術の原則は、異世界であろうと同じようなものだろう」

「いえ、僕はもっと大局的な面で彼らの知恵が使われることを危惧しているのですよ。カキ国王の治世になってから、他の海岸諸国との仲も悪化していますし」

「野心的なお方じゃからな」

グリングゲは嘆息した。賢王と呼ばれた先代を超えようというのか、強引な政策が多く、それが周辺諸国との軋轢を生んでいるのだ。

「ともかく、今平原諸国を怒らせるのはまずいです。まして、高原諸族まで彼らの味方についているのですからね。叔父さんの力で、早急に平原側との交渉をまとめるように働きかけてください」

「無茶を言うものではない」

グリンゲは笑った。將軍の中ではもつとも古株であり、カキ国王の信頼も厚いとは言え、グリンゲは重臣ではない。国王に直言などできる立場ではないし、重臣たちにそれほど顔が効くわけでもない。「僕の読みが正しければ、平原との対立は絶対に避けるべきです」  
キュイランスが、力説した。

「街に流れている噂では、使節団は明日ルルトに向けて発つそうではないですか。おそらくは、海岸諸国をまわって友好関係を築き、わが国に対して圧力を掛ける思惑があるのでしょうか。下手をすれば、わが国が孤立しかねません」

「わかつたわかつた。できるだけ手を打ってみよう」

グリンゲは、気乗り薄にそう約束した。できることと言えば、何人かの気の置けない廷臣に意向を吹き込むくらいだが、何もしないよりはましであろう。

ノノア川を下り続ける合同使節団の前方に、青く連なる山々が見えてくる。

「あれが海岸山脈です」

細い腕を差し伸べ、前方を指し示しながら、エイラが解説してくれる。

「あそこを越えれば、本当の海岸地帯ですわ。もつとも、わたくしも行くのは初めてですが」

やがて船団は、幅五キロほどの細長い盆地に入ってしまった。川幅がやや狭まり、流れも速くなる。両側に山々が迫り、それが徐々に高くなってゆく。それに伴い、盆地の幅も狭まっていった。

「植生が変わったわね」

河岸を指差しながら、凜が指摘する。

今までの河岸は、湿地や植物の繁茂に適さない岩がむき出しになった荒地、人工的に開かれた平地などを除けば、亜熱帯ジャングルに覆われているのが常であった。だが、このあたりでは単に草が繁

茂するだけの平地が目につく。生えている木々も、やたらと背が高かったり、葉が大きかったりするものが減り、夏希らが見慣れている温帯のものに近い、小さくて緑色の濃い広葉樹が混じるようになってきた。

下ってゆくうちに、さらに盆地の幅が狭まってゆく。そしてついには河岸の平地が皆無となり、岩石質の崖がそのまま河岸を成す地形となった。川の流れが、長いあいだ直接谷間を穿ち続けて形成された箇所なのだろう。

その細い谷間を、船団は抜けていった。しばらくすると、谷間が広がり始めた。川幅も、広くなる。狭隘部を抜けたらしい。

「……そういえば、雨降ってこないわね」

夏希は空を見上げた。高層に筋雲が浮かんでいるが、豪雨をもたらす低層の雲は見当たらない。前回雨に降られてから、四時間以上は経ったはずだ。そろそろ、ひと雨来る頃合なのだが……。

「海岸山脈より北には、雨季がないのです」

夏希の疑問を受け、エイラが説明してくれる。

「ここから北は、平原やワイコウ付近とはかなり気候が違います。海に面しているせいでしょうか」

「むしろ、この山脈のせいじゃないの？」

最後に比べるとだいぶ低くなった山々の連なりを指差しながら、凜が言った。

「三国山脈みたいなものかもね。真冬の関東と新潟の天候が真逆なのと同じかも」

夏希はそう言った。おそらくは、平原地帯やその北の湿地帯に雨をもたらす水分をたっぷりと含んだ雲は、海岸山脈を越えられないのだろう。

さらに船団が進むと、いきなり谷間が広がって景觀が開けた。それまでほぼ真っ直ぐに流れてきたノア川が蛇行を始める。川幅も、極端に広くなった。

夏希は立ち上がると、日除けの外に出て周囲を眺めた。遠くの方

に、村落が見える。その周辺にある茶色い土地は、畑だろうか。河岸の土地は、荒地が草地のまま放置されている。

「洪水が多いのかしら」

夏希はつぶやいた。地図を見る限り、平原地帯から海へと至る川は、ノノア川だけのようだ。高原と平原に降った膨大な量の雨水がたった一本の川に集中するのでは、たびたびの氾濫は必至だろう。

川のそばに家や畑を作っても、意味がない。その予想を裏付けるかのように、河岸の荒地には角の取れた石が大量に堆積しているのが目に付いた。岩と言っているいいサイズの大石が、草地の中にごろんと転がっている光景も、頻繁に目にする。おそらくは、以前の大洪水で上流から運ばれてきた岩なのだろう。

そうこうしているうちに、前方にかなり大きな街が見え出した。

ちよっとした高台にあり、そのうえ周囲を石造りの頑丈そうな堤防で囲っている。さながら、中世ヨーロッパの城塞都市のようだ。

「ここまでくれば、ルルトまであと一息ですわ」

近づく都市を眺めながら、エイラが嬉しそうに言った。

「この街はルルトに属しているの？」

「そうです。クートロアという街ですわ」

「大きい街ねえ。ジンベルに匹敵するんじゃないかしら」

堤防の長さを目で測りながら、夏希は言った。規模だけではなく、建物も立派なものが多く、堤防よりも高く聳えている石造建築物は何十となく見えたし、ミナレット（モスクに付随する細長い尖塔）を連想させる鉛筆のような塔もいくつか数えることができた。

「そうですね。同じくらいの人口があってもおかしくありません。

なにしろ、ルルト王国全体で十五万の人々が住んでいると言われてますから。このあたりで最大の国家ですし」

「十五万……」

エイラの説明に、夏希は絶句しかけた。実にジンベルの十倍以上の人口である。一人当たりGDP……もちろんそんな概念はこの地にはないが……は海岸諸国の方が上だから、総合国力はおそらくは

ジンベルの十数倍程度に達するだろう。

ノア川の流れに乗って、船団がさらに街に近づく。街の北側には川に通じる掘り込みがあり、そこにはかなり整った河港が整備されていた。河港の入口には水門があり、川が増水しても河港内に流れ込まないように工夫されている。船団はそこに船を着けた。事前にワイコウ駐在のルルトの役人……まだこの世界には大使や公使、領事といった役職は存在していない……を通じて訪問を連絡してあったので、街のお偉いさんらしい人々が出迎えてくれる。一行のほとんどもそこで上陸し、ルルト側が用意してくれた昼食をいただくことになった。

「豊かな国ねえ」

歩きながら周囲を眺めるだけでも、その豊かさは理解できた。港には倉庫が立ち並んでおり、着けている商船から木箱や麻袋、樽などが続々と運び込まれている。主要な街路は石畳で広く、幅十メートルくらいあり、中央には一方通行の荷車専用レーンが設けられていた。建ち並ぶ商家の店先に並ぶ商品も豊富だ。

「市民の身なりも上等。お金持ってるわね。おいしい商売ができそうだわ」

凜が、喜ぶ。

「舌なめずりはやめなさい。時代劇に出てくる悪徳商人の顔付きになってるわよ」

夏希は冗談交じりに忠告した。

「商売の基本は、悪だからね」

開き直ったのか、凜がいかにも底意地の悪そうな笑みを向けてくる。

「そうなの？」

「商売の基本は、必要でないものをいかに高く売りつけるか、だからね。ポテトを食べたくない客に、断れない雰囲気を作っておいてポテトを押し付ける。これが、商売の基本なのよ」

「……そんな話聞いたら、急にハンバーガー食べたくなったじゃない

いの」

夏希は胃の辺りを押さえた。ファーストフード好きではないが、もともとパンは好きである。そういうわけで、ときおり無性にコンビニのサンドイッチや調理パン、安っぽいハンバーガーなどが、恋しくなることがあった。

「小麦はタナシスまで行かないと作ってないからね。今度米粉パン焼いてあげるから、焼肉サンドあたりで我慢しなさい」

意地の悪い笑顔を消した凜が、励ますように夏希の肩を叩いた。

49 叔父と甥（後書き）

第四十九話をお届けします。

ルルト側の対応は、きわめて友好的であった。

エイラとサーイエナの読み通り、ルルト国王は人間界縮退問題に  
関し、委員会および対策群に対し全面的協力を確約してくれた。ワ  
イコウへの働きかけも、前向きに検討することを約束してくれる。  
タナシスへ親書を送る件については、オープア王国の意向を確認次  
第、王室出入りの信頼できるルルト商人に託して、タナシスの属国  
であるラドーム王国外交当局に責任を持って届ける、という言葉質を  
得た。

経済面でも、平原の商人が高原や平原の産物をルルト国内へ持ち  
込むこと、およびルルトの産物を買い付けることが許可された。だ  
だし、ルルト国内での小売と、ルルト商人を介さずに直接ワイコウ  
を除く他の海岸国家と貿易することは原則禁止とされた。前者は明  
らかにルルト商人の縄張りを荒らすことになるし、後者を許せばル  
ルトに金が落ちない。平原側としても、ノノア川河口にある都市ル  
ルトを経由しなければ、オープアや東部海岸諸国……ラクトアス、  
チユイ、ニガタキの三力国……と通商するのは事実上不可能だつた  
から、納得できる譲歩と言えた。

いずれにせよ、平原の商人の資本力はルルト商人のそれには遠く  
及ばないから、自由競争となればいずれルルト商人に平原の市場を  
喰い荒らされてしまうのは目に見えている。平原側はこの取り決め  
によって、ノノア川を利用した平原・ルルト間の物流を握ることが  
できたし、ルルト資本が平原地帯に無軌道に流入し、各国の商業界  
を圧迫することを防ぐこともできる。一方のルルト商業界も、なん  
ら新規投資を行わずに平原や高原の産物を安価に買いつけ、そして  
それを他の海岸諸国へ転売するというおいしい商売にありつけるし、  
平原と高原という新たな市場へ独占的に商品を供給できるルルトを  
開拓したことになる。ルルト王国としても、自国の商人が潤えばそ

れだけ税収も増える。両者にとって、旨みの多い協定と言えた。

「ねえ、エイラ。どうしてルルトはもつと前から平原と交易しようとしなかったの？」

経済協力協定が締結された晩に、食事を摂りながら夏希はそう質問してみた。こんなにもおいしい商売を放置していたからには、何らかの理由があるはずだ。

「縄張りがあるのです」

箸を手にしたまま、エイラが肩をすくめる。

「縄張り？」

「海岸諸国は、過度の経済競争でお互いが疲弊しないように、それぞれ縄張りを定めているそうです。オープアは西群島、東部三力国は東群島を縄張りとして、独占的な商売の権利を有しています。ワイコウは、同地以南が縄張りですね」

「ルルトは？」

「交易の中継を独占しているそうです。例えば、西群島の染料をラクトアス商人が買おうとすると、オープア商人が西群島で買い付け、オープアまで運んだものをルルト商人が買い取る。それがルルト商人の手によってラクトアスまで運ばれ、そこでラクトアス商人が買い取る、という段取りになるでしょう」

「なるほど」

「ワイコウは、平原と大規模な交易をする意図はなかったようです。特産物の多くが平原産のものと重複しますからね。平原側も、海岸諸国と大規模な交易を行う態勢になかったのです」

「そうすると、今回の協定で平原とルルトは、ワイコウの頭ごなしに交易するわけね。色々と、まずいんじゃないの？」

夏希はそう訊いた。

「まずいですね。だからこそ、ルルトは自国の商人を平原へ送って商売させるのではなく、平原の商人がルルトへ産物を持ち込む形にしたのでしょね。平原の商人が勝手にやって来て、ルルト商人と商品を売買している、という状況ならば、ルルトはワイコウの縄張

りを荒らしていないと強弁できますから」

「いわくありげに、エイラが微笑む。

「うーん。さすがに商業国家ね。そこまで考えてるんだ。じゃ、そうすると交易が始まったら、平原はワイコウに恨まれるわね」

「そうなりますね。まあ、人間界縮退対策に快く協力してくれなかった報いですわ」

そう楽しそうに言ったエイラが、箸でつまんだから揚げの小海老を口に放り込んだ。

ルルトでの滞在は五日に及んだが、その間夏希は暇を持て余していた。委員会が目指していた目的は、一日目の協議であっさりと達成してしまったので、あとは夜の外交レセプションに出席するくらいしか公的な行事の予定がなかったからだ。幸い、ワイコウと違ってルルトはきわめて開放的だったので、夏希は連日エイラとサーイエナ、それに二匹の魔物と連れ立って、ルルト市街の見物に出かけた。気候的には今の海岸地帯は春で、海沿いゆえやや湿気は多かったものの気温は日中でも二十五度前後であり、平原の気候に慣れた夏希にははなはだ快適なものに感じられた。

対照的に忙しかったのが、凜であった。ルルト商人に対する持参した商品見本の配布とプレゼンテーション。市場調査。商業関係の法律のチェックと、役人との折衝。河港や海港、街道に関するデータの収集。船主組合や小売業界への根回し。持ち帰る商品見本の買い付け。などなど。

「はあ。いささか疲れたわ」

五日目の晩餐会の席で、凜が愚痴った。

「オープアに行けば、休めるよ。頑張つて。ほら、このお魚、おいしいよ」

夏希は励ましつつ、酢締めしてある魚の切り身を取り分けてやった。

「ちよつと臭みがあるわね」

箸に挟んだ切り身を鼻に近づけて、凧が眉をひそめる。

「ちよつと魚醬をつけるると臭みが気にならないよ。締め鯖みたいで、おいしいよ」

海岸沿いだけあつて、料理には魚介類がふんだんに使われていた。さすがに刺身はなかったが、各種の焼き魚の切り身、丸ごと揚げた魚に、蒸した野菜の細切りを添えたもの、魚醬で煮付けた魚、殻のまま焼いた貝類、野菜と揚げた小魚の炒め物、膾にした海老、蒸した蟹、蛤に似た貝のスープなどが並んでいる。魚好きの夏希は、ここ数日の食事を大いに楽しんでいた。

「臭い消しに、昆布締めとかすればいいのに……そういえば、海草食べてないわね」

切り身を飲み下した凧が、不思議そうに言った。

「そう言えば、そうね」

夏希も首を傾げた。ルルトへ来てから、海草の類は……昆布も若布も海苔も一切目にしていない。

「海草を食べる習慣がないのか。これは、商売のタネになりそうね」

「この気候じゃ、昆布は取れないと思うけど」

夏希はそう指摘した。凧が、頭を搔く。

「そうだったわね。あれは寒い海でないと育たないんだっけ。……」

ところで、忙しくてチェックしている暇がなかったんだけど、次のオープアまでどうやって行くの？ また船？」

「船だけど、川船じゃないよ。ここまで乗ってきた川船じゃ、沿岸とは言え海には出られないから。オープアが、海軍の船を迎えに寄越してくれたの」

「海軍？ ってことは、軍艦？」

「うん。オープアの国家規模はルルトより一回り小さいけど、海軍は海岸諸国随一の規模なんだって。もともと、海賊対策で整備されたものらしいけど」

「海賊？」

凜が、首を傾げる。

「えーと、根本的に説明した方がよさそうね。海岸地帯の地勢は、ノノア川河口を中心にしてほぼ左右対称なの。河口の西側にあるのが、ルルトの首都ね。その西方にあるのが、ルルトの盟邦であるオプア王国。ルルトの東側にあるのが、ラクトアス、チュイ、ニガタキのいわゆる東部三力国。で、その更に東にあるのが、東群島。ここには統一国家がなく、島ごとに小国や貴族領がいくつもある。

その東群島の対称位置にあるのが、西群島。島の数は東群島よりも少ないけど、状況は同じで小国ばかり。どちらの群島も、オプアや東部三力国にとっておいしい市場だったけど、海賊が出るのが悩みのタネだった。そこで、オプアと東部三力国は強力な海軍を建設して、海賊の制圧を行ったわけ。二百年くらい前の話だそうよ。いまでも食い詰めた漁民なんか海賊行為に走ることもあるし、オプアや東部三力国がいわば地域大国として群島の小国同士の争いに介入したりすることがあるから、海軍は維持されているの」

夏希は、暇つぶしにルルト人とおしゃべりして仕入れた知識を披露した。

「じゃあ、前に言ってた関東地方に例えると、オプアはどのあたり？」

「銚子あたりかな。西群島が、犬吠埼のずーっと沖合いね。東部三力国は……ちょっと方角がずれるけど、小田原から熱海のあいだ、つてとこかな。でもって、東部群島が駿河湾あたり」

以前に見せてもらった地図を思い起こしながら、夏希はこの地の地名を頭の中の日本地図に当てはめていった。

「何となく、理解したわ」

凜が深くうなずく。

翌朝早く、合同外交団は宿舎を引き払い、ルルトの海港に向かった。見送りは結構派手で、国王の姿こそなかったが、三人ほど王族

の姿が見られた。外交団長のスロン外務大臣が、ありきたりなスピーチを行い、盛大な拍手を受ける。

「とりあえず、ルルト訪問は大成功だったわね」

凜が拍手しながら、隣に立つ夏希の耳元に口を寄せて、言う。

「主目的を忘れないでね。お金儲けも大事だけど、人間界縮退問題を何とかしなくちゃならないんだから」

このところすっかり『商人モード』あきんどに入っている凜に、夏希はそう釘を刺した。

「わかってますって。でも、先立つものは必要でしょ」

「まあね」

凜の言葉に、夏希はしぶしぶ同意した。

合同外交団は、見物に訪れた多くのルルト市民の見送りを受けながら、棧橋へと向かった。ルルトの海港は、差し渡し一キロはあるうかという半円状の湾の奥にあった。陸上には多数の倉庫が建ち並んでおり、市街地へと通じる街道の両側にも、商家や民家がびっしりと建っている。

海港に設けられている木製の棧橋は、数が多いがいずれも小さなもので、大型の船舶が横付けできる規模ではなく、夏希らがハンジヤーカイから乗ってきた川船と大して変わらぬ小船が舳われているだけだった。浚渫の技術などないだろうし、海水の色合いからして湾の水深も浅いように見えたから、いずれにしても大型船舶は湾内に進入できないに違いない。

海港の沖には、全長二キロ半ほどはあろうかという大きな島が横たわっており、それが天然の防波堤を形作っていた。その手前は錨地のようで、数隻の大型船が停泊している。合同外交団が分乗した十隻ほどの小船は、その中でもひととき大きな二隻の帆船を目指して進んでいった。夏希は日光を照り返す波に目を細めながら、帆船のサイズを目測した。二隻とも、全長は二十五メートルばかりあるだろうか。前方に傾いた二本のマストに、畳んだ白い帆がついている。船首には、低い船首楼があり、船尾の方にはそれよりも高い船

尾楼がある。

「おそらく、ラティーン・セイルね。大型のダウ船、ってところかな」  
夏希の隣で同じように船を眺めながら、凜が言う。

「……専門用語の解説をお願い」

「ラティーン・セイルは大型の三角帆で、縦帆じゅうはんの一種。ダウってのは、南アジア、西アジア、東アフリカあたりで今でも使われている帆船の型式。ラティーン・セイルを一枚ないし二枚備えるのが特徴よ。次の質問を先読みして答えると、縦帆ってのは、船の長径に沿って張る帆のこと。長径にクロスするように張るのが、横帆ね。横帆は逆風だとまともに帆走できないけど、縦帆だと斜め前方からの風でも帆走できるから便利なの」

「へえ。さすが歴史通ね」

「……帆船マンガ読んで得た知識だけどね」

凜が、ぺろつと舌を出す。

合同外交団は、二隻の帆船に分かれて乗り込むことになっていた。手前の船には、各国代表やサーイエナ、エイラとその補佐など、比較的高位の人物が乗り込む。二隻ともそっくりに見えるが、こちらの船の方が、格上らしい。夏希と凜も、エイラらと同じ船を宛がわれた。……異世界人なので、一応VIP扱いらしい。

厚い板切れに、ふたつ割にした棒材を釘で打ちつけただけの、粗末な昇降板を登って、夏希は帆船へと乗り込んだ。船の様子は、夏希が想像していたものとはかなり異なっていた。いわゆる主甲板が、一部にしか敷かれていなかったのだ。前のマストと後ろのマストのあいだの部分は、ぱっくりと口を開けたようになっており、覗き込むと低い位置に下層甲板が張られているのが見えた。

「ようこそ皆様。乗船を歓迎いたします。わたくし、本船の船長、マローアと申します」

この船に割り当てられた合同外交団の全員が乗り込んだところで、壮年の男性が進み出て歓迎の辞を述べた。

「では、今回の戦隊司令を兼任されるわがオープア海軍司令官を」

紹介します。ランクトウアン王子殿下です」

恭しい口調で船長が言う。すぐに、浅黒い肌の青年が船尾楼から現れた。

「ランクトウアンです。国王陛下より皆様をオープアまでお連れするよ用にとの命を受けて参りました。狭くむさ苦しい船ですが、どうぞおくつろぎ下さい」

他の水夫と同じような装束……白茶けた麻のハーフパンツと、胸元が大きく開いているシャツという姿……のランクトウアン王子が言って、一同を船尾楼へと導く。

「すごい美形じゃないの」

勧められるままに用意されていた腰掛け……真新しく見えるので、船の備品ではなく、今回のために特に用意されたものらしい……に座った途端に、凜が夏希の耳元でそうささやいた。

「同意するわ」

夏希はうなずいた。ランクトウアンの背は低い……せいぜい百六十センチ前後だろう……が、丸顔で目が大きく、ちよつと女性的に見えるほど顔立ちを整っている。

「おまけに王子様だなんて。ファンタジー小説なら、絶対に恋愛フラグが立つところね」

凜が、続けた。

「勝手に立ててなさい」

夏希は苦笑した。欧米系の美形には、相変わらず興味が沸かないのだ。

「それでは、出航します。風の具合によりますが、日没までにはオープアに入港できる予定です。今日は天候に恵まれていますし、波も穏やかなので、航海を楽しんでいただけたと思います。わたしは出航の指揮を執らねばならぬので、これで失礼します。なにか御用がお有りの場合は、控えている水夫にお申し付けください」

ランクトウアン王子がにこやかに言って、船首楼を出て行った。

麻製の三角帆が風を孕み、青い海原を二隻の船が駆ける。

ランクトウアン王子の勧めで、合同外交団一同は交代で船内を見学した。夏希は凜、エイラ、それにコーカラットとともに、士官のひとりの案内であちこちを巡り歩いた。帆船に乗るのは初めてのことである。見るものすべてが興味深かった。

凜が、細かい事柄を士官に尋ねる。乗員は、全部で四十名。本来ならば、これに戦闘要員が長期航海ならば三十名ほど、短期航海ならば五十名ほど加わるという。普段は、西群島海域の哨戒と、オーブアへ至る航路での警戒任務を行っているらしい。

「この辺で、海賊が出たりしない？」

潮風になぶられている黒髪を手で押さえながら、夏希はそう尋ねた。仮に海賊船が出てきても、コーカラットとユニヘックヒューマの手に掛ければ……いや、触手とステッキに掛ければ数十秒で撃沈できるだろうから、どうでもいいと言えはどうでもいいのだが。

「ご心配にはおよびません。この海域で海賊が出たという最後の報告は、百数十年前のことですから」

生真面目そうな若い士官が、笑みを浮かべて答える。

「海岸諸国最強のオーブア海軍のお膝元で、海賊が活動できるはずないですわ」

エイラが、世辞めいたことを言う。士官の笑みが、深まった。

「これ、なに？」

夏希は、後部の舷側についている横棒を指差した。一端が太い縦棒につながっており、その縦棒は舷側の外側で下に伸びているようだ。

「舵であります」

士官が、堅苦しい口調で答える。

「え、舵って普通船尾にあるんじゃないの？」

「昔の船だと、舵が舷側に設けてあるのは珍しくないわ。古くは、大型の櫂が舵代わりだったんだから、その名残でしょうね。この船には、両舷に舵があるみたいだけど、小さい船だと右側に一本だけ

つてのが普通」

凜が、解説してくれる。

「どうして右側なの？」

「右利きだと、その方が操り易いからよ。竹箒かなにかを握って動かしたところを、想像してみればわかるわ」

「なるほど」

「ちなみに、この舵を破損しないように、船は棧橋や港に対して常に左舷側を向けるようにしたの。その習慣が、今でも続いているのよ。現代船舶でも、接岸の基本は左舷接岸。あくまで基本だけで、右舷接岸することも多いけどね。飛行機でも、必ず機体の左側から乗るでしょ？ 機首が左手にあつたはずよ」

「……そういえば、そうだった」

夏希は以前に航空機に搭乗した時のことを思い起こした。機内に入ると、常に左向きに座席が並んでいた。つまりは、進行方向が左側であり、機首方向であるから、機体の左側の扉から乗り込んだことになる。

「飛行機の運用や用語なんかは、船舶のそれを踏襲しているからね。習慣も同様。航空会社だと旅客機のことをシップ、なんて呼んだりもしてるし。ま、雑学披露はこのくらいにしておきましょう」

会話内容についてゆけずにきょとんとしている士官に微笑みかけながら、凜が言った。

50 提督王子（後書き）

第五十話をお届けします。

## 51 船上の会食

オープア海軍に所属する二隻の帆船は、海岸からそれほど離れていない位置を西に向かつて順調に航海を続けていた。風は北東から吹いてくるので、順風に近い。

「どのくらいの速度なのかしら」

緑成す美しい海岸を眺めながら、夏希は誰に訊くともなく口にした。

「五ノットから六ノットくらいじゃないかしら」

すかさず、隣に立つ凧が答える。

「どうやったらわかるの？」

夏希は半ば驚いてそう聞き返した。自動車や自転車の速度ならば、乗り慣れているうえに道路際の建物などの比較対象物があるからおおよその見当がつくが、船となると皆目わからない。

「帆船の巡航速度なんて、せいぜいそんなものよ」

凧が、笑いながら言う。

「順風でがんばっても、せいぜい十ノット程度。もつと近代的な横帆を多用した帆船なら、二十ノットを越えられるでしょうけどね」

「ふうん、そうなんだ。で、五から六ノットって、時速何キロ？」

「九から十一キロくらいね」

「意外と遅いんだ」

時速十キロといったら、一般的な自転車よりも遅い速度である。

「しょせんは風の力頼りなもの。風力だけで時速数十キロを常時得られるくらいなら、人類は乗馬も内燃機関も発明しなかったでしょう」

肩をすくめつつ、凧が笑う。

「それもそうね」

夏希も笑った。

昼食時になると、船首甲板にテーブルが三つ設えられた。乗り込んでいる合同外交団全員が一度に食事するスペースはないので、三回に分けて昼食が供されると説明される。各テーブルには、ランクトウアン王子とマローア船長、それに副長がそれぞれホストとして同席した。このテーブルも、腰掛と同様真新しい。客人用に急遽積み込まれたものであろう。

夏希には、エイラとサーイエナ、それに委員会および対策群のメンバー三名とともに、二回目の王子のテーブルが割り当てられた。「船上ゆえたいしたものはお出しできませんが、どうぞ召し上がってください」

水夫による男臭い給仕が終わると、ランクトウアン王子がにこやかに勧めた。

ルルトで出された豪華な食事に比べると、テーブルの上に並べられた品数は少なく、いささか貧相ではあった。温い茶と野菜スープ、数種の燻製魚、冷肉の薄切り、漬物、それに炊きたてらしく湯気をあげている炊き込みご飯程度である。

だが、この炊き込みご飯が絶品だった。何種類かの貝類が、丸ごとあるいは細切りにしてたっぷりと入っており、それらから染み出した旨みご飯にしっかりと浸透している。深川飯に、さらに牡蠣を炊き込んだうえに、蛤の出汁を効かせたら、こんな味になるだろうか。おそらく使われている調味料はわずかな塩だけだと思うが、実に美味い。

「こんなおいしいご飯、生まれて始めて食べましたわ」

夏希は思ったままを口にした。エイラやサーイエナも、同意する。「気に入っていただけただけで何よりです。オープア海軍名物の貝飯です。本来ならばありあわせの貝をぶち込んで炊き上げるのですが、今回は大切なお客様にお出しするために入れる貝を厳選しましたからね」

嬉しげに、ランクトウアンが言う。

「ところで、王子殿下はなぜ海軍にお入りになったのですか？」

サーイエナが、話題を変えた。

「オープアでは、王家の者はそれなりの役職に就かねばならぬのですよ。わたしは王子とは言え、第六王子ですからね。重要な役職はすでに兄たちが占めている。空いている役職は、海軍司令官くらいしかなかったのです。ま、お飾りですな」

ランクトウアンが、苦笑する。

……単なるお飾りじゃないわね。

夏希はそう推察した。王子はよく日に焼けているし、上半身にしっかりと筋肉がついている。名前だけの海軍司令官ではなく、頻繁に海に出ていることは間違いない。近くで見ると、髪が痛んでいたり、手が荒れていたりするのもわかった。潮風に晒され、そして自ら水夫らと同じような作業にも参加するのであろう。顔立ちも女性的ながら、その大きな目が放つ光はかなり鋭い。

食事後半の話題は、もっぱら人間界縮退問題となった。エイラとサーイエナが、王子を味方につけようとしていることを察した夏希は、たまに相槌をうつ程度で会話には加わず、大人しくご飯を食べていた。

「ご心配なく。陛下もあなた方の言葉を信用するでしょう。断言はできませんが、わが国もルルトに同調して、あなた方に協力しますよ」

ふたりの巫女の説明を納得顔で聞いていたランクトウアン王子が、何度もうなずく。

「東部三カ国はどう反応するか、お考えをお聞かせ願えますか？」

へりくだった調子で、サーイエナが尋ねた。

「オープアとルルトが連名で頼めば、協力してくれるでしょう。それは間違いありません。東部三カ国とは極めて親密な関係ですからね。ルルトがラクトアスと海岸沿いの小島の領有権を巡って争っています、あくまで外交上の係争に止まっていますし」

ランクトウアンが、頼もしい返答をしてくれる。

「となると、残るはワイコウ王国だけですな」

エイラが指摘した。とたんに、ランクトウアンの表情が曇る。

「事情は聞き及んでいきます。カキ国王も、頑固なお方だ」  
嘆息気味に、王子が言う。

「まだ国王陛下にお目にかかっていない状態で言うべきことではないかも知れませんが……オープアとルルトでワイコウを説得していただくませんか？」

「さすがのように、エイラが頼んだ。」

「説得……は難しいでしょう。ご承知のように、今現在わが国とワイコウは疎遠ですからね」

ランクトウアンが、わずかに肩をすくめる。

「形の上では友好国ですし、相互防衛条約を始めいくつかの条約や協定も結んでいます。いずれも古いものです。商売はルルトを通じて行っているだけで、直接の交易は皆無に近い。以前はワイコウにわが国の役人が常駐していましたが、ワイコウの南方への領土拡大に抗議して帰国させて以来、そのままになっています。ルルトとなると、さらに表立ってワイコウと対立している。カキ国王とルルトのエジュアル国王は犬猿の仲、とも聞きます」

「それならば、ワイコウと縁を切ればよろしいのでは？」

サーイエナが、空気を読まずに提案した。

「サーイエナ殿。それは僭越過ぎますわ」

「すかさず、エイラがたしなめる。」

「いえ、構いませんよ。外国の方ならば、そう思っただけです」  
ランクトウアンが鷹揚に言っただけ、苦笑する。

「しかし、オープアとルルト、そしてワイコウはいわば血の盟友なのです。かつてワイコウが周辺諸国家に攻められたときに手を貸したのが、オープアとルルトでした。その結果、ワイコウはそれら小国を併呑し、強国となりました。その返礼として、西群島の海賊制圧のためにワイコウは義勇軍を差し向けてくれた。二百年も前の話だとは言え、共に肩を並べて戦い、血を流しあっていたいわば戦友なのです。相互防衛条約も、その時に結ばれたもの。軽々に放棄しては、

戦いに倒れたご先祖様に申し訳が立ちません」

「血の盟友……中国と北朝鮮みたいなものね」

夏希はぼそぼそとつぶやいた。無茶をする独裁者を見捨てられな  
いところなど、よく似ていると言えようか。

あらかた食事が終わると、水夫がデザートを運んできた。カット  
したフルーツの盛り合わせだ。平原では見たことのない、ビー玉サ  
イズの真っ白な粒が目を引く。皮を剥いたブドウの一種だろうか。

「ときに、夏希殿」

「はい？」

いきなりランクトウアンに話しかけられた夏希は、少しばかり驚  
いて慌てて箸を置いた。

「わたしも一応軍人です。あなたの活躍は聞き及んでおります。少  
しばかり、手柄話を披露していただけませんか？」

「いや、あの、その……。たいした手柄は立てていないのです、殿  
下。同じ異世界人で、拓海という男がいます。彼がなかなかの知  
恵者で、彼の立てた作戦通りに市民軍を率いたら、勝てたというだ  
けですわ」

夏希は慌てたまま言い訳がましく語った。

「なるほど。しかし野戦指揮官は軍船の船長も同様。上官の立てた  
作戦に従ったとしても、現場での機敏なる判断や部下の掌握度合い  
などは、野戦指揮官の度量と能力に依存しているはず。ご謙遜なさ  
ることはありませんよ、『竹竿の君』」

にこやかに、ランクトウアンが言う。

「……オープアの王族にまで、この二つ名で呼ばれるとは……」。

「恐縮です」

せっかくエイラとサーイエナが言葉巧みに説得し、味方につけた  
王子の機嫌を損ねるわけにはいかない。夏希は無理に笑顔をつくる  
と、可愛らしく小首を傾げて、王子に目礼した。

ルルトと同様、オープア王国の対応はきわめて友好的であった。

オープア国王は、人間界縮退対策に全面的に協力することを確約し、タナシスへの親書の副署も承諾してくれた。その旨を記載した書状を携えた使者は、合同外交団到着の二日目の早朝、船でオープアを発ち、ルルトへと向かった。

国王は、ワイコウへの働きかけも行うと言明してくれたが、その際に付け加えた言葉は、『たぶん無駄に終わると思うが』であった。ランクトウアン王子があらかじめ教えてくれた通り、オープアとワイコウの関係は疎遠のようだ。

オープアの街は、その規模こそルルトよりは一回り小さかったものの、活気のある豊かな都市であった。海港も大きく、西群島からの貿易船が停泊している錨地とのあいだを、貨物を満載した小船がしきりに往復している。合同外交団への待遇も、ルルトで受けたものを比べ遜色のないものだった。

オープアに三日間滞在した合同外交団は、ふたたびオープア海軍軍船二隻に分乗し、ルルトへと戻った。すでにオープア国王の副署のあるタナシスへの親書に、ルルト国王の副署もいただく。完成したタナシス国王宛の親書は、ルルトの外務大臣に託された。このあと、信頼できるルルト商人の手によって、タナシスの属国である島国、ラドームの外務当局に手交されることになる。

ルルトでの滞在は一日で切り上げ、合同外交団はルルト側が用意してくれた商船に乗り、東部三カ国でもっとも西にある国、ラクトアス王国へと向かった。国王に謁見し、人間界縮退問題に対する協力を要請する。こちらでも、反応は良好だった。合同外交団は、さらにチュイ、ニガタキと訪れ、同様の要請を行ったが、いずれも国王は協力を約束してくれた。

「これで、本当に残るはワイコウだけ、となりましたね」

ニガタキで与えられた宿舎……さすがに国家規模が小さいので、ルルトやオープアでの宿舎より格が落ちたが、それでもかなり豪奢

なもの……でくつろぎながら、エイラが嬉しそうに言った。

「帰りにどうせワイコウを通るのよね。何日か滞在して、協力するように説得するの？」

お茶を飲みながら、夏希は尋ねた。気候のせいか、茶葉の種類が異なるのか、あるいは製法に違いがあるのか、海岸地帯のお茶はなぜか平原のものより渋みが強い。

「あからさまに無視して素通りするのもひとつの手だとは思いますが、やはりカキ国王にご挨拶くらいすべきですね。ワイコウを除く海岸主要国家はすべてわたくしたちに協力してくれることになりました、とご報告しなければ」

意地悪そうに目を歪めながら、サーイエナが言う。

「ルルトとオープアの努力が実るといいけど」

夏希はぼそりと言った。近日中に、兩國の特使がワイコウを訪れ、魔術の使用を抑制して平原と高原とが行っている人間界縮退対策に協力すべきだと、説得することになっていた。順調に行けば、すでに特使はワイコウ入りしている場合である。

「尽力してくれている兩國には悪いですが、あまり期待できませんね」

サーイエナが、言う。夏希もうなずきで同意した。

海岸東部三カ国歴訪を終えた合同外交団は、船でルルトへと戻った。そこで一泊し、ルルト国王への挨拶を済ませた一行は、河港から川船に乗り込んだ。ちなみに、船の数は十五隻に増えていた。凜を含む商人たちが買い込んだ商品見本や、各国から贈られた土産物類が大量だったためである。

川の遡航には時間がかかる。行きでは一日行程だったルルト・ワイコウ間は、今回は二日掛りだった。ワイコウに着いたのは日没直前だったので、一行はすぐに前回と同じ宿舎に案内された。

「相変わらず、警備が厳重ですね」

宿舎の玄関で立哨している兵士を見やって、エイラが嘆息する。  
翌日、エイラとサーイエナを含む外交団主要メンバーは、ワイコ  
ウ政府要人との協議のため王宮へと出向いた。夏希は前回同様、留  
守番であった。

「暇なのです！ 夏希様、散歩でも行きませんか？」

ステツキを振りながら、ユニヘックヒューマが誘う。

「いいわね」

夏希は即座に応じた。同じように暇を持って余っていたコーカラッ  
トも、ユニヘックヒューマに誘われると喜んでついてきた。

夏希はお供の魔物を引き連れて、庭園に設えられた小道を巡った。  
朝方降った雨のせいで、木々や草花はしっとり濡れている。強い  
日差しが、それらを徐々に乾かしつつあった。

「海岸の気候に慣れちゃったのか、ずいぶんと蒸し暑く感じるわね」

夏希は顔をしかめた。平原に戻れば、もっと暑いはずである。

「そういえば、前回散歩した時に、変な男の人と出合ったんだっけ。  
名前、忘れちゃったけど」

今回の旅で、何百人もの人と引き合わされ、名乗られたのだ。王  
族などのよほどの大物でない限り、名前までは覚えていない。

「拓海様に似た方ですねえ」。キュイランス、と名乗ってましたあ

「」  
コーカラットが、教えてくれる。

「そうそう。そんな名前だった。たしか、この先あたりに隠れてた  
んだよね」

夏希は記憶をたどると、別の小道に踏み入った。見覚えのある花  
壇を過ぎると、これまた見覚えのある茂みの前が出る。

「止まるのです！」

いきなり、ユニヘックヒューマが前に出た。ステツキを振り上げ、  
茂みを睨みつける。

「……まさか、また？」

夏希は戸惑いの表情で、浮かんでいるコーカラットを見上げた。

「怪しい気配がするのですう」

コーカラットもすうすうと前に出て、夏希を守る態勢に入る。

「えーと、ひよっとして、キュイランスさん？」

まさかとは思いつつも、夏希は茂みに向かってそう呼びかけた。

がさごそという音とともに、茂みが割れる。ひよいと顔を覗かせたのは、やはりキュイランスであった。

「またお会いしましたね、夏希様」

なんとなく拓海を連想させる中年男が、笑顔を見せて茂みから出てくる。

「またお前なのですか！」

ユニヘックヒューマが眉を逆八の字にした呆れ顔で、ステッキを下ろす。

「で、今度は何の用？」

同じく呆れ顔で、夏希は尋ねた。

「使節団がルルトから戻ってきたと聞き、どなたかとお話したくて、明け方からここに潜んでいたのです。旧知のあなた方と会えたのは、幸運でした」

「旧知、と言うほどの間柄じゃないと思うけど」

夏希は一応そう突っ込んだ。

「実はわたくし、王宮内にコネがありまして、それなりに情報通なのです」

夏希の突っ込みを聞き流し、キュイランスが続けた。

「カキ国王は、あくまで皆さんの提案を拒絶し、魔術の使用を続ける意向のようです。皆さんは、それに対し、どんな手を打たれるおつもりなのですか？」

「そんなこと、話せるわけないでしょ」

夏希は拒絶した。外交上の秘密を、一市民であるキュイランスにべらべらと喋るわけにはいかない。

「そうですね。では、他の海岸諸国の反応だけでもお聞かせ願えますか？」

低姿勢で、キュイランスが頼み込んでくる。夏希はしばらく考えてから、教えてやることにした。公式には未公開情報だが、各国が委員会と対策群に協力することはいずれ公表されるはずだし、ここでキュイランスにそのことを伝えれば、ワイコウ市民のあいだに情報が広まって、ワイコウ政府に対する圧力になるかもしれないと考えたのだ。

「やはりそうですか。この件に関して、ワイコウは孤立したのですね」

夏希の説明を聞いたキュイランスの表情が、曇った。

「カキ国王は、何を考えているの？ このままだと、ワイコウの立場が悪くなるだけよ」

「わたくしの分析によれば、玉座維持のために必死になられているのだと思います」

夏希の問いに、キュイランスが苦々しげに答える。

「玉座維持？ 玉座を追われそうなの？」

「今すぐに、と言うわけではありませんが、カキ国王には敵が多いのです」

心持ち声を潜めながら、キュイランスが続けた。

「実績を挙げ続けなければ、政敵の勢いが増してしまいます。ですから、陛下は強引な政策を取り続け、それなりに成果を挙げ続けました。魔力の使用をやめれば、ワイコウは混乱し、陛下を支持する者は減るでしょう。政敵の思う壺です」

「そうなんだ」

夏希はしばし考えた。この怪しげな賢者の分析が正しければ、これは使える情報である。カキ国王に、政権維持の手伝いをしてやるから魔術の使用をやめろ、と提案することもできるし、その政敵とやらと手を組んで、クーデター成功の暁には魔力の源を引き渡してもらおう、という方策も考えられる。

全面的に信用したわけではないが、この男は見えそうだ、と夏希は判断した。

「ねえ。これからもたびたび会えないかしら」

「ありがたいお申し出です、夏希様。……しかし、わたくしはどうかやれば皆様にお会いできるのでしょうか？」

「そうねえ。わたしが外へ出られない以上、あなたにここへ来てもらうしかないわね」

「雨季が終わると、庭園内に忍び込むのは難しくなりますが」

キュイランスが、遠慮がちに指摘する。

「そうか。直接会うのが無理ならば、手紙のやり取りをするくらいしか方法はないわね」

夏希は首を傾げて考え込んだ。いまだこの地の文字の読み書きはできないが、他に方法はないだろう。夏希はその視線を、そばで見守っているコーカラットとユニヘックヒューマに向けた。

「やっぱり、コーちゃんに頼むしかないわね。魔物がふらふら飛んでいるくらいなら、警戒されることもないでしょうし、魔物に喧嘩を売ろうとするほど愚かな警備兵もいないでしょう。彼女を使って、手紙のやり取りをしましょう。この近くに、目立つ建物とかない？」

夏希にそう問われ、キュイランスが腕を上げてある方向を指した。「あちらの方角、境界柵から半シキツホほどのところに、中央に井戸がある小さな広場があります。うまい具合にそこに叔母の家があるので、使ってください」

「じゃ、用事があるときはコーちゃんに手紙持たせて送り出すわ。

刻限は……お昼過ぎにしましょうか。何か連絡したいことがあったら、合図して。そうね、窓辺に布切れ置いとくとかなにかして」

「では、こちらからご連絡したいときには、窓から紅い布を垂らしておきましょう。どの窓かわかるように、帰ったらさっそく布を垂らしておきます。手紙は、その窓から放り込んでくだされば、わたくしが回収いたします」

キュイランスが、うなづく。

「そういうことで、頼めるかしら、コーちゃん？」

「お易いご用なですう。なんだか秘密めいていて、面白そうな

のですう〜」

嬉しげに、コーカラットが触手を揺らす。

「では、わたくしはこれで失礼します」

一礼して、キュイランスが茂みの中へと消える。

「面白そうなので、わたくしも一枚噛みたいのです！」

それを見送ったユニヘックヒューマが、夏希に向けて主張した。

「そうねえ。じゃ、手紙の代筆を頼むわ。ユニちゃん、字は書けるでしょ？」

「もちろんであります！」

ユニヘックヒューマが、嬉しげにステッキを振り回す。

51 船上の会食（後書き）

第五十一話をお届けします。

雨季が終わった。

夏希はハンジャーカイで、比較的のんびりとした時を過ごしていた。委員会の仕事が少なく、自由に使える時間が多かったのだ。タナシスへ送った親書の反応ははまだ皆無だし……ラドームの女王が直接受け取って、タナシス本国へ届けることを確約してくれた、との報告は届いていたが……ワイコウに対する人間界縮退問題協力への説得も、相変わらず不調である。サーイエナ率いる対策群の監視部門は、精力的に魔界との境界で観測を継続しているが、こちらもはかばかしい成果は挙げていない。

他の四人の異世界人は、いずれも精力的に動き回っていた。駿はその巧みなプレゼンテーション能力を活かし、平原共同体の前身ともいうべき『平原諸国連絡会議』を立ち上げることに成功していた。これは、各国の外交当局者がハンジャーカイに常駐し、本国と常に連絡を取りながら定期的に会合を持ったための組織である。その主たる目的は、会合を通じて各国の対外的政策をオープンにして、その利害調整を行うとともに、紛争の発生を未然に防ぐことにある。

拓海と生馬が主導する平原統合軍結成も、徐々にではあるが準備が進んでいた。『平原統合訓練部隊』との名目で、各国から防衛隊の一部を割いてもらい、ハンジャーカイに集めて再編成し、訓練を施しているのだ。平原共同体が未成立なので、彼ら兵士の所属はあくまでそれぞれの出身国に止まっている。……個々の兵士の忠誠の対象が曖昧なまま、異世界人に軍勢の指揮を任せるほど、平原諸国はお人よしではないのだ。この訓練部隊が正式に統合された戦闘集団になるためには、その忠誠心の対象たる平原共同体が正式に発足する必要があった。

一方凜は各国から出資者を集め、平原最北端にあるマリ・八に『ノア川水運商会』を立ち上げる準備を進めていた。いわば国策会

社ともいえるこの商会の主たる業務は、その名の通り平原・ルルト間の水上輸送である。この商會が活動を始めれば、自前で船を持ってない零細商人でも、契約すれば海岸との貿易を行えるようになる。商會の業務は輸送のみであり、直接商品を扱うことはない。他の大商人の商売を圧迫することもない。

すでに資本力に優れ、目先の利く何人かの大商人は、船を仕立ててノノア川をルルトまで往復する商売を開始し、かなりの収益を上げていた。いまだ量的にはわずかだが、ここハンジャーカイのメイストリートでも、海岸地帯の産物……色鮮やかな染料、綿で作られた衣類、日持ちのする食品……乾燥海産物やオリーブオイル漬け、あるいは塩漬けの魚、干しブドウや炒った落花生などが小売されているのを頻繁に見かけるようになった。

平原産の産物も、ルルトで好評を得ているとの噂だった。特にハナドーン産のチークに似た材木は、ワイコウ産の物より質が良い。そう、オープアやラクトアスに転売することで、ルルト商人はすでにかなりの利益を上げているらしい。

異世界人たちの努力は徐々にではあるが実りつつあった。

「で、今日は何の集まりなんだ？」

冷やしたお茶をすすりながら、生馬が尋ねる。

異世界人五人は、凜の家を集っていた。一応、五人ともハンジャーカイに家なり宿舍なりを持ってはいるが、常駐しているのは委員会の仕事がある夏希と平原統合訓練部隊に関わっている生馬と拓海だけである。凜と駿は留守にしていることが多かった。五人が顔を合わせるのは久しぶりであった。

「第一部は報告会よ。第二部は、凜ちゃん特製手打ち蕎麦の賞味にやにやしなから、夏希は告げた。」

「蕎麦か！ いいな」

拓海がはしゃぐ。

「打ちたてを食べてもらいたいから、あたしは第一部欠席ね。夏希に代行してもらうわ。資料は渡してあるし」

凜が言っつて、台所へと消える。そこでは侍女のミュージーナが、すでに下ごしらえに入っていた。

「海岸諸国では、わずかだけソバを栽培してるの。パンケーキみたいにして焼いて食べるのが主で、麺にする習慣はないけどね。凜が、知り合いの商人に頼んでかなりの量を買ってきてもらったそうよ」

夏希は男三人に向け解説した。

「じゃ、さつそく始めるか。最初は……やっぱり懸案の人間界縮退問題からだな」

相変わらず議長役を務めるつもりか、拓海が夏希を指名する。

「進展なしね。タナシスからの返事はまだ。ワイコウに対する説得も不調。ルルトやオープアがかなり強い圧力を掛けてくれているんだけどね」

「カキつて国王が難物だな。いつそのこと、排除しちまうか」

拓海が物騒なことを口にする。

「政治的に排除する、というわけだね。成功の可能性はあるのかい？」

からかうように、駿が訊く。

「探せば反体制派の馬鹿の一人や二人、見つかるだろう」

「馬鹿の一人や二人つて……」

絶句しかけた夏希を見て、拓海が笑う。

「政治的暗殺に、頭に血が昇った馬鹿な若者を使うのは歴史的にも常套手段だよ。成功しようが失敗しようが、都合よく使い捨てができるからね」

「まあ確かに、手元に入っている情報から考えれば、カキ国王を排除すればワイコウが軟化する可能性は高いな。国内にも結構敵を抱えているようだし」

生馬が、口を挟んだ。

「僕のつかんだ情報では、クーデターを起こすのは無理だね。国軍は、カキ国王を支持しているから。むしろ、一部貴族と商業界、それに一般市民の中に反国王派が多いようだ。まあ、いずれにしろデータ不足だね。情報収集の強化を献策してみるよ」

駿が言った。拓海がうなずく。

「よろしく頼むよ。それで、サーイエナの方はどうなんだ？」

「対策群も進展なしね。縮退の速度は以前と変わらず。止める方策もなし。お手上げに近いわ」

夏希は首を降った。

「当面タナシス関係は手の打ちようがない。ワイコウ対策に努力を傾注するしかないか」

生馬がまとめる。

「そうだな。じゃ、凜ちゃん代理、引き続き報告を頼む」

拓海が夏希を再び指名する。

「こちらは大成功。各国の商人が、こぞってルルトとの交易を開始したわ。ルルトとのトラブルは報告されていない。平原各国の経済もかなり活性化された様子。詳しい統計はないけれど、海岸産品の流入は市民の消費欲を刺激してるわね。ただし……」

夏希は凜の丸っこい文字がびっしりと書き込まれているメモを繰った。

「価格的には、品薄ゆえかなり高価で売られているわ。干し鮑の小売価格が、昨日現在でルルトの約五倍。無染色の綿布が同質品で三倍半。もう少し流通量が増えないと、一般庶民にはそうそう買えない値段ね」

「いずれにしても、税収は増えるな。いいことだ」

生馬が、満足げに言う。

「ワイコウの様子はどうなんだ？ 商売の邪魔されて、怒ってないか？」

拓海が訊いた。

「まだ反応はないみたい。こちらの貿易量が少なすぎて、まだ影響

が出ていないのかもね。商人の中にはかなり大規模かつ長期的な輸出契約をルルト商人と結んだ者がいるという報告が入ってきてるし、噂ではルルトとオープアの商人を介して、オープア海軍へ船材を納入する契約を勝ち取った商人もいるらしいわ。それらが顕在化したら、ワイコウが怒るかも知れないけど」

「平原内で勝ち組国家と負け組み国家ができてしまうのは、懸念材料だね」

駿が、口を挟んだ。

「海岸諸国はレベルの高い金属製品を製造しているから、ススロンやニアンは輸出するものがない。牧畜も盛んだから、フルームも同様。材木を売れるハナドーンや、麻を輸出できるケートカイは大儲けするだろう。これらを調整してやらないと、国家間の反目が起きかねない」

「それを何とかするのが、『平原諸国連絡会議』だろ？ 期待してるぜ」

拓海が、気安い調子で駿の肩を叩いた。駿が、苦笑する。

「あと、報告しなきゃいけないのは……そうそう、ハナドーンで、新たに川船製造の商会を造ろうという構想があるわ。凜ちゃんのアイデアでは、これに出資できるのはその『負け組み』国家の商人中心にしよう、という計画ね。貿易が拡大すれば、当然川船の需要も伸びるはずだから、成長産業となるはずよ」

「いい案だ。賛成だな」

生馬が即座に賛意を示す。駿と拓海も、同調した。

「凜ちゃんの報告はこんなところね。では次は……駿？」

「ご指名ありがとうございます」

芝居がかって一礼した駿が、手元のメモに目を落とした。

「とりあえず平原諸国連絡会議は無事発足した。今のところ、各国ともかなり位の低い外交官……まあ、現代風に言えば課長クラスしか送ってきていないが、これを少なくとも次官クラスに上げようと骨折っているところだ」

「でも、凄い成果ね。短期間で十カ国以上を説得して、連絡会議を発足させちゃうなんて。さすがは駿、ってとこね」

夏希は褒めた。

「駿のプレゼンテーション能力の賜物だな」

拓海が、感心したように言う。

「俺も一回つきあつたことがあるが、こいつの弁舌は見事なもんだ。それに加え、色つきの図表やら統計のグラフとか見せながら説得するんだぜ。円グラフとか折れ線グラフの概念を説明された役人など、半ば腰を抜かしてたよ。彼らから見れば、駿は天才に見えたことだろうな」

「それはともかく……この地では国際社会の組織化、という概念が希薄だからね。平原諸国連絡会議にそれなりの権限と機能を持たせるには、根拠となる国際法を法典化するところから始めなきゃならない。とりあえず、平原諸国の多国間条約として平原諸国連絡会議基本法を制定する準備を進めているところだ。いずれはこれを平原共同体基本法に昇華させねばならないが……まだだいぶ先の話になりそうだね。僕からの報告は、以上だ」

苦笑いした駿が、話を締めくくった。

「じゃ、俺と生馬の番だな。平原統合訓練部隊は、いまのところ総兵力二千名。もつとも、これは登録上の人員だ。実際にハンジャーカイに常駐しているのは、この三分の一程度。出身国を無視して各国混成で再編成し、訓練している。言葉が通じるのが、幸いだな」

「言葉つて……魔術を掛けてもらってるから、通じるのは当たり前でしょうに」

夏希はそう突っ込んだ。

「いやいや。兵士相互の言語だよ。これが通じないと、共同行動など取れないだろ？ 異世界の場合だと、下手すりゃ同じ国の出身なのに、言語による意思疎通が不可能だったりするからな」

「ああ。バイリンガル国家とか？」

「いやいや、日本の話だ」

拓海が、笑う。

「昔は郷土連隊などと称して、駐屯地周辺で徴兵された者は地元  
の連隊に配属させたんだが、その制度採用理由のひとつに異なる地方  
出身者同士では会話に不自由する、という事実もあったんだ。標準  
語が日本全土に広まったのは、テレビ放送普及以後の話だからな。  
明治時代に博多弁の兵士と秋田弁の兵士が細かい打ち合わせに苦労  
している様子を想像してみろ。ほとんど漫才だぞ」

「そう言えば……魔術におんぶに抱っこで気付かなかったけど、こ  
この言語にも方言とかあるのかしら？」

夏希はもつともよく当地の言語に通じている駿にそう尋ねた。

「方言とまではいかないが、訛りはあるらしい。高原訛り、平原訛  
り、海岸訛りみたいな感じでね。僕には差異は聞き取れないけど」

「言語の魔術といえば、その効果が半永久的で良かったな」

ぼそりと、生馬が言った。

「半年に一回掛け直さなきゃならない、とかだったら、俺たちは否  
応なしにここの言語を学ぶはめになっていたはずだ」

「生馬は英語苦手だったからねえ。イギリス人の血が入ってるくせ  
に」

「うるさい」

からかった拓海の頭を、生馬が平手でぺちんと叩く。

「え。生馬にイギリス人の血が入ってるの？」

夏希は驚いて確かめた。むろん、初耳である。

「内緒にしとけて、言つてただろ」

やや恥ずかしげな生馬が、拓海を睨む。

「学校じゃ黙っとけ、と言われたが、ここは学校じゃないしな。も  
うばらしてもいいだろ？」

悪びれた様子もなく、拓海が言う。

「こいつの母方のばーちゃんは、生粋のイングランド人だ。日本人  
と結婚して、横浜に住んでる。生馬ん家で何回か見かけたことある  
が、銀髪で品のあるご婦人だよ。ただし、背は高い。夏希と同じく

「らいあるんじゃないかな」

「高身長は遺伝子ゆえか」

駿が、言う。

「父方の家系は九州男児なのに、妙に色白なのもそのせいだろうか」  
拓海が、続けた。生馬が、その口を塞ごうとする。

「家系ネタはやめろ」

「イギリス人か。じゃ、クォーターってことね」

夏希はじゃれあっている二人を眺めながらそう言った。

「そう言えば……生馬を召喚する時、僕たちはイギリス人かフランス人がいい、ってエイラに注文した覚えがあるんだが」

不意に、駿がそんなことを言い出す。夏希はうなずいた。

「そうだった。思い出したわ。イギリス人かフランス人の軍人を所望したんだっけ」

「で、生馬が召喚されたわけか。じゃあ、まるつきり外れたわけじゃないかったんだな。一応、イギリス人の血を引いている侍の家系だし」

拓海が感心したように言う。

「凜の時は、わたしとの相性を重視して日本人を指名したのよね。で、駿の時も日本人指名で、学究肌の人を頼んだのよ」

その頃を思い出しながら、夏希は言った。それほど前ではないのに、なぜだかずいぶんと昔の話に思える。

「ふむ。一応、注文通りの人物が召喚されたわけだ」

生馬が、駿を見やる。

「生馬も……こうして見ると外れじゃなかったのよね。ちゃんと、役目は果たしてくれたわけだし」

夏希はそう言った。自分も含め、異世界人はみなそれなりに期待通りの活躍をしていると言えないこともない。

「拓海は指名して召喚したようなもんだっただしな。今まで、エイラの召喚の腕前はひどくい加減なものだと思っ込んでいたが……自賛するわけじゃないが、意外にベストに近い人材を召喚していたの

かもしれないな」

生馬が、感慨深げに言う。夏希も同意してうなずいた。

「そうね。最初がわたしだったから、その近くにいた適切な人物を召喚したら、たまたま全員が同じクラスだった、というだけなのかも知れない」

「さて、そろそろ終わったかな？ 茹でに入ってもいいかな？」

凜が、顔だけを部屋の中に突き出す。

「だいたい終わったよ。頼む」

拓海の言葉に、凜がうなずいて引っ込む。ミュージーナが、テーブルの上に箸やグラスを並べ始めた。桶で冷やされた日本酒も運ばれ、拓海がさっそく四つのグラスに中身を注ぐ。

次いでミュージーナが運んできたのは、天ぷらが大盛りになされた大きな皿であった。野菜天が三分の一、掻き揚げが三分の一くらいを占めている。

「これは美味そうだ。でも、どこで小麦粉手に入れたんだ？」

生馬が首をひねる。

「それは米粉の天ぷらよ。丁寧に細かく挽けば、小麦粉と同様に使えるの。この天つゆで食べてみて」

小さな壺を手に出してきた凜が、言う。

夏希は小鉢に天つゆを注ぐと、匂いを嗅いでみた。しっかりとした醤油の香りがする。

「うん。ちよっと甘口だが、美味しいよ」

早くも天ぷらにかじりついた生馬が、褒める。

夏希も掻き揚げをひとつ取って天つゆに浸け、かじってみた。油気の中に、煮干っぱい出汁の香りが感じられる。掻き揚げ自体は、数種の根菜と葉物野菜、それに干し貝柱や干し海老、それに正体不明の灰色の小球が混じった贅沢なもので、からりと揚げられていた。

「おまたせ」

凜が、大きな盆を持って現れた。各人の前に、小笹に入った蕎麦を置いてゆく。

「香りがあんまり良くないけど、一応十割蕎麦よ。つなぎは山芋っぱいのを手に入れて使ったの。薬味は葱とわさびもどきね。わさびもどきの方も、東群島産のより香りの強いホースラディッシュに切り替えたから、味は良くなっていると思う」

夏希は薬味を入れずに、とりあえず蕎麦を汁に浸して食べてみた。懐かしい味と香りが、口いっぱい広がる。

「いやいや。これだけ美味けりゃ上出来だよ、凜ちゃん」

上機嫌で、拓海が褒めた。

「お代わりはあったかい蕎麦もあるけどどうする？ 天ぶら載せて食べてもいいし」

凜が、訊く。

夏希は温かい蕎麦を頼んだ。生馬と駿も同様に温かい蕎麦を注文したが、拓海はよほど笹蕎麦が気に入ったらしく、そちらを三枚注文する。凜が笑って引つ込むと、すぐに笹蕎麦を持ってきた。夏希らには、ミュージーナがどんぶりを持ってきてくれる。

「一味あるけど、使う？ 香りは強いけど、あんまり辛くないから、かなり入れても大丈夫だよ」

凜が、小さな竹の容器に入った一味唐辛子を差し出した。

夏希は蕎麦の上に、三種類の野菜天と掻き揚げひとつを載せた。

一味を控えめに一振りしてから、掻き揚げをちよつと崩し、蕎麦に絡めてひと啜りする。

「おいし〜」

鰹出汁でないのが残念だが、それでもしつかりとした出汁と醤油の味わいが、蕎麦の香りと天ぶらの具材の旨み、そして油が一体となって、舌と鼻腔を刺激する。

「どうやら醤油もいいものができたみたいだね」

汁を美味そうにすすった駿が言った。

「わさびもどきも、チューブ入りの練りわさびくらいレベルには達したな。これに海岸諸国の魚介を合わせれば、本格的な寿司ができんじゃないか？」

ようやく座って笹蕎麦を食べ始めた凜に、拓海が期待を込めた視線を向ける。

「そうね。あ、醤油と言えば、将来ルルトあたりと合併で海岸に醤油工場を建てる構想があるの。やっぱり、大豆の産地でないと生産効率が悪いし。雑穀類も海岸地帯のほうの種類も豊富だから、いいものが作れそうだし」

「雑穀？」

「小麦代わりよ」

夏希の問いかけに、凜が答える。

「醤油つて、小麦も使うの？」

「普通の醤油は、大豆とほぼ同量の小麦を使うのよ。大豆だけでも作れるけど、香りがいまひとつなの。代用として、数種の雑穀を念入りに細かく挽いて、よく煎ってから入れてあるんだけど、なかなか思ったような風味が出なくて。……それはともかく、この地の風土や食品、それに食習慣からして、醤油は受け入れられると思うの。ぜひ大量生産して、広めるべきだよ」

凜が、力説する。

「それには賛成だが……やっぱり小麦粉がないと食のバリエーションが寂しくなるな」

野菜天をつまみながら、拓海が言う。

「そうよねえ。パスタ、食べたいなあ」

夏希はぼやくように言った。海岸諸国で、オリーブオイルを使った魚介類の料理を何度も食べたので、余計にパスタへの郷愁が募っている。

「じゃ、次回は米粉パスタにしましょうか。芋系の澱粉をたっぷり混ぜれば、たぶんそれなりの麺はできると思うし」

凜がそう宣言する。夏希はすぐさま魚介系のパスタを注文した。それに対し、生馬がペロンチーノを、拓海がミートソースパスタを、駿がカルボナーラを所望する。

「めんどくさいから、どれかひとつに統一してよ」

凜が、顔をしかめる。拓海が、訊いた。

「凜ちゃんは、何が食べたいんだ？」

「あたしは和風ソースが好きなんだけどね。きのことかたつぷり入れて、ちよつと甘口にして、醤油で仕上げるの」

「見事に意見が分かれたな。ここは公平にジャンケンでもするか？」  
生馬が、そう提案する。

「まずは、作りにくいものから消去していけばいいんじゃないか？」  
駿が、知性派らしい提案をした。

「そうね。魚介系のパスタは、鮮度のいい貝が手に入らないから、難しいわね。乾物で代用はできるけど。カルボナーラも難しいわね。チーズも生クリームもないし。パンチエッタもどきはあるけど。ミートソースも自信ないな。このトマト、火を通して旨みが薄いよ。よく煮込んで、こくが出ないと思う。ニンニクや唐辛子はすぐに手に入るし、オリーブオイルはだいたい出回るようになったから、作り易いのはペペロンチーノかな？」

首をかしげて考えつつ、凜が言った。生馬が、控えめにガッツポーズを取る。

「ロングパスタの作り方から研究しなきゃならないから、時間がかかると思うけど、今回はそういうことで。あ、まだお蕎麦残ってるから、お代わりが欲しい人はどうぞ」

凜の言葉に、生馬と駿がどんぶりを、拓海が箸を突き出した。

「夏希は？」

「遠慮しとくわ」

食べたいのはやまやまだったが、海岸諸国訪問で増加した分の体重が……体重計はないので、あくまで推定値だが……まだ落ち切っていない。蕎麦ならそれほど悪影響はないと思うが、ここは自重すべきだと、夏希は判断した。

「じゃ、蕎麦湯持ってきてあげるね」

凜が、『わかってるわよ』的な視線を夏希に投げかけ、席を立った。旺盛な食欲を見せて蕎麦を美味そうにすすりこむ男三人の様子

を羨ましげに眺めながら、夏希は出汁の利いた汁を熱い蕎麦湯で割って、わびしげにすすった。

52 蕎麦（後書き）

第五十二話をお届けします。

### 53 通行税

「ちよつと夏希。駿見なかった？」

慌てた様子で委員会本部に凜が駆け込んできたのは、夏希がエイラとともに優雅に午後のお茶を楽しんでいる時間帯だった。

「今日は見てないけど……ハンジャーカイにいるはずよね」

とりあえず座るように手で促しながら、夏希は応えた。

「何があつたのですか？」

凜のためにお茶を煎れてやりながら、エイラが訊く。

「マリ・ハから急使が来たの。ワイコウが、ノノア川で通行税を取り立て始めたらしいわ」

しかめっ面で、凜が告げる。

「あらまあ」

ノノア川は、平原地帯と海岸地帯を結ぶ唯一の通行路、と言つていい。ワイコウまでは整備されていないが川沿いに街道があるし、海岸山脈を越える数本の山道の存在も知られてはいるが、それらは徒歩で利用することを前提としたルートである。貨物輸送を行うには、ルルト川を利用するしかない。

「通行税つて、どのくらいの額なのですか？」

お茶を入れたカップを凜に勧めながら、エイラが訊いた。

「詳細はわからないわ。でも、法外な額であることは確かね。抗議した商人が、ワイコウの役人に拘束された、という報告も入ってるから」

憤然としたまま座つた凜が、カップを手にする。

「じゃ、完全に外交問題化しちゃうじゃない」

「だから、駿を探してるのよ。拘束された商人は複数で、しかも三カ国くらいの所属だから、平原諸国連絡会議にもなんらかのアクシヨンを起こしてもらわないと。海岸諸国へも連絡を取って、早急に手を打たなきゃ」

「しかし、通行税とは考えましたね。協定によって、そこを通る商人は平原諸国の者に限られている。税の分を商品に上乘せすれば、おそらくはワイコウ産の商品と価格面で競争できなくなる。ワイコウ自体も、税収で潤う」

エイラが、そう分析してみせる。

「お話中申し訳ありませんがあゝ」

部屋の隅で浮いていたコーカラットが、すうつと凜に近付いた。

「なに、コーちゃん」

「駿様なら、先ほどわたくしが散歩中にお見かけしましたあゝ。街の西の方の大通りを、女性の方と一緒に歩いておられましたあゝ」

「西の方？ 宿舎とは反対方向ね」

夏希は首を傾げた。一緒にいた女性というのも、ちょっと気になる。

「もしよろしければ、お探しまいりましようかあゝ」

コーカラットが提案する。

「そうね、頼むわ。エイラ、いい？」

凜が、使い魔の主人に許可を求める。

「もちろん結構です、凜殿。コーちゃん、頼むわね」

「はいいゝ。行ってまいりますですうゝ」

エイラに頼まれたコーカラットが、急いで部屋を出て行った。

わずか五分ほどで、コーカラットは駿を伴って帰ってきた。その早さと駿の髪が乱れている様子からして、おそらく抱えて飛んで戻ってきたのだろう。

「ノア川は複数の国家を貫流し、外海へと繋がっており、しかも船舶が航行可能な自然水路だ。国際法上は明白な国際河川と定義しうる。特定国家が、通行税を徴収することは認められないよ」

凜から状況を説明された駿が、顔をしかめた。

「まあ、この世界でそんなことを言っても、ワイコウは聞く耳を持たないだろうけどね」

「とりあえず外交官を送って抗議する。他に打つ手はないかしら」  
凜が、駿に訊く。

「海岸諸国の応援を当てにすべきだね。聞いた話では、ルルトやオ  
ープアは海洋自由の原則を理解しているようだし」

「海洋自由の原則？」

「領海外……つまり公海は、いかなる国家も自由に経済活動を行え  
る、という海洋国際法の基礎的な概念だ。ルルトもオープアも海洋  
国家らしいからね。この原則を無視して、沿岸国家の主権が外洋に  
まで及ぶと定義すれば、商船の通行さえ阻害されてしまい、通商が  
不可能になってしまう。異世界の方は、大陸棚開発能力の高まりや  
漁業資源の枯渇で排他的経済水域の設定がトレンドだが、それでも  
通行の自由は堅持されているし。……ちょっと話がずれたな。とに  
かく、海洋にしる河川にしる、沿岸国によって自由な往来が阻害さ  
れることのデメリットを、両国は理解しているはずだからね。味方  
に付けるべきだ。いずれにしても、この件に関してはもっと調査が  
必要だな。歴史的に、この世界で河川通行税の徴収が認められてい  
たのか、とか調べないと」

「昔はあちらでもあったみたいだしね。ライン川とか、ドナウ川と  
か有名だし」

歴史通の凜が、言う。

「日本でもあったね。たしか、河手かわてとか呼ばれていたはずだ」

「適正な金額なら、認めてもいいと思うけど、どう考えてもワイコ  
ウの目的は単なる通行税の取立てじゃないもんね」

夏希も言った。駿が、同意のうなずきを見せる。

「ともかく、もっと情報が必要だね。特に、今回のワイコウの企て  
の真意を知る必要がある。平原商人によって商売を圧迫されたワイ  
コウ商人が、妨害目的でワイコウ政府にやらせているのか、それと  
も力キ国王が事実上のノア川封鎖を目指してやっているのか、あ  
るいは単なる平原諸国への嫌がらせ、あるいは挑発行為なのか。ひ  
よっとすると、ノア川中流域の実効支配を目指すための実績作り

「かも知れない」

「実効支配？」

「通行税の取立てを各国が承認すると言うことは、当該地域におけるワイコウの主権を国際的に認めることになる」

駿が、説明する。

「いずれにしても、ワイコウのこの行為は平原諸国連絡会議が目指す『国際協調』と『自由な商業活動』の理念に反する。早めに芽を摘んでおくほうがいい。拘留された国の外交官がワイコウに抗議に行く時には、僕もついていこう。ワイコウ国内で、情報収集をした  
い」

「さすがの駿でも、それは難しいと思うな」

凜が、言った。

「ワイコウの警備は厳しいの。外交関係者は勝手に出歩くことすらできないわ。宿舎に缶詰よ」

「それはまずいな。この手の情報収集は、事情通の市民に時間を掛けてじっくりと話を聞く、というのが一番効果的なんだが」

駿が、腕を組む。

「あ、わたしが役に立てるかも」

夏希は、ワイコウの賢者キュイランスとの約束を、駿らに披露した。

「胡散臭い奴ね。しかも、拓海に似ているなんて余計に怪しいわ」

凜が、鼻にしわを寄せる。

「信用できるのかい？」

にやにやしながら、駿が訊く。

「たぶん。ワイコウ側の回し者や悪人には見えなかったわ。そうでしょ、コーちゃん」

夏希は、キュイランスに会ったことのあるコーカラットを振り仰いだ。

「少なくとも、嘘をつく方には見えませんでしたあゝ」

コーカラットが、夏希の見解に同意する。

「いいだろう。君も一緒に来てくれ」

納得した駿が、夏希を見据える。

「あ、でもそうすると、連絡役にコーちゃんが必要になるわ。エィラ、しばらくコーちゃん借りていいかしら？」

「もちろん構いません。コーちゃん、いいわね」

「承知しました、エィラ様あゝ」

翌日までに、平原商人拘留の報は平原全土に広まった。ワイコウ当局に拘留された商人の数は合計五名。その国籍は、エボダが二名、ススロン、ハナドーン、ケートカイが各一名。それとは別に、イヤーラ国籍の船頭がある種の公務執行妨害で捕縛されたとの情報ももたらされた。現在のところ、ノノア川の当該地域……ワイコウ川がノノア川へと合流する地点の、やや上流……の平原所属船舶による物流は、上りも下りも完全に麻痺状態にあった。

午前中に、夏希はアンヌツカとコーカラットを伴って、駿と共に川船でマリ・八に向かった。そこでさらに情報を収集してから、エボダら拘留者を出した国家の外交官到着を待つ。

「すでに平原諸国連絡会議名で、抗議の書簡は送っておいたけど、無視されるだろうな」

早めの夕食を採りながら、駿がぼやくように言う。

「どうやったら解決できるかしら？」

「国際河川は紛争のタネになり易いから、たいてい流域国間で何らかの条約や協定が結ばれているのが普通なんだ。だから、現在では通行権を巡って紛争になることはまずない。土木技術の発達で大規模な水利が可能になったから、水資源を巡っての紛争は増えてきているけど。上流国が巨大なダムを複数建設すれば、水資源の独占的な利用が可能だからね。通行権に関しては……川じゃないが、覚えているのはスエズ運河の例くらいかな。一九五六年、エジプトのナセル大統領がスエズ運河の国有化宣言をした。それに危機感を覚えた

のが、イギリスとフランス。この二カ国が、イスラエルをけしかけてエジプト侵攻を行わせた。これが、いわゆるスエズ動乱などとも呼ばれる第二次中東戦争だ。英仏の目論みは、イスラエルがスエズ運河を押さえたところで介入し、自分たちがスエズ運河を管理すると共に戦争を終わらせよう、というものだった。途中まではこの三カ国の思惑通りに行ったんだが、英仏のやり口が国際社会の非難を浴びた。特にいわゆる第三世界のね。これが、冷戦構造下で第三世界に反共精神を植えつけて味方に引き入れようと骨折っていたアメリカの怒りを買うことになる。そのアメリカがエジプトの肩を持って停戦勧告を出す。当時のソ連はもともとエジプト寄り。国連も、米ソに引きずられるように三カ国の敵にまわった。窮した英仏は撤兵。イスラエルも粘ったが結局撤退。戦術的にも戦略的にも、エジプトは敗北してるんだが、政治的には勝利している。戦争の決着は戦場でつくものではない、という事実の典型だね」

「軍事介入か……。うまく行きそうにないわね」  
ワイコウ訪問を思い出しながら、夏希は言った。ワイコウ王国は平原から見れば大国だし、ワイコウの街はまるで山岳要塞のような佇まいであった。疎遠とは言え、ルルトやオープアと相互防衛条約を結んでいると聞く。平原側の勝ち目は薄いだらう。

翌日の昼ごろになって、ようやく関係各国の外交官がマリ・八に集まった。駿がすでに手配してあった三隻の川船に分乗し、ノノア川を下り始める。旅が始まるとすぐに、駿が荷物の中から紙束を取り出した。

「何してるの？」

「地図作りさ。拓海に頼まれた」

つけペンを握った手をせわしなく動かしながら、駿が答える。

「あれ。ノノア川沿岸の地図なら、平原の有力商人がお金を出し合っ  
て作らせたんじゃないかっただけ？」

夏希は首を傾げた。凜から、そんな話を聞いた覚えがある。

「あれは言わば水路図だよ。平原の船がノノア川を安全に航行できるように製作されたものだ。拓海に頼まれたのは、ちょっと毛色が違うんだ。強いて言えば、戦術地図かな」

「……なに企んでるの？」

「将来、ノノア川沿いで戦争が勃発した場合に備え、地形を詳らかにするとともに、利用できる集落や地物を記載するのが目的だ」

紙と風景に交互に視線を走らせながら、駿が言う。

「先走り過ぎてない？ ワイコウと対立しているとは言え、まだきな臭くもなっていないのに」

「こんな仕事は平時でなきゃできないよ」

駿が、笑った。

「平和だからこそ、可能な情報収集というものがあるんだ。対立が深刻化してからやろうとしても、相手もガードが固くなるからうまく行かないし、時間もない。ネットで検索を掛ければ一発で出てくる、というものじゃないね。情報というものは普段から収集する。その九十九パーセントが無駄になったとしても、残る一パーセントが役に立てばそれでいい。そのくらいの気構えでないと、本当に役に立つ情報は集められないものだよ」

「言いたいことはわかるけど……難儀なものね」

夏希は軽いため息をついた。

雨季が終わっているのです、豪雨による中断がなく行程は捗ったが、出発が遅かったために、湿原地帯の中ほどで日没となり、一行はそこで船中泊した。

翌日の午後半ばになって、三隻の前方に一隻の川船が現れた。舳先で望遠鏡を覗いていたアンヌツカが、小さく舌打ちする。

「ワイコウの兵士が乗っているようです。おそらく止められるでしょう」

アンヌツカの予想通り、川を遡って近づいて来た船から、手振り

で合図が送られてきた。船頭同士が使う、『停船せよ』の合図らしい。先頭に行くこちらの船が、大人しく河岸に寄って停まった。残る二隻も、それに続く。

「こちらはワイコウ王国通商部です。そちらの船の国籍と航行目的および目的地を申告してください」

近づいて来たワイコウ船に乗る男……見るからに役人臭い……が、意外と丁寧な口調で呼びかけてくる。

「この三隻の所属はマリ・ハだが、乗っている者はエボダ、ススロ、ケートカイ、イヤーラ、ハナドーンの外交官とその随員および護衛、平原諸国連絡会議関係者、それにジンベル貴族とその護衛だ。目的地はワイコウ王都。目的は、ワイコウ外務当局者との協議だ。外交使節としての待遇を要求する」

やや高飛車に、駿が告げる。……相手を小役人と見切った上での対処だろう。

「了解しました。五シキツホ下流に通行税徴収所があります。そこで停船し、手続きしていただければ、王都までご案内いたします。もちろん、通行税は免除させていただきます。ご協力、ありがとうございます」

丁寧な物腰で役人が応じ、一礼する。

三隻の川船はすぐに岸辺を離れた。わずかに下ったところで、いかにも急造の棧橋が河岸から突き出ているのが見えてくる。そこに舫ってあった川船から、停船の合図が為される。夏希らは棧橋に船を寄せた。出てきた役人に、駿が先ほどと同じ口上を述べる。

「承りました。ご案内のために、こちらの兵士を一人同行させたいのですが、乗船を許可していただけますでしょうか」

初老の、結構偉そうな役人が丁寧に尋ねてくる。

「もちろん結構です。ですが、ここで休憩などさせてもらえませんか？ 茶でもいただければ、ありがたい」

「たいしたおもてなしもできませんが、ご休憩の場所なら準備いたします」

役人の勧めにしたがって、船頭を除く一行は川船を降り、真新しい河岸の小屋に入った。夏希らは出された茶を飲んでしたが、駿だけは小屋の外でなにやら動き回っている。

夏希がお代わりを半分ほど飲んだところで、駿が戻ってきた。

「なにしてたの？」

「情報収集さ。通行税の具体的な金額がわかった。法外な額ではないが、払う気にはなれない金額だね。徴収の目的は、明らかに平原商人に対する妨害だ。ルルトとの交易コストを押し上げさせ、貿易量そのものを減少させようとの意図が感じられる。閉鎖的な国家の関税障壁みたいなものかな。ここの役人の態度は高圧的ではないし、兵士たちものんびりと構えている。敵意は感じられないね」

「とにかく、カキ国王の意向を確認しないと」

駿にお茶を注いでやりながら、夏希はそう言った。

「そうだね。通行税徴収は手段に過ぎない。目的を見極めねば、有効な対抗手段をとることができないからね」

何事もなくワイコウの王都に到着した一行は、すぐに例の豪華な宿舎へと案内された。ちなみに、駿はワイコウへ通じる支流でも、せつせと地図作りに励んでいた。

すでに日没間近だったが、各国外交官と駿は折衝のために王宮へと出かけて行った。

「じゃ、わたしたちも仕事に掛かりましょう」

夏希はコーカラットと共に、与えられた部屋にこもった。紙とペン、それにインクをコーカラットに与える。

「ユニちゃんがないから、代わりに口述筆記をお願いします」

「承知しましたあゝ。ペンをもう一本いただけますかあゝ」

「二本も使うの？」

訝しりながら、夏希はもう一本ペンを渡した。

コーカラットが、二本のペンを別々の触手に握り込む。

「こうすれば、インクを切らさずに連続して書けるのですう」

「なるほど」

つけペンでは、インクを着けている間は筆記できない。二本を交互に使えば、途切れることなく書けるといふ寸法だ。

「じゃ、行くわよ。宛名も差出人もなしで。以下本文。情報求む……」

夏希は頭の中で文章を整理しつつ、口述を開始した。万が一部外者にこの手紙が渡ったとしても、こちらの正体がばれないように気を付けつつ、簡潔な表現を心がける。

「……返信は規定通り願う。協力に謝す。以上。……こんなところかな」

「書けましたあ〜」

インクを乾かすために、紙をぴらぴらと振ったコーカラットが、それを差し出してくれる。受け取った夏希は、手紙にざっと目を通した。

「コーちゃん、きれいな字を書くのね。わたしより上手じゃない。きれいな楷書で……って、日本語！」

夏希は呆れて顎を落とした。

「あのねえ、コーちゃん。この手紙、キュイランスのところに持っていくのよ？ 日本語で書いてどうするの？」

「わたくし、うっかりしておりましたあ〜。申し訳ないのですう〜」  
コーカラットが、恐縮した様子でぺこぺこことボディを前に傾ける。

「まあいいわ。この内容を、そのままこの言葉に直して、書いてくれる？」

「はいい〜。しばらくお待ち下さいい〜」

再び二本のペンを触手に握ったコーカラットが、新しい紙にすららと文字を書き連ね始める。

「書けた？ じゃ、適当に折り畳んで。届ける場所は覚えてるわね？」

「はいい〜。キュイランス殿の叔母様のお家の、二階の西側の窓ですう〜」

「散歩してるふりしてね。時間掛けて、あちこちふらふら飛んできていいから」

キユイランスとの取り決めのあと、夏希は怪しまれないように何度かコーカラットを空の散歩に送り出していた。警備の兵はあからさまにいやな顔をしたが、魔物のすることだからと咎めだてされたことはない。今回も、阻止されることはあり得ないだろう。

「では、行ってまいりますう」

手紙を垂れ下がった触手の中に隠したコーカラットが、開いたままの窓からふわふわと漂い出た。日が落ちて薄暗くなった空に、のんびりとした様子で上昇してゆく。

「頼んだわよ、コーちゃん」

夏希はつぶやくと、紙やペンを片付け始めた。

53 通行税（後書き）

第五十二話をお届けします。

## 54 マンテムス氏事件

夏希が驚いたことに……いや、駿も驚いていたのだが……拘留されていた五人の平原商人は、外務当局者との短時間の折衝の結果、無条件であつさりと釈放された。ただし、公務執行妨害で捕縛されたイヤーラ国籍の船頭に関しては、兵士に対する暴行があつたために、無条件とは行かなかつた。しかしこれも、イヤーラの外交官がかなりの金額を罰金として納めるといふ条件を呑んだために、翌朝には釈放される運びとなつた。

「いやに低姿勢だな」

朝食の席で、駿が言つた。

「こちらを早く追つ払おうという魂胆じゃないの？」

朝粥を食べながら、夏希は意見を述べた。

「それはあり得るね」

駿が、同意する。

「ところで、そちらの情報収集は進んでるかな？」

「うまく行けば、お昼過ぎには第一報が手に入るわ。駿の予定は？」

「一応昨日の時点で、通商や財務官僚との会見の約束を取り付けておいた。各国外交官と一緒に臨んで、通行税に関して抗議する予定だ。たぶん、暖簾に腕押しだろうがね」

苦笑いしつつ、駿が言う。

「このまま通行税を取られ続けるとしたら……こちらはどんな対抗策が取れるかしら」

「ルルトとの交易は細るしかないね。通行税は積荷の内容に関わらず一律だから、よほど単価の高い商品を商わない限り、まともな儲けは出ないだろう。経済的にこれに対抗するのは無理だ。補助金など出したら、たちまち平原諸国の財政が干上がってしまう。とりあえず外交圧力を掛けて、通行税の減額を迫るしかないね」

「通行税の徴収が無効、みたいな攻め方はできないの？」

漬物に箸を伸ばしつつ、夏希は訊いた。

「ざつと調べて見たが、ノノア川に関して国際的な取り決めがかつて行われた記録はないようだ。平原地帯の国家が独自に自国内を流れる河川で通行税を取り立てたことはあったようだが、これはあくまで自国民に対する課税であって、今回とは異なるものだ。ワイコウが税金徴収を始めたルルト川のあの辺りは、歴史的に見てもワイコウが長年実効支配している土地なんだよ。これは、他の海岸諸国も承認している。当地での慣習法に基づけば、通行税の取立ては残念ながら違法とは言えないね。もっと上流……例の入植地カキ・セドあたりで徴収しているのならば、その土地はワイコウ領土として国際承認を得ていないから、違法だと糾弾できるんだが」

「いずれにしても、儲けの大半を吐き出さなきゃならない通行税なんて、嫌がらせだわ。なんとかしないと」

唸るように、夏希は言った。駿が、同意のうなずきを見せる。

「海岸諸国、特にルルトは当てにしていると思う。すでに平原との交易で、かなり儲けているはずだからね。これが激減するとなれば、さしもの大国もかなりの打撃だろう。先の交易協定を改正して、ルルト商人がマリ・ハのみと直接交易できるようにする、というアイデアは思いついたよ。ワイコウがルルト商人から通行税を徴収すれば、当然ルルトの市民感情は反ワイコウに傾くだろう。ワイコウがルルト商人に免税特権を与えれば、そもそも通行税の徴収自体に法的な根拠がないと宣言するようなものだ。税の徴収は平等が原則だからね」

「……海岸諸国の圧力にも屈さなかったら？」

「方法はふたつしかないな。ルルトとの交易を諦める。そうなると海岸諸国との関係は冷却化してしまう。人間界縮退問題解決のためには、タナシスとの交渉を進めなければいけないが、それには海岸諸国の協力が必要不可欠だ。言うまでもなく、平原も高原も、外洋航海のノウハウはもちろん、まともな海洋船舶一隻すら持っていないからね。これじゃ、タナシスに手紙一本送れやしない。ふたつ目

の方法は……武力干渉だな」

「やっぱりそうなるのね」

夏希はため息をついた。戦争はもうこりこりである。

「外交も戦争も、こちらの要求を相手に吞ませるための方策、と言  
う点ではなんら変わるところがないからな。血が流れるか流れない  
か、という相違はあるが」

「それは、とつても大きな相違だわ」

「確かにね」

駿が、認める。

コーカラットは、ワイコウ王都上空をふらふらと飛びまわってい  
た。下方では、多くのワイコウ市民が見上げたり指差したりして、  
その飛行姿を見守っている。

「そろそろいいでしょうかあ」

独り言を言いながら、コーカラットは針路を外交団宿舎の方向に  
向けた。高度も徐々に落としてゆき、二階の窓の高さあたりまで降り  
る。

目指す建物は、彼女の左前方にあった。宿舎へ帰る振りをしながら、  
手紙を回収するつもりである。近付くと、昨夜手紙を放り込ん  
でおいた窓の枠に、紅い布切れが掛かっているのが見えた。

「お返事が来ているようですねえ」

コーカラットは、視線を前に固定したまま、窓の中を『見た』。  
窓際のテーブルの上に、折り畳んだ紙が置いてあるのがわかる。

電光石火の早業で、コーカラットの触手が伸びた。先端が、手紙  
を掴み取る。次の瞬間には、手紙は垂れ下がった触手のあいだに収  
まっていた。

コーカラットは、素知らぬふりで飛行を続けた。たとえ注視して  
いた人がいたとしても、一瞬何かが動いたように見えただけで、窓  
の向こうから手紙を回収したことには気付かれなかつただろう。

「何が書かれているのでしょうかあ」。早く読みたいのですう」

なおも独り言をつぶやきながら、コーカラットはゆっくりとしたスピードで宿舎を目指した。

キュイランスの手紙は、想像していた以上に長文だった。夏希はコーカラットが読み上げる内容を要約し、紙に書き出していった。

「通行税そのものはカキ国王の発案。税額算定は通商関係官僚と商業界の助言によるもの。平原商人拘留は見せしめの意味合いが大。税そのものの目的は、ワイコウ商人の保護。カキ国王に、平原諸国挑発の意図なし。ワイコウ市民は同政策に対し無関心。まあ、予想された通りね」

拘留した商人をあつさり釈放したことから、ワイコウが平原との対立を望んでいないことはわかる。

「こうなると、ワイコウ側が折れて税額を引き下げること期待できるのでは？」

見守っていたアンヌツカが、意見を述べた。

「そうね。でも、強く出るにしろ下手に出るにしろ、交渉の材料が少ないのよね。三のワンペアしかない状態で、ポーカーしているみたいなものね。ブラフを貫いて相手が降りるのを期待するか、カードテーブルひっくり返して殴りかかるしか選択肢がないみたいなものよ」

「相手は確実に役を作っているうえに、こちらの手も読んでいますからねえ」

コーカラットが、そう応ずる。

「あらコーちゃん。ポーカーできるの？」

「魔物ですからあ」

コーカラットが嬉しそうに触手をひらひらさせる。

夕方になると、王宮から戻ってきた駿に夏希はキュイランスからの情報を伝えた。

「僕の観察と一致するね。その男の情報源は、確かなようだ」

「それで、交渉はどうなったの？」

「予想通りさ。国際河川概念がないから、ノノア川の当該地域はワイコウ王国の内水である。したがって、主権が及ぶから通行税の徴収は法的に問題ない。徴税の対象は商品や産物を積載した商用船のみであり、一般旅行者はもちろん対象外。さらに手荷物程度の商品ならば見逃している。税額に関しては、後々減額を前提に見直す考えはあるが、現状でも高額とは判断していない。のらりくらりと躲かれたよ」

「処置なしね。どうするの？」

「とりあえず拘留者の釈放という目的は達成したから、ここは引くべきだね。改めてもつと高位の外交官からなる使節団を派遣して、平原全体で圧力を掛けるしかないだろう。僕は、いったんハンジャーカイに戻って信任状をもらってから、海岸地帯に行くつもりだ。この件に関して、ルルトと、できればオープアを味方につけておきたい。これはまだ噂の段階なんだが、ワイコウ国内の反カキ国王派が、ルルト政財界の一部と結んでいる、という話があるそうなんだ。もしこれが本当なら、使えるかもしれない」

「……なんか物騒なこと、企んでいるんじゃないでしょうね」

夏希は目を細めて駿を軽く睨んだ。

「企むのは嫌いじゃないからね」

駿が、にやにやと笑い返す。

夏希らがハンジャーカイに戻ってから三日後、平原各国の国王による署名入りの信任状を携えた駿が、ススロンやエボダなどの主要国の外交官を引き連れて、ルルトへ向け出発した。

ワイコウによる通行税の徴収は依然続いており、ノノア川の物流は事実上ストップしていた。このような中で、もつとも苦慮していたのは、先行投資として川船を大量発注していた一部の有力商人たちであった。交易量増大を見越して注文を出したものの、引渡しを受けても使いようがないのだ。同様に、販売増を見込んで大量生産

に踏み切ったハナドーンの造船業界も、苦境に陥っていた。買い手がつかない川船は、船溜りや船台に溢れていた。

これを救ったのが、拓海であった。平原統合訓練部隊の予算を流用し、比較的安価ではあったが余っている川船を積極的に買い上げたのだ。表向きは、河川航行訓練用と称しての買い物ではあったが、その数は訓練部隊の陣容に比してあまりにも多すぎた。

「……すでに、ワイコウと一戦交える気になってない？」

「いやいや。あくまで景気対策だよ」

夏希の突っ込みに、拓海がとぼけた返答をする。

マンテムス氏は、怒っていた。

ルルトで最大の家具工場を経営するマンテムス氏は、先ごろ同国を訪問した平原からの使節団が持参した寄木細工の見本に魅了された。使用されている鮮やかな色合いの木は海岸地帯には存在していないし、その技量もマンテムス氏の工場で働く職人よりも上であると思われた。さらに、その価格を聞いたマンテムス氏は仰天した。予想した額の半分程度だったからだ。

これは売れる。

父親の代には職人一人、その弟子二人……何のことはない、父親とその息子二人である……だったささやかな工房を、ルルト最大、つまりは海岸地帯最大の工場にまで発展させたマンテムス氏は、自分の商才に絶大な自信を持っていた。平原地帯の安くて美しい寄木細工を、自分の工場で生産する家具に組み込めば、多少高い値をつけても絶対に売れる。そう判断したのである。

マンテムス氏は、その場でハナドーンの商人と独占契約を結ぶための仮契約を済ませた。後日、部下がハナドーンまで出向き、詳細な調査を行う。相手商人の資本力や商品供給能力、職人の質、さらに製品の状態に満足したマンテムス氏は、ルルトを訪れた商人と本契約を結んだ。もちろん、ハナドーン産寄木細工の大量供給契約で

ある。

マンテムス氏はさっそく先行投資を行った。郊外に新たに工場を建て、多くの職工を雇う。こちらでは、従来の家具を作らせるつもりだった。寄木細工を組み込んだ家具は、高級化路線で行くべきだ。本工場で、腕のいい職人に任せるに限る。

マンテムス氏の商才は、すぐに証明されることとなった。はるばるハナドーンから運ばれてきた寄木細工を組み込んだテーブルや箆笥は、たちまち人気商品となったのだ。ルルト王宮御用達商人でもあるマンテムス氏はとりわけ高級に仕上げたテーブルを、王宮に献上した。さらに、ほぼ同等品をオープアに、やや劣る品を東部三カ国の王宮に寄贈する。諸外国でも評判になれば、さらに儲けは増えるとの目論見である。

あまりの人気ぶりに殺到する注文に生産が追いつかず、何十日も先まで予約を受け付けることになったマンテムス家具商会の新製品だが、ある日を境に肝心の寄木細工の供給はぱったりと途絶えてしまった。言うまでもなく、ワイコウによるノア川通行税徴収の影響である。

マンテムス氏は憤慨した。契約書によれば、輸送中の税金などの支払いは、ハナドーン商人の責任において行うことになっている。だが、天災や政変など不慮の事態に際し、十分な利益を上げられなくなった場合は、一方的契約破棄を認めている。先方は、この税金のせいで純益は売り上げの四割からわずか一割に減ったと通告してきた。買取価格を大幅に上げてもらわない限り、契約破棄やむなし、という手紙が、マンテムス氏の手元に届けられる。

マンテムス氏は窮地に立たされた。すでに先行投資で、手持ち資金は不足気味である。顧客からの注文も、山ほど溜まっている。ハナドーン商人の要求を聞き入れて買い取る金額をアップする手もあるが、予約客が販売価格の上乗せを承知するとも思えない。しかも、寄木細工入り家具があまりにも評判が良かったために、普通の家具の売れ行きは激減していた。職人たちには、とりあえず家具の部品

を製造するように指示を出していたが、資金繰りは徐々に悪化してゆく。

王宮御用達商人としての立場を活かして、王国政府に事態打開のための嘆願書を送ってみたが、すでに政府はワイコウに対し通行税撤廃を求めて働きかけている、との事務的な返事が返ってきただけであった。マンテムス氏が親しくしているルルト商業界の友人たちの中にも、同じような目にあっている者が多かった。ほとんどの者が、ワイコウの措置を横暴だと考えている。誰からともなく、直接ワイコウに抗議に行こう、という声があがった。たいていのルルト商人は、ワイコウとの商売を通じてかの地に友人や知人を有している。彼らに相談し、ワイコウ政府を動かすことはできないだろうか。いったん意見が一致すると、彼らの行動は素早かった。みな、目端の利くやり手の商人なのだ。翌朝には、船を仕立ててノノア川を遡っていた。

川船は順調に進み、やがてワイコウ王都へと通じる支流とノノア川が合流する地点に達した。ここで突然、ある商人が『通行税を取り立てているところを見に行こう』と発言した。憎つくき徴税の現場を、この目で確かめてやろうというわけだ。まだ日は高かったので、ほぼ全員が賛成する。そのくらいの寄り道は構わないだろう。

川船はノノア川を遡ってゆく。やがて見えてきた棧橋の手前で、マンテムス氏らは止められた。来意を告げると、対応の役人は何人かの商人の顔を知っていたらしく、あっさりと見学を許可された。上陸したマンテムス氏らは、案内役の兵士に連れられて、あちこちと見てまわる。

ちょうどそのとき、河岸の小屋のひとつでは騒動が持ち上がっていた。ルルトへの旅行者であると主張するシーキンカイの商人が、ワイコウの役人と激しい口論を交わしていたのだ。旅行者の手荷物ならば、通行税を課されないことを知った商人が、ルルトへの物見遊山の旅行者を募って船に乗せてやってきたのである。旅行者たちは、商人が渡した荷物を自分のものだと言い張れば船賃ただでルルト

トまで往復できるといふ仕組みである。それを見抜いた役人は、当然税を取り立てようとした。まあ、船客全員が高価そうな焼き物を山ほど抱えていれば、怪しむのは当然だが。

商人と船客は、これらの皿や壺はみなルルトにいる知人への手土産だ、と主張した。ここで通行税を払えば、当然帰路でも課税されるだろうし、そうなれば商人は今回の企てで一オロットすら儲からないだろう。一方の役人も、これを許せば模倣者が続出し、通行税制度が根底から否定されかねない。双方とも、譲る気はなかった。

やがて、商人と役人の口論は、つかみ合いに発展した。ちょうどその頃であった。マンテムス氏ら一行が、小屋の外を通りかかったのは。

小屋の中の騒ぎに気づいて、外に待機していた兵士が慌てて駆け込む。船で待っていた商人の雇い人も、すぐに主人の元に駆けつけた。休憩していた兵士らも、戟げきを手に走り寄ってくる。

乱闘が始まった。

マンテムス氏らは、とっさに動けなかった。基本的にみな金持ちである。金持ち喧嘩せず、の言葉通り、暴力沙汰とは無縁だ。

血の気の多い船客も加わり、乱闘の輪が急速に膨れ上がる。逃げる間もなく、マンテムス氏ら一行はその中に巻き込まれた。

応援の兵士が到着し、乱闘が収まったのは二ヒネほどあとであった。乱闘に加わったシーキンカイ人は、件の商人を含め全員が捕縛された。船に残っていた者も、念のために拘留される。兵士数人も、負傷していた。

ルルト商人一行は、ほぼ全員が怪我を負っていた。シーキンカイ人に殴られた者もいたが、大半はワイコウ兵士にシーキンカイ人と間違えてど突かれたり、取り押さえられた際の負傷であった。乱闘だったために、兵士以外の格好をした彼らがシーキンカイ人と間違えられたのは無理からぬ話であった。

「おい、マンテムスがいらないぞ」

瘤のできた頭をさすりながら、商人の一人が辺りを見回した。

「川に落ちたよ。兵士の一人に、戟の石突きで突かれたんだ」  
鼻血をたらした一人が、答えた。

「俺も見たよ。背中からどぼんだ」

痛めた左腕を庇うように右手を添えた一人が、そう言った。

瘤のできた商人が、青ざめる。

「マンテムスは泳げないんだ！」

事情を聞いた兵士たちが、慌てて川の搜索を始める。だが、手遅れだった。十ヒネ後に、河岸の葦のなかで見つかったマンテムス氏は、すでに事切れていた。

54 マンテムス氏事件（後書き）

第五十四話をお届けします。

「……というのが、マンテムス氏事件の概要だそうよ。で、どっちが仕組んだの？」

凜が、生馬と拓海の顔を交互に睨む。

「俺はやってないぞ。謀略など、苦手だ」

生馬が鼻白む。

「俺も無実だ。戦場での謀略は好物だが、平時に民間人を巻き込むような謀略は好かん」

拓海もきつぱりと否定する。

「じゃ、やつぱり駿の差し金？」

「偶然じゃないのかなあ」

夏希は首を傾げつつそう言った。

有力商人であり、王宮出入りの商人でもあるルルト人マンテムス氏の事故死。死因は水死ではあったが、その死の責任はワイコウ兵士（ワイコウ国軍によって調査が行われたが、マンテムス氏を結果的にノノア川へと突き落とされた兵士は特定できなかった）にあるとして、ルルト政府はワイコウ国軍および政府を激しく非難していた。対するワイコウ政府は、遺憾の意を表明し、見舞金を送ることを申し出ていたが、ルルト政府はどちらも拒否し、責任の所在を明確にしたうえでワイコウ政府による正式な謝罪を求める姿勢を崩さなかった。

「いずれにしても、ルルト側はこの事件をとことん利用するつもりらしいわ」

駿から届いた、事件の詳細とその後の展開を伝える手紙をぴらぴらと振りながら、凜が続けた。

「ワイコウが通行税の徴収などに踏み切らなければ起こらなかった悲劇、とか言ってるね。ルルトの国王も、哀悼の談話なんか公表しちゃってるし。ここで一気に圧力を掛けて、通行税撤廃を強いるつも

りでしょうね」

「ふむ。こちらからも圧力を掛けて挟み撃ちにするか」

拓海が、顎を撫でる。

「ちよつとばかり、挑発してやるか。湿原地帯で演習するとか」

「いや、それはまずい」

生馬の意見を、拓海が手を振って退ける。

「ワイコウとルルト、オープアのあいだには相互防衛条約がある。

下手に平原側が軍事的挑発に走れば、ワイコウがこれ幸いと防衛条約の発動を求めかねない。そうすれば、自動的にルルトとオープアが平原の敵にまわってしまう。それだけは避けなきゃ」

「あのー、みんな。魔力の源のこと忘れてない？」

夏希はそう割り込んだ。通行税問題ばかりがクローズアップされて、肝心の人間界縮退対策がないがしろにされているように思えたのだ。委員会委員長補佐としては、由々しき事態である。

「……ちよつと忘れかけてたわね」

凜が、素直に認める。

「ともかくワイコウに圧力を掛けて交渉を続けなければ、通行税問題も魔力の源問題も解決しない。方策を探るべきだ」

生馬が、断言する。

「交渉材料がないからなあ。ルルトとの交易を制限するから、魔術使用をやめろ、と言ったら聞いてくれるかもしれないが……もう手遅れだろうな。ルルトが承知しないだろうし、高原の産物を買付に走った平原商人も多いからな」

そう拓海が言う。

「相互防衛条約がある限り、軍事オプシオンも使えない、と。ルルトに期待するしかないわね。駿が向こうで、うまく立ち回ってくれるといいんだけど」

凜が、諦めたように肩をすくめた。

「ひじょーに由々しき事態ですよ、叔父さん！」

キュイランスの手が、テーブルを叩く。

「まずいと思うが、どうしようもあるまい」

涼しい顔でお茶をすすりながら、グリーンゲ将軍が応じた。

夕食後のテーブルである。このところ頻繁に、キュイランスは叔父のもとを訪ね、王宮の様子を根掘り葉掘り尋ねていた。もちろん情報収集のためである。

「落とし処としては、国軍の現場責任者が譴責のうえ除隊。政府が謝罪のうえ見舞金を増額、といったところじゃろつて」

手ずからお代わりを注ぎながら、グリーンゲが言う。

「その程度で済めばいいのですが。噂では、平原の異世界人の一人が、ルルトに滞在しており、盛んにルルトの反ワイコウ感情を煽っているそうです」

「お前が会ったという竹竿の君か？」

興味を覚えたのか、カップを置いてから、グリーンゲが訊く。

「いえ、シユンと言う名の異世界人です。外交官ですよ。平原諸国連絡会議を立ち上げた男です。かなりの切れ者、という噂ですが」

キュイランスは、憤然たる表情のまま、お茶をすすった。

「ときに、キュイランス」

「なんでしよう、叔父さん」

「お前、最近ちよくちよくクレールのところへ行っているそうじゃないか」

グリーンゲが、さりげない調子で訊いてくる。

「母方の叔母ですから。たまには顔を見せないと」

「しかし、二階の部屋にこもって書き物をしているだけ、とも聞か

が  
なおもさりげない調子を続けながら、グリーンゲが重なるように訊いてくる。

「あ……あそこは静かなので、集中できるんです」

「そうか。ではなぜ、昼前後しか行かないのだ？」

グリンゲの眼が、すつと細まった。引退間近の初老の廷臣の穏やかな眼つきが、年季の入った軍人の鋭い眼光に切り替わる。

「わ、わたしにも時間の都合というものが……」

「しかも、行くのは迎賓館に平原の使節が入っている時だけ。クレールの家と、迎賓館は眼と鼻の先だ。……これをどう説明する？」

グリンゲが、キュイランスを見つめる。もはや可愛がつている甥を見る視線ではなかった。

「あ、あの、その」

キュイランスは窮した。こうなると、賢者の頭脳も働きが鈍る。上手い言い訳がなかなか出てこない。

そんな甥の様子を睨みつけていたグリンゲの視線が、ふつと柔らかくなった。

「安心しろ。お前がワイコウを裏切るような奴ではないことは、わしが一番よく知っている。おおかた、竹竿の君あたりと連絡を取り合っているのじやろう。どうやってかは、知らぬが」

「お、おっしゃる通りです」

キュイランスは素直に認めた。ここまで状況証拠をつかまれた状態で、嘘を吐き通せる相手ではないことは、充分承知している。

「ですが、決して、ワイコウの不利益になるような情報は渡していませんよ。あくまで、わが国と平原の紛争を抑止するための、情報提供……いや、情報の交換です」

「その言葉、信じよう」

グリンゲが、静かに言う。

「やっぱり、やめるべきでしょうか」

しばらくの沈黙ののち、遠慮がちにキュイランスは尋ねた。グリンゲが、ゆっくりと首を振る。

「いいや。続けるんだ。せつかくできたコネだからな。ただし、情報と交換に向こうの意図を探るんだ。そして、それをわしに報告しろ。いいな」

「わかりました、叔父さん」

その死体が見つかったのは、夜明け前のことであつた。

王都ルルト近郊の漁村の漁師たちによつて浜に引き上げられた中年男性の死体は、温かな海水に浸かつていたにも関わらず腐敗の兆候がなく、死んでから間もないと推定された。死因は溺死と思われたが、駆けつけた役人が調べると、腹部に殴打の痕が見つかった。直接死に繋がるほどの負傷ではないが、殴られたあとに海に放り込まれたとすれば、殺人の疑いが濃厚である。

服とサンダル以外に身につけていたものは皆無だったので、被害者の身元の特定には時間が掛かると思われたが、昼前にはあっさりと身元が割れた。彼はルルト人ではなかつた。ワイコウ商人だつたのだ。しかも、かなりの豪商であつた。

噂はすぐに広まつた。マンテムス氏事件の報復ではないか、との憶測が、燎原の火のようにルルト市内に広まる。

その翌日、新たな死体が見つかった。今度は、市内を流れる排水路にまだ若い男性が投げ込まれているのが、散歩中の老人によつて発見されたのだ。死因は、鈍器による頭部への打撲だつた。彼の身元もすぐに判明した。やはり、ワイコウ商人であつた。

二件の殺人事件を受けて、ワイコウ政府はルルト政府に対し、王都ルルトにおける治安水準の低さを激しく非難するとともに、同市におけるワイコウ市民の安全に対する配慮を強く要求した。

内政干渉に等しいワイコウの不躰な要求に対し、ルルト側は立腹した。両国政府はお互い譲らぬまま、厳しい文言が並んだ書簡を数日に渡つてやり取りした。

そして、第三の事件が起きた。今度の舞台はワイコウであつた。王都市内の路地裏で、ルルト商人の死体が発見される。外傷がなく、死因は病死かとも思われたが、検査の結果肺に水が入っていることが判明した。……近くにある水といえは、子猫でさえ溺れることがないほど浅く狭い排水溝だけだというのに。

他所で溺死させられ、この場に死体が放置されたことは、疑う余地がなかった。メッセージは明白だった。マンテムス氏と同じ死因である以上、ルルトに対する報復である。少なくとも、ワイコウとルルト市民の大半が、そう判断した。

両国の関係はさらに悪化した。ワイコウもルルトも、国軍を動員して市内の治安維持に努めた。苛立った市民が、同じく苛立った兵士ともみ合うようなシーンが、随所で見られるようになる。両国の商人は、身の危険を感じてそれぞれの母国に引き上げた。

「で、これが最新の手紙よ」

凜が、折り畳まれていた紙を広げ、三人に向ける。

そこには、五センチ角くらいの大きな字で、『僕は無実だ！』と書いてあった。

「いくら駿でも、あそこまで血生臭い手は使わないだろうからな」  
生馬が、言った。

「ともかく、駿の説明によれば、今回の謀略を仕掛けているのはワイコウ国内の反カキ国王派と、そいつらと結託したルルトの反ワイコウ勢力らしいわ。ルルトの反ワイコウ感情を煽り、カキ国王の間抜け振りを強調し、ゆくゆくは玉座から引き摺り下ろそうって魂胆そのあとは、もっと穏健でルルト寄りの国王を擁立するんじゃないか？」

「でも、なんでそんな連中が急に暴れだしたのかしら？」

夏希は当然の疑問を口にした。

「駿によれば、理由はふたつだそうよ。ひとつは、ワイコウと平原各国の関係が悪化したこと。ルルトで反ワイコウ感情が高まり、両国の関係が決定的に悪化した場合、ワイコウが平原のいずれかの国……おそらくは複数と手を結ぶことを、彼らは恐れていたらしいわ。今ならば、その可能性はゼロに等しいから。ふたつ目は、通行税の導入によって、ルルトの商業界が一気に反ワイコウに傾いたこと。」

もともと、ワイコウはルルトにとって重要なビジネスパートナーだったから、商業界は好意的だったの。ところが通行税の導入、さらに有力商人であるマンテムス氏の無残な死で、ルルト商業界が反ワイコウ一色に染まってしまった。これを、好機と捉えたのでしょね

「となると、そいつらとは早めに手を組まないとならんね」

拓海が腕を組む。

「そのあたり、駿は抜かりないわ。すでにルルト、オープアを始めとする海岸主要国がすべて人間界縮退問題に対し協力的であるという事実を強調して、取り入っているとこよ」

「なら、任せておいて問題ないか」

生馬がうなづく。

「援護射撃が必要なら、その旨言ってくるだろう。ここは、下手に手を出さん方がいい。裏で平原諸国が糸を引いているなんて噂が出たら、ことだからな」

拓海がそう言って、にやりと笑った。

「おや、叔父さんでしたか。尋ねてきて下さるとは、珍しい」

キュイランスは大きく扉を引き開けると、グリーンゲを招じ入れた。

「お茶でも淹れましようか。それとも、お酒の方がいいですか？」

「酒をくれ。強いやつをな」

椅子に座ったグリーンゲが、ぶつきら棒に言う。

わびしいひとり住まいだが、賢者らしく友人知人は多いので、酒のストックは豊富である。キュイランスは、ニガタキ産のブドウの蒸留酒の瓶を手にした。ふたつの小さなグラスに、注ぎ分ける。

グリーンゲが、それを一気に呷った。お代わりを注ごうとしたキュイランスを手で制し、テーブルの上に身を乗り出す。

「まずいことになった。陛下が、ヒュックリー将軍に、カキ・セドへの出兵を命じた」

「ほう。カキ・セドで問題が生じたとは、知りませんでした」  
自分のグラスを取り上げて、キュイランスは応えた。

「お前が知らないのは当然だ。カキ・セドで問題などまったたく生じていないからな」

グリンゲの言葉に、キュイランスの手が止まった。

「問題が生じていない？ では、なぜ出兵など……」

「お前の頭なら、考えるまでもないだろう」

グリンゲが、酒瓶を手にした。ほんの少しだけ、自分のグラスに注ぎ入れる。

キュイランスは、素早く頭を回転させた。必要とされていないのに、国軍がカキ・セドに出動する。ということは、その真の目的地はカキ・セドではないのだ。となれば、カキ・セドの周囲に目的地があるはず。だが、あたりは無人の湿地帯ばかり。

…… ノノア川の上流。

キュイランスは、一気に回答に行き当たった。思わず、息を呑む。  
「陛下は、ルルトとオープアを強引に味方に引き入れるおつもりなのですね？」

「そうだ。それしか考えられん」

グリンゲが、グラスの酒を舐める。

「いや、参ったな。そう来るとは思わなかった」

キュイランスは、急にかゆくなった首筋をぼりぼりと掻いた。

カキ・セドに国軍の一部隊を派遣する。これはカムフラージュに過ぎない。真の目的は、その北にある。平原地帯……おそらくは、一番北に位置するマリ・ハを挑発し、軍事的緊張状態を……あるいは軍事衝突を引き起こすのが目的なのだ。そうなれば、ワイコウは相互防衛条約に基づき、ルルトとオープアに援助と派兵を要求することができる。そのような事態になれば、ルルトも反ワイコウの姿勢を改めざるを得なくなるだろう。マンテムス氏事件を始めとする諸問題も、棚上げとなるう。ワイコウ・ルルト関係は、劇的に改善するに違いない。

「ずいぶんと荒療治ですが、効果的な手だ。さすがは力キ国王ですね」

なおも首筋をかきむしりながら、キュイランスは言った。

「効果的だが、危険な一手でもある。お前に『平原諸国には勝てないかも知れない』と言われてから、色々調べてみたが……たしかに連中は手強いようだ。高原までもが敵にまわるとすれば、動員兵力だけでも圧倒されてしまう。そのうえ、現状では条約通りルルトとオープアに派兵してもらっても、まともに戦ってくれるとは思えない。陛下は平原と軍事的緊張状態を作り出すだけで、開戦するつもりはないようだ。ことは軍事だ。どう転ぶか予測は不可能だ。もし平原側が過剰反応し、開戦の運びとなれば、わが国が滅びかねない。なんとしても、平原との開戦は避けねばならぬ」

グリングゲが、力説する。

「おっしゃる通りです、叔父さん」

キュイランスも、力強く同意した。

「そこでだ」

グリングゲが手を伸ばし、甥の肩を軽くつかんだ。

「お前は竹竿の君に連絡を取れ。わが国が軍事的挑発をすることを知らせ、それに乗らないように説得するのだ。いいな」

「無理ですよ、そんな。いま、迎賓館には平原の使節が入っていますし」

「そんなことは承知の上だ。お前が、平原に赴くのだ」

甥の眼を覗き込むようにしながら、グリングゲが告げる。

「……それって、いわゆる利敵行為になりませんか？ まるで謀者じゃないですか。ばれたら、処刑とかされそうだ」

「すでに竹竿の君と連絡を取っているだけで、謀者扱いされても仕方ないな」

キュイランスの肩から手を離れたグリングゲが、あさっての方を見ながら他人ごとのように言う。

「脅す気ですか？」

「そんなつもりはない。言っておくが、わしも同罪だぞ。もちろん、国を裏切る気はない。むしろ、国を憂えての行動じゃ。それは、お互い理解していると思うが」

「確かに」

「とにかく、お前は平原の異世界人と面識がある。そしてその事は他人に知られていない。密やかな連絡役にはぴったりじゃ」

グリングゲが、懐から布の小袋を取り出し、テーブルに放った。がしゃん、という鈍い金属音と共に、袋は天板に着地した。

「これで船を借りる。明日にでも出立してくれ。いいな」

「仕方ありませんね」

キュイランスはしぶしぶ小袋に手を伸ばした。

## 55 謀略（後書き）

あけましておめでとございます。第五十五話をお届けします。

「今日もいい天気なのですう〜」

上機嫌で、コーカラットは空を飛び回っていた。

眼下では、ハンジャーカイの人々が動き回っている。田の手入れをする人。赤ん坊をあやす母親。売り物を肩に口上を述べながら歩き回っている行商人。路地裏を駆け回る子供たち。皆すでに、空中散歩を楽しむ魔物の姿に慣れきっているので、振り仰いで見つめたり、手を振ったりしてくれることは稀だ。

と、コーカラットの視界に激しく手を振っている男の姿が入った。見た目が、平原の民とは違っている。

「外国の方なので、わたくしが珍しいのでしょうか〜」

興味を覚えたコーカラットは、高度を落として男に近付いた。大通りの一角に立つ男は、なおも激しく手を振っている。

「どこかで見たような方ですねえ〜」

「魔物殿！」

男が、呼びかけてくる。

「あ、キュイランスさんではないですかあ〜」

男の正体が、ワイコウの賢者キュイランスであることを見て取ったコーカラットは、地表近くまで降りていった。

「お久しぶりなのですう〜。こんなところで何をいらっしやるのですかあ〜」

「お会いできてよかった、魔物殿」

キュイランスが、安堵の表情で言う。

「そう言えば、名乗っていなかったのですねえ〜。わたくし、コーカラットと申しますう〜。コーちゃんと呼んでくださると、嬉しいのですう〜」

「ああ、コーちゃん。ナツキ様にお会いしたいのですが……ちょっと、目立つわけにはいかないのです」

あたりに視線を走らせながら、キュイランスがささやく。魔物とこそそと話し合っている海岸諸国人が珍しいのだろう、大通りを行く人々の視線が集中している。中には、立ち止まって見物している人もいた。

「それなら、わたくしに付いてきてくださいい。委員会本部までご案内しますう。門番には、わたくしが話を通しますですう」  
「恩に着ます、コーちゃん」

コーカラットは、ふわりと浮かび上がって高度を取った。これならば、散歩中と変わりはない。キュイランスが追って歩いたとしても、目立つことはないだろう。

「平原と紛争を起こすことによつて、相互防衛条約を発動させ、ルトとオープアを自動的に味方にし、事態の解決を図る。……考えたわね」

キュイランスの説明を聞いた夏希は、一声唸つて腕を組んだ。

「とにかく、ワイコウの挑発に乗らないで下さい。下手をすれば、海岸諸国対平原・高原の大戦争に発展しかねません」

半ば哀願口調で、キュイランスが言う。

「ともかく、この話は軍事担当者に聞いてもらった方がいいわね。悪いけど、ここで待つていてくれる？ 仲間を呼んでくるから」

夏希は部屋を出ると、エイラの許可を得てからコーカラットを平原統合訓練部隊本部に向かわせた。ここの雇員を派遣するよりも、その方がはるかに早い。

「しかし、本当に拓海様に似ている男ですね」

夏希と一緒にキュイランスの話聞いていたアンヌツカが、薄笑いを浮かべながらぼそりと言う。

「並んだら、親子に見えるかも」

夏希もそう応じて、くすりと笑った。

ほどなくコーカラットが、生馬と拓海を抱えて戻ってきた。夏希

は、ざつと事情を説明した。

「それは詳しく話を聞く必要があるな」

拓海が、難しい顔で腕を組む。

「噂の拓海似の情報提供者か。まずいな。顔見た途端に笑ってしま  
いそうだ」

にやにやしなながら、生馬が言う。

「真面目にやれよ。そいつの言ってることが本当ならば、大戦争に  
繋がりがねないんだからな」

「わかったわかった。笑わんよ」

「じゃ、行くわよ」

夏希の合図を受け、アンヌツカが扉を開いた。座っていたキュイ  
ランスが、礼儀正しく立ち上がる。

「……似てるな」

入室しながら、生馬がささやく。

「座って、キュイランスさん。えー、事情が事情だから、紹介はし  
ないけど、この二人は軍事専門家よ。まあ、見た目で異世界人だと  
いうのがばれちゃうから、名乗らないのは意味がないと思うけど、  
建前上詳しい身分は明かせないわ。じゃ、もう一度話を聞かせて」

「わかりました、夏希様」

腰を下ろしたキュイランスが、説明を繰り返す。

「よくわかった。早急に手を打とう。こちらとしても、ワイコウと  
の戦いは望んでいないからね」

聞き終えた拓海が、何度もうなずきつつ言った。キュイランスが、  
安堵の表情を見せる。

と、扉にノックがあった。立っていたアンヌツカが、廊下に首を  
突き出し、すぐに引込める。

「生馬様。訓練本部より伝令です」

「通してくれ」

アンヌツカを見た生馬が、素っ気なく命じた。

入ってきたのは、生馬お気に入り伝令兵、長身のソリスだった。

「生馬様、訓練本部に至急報が参りました」

ソリスがちらりと夏希らに視線を走らせる。

「外で聞こう」

立ち上がった生馬が、ソリスを伴って扉の外に消えた。

「とにかくワイコウの挑発に乗らないことだな。キュイランスさん、あんたの立場はどうなんだ？ カキ国王のことは、どう思ってるんだ？」

改めてワイコウの賢者に向き直った拓海が、訊く。

「そのあたりの質問は、勘弁してください。わたしは、ワイコウ王国民なのでから」

キュイランスが、困ったように顔をゆがめる。

「国王のことは気に入ってないが、愛国者ではある、というところか」

拓海が言う。キュイランスが、苦笑した。凶星だったのだろう。

扉が開き、生馬が戻ってきた。表情が、硬い。

「どうしたの？」

夏希の問いを無視し、生馬がキュイランスを見据える。

「残念だが、お前さんの警告は少しばかり遅かったようだ」

「なんだって？」

拓海が、腰を浮かす。

「先ほど連絡が入った。マリ・八の防衛隊は、ワイコウ国軍と思われる軍勢と交戦状態にある。平原統合訓練部隊にも、救援要請が届いた」

「あらら」

夏希は頭を抱えた。これで、ワイコウは相互防衛条約を発動させるだろう。ルルトとオープアは、条約の一方的廃棄という不名誉な選択をしない限り、ワイコウに協力せざるを得ない。

「紛争発生には間に合わなかったが、拡大の阻止は可能だな」

最初に立ち直ったのは拓海だった。

「生馬、あんたは訓練部隊のマリ・八派遣準備を進めてくれ。船の

準備は、俺がやっておく」

「頼むぞ」

一声だけ言つて、生馬が部屋を飛び出してゆく。

「俺はマリ・八に自制するようにメッセージを送るために、ハンジヤールカイ王宮と平原諸国連絡会議本部に行く。夏希、あんたは凜ちやんを探して、情報収集役を頼んでくれ。そのあとで、委員会名義で各国に書簡を。アンヌツカ、あんたはこの御仁の世話を頼む。しばらくノノア川の交通は遮断されるだろうからな。何日か、泊めてやらんと」

「ご配慮、恐れ入ります」

キュイランスが、一礼した。

「とにかく、紛争拡大を防がねばならない。急ごう」

勢いよく立ち上がった拓海が、部屋を出てゆく。夏希も立ち上がった。

「じゃ、アンヌツカ。キュイランスさんを頼んだわよ」

「お任せ下さい」

「結局、間に合わなかったようだな……」

「何かおっしゃいましたか、閣下」

夕食の皿を片付けていた従卒のジェミが、手を止めてグリーンゲ將軍を見る。

「いや、なんでもない。茶も片付けていいぞ。今日は久しぶりに一杯やりたい気分だ」

「では、おつまみでも作りましょう」

「凝ったものは作らなくていいぞ。干し肉でも切ってくれば、それでいい」

グリーンゲは自らグラスと酒瓶を取ってきた。もともと酒は強い方ではなく、好むのは弱い醸造酒だ。ブドウから作った赤紫色の酒を、グラスに注いでひと口味わう。

ヒュツクリー將軍率いる国軍派遣隊からの報告は、今日の昼ごろに王宮に届けられた。マリ・八防衛隊と思われる偵察隊と遭遇、攻撃。意図的に数名を逃がす。さらに南下し、武装兵約二百と交戦のち、撤収。戦果、死傷約百名。損害、死傷二十名。

これを受けて、カキ国王はルルト王国およびオープア王国に対し、相互防衛条約に基づく緊急援助と派兵を要請することを決定、急使は数ヒネ後には王宮を飛び出し、あらかじめ用意されていた川船に飛び乗った。……すべて、カキ国王の思惑通りの展開である。

紛争について意見を求められたグリングゲは、拡大防止を主眼として対処するように進言しておいた。幸い、カキ国王も平原との全面戦争は望んでいない。しかし、ことは戦争である。戦場では予想外の出来事が起こるのが常だし、戦争の経過が戦前の予想通りに進むことなどめつたにない。その事は、専門家であるグリングゲは充分に理解していた。

「しかし、我ながら先見の明があったな」

静かにグラスを傾けながら、グリングゲは甥を平原へと派遣した自分のアイデアを高く評価した。紛争開始に間に合わなくても、キユイランスならばその拡大阻止のために動いていることだろう。少なくとも、竹竿の君は暗愚な人物ではあるまい。ここでワイコウと平原が戦っても、意味がないことは理解してくれるはずだ。たぶん。

「竹竿の君か。一回会ってみたいものだ。もちろん、戦場でない場所で」

グリングゲはひとりつぶやいた。戦女神にもなぞらえられる異世界出身の女戦士。武人としては、なんとも興味をそそられる相手である。

「お待たせしました、閣下」

ジェミが、皿をテーブルに置いた。割いた干し肉と軽く炙った干し魚、それに荒めに刻んだ数種の野菜を魚醬とオリーブオイルであえた物が載っている。

「ありがとう。今日はもう休んでいいぞ」

「ありがとうございます。では、失礼します」

一礼し、ジェミが去る。

グリンゲは、干し肉を口に入れた。ゆっくりと噛みながら……この歳だが、齒はまだ丈夫である……異国の地で苦勞しているであろう甥に思いを馳せる。

「わしもそろそろ動き始めるべきじゃろうな」

酒を注ぎながら、グリンゲはつぶやいた。

マリ・八防衛隊を襲撃した国軍派遣隊は、その規模が大きくなかったことから、次席であるヒュックリー将軍が指揮した。状況が悪化し、国軍が総力を挙げて出動する事態になれば、総指揮は当然首席であるグリンゲが執ることになるだろう。しかしながら、現状で全面戦争となれば、ワイコウの勝ち目は薄い。グリンゲは愛国者ではあったが、敗軍の将となるつもりは毛頭無かった。

もし自分が全面戦争の指揮を執るとすれば、王都ワイコウ周辺での迎撃戦略を採用するだろう。だが、カキ国王がそのような消極的戦略を認めるとは思えない。そしてもちろん、グリンゲに国王の意向に逆らえるだけの権威はない。最初から勝ち目の無い戦いを強要され、多くの部下を失った上で、無能な指揮官との烙印を押されるだけだ。それならば、最初から戦場に赴かず、傍観者としての立場を貫く方がいい。……たとえそれが、武人としては卑怯な手段を使わざるを得ないとしても。

「とりあえず、成功かな」

生馬から届いた手紙を読みながら、凜が言った。

湿原地帯南部で発生したワイコウ国軍とマリ・八防衛隊の衝突は、双方合わせて三桁に達する死傷者を出したものの、幸いなことに小康状態を保っていた。ワイコウ側が繰り出した兵力は、正規軍である国軍が推定で約一千。対するマリ・八防衛隊の規模は、五百前後である。現在は、これに急遽編成された市民軍四百、それに生馬が

率いる平原統合訓練部隊六百が加わり、対峙しているところだ。

面子を潰された形のマリ・ハは、平原諸国連絡会議で報復攻撃を訴えていたが、拓海ら異世界人が各国に根回ししたせいで、それに同調する者は少なかった。これを機に、一気にワイコウを攻め落として魔力の源を奪取しようという意見も出たが、ワイコウの要請に応えてルルトとオープアが派兵を検討中という報せが届き、勢いを失う。この二大国がワイコウの味方となれば、戦争の長期化は必死である。高原を味方につければ、人的資源では平原諸国の方が有利だが、経済力では負ける。長期戦において、もっとも重要なのは継続能力の維持である。貧乏国家が金満国家に長期戦を挑んで勝利した例は、歴史的に見てもほとんど存在しないのだ。

「早急に関係を改善したいが、向こうが望んでいない以上、難しいな」

拓海が、唸る。

紛争はあくまでマリ・ハ対ワイコウである、という認識の下に、平原諸国連絡会議の依頼を受けたエボダが、和平を取り持つ目的で外交官をワイコウに派遣しようとしたが、ノア川を閉鎖しているワイコウ国軍に追い返されてしまったのだ。ワイコウがルルトとオープアを味方に付け続けるためには、紛争状態を継続する必要がある。当然、彼らが早期の和平交渉などに応じるはずもなかった。

「謀略工作していた連中も、頭を抱えているでしょうね」

皮肉めいた笑みを浮かべて、夏希は言った。裏を返せば、その連中が商人を何人も殺すような過激な工作に走ったからこそ、窮地に立たされたカキ国王が平原との紛争惹起という大胆な対抗手段を取ったわけだが。

「とりあえず紛争拡大は防いだ。次に打つ手だが……なんかいい案はないか？」

拓海が、向かい合って座る女性二人を生氣に乏しい眼で見やる。

「ないわねえ。手詰まりだわ」

凜が、肩をすくめる。

「わたしもないわよ」

夏希も同様に言った。人間界縮退問題にしる、ノノア川通行税問題にしる、ワイコウとマリ・八の紛争が終わらない限り、進展は難しいだろう。そして、ワイコウは和平を望んでいない。……これでは、前進のしようがない。

「今回の紛争でひとつだけ良かったところを挙げれば、訓練部隊が格上げできそうだという点だけだな」

ぼそぼそと、拓海が言う。

ワイコウの一方的な挑発と、それに伴うマリ・八防衛隊の損害。さらに、迅速に紛争地域に出動し、さらなるワイコウ国軍の侵攻意図を挫かせた（外見上はそう見えた）生馬率いる訓練部隊の活躍は、平原各国の賞賛を浴びた。これを受けて、平原統合訓練部隊は、近いうちにその規模を拡大し、平原統合軍部隊として再編成されることになった。指揮権は、各国の防衛隊幹部が参加する統合軍司令部が掌握する予定である。生馬と拓海も、その中で重要なポストを得るはずだ。

「ところで、キュイランスはどうしてるの？」

凜が、夏希に尋ねる。

「大人しくしてるわよ。彼が、どうかしたの？」

「いや、ワイコウ人で、賢者なんでしょ？ なにかいいアイデア持ってるかな、と思って」

あまり期待していない様子で、凜が言う。

「そうね。訊いてみるだけなら損はないし。手土産でも持って、訪ねてみますか」

「わたくしにも、いい案などありませんよ」

キュイランスが、肩をすくめた。

「やっぱりそうか。ま、いいわ。とりあえず、これお土産だから。甘いものが好きだといいいけど」

夏希は荒い織り方の麻布が掛けられた竹箆をアンヌツカから受け

取ると、キュイランスに押し付けた。

「なんででしょうか？」

キュイランスが布を取ると、甘い香りがぱつと広がった。中には、薄茶色の太いリング状の食物が十個ほど、きれいに並んで入っていた。なんのことはない、ドーナッツである。

「最近、流行りだした食べ物よ。米の粉に甘味をつけて、油で揚げであるの。凜が、流行らせたんだけだね。おいしいよ」

「はあ。ありがとうございます」

心がこもっているとは思えぬ礼を言ったキュイランスが、杖をテーブルに置く。

「お酒とかの方が良かったのかな？」

「いえ、甘いものは嫌いじゃありません。……どうぞ、お座り下さい」

キュイランスが、夏希とアンヌツカに椅子を薦める。夏希は座ったが、アンヌツカは軽く首を振ってその後ろに立った。

「どうしたの。元気ないわね。こっちの気候が合わないの？」

のろのろと座るキュイランスを見ながら、夏希は訊いた。

「いえ。健康は保っています。ですが、賢者のくせに今回の一件でまったくお役に立てないことが、情けないのです」

「それは、しかたないよ。国家間の紛争になっちゃったんだもの。」

「賢者には、どうしようもないでしょう。わたしだって、事態の推移を見守るしかないんだし」

夏希は元氣付けようとそう言った。

「夏希様。わたくしは祖国であるワイコウを愛していますが、それ以上に平和を愛しています。戦争は、知識の誤った使い方のもたるものです。和平に繋がることであれば、たとえワイコウの国益を損ねることであっても、夏希様に協力する所存です。もし何かわたくしにできることがあれば、何なりとお申し付け下さい」

相変わらず元氣のない口調だが、眼だけは輝かせて、キュイランスが言った。

「わかったわ。覚えておきます」

夏希は安心させるようにうなずいた。ワイコウ王宮内にコネのある聡明な人物。今後役立つてくれる機会は、きっとあるはずだ。

56 挑発（後書き）

第五十六話をお届けします。

## 57 ルルトの要請

ワイコウとマリ・八が交戦してから、十五日あまりの時間が流れた。両国のにらみ合いは、いまだ続いていた。他の平原諸国に報復攻撃は止められたものの、ワイコウによる一方的先制攻撃に怒りの収まらないマリ・八は、防衛隊展開地の要塞化を進めつつあった。対するワイコウ国軍も、長期化を想定したのか砦の構築に勤しんでいる。

現地で生馬が率いていた旧平原統合訓練部隊は、増援に派遣されたスロンとエボダの防衛隊と交代し、ハンジャーカイへと帰還した。新生平原統合軍は、新たに各国から提供された兵力を吸収し、訓練を継続しつつ、不測事態の発生に備えている。

駿が海岸地帯からひよつこりと戻ってきたのは、その日の夕暮れ時だった。緊急招集の報せを受けた四人の異世界人は、急いで平原諸国連絡会議本部へと向かった。

「揃ったね、諸君。急がせて悪かった」

「やにやしなから、駿が集った四人に言う」

「完全に何か企んでいる顔ね」

凜が、指摘した。

「ずばりその通りだ。まあ、座ってくれ」

「よく無事に帰ってこれたわね。ノア川が封鎖されていたでしょうに」

腰を下ろしながら、夏希はそう訊いた。

「ルルトとオープアの外交官にくつついてきたんだ。ワイコウの連中も、この両者には手を出せないからね。じゃ、さっそく本題に入ろう。すまんが、急いで戦争準備を進めてくれ」

「やにや笑いを続けながら、駿が爆弾発言をする」

「戦争って……相手はどこだ？」

厳しい表情で、拓海が問う。

「もちろん、ワイコウ王国だよ」

「ワイコウとルルトとオープアだろう？」

同じく厳しい表情で、生馬が聞き返す。

「いいや。ワイコウだけだ。ルルトとオープアは好意的中立を保つよ」

「どういうこと？」

眉根を寄せて、夏希も問うた。

「ワイコウを攻撃して欲しい、というのは、実はルルトからの要請なんだ。だから当然、ルルトはこちらの味方。直接兵力は出してくれないけどね。オープアも、それに同調している。東部三力国とも話についてはいるんだ。言うまでもなく、高原は平原の味方。負けるはずのない戦いだ」

「待てよ。ワイコウの相互防衛条約はどうなるんだ。ルルトとオープアは、一方的破棄に同意したのか？」

拓海が、戸惑ったような口調で訊く。

「破棄はしないよ。だが、条文に穴があってね。あとで詳しく説明するけど、ルルトもオープアも参戦しないんだ。ともかく、ワイコウに関する説明を先にやらせてくれ。現在同国を統治しているのは、ご存知のカキ国王だ。彼の力の源泉は、実は常備軍たる国軍なんだ。これをほぼ完全に掌握しているから、貴族連中も商人連中も一般国民も、治世に不満があっても反抗できない。だから、国軍に打撃を与えれば、カキ国王は玉座から滑り落ちる、という寸法だ」

「簡単に言ってくれませ」

拓海が、唸る。

「すでに、ルルトの反ワイコウ勢力と、ワイコウの反カキ国王派はがっちりと手を組んでいるんだ。例の一連の謀略を行った連中だね。そして、その行動は、非公式にはあるがルルト王国政府の承認を得ている。オープアも同調したし、東部三力国の協力も得られる予定だ。一連のワイコウの動きで、さしものルルト政府も切れてしまっただんだ。付き合いきれないから、カキ国王の追い落としに協力

するつもりになったようだ」

「で、ワイコウと戦争することで、平原にどんな得があるの？」

いかなる場合でも損得勘定を重視する凜が、尋ねた。

「その前に、連中の思惑から説明させてくれ。開戦と同時に、ワイコウ国内の反国王派が大々的な宣伝工作を開始する。そして国軍が大打撃を受け、カキ国王の面子も潰れたところで、さらに過激な宣伝工作を仕掛ける。カキ国王を追放しない限り、ルルトとオープアにも見捨てられ、ワイコウが平原によって蹂躪されるという内容だ。そうやって大衆を味方に付けたワイコウの貴族連中が、カキ国王を追放し、傀儡政権を打ち立てる。そこで、あっさり平原と停戦だ。

これなら、ワイコウに大きく恨まれることもない。こちらのメリツトは、ワイコウの魔力の源の管理権譲渡、ノア川の自由通行を謳った沿岸諸国条約の締結、人間界縮退問題に対するルルトおよびオープアの更なる協力、将来的な集団安全保障体制へのワイコウを含む海岸主要国の参加、そしてこれが一番大きい。本戦役の戦費のルルトによる全額負担だ。もちろん、支払いが行われるのは終戦後で、異なる名目だろうけどね」

「……流れる血だけは自前、つてことか」

生馬が皮肉な笑みを浮かべる。

「ワイコウの魔力の源が手に入るのは嬉しいけど……また戦争かあ」

夏希は大きく息を吐いた。通行税問題やマリ・ハの紛争問題も一気に解決するが、また大勢の死人が出るかと思うとやりきれない。

「ルルトの言うことは信用できるんだろうな？」

拓海が、確認する。

「僕と一緒に来たルルトとオープアの外交官が、今平原諸国連絡会議で各国の外交官に説明しているところだ。玉璽つきの書簡持参だね。信用してもいいと思うよ。海岸諸国は商人気質だし」

「商人気質？」

「ごく大雑把に言ってしまうと、平原の民は農民気質だ」

首を傾げた夏希に向かい、駿が説明を始める。

「土地に対する執着が強く、保守的。戦わせると守りには強いが、攻めるのは不得手。高原の民は狩人氣質で、土地に対する執着は薄いが、血縁重視。守りは苦手だが、攻めるのは得意。海岸諸国は僕の見る限りでは典型的な商人気質だ。利に敏く、基本的に真面目。先進国らしい享樂的なところは見受けられるがね。大丈夫、約束は守ってくれるよ。おそらく、平原各国の政府も信用して、開戦に賛成するだろう」

「やるしかないようだな」

生馬が、拓海と視線を合わせる。

「だな。しかし……兵力的にはこちらが上だが、かなりの難敵だぞ、ワイコウは」

拓海が、難しい顔で説明を始める。

「人口は約八万。常備軍である国軍は約三千五百。しかもかなりの精兵と言われている。市民軍の動員限界は、最大でも一万だろう。野戦に持ち込めば、兵力に勝るこちらが有利だが、あの狭い谷間にある王都ワイコウやその周辺にこもられたら、穴熊状態だ。ルルトも、長期戦は望んでいないのだろうか？」

「いや、王都での戦闘は避けて欲しい。目的はあくまでカキ国王の追い落としだ。一般市民への被害は、最小限に留めないと」

駿が、言う。生馬が、首を傾げた。

「何か策があるのか？」  
「ある」

駿が、地図を取り出した。マリ・八から北側、湿原地帯を経てワイコウあたりまでの、ノノア川中流域が描かれている。

「カキ国王の弱点のひとつが、これだ。カキ・セド。自らの名を取って付けた入植地。ここを失えば、面子は丸潰れだ」

駿の指が、湿原地帯北部にある黒い丸を抑える。

「スターリンググロードみたいなものか」

拓海が、笑う。

「こちらがカキ・セドを襲う姿勢を見せれば、カキ国王はそれを阻

止しようとするだろう。当然、国軍が出てくる。こちらは、適当な場所でこれを迎撃すればいい」

「そううまく行くのかしら」

夏希は駿の言葉に疑問を呈した。敵もこちらが待ち構えていることくらい、予想するだろう。

「ルルトの分析では、必ず来るそうさ。カキ国王の性格と立場。国民性。それに、呼応して貴族連中が国王をけしかける手筈になっている。来るよ、間違いなく」

「万が一、来なかった場合は？」

凜が、訊く。

「カキ・セドを制圧する。カキ国王の面子は潰れ、国民の支持も失われるだろうな。いずれにしろ、こちらが攻め込んでいけば一回は野戦のチャンスが生まれるはずだ。そこで、国軍に壊滅的打撃を与える」

「まあ、兵力差からして負ける気遣いはないな。しかし、あなたの書いた筋書き通りに行くかどうかは微妙なところだな」

「僕が書いた筋書きじゃないよ。書いたのはルルトだ」

拓海の言葉に、駿がくすくすと笑う。

「ルルトと言えば、どうしてルルトとオープアが条約破棄なしで参戦せずに済ませられるんだ？ そのからくりを聞いておかないと、怖くて開戦なんてできんぞ」

生馬が言う。駿がうなずき、一枚の紙を取り上げた。

「これが三方国の相互防衛条約条文の抜粋だ。『第四条第一項 締約国は、他の締約国の領土に対する武力攻撃に対しては、これを必要と認めるすべての手段を用いて即座に援助を与えなければならぬ』 同第二項 締約国は、自国領土が他国による侵略の脅威に晒されている場合に限り、前項の援助を制限する権利を有する』」

「それで？」

「この条文に基づけば、だ……」

駿が、詳しい説明を始める。

「汚いやり方だな」

聞き終えた拓海が、からからと笑った。

「なんだか、ワイコウが気の毒になってきたわね」

凜が、鼻に皺を寄せる。

「で、今回の戦役に関してひとつだけ注文があるんだが……」

拓海と生馬がすっかりやる気になったところで、駿が切り出した。

「注文？　なんだ？」

生馬が、身を乗り出す。

「開戦から五日以内に、ワイコウ国軍を粉碎して欲しい」

「馬鹿な！」

「無理だ！」

駿の言葉に、生馬と拓海が即座に拒否反応を示す。

「五日？　なんでタイムリミットがあるのよ」

凜が、訊いた。

「開戦と同時に、ワイコウ国内の反カキ国王勢力が一斉に宣伝活動を開始し、国民各層に対しカキ国王追放を呼びかける手筈だ。当然ワイコウ政府はその弾圧を始めるだろう。それゆえ宣伝活動がまともに機能するのは、五日程度。それまでに国軍に打撃を与えられなければ、ワイコウ国内のカキ国王追放気運は勢いを失ってしまう。

そうなれば、たとえ国軍を壊滅させたとしても、カキ国王は玉座を死守してしまうだろう」

駿が、説明した。

「理由はわかったが、五日は無茶だ。適当な戦場へ展開するだけでも、早くて二日、余裕を見れば三日は掛かるぞ。仮に二日で展開を終えたとしても、敵が来てくれなきゃどうしようもない。無理だよ。ルルトに断りを入れてくれ」

拓海が、渋い顔で言う。

「同感だな。移動手段は川船と徒歩しかないんだ。エイラが大型軍用ヘリの三十機も召喚してくれるってんなら、別だが」

皮肉を込めて、生馬も拓海に同調する。

「その宣伝活動の期間を、ずらすことはできないの？　こちらとワイコウ国軍が戦闘する数日前から始めるとか」

夏希はそう訊いた。

「無理だね。開戦時から反国王気運を盛り上げなければ、国軍敗北時に大きなインパクトを与えられない。少なくとも、ルルトの連中はそう考えている。僕としても、その考えは正しいと思う。ダムを決壊させるのならば、満水状態を狙うべきだよ」

「言いたいことはわかるが、五日は無茶だ。ギャンブルにもほどがある」

呆れたように拓海が言つて、首を振つた。

「ふむ。何日なら、可能なんだ？」

困り顔の駿が、拓海に訊き返す。

「相手の出方によるな。もしこちらが布陣した途端に攻めて来てくれるのなら、三日以内に一戦交えることは可能かもしれない。だが、一回の交戦で壊滅的打撃を与えられるとは思えん。追撃ないし再戦を強いるとなると、最低でもさらに五日は掛かるだろう。あわせて八日。余裕をみて、十から十二日というところか」

「十日あればなんとかなるが、五日では無理、ということだね」  
なおも難しい顔の駿が、念押しする。

「そうだ。いや、十日でもぎりぎりだな。悪天候の日があったりすれば、動けないだろうし」

「生馬の意見は？」

「とにかく五日じゃ駄目だよ。倍の十日あれば、できないことはないだろうが……」

「よしわかった。十日で頼む」

破顔した駿が、言つた。

「そんなに勝手に決めちゃっていいの？」

凜が、驚く。

「担いだな、駿」

拓海が、恨めしげに駿を見た。駿が、笑顔のまま言い訳を始める。

「悪い悪い。端から十日、と言ったら却下されかねなかったからね。五日の倍、と考えれば、長い期間だろ？ 宣伝活動は十日は持続するはずだから、そのあいだに何とかワイコウ国軍に壊滅的打撃を与えてくれ。頼むよ」

「仕方がない。どうにか策を考えよう。で、開戦の日時は？」

拓海が、渋い表情で訊く。

「それはこちらの都合で決められる。ただし、ごく近いうちに頼む。遅くなるほど、ワイコウの外交的立場が回復するからね」

三日以内に、ルルトによる提案……平原諸国軍がワイコウ領域内に侵攻し、ワイコウ国軍に打撃を与えることによってカキ国王の支持基盤を揺さぶり、玉座からの追い落としを図る……は、平原各国元首すべての賛同を得た。これを受けて、各国が派遣した防衛隊が、続々と策源地たるマリ・八に送り込まれる。食料を始めとする兵站物資の集積も、開始された。拓海が訓練部隊用に買い込んでおいた川船が、大量の米を積み込んで各河川を下り、マリ・八を直指してゆく。

「……グリーンゲ殿！ グリーンゲ殿！」

グリーンゲは、うつすらと眼を開いた。顔見知りの廷臣三人ほどが、気遣わしげな表情で見下ろしている。

「おお、気付かれましたか」

廷臣たちの表情が一斉に和らいだ。

「……わしは……どうして……」

グリーンゲは、わざと力ない口調で言った。

「急に倒れられたのですよ。今、医者を呼びに行かせています」

農業部の廷臣が、なだめるように告げた。

やがて駆けつけてきた王宮付き医師が、床に倒れたままのグリーン

ゲをざつと診察した。黒い丸薬を三粒取り出し、書記二人の手を借りて上体を起こしたグリンゲの口に押し込み、水を含ませる。

「心臓ですな。ご無理なさらないで下さい、グリンゲ殿。ご自分の年齢を考え、もう少しお体をいたわらないと」

諭すように、医者が言う。

「しかし、將軍たるもの、国軍が出動しているこの時期にのんびりしてはおれぬ」

「グリンゲ殿。戦場のことはヒュックリー將軍に任せておけばよろしいでしょう。このところ毎日遅くまで王宮に詰めているではないですか。少しは休まれたほうがいい」

遠巻きに見守っていた大臣の一人が、言った。

「閣下のおっしゃる通りです。働きすぎですよ」

「よいお年なのですから、無理なさらずに」

廷臣たちのあいだから、賛同の声があがる。

「いずれにしろ、今日はもう仕事はなしです。寝台を用意しますから、そこで寝ていてください」

きつぱりと、医者が告げた。

「むっ」

グリンゲは、不満そうな表情を取り繕った。

数日前から、グリンゲは健康に不安があることをさりげなく周囲に印象付け始めていた。なにしろ王宮勤めの者の中でも、五指に入る高齢者である。多少足をふらつかせたり、腰の痛みを訴えたり、疲れ易いと漏らしたりしても不信がる者はいなかった。

ぶつちやけ、仮病である。こうして衰えていることをアピールすれば、国軍の総指揮を命じられることはまずないだろう。もし指名されたとしても、戦陣では身体が持たぬと言い張って辞退すればいい。老いて怖気づいたと糾弾されるかも知れぬが、何百人もの若者を自らの手で死地に追いやるよりは、まだ良心は痛まぬ。

医者の指示で、四人の衛兵がグリンゲの身体を持ち上げた。ワイコウ最古参の將軍は、聞き分けのいい幼児のようにおとなしく寝台

まで運ばれていった。

## 57 ルルトの要請（後書き）

第五十七話をお届けします。

「本戦役の肝は、いかにしてワイコウ国軍を戦場に引つ張り出すかだ」

四人の異世界人を前に、拓海が説明を始める。

「言うまでもなく、戦闘に消極的な敵に戦闘を強要することは難しい。そこで、駿を通じていくつか布石を打つといた。まずは、平原諸国軍がマリ・八防衛隊攻撃の報復として、カキ・セド占領を狙っているという噂を流した。カキ・セドは周辺地域を含め、人口二千人ほどの入植地だ。この防衛に国軍が出てきてくれれば、開戦から数日以内に決戦に持ち込める。同時に、カキ・セドが平原の手に落ちるようなことがあれば……それが軍事的占領だろうと一方的な放棄によるものだろうと……カキ国王も終わりだ、という意味合いの噂も流してもらった。いわば、ハードルを上げといたんだな」

「その程度で、出てきてくれるかしら？」

凜が、疑わしげに言う。

「ちよつと不足かもしれない。ま、順番に説明していこう。敵の総兵力は、国軍三千五百に市民軍一万、と見積もっている。おそらく決戦兵力として出てくるのは、あわせて一万程度だろう。こちらがあまりにも大軍で行ったら、さっさと逃げてしまいかも知れない。そこで、平原統合軍は主力七千、マリ・八で待機する予備軍五千の陣容でいく。これには、兵站担当者は含まない」

「少なすぎないか？」

駿が、片眉を上げて訊く。

「確かに少ない。だが、主力の半分以上は今生馬が鍛えている大隊編成の精鋭部隊だ。これは強いよ」

「大隊？」

「詳しくはこのあと訓練を見学してもらう時に説明するが、弓を主力にこれを援護する兵を配した、いわば諸兵科連合部隊だな。弓隊

や長槍隊はそれ自体の攻撃力は高いが、柔軟性に欠け、攻守の切り替えが遅く、融通が利かないという欠点があった。この大隊編成なら、攻防ともに威力を発揮するはずだ。一隊三百八十名編成で、十隊投入する予定になっている」

生馬が、ざつと解説する。

「残りは市民軍が約一千。司令部要員が二百。それに、弓兵を中心に高原戦士が二千」

謝意を示す視線を生馬に投げかけた拓海が、続ける。

「高原も巻き込むの？」

夏希は驚きの声を上げた。兵力的に余裕がある以上、高原戦士の出番はないと思い込んでいたからだ。

「いいチャンスだからな。かつての敵同士が、肩を並べて戦うというのは、もつとも効果的な和解方法なんだ。政治的にも、対外的、対内的に平原と高原の協調ぶりをアピールできるしな。軍事的に見ても、高原弓兵の能力は高く、平原のそれを上回る。適切に使えば有効な戦力になるはずだ。予備軍五千のうち、防衛隊は一千。あとは市民軍となる。この部隊の出番は少ないと思う。と言うか、予備隊をそっくり注ぎ込まなきゃならない事態に陥ったら、まず間違いない。こちらの作戦目的は達成できないだろうな」

「そうだな。……しかし、ワイコウ国軍の釣り出しにもう少し餌が欲しいところだな」

拓海の見解に同意した生馬が、不満顔で言う。

「俺もそう思った。そこでだ。キュイランスを活用したい」

「信用できるのかい？」

薄笑いを浮かべた駿が、訊く。

「俺も、彼は全面的に信頼していない。俺たちを担いでいるとは思わんが、裏切る可能性はあるだろうし、当局に怪しまれて尋問されたりすれば、即座に口を割ってしまうだろうしな。そこでだ。偽情報をつかませた上で、工作を依頼することにした」

「具体的には？」

やや疑わしげな表情で、生馬が訊く。

「タイムリミットに関しては一切教えない。ルルトの介在についても同様。その上で、こちらの架空作戦内容を伝えておく。総兵力は一万。第一段階は主力をカキ・セドの占領部隊と警戒部隊に二分。前者はもちろんカキ・セドを攻略。後者はノノア川沿いに布陣し、ワイコウ王都からの救援を阻止する。第二段階は主力を合流させ、前進してワイコウ野戦軍の撃破を目指す。第三段階は、ワイコウ王都攻略作戦への移行だ。キュイランスには、第二段階終了時点でカキ国王が退位すれば、第三段階は発動しない、と告げる。で、肝心の工作だが、可能な限りのワイコウ国軍兵力を、早期に湿原地帯に出動させるように働きかけてもらう。対陣状態が続き、兵が疲労するのを狙う、という理由付けでね。そこを、合流したこちらの主力が叩くという寸法だ」

「なるほど」

凜が合いの手を入れた。

「これならば、キュイランスが裏切って架空作戦内容が漏れても、ワイコウ側の効果的な対策はできうる限りの大兵力を早期に派遣し、こちらが兵力を二分している状態で叩く、ということになるはずだ」

「……王都近辺で迎撃する、という策を採用されたら？」

夏希はそう訊いた。

「作戦失敗だな。ま、こちらが失うものは少ない。いわば振り出しに戻るだけだ。とりあえずルルトの依頼に応じて出兵したんだから、ルルトとオープアとの関係は深まるし、戦費も負担してもらえろ。両国と平原が組んでさらなる圧力を加えれば、ワイコウも折れてノア川の通行税問題も解決するだろう。カキ国王は居座るだろうが、国際的に孤立した状態では悪さもできまい」

「魔力の源はどうなるの？」

「それは後回しになっちゃうな。残念ながら」

夏希の問いに、拓海が顔をしかめた。

「……というのが、竹竿の君の意向と、平原側の作戦計画です」  
説明を終えたキュイランスが、すっかり冷めてしまったお茶をごくごくと飲み下した。

……偽情報をつかまされたか。

グリーンゲ將軍は、即座にそう判断を下した。

これほど短時間で、キュイランスが平原側の全面的信頼を勝ち取ったとは思えない。ならば、教えられた平原統合軍とやらの作戦計画は、おそらくはでたらめだろう。

グリーンゲは思案した。平原に……竹竿の君に協力すべきか？ それとも逆らうべきか。

「キュイランス。お前は、どうするべきだと思う？」

「平原側が狙っているのは、カキ国王の退陣だそうです」  
唇を舐めながら、キュイランスが言う。

「マリ・ハとの軍事衝突に対する賠償と謝罪。ノア川通行税の撤廃。そして、魔力の源の引渡し。この三つを確実に成し遂げるために、カキ国王のワイコウ統治を終わらせる必要がある。そのためには、戦争を吹っかけて叩くしかない。このように、平原側は考えているそうです」

「それはおかしいな。たしかに陛下には政敵が多いが、王都が陥落でもない限り、退位されることはないだろう」

そう反論しながら、グリーンゲは素早く頭を回転させた。平原側は情報不足から戦略を読み違えているのか、それとも国王追放の秘策があるのか。たとえば、すでに国内の反国王派と手を組んでいるか。

「いずれにしても、全面戦争となれば大勢の命が失われます。一番いいのは、こちらが平原に譲歩することでしょう。次善の策としては、平原の計画に協力すること、だと思います」

厳しい表情で、キュイランスが言う。

「陛下に退位してもらわぬ限り、戦争は避けられそうにないか」

グリンゲは腕を組んだ。鋭い眼でキュイランスを見つめ、質問を放つ。

「で、お前の見たところ平原の連中はどこまで信用できる？ 奴らの目的が、わが国に対する侵略でないことを信じていいと思うか？」  
「竹竿の君は信用していいと思っています。まあ、わたしに与えられた情報すべてが正確とは思えませんが」

苦笑しつつ、キュイランスが答える。

「奴らの計画に協力すれば、陛下の退位までにわが国軍は全滅に近い打撃を蒙るだろう。それではワイコウの存続さえ危ぶまれる」

グリンゲは渋い表情で、そう甥に告げた。

「では、計画に協力しないと……」

「協力はする。だが、国軍の戦力は浪費させない。これしかないだろう。異世界人をそこまで信用できぬ」

「では、カキ国王のことは……」

声を潜め、もともと猫背の背中をさらに丸めて、キュイランスが問う。

「わしの忠誠の対象は、わがワイコウだ。国王陛下がどなたであるうとな」

同じように声を潜め、グリンゲはそう言い切った。

マリ・八に平原の大部隊が集結し、北上を狙っているとの報告を受けたカキ国王が下した判断は、やはりワイコウ国軍の全面出動であった。引いて迎え撃つ方が有利、という進言もなされたが、ルルトおよびオープアからの増援計二千五百が到着したこともあり、強硬策が選択される。

グリンゲ将軍は、総指揮官就任を打診されたが、健康上の理由を名目にこれを固辞した。現在南部で派遣部隊を指揮しているヒュックリー将軍が、次席であるために総指揮を執ることになる。

ワイコウでは急ぎ市民軍の編成が行われた。しかし、それが終了

する前に平原側の侵攻準備が完了したようだとの報告がもたらされる。カキ国王は、副将格であるアタワン將軍に、急ぎ出動するよう命じた。ヒュックリー將軍には、適宜退却し、アタワン將軍率いる本隊と合流するようにとの命令を携えた伝令を送る。

アタワン將軍に指揮された総計一万一千七百名……ワイコウ国軍二千二百、市民軍約七千、ルルト国軍千五百、オープア国軍一千は、山道をたどってノノア河岸を目指した。補給物資を満載した川船が先回りし、河岸に補給所を設置してゆく。川船の数は不十分であったが、アタワン將軍は兵站面での不安を感じていなかった。もとより長期戦は想定していなかったし、予想戦場域にはノノア川沿いに多少なりとも耕作地がある。食料に限って言えば、ある程度の現地補給も行えるはずであった。

「お久しぶりです、みなさん」

弓兵を主体とする二千名の高原戦士を率いてマリ・八に現れたのは、イファラ族のベンデイスであった。

「ひよつとして、拓海のご指名？」

出迎えた夏希は、そう訊いた。ベンデイスが出てくれば、当然妹のリダも付いて来るはず。そのように考えた拓海の計らいかもしれない。

「いえ、族長会議の指名ですよ」

夏希の考えを読み取ったのか、苦笑しつつベンデイスが応える。

「実戦経験と平原の民に関する知識、それにお二人だけですが異世界人との面識などを考慮されたようですよ」

「そうなんだ。ところで、リダは？」

「止めたんですが、付いてきました。まあ、弓の腕前はかなりのものですから、足手まといにはならないでしょう。弓兵隊の一員に組み込んであります」

「……心配じゃない？」

「わが妹ながら、あいつはなかなか強かな娘です。大丈夫ですよ」  
「いや、そつちじゃなくて、拓海の方よ」

夏希は苦笑交じりに言った。

「そちらも心配していません」

「じゃ、兄公認のお付き合いなのか？」

「高原では、男女関係に対しては親族とさえも過干渉することはないのです。リダももう子供ではありません。誰を好きになろうと誰と付き合おうと、誰の愛を受け入れようと、自分の責任です。…まあ、その風潮のせいで未婚の母が多いのも、高原の特徴ですね」

ベンデイスが、苦笑いする。

「子供はどうなるの？ 父親なしじゃ、いろいろと問題が生じ易いんじゃないの？」

「子育ては母親が行うことはもちろんですが、親族がいろいろと手助けします。高原の民は、平原の民よりも血縁を重視することを思い出してください。血の繋がっている子供であれば、家族の枠を超えて一族の一員として大切に育てられるのです」

「作戦速度には、二種類ある。物理的な進軍速度と、指揮統制上の意思決定速度だ。前者は言うまでもなく、兵力移動の手段に制約される。歩兵より騎兵が速く、良路があり燃料補給が潤滑に行けば自動車化された部隊の方がさらに速い。後者は言わば指揮官の決断の早さだ。もちろん、あまりに拙速では本末転倒だがな。各所から上がってくる情報や報告、具申などを総合的に判断し、的確な命令を末端にまで行き渡らせることが肝要だ。この両者が優れた軍隊は、高い作戦速度を維持できる。敵はその速度について行けずに、主動を奪われ、対応が後手に回り、やがては自滅するわけだ」

ノア川を下る川船の中で、拓海がやや自慢げに説明した。

「で、この船団は前者の作戦速度の向上に貢献しているわけね」

「そうだ」

堂々たる船団であった、その数、実に百七十隻。

平原統合軍北進の兆候を察知したヒュックリー將軍率いる約一千名のワイコウ国軍部隊は、陸路北上して湿原地帯北部……カキ・セドの至近まで退却していた。名目上の総指揮官であるスロンの將軍に率いられた三千の平原統合軍は、ヒュックリー將軍指揮下の警戒部隊を追い散らして、カキ・セドよりも北の河岸に上陸を敢行した。これを見て取ったヒュックリー將軍が、約一千の国軍部隊を率いてカキ・セドに立てこもる。

「やはりそう来たか」

地図を睨みながら、拓海が唸った。

「どうするんだ。偵察隊の報告とルルトからの情報を勘案すると、敵の主力はかなり近付いてきているぞ。ここで戦力を二分するのはまずい」

マリ・ハまで往復した川船に乗って、第二陣の二千五百名を率いてきた生馬が問う。

「幸い、敵主力はやる気のような。野戦を意図して、南下して来るだろう。こちらは、それを予定よりも南で迎撃しよう。オランジ村だ」

拓海の指が、地図の一点を指す。ノノア川沿いにある、小邑らしい。

「……って、どこかで聞き覚えのある村ね」

夏希は首を傾げた。

「作戦はこうだ。ここに一千を残し、四千五百でオランジ村へと進出、敵主力に備える。マリ・ハからは船で残る一千五百を直接オランジ村まで輸送する。予備軍からも一千五百を船でここまで移動させ、カキ・セドに立てこもっている敵一千の押さえとする。残しておいた一千は、予備軍を輸送した川船でオランジ村まで急送する。

つまりは、主力七千全てで敵主力を迎え撃つわけだ」

「となると、のんびり準備している時間はないな」

生馬が、急いた口調で言った。

「その通りだ。とりあえず、俺が総指揮官といっしょに第一陣としてオランジ村に向かう。二人は第二陣として来てくれ。いいな」

命令口調で、拓海が言いつつ、夏希と生馬を指差す。

アタワン將軍率いる一万一千七百の軍勢は、ようやくカキ・セドまで一日行程の場所までたどり着いた。偵察隊を数隊放ち、小部隊による警戒線を張り巡らしてから、野営準備に入る。

「明日は敵と接触することになるだろう。兵には腹いっぱい食わせてやれ」

そうアタワン將軍は命じた。

就寝前に、偵察隊からの伝令が戻ってくる。どうやら、平原側はオランジ村に陣取っているらしい。

「この村か。どのような村なのか？」

アタワンは、地図を眺めながら湿原地帯に詳しい側近に尋ねた。

「は。ノノア川の西側にある米作りで成り立っている小村です。人口は二百ほど。密林が東側へ大きく張り出しているので、隘路と言えます。街道の西側に沼があり、西側には水田が広がっていますので、おそらく敵はそれを盾として使ってくるのではないでしょうか」  
「なるほど。敵は有利な地形に陣取ったというわけだな。あと留意しなければならぬのは、敵の川船だな」

ワイコウの軍勢が徒歩でここまで移動するのに掛かった日数は二日。平原側の進発はこちらよりも遅かったが、すでに数千の軍勢をカキ・セドよりも北側に送り込んでいる。距離を勘案すれば、四から五倍くらいの速度であろうか。

「川船でこちらの連絡路を断つ策に出られると、厄介ですな」

側近の一人が、発言した。

「いや、むしろその方が都合だろう」

アタワンはそう応じた。情報では、当面の兵力はこちらの方が上

である。敵が自ら戦力を分散してくれるのであれば、各個撃破が可能となる。連絡線が一旦断たれたとしても、兵站状況には余裕があるし、短期間ならば問題は生じないはずだ。むしろ、警戒すべきは敵が川船を使って短期間のうちに正面の兵力を増強する可能性だろう。カキ・セドに立てこもっているヒュックリー將軍を救出するためには、こちらは敵が予備軍を投入する前に、早めに攻勢に出る必要がある。隘路であるオランジ村に陣取る敵兵力がこちらを上回ってしまったら、安易に攻勢に出るのは自殺行為だ。

アタワンは決断した。

「状況に変化がない限り、明日仕掛けるぞ。皆、よく眠っておけ」

58 両者の思惑（後書き）

第五十八話をお届けします。

## 59 条約の厳守

「ごそごそという気配で、夏希は目を覚ました。

布団代わりに身体に巻きつけていた薄布を剥がし、上体を起こす。小さな小屋の中は、すっかり明るくなっていた。一緒に寝ていた者は、もう数名しか残っていない。

オランジ村は小さな村である。何千人もの兵士が宿営できるだけの建物は、ない。村人に丁寧に『頼み込んで』明け渡してもらった何軒かの家と小屋で眠れたのは、五人に一人くらいであり、しかも雑魚寝とあいなった。夏希は他の女性たちと小屋で横になったが、暑苦しさで閉口した。むしろ、野宿の方が熟睡できたかもしれない。「お目覚めになりましたか」

アンヌツカが、顔を覗きこんでくる。腰を下ろしてはいるが、すでに革鎧を着込み、剣まで帯びた状態だ。

「おはよう」

「おはようございます。まずは、お顔を洗った方がよろしいですね」

立ち上がったアンヌツカに手を引かれるようにして、夏希は小屋を出た。誰かが川から汲んできてくれたらしい水の張られた大きなタライの前で、顔を洗う。アンヌツカが差し出してくれた手拭いで顔を「ごしごし」と擦り、水気と眠気を拭い去ろうとしていると、背後から声が掛かった。

「おはよう、諸君」

拓海の声だ。しかも、声調からして上機嫌らしい。

「おはよう。……いやに機嫌がいいじゃない」

「夜のうちに放った偵察隊から報告が来た。敵は夜明け前から起き出して、進軍準備を整えたそうだ。今日中に、接敵できるぞ」

満面の笑みを湛えて、拓海が言う。

「というわけで、朝食前に生馬を交えて最終打ち合わせだ。アンヌ

ツカ、しばらく夏希を借りるぞ。付いて来い、夏希」

「はいはい、平原統合軍派遣部隊総指揮官主席補佐殿」

夏希は手拭いをアンヌツカに返すと、今回の派遣部隊における拓海の正式な肩書きで呼びかけた。ちなみに、夏希の肩書きは同部隊総指揮官補佐、となっている。

「……相変わらず元気な奴だな」

生馬の姿を見つけた拓海が、呆れたように言った。

生馬は上半身裸になり、一軒の農家の裏庭で鞘付きの長剣をぶんと振り回していた。農家の子供だろうか、幼児が二人、しゃがんだ姿勢でその様子をぼかんと眺めている。

「よう、拓海、夏希」

「作戦会議だ。顔を貸せ」

拓海が、生馬を手招く。

「ちよつと待つてくれ。ソリス！」

生馬が、お気に入りの伝令兵を呼ぶ。手渡されたシャツを羽織った生馬が、腰に長剣を手早く吊った。

「よし、いいぞ」

三人は、農家から離れて畑の中に伸びている小道を歩んだ。周囲に人気がないことを確認してから、拓海が足を止める。いまのこゝる住民とトラブルにはなっていないが、彼らはワイコウ国民である。用心に越したことはない。

「偵察結果から推定するに、敵は早ければ昼ごろ、遅くとも午後早いうちに仕掛けてくるだろう。生馬、頼んでおいた部隊の編成は終わってるか？」

「昨日のうちに終わらせたよ。俺が直卒するもつとも出来のいい大隊二個と高原弓兵四百名。ベンデイスが率いる高原弓兵六百名。ただし、乗せる船が揃っていないが」

「午前中には、残りの一千名を乗せて現れるはずだ。そうしたら、手筈どおりやや上流で待機してくれ」

「防塞で敵の前進を阻み、その間に俺の部隊が船で敵主力後方に進

出、背後を衝く。役目は承知しているが、どうも作戦の全体像がつかめていない。もう少し詳しく説明してくれるか？」

生馬が、訊く。

「詳しい説明は必要ないよ。ひと目でわかる。ちょっと、高いところへ登ろうか。夏希も来てくれ」

拓海が来た道を戻り始めた。村の北側にある一軒の家の屋根の上に、簡素な低い櫓が組まれている。拓海が昨日のうちに造らせたものだろう。そこに掛けられた梯子を、拓海がひよいひよいと昇ってゆく。生馬と夏希も続いた。

「この地形を見れば、俺がやりたいことはわかるだろう」

拓海がやや自慢げに言っつて、大げさな身振りで北の方角を指し示す。

夏希は櫓の上からオランジ村の北方を眺めた。以前、コーちゃんに空から見せてもらった時の事を、鮮やかに思い出す。左手にジャングル。右手にノノア川。川沿いには南北に細長く田んぼが広がり、その左側に街道が南北に伸びている。田んぼの北には、小丘。街道を挟んで左手には、青々とした葦に縁取られた大きな沼地。その南側にも、田んぼが広がっている。

「ふむ。守り易いよい地形だな」

生馬が、感心したように言う。

「感想は、それだけかい？」

いたずらっぽい口調で、拓海が問うた。

「感想？」

「田んぼと沼地に挟まれた街道。左手のジャングル。右手に水。なにも思い浮かばないのか？」

拓海がくすくすと笑う。

「沖田躰か！」

生馬の表情が、ぱっと輝いた。

「そう。あの再現をしようというんだよ。ま、かなりアレンジしてあるがね」

「起きたなワテ？ なに、それ？」

夏希は首を傾げた。

「島津びいきの生馬に語らせると長くなるので俺が説明するが、戦国時代の合戦のひとつだ。場所は九州は島原半島の東海岸。島津と有馬の連合軍が竜造寺の侵攻軍を打ち破った戦いだ。この敗戦で九州三大戦国大名の一角であった竜造寺家の没落が決定的となった」

「あー、これだけは言わせてくれ」

生馬が嬉々として割り込んだ。

「この合戦で、総大将の竜造寺隆信が討ち死にしている。フィクシヨンの影響か、戦場で戦国大名が討ち死にするのは当たり前だと思われるが、実はそんなことはないんだ。逃げ場のない城攻めや包囲戦で自決するならともかく、野戦ではめったに大名が討ち死にすることはない。あの関が原の合戦でさえ、本戦の戦場で討ち死にまたは自害したのは大谷吉継、島津豊久ら四人しかいない。純然たる野戦で、総大将でもある有力大名が首級を挙げられた例は、長い戦国時代を通じてもたった二例しかない。ひとつがこの沖田礮での竜造寺隆信。もうひとつは、桶狭間での今川義元だ」

「へえ。そんなに凄い合戦なんだ。それにしても、知名度がないわね」

「仕方ないだろ。信長と家久じゃ、その後の出世振りが違いすぎる」

生馬が、肩をすくめる。

「それで、生馬の部隊が前進するタイミングだが……」

拓海と生馬が、細々した打ち合わせを始めた。夏希も真剣に聞き入った。すでに以前の戦闘指揮経験から、戦場においては他の部隊との連携のタイミングが、勝敗を左右しかねない重要なポイントであることは学んでいる。

「とまあ、こんなところだな。とりあえず、朝飯にしようや」

拓海が言っつて、梯子を降り始めた。

昼前に、平原統合軍と高原の民の合同部隊は、全ての準備を整えていた。

オランジ村の北は隘路である。濃密なジャングルとノア川の流に挟まれた土地は、幅が三百メートルほど。しかしながら、街道を挟むように西側に楕円形の沼地、東側に長方形の田んぼが南北方向に伸びているので、通行できるルートは三ヶ所しかない。すなわち、ジャングルと沼地のあいだの狭い草地、河岸と田んぼを守る土手のあいだの河原、そして、街道とその両側の草地である。

平原側は、その三ヶ所の南側に簡素な防塞を築き、その後ろに布陣していた。最も狭いルートであるジャングルの縁には二個大隊と高原弓兵四百名。中央の街道には、四個大隊と高原弓兵三百名。川沿いには、二個大隊と高原弓兵三百名。予備部隊である市民軍一千名は、街道と川沿い両方にいつでも駆けつけられるように、その後方にまとめて置かれている。

夏希は川沿いの部隊を率いていた。総勢一千六十名。主力である大隊は、弓兵二百名を主力に、これを援護する長槍兵百二十名、接近戦に強い長剣兵五十名、それに本営を構成する大隊長とその補佐、護衛や伝令の兵士計十名の総計三百八十名で編成されている。ちなみに弓は、高原戦士が使っているものを参考に改良されており、以前の物よりも短いが威力は同等以上にある。取り回しが良くなった分、射る速度も若干向上していた。

例によって、夏希は竹竿を携えていた。もちろん、すぐそばにはアンヌツカが控えている。さらに、拓海が付けてくれた伝令が三人従っている。

夏希は空を見上げた。珍しく、雲が多い。雨をもたらすような雲ではないが、かなり厚みがあるので、時折日差しが翳るとあたりが急に薄暗くなる。視線を戻すと、くつきりとした雲の影が、細いあぜ道で整然と区切られた水田をゆっくりと横切つてゆくのが見えた。拓海の指示で、水田の排水路は昨晚から板と粘土質の土で暫定的に塞がれていた。水量を多くし、敵兵が簡単に踏破できないようにし

たのだ。伸びきっていない稲の葉は水面からちよこんと顔を出している状態であり、さながら田植え直後のようにも見える。

「……戦場に馴れちゃったのかしらね」

夏希はそつとつぶやいて、顔をしかめた。おそらくあと五十ヒネ足らずのうちに、何百もの命が失われる陰惨な戦いが開始されるというのに、まったく動じていない自分に、少しばかり嫌悪感を覚えてしまう。

「それでよろしいのですよ、夏希様」

例によって夏希の考えを読み取ったアンヌツカが、ささやいた。

「大隊の兵士たちも、高原戦士たちも、みな夏希様の評判を聞き及び、そして信頼しているのです。以前拓海様に聞いたことがあります。『指揮官は、部下の前ではよい役者たれ』……。泰然と構えていらっしやる夏希様と一緒になら、勝てると思いが思い込んでくれれば、それでいいのです」

「よい役者ねえ」

夏希は苦い笑みを浮かべた。もともと、演技は得意ではない。感情がすぐに顔に出してしまうタイプなのだ。カードゲームでも、ポーカーやババ抜きなどは下手くその方である。

「……いいでしょう。戦場でくらい、自分を偽ってみますか。」

夏希は厳しい表情を作ると、きびきびとアンヌツカに告げた。

「大隊と高原弓兵の様子を視察してきます。後は頼んだわよ」

「了解しました、夏希様」

にやりと笑ったアンヌツカが、すぐに引き締まった表情に戻ると、小さく頭を下げた。

アタワン將軍は平原側の布陣をざつと望遠鏡で観察した。次いで、偵察隊からの報告が書き込まれた地図を見つめる。

「河岸の敵が少ないように思うが？」

「畏ですかな」

側近が、首をひねる。

偵察隊の見積もりでは、密林沿いが約一千。街道沿いが約二千。川沿いが約一千となっている。

「敵は総勢六千から七千のはず。予備部隊を多く取っているようですね」

別な側近が、言う。

「常識的な戦法だな」

戦力を三分し、こちらにも戦力の分割を強いる。戦況に応じて大規模な予備兵力を一ヶ所に投入し、各個撃破と戦線の突破を狙う。しごくまともな戦法といえる。

……この程度の兵力ならば、戦力差で押し切れるはずだ。

そうアタワンは判断した。下手な小細工は失敗の元である。単純な戦術こそ、勝利への近道だ。こちらの戦力には、訓練不十分な市民軍も多いし、友好国の国軍も混じっている。精妙な作戦を行うだけのゆとりは、ない。

「こちらにも戦力を分けるぞ。街道沿いと河岸を主攻とする。ルルト部隊には密林沿いを、オープア部隊は予備にまわってもらおう」

「閣下。作戦会議中申し訳ありません。シュビッツ閣下とネーゲルス閣下が、至急お会いしたいとのことですよ」

足早に歩んできた士官が、報告する。

「すぐにお通ししろ」

アタワンはそう命じた。シュビッツ將軍はルルトの、ネーゲルス將軍はオープアの派遣軍司令官である。名目上二人ともヒュックリ將軍およびアタワン將軍の指揮下に入っているが、軍人としてはアタワンと同格の地位にある。無下にはできない。

「ようこそお二方。いま、作戦計画を練っていたところです。申し訳ありませんが、ネーゲルス閣下の部隊は予備にまわっていただきませぬ」

アタワンはにこやかに告げた。

「そのことですが、閣下。ここで平原側と戦われるおつもりですか

「？」

懸念を顔に張り付かせて、シュビッツ将軍が訊いてくる。

「もちろん、そのつもりですが」

「それでしたら、残念ながら我が部隊はご協力することができません  
ん」

「なんですと？」

アタワンは目を剥いた。

「アタワン閣下。わがオープア部隊も、参戦することはできません  
ネーゲルス将軍も、そう通告する。

「どういうことですか？ 相互防衛条約を、反故にするつもりですか  
？」

「いや、相互防衛条約を厳守したいだけですよ」

シュビッツ将軍が、首を振った。

「第四条を、思い出してください。『第四条第一項 締約国は、他の締約国の領土に対する武力攻撃に対しては、これを必要と認めるすべての手段を用いて即座に援助を与えなければならない』」

「それが、どうかしましたか？ 平原の軍勢は、わがワイコウの領土を侵しているのですぞ。条約に基づいて、一緒に戦ってくださいるのでは？」

「閣下。我々の現在地は、ここですね？」

シュビッツ将軍が、手にした地図を広げ、一点を指差した。オランジ村の、やや北側だ。

「そうです」

「で、予想戦場が、こゝ」

シュビッツの指先が少しずれ、オランジ村に重なる。

「そうですか……」

「ならば、我が部隊は戦うことはできません。わがルルト王国は、カキ・セドを含む湿原地帯北部のワイコウ王国による領有宣言を公的に認めたことは一度もないのです。それどころか、何度も外交ルートを通じて、領有宣言が無効であることを主張し、取り消すよう

に求めている。相互防衛条約の条文に忠実であるならば、現在の平原軍の行動はワイコウ王国の領土に対する武力攻撃とは認められないのです」

「詭弁だ！」

「そう取られても仕方ありませんな。しかし、わたしは国王陛下に仕える軍人です。国際条約の解釈や祖国の外交政策をみだりに曲げるわけにはいかないのです」

しれっとした表情で、シュビッツ将軍が言い切る。

「まさか、ネーゲルス閣下も……」

「シュビッツ閣下と同意見です。わがオープアも、ワイコウの湿原地帯入植には反対の立場を貫いており、この地の領有も認めていませんから」

……悪夢だ。

アタワンは天を仰いだ。ルルトとワイコウの部隊は、あわせて二千五百。数は多くはないが、質的にはワイコウ国軍に匹敵する。この両者が戦ってくれないとなると、戦力は三割減、ということになるだろうか。

アタワン将軍は、必死になって二人の外国人将軍をかき口説いた。しかし、両者とも頑として首を縦に振らなかつた。

……仕方がない。

アタワンは頭を切り替えた。ここで参戦を無理強いしては、後々外交問題に発展してしまう。相互防衛条約違反を言い立てられ、条約の合法的破棄の理由をルルトとオープアに与えてしまうことにもなりかねない。

両部隊には、牽制役を務めてもらおう。

アタワンは頭に浮かんだ案を整理した。予備軍と一緒に、後方に控置すればいい。平原側は、こちらのごたごたなど知らぬはずだ。精鋭予備部隊だと思わせることができれば、役に立たないわけではないだろう。特に、敵がこちらの読みどおりに川船を使ってわが後背に兵力を送り込んできた場合、二千五百の兵力はかなりの脅威と

映るはずだ。

「わかりました。国家の政策とあれば仕方ありません。後方で待機していても構いません。その場所は指定させていただきませんが……よろしいですか？」

「その程度でしたら、喜んでご協力させていただきます。我々は条約を守りたいだけであって、決して閣下の足を引っ張りたくいわけではないのですから」

シュビッツ將軍が言って、笑みを見せた。ネーゲルス將軍も、同意する。

59 条約の厳守（後書き）

第五十九話をお届けします。

## 60 オランジ村の戦い

ワイコウ軍が、前進を開始した。

密林沿いに市民軍千五百、街道沿いに国軍千二百と市民軍二千、川沿いに国軍一千と市民軍二千。予備に市民軍千五百。そして、見せ掛けだけの予備軍として、ルルトとオープアの部隊二千五百が、その後方川沿いに布陣している。

アタワン將軍は、街道の東側の水田の北にある小丘に陣取っていた。かなり遠くまで見通せるので、指揮には都合がいい。

「思っていたよりも、予備が少ないようです」

望遠鏡で平原側の布陣を観察していた側近が、そう報告した。

ほどなく、三ヶ所全ての戦線で交戦が始まった。接近するワイコウ軍に対し、平原側が盛んに矢を浴びせてくる。

ワイコウ国軍の標準的な最小戦闘単位は、十二名からなる分隊である。その編成は、隊長以下盾兵二名、弓兵二名、戟兵四名、長槍兵二名、それに伝令兵となる。比較的軽装な弓兵や長槍兵でも、全員が胸甲と肩当て、それに草摺りが付いた小札鎧と板金冑を着用しており、隊長と戟兵に至っては上腕部にも小札鎧が付き、さらに板金製の脛当てまで支給されている。したがって、単に『装甲度』を比較すれば、平原統合軍の大隊に属する兵士よりも、ワイコウ国軍の兵士の方が上である。……属する国家の経済力の差、と言えようか。

盾兵が持つ大盾は、人ひとりをすっぽりと隠せるだけの大きさと至近距離から放たれた矢が貫通しないだけの強度を持っている。分隊四個が集まって小隊を形成し、さらに小隊四個と五十二名から成る弓小隊一個で編成されるのが、中隊である。一個中隊の定員は、二百六十五名だ。

市民軍の編成も、国軍に準ずる。武器に関しては、国軍と同等のものが支給されているが、防具に関しては数段落ちる。一応全員が

板金冑を被つてはいるが、その強度は国軍兵士が身につけているものとは比べ物にはならない。小札鎧を着用しているのは三分の一度。残りの者は、革鎧だ。

重装備の国軍中隊が、盾兵を先頭に前進する。防塞に陣取った平原側大隊弓兵が直射で、その後ろに並んだ高原弓兵が曲射で、激しく矢を浴びせる。ワイコウ弓兵も応射したが、その数は少ない。

「なんと弓兵の数だ」

望遠鏡で戦況を見守りながら、アタワン將軍はうめいた。ワイコウ側の弓兵は、中隊で八十四名。全体の、約三割である。平原側は、おそらくは半数以上を弓兵が占めているのではないだろうか。幸い、盾兵と各兵士が着用する冑と小札鎧のおかげで損害は少ないが、それでも何人もの兵が矢傷を受け、脱落してゆく。

ワイコウ兵が、防塞に迫る。

平原側が築いた防塞は、粗雑なものであった。密林から切り出した葉付きの枝を積み上げ、その後ろに竹や棒で四つ目垣を張り巡らせてあるだけである。

その垣の間から、長槍兵が得物を突き出す。ワイコウ側も盾兵を下げ、長槍兵と戟兵を繰り出した。両者は激しく突き合ったが、やはり防塞にこもる分だけ平原側が有利であった。長槍の穂先に貫かれたワイコウ戟兵や長槍兵が、続々と倒れてゆく。援護の弓も、容赦なくワイコウ兵の小札鎧に突き刺さった。悲鳴と怒号が交錯する中、両軍兵士たちは泥臭い戦いを続けた。

「閣下、平原の川船です！」

ノノア川上流方向を見張っていた兵士が、叫んだ。

アタワン將軍は望遠鏡の筒先をノノア川に向けた。夥しい数の川船が、ノノア川を下って来つつある。

……やはり来たか。

アタワン將軍は不敵な笑みを浮かべた。敵が川船を使ってこちら

の後方に兵力を送り込む作戦を取ることを、アタワンは完全に読み切っていた。ただし、それを挫くだけの十分な予備兵力は準備できなかったが。

「伝令、ルルト部隊とオープア部隊に、河岸に移動するように要請しろ。予備隊は現状で待機。平原軍の後方からの攻撃に備えよ」

平原軍がルルトとオープアの二千五百名に恐れをなし、より下流に上陸してくれば時間が稼げる。そのあいだに、正面の敵を蹴散らせば、こちらの勝利は確定的となる。アタワン將軍は、事情を知らぬ平原軍がルルトやオープアの部隊を攻撃してくれば、それら部隊が自衛のために反撃し、なし崩し的に参戦してくれる可能性もあると踏んでいた。そうなれば、勝利は間違いない。

ノノア川を下ってきた川船の群れは、二群に分かれていた。

先頭に行くのは、ベンデイス率いる二十隻である。比較的大型の船を集めてあり、おおよそ一隻に三十名前後の高原弓兵が乗っている。左舷には、矢除けの革盾がずらりと並べられていた。

ベンデイスの指示に従い、二十隻の川船はノノア川西岸に寄ると縦一列の隊形を取った。むろん、竿で操作される川船だから、縦一線とはならず、かなり粗雑な隊形である。

河岸では、防塞に拠って抵抗する平原側と、それを攻め立てるワイコウ側が激しくやり合っている。

ベンデイスは、手にした長槍を振り回した。合図を受け、船上の高原弓兵が弓を番える。

平原側の意図を悟ったワイコウ兵に、動揺が走った。いまだ戦闘には積極的に参加せず、国軍の後方で支援を行っていた市民軍の弓兵が、接近する川船に向けて慌てて矢を放つ。最前線以外の国軍部隊と市民軍部隊が、隊形を変更して川からの攻撃に備えようとしたが、狭い河原に密集しているために思うように動けない。

高原弓兵が、速射を開始した。高く撃ち上げられた六百本近い矢が、雨のように降り注ぐ。安定の悪い川船から放たれたものである

から、その精度はひどいものであったが、密集しているワイコウ兵は避けることができなかつた。小札鎧のおかげで致命傷を負つたものは少なかつたが、百名を越える兵士が矢傷に悲鳴をあげる。

船頭が、さらに川船を河岸に寄せてゆく。曲射で数回矢を放つた高原弓兵たちが、直射に切り替え始めた。ベンデイスの合図で船頭が竿を川底に突き立て、船を停める。

高原弓兵は、速いペースで矢を射続けた。その東側を、生馬率いる六十隻の川船が追い抜いてゆく。

「突撃！」

夏希は竹竿を振り回してそう命じた。

二個大隊分の長剣兵百名が、長槍兵に手助けされて防塞を乗り越え、河原で戦うワイコウ兵の中に斬り込んで行く。

前面と側面から矢を受けて、死傷者が続出したワイコウ側は混乱していた。弓に対抗する効果的な手段はいくつかある。もっとも消極的だが優れた方法は、射程外まで逃れることだ。そして、もっとも危険ではあるが積極的な方法は、近接戦闘に持ち込むことである。しかしながら、狭い河原に蝟集している彼らには前者の方法は事実上不可能だつたし、前方は防塞と長槍兵に、側面はノノア川の水によつて高原弓兵と隔てられている状態では、後者の手段を取る術もなかつた。

その混乱したワイコウ軍の只中に、重装備の長剣兵が得物を振り回して突つ込んでゆく。たちまち隊列が崩れた。懐に飛び込まれた長槍兵や戟兵が、容赦なく斬り倒される。長剣兵が仕留め損ねたワイコウ兵は、援護の長槍兵が突き殺した。弓兵は曲射で、さらに遠方の敵に矢を浴びせてゆく。

河岸担当のワイコウ軍部隊は危機的状況に陥つた。

……まさか、船上から弓を射るとは。

アタワン將軍は急いで伝令を走らせた。河岸担当の部隊に撤退を

指示したのだ。このままでは、全滅しかねない。

「閣下、平原軍川船の第二陣、上陸する模様です」

「なに？ 早過ぎるぞ」

振り返ったアタワンは、肉眼で北方川沿いの状況を確認した。五十から六十隻と思われる平原軍川船……一隻に二十名として、ざつと千名前後の兵力か……は、ワイコウ側市民軍予備隊が守備する河岸と、ルルトおよびオープア部隊が位置する河岸のちょうど中間地点で河岸に接近しつつあった。

「馬鹿な！」

アタワンは思わず叫んだ。

戦術的に、ありえない選択であった。市民軍予備は千五百。ルルトとオープアの部隊は二千五百。あの位置に船を着ければ、上陸した途端に両者に挟撃される。千名程度の兵力では、十分と持たずにノノア川へと追い落とされてしまうだろう。……ルルトとオープアの部隊が、戦ってくれるのであれば。

あの部隊を率いている指揮官が間抜けなのか。それとも……まさか奴らは、両国の派遣軍が参戦しないことを知っているのか？

「閣下、ルルトとオープアの部隊が、河岸を離れつつあります。北西方向へ、移動中」

……戦場から、遠ざかるつもりか。

アタワンは齒噛みした。その場に止まってくれれば、偶発的に交戦に発展する可能性もあるし、なにより良い牽制になるのだが、退かれてしまったてはどうしようもない。

「伝令。市民軍予備部隊すべてを、上陸中の平原軍にぶつける。本隊の背後を衝かせなければそれでいい」

まだ街道沿いの部隊は十分に余力を残している。ここを突破し、敵の背後に回り込めれば、勝機はある。

いまや、高原弓兵の乗った川船は、河岸の至近まで迫っていた。

リダは無心で矢を射続けた。盾の裏に取り付けてある大きな矢筒はすでに空となり、いまは背中に負った矢筒から矢を引き抜いては射ている。

正面の敵は、市民軍のようであった。鎧が揃っていないし、錬度も低いようだ。

すでに多くの兵士が、河原に四肢を投げ出して息絶えていた。勇敢にも得物を振りかざして向かってきた兵士は、何本もの矢を集中して浴びせられ、うつ伏せになって川面を漂っている。

市民軍部隊の士気は、崩壊しつつあった。幾許かの兵士は、後方へと逃れたが、残る兵士たちは交戦を放棄し、河原と水田を区切っている低い土手の陰に身を潜めていた。射返してくる弓兵もいたが、たいていの場合返礼に数本の矢を射返され、すぐに絶命した。水田の中へと踏み込み、深い泥に足を取られて身動きできなくなった者も多い。

リダは射るのをやめた。いつの間にか、標的がいなくなったのだ。視界に入るのは、死体と重傷者ばかり。土手の陰に隠れた者たちはすっかり戦意を喪失したらしく、ぴくりとも動かない。

やがて、リダたちの前に退却してきた国軍兵士が現れた。矢が再び凄まじい勢いで放たれ始める。リダもよく狙って矢を放った。動く兵士の数が、見る間に減ってゆく。

「味方が来るぞ！ 気をつける！」

川船の指揮官が、注意を促す。

平原の長剣兵が、逃げ送れたワイコウ兵を屠りながら現れた。その後ろには、長槍兵が続いている。

ワイコウ国軍兵士は、噂どりに勇敢であった。だが、すでにほとんどの者が矢傷を受けたうえ、疲労している。編成もばらばらで組織的戦闘を行える状態ではない。高原弓兵の矢に射すくめられ、長槍に突かれ、長剣に叩かれてその数を急速に減らしてゆく。

ついに、中隊長級らしい男が、手にした直刀を投げ捨て、降伏の意を表した。それを見て取った兵士たちが、てんでに得物を投げ捨

てる。土手の陰に隠れていた市民軍兵士たちも、戟や長槍を手放して、姿を現した。

ワイコウ軍河岸侵攻部隊は、ほぼ壊滅した。

……しぶといな。

生馬は舌打ちした。

彼が率いる一千百六十名の精鋭部隊……二個大隊と高原弓兵四百名……の任務は、敵本営への攻撃と国軍退路への牽制攻撃である。さすがにこの程度の兵力では、退路遮断は不可能だ。

しかしながら、生馬の前に立ちはだかった一千五百程度のワイコウ市民軍の士気は旺盛だった。突破する方策を見出さないまま、ずるずると矢の応酬が続いている。こちらの方が弓兵が多いし、矢避けの盾も十分に用意しているから、損害は敵のほうがはるかに多いが、このままではいつまで経っても左手にある小丘の上にあると思われる敵本営を叩けない。

……下手に迂回もできないしな。

少数兵力を迂回させても、各個撃破の機会を敵に与えるだけである。やるならば一個大隊を丸ごと向かわせるべきだが、そうすると高原弓兵を守る兵力が一個大隊だけになってしまい、敵が突撃に転じた場合に支えきることが難しくなる。十分な予備兵力がない場合、戦闘は時間の掛かる消耗戦に陥る場合が多い。今がまさにそのケースであった。

「河岸部隊、ほぼ壊滅です」

見張りが、告げた。

……負けか。

アタワン將軍は、勝利を諦めた。街道沿いの部隊は奮戦し、敵の防塞を突破したが、平原側は予備部隊を投入し、戦線を維持し続け

ている。こちらは予備部隊を使い切ったので、このままでは河岸沿いに敵の侵入を許してしまう。そうなれば、この本営も引き払わねばならなくなるし、街道沿いの部隊との連絡も絶たれる。前後を敵に挟まれれば、全滅は時間の問題だろう。

余力のあるうちに退くべきだ。

「伝令、密林沿いと街道沿いの部隊に、敵との接触を断つように伝えろ。密林沿いの部隊には、兵力五百を抽出し、退路の確保に努めるようにとも命じるのだ。退却するぞ」

ベンデイス率いる高原弓兵六百が、河岸に上陸する。

さらに、夏希率いる河岸部隊が、これに合流した。これら新手に南から、生馬率いる部隊に北から攻められたワイコウ市民軍予備部隊は、短時間で戦力と抗戦意欲を失い、多数が降伏した。

しかし彼らの奮戦のおかげで、街道沿いと密林沿いのワイコウ軍主力は離脱の時間的および空間的余裕を得た。本営と合流したワイコウ軍が、街道を使って後退してゆく。

生馬は指揮下の部隊と、ベンデイス率いる高原弓兵部隊を糾合し、追撃部隊を編成してこれを追ったが、後衛の市民軍五百を捕捉しただけに終わった。街道上に陣取ったこの部隊は、しばらく抗戦したあと、包囲されて降伏する。

「まずは上首尾だな」

機嫌良さそうに、拓海が言った。

平原側の損害は、戦闘に支障がない程度の軽傷者を除くと、正規軍が死傷約三百。高原の民が同じく百七十。市民軍が、八十。

戦果は捕虜が二千人以上。遺棄死体と重傷者は、概算で三千。

「敵戦力は半減したと見ていいだろう。あと一押しすれば、ルルトの思惑通りに行くんじゃないか？」

追撃失敗にもかかわらず、笑みを浮かべて生馬が言う。

「で、次の手は？」

汗と埃で汚れた顔を気にしながら、夏希は問うた。すぐそばには大量の水が流れているのだが、さすがに死体がぶかぶか浮いている川の水で顔を洗う気にはなれない。

「部隊を再編成し、戦場清掃を行い、明日の朝まで休息だ。いささか矢を使い過ぎた。川船の数もぎりぎりだったから、兵站面もやや心許ないしな。そのあとで、川船を使って敵を追う。上手く行けば、王都ワイコウに逃げ込まれる前にもう一戦交えることができるだろう。まずは、総指揮官殿に戦勝のお祝いを申し述べに行こうや」

拓海が言って、生馬と夏希を促した。

「再編成の結果、国軍は九百、市民軍は三千二百が残っております。沈痛な面持ちで、側近が告げた。

投入した兵力九千二百あまり。そのうち、国軍千三百と市民軍三千八百が失われた。

「河岸部隊がほぼ壊滅したのと、市民軍予備部隊が離脱できなかったのが痛いな」

アタワン将軍はつぶやくように言った。

「……どうなさいますか？」

「敵の追撃は振り切った。増援を要請するとともに、次回はルルトとオープアの部隊にも戦ってもらおうしかないな」

両部隊を含めれば、六千六百名。増援が加われば、八千名程度の兵力は揃えられるだろう。敵も、今回の戦いである程度の損害は蒙っているはずだ。勝ち目はある。……平原側が、兵力の増強を受けない限りにおいては。

60 オランジ村の戦い（後書き）

第六十話をお届けします。

## 61 陣中見舞い

国軍敗れる。

ワイコウ政府からの公式発表はなかったが、敗戦の翌日には、すべてのワイコウ市民がそのことを知らされていた。

もちろん、反力キ国王勢力による宣伝工作の一環である。

すでに数日前から緊張感をはらんでいた王都ワイコウの空気は、敗戦の報を受けてさらに重苦しいものへと変質していた。夜のあいだに王宮周辺ばかりで発生した何件かの放火は、いずれも小火<sup>ほや</sup>程度で消し止められたが、それに伴う喧騒は確実に市民の睡眠時間と精神力を幾許か削り取った。以前から反国王派の摘発は続いていたが、デマを流したと称して、朝のうち何十名もの市民が官憲に捕縛される。昼過ぎからは、治安維持のために市民軍部隊若干が市内巡察に駆り出された。

「お呼びですか、叔父さん」

「すまん。まあ、座れ」

グリーンゲが、キュイランスに椅子を勧める。

静かに現れたジェミが、テーブルにお茶のセットを置いた。グリーンゲの目配せを受け、一礼して退出する。

「今回の一件、からくりがわかったぞ」

甥にお茶を注いでやりながら、グリーンゲが言った。

「アタワン將軍から送られてきた戦闘詳報を読んだが、ルルトとオープアの派遣部隊は戦闘に参加しなかったそうだ。湿原地帯北部はわが国の領土とは認められない、と理屈を付けてな。確かに両国はカキ国王の湿原地帯入植政策を批判していたし、相互防衛条約を杓子定規に解釈すれば、納得できる理由ではある。しかし、両国の派遣部隊を率いる將軍が、戦闘への不参加を表明したのは開戦直前だった。どう考えても、これは意図的なものだ。これでは、アタワン

とて有効な代替策を講ずるのは無理だつたらう」

「ひどい話ですね」

お茶の入ったカップを受け取りながら、キュイランスは感想を述べた。

「それに、これだ」

グリンゲが、懐から折り置まれた紙を引っ張り出した。テーブルの上に、広げる。

それは、多色刷りのビラであった。派手な赤や藍色の字で、国軍が平原軍に敗北したこと、そして次の戦いも負けるはずであること、ワイコウが生き延びるためにはカキ国王を追放しなければならぬことなどが、要領よく書かれている。下の方には、文盲の市民用に敗走する国軍兵士や、勝ち誇って進軍する平原の民、市民によって玉座から引き摺り下ろされているカキ国王（あまり顔は似ていなかったが）などの絵が添えられていた。

「仕事が早いですね」

キュイランスは感心した。

「早いどころじゃない。このビラが押収されたのは、昨晚なんだ。どう考えても、敗戦の報を聞いてから版木を作り、刷ったものじゃない。何日も前から、国軍の敗北を予測して刷られたものだ。おそらくは、今日中に市内にばら撒かれるのだらう」

「しかし、いい仕事してますね。紙の質もいいし、色ずれもしていない」

ビラを手に取って、しげしげと眺めながら、キュイランスは言った。

「このレベルの仕事ができるところは限られている。すでに官憲が調べたが、市内の版木職人は全員関係ないと判明した。明らかに、他所で事前に刷られ、持ち込まれていたものだ」

「平原に、これほどの技術はありませんね。ルルトかオープアに発注したのかな？」

なおも見事な仕事ぶりに感嘆しつつ、キュイランスは言った。

「いや。おそらく、ルルトかオープアが自ら作ったものだろう」  
グリンゲが、断言する。

「まさか」

「もう一度、よく読んでみる」

叔父に言われ、キュイランスはビラを注視した。最初から、ゆっくりと読んでみる。叔父が言わんとしていることは、すぐに理解できた。

「本当だ。戦場の位置や戦闘経過に関してはわざと曖昧に書いてありますが、ルルトとオープアの派遣部隊が参戦しなかったことは明記してある。このビラが事前に準備されたものであれば、その作者は未来を見通していたことになりますよ」

「実際見通していたんだ。戦場において派遣部隊が戦闘に参加せず、そしてワイコウ側が敗れることを。すべては罫だ。平原と高原、ルルト、オープア、それに、おそらくは国内の反力キ国王勢力。そのすべてが、裏で結託しているに違いない。そうでなければ、このビラが存在する説明がつかないのだ」

「いやはや。これでは、わが国に勝ち目はありませんね」

キュイランスはビラをテーブルの上に戻すと、呆れたように首を振った。

「アタワン將軍は、増援を得たうえで平原軍ともう一戦交えるつもりらしい。だがおそらく、その戦いでもルルトとオープアの派遣部隊は何らかの理由をつけて参戦を拒否するだろうな。間違いなく、こちらは負ける」

重々しく、グリンゲが言う。

「では、どうすれば……」

「速やかに平原の連中の要求を呑むしかないな。そうしなければ、国軍は壊滅し、多くの市民軍兵士が死傷するだろう」

「マリ・ハとの軍事衝突に対する賠償と謝罪。ノノア川通行税の撤廃。そして、魔力の源の引渡しですね」

キュイランスは、以前に竹竿の君に告げられた平原側の要求を口

にした。

「そうだ。しかしながら、カキ国王はそれらをお認めにならないだろう。あのお方の性格を考えれば、平原軍が城を囲んでもなお、国軍が健在ならば玉座にしがみ付いているだろうな」

皮肉っぽい口調で、グリンゲが言う。

「このままでは、次の戦いでアタワン将軍が大敗してしまいますね。国軍が存在する限りカキ国王の退位はあり得ないとすると、何百、いえ、何千ものワイコウ人の血が流されることになる。これは、手詰まりですね」

嘆息したキュイランスは、お茶をすすった。

「国軍の全滅を防ぎ、なおかつカキ国王を退位させる手段が、実はひとつだけある」

グリンゲが、やや声を潜めて言う。

「どのような方法ですか？」

カップを置いたキュイランスは、身を乗り出して叔父の顔を見つめた。

「国軍に、カキ国王を追わせるのだよ」

グリンゲが、渋い表情のまま口の端を歪めて笑う。

「どうやって？」

「お前が説得するんだ。アタワンはヒュックリーよりも現実的な男だ。勝ち目がない戦はやらんだろう」

「む、無茶ですよ。たしかにアタワン將軍とは以前にも何回かお会いしたことがあります。友人でも知人でもありませんし。むしろ、叔父さんが出向いて説得すれば……」

キュイランスは慌ててそう言った。グリンゲはずいぶん軽々しく言っているが、ようは国軍の軍人たるアタワンに、国王陛下に対する叛逆を企てさせようという話なのだ。このような計画、具体的なことを話し合っただけで、処刑されても文句は言えない。

「わしは動けんよ。いまさら戦場に赴くのも不自然だしな。それに、こちらでの下準備もある。反カキ国王派の貴族連中を見極め、接触

せねばならん」

「はあ……」

「アタワン宛にはわしが書状を認め<sup>したた</sup>る。お前はまずルルトとオープアの派遣部隊指揮官と連絡を取り、味方につけるのだ。彼らはまず間違いない、この陰謀の当事者だからな。そのうえで、アタワンを説得する。戦闘詳報によれば、平原軍には竹竿の君が加わっているそう。お前は彼女にも接触し、事情を説明してこれ以上の攻勢を行わないように要請しろ。カキ国王を玉座から追い出したら、平原が要求している三つの条件はすべて受け入れる、と確約してこい」

「いいんですか、申請け合いして？」

「構わん。貴族連中が次期国王に誰を担ぎ出そうが、平原との関係は改善させねばならぬからな。マリ・八に対する賠償は仕方ないし、ノア川の独占もルルトとの友好には障害ではない。魔力の源も……無くても、わが国はやって行けるはずだ。問題ない」

「……わかりました。アタワン將軍のところへ参りますよ。問題は……」

言いかけたキュイランスの言葉を遮るように、懐を探ったグリーンゲが金袋をテーブルの上に放り投げた。

「持って行け」

川船がマリ・八とオランジ村のあいだを往復し、大量の物資を運び込む。

「予定より遅れてるな。やはり、専門の兵站部を置かない限り、大量輸送を効率的に捌くのは無理だね」

洪面で、拓海が言う。

「じゃあ、追撃は延期か？」

「今日中の出発は無理だな。明日の早朝にしよう。二十隻ばかり割くから、一個大隊で前衛を編成し、先行させてくれ。偵察隊と連絡を取りつつ、敵情を探らせるんだ」

拓海が、生馬にそう指示する。

「わかった。すぐに掛かるう」

うなずいた生馬が、ソリスを従えて走り出す。

「夏希。あんたはすまんが物資の整理を手伝ってくれ。目録を作り、分類して分配なり収納なりしなきゃならん。手が足りなきゃ、村人に手伝ってもらえ。報酬は、米の現物支給でいいだろう。いや、米は足りてそうだな。余ってる食い物があれば、それを与えてやれ。どうせ、金持ちのスポンサーがいるんだ。遠慮することはない」

「了解」

夏希はアンヌツカを伴って船着場の方へ歩みだした。着いたばかりの川船から、兵士たちが麻袋や樽、木箱などを続々と荷下ろししている。

「しかし……戦争において、兵站つてものがこれほど重要だとは、思ってもみなかったわね」

歩きながら、夏希はぼやくように言った。

兵站、という単語自体、この世界へ来るまで夏希は知らなかったのだ。軍事知識と言えば、戦争映画とテレビのニュースで得たものだけ。まあ、兵站に関して該博な知識を持っている女子高生、という存在自体が、たぶん稀有だと思うが。

「拓海様から以前聞きました。夏希様の世界では『おいる』というものがたいへん重要な兵站物資だそうですね。なんでも、食料よりも大切だとか」

アンヌツカが、訊いてくる。

「そうね。何でもかんでもオイルで動くからねえ。トラックに戦車、戦闘機に軍艦。発電機動かさないと無線機も照明もコンピューターも使えないし。だいたい、オイル巡って戦争すらしてるくらいだし」

「『おいる』が魔力の源みたいなものなのですね」

「ちよつと違うけど、似たようなものかな。いえ、むしろ魔力の源より、オイルの方が大事かもしれない。海岸諸国みたいに、魔力の源に依存せずに栄えている国はいっぱいあるから。わたしの世界じ

や、栄えている国はみんなオイルに依存しているの。特にわたしが生まれた国なんて、オイルを山ほど使っているくせに、ほとんど産出しないのよ……って、この話はまた暇な時にしてあげるわ。こりゃひどいわね」

船着場の奥に積み上げられた物資の山を眼にして、夏希はうめき声を上げた。木箱、麻袋、皮袋、樽、壺などが、山積みになっている。

「あゝ、凜連れてくればよかった。あの娘、こーゆーの得意なんだけどなあ」

夏希はぼやいた。

「なんだか最近船に乗ってばかりな気がする……」

キュイランスはぼやいた。

「なにかおっしやいましたかな？」

ぼやきを聞きつけた船主の商人が、何事かと振り向く。

「いえいえ、何でもありませんよ」

キュイランスは笑顔でごまかした。

小さな川船は、ノノア川を遡っていた。ちなみに、船籍はルルトで、船主も船頭もルルト人である。マンテムス氏事件以来、ルルト商人はワイコウとの取引を控えるようになっていたが、戦争特需を当て込んで、かなりの数の商人がワイコウ相手の商売を再開していた。ワイコウの船は多くが国軍に徴用されて、軍需物資の輸送に従事しているの、仕方なくキュイランスはこの外国籍の船を借りたのである。

川船には、幾許かの果物と弱い酒が積み込まれていた。アタワン将軍への陣中見舞いである。戦時ゆえ、一般市民の旅行には制限が課せられていたが、キュイランスはグリーンゲ将軍の代理として、これらの品を届けるという理由で、旅行許可を得たのだ。

食料や増援の市民軍兵士を乗せた川船を時折追い抜きながら、キ

ユイランスを乗せた船は順調にノノア川を遡った。やがて、河岸に拠った川船上の兵士に停船の合図を受ける。

キユイランスは事情を説明し、上陸許可を得た。ワイコウ軍野営地の側の船着場は、国軍が徴用した船で混雑しているので、遠慮して少し離れた場所に船を着けてもらう。荷物運びのために、船主の雇い人を一人借りたキユイランスは、自らも陣中見舞いの品を担ぐと野営地へ向け歩き始めた。

迅速かつ慎重な行動が必要であった。

補給担当の士官に話を通したキユイランスは、陣中見舞いの品を手にあたわん將軍の天幕を訪ねた。筆頭將軍グリンゲの身内として、あたわんとはすでに面識がある。

あたわんに歓迎されたキユイランスは、ルルトとオープア派遣部隊のトップにも陣中見舞いを持参したと称して、シュビッツ、ネーゲルスの両將軍を呼んでもらった。あたわんに、自分の身分の保証をさせようという魂胆である。やってきた二人の將軍にそれぞれ手土産を渡したキユイランスは、いったんそこを辞した。二人の將軍が天幕を出て、自分たちの部隊へ戻りかけたところで、声を掛ける。「何か御用ですか、キユイランス殿」

副官と護衛の兵を伴ったシュビッツが、訊いてくる。

「叔父からお二人に伝言を預かっているのです。内密にお話できませんか？」

キユイランスが発した言葉を聞いた二人の將軍が、目配せを交し合う。

「よろしいでしょう。では、わたしの天幕で」

シュビッツがうなずき、歩き出した。肩を並べるように、ネーゲルスが続く。キユイランスは、少しばかり慄きを感じながら、そのあとを追った。後ろには、副官たちと護衛兵がぞろぞろとついてくる。

天幕の中に招じ入れられたキユイランスは、シュビッツが人払い

をするのを待った。三人だけになったところで、懐からゆつくりと……武器と間違えられてはことだ……書状を抜き出す。

「わたくしは、これをアタワン將軍にお渡ししようと思えます」  
そう言つて、開いた書状を二人の將軍に見せる。

……さあ、どのような反応を見せてくれるか。

キュイランスは内心の不安を押し隠し、二人の將軍を無表情に見守った。

書状の内容は、要約すれば『平原と高原とワイコウ国内の反カキ国王勢力とルルトとオープアは結託している。貴殿に勝ち目はない。ここは貴殿も反カキ国王派に加わるのが得策。委細はこの書状の持参者に』というものである。署名はなされていないが、その差出人がワイコウ筆頭將軍グリングエであることは明白だ。

もしこの二人の將軍が、グリングエの読みどおり平原側と内通していれば、今後のキュイランスの行動を後押ししてくれることは確かだろう。だが、読みが外れていた場合は、カキ国王に対する反逆罪の疑いで拘束され、アタワン將軍に引き渡されることになる。もちろん、グリングエもただでは済むまい。

「ほう、なかなか興味深いことが書いてありますね」

読み終えたネーゲルス將軍が、薄く微笑んだ。

「で、あなたはこれをアタワン將軍にお渡しして、どうされるおつもりですか」

落ち着いた表情ながら、ちよつと詰問口調で、シュビッツが訊いてくる。

「わたしが知る限りでは、平原側の戦争目的はマリ・八との軍事衝突に対する賠償と謝罪。ノノア川通行税の撤廃。加えて、魔力の源の引渡しです。目的達成のためには、カキ国王陛下に退位していただく他はない。そこで、アタワン將軍を説得し、国王に反旗を翻していただきます」

「できるのかね、君に」

「難しいでしょう。しかし、協力してくださる方がいれば、可能だ

と思いませんが」

表情を和らげたキュイランスは、媚びるかのように二人の將軍をちらりと見た。

シュビッツとネーゲルスが、顔を見合わせた。シュビッツがわずかにうなずき、ネーゲルスが同意するかのようになりにやりと笑う。

「ウイニヨン！ 入れ」

いきなり、シュビッツが大声をあげた。すかさず天幕の垂れ幕がさつと上がり、剣を吊った護衛が数人飛び込んでくる。キュイランスは、思わず身体を硬直させた。

「当番兵にキュイランス殿をおもてなしさせる。所望した物は、なんでもお出しするように。ただし、絶対に天幕の外には出すな。いざとなれば、切り捨てても構わん」

早口で、シュビッツが告げる。隊長格らしい一人が、小声で指示を飛ばした。護衛の一人が天幕の外に消え、二人が入口を、そして残る二人がキュイランスの両脇を固める。隊長は、その背後にまわった。

「悪いが、すこし相談の時間をいただきたい」

そう言い置いて、シュビッツが天幕を出てゆく。ネーゲルスが、続いた。

二人の將軍が戻ってきたのは、十ヒネほど後のことであつた。

キュイランスにとつては、空恐ろしいほど長い時間であつた。当番兵がお茶を持ってきてくれたので飲んだが、味はもちろん熱かつたのか冷やしてあつたのかさえ定かには覚えていない。

シュビッツ將軍が、身振りで護衛兵たちを天幕の外へと追い払う。「相談の結果、我々は君に協力することにした。そこで、もう少し肚を割って話し合いたい」

ネーゲルス將軍が、口を開いた。

「この書状を書いたのは、グリーンゲ將軍なのだね」

「そうです」

キュイランスは、素直に認めた。

「では、グリーンゲ將軍の目的は？」

今度は、シュビッツが訊く。

「ワイコウの国益です。カキ国王治世のワイコウではなく、純然たるワイコウ人の国家たるワイコウの国益であることに、留意していただきたい。すでにこの戦い、ワイコウに勝ち目はありません。このまま平原との戦争が続けば、さらに多くのワイコウ人の命が失われ、国力は疲弊します。その前に戦いを終わらせるには、カキ国王陛下に退位していただく以外に方法はありません。国内の反カキ国王派も、ワイコウを滅ぼすつもりで活動しているわけではありませんから、それに協力することに決めたのです」

「で、アタワン將軍が反旗を翻すことに同意した後は？」

キュイランスを追い込むかのように、シュビッツが質問を重ねる。「まず、その事実を王都に伝えます。アタワン將軍に、カキ国王を弾劾する一文を書いていただくつもりです。それを反カキ国王勢力に渡せば、王都のカキ国王支持勢力を切り崩せるでしょう。そのあとを追うように、將軍とこの全兵力を王都へ向け進軍させます。ワイコウに現存する最大の兵力を前にしては、カキ国王も玉座を明け渡さざるを得ないでしょう」

「……アタワン將軍に、すべての部隊が服従するとは思えませんが」  
懐疑的な表情で、ネーゲルスが口を挟んだ。

「そこで、お二方の協力が必要なのです。ルルト、オープアの部隊合計二千五百が、反旗を翻したアタワン將軍を支持しているという処を見せれば、数の減った国軍や、軍規の緩い市民軍も大人しく従ってくれるでしょう」

「平原軍はどうするのです？ 追撃されるかもしれませぬよ」

ネーゲルスが、訊く。キュイランスは、訝った。

「お二方が平原側に連絡を取れば、停戦に持ち込めるのでは？」

「それは無理だ。我々は、平原軍と通じているわけではないのだよ。上から、なるべく戦わないようにと指示されているだけだ。決して、

ワイコウを裏切っているわけではないのだ」

シュビッツが、断言する。キュイランスは、うなずいた。

「なるほどそうでしたか。では、アタワン將軍を説得したあとで、士官の方一人と、その護衛数名を貸していただけませんか」

「何に使うつもりかな？」

シュビッツが、片眉を上げる。

「平原軍に、『竹竿の君』が加わっていたと聞きましたが」

「たしかにいたようだ。オランジ村の戦いでも、一隊を率いて活躍したとの噂は聞いた」

「あの方とは、面識があります。直談判に、付き合ってもらおうのですよ。休戦協定を結ぶのは無理ですが、二日ばかり猶予をいただくことは可能ですよ」

「わかった。最後にひとつ訊きたい。君はどこまで信用できる？」

さかんにうなずいたネーゲルスが、そう斬り込んでくる。

「わたくしにも、叔父上にも、あなた方を騙すメリットがありませんよ。どうせ、天幕を出たあとでアタワン將軍の配下が戦闘準備を整えていないか探させたんでしょう？ わたくしがアタワン將軍に命じられて、あなた方がワイコウを裏切っているという証拠を集めているわけではないことは、確認できました。何度も繰り返し返すように恐縮ですが、この件であなた方に嘘をついても、ワイコウにもわたくしにも叔父上にもなんら益はありません」

「確かにそうだな」

ネーゲルスが、納得したようにうなずく。

シュビッツ將軍が、ネーゲルス將軍と視線を合わせた。ネーゲルスが、わずかにうなずく。

「よろしい、キュイランス殿。君を信用しよう。ウイニョン！ 来てくれ！」

シュビッツが、護衛兵を呼んだ。天幕の垂れ布が上がり、今度は隊長格が一人だけ入ってくる。

「キュイランス殿が、アタワン閣下の天幕を訪問される。誰かつけ

て、案内してさし上げる」

キュイランスは、ほっと息をついた。どつやら、最初の川は無事に渡り切ったようだ。

61 陣中見舞い（後書き）

第六十一話をお届けします。

## 62 叛旗

書状を読み終えたアタワン将軍が、唸った。

キュイランスは強いて無表情を保った。アタワン将軍との関係は、互いに顔を知っているという程度である。アタワンがその気になれば、キュイランスを反逆罪で捕らえることはもちろん、この場で処刑することすら可能だろう。

……叔父上の読みが当たっていればよいが。

アタワン将軍の性格からすれば、キュイランスに危害が加えられることはない、とグリーンゲは請合ってくれた。万が一の用心としてこの天幕の中で騒ぎが起こった場合には、ルルトとオープアの兵士が救出に来てくれる手筈にはなっている。

「この書状は、グリーンゲ将軍が自ら認められたのだな？」

アタワンが、殺意さえ感じられそうな冷たい眼差しでキュイランスを見つめる。

「その通りであります、閣下」

「この、ルルトとオープアの関与というのは確実なのかね？」

「派遣部隊将軍をお呼びになって、ご自分で確かめられた方が早いと思います」

キュイランスは、慇懃に答えた。唸ったアタワンが、しばし考えてから従卒を呼び、シュビッツ、ネーゲルスの両将軍を呼びに行かせる。

キュイランスは内心でほっと息をついた。これで、とりあえず処刑の線はなくなった、とみてもいいだろう。

ほどなく、天幕内にルルトとオープアの派遣部隊指揮官が現れた。キュイランスは、視線で支援を要請した。シュビッツが、任せるとでも言わんばかりに軽く手で合図する。

「では単刀直入にお聞きしましょう。彼が主張するには、ルルトとオープアはカキ国王陛下が退位されることを望んでいる。そのため、

ワイコウの反国王派を仲介として、平原と手を組んでいる。相違ありませんか？」

アタワンが、二人の将軍を見比べつつ訊いた。

「相違ありません、閣下」

シユビッツが、静かに言った。

「よくお考え下さい、閣下。カキ国王の治世になってから、貴国とルルト、オープアの関係がどれほど冷却化したかを。かつては三人姉妹、とまで形容された盟友が、疎遠になってしまったのかを。今こそ、撚りを戻す好機です」

「しかし、国軍軍人として陛下に叛旗を翻すなど……」

「もしお望みであれば、首謀者をわが叔父上にしてもよろしいです」  
キュイランスは、そう口を挟んだ。

「どうせ古い先短い身。ワイコウのためならば、反逆者の汚名を着て自害するなどむしろ名誉、と叔父は申しておりました」

……嘘である。いくらグリングでも、そこまで自己犠牲の精神は持ち合わせていない。だが、このキュイランスの作り話は、いたくアタワンを感動させたようだった。

「おお。グリング将軍はそこまでのお覚悟なのか」

アタワンのキュイランスを見る目が、ずいぶんと和らぐ。

それから十五ヒネばかり続けられた説得の結果、ついにアタワン将軍はカキ国王打倒に加担することに同意した。すぐさま、もっとも信用できる士官たちが天幕に集められる。話を聞いた士官らは皆一様に驚いた表情を見せたが、全員がアタワンに忠誠を誓った。一同は、絶対に説得に応じないと思われるカキ国王支持派士官のリストを短時間で作成すると、彼らを捕縛すべく、信頼のおける部下を率いて野営地に散った。

「……というのが、現状です。平原軍がワイコウ領内で北進することとは構いませんが、アタワン将軍の部隊に対する攻撃はお控えくだ

さるよう、重ねてお願い申し上げます」

キュイランスが言っつて、深々と頭を下げる。

「要請はわかりました。協議するから、ちよつと待っていてね」

夏希はそう返答すると、一緒に話を聞いていた拓海と生馬を手招いた。キュイランスと、彼をここまで護衛してきたルルトの兵士たちから十分に離れたことを確認してから、口を開く。

「どう思う？」

「むしろこつちが訊きたいね。あいつのことをもつともよく知っているのは、あんただろ」

笑み交じりに、拓海が訊き返す。

「とりあえず、彼がわたしたちに対し嘘をついた例はないと思うの。信用しても、いいんじゃないかな」

夏希は自信なさげに言っつた。断言できるほど、キュイランスについて知っているわけではないし、大人の男性の嘘を見抜けるほどの人生経験も積んでいない。

「こんなことになるのなら、ルルトの派遣部隊指揮官と事前に合言葉でも打ち合わせとけばよかつたな」

生馬が言っつ。

「後知恵とは、そういうもんだ」

拓海が、笑う。

「当面彼を信用しても、こちらの行動には影響がないでしょ？」

夏希はそう訊いた。拓海が、うなずく。

「そつだな。アタワンの部隊を攻撃しようがしまいが、こちらが前進することには変わりない」

「問題は、これがアタワンが王都へと退却する時間稼ぎの謀略ではないか、という可能性だが……」

口を挟んだ生馬が、離れたところで大人しく待っているキュイランスに、視線を投げる。

「アタワンが降伏してくれれば、話は早いんだがな」

拓海が、言っつた。

「形式的に降伏し、その報せが王都にもたらされる。さらに、反力キ国王の旗を翻して、平原統合軍と共に王都を目指す。そんな筋書きなら、さしものカキ国王も、裸足で逃げ出すに違いない」

「アタワン将軍が認めるとは思えないけどね」

夏希は肩をすくめた。キュイランスの言葉を信じる限りでは、アタワン将軍はかなりプライドの高い人物らしい。形式的であれ何であれ、あっさり降伏することはないだろう。

「まあ、この件はローリスクハイリターンだと思う」

拓海が、断定的に言う。

「グリーンゲとキュイランスの計画通りに行けば、近日中にカキ国王は玉座を追われ、反力キ国王派とルルトの思惑通りになるだろう。こちらにも、一兵も損なわずに済む。もしこちらが騙されていたとしても、すでにオランジ村の戦いでルルトの要請は果たしている。問題は、少ないはずだ」

「たしかにな」

生馬が、同意した。

「じゃあ、キュイランスの要請は呑む、ということでもいい？」

「総指揮官殿が、承認すればな」

夏希の言葉に、拓海が苦笑で応ずる。拓海の肩書きは、あくまで総指揮官主席補佐である。もつとも、総指揮官殿はたいへんに聞き分けがよく、拓海の進言はほぼ無条件で承認してくれていたが。

アタワン将軍の突然の裏切りと、それに続く王都への進軍。

ルルト、オープア両国政府の、カキ国王に対する非難声明。

このふたつが、カキ国王に対する国民の支持を一気に失わせた。

夜間秘かに、数隻の川船がワイコウ川を下った。カキ国王と、その家族、側近など、約八十名が乗った船であった。ノノア川に入った船団は流れに沿って北進を続けた。すでに、西群島にある小国のひとつが、亡命の受け入れを表明していた。カキ国王が、後継者を

定めずに退位を表明した王璽と署名入りの書状は、夜明けとともに王宮で公開された。

すでに、趨勢を見極めたカキ国王派の貴族は、こぞって反カキ国王派に鞍替えしていた。以前からの反カキ国王派と、にわか反カキ国王派の貴族が次期国王に推戴したのは、カキ元国王の従兄弟に当たる人物だった。ほぼ無名で、政治経験も浅い。お飾りに使うにはもってこいの人材であった。

平原統合軍派遣部隊は、ワイコウ王都まで一日半の位置に留まったが、平原諸国連絡会議は総会において、ワイコウの政権交代を歓迎する声明を全会一致で議決し、公表した。ルルト、オープアを始めとする海岸諸国も、新国王就任に対し慶祝の使節を送った。

いまだカキ・セドに立てこもっているヒュックリー將軍率いるワイコウ部隊は、本国での政変に動揺して士気が崩壊し、平原統合軍に対し条件付き降伏を行った。

事態は急速に終結しつつあった。

「おめでとう、アタワン將軍」

グリングゲは、いまや『救国の英雄』として筆頭將軍の地位に就くことになった後輩を祝福した。

「ありがとうございます。ですが、わたしの心の中では、いつまでも閣下が筆頭將軍です。今回の件では、お世話になりました」

アタワンが、丁寧に頭を下げる。

「やめてください。わしは引退する老いぼれですぞ」  
グリングゲは苦笑した。

王宮の一角で、ふたりはテーブルに就いていた。大臣や高級官僚が執務の合間に休憩する、サロンのような場所である。

国軍反乱に関するグリングゲとキュイランスの関与は、秘密にされていた。すべて暴露されれば、グリングゲの仮病や早い段階でのカキ国王への反乱加担、さらには平原側との連絡などが明るみになって

しまい、色々都合が悪い。それゆえ、手柄はすべてアタワンの独り占め状態になっている。貴族側でも、動揺する国民を一本にまとめ上げるために、目立つ旗印を必要としていたので、アタワンは短時間のうちに英雄へと祭り上げられた。

グリングゲは、国民的英雄となったアタワンに筆頭將軍の座を譲るために、引退を表明していた。まだまだ健康には自信があつたが、仮病を使い過ぎたせいで、周囲からも静かに老後を過ごすようにさかんに勧められている。最後に大きな仕事を成し遂げたこともあり、グリングゲは未練なく王宮を去るつもりであつた。

「その件ですが……引退は、もう少し待っていただけかもしれませんしよ  
うか」

アタワンが、そう切り出す。

「なんですと？」

「カキ国王べつたりだつた大臣が辞任してしまい、いくつか大臣の椅子が余つておるのですよ。貴族の方々の中でも、しばらく混乱が続くと考えて、大臣就任を渋っている方も多いのです。閣下さえよろしければ、わたしがしかるべき大臣の地位に就かれるように、ご推薦いたしますが」

「むう。大臣ですか」

グリングゲは渋つた。興味がないといえは嘘になるが、完全引退を決意したあとだけに、即断できない。

「大臣となれば、秘書官が必要です。もちろん、ご友人や身内の方を起用しても問題ありません」

少しばかり意地の悪そうな笑みを見せて、アタワンが言った。

「うつつの人物が、閣下のお側にいらっしゃるのではないですか？ 聡明で、度胸もある。機転も利く。いかがでしょう」

「むう」

グリングゲは唸つた。たしかに、キュイランスは秘書官役には最適だろつ。

……そろそろあいつにも貧乏賢者をやめさせて、立派な地位と嫁

くらい与えてやる潮時かもしれん。

「よろしい。その話、喜んで引き受けさせていただきますしょう」

ワイコウの新国王は、就任二日目に早くも、ノノア川通行税の撤廃と、魔力の源の使用抑制を表明した。三日目には、ルルトとオープアから外務大臣を長とする使節団がワイコウに入国、関係改善に向けた話し合いが始まった。四日目には、マリ・八に対し使節が派遣され、武力衝突に関する賠償交渉が開始される。ハンジャーカイにワイコウ使節が訪れ、平原諸国連絡会議および平原統合軍に対し、正式な停戦の申し入れが行われたのは、五日目のことであった。

「いやいやいや。呆れるくらい低姿勢だな、ワイコウの連中は」

駿が、笑った。

「魔力の源に関しては？」

夏希は一番の関心事を真っ先に尋ねた。

「管理を人間界縮退対策委員会に委ねることを確約してくれたよ。魔術使用抑制の方針をすでに打ち出しているが、実質的には魔術禁止令だそうだ」

「よかった。これではらく、のんびりできるわね」

凜が、言う。

「おいおい。これからが本番じゃないか。タナシスにある魔力の源を、どうにかしないと。サーイエナもエイラも、まだ人間界縮退に關して効果的な対策を見出していないのだろう？」

拓海が、聞く。夏希はうなずいた。

「残念ながらね。サーイエナが色々試しているみたいだけど、効果はないそうよ。魔術の使用を原則的にやめて、これ以上の縮退を喰い止めるのが、現状ではもっとも効果的な対策ね」

「まだタナシスの反応はないのか？」

生馬が、訊いた。

「ラドームからは、何も言ってきていないわ」

夏希は首を振った。天候不順などで航海が遅れたり、タナシス政府の意見がまとまらずに返答が遅延した可能性もあるが、本来ならばもつとつくに何らかの反応が返ってきていいはずだ。

「なんか不気味だな。でかい国なんだろう？」

拓海が、駿に振る。

「まあね。ラドーム公国を含め、七州三自治州四辺境州四公国。総人口は不明だが、王都リスオンだけで人口五万というからね。海岸諸国と平原諸国と高原諸族を合わせたくらいの人口があってもおかしくない」

「超大国ね」

凜が、唸った。

「もつとも、聞いた話では、結構内部はぎすぎすしているらしいけどね」

駿が、笑う。

「ぎすぎす？」

夏希は首を傾げた。

「基本的にタナシスは、征服王朝なんだそう。自治州や公国は、以前に降伏した国家の成れの果て。辺境州では、まだ服属している少数民族が武力闘争を続けているらしい」

「はあ。それは大変ね」

「人間界は、これで全部なんだな？ 北にある陸塊は、すべてタナシスの領土。あいだに島国ラドームを浮かべた海。南側に、海岸諸国、平原諸国、そして高原」

拓海が、確認する。

「そういうことになるね」

駿が、うなづく。

「まわりを魔界に囲まれた円形で、真ん中に帯状に海があるわけだ。大中黒みたいだな」

生馬が、笑った。

「おおなかぐる?」

「家紋だよ。新田家のが有名だな。白い円の真ん中に太く黒い帯が走ってる。人間界の地図を描いたら、似たような感じになるはずだ」  
生馬が、笑いながら説明した。

「いずれにしる、タナシスとは争いたくないな。政治動向はどうなんだ? 国王の外交政策や、権力掌握具合は?」

拓海が、質問した。

「外交は……不干涉主義かな? こちらに接触してこないからね。権力は、かなり中央集権的だろうね。でなければ、これだけの大国は維持できないだろう。王家の歴史もそれほどないらしいし、中華的な地方分権型帝国でもないようだ。聞いた話だと、国王は中年で、娘が三人いるらしい。官僚制はかなり発達していると聞いている。あと、ユニークなのは奴隷制の存在だね」

「奴隷制があるの?」

夏希は眉をひそめた。平原も高原も海岸諸国も、夏希から見ればかなり遅れた社会だったが、奴隷制度だけはなかった。

「なんだ、意外と遅れてるんだな、タナシスは」

生馬が、馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「たぶんアフリカ系の奴隷が鞭打たれているようなシーンを頭に浮かべたんだろうが、それは違うよ。貴族の下に市民、そのさらに下に奴隷、という身分制度じゃない。貴族が所有する人間として、奴隷がいるだけだ。身分的には、たしかに市民よりは下だが、一方的に搾取迫害されている存在じゃないらしい。むしろ、イスラムの優遇された奴隷に近いね」

「イスラムの優遇された奴隷?」

夏希は首を傾げた。世界史は習ったが、聞いたことのない話だ。

「イスラム社会にも奴隷がいたが、それには二種類あったんだ。ひとつは、他民族かつ異教徒の奴隷。これは、いわゆる普通の奴隷と一緒に。もうひとつは、最初から厚遇する目的で集められた奴隷。

彼らはムスリムに改宗させられ、高い教育を施されて、イスラム諸

国家で軍人や下級官僚、あるいは貴族の家来として働かされたんだ。身分的にはたしかに奴隷なんだが、出世してスルタンや將軍になった者までいるからね。中世的な世界では、官婢が出世して実力者になるのは珍しいことじゃないが、イスラムでのこの手の奴隷の活躍は他とは規模が違う。軍人奴隷であったマムルーク制度なんかは、特に有名だしね。……話がだいぶずれたな。えーと、ワイコウの連中は、誠意を見せる意味でも人間界縮退対策委員会に対し、速やかにワイコウの魔力の源の管理を委ねたいと申し出てきている。どうやら、平原と高原との和解を印象付けようと、派手なパフォーマンスをやりたいらしいんだ。今ならサーイエナもハンジャーカイにいるだろう？ 君とエイラ、それにサーイエナの三人で、ワイコウに行ってくれるかな？」

「もちろん行くわよ。そのために、戦争までやったんだから」

夏希は勢い込んで言った。

「とにかくこれで、魔力の源を三つ確保したわけね。残る四つのうちひとつは、すでに魔力を使い果たされて、麦藁帽子を被った魔物が持っている。あとの三つは、おそらくタナシスにあり、いまでも魔力が引き出されている」

凜が、指折り数えながらまとめる。夏希はうなずいた。

「ニヨキハンの言葉が正しければね」

「いずれにしても、タナシスが鍵だな。ルルトかオープアに頼んで船を仕立ててもらって、海を渡るか」

生馬が提案する。

「そうだね。外交だから僕が行きたいところだが……この先しばらく忙しくなりそうだから無理だね。平原諸国連絡会議の機能と権限を、もう少し大きなものになりたいんだ。平原共同体基本法を制定して、下部組織も作りたい。文化教育部、とかぜひ欲しいね」

駿が、嬉しげに語る。

「俺も平原統合軍を改革したい。とりあえず、軍縮しなきゃならぬいし。参謀部を作りたいね。兵站関連の専門家を育てないといけな

いことを、今回の戦いで痛感したよ」

拓海が、言う。

「……どこと戦うつもりなのよ？」

夏希は聞いた。高原とはすっかり同盟国状態だし、ルルトやオーブアとの関係も良好だ。ワイコウも、屈服させた。もはや、平原に敵はいないはずだ。

「あくまで安全保障さ。規模は小さいが、精強で小回りの利く軍隊を、平原共同で保持するんだ。紛争抑止には、役立つ」

「俺も改革したいね。今の大隊編成は効果的だが、衝撃力に欠ける。弓を減らし、長剣兵を主体としたもつと大きな……おそらくは千名規模の野戦部隊が欲しい。決定的な、打撃戦力となるような部隊だ」

生馬が、眼をきらきらとさせて語る。

「あたしはノア川水運商会の再建をしないと。それが終われば少しは暇になるでしょうから、タナシスに行ってもいいわよ」

凜が、そう言った。

「いずれ、凜ちゃんには手を貸してもらいたいんだけどな。経済調整や技術開発部門を、任せたいんだ」

「いいわよ」

駿の頼みを、凜が快諾する。

「……となると、わたしもタナシス行かなきゃ、だめ？」

自分を指差して、夏希は仲間に問いかけた。

「いずれ、軍に籍は置いてもらうぞ。オランジ村でも、見事な指揮振りだったからな」

拓海が、言う。

「せっかくここまで『竹竿の君』として武名を轟かしたんだ。引退しちゃ、もつたいない」

笑いながら、生馬も言う。

「当面、人間界縮退対策委員会は暇になるだろう。船旅を楽しんでくるべきだよ」

駿が言っつて、にやにや笑いをする。

62 叛旗（後書き）

第六十二話をお届けします。

### 63 タナシス訪問団

「はあ。もうあれからひと月経ったのねえ」

川船の船縁に肘を乗せ、頬杖をついた姿勢で夏希はつぶやいた。

もちろん、こちらの時間の単位に『月』というものはない。しかしながら夏希は、三十日をひと月と考える習慣から、まだ抜け出せないでいた。一日の長さが短いから、当然『月』の長さも、こちらの方がかなり短いのだが。

川船は、オランジ村の脇をゆつくりと下ってゆくところであった。戦死者はもちろんすべて集められ、葬られたし、遺棄された武器武器のたぐいもほとんどが回収されている。折れた矢の鏃や、鎧から落ちた板金なども、地元の住民が換金目当てで拾い集めたらしく、戦場跡はきれいなものであった。河原の石にこびりついた茶色い染みが、辛うじてここが激戦の場であったことを物語っている。

「なに黄昏てるの？」

寄ってきた凜が、夏希の真似をして頬杖をつき、訊いた。

「ここがオランジ村よ。例の、ワイコウ軍との決戦場」

夏希は短く答えた。

「……こんなところ、前に通ったっけ？」

凜が、首を傾げる。

「相変わらずの地理オンチぶりね、団長は」

夏希は笑った。

「団長呼ばわりはやめてよ。腕章も着けてないし」

「はあ？」

「あ、今のは聞き流して」

凜が、苦笑いする。

平原共同体経済部顧問にして、今回のタナシス訪問団団長というのが、今の凜の肩書きである。駿念願の平原共同体は、従来の平原諸国連絡会議を発展させる形で、つい五日ほど前に正式発足してい

た。その政治的権限は、従前の組織と大差はないが、その下に外交、経済、文化教育の三部門が設置されているのが新しい点である。いまだそれらの組織は人員、予算とも不足しており、その活動は準備段階に留まっている。ちなみに、外交部部長には駿が就任している。そしてもうひとつ、平原共同体の指揮下にあるのが、平原共同軍である。これももちろん、平原統合軍が発展してできたものだ。平原共同体の最高組織である連絡会議総会の下に、平原共同軍司令部が置かれ、さらにその下に平原共同軍野戦部隊と、平原共同軍参謀部が設置されている。参謀部は六局十四部からなる本格的なもので、参謀部参謀長は拓海が務める。生馬は編成中の仮称『突撃連隊』長と兼任で、参謀部次長となる。

エイラ率いる人間界縮退対策委員会と、サーイエナ率いる対策群も、ワイコウの魔力の源を手に入れたことを契機に合併し、新たに人間界縮退対策本部が発足した。外交部門長兼任の本部長にはエイラが、研究監視部門長にはサーイエナが就任している。夏希は、本部長補佐の肩書きをもらった。平原共同軍の方にも籍があり、共同軍参謀部参謀の地位にある。

凜を名目上の団長とし、人間界縮退問題対策本部からエイラ、サーイエナ、そして夏希が参加したタナシス訪問団。すでにルルトとオーピアから、外洋船舶提供の約束は取り付けてあるし、ラドーム当局にも訪問を通告してあったが、実はかなり行き当たりばったりの派遣であった。いまだタナシス王国との連絡が取れていないのだ。場合によっては、タナシス側の許可が下りるまでに何十日もラドームに足止めになる可能性もあるし、最悪の場合タナシスの指図を受けたラドームに入国を拒否されるかもしれない。

それにもかかわらず、対策本部のナンバー1と2の二人の巫女が含まれる訪問団派遣が強行されたのは、とりもなおさず人間界縮退問題が手詰まりであることの証左とも言える。魔界はいまだ一日六キッホ（約3.6メートル）程度の速度で、人間界を蝕みつつあったし、それを遅らせる有効な手立ては、まだ見つかっていないのだ。

タナシスを説得し、魔術の使用を断念させるには、直接出向いて説得するしかない。

「先行き不安だね。色々」と

夏希はため息混じりに言った。ちなみに今回、アンヌツカはハンジャーカイで留守番である。人数的に制限があるため、連れてくるのは難しかったし、彼女の本来の所属はあくまでジンベル防衛隊にある。何十日掛かるかわからない旅に同行させるのは、無理であった。本人はもちろん同行を希望したし、夏希も一緒に来てもらいたかったのだが。

「まあ、いざとなったら頼りになる二匹がいるし」

凜が頼杖を外すと、視線を空に向けた。川船の上空二十メートルほどのところには、コーカラットがふわふわと浮かんでいる。ユニヘックヒューマは、下へ垂れ下がった触手の一本にぶら下がって、なぜか片手懸垂の最中であつた。

「船の準備はすべて整っております。ラドーム公国への入国許可も取りました」

ルルトの河港で出迎えてくれたルルト外務官僚が、そう報告する。「しかしながら、いまだタナシスより連絡はありません。いかがなさいますか？」

「いまさら引き返すわけにはいきません。とりあえず、タナシスマで参ります」

凜がきつぱりと言う。

「では、出航準備に取り掛からせます。案内人を乗せますので、川船はこのまま派遣船へ着けて荷物を積み替えましょう」

「うなずいた外務官僚が、控えていた部下に指示を出す。」

「ラドームの反応はどうなんですか？」

夏希は訊いた。入国許可は下りたとはいえ、歓迎されないのでは困る。

「ラドーム公国自体は、訪問団を歓迎しているようです。王国時代から、ルルトとは交流がありましたから。しかし、現在のラドームは、タナシスに従属していますので、その意向には従わざるを得ない状況です」

外務官僚が、肩をすくめた。

「タナシスに対する、ラドームの感情はどうなのでしょう？」

エイラが、訊いた。

「良くはありません。タナシスと直接交戦したわけではありませんが、派兵をほめかしたうえで従属を誓わせたのですからね。征服されたと同じです。まあ、公国として自治は認められていますし、タナシスの方もそれほどひどいことをラドームに強いているわけではありません。ただし、公国に衣替えする時に、名君と言われた国王を退位させ、扱いやすい王女を即位させたことは、確実にラドーム人の怒りを買ったようです。辺境部族との戦いに投入するために、定期的に少数を徴兵していることも、ラドーム人の反感の元ですね。何年経つても、誰も帰ってこないのですから」

「それはひどい話ですね」

サーイエナが、眉をひそめる。

「では、凜様、エイラ様、サーイエナ様、夏希様はこちらへどうぞ。王宮にご案内申し上げます」

外務官僚が言つて、護衛の兵士を呼び寄せた。

ルルト国王に拝謁し、船の調達に対し礼を申し述べた四人の女性は、先ほどの外務官僚に案内されて海港へと向かった。

「お久しぶりですね、みなさん」

待ち受けていた青年が、にこやかに挨拶する。

なんとそこにいたのは、ランクトウアン王子だった。オープア海軍司令官にして、オープア王国第六王子。いつもの水夫ルック……白茶けた麻のハーフパンツと、胸元が大きく開いているシャツ姿だ。「これは殿下。再びお目にかかれて嬉しいです」

凜が、丁寧に頭を下げる。夏希はもちろん、エイラとサーイエナも前回の海岸諸国訪問の時に出会っているので、久々の再会となる。「では、殿下の船に乗せていただけののですか？」

挨拶が終わると、夏希はそう訊いた。

「いやいや。わたしの船はお客様を乗せるにはいささか手狭ですね。ルルトがより大きな商船を貸してくれますから、皆さんはそちらへどうぞ。わたしは護衛として、お供します」

浅黒い端正な顔をほころばせながら、ランクトウアンが言う。

「殿下に守っていただけのなんて、光栄ですわ」

エイラが、珍しくこぼれるような笑みを見せて言った。

「ではどうぞこちらへ」

ランクトウアンが、自ら一行を待ち受けている小船へと誘う。

タナシス訪問団一行……護衛を含め、二十人と魔物二匹……が乗り込んだルルト船は、全長三十五メートルほどの大きなものだった。海岸諸国の技術レベルからすれば、巨船と言えよう。乗員は、運航要員二十名を含め三十人ほど。

「意外と少ないのね」

「軍船じゃないからね。商船の場合、運航経費を抑えないと商売にならないから。企業とおなじよ。いつの時代も、人件費の抑制が儲けるコツなのよ」

夏希の疑問に、やや辛辣な口調で凜が答えてくれる。

船長への挨拶、船室の割り当て、手荷物の積み込みなどが終わると、さっそく出航となった。夏希は甲板へ出て、水夫たちが働く様子を興味深く見守った。白い三角帆が広げられ、風を孕む。巨船は穏やかな水面を滑るように進み出した。ランクトウアン王子が指揮するオープアの軍船の先導で、半月状の湾を出てゆく。沖合いの島を迂回して外洋に出たところで、夏希は船室に戻った。天井がやけに低い八畳間くらいの部屋に、異世界人二人と巫女二人、それに魔物二匹が同居である。かなり狭苦しいが、これでもこの船では船長以

上に優遇された環境である。随員や護衛は空いた船倉に押し込まれているし、一般の水夫は船倉の荷物の上に敷物を敷いただけでころ寝するのだから。

「ルルト・ラドーム間が六百キロ。風さえよければ、二日から三日で航海できるわね」

敷物を敷いた床の上に座り込んだ凜が、つぶやくように言う。

「いまさら言うのはなんだけど、難破とかしないでしょうね」

「海岸諸国の造船技術と航海技術はかなり高いわよ。でも、二十一世紀でさえ運が悪ければ船は難破するんですからね。安全だと断言はできないわ」

「いざとなったら、コーちゃんに助けてもらいましょう」

話を聞いていたエイラが、口を挟んだ。

「あたいは泳げるから、コーちゃんに助けてもらわなくても大丈夫なのです！」

ユニヘックヒューマが、ステッキを小さめに振り回して……船室が狭いので、彼女なりに気を遣っているらしい……言った。

周囲が薄暗くなり、空に星が瞬き始めた頃、夕食となった。

メニューは貝飯だった。オープアの軍船で食べたものより若干味は落ちたが、それでもたいへんにおいしかった。あとは塩味の野菜スープと、これまた塩気のきつい漬物。それに、燻製肉の薄切り。

飲み物は、冷たいお茶だった。

食事を終えた夏希は、早々と横になった。火災対策のためか、明かりは薄暗い灯明がひとつあるだけだ。これでは暗すぎて、何もできない。

与えられた寝具は、藁を入れてあるマットレスと、薄い上掛けの布、それにやけに固い枕だけだった。夏希が横になるのを見て、エイラとサーイエナも寝支度を始めた。眠くなさそうだった凜は、隅の方でユニヘックヒューマ相手になにやらぼそぼそと話し込んでい

る。コーカラットは、船室の中央でさかさまになって浮いていた。寝ているわけではない……魔物は睡眠をとらない……はずだが、なぜか目を閉じている。

翌日から、海が荒れ始めた。

天気はいいのだが、なぜかうねりがひどい。船は上下に揺れ、当然のことながら夏希は船酔いに掛かった。

「……平気なの？」

青い顔をした夏希は、平然としている凜を羨ましげに見た。

「三半規管だけはなぜか強いよね」

凜が、笑う。

船室に朝食が運ばれてきたが、夏希の食欲はゼロであった。

「ご気分が悪いのですか？ 夏希殿」

エイラが、気遣う。

「船酔いね。あなたもサーイエナも、海には慣れていないはずなのにどうして平気なの？」

「なぜでしょうか？」

エイラが、首を傾げる。ちなみに、彼女のお盆の上のご飯はすでに半分くらいに減っていた。食欲も減退していないようだ。

「夏希殿。ユニちゃんの飲み物を飲んでみたらいかがでしょう」

サーイエナが、そう提案する。

「それは、ちよっと」

「あたいの飲み物は、人間の二日酔いの特効薬でもあるのです！」

ステッキをぽきぽきと折って、カップとポットを作りながら、ユニヘックヒューマが言った。

「きつと、船酔いにも効くのです！」

「……ほんとかしら」

夏希は顔をしかめた。この気持ち悪さが緩和されるのであれば、挑戦してみたい気もする。

「あら。まだユニちゃんのジュース飲んだことないの？」

凜が、意外そうな口ぶりで言った。

「だって、どう見ても青汁じゃない」

「香りは生臭いけど、味はおいしいのよ。飲んでごらんさい」

凜が、勧める。

ユニヘックヒューマが、ポットをスカートの中に入れた。じよろじよろと水音が聞こえる。

「どうぞ！」

ユニヘックヒューマが差し出したカップを、夏希は不承不承受け取った。注がれた液体の臭いを嗅ぐ。……やはり、野菜ジュースの生臭い臭いしかない。

「味は……そうね、玄米茶と抹茶を混ぜたような感じかな」

凜が、言う。

「本当？」

「ほんとほんと。絶対、おいしいから」

凜が請合う。

夏希はちよつとためらってから、ひと口含んでみた。青臭い臭いが、鼻腔を満たす。

……あれ。

夏希の舌が、旨みを感じ取った。確かに凜が言った通り、緑茶に近い味わいだ。生臭さが消えると、香ばしい香りが感じられる。あとは適度な渋みと、甘味。

ごくりと飲み下す。……コンビニで売っている、ペットボトル入りのお茶の濃い目のやつ、やや異国調バージョン、といった味わいである。

「た、たしかにおいしいわね」

夏希は残りもごくごくと飲み下した。空になったカップに、ユニヘックヒューマが嬉々としてお代わりを注ぎ込む。夏希はそれも飲み干した。気のせいか、胃がいくぶんすっきりとしたようにも感じる。

結局、夏希はまったく朝食を採らなかったが、時間の経過とともに

に船酔いの症状は劇的に改善されていった。昼食時にはすっかり食欲も戻り、空腹だったこともあり貝飯を三杯平らげる。

「食後に一杯いかがですかあ〜」

夏希が食べ終わった頃を見計らって、コーカラットがふわふわと近づいてきた。触手カップを、差し出してくる。中身は、もちろん黄色い謎の液体だ。

「ありがとうございます」

ユニヘックヒューマの青汁が飲めたのだから、コーカラットの液体も飲めないことはないだろう。夏希は意を決すると、カップを手にした。相変わらず尿にしか見えない液体を、思い切って口に含む。……甘い。

砂糖のような、押し付けがましい甘さではなく、もっと爽やかな、フルーツっぽい甘味だ。香りもフルーツっぽい。しいて例えれば、パイナップルの風味だろうか。

夏希は味を分析しながら、カップ一杯の謎の液体を飲み干した。パイナップル味の強いミックスジュース、という感じがする。かなりおいしい、と評してもいいだろう。

「おいしかったわ。ありがとうございます」

「恐縮ですう〜」

コーカラットが、嬉しそうに触手を振る。

### 63 タナシス訪問団（後書き）

第六十二話をお届けします。

## 64 ラドームの公女王

ルルト船が、縮帆しつつ湾内に滑り込んでゆく。

「三日目に到着か。まあまあ順調な航海だったわね」

あたりの景色を眺めながら、凜が言った。

島国ラドーム公国の王都グルージオンは、逆V字型の湾の奥にあった。津波がきたらひとたまりもないように思えるが、夏希はこの地に来てから一回も有感地震に出くわしていないことに気付いた。たぶん、このあたりは地盤が安定しており、めったに地震など発生しないのであろう。

「ずいぶんと造船業が盛んなようですね」

サーイエナが、市街地左手の砂浜を指差す。そこには、十を超える丸太で組まれた船台が並んでおり、そのすべてで大きな船が建造されていた。もうすでにかなり出来上がっており、中にはマストまで立てた船もある。

「島国だし、船材にも恵まれているみたいだから、いい商売なんじゃないの？」

夏希はそう言った。海岸部を除けば結構山がちの地形らしく、その山々も濃い緑色の樹木でびっしりと覆われている。

かなり北に来たせいだろう、ラドームの気温は海岸地帯よりもさらに低く感じられた。ただし、海岸地帯同様湿気が多いせいか、あまり快適な感じはしない。

やがて、停船したルルト船に小船が近づいて来た。船長が用向きを告げると、そこから案内人が乗り込んでくる。肌の色は褐色に近くて艶があり、丸顔で頭部は小さい。黒目がちの眼は大きく、鼻は低い。髪の毛は、黒くてウェーブしている。異世界で言ったら、インド南部とかスリランカあたりの人種に近いだろうか。

その案内人の指示で、ルルト船とオープア船は停泊地へと導かれた。すぐに棧橋から、迎えの小船が漕ぎ寄せる。夏希ら訪問団の主

要メンバーは、それにラドーム公王女への土産物とともに乗り込んだ。コーカラットとユニヘックヒューマの姿にびびっているラドーム人水夫が操るオールによって、小船は波の静かな湾内を滑るように進んでゆく。棧橋に上がった一行は、待っていたラドーム外務官僚の出迎えを受けた。その案内に従って、公王宮へと赴く。

「生活レベルは、平原と海岸の中間くらいかしらね」

ラドーム人に聞こえないように気を遣いながら、凜が夏希の耳にささやきかける。

炎暑に悩まされない分、ラドームの一般家屋は平原や海岸のものよりいくぶん開放部が少なかったが、その造りは海岸諸国のものよりも重厚さに欠け、やや安っぽく見えた。ほとんどが木造の平屋で、石造りの建物は見当たらない。住民の衣服も簡素で、平原の民と同じくらいのレベルに見えた。ただし、身長は平原の民と比べると明らかに高かった。夏希よりも背の高い男性の姿も、結構見かけることができる。

案内された公王宮も、木造の建物であった。朱塗りの丸い柱が何本も立っており、梁や垂木が鮮やかな緑や青に塗られているので、なんだか中国の古い寺院を思わせる。

控えの間に通された夏希らに、女官らしい人々が茶菓を持ってきてくれる。だが、それに手を付けた途端に、貫禄のある中年男がやってきて、公女王がお会いになります、と告げた。夏希はしぶしぶと、半分に割った焼き菓子を皿に戻した。中にフルーツ系の餡が入っていて、とてもおいしそうだったのだが。

「ようこそラドームへ。わたくしが、公女王カミュエンナです」

謁見の間で待ち受けていたのは、まだ歳若い女性であった。二十歳前後、と夏希は見当をつけた。褐色の肌と低い鼻はいかにもラドーム人らしいが、少しばかり面長の顔立ちで、大きな黒い眼が愛嬌たっぷりだ。ウェーブした黒髪は長く、腰の辺りまである。

団長である凜から順に、四人は挨拶の言葉を述べた。むろん、コーカラットとユニヘックヒューマは控えの間で留守番である。

凜が土産物を差し出し、タナシス王国との仲介に感謝の意を述べる。控えていた女官が受け取って、中身をカミュエンナに見せた。公王女が、にっこりと笑う。

「カミュエンナ様。タナシスからの連絡は、いつごろ来るのでしょうか？」

あくまで控えめな調子で、凜が尋ねる。

「あなた方のラドーム訪問に関しては、すでに書状を七日前にアノルチャ行きの船に託しました。もうすでに、王都リスオンに着いているはずです。入国許可が下りるまで、どうぞ滞在なさってください。入用なものがあれば、なんなりと係りの者に申し付けてくださって結構。ラドーム滞在を、楽しんでいただければ幸いです」

にこやかなまま、カミュエンナが告げる。

「ありがとうございます、公女王様」

堅苦しく凜が言って、頭を下げた。

「ここもお米文化圏なのね」

夕食に出されたのは、白いご飯であった。

「ラドームは雨が多いと聞きますから」

箸を使いながら、エイラが説明する。

「タナシス本土は、北部を除くと雨が少ないので、お米作りには適していないそうです。北部は涼しすぎて、これまたお米作りができません。だから、小麦やトウモロコシなどを食べているそうです。どんなものかは、知りませんが」

「そうか。エイラは小麦もトウモロコシも知らないんだ。両方ともおいしいんだよ。タナシスに行けば、食べ放題だよ、きつと」

夏希はすこしばかりはしゃいで言った。小麦さえあれば、パンやパスタが食べられる。

「素直に入国許可が下りてくれれば、の話でしょ」  
ぶすりとして、凜が言った。

「それはそうだけど。ねえ、エイラ。名前忘れちゃったけど、タナ

シスの国王って、どんな人なの？」

「オストノフ国王です。人となりは、実はよくわかっていませんわ。海岸諸国でも、お目にかかったことがあるのは数名の外交官くらいですから。中年の、精力的な人物だと言われています。王女が三人いますが、王子はなし。女系の即位も認められているそうですから、しばらくは安泰でしょうね」

エイラが、ざっと説明した。

「三人娘か。ところで話し変わるけど、ラドームの特産品って、何なの？ このメニューを見る限り、食べ物系はあまり期待できそうにないわね」

おかずをつつきながら、凜が訊いた。

「たしかにね」

夏希も同意した。焼き魚の切り身、野菜の漬物、小魚のから揚げ、貝が入ったスープ、茹で豆といったところで、海岸諸国で食べたものと大して変わりはない。

「島国で山がちですから、農産物は自給できるだけなのでしょうね。それでもタナシス本土より暖かいので、果物はかなり輸出していると聞いています。あとは、香木と錫鉱石、それに鉛を産するそうです。海岸諸国の商人が買い付けるのは、ほとんどが香木と鉛らしいですわ」

エイラが、説明する。

「へえ。香木か。何に使うのかな」

「もちろん、燃やすんですよ？」

凜が、言う。

「香木を燃やしてどうするのですか？」

エイラが、きょとんとした顔をする。

「え。香りを楽しむんじゃないの？」

夏希は少しばかり驚いた。香木といったら、細片や粉末を練り固めたものに火を点けて、その香りを楽しむものだとばかり思っていたのだが。

「燃やしてしまつては、一回しか楽しめないではないですか」  
エイラが、きよとんとした表情のまま言う。

どうやらこの世界の香木は、燃やさなくともそのままでも十分よい香りがするらしい。夏希が異世界のお香の話をしてやると、エイラとサーイエナが驚いた。

「でも、あんまり香木使つてるとこ見たことないな」

「海岸諸国でしか流行つていませんからね。身につける装身具に加工してよい香りを漂わせたり、家具に組み込んで部屋に香りをつけたりするそうです。まあ、お金持ちの道楽ですね」

夏希の疑問に、エイラが答える。

翌日から、夏希らはグルージオン見物を始めた。タナシスから入国許可が出なければ、動きようがないのだ。せつかく外国まで来たのだから、色々見ておかなければ損である。

ラドーム側がつけてくれた案内人兼護衛の兵士たちは、実に親切であった。案内を頼めばどこへでも連れて行ってくれたし、特定の場所や事柄を隠すようなこともない。

「造船業が盛んなようですね。技術も高いのでしょうか？」

市街地を抜け、海岸に出たところで、サーイエナが護衛責任者に訊いた。ルルト船からも見えた砂浜の船台では、大勢の船大工や職人が立ち働いている。総勢百五十人はいるだろうか。

「ラドームの造船技術は、他の土地と比べそれほど高いわけではありません」

護衛責任者が、丁寧に答える。

「大きさからして、交易用の商船でしょ？ 一度に十二隻も造るなんて、他所から注文が入ったのかな？」

船台の数を数えた凜が、言った。

「注文……といいますが、タナシス政府からの要請です。大型船を十二隻建造し、納入せよと、指示されたのです。むろん、建造費は支払ってもらえますが、十二隻ともなると船大工の数が足りません。

国中から大工や木工職人、さらには樵まで集めて働いてもらっています。まあ、タナシス本国に納める、一種の税金みたいなものですね」

苦笑を浮かべて、護衛責任者が語る。

「旧ソ連みたいなものね」

凜が、言った。

「なにそれ」

「ソビエトも、小型の貨物船や、海軍の使う補助艦艇などはポーランドや東ドイツ、ルーマニアなどに造らせることがあったのよ。破冰船を、フィンランドに発注したりもしてたわ。それと同じじゃないかしら」

歴史通の凜が、ざっくりと説明する。夏希はうなずいた。

「ふうん。ある種の分業体制なのね」

港を一通り見学した一行は、昼食を採るために宿舎へと戻り始めた。行きに通った大通りではなく、ちよつとせせこましい道を歩く。片側に様々な品物を商う商店が、その反対側には屋台のような店が建ち並んでおり、まるで市場の中を抜けていくかのようだ。

「商業的には平原なんかよりもはるかに進んでるわね。専門の食べ物屋台があるみたいだし」

あたりをきよるきよると見渡しながら、夏希は言った。昼時というところもあり、屋台の前に置かれた腰掛に座って、どんぶりを抱え、箸を使っている人が多い。

「都市が単なる人口密集地ではなく、本来の都市としての機能を備えているということね」

凜が、考え深げに言う。

「どついつこと？」

「家とは、自然から身を守る一種の砦であると同時に、睡眠場所であり、食料を摂取する場所であった。これは、横穴式住居のころからの人類の常識ね。文明が発達すると、家の重要性が低下する。社

会が豊かになると、個人が食料を備蓄し、加工する必要がなくなつたので、家で食物を摂取する必然性が薄れた。さらに社会が安全になると、寒暑は別として家は身を守るための存在ではなくなった。狼も、異民族の脅威もなくなったからね。もつと未来になれば、睡眠場所さえ家である必要はなくなるのでしょね。ネットカフェ難民とか、ホームレスの人々は、ある意味未来に生きているのかも知れない。えーと、都市の話をしていただっけ。都市ってのは、単に家が寄り集まった場所、ってわけじゃないのよ。余剰資本や余剰食糧などで、無駄飯食いを養ってゆけるだけの度量と、文化を生み出せる力を備えていなければ、本当の意味で都市とは言えないのよ」

「無駄飯食い？」

「例えば画家ね。絵なんていくら描いても、米粒ひとつ生み出せないのよ。まさに無駄飯食いだわ。農村にいたら、無能扱いされるでしょうね。でも、都市には芸術を理解し、作品に美を見出し、それを買ったり、画家を援助してくたりする人がいる。文化という腹の膨れない産業を育てていけるだけの力量があるのよ。そして、無駄飯食いの人々を受け入れるだけの自由と不干渉の精神が備わっている。これが、本当の意味での都市なの。おそらくこのグルージュオンという街は、そこまでの力を持っているのでしょね」

「そうなんだ」

夏希は納得した。確かに、都市住民にはそのような気風がある。この世界でもつとも都市生活とかけ離れた暮らしをしている高原の民は、ほぼ全員が基本的に狩人が農民であり、籠職人などの専門職も存在するものの、その数はわずかだ。海岸諸国の都市ならば、例えばワイコウのキュイランスのような『賢者』などという曖昧な職業の者さえ、それなりに一目置かれたうえで暮らしてゆけるのである。もつとも、今ではキュイランスは賢者を辞め、大臣となった叔父グリンゲの秘書官として活動しているそうだが。

「ねえ、団長。お昼、ここで食べていかない？ なんだか、おいしそうだし」

いくつもの屋台を眺めながら、夏希はそう訊いた。

「だめよ。宿舎で食事を用意してくれている人のことを考えなさい」  
凜が、夏希をたしなめる。

「ちえ」

夏希は子供ののように口を尖らせた。歩いていると、本当にいい匂いがあちこちから漂ってくる。ご飯のお焦げの、香ばしい香り。肉の脂が焦げた匂い。煮立ったスープから立ち昇る、ほのかに甘い香り。焼いた魚の匂い。焙煎されたコーヒー豆の、香ばしい香り。魚の燻製だろうか、スモークサーモンのようなちよつと生臭さを残した臭い。イカ焼きを思わせる匂い。油通しした香辛料のような、ちよつと刺激的な匂い。

え。

夏希は思わず足を止めた。鼻腔に大量に空気を吸い込み、匂いを分析する。

「ねえ、凜。コーヒーの匂い、しない？」

「……そういえば、するわね」

鼻をひくつかせた凜が、そう答える。

夏希は急いで来た道を戻り始めた。臭源を探し、路地に入る。あつた。

間口の狭い、古そうな店であつた。店頭に大きな箆が置いてあり、各種の豆がうず高く盛られている。

夏希は大股でその店に入ってしまった。

これは……。

夏希は置いてあつた箆のひとつに手を突っ込んで、くすんだ青緑色の豆をひとつ摘んだ。

コーヒー豆だ。

いきなり現れた異国人に驚いたのだろう、店の奥では店主らしい中年男性が、浅い鍋を片手にぱかんとした顔をしていた。夏希はつかつかと歩み寄ると、鍋の中を覗いた。すでに褐色になったコーヒー豆が入っている。煎っている最中だったらしく、鍋からは香ばし

い香りが盛大に立ち昇っていた。

「凜、お金！」

振り向いた夏希は、ようやく追いついた凜に向け手を差し出した。地元の通貨を持っているのは、凜だけなのだ。

「どうするつもりなの？」

「買い占める！ この店にあるコーヒー豆、全部買い占める！」

「買占めはやめときなさいよ。反感買うわよ」

ラドームのコインを夏希に手渡しながら、凜が言う。

「わかったわ。でも、ラドームでコーヒー作ってるとは知らなかった。なんで宿舍の食事にはついてこないんだらう？」

「飲用の習慣がないんじゃないの？ ここ、どう見ても煎り豆屋よ」  
凜が、言う。

夏希はあらためて店内を見回してみた。たしかに、コーヒーショップには見えない。コーヒー豆が盛られた箎はひとつだけだ。他の箎には、大豆や落花生などの、各種の豆が盛ってあった。トウモロコシの粒や、木の実らしいものを盛った箎もある。

「どうしたんですの？」

追いかけてきたエイラが訊いてくる。夏希は説明を凜に任せると、驚いている店主にコインを渡して生豆を買い、鍋で煎ってもらった。これ以上煎ったら苦味が出てまじくなる、と店主に言われたが、無理を言っただけでさらに時間をかけて煎らせる。チヨコレート色のシテイロースト程度になったところで、追加料金を払って布袋に詰めてもらった。

意気揚々と宿舍へ戻った夏希は、厨房から回転式の石臼を借りてきて、焙煎したコーヒー豆を挽き始めた。出来上がった粉末を清潔な綿布に包み、広口のポットに入れ、上から少量の熱湯を注ぎ込む。「ネルドリップならぬコットンドリップね」

昼食抜きでコーヒー作りに取り組んでいる夏希を呆れたように見ていた凜が、そう茶化す。

じつくりと浸出を行った夏希は、そつと布を引き上げた。ポット

から立ち昇る香気を嗅いでみる。……あまり良くはないが、正真正銘、本物のコーヒーの香りだ。

夏希はカップにコーヒーを注ぎ分けた。凜はもちろん、二人の巫女と、ついでに魔物二匹にも勧める。

「まあまあね。ちよっと渋みが強いかな」

ひと口啜った凜が、言う。

夏希はじっくりと半年ぶりのコーヒーを味わった。確かに、しっかりと焙煎した割には渋みが強く残っている。愛飲していたモカには及ばないが、これはこれで十分においしかった。

「香りはいいですが、苦いですわね」

エイラが、渋い表情でカップを置いた。彼女の口には、合わなかったようだ。

「わたくしは気に入りましたわ」

一方サーイエナは、おいしそうに飲んでいる。

「わたくしは苦手ですう。もっと甘い方が好きなのですう」

コーカラットも、好きになれなかったらしく、カップを置く。

「あたいはいいと思うのです！ でも、あたいの飲み物の方が、断然おいしいのです！」

味が気に入ったらしく、一気飲みしてしまったユニヘックヒューマが、空になったカップを振り回しながら叫ぶ。

「こんな熱いの一気飲みして、よく火傷しないわね」

凜が、呆れる。

「ふふふ。これで毎朝コーヒーが飲めるわ。凜、ノアア川水運商會に外洋船を購入させてね。ここからハンジャーカイまで、コーヒー豆の取引ルートを確立させるわよ」

「需要はないと思うな。赤字分補填してくれるってなら、やってもいいけど。むしろ、ルルト商人に頼んで少量を定期輸入した方が断然安上がりよ」

自分の分を啜りながら、凜が言う。

「ともかく、帰りにはたっぷり買い占めて帰るわよ。駿はコーヒー

党のはずだし、生馬も拓海も飲むでしょう。いいお土産ができたわ」  
夏希は幸せな気分でコーヒーを啜りこんだ。

64 ラドームの公女王（後書き）

第六十四話をお届けします。

## 65 拒絶

ラドームの公女王カミュエンナから、タナシス本国より入国許可申請に対し返答が来たとの連絡があったのは、夏希らがラドームに入国してから五日目のことであつた。

夏希らはすぐさま公王宮に出向いて拝謁を願い出た。カミュエンナも待つていたらしく、すぐに謁見の間に通される。

挨拶が終わると、カミュエンナがさつそく本題に入った。

「タナシス本国の意向をお伝えします。現在、タナシス本国内では叛徒が跳梁しており、人間界縮退対策本部および平原共同体からの訪問団の安全を保障できない。ゆえに、入国を遠慮願いたい、とのことですよ」

「叛徒の跳梁、ですか」

凜が、眉根を寄せる。

「公女王様、それほどまでにタナシス本国は乱れているのですか？」

サーイエナが、訊いた。

「たしかに辺境州では叛徒が力を持っていますが、その他の州や自治州は平和そのものはずですよ。少なくとも、わたくしが知る限りは」

「ならば、王都リスオンまでくらいならば安全でしょうに……」

「とにかく、タナシス本国の意向はお伝えしました」

異論を唱えようとしたサーイエナを遮るように、カミュエンナがきっぱりと言った。

「それから、人間界縮退問題に関しての書状も一緒に届きました、お渡ししておきます」

カミュエンナの合図を受けて、控えていた書記の一人が折り畳んだ書状を持って現れ、恭しく凜に手渡した。凜が、改めてカミュエンナに礼の言葉を述べる。

「わたくしとしても、今回のタナシス本国の意向を遺憾に思います。

ここラドーム公国は、北陸塊にあるタナシス王国に属しているとはいえ、北陸塊と南陸塊のあいだにある地。あなた方とは、友好的にお付き合いしたいのです」

褐色の眉間にわずかに縦皺を寄せながら、カミュエンナが言う。

「平原共同体も、タナシス王国ならびにラドーム公国との友好を切に願っております」

凜が、そう応じる。

宿舎に戻った凜が、書状をエイラに渡す。夏希は、書状を読み上げるエイラの声に耳を傾けた。

「中身のない書状ね。要約すれば、縮退問題ははまだ調査中。協力要請は検討中、ってことでしょ？」

訊き終えた凜が、憤然として言う。

「そのようですね。長いあいだ音沙汰なしだったのに、返答は中身がない。何を考えているのでしょうか、タナシスは？」

サーイエナも、わずかに怒りの色を見せながら首を傾げる。

「少なくとも、人間界が縮退していることは、認識しているのよね。だけど、積極的に対策を施そうとしていない。被害が出ていないのかしら」

夏希はそう推測した。

「そうね。困っているのならば、こちらから申し出た協力を事実上断るような返答を寄越す訳ないものね」

凜が、同意する。

「いずれにしても、タナシスに関して情報が少なすぎますわ。これでは、対策の立てようがありません」

困り顔で、エイラが言った。

「外交使節を受け入れてもらえないとなると……スパイでも送り込みますか」

凜が、ぼそりと言う。

「候補がいるの？」

「彼女とかどう？ 空も飛べるし、いざとなったら魔界に逃げ込めるし」

凜が、天井付近に浮いているコーカラットを見上げる。

「戦略情報の収集は、厳密に解釈すれば人間界の争いに介入しないという魔物の大原則に抵触するおそれがあるのですう。凜様の頼みでも、聞くわけにはいかないのですう」

するすると低いところに回転しながら降りてきたコーカラットが、言う。

「じゃあ、商船を送り込みますか。山つ気のある商人に偽装して」

夏希はそうアイデアを出した。

「異国船打ち払い令とか出てるかもよ」

「なら、難船を装って救助を求めるとか」

「いきなり処刑されたりして。いずれにせよ、危なすぎるわね。仮に潜入に成功したとしても、こちらと連絡が取れなければ役に立たないし」

凜が、首を振る。

「じゃあ、いったん戻ってみんなと相談する？」

「それしかないわね。エイラ。サーイエナ。なにかいい考えはある？」

凜が、ふたりの巫女に振った。

「ありませんわ」

「同じく」

「じゃ、明日にでも帰国の船を出してもらいましょう。港まで行って、ルルト船とランクトウアン王子に話をつけてくるわ」

立ち上がった夏希は、凜に向かって手を突き出した。

「あたしも行かなきゃだめ？」

「違うわ。お金貸して。今日のうちにコーヒー豆全部買い占めて、船に積んでおきたいから」

真顔で、夏希は告げた。

翌日、麻袋五つ分の生豆を積んだルルト船は、オープア軍船に先導されてグルージオン市沖合いから外洋へと出て行った。帰路もかなり海は荒れたが、ユニヘックヒューマの飲み物の助けを借りて、夏希はなんとか乗り切った。

ルルト海港に無事入港し、川船に荷を移し替え、ランクトウアン王子に別れを告げる。改めてルルト王宮に赴き、国王の尽力に対し礼を述べた一行は、ルルト外務当局者とタナシス情報の収集に関する打ち合わせを行った後に、与えられた宿舎へと引込んだ。そこで一泊し、少しばかり土産物を買って入ってから、川船に乗り込んでノア川を遡り始める。

ラドームを発って七日後の午後遅く、ようやく一行はハンジャーカイへと帰りついた。

「ほう。懐かしい香りだな」

生馬がカップから立ち昇る香気を吸い込んで、眼を細める。その隣では、拓海が凜特製の糖蜜から作ったザラメ糖もどきを、カップにどかどかと放り込んでいる。夏希は顔をしかめた。

「そんなに甘くして。太るわよ」

「苦いのは苦手だ」

金属スプーンでカップの中身をぐるぐるとかき回しながら、拓海が言い返す。

その目的を達成できなかったタナシス訪問団が、ハンジャーカイに帰還して解散した翌日である。五人の異世界人は、ハンジャーカイ郊外の畑を潰して新設された『平原共同軍参謀部庁舎』の中にある参謀長執務室に集まっていた。

「ではまず、訪問団団長から報告するわね」

凜が、ラドームにおける訪問団の活動と、タナシス側の反応を詳しく説明する。

「タナシス王国の言うことは信用できないねえ」

にこやかにコーヒーを啜りながら、駿が言った。

「同感だな。たかだか二十名程度の外交使節団の安全を、大国タナシスが守れないわけがない」

生馬が、うなずく。

「受け入れ拒否の真の理由はなんだ？ 友好関係を結ぶ気がないのか、あるいは情報の流出を嫌っているのか……」

カップを置いた拓海が、考え込む。

「単なる不干渉主義なのかもね。モンロー主義のような」

駿が、言った。

「どうか。この世界の海は、厳密に言えば海洋とは言えないだろう」

拓海が、首を振る。

「海洋じゃないって、どういうこと？」

夏希は訊いた。たしかに、太平洋やインド洋に比べれば小さな海だが、日本海よりも広い海なのだ。海洋と呼んでも差し支えないのではないだろうか。

「あー、地政学的に言えば、この世界の海は閉鎖海なんだ。南北は陸塊、そして東西はおそらく魔界によって閉ざされている。地中海を思い起こしてくれればいい。モンロー主義……両米大陸に対する新たな植民活動の禁止、ヨーロッパの政治組織を西半球に拡大する試みの拒絶、そしてヨーロッパ内政に介入しないという政策が、曲がりなりにも機能したのは、大西洋が大きく、そして開放された海だからだ。ヨーロッパのシーパワーは、大西洋を通じてアフリカやアジアに投射することができる。北米は太平洋にも面しているから、シーパワーをアジアへと向けられる。しかし、この世界の海は閉ざされている。タナシスのシーパワーが伸張すれば、その向かう先は南側の陸塊しかないんだ。不干渉主義の維持は難しいよ」

「そうなの？ お互いいわば鎖国状態になれば、不干渉主義を貫けるんじゃないの？」

夏希はそう反駁した。

「ラドームが王国から公国になった経緯を忘れているよ。タナシス王国は、少なくともラドームまではその政治組織を拡大して来たんだ。もし厳密に不干渉主義を貫きたければ、ラドームを中立地帯にするのが正解なのにね。どう見ても、ラドームの地は互いの陸塊に影響を及ぼすためのブリッジヘッドになるだろうし」

拓海ではなく、駿が答える。

ブリッジヘッド  
「脱色頭？」

「ブリッジヘッドだ。橋頭堡。敵地で橋を通過する場合、軍勢は脆弱となる。一度に対岸に渡れる兵の数は限られているからね。各個撃破のおそれがある。それを防ぐために、橋を渡った先にとりあえず置かれる強固な前衛部隊による応急陣地などを橋頭堡と称するんだ。地政学用語だと、戦略的な足掛かりの土地、という意味合いだな。朝鮮半島は日本に対するブリッジヘッド、などと使われる」

例によって、拓海が説明してくれる。

「案外、人間界縮退の原因を作ったのが、タナシスだったりして」  
冗談めかして、凜が言う。夏希は眼を剥いた。

「それを隠すために、入国拒否したの？ あり得ない話じゃないわね」

「とにかく、平原共同体外交部は海岸諸国と協力して、ラドーム公国を通じタナシス王国とのあいだに外交関係を樹立できるように努力を続けるつもりだ」

駿が外交部長としての決意を披瀝する。

「いずれにしても、まったく情報が取れないのは困りものだな。頼みの綱は、ラドーム公国経由の情報か。そのカミュエンナとかいう女王様は、まともな人物なんだな？」

拓海が、確かめる。

「しごくまともな人物に見えたわね。タナシスに従属してはいるけ

ど、こちら側との友好も維持したい。トラブルになったら、矢面に立つのは彼女の国だからね。板ばさみで苦慮している感じだったわ」  
小さくうなずきながら、凜が答える。

「緩衝国の悲哀だな」

拓海が、言った。

「それで、わたしたちの留守のあいだ、なにか進展はあった？」

コーヒーのお代わりを注ぎながら、夏希は訊いた。

「人間界縮退に関しては変わらず。平原共同体の方は、だいぶ組織が整ってきたよ。文化教育部で、念願だった師範学校設立に向けた準備室を立ち上げた。まだ先は長いがね。外交関係では、ノノア川の利用に関する条約を制定するために、各国と調整に入っている。沿岸すべての国が関わる条約だから、これも時間が掛かりそうだがね」

嬉しそうに、駿が報告した。

「俺は突撃連隊の編成を終えたよ。総員千名。長槍兵が四百、長剣兵が三百、弓兵が百八十、散兵が百、本営が二十。かなりの打撃力になるはずだ」

こちらも嬉しそうに、生馬が報告する。

「俺のほうは、軍縮を終えた。突撃連隊を除く野戦部隊は、四百名大隊五個にまで削減した。戦時には、動員を掛ければ三日で十個大隊まで増える」

今度は拓海が報告した。

「合計三千名プラス二千名か。たいしたことないわね」

凜が、いささか辛辣そうに言う。

「常備軍は金がかかるんだ。参謀部の方でも、かなり人員を使っているしな。とにかく、参謀部の各部局が平時にきっちり仕事をしていてくれれば、いざという時に動員を掛け、各国に防衛隊を派遣してもらい、そのうえ市民軍を集めれば、短時間でかなりの兵力を円滑に運用できる。大隊の配置はススロン、エボダ、ニアン、マリ・八、それにハンジャーカイに各一個ずつ、突撃連隊はハンジャーカイに

置く。これで当面、平原は平和を保てるだろう。それと、新兵器の開発にも取り掛かっている」

「新兵器？」

「生馬」

拓海が、生馬に合図した。生馬が大声でソリスを呼ばれる。

しばらくして現れたソリスは、一本の棒状武器を携えていた。立ち上がった生馬が受け取って、斜めに構えてポーズを取る。

「海岸諸国の戟げきに似てるけど、ちよつと雰囲気違っわね」

全長は刃部を含めて二メートル半ほど。刃部には、片側に斧を思わせる形状の大きな刃が、その反対側に太いナイフのような刃が突き出している。先端には、槍先のような尖った刃がある。

「ハルバードだ。いわゆる矛槍だね。突けば槍として、叩けば長柄の戦斧として、錨爪を使えば引っ掛けることもできる多用途兵器だ。複合兵器としては、史上もつとも成功した部類じゃないかな。防御には長槍のほうが適しているが、攻勢には使いにくいし、接近戦にも弱い。ハルバードなら、攻防両面で威力を発揮できる。慣れないと扱いにくい武器だが、いずれ長槍兵の大半はこれに置き換えるつもりだ」

拓海が、説明した。

「竹竿の君に、感想をうかがいたいね」

生馬が、ハルバードを夏希に差し出す。立ち上がった夏希は、しぶしぶそれを受け取った。天井に刃部が刺さらないように注意しながら、小さく振ってみる。見た目どおり、結構重い。三キログラムくらいか。

「確かに、使いこなすにはかなり訓練しなきゃならないでしょうね」  
夏希は刃部をじっくりと観察しながら言った。竹竿のように、単に振り回すだけでは役に立たない。相手に正確に斧刃の部分を叩きつけたり、錨爪を引っ掛けてりしなければならぬのだ。

「新兵器は、もうひとつある」

「にやにやしなから、拓海が言う」。

「今度はなに？ 連弩れんとでも開発したの？」

凜が皮肉っぽい口調で訊く。

「いやいや。川船だ。ノノア川を制すものは、この地を制す、ってことで、武装艦艇をハナドーンで建造中だ。重装甲、火矢対策済み。こいつで河岸の敵に対して矢を雨霰と浴びせるんだ。無敵のチート兵器だね」

拓海が、くすくすと笑う。

「一番苦労したのが推進機関だ。当初はスクリュー推進にするつもりだったけど、それでは喫水が深くなってしまうノノア川はともかく支流に入り込めない。結局、内輪船になった」

駿が、言い添える。

「内輪船？」

「外輪船は知ってるだろ？ その外輪を、船内に持ち込んだバージョンだ。外付けだと、破壊されやすいからな」

夏希の疑問を、拓海が解消してくれる。

「当然、人力推進よね」

「もちろん。単純なクランクを利用した自転車みたいな脚漕ぎ方式を採用した。設計責任者は、駿だが」

拓海が、駿を見る。

「ここの金属加工技術と、木工のレベルが高くて助かったよ。職人に設計図を理解させるのには手間取ったけどね。とりあえず、作動テストには成功し、量産に入らせている。おそろくしょっちゅう故障するだろうからな。予備部品を多めに作つとかないな」

「川船ってことは、河川専用なの？ 海には出せないのかな？」

凜が、訊いた。

「出せないことはないが、喫水が浅いから大波がきたらひっくり返るね。少なくとも俺は乗りたくないよ」

拓海が笑いながら言う。

「完成はいつごろ？」

「あと四十日ってとこだな。予算の都合がつけば、二番艦も建造し

「たいが……とりあえず運用テストしてからだな」

「使い物になるのかしら」

懐疑的な表情で、凜が問う。

「たぶんね。船首部分には中に鉄材を仕込んだ銅張りにして、衝角しょうかくをつけた。敵船に体当たりをかませるんだ。かなり大きな川船でも、一撃で沈められるはずだ」

「そんな敵がそうそう現れるとは思えないけど」

自慢げな口ぶりの拓海を見ながら、夏希は苦笑した。仮にタナシス王国と戦うはめになったとしても、その戦場は海であろう。川船が活躍する場面など、まずあるまい。

## 66 戦略的奇襲

「ルルト海軍からの定期報告です」

副官が、一枚の紙を机上に置いた。

「ありがとうございます」

ランクトウアン王子は、読み込んでいた報告書を置くと、副官が置いた紙を手元に引き寄せた。上から順に、走り読みしてゆく。

中ごろまで読んだあたりで、王子の端正な顔がわずかにゆがんだ。

「シヨロク。誰か船主組合まで使いに出せる者を探してくれ」

ランクトウアン王子は、声を高めると副官を呼んだ。

「他にご用事がなければ、わたくしが行ってもよろしいですが」

すぐに顔を見せた副官が、そう申し出る。

「いいだろう。頼む。船主組合に行つて、ラドームへ向かった商船で、帰着が遅れている船があれば、すべて調べてきてくれ。一日でも遅れた船は全部頼む。船名、出航日、帰着予定日、船主、積荷、船長名、その他登録事項全部だ」

「承知しました。参考までにお尋ねしますが、これは『バラシア』号の遭難となにか関係があるのでしょうか？」

副官が、訊く。『バラシア』号とは、約三十日前に出航し、ラドームへ向かったオープア商船である。すでに帰着予定日を二十日も過ぎていにも関わらず、いまだどの港にも戻って来ていないので、遭難した模様だと海軍に届出があつた船だ。

「そうだ。この報告書によると、ルルトでも三隻の商船が行方不明になっているとのことだ。いずれも、『バラシア』号と前後してラドームへ向かったが、帰ってきていない。ここしばらく、海が大きく荒れたとの報告がない以上、四隻もの外洋商船が一度に遭難するとは考えられない。おそらくは、ラドームで足止めされているのだらう」

「政変でもあつたのでしょうか」

副官が、言う。

「ま、原因はいくつか考えられるがな」

オープア商人もルルト商人も、ラドーム公国との商取引を行っているが、それは長期契約に基づく輸出入ではなく、もっと投機的な商売である。すなわち、海岸諸国で仕入れた商品をラドームへ運んで売却し、当地で商品を購入、海岸諸国へ戻り売却、利ざやを稼ぐというやり方だ。だから、ラドームで積荷が捌けなかったり、海岸諸国で売れる品物が手に入らなければ、長期滞在を強いられるはずだ。あるいは、ラドーム側の商取引の法律が変更になったり、税率が変わって資金繰りに苦慮しているのかも知れない。ラドーム周辺だけが局所的に悪天候に晒されている可能性もある。流行り病で大勢の水夫が寝込んでいる、海賊が出現して出航を見合わせているなどもあり得るだろう。

ランクトウアンが、異世界人二人と巫女二人、それに魔物二匹という奇妙な外交団を護衛してラドーム公国を訪れたのは、すでに三十日も前のことだ。その時は、特に異常は見られなかった。だが、三十日というのは長い時間である。そのあいだに、ラドームでなにが生起したとしても、不思議はない。

「とにかく、ラドームで何かが起こっていることは確かだ。これは、調査せねばならない」

「わかりました。さっそく船主組合まで行ってまいります」

一礼した副官が、下がる。

「こら！ ノア川水運商会顧問！」

平原共同体経済部庁舎の廊下で凜を見つけた夏希は、ずいとはじめ寄った。

「……なに怒ってんの？」

「なんでコーヒー豆が届かないのよ！」

毎日コーヒーを味わうために、夏希はノア川水運商会に属する

商人に頼んで、独自にコーヒー輸入の手筈を整えてもらっていた。ルルトとハンジャーカイを定期的に往復するその商人が、ラドームとの取引を頻繁に行っているルルト商人に金を払って生豆を一定量購入してもらい、それを他の商品と一緒にハンジャーカイまで運ぶ。夏希が、生豆を商人の言い値ですべて買い取る、というシステムである。

前回の生豆購入は十五日ばかり前のこと。夏希はコーヒー党を一人でも多く増やそうと、アンヌツカ（気に入ったようだ）やシフオネ（ひと口しか飲んでくれなかった）を始め身近な人々に景気よく振舞っていたので、すでにコーヒー豆は一粒も残っていない。

「ああ、そのことが。なんでも、ラドームに行った商船が、足止めを喰っているらしいの」

「足止め？」

「そう。最近一隻も戻ってこないのよ。あなたが契約した商人も、ラドーム産の鉛を扱ってたから、苦慮してるらしいわ。でも、ラドームから直接持ち帰った豆がまだ残ってるでしょうに」

「とつくになくなったわよ。お土産として、あちこちに飲み方のレシピつけて配っちゃったから」

「そうなんだ。それは、ご愁傷様ね」

凜が、すまなそうに首を縮める。

「何があつたのかしら？」

「おおかた、タナシスの方針で禁輸政策が取られたんじゃないの？」

「でもそれなら、船は追い返されるんじゃないの？」

夏希はそう言った。凜が、うなずく。

「それもそうね」

「駿や拓海はなんて言ってるの？」

「打つ手なし、ってとこね。まあ、貿易途絶で本当に困るのはルルトとオープアだけだしね。平原は、影響が少ないから、様子見つてとこね」

「そんな。わたしは影響大だよ」

「喚いてもしょうがないでしょう。あたしの部屋でおいしいお茶淹れてあげるから、我慢しなさい。アンヌツカ、あなたもどうぞ」

凜が、やや呆れ顔で夏希の背後に突っ立っていたアンヌツカを手招いた。

「ありがとうございます、凜様。ご馳走になります」

「あら。なんか、味違うわね。コーヒーばかり飲んでたせいかな。凜が淹れてくれたちよつと温めのお茶を味わいながら、夏希は言った。

「アンヌツカはどう?」

いたずらっぽい笑みを見せながら、凜が訊く。

「普通のお茶より、渋みが少ない気がしますね」

「平原の人の舌に合うかしら?」

「どうでしょうか。わたしはおいしいと思いますが」

アンヌツカが、首を傾げ気味にして答える。

「なに、新しい品種か何か?」

「まさか。イナートカイで、ちよつとかぶせ茶っぽく作ってもらったの」

湯飲みを置いた凜が、言う。

「かぶせ茶?」

「収穫直前に、数日から十日くらい、茶葉の上に覆いを乗せて日光を遮って作るお茶よ」

「……それって、玉露じゃないの?」

「玉露は、茶畑そのものを遮光するの。かぶせ茶は、単純に木の上に日除けを置いちゃうやり方。今回は、稲藁を載せてもらったわ。

この辺、日差しがきついでしょ? イナートカイは霧が多いからお茶作りには適してるけど、どうしても渋みが強いお茶になってしまふ。だから、かぶせ茶を試してみたの。評判がよければもっと作ってもらうつもりだけど、みんな渋めのお茶に慣れてるからね。商品

になるかどうかは、未知数だわ」

「凜様！」

いきなり、戸口から経済部の事務官が飛び込んできた。

「どうしたの、フーシオ？」

「連絡会議臨時総会が開かれるそうです。凜様も、ご臨席ください」  
慌てた口調で、事務官が告げる。

夏希は腰を浮かした。アンヌツカは、いち早く立ち上がっている。  
「なにがあったの？」

夏希は事務官にそう問うた。平原共同体の最高意思決定機関である総会が臨時に開かれるなど、緊急事態でしかあり得ない。

「ルルトから急報がありました。国籍不明の軍勢に、海上から攻撃されているとのことです」

夏希は眼を剥いた。

「夏希様！」

アンヌツカが、鋭い眼差しで夏希を見る。夏希は立ち上がりながら、うなずいた。

「わかった。すぐ行くわ」

そう答えながら、凜も立ち上がる。

「わたしは参謀部へ行くわ」

夏希は、凜にそう告げた。一応、平原共同軍参謀部参謀でもあるのだ。

「襲ってきたのは、やっぱりあの国かな？」

厳しい表情で、凜が問う。

「でしょうね」

オープアが、盟邦であるルルトと喧嘩を始めるとは思えない。ラクトアスを始めとする東部海岸諸国も、同様だろう。群島の小国や海賊に攻められたくらいで、南の陸塊随一の人口と経済力を誇るルルト王国が揺らぐとも思えない。ラドーム公国が、単独でルルトを攻撃することも、考えられない。

となれば、攻め寄せた国はひとつしかあり得ない。

すなわち、北の陸塊にある大国、タナシス。

「行くわよ、アンヌツカ」

夏希は走って凜の部屋を出た。

「戦略的奇襲は困難である、と昔の偉い人は言ったがな」

自嘲気味に、拓海が言う。

夏希とアンヌツカが息せき切って駆けつけた平原共同軍参謀部は、意外なことに静かであった。参謀長たる拓海は、次長である生馬と差し向かいで、のんびりとお茶など飲んでいる。ただし、二人が座っている机の上には、地図が広げられていた。大海を挟んで両岸がかなり内陸まで描かれたものだ。もともと、北部陸塊の地形などは情報不足からかなり簡略に描かれてはいたが。

「慌てても仕方ない。情報が少なすぎるからな。まあ、座れ」

立ち上がった生馬が、親切に椅子を持ってきてくれる。

「敵はやっぱりタナシス王国なの？」

礼を言って座った夏希は、そう訪ねた。

「断言はできません。大部隊であれば、まず間違いない。しかし、略奪目的の小部隊であれば、海賊の可能性がゼロじゃない」

お茶をすすりながら、拓海が答える。

「報告します。第二報が届きました。現在日没直前。敵船舶数約七十。上陸兵員推定一万以上。ルルト国軍、応戦中。敵をタナシス王国軍と認む。救援を乞う。ルルト国軍本部。以上です」

戸口に現れた青年が、口頭でそう告げてから、つかつかと歩み寄って拓海に一枚の紙を渡した。

「ご苦労。念を押すようで悪いが、作戦局と情報局にも同じ報告が行っているかどうか、確かめておいてくれないか」

受け取った拓海が、言った。

「承知しました」

青年が一礼し、足早に去る。

「なんか、本格的ね」

「情報は広く行き渡らせる。参謀部みたいところでセクシヨナリズムが蔓延したら、とんでもないことになるからな。それと、必ず平易な文で書面化する。口頭だけでは誤解が生じ易く、下手をすれば伝言ゲーム状態になって情報や命令が曲解されるおそれがある。もってまわったような言い回しは厳禁だ。美文調や装飾過多だとかまかしが効くからな」

「それはいいけど……読めるの？」

丸っこいこの地の文字が書かれた報告書を指差し、夏希は訊いた。「少しは読めるようになった。単語さえ覚えちまえば、読むだけなら難しくはないよ。発音は覚えなくて済むし。平易な文を書かせてるから、文法も簡単だ」

こともなげに、拓海が言う。夏希は、生馬に視線を当てた。

「俺はまだまだだ。最近、やっと数詞を覚えたよ。ほら、これが七十だ。船の数だな」

生馬が、単語のひとつを指で抑える。

「これが敵、次が船、七十。とすると、この後ろの二文字が約、の意味かな？」

「そうだ。適当、という意味合いだな。適切に、という意味でも使われることがある」

「よし、覚えたぞ。しかし七十か。もちろんすべてが軍船ではないだろうが、凄い数だな」

生馬が、唸る。

「ルルトの国軍は約四千。海軍が、千名程度。この奇襲では、市民軍を編成している余地はないだろう。国軍も、各所に散らばっているだろうし。敵の目的がルルト市制圧なら、阻止はまず不可能だな。地図を睨みながら、拓海が言う。

「問題は、敵の戦略目的だ。タナシスの正規軍だとすると、単なる略奪じゃないだろう。懲罰攻撃とも思えない。占領……なのか？」

生馬が、問いかけるように拓海を見る。

「たしかにルルトは豊かな国だが、そこだけ植民地として維持するのは不可能だろう。やるとすれば、ワイコウまで含めて海岸諸国をすべて平らげる必要がある。兵力は……最低でも五万は欲しいな」

「平原共同軍は出動しないの？」

夏希は訊いた。拓海が、呆れたような顔をする。

「おいおい。共同軍は共同軍司令部が指揮しているし、その司令部も共同体連絡会議総会に隷属する組織だ。一応、シビリアンコントロール下にあるんだよ。総会で議決がなきゃ、一兵たりとも動かさないんだ。ま、出兵前提で参謀部を動かしてはいるけどね。会計部には銭勘定させてるし、人事局には予備大隊編成準備と市民軍編成の見積もりをやらせてるし、作戦局には行軍計画を立てさせてるし、情報局には各種情報の収集と敵兵力の見積もりを命じてあるし、外交局には高原とワイコウとの接触を命じたし、兵站局には各種装備の増産に備えるように指示したし、補給局にも川船の徴用と食料集積に備えるように言っているし」

「敵が一万程度なら、オープアと東部諸国、ワイコウ、それに平原共同軍が力を合わせれば、意外とあっさり撃退できちゃうんじゃないの？」

夏希はそう言ってみた。

「言つまでもないが、いまもたらされた報告は、十四時間近く前のものだ。それを忘れちゃいかん。古い情報のみに基づいて行動するのは、間違いのもとだ。それはともかく、追加の報告が届いてみるとなんととも言えんが、タナシスの戦略目的が何であれ、数日以上戦闘行動を意図しているのならば、増援部隊は来るだろうな」

拓海が考えつつ言う。生馬がうなずいた。

「間違いなく来るな。おそらく、すでにタナシス船団の大半は、すでにルルト沖から消えているに違いない」

「そうか。本国へ戻って、増援部隊を連れてくるんだ」

夏希もうなずいた。

「いや、違うな」

拓海が渋い表情で首を振る。

「違うの？」

「ああ。本国までは戻らない。まず間違はなく、事前にラドームに兵員を運び込んでるはずだ。本国まで往復するより、四日から五日は節約できる」

「ラドームに行ったルルトの商船が戻ってこないって……こういうわけだったのね」

夏希はようやく理解した。何万ものタナシス軍部隊が集まっているところを見てしまったルルト商船……。タナシスによる奇襲を成功させるために、抑留されたに違いない。

「十中八九、今回来襲した七十隻の中に、捕らえられたルルトとオープアの商船が混じってるな。第一撃に総力を挙げるのが、戦略的奇襲の原則だからな」

生馬が、言う。

「あと知恵だが、兆候はあったんだ。タナシスが訪問団を拒絶したのも、すでにその時に侵攻準備を行っていたからに違いない。夏希が見た、タナシスがラドームに造らせていたという船も、この七十隻の中に入っているだろう。それに、ルルトとオープア商船の未帰還。抜かったな。オープア海軍にでも頼んで、偵察に行ってもらえばよかった」

拓海が、悔やむ。

「過ぎたことは仕方ない。奇襲の兆候なんて、見過ごされるのが当たり前前なんだから。真珠湾を見る。フセインのクウエート侵攻を見る」

生馬が、なだめるように言う。

「三十八度線、六日戦争、フォークランド……。生馬の言うことは正しいが、俺は一応平原共同軍参謀部参謀長だからな。反省はしない」

「次長として言わせてもらおうが、今やるべきことはこの事態にどのような対処すべきか、参謀部としての方針を決定することだろう。」

対策を練ろうや」

微笑んだ生馬が、拓海の肩をぽんと叩く。

「ああ、そうだな。まずは敵の戦略意図だが……これがどうも判らん。最悪のケースとして、海岸地帯全体の領有を狙っていると仮定しておこう。戦力だが、現状の報告では陸戦兵力が一万となつているが……これは控えめに見積もり過ぎていると思う。對抗勢力たるルルト国軍の戦力を考慮すると、第一次攻撃としては兵力があまりにも過小だ。暫定的に、切りのいいところで二万と推定しておこう」

「七十隻で二万人も運べるのかな？」

夏希は暗算した。二万割る七十で……二百八十五くらいか。

「あなたがラドームへ乗っていった商船でも、三百人くらい運べるだろう。ラドーム・ルルト間は順風なら三日以内だ。余分な水や食料を積まなければ、余裕だ」

「ルルトは大量の食料を抱え込んでいるからな。当面、敵は兵站の心配もしなくて済む」

生馬が、指摘する。

「分析を続けよう。当面の敵の戦略目標は、ルルト市の完全制圧だろう。ルルト野戦軍の撃破も意図するだろうが、それよりも増援部隊を受け入れられるように、海港を中心とする市街地の占領を優先させるはずだ。そしておそらく、防備を固めてオープアや東部諸国、ワイコウによる反撃に備える。船団が、第二陣を運んでくるまで……早ければ五日か。陸戦兵力は四万に膨れ上がる」

「その前に、叩かないと」

夏希は急かした。聞いた話では、タナシス王国の総人口は、南の陸塊すべての国家と高原諸族をあわせたものよりもはるかに多いらしい。当然、動員兵力も大だろう。大軍を続々と送り込まれたら、勝ち目はない。

「今手元にある兵力は、一個大隊と生馬の突撃連隊、合わせて千四百だけだ。マリ・八駐屯の大隊を含めても千八百。一日待てば、他の三個大隊が合流できるから、三千の兵力がそろつ。各国から防衛

隊若干に参加してもらって、これが一千とすると、総計四千。再建中のワイコウ国軍が、千五百。あわせて五千五百。仮にオーブア国軍と合流できたとしても、一万に満たない。だめだ。この程度の兵力で攻勢に出ても、勝てないよ」

拓海が、分析する。

「じゃ、どうするの？」

「兵力を集める。とりあえず、共同軍予備大隊の徴集だな。これで二千名。各国に協力要請し、防衛隊も二千名まで集めたい。市民軍も編成して、二万。高原にも派兵要請し、二万を送ってもらおう。これで総兵力四万七千五百だ。わが補給局と兵站局が現状で組織管理できる兵站能力を鑑みるに、これが運用限界だろうな。これだけの兵力があれば、タナシス軍四万と互角以上の戦いができるだろう」

「タナシス軍の第三陣がやってきたら？」

「海岸諸国を明け渡ししかないな。さらに市民軍を動員することも、高原に追加派兵を要請することも可能だが、下手をすると平原経済が戦費と労働力不足で崩壊しかねない。守りを固めて、タナシスが平原に侵入することを防ぎつつ、様子を見る。いくらタナシスが大国でも、六万七万もの兵力を本国から海を隔てた地で長期にわたって運用するのは無理だろう。必ず、かなりの兵力を引き上げ、守備態勢に移行するはずだ。そこで機を見て、逆襲に転ずる。海で隔てられている以上、タナシス側も事前準備なしに大兵力を送り込むことは難しいはずだ。三万程度の守備兵力ならば、こちらが数で押し切れる」

「おいおい。先走り過ぎだぞ。タナシスの意図はまるでわからんのだから」

生馬が、嗜めた。

「そうだったな」

拓海が苦笑する。

## 66 戦略的奇襲（後書き）

第六十六話をお届けします。

## 67 タナシスの野望

ルルト政府から派遣された正式な急使がハンジャーカイを訪れたのは、翌日の昼過ぎであった。すぐに平原共同体連絡会議総会が召集され、集まった平原各国代表や高原のオブザーバーの前で、急使がルルトの窮状を述べ、支援を乞う。

「派兵決定だ。総会は平原共同軍司令部に対し、高原諸族および海岸各国と協力し、ルルト市を占拠したタナシス軍部隊を速やかに排除するように命令を出した。平原各国代表は、それぞれの国で防衛隊を供出することと、市民軍を組織することにも同意した。高原のオブザーバーも、義勇軍派遣に協力を確約した」

総会から戻ってきた駿が、一気に説明した。

「で、新たな情報は？」

拓海が、訊く。

「敵兵力は一万七千から八千。船団は七十隻で、軍船が約三分の一。陸戦兵力のうち、いわゆるタナシス人は半分程度。残りは、自治州が支配下の公国、あるいは辺境民族らしい」

「タナシス人って、どんな人たちの？」

凜が、訊いた。

「俺たちに似ているそうだ。きわめて東アジア的。もっとも、風貌を聞いた限りでは、日本人よりは中国人やモンゴル人に近いみたいだがな。自治州なんかは、東部が高原みたいなヨーロッパ系、西部が黒い肌のアフリカ系に近いようだ。北部の辺境域で抵抗している連中は、西アジアっぽい風貌らしい」

拓海がざつと説明する。駿が、メモに眼を落とす。

「戦闘の経緯を説明するよ。一昨日の午後遅く、七十隻の船団がルルト市沖合いに出現。調査のため緊急出航したルルト海軍艦艇を火矢で攻撃して撃退。その後、三群に分かれて西郊の砂浜、海港、ノア川河口付近の三ヶ所に小船で上陸開始。ルルト国軍と戦闘とな

る。日没後も戦闘は続き、夜半にルルト王族は南方の都市クートロアに脱出。国軍部隊もかなりの損害を敵に与えたものの、夜明けとともにルルト市を撤退。決戦を避けて西方海上に退避していたルルト海軍艦艇も、これを見てオープア海軍と合流すべく西進した、ということだ」

「オープアや東部諸国の動きは？」

生馬が、訊く。

「まだ入ってきていない」

「どうもまどろっこしいな。下手したら、丸一日遅れのニュースを聞かされるんだから」

生馬が苛立たしげに言う。

「ともかく、行動指針はできたわけだ。兵力を集め、兵站を整え、情報を収集しつつ敵の出方を待つ。凜ちゃん、今回は付き合ってもらうよ。臨時だが、兵站局と補給局の顧問を務めてくれ」

拓海が、凜を見た。

「いいけど……兵站と補給とどう違うの？」

「あー、補給関連部局が大きくなりすぎたんで、便宜上ふたつに分けてるだけだ。兵站局には、武器を担当する兵器部、防具と被服を担当する装備部、それに衛生部がある。補給局には、食料部、宿営部、それに街道部と河川部がある」

「兵力結集までどのくらい時間がかかりそう？」

夏希は、拓海にそう尋ねた。敵の数が多い以上、こちらも数をそろえないことにはどうしようもない。

「高原次第だな。早くて七日。おそらくは、十日近く掛かるんじゃないかな。戦略的奇襲に成功されたんだから、後手に回るのは仕方がないよ」

拓海らの予測通り、タナシス船団の約五分の四が、ルルト市占拠完了直後に出航し、北方へと姿を消していた。ルルト市民が安堵し

たことに、タナシス占領軍の規律は高く、市民への暴行や略奪はほとんど行われなかった。しかしその代わりに、市民たちは食料の増産を指示された。住民は他地域への移動が禁じられ、一時的にせよ職を失った商業関係者や職人が集められ、郊外の田畑で働かされる。川船はすべて、船頭ごと徴用された。

タナシスの次の目標が、ルルト王族が避難した南方ノア川沿いにあるクートロア市であることは明白だった。

「第二陣到着。総兵力推定三万五千。クートロア市攻撃開始か」

夏希は渋い表情で、届いた報告書を眺めた。むろんまだ文字は読めないが、内容は駿が読み上げてくれたので、頭には入っている。

侵攻から七日目の晩である。タナシス侵攻船団主力がルルトを出航したのが二日目の朝。そしてこの報告を携えた急使がクートロアを発ったのが今日の夜明け前のことだから、タナシス側はたった五日で、一万五千以上の兵力をラドームから運び入れたことになる。

「状況を整理しよう。タナシスの軍勢は、西のオープア王国や東の東部諸国には手を出さず、クートロア市の制圧を優先している。現在のところ、クートロアを守る戦力は、ルルト国軍の残存兵力二千五百と、急遽編成された市民軍二千、それに駆けつけたワイコウ国軍一千だ。ちなみに、このワイコウ軍部隊はかの有名な救国の英雄、アタワン将軍が指揮を執っているそうだ」

笑みを湛え、拓海が説明する。

「タナシス軍がクートロアに差し向けた兵力は、推定二万。……まあ、ルルトに勝ち目はないな」

生馬が、言う。

「でしようね」

夏希は陰気に同意した。クートロア市は洪水防止用の高い堤防に囲まれているから、防衛戦には適しているはずだが、四倍近い兵力で攻められたらまず守りきれないだろう。

「注目すべきは、なぜタナシスがクートロア制圧を優先したかだ。普通に考えれば、もはや攻勢能力を失ったルルト国軍に止めを刺すより、いまだ無傷であり、ルルト海軍艦艇を加えて戦力を強化した海軍を持つオープアを先に潰しておいた方がいいはずだ。少なくとも、俺ならそうするがな。兵員輸送途中に洋上で襲われたら痛いし、オープアを屈服させればルルト市西側の防衛負担も軽くなり、兵力を節約できる。これをやらずにクートロア制圧を優先する理由は、三つしかないと思う。ひとつは、タナシスの戦略目的は……それが占領なのか懲懲攻撃じやぢぢこうげなのかは知らぬが……あくまでルルト王国ではない、という可能性。ふたつ目は、戦略目標がノノア川を遡った場所にある可能性。これならば、途中にあるクートロア市を占領しない限り、目的を達成できないからな」

「ワイコウの占領を狙ってるのか？ またなんで？」

拓海の分析に、生馬が眉をひそめる。

「わからんよ。あるいはもっと上流……ひよつとすると、平原を狙ってるかもしれないし」

「まさかね」

凜が、笑う。

「三つ目の可能性は、タナシスの最高指揮官が間抜けか、あるいは海岸諸国の情勢に疎いせいかもしれない。戦略状況を見誤っていれば、当然頓珍漢な戦略を選択するはずだからな」

「で、拓海はどれだと推測するの？」

夏希はそう訊いた。やはり軍事に関しては、彼がもっとも頼りになる。

「一番ありそうなのは三番目だな。いくらなんでも、ルルトに手を出せば他の海岸諸国も敵に回すことくらい承知しているはずだ。だから、ひとつ目の可能性は薄い。ふたつ目も、海岸地帯の植民地化ならともかく、タナシス王国がわざわざ膨大な費用を使ってまでして、ワイコウや平原に遠征軍を派遣する理由が見当たらない」

「まあ、クートロア陥落後に、タナシス軍がどう出るかで、結論は

出るね」

ずっと黙ってやり取りを聞いていた駿が、ぼそつと口を挟む。

「こつちの準備状況はどこまで進んだの？」

夏希は拓海に質問を放った。

「とりあえず予備大隊はすべて充足させた。市民軍一万がマリ・八に集結。あと一万も、各国家で編成を終えている。糧食の集積は、まだ終わっていない。川船の多くが、高原から兵力を輸送するのに使われているからな。前回の戦いでもそうだったが、湿原地帯で食料が補給できる場所は限られているし、その量もわずかだ。十分な兵站準備なしに大軍を北上させたら、飢えで自滅しかねない」

「川船といえば、新兵器はどうなったの？ 今回さつそく活躍できそうじゃない」

凜が言った。

「無理だよ。動員令のおかげで、建造中断になっちまった。あと少いで進水だったんだがな。仮に完成していたとしても、初陣がいきなり二百キロの川下りから始まるというのも無理がある。ま、今回は見送りだな」

残念そうな表情で言った拓海が、肩をすくめた。

夏希らの予想通り、クートロア市の攻防戦は一日で終わった。ルルト国軍は、ルルト王族を守ってクートロアを脱出、ワイコウの増援部隊も同様に同盟国の都市から退却した。市民軍の一部が脱出に成功したが、残りは武器を置き、タナシス軍に降伏した。

「いくつか興味深い報告が入ってきた。順に説明しよう。まずは、ルルト国王が平原共同体に庇護を求めてきた。王族を乗せた川船は、すでにワイコウを素通りして平原に向かっている。総会は開かれていないが、主要各国はすでに受け入れを表明している。次に、クートロア市を退いたルルト国軍とワイコウ国軍だが、いずれもワイコウ市に向かった。ここを拠点にして、抵抗を続ける目論見のようだ」

メモを片手に、淡々と駿が報告する。

「続いてオープア海軍からの報告だ。タナシス船団が、また消えた」  
「あちゃあ〜」

凜が、手のひらで顔を覆う。夏希も天井を仰いだ。これで、五日か六日後には、タナシスの兵員が一万五千ばかり増えるだろう。

「参ったな。ルルトとの戦闘で多少損耗しているとはいえ、現状で三万以上の兵力なのに、さらに増援となると、こちらの動員計画も見直さないとまずいぞ」

拓海が、唸る。

「敵も、策源地たるルルトの守備に一定の兵力は割かねばならんだろうし……こちらは最低でも五万五千は欲しいな。どうする？」

生馬が、拓海を見る。

「無理をすれば、平原で市民軍を集められるが、やりたくないね。

補給局が、五百名以上別枠で人を雇う必要があるし。集めるのに時間がかかるが、高原に頼むしかないよ。一万人増員だ」

「下手をすると、あと十日は掛かるぞ」

脅すように、生馬が言う。

「仕方ない。敵は市民軍を含んでいないんだ。錬度はそれなりに高いだろう。兵力的に劣勢のまま攻勢に出るのは無謀だ。ルルト国民には悪いが、もう少し我慢してもらおう」

侵攻九日目。クートロア市に若干の守備兵力を残置したタナシス軍は、推定一万八千の兵力で南下を開始した。

「いやいやいや。さすがにおかしいだろ、これは」

拓海が、呆れる。

外交部長として、各国の王族との折衝で忙しい駿を除く異世界人四人は、例によって拓海の執務室に集い、情報の収集と分析を続けていた。

「南下したってことは、タナシスの目的が、ワイコウの制圧だった

ってこと？」

夏希は拓海を見やってそう訊いた。

「かもしれないが……ワイコウを攻撃して、タナシスにどんな得があるってんだ？」

夏希と眼を合わせた拓海が、首を振る。

「とりあえずワイコウを陥落させ、そこを拠点に南からの反撃に対する守りを固め、あとからオープアと東部諸国を平らげる目論見かもしれない」

机上の地図を睨みながら、生馬が言う。拓海が、鼻を鳴らした。

「教科書無視の戦略だな。すでにオープアも東部諸国も市民軍の動員を終えて、がっちり守りを固めてるから、簡単には屈服しないぞ。こちらがワイコウにちょっかいを出せば、南方にもかなりの戦力を割かねばならないし。ルルトとワイコウの連合軍には、ルルト市を奪還する力はなかったのだから、先に主力でオープアを陥とし返す刀でクートロア市を占領した方が、はるかに楽だったはずなのに……」

「そのタナシス軍総指揮官に関しても、情報が入ってきたわよ。どうやら、指揮しているのはタナシス国王オストノフの次女、シエラエズ王女らしいの」

報告書をぴらぴらと振りながら、凜が言った。仕事の都合上、いつの間にか彼女もかなりこの地の文字を読めるようになったらしい。まあ、もともと凜の英語の成績は夏希よりもはるかに上だったから、言語センスが優れていたのかもしれないが。

「ほう。女性野戦指揮官か。夏希のライバル出現かな」

拓海が、茶化す。

「やめてよ。向こうは万単位の軍勢動かしてるのよ。わたしとは桁が違っわ」

夏希は顔をしかめた。まして向こうは超大国の王女である。こちららは、小国の一貴族に過ぎないのだ。

「次女か。親征の代理かな？ それとも指揮官としての才覚がある

のか」

生馬が、腕を組む。

「それが、関係あるの？」

「大有りだよ。指揮官の立場がわかれば、その足元を掬うような手を打てる。親征の代理であれば、面子を失うことには耐えられないだろう。だが、有能な野戦指揮官として、指揮権を付託されていれば、面子を失つても実利を取るだろう」

拓海が、説明した。

「だからこそ、拓海は参謀役に徹してるんだよな」

生馬が言う。

「ま、主たる目的は、軍隊の実権を握らずに作戦指揮を執りたいからだが。トップに立つちまうと、無用な責任が生ずるし、敵に研究されるしでいいことない。それに、俺たちが所詮は異世界人だということも忘れちゃだめだ。権力を握れば、警戒されるし妬まれる。今まで曲がりなりににもジンベルや平原の改革を進めてこれたのは、なるべく既得権益を侵さぬように注意深くやってきたからだ。どこかのマンガやアニメみたいに、既得権益侵しまくりに強引に異世界の改革などやらかしたら、良くて恨み買いまくって暗殺、悪けりや内戦突入だよ」

拓海が、苦笑いする。

「ストーリー的には、その方が盛り上がるからね」

ラノベ通の凜が、言う。

「そうか。みんなそれなりの地位に就いたけど、誰かを蹴落としたわけじゃないんだ」

夏希はここ半年の流れを思い出しながら言った。五人とも色々な肩書きを持ったが、その大半が、平原統合軍や平原共同体、人間界縮退対策委員会などの新設された組織のポストであったし、ジンベル防衛隊での地位も、市民軍隊長などという新たに設けられたものであった。夏希らのおかげで不利益をこうむった人は、ジンベルや平原の敵になつた人々を除けば、きわめて少ないはずだ。

「いずれにしても、タナシスの真意がわからんと、具体的な戦略を策定しづらいな」

拓海が、唸る。

「聞いてみれば？」

唐突に、凜が言った。

「聞く？」

「平原共同体はタナシス王国と直接交戦したわけじゃない。外交使節を送って、シエラエズ王女に会うのよ。何らかの情報は得られるはずだわ」

「いい案だが、かなり危険だな。問題は、誰を行かせるかだが……」

生馬が、組んでいた腕を解いて、顎を撫でた。

「駿じゃだめなの？」

夏希はそう言った。交渉ごとなら、彼が一番優秀である。

「もうすでに、平原共同体がルルト王族を庇護したことは知られているだろう。開戦に向けて準備していることも、当然悟られているにちがいない。外交部長を送り込むのは、リスクが大きすぎるな。もう少し、中立的な立場の者の方がいい」

拓海が、言う。

「中立的といえば……」

凜が、夏希を見た。

生馬も、夏希を見つめる。

「そうだな。人間界縮退対策本部は、平原各国と高原諸族の支援を受けてはいるが、政治的には独立した国際組織だ。武力はもっていないし、今回の戦争にも中立の立場を貫けるだろう。以前から、タナシス王国と接触しようとしていたのだから、南の陸塊にタナシス王族が来たのであれば、挨拶に行ってもおかしくはないな」

拓海が、にやつきながら言う。

「……捕まって処刑とかされたらどうするのよ」

「エイラとサーイエナと一緒に行ってもらえ。コーカラットとユニヘックヒューマが一緒なら、タナシスも無茶はしないだろう」

生馬が言う。夏希は逃げられそうにないことを悟った。

「……こんなことなら、賢者を続けていればよかった……」

「何か言ったか、秘書官？」

グリンゲは、傍らに立っているキュイランスを見た。

「何でもありません、大臣閣下」

青い顔をしたキュイランスが、つぶやくように答える。

「しっかりしろ。アタワン將軍相手にはったりをかましたことを思い出せ。お前は、自分で思っているよりも度胸のある男だ。安心しろ。タナシスは手荒な真似はしないはずだ」

「そうだといいんですけど」

グリンゲとキュイランス。今はワイコウ王国農務大臣とその秘書官となった叔父と甥は、川船の船首に立っていた。その後ろでは、一人の兵士が長槍の穂先に細長い白布を結びつけたものを、頭上に掲げてゆっくりと左右に振っている。軍使や交渉者の印である。

小さな川船は、ゆっくりとワイコウ川を下っていった。すでにタナシス軍は、王都ワイコウまで半日足らずのところまで迫ってきている。

「ふむ。どうやら見つかったようじゃな」

河岸に気配を感じたグリンゲは、視線を正面に据えたままつぶやいた。

「これ。落ち着かんか」

急にあたりをきよるきよると見回し始めたキュイランスを、たしなめる。

ほどなく、前方に川船が現れた。タナシス人が乗っていることを見て取ったグリンゲは、船頭に減速を命じた。十キツホほど離れたところで停船し、用向きを告げる。

「ワイコウ王国農務大臣グリンゲだ。国王陛下の命を受け、参った。タナシス軍指揮官にお目にかかりたい」

「承りました。ご案内しますので、当船のあとについてきてください」

細く吊り上がった眼のタナシス士官が、慇懃に言う。

一シキツホばかり下ったところで、タナシス船が河岸に寄った。上陸を促されたグリーンゲは、キュイランスを伴って岸に上がった。船頭や、護衛の兵士も船から下りるように要請される。どうやら、河岸にいてもらいたくないらしい。少しかり奥まったところにある野原に案内されたグリーンゲらは、そこでしばらく待つように告げられた。

「扱いが悪いですね」

キュイランスが、愚痴る。

しばらくすると、十数名の兵士が分解された天幕を持って現れた。慣れた様子で、野原に大きな天幕をいくつも立ててゆく。全員が、茶褐色の肌をした南の陸塊では見かけない人種であった。作業が終わったところで、指揮者らしい士官が、一行を小振りの天幕の中に招き入れた。グリーンゲらは、敷物の上に座って待った。しばらくすると、二人の兵士がお茶を運んできてくれた。今度は、高原の民のような白い肌の人種だった。

三十ヒネばかりのち、天幕に革鎧姿の中年男性が現れた。元軍人として、男性が高位の軍人であることを本能的に悟ったグリーンゲは、素早く立ち上がった。

「タナシス正規軍のランブーン将軍です。お待ちせしました、派遣軍総指揮官、シエラエズ王女殿下がお会いになられます」

中年男性……ランブーン将軍が、丁寧な口調で挨拶する。

「ワイコウ王国農務大臣グリーンゲです。将軍、秘書官を同行させてもよろしいかな？」

「ご随意に。しかしながら、護衛の方はご遠慮願います」

グリーンゲとキュイランスは、ランブーン将軍の案内で天幕を出た。いつの間にか、あたりにはタナシス軍兵士が二百名ばかり集まっていた。二ヒネほど歩み、ひときわ大きな天幕の前に出る。

「こちらで、王女殿下がお待ちです。どうぞ」

ランブーン将軍が、天幕の垂れ幕を持ち上げる。

「将軍。身を検めなくてよろしいのですかな？」

グリングゲは、少々驚きながら訊いた。彼もキュイランスも、ここまでまったく身体検査の類は受けていない。もちろん、身には寸鉄も帯びていないが、これではグリングゲがその気になれば小振りの剣くらいは持ち込めってしまうだろう。

「ワイコウは文明国でしょう。タナシスも、同様です。国王陛下の命令を受けていらっしやっただ閣下が邪な企みなどするわけがありません。それに、王女殿下は勇気あるお方です。どうぞ、お入り下さい」

ランブーン将軍が、薄く笑った。

67 タナシスの野望（後書き）

第六十七話をお届けします。

## 68 シェラエズ王女

「ワイコウ王国農務大臣グリングゲと申します。これは秘書官のキュイランスであります。拝謁をお許しいただいたこと、感謝の極みであります」

グリングゲは、深々と頭を下げた。

「派遣軍総指揮官、シェラエズ。ここは戦場です、グリングゲ殿。堅苦しい挨拶は省略しましょう」

シェラエズ王女が言って、薄く笑った。

なんとも印象的な人物であった。背は高く、グリングゲよりも頭ひとつ分は大きい。顔は典型的なタナシス人らしく、細く吊り上がった眼とすつきりと通った鼻筋の持ち主だ。まだ若い……二十歳を越えた程度だと思えるが、王族の血ゆえかかなりの貫禄を漂わせている。まとっている服は、身体に密着した薄手のもので、手足の筋肉がかなり発達していることが見て取れる。腰に吊っている長剣は、おそらくは飾りではないだろう。並みの兵士を越える腕前の持ち主だと、グリングゲは見当をつけた。

その王女の背後に寄り添って立つ二人の人物も、これまた印象的であった。向かって右にいたのは、高原の民のような白い肌と金色の髪を持つ女性だ。左側には、茶褐色の肌と黒い縮れ毛の女性。二人とも王女より若干背が高い。身なりは王女と同じような薄手のものだが、肌の露出がやや多い。左の腰には長剣、右の腰には短剣を吊っている。グリングゲは、この二人が筋肉を緊張させていることに気付いた。不用意に王女に近付いたりすれば、間髪を入れず抜刀され、斬り付けられることだろう。

「お座り下さい」

王女が言って、敷物を手で示した。

「恐れ入ります」

グリングゲは、王女が低い腰掛に座るのを待ってから、ゆっくりと

腰を下ろした。背後で、キュイランスも同様に敷物の上に座る。

「ワイコウとは面白い国ですね。農務大臣が、外交交渉に赴くとは」  
皮肉な笑みを浮かべて、シエラエズが言う。

「外務大臣は病に臥せっておりますゆえ、代理としてわたくしが派遣されたのであります」

グリンゲは、淡々と答えた。

嘘であった。

反力キ国王派の一員として活動し、外務大臣という要職を得た若手貴族は、タナシス軍接近の報告を聞くと、職務を放棄してさつさと西方にある自分の領地に引っ込んでしまったのだ。彼以外にも、大臣の多くが王宮から逃げ出した。今の国王は貴族連合の傀儡である。命がけで守ろうとする者は、きわめて少数であった。

「わたくしが、閣下のもとへ参ったのは他でもありません。平和を求めためです」

グリンゲは、慎重に切り出した。

「ワイコウ王国国民は、タナシスとの争いを望んでおりません。ワイコウに軍を進めるのを、中止していただきたい」

「わたしも南の陸塊を征服しに来たわけではない。そちらが当方の要求を呑んでくれるのであれば、兵は退こう」

意外にあっさりと、シエラエズ王女が譲歩する。

「ありがとうございます、閣下。して、その条件とは？」

「ふたつある。ひとつは、ワイコウにある魔力の源の譲渡だ」

「魔力の源、ですと？」

グリンゲは、おもわず頓狂な声を上げた。

「そうだ。それを、譲渡してほしい」

「恐れながら、ワイコウの魔力の源は、先だつての平原との戦争の結果、平原と高原の民が作った人間界縮退対策本部という組織に管理所有権が移っております」

「それは存じておる。しかし、いまだ王都内にあるのだろうか？ 魔力の移し替えをさせてくれれば、それでいいのだ」

「はあ」

グリングゲは、曖昧な返答をした。なぜシエラエズ王女は魔力の源を欲しているのだろうか？

「ふたつ目は、すべての川船の徴用、食料の徴発、船頭を含む作業用人員の提供だ。むろん、代価は払う」

グリングゲの当惑を無視するかのようになり、シエラエズが次の要求を告げる。

「まさか、平原へ攻め込むおつもりでは？」

「その通りだが」

「ということは、ジンベルと高原の魔力の源をも手に入れようとなさる？」

「これ以上は話せぬな。以上二点を受け入れてくれるのであれば、すぐに主力は引き上げさせよう。王都ワイコウには、魔力の源の移し替えを行うためのごく少数の部隊しか入れぬ。もちろん、ワイコウ王国の主権も侵さぬ。どうかな？」

シエラエズ王女が、誘うような笑みを見せる。妖艶、と言っにはちと色香が足りぬが、異国調の顔立ちと相まって、妙にあだっぽさを感じさせる笑みだ。

「ご提案、しかと国王陛下にお伝えします」

グリングゲは座ったまま深々と頭を下げた。

「明日の夜明けまでに返答をいただきたい。回答がない場合は拒否と看做す。よろしいか」

シエラエズが、面をあげたグリングゲの眼を真っ直ぐに見つめた。

「陛下はタナシスの提案を呑むおつもりでしょうか？」

アタワン将軍が、小声で告げる。

「だろっな」

グリングゲはうなずいた。ワイコウ国軍は現在千五百名。しかしながらいまだ再建途上であり、その実力は以前とは比べ物にならぬほ

ど低い。市民軍は最大一万程度動員できるが、こちらの士気も低いものにならざるを得ない。一万五千以上と思われるタナシス軍に攻め寄せられたら、三日と持たないだろう。

すでにグリーンゲは、シエラエズ王女との会見の様様を細大余さず、国王といまだ王都に残っている重臣たちに報告してあった。それに引き続いて会議も行われたが、全会一致の方針が定まらぬまま時間ばかりが過ぎ、いったん休憩となった。議論に疲れた人々は、王宮内の食堂で冷たい夜食を採っているところである。

今回シエラエズ王女が出てきた条件は、はなはだ魅力的である。……戦後のことを考慮しなければ。

魔力の源の確保が目的であるならば、いずれタナシス派遣軍は本国に引き返すだろう。そうなれば、タナシスに味方した国は糾弾される。ワイコウ王国は先ごろの戦争のように、周辺諸国すべてを敵に回すことになりかねない。前回はカキ国王をいわば生贄とし、その追放で強引に終戦に持ち込むことができたが、次は国が滅ぼされるかもしれない。

「わが国としては、タナシスと正面切って戦うわけにもいきませんが、平原やルルトを敵に回すわけにもいきません。そこで、閣下にお願したいのです」

アタワン将軍が、声を潜めて言う。

「国軍を割る、というのかな？」

「さすがグリーンゲ閣下。先が読めていらっしやる。その通りです。大部分の国軍兵士を率いて、平原共同体に亡命していただきました。たとえ一部でも、ワイコウ人がタナシス派遣軍と戦った実績を残せば、本国がタナシスに屈し協力したとしても、他国の心象はよくありません。どうでしょうか」

「その役目は、むしろアタワン閣下のものでしょうか。救国の英雄が、愛国の念に駆られて部下を率いて脱出、平原とともに戦う、というのは見栄えもいいですよ」

グリーンゲはそう提案した。

「いや、わたしは平原に伝がありません。閣下には、竹竿の君とも親しいキュイランス殿がいらっしやる。平原側も、快く迎えてくれるでしょう。この企み、平原に拒否されてはなりません」

「むづ」

グリンゲは唸った。どうやら、他に打つ手もなさそうであった。

「何度目かしらね。ノノア川下るの」

ぼんやりと河岸の風景を眺めつつ、夏希はぼやき気味に言った。繁茂する葦のような植物と、延々と広がっている沼地。重く湿気を含んだ空気をかき回すかのように、首の細長い鶴を思わせる優美な鳥が、その長大な翼を羽ばたかせて飛び交う。

今回の旅はきわめて少人数であった。夏希と二人の巫女。二匹の使い魔。唯一の護衛役としてアンヌツカ。川船を操るのは、二人の船頭だ。

「エイラ様あゝ。皆様あゝ」

川船上方で浮いていたコーカラットが、急に高度を落とした。

「どうしたの、コーちゃん」

サーイエナとおしゃべりをしていたエイラが、訊く。

「前方に、多数の川船を見つけましたあゝ。川を遡って来ますですう」

コーカラットが、相変わらずののんびりとした口調で、報告する。

「タナシス軍……にしては、早すぎるわね」

夏希は立ち上がって、前方を見やった。

「コーちゃん、悪いけどちょっと飛んで見てきてくれない？」

「承知しましたあゝ」

エイラの依頼で、コーカラットが前方偵察に出かける。

「おそらくは、ワイコウの船団でしょうね」

アンヌツカが、意見を述べる。

「ワイコウが陥ちたのかしら。ちょっと早すぎるような気もするけ

れど」

夏希は首をひねった。今日は侵攻十一日目である。昨日の段階で入ってきていた情報では、タナシス軍はワイコウ市の手前まで迫っている、ということだったが。

コーカラットは、五ヒネほどで戻ってきた。

「ワイコウの船でしたあゝ。全部で三十六隻ですうゝ。キュイランスさんもいらっしやいましたあゝ」

嬉しそうに、報告する。

「やはり、ワイコウからの脱出組ですね」

サーイエナが、言う。

「話を聞いておきたいわね」

夏希はそう言った。キュイランスならば、それなりに情報を集めているだろう。少なくとも、今どこにシエラエズ王女がいるのかぐらひは、知っているはずだ。

ワイコウ船団が近付いてくると、エイラが船頭に命じて船を河岸に寄せさせた。夏希は立ち上がり、キュイランスの乗っている船を捜した。てっきり難民が乗っていると思われたワイコウ船だったが、ほとんどの船が武装した兵士を載せていた。しかも、国軍らしく装備がきつちりと揃っている。

と、一隻の川船が夏希らの船に漕ぎ寄せてきた。船首に、キュイランスの姿がある。その船が、船頭の巧みな竿さばきで、夏希らの船に舷側を寄せた。

「お久しぶりです、皆様。さつそくですが、わたしの上司である農務大臣グリーンゲを紹介させていただきます」

深々と頭を下げたキュイランスが、傍らに立つ恰幅のいい老人を恭しく指し示す。

「グリーンゲです。よろしく」

眼光鋭い老人が、頭を下げる。夏希らは、改めてグリーンゲに名乗った。

「お噂はうかがっております。キュイランス殿を通じ、いろいろと

便宜を図っていただき、お礼申し上げます」

挨拶が終わると、夏希はあいまいな言い方で礼を述べた。グリンゲとキュイランスが平原に情報を流していたことは秘密である。部外者がいるところで詳細なことを口にするにはできない。

「恐れ入ります」

「それで、グリンゲ殿。ワイコウはどうなりましたの？」

エイラが、訊いた。

「圧倒的多数の敵に迫られ、国王陛下は臣民の生命を守るために中立を宣言し、タナシス派遣軍指揮官シエラエズ王女殿下の要求を呑むことを決定されました。わたくしはその前に、国軍を率いて王都を脱出、山道を伝ってノア川河岸に逃れ、事前に集積してあった川船を使い、平原を目指している途中です。平原共同体の許可をいただければ、このまま義勇軍として平原共同軍の指揮下に入り、タナシスの侵略軍と戦い続けたい所存です」

力強く、グリンゲが言い切る。

「見事なお覚悟です、グリンゲ殿」

エイラが、珍しく感激の面持ちで言う。

「わたくしは平原で政治的な公職には就いてないゆえに、確かなことは申し上げられませんが、平原の民は皆様を歓迎すると思います。ワイコウ奪還のために、力を合わせましょう」

「派遣軍の要求を呑んじゃったら、中立とは言えないと思うんですけど……」

夏希は小声で突っ込みを入れた。

「夏希殿。グリンゲ殿のお立場も考慮してさし上げてください」

サーイエナが、言う。

「そうね」

中立などと称しているが、実質的には派遣軍に対しワイコウは降伏したのだ。一戦も交えずに屈したことを、他国に非難されないうちに、あえて中立宣言と強弁しているのだろう。グリンゲがこうして国軍を率いて脱出し、平原共同軍に加わろうとしているのも、ワ

イコウ王国が決してタナシス王国の味方になつたわけではない、というアリバイ作りに違いない。ちよつと状況が違うが、関が原の時の真田家のように、二股をかけた、というところだろう。

「ところで皆様は、どちらへ行かれるのですか？」

キュイランスが、訊く。

「人間界縮退対策本部代表として、シエラエズ王女殿下に会わせていただくこと」

「王女殿下なら、おそらくノア川とワイコウ川の合流地点あたりにいらつしやると思います。平原侵攻準備の真つ最中でしょう」

「平原侵攻準備？ タナシスが、さらに南下するのですか？」

「そのとおりです」

グリーンゲが、深くうなづく。

「シエラエズ王女の要求のひとつが、ワイコウから川船と食料、それに船頭を含む作業用人員の徴発でした。ルルト方面からの追加の兵員を合流させたら、派遣軍は南下を再開するでしょう。次の目標は、平原の入口たるマリ・ハの攻略です。当面の戦略目的は、ジンベル王国ですから」

「なんですって？」

夏希は驚いた。ジンベルのような小国が、戦略目標になるのだろうか？

「どういうことですか、グリーンゲ殿？ なぜジンベルが、タナシス軍に狙われるのですか？」

「シエラエズ王女の目的が、魔力の源の奪取にあるからです」

「本当ですか？」

サーイエナが、驚きに目を瞪る。

グリーンゲが、やや声を潜めてシエラエズ王女との会見の模様を語った。

「で、ワイコウは魔力の源をタナシスに譲つたのですね？」

夏希は確かめた。グリーンゲが、うなづく。

「まず間違いなく」

「どついつことでしょうか？」

サーイエナが、エイラの顔を見る。

「わかりませんわ」

「どうせシエラエズに会いに行くんでしょ。訊けばいいじゃない」

夏希はそう言った。

「それもそうですね」

サーイエナが、うなづく。

「グリーンゲ殿とキュイランスさんは、このままマリ・ハマで行って、情報を駐屯している共同軍に伝えてください。わたくしたちは、予定通りシエラエズ王女を探します」

エイラが告げた。

「わかりました。ご幸運をお祈りします」

グリーンゲとキュイランスが、深く一礼する。

「……というわけで、グリーンゲ大臣とキュイランスのおかげでタナシス派遣軍の戦略が判明した。現在の段階での戦略目標は、ジンベル王国だ。当然、当面の戦略目的は平原の入口であるマリ・ハの制圧と、マリ・ハとワイコウ付近、およびルルト間の兵站線の確立になるだろう。我々は、それを阻止しなければならぬ」

地図をテーブルに広げ、拓海が言う。

「なぜタナシスは魔力の源を欲しているんだ？」

生馬が、訊く。

「わからん。国内にあるものが枯渇したのかもしれない」

「七つ集めると龍かなにか出てきたりして」

凜が、冗談めかして言う。

誰も笑わなかった。

「あー、ちよつと思っただが」

生馬が、小さく拳手した。

「タナシスが、人間界縮退問題を解決する方法を見つけた、という

可能性はないかな」

「なるほど。それには、もっと魔力の源をそろえる必要がある、とか」

凜が、推測する。

「だとすると、わざわざ金と時間を掛けて南の陸塊へ侵攻してきた理由がないだろう。こちらの縮退問題担当部局が書簡を送ったんだから、事情はわかってるはずだ。返書や使者を送って、協力を要請すればいいのに……」

そこまで言った拓海が、急に顔をこわばらせた。

「あー、もしかして、このタイミングで侵攻が行われたってことは

……」

「たぶんそうだろうな」

駿が、陰気にうなずく。

「どういうことだ？」

生馬が訝しむ。

「そうか。生馬、タナシスが南の陸塊に魔力の源があることを知らなかった、と仮定してみたら？」

理解したらしい凜が、言う。

「……なるほど。届いた書簡で、こちらの魔力の源の数や位置を知ったタナシスが、それを奪取するために侵攻準備を行ったとすれば、時期的にも符合するな」

生馬が、顔をしかめる。

「侵攻の引き金を引いちゃったのは、俺たちの活動かも知れないわけだ」

そう言った拓海が、引き攣ったような笑みを見せた。

「まあ、それはあくまでも推測だよ。仮に、本当だったとしても、とりあえず黙っておこう」

なだめるように、駿。

「そうだよ。起こってしまったことは仕方がないもの。大事なのはこれからの対策よ」

凜が、自分に言い聞かせるように言う。

「……なんか、最近反省してはっかかりだな。気を取り直していくぞ。こちらの戦略は三択だ。前進し、湿原地帯で迎撃する。マリ・八前面で戦う。マリ・八を放棄し、敵を平原へ引きずり込んで戦う」

地図を指差しながら、拓海が説明を始めた。

「第三案はまずいね。平原そのものが戦場になれば、平原共同体が政治的に揺らぎかねない」

駿が、指摘する。

「だな。一番準備に時間を掛けられるし、軍事的には優れた選択だが、政治的には採用しにくい。タナシス派遣軍は今のところ、きわめて堅実に前進を続けている。ルルト市を押さえ、クートロア市を占領し、ワイコウを補給基地化した。マリ・八を明け渡したら、すぐに策源地化するだろう」

「安全なのは、第二案か」

生馬が、唸る。

「安全だが、政治的にはこれもまずい。もう十日以上経つのに、こちらの戦果はまったく挙がっていないんだ。なるべく早期に開戦し、それなりの戦果を挙げないと、士気を維持できない。各国に、平原共同軍が役立たずと見られるのも困る。そこで、二段構えの戦略で行きたい。まず主力を用いて、湿原地帯南部で迎撃する。ここで大勝し、敵が逃げ帰ってくれば万々歳。決定的勝利が得られなかった、または敗北した場合は、マリ・八の北、平原への出口付近で迎撃する」

「策はあるのかい？」

駿が、訊いた。

「一応は。湿原では、ノノア川の支流に川船を入れて、敵を分断しつつ、側面から叩く作戦で行く。マリ・八では土木工事を行って、堅固な防塞を造る予定だ。そうそう、凜ちゃん。すまんがハナドールの船大工、強制徴用させてもらおうよ」

「いいけど……川船の増産でもするの？」

「いや。秘密兵器を突貫工事で完成させるんだ。マリ・八正面での戦いに必要だからね」

そう言った拓海が、いわくありげににやりと笑った。

68 シェラエズ王女（後書き）

第六十八話をお届けします。

夏希ら『人間界縮退対策本部代表団』を乗せた川船は、湿原地帯を抜けたあたりでタナシス軍偵察隊によって停船を命じられた。それに素直に従って身分を明かし、訪問意図を告げる。

そこから先は拍子抜けするほどほとんど拍子に進んだ。案内の士官が川船に同乗し、少しばかりノア川を下ったところで上陸する。新たに付けられた護衛の一隊に守られて、川沿いの道を歩む。ほどなく、一行は天幕がいくつも張られた野原に出た。すでに連絡がなされていたらしく、夏希らはすぐにシエラエズ王女の天幕に案内された。

エイラ、サーイエナ、夏希の順に天幕の入口をくぐる。アンヌツカと二匹の魔物は、もちろん留守番である。

「ようこそ。わたしが派遣軍総指揮官シエラエズだ」

天幕の中で待っていた二十歳過ぎくらいの女性が、男っぽい口調で言う。身長は、夏希よりわずかに低い程度で、この世界の女性としてはかなりの長身だ。吊りあがった眼と面長の顔立ちは、ハリウッドあたりが好む『東洋系美人』の典型に近いだろうか。遅しい腕と薄物の衣装、腰に吊った細身の長剣、そしてその顔立ちから、夏希は古いアメコミあたりに出てくる海賊の女性頭目を連想した。

シエラエズ王女の後ろに立つ護衛役らしい女性剣士二人も、これもまたアメコミの登場人物を思わせた。王女よりも背が高く、一人はやや顔が大きく、髪は金色。もう一人は茶褐色の肌で、頭部が小さく顎がやや前に突き出ている。アフリカ東部あたりの人種に近いだろうか。

挨拶と自己紹介を済ませた夏希らは、シエラエズの勧めに従って敷物の上に腰を下ろした。腰掛に座った王女が、心持ち身を前に乗り出し、口を開く。

「さて。用件は、そなたらが所有している魔力の源の譲渡に関して

でよろしいのかな？」

いきなりそう問われ、夏希は硬直した。

「遺憾ながら、殿下。当委員会が所有している魔力の源は、ワイコウにあるものだけです。他の物は管理はしておりますが、その所有権は対策本部にはございません」

エイラが、例によって無表情のまま答える。

「そうか。それは残念だな。もうそなたたちも気付いておるだろうが、わが派遣軍の目的は南の陸塊に存在する魔力の源の確保にある。派遣軍はすでにワイコウ政府の許可を得て、ワイコウにあった魔力の源を押収し、魔力の移し替えを行った。悪いが、対価は払わぬつもりだ。戦利品、と看做してもらいたい」

うつすらと笑みを湛えたシエラエズ王女が、言う。

「当委員会は、平原各国および高原諸族の助力を得ておりますが、政治的には独立した国際組織です。今回の紛争にも、局外中立を貫いております。タナシス王国とも、事を構えるつもりは毛頭ございません。魔力の源を返してはいただけませんでしょうか？」

「悪いが無理だ」

エイラの願いを、シエラエズがにべもなく断る。

「しかしそれでは、文明国家たるタナシス王国が国際秩序の安定や戦争の慣習を重視しない、ということになりはしませんか？」

サーイエナが、ややきつい口調で言葉を差し挟んだ。

「たしかにな。だが、そなたらがそう抗弁するのであれば、この場で人間界縮退問題対策本部をタナシス王国の敵と宣言することもできるのだぞ？ それは望むまい」

笑みを湛えたまま、シエラエズ王女が静かに言う。

「殿下。なぜ貴国は魔力の源を欲しているのでしょうか？」

夏希は訊ねた。

「もちろん、人間界縮退を防ぐためだ。そなたらが気付くよりもはるか以前に、わがタナシス王国は人間界の縮退を察知し、その観測と研究を行ってきたのだ。今のところ、効果的な対策は魔術の使用

抑制しかない。そこで、魔力の源をわが国が一元管理することに決めたのだ。平原および高原にある魔力の源を確保し、これをタナシスに持ち帰ることが、わたしに課せられた使命なのだ」

「殿下。すでに平原でも高原でも、魔力の使用は原則的に行われておりません。人間界縮退対策本部は、貴国と協力してこの問題に対処する用意があります」

エイラが、毅然たる態度で告げる。シエラエズ王女が、首を振った。

「信用できぬ。大国であり、もつとも進んだ文明国であるわが国こそ、魔力の源の管理者に相応しい。平原各国と高原諸族は、ぜひ魔力の源を我々に譲渡してもらいたい。それが、人間界縮退を止める唯一の理性的な手段だ」

「しかし、そのために戦争を起こすなど……」

「人間界が消えてなくなるよりははるかにましではないか。平原と高原に戻り、国王や族長に伝えてほしい。速やかに魔力の源を譲渡するように。そうすれば、派遣軍はすぐにも撤収し、二度と南の陸塊の領土に足を踏み入れない。お判りいただけただけかな？」

うつすらと笑みを湛えて、シエラエズ王女がエイラを真っ直ぐに見据えた。

「譲渡を拒否した場合はどうなりますか？」

王女の返答は予想がついたが、あえて夏希はそう訊ねた。

「もちろん、派遣軍の全力を持って攻め込み、奪取する。その能力は十分にあるからな」

笑みを深くしたシエラエズ王女が、夏希を一瞥して言い放った。

「ともかくこれで、タナシスの目的ははつきりしたわけね」

ノノア川を遡る川船の中で、夏希は言った。

「動かせる魔力の源があれば、魔力を移し変えることによって、ジッベルの魔力の源を隠すことが可能なのですが」

エイラが、唇を噛んだ。

「ニヨキハン殿に、お借りしましょうか」

サーイエナが、魔界の賢者の名前を口にする。

「簡単には貸してくれないでしょうね。それに、貸すことは人間同士  
の争いに加担することになるのではないのでしょうか」

エイラが指摘する。

「ねえ、エイラ。魔力の源って、その容量みたいなものに、制限は  
あるのかしら？」

夏希はそう訊ねた。

「推測ですが、元からあつた魔力の量は超えられないのではないで  
しょうか」

「つまり、皮袋みたいなもので、その持てる魔力には限度があると」

「そうですね」

「サーイエナも、同じ意見？」

「もちろんです」

「じゃ、ジンベルの魔力の源は、今現在どのくらい魔力を蓄えてい  
るのかな？ 半分くらい？」

「その大きさが、蓄えている魔力の量を現しているわけですから…

…伝承による昔の大きさを勘案すると…七割程度でしょうか」

可愛らしく小首を傾げて、エイラが答える。

「サーイエナ。高原の魔力の源は？」

「そうですね。八割くらいではないでしょうか」

やや眉をしかめるようにして、サーイエナが答えた。

「じゃ、ワイコウのものはどの程度かな？」

「見た感じ、ジンベルのものと大きさはたいして変わりませんでし  
たから、七割程度でしょうか」

エイラが、推測する。

「なるほど。タナシスが派遣軍を組織してまで、必死になって魔力  
の源を求めている理由が、やっと判ったわ」

夏希はにやりと笑った。

「どついつことですか？」

「ニヨキハンによれば、タナシスにある魔力の源は三つ。そして、ワイコウの魔力の源を移し替えたということは、そのうちのひとつは確実に魔力を使い切ってしまったっていて、ワイコウまで持つてくることができた、ということよ。すべての魔力の源の容量が同じだとすると、他の二つもかなり少なくなっているんじゃないかしら」

「妥当な推論ですね」

エイラが、うなづく。

「つまりこれは、安全保障問題なのよ。高原よりも早くタナシスが人間界縮退に気づいたということは、すでにタナシスでは高原より大きな被害が出ているはずだわ。そして、すでにタナシスの保有する魔力の総量は少ない。つまり、人間界縮退に対して打てる手がほとんどない状態なのよ」

「大国タナシスの命運を、わたくしたちが握っているということですか」

サーイエナが、言う。

「そう。南の陸塊で魔力が無駄遣いされれば、タナシスは危機に陥る。だから、軍事力を行使してでも魔力の源を確保しなければならぬ、と考えれば、辻褄が合うもの」

「でも、シエラエズ王女はそのことをことさら隠そうとはしていませんでしたね。タナシスの命運が、こちらの手に握られているというのに」

エイラが指摘する。夏希はうなずいた。

「こちらが折れると読んでいるのか、あるいは軍事力の優位に自信があるのか。ま、政治的判断は平原共同体に任せましょう。今は一刻も早く戻って、報告することだけ」

「夏希の分析が正しければ、派遣軍は高原まで攻め込むということだな」

生馬が、無精髭の浮いた顎を撫でた。

「それだけの能力があるのかしら？」

凜が、訝る。

「タナシスはすでにワイコウの魔力の源を確保しているんだ。ジンのベルのそれを確保しただけでも、とりあえずの目的は達成できるだろう。実際問題として、高原までの侵攻は無理だろうな。長大な兵站線を維持できないよ。平原に踏み込んでしまえば、兵站線を守るためには面的な制圧が不可欠だが、さすがにそれだけの兵員数はない。本気で高原侵攻を行うとすると、最低でも十万の兵力が必要だろう」

拓海が、そう分析してみせる。

「和平という選択肢はないかしら。タナシスも人間界縮退問題に苦慮しているのだから、対策本部とタナシス王国が等しい量の魔力を保有する、とか」

凜が、訊いた。

「その気があるのならば、対策本部の使節にしかるべき提案があったはずだけどね。ところが、与えられたのは、事実上の最後通牒だ」

駿が、笑った。

「いずれにしても、共同体総会の判断待ちだな」

拓海が、唸る。

「戦争準備はどうなってるの？ わたしが留守のあいだ、ちゃんと進んでた？」

夏希は、拓海と生馬をかわるがわる見た。

「順調だよ。とりあえず四万八千集めた。兵站要員に市民五千。高原からは、さらに二万増派の確約を得た。時間はかかるけどね」

拓海が答える。

「どのくらいの敵が攻めてくるのかしら」

「ルルトやワイコウからの情報を総合すると、今のところ、敵総兵力は陸戦要員五万、水夫や水兵二千五百から三千、と見積もられる。おそらくは、四万から四万五千程度が来るだろうな」

「凄まじい数だね」

駿が、肩をすくめる。

「質はどうなの？」

「グリングゲ將軍の話では、かなり錬度は高いらしい。別のルートで入手した情報によれば、タナシス正規軍が五分の二程度、自治領軍と公国軍が五分の一ほど。残りが奴隷軍らしい。装備は、長槍と弓、それに薙刀なぎなたみたいな長柄刀ちやうへいとうを持った重装歩兵と、幅広の曲刀を装備した軽装歩兵、それに弩いしゆみだそうだ」

「驚って、昔の中国を描いた映画に出てくる、ボウガンみたいなやつだっけ？」

夏希は首を傾げつつそう訊いた。

「タナシスが使っているやつは、古代中国のものよりは洗練されているようだがな。いずれにしろ、連射速度は普通の弓に劣るが、直射での射程と威力には勝る。野戦では、あまり使い勝手のいい兵器ではないはずだ。敵はこれを奴隷軍の主要装備として使っているようだ」

「で、こちらの作戦は？」

「予定通り、湿原地帯南部で迎撃する。候補地は、ここだ」

拓海が、机上の地図の一点を指した。マリ・八から、さほど離れていない位置だ。

「ノア川の東岸にリモエス、という小さな村があつて、その少し下流にタホ川という支流が西から流れ込んでいる。タホ川のやや上流には大きな沼があつて、そこに川船を待機させることができる。北からノア川沿いに伸びていた街道は、いったん西側に膨らんでタホ川に掛かる橋を通過してから、再び東寄りに向きを変え、ノア川沿いに戻る。そしてその先には、大きな丘がある。リモエス村の南方はジャングルと沼沢地で、通行は無理だ」

「なんだか、ややこしい地形ね」

頭の中で地図を描いたのか、あらぬ方を睨んだ凜が、眉をしかめる。

「あとで図を描いてやるよ。わが主力はその丘の上に布陣し、街道およびノア川を南下する敵を迎撃する姿勢を見せる。敵は、こちらの思惑が丘上からの攻撃にあるものと見て、タホ川の北に戦力を集結させるだろう。正面から攻撃、あるいは川沿いに突破を図る、または大きく西へと迂回を図ることを意図してね。とにかく、その注意は南側に向けられるはずだ。そこで機を見て、突撃連隊を主力とする精鋭を川船でタホ川を使い突っ込ませる。できれば、敵の半数程度がタホ川の南へ渡った時点が望ましいね。主力も丘を降りて攻撃開始。あそこの橋は細いからね。南と西から圧迫し、兵力差で押し切る」

「タイミング次第の作戦だな」

生馬が、唸った。

「生馬には、突撃連隊と正規大隊五個すべてを預ける。これで、敵の側面を衝いてくれ。夏希、あんたには出来るいい市民軍五千と、高原戦士一万を任せる。これで西側から回り込み、生馬と連携してくれ。俺は主力を指揮して、南から攻める」

「ねえ。それならタホ川に掛かる橋をあらかじめ落としておいたほうがいいんじゃないの？ 時間も稼げるし」

夏希はそう献策した。拓海が、首を振る。

「いやいや。この橋が、中途半端に立派な橋なのが、本作戦の重要なポイントなんだ。二人の兵士が並んで走れるくらいの幅がある。おおよそ、一分間に四百から五百名は渡れるだろうな。これ以上立派な橋なら、短時間で大兵力が渡れてしまうからこちらとしてはやりにくくなるし、細い橋ならば橋頭堡の確保に時間が掛かるから、敵は事前に仮設橋を建設するだろう。あらかじめ橋を落としてしまえば、当然複数の仮設橋を掛けてから北岸への進出を試みるはずだ。一分間に五百名とすると、四万の兵力が渡河するには八十分。分断撃破を狙うには、ちょうどいい」

「うーん。うまく行くかしら」

夏希は首を傾げた。兵員数はこちらの方が上だが、総合的な質は

タナシスの方が高いだろう。拓海が集めた四万八千の兵士のうち、プロの兵士と言えるのは六分の一程度。あとは訓練不十分の市民軍と、きわめて勇敢だが戦争慣れしていない高原戦士なのだ。

「難しいところだな。ま、第二の策としてマリ・八の方で防塞構築を進めてるし、例の秘密兵器の建造もどうやら間に合いそうだし。そうそう、船名を決めなきゃならないんだが……なんかいいアイデアないか？」

拓海が、他の四人を順繰りに見る。

「船名ねえ。適当でいいんじゃないの？」

凜が、面倒くさそうに言う。

「軍艦だから、人名か地名か、あるいは勇ましい形容詞とかだね」

駿が、言った。

「人名か。戦国武将名とか、どうだ？」

鼻息を荒くして、生馬が提案する。

「この世界の人からななきゃ意味ないような」

夏希は苦笑いした。

「何隻かあるのなら、平原の地名でもいいと思うが、一隻だけじゃ難しいねえ」

駿が腕を組む。

五人はしばらくアイデアを出し合ったが、全員が気に入るような名は出てこなかった。

「もう、名なしでいいじゃない」

話し合いに飽きたのか、凜がそう言い出す。

「いやいや。正式名称がないと、指揮統制の際に困るだろう」

拓海が首を振る。

「いっそのこと、恥ずかしい名前にしようか。友情、とか、友愛、とか」

にやにやしなから、駿が提案する。

「待った。動物の名前はどうか？」

ふと思いついた夏希はそう訊いた。

「猛虎とか大鷲とかか？ それもけっこう恥ずかしいな」

生馬が、笑う。

「それじゃ、この世界の人にわからないじゃないの。高原に、セレンガっていう猛獣がいるの。雌ライオンに似た美しい獣よ。これなら、平原の民でも噂くらい聞いたことがあるはずよ」

「そうか。その手があつたか」

拓海が、ぱしんと両掌を打ち合わせた。

「セレンガなら、高原の民は皆ある程度の敬意を持っている。平原でも、知られた名だろう。いい名前だ。気に入ったぞ」

「高原通の拓海が言うのなら、問題ないだろう」

生馬が賛成する。駿と凜からも、異論は出なかった。

69 命名（後書き）

第六十九話をお届けします。

「ここまでは予定通りだな」

腕組みをした拓海が、満足げに言った。

平原北端の都市国家マリ・八から北に約二十五キロメートル。ノア川西岸にある差し渡し千二百メートルほどの丘の上に、平原共同軍主力は陣取っていた。共同軍予備大隊五個二千名、各国の防衛隊二千名、市民軍一万五千名、高原戦士二万五千名、それにワイコウの亡命軍一千名の、合計四万五千名である。

「なんとか間に合ったわね」

あたりの地形を確認しながら、夏希はそう応じた。

丘の北側には、丈の低い草が生えている鮮やかな黄緑色の平地が広がっている。一キロ半ほど離れたところを、南南西方向から東に流れ来て、ノア川に注ぎ込んでいるのは、タホ川だ。川幅は広くはないが、水量は豊富なので、川船の通行には支障がない。

この付近でタホ川に掛かっている橋は、一本だけ。ノア川との合流点の一キロほど上流で、兩岸に岩場があつて川幅が狭まっている地点に、細い木橋が掛けられている。それまでノア川西岸に沿うように南下してきた街道は、少し手前で西側に逸れて、この木橋を通り、ふたたび東寄りに方向を変え、ノア川沿いに戻る。

タホ川の上流方向には密林があり、見通しは悪い。さらに上流には大きな沼があり、そこにはすでに五十隻を越える川船と、ほぼ同数の筏が隠してあつた。生馬率いる突撃連隊千名と、共同軍正規大隊五個二千名も、待機中だ。

夏希は右方に視線を転じた。東岸に見えるリモエス村は、戸数三十ほど。その南側は、河岸まで密林に覆われているので、タナシス派遣軍が東岸から迂回するのは不可能だ。街道が走っているノア川と丘に挟まれた平地は幅が狭く、無理やり通り抜けようとするれば丘上に陣取った共同軍部隊に横撃されるのは必定である。丘の

西側は、湿地であり部隊の移動は困難だ。タナシス派遣軍が南下を続けようとするならば、この丘上に陣取った共同軍を正面から打ち破る必要がある。当然の策として、木橋を渡り、タホ川南岸で陣形を整えようとするだろう。だがこちらは、タナシス側がすべての兵力を渡河させぬうちに生馬率いる精鋭三千にその側面を衝かせ、さらに主力が丘を降りて迫るといふ作戦を目論んでいる。すべてうまく行けば、敵主力はノア川とタホ川が形作るコーナーに追い込まれ、自滅するだろう。

「よい場所に布陣したな、敵は」

偵察員が描いた地図を眺めつつ、シエラエズ王女が口の端を歪めて微笑した。

平原と高原の軍勢は、要衝と言つべき丘の上にいる。その数、推定で四万以上。迂回するルートはないから、シエラエズはこれを正面から打ち破らねばならない。

タナシス軍部隊は、五百名からなる『団』という編成を多用している。正規軍や各公国および自治領から供出させた団の場合、百名からなる軽装歩兵、重装歩兵、弓兵各一隊と、槍兵二隊が基本である。奴隷部隊には、歩兵団と弩兵団の二種類がある。前者は軽装歩兵四隊と弓兵一隊の混成、後者は五つの隊がすべて弩兵で構成されている。

シエラエズ王女の手元にある兵力は、正規軍三十団、公国軍十四団、自治領軍十二団、奴隷歩兵十六団、奴隷弩兵十八団。総計四万五千である。奇しくも、丘上に布陣する共同軍とその規模はほぼ同一であった。

「いかなさいますか、殿下」

ランブーン将軍が、訊く。

「むろん、今日中に丘上を叩く。川船隊はこの村まで前進させる。

奴隷歩兵二団をこの支流沿いに西へと向かわせなさい。正規軍五団

で橋を確保。状況を見極めたうえで、主力が渡河を開始します」

「承知いたしました。して、丘攻略の策は？」

「ない」

問われたシエラエズが、笑顔で言い切った。

「質で量に対抗するしかあるまい。とにかく、川向こうに布陣することだ。戦を始めるのは、そのあとだな」

シエラエズの指が、二本の線で表された地図上のタホ川を、とんとんと叩く。

「来た来た。読み通りだな」

望遠鏡を覗きながら、拓海が言った。

夏希も自分の望遠鏡を覗いた。タホ川に掛かる木橋のあたりに、タナシス兵が湧き出しつつある。

今回の戦いで総指揮を執るのは、平原共同軍司令部のトップでもあるスロン人の將軍である。副指揮官は、高原戦士の代表だ。序列から言えば、拓海は上から五番目あたりにいたが、すでに総指揮官から最前線で差配する許可は得てある。

「伝令。赤い旗を一本減らせ」

望遠鏡を下ろした拓海が、控えていた伝令に命じた。

丘上の陣内には、十数本もの色鮮やかな旗竿が立つている。生馬への合図は、この中の何本かを下ろすことによって為される。敵に、罨を仕掛けていることを悟られないための用心である。いきなり合図のために大きな旗を振ったりしたら、怪しまれるだけである。

「じゃ、そろそろわたしも配置につくわ」

夏希は快活に言って、拓海に手を振った。

「任せたぞ」

拓海が手を振り返す。

今回夏希に預けられた兵力は、市民軍五千と高原戦士一万、それ

にワイコウ亡命軍一千の、計一万六千である。生馬の部隊が敵側面を衝くのと呼応し、いち早く丘を下って南西方向から敵を突き崩すのが任務だ。

アンヌツカを伴って、預けられている部隊に戻る。すでに全員が装具を身にまとっているが、胄は被っておらず、地面に座り込んだ状態で休息している。各所には水を満たした木桶が置かれていて、自由に飲めるようになっていた。この気候である。十分な水分補給をせずに走り回ったら、すぐにぶっ倒れることになりかねない。

夏希は、高原戦士を指揮するベンデイスと、ワイコウ亡命軍を率いるグリンゲを手招いた。さすがに今回派遣されてきた高原戦士は数が多いので、その総指揮官には族長クラスの大物が任命されている。ベンデイスの序列は、高原の副指揮官に次ぐ三番目であった。

「打ち合わせ通りいきます。先陣がグリンゲ殿。次がベンデイス殿。最後に、わたしの部隊」

夏希は部隊を三つに分けていた。ベンデイスが直卒する弓隊を中心とする高原戦士五千。グリンゲが率いる、ワイコウ亡命軍一千と投げ槍隊を主力とする高原戦士五千。そして、夏希が指揮する槍隊中心の市民軍五千。弓で援護された投げ槍隊が接近し、槍を投擲。陣形が崩れたところで槍隊が横合いから突っ込む、という段取りである。

高原戦士の投げ槍兵の防具は、以前は革の胴鎧だけだったが、平原の兵士に倣って小札鎧を採用したうえに、平原から輸入した金属胄も徐々にではあるが普及し始めていた。四十センチ四方くらいだった角盾も、矢避けのために長さ七十センチほどのものに取り替えられている。弓に対する耐久性は、かなり向上していた。

「ところで、彼は大丈夫？」

グリンゲの耳に口を寄せて、夏希はそつと訊いた。

「いまのところ、気を失ってはおりませんな」  
くすくすと笑いながら、グリンゲが答える。

どのような意識の変化があったのかは知らぬが、あのキュイラン

スが一兵士として従軍を希望したのである。一応グリンゲの副官扱いになっているが、はたして戦場で役に立つのかどうか……。

「まあ、鈍い奴ではないので、足手まといにはならんでしよう。では、失礼しますぞ」

からからと笑ったグリンゲが一礼し、指揮する部隊の方へと戻ってゆく。ベンデイスも、一礼してから歩み去った。その後ろ姿を見送りながら、夏希は自分もつい半年ほど前までは、ど素人であったことを思い出した。人を殴った経験さえなかった女子高生が、いまではいっぱしの軍人気取りで、一万六千の兵を率いて、こうして戦場に立っている。

「慣れとは恐ろしいものね」

夏希は冷笑を浮かべた。数十分後には、自分も戦場へと飛び込んでいるはずだが、精神はいたって平常かつ平静である。怯えも、興奮も皆無だった。

樹上の見張りが、大きく腕を振り回す。

拓海からの合図を見て取ったのだ。

「行くぞ」

生馬は前進を命じた。すでに、戦闘序列に関しては詳しく取り決めてある。沼地に待機していた川船と筏の群れが、整然と夕木川に入り、これを下り始める。

生馬が手ずから育てた突撃連隊一千名と、共同軍の常備兵力である正規大隊五個二千名。いまだ訓練不足ながら、質的には南の陸塊で最も優れた戦士集団である。

川船の舳先が、やや濁った水を掻き分ける。今回、専門の船頭は連れてきていない。敵中へ殴りこむ以上、兵士以外では生き延びられない可能性が高い。

航行を続けながら、生馬は兵士たちに主に北岸を警戒させた。シエラエズ王女にまともな軍事知識があるならば、渡河地点の側面を

守るために川沿いに警戒部隊を派出しているはずだ。

豊富な水量に助けられ、総計百を越える川船と筏の群れは順調にタホ川を下っていった。生馬は南岸を注視した。上陸予定地点は、昨日下見した段階ですでに六箇所選定し、その位置は頭の中に叩き込んである。迅速な上陸を行うために、実際に使用するのは三箇所だけで、それぞれ千名ずつ上陸する手筈だ。なるべく東にある上陸地点を使用することが望ましいが、敵の抵抗などでそれが難しい場合には、順次西側へとずれた上陸地点を利用することになる。

「北岸に敵！」

見張りが叫ぶ。

いきなり、矢の応酬が始まった。生馬は身を低くすると、南岸を注視し続けた。部下は優秀である。任せておいても大丈夫だろう。

「敵の弓兵はごく少数です！」

ソリスが、報告する。

「前進！」

夏希は竹竿を振り回して命じた。

グリーンゲ將軍率いる六千名が、順次丘を駆け下り始める。グリーンゲに先陣を切らせたのは、拓海の政治的配慮であった。戦後の対ワイクウ政策を考慮すれば、タナシスとの戦いで少しでも多くグリーンゲに手柄を立てさせる必要があると判断したのである。北の陸塊のほとんどを統べる大国、タナシス王国と紛争状態に陥った以上、南の陸塊内で合い争うのは自滅しかもたらさないはずだ。

「西より川船多数、接近中！」

「丘西側より押し出してきました！」

シエラエズ王女のもとに、次々と報告が届く。

「ランブーン。南岸に何団渡った？」

「約三十団と思われぬ」

「三分の一か」

シエラエズは、敵の思惑を正確に見抜いていた。もうすでに、速やかなる撤退は不可能な態勢にある。ここは、西側から突っ込んでくる敵に対し時間稼ぎを行いつつ、一兵でも多くタホ川の南岸に渡らせて、陣形を整えさせるしかないだろう。

……誰が指揮しているか知らぬが、いい作戦だ。

シエラエズはそう判断した。正面切つて戦いを挑み、敗退したルルトの連中よりは、はるかに血の巡りのいい相手なのだろう。戦場レベルにおけるこちらの戦略方針が膠着化し、柔軟な対応が不可能になった時点で、別働隊の行動を含む決戦を強要して来た。戦場レベルでの戦略としては、きわめて優れた作戦である。

仕方がない。こちらも、切り札を出すしかあるまい。

「支流沿いに弩兵を送り込み、川船を阻止しろ。木橋を落とされてはならない。イロー又將軍には西方よりの敵を確実に阻止するように伝えよ。奴隷歩兵に例の物を使わせ、すり潰してかまわぬ」

正規軍二十団が陣形を整えれば、高原や平原の兵士数万の攻撃を跳ね返すことができる。シエラエズはそう踏んでいた。とにかく、時間を稼がねばならない。

「その先だ！ 着ける！」

生馬は叫ぶように命じた。

川船と筏が、続々と河岸に乗り上げる。飛び降りた兵士たちが、河岸の萱のような植物を掻き分けつつ、得物を構えてなだらかな斜面を駆け上がった。

もつとも東に位置する上陸位置である。すでに正規大隊五個は、第二と第三の地点で上陸を果たしていた。ここまでは、作戦は順調に進んでいる。

ソリスを伴って斜面を駆け上がった生馬は、東の方を眺めた。四

百メートルほどの位置に、四百から五百名程度の方陣が認められる。その向こうには、さらに多くのタナシス軍が蟻集していた。

南に視線を転ずる。丘上から、夥しい数の味方が押し出して来つた。夏希率いる部隊は、完全に丘を降り終って、前進中だ。

「急ぎ陣形を整えよ！ 後続を待たずに、敵陣へ突っ込むぞ！」  
生馬は命じた。

タナシスにおける奴隷軍兵士供給源は、三つある。

ひとつはエルフルール、メジャレーニエ、ストラウド、デイディナラ各州のさらに外側にある辺境域で、半強制的に徴募された者。次に、各公国や自治州で貧困層から見出された者。最後に、幼少の犯罪者および犯罪者の子供などである。

主に健康であることを条件に選ばれた彼ら……原則として、女性は奴隷としない……は、その性格や従順さ、知能などによって分別され、国費によって世俗と隔離された環境での集団教育が施される。現代から見れば『洗脳』レベルの愛国心や国王への忠誠心が養われるのも、この教育課程である。期間は二年。軍事教練を含む内容はかなり高度なものであり、そこで脱落したものは二流の官奴として、公共施設の下働きなどとして使われることになる。

集団教育を終えた奴隷たちは、各所に配属される。知能が高い者は、役所などの書記や役人の補佐役に。見た目が麗しく、性格の良い者は王宮や大臣、知事公邸などの召使に。体格がよく、軍事センスのある者は辺境軍奴隷部隊に。その他の者は、貴族や商人に安価に貸し与えられ、召使、農場や倉庫の管理人、護衛役、執事など多種の仕事を任される。身分的には奴隷だが、その所有権はあくまで国家にあり、虐待、売買などは禁じられている。さらに、仮の所有者には奴隷を定期的に軍事教練に参加させる義務、戦時には国家に返納する義務などが課されている。

このような制度により、タナシス王国は忠実かつ良質かつ精強な

奴隷予備軍を、平時に大きな金銭的負担を生ずることなく、大規模に保持することを可能にしているのだ。

生馬率いる突撃連隊の前に立ちほだかった一個団五百名の奴隷歩兵たちが、得物である刃渡り一メートルほどの曲刀を振りかざして突っ込んでくる。

生馬は突撃連隊を停止させると、素早く迎撃準備を整えさせた。長槍兵四百に三重の横陣を組ませ、その後ろにバックアップ用の散兵を置く。さらに後ろには、弓兵百八十。長剣兵三百は二分し、左右を守るとともに反撃用に控置する。

弓隊長の号令で、弓兵が曲射で射始めた。突っ込んでくるタナシス兵……コート状の連鎖鎧と板金冑を身につけている………たちに次々と矢が命中する。

突撃連隊弓隊は速いペースで矢を射続けた。さらに接近するタナシス兵に対し、しゃがんでいる味方の頭越しに直射を開始する。

だがしかし、倒れたタナシス兵はごく少数だった。部隊の突っ込んでくる勢いも衰えていない。生馬は眉をひそめた。あの連環鎧に特殊な工夫でもしてあるのだろうか。

「構え！」

長槍隊の隊長が、叫んだ。最前列の者が脚を開いて腰を落とす、低く槍を構える。二列目がその後ろで、腰の辺りで構える。なるべく背の高い者で構成された三列目が、高く構えて前の者の肩越しに槍を突き出す。

幅広の曲刀を振りかざして迫ってきたタナシス兵が、続々と槍の穂先に貫かれた。脚がとまった味方の身体を乗り越えるようにしてタナシス兵が横陣を崩そうとする。

随所で、横陣に綻びが生じた。散兵が、突っ込んできたタナシス兵を阻止しようと手槍を突き出す。

馬鹿な。

生馬は自分の目を疑った。手槍三本に腹部を貫かれたタナシス兵

が、なおも曲刀を振り回している姿を目にしたからだ。

駆け寄った散兵の一人が、手槍をそのタナシス兵の胸に突き立てる。ぱつと飛び散った鮮血が、散兵の肩を赤く染めた。

次の瞬間、タナシス兵の曲刀が一閃し、散兵の頭部を打ち据えた。板金冑を被っていた散兵がよろめき、地に伏す。

……あり得ん。

生馬は抜刀するとその場に駆け寄った。タナシス兵が気付き、生馬を見据える。その背中に、別の散兵が手槍を突き刺した。だが、タナシス兵は倒れない。

タナシス兵が、曲刀を振るう。生馬は間合いを取ると、喉を狙って突きを入れた。狙いはわずかに外れたが、剣先に切り裂かれた首筋からぱつと鮮血が散る。

……信じられん。もうすでにかなり血を失っているはずなのに、なぜ血圧を保っていられるのだろうか。ひよつとして、魔術か。

タナシス兵が、再び曲刀を振るう。生馬は愛剣でこれを払った。その隙に側面に回りこんだソリスが、手槍でタナシス兵の脇腹を深々と抉る。

ようやく、タナシス兵が膝を付いた。素早く近付いた生馬は、顔面に斬り付けた。ソリスが左胸を手槍で突く。タナシス兵の手から、曲刀が落ちた。

生馬は素早く戦況を観察した。随所で、乱戦が生じていた。長剣兵隊も、独自の判断で反撃に出て、タナシス兵と斬り結んでいる。こちらは千名、しかも平原一の精鋭だというのに、半数程度の敵に対して押されていることを、生馬は見取った。

また一人、タナシス兵が横陣を突破してきた。立ちはだかった散兵に斬り付け、これを倒す。生馬は駆け寄ると突きを繰り出した。連鎖鎧に斬り付けても、効果はない。突きを多用するしか、手はなかった。

タナシス兵の顔面に、剣先が埋まった。生馬は素早く剣を引き、二撃目を繰り出そうと身構えた。

顔の右半分を鮮血で染めたタナシス兵が、生馬を認めると口の端を歪め、にやりと笑った。

生馬は背筋が凍るのを感じた。顔面には神経が集中しているから、切り裂かれればその痛みは半端ではないはずだ。なぜ、笑う余裕があるのか。痛みを感じないのか。

タナシス兵が鋭く踏み込みつつ、曲刀を振るった。あまりにも早い動きに、生馬は飛び退くことができずに、剣で受けた。

……なんて力だ。

生馬は驚いた。彼よりもずっと小柄……せいぜい百六十五センチほどしかないタナシス兵だったが、その打ち込みの衝撃は凄まじいほどであった。

隙をうかがっていたソリスが、手槍の穂先をタナシス兵の背中に突き立てる。

一瞬タナシス兵の動きが止まった。

剣を引き、態勢を立て直した生馬は再び顔面に突きを入れた。頭蓋骨に剣先が当たった衝撃と、さらにその先に刃先が沈みこんだ手応えを感じる。

噴き出した鮮血が、タナシス兵の胃から下を赤く染めてゆく。血液で目を塞がれてしまったタナシス兵が、でたらめに曲刀を振り回し始めた。

……ゾンビか、こいつは。

剣を引き抜いた生馬は驚愕した。剣先が脳に潜り込んだのは、ほぼ間違いない。にもかかわらず、死ぬどころか倒れもしないとは。

ソリスが、何度も手槍を背中に突き刺す。生馬も、喉に向け愛剣を突き出した。五回ほど突いたところで、ようやくタナシス兵が絶命する。

荒い息をつきつつ、生馬は流れ落ちる汗を拭った。第二の上陸地点から駆けつけてきた正規大隊二個半が合流したために、戦況は急速に味方に有利に傾いていた。そこかしこで、暴れまわっていたタナシス兵が止めを刺され、絶命してゆく。いったんは崩された突撃

連隊の横陣も、態勢を立て直していた。

だが、共同軍側は貴重な時間を失っていた。敵は分速五百名程度で夕水川北岸に増援を送り込めるのだ。急がないと、作戦は失敗してしまう。

「急ぎ陣形を立て直せ！ 第一大隊は本隊の右、第二大隊は本隊の左に展開せよ。予備は後方につける。急げ！」

生馬は愛剣を振り回して命じた。

「生馬様！ あれをご覧下さい」

ソリスが、手槍の穂先で東方を指し示す。

生馬は慄然とした。先ほどの狂戦士たちと同じような雰囲気と規模の部隊が、行く手に待ち受けている。彼らがゾンビのような不死身ぶりを見せるのであれば、たとえ正規大隊千名を加えた突撃大隊でも、短時間で打ち破るのは難しいだろう。急速に進出し、敵主力側面を衝くという拓海の作戦は、失敗に帰することになる。

70 狂戦士(後書き)

第七十話をお届けします。

71 タホ川の戦い(前書き)

多少ですがいつもよりグロい描写があります。ご注意ください。

## 71 タホ川の戦い

「なぜ死なぬ！」

戦斧をタナシス兵に叩きつけながら、グリングゲ將軍は怒鳴った。連鎖鎧を貫いて突き立っている矢は三本。長槍に貫かれた腹部の傷口からは、鮮血が滴っている。背中に突き刺さった投げ槍が、グリングゲの打撃を受けるたびにぶらぶらと揺れている様は、不気味を通り越して滑稽ですらあった。

グリングゲは渾身の力を込めて、戦斧を振り下ろし続けた。十回目かそこらで、やっとタナシス兵が崩れ折れる。

「キュイランス！ 無事か？」

荒い息をつきながら、グリングゲは周囲を見回した。

グリングゲ率いる先鋒部隊六千名は、混戦状態にあった。様々な人種が混じっているゆえに奴隷部隊と思われるタナシス軍千名ほどに迎撃され、苦戦しているのだ。後続の高原戦士弓兵五千の支援を受けてはいるものの、なぜか異様なほどにしぶといタナシス兵のせいで、前進の勢いは完全に止まってしまっている。

「無事です、叔父上！」

叫びながら、キュイランスが走り寄ってきた。手にした短めの槍の穂先が、赤く染まっている。それなりに、戦ったのであろう。

「キュイランス。こいつらはなぜ簡単に死んでくれんだ？ まるで痛みを感じていないかのようだ。もと賢者は、これをどう見る？」

戦斧を下ろし、休憩モードに入りながら、グリングゲは訊いた。年齢が年齢なので、休み休み戦わないと、すぐに身体が言うことを聞かなくなってしまう。それにどうやら、戦場に竹竿の君率いる後衛が到着したようで、さしものタナシス兵も押され始めたようだ。少なくともグリングゲの周囲には、生きているタナシス兵の姿はなかった。

「ある種の植物から抽出したエキスを使えば、痛みを抑えることは

可能ですよ。医者が処方するような、薬です」

仰向けに倒れているタナシス兵の死体の脇に膝をついたキュイランスが、言った。

「こやつらが、そのような薬を服用しているというのか？」

「いえ。それはないでしょう。服用すれば眠くなり、身体の動きも鈍りますから。しかしながら、北の陸塊には、その反対の作用をもたらす薬があると聞きます」

「ほう」

「痛みに鈍感になるが、それと同時に精神が高揚し、身体の動きや頭の働きが活発になるそうです」

「では、こやつらはその薬を処方されているのか？」

「いいえ。これらの薬は服用後二十ヒネ以上経たないと効果が現れないはずです。それに、効果が持続する時間も、せいぜい二十から三十ヒネ程度。そのあとは、精神も肉体も極端に働きが鈍ってしまふそうです。敵がこちらの作戦を読んでいたとしても、こつも都合よく効果時間内にそれらの部隊を戦場に投入できるとは思えません」

説明しながら、キュイランスがタナシス兵の身体を探った。腰の皮袋を開け、中を覗き込む。

「これかな」

キュイランスが、手の中に握り込めそうなほど小さい木の実を取り出した。上部が切り欠かれているので、殻を利用した容器のようだ。鼻に近づけて臭いを嗅いで、顔をしかめる。

「いかにも薬っぽい臭いですね。これを呑んだのかも。でも、それでは即効性がないし……」

すっかり賢者にもどってしまったキュイランスが、さらに死体を検め始めた。タナシス兵の口をこじ開け、中を覗き込む。

「臭いますね。呑んだことは間違いないようです。でも……おや」  
キュイランスが、さらに大きくタナシス兵の口を開けた。指を突っ込む。

「わかりましたよ、叔父上」

立ち上がったキュイランスが、木の実の容器をグリングゲに差し出した。

「菌茎に真新しい傷がついていました。鋭利な刃物で切り裂いたんでしょう。毒矢の原理と一緒にです。経口服用では死ぬまでに何十ヒネも掛かる弱い毒でも、鏃に塗って突き刺せば速やかに殺すことができます。こいつらは、自ら菌茎に傷をつけ、この薬をなすりつけたのでしょうか。こうすれば、薬が速やかに体内に入り、効き目を現すはずですよ」

「なんと。して、対抗手段は？」

「戦いを避けるしかありませんよ。幸い、持続時間は長くはありません。三十ヒネも経てば、効果が切れて大人しくなるはずですよ」

「では、現状では打つ手なしか」

甥の説明に、グリングゲは呻いた。

……失敗か。

拓海は覗いていた望遠鏡を下ろした。丘を下りた主力部隊は、整然たる方陣を築いて、敵主力と交戦を開始している。これは、計画通りである。

しかしながら、敵主力はまだその数は少ないものの、実にしっかりとした陣形を保って共同軍側を迎え撃っていた。側面を衝こうと機動していた生馬の部隊は、それを果たせず脚止めされている。生馬の部隊との連携を目指した夏希の部隊も、動きは完全に止まっていた。

槍を相手に押し付けても、たいした傷を与えることはできない。鋭くかつ真っ直ぐに突き出してこそ、大きな打撃を与えることが可能なのだ。戦場での部隊機動も同様である。衝力という名の勢い……前進速度、打撃力、精神力が合算されたもの……を敵に激しくぶつけなければ、その効果は薄い。

すでに、生馬の部隊も夏希の部隊も、完全に衝力を失っている。

この状態で敵主力にぶち当てても、たいした戦果は挙げられないだろう。それどころか、生馬の部隊は速やかに夏希の部隊との連携を取らないと、孤立したまま殲滅させられるおそれすらある。

「伝令！ 予備隊をすべて左翼に回し、投入準備させる！ 正面の敵は押さえるだけにしろ。突撃連隊には後退を指示。竹竿の君には、突撃連隊との連携にのみ集中させる」

拓海は矢継ぎ早に指示を飛ばした。敗勢を悟ったら早めに手を打つのが、大敗を避けるもつとも効果的な手段である。戦史上、大敗は作戦指揮層が事前の作戦計画にこだわり過ぎたうえに、勝ち目が薄くなっていることを自覚しながらもあくまで勝利を目指すという、柔軟さを欠いた指揮統制を行った場合に生ずることが多いのだ。

拓海はこの戦いを、タナシス軍に大打撃を与える決戦の場として作戦を立案し、実行した。これを遅滞なく補助的な前哨戦に格下げし、決戦を回避しなければならない。決定的な会戦に敗れた軍を再建するのは難事だが、前哨戦に敗北しても退却に成功すれば、戦略的敗北を免れることができるとともに、次なる戦いに速やかに臨むことが可能である。

夏希は市民軍槍兵隊に横陣を作らせると、その支援に高原弓兵を組み合わせた。高原投げ槍兵とワイコウ軍部隊はその場で簡単に再編成させ、生馬の部隊との連携を命ずる。

相変わらず、タナシス奴隷歩兵はタフであった。矢を何本を突き立てたまま、全力疾走する者。全身から鮮血を振りまきながら、なおも曲刀を振るい続ける者。長槍に胸部を貫かれた状態で、三名の高原戦士相手に互角の戦いを続ける者。あるタナシス兵は、断ち斬られた自分の右腕を左手に握り締め、悠然とした足取りで歩いていた。さしもの夏希も、はみ出た臓物を自らの手で腹の中に戻しているタナシス兵を見かけたときには、危うく吐きそうになった。

「ほう。早くも逃げにかかったか」

シエラエズ王女が、笑った。

夕水川北岸に渡った兵力は、いまだ六割程度。兵員数だけ見れば、敵の方が圧倒的に有利である。にもかかわらず、あっさりと逃げ始めるとは、敵の指揮官は戦というものをよく知っているらしい。

「やりますか、殿下」

ランブーンが、訊く。

シエラエズは逡巡した。

南西方向から迫ってきた一万五千ほどの敵に圧力を加えれば、川沿いに襲ってきた三千ほどの兵力が南へと脱出することを阻止できるだろう。だがそれをやるには、兵力が足りない。となると、また新たな奴隷部隊に麻薬を使わせなければならぬが、麻薬使用部隊は損耗率が高すぎるうえに一度使用したら三日は使い物にならない。すでに、マリ・ハマでは一日半の位置まで近付いているのだ。ここで時間のロスは避けたい。

「通常の追撃に留めよ。主眼を退却阻止ではなく、敵兵員の殺傷とする。一人でも多く倒し、傷つけるのだ」

タナシス側に、増援の計画はない。手元にある兵力だけで、この先何度も生起するであろう戦いを勝ち抜いてゆかねばならないのだ。それに対し、敵には低質なものとは言え兵力増強の手段が残されている。ここで味方の損害を省みずに強引な攻勢に踏み切ることは、シエラエズにはできない相談であった。

共同軍側から見て右翼と中央の戦場では、双方の主力が激しくぶつかり合っていた。

前面に市民軍長槍隊と、大盾を携えた高原の投げ槍兵の横陣。その後ろに、高原弓兵を配した共同軍側は、拓海の指示に従って守りを固めていた。降り注ぐ矢は大盾で防ぎ、主に高原弓兵の曲射で夕

ナシス兵士を殺傷しようとする。

タナシス側も、その兵力の不足から積極的に攻勢に出ようとはせず、奴隷軍警兵を前に出して、大盾の陰から矢を放つ戦法を取っていた。彼らの放つ矢の威力は大きく、また狙いも極めて正確であった。しかしながら、発射速度は遅いので、殺傷された共同軍兵士の数は少なかった。

拓海が送り込んだ予備部隊……共同軍予備大隊三個……が、ようやく戦線の左翼東側面を安定させる。

夏希は全般指揮をグリーンゲ將軍に委ねると、高原投げ槍兵と市民軍兵士の一部を率いて強引に北上を図った。この動きを見て取った生馬が、正規大隊二個に南方への突撃を命ずる。挟撃されたタナシス正規軍一団が、たまらず東へと引く。こうしてついに、生馬率いる部隊と夏希率いる部隊は連携を果たした。

「状況は？」

「手ひどくやられたが、まだ余力はある。後衛を務めさせてもらおうよ」

夏希の問いに、快活そうに生馬が答える。だが、その言葉とは裏腹に、生馬もその部下たちも相当消耗していることに、夏希は気付いた。

「無理してない？」

「してる。だが、市民軍よりはまだ余裕があるよ」

生馬が、表情を歪めて言う。

たしかに、夏希率いる市民軍部隊はここへ至るまでの激しい戦いでかなり疲弊していた。兵士とは言え、普段は米を作ったり商いをしている者たちなのだ。訓練も十分とは言えないし、なにより正規軍兵士に比べて胆力が不足している。戦場では、呆れるくらい速いペースで気力が消費されてしまうものだ。

「わかった。わたしは側面の援護に徹する。後衛は、任せたわよ」

夏希はそう言つて、生馬の汗まみれの手をきゅつと掴んだ。

タナシス兵は執拗であつた。

後退する生馬と夏希らは、追いつがる敵を叩くために何度も脚を止めざるを得なかつた。ベンデイス率いる高原弓兵は健在であつたが、乱戦となれば弓での援護も受けにくい。共同軍側は、徐々に死者を増やしていった。

夏希は、負傷した市民軍兵士から譲り受けた長槍を振るつていた。竹竿は、酷使に耐えかねて割れてしまつたのだ。自らの手で人は殺さない、という方針を、夏希はとつと捨てていた。とにかく目に付いたタナシス兵には、容赦なく突きを入れる。おそらくすでに、三人ぐらいは刺殺しているのではないだろうか。背後を守つてくれるアンヌツカも、連鎖鎧にはあまり効果のない愛用の剣を収め、戦死した長剣兵の得物を拾つて使つていた。これならば重量があるから、連鎖鎧の上から叩きつければ打撃を与えられる。

「ここまでか」

シエラエズはつぶやいた。

すでに、突出していた敵右翼は、丘の麓付近まで後退を果たしていた。これ以上追撃を続ければ、敵に側面を衝かれて分断されるおそれがある。

「ここは無理せずに、勝利で締めくくるべきだろう。」

「右翼部隊の追撃中止を下命しろ。正面と左翼では戦闘継続。予備部隊を速やかに編成し、敵の戦場撤収時に効果的な追撃を行えるように準備せよ。」

敵が追撃を中断したことを見て取つた拓海は、急いで部隊の再配

置を行った。生馬と那夏希の部隊を丘上に上がらせ、再編成を命ずる。余裕のできた予備部隊に支援させながら、拓海は正面と右翼部隊も後退させた。損害の少ない部隊は丘の右側、ノノア川沿いに布陣させ、敵が丘を迂回できないようにする。

「……逃げ切った」

夏希は長槍を投げ出すと、地面にぺたんと座り込んだ。

そこかしこでは、市民軍兵士たちが水桶に群がって水分補給中だ。夏希同様得物を投げ出して座り込んでいる者も多い。大の字になって横たわり、死体のように動かない者もいる。

「夏希様、どうぞ」

アンヌツカが、水の入った竹の柄杓を差し出してくれる。礼を言っただけで受け取った夏希は、ひと口目で口中を洗ってから、生ぬるい水を飲み干した。やや濁っていた水だったが、贅沢は言っていられない。ここで水分補給をしなければ、早晚倒れてしまう。戦場で体力が尽きれば、待っているのは死である。

気力を振り絞って立ち上がった夏希は、大声で隊長格の者を呼び集め始めた。速やかに再編成を完了し、指揮下の部隊を再び戦える集団に作り変えねばならない。

「逃げ方にもそつがありませんな。ルルト軍とは一味も二味も違うランブーン將軍が、感想を述べる。」

「そうだな。だがただで帰してやるわけにはいかん。左翼で追撃させる。ただし、無理はさせるな。無駄な損害は出したくない」

「はっ」  
シエラエズ王女の指示を受けたランブーンが、命令を飛ばし始める。

損害の大きかった部隊から、共同軍は退却を開始した。ほとんど損耗していない各国防衛軍供出部隊と高原弓兵の一部が丘上に陣取り、追撃の姿勢を見せるタナシス軍を牽制する。

夏希は指揮下にあった高原戦士の指揮をベンデイスに委ねると、再編成した市民軍を率いて、ノノア川河畔で負傷者を川船に乗せて後送する任務に当たった。負傷者の中に、重傷者は少なかった。もともと激戦であった左翼で生じた重傷者は、撤退させることができずにやむなく大半が置き去りにされたのである。

「夏希。お前は川船で一足先にマリ・八へ戻ってくれ。次の戦いに備えるんだ。細かいことは、駿に任せてあるから」

ほとんどの負傷者を送り出したところで、拓海がそう命ずる。

「わかった。あと頼んだわよ」

夏希はアンヌツカを伴って、残っていた川船に軽傷者とともに乗り込んだ。疲れてはいたが、夏希はアンヌツカとともに艫に立ち、竹竿を握った。いくらなんでも、怪我人に竿を突かせるわけにはいかない。

川船が、ゆっくりとノノア川を遡ってゆく。戦いの喧騒は、いまだ聞こえていた。味方後衛が、追撃してくるタナシス軍と干戈を交えているのだ。武器が打ち合う金属音。喚声。悲鳴。怒号。

夏希は暗澹たる思いで竿を操り続けた。異世界へ来てから初めて経験する、負け戦であった。

71 タホ川の戦い（後書き）

第七十一話をお届けします。

## 72 マリ・八防衛線

「進捗状況は四割、といったところだね」

月明かりに照らされた平原を指し示しながら、駿が言った。

マリ・八からノア川沿いに北へ約三キロ。河畔から二十メートルほど離れたちよつとした高みに設けられた櫓の上に、夏希と駿は立っていた。

北方には、ほぼ真っ直ぐに伸びるノア川の流れがある。櫓の位置から一キロ近くは、丈の短い草が生い茂るだけの平原だが、そこから先は濃密なジャングルと沼地のまだら模様で、河の左右だけがまともに人が歩ける平地となっている。その幅は、西岸が五十メートルほど。東岸はやや狭く、三十メートルほどだ。細い街道は、西岸を川沿いに走っている。

櫓の少し先には、いわば平原地帯への入口とも言える箇所を囲むように、防塞が円弧状に設けられていた。ノア川から水を引き入れることを意図した堀と、木製の柵の連なりだ。だが、時間と人員の不足から、その工事は半分も進んでいない不完全なものだった。

平原入口と防塞の距離は、四百メートルほど。わざと矢の射程外に設けたのは、本作戦が単なる迎撃ではなく、ある程度タナシス軍を平原へと引きずり込んでから殲滅戦を行うという拓海の戦術構想に基づくものである。

「早ければあさつての午前中には来るわよ。それまでに、どれくらい進みそう？」

「四割五分がせいぜいだね」

駿が、肩をすくめた。

「とりあえず、時間の掛かる水濠造りは諦めたよ。柵だけは、しっかりとしたものすべての箇所設ける。それで、我慢してもらえないかな」

夏希は南方へと視線を転じた。櫓から五十メートルほどのところ

に、真新しいすっかりとした木橋が架かっている。幅は十メートル近い。この橋を使い、決戦兵力をノア川の東西どちらにも速やかに送り込むというのが、拓海の意図らしい。

「現状の兵力は？」

「工事要員から市民軍五千は編成できる。高原戦士は約一万。ハンジャーカイには、五千の高原戦士が到着した。あと一万五千来るはずだが、まだ報告は来ていない。間に合わないかもしれないな」

「とりあえず兵員数ではまだ上回ってるわね」

夏希は疲れた身体を手すりに持たれかけさせた。マリ・八市内と郊外に設けられた救護所に負傷者を運び、後事を凜に託してから、食事と水浴び、着替えを済ませたが、身体も心もいまだずっしりと重い。

「夏希様、駿様。拓海様より伝令が参ったそうです」

櫓の下から、アンヌツカが声を掛けてくる。

ふたりは櫓を降りた。アンヌツカが、紙片を駿に手渡す。月は満月に近いから、文字を読むに支障はない。

「朗報だよ。タナシス軍は追撃を諦めた。共同軍は離脱に成功。退却中。マリ・八到着は明日午後の予定」

「損害は？」

「記されていない」

駿が、首を振る。

夏希は、手の陰でそつとあくびを漏らした。

「悪いけど、今日はもう寝かせてもらおうわ。本隊の受け入れ準備は明日から始めても間に合うでしょう」

疲労困憊して戻ってくるであろう共同軍主力を再編成し、休養させ、装備を整えさせ、明後日と思われるタナシス軍の侵攻に備えねばならない。夏希自身も、今日はすでに気力が尽きかけていた。体的にはまだ余裕があることが感じ取れるが、もはや歩くことさえ億劫である。今眼の前に寝台が差し出されたら、即座に身体を丸めて横たわってしまうだろう。それくらい、夏希は精神的に疲れを覚

えていた。

……敗北というものは、人をこれほどまでに消耗させるものなのか。

翌日の昼過ぎ、北から退却してきた共同軍部隊が、予定通りに平原に姿を現した。

「まずは飯だ飯。すべての兵士に、食べたいだけ喰わせてやってくれ」

拓海が、喚く。

「準備はできてるわよ」

凜が、笑った。

早朝から、マリ・八北郊外に多数設けられた臨時の竈を使って、数回に渡り大量の米が炊き上げられていた。牛などの家畜も惜しげもなく屠られ、炙られたり茹でられた肉が米とともに兵士たちの胃袋に納まってゆく。

食事を終えた兵士たちが、その場に寝転がって午睡を始める。なんともだらしない姿だが、気力と体力を速やかに回復させるには、大量の食事と睡眠が何よりも効果的である。

「俺たちも寝たいところだが……我慢して作戦会議と行くぞ」

兵士たちに混じって胃袋を満たした拓海が、生馬を伴って歩き出した。適当な木陰を見つけ、拓海が座り込む。すかさず、凜が持参の地図をその前に広げた。生馬と駿も、腰を下ろす。夏希も、凜の隣に座った。

「まず、夕ホ川の戦いの評価だ。味方の損害は、正確なところは再編成してみないことにはわからないが、推定で五千から六千を失った。負け戦にしては、うまく逃げ切った、と評価してもいいだろう」  
無然たる表情で、拓海が言う。

「敵の損害は？」

駿が、訊く。

「二千から三千程度だろう」

「地形的に有利な場所で戦ったおかげだな」

生馬が、無精髭と言つにはいささか伸びすぎた顎鬚を撫でた。

「一方からの追撃は、比較的躲し易い。狭い廊下で鬼ごっこするようなものだからな」

拓海が、苦笑した。

「思ったより、善戦したわね」

夏希はそう意見を述べた。かなりの損害を蒙ったが、敵にもそれなりの打撃を与えられたようだ。

「数字の上ではな。敵の損害のほとんどは、おそらくは使い捨ててもいい奴隷部隊だろう。こっちは最精鋭の突撃連隊と正規大隊の三分の一を失っている」

ぶすりと、生馬が言った。

「まあ、反省会は後回しにしよう。今回の作戦計画だが、見ての通り平原への入口に陣地を構築中だ。狭隘部からの出口における防御は、優れた策だと昔の偉い人も言っている。で、どの程度の進捗状況なんだ？」

「五割未満だね」

拓海の質問に、駿が短く答える。

「それで我慢しなきゃならないな。追加兵力は？」

「市民軍五千。高原戦士一万は確保した。今日中に、高原戦士五千も着く予定だ」

「頭数だけが多いな」

生馬が、唸る。

「秘密兵器はどうだ？」

拓海が、訊いた。

「もうマリ・八に向かつてるわ。こちらも今日中には、着くはずよ。凜が、答える。

「よし。合計兵員六万近く。不十分ながら防御陣地も構築したし、地形的にも有利。おまけに秘密兵器もある。勝利は確実……」と言

たいが、あのゾンビどもがいるとなると……自信が揺らぐな」

拓海が、芝居がかって頭を抱えた。

「なに、そのゾンビって？」

凜が、首を傾げる。

「なんだ。夏希から聞いていないのか」

拓海が、痛みを感じないらしいタナシス奴隷歩兵に関して、詳しい説明を始める。キュイランスの分析も、付け加えて語る。

「なるほど。アッパー系の麻薬を使っているんだね。効果としては、コカインに近いかな」

「アッパー系？」

駿の言葉に、夏希は頭をひねった。

「大まかな麻薬の分類だよ。アッパー系はいわば興奮剤で、いわゆるハイな状態にさせる麻薬。ダウンナー系は精神を鎮め、リラックスさせるタイプの麻薬だ。北の陸塊の気候を考えると、コカインとは思えないな。おそらくは植物系だろうが、この世界独自の麻薬かもしれない」

「麻薬の正体はともかく、あのゾンビどもに対する効果的な対策を考えないと、まずい。短時間とは言え、五人分くらいの暴れっぷりだし、HPは三倍増くらいのチート状態になるからな」

拓海が、良案を求めるかのように他の四人を見た。

「フェイントを掛けて服用させ、自滅させるしかないだろうね。簡単に引つ掛かってくれるとは思えないけど。キュイランスの知識が確かならば、持続力は短いようだし」

駿が言う。

「でも、戦争に麻薬を使うなんて、卑怯よね」

夏希はそう言った。しかも、奴隷兵に使わせて捨て駒的に使うなど、常軌を逸している。

「いやいや。戦争に麻薬は付き物だよ」

拓海が、苦笑いした。

「麻薬の煙を吸引してから戦った、なんて話は昔からごろごろし

てる。ベルセルクのような伝説的な狂戦士も、麻薬の影響下にあつたという説が有力だしな。第二次世界大戦でのアンフェタミンの濫用。ベトナム戦争での大麻とコカイン。今でも、先進国の軍隊は覚醒剤的な薬物を利用してはいるしな。メタンフェタミンとか」

「歴史の話はいいよ。問題は、明日どうやってゾンビどもに勝つかだ」

生馬が、疲れからかやや苛立った調子で拓海の言葉を遮る。

「子供だましの奇策が通用する相手とも思えないしねえ」

凜が、ため息混じりに言う。

「ところで駿。俺と生馬の立場は、政治的にはどうなっている？」

拓海が、話題を変えた。

「そのへんは抜かりないよ。タホ川の戦いは、痛み分けという形でハンジャーカイには報告してある。多少評判は落としたかも知れないが、総会の支持はまだ十分にある」

「どういうこと？」

夏希は説明を求めた。

「負け戦だということがばれば、実質的に作戦指揮を執った俺が糾弾されかねないわけだ。そこをうまく、駿が取り繕ってくれたというわけさ」

「大敗の責任を取らされて総司令官が解任、なんてことはよくあるしねえ」

凜が、醒めたような口調で言う。

「ま、そんなこともあるから、俺は共同軍参謀部参謀長という詰め腹を切らされにくい地位に就いてるんだがな」

「でも、実際の指揮を拓海が執っていることは、みんな承知しているよね。タホ川の戦いが、実質こちらの負けだと知れたら、まずいんじゃないの？」

夏希はそう訊いた。

「そのあたり、あらかじめ手は打ってあるよ。まあ、駿のアドバイスなんだが。平原共同軍法には、共同軍司令部司令官、同副司令官、

参謀部参謀長の人事権は、平原共同体総会にあると定められている。つまり、懲戒解任を別にすれば、参謀長の任を解くには総会が開催され、そこで過半数の賛成が必要とされるということだ。よほどのことがない限り、俺の地位は安泰なんだよ」

「ずる賢いと言おうかなんと言おうか……」

凜が、くすくすと笑う。

「いい機会だから、この世の真実というものを披露しておこう」  
にやにや笑いを顔に張り付かせながら、駿が夏希と凜を見た。

「一番の実力者は、権力を握っている者でも賢い者でも人望のある者でもない。自らルールを決められる者なんだよ。言い換えれば、ルールを自由に弄ることのできる奴に逆らうのは、愚の骨頂だ。もし自分が勝手にルールを決められる立場に立つたら、迷うことなく自分に有利なルールを山ほど作っておくべきだ」

「肝に銘じておくわ」

夏希はそう言って微笑んだ。

「ふあ」

いきなり生馬が大あくびをした。いささか子供っぽいしぐさで、眼をこする。

「さしもの生馬も限界のようだな。ゾンビ対策は、あんたらで相談していいアイデアをひねり出してくれ。俺と生馬は寝かせてもらおうよ」

腰を上げた拓海が言った。あくび交じりに立ち上がった生馬とともに、マリ・ハの市街地方向へと歩み去ってゆく。おそらくは、川沿いにいくつも張られている天幕のひとつに潜り込んで睡眠を取るのだろう。

「僕も陣地構築の監督に戻らないと」

駿も、腰を上げた。

「あたしも救護所に戻らなきゃ」

凜も立ち上がった。

ひとり残された夏希は、凜が残していった地図を睨んだ。狭い川

沿いの平地から湧き出してきた敵がしつかりとした陣形を整える前に、半円形に包囲する形で捕捉、攻撃する……。悪くない手である。河の両岸で迎え撃ち、敵の分断を強いるというのは、高原との二度目の戦い……。第二次ジンベル南平原の戦いと同じような作戦であった。しかし、麻薬で強化（？）された奴隷歩兵をタナシスに使われたら、包囲網を突破されるおそれが出てくるだろう。打撃力のある敵に背後に廻られた防衛線ほど、脆いものはない。

「ここで負けたら、平原が戦場になるのか……」

地図から眼を上げた夏希は、南方に視線を転じた。柔らかな黄緑色の草を刈ったあとに張られた数十の天幕。河岸に生えている柳のような木々と、その向こうにぼんやりと見えているマリ・ハの市街地。手前には、田んぼが広がっている。

実にのどかで平和な風景だ。

夏希がこちらへ来てからも、平原では何回か戦いが行われた。二次に渡るジンベルとその同盟国と、高原戦士の戦い。その後の、二アンと反ニアン国家群の戦い。

前者は一般市民を巻き込むことなく終結したし、後者は市街地で戦闘が行われたものの、短時間のうえに極めて抑制的な戦いだったから、市民の死傷は最低限で済んだ。

今回の戦いは違う。タナシス人は異民族である。幸い、ルルト制圧の様子からして、タナシス軍の規律は高いようだが、市街を巡って両軍が戦うとなれば、一般市民を巻き込むことは避けられない。

死傷者二千九百というのが、タホ川の戦いにおけるタナシス派遣軍の損害であった。

内訳は、正規軍四百名、ペクトール公国軍百名、奴隷警兵四百名。それに、奴隷歩兵が三個団壊滅を含めて二千名。

「少しばかり、痛かったな」

報告を聞いたシエラエズ王女は、わずかに表情を歪めた。

大国タナシスとは言え、その国力は無尽蔵ではない。七十隻を越える大型船舶と、水夫やラドーム公国に残した兵站要員を含めれば五万四千近い人員を動員し、大海を隔てた南の陸塊に長期にわたって侵攻するのは、国庫にも国家経済にもきわめて大きな負担である。遠征計画には、兵員の増援は組み込まれていないのだ。シエラエズが実父であるオストノフ国王に泣きつけば、五千や一万程度の兵員であれば送ってもらえるだろうが、彼女にその気はさらさらなかった。そんなことをすれば、妹のリユスメースに死ぬまで罵倒されるだろう。

タナシス遠征軍主力は、マリ・八まで百五十ヒネほどのところで野営していた。南方には警戒部隊が配置されており、平原側の夜襲に備えている。

すでに陽は落ち、空には多数の星が瞬いている。米と干し肉、干し魚というあまり健康的とは言えぬ食事を終えた兵士たちは、河原や密林の際などに適当に寝床をこしらえ、大半の者がすでに横になっていた。

「兵站状況はどうだ？」

わずかだが周囲よりも小高くなっている場所に張られた大きな天幕の中で、シエラエズは補給担当者に問いかけた。

「問題はありません。敵がタホ川に残した川船と筏を鹵獲しましたので、今後の補給状況はさらにゆとりができました。現状で、米は三日分を確保しております」

「よろしい。あとは、偵察だな」

すでに、複数の偵察隊が徒歩および川船で南方の偵察に送り出されていた。常識的に見れば、敵は平原の入口またはマリ・八市街地付近で待ち構えているはずだ。

「偵察隊が戻るまでまだ間があります。お休みになられてはいいがですか」

ランブーン將軍が、遠慮がちに言う。

「そうだな。偵察報告が一通り出揃ったところで起こしてくれ。頼

むぞ」

夜明け前に、シエラエズは護衛の女性剣士に揺り起こされた。熱いお茶を一杯飲んでから、司令部天幕に入る。

「敵の陣容が判明しました。平原の入口で待ち構えております」  
ランブーン将軍が、手書きの地図をシエラエズに指し示しながら、説明する。

「またいやになるくらいよい位置に構えているな」

シエラエズは笑みを浮かべた。本当ならばため息のひとつもつきたいところだが、大勢の部下が見守っている以上それはできない。弱気な上官など、害毒でしかない。

「いかがなさいますか？」

「まあ待て」

シエラエズは、地図を睨んで敵將の意図を推し量ろうとした。

ノノア川の兩岸に迫った密林。部隊を機動させられる余地は、狭い河岸の平地だけだ。そして、南側の密林が切れたところには、平原への出口を弧状に囲い込むように敵陣が置かれている。敵陣のやや南側、ノノア川をまたいでいる構造物は、間違いなく橋梁である。

敵は東西兩岸に自在に兵力を移動させることができる。敵の強みは、第一に数的優勢。第二に、地の利であろう。タナシス側が東岸から来ようが西岸から来ようが、あるいは兩岸同時に攻め入ろうが、十分な兵力を以って迎撃できる態勢である。

これを崩さねば、勝てぬ。

「橋が必要なな」

ぼそりと、シエラエズは口にした。

「橋ですか」

すでに自身もそう考えていたのだろう、ランブーン将軍の口調には、意外そうな雰囲気は微塵もなかった。

シエラエズは、補給担当者を手招いた。

「川船に余裕はあるだろう。何隻かを割いて、このあたりに仮設橋を掛ける準備を進めてもらいたい」

「川幅は、一キツホ程度ですな。お易い御用です。早速、準備に掛かります」

補給担当が一礼し、そそくさと天幕を出てゆく。

「策を、お聞かせ願えますか」

ランブーンが、慇懃に問う。

「残念だが、また奴隷歩兵に薬を使わせるしかないな。東西どちらかは、公国軍と自治州軍を主力として、助攻とする。予備に正規団十個は確保しておけ。余っている川船はすべて投入。ノノア川を封鎖する。ところで、皆寝たのか？」

「交代で仮眠を取りました」

「もう少し寝ておけ。わたしも朝食まで寝かせてもらおうぞ」

「夏希様あゝ。朝なのですう。起きてほしいのですう」

触手に揺さぶられ、夏希は眼を開けた。

「あら、コーちゃん。こつちに来たんだ」

「あたいもいるのです！」

上体を起こした夏希の眼に、ステッキを振り回しているユニヘックヒューマの姿が映る。

「エイラ様とサーイエナ様が、お話したいそうなのですう」

寝台の上に浮かんだコーカラットが、触手で隣室を指す。

「ん、わかった」

夏希は寝台を下りた。

夏希が寝ていたのは、マリ・八市街地で借り上げられた一軒家の一室であった。開けっ放しだった窓からは、眩い朝日が差し込んでいる。

着替えを済ませた夏希は……すでに魔物に下着姿を見せることに関して抵抗感はなくなっている……、狭い部屋を出た。

アンヌツカが床で寝ていたはずの隣室にはテーブルが運び込まれ、そこでは三人の女性が朝食を採っていた。エイラ、サーイエナ、それに凜だ。

「おはよう、みなさん」

夏希は朝の挨拶を交わした。空いている椅子に座ると、エイラが陶製のポットからお茶を注いでくれた。アンヌツカが入ってきて、夏希の前に皿や小鉢を並べる。メニューは朝粥に野菜の漬物、佃煮状の肉と小魚というところだ。いささか簡素ではあるが、すでにここは戦場と言っている。でき立ての温かな朝粥を掻き込めるだけでも、ありがたい。

「で、なんでマリ・八に？」

箸を取り上げながら、夏希はエイラとサーイエナに問いかけた。

「人間界縮退対策本部は、昨今の情勢を鑑みて、ジンベルにある魔力の源を移動させることを平原共同体に提案しました。いま総会に諮っているところですが、おそらく認可されるでしょう」

エイラが、説明する。

「どうやって？ ニョキハンから、空になった魔力の源を借りるの？」

「それ以外に方法はないと思います」

「貸してくれるかな？ 人間界の争いに介入することにもなりかねないし」

「そのことなら、ユニちゃんとコーちゃんとも相談しましたが、魔力の源そのものが戦いに使われるものではない以上、貸与だけでは介入にはならない、ということなんです。貸してくれるかどうかは……」

サーイエナが、ユニヘックヒューマを見た。

「ニョキハンは、魔物の賢者なのです！ 珍しいものを集めるのが好きなのです！ だから、手土産に珍しいものを持っていけば、きっと貸してくれるのです！」

食卓に気を遣ってか、ステッキを控えめに振りながら、ユニヘックヒューマが言う。

「それはそうかも知れないけど、ニヨキハンが珍しがるものって、なに？」

「異世界のものなら珍しいのですう。わたくしたちがマリ・ハマで来たのは、異世界人の皆様になにか品物を提供していただくためなのですう」

コーカラットが、説明した。

「ということで、あたしはここへ来るとき履いていたスニーカーを提供することにしたわ。あなたも何か出しなさいな」

凜が、ぼそぼそと言う。

「なるほど。異世界のものなら確かに珍しいし、ニヨキハンも喜びそうね」

「すでに、駿様からは腕時計を、生馬様からはお財布を、拓海様からは携帯電話をお譲りいただけることになっておりますう」

コーカラットが、言う。

夏希は箸を置くと考え込んだ。朝食寸前だったゆえに、夏希が召喚された時にはポケットの中に何も入っていないかったし、アクセサリーの類もまったく身につけていなかった。手にしていたマグカップは割れてしまっただろうし……。

「サンダルは取ってあるはずだけど、それだと凜のスニーカーと被るわね」

「下着とかどう？ ニヨキハン、喜ぶわよ」

にやにやししながら、凜が言う。

「それは……やだ」

結局、夏希はハンジャーカ이의宿舎に置いてある衣類の中から、ドレスシャツを提供することにした。部屋着として着ていた安物だが、構わないだろう。

「総会の許可が下り次第、コーちゃんとユニちゃんにはこれら品物を持って魔界へ行ってもらいます」

きっぱりと、エイラが言った。

72 マリ・八防衛線（後書き）

第七十二話をお届けします。

### 73 セレンガ、出撃

昼前に、共同軍側はすべての準備を終えた。

平原への入口を弧状に囲む防衛ラインは、ノア川の流れによって東西に二分割されている。その東岸に配されたのは、市民軍八千名と高原戦士一万八千名の、合計二万六千名。西岸に配されたのは、各国防衛隊千九百名、市民軍八千名、高原戦士二万名の、合計二万九千九百名。東岸重視の配置なのは、密林内の平地は東岸の方が幅広く、タナシス側はこちらを主攻とすると判断してのことである。

夏希が率いることになった決戦兵力である予備隊は、その後方ノア川に掛かる橋の左右に展開していた。その数、九千五百名。予備から三百名を編入して四個編成された正規大隊千六百名、未充足の一個を含む予備大隊四個千五百名、高原戦士精鋭五千名、ワイコウ亡命軍八百名、それに突撃連隊の六百名からなる、きわめて質の高い部隊である。

秘密兵器である『セレンガ』号は、生馬率いる選りすぐりの突撃連隊員百名、漕ぎ手など操船要員五十名を載せ、すでにノア川に浮かんでいた。ただし、こちらの意図を悟られないために、その船体には折り取ってきた枝葉が被せられ、遠目にはその正体がわからないように工夫されている。

夏希は生馬の案内で、『セレンガ』を見せてもらった。全長は二十五メートルほどで、川船としては非常に大きなものだ。幅は八メートルはあるのか。外観は、幅広のボートに寄棟屋根を被せたような形、というところか。小さな庇のついた開口部があちこちにあるが、いずれも小さく、そこから出入りすることはできない。

「今頃掃除？」

数名の兵士が、川から手桶で水を汲んではセレンガにぶっ掛けているのを見て、夏希は問いかけるような視線を生馬に向けた。

「一番怖いのは火矢の攻撃だ。だから、あらかじめ木製の外板に水

を含ませているんだ。そうすれば、着火しにくいからな。その上に、放水システムも完備してある。頂部に這わせたパイプから、手押しポンプで汲み上げた水を流すんだ。中も見せよう」

生馬が渡り板を歩き出した。長身を折り、船尾にある狭い出入口をくぐる。夏希も続いた。

船内は、明るかった。一個だけだが、魔術の光が灯されていたのだ。

「エイラに特例で掛けてもらった。明り取りのために開口部を増やすわけにもいかないし、ランプに頼るもの出火が怖いからな」

言い訳がましく、生馬が言う。

「なんか、臭いわね」

夏希は鼻にしわを寄せた。油と何かの薬品を混ぜたような臭いが充満している。

「防水用樹脂と、潤滑用油の臭いだよ。推進用内輪を駆動する機構の軸受けだの歯車だのには、潤滑剤として柔らかい樹脂と椰子油を練ったものを使っている。防水用には、乾燥して硬化すると完全防水になるタイプと、粘性のあるタイプを併用している。いずれにしても、動き出したら相当水漏れするだろうから、あか塗り役は指名してあるが」

船内には六つ、木製の箱のようなものが床から突き出していた。

「これが、内輪？」

「そうだ。内部に羽根車が入っている。そいつを回転させて、進むわけだ」

箱の左右からは、一メートル間隔くらいで木製の歯車を取り付けられた金属製の棒が突き出していた。床に打ち付けられている腰掛のようなものには、自転車のペダルを思わせる機構がついており、そこにある大きな歯車が、金属棒の歯車と噛み合わされている。

「これ、ギア比とか漕ぐタイミングとか工夫しないと、まともに動かないんじゃないの？」

「実験してみたが、うまく行ったそうさ。長時間漕ぐわけじゃない

からな。今日はとりあえずタナシスが作るであろう仮設橋にぶち当たるまで持つてくれればいい」

厳しい表情で、生馬が言う。

一方タナシス派遣軍も、順調に戦闘準備を整えていた。平原入口より十キツホほど北に、素早く仮設橋を設置する。水流に逆らわぬように縦に川船を並べてロープで繋ぎ合わせ、その上に半割りにした丸太を並べたものだ。さらに安定させるために、長い杭が何本も河床に打ち込まれ、川船に縛りつけられる。

「この戦、負けるかも知れぬな」

作業の様子を見守りながら、シエラエズ王女はそつとつぶやいた。「なにをおっしゃいますか、閣下」

ランブーン将軍が、聞きとがめる。

「状況が、事前情報とあまりにも違いすぎる」

南の陸塊一の強国であるルルト王国と、その南に位置するワイコウ王国の仲は良くない。これは、事前情報通りであった。それに基づき、シエラエズはワイコウ王国に事実上の降伏である『中立宣言』を行わせ、首尾よく魔力の源を確保した。

だが、政治的に統一されておらず、平和は保たれているものの主要国家間では対立が続いているはずの平原各国は、その軍力を統一運用してタナシス派遣軍に対し激しい抵抗を続けている。さらにその上、平原とはるくに接触もなく、一部では軍事的ににらみ合っていたはずの高原諸族が、何万もの戦士を派遣し、平原諸国と肩を並べて戦っている。

予想外の展開である。シエラエズは、優秀な軍人の常として、今回の遠征を楽観視せず、かなり苦戦することを想定して慎重に戦略を組み立て、実行してきた。だが、現状はシエラエズが想像したもつとも悲観的な設定を上回っていた。

「もちろん、わたしも武人だ。簡単に音をあげたりはしない」

シエラエズは妖艶に微笑むと、ランブーン將軍を見据えた。半ばお目付け役として、姉のエミスト王女に押し付けられた副司令官だったが、なかなか優秀な男である。すでにこの遠征で、シエラエズの信頼も勝ち得ていた。王女の笑みと視線を受けて、ランブーンがやや赤面する。

「仮設橋設置終了次第、予定通り攻撃を開始するぞ。敵の指揮官は有能だが、間違いをしでかすこともあるだろう。敵の失策を期待して作戦を立てることは愚かだが、敵の失策を見逃さずそこに付け入るのは賢いやり方だからな」

やがて、作業が終了した。一個団五百名の自治領兵が実際に渡ってみて、強度と安全性を確認する。

「よろしい」

設置完了の報せを受けたシエラエズ王女は、ただちに攻撃開始を下命した。

タナシス軍は、やはり東岸を主攻としていた。先鋒は、すでに麻薬の影響下にある奴隷歩兵团四個二千名。そのあとに、正規軍十九個団九千五百名が順次続く。狂戦士と化した奴隷歩兵を突撃させ、共同軍側戦線を混乱させているあいだに、正規軍の陣形を整えて勝負に出ようという作戦である。

駆け足で突っ込む奴隷歩兵たちに、一万を越える高原弓兵から矢が降り注ぐ。何本も矢を受けても倒れぬ奴隷歩兵に対し、防柵の内側に三重に陣取る市民兵士が長槍を突き立てた。防柵を突破しようとする奴隷歩兵には、高原投げ槍兵が容赦なく投げ槍を投ずる。

防御陣地が、拓海の当初構想通り浅いものながら水濠付きであれば、あるいはこの狂戦士たちによる突撃を防げたかもしれない。または、守備についていたのが市民軍ではなく、精強な共同軍正規大隊であったならば。

ごく一部ではあったが、麻薬でハイになり、痛みを感じなくなっている奴隷歩兵が防柵を乗り越え、市民軍兵士たちのあいだに踊り

込んだ。すぐさま駆けつけた高原投げ槍兵がこれを刺殺しようとするが、狂戦士はしぶとく抵抗し、曲刀を振り回す。

市民軍長槍隊の横陣が乱れたせいで、さらに多くの奴隷歩兵が防柵の内側に入り込んだ。数箇所、防柵そのものが引き倒される。

開戦からものの数分で、共同軍西岸部隊の統制は乱れ始めた。

「やべえ」

戦場全体を見渡せる櫓の上で、拓海は呻いた。

ノノア川東岸の状況は安定していた。しかし、西岸は早くも危機的状況にある。特に市民軍部隊は浮き足立っているようだ。横陣は崩れつつあり、高原投げ槍兵によるカバーが間に合っていない。このままでは、高原弓兵部隊に被害が及ぶだろう。

……早すぎるが、負けるわけにはいかない。

拓海は作戦計画の変更を決断した。決戦兵力は、敵にそれを回避する余地があるうちに投入すべきではない、というのは、戦術の大原則である。ポーカーで言えば、相手が余裕でホールド（降りる）を決断できる段階で勝負に出てはならないのだ。もはやホールドできないところまで追い詰めた状態で、こちらがすべてのチップをつぎ込むのが、大勝する秘訣である。

その原則を、拓海は枉まげた。すでにタナシス軍右翼部隊は、続々と平原に侵入し、隊列を整えつつある。まず間違いなく、質の高い正規軍部隊だろう。十分に陣形を整えたこれら部隊が前進を始めれば、数で勝っていても市民軍と高原戦士だけでは対抗しきれない。防衛ラインを突破され、平原での機動戦に持ち込まれば、量よりも質がものを言ってくる。戦場レベルでの正確かつ速やかな部隊機動は、訓練でしか身につけることはできないからだ。すなわち、錬度が高い方が断然有利となる。

「竹竿の君に指示。予備軍すべてを左翼後方へ。適宜防衛線を補強しつつ、敵捕捉に備えよ。続いて『セレンガ』に指示。計画通り突

「入せよ」

「出航する！ 係留索切れ！ 漕手、前進低速！ 舵左一点！」

生馬の命令が、『セレンガ』船内に響き渡る。

羽根車ひとつ当たり六基のペダルがゆっくりと漕がれ、セレンガがのっそりと動き出した。たちまちあちこちから水漏れが始まる。塗汲み担当が、さっそく活動を開始した。

生馬は脇の小窓から頭を突き出して、前方を確認した。ノノア川の中央に乗ったことを確認してから、頭を引つ込めて命令をがなる。「よし、舵中央！ 漕手、前進中速！」

漕手のペダルの動きが早くなった。樹脂が摩擦で熱せられたのか、船内に異様な臭いがこもり始める。それまでは比較的静かだった船内が、急にやかましくなった。ぎしぎしという軋むような音に、金属がこすれ、あるいはぶつかり合うがちやがちやという音が重なる。水漏れも悪化し、塗汲み担当者の動きも慌しくなる。

船外では、船首部分に被せてあった枝葉が、風圧を受けて徐々に川面に落ち始めた。銅板で補強し、さらに先端部に鑄鉄の塊を取り付けてある衝角が、彫刻刀の刃先を思わせる禍々しい姿をあらわにする。

「阻止しろ」

内心の狼狽を押し隠し、シエラエズ王女は冷静な声音で命じた。敵の意図は明白だった。仮設橋を切断し、タナシス派遣軍の兵員移動を阻止する。その上で、ノノア河岸の一方に集中的に兵力を投入、量で押し切る作戦だ。

いまのところ、ノノア川西岸の戦況はタナシス軍有利のまま進んでいる。東岸も、有利ではないが予定通りに推移している。

おそらくは、ノノア川を下ってくるあの船は敵の切り札だろう。

これを阻止できれば、この戦いに勝つ可能性は増大する。そしてもちろん、阻止に失敗すれば、まず間違いなくタナシス派遣軍は敗北するだろう。

「予備部隊すべてを一時的に投入してもよい。場合によっては、奴隷歩兵に麻薬を使わせる。絶対に、あの船を阻止するのだ」

重ねて、シエラエズは命じた。

タナシスの仮設橋まで約八百メートルの位置で、生馬は前進高速を命じた。

すでに、セレンガはタナシス軍支配地域に入り込んでいた。両岸から、さかんに矢を浴びせられつつあるが、損害は皆無だ。外板は分厚い板を張り合わせてあるから、矢が突き立っても貫通することなどあり得ない。

「生馬様、前方に複数のかがりびの篝火が見えます！」

船首部の覗き穴から進路前方を見張っていたソリスが、そのままの姿勢で報告した。

こんな真昼間に篝火は必要ないし、戦闘中に戦場で米を炊くこともあるまい。間違いなく、火矢の準備だろう。火薬を使った兵器が普及するまでは、火矢は重要な対艦攻撃手段だったのだ。

「ポンプ稼働！放水開始！量は半量でいい！」

生馬は待機していたポンプ係に命じた。二人の兵士が、ゆっくりとした速度で手前の手押しポンプを押し始める。船底から汲み上げられた水が、パイプを通じてセレンガの外板上部に導かれる仕組みである。

セレンガが、仮設橋まで六百メートルの位置に達した。待ち構えていた奴隷警兵隊が、左右両岸から火矢を浴びせかけてくる。鏃に布を巻き、烧夷性の樹脂と油を混ぜたものを浸み込ませ、点火したものだ。薄いオレンジ色の炎を引きながら、数百本が一度に宙に舞う。

「ポンプ全量！」

生馬が命じる。

すでに、セレンガの外板は大量の水で濡れていた。そこへ、二百本を越える火矢が突き刺さる。

小さな炎を無数にまわりつかせながら、セレンガは前進を続けた。火矢自体は燃えているものの、すでにたっぷりと水分を含んでいるうえに、常に水が上から流され続けているので、外板に着火することはない。

さらに火矢が飛ぶ。樹脂と油が燃える黒い煙の尾を引きながら、セレンガはなおも北進を続けた。

夏希率いる予備部隊九千五百の投入で、ようやく共同軍左翼が安定する。

狂戦士化した奴隷歩兵二千名は、ほぼ壊滅していた。だが、彼らの犠牲によって稼いだ時間を使い、タナシス王国正規軍十九個団九千五百名は整然たる方陣を整えて、共同軍防衛線に襲い掛かりつつあった。

このままでは持たない、と判断した夏希は、グリーンゲ將軍に高原戦士五千名を預け、左翼戦線のもっとも西側から逆襲に出るようによ請した。一時的にしる、タナシス軍の勢いを止めることができれば、防衛ラインを強化する余裕が生まれるはずだ。

「川船です！」

ソリスが叫ぶ。

岸に舫ってあった川船十数隻が、兵士を満載してノノア川に乗り出しつつあった。

仮設橋までは、あと三百メートル足らず。

「開口部を密閉しろ！ 漕手、前進全速！ 舵固定！ 総員、衝撃

に備える！ 一気にぶつけるぞ！」

思わず咳き込みたくなるような異臭が充満する中、生馬は怒鳴った。

セレンガが、ぐんと加速した。

タナシス側が狙ったのは、『セレンガ』への移乗であつた。

突っ込んできたセレンガに、舷側を触れさせんばかりに寄せて、何名かが飛び移ろうとする。半数ほどが成功し、燃え尽きた火矢を手がかりにセレンガの外板にしがみつく。要領のいい者は、手にした槍などを外板に突き立て、手がかりとした。

一隻の川船が、セレンガの速度を見誤り、その舷側と接触した。さながらビリヤードの球のごとく弾き飛ばされた川船から、何名もの兵士がバランスを崩して川面に落ちる。

別の一隻は、不運なことにセレンガの正面に出てしまった。強化された衝角が、川船を易々と打ち砕く。二つ折りになった川船は、二十名ほどの兵士を道連れにして、セレンガの船体下に消えた。

突き進むセレンガに、さらに川船が群がる。一足先に船体に取り付いた兵士たちが、手にした得物で外板を突き始めた。継ぎ目に刃先をねじ込んだり、閉められた開口部を探り当てたりして、なんとか船体内部に被害を及ぼそうと試みる。

三十数名のタナシス兵士を張り付かせたまま、セレンガが驍進する。仮設橋までの距離は、もう五十メートルもない。

仮設橋を守っているタナシス兵たちが、橋上から退避を開始したが、全員が逃げおおせる前に、セレンガの衝角が仮設橋に接触した。

川底に突き刺した杭も、セレンガの運動エネルギーを止めることはできなかつた。衝角にぶつけられた川船が、まるで爆発したかのように細片となって飛び散る。道板代わりの半割り丸太が弾かれた

ように宙に舞い、セレンガの前半分が水煙と木片に包まれる。しがみ付いていたタナシス兵たちも、衝撃で振り落とされ、川面に消えた。

めりめりばきばきという音響を残して、セレンガが仮設橋を突き抜けた。あとに残されたのは、十メートルを優に超える断絶部であった。

タナシス派遣軍は、ノノア川の両岸にその戦力を二分することとなった。

73 セレンガ、出撃（後書き）

第七十二話をお届けします。

## 74 捕虜

「修理に要する時間は？」

苛立ちを拳を固めることで押さえ込みながら、シエラエズ王女は補給担当者に問うた。

「予備部隊から兵をお貸しくださいませ、十ヒネ以内には」  
慌てた様子で、補給担当者が答える。

「許可する。急ぎ修理せよ」

「よくやった、生馬！」

拓海はすぐさま伝令を呼んだ。夏希に対し、攻勢に転ずるように指示を出す。東岸の部隊にも、前進攻勢を命じた。敵が態勢を立て直す前に、少しでも圧力を加えておかねばならない。こちらはすでに切り札も予備部隊もすべて投入している。打てる手は使い果たしたのだ。頭の悪い方法だが、ここは数を頼みに力押しするしかない。時間の経過はタナシス側に味方するだろう。

仮設橋破壊という目的を達成したセレンガだったが、無傷ではすまなかった。

船内では、衝撃に備えていたにも関わらず、数名が打撲や裂傷を負った。船体も歪み、いくつもの箇所から水漏れが生じた。

だが、一番の損害は後部の舵を失ったことであった。生馬は、舵を引き上げ式に設計していなかったことを悔やんだが、後の祭りであった。仮設橋との激突で進路を捻じ曲げられたセレンガは、羽根車の固定という急制動にも関わらず前進を続け、仮設橋の下流二百メートルほどの西岸浅瀬に乗り上げ、動きを止めた。

すぐに、セレンガは数百名のタナシス兵に囲まれた。生馬は開口

部を閉じ、船内にこもることを選択した。わずか百五十名では、打つて出ても敵に数で圧倒されてしまうだけだ。

「どじつたな、生馬」

望遠鏡の視野には、河岸で動けなくなったセレンガの姿があった。拓海は素早く鏡筒を動かして、状況を確認した。セレンガを包囲したタナシス兵は、ざっと三百人ほどか。槍を始めとする得物で、船体を攻撃に掛かっている。

「……余裕は二十分、というところか」

望遠鏡を下ろして、拓海はつぶやいた。セレンガの外板は十分な厚みがあるので、槍や長剣で破るには、何時間も掛かるだろう。しかし、戦斧や鋸のような工具を使われたら、そうそうは持たない。

さらなる攻勢に出るしか手はなかった。消極策を取れば、まず確実に生馬以下セレンガの乗員は全滅させられるだろう。もちろん見捨てるわけにはいかない。大きな損害が出ることを覚悟の上で攻め、敵にも損耗を強いる。タナシス軍が遠征軍であり、簡単に兵力増援が望めないという状況を考えれば、敵は消耗戦を嫌がって後退する可能性が高い。

「人命を救うために人命を無駄遣いせにやなんのか」

新たな命令を与えた伝令を送り出した拓海は、そつとつぶやいた。この世でもっとも尊いもののひとつとされる人命が、いとも安易に、そして大量に消費されるのが戦場である。

「戦争とは、究極の贅沢なのかも知れないな」

「突っ込めって言われても」

夏希はぼやいた。

ノノア川西岸では、激しい戦いが展開されていた。高原弓兵の支援を受けながら、市民軍と共同軍大隊の方陣が、タナシス正規軍の

方陣と接触する。

タナシス正規軍はきわめて優秀だった。矢を浴びせられても、槍兵の方陣に圧迫されても、一向に隊列を乱さない。方陣の戦闘力の根幹は、その整然たる隊形から繰り出される打撃力と、互いの弱点をカバーしあうために生ずる固い防御力にある。この秩序を突き崩さない限り、方陣に対し大きな損害を与えることは不可能だ。

西側から攻撃するグリーンゲ將軍率いる部隊も、タナシス正規軍方陣の前に前進を阻まれていた。牽制の役にはたっているものの、状況を打破するには至らない。

膠着化した戦場で主動をつかむには、新たなる因子の導入が不可欠である。これが近代戦であれば、砲撃支援や空爆の要請、あるいはヘリボーンなどによる敵後背への兵力移動といった手が使える。しかしながら、二次元的な平面戦争において、新たなる因子の導入と言えるのは予備部隊の投入以外にない。そして、すでに共同軍側はすべての予備部隊を使い切っている。

両軍は激しいわりに死傷者の少ない、サッカーで例えるならば中盤でのボールの奪い合いのような決め手に欠ける消耗戦を継続した。

「東岸が危険です」

ランブーン將軍が、告げた。

東岸に配されている兵力は、自治州軍と公国軍合計一万二千九百。予備部隊である正規団十個のうち過半数は東岸に待機していたから、それを合わせても一万五千程度。奴隷弓兵も若干いたはずだが、せいぜい千名ほどだろう。

自治州軍と公国軍の士気は低い。歴史的に見れば、前者はかつてタナシス王国に征服された国家、後者は服属を選択して保護国化された国家である。今回の遠征も命じられて兵力を供出しただけで、一般の兵士はもとより将官クラスでさえ栄達よりも生きて故郷に帰ることを強く望んでいるのが現状である。

激しく攻勢に出た東岸の共同軍に押され、自治州軍と公国軍が後退を始めていた。まだ戦線は維持されているが、一箇所でも突破されれば危機的状况に陥りかねない。平原の入口を押さえられたら、取り残された部隊は全滅必死だろう。

「だめか」

シエラエズは眼を閉じた。無理をして踏み止まり、反撃を跳ね返したとしても、こちらの損害もかなりの規模に達するだろう。その状態では、平原制圧どころかジンベル占領さえ不可能になる。そしてもちろん、大幅に兵力を損なってしまうえば平原の追撃を撃退することも困難になるし、場合によっては海岸諸国軍によって退路を断たれかねない。

「撤退する。西岸は抵抗を継続し、撤退の時間を稼ぐ。東岸は徐々に戦線を収縮させよ」

「殿下！」

ランブーン将軍が、眼をむく。

「陛下からお預かりした兵をこれ以上失うわけにはいかない。我々の目的はあくまで魔力の源の確保だ。平原の軍事力に打撃を与えることが目的ではない。ジンベルの魔力の源奪取が無理となれば、これ以上の交戦は無意味だ。仮にマリ・八を確保したとしても、その戦略的価値はない。戦争目的に合致しない戦略目標確保のために兵を損なうなど、戦術も戦略も知らぬ愚者のやることだ。ここは退くぞ」

シエラエズ王女はそう言い切った。

「決断が早いな。さすがにやる」

望遠鏡を覗きながら、拓海は唸った。

東岸でも西岸でも、タナシス軍は巧みに戦線を縮小し、平原入口へと後退しつつあった。背後へ回り込んで退路を断とうとするこちら側の動きは、ことごとく退けられている。拓海が当初意図した、

平原に引きずり込んで敵戦力に大打撃を与えろという戦術構想はもちろん、次善の策として選択した消耗戦も失敗に終わりそうだ。

「負けなかつただけで、よしとするか」

拓海は望遠鏡の筒先をセレンガに向けた。残る懸念は、ここだけだ。

「なんとか持ちこたえろよ、生馬」

いささか短慮、短気の気があるが、生馬は精神的にも肉体的にもタフである。簡単に死ぬような男ではないし、戦場経験も積んでいる。優秀な部下も付いている。だが……。

「くそつ、ここまでか」

生馬は愛剣の柄に手を掛けた。

すでに、セレンガの外板数箇所に拳大の穴が開けられていた。さらに外から斧が振るわれ、がんがんという神経に障る音とともに穴が徐々に大きくなってゆく。

船内には凄まじい熱気がこもっていた。開口部をほとんど塞いだ広いとは言えぬ空間に、百五十名もがひしめいているのだ。

と、いきなり音がやんだ。

「船にこもっている戦士たち。聞こえるか」

代わりに聞こえてきたのは、張りのある女性の声だった。

「……なんででしょうか？」

手槍を握り締めたソリスが、問いかけるように生馬を見る。

「わたしはタナシス派遣軍司令官、シエラエズ王女だ。諸君らの降伏を勧告する。速やかに武器を捨て、船外へ出てきたまえ」

女性の声が、告げる。

「降伏を受け入れない場合は、遺憾ながら部下に殲滅を命ずる。船内に火を投げ込むことになる。一ヒネだけ待つ」

「シエラエズ。本物か？」

むろん、生馬はシエラエズ王女に会ったことはない。だが、容姿

その他に関しては、夏希から詳しく聞いている。

生馬は出入り口に歩み寄った。ソリスが、すかさず制する。

「いけません生馬様。畏かもしれません」

「いずれにしろこのままでは全員が助からん。みんな、俺が出たら閉め直せ。イムール、あとの指揮はお前に任せる。いいな」

生馬は副指揮官格の青年に指揮権を委ねた。

「では、わたしもお供します」

ソリスが、覚悟の表情で言う。

「だめだ。お前は残れ」

生馬は出入り口の門を外した。数秒だけ気配を探り、待ち伏せされていなかったことを確信してから、内開きの扉を開けて頭だけ突き出す。

数百名のタナシス兵に、セレンガは取り囲まれていた。

「降伏する気になったか」

タナシス兵の人垣が割れ、長身の女性が姿を見せた。両脇に、さらに背の高い女性剣士がぴたりと付き従っている。女性の容姿は、生馬が聞き及んでいるシエラエズ王女によく似ていた。いかにも気が強そうな顔立ちだ。

「平原共同軍突撃連隊長、サカイ・イクマだ。シエラエズ王女殿下とお見受けするが」

弓などで狙われていないことを見て取った生馬は、大胆に出入り口から身を乗り出して問うた。汗まみれの身体に川面を渡る風が当たり、心地よい。

「その通り。速やかに降伏してもらいたい」

「どうやら、この戦は平原共同軍の勝ちと見えるが？」

川沿いの街道を続々とタナシス兵が北へと向かっているのを見た生馬は、そう問いかけた。

「たしかに、わが軍は撤退中だが、負けたわけではない。それに、後衛がこの地点に達するまでには、まだ二十ヒネは掛かるだろう。二ヒネあれば、そなたらを殲滅することは可能だが？」

シエラエズ王女が、にやりと笑う。

……本気だな、この女は。

生馬はそう悟った。出入り口から完全に身体を出した生馬は、その長身を活かしてぐるりと周囲を眺め渡した。東岸でも、タナシス軍は撤退中だった。両岸とも整然たる撤退であり、共同軍側の追撃は不十分なものであると思われた。戦いの喧騒も、かなり南のほうから聞こえてくる。シエラエズの言うとおり、このまま船内に立てこもっていても生き延びることは無理だろう。

俺と部下の命を、この女に預けるか。

少なくとも、タナシス遠征軍はルルト王国やワイコウ王国では残虐行為も捕虜虐待もしていないはずだ。軍規は高い。降伏したあとで処刑されるようなこともないだろう。

「結構。部下に降伏を命じよう。ただし、人道的な扱いを希望する」  
「タナシス王族として誓おう。わが国は文明国だ。捕虜は厚遇する」  
シエラエズが、厳かな表情で誓った。

「その言葉、信じよう」

生馬は熱気でむっとする船内に引っ込むと、部下に降伏を命じた。

セレンガ号は、無残に焼け爛れていた。

「間に合わなかった……」

夏希は河原にへたり込んだ。あたりには、焦げ臭い匂いが立ち込めている。

「ご安心下さい夏希殿。船内に死体はありませんでしたぞ」

一足先に駆けつけていたグリーンゲ將軍が、言う。

「戦闘の跡も見られません。おそらく生馬様は降伏されたのででしょう」

キュイランスも、言い添える。

「いまのところ、タナシス側による残虐行為の報告はありません。」

生馬殿は無事でしょう」

グリンゲが、なだめるように言う。

「でも、負けた腹いせとかあるんじゃないの？」

「それは考えられますが、おそらくは生馬殿もご自分と部下が安全であると判断したからこそ、降伏されたのではないですか」

「うーん。そうかも」

なんとなく納得した夏希は、アンヌツカの手を借りて立ち上がった。

「やれやれ。厄介なことになったな」

疲れた顔の拓海が、護衛を四人ほど引き連れて歩んできた。

「追撃は？」

「無理だ。どの部隊もある程度損害を出しているから、再編成しないともにも戦えないよ。一応形だけ出したけど。問題は、敵がどこまで退くかだな。それによつて、今後の対応が決まってくる」

「ねえ、生馬大丈夫かな？」

「それはこつちが訊きたいね。生馬くらいの大物になれば、シエラエズ王女の許可がなけりや処刑はないだろう。あんたはシエラエズに会ったはずだ。敗戦を糊塗するために生馬を殺すようなことをやる人物なのか？」

拓海が眼を細めて、夏希を見上げた。

「……どうかな。計算高くて冷静で、すこし冷酷なタイプに見えたけど。ブランド物のパンツスーツ着て、男性の部下を顎でこき使っている感じ」

「そうか。まあ、捕虜はこちらにも若干いるから、交換を持ちかければ意外と早く帰つてくれるかもしれない」

「生馬、短気を起こさなきゃいいけど」

夏希は生馬がいるであろう北方を見やった。

「まあ、部下が一緒だから大丈夫だろう。あいつは昔から、保護欲の強い奴でな。普段は気が短めだが、弟分とかが身近にいるときは我慢強いんだ。とりあえず、駿のところへ行こう。戦勝報告だ」

「勝つた、と言えるのかなあ」

タナシス軍にもかなりの損害を与えたはずだが、共同軍もそうとうの死傷者を出している。その上、生馬とその部下百五十名も捕虜にされてしまった。これで、勝利と言えるのだろうか。

「今回のタナシス派遣軍の目的はマリ・八攻略だったはずだ。敵が当面の戦略目的達成を断念し、戦闘継続を放棄し、戦場から離脱した以上、戦略的に見ればこちらの勝利だよ。そもそもちろん、駿にはもう少し脚色した勝報をハンジャーカイに持っていつてもらう必要がある」

「なんか、詐欺っぽくてやだなあ」

「軍事が政治に隷属している以上、この手のテクニクは必要不可欠だ。対内向け情報戦の意味合いもある。自分の息子や兄貴が負け戦で死ぬのと、勝ち戦で死ぬのと、どちらが軍や国家に対する反感が増すと思う？ どうせ死ぬのなら、すこしでもかっこよく役に立って死にたいだろ？」

「それはそうかもしれないけど」

「ともかく、平原共同体連絡会議総会に報告をあげないとな。ルルト市奪回の決議は出したが、その後の状況変化で各国の意向が変わっているかもしれない。そのあたりも踏まえると、ここで『がんばったんですけど敵主力の撤退を許しちゃいました、てへっ』みたいな報告はできないだろ。『勇戦したわが軍はマリ・八防衛に成功。目論見どおり侵攻部隊を撃退』くらいは言っておかないと」

「まだ、タナシス軍主力はまるまる残ってるもんねえ」

夏希は小さくため息をついた。まだまだ、前途は多難である。

「残存兵力三万七千三百か」

ランブーン將軍の報告を聞いたシエラエズ王女は、寂しげに微笑んだ。

平原侵攻を目指して進発した部隊は四万五千の兵力を有していた。二回の交戦で、約七千七百を失い、その侵攻意図を挫かれた。

完全な、遠征失敗である。

戦場を離脱したタナシス遠征軍は、宵闇が迫る前に北上を中止し、ノノア川河畔で野営に入っていた。幸いにして、平原側の追撃は執拗ではなく、簡単に追い払うことができた。

「この先、いかがなさいますか？」

「速やかに本国に帰還するしかあるまい」

ふたつ目の魔力の源の確保が絶望的になった以上、南の陸塊に長く留まれば留まるだけ兵を損ねることになる。一兵でも多く無事に本国に連れ帰れば、平原侵攻失敗を糊塗して、魔力の源一個確保という最低限の成功は収めた、と言いつくろつことは可能だろう。

「交渉でなんとか魔力の源を手に入れられないものでしょうか」

ランブーンが、言った。

「望み薄だな。何百日も海岸地帯に居座って圧力を掛けられるのなら別だが、わが方にそのような余力はない。ルルト市まで、一気に退くぞ。ただし、敵の追撃が激しければ、どこかでこれを迎え撃つことはあり得る」

「敵が、驕って追ってきた場合ですな」

「そうだ。わたしの見たところ、敵の総指揮官はかなり慎重な人物のようだから、これも望み薄だがな」

「ワイコウを拠点に、平原軍の南下を押さえつつ海岸諸国の征服を図るという手はいかがでしょうか？」

別の将軍が、進言した。

「それでどうなるというのか？ この地はまだ未開の地なので。タナシス王国であれば、たとえストラウドのような辺境州であっても、失えば経済や物流に大きな影響が出るが、この地は違う。

海岸地帯をすべて失っても、高原はもちろん平原も痛くも痒くもないだろう。圧力にはならぬ。高原はもちろん、平原ですら海岸地帯とろくな交易もせずにはいまままで存続していたのだ。自給自足の農村の民に村の外へ出るなど命じても、誰も困らぬようなものだな」

シエラエズは苦笑した。

「ランブーン」

「はっ」

「ヤンバス將軍に伝令を送れ。十分に警戒せよ、と伝えるのだ」

シエラエズは、ワイコウ付近に駐屯する指揮官の名を出した。その兵力は、正規団二個一千と、奴隷歩兵団二個一千の、わずかに二千。この兵力で、ワイコウ王国主要部とノノア川の海岸平野部北部流域とその上流を警備している。

「承知しました。では閣下は、ワイコウが中立を捨てるとお考えですか？」

「もちろんだ。我々がワイコウよりも北に移動した時点で、共同軍側につくだらうな。今後の外交を考えれば、当然の策だ。これは、止めようがない。だが、ワイコウ人がわたしが考えている以上に馬鹿ならば、挟撃を狙って明日にでも敵にまわるだろう。もちろんそうなれば蹂躪してやるまでだが、兵は損ないたくない。ヤンバス將軍にうまく立ち回らせて、ワイコウ人を抑えさせる」

74 捕虜（後書き）

第七十四話をお届けします。

## 75 緩慢なる追撃

マリ・八防衛線で共同軍側が蒙った損害は、約五千名に上った。

内訳は、正規大隊および予備大隊が約四百、各国防衛隊が約二百、市民軍が約千五百、高原戦士が約二千七百、ワイコウ国軍が約五十、それに生馬率いる『セレンガ』の約百五十である。

「ハンジャーカイに戻った駿から手紙が届いた。ということが集まってもらったわけだが……さみしいな、こりゃ」

拓海が、芝居がかったため気をつく。

マリ・八市街地北郊に張られたテントの中に集っているのは、わずかに三人。拓海その他には、夏希と凜のふたりの女性しかいない。

夏希は凜と眼を見交わした。凜が先に視線を逸らし、無理やり声を張る。

「嘆いていても仕方ないわ。会議しましょうよ、会議」

「じゃ、まず俺から報告する。再編成は一応完了した。昨日到着した高原戦士一万五千を加えて、暫定的総兵力七万五千五百だ。敵は推定四万から三万五千だから、いまだ数だけは有利だな」

「どこか広いところで包囲戦とかやればいいんだけどねえ」

夏希は愚痴口調でそう言った。

「完全な包囲戦をやるには質量ともに不足だな。ノノア川と密林を上手く活かして、こちらが戦術機動を行う余地はあるが敵が戦場離脱しにくいくらいの広さの平地に誘い込めれば、片翼包囲程度で上手に囲い込めればあるいは、とも思うが、どうやらシェラエズ王女はかなりの戦術眼の持ち主らしい。罠には引っ掛かってくれないだろう」

「で、王女様はどこまで退却したの？」

凜が問う。

「今朝の段階で、湿原地帯北部……地図で言うと、この地点だ」  
敷物の上に直に広げられた地図の一点を、拓海が指した。

「いい逃げっぷりね。このままタナシスまで一気に逃げてもらいましょうよ」

「ところが、そもいかないみたいなんだな」

拓海が、懐から紙束を取り出した。

「駿の報告によれば、平原共同体連絡会議総会は荒れたそうだ。いうまでもなく、これにはオブザーバーとして高原諸族代表、ルルト国王名代、さらにはワイコウ亡命軍の政治代表、オープアを始めとする海岸諸国の外交官なども加わっている。いうなれば、南の陸塊における反タナシス同盟の政治的・最高議決機関だ。ここで、かなり足並みの乱れが生じた」

拓海が咳払いして、いったん言葉を切る。

「まず、肝心の平原共同体だが、この内部で意見が分かれた。ルルト王族を事実上直接保護しているスロンとエボダは、ルルト解放を強く望んでいるが、他の国家は人的・経済的負担が大きすぎるとして消極的だ。高原諸族も、当面の危機は去ったとみなして消極的。派遣した戦士の少なくとも半数は帰還させて欲しいと主張している。ルルトはもちろん主戦派で、オープア他海岸諸国もそれに同調している。ただし、本国の防衛隊はなるべく温存したい意向のようだ。ワイコウ亡命軍も積極派だが、兵力はわずか七百五十だ」

「総論としては、タナシス派遣軍を撃退したいけど、どの国もこれ以上死人は出したくない、ってところ？」

「そんなところだな」

夏希の要約に、拓海が同意する。

「で、結果的にどうなったの？」

凜が、訊く。

「共同軍を中心に、高原諸族戦士とワイコウ亡命軍が加わって、統一運用がなされるといっものは従来通りだ。ただし、高原戦士は一万五千三百が引き抜かれ、高原に帰還することになった」

「……痛いわね、それ」

夏希は顔をしかめた。戦慣れはしていないが、勇敢でタフな高原

戦士は、正規軍の少ない共同軍の中では貴重な戦力である。

「まあそれでも、四万もの高原戦士が残ってくれているんだがな。ということ、近日中に総兵力は六万ちよつとに減る。その代わりと言つては何だが、共同軍が海岸地帯に入ったところで、海岸諸国各国の防衛隊五千五百が指揮下に入る。それに加え、オープア海軍と東部諸国海軍、オープアに亡命したルルト海軍主力も同様に指揮下に入ることになる」

「海軍か。拓海、あんたに使いこなせる？」

「いたずらっぽい笑みを浮かべて、凜が訊く。

「正直自信がないね。俺の海軍に関する知識は、弩級艦出現以降だから。むしろ、海のことには駿に任せたほうがいいかもしれない。

……ともかく、総会ではタナシス派遣軍追撃に関してゴーサインが出た。高原諸族も含め、資金抛出の確約も得たそうだ。で、これは総会ではなく、共同体各国の意向なんだが……」

紙束に眼を落とした拓海が、わずかに声を潜めた。

「ルルト王国に恩を売るためにも、派手にルルト市解放をやってくれないか、とのことだ。このままあっさりタナシス派遣軍が退却するのは、政治的にまずい。平原と、それに協力した高原の活躍によって、侵略者タナシス軍が粉碎され、泣きながら海の向こうへ消えてゆく、といったシナリオを描いてるんだな、平原各国は」

「そうやって、少しでも多くルルトと海岸諸国に恩を売って、お金を搾り取るうというのね」

凜が、呆れたように肩をすくめる。

「戦後のことも考慮しているのかしら」

「たぶんな。パリ解放みたいな派手なことをやりたいんだらう」

「米仏は戦後しばらく仲良かったからねえ」

凜が、笑った。

「ドゴールが権力を握るまではな。あいつが暴走したせいで、アメリカとの関係がこじれたが」

釣られたように、拓海も笑う。

「ま、明日中に、兵站面の準備が整う。明後日進発だ」

「ところで、士気はどうなの？ 生馬が捕まっちゃったりしたし……」

凜が、心配げに口を挟む。

「それは俺も懸念していたんだが……あんまり影響ないみたいだな。俺たちが考えていたほど、あいつに人望はなかったのかもしれない」

やや冗談めかして、拓海が言う。

「しよせん異世界人だし、ってこと？」

「それもあるが、宣伝臭が強いとは言え前回が勝ち戦だったからな。はるばる遠征してきた敵が、こちらのホームグラウンド前で阻止されてすくすく逃げていったんだ。士気はあがるよ。今度はこちらが攻める番だ、ってね。じゃ、行軍の概要を説明しとこうか。すでに、ワイコウ王国とは連絡がついている。時期を見て中立を破棄し、こちらの味方につく予定だ。共同軍はワイコウ付近まで進出、そこを拠点として更なる北上のタイミングを計る。当面の目的は、ルルト王国の都市クートロアの解放だ。その後、ルルト市解放を目指す」

「その前に、タナシス派遣軍が本国に逃げ帰っちゃったら？」

夏希は当然の疑問を口にした。

「おとなしく引き上げだな。政治的にはまずいが、これ以上死人が出ないだけでも喜ばんと」

「しかし……ソロバンに合わない戦争よね、今回は」

凜が、言った。

「同意だな。ルルトがかなりの戦費を負担してくれるだろうが、国土が占領された以上その経済力もかなり損なわれているはずだ。各国の経済負担も大きい。よかったことは、これを機会に、駿が構想していた南の陸塊各国すべてを網羅した安全保障体制の構築が速やかに進みそうなくらいか」

「そして、海に向こうには復讐心に燃える大国タナシスが残る、と」「冷戦状態に突入、かな」

凜が、渋い顔をする。

「さすがにタナシス本国に膺懲攻撃を掛けるほどの力はこちらにないからな。一部の兵力を海岸諸国に駐留させて、沿岸防備を固めたり、共同軍に海軍を保有させたりする必要はあるかもしれないが、いずれにしても、金が掛かるな」

拓海が、肩をすくめる。

「ワイコウ王国の状況はどうだ？」

ヤンバス将軍の顔を見るなり、シエラエズ王女はそう尋ねた。

「残念ですが、わが軍が去ったと同時にワイコウは敵にまわるでしょう」

「仕方ないな。動員兵力予想は？」

「防衛隊は五百。市民軍は、一万近く可能です」

「ふむ。一万は痛いな。ワイコウ市街地を焼き払うか」

「閣下！」

ランブーン将軍が、血相を変える。

「冗談だ。その気もその時間もない。平原の追撃が遅れているうちに、ルルトまでたどり着かねばならんのだ」

苦笑しつつ、シエラエズは告げた。

「しかし……悔しいですな。敵に背を向けるのは」

ヤンバス将軍が、搾り出すように言う。

「よいではないか。みな、米を食べるのには飽きたろう」

笑みを深めながら、シエラエズが言う。側近のあいだから、控えめな笑いが起こった。

追撃開始二日目、いまだ共同軍が湿地帯を抜け出せないでいる頃、そこに珍客が現れた。

「お久しぶりです、夏希殿」

拓海に呼び出されて顔を出した夏希に、逞しい身体つきの壮年の

男性が頭を下げる。

よく日に焼けた、地中海系っぽい顔立ちの海岸諸国人。見覚えのある顔だ。

「船長！ マローア船長じゃないですか？ どうしてこんな内陸に？」

夏希は驚いた。かつて、夏希がエイラとサーイエナとともに海岸諸国を訪問した際に、ルルトからオープアへの往復に使わせてもらったオープア海軍軍船の船長である。

「今は出世しましてね。オープア海軍第三戦隊副司令官です」

「ともかくこれで、マローア殿の身分を確認できたわけだ」

ほっとした表情で、拓海が言った。

「なによりです。では、計画をご承認いただけますかな？」

「お預かりした書簡は、平原共同体連絡会議総会に届けます。いまのところ、ランクトウアン閣下の作戦は共同軍に与えられた戦略方針と合致するものですから、わが部隊は作戦の遂行を最大限支援することにしよう」

「ありがたい。力を合わせて、ルルト王国からタナシス人どもを叩き出しましょう」

笑顔で、マローアが言う。

「ちよつと待つてください。話が見えないんですけど」

置いてきぼりにされた夏希は、そう口を挟んだ。ランクトウアンという懐かしい名前も出たが、まったく意味がわからない。

「わたくしから説明しましょう。ルルト王国……正確に言えば、タナシス占領下において抵抗運動や情報収集を行っている地下組織ですが……の要請に基づき、オープアおよび東部沿岸諸国海軍が計画している作戦があるのです。現在、ルルト国内の各港では、百隻を越えるルルトを中心とする民間外洋船舶が抑留されています。さらに、タナシス占領当局は、多数の大型漁船の徴発を開始しました。数日中にルルトに到着するであろうタナシス遠征軍本隊を、ラドーム島および本国へと帰還させる準備と思われまます」

「そうか。三往復したんだから、自分たちの七十隻だけじゃ撤退できないんだ」

夏希はうなずいた。現在ルルト市に向かって後退中のタナシス派遣軍は四万に少し欠けるくらいの兵員数を保持している。これにルルト市などの占領地の防衛に残置した兵力、それに兵站線の維持に割いた兵力を加えれば、四万数千名以上を撤退させねばならないのだ。軍船や輸送船の水夫などを含めれば、五万名前後になるだろうか。

「ルルト市とクートロア市、およびその周辺に残っているタナシス軍は、約四千。ルルト市内には、そのうち千五百しかいません。そこで、タナシス派遣軍本隊がルルト市に到達する前に、地下組織がルルト市街近郊でひと騒動起こします。タナシス兵の一部が市外に出て、港の警備が手薄になったところで、あらかじめ準備していた民間船舶が一斉に出航します。警戒態勢にあるタナシス軍船が阻止しようとするでしょうが、沖合いにはランクトウアン閣下率いる連合海軍艦隊が待ち受けていますので、タナシス艦隊は手出しできないでしょう。民間船舶はそのまま連合艦隊の護衛で、オープアに向かいます」

「……凄い作戦ね。でもそれじゃ、ルルトが困るんじゃないの？ 放っておけば、タナシス軍は本国へ逃げ帰ってくれるんでしょう？ 占領期間が延びちゃわない？」

「たしかに、解放される日が伸びるのは好ましくありませんが、ルルトの富がタナシスに持ち去られるのを見過ごすわけにはいかないのです。多数の船舶、そして水夫たち。ルルト国民と、その他の海岸諸国民である彼らがタナシスに連れて行かれれば、奴隷にされかねません。さらに、タナシス占領軍は、ルルトの保有する資本を根こそぎ持ち去る計画を、秘かに進めているようなのです。今の段階でそれを行えば、間違はなく駐留部隊では統制できない大規模な反乱に発展するので、計画段階に留まっていますが、遠征軍主力が帰還すれば即座に強行するでしょう。この遠征から少しでも利益を上

げようという腹積もりなのです」

苦々しげに、マローアが言う。

「この作戦が成功すれば、タナシス派遣軍をルルトに足止めできる。一度に脱出できるのは、無理しても半数程度だろう。連合海軍対策を考えれば、軍船の大半も撤退船団の護衛に割かねばならないはずだ。そうなれば、ルルト市にこもる敵はせいぜい二万五千。こちらは約六万に、海岸諸国の防衛隊と市民軍二万近くが加わる。上手くいけば、ワイコウからも一万程度動員できるだろう。仮に、タナシス側が撤退をいったん諦めたとしても、四万数千対九万の兵力だ。平原各国が望む劇的なルルト市解放作戦が展開できる可能性が高くなった」

嬉しそうに、拓海が言った。

「理想的な展開ね。上手くいけば、だけど。船長……じゃなかった、マローア殿。成功の確率は？」

「ランクトウアン閣下は、七割と見ています。地下組織が頑張つて、派遣軍が敗退したことを誇張しつつ広めましたからね。敵の士気は、明らかに落ちています」

「七割か。難しいわね」

夏希は腕を組んだ。

「あー、言つとくが、すでにこの作戦は決行が決まってるんだ。マローア殿は、わが方との連携を取るためにいらっしやっただ」

「……そうなんだ」

よくよく考えてみれば……いや、よく考えなくてもそうである。

すでに、シエラエズ王女率いるタナシス遠征軍主力はルルト市まで三日ほどの位置にまで達している。マローアがオープアに戻るはるか以前に、ルルト市街へ入城してしまうだろう。民間船舶脱出作戦は、その前に行われなければならないのだ。

「どござお入り下さい」

慇懃に頭を下げた士官が、天幕のたれ布を上げる。

礼代わりに小さくうなずいた生馬は、その長身を折り曲げて天幕の入口をくぐった。

「待っていたぞ。まあ座れ」

小卓の前に置かれた腰掛に座っているシエラエズ王女が、手まねで敷物に腰を下ろすように促す。一瞬むっとした生馬だったが、相手が大国の王女であることを考慮し、大人しく敷物の上に胡坐をかいた。色々な肩書きを持つてはいるが、生馬は身分的には弱小国家ジンベル王国の一貴族に過ぎないのだ。本来であれば、招いてもらえただけでも感謝せねばならぬ立場である。

捕虜となつた生馬とその部下百五十名だったが、その扱いは悪くなかった。もちろん武器は取り上げられたが、処刑はもちろん虐待された者は一人もない。撤退に際して『自分の食い扶持は自分で運べ』とばかりに米などを担がされたが、これは他のタナシス軍兵士も同様に大量の荷物を背にしていたので、虐待とは言えないだろう。ちなみに、生馬は特別待遇として荷運びを免除されたが、部下の中に体調不良の者がいたので、代わりにその荷を担いだ。重量は二十キロ程度か。日頃から鍛えていたし、行軍速度も早くはなかったので、生馬にとってはそれほど苦にはならなかった。

与えられた食事は、質は不十分だったが量は十分で、タナシス軍の兵站状況が良好であることをうかがわせた。あるいは、食料を敵に残すくらいなら食べ尽くしてしまえ、とタナシス側が考えているせいかもしれないが。

部下たちに対する監視の眼は厳しかったが、生馬はかなり自由な行動を許されていた。手近の兵士を殴り倒して長剣を奪えば、簡単に脱出できると生馬は踏んでいたが、行動には移さなかった。部下がどのような報復を受けるかわからなかったし、逃亡に成功したとしても周囲は湿原地帯である。生きて味方のところへたどり着く自信はなかった。タナシス側もそのことは承知していたらしく、湿原地帯を抜けると途端に警備が厳しくなった。

生馬が得た情報……地理に詳しい部下の推定や、タナシス兵のおしゃべりに聞き耳を立てた結果……では、今現在タナシス遠征軍本隊が野営しているのは、ルルト王国の都市クートロアへあと一日ほどのところらしい。クートロア・ルルト市間は一日行程だから、あと二日で遠征軍本隊はルルト市内へ入ってしまう。

生馬は顔を上げて、シエラエズ王女をじつと観察した。よくよく見ると、王女はそこそ美人と言えた。いささか眼が細すぎ、かつ目尻が吊り上がりすぎではあるが、顔のパーツの形やバランスは整っている。もつとも、生馬の趣味ではないが。

むしろ生馬の気を引いたのは、王女の左後方に立っている護衛の女性剣士の方だった。ちよつと地味目の顔立ちだが、十分に美人の範疇に入る。長い手足はほどよく鍛えられており、なかなか腕も立ちそうだ。その相方の、茶褐色の肌の女性も、それなりに美しい音もなく天幕の中に入ってきた若い女性が、生馬の前にそつと盆を置いた。木製の取っ手つきカップと、同じく木製の小さな皿。カップには、液体がなみなみと入っている。皿の上には、細切りにした干し肉と茹で落花生らしきものが盛つてあった。

「酒が好きだといいが。遠慮なく、飲んでくれ」

シエラエズが、小卓の上のカップを取り上げ、ひと口飲んだ。そばに置かれた皿の上には、生馬のものより品数の多いつまみが盛りされている。

「……いただきます」

生馬はカップを手にした。慎重に、ひと口すする。

ウイスキーの味がした。……いや、この香りはバーボンだ。トウモロコシ臭がする。

南の陸塊で、トウモロコシを栽培しているところはない。となると、この酒ははるばるタナシスから持参したものなのだろう。

「すでに気付いておると思うが、もうすぐ我々はルルト市に到着する。そこで、諸君ら捕虜の処遇だが……」

もったいぶって言葉を切ったシエラエズが、少々いやらしい笑み

を浮かべる。

「条件次第では、部下を解放してやってもいい。タナシスまで連れて行くのも、面倒だからな」

「解放していただけるのであれば、ありがたいお話ですが、その条件とはなんでしょうか？」

「うむ。そなたのみ、タナシスへ同行してもらいたい。なに、残りの人生を北の陸塊で過ごせ、などと言うつもりはない。用件が終われば、速やかに送り返す」

笑みを浮かべたまま、シエラエズが言う。

……なるほど。

生馬は理解した。おそらくシエラエズには、今回の遠征が失敗ではなかったことを証明する必要があるのだろう。捕虜の獲得は、勝利の証でもある。しかし、船の都合で百五十人もの捕虜を本国につれて帰るのは困難だ。そこで、指揮官である生馬だけを連れてゆくことにしたのだろう。

「いいお話ですな。条件は、それだけですか？」

「貴殿には捕虜らしく振舞ってもらおうぞ。反抗はいつさいしないこと。よろしいかな？」

……たぶん、戦勝式典かなにかで、シエラエズの武勇を讃える道具にでもされるのだろう。戦勝のトロフィー代わりに、見世物にされるに違いない。武人としては不名誉だが、それで部下が助かるのであれば致し方ない。

「結構です。そのお話、お受けしましょう」

75 緩慢なる追撃（後書き）

第七十五話をお届けします。

## 76 民間船舶脱出作戦

すでに数日前から、ルルト市を占領するタナシス軍政当局によって徴用された民間外洋船舶……ルルト船籍が七割を占める……は出港準備に取り掛かっていた。船腹の継ぎ目には、麻屑と防水樹脂が詰め込まれ、帆の繕いも終わっている。食料の積み込みも行われ、各船長にはラドーム公国までの海図の写しも配られた。

もちろん、タナシス側は民間船舶が逃亡を図る可能性を考慮し、それなりの手は打っていた。外港の沖には、常に複数の軍船が出て警戒に当たっていたし、夜間に船に残る人員は最小限に留めるように通達を出していた。港自体の警備も、数日前から強化されている。最大の保険と言えるのが、船内への水の持ち込みの禁止であった。言うまでもなく、洋上で水を得るのは困難である。水を積み込まずに出航するのは、自殺行為と言えた。

ルルトの元軍人や有志、一部貴族や王室関係者で構成された地下組織は、ルルト市占領直後から活動を開始しており、自ら立案したこの『民間船舶脱出作戦』に関しても、オープアおよび東部沿岸諸国と綿密な連絡を取っていた。

機密保持のために、作戦決行当日の明け方の時点で、その詳細について知悉している者の数は全部で二十人に満たなかった。脱出予定リストに挙げられている船舶の船長でも、約三分の一が作戦への参加要請を受けていただけで、出航がいつごろなのか、最終的にどこへと向かうのか、警備のタナシス兵をどうやって制圧するのか、航海中の飲料水の確保はどうするかなどの細部は伝えられていなかった。

午前中早い時間に、作戦の第一段階が開始される。市街近郊の農地複数で、都市住民からなる強制徴用者が警備のタナシス兵に反抗し、その一部が手製の武器……農具の多くはそのまま、あるいは少

しばらく手を加えるだけで、効果的な近接戦闘兵器になりうる……  
を手に、立てこもりを行う。

すぐさま、市街地の守備部隊の一部が、反抗鎮圧のために派遣される。その結果、ルルト市内におけるタナシス軍兵力は、一千名以下となった。

その間に、地下組織も動いていた。脱出予定リストに乗っている船の船長すべてと接触し、協力を取り付ける。さらに、警備兵力阻止のための市民動員準備も開始された。

昼近くになると、タナシス側も不穏な動きに気付いていた。おそらくは裏切った船長がいたのだろう、海港付近の警備が急に増強される。昼過ぎには追加の軍船も出港し、通常ならば二隻態勢の警戒船が、倍の四隻となる。

次に動きがあったのは、洋上であった。ランクトウアン王子率いるオープア海軍を主力とする海岸諸国連合海軍から派遣された一戦隊七隻が、ルルト海港沖合いに姿を見せる。タナシス警戒船が、すぐさま集結して迎撃態勢を整えた。待機していた軍船の出港準備も、慌しく進められる。

呼応するように、地下組織側も動きを見せた。動員されたルルト市民に囲まれるようにして、急遽集合を掛けられた民間船舶の船員たちが海港へと向かう。

すぐさま、海港警備の正規団の一部、約百名がその前に立ちはだかる。だが、非武装のルルト市民の群れは、前進を続けた。タナシス兵の指揮官は、慌てて部下に後退を命ずる。歩んでくる市民の数は、三千を越えるだろう。非武装の彼らに刃を向ければ、全市を挙げた反乱に発展しかねない。ルルト市の人口は、約七万。南の陸塊随一の大都市である。これが一斉蜂起すれば、千名程度の占領軍部隊はた易く蹂躪されてしまうだろう。それを恐れていたからこそ、タナシス軍部隊は高い規律を保ち、ルルト王国国民に対する残虐行為や略奪を最低限に留めていたわけだが。

タナシス派遣軍ルルト王国占領部隊……通常は指揮官の名をとってオンスロー部隊と呼ばれる……の指揮所は、市街地西部にある船員用宿泊施設（ホテルや旅館、と言えるほど洗練されたものではなく、船員向け食堂兼居酒屋に貸し部屋が付随している程度の建物である）に置かれていた。

二階の一室に陣取るオンスロー將軍の元には、様々な情報が飛び込んできていた。だがその大半は、地下組織が意図的に流した虚報であった。中には、海岸諸国連合海軍艦艇によって郊外の漁村のひとつが占拠されたなどという情報や、平原の作業員によってシエラエズ王女が暗殺された、ラドーム公国が叛旗を翻したなどの一見してデマとわかる情報まで含まれていた。

「正確な情報をよこせ！ ルルト側の動きをつかみ、先手を取るんだ！」

オンスロー將軍は喚いた。野戦指揮は得意ではないが、兵站などの後方支援に関しては手腕を発揮する、官僚肌の初老の軍人である。扉にノックがあった。当番兵が開けると、褐色の髪の少女が茶器の載った盆を手にしていった。この宿の下働きの一人である。当番兵が盆を受け取ると、少女が一礼して去る。

当番兵はサイドテーブルに盆を置くと、茶を淹れ始めた。すでに習慣と化している、午後のお茶である。当番兵は何の疑いもなく、熱い茶が入ったカップをオンスロー將軍の前に置いた。

三ヒネ後、オンスロー將軍が昏倒した。これが、民間船舶脱出作戦における唯一の死者となる。

『独断専行』という言葉がある。

軍事における独断専行とは、前線部隊指揮官や同様の職務にある者が、事前の作戦計画や上官、あるいは上級司令部の命令に一時的に従わず、独自の判断で部隊運用などの行動を行うことを言う。近

代以降の軍隊においては、分隊長レベルの者に対してさえ、この独断専行の権利が認められている。最前線にいる者こそが、もつとも詳しい敵情を始めとする情報を得ている以上、これを活用しない手はないからだ。不十分な情報に基づいて立てられた作戦計画にこだわっているのは、流動する戦場で好機をつかむのは不可能である。

とはいえ、独断専行は諸刃の剣である。最前線で得られる情報は、ミクロなものでしかない。目先の利益に囚われれば、全体の利益を逸することにも繋がりがかねないのだ。局地的に見れば、無駄としか思えぬ作戦行動でも、戦局全体を俯瞰すればきわめて有用なものである、といったことは、実戦ではしばしば見られるものである。

きわめて中世的な軍隊であるタナシス軍ではあったが、この独断専行の権利は存在していた。だが、これを認められているのは、正規軍団長クラス以上であった。士官学校や下士官教育課程が設けられていない状況では、知識や経験の足りぬ一般の士官や下士官に独断専行を許すわけにはいかない。そしてもちろん、今現在海港に至る街路を封鎖している男は正規軍野戦指揮官クラスで、独断専行の権利はなかった。

彼が命じられたのは、海港の警備だけである。非武装の市民が押し寄せてくるといふ異常事態を処理するには、上官の指示を仰ぐ必要があった。しかしながら、指揮所へ走らせた伝令ははまだ戻ってこない。彼は知らなかったが、指揮所の周囲は地下組織のメンバーと徴用された市民三十名ほどによって、完全に固められていたのだ。出入りしようとするタナシス兵はすべていきなり大きな麻袋を被せたと上に殴打されるといった荒っぽいやり方で捕らえられ、近くの倉庫に簀巻きにして放り込まれていた。仮に、伝令が指揮所内にたどり着いたとしても、そこはオンスロー將軍の突然死でパニック状態であり、まともな指示を受けられるはずもなかったが。

新たな指示が受けられない以上、海港警備責任者は従前の命令に忠実に従うしかなかった。すなわち、「ルルト市民に対しては丁寧かつ親切に接すること。武器などによる威嚇は最小限に留めること。」

不正行為時の逮捕、または自衛のため以外の武器の使用は原則禁止。市民が占領軍に対し敵愾心を持つ行為、特に武装蜂起に繋がりがねない行為は厳禁』

なんとも矛盾した命令である。海港は現在封鎖状態にあり、ここに市民が侵入することは不正行為であり、阻止されなければならぬ。これに伴う武器の使用は、許容範囲だ。だが、武器を振るえば確実に流血沙汰になる。相手は三千名以上である。ほんのわずかなきっかけで、武装蜂起に発展してしまうだろう。

考えあぐねた指揮官は、部下に人垣を作るように命じた。こちらも非武装状態で、市民を押し留め、時間を稼ごうとしたのだ。これにより、一時的に市民の動きは止まったが、他の市民や船員は裏通りや建ち並ぶ家々のあいだを伝って海港へと侵入していった。

「もつと接近せよ。ただし、矢の射程内には踏み込まないように」  
楽しそうに、ランクトウアン王子は命じた。

オープア海軍十七隻。亡命ルルト海軍八隻。東部沿岸諸国海軍七隻の、合計三十二隻。すべて軍船からなる、堂々たる大艦隊である。一個戦隊に釣り出されたタナシス軍船が、こちらを見て慌てて逃げてゆく。

タナシス側の軍船は、全部で十五隻が確認されている。数は少ないが、大きさはタナシス側の方が上である。戦力的には互角だろう。だがもちろん、ランクトウアン王子はタナシス側と一戦交える気はなかった。本作戦の目的は、いかにしてタナシス側死傷者を少数に留めつつ、一隻でも多くの民間船舶を脱出させるかに掛かっている。ルルト国民が、いわば人質に取られている状態なのだ。シエラエズ王女が市民に対し報復を考慮するような事態になってはまずい。

海港に侵入した船員たちが、小船を漕いで三三五五自分の属する

船に乗り込んでゆく。彼らの大半が、ついさきほど脱出作戦について知らされたばかりである。

気の早い何隻かは、乗員が三分の一ほど集まった時点で、早々と出航を開始した。置いてきぼりをくらった船員が、手近の船に潜り込む。

その頃になつてやっと、タナシス側に増援の奴隷歩兵部隊二百名が到着した。だが、奴隷歩兵部隊指揮官には独断専行の権利などまったく与えられていない。いずれにせよ、その時点では海港周辺には騒ぎを聞きつけたルルト市民多数が繰り出してきており、その数は軽く五千名を越えていた。

ランクトウアン王子の艦隊は、タナシス軍船を牽制しつつ、続々と出航してくる民間籍船舶を西方へと逃がした。待ち構えていたオーピア商船から、水を詰め込んだ樽を満載した小船が漕ぎ寄せ、各船に飲料水を積み込ませる。

緊急出航できたタナシス軍船は十隻に満たず、また指令所から明白な攻撃命令が出されていなかったため、隻数で上回る連合艦隊に対し積極的に仕掛けてくることはなかった。

海港内では、出航が続いていた。一部市民をも便乗させた民間船が、帆をあげて港を出てゆく。脱出リストに含まれていなかった小型船や何隻かの漁船も、あとに続いた。

太陽が西に傾き、その色合いが赤味を帯びる頃には、予定していたすべての船舶が、洋上に出ていた。水を受け取った各船は、数隻ごとに船団を組むと、西のオーピア王国を目指した。

シエラエズ王女のもとにこの一件の詳細が届けられたのは、日没後かなり経ってからのことであった。

すでにタナシス派遣軍本隊は、クートロア市に入っていた。ここ

まてくれれば一安心、と誰もが思っていたところにもたらされた、凶報であった。

「やられたな、これは」

シエラエズ王女は、からからと笑った。

「笑い事ではありませんぞ、閣下」

ランブーン将軍が、渋い顔をする。

「敵はよほどわたしを本国へと帰したくないらしい。これは、根本的に計画を練り直さねばならぬな」

「オンスロー将軍の失態ですな。一服盛られて死んだのは当然の報いだ」

苦々しげに、ヤンバス将軍が言う。

「いや。失態とまでは言えぬな。無理に阻止しようとするれば、多くのルルト市民を殺傷せねばならなかっただろう。おそらくは、百年先でも語り継がれるような大虐殺になりかねない。兵力が限られている以上、オンスローが生きていたとしても、民間船舶脱出を阻止するのは難しかったろうな。最悪の場合は、武装市民にオンスロー部隊が市内から叩き出され、わが軍は腹背に敵を抱えたまま立ち往生したかも知れぬ」

真顔に戻ったシエラエズが、言った。

兵站担当者呼び寄せたシエラエズは、側近を交えて撤退計画を練り直した。侵攻に際し、軍用輸送船五十五隻に搭乗した兵員数は最大で一万七千二百五十名。ただし、当座の食料なども積載していたので、撤退の際にはそれ以上の兵員を詰め込めるはずだ。

「軍船にまで詰め込んでも、二万一千が限度か」

計算結果を見たシエラエズ王女は、軽くため息をついた。

現在、彼女の手元にある兵員数は三万九千三百。これに、オンスロー将軍が指揮していた四千名が加わる。合計、四万三千三百を、無事にラドーム公国まで撤退させねばならない。

「逃げ損ねた民間船を徴用すれば、半数は撤退できるでしょう」  
ランブーン将軍が、言った。

「ラドームで新たに船舶を徴用できれば、二回目の撤退はさらに大勢運べます」

側近の一人が、進言する。

「精銳を残さざるを得ないな。正規団32個で一万六千。これに奴隷歩兵と弓兵をあわせて七千。合計二万三千あればルルト市に籠城できるだろう」

「閣下。僭越ながらわたくしがその指揮を執らせていただきます」  
ランブーン将軍が、進み出る。

「却下する」

シエラエズが、即座に拒否した。

「では、わたくしが」

すかさず、ヤンバス将軍が自分を売り込む。

「ヤンバス、そなたには第一次撤退部隊の指揮を命ずる」

「閣下。まさかとは思いますが……」

ランブーンが、眉をひそめた。

「わたしは最後までこの地に留まるぞ。ランブーン、そなたは補佐を頼む」

シエラエズが宣言し、にやりと笑った。

翌日ルルト市に入城したシエラエズがまず着手したのは、ルルト側地下組織の駆り出しであった。もともと、これを予期していた地下組織側はすでに組織を解散、証拠隠滅を行ったうえで市外に逃亡していたので、成果はほとんどあがらなかった。オンスロー将軍に毒を盛ったと思われる宿の関係者も、すべて姿を消していた。

二日後、ヤンバス将軍率いるタナシス派遣軍第一次撤収部隊がルルト海港を出航した。外洋船に搭乗した兵員は、公国軍団十三個六千四百名、自治州軍団十一個五千五百名、奴隷歩兵二千名、奴隷弩兵五千三百名、正規団の軽傷者二千名の、合計二万一千二百名。軍船十一隻に護衛された七十隻を超える大船団は、監視していたオー

プア海軍艦艇を振り切ると、一路北のラドーム公国を目指した。

翌日、残留したタナシス派遣軍はクートロア市およびルルト市郊外を放棄し、ルルト市街地に立てこもる構えを見せた。

「早ければ五日、遅くとも六日後には船団が戻ってくるはずだ。すでに一日過ぎたから、猶予は四日とみるべきだな」

早口で、拓海が言った。

ワイコウ王国から提供された約八千名を加えて、七万を越える規模となった共同軍は、ようやくクートロア市内に入ったところだった。初動の遅さもあるが、寄せ集めの大軍であり、かつ川船の不足それにワイコウ王国の食糧事情がタナシス派遣軍のせいで悪化していたため、兵站状況が思わしくなく、行軍速度はかなり低速であったのだ。

「ルルト市まで一日。偵察と情報収集に一日。残り二日以内に制圧しないと、逃げられちゃうわけね」

夏希は唸った。

「生馬はもう船に乗せられちゃったのかな？」

凜が、問う。

「貴重な捕虜、と考えればもうすでに洋上にいるだろうな。だが、シエラエズ王女はまだ居残っているらしいから、その手元に置いてある可能性もある。どちらとも言えんね」

「で、何らかの策があるんでしょうね、参謀長」

肩をすくめた拓海を、夏希はじっと見つめた。

「多方向からの同時飽和攻撃しかないな。オープア防衛隊と、東部海岸諸国防衛隊には、それぞれ一万程度の高原戦士を貸してやるつもりだ。ランクトウアン王子には海から。オープア防衛隊が西から。東部海岸諸国防衛隊が東から。そして俺の主力が南から一斉に攻め立てる。敵予想兵力は二万ちよつとだ。軍船は四隻しか残っていないし、一箇所は必ず破れるだろう。市街地に入り込んでしまえば、

こつちのものだ。市民は味方だしな」

「あんまり市街戦はやりたくないわね。あのゾンビ兵士のことを考える」と

「そうだな」

夏希の言葉に、拓海が同意する。麻薬でハイになった奴隷歩兵なら、民間人も見境なく殺傷しかねない。

「とにかく、今日は兵に飯を食わせてたっぷりと寝てもらおう。凛ちゃん、補給局と兵站局の指揮は任せる。俺は、同盟各国部隊と共同作戦に関して連絡を取る。夏希、ルルト市周辺の詳細な地図と詳しい住人を見つけて、作戦局と地図部の連中と一緒に話を聞いてくれ。大まかな布陣計画を早めに立てたいからな。あ、工兵部の連中も一緒にね」

「了解」

76 民間船舶脱出作戦（後書き）

第七十六話をお届けします。

## 77 戦略的包囲と戦術的包囲

軍事における用語としての包囲には、二種類ある。すなわち、戦略的包囲と戦術的包囲である。

前者は言うまでもなく、戦略的状况における包囲である。つまり、味方部隊の配置によつて敵が戦略的に「動けない」状況を作り出せば、そこで戦略的包囲に成功したことになる。例えば、一本道を進軍中の敵部隊に対し、その道の両端に味方部隊を配すれば、戦略的包囲が完了した、と看做す事が可能だ。戦略的包囲とは、あくまで敵が「動けない」あるいは「動きにくい」状況を作り出すことが目的だからだ。

戦術的包囲は違う。その目的は、あくまで敵の殲滅、ないしはそれに近い打撃を敵に与えることにある。したがつて、ただ単に囲んだだけでは、戦術的包囲とは言えない。包囲部隊各個が有機的に連携している状態でなければならぬのだ。この原則を理解せず、ただ単に漫然と敵の周囲に部隊を分割して配置し、兵力の優越という有利な点を自ら捨ててしまい、敵に局所的、時限的な兵力の集中を許し自滅するといった例は、歴史上いくつも見られる。

包囲の一般的なイメージは、動きが少ないにらみ合いに近いものだろうが、上質な戦術的包囲は、きわめて攻撃的かつ機動的である。すなわち、一部の部隊が交戦によつて敵を拘束し、その間に他の部隊が退路を断ち、さらに主力部隊が敵側面ないし後背という弱点に襲い掛かるのが、理想的な戦術的包囲と言える。

今回のルルト市攻防戦で、拓海が採用した作戦も、このような戦術的包囲のひとつのバージョンであった。

「西側の敵戦力は、オープア防衛隊を中核として、推定三万。東側の敵戦力は、東部海岸諸国防衛隊を中核として、推定二万五千。南

側の戦力は、平原共同軍を主力として、推定四万。以上です」

「少ないな。二万以上の予備部隊を控置しているに違いない。こちらに戦力の分散を強いた上で、突破できそうな箇所に大量の予備部隊を投入する作戦だな」

ランブーン将軍の説明に、シエラエズが微笑んだ。

「報告は入っていませんが、海軍の攻撃もあるものと思われます」

「だろうな。ま、切り札を使えば、二日程度は持ちこたえられるだろう」

立ち上がったシエラエズが、窓際に寄った。すでに真夜中近いが、空に星は見えない。

「雲が多いな。明日の天候はどうだ？」

「おそらくは雨かと。海も、若干荒れてきております」

側近の一人が、答えた。

「不利だな。この地は雨が多い。敵は雨中での戦闘に慣れているはずだ」

シエラエズは顔をしかめた。

遠方には、いくつもの小さな明かりがちらついているのが見えた。包囲軍の、野営の火であろう。

「あの中に、彼女もいるのだろうか」

「竹竿の君ですか。まず間違いない、いるでしょうな」

シエラエズの独り言じみた言葉に、律儀にランブーンが答えた。

捕虜にした敵兵士。街の噂。何度も聞いた名である。戦女神のごとく、竹竿を振り回す美しい女性。その正体が、以前シエラエズに目通りした人間界縮退対策本部部長補佐を名乗っていたナツキという女性と同一人物だと知ったのは、つい最近のことである。

「美しく、そしておもしろい女だ。もう一度会ってみたいものだな、できれば戦場以外で」

夜半から、雨が降り始めた。

「珍しいわね。こんな曇天」

夏希は天幕の入口から顔突き出して、空を眺めた。すでに明け方だが、外は薄暗く、温かな雨がしとしと降っている。まるで日本の梅雨時のようだ。

「どちらに有利に働くかしらね」

夏希の下から顔を突き出した凜が、問う。

「そりゃ、立てこもっている敵の方でしょう。濡れなくてすむし、ぬかるみに足を取られることもないし」

今回、夏希が仰せ付かった任務は二万からなる予備部隊の指揮であった。半数が市民軍、残る半数が高原戦士からなる、あまり上質とは言えぬ部隊である。一応南側から攻める共同軍主力の背後に位置するが、状況によっては東からのオープア部隊や、西からの東部海岸諸国部隊を支援することもありうる遊撃部隊だ。

「ま、温かい雨だから、体が冷えることもないし」

戦支度を整えた夏希は、アンヌツカを伴って天幕の外に出た。平原や高原の民には、雨具を使う習慣はない。雨季であっても激しい雨は短時間で降り止むので雨宿りすれば済むし、仮に濡れたとしてもすぐに乾いてしまうので、誰もが雨に濡れることを厭わないのだ。一番雨具に近いのは頭に被る笠だが、これも主たる目的は日除けである。雨季のない海岸諸国にはさすがに雨具があるが、防水布を使った合羽のようなものであり、あまり普及していない。

「……そうしてみると、人類の進歩って、なんなのかしらね」

夏希は皮肉めいた笑みを浮かべた。雨の中でも雨具を使い、仕事や作業を強いられたり歩行を続けたりする現代日本の人々と、雨が降れば止むまでのんびりと休憩していられる平原や高原の人々。どちらが本当に豊かな暮らしをしているのであろうか。

ルルト王国の王都ルルト市は、ノノア川河口の西に位置する大都市である。

河岸から都市東端までの距離は八百メートルほど。むろん、洪水対策のためである。都市東端には高い堤防が築かれており、東からルルト市への出入りは階段を使うしかない。

最初に戦端が開かれたのは、その東側からであった。東部海岸諸国防衛隊と市民軍、高原戦士の計二万二千が、一斉に押し寄せる。

高い堤防の防御能力を当てにして、こちらを準備していたタナシス軍兵力はわずかに四千五百名であった。堤防の上に陣取った奴隷弩兵が、押し寄せる軽装備の市民軍に矢を浴びせる。すかさず、高原戦士弓兵が射返す。

西側と南側からの攻撃は、ほぼ同時に始まった。西側の攻撃部隊はオープア防衛隊、オープア市民軍、高原戦士の計二万五千。南側からは共同軍主力として、二万八千名。その内訳は、共同軍正規部隊、平原各国防衛隊、平原市民軍、高原戦士、それに新たに加わった新生ワイコウ国軍兵士を交えた元ワイコウ亡命軍、これも新たに参加したワイコウ市民軍など、多岐にわたっている。

対するタナシス軍は、西側に五千五百、南側に六千の兵力を貼り付けて待ち構えていた。兵力差は、単純に見ても四倍半である。市街地にこもっているとは言え、ルルトは城塞都市ではない。明らかに、タナシス側は不利であった。

「予想通りではあるが、泥臭い戦いになったな」

ルルト市街地から南へ約一キロ、農家の屋根の上に陣取った拓海が、ばやき気味に言った。

夏希はその傍らで、望遠鏡のレンズについた雨のしずくを布で拭いた。うつとおしい雨は、霧雨状になってなおも降り続けている。

市街地外縁での防御戦闘に失敗したタナシス側は、抵抗ラインを下げて市街地内部での防御に作戦を切り替えたようだった。街路にバリケードを築き、建物そのものを遮蔽物にして、こちらの前進を阻もつとしている。随所で、一軒の家屋の支配権をめぐって小部隊

同士が激突したり、ひとつの部屋を取り合ったりというきわめて局所的な小戦闘が行われていた。

「まるでスターリングレードだ」

続けて、拓海がぼやく。

泥臭い戦闘は、午前中いっぱい続いた。汗と血と雨にまみれた両軍兵士が、街路の石畳の上で、商家の軒先で、あるいは民家の居間や食堂の中で、近接戦闘を繰り広げる。高原投げ槍兵の多くは、家屋内での戦闘では得物を鉈に持ち替えて振るった。狭苦しい場所では、長物は使いづらい。果敢に接近戦を挑み、器用に鉈を操る高原戦士を前にしては、さしものタナシス正規軍兵士も苦戦を強いられた。

拓海の命令で、最前線の部隊が順次交代し、昼食を含む休憩を取る。夏希も自分の部下……二万人の予備部隊……のところへ戻ると給食の手配をした。すでに、参謀部補給局食料部によって、コートロア市民有志が動員されて、雨よけの仮小屋や天幕の下で早朝から大量の米が炊き上げられている。夏希自身も食欲はなかったが、無理やり白米をわずかな野菜の漬物とともに口に押し込んだ。このままいくと、徹夜での戦いになるかもしれない。へばらないためには、食べておくしかない。

「そろそろ限界だな。例の策を」

「はっ」

シエラエズ王女の命令に、ランブーン将軍が厳しい表情でうなずく。

十数ヒネ後、東西南三箇所の戦線に、一斉に麻薬を服用した奴隷歩兵が現れた。その数は少なかったものの、一時的にはあるが包囲側の攻勢が鈍る。特にゾンビ兵士に始めて出くわした海岸諸国の防衛隊や市民軍は、その対応に苦慮した。

「やられたな」

拓海がつぶやく。

ゾンビ兵士で時間を稼いだタナシス側は、東西南すべての戦線から一斉に兵力の引き上げを行っていた。そしてそれら兵力は、ルルト海港とその周辺に再集結していた。

「こちらの有利な点である兵力の優越を消すために、あえて大幅な戦線の縮小を行ったわけだ。たしかに、連中にはルルト市そのものを防衛する意味はないからな。くそつ。あんな狭いところにこもられたんじゃ、隙が無さ過ぎる」

「ランクトウアン王子に、海から攻撃を掛けてもらったら？」

夏希はそう提案した。

「あまり意味はないな。敵の予備隊を引きずり出して消耗させる戦法は、予備隊をいかに早期に、かつ主戦場より離れた場所で使用させるかがポイントだ。あの狭い防衛陣の中で予備隊を使わせても、あまり意味はない。加えて、戦線縮小により兵力の節約ができ、予備隊の兵員数も当初より増加しているだろう」

「じゃ、手はないの？」

「一番効果的なのは風向きを見計らって火をつけちまうことだが…さすがにそいつは無理だ」

拓海が、自嘲気味に笑う。

「明日までに制圧できないと、逃げられるわよ」

「市街戦は難しいんだよ。機械化された現代の軍隊でさえ、都市の制圧は歩兵に頼らにゃならん。当然、時間が掛かる」

「映画でよく見るやつね。ドアを蹴破ったり、部屋の中に手榴弾を投げ込んだりするやつ」

「そうだ。損害も当然多いし、辛気臭いルーチンワークとなる。まあ、このまま圧力を掛け続けるしかないな」

「どつやら、共同軍側が有利なようだな」

戦闘の喧騒が近付いてくるのを聞き取った生馬は、部下への励ましの意味も込めて聞こえよがしにそう口にした。

海港そばの倉庫に、生馬とその部下百五十名は閉じ込められていた。見張りはいないが、すべての戸口と窓には外から角材が打ち付けられているので、逃げる手立てはない。

すでに、生馬が部下の解放と引き換えにタナシス本国へ捕虜として連れて行かれることは、全員に知れ渡っていた。主だった士官らは生馬に同行を申し入れていたが、生馬はソリスのそれを含め、すべて拒否した。辱めを受けるのは、一人で十分である。

解決策は、意外な方面からもたらされた。

「お久しぶりですな、夏希殿。拓海殿、作戦への協力、深謝いたします」

突然陣営に訪れたのは、ランクトウアン王子であった。

「これはこれは、殿下。民間船舶脱出作戦の成功、おめでとつございます。鮮やかなお手並みでした」

拓海が、心底からと思われる祝辞を述べる。

「これも共同軍の協力があればこそです」

ランクトウアン王子が、その端正な日に焼けた顔をほころばせる。殿下。後ろの方はどなたですか？」

夏希は、王子の背後で突っ立っている男性を手で指し示した。が、つちりとした体格の中年男で、褐色に近い肌にウエーブした黒髪。海岸諸国人には見えない。

「紹介しましょう。ラドームの商人、イエスパ船長です」

王子に促され、中年男性……イエスパが半歩前に出る。

「彼は主にオープアとラドームのあいだで商売をしておりますね。わたしが子供の頃からよく知る人物です。今日こうして拓海殿と竹竿の君のもとへと参ったのは他でもありません。船長がもたらして

くれた情報に基づく作戦に協力していただきたいのですよ」

「作戦ですか」

拓海の表情が、急に生氣を帯びる。

「ご存知かと思いますが、ラドームには反タナシス組織があります。退位を強いられた先王……現公王女の父君ですな……を再び元首として戴き、ラドーム王国の復活、すなわちタナシス王国の支配からの脱却を目指している組織です。タナシス統治下では当然非合法活動ですから、地下組織ですが。実は、そこがタナシス派遣軍の第二次撤収船団の航行に関する諸情報入手したのです。これを利用すれば、洋上でわが艦隊がタナシス船団を捕捉するのも可能かと」

「その情報を、イエスパ船長が伝えてくださっただけですね」

夏希はそう口を挟んだ。

「その通りです。出発時刻、その後の針路、こちらの艦隊を避けるための変針位置など。ルルト市の沖合いで待ち構えていれば、捕捉できないこともないですが、長時間の待機は困難ですし、夜陰に紛れて接近されれば阻止は不可能です。ルルト海港出航時を叩こうにも、兵員満載の敵では返り討ちにあうおそれがある。しかし、空船同然の往路で、しかも昼間に油断していると、急襲すれば、勝利は間違いありません。何隻か沈めるか拿捕できれば、それだけでタナシス側の撤退計画を妨害できます」

「素晴らしい。で、我々への協力要請とは？」

「艦隊を増強するために、すでに二十隻を超える民間船舶を臨時に海軍に組み入れましたが、兵員が足りていないのです。オープアおよび東部海岸諸国の防衛隊と、市民軍の一部を引き抜かせてください。それと、高名な高原弓兵もお借りできればありがたい」

「お易いご用です。すぐに手配しましょう。ですが、ひとつだけ条件が」

「なんですか？」

「共同軍側の高級指揮官も、船に乗せていただきたいのです。もちろん、殿下の指揮下に入りますが」

「その程度でしたら。まったく問題ありません」

鷹揚に、ランクトウアンが微笑む。

「じゃ、頼んだぞ」

拓海が、夏希の肩に手を置いた。

「……って、わたしが行くの？」

「殿下、ちよつと失礼します」

にこやかに言った拓海が、夏希をずるずると天幕の隅へと引き摺ってゆく。

「いいか、夏希。この作戦、パーフェクトに行ったら第二次撤収船団に大打撃を与えて、ラドームに追い返すことが可能だろう。それを知ったシエラエズ王女が、あっさり降伏するなんてシナリオも考えられる。そうなると、共同軍がルルト市を解放する、というプランが水の泡だ。だが、艦隊に共同軍の高名な人物が参加していたとなれば、それなりに名目が立つ」

「理屈はわかるけど、いやよ。船酔いするもの。ユニちゃんがいれば、別だけど」

夏希は拒んだ。ユニヘックヒューマのジューズなしで、外洋船に乗りたくはない。

「あ、ユニヘックヒューマがいればいいのか。なら話は早い。実はついさつき、エイラとサーイエナがクートロア市に到着したという報告があつたんだ。早速、使者を遣わして呼び寄せよう」

「あれま」

あまりのタイミングの良さに夏希は半ば呆れたが、船酔いの特効薬が手に入るとすると、拒む理由はない。

「わかつたわ。ランクトウアン王子の指揮下に入るわよ」

「結構」

納得した夏希をそのままにして、拓海がランクトウアン王子に向き直る。

「ということ、わが竹竿の君を参加させます。ところで殿下、お茶を一杯付き合ってくださいさるお時間がありますかな？」

「もちろん、喜んでご馳走になりますよ」

「それは良かった」

拓海が、従卒を呼び寄せた。イエスパ船長には、別のテントで一休みしてもらおうように手配する。

「さて殿下。ラドームの地下組織について、もう少し詳しくお話をうかがいたいのですが」

腰を落ち着け、運ばれてきたお茶を味わいながら、拓海が切り出した。

「当然ですな。もちろん、こちらとしても気は遣っていますよ。イエスパ船長は、あくまで自主的に情報を旧知の仲であるわたし個人に伝えたに過ぎません。オープア海軍も、オープア王国も、ラドームの反タナシス組織を公的な交渉相手として認めたことはありませんし、今回の作戦に共同軍が参加したとしても、同様に平原共同体がラドームの反タナシス組織と政治的関係を結んだと看做されるようなことはありません」

にこやかに、ランクトウアン王子が説明する。

「杞憂だったようですね。いやいや、殿下の先見の明には恐れ入りました。ご配慮にも感謝いたします」

深々と、拓海が頭を下げた。

「……えーと。話がよく見えないんだけど」

「あのなあ」

拓海が呆れ顔をする。

「ラドーム公国の地下組織が、今回の情報提供をオープア王国や平原共同体承認のうえの協同軍事行動だ、なんて看做したらどうなると思う？ 外交上の義務らや面子やらでこちらが縛られちまう。下手をしたら、ラドーム独立のための内戦かなにかに介入しなきゃならない羽目に陥るぞ。俺たちはあくまで平原共同体総会の下部組織である平原共同軍参謀部の所属だ。政治的判断は下せないんだよ。だからこそ、殿下はイエスパ船長からの情報を公人ではなく私人として受け取ったんだ。個人が知りえた情報を活用する分には問題な

いからな」

「そうか。総会が認めたのはルルト解放までだもんね」

「わたしとしても、ラドーム公国への介入は時期尚早だと思っています」

ふたりのやり取りをにこやかに眺めていたランクトウアン王子が、真顔になって言った。

「戦略的に見れば、ラドームがタナシスによる南の陸塊侵略の拠点となったことは事実。そして、そこを押さえれば再侵略を効果的に防げることも、また事実でしょう。しかし、島嶼防衛は負担が多すぎます。海岸諸国は、いまのところラドーム情勢に介入する意図も能力もありません。わたし個人としては、ラドーム人には同情していませんが」

「平原を代表する立場ではありませんが、平原も同様の考えです。いずれにしろ、今回の作戦が成功し、タナシス派遣軍を粉砕できれば、しばらくはタナシスが南の陸塊に手を出してくることはないでしょう」

拓海がすかさず言った。

「同感ですな」

ランクトウアン王子が、うなずいた。

## 77 戦略的包囲と戦術的包囲（後書き）

第七十七話をお届けします。

## 78 洋上の迎撃

お茶を飲み終えた夏希は、あとのことを拓海に任せると、アンヌツカを伴いランクトウアン王子に従って海岸へと赴いた。

砂浜から小船に乗り込んで、沖合いにいる艦隊に向かう。

「とりあえず旗艦へどうぞ。戦闘時には、高原弓兵が乗り込む民間徴用船で指揮を執ってもらいますが、よろしいですか？」

「それで結構です、殿下」

ランクトウアンの言葉に、夏希はうなずいた。

旗艦に乗り込み、小さな船室に案内された夏希とアンヌツカだったが、腰を下ろす暇もなく士官が現れ、王子が甲板で呼んでいると告げられる。いぶかしみながら甲板への梯子を昇った二人に向け、王子が海上の一点を指差した。

「あれは、お連れの魔物ですか？」

夏希は驚きに目を見張った。ユニヘックヒューマの小さな姿が、海の上を歩んでいたからだ。いや、その速さはむしろ走っているに近い。

「……竹馬？」

夏希は眼を凝らした。どうやら、例のステッキを竹馬にして、それに乗って走っているらしい。速度は……時速三十キロ程度だろうか。みるみるうちに近付いてくる。

「水の抵抗とか、凄いと思うんだけど……悩むだけ無駄か」

舷側までたどり着いたユニヘックヒューマが、動きを止めた。とたんに、竹馬がするすると伸び、甲板を越える高さまでユニヘックヒューマがエレベーターのごとく滑らかにせり上がってきた。手すりを飛び越えて甲板に降り立ったユニヘックヒューマが、竹馬をつかむ。二本の竹馬はすばんと縮まり、彼女の手の中で一本に結合され、いつものステッキに戻った。

「ご指示通り追いかけてきたのです、夏希様！ これは王子殿下、

お久しぶりなのです！」

ステッキを振り回しながら、ユニヘックヒューマが挨拶する。

拓海は二万名の予備隊を三分割し、七千名ずつを東側および西側で攻勢を続ける部隊への増強として送り、ランクトウアン艦隊に引き抜かれた兵力の穴埋めとした。残る六千名は、最終予備として手元に置く。

意外に難航したのは、高原弓兵の抽出だった。生まれて始めて海という膨大な量の水を見た彼らは、誰も外洋船に乗りたがらなかつたのだ。拓海はベンデイスに頼み込んで、なんとか人数を集めようとした。引き受けたベンデイスが取った策は、なかなか巧妙であった。大勢の高原弓兵が見守る中で、妹のリダに参加宣言をさせたのだ。誇り高く勇敢な高原戦士にとって、まだ少女と言える年頃の女性戦士が参加するというのに、自分たちが尻込みするのは、耐え難い屈辱である。たちまちのうちに、三千人の参加枠は埋まった。その指揮は、そのままベンデイスが執ることとなった。

拓海は、前線部隊に対し攻勢を弱めるように通達を出した。このまま無理に攻め続けても、損害が増えるばかりで敵は音を上げないと判断したのだ。ランクトウアン王子の作戦が上手く行けば、ごく少ない被害だけでシエラエズ王女を屈服させることができるはずだ。

「攻勢が弱まったか。何か策を講じるつもりか、あるいは諦めたのか」

シエラエズ王女は思案した。

「ランブーン。小船の準備はどうか」

「順調です。南の陸塊にしては豊かな都市ですな、ルルトは。十分な量の油が集まりました」

笑顔で、ランブーン将軍が答える。

撤収船団の入港および出航時が、もつとも危険であるとシエラエズは懸念していた。そこで凝らされた工夫が、小型の漁船を徴用し、植物油脂や薪を満載して、奴隷兵士に操らせて敵船に体当たりさせる火船の準備であった。体当たりにも失敗しても、火船がいるだけで敵船はルルト外港に近づくのをためらうだろう。ちなみに、火船に乗る奴隷兵士は任務終了後は奴隷身分から解放し、敵に降伏することを許すつもりであった。

「あと一日か」

早ければ、あさつての夜明け前くらいには、第二次撤収船団が現れるだろう。そこまで持ちこたえれば、タナシス本国に帰還できる。

「凄い数ね。まさに大艦隊だわ」

あたりを見渡しながら、夏希は驚嘆した。

前方をゆくオープア海軍、ルルト海軍、東部海岸諸国合同海軍の艦艇は総計三十隻はいようか。後続する徴用民間船舶は、二十数隻。これだけ多数の風を孕んだ白い帆が大海原を滑ってゆく光景は、壮観としか言いようがない。

夏希が乗り込んでいたのは、ルルト船籍の大型商船であった。全長は、三十メートルを越える。乗員は、三十名ほど。もちろんこの他に、戦闘要員としてオープアの市民軍と高原戦士が合計二百名以上乗り込んでいる。

昨日の曇天とは打って変わり、今日の天候は快晴だった。懸念されたうねりもなく、海は穏やかである。今のところ、ユニヘックヒューマのジュースの出番はない。

ランクトウアン王子の計画では、今日の午後半ばにタナシス第二次撤収船団と接触、交戦の予定である。艦隊は待ち伏せを掛けるために、会敵予想海域へと急いでいた。

「問題は、敵船団が予定通りの行動を取ってくれるかですが……」  
アンヌツカが、語尾を濁す。

「そうね」

出航時刻が多少遅れるくらいならばいいが、予定コースを意図的に、あるいは不可抗力で外れたりすれば、会敵できないおそれが生じる。もし取り逃がせば、何の妨害も受けずに撤収船団はルルト海へと入り込んでしまっただろう。出航時には捕捉できるだろうが、その場合の主動は敵が握ることになる。帆船で港を長期間に渡って封鎖し続けることは困難である。隙ができれば、軍船を後衛に使う形で脱出を図り、わずかな犠牲だけでタナシス側は逃げおおせてしまっただろう。ルルト解放という目的は達成できても、それでは勝利とは呼べぬ。

昼過ぎに、ランクトウアン艦隊は会敵予想海域に到着した。

王子は艦隊を三つに分割した。足の遅い民間船をその場に待機させ、主力艦隊をやや北方に置く。撤収船団は、北東から南西方向へ向け進んでくるはずである。その退路を断つのが、目的である。特に足の速い小型の軍船は、広く散開させて北東方向に進出させて、哨戒にあたらせる。撤収船団の針路が予定とずれていた場合に備えるのである。

準備を終えた夏希は、甲板に張られた日除けの下で、敵発見の報を待ち受けた。ちなみに、革鎧はまだ身につけていない。陸戦と違い、会敵してから実際の戦闘に突入するまで結構余裕があるので、暑苦しく体力を消耗し易い防具は直前まで付ける必要はないのだ。

夏希は竹竿を持参するのを忘れていたが、たいていの船には船の補修を始め様々な用途に使える予備の木材などが積載されており、その中には竹束も含まれていたので、握り易そうな一本をそこから拝借してきてあった。

「あゝ、なんか胃が痛くなってきたわ」

夏希は腹をさすった。撤収船団の指揮官が、心変わりして別の針路を採用したら、あるいは出航が丸一日遅れたら。ひよっとすると、

予定を早めて船団はすでにこの海域を通り過ぎてしまったかも知れない。地下組織が手に入れた情報が最初から間違っていた、それとも、そのあとで航海の計画が変更された可能性もある。

「日本海海戦の前のアドミラル・トーゴの幕僚のような気分ですね！」

ユニヘックヒューマが、言う。

「どうしてそんな話知ってるの？」

「魔物ですから！　と言いたいところですが、以前に拓海様に聞いたことがあるのです！」

じりじりと時間が過ぎる。夏希は胃の痛みに効くかと考えて、ユニヘックヒューマのジューズを一杯もらって飲み干した。

と、急に甲板上が慌しくなった。船員が走り回り始める。

夏希はメインマストの上を見上げた。見張り台に立つ水夫が、望遠鏡で北東方向を熱心に観察している。

「旗艦からの合図です、夏希様。敵を発見したとの一報です」

駆け寄ってきた高級船員が、早口で告げると、すぐに走り去った。

「情報は正確だったようですね」

アンヌツカが、微笑んだ。

「タナシス船団の航法の腕の良さと時間の正確性にも感謝しましょう」

夏希も笑みで応じた。胃の痛みは、きれいさっぱり消え失せていた。

ランクトウアン王子は、敵船団予想針路のずれに合わせて、民間徴用船舶群に西への航行を命じた。同時に自ら率いる主力をいったん北に向かわせ、敵に視認されないまま背後に回りこもうとする。

一方、南の陸塊連合海軍の警戒船を視認したタナシス船団は、戦闘態勢を整えつつ従前の針路を維持した。発見された以上、一ヒネでも早くルルト外港に飛び込むのが、最も優れた安全策だからだ。

だが、その針路前方に、二十六隻の連合海軍船舶が立ちはだかる。

タナシス船団を率いるのは、第一次撤収船団を指揮したヤンバス将軍である。戦力は、軍船十一隻と、新たにラドーム公国で徴用した数隻を含めた輸送船七十七隻。船の数は多いが、輸送船のほとんどは航海要員しか乗り組んでいない。目的はルルト市に立てこもっている兵員の撤収なのだ。往路に陸戦要員を乗せる余裕はない。

ヤンバス将軍はすぐに補佐役の意見を聞いた。陸戦の指揮には自信があるが、海戦の経験はほとんどない。

「見たところ、敵はすべて商船です。速度は遅いはず。ここは強行突破しましょう。幸い、追い風です」

補佐役は、そう進言した。

「そうしよう」

ヤンバス将軍は、前進全速を命じた。軍船を前に出し、輸送船の盾とする。

タナシス軍船が、五隻と六隻の二隊に別れ、こちらに船腹を見せる。

連合海軍側各船は、そこへ果敢に突っ込んでいった。接近した各船から、火矢が飛ぶ。タナシス側も射返す。たちまち、数隻で炎があがった。水夫が走り回り、海水を掛けて消火に勤める。

見守る夏希のそばにも、火矢が突き刺さった。夏希はあらかじめ甲板上に用意されていたタライから桶で海水を汲むと、燃え盛る火矢に引つ掛けた。駆けつけた水夫たちも、桶で水を掛け始めた。火矢は、通常の矢よりも金属製の鏃部分が長く、そこに一部を樹脂で固めた布を固く巻きつけ、植物性油脂を浸み込ませたり塗り込んだりしたものである。

さらに連続して、甲板に火矢が突き立つ。帆にも突き刺さり、いくつもの炎が上がる。

夏希はアンヌツカとともに水を掛け続けた。実際のところ、よほ

ど多数の火矢を一度に打ち込まれない限り、帆はともかく甲板や上構が炎上することはない。むしろ乗員を消火活動に悩殺させて、その戦闘力を抑制するのが、火矢攻撃の一義的な目的である。

比較的小型で足の速い何隻かは、すでにタナシス軍船に近接し、焙烙攻撃に移っていた。小さな陶器の壺などに、焼夷性の物質……ほうろく焙烙攻撃に移っていた。小さな陶器の壺などに、焼夷性の物質……たいていは植物性の油脂類だ……を詰め、火を点じて、あるいはそのまま敵船へと投げ込む攻撃方法である。多くの場合、投擲距離を伸ばすために、ハンマー投げのように一メートルほどの丈夫な紐が取り付けられており、投擲手はこれを頭上などで振り回してから投げる。甲板に落下、あるいは船上の構造物にぶつかった焙烙は衝撃で砕け、火矢とは比べ物にならない量の焼夷物質を撒き散らすので、その効果は火矢十本分にも匹敵しようか。

こちらの船に近接され、タナシス側軍船が陣形を乱した。双方の何隻かで、火の手が上がる。接舷戦闘も開始された。敵船に乗り移り、あるいはこれを迎え撃って、槍や剣で戦うのだ。

夏希の乗る船も、一隻のタナシス軍船に狙いを定めて、焙烙攻撃に移った。十数個の焙烙が飛び交い、甲板に炎が踊る。

「接舷するぞ！ 掴まれ！」

高級船員の一人が、怒鳴る。

夏希は桶を放り出すと、手すりを握り締めた。

どん。

甲板に、衝撃が走る。ルルト船は、一回り大きなタナシス軍船に接舷した。

夏希は手すりに縛り付けてあった竹竿を急いで回収した。長剣を抜いたアンヌツカが、走り寄ってくる。

敵の方が大型なので、甲板の高さも若干高い。そこから、タナシス兵が続々と飛び降りてくる。得物はほとんどが、ちよつと中国風の長柄刀だ。ちようへいとう船上では、槍などの長物はかえって使いづらい。

手槍と鉞を手にした高原戦士たちが、すかさず前に出てタナシス兵に立ち向かう。数は高原戦士たちのほうが多かったが、船上の戦

いに慣れていないために、苦戦する。揺れる甲板の上では、慣れないと激しい動きをしただけでもバランスを崩しかねないのだ。

高原戦士一人を屠ったタナシス兵が、やや離れたところで待機していた夏希に眼を留めた。長柄刀を振りかざし、駆け寄ってくる。

夏希は身構えた。竹竿を水平に持ち、突きの体勢に入る。

すかさず、アンヌツカが前に出た。タナシス兵に、上段から斬りつける。

長柄刀と長剣が切り結んだ。夏希は竹竿で突くタイミングを計った。

いったん剣を引いたアンヌツカが、再び斬りつける。受けたタナシス兵のから空きになった脇腹を目掛け、夏希は竹竿を突き入れた。タナシス兵が、憤怒の表情で夏希を睨む。連環鎧越しでも、今の一撃はかなり効いたはずだ。ひよっとしたら、肋骨の一本くらい折れたかもしれない。

再び斬りつけたアンヌツカの剣を払ったタナシス兵が、夏希に向け踏み出した。夏希は身構えた。叩き合いになれば、竹竿は一撃で折られてしまうだろう。タイミングよく突きを繰り出し、前進を止めねばならない。

いまだ。

夏希は渾身の力をこめて突いた。狙いは少し外れ、タナシス兵の左胸に竹竿の先端が当たる。

半身となったタナシス兵が、無理やり右手の長柄刀を振るった。

夏希は急いで腕を引いたが、間に合わなかった。長柄刀の先端が、夏希の左手前腕部手首近くを切り裂く。

鋭い痛みとともに、鮮血がぱつと散る。夏希は痛みを無視して、必死に竹竿を再度突き出した。これ以上近接されたら、殺られる。

竹竿の先端が、タナシス兵の胸を突く。振るわれた長柄刀が、竹竿を叩き折った。

「死ねっ！」

タナシス兵の背後から、アンヌツカが気合とともに長剣で斬り付

けた。無防備だった首筋に、刀身が滑る。一瞬だが、鮮血が水鉄砲のように勢いよく中空に噴き出す。

夏希は身を引いた。タナシス兵が、前のめりに倒れる。手から落ちた長柄刀が固い甲板に落ち、がらんとするうづるな音を立てた。

「夏希様！」

周囲を警戒しながら、アンヌツカが夏希に駆け寄った。

「大丈夫」

夏希は折れて短くなってしまった竹竿を左脇に挟むと。懐から取り出した布を右手に持って傷口に押し当てた。生成りの布が、見る見るうちに赤く染まる。

「状況は落ち着いたようです。手当てしましょう」

長剣を甲板に突き刺し、いつでも手に取れるようにしたアンヌツカが、自分の懐から布を取り出した。

夏希は頭をめぐらせた。他の味方の船が、敵軍船に接舷したらしく、戦況はこちらの優位に思えた。乗り移ってきたタナシス兵は、いずれも自分の船に戻るか、高原戦士に斬り倒されてしまったようだ。

「痛みますか？」

「かなり」

夏希は出血時の手当ての方法を思い出し、甲板に座り込んで左腕を上げ、傷口が心臓よりも高い位置になるようにした。鋭い痛みは弱まったが、代わりに生理痛を思わせる身体に響くような鈍く重い痛みが強まっている。アンヌツカに促され、夏希は傷口に当てていた布を外した。すかさず、アンヌツカが布を押し当てる。

「だいぶ出血がひどいですね！ お手伝いしましょう！」

とことこと現れたユニヘックヒューマが、夏希の左上腕部にどこからともなく取り出した紐をきつく巻きつけた。

「ちよつと傷を見せてください！」

ユニヘックヒューマに要求され、アンヌツカが当て布を外した。

「骨には達していませんが深い傷なのです！ これは縫った方がいい

いのです！　まずは消毒です！」

ユニヘックヒューマが、夏希の左手をつかんだ。止める間もなく、それを自分のスカートの中に潜り込ませる。

夏希の左手に、液体が掛かる感触が伝わった。……ユニちゃんのジューズだ。

「では、縫うのです！　アンヌツカさん、手伝ってください！」

アンヌツカが、ユニヘックヒューマに指示されるままに夏希の左手を支え、指で傷口を閉じる。針と糸を取り出したユニヘックヒューマが、そこを器用にちよこちよこ縫い合わせた。

「上手いわね、ユニちゃん」

痛みを堪えながら、夏希は褒めた。

「やり方は、コーちゃんに教えてもらったのです！」

縫い終えたユニヘックヒューマが、新しい布をくるくると夏希の前腕部に巻きつける。いまだ出血は続いていたし、痛みもひどかったが、とりあえずこれで死ぬようなことはないだろう。

「アンヌツカ、状況は？」

「よくわかりませんが、どうやら勝ったようですね。炎上している船は、みな軍船ですし、近くにいる軍船も船上にいるのは高原戦士や海岸諸国人ばかりです」

「そう、良かった」

夏希は眼を閉じた、なんだか、とっっても眠くなっている。失血のせいだろうか。

二十七隻の連合艦隊民間船は、十一隻のタナシス海軍軍船を打ち破ることはできなかったが、軍船を輸送船から切り離すという任務には成功した。単に乗員と戦闘要員の数だけで比べれば、前者は約四千八百であるのに対し、後者は三千二百である。錬度から考えれば、海を見たのは生まれて始めてという高原戦士が半数以上を占めている連合艦隊側に比べ、すべてが海軍所属であるタナシス側の方

がはるかに上だ。にもかかわらずここまで連合艦隊側が健闘したのは、やはり全般的な士気の差が大きかった。すでにタナシス海軍兵士は、第一次撤収船団の護衛という任務を通じて、母国の遠征軍が敗れたことを承知している。そして、今回の任務も第二次撤収船団の護衛という、不名誉かつ意気の上がない任務である。そしてそのうえ、予想だにできなかった海域での待ち伏せ。これら複合的な原因から、一般の水兵や海兵は戦う意義を見出せず、誇りを持って戦うことよりも、無事に故郷に帰ることの方を強く望んだのであった。

急速に南下したランクトウアン王子率いる連合艦隊本隊は、低速のタナシス輸送船団にあっさりと追いついた。

輸送船は散開して逃走を図ったが、三十二隻の連合艦隊各艦はそれを一隻ずつ拿捕に掛かった。水夫ばかりで陸戦要員がほとんど乗っていない輸送船は、いったん連合艦隊の海兵に乗り込まれてしまえば降伏するしかなかった。

ランクトウアン王子は、旗艦が二隻目の拿捕に成功した時点で、艦隊集合の旗流信号をマストに掲げさせた。艦隊の目的は、敵船団撃滅ではない。ルルト海港に、タナシス船を入れさせないことにあるのだ。逃げた輸送船を追って散るより、艦隊を再編成させて一ヒネでも早くルルト沖に向かう方が、上策と言えた。

## 78 洋上の迎撃（後書き）

第七十八話をお届けします。久しぶりに評価ポイントをいただきました。ありがとうございます。

## 79 強かなる交渉

連合艦隊民間籍船艦隊は、洋上で戦後処理を行った。溺者を敵味方問わず救助し、火災の消火に務める。手が付けられないほど燃えている船は放棄し、燃え落ちるに任せた。拿捕した船には陸戦要員を送り込み、生き延びたタナシス船員に操船させる。

夏希は船室の床で眼を覚ました。いつの間にか眠り込み、誰かが船室まで運んできてくれたらしい。左手をチエックする。巻かれた布に血は滲んでいたが、ひどい出血は収まっているようだ。痛みも、じんじんという鈍いものになっている。

「お目覚めですか」

水差しを手に、アンヌツカが歩んできた。上体を起こした夏希の右手に、銅のカップを握らせる。

「かなり血を失いましたからね。十分に水分を取ったほうがよろしいと、ユニヘックヒューマ殿が申しておりました」

夏希はアンヌツカが注いでくれた水をごくごくと飲み干した。

「で、どうなったの、戦いは？」

お代わりを注いでもらいながら、夏希は訊いた。戸口から漏れてきている光は、かなり赤味を帯びている。もう夕方なのだろう。

「勝利です。民間船四隻を放棄し、千名近い死傷者を出しましたが、タナシス船団を粉碎しました。燃やした軍船は三隻。拿捕が四隻。あとの四隻には、逃げられました。輸送船は、四十六隻を拿捕。たぶん、三十隻くらいは逃がしましたが。今現在、船団は最も近いラクトアス王国に向かっています。ランクトウアン王子の艦隊は、拿捕のために海兵の半数を割きましたが、ほぼ無傷でルルト沖に向かっています。タナシス船団が再集結し、ルルト入港を図った場合は、阻止する予定です」

「輸送船三十隻か。もし仮に、すべてのタナシス船がルルト入港に成功したとしても、その船団で運べる兵員数は一万人以下よね。立

てこもっているタナシス軍の半数しか逃げられない」

ちびちびと水を飲みながら、夏希はほくそ笑んだ。

「大量の捕虜も得られました。これで、シエラエズ王女に対し圧力を掛けられますね」

アンヌツカが、にこやかに言う。

「これで勝てたわね。アンヌツカ、悪いけど、もうひとつカップ持って来てくれる？」

「……何にお使いですか？」

「水だけど、乾杯しましょう」

カップを小さく振りながら、夏希は笑顔で言った。アンヌツカの笑みが、大きくなる。

「はい、夏希様！」

海戦勝利の報が拓海のもとに届いたのは、夜明け前のことであつた。

「これで勝てるよ、凜ちゃん」

眠い眼を擦っている凜の前で、拓海がはしゃぐ。

「とりあえず降伏勧告だな。もはやタナシス派遣軍に逃げ場はない」

「降伏条件は？」

眠そうな声で、凜が問う。

「とりあえず優先順位は、共同軍の勝利の印象付け、ルルトを始めとする海岸諸国の意向重視、それにタナシスとの関係修復を阻害しない、といったところだな。いずれにせよ、かなり寛大な条件を提示せざるを得ないだろう。タナシスとの戦争が長引いたら、こっちの経済が持たん」

「具体的には？」

「とりあえず全面降伏させる。続いて武装解除。タナシス人はシエラエズ王女を筆頭に下っ端兵士に至るまで送還。船舶や武器は没収。形式上のタナシス王国による謝罪。速やかな不戦条約の締結。そん

なところだな」

「その程度では、ルルト王国が納得しないんじゃないの?」

「かもな。その辺は、要相談というところだな。駿を呼び寄せるか」  
拓海が腕を組む。

「ところで、誰に降伏勧告をさせるつもり?」

「夏希に頼む……と言いたいが、海の上だしな。相手が王女様となると、それなりの人物を送らにゃならん」

「拓海が行けば? 共同軍のナンバー3なら、資格は十分でしょ」  
あくび交じりに、凜が言う。

「……俺は裏方に徹するつもりなんだが。まあ、降伏勧告だけなら、もう少し下のポストでも失礼には当たらんだろう」

夜明け直後、三隻のタナシス輸送船が相次いでルルト沖に現れた。  
第二次撤収船団の生き残りである。

すぐさま、待機していたランクトウアン艦隊の一戦隊が襲い掛かる。瞬く間に二隻が拿捕されたが、一隻は追撃を生き延びてルルト外港へと逃げ込むことに成功した。もつとも、これはランクトウアン王子の策略のひとつであった。わざと一隻だけ逃がし、タナシス人の口から船団壊滅をシエラエズ王女に報告させるためである。

「そうか」

船長の報告を聞いたシエラエズ王女が漏らした言葉は、それだけであった。身振りで下がるように命ずると、顎に手を当てて黙考の姿勢に入る。

「ランブーン。すまんが、使者を仕立ててくれ。敵と交渉する」

五ヒネばかりのち、シエラエズが静かに告げた。

「承知いたしました。して、口上はいかがいしましょう」

「もはや強い立場で交渉するのは無理だ。残念ながら、降伏を前提としなければなるまい。交渉場所を指定すれば、そこへわたしが赴くと伝えよ。よいな」

交渉の場所は、共同軍本営にほど近い一軒の農家が指定された。交渉開始時刻は、本日正午。その前提条件として、日没を期限とする休戦協定も結ばれた。

拓海は急いでルルト亡命政府代理人やオープア政府関係者、東部海岸諸国代表などと連絡を取った。降伏受け入れについては全員が賛成したが、その後の対応に関しては意見が分かれた。平原や高原の者は早急な和平を望んだが、ルルトは報復兼安全保障策としてラドーム公国の完全独立化と中立化を主張する。オープアは慎重だったが、東部沿岸諸国はルルトの主張に同調し、ワイコウ王国も立場上それに賛意を示す。

結局、意見の統一がみられないまま、拓海はシエラエズ王女との会談場所に赴くこととなった。実際に交渉に当たるのは、平原と高原を代表する形での共同軍司令官と、ルルト亡命政府代理人、それに海岸諸国代表としてのオープア防衛隊の司令官の三人。拓海は、共同軍司令官に助言する立場として、その後ろに控えた。

正午前に現れたシエラエズ王女は、二十名ほどの護衛に囲まれていた。共同軍士官に案内され、王女がふたりの女性剣士を連れただけで農家の中に入る。

立って待ち受けていた出席者が、それぞれ名乗りをあげた。

「タナシス王国王女、派遣軍指揮官シエラエズだ。よろしく頼む」  
やや緊張した面持ちで、シエラエズが名乗る。

テーブルクロス代わりの大きな藍色の布が掛けられたテーブルを挟んで、出席者が椅子に座った。身なりを整えた兵士が、各人の前に水差しを置く。

「こちらの申し入れに応じて、このような交渉の場を設けていただいたことを、まずは感謝する」

先に口を開いたのは、シエラエズだった。

「もはや、わが軍に逃げ場はない。降伏する以外に、方法は残され

ていないように思う。ただし、名誉ある降伏は認めていただきたい」  
「もちろんです。我々も軍人であり、武人です。殿下はもちろん、部下の方々の名誉を汚すような振る舞いはいたしません」

共同軍司令官が、重々しく言う。

「結構。もうひとつの条件として、この降伏はあくまで平和のために行われるものとしたい。つまり、双方に遺恨を残すような交渉はすべきではないということだ」

「それはいささか虫が良すぎるのではないですか、王女殿下」

ルルト亡命政府代理人が、少しばかり揶揄するような調子を滲ませて、言った。

「タナシス派遣軍が行ったことは、明白な侵略行為です。ルルト王国の大部分は数十日間に渡って占領され、大量の物資を徴用されました。住民の生活は脅かされ、派遣軍の用に供するために強制的に働かされた者も多い。これらに対する保障と謝罪なしに、平和の回復はあり得ませんぞ」

「徴用に関しては、すべて対価を支払ったはずだ。労働に関しても適切と思われる労賃は払っている。船舶などの徴用に関しては、撤退前に清算しよう」

澄ました顔で、シエラエズが告げる。

「それと、侵略行為というのは心外だ。今回の目的はあくまで魔力の源の確保にある。人間界縮退という災厄が進行中であり、その脅威にわがタナシス王国が晒されている現状では、政治的に不安定な南の陸塊諸国に魔力の源の管理を任せるわけにはいかない。いわば自衛行為だ」

「目的は手段を正当化しませんぞ」

オープア司令官が、鋭く言う。

「自衛行為と言うならば、なぜ以前に人間界縮退対策委員会と対策群が連名で送った書簡を無視し、さらに人間界縮退対策本部による訪問および協力要請を拒絶したのですか？」

共同軍司令官が、問う。

「怪しげな組織の書簡や使者などそうそう信用できぬ」

不満げな表情で答えたシエラエズが、続けた。

「いずれにしろ、わたしの権限はあくまで派遣軍司令官としてのものだ。政治的な判断も、約束もできぬ。和平交渉は、正式なタナシス代表と行つてもらいたいものだな」

「よろしいでしょう。では、殿下のご提案をお聞かせ願えますかな」

共同軍司令官の目配せを受けたルルト亡命政府代理人が、訊いた。「現在ルルト市街地にいるわたしの部下は、速やかに降伏し、武装解除を受ける。そちらは責任を持って兵員をラドーム公国まで遅滞なく送還すること。その際、個人が携行できる護身用武器と私有財産の持ち出しは認めること」

「それでは停戦とそれにもなう撤兵と代わりはないですな」

辛辣に、ルルト亡命政府代理人が評した。

「その代わりといつてはなんだが、わたしはそちらの捕虜になる。完全な和平が結ばれるまで、抑留してもらつて結構。この条件で、いかがだろうか？」

シエラエズが言つて、薄く微笑んだ。

共同軍司令官が、ちらりと拓海に視線を送る。拓海は小さく首を振つた。この条件では、あまりにタナシス側に有利だ。

両者はさながら将棋の千日手のような実りのない交渉を続けた。拓海は共同軍司令官に強い姿勢を維持させた。シエラエズ王女にはあてがないはずである。それに、おそらく彼女はかなりの部下想いである、ということも拓海は見抜いていた。そうでなければ、大国の王女たる彼女が部下を助けるために自ら進んで捕虜となることなどあるまい。つまり、こちらが部下を助けてやるという条件で無理を言えば、それは通り易いはずだ。

結局、先に折れたのは拓海を読みどおりシエラエズであった。日暮れ前までには、しぶしぶながら両者が納得したかたちで妥協が成立し、急遽作られた書類に出席者たちが署名を済ませた。その主な内容は、今現在行われている停戦の無期限継続、明日の日の出をも

つて現在シエラエズの指揮下にあるすべての兵員の降伏、防具および護身用を除く武器の没収、タナシス側が徴用中の住民および管理下にある捕虜の即時解放、船舶を始めとする現在ルルトにある個人所有以外のタナシス側財産の没収、降伏したタナシス兵に対する人道的な扱いと、可及的速やかなるラドーム公国への送還、今回の事態が政治的に決着するまでのシエラエズ王女の抑留、そして双方が完全なる和平を結ぶことを目標として尽力する、というものであった。

ラクトアス市で船を下りた夏希は、アンヌツカとともにユニヘックヒューマに担いでもらい、ルルトへと戻ってきた。腕の傷の痛みは、ラクトアスで薬師から分けてもらった鎮痛効果のあるハーブ……厳密に言えば麻薬の一種だろう……を服用したので、かなり治まっている。

「名誉の負傷だな」

布が巻かれた夏希の左腕を見て、拓海が眼を細める。

「で、どうなったの？」

「シエラエズ王女が降伏に同意したよ。ちょうどいい。エイラヤサイエナも含めて、報告会を開くところだ。一緒に来てくれ。」と、その前に「

拓海が、懐から書状を出して、夏希に渡した。

「なに、これ」

夏希は表書きを見た。こちらの文字で、自分の名前が記されていることぐらいは見当がつく。差出人のところには、ジンベル、と読める文字もあった。

「あんたがランクトウアン王子について行った直後に届いた。ジンベル国王の代理人からの手紙らしい」

「アンヌツカ、何が書いてあるの？」

夏希は書状を開くと、副官に手渡した。

「差出人は、ヴァオテイ陛下の秘書官長ですね。えーと、夏希様との契約から一年経過したので、契約延長に関しお話したい、とのこと。ジンベルとしては、延長に依存はないが、夏希様がジンベル国内を留守にしていることを鑑み、支払いに関してはその額の変更を望む、と書いてあります」

「え、もう四百五日経っちゃったの？」

夏希は驚いた。

「おお。そういうことか。じゃ、夏希が望めばエイラにもこの世界にかえしてもらえるんだ」

拓海が、ぽんと手を叩く。

「……この状況じゃ、手を引くわけにはいかないよねえ」  
「だな」

拓海が同意する。

「ジンベルまで、手紙届けられるかな？」

「ハンジャーカイへは、定期的に報告を上げているから、その使者に託せばいい。そこでジンベル代表に託せば、本国まで届ける手配をしてくれるだろう。で、なんて書くんだ？」

「そうねえ。一年延長かな？ それだけあれば、戦後処理してタナシスとの和平を結ぶには十分でしょうし、人間界縮退問題も解決は無理でも落ち着くでしょう」

「まあな。じゃ、あんたはいずれ元の世界へ帰るつもりなんだな」

「死にたくはないしね」

夏希は、布を巻きつけた左手をかざした。

「ま、それは好きにしてくれ。俺がどうこう言える立場でもないし。まずは、報告会だ」

拓海が歩み出す。アンヌツカの任を解き、休むように命じた夏希は、ユニヘックヒューマを伴って、拓海に続いて天幕のひとつに入った。すでに、凜とエイラ、サーイエナ、それにコーカラットが待ち受けていた。

「お怪我をなさったのですね。コーちゃん、診てさし上げて」

珍しく眉根を寄せた心配げな表情になったエイラが、命ずる。

「承知いたしましたあゝ。失礼いたしますうゝ」

コーカラットの触手が、夏希の左腕に巻かれていた布をするすると取り去る。当て布が外され、縫い合わされた傷口があらわとなった。

「上手に縫い合わされていますうゝ。ユニちゃんが縫ったのですかあゝ」

「そうなのです！ コーちゃんから教わった通りに縫ったのです！」

「見事な出来栄えですうゝ。完璧ですうゝ。熱も持っていないせんから、感染症の疑いもありませんねえゝ。傷口が塞がったところで抜糸すれば、問題ないのですうゝ」

そう言ったコーカラットが、当て布をもとに戻し始める。

「じゃ、始めるぞ」

皆が敷物の上に腰を落ち着けたところで……コーカラットだけは相変わらず浮いていたが……拓海がシエラエズとのあいだで決定された取り決めに説明し始めた。

「ずいぶんとタナシス側に有利に思えるんだけど」

凜が、苦言を呈す。

「見た目はね。でも、いったんすべての兵員……まだ二万はいるはずのタナシス兵を捕虜にできるんだからな。速やかに送還、となっているが、期日は明記されていない。この二万人は、タナシスへの政治的取引材料として使えるはずだ。ランクトウアン王子が海戦で捕虜にした二千人は、別枠になるし。それにシエラエズ王女も、こちらが満足するまで手元に置いておける。一応王位継承権二位の人物だからな。切り札になる」

「影武者掴まされたりして」

「それはないだろう。こつちには、以前に王女にお目にかかった者もいるし」

凜の言葉を否定した拓海が、夏希とエイラとサーイエナを見る。

「まあ一回会っただけだし、そっくりな女性出されたら見分けつか

ないかも」

「そんなことはありませんわ。あの方なら、絶対に見分けられますねえ？」

サーイエナが、エイラに同意を求める。

「もちろんですわ。わたくしたち、巫女ですから」

「おふたりを信頼しましょう。で、今後の予定だが……兵員の送還は、ランクトウアン王子に頼んで徐々に進めてもらう。平原共同体総会と駿には、とりあえず第一報を送つといた。詳細な報告書は、いま外交局と記録部の連中に書かせているところだ。出来次第、送る。とにかく、早めに各代表をルルトに集めて、タナシスとの和平交渉を始めなきゃならない。こいつが終わらんことにはおちおち復員もできないからな。ともかく、戦後処理を除けば軍人の役目は終わったよ。これからは政治家の出番だ」

早口で言った拓海が、気持ち良さそうに伸びをした。

「疲れたわ、今回は。ところで、生馬は無事なの？」

無意識のうちに左手を動かしてしまい、いきなり走った鋭い痛み  
に顔をしかめながら、夏希は訊いた。

「生馬も部下も無事だ。明日の日の出とともに解放されるよ」

「よかった。ま、簡単にくたばる奴じゃないと思つてたけど」

凜が笑う。

「そうそう。シエラエズ王女の処遇だが」

そう言い出した拓海が、真顔で夏希を見据えた。

「すまんが、あんたが身柄を預かってくれ」

「え。なんでわたしが？ 拓海、あなた厄介ごとはことごとくわたしに押し付けていない？」

「いや、適任者があんたしかいないんだ。べつに、手元において軟禁しろ、とか言っているわけじゃない。細かいことは俺の部下にやらせるよ。ただし、相手は大国の王女様で、王位継承権第二位の人物だ。もしなにかあつたら、タナシスとの和平交渉がこじれるのは必至だ。いわば応接役として、それなりの人物を責任者に据えない

とこちらの面目が立たん。女性で、高位の軍人で、貴族で、しかも今現在ルルトにいる、おまけに王女とは面識がある。これだけ条件が揃ってるのは、あんたしかいないんだ」

拓海が諭す。夏希はしぶしぶうなずいた。

「なら、仕方ないわね」

「別に難しいことじゃない。三日にいつぺんくらい挨拶に寄って、『ご不便はありませんか？ なにかお入用なものはございませんか殿下』くらい言ってやればいいだけだ。あとで王女に相応しからぬ待遇を受けた、とか文句を付けられないためにな」

「了解。……あ、そういえば」

ふと思いついた夏希は、エイラとサーイエナに視線を向けた。

「ニヨキハンに会いに行った件、どうなったの？ 魔力の源、貸してくれました？」

「ええ。共同軍の勝利で結局使い道はなさそうですが、快く貸してくれました」

サーイエナが、答える。

「コーちゃん、夏希殿に見せてさし上げて」

エイラが、コーカラットを手招く。

「承知いたしましたあ」

ふらふらと夏希に近付いたコーカラットが、触手をボディの底面に差し入れる。

「どうぞお」

差し出された触手の先には、ゴルフボール大の黒い塊があった。

蓄えられていた力を使い切った魔力の源だ。魔物の賢者、ニヨキハンが大事にコレクションしていた、品。

「しかし……コーちゃんのボディって、物入れにもなるの？」

「魔物ですからあ」

コーカラットが、嬉しそうに身体を揺らしながら答える。

「そうだ、エイラ。わたし、ヴァオティ国王との契約を一年延長することに決めたわ。よろしくね」

「もう一年経ちましたか。早いものですね」

エイラが、嬉しそうに笑顔を見せ、目を細めた。

夏希も笑顔でエイラと、その傍らで浮いているコーカラットを眺めた。坑道の中で突如現れた、奇妙で愛想のいい魔物。そして、案内された王宮で出会った、白装束の美少女。とても一年前のことには思えない。

「だから、召喚取り消しは延期ね。あと一年経ったら、よろしく頼むわ」

「そのことですが、今彼女と協力して、新たな召喚方法を模索しているところなのです」

エイラが、隣に座るサーイエナの腕に、そつと手を置く。

「新たな召喚方法？」

「魔力の源の力を、なるべく使わないで済むようなやり方です。うまく行けば、供物も無しで済ませられるかもしれませんわ」

サーイエナが、口を挟んだ。

「へえ、それは凄いわね」

「ものになるかどうかは未知数ですが、もしできるようになれば、きわめて簡単にこちらと異世界を行き来できるようになるかもしれません」

エイラが、あまり自信なさそうな口調で言う。

「わたくしとユニちゃんも、お手伝いしているのですっ」

触手を自慢げに振りながら、コーカラットが言った。

79 強かなる交渉（後書き）

第七十九話をお届けします。

## 80 解放の日(前書き)

【GL警告】今回はかなり濃い目の百合成分を含みます。苦手な方はご注意ください。

## 80 解放の日

翌日日の出とともに、タナシス派遣軍の武装解除が始まった。ルルト市内の広場や大通りに集結したタナシス兵が、足元に得物や鎧、胄などを置いて整列する。荷車を引いた共同軍兵士たちが、それらを回収しつつ、タナシス兵の身体検査をした。護身用と看做されない長剣などは没収、さらに略奪品と思われる高価な物も容赦なく没収された。多少のトラブルはあったものの、タナシス兵の大半は規律が高く、おとなしく共同軍兵士の指示に従った。

それらを済ませたタナシス兵は、順次郊外にある天幕村に連れて行かれ、当座の食料を渡されて自炊するように命じられた。そこは、共同軍が野営していた陣営をそのまま捕虜収容所に転用したものだ。明け渡した共同軍兵士は、ルルト市内の建物を接收し、そこで寝泊りすることになる。

百五十名の部下を引き連れ、解放された生馬が歩んでくるのを、夏希と凜、拓海の三人は広場の一角で待ち受けた。

「よお」

片手を上げて、生馬が挨拶する。髭が伸び、やや薄汚れた感じだが、元気そうだ。

「よく生きてたな」

拓海が、生馬に抱きついた。背中をどやしつける。

「そうそうは死なんよ」

「いいねえ、その髭。いかにも解放捕虜、といった感じだ」

拓海が笑いながら、抱擁を解く。

「済まなかったな、凜ちゃん。迷惑掛けた」

凜に向き直った生馬が、右手を差し出す。凜がその手を無視し、生馬にぎゅっと抱きついた。

「おかえりなさい」

凜が生馬から離れる。再会の挨拶は握手かハイタッチで済まそう  
と思っていた夏希だったが、凜に感化されて半ば衝動的に右手だけ  
で生馬を抱きしめ……すぐに身を引いた。

「くさっ」

いわゆる男臭さが、濃厚に漂っている。

「仕方ないだろ。ここ三日ほど水浴びすらしていないんだから」

がはは、と生馬が豪快に笑う。

「なにはともあれ、風呂だな」

苦笑した拓海が、言う。

「それと飯だ。量は十分もらっていたが、内容はしょぼかったから  
な。みんなに、旨いものを喰わせてやってくれ」

生馬が、百五十名の部下を指し示す。

「いいだろう」

拓海が数歩前に出た。相手が共同軍参謀長だと知っている兵士た  
ちが、やや雑然としているが整列を始める。

「諸君、楽にしてくれ。わたしは共同軍参謀部参謀長、ヒヤマ・タ  
クミである。長きに渡る捕虜生活、ご苦労であった。マリ・ハの戦  
いにおける戦勝は、諸君らの奮闘によってもたらされたと言っても  
過言ではない。この勝利によって勢い付いたわが軍は反撃に転じ、  
以後数多の勝利を重ね、そして今日ついに念願のルルト市解放と敵  
降伏を迎えることとなった。さあ、諸君。諸君らがもたらしてくれ  
たこの勝利と、諸君らのわが軍への復帰を、ともに祝おうではない  
か！」

拓海が、拳を握った右腕を突き上げる。

一瞬戸惑いの色を見せた兵士たちだったが、すぐに生馬が拓海同  
様のポーズを取ったこともあり、全員が右腕を突き上げた。

「勇戦に対する報奨として、諸君らは第一陣として平原に帰還し、  
長期休暇が与えられる」

右腕を下ろした拓海が、続けた。控えめな喚声があがる。

一人の士官が、半歩前に出た。

「部隊長は、どうされるのですか？」

「俺は……参謀長の補佐として動かねばならん。お前たちは一足先に、平原に戻って休め」

生馬が言う。とたんに、兵士たちが騒ぎ始めた。

「隊長、最後までお供させてください！」

「隊長が帰らないんなら、俺たちも残ります！」

「生馬様と離れたくありません！」

口々に、兵士が言う。

「わかったわかった。残りたい奴は、残つてよろしい。ただし、負傷している者、体調を崩している者は別だ。家族のもとに帰って、養生しろ。いいな」

両腕を振って押さえるようなポーズを取りながら、生馬が言う。

兵士のざわめきが、すつと納まった。

「参謀長閣下が、皆に水浴びと食事の準備を整えてくださった。イムール、あとの指揮は任せる。では、行け」

生馬が命ずる。指揮を移譲された青年士官が号令をかなり、全員が二列縦隊に並び直した。

「いい部下を持ったねえ。俺も前線で野戦部隊を指揮しようかな」  
整然と行進して行く百五十名を見送りながら、拓海が羨ましそうに言う。

「よせ。お前さんの運動神経じゃ、三十分と持たずに斬られるぞ」  
生馬が、笑う。

「とにかく、あなたも水浴びて来なさいな。石鹸使つてね」

これ見よがしに鼻を押さえながら、夏希はそう告げた。

「ジンベル特産の凧ちゃん印の石鹸か。ルルトへも大量に輸出したから、探せばあるだろうな」

「ついでに髭も剃つて来てね。ないほうが、男前だから」  
凧が言い添える。

「ご婦人方のご希望に副えるよう尽力しましょう」

生馬が、芝居に出てくる老執事のように優雅に一礼した。

シエラエズ王女の当面の住居として、ルルト王国が市街地の一角にある豪邸を貸与してくれることとなった。召使や料理人なども急遽集められる。警備は共同軍が担当することになった。

「で、本物だった？」

王女引渡しに立ち会ったエイラとサーイエナに、夏希は尋ねた。

「本物でした。間違いありません」

サーイエナが、請合う。エイラも、うなずきで同意した。

夏希はシエラエズが新居に落ち着いたところを見計らって、アンヌツカを伴って会いにいった。屋敷の警備は厳重であった。もちろん、逃亡を警戒してのものではない。ルルト人などには、王女に深い恨みを抱いている者も多いだろう。その連中による暗殺を警戒しての処置である。

「お久しぶりにお目にかかります。共同軍参謀部参謀、ジンベル王国貴族、モリ・ナツキです。このたび、殿下の身柄をお預かりする責任者に任じられました」

居間に通された夏希は、くつろいだ様子で椅子に腰掛けているシエラエズ王女に、そう挨拶した。

「そなたのことはよく覚えている。常々、もう一度会いたいとおっしゃったのじゃ。人間界縮退対策本部本部長補佐でもあったな。色々な肩書きをお持ちじゃな」

シエラエズが、薄く笑う。

「夏希殿、でよろしいかな？ それとも、竹竿の君と呼んだほうがよろしいかな？」

「その二つ名は、やめていただきたいかと……」

「そうなのか？ まあいい。そなたには戦場で散々苦しめられたと思うが、休戦が成立した以上、もはやわだかまりはない。過去は水に流して、仲良くやろうではないか、夏希殿」

にこやかに、シエラエズが言う。

「ありがとうございます、殿下」

夏希も内心ほっとして笑顔を見せた。どうやら、シエラエズはしごく物分かりのいい人物のようだ。

「ひとつだけ苦言を申してもよいか、夏希殿？ 護衛はともかく、従者の一人すら同行させるのを拒否すると言っるのは、いささか横暴ではないか？」

「身の回りのお世話をする者は、こちらですべて用意させていただきます。決して、ご不便をお掛けすることがないように心配いたします。何でもお申し付け下さい」

「ほう。何でも、と申したな。……武人として、二言はあるまいな」  
「……ありません」

ちら、といやな予感がかすめたが、夏希はあえて自信ありげな表情で言い切った。

「では、こちらに来てもらおう。その剣士、済まぬが待っていてくれ」

立ち上がったシエラエズが、戸口で控えていたアンヌツカを視線で制す。

夏希は素直にシエラエズについていった。

「ここへ」

招じ入れられたのは寝室だった。欧米サイズのダブルベッドほどもある大きな寝台が置いてある。

「寝具がお気に召しませんか？」

訝る夏希の背後で、シエラエズが扉を閉める。一瞬警戒して身構えた夏希だったが、シエラエズは彼女の脇を通って寝台に腰を下ろしただけだった。

「殿下？」

「夏希殿、脱いでいただけるか？」

「はあ？」

「脱いでほしいのだ」

自らの衣服を取り去りながら、シエラエズが重ねて言う。

「……これっでもしかして。」

「ぬ、脱ぎませんよ！」

すでに上半身をむき出しにしたシエラエズが、夏希の言葉に手を止めた。着痩せするタイプなのか、胸は夏希よりも大きかった。大き目の乳輪の上に、やや黒ずんだ乳首が載っている。上半身の筋肉はよく発達しており、乳房がなければ細身の男性の身体と見間違えそうなほどだ。

「ほう。夏希殿は着たままするのがお好きなのか。たしかに、その方が興奮するという者も多いようだ。」

「あの、殿下。失礼ながらわたしは女同士でそのような行為をする習慣がないのです。ですから、お相手するわけには……」

「夏希殿は未婚であろう？ 問題ない。身分差を気にしているのであれば、構わんぞ。小国とは言え貴族女性なのだから」

下半身の衣服を脱ぎながら、シエラエズが言う。  
「そうではなくて、女同士でエッチなことしないんです、わたしは！」

夏希は力説した。

全裸になったシエラエズが、寝台の上にわざと股間を見せ付けるようなポーズで座りなおす。漆黒の陰毛は控えめで、薄かった。

「戦陣では、そうそう慰めることができなくてな。したくてたまらなかつたのだ。さあ、遠慮せず抱いてくれ」

「かんべんしてよ……」

夏希は力なくつぶやいた。仕方ない、ここは奥の手を出すしかあるまい。かつてエイラに迫られた時に、回避に成功したあの手だ。

「わたしはひとりするのが好きなんです！ ですから、殿下のお相手はできません！」

真っ赤になっっているのを自覚しながら、そう言い張る。

「そうだったのか。済まない。しかし、わたしはひとりするのも好きなのだ。一緒に見せ合おうではないか」

シエラエズが、自分の股間に手を伸ばした。夏希に見せ付けるように、指を動かし始める。

「さあ、遠慮せず夏希殿も始めるがよい。見せ合っつてするなど、久しぶりだ。ああ、いい感じに興奮してきたぞ。夏希殿の悶える姿を、早く見たい……。さあ、遠慮せず胸でも股間でも弄るがよい。なんでも申し付けろ、というのは嘘だったのか？」

とろんとした眼が、夏希を見上げる。息が荒くなり、指が肉を弾くぴたぴたという音までが、呆然と立ち尽くす夏希の耳に届いた。

「で、殿下に相応しいお相手を早急に見つけてきます！」

夏希はほうほうの体で寝室から逃げ出した。

「書けました、夏希様」

アンヌツカが、清書した書状を夏希に差し出す。

ジンベル王国との契約延長に関する返書である。夏希は、一年の延長を申し入れた。さらに延長分の報酬に関しては、無報酬でも構わない、と書いておいた。ハンジャーカイに引越して以来、ほとんどジンベル王国単独のためには働いていないし、数々の役職に就いたのでそれなりに手当てはもらっている。ジンベルの余裕があるとは言えぬ財政状況を鑑みれば、そのくらいの譲歩は必要だろう。

「凜、あなたも召喚されたのはわたしの二十日くらいあとでしょ？」

すぐに書状が来るわよ」

「ま、来たら返事書くわよ」

隅のテーブルに座っている凜が、物憂げに返答する。

「あなたはどつするの？ 延長？」

「延長するわよ。とりあえず、あなたと同じように一年かな。ここ、気に入ったし。場合によっては、永住してもいいと思ってるわ」

「まじで？」

「……数年に一回帰れると嬉しいけどね。医療とか、色々あるしね」  
「そうよね」

幸い、異世界人の誰も今のところ大病を患つたりはしていないが、向こうの世界の病院にいけば注射一本や抗生物質の服用、あるいは日帰り手術で済むような疾病が、こちらでは命取りになりかねないのだ。夏希の腕の傷も、ユニヘックヒューマの応急手当があったから大事には至らなかつたが、下手をすれば肱から先を切り落とすようなはめに陥つたかもしれない。

「アンヌツカ。じゃ、その書状を封緘し、拓海に渡してきて」「了解しました」

堅苦しく一礼した副官が、書状を丁寧に折り畳み始める。

駿がルルト市にやってきたのは、タナシス派遣軍武装解除から四日目のことであつた。

「久々に五人揃つたな。今夜は戦勝祝いで宴会といくか」「上機嫌で、拓海が言う。

「最近毎晩宴会じゃないの。飲みすぎよ」「凜が、古女房のような口調で文句をつける。

「仕方ないだろ。海岸諸国の要人に誘われてるんだから。平原と海岸諸国の友好のためだ」

「宴会はぼくもやりたいがね。でも、平原共同体総会は早急にタナシスとの和平を推進するように求めている」

駿が、説明を始める。

「条件は？」

真顔に戻つた拓海が、訊いた。

「ルルトが主張するラドーム公国の中立化は、否定的だ。そこまでタナシスに譲歩させるには、時間が掛かりすぎる。平原各国は、さつさと兵を引き上げて、海岸諸国から経済援助を引き出したがつているんだ。高原も、同様だね。とにかく、二度とタナシスが攻めてこなければ、それでいいと考えている。海岸諸国は、賠償まで持ち込むつもりかな？」

駿が、拓海に訊き返す。

「強硬ルルト、同調東部海岸諸国、日和見ワイコウ、慎重オープア、つてとこだな。占領と王族の亡命で面子の潰れたルルトは、報復する気満々だ。東部の三カ国も、同様。ワイコウは、孤立しないために主流派に乗っかるつもりらしい。オープアは冷静だが、ルルトとは仲いいからねえ。どうなるかわからん」

「とにかく、大事なのは平和の維持でしょ。ヴェルサイユ体制みたいな戦後処理をするわけにはいかないじゃない」

凜が、口を挟む。

「まあ、ある種モンロー主義的な非干渉政策を双方が貫くのが、一番簡単だろうね」

諦観したような口調で、駿が言う。

「モンロー主義って、アメリカの孤立主義政策だっけ」

夏希は世界史の授業を思い出しつつ、そう言った。

「厳密には違うがな。主な内容は、南北アメリカ大陸に対する新たな植民活動の禁止、ヨーロッパの政治組織を大西洋を超えて南北アメリカ大陸に拡大することを拒絶、南北アメリカ大陸における植民地の独立活動の妨害の拒否、そしてそれらの代わりに合衆国がヨーロッパの内政に介入しない、といったところだ。ありていに言ってしまうえば、西半球は合衆国が支配するから、ヨーロッパ諸国は手を出さな、その代わりにこちらもヨーロッパには手を出さないよ、ということだな」

拓海が、ざっと説明する。

「……なんか、すっごい横暴な話に聞こえるんだけど」

「超大国ってのはそういうもんだ。ともかく、ラドーム公国以北にはこちらでも干渉せず、タナシスも二度と南の陸塊に手を出さない、という形なら、和平を結ぶのは難しくないだろう」

「むこうは一国だけど、こちらは高原諸族も国家と看做すと、数十カ国よね。意見がまとまるかしら？」

「そこでだ。平原共同体を手本に、南の陸塊すべての国家をまとめ

上げる構想がある」

嬉しそうに、駿が言う。

「仮名称、ノノア川憲章条約だ。条約内容は、第一章が地域の平和と安全の維持、第二章が諸国間の友好の発展と円滑な経済活動の援助、第三章が人間界縮退問題の対処、第四章が雑則。平原共同体よりは結びつきが緩く、共同軍のような常備軍も持たないが、南の陸塊すべての国が加われれば政治的影響力は大きいだろう」

「組織はどうなる？」

生馬が質問した。

「常設されるのは、ノノア川憲章条約総会、同憲章条約事務局、同憲章条約経済調整局、さらに現在の人間界縮退対策本部をベースに憲章条約人間界縮退対策本部、といったところだね」

「タナシスとの外交チャンネルはそこが独占するのか？」

鋭い口調で、拓海が訊いた。

「それが無難だと思うね。個別に外交的に揺さぶりを掛けられるとこちらの政治的統合が緩むおそれがある」

「ノノア川憲章ねえ。西群島や東群島の小国家はどうするの？」

夏希はそう訊いた。オープア王国の西と、東部海岸諸国の東には、小さな漁村ひとつが事実上の独立国として機能しているような自治領や貴族領がいくつもある。

「もちろん参加させるよ。代表は総会に出席できるが、議決権は地域で一票、という形になるだろうね」

「なんか揉めそうね。平原が十三カ国。高原が十氏族でしょ。海岸諸国が六カ国と東西両群島。バランス取れないような気が」

主要国が議決権一票、と考えると、平原と高原が組めばノノア川憲章総会を牛耳ってしまうだろう。地域バランスを考えると、海岸諸国が不利になる。

「そのあたり、人口比とかにするとよけい揉めるからね。一応、大国は理事国、みたいな地位を与えて優遇するつもりだ。ルルト、オープア、ワイコウ、ススロン、エボダ、それに高原の氏族を三つく

らい。人口がもつとも多いのは高原だしね」

「人口か。そういえば、駿が色々調べてたんだっけ。正確な数字は出たの？」

夏希はそう訊いた。平原が三十万以上、海岸諸国はそれより多く、高原の民はもつと多い、というくらいは聞いたことはある、詳しい数字までは知らない。

「正確な数字は無理だよ。海岸諸国でさえ、戸籍はないからね。海岸と平原でも、農民に対する簡便な土地台帳があるだけだし、高原に至ってはそれすらない。まあ、狩猟民族に土地台帳は必要ないからね。まったくの推計だが、平原が三十万、海岸諸国が五十三万、高原が百万前後、とみている」

「合計百八十三万か。高原の民はすごいわね」  
素早く暗算した凜が、言う。

「高原の民の居住域は広いからな。平原はノノア川とその支流域しか開けていないし、海岸諸国もワイコウを除けば海沿いに点在しているだけだ。高原の人口密度は低いが、広範囲に散らばっているから、総人口は多い」

高原通の拓海が、説明する。

「タナシスの人口はどれくらいなのかしら？」

「タナシス王国は、公称二百十万人と言っているそうだ。この他に、タナシス王国の支配を受けていない辺境域の住民が若干いる。いずれにしても、南の陸塊より人口が多いことは確かなようだ」

「喧嘩相手にはしたくないな。とにかくタナシスとの和平交渉を進めなきゃならん」

生馬が、しみじみとした口調で言う。

「ところで、王女様の様子はどうだ？」

拓海が、夏希に振った。

「機嫌はいいわよ」

迫られたときのことを思い出して、気恥ずかしげに夏希は答えた。事情通のルルト貴族女性を探し出し、相談を持ちかけて推薦しても

らった貴族娘をあてがっておいたのだが、シエラエズはその娘のこ  
とをいたく気に入ったらしく、それ以来ずっと上機嫌なのである。  
……よほど性欲が溜まっていたにちがいない。

80 解放の日（後書き）

第八十話をお届けします。

## 81 王都リスオン

正規州七、自治州三、辺境州四、そして支配下の公国四からなる大国、タナシス王国。辺境州にはいまだその支配に従わぬ蛮族が存在するものの、事実上北の陸塊すべてを統治していると看做しても差し支えないだろう。蛮族を除く王国の総人口は、推定で二百十万人を越えていると言われている。

同国の地形を特徴付けているのは、その領域を流れる三本の大河と、二つの山脈である。西部地域と呼称されている西寄りの地方の南部から中部は、肥沃な平野が広がっており、そこを滔々と南へ向け流れているのがテマヨ川である。下流域にあるのが、カレイトン自治州で、その東方にはタラガン州がある。テマヨ川は中流で二つに別れ、西テマヨ川の上流にはクーグルト公国が、さらに上流の丘陵地帯には、エルフルール辺境州がある。一方の東テマヨ川を遡れば、デイディリベート州に行き着く。

中部地域と呼称されている地方を流れているのは、最大の川であるアノルチャ川だ。下流域にあるアノルチャ州内で流れは二手に分かれ、本流はほぼ北東へと伸びる。アノルチャ州の北は高原地帯であり、そこにはY字形に山脈が延び、三つの州の境を為している。

南西にあるのが、王都リスオンを擁するリスオン州。南東に位置するのが、デイディリア州。そして、北側にあるのが、タナシス王国発祥の地でもあるデイディウ二州である。同州の北には、メジャレ―ニエ辺境州がある。

アノルチャ川東岸、丘陵地帯に位置するのがスルメ公国。さらにアノルチャ川の上流域にあるのが、デイディサク州。その北東には、ストラウド辺境州がある。

西部地域を流れているのは、ペクトール川だ。下流域にはペクトール公国が、その北にはメリクラ自治州がある。小山脈を隔ててさらに北にあるのが、デイディナラ辺境州である。

これに洋上にあるラドーム公国を加えたものが、タナシス王国となる。

王都リスオンの人口は、約四万。リスオン川によって市街を二分された、高原都市だ。気候は冷涼で、雨は少ないが、豊富な水量を誇るリスオン川の恩恵で、水には困らない。

その王都に、遠征軍降伏の一報が届いたのは、昨晚遅くのことであつた。夜が明けた頃、詳細な第二報が届けられる。

「この報せは、わたくしから陛下にご報告します。そのほうが、よろしいでしょう」

リュスメース王女は、報告書を持参した外務官僚にそう告げた。あきらかにほつとした表情を浮かべた中年男が述べる礼の言葉を聞き流しながら、リュスメースは報告書をもう一度読み返した。

「シエラエズ姉さまも、気の毒に」  
外務官僚が下がると、リュスメースはひとりつぶやいた。報告書を手に、王宮の回廊を足早に歩み出す。

国王オストノフの三女である王女リュスメース。彼女の容姿はぱつとしない。見苦しくないだけの顔立ちではあるが、美人と誉れ高い長女エミストや、派手な顔立ちの次女シエラエズと比べれば、数段落ちると見られても仕方ないだろう。背も低く、身体つきは生硬でさながら少年のようだ。

そんな彼女は、自分の役割は父や姉たちを支えることにあると自覚していた。幸い、頭の回転は速いし、物覚えも良い。人前に出るようなことは姉たちに任せて、自分は裏方に徹し、王家を支えてゆく。まだ若いながら、リュスメースはそんな覚悟で生きていた。非公式ではあるが、すでに彼女は王宮内でオストノフの秘書官兼相談役のような役割を担っていた。

「お早うございます、陛下」

中庭のひとつでは、オストノフ国王が起床後の日課である鍛錬を行っていた。リュスメースは、堅苦しく声を掛けた。

「おう、リュスメースか。早いな」

愛剣を振るうのを止めたオストノフが、笑顔を見せた。すかさず寄って来た介添え役に剣を渡し、代わりに手拭いを受け取ったオストノフが、それでわずかに浮き出た汗を拭いながら歩んでくる。タナシスは征服王朝である。国王は単なる統治者ではない。武人でもあらねばならないのだ。すでに壮年といえる年齢に達してはいたが、オストノフは毎日の鍛錬を欠かしてはいなかった。

「遠征軍に関し第二報が届きました」  
「要約してくれるか」

オストノフが言つて、わずかな身振りで合図を送った。控えていた者たちが、すぐに消える。

人払いが終わったのを確認してから、リュスメースは口を開いた。二度読んだのもう内容は完璧に頭の中に入っているが、それでも眼で字面を追いながら喋る。

「遠征軍指揮官シエラエズ王女は、ルルト市で南の陸塊連合軍に対し正式に降伏。王女は平原共同軍が身柄を確保しました。遠征軍約二万は武装解除。グルージオンに入港した海軍船舶は軍船四、輸送船二十一。ヤンバス將軍は、すでに王都に向かつております。以上です」

「完敗だな。捕虜二万か」

「陸戦兵力で二万。拿捕された船も多いので、こちらの捕虜が一千から二千はいるでしょう」

「陸戦兵力だけで五万一千を送り込んで、死者行方不明と捕虜を合わせて約三万か。痛いな」

オストノフが、苦笑する。リュスメースは無表情を保った。痛いところの話ではない。

タナシス王国の総兵力は、正規軍が八十個団四万、辺境軍が四十個団二万、自治州軍が十八個団九千、公国軍が二十二個団一万一千、それに奴隷部隊が最大動員で約四万である。つまり、今回の遠征で実に四分の一が失われてしまったのだ。

さらに、海軍の軍船もその過半数が失われた。南の陸塊と違い、海賊に悩まされていなかったタナシス王国は、元来大規模な海軍を有していない。輸送船団の船舶および人員の損失を含めれば、タナシス海軍は壊滅的な打撃を受けたと言えた。

「敵を舐めていたな」

「姉上からの手紙にもありましたが、情報の不足が敗因ではないかと」

「たしかにな。烏合の衆のはずの各国が、あれほど早期にまとめ、統一指揮を受けて戦うなど予想すらできなかった」

オストノフが、汗を拭い終わった手拭いをぞんざいに肩に掛ける。王族らしからぬ振る舞いだ、筋肉の良く発達した武人肌のオストノフには、そんな少しばかり粗野なしぐさが妙にしっくりと似合っていた。

「戦術面でも予想できぬほど巧みな部隊運用がなされたようです。よほどの知恵者が、敵にいたのでしょうか」

「シエラエズの手紙にあった、竹竿の君か」

オストノフの言葉に、リユスメースはわずかにうなずいた。

「かもしれません」

「ふむ。一度会ってみたいものだ、噂の戦女神に」

「同感です。実に興味深い人物だと思います」

「問題は今後だ」

オストノフが、池のそばの石のベンチを指し示した。父親が腰を下ろすのを待つてから、リユスメースも座る。

「姉上と捕虜はぜひとも返してもらわねばなりません。事態が長引けば、公国や自治州に動揺が広がりがかねません」

「むろんだ」

自治州はかつてタナシス王国に征服された国、公国は征服をおそれて屈服した国が元になっている。表面上は大人しくしているが、独立を求める勢力は水面下で蠢動を続けているのだ。辺境軍は蛮族対策で動かせないし、奴隷部隊は常設の軍ではない。自治州軍や公

国軍は、政治的に信頼が置けない。今回の遠征で、正規軍一万八千を派遣し、いまのところ帰ってきたのは負傷者二千名だけである。

現在手元にある正規軍は、二万二千。これだけでは、万がどこかの自治州か公国が反乱を起こせば、早期鎮圧は難しい。そして、早期鎮圧に失敗すれば、まず間違いなく反乱は他の自治州や公国にも飛び火するだろう。そうなれば、タナシス王国は大混乱となる。是非が非でも、現在ルルトで捕虜になっている一万名以上の正規軍兵士を返してもらわねばならない。

「不戦条約と多少の賠償金だけでは納得せぬだろうな」

オストノフが、ぼやき気味に口にする。

「前向きに協力姿勢を見せるのが良作かと思考いたします」

「ほう。案を聞こうか」

「人間界縮退問題を持ち出すのです。これを、タナシスと南の陸塊の共同の敵、といった体で目立たせれば、よい方向へ向かうのではないでしょうか」

実際のところ、タナシス王国そのものには、まだ人間界縮退問題は大きな被害を与えていなかった。直接被害を受けていたのは、もっぱら辺境州のさらに外側に居住している蛮族であった。生活域を脅かされた彼らは、居住域を辺境州内に徐々に移しつつあり、その結果として辺境州軍との衝突が増えていたのである。統一が取れておらず、武器、戦術ともに未熟である蛮族だったが、辺境州は広大である。二万の兵力を持つとは言え、そのすべてで蛮族の襲撃から居留民を守ることは不可能であった。正規軍の大量投入で蛮族退治をするのも非現実的である。拠点を持たず、流浪生活に慣れている蛮族は、狩り立てられればあっさりと土地を捨てて逃げ出し、州外へと逃れるか、他の辺境州へ移り住むだけなのである。まるで水のように、自在に姿を変えてつかみどころがない。このような敵を撃滅することは、ひじょうに困難である。

そんな中で届けられたのが、人間界縮退対策委員会と対策群の連名で書かれた書簡であった。内容を知ったタナシス政府は驚愕した。

南の陸塊には、従来魔力の源はひとつしかないと言われていたのだ。それが、三つもあり、しかもかなりの魔力を余しているという……。すでにタナシスは、人間界縮退と魔力の使用の相関関係を知っていた。それゆえ、魔力の使用も極力控えるようになっていた。もっとも、それ以前からタナシスにおいては魔力の使用自体がほとんど行われていなかった。三つある魔力の源のうち、ひとつは完全に魔力を使い果たしていたし、残る二つも魔力残量はわずかだったからだ。

南の陸塊にある魔力の源ひとつが、タナシスが保有する魔力の総量の数十倍の魔力を有している……。

タナシス王国上層部は慌てた。南の陸塊が意図的に、あるいは意図せず魔力を無制限に使えば、まず確実にラドーム公国を除くタナシス全土が魔界に飲み込まれてしまうだろう。安全保障上、それは容認できない。

かくして立案されたのが、南の陸塊へ侵攻して魔力の源を奪取する作戦であった。投入された兵力は、投入可能な輸送船腹量と予想される現地での兵站、それに国内事情を考慮すれば、最大限の規模といえた。指揮官には、オストノフ国王によってシエラエズ王女が任命された。こちらも、軍事的能力、士気の向上など、各種事情を考慮した上での最善の選択であった。

しかし、タナシス遠征軍は敗れた。ワイコウの魔力の源は奪取し、空になっていった魔力の源にその力を移し替え、タナシス本土まで運び入れることに成功したが、魔力の総量という意味では、いまだ南の陸塊の方が多くの力を保有している。当面の危機は去ったが、当初の目的はいまだ達成できてはいないのが現状である。

「なるほど。共闘を持ちかけ、昔の恨みは忘れろ、と言い張るのか」  
リュスメースの提案を聞いたオストノフが、角ばった顎を撫でる。  
「敵は……失礼、南の陸塊は一枚岩ではありません。人間界縮退対策に本当に悩んでいるのは、一番南に位置する高原の人々でしょう。彼らの優先目的は、人間界縮退対策です。上手く立ち回れば、高原

をこちらの味方につけ、南の陸塊諸国の団結を切り崩すことも可能かと」

「いい案だな。承認する」

「ありがとうございます」

「ところで、もうひとつ知恵を貸してくれ。南の陸塊と和平交渉に臨むことになると思うが、誰に任せればいいと思う？」

「姉上に……エミスト殿下にお任せするほかないと思いますが」

やや当惑気味に、リュスメースは言った。勝ち戦ならともかく、負け戦の和平交渉に国王陛下自らが出るわけにはいかない。国王名代となれば高い地位の者が必要だが、抑留されているシエラエズ王女を使うこともできない。必然的に、出せる人材は限られる。その中で、もっとも適任なのがエミスト王女だろう。地位、交渉能力、押し出しの良さ。これ以上の人材は、考えられない。

「自薦する気は、ないのか？」

優しげに微笑みながら、オストノフが訊く。

不意にリュスメースは赤面した。

「まさか、そんな。交渉には外見も大事です。わたくしでは、舐められてしまいますわ」

「謙遜するな。自薦すれば、それを承認するつもりだったがな。まあ、やる気がないので仕方がない。だが……」

オストノフが立ち上がりながら、リュスメースの細い肩に大きな手をそつと置いた。

「今後何かあつて、もし自分の方が適任だと感じたら、遠慮なく自薦しろ。お前には、それだけの器量がある。いいな」

「タナシス政府は和平会談に応ずるそうだ。場所はラドーム公国の首都グルージオンか、ルルト市か好きな方を選べと言って来たよ。向こうの代表はエミスト王女。王女三姉妹の長女。シエラエズの、姉だ」

異世界人五人が揃った朝食の席で、駿がそう報告する。

「当然、ルルトに呼びつけるんだろうな。こっちが勝ったんだから、頭下げてやってくるのはタナシスだ」

生馬が得意げに言っつて、旨そうに茶をすすする。

「いや、ラドームへ出向いた方がいい」

拓海が反対する。

「なんで？」

意外そうに、夏希は訊いた。生馬の理屈はしごく正しい、と思っただからだ。

「ルルトにはまだ二万人近い捕虜がいる。シエラエズ王女もいる。そこで和平会談を行うのは、トラブルを惹起しかねない」

「じゃ、オープアかラクトアスにしてもらったら？」

凜が、提案する。

「おいおい。電話で打ち合わせするわけには行かないんだ。会谈場所変更だけで、五日は潰れるぞ。二万人に飯を食わせるだけでも、膨大な金がかかるんだ。捕虜は有利な取引材料として使いたいのが、維持費を考慮すれば一日でも早く送還したいのがこっちの本音なんだよ」

「ところで、こちらの意思統一はできたの？」

貝のスープを飲みながら、夏希は駿に訊いた。

「ルルト王国はなんとか説得した……というか、オープアと東部海岸諸国が納得させたつてところだね。捕虜の給食に関しては海岸諸国に任せてあるから、思ったより金が掛かることに遅まきながら気付いたらしい。賠償に関しては、侵略の是非を不問にして、ワイコウの魔力の源の対価を払わせる、という名目で金を巻き上げよう、という方向で話がまとまりかけている。戦時賠償、ではタナシスも金を払いにくいだろうからね」

「お金つていうと、現金？」

「タナシス王国も高額通貨として金きんを利用しているから、まとまった量の金、という形になるだろうね。全額を金でもらうと、こちら

の需給バランスが崩れるから、半分程度は他のものでもらいたいね。タナシスには、南の陸塊にはない産物が色々多いみたいだし。羊がいるから、羊毛や毛織物を産するし、酪農も盛んだから乳製品も作られている。養蜂もやっているから蜂蜜もある。養蚕も盛んらしい。シルクはこちらでも高く売れるんじゃないかな」

「シルクって、湿気に弱いよねえ」

夏希は頬を掻いた。海岸地帯ならともかく、平原でシルクの服など着ていたら、湿気と汗で一日でだめにしてしまいそうだ。

「なんだか商売つ気が刺激されてきたわね。不干渉主義なんてやめて、タナシスと貿易した方がいいんじゃない？」

眼を輝かせた凜が、言う。

「そうしたいのは山々だが、効果的な安全保障体制が構築できない場合は、不干渉主義が一番平和を保てるんだよ。付き合わない限りや、利害の衝突は皆無だからな。引きこもり同士が喧嘩しないようなもんだ」

「やな喩えね、それ」

凜が鼻に皺を寄せる。

「乳製品に蜂蜜か。タナシスの主食は小麦なんだろう？ 久しぶりにピザやホットケーキが喰えそうだな」

箸を置いた生馬が、はしゃぐ。

「ねえ、こっちの代表は誰なの？」

夏希は訊いた。王女様が相手となると、それなりの人物をこちらも用意しなければならぬだろう。

「あんまり大人数を出しても、交渉がまとまらないからね。多くても四人が適当だと思う。とりあえず平原代表が一人、高原代表が一人、海岸諸国代表が一人で調整を進めてもらってる」

にやにやしなながら、駿が言う。

「じゃ、三人だな。まあ、俺も会談には出ないが、相談役として付いてゆくつもりだが」

拓海が重々しくうなずいた。

「それが、四人なんだ。タナシス側から、ぜひ出席して欲しいとご指名の人物がいてね」

「誰だろう？」

夏希は首をひねった。共同軍の司令官だろうか。あるいは、ルルトの国王か。

「ヒントを出そう。女性だ」

にやにや笑いを深めながら、駿が言う。

「ニガタキ王国の女王様か？ たしか、ランクトウアン王子の姉も、結構なやり手だと聞くが」

生馬が言う。駿が、首を振った。

「外れだ。第二ヒント。僕たちのよく知る人物だ」

「エイラかな？ それともサーイエナ？ まさか、コーちゃんじゃないでしょうね」

夏希はさらに首をひねった。

凜が、ぷつと吹き出した。釣られたように、拓海もくすくす笑いを始める。夏希のきよとんとした顔を見て、生馬も豪快に笑い出した。

「え？ なにがそんなにかしいの？」

「あのな。こんだけヒント出されても気付かないのか。タナシスにまで名の知れ渡った、俺たちがよく知る女性など、何人もいるわけがないだろう」

拓海が、呆れたように言う。

「ご指名、と言ったが、本当は名前を指定してきたわけじゃないんだ。高名な武人、竹竿の君にもぜひご同席いただきたい、と言ってきたのさ。タナシスは」

駿が夏希を見据える。夏希の眼が、点になった。

81 王都リスオン（後書き）

第八十一話をお届けします。

## 82 平和へと至る道

「嫌味よねえ、この数は」

洋上を滑ってゆく白い帆を数えながら、夏希は言った。

和平会談関係者を乗せたルルト船籍の大型民間船は一隻。それを取り囲むように、ランクトウアン王子が指揮するオーブア海軍と、復活したルルト海軍の軍船が十二隻いる。一応、護衛という大義名分だが、どう考えてもこれだけの数は不要である。

「嫌味だな、たしかに。大国タナシスといえども、軍船の数は限られているはずだ。今回の戦いで四隻喪失、八隻鹵獲だから、相当痛かったはず。輸送船の数も、激減しただろうし」

拓海が満足げに応じる。

和平会談代表団についてきた異世界人は、夏希と拓海だけであった。生馬はルルト市に残って戦後処理と共同軍の再建に当たっている。凜は一足先にハンジャーカイに戻って、戦争で混乱した平原共同体経済の建て直しを手伝っている。駿は海岸諸国をまわって、ノア川憲章条約締結の根回しの最中だ。

夏希の知り合いの中では、エイラとサーイエナもこの船に乗り込んでいた。議題が魔力の源に関連してくるので、人間界縮退対策本部関係者として参加するためだ。もちろん、二匹の使い魔も一緒である。

ほどなく、進路前方にタナシス船が現れた。その船に案内されて、十三隻の艦隊はラドーム公国の首都である港町、グルージオンへと近付いていった。

会談場所は、ラドーム公王宮内に準備されていた。

夏希は四人目の代表として、三人のVIPのあとに続いて公王宮の回廊を歩んだ。平原代表は、ススロンの王子ビアスコ。高原代表

はユーロアン氏族の氏族長アフムツ。そして、海岸諸国代表はルルトの王子ハルントリー。相手が王女であることを考慮し、王族が二人選ばれている。

夏希は代表団に参加するまでアフムツ氏族長の名前すら知らなかったし、ハルントリー王子にはルルト王族が平原に亡命してきたときに挨拶で一回顔を合わせただけ。唯一ビアスコ王子だけは、平原時代にパーティの席で数回言葉を交わしたことがある。もちろん代表団入りが決まってからは、四人で何度も詳しく打ち合わせや勉強をして、意思の統一は図ってあった。

タナシス王国のエミスト王女は、すでに会談場所である広間で待ち受けていた。

……うわ。

妹であったシエラエズ王女も結構な美人だったが、エミストはそれを上回る美しさだった。鋭く尖った感じの妹とは違い、おっとりとして優しいタイプだ。卵形の顔に、ぱつちりと大きな黒い眼。優美にカーブを描いた細い眉。控えめな唇。年齢は、二十代後半か。中国が韓国の人気女優、といった雰囲気である。

二人の中年男性を従えたエミスト王女が、優雅に立ち上がった。近づく四人に向け、微笑を向ける。慈母じみた、見ているだけでこちらも微笑んでしまいそうな暖かみのある笑みだ。

お互い自己紹介が済んだところで、一同は広間の真ん中に設えられた大きなテーブルの反対側に分かれて座った。エミスト王女の左右には、外務大臣と名乗ったロンドリーという禿頭の男性と、軍事顧問らしいレジエ將軍と名乗る細い口髭を蓄えた男性が座る。少し離れて下手には、記録係である書記が腰をおろした。

一方の南の陸塊側は、すでに中年に達しているハルントリー王子を中心に、右にまだ若いビアスコ王子、左に初老のアフムツ氏族長が腰掛けた。夏希の席は、アフムツの左で、さらに少し離れたところにこちら側の書記が座る。

ラドーム公王宮が手配した接待役や控えの書記は、壁際に置かれ

たベンチに腰を下ろす。双方の護衛がそろそろと広間を出て行き、公王宮の衛兵が扉を閉めた。

「まずははるばるラドームまでおいでいただいたことに感謝します」  
エミスト王女が、最初に口を開いた。その風貌に似つかわしい、優しい声だ。

「ビアスコ殿下やアムツ殿はともかく、わたしはそれほど時間を掛けずに来れましたが。まあ、しばらく平原暮らしを余儀なくされましたから、それを考慮すれば別ですが」

ハルトリー王子が、穏やかな口調で嫌味を言う。

「捕虜の送還を開始してくださったことにも感謝します。しかし、ずいぶんとみなさんの海運事情は悪化しているようですね。船は余っているのに、いまだ四千名しか送還していただけないとは」

負けじと、エミスト王女が皮肉を口にする。送還された捕虜は、負傷者や奴隷兵士が中心で、精鋭正規軍兵士はそのほとんどがいまだルト市郊外の捕虜収容所に留め置かれているのだ。もちろん、有利な取引材料になる、と考えてのことである。

「戦争で、かなり混乱しましたからな」

しれっとした表情で、ハルトリー王子が答えた。

しばらくのあいだ嫌味の応酬が続いたが、夏希は黙っていた。まだ、自分が口を差し挟む段階ではない。タナシス側に出席を要請されたとは言え、夏希の身分は平原共同軍参謀部参謀でしかないのだ。それぞれ高原、平原、海岸諸国の外交代表を名乗っている三人に比べれば、はるかに格下の存在である。

実りのない会話に飽いたのか、アムツ氏族長が話題を変えた。タナシス派遣軍の軍事行動が、南の陸塊に対する侵略行為であったとして、やんわりとエミスト王女を非難し始める……。

「……すっごい無駄な時間を過ごしたような気がする」

宿舎で夕食を食べながら、夏希はそう拓海に感想を述べた。

和平会談は、結局なんの成果も挙げられないまま、夕刻にいたつてお開きとなった。唯一双方が合意したのは、翌日再開される会談の刻限だけであった。ちなみに、夏希が発言する機会は一度もなかった。ついでに言えば、タナシス側の二人の男性……ロンドリー外相とレジエ將軍……も一言も発しなかった。

「まあ、外交交渉つてものは、基本的にそういうもんだ。お互い腹を探り合つて、相手がどこまで譲歩するかを見極め、その上でこちらの主張を展開し、妥協点を見出そうとする。時間が掛かつて当然だよ。三次元空間には無限の点が存在するが、いわば双方がそこに正確にたどり着かなきゃならないわけだからな。どうでもいい条約一本結ぶにも、何十日も前から外務官僚同士が接触して根回しし、課長級やら局長級やらが細部まで詰めて、副大臣か次官クラスが9・9パーセントまでまとめ上げてから、始めて外相や首相やらが出てきて話し合つて、握手してサインするんだ。ぶつつけ本番で行われる和平会談なんて、マラソン化するのが通例だ」

向かい合つて米飯を掻き込んでいた拓海が、苦笑する。  
「でも、時間を掛けられないんでしょ？」

いまだルルトには一万六千のタナシス兵捕虜がいる。共同軍の復員も進められ、平原市民軍は解散し、高原戦士も大半が故郷へと向かった。さらに海岸諸国市民軍もその半数以上が市民生活に戻ったが、それでもまだルルト市とその周辺には三万近い部隊が捕虜管理、戦後処理、さらに警備警戒などのために残留している。彼らに給食するだけで、毎日大量の食料とお金が消えてゆくのだ。

「まあな。しかしここでの拙速はまずい。もつと相手を追い込まないと。明日はワイコウの魔力の源返還要求で攻めてもらうつもりだ。そこから魔力の源買い取り、へ話を持っていければ好都合。……とここで、エミスト王女をあんたはどう見る？ 聞いた話じゃ、かなり切れそうだが」

「見た目はおっとりお姉さまだけど、知恵は働くわね。今日は一回も補佐役の助けを受けずに、こちらの三人相手に一歩も引かずやり

あつたし。かなりタフな印象よ」

久しぶりのコーヒー……戦争中は当然ルト・ラドーム間の貿易は途絶していた……をしみじみと啜りながら、夏希は答えた。

「政治や軍事に関する知識や見識はどうだ？」

拓海が、眉根を寄せて訊く。

「それは……直接会話しないとわからないわね」

「折を見て、そこらへんを探ってくれないか。まずはなぜ竹竿の君を出席者に指名したのか、あたりから話をすれば、自然だろう」

「わかった。やってみる」

翌日の会談冒頭で、エミスト王女が議題をいきなり人間界縮退問題に誘導する。

「殿下。たしかに人間界縮退問題は懸念すべき問題ですが、ここは和平交渉の場です。人間界縮退問題は、和平条約が結ばれ、双方の外交関係が正常化してから改めて取り組めばいいことでしょう」

ピアスコ王子が、苦言を呈する。

「いや、タナシスが南の陸塊遠征を決意したのも、もとは人間界縮退が原因です。この問題の対策を無視して、和平は難しいでしょう。ぜひここで話し合い、両者協力して対策を考えるべきです。そうは思いませんか？」

熱っぽい口調で語ったエミスト王女が、大きな眼で一点を見据える。視線の先がアフムツ氏族長であることに、夏希は気付いた。

しばらく人間界縮退問題に関するやり取りが続く。結局エミスト王女は、和平条約の中に人間界縮退問題に対する取り組みをタナシス王国と南の陸塊諸国の共同で行う、という文言を盛り込む、という言質を得たことに納得し、ようやくその議題を取り下げた。

「では、こちらからお話をさせていただきます。王女殿下。ワイコウに存在した魔力の源は、人間界縮退対策本部の所有物でした。あなた方は、これを強奪した。和平に先立ち、この返還を要求いたし

ます」

ハルントリー王子が、強い口調で要求する。

「これは異なることを。魔力の源に、そもそも所有権など発生しないでしょう」

「はあ？」

「魔力の源は、はるか昔から存在した自然物。いわば、海や山や川のようなものです。ひとが所有できるものではありません。ワイコウにあった物も、ワイコウが管理していたに過ぎません。タナシス遠征軍は、ワイコウ政府から合法的に管理権を譲り受けて、魔力の源の移し替えを行い、本国に持ち帰っただけです。管理権移転に関する、公文書も残っています。返還など、必要ありません」

「失礼ながら、それは屁理屈ですな、殿下」

ハルントリー王子が、鼻で笑った。

「例えば土地には、所有権が発生しますぞ。それを奪うのは、窃盗です」

「土地の所有権は、きわめて制限されたものです。それは真の所有権とは違います。いわば、一時的な利用権に過ぎません。自分の土地に流れている川だからといって、その水をすべて堰き止めたり、毒物を垂れ流したりする権利はありませんよ」

「そんな極論を」

「極論ではありません」

若干悲しげな表情で、エミスト王女が続けた。

「人間界縮退問題でわかったように、魔力の源はいわばこの地に住む者すべてを守る存在なのです。共有の財産と言えます。その管理は、個人や小組織に任せられるものではありません。下手をすれば、すべてが魔界に飲み込まれかねないのですよ。いずれ、魔力の源は正当なる国際組織の管理下に置かれるべきでしょう。もちろんわが国は、すでに以前から魔力の使用を全面的に禁止しています。かつてワイコウが管理し、きわめて正当な方法でわが国に管理権が移った魔力の源は、当面わが国が管理させていただきます。これは、人

間界を守る正当な行為なのです」

夏希に発言のチャンスがめぐってきたのは、昼食休憩のしばらくあとのことであつた。

双方が実りのない議論にいささか倦み、無言でにらみ合いに入つたところで、夏希は頃合よしとしてエミスト王女を見つめ、言葉を発した。

「ところで王女殿下。なぜわたしを会談メンバーに入れるように要請されたのですか？」

「ひとりくらい、武人がいてもよろしいでしょう。こちらにも、レジエ將軍がいますし」

話題が変わつたことにほっとしたのか、やや安堵じみた笑みを浮かべながら、エミスト王女が答える。

「武人なら、別にわたしでなくとも……」

「あなたが一番有名ではないですか、竹竿の君」

エミストが、笑みを深くする。

「それに、あなたに会つてみたかつたのですよ。竹竿を華麗に操る美しき戦女神。評判どおりの美しい方ですね。優秀な武人とも、聞き及んでいます」

「わたしよりも優秀な武人など、高原にも平原にも海岸諸国にも、大勢いらつしゃいます」

三代表のことをおもんばかつて、夏希はそう発言した。

「でも、女性はあなただけでは？ もうひとつの理由は、会談にわたくし以外に女性が参加して欲しかったからです。男性ばかりでは華がなくていけませんから」

冗談めかしたつもりか、ちらつと歯を見せる笑顔を夏希に向けたエミスト王女が、器用にウインクする。

「そう来たか。こりゃ、長引くぞ」

夏希の報告を聞いた拓海が、唸る。

「こちらは賠償請求したい。タナシスは侵略行為を認めず、謝罪し  
たくない。当然、賠償にも応じない。賠償に応じれば、侵略を認め  
たことになるからな。だから、魔力の源を買い取った、ということ  
にして、南の陸塊に金を払えば丸く収まる、というのが駿と俺が描  
いたプランだったが……美人王女様が魔力の源管理権説を唱えると  
なると、支払いには応じてもらえそうにないな」

「どうするのよ」

「とりあえず、双方納得できる条項だけ署名して、戦争状態を終わ  
らせるしかないな。休戦状態が長引くのは、まずい。そのうえで、  
金の話は継続する。タナシス遠征軍が南の陸塊で生じさせた物資の  
消費や住民の徴用に関する支払いは認めているんだから、生じた損  
害に対する補償という形なら、支払ってくれるだろう。額に関して  
は、揉めるだろうが」

「捕虜はどうするの?」

「ほとんどは帰すしかないだろうな。シエラエズ王女も、こうなっ  
てくると切り札として使い辛くなる」

「大国相手の外交は、難しいわね」

夏希は憤然として腕を組んだ。タナシス王国は負けたと言っても、  
敗戦国になっただけではないのだ。カモ面子も失っていない相手に  
頭を下げさせるのは、難しい。

「しかもこちらは寄り合い所帯だからなあ。一刻も早く駿に、ノノ  
ア川憲章を発足させてもらわないと」

渋い表情で、拓海が言う。

和平会議三日目は、劇的前進が見られた日であった。

冒頭から南の陸塊代表団が、タナシス王国に対する金銭的要求を  
一時的に棚上げし、和平条約締結を先行させるという提案を行う。

タナシス側は、その提案に原則的に賛成した。

そのあとはとんとん拍子であった。昼前に、和平条約の骨子が固まる。昼食休憩と午後半ばまでかけて、双方がその骨子を検討し、条文化したものをその後つき合わせ、協議を重ねる。夕刻までには、条文内容の調整が済み、和平条約本文がラドーム公国の書記の手によって清書された。

夏希は写しを手に入れると、それを精読した。内容は、戦争状態の終結、勢力圏が南の陸塊北岸とラドーム公国南岸のあいだの海洋であることの再確認、正常かつ友好的な外交関係の継続の確約、南の陸塊諸国によるタナシス王国への不干涉、おなじくタナシス王国による南の陸塊諸国への不干涉、現在南の陸塊諸国が管理しているタナシス捕虜（シエラエズ王女を含む）の条約署名後五十日以内の送還、タナシス派遣軍が南の陸塊で行った物資調達、住民徴用、動産および不動産の利用、毀損した財産に対する補償などに対する支払いの確約と、その詳細に関する交渉の継続、人間界縮退問題に対する双方の協力体制の構築、本条約は署名後に暫定的に効力を発生するが、完全なる締結にはタナシス王国政府および南の陸塊諸国政府による批准を必要とする、などであった。

「ねえ、拓海。署名と批准って、どう違うの？」

「署名は代表が内容に納得してサインすることだ。だが普通、それだけでは国際条約などは発効しない。政府の条約加入賛否を握っている機関……たいていの場合議会だ……の承認を得なければならぬ。これが批准だ。南の陸塊諸国なら、国王の裁可や御前会議、族長会議の承認が必要になる。この条約のままだと、あまりにもタナシス側に有利だからな。金の支払いをのらくらと躲し続けると、批准してやらんぞ、と圧力を掛けるためだ」

「なるほど」

署名準備が整った頃には、とうに日は暮れていた。植物油ランプが数多く灯された広間には、立会人として公女王カミュエンナを始めとするラドーム公国の重要人物も多数詰め掛けていた。もちろん、

南の陸塊とタナシスの主だった随行員も同席している。

夏希はやや緊張して、三人の代表のあとについて広間へと入っていった。すでに大テーブルに座っているエミスト王女に会釈してから、椅子に腰掛ける。

……緊張するなあ。

条約に署名するなど、生まれて始めてのことである。

ラドームの官僚が、条約内容を朗々と読み上げた。双方の代表団に、遺漏がないことを確かめさせる。

各人の前に、ペンとインク壺が置かれた。ペンは、おなじみの割り箸みたいなつけペンだ。

ラドームの官僚が、書類をエミスト王女の前に置く。ペンを取った王女が、すらすらと署名した。書記が署名の上から柔らかい布を押し当て、余分なインクを吸い取る。この世界に、吸い取り紙というものはまだ存在しない。

書類を取り上げた官僚が、それをハルントリー王子の前に置いた。ついで、ビアスコ王子が署名する。その下に、アフムツ氏族長。

次は自分の番だと思ってペンを取り上げた夏希だったが、ラドーム官僚は夏希の前を素通りして書類をロンドリー外務大臣の前に置いた。落ち着いた表情で、ロンドリーが署名を済ませる。

……身分順なんだ。

ようやく、夏希は気付いた。まずは大国の王女で、次期女王であるエミスト。次に、海岸諸国最大国家の王子。そして、平原有力国の王子。アフムツは、氏族長だから有力貴族待遇だったのだろう。ロンドリーは、高位な貴族に違いない。

そのまま隣のレジエ將軍に署名させるかと思われたラドーム官僚だったが、意外にも彼が次に書類を差し出したのは夏希にであった。戸惑いを隠せないまま、夏希はその指差す場所に何度も練習したこの世界の丸っこい文字で自分の名を書いた。

ラドーム官僚が、レジエ將軍の前に書類を置く。ペンを置いた夏希は、將軍が署名する姿をぼんやりと眺めた。ジンベルのような小

国の、成りたて貴族よりも地位の低い貴族がいるとも思えない。レジエ將軍は、平民の出なのである。にもかかわらず、大国タナシスで將軍の地位にまで上り詰め、次期女王の傍らで助言役をこなす、そしてこうして全権代表の一員として署名までしてしまふ。……タナシスは、見た目よりも進んでいる国家なのかも知れない。

ラドーム官僚が、七人の代表が全員署名した書類を掲げて、立会人たちに見せた。期せずして、拍手が巻き起こる。別のラドーム官僚が、もう一通の書類をエミスト王女の前に置いた。双方が保管するため、原本二通が作成されるのである。

「たいへんお世話になりました、殿下」

無事和平調印がなされた翌日、夏希は船団出航前に公王宮を訪れ、ラドーム公国公女王カミュエンナに礼を述べた。

「和平が成立し、本当によかったです」

カミュエンナが、首をわずかにかしげて笑顔を見せた。

「ラドームはタナシス王国に属していますが、文化的にみれば南の陸塊に近い。友人の立場に戻れたことは、本当に嬉しいです。……これはごく個人的な感情で、公女王としての立場で言う言葉ではありませんが、ラドームが南の陸塊侵攻の策源地となったことは、遺憾であり、無念でもありません」

「おやめください殿下。殿下やラドームの人々の立場は、十分に理解しております。南の陸塊では、誰一人として殿下やラドーム人を心憎く思ってはおりませんよ」

「そう言ってくださると、心が休まります」

カミュエンナが、寂しげに微笑む。

小国のうえ独立国ではないせいか、カミュエンナは高貴な立場にも関わらず夏希には気さくに接してくれていた。歳が近いせいもあり、何回か顔を合わせるうちに夏希は愛嬌ある顔立ちの褐色の肌の娘のことを、すっかり気に入っていた。カミュエンナも夏希のこと

を好いていてくれるようで、今日も通されたのは謁見の間ではなく、カミュエンナがいつも使っているらしい私室であった。

「わたしは帰国させていただきますが、補償交渉に関しては、まだ当地で継続して行われます。ご迷惑をお掛けすることになりますが

……」

「迷惑などんでもない。微力ながら、双方の陸塊の平和のために寄与できるのは、わたくしにとってもラドーム人民にとっても、喜ばしいことです。願わくば、その交渉が早期に終結し、みなさんとタナシス王国が真の友人となれる日が一日でも早いことを期待します」

カミュエンナが、手を伸ばすと膝の上に置いていた夏希の手をきゅっと握った。

「ありがとうございます、殿下。ご期待に副えるよう、努力します」

82 平和へと至る道（後書き）

第八十二話をお届けします。

タナシス兵捕虜が、続々と小船に乗り込んでゆく。

第三次送還船団の出発である。商船十二隻、護衛の軍船二隻で、三千五百名のタナシス正規軍兵士をラドーム公国へと運ぶ。

「和平条約に署名しちまったら、もはや捕虜は用無しだからな。無駄飯を喰わせることもない」

外港に停泊している商船に小船が漕ぎ寄せてゆくのを見送りながら、拓海が言う。

ノア川憲章締結に向けて走り回っている駿を除く四人の異世界人は、送還船団の出発式に立ち会っていた。平和の回復を宣伝するかのように、式典は派手かつきわめて友好的に行われていた。タナシス捕虜の代表者に対し、ルルト市民の幼い少女が花束の贈呈を行うところなど、過剰演出もいところである。

「ところで、シェラエズ王女はいつ帰すの？」

夏希は問うた。王女は面倒は起こしてはいないが、やはり身柄を預かる責任者としては、早めに送還してもらったほうがありがたい。

「あー、そのことなんだが、駿の提案があるんだ」

「提案？」

「シェラエズ王女送還にかこつけて、南の陸塊主要国共同の外交団をタナシスに送り込もうというプランだ。王女を送り届ける、という大義名分なら、タナシスも断りにくいだろうからな」

「目的はなんだ？ 駿のアイデアなら、単なる友好目的じゃあるまい」

「にやにやしなから、生馬が訊く。」

「タナシスの内情調査だな。原則不干渉主義でいくとしても、信頼醸成のためにはある程度の情報の交換は必要だからな。和平条約とは別に、いずれ軍備に関する条約も結びたいし」

「軍縮条約とか？」

凜が、訊く。

「いや。むしろ軍備管理協定に近いかな。八十年代にヨーロッパで行われたようなものだ。もちろん、それよりもはるかに緩いがね。とりあえず大海で隔てられているんだから、軍船保有数に上限を課すだけでも、互いの疑心は取り除けると思うし」

「じゃ、拓海自らタナシスに行くつもりか？」

生馬が、意外そうな顔で問う。

「ああ。行ってみたいね。色々調べたいことも多いし」

「俺も行つていいか？」

「悪いが、だめだ。タナシスが和平条約を反故にするとはいえんが、補償関連がこじれば外交団が抑留される可能性は皆無じゃない。

生馬には、留守を頼むよ。俺の代役が務まるのは、あんたしかいないんだから」

「わかつたわかつた」

生馬が、あっさり引き下がる。

「じゃ、あたしも行かない方がいいわね。ノア川憲章が発足したら、経済調整局にポストをくれるって、駿が言ってたから、いずれ忙しくて旅行どころの話じゃなくなるだろうし」

凜がそう言う。拓海がうなずいた。

「駿はもちろん無理だし、とりあえず主要各国に代表を出してもらって、俺と夏希でタナシスの内情を調べてくるよ。二十日もあれば、十分だろう」

「ちよつと待った。意向も聞かないまま、わたしを含めないでよ」

夏希は強い口調で抗議した。行くのは構わないが、勝手に決められるのは困る。

「あなたはシエラエズ王女のお守り役だろ？ 王都リスオンまで、無事に送り届ける責任がある」

拓海がそう指摘する。

「そつ……かもしれないけど」

「和平条約に調印した者が入っていれば、外交団にも箔がつく。な

んなら、あんたが外交団長でもいいくらいだ。タナシスに名も売れてるしな」

「なるほどな。わたしを送り届けるついでに外交を行おうというわけか。捕虜の身としては、拒否するわけにはいかん」

夏希の説明を受けたシエラエズ王女が、納得した表情を見せる。

「別に殿下を政治的に利用する意図はこちらにはありませんし、もちろん殿下の名誉を汚すようなことは……」

「わかつている。和平が成立した以上、南の陸塊諸国とタナシス王国はよき隣人、よき友人とならねばならぬのだ。わたしと部下を人道的に扱ってくれたことにも、感謝している。タナシスとそなたたちが友情を築けるのであれば、それに協力することは吝か<sup>やたら</sup>ではないよき友人となれるといいな、われわれは」

シエラエズが、熱っぽい眼で夏希を見据える。

「友人、であれば可能でしょう」

慎重に、夏希は心じた。シエラエズはまだ夏希に未練があるらしく、顔を合わせるたびに誘ってくる。半ば冗談だとはわかっていても、その気のない夏希にとってはいささかうざい。

シエラエズが、見せ付けるように夏希に胸を突き出し、着衣の上からさりげなく乳首を弄り出した。夏希はそれを無視し、事務的な口調で続けた。

「えー、殿下。送還に当たって、なにかご希望はありますか？」

「特にないな。強いてあげれば、船室はそなたと同室がいい」

「殿下」

「冗談だ。無事に本国に送り届けてもらえば、それで十分だ。そなたが望むのであれば、あらかじめ陛下に……父上に手紙を書いてもいいぞ。外交団を歓迎するように、口添えしよう」

「それは助かります。ぜひお願いします」

「諸君、先ほど高原からの使者がルルト市に到着した。高原氏族長会議で、すべての高原氏族がノノア川憲章への参加を承認したそう  
だ。これで、南の陸塊にある国家と氏族ひとつ残らず参加する目処  
がついた」

嬉しそうに、駿が報告する。

「これで、南の陸塊が政治的に統合されたな。もう戦争もあるまい」  
拓海が、駿に握手を求めると。

「憲章の内容は？」

夏希は訊いた。

「内容は各国代表を集めて検討したうえで細部を詰めるから、いま  
は僕が書いて平原や海岸諸国の外交官に手直ししてもらった草稿が  
あるだけだが、基本的には以前説明した内容と変わらないよ。第一  
章で、地域の平和と安全の維持を定める。集団安全保障体制の構築、  
域外からの脅威に対する無制限の協力、非常時以外の市民軍の編成  
の抑止、諸国間の軍事同盟の撤廃および禁止……」

「ちよつと待った。平原共同体はどうなるんだ？」

拓海が、鋭く突っ込んだ。

「基本的にはそのままだ。あくまで地域的経済協力機構兼安全保障  
体制だからね。だけど、平原共同軍は条約に明らかに抵触するから、  
ノノア川憲章条約防衛隊を創設することにした。憲章条約総会の下  
に置かれる、小規模な自衛戦力だ。平原共同軍はそのまま、ノノア  
川憲章条約防衛隊平原支隊、という名称で残す。同様に、高原諸族  
は高原支隊を、海岸諸国は海岸支隊を作る。海岸諸国海軍も、でき  
れば条約海軍というかたちで統合できればいいが、これは難しいか  
もね」

「平原共同軍を残してくれないと、俺も拓海も失業しちゃうからな」  
生馬が、笑う。

「第二章が、諸国間の友好の発展と円滑な経済活動への支援。ノノ  
ア川憲章条約事務局と経済調整局に関する諸規則は、ここにまとめ

られる。技術援助、経済調整局を通じた借款の斡旋。ノア川の利用や海洋の利用に関する諸規則。いささか先走りすぎた感もあるが、公害対策まで入れといた」

「……駿らしいわね」

凜が言つて、肩をすくめる。

「第三章は、人間界縮退問題の対処だ。ノア川憲章条約人間界縮退対策本部の設立。予算と人員、ポスト。業務内容。魔力の源の一元管理。などなど。第四章が、雑則となる。総会の諸規則、予算、理事国の扱い、憲章変えないし新たな条項追加の諸手続きといったところだ。これに、平和の尊重や民族自決主義、国家間の平等や対等な外交関係を謳いあげた前文がつく」

「大丈夫？ 憲章条約全文読んで革命思想を持った、なんて奴が出てきたりしないでしょうね」

凜が、鼻に皺を寄せて突っ込んだ。駿が、苦笑する。

「そのあたりは信用してくれ。共和制に繋がるような理念は盛り込んでいないつもりだ」

「まあ、細かいところは任せるよ。俺は、法律関係は苦手だし」

拓海がそう言う。

「ところで、総会や事務局はどこに置くんのだ？」

生馬が訊いた。

「それは各国代表を集めて決めてもらう。地理的には平原に置くのがベストだと思うがね。ハンジャーカイだと、平原共同体と被るから、マリ・八が最適かな。海岸諸国では、防衛上脆弱だと思えるしねえ」

「ワイコウなら？」

「戦訓から言えば、それでも脆弱すぎるね。ノア川から切り離されたら、平原と連絡が取れなくなる。やはりもつと南でない」と

「名称からしても、ノア川沿いのほうがいいわね」

夏希はそう発言した。

「秘かにジンベル誘致を狙ってたんだが、無理か」

生馬が言つて、からからと笑う。

「いささか南に寄り過ぎてているが、ジンベルも悪くないね。高原との連絡も取り易いし。だが、どうしてジンベルを推すんだい？」

「俺たちにとつては、ホームタウンだろ、ジンベルは。多少は恩返しじみたこととしてやらんといかん、と思つてな」

生馬が応える。

「ホームタウンか。状況が落ち着いたら、一度戻つてみるのもいいね」

そう言つた駿が、懐から書状を取り出した。

「実は今日、僕のもとにも契約延長に関する手紙がジンベルから届いたんだ。僕の場合、過去に色々あったから。直接ヴァオティ国王にお会いしてあらためてご挨拶したうえで、契約延長を申し入れたかつたんだが、どうやら無理なようだね」

「そうよねえ……駿はジンベル貴族じゃないし」

凜がそう言う。かつて駿は、ジンベルの貴族位を返上し、スロクン王国に亡命した経緯があるのだ。結局その行為もジンベル王国を守るためのものであり、ヴァオティ国王もそのことは承知しているはずである。

「駿も延長か。期間は？」

生馬が、訊く。

「夏希や凜ちゃんと同様、一年にしておくつもりだ」

「じゃ、俺も一年にするか。たしか、俺が来る十日くらい前に、駿が召喚されたんだよな」

「そうだったかな？」

夏希は首を傾げた。あの頃は慌しかったから、よく覚えていない。

「おいおい。一番の先輩が、何を言ってるんだよ」

拓海が、呆れたように突っ込んだ。

「ジンベルか。ずーっと、帰つてないよね」

凜が、遠い眼をして、つぶやくように言う。

「確かに、一回行つてみたいわね」

夏希はそう言った。二百日以上……こちらの暦でいけば半年近く……をジンベルで過ごしたのだ。いわばこちらの世界での故郷のよ  
うなものである。

「よし、暇ができたならみんなで里帰りだ。骨休めも兼ねてね」

拓海が言う。

「いいね。賛成だ」

生馬がすぐさま同意する。夏希を含む他の三人も、すぐに賛意を  
示した。

駿が発案したシエラエズ王女のタナシス王国返還に伴う外交団派  
遣は、すぐに主要各国の賛同を得られた。シエラエズの手紙の効果  
もあつたのだろう、タナシス政府も外交団訪問を歓迎すると表明す  
る。これを受け、早速各国代表が出発地であるルルト市に順次集結  
した。外交団長には、夏希が就任することとなった。

「お久しぶりですな、夏希殿」

高原族長会議が送り込んできた代表は、なんとイフアラ族の氏族  
長、サイゼンであつた。かつてジンベルに攻め寄せた高原戦士たち  
の指揮を執り、その後生馬によつて捕虜となり、さらにのちに夏希  
拓海、エイラの三人を高原へ『拉致』し、平和回復の端緒を作つて  
くれたあの男である。

「これはサイゼン氏族長。その節は、お世話になりました」

夏希は頭を下げた。サイゼンの背後には、ベンデイスの姿も見え  
る。彼も、随員として参加するのだろう。

「ところでベンデイスさん。最近、リダの様子はどうか？」

サイゼンが他の代表への挨拶に向かつたところで、夏希はハンサ  
ムな高原青年の耳元に口を寄せて、小声で問うた。

「あー、そのことですが、夏希殿のお力をお借りしたいのです」

ベンデイスが、真剣な眼差しを夏希に向けた。

「なにかしら？」

「リダを、拓海殿のおそばに置いてやってくれませんか？」

「おそばって……結婚させる、とでも言うつもり？」

「拓海殿は本気でリダを愛していらっしやるようですよ、リダもその気です。年齢も年齢ですよ……」

「あのー、リダってわたしより年下ですよね……」

夏希は頬を掻いた。たしか実年齢で二歳近く、見た目では三歳くらい離れているはずだ。

「高原ではもう適齢期ですよ。平原の貴族の方は、もっと遅いようですが。あ、別に夏希殿が嫁き遅れている、などと言うつもりはありませんよ」

ベンデイスが、慌てて手を振って否定する。

「兄の欲目かも知れませんが、リダは本当にいい子ですよ。ですが、あの顔の傷は、たいていの男性を遠ざけてしまう。拓海殿は、あの傷を含めてリダを愛して下さっている。ならば、拓海殿にリダの将来をお任せしてもいい、と思うのです」

「じゃ、リダがプロポーズすればいいんじゃないの？」

「しました」

「え」

「ですが、拓海殿は返答を濁したそうです。異世界人ゆえ、結婚するのは難しいとおっしゃって」

「そりゃ、そうでしょうね」

結婚し、この地で家庭を築いてしまえば、当然元の世界に帰り辛くなる。

「そういうわけで、拓海殿の心を変えるためにも、リダを拓海殿のおそばに置きたいのです。なにか適当な仕事を見つけていただけませんか？」

「仕事ねえ」

夏希は思案した。いずれ、ノノア川憲章条約が正式に制定されれば、拓海はおそらくノノア川憲章条約防衛隊のどこかの部局にポストを得るだろう。そこに、助手か何かとして押し込むことは可能だ。

リダは高原の民としては高度な教育を受けているはずだし、実際賢い娘である。でも、その前に……。

「今回の外交団の護衛の一人として、採用しましょう。任務は、拓海直属の護衛ってことで、どう？」

「よろしいのですか？」

「わたしが団長だもの。問題なし。帰国したら、またなにかポストを与えるわ。これでいいかしら」

「ありがとうございます、夏希殿。このご恩、生涯忘れませんぞ」  
ベンデイスが、感激の面持ちで夏希の手を握る。

タナシス派遣外交団は、比較的小ぢんまりとした編成となった。

あくまで儀礼的な訪問団であり、外交折衝のための事務方などの同道の必要がなかったからだ。ただし、人間界縮退問題に対する協議が行われるために、人間界縮退対策本部からはエイラとサーイエナを含む若干の人員が同行することになった。もちろん夏希は歓迎した。ユニヘックヒューマが一緒なら、船酔いに苦しまなくて済むし、いざという時に頼りになるコーカラットがついて来てくれるのも、心強い。

「で、相談って、なに？」

連れだつて現れたエイラとサーイエナに椅子を勧めながら、夏希は訪ねた。

「対策本部研究監視部門から、報告がありました。人間界の縮退は、一日あたり五キツホに減少したそうです」

厳しい表情で、サーイエナが告げる。

「三メートルくらいか。だいぶ遅くなったわね。でも……」

夏希は首を傾げた。魔力の源は七つ。人間界縮退対策本部が管理している三つ……うちひとつは魔物の賢者ニヨキハンからの貸与品……は、事実上使用されていない。タナシス王国にある四つ……うちひとつは、ワイコウのそれを魔力を移し替えることによって奪取

したもの……も、エミスト王女の言葉を信用するならば、使用が禁じられているという。

どこも魔力の源を使用していないのであれば、人間界縮退はストップするはずだ。なのに、継続している。

「おかしいじゃない」

「おかしいです」

エイラが同意する。

「まさか、人間界縮退と魔力の源が、ぜんぜん関係ないとか……」

「それは考えにくいです。タナシス王国も、縮退と魔力の源の使用との相関関係を、独自に発見していますし。ニヨキハン殿も、言明していましたし」

サーイエナが、言った。

「タナシス王国が嘘をついているのかな？」

「それも考えにくいですね。そこまでして魔力を使う理由を、思いつきません」

「じゃ、なんで縮退が続いているの？」

「魔力の源が、他にも存在するのもかも知れません」

「ニヨキハンは、七つと言っていたわよね」

「はい。ですが、彼も知らない八つめがどこかに存在し、その魔力が大量に使われ続けているのかも知れません」

「うーん。だとしたら、どこにあるのかしら」

夏希は人間界の全体図……いわば世界地図を頭に浮かべた。平原地帯には……まずないだろう。高原の民が秘かに隠し持っている……ありえない。彼らは人間界縮退の脅威に直接晒されているのだ。使用は自殺行為である。それに、サーイエナの属する巫女一族が嘘をついているとも思えない。

海岸諸国……西群島や東群島はどうだろうか。ありえない話ではない。どこかの小国や貴族領が、隠れて使っている可能性はある。

あるいはタナシス王国内だろうか。タナシスはともかく、公国や自治州が隠していることはありそうだ。ひよっとすると、ラドーム

公国にあるのかも知れない。人間界がこのまま縮退を続けた場合、最後に残るのはほぼ中央に位置するあの島だろう。北の陸塊の蛮族？ これも考えにくい。自分で自分の首を絞めるようなものではないか。

「とにかく、八番目の魔力の源を探すしかないわね」

「そうです。そしてその使用をやめさせなければいけません」

エイラがきつぱりと言う。

「この件に関しては、タナシス王国と協力できそうね。向こうに行ったら、議題のひとつにしましょう。南の陸塊にある可能性も考慮して、このことはわたしから駿の耳に入れておくわ」

小船が、波の穏やかなルルト港内を滑るように進んでゆく。

「やつぱり、あんたの差し金だったか」

諦め顔で、拓海が言う。その背後では、金髪頭に濃緑色のターバンを巻きつけた小柄な少女が、生真面目な表情で控えていた。

ルルト王族がこぞって参加してくれた派手な外交団出発式典が終わり、出席した外交団の面々は小船に分乗し、外港で待ち受ける船に向かっていくところであった。

「結婚はともかく、付き合うくらいはいいでしょうに。もう、その、やつちゃったの？」

夏希はリダに聞こえない程度の小声で……何人もの水夫がパドルで漕いでいるので、ひそひそ話ならばそうそう周囲には聞こえない……訊いてみた。

「リダには手を出しちゃいけないよ。彼女の自己申告によれば、処女だそうだし」

怒ったかのような口調で、拓海が言い返す。

「俺は自他共に認めるスケベだが、結婚に関しては保守的でね。一生面倒見切れない相手と、結婚するつもりはないよ」

「ほう。意外ね」

「まあこの世界、金さえ払えばいくらでも楽しめるからな」  
「そうね」

夏希は同意した。ここでカマトトぶっても仕方がない。目立ちほしくないが、平原でも海岸諸国でも、セックス産業はそれなりに盛んである。もっとも、ほぼすべてが男性相手の売春である。それゆえ、貴族や上流市民の女性同士が擬似性交することが、社会通念上タブーではないのだが。ちなみに、男性同士のそれはタブー視されている。そのような趣味の人は一定数いるはずなので、ばれないように楽しんでいるのだろうか。

「駿はもてるから、結構遊んでいるみたいだな。生馬は最近禁欲的だ。イブリス王女に操でも立てているのか、遊びに誘っても乗ってこないんだ。まあ、元から硬派だったしな。ところで、あんたと凜ちゃんも浮いた話を聞かないな。男を作った様子もないし。やっぱりこの地の習慣に従って、女同士で……」

拓海が、矛先を夏希と凜に向ける。

「ストップ。それ以上訊いたら、セクハラよ」

夏希は慌てて言った。どうも、この手の話は苦手である。

タナシス派遣外交団そのものが乗る商船、シエラエズ王女と、最後まで残った主に士官からなる五十名ほどのタナシス派遣軍捕虜が乗る商船、それに護衛の軍船二隻。合計四隻の船団は、穏やかな天候に恵まれ、何事もなく中継地点であるラドーム公国の首都グルージオンに到着した。

グルージオンでは、タナシス王国外交官と海岸諸国外交官のあいだで、タナシス派遣軍の行動に伴う損害補償に関する交渉がすでに始められていた。夏希は公王宮へ出向き、カミュエンナ女王に挨拶したついでに、海岸諸国外交団にも会って話を聞いてみたが、どうやらタナシス側はかなり強硬姿勢を見せているらしい。

グルージオンで一泊し、護衛兼案内役としてタナシス海軍軍船一

隻を加えた船団は、ほぼ真北のアノルチャ州都アノルチャへと向かった。

ラドームを出航して二日目の昼ごろ……ルルトを出航してからは通算五日目となる……、船団は無事に北の陸塊が望見できる海域に到達する。

「ほう。いきなり乾燥した感じだな」

手すりにもたれて陸地を眺めながら、拓海が言う。

「そうね」

夏希は同意した。南の陸塊の濃い緑色に慣れた眼からすると、北の陸海の茶色と黄褐色が目立つ海岸は、いささか奇異に見える。

「空気も乾いていますわね。こんなに海が近いのに」

潮風を味わうかのように吸い込んだエイラが言った。

「あー、気温が低いと、空気を含むことができる水分は減るんだ。

だから、場所によっては海沿いに砂漠ができたりするんだ」

「さばく？」

「えー、極端に乾燥した土地にできる、ほとんど水のない砂や岩場のことだ。砂浜を数千倍に拡大したところを、想像してもらえないかな」

拓海が、エイラに説明する。理解に至らなかったのだろう、エイラがきょとんとした顔で拓海を見つめた。

「気温と言えば、やっぱり涼しいわね」

夏希はむき出しの腕をさすった。今はかなり強い日差しに晒されているからいいが、日影に入れば半袖では肌寒さを感じる程度の気温だろう。

「アノルチャに着いたらまず衣類の調達だな」

「古着屋を漁るしかないわね」

夏希は愚痴っぽく言った。もつとも経済が発達した海岸諸国でさえ、既製服というものは売られていない。庶民は手作りするか、古着を購入するのが普通だ。お金がある者は縫製屋にオーダーメイドするし、さらに富裕な者は使用人に仕立てさせる。貴族や大商人は、

自前で専門のお針子を雇い入れているので、彼女らがせつせと主人やその家族の服を作ることになる。スタイルの流行り廃りはあるよ  
うだが、それは何十年もの間隔を開けて徐々に浸透してゆくもので  
あり、同じ地方の住人はそのほとんどが似たような衣服を……身分  
や富裕の差による違いはあれど……身につけているのが、普通であ  
った。

83 外交団長（後書き）

第八十三話をお届けします。

## 84 拓海の推測

アノルチャ市は、タナシス王国最大の港湾都市である。

アノルチャ川やその支流であるリスオン川を使って内陸部から運ばれた商品は、ここで外洋船に積み替えられ、西部地域や東部地域、そしてラドーム公国へと運ばれてゆく。帰りの船には様々な産物が積み込まれ、アノルチャ港を経由して上流各地へと送られる。

軍港としても、アノルチャは重要である。タナシス王国海軍本部は同地に司令部を構えており、商港に隣接する軍港はタナシス王国最大の規模を誇っている……。

アノルチャ市での衣類調達には難航した。

事前に連絡を受けていた州政府当局が、外交団向けに衣類と靴をそろえていてくれたのだが、夏希に合うサイズの女性服は皆無だったのだ。タナシス人は、平原の民よりも若干背が高いが、それでも用意された服はみな小さすぎた。夏希は男物でも構わないと主張したが、州政府の担当者は納得せず、急遽呼び寄せた縫製屋と靴屋に夏希のサイズを測らせた。とりあえずその夜は男物の毛織の上着とズボンをもらって夏希は宿舎に入ったが、翌朝出発前にはそこに下着類を含む数種の衣類が、一足の革靴とともに届けられた。

夏希はさっそく試着してみた。絹の下着を着け、その上から草木染めなのか、やわらかな草色をした絹のロングドレスをまとう。毛織の軽い長袖の上着を羽織る。

「お似合いです、夏希様」

アンヌツカが、褒めてくれる。

絹の長靴下をはいた夏希は、靴も試してみた。革靴といっても、硬いのは底だけで、あとの部分は柔らかくふにゃふにゃしており、甲の部分を革紐で縛るようにできている。サイズは、ぴったりであ

った。

「なんか垢抜けない格好だな。道端で籠持ってマツチでも売って  
そうぞぞ」

朝食の席で顔を合わせた拓海が、冷やかしてくる。

「そつちこそ、アルプスで羊でも飼っていそうじゃないの。チロリ  
アンハットが似合いそうよ」

夏希はやり返した。白い絹の長袖シャツに毛織のズボン、黒っぱ  
い革のベストを着込んだ拓海が、顔をしかめる。

朝食のメニューは、パンであった。昨夜の食事の主食は、こちら  
に気を遣って白いご飯が出されたのだが、夏希と拓海は久しぶりに  
小麦を味わいたかったので、以降はパンも出すように接待役に注文  
したのだ。

竹で編まれた籠に盛られているパンは、二種類であった。バゲッ  
トのような細長いパンをスライスしたと思われるものと、ナンを思  
わせる平べったい白いパンだ。

拓海がさつそくスライスパンを一切れ取り上げ、かぶりつく。

「うまい」

「どれどれ」

夏希も一切れ取ると、かじりついた。

「……おいしいけど、なんか違う味ね」

「色からして、全粒粉使ってるんじゃないかな。健康食品マニアな  
ら、漬物だな。まあ、日本の安いパンの旨さは異常だしな。海外  
行くと、二流以下のホテルになるとんでもなくまずいパンを平気  
で出すからなあ。アメリカとかアメリカとかアメリカとか」

「よっぼど恨みがあるのね」

夏希は箸をおかずに伸ばした。こちらもパン食に合わせた品が並  
んでいる。ハムのような、柔らかい燻製肉の薄切り、野菜のソテー、  
どう見てもムニエルにしか見えない魚の切り身、生野菜の盛り合わ  
せといったところだ。汁物は昨夜も出た羊肉団子が入った野菜スー  
プで、臭みを消すためか香辛料がたっぷり入っており、かなりおい

しいものであった。ちなみに、北の陸塊の人々も普通に箸を使うが、汁物を飲む時には大きなスプーンを使うのが正しいテーブルマナーらしい。

「まるつきりナンだな、こりゃ。無醗酵パンだ」

平べったい白いパンをかじりながら、拓海が言う。

「味は？」

「わずかに塩気があるだけだ。なんかつける必要があるな」

拓海が、白っぽいとろみのある液体が入った小鉢を引き寄せ、かじりかけのナンをそれに浸した。

「なに、それ。ヨーグルト？」

「いや、匂いからするとチーズだな」

拓海が、ナンを口に入れる。

「うまい。ちよつと塩気がきついが、クリームチーズみたいだ。こりゃ、いける」

笑みを浮かべた拓海が、瞬く間にナンを食べ終わった。パン籠に手を伸ばし、醗酵パンの方を手取る。

真似しようとパンを取った夏希だったが、そこではたと閃き、控えていた給仕係りの女性を手招くと、ナイフを一本借りた。それでスライスパンをさらに半分は薄く切り、一枚にスプーンでクリームチーズを塗る。そこへ燻製肉の薄切りと生野菜幾許かを挟み、仕上げに塩をばらばらと振った夏希は、その上に二枚目を載せると、手に持ってぱくりとかじりついた。

うまい。

「これでマヨネーズがあれば、言うこと無しなんだけど。凜ちゃん呼んで来て、作ってもらおうかな」

幸せな気分で二口目もかじった夏希だったが、拓海に真剣な眼差いで見つめられていることに気付いて、動きを止めた。

「え、どうかした？」

「注目されてるぞ、あんた」

拓海が言っ、そつと周囲に視線を泳がせる。

即製サンドイッチを皿に置いた夏希は、おそろおそろ周囲をうかがってみた。隣のテーブルで食べていたエイラとサーイエナ、他のテーブルの外交団の面々、さらにタナシス人の給仕係り、そのうえ壁際で大人しくしていた二匹の魔物までもが、動きを止めて夏希を注視している。

「……えーと、マナー違反？」

「違うな。むしろ、驚いているようだ。こんな飯の喰い方、生まれて始めて見たんだろう」

「ひよつとして、わたしはサンドイッチを発明しちゃったのかな？」

「かもな。『ナツキ喰い』とか名前がついて、アノルチャの名物料理になるかもしれんぞ」

拓海が、くすくすと笑った。

タナシス側が準備してくれた川船に分乗し、アノルチャ川を遡る。アノルチャは大河であった。ノノア川もそうとうの大河だったが、川幅、水量ともにそれを上回っている。

「やはり雨は少ないようだな。川から水を引き込む水路がやたらと目に付く」

辺りの風景を観察しながら、拓海が言った。

「農業は盛んなようね」

洪水対策らしく、川沿いにあるのは放牧地ばかりで、そこには牛や羊がのんびりと草を食んでいる姿が目についた。少し離れたところには柔らかな緑色の畑や、果樹園らしい整然と並んだ低木の列、くすんだ灰色の屋根をもつ民家の姿などが認められた。

小さな三角帆に風を受けながら、川船は緩やかな大河の流れをゆつくりと遡ってゆく。行き違う船の数は多かった。南の陸塊のノノア川同様、ここでも川は物流の大動脈なのだろう。

河岸の小さな街での昼食休憩ののち、船団はアノルチャ川に別れを告げ、支流のリスオン川へと乗り入れた。支流といっても、ノノ

ア川本流ほどの幅をもつ、大きな川である。午後遅く、キユスナルという都市に到着したところで、一日目の行程は終わりとなった。上陸し、宿泊する。

二日目、アノルチャ州とリスオン州の境界に差し掛かったあたりで、川の勾配が急にきつくなった。流れも蛇行が激しくなる。落ちた速度を補うために、船員がオールを使い始めた。

「寒くなってきたわね」

夏希は昨日まで日中は脱いでいた毛織の上着を羽織った。川面を渡ってくる風は冷涼かつ乾いていて、さながら秋の夕暮れ時の空気のような。

午後遅くなったところ、やっと勾配が緩やかになった。植生も変化し、杉や檜を思わせる高木の森が川沿いに見られるようになる。東の方には、山脈らしきものが望見できた。あまり峻険ではなく、山頂部はいずれもおだやかに丸まっている。古い山地なのだろう。やがて川の左手に見えてきた小都市で、二日目の行程は終わりとなった。

三日目の午後、ようやく一行はタナシス王国の王都兼リスオン州の州都であるリスオン市に到着した。市街地をぐるりと取り囲んでいる低い石造り城壁の外側にある河港に、川船を乗りつける。

「人口四万と聞いていたけど……なんか活気のない街ね」

出迎えの役人に先導され、都市のほぼ中央に位置する王宮までの道を歩みながら、夏希は周囲を観察した感想を述べた。建ち並ぶ建物はいずれも海岸諸国並みの立派なもので、街路も広く、人の姿も多いのだが、都市特有の『賑わい』といったものに欠ける。

「同意だな。政治都市か軍事都市、といった印象だ。通行人の女性比率が異様に低いことに気付いたか？」

拓海が指摘する。

「……ほんとだ」

「子供の姿もありませんわね」

すぐ後ろを歩んでいるエイラも、言う。

王宮は、白っぽい石材を組み合わせた重厚な一群の建物の複合体であった。何本かの角塔を除けば比較的低層で、むしろ要塞じみた造りだ。

「石材加工技術は高いな。積み方も丁寧だし、表面仕上げもきれいだ」

さりげなく外壁を撫でた拓海が、言う。

「地震とかないでしょうね、ここ」

高く聳える石壁を見上げながら、夏希はそう訊いた。たしかに丁寧な造りだが、大きな地震に見舞われればひとたまりもないだろう。中にいれば、圧死確実である。

「ないはずだ。駿が言ってたが、この世界は自然災害が極端に少ないらしい。地震、津波、台風、竜巻。いずれも記録がないそうだ。

地震や津波はともかく、気候からして台風が発生しないのは解せないがな」

「船が難破する程度の嵐はあるんでしょう？」

「それくらいは、普通にある。あと、災害と言えるのは洪水くらいだが、これも雨季に川が増水するくらいで、規模は大きくても事前に予測可能なものだ」

「恵まれた土地なのねえ」

「恵まれすぎ、と言えるかもな。作物は良く実るし、海も豊かだ。

気温も……平原や高原はちと暑いが、住むには適している。鉱物資源も、分布は偏っているがふんだんにある。俺に言わせれば、なんだから作り物じみてるようにも思える」

「作り物って……誰が作るのよ、こんなところ」

「神、かな」

ぼそり、と拓海が口にする。

「まさか」

「これは駿の見解だが……この世界の人種的多様性は不可解なんだ。北の陸塊まで含めると、人類の主要人種がすべて揃っている。だが、文化的多様性はあまりみられない。言語はひとつだけ、文字も一種

類。おかしいとは思わんか？　まるで誰かが戦略歴史ゲームの初期配置みたいに適当に様々な民族を各地に置いて、全員に同じ言葉と文字を教え込んだかのようだ」

「造物主のような存在が、つてこと？」

「魔物たちの話によれば、以前はこの世界はすべてが魔界で、魔物しか棲んでいなかった。しかしあるとき急に人間界が出現した。そして、魔力の源が力を失うことによって、人間界が縮退している。何者かが、魔力の源を配置して人間界を造り、人間をここで生活させている……なんの目的かは知らんが……という可能性は、あると思う」

「B級SF映画じみてきたわね」

夏希は眉根を寄せた。

「むしろB級ファンタジーっぽいかな」

鼻で笑った拓海が、続ける。

「あと、これは生馬に指摘されて気付いたんだが、この世界では宗教の存在が希薄だ」

「……そう言えば、そうね」

ジンベルには墓地があつたし、そこに定期的に詣でるようなことをしていた人たちも多かったので、ある程度の先祖信仰みたいなものはあるようだが、教会や寺院、神社に相当するような宗教施設や、普遍的に信仰されている宗教のようなものは、見たことがない。

「俺自身無神論者だからあまり奇異には思わなかったが、考えてみればこれほど遅れた社会で宗教勢力が伸びていないのはおかしい。

巫女はいるが、信仰とは無縁の存在だしな。ひよつとすると、この世界の住人は本能的になんらかの存在を……神のごとき存在を認識しているの、似非宗教にはなびかないのだ、という解釈もできると思う」

「今度はオカルトチックになってきたわね」

夏希は少しばかり慄きを覚えながら言った。考えれば考えるほど、奇妙な世界である。

「南の陸塊諸国外交団のみなさん、ようこそタナシス王国へ。わたしは国王のオストノフだ」

壮年の髭の男性が、朗々たる声を響かせる。

「外交団長のジンベル王国貴族、モリ・ナツキです。歓迎していただき、ありがとうございます」

夏希は堅苦しく礼の言葉を述べた。

広々とした謁見の間であった。内装は、想像していたものより簡素である。だが、壁も床も天井も板張りで、よく手入れされているのかぴかぴかに光っている。壁際にいくつも暖炉……南の陸塊では無用の長物だ……があるのが、奇異に見える。寒くはないので、火はもちろん入っていないかった。

こちら側の代表が、ひとりずつ名乗りをあげる。次いで、オストノフ国王の左右に控えていたエミスト王女と、モンセリスと名乗った宰相が、挨拶した。

「娘が世話になった。礼を言う」

機嫌良さそうに、オストノフ国王が言った。

「戦った過去は消せないが、よき未来は築けるはずだ」

「おっしゃるとおりです。よき隣人、そしてよき友人としてありたいものです」

王宮の大広間で、歓迎の宴が催される。

「堅苦しいことは苦手だね」

夏希の隣に座るオストノフ国王が、笑う。

その上でテニスのシングルスならプレイできそうなほど巨大な木製のテーブルには、外交団の主要メンバーと、タナシス王国側の要人が交互に着席していた。夏希が与えられた席は上座で、右にオストノフ国王、左にはエミスト王女が着いている。拓海は今回、平原

共同軍参謀長という身分を隠し、平の参謀として夏希の随員資格で参加しているので、その席はかなり下手の方だ。夏希は他のタナシス側の出席者の顔を一人ずつ確かめていったが、知っている顔はふたつしかなかった。シエラエズ王女と、和平会談に出席していたロンドリー外務大臣である。

「お酒はいける方かな？」

ワインらしい赤紫色の液体が注がれた陶器のカップ……この世界ではワイングラスというものはまだ発明されていない……を掲げながら、オストノフ国王が訊く。

「あまり飲めません」

「それは残念だ。今回は特別に美味い樽を開けさせたのだが」

オストノフが、ぐいっとカップを傾ける。

「ところで夏希殿。和平条約の批准はどうなっているのですか？」

わが国は、すでに済ませましたが」

エミスト王女が、訊いてくる。

「わたしがルルトを発った段階では、平原諸国の過半数が批准を済ませたはずです。高原諸族も、報せは届いていませんが順調に批准を進めているはずです。海岸諸国は……」

夏希は語尾を濁した。ルルトは補償問題が決着しない限り、批准はしないことを明言しているし、オープアを始めとする海岸諸国もそれに同調する姿勢を見せている。

「過去は過去としてきちんと清算しなければならぬが、ルルト王国の要求は過大すぎるのではないかな」

とりなすような口調で、オストノフが口を挟んだ。

「その件に関して、政治的判断を行えるだけの権限は持ち合わせておりませんので」

夏希は慎重に逃げの一手を打った。

宴席は、和やかに進んだ。広間の奥には楽人の一隊がいて、各種の笛や抱きかかえる琴、といった趣の弦楽器で、哀調なメロディーを低く奏でている。

料理は多様で、南の陸塊ではお目にかかれないものが多かった。肉は羊肉が多く、各種のたれをかけて串焼きにしたものはどれもおいしかった。ひき肉と刻んだ野菜を詰めた、ピロシキのようなもの。生姜を効かせた牛肉ステーキ。川魚や蟹の揚げ物。小魚の酢漬け。数種類のチーズ。生野菜のサラダ。きしめんを思わせる平べったい小麦麺が入ったスープは、味自体は香りのいい香草がたっぷり入っていておいしかったのだが、麺の方は伊勢うどんなみに柔らかく箸でつまもうとしてもぶちぶちと切れてしまうのが残念だった。

翌日行われた会談……というよりも、意見交換会といった趣の席で、夏希は『八つめの魔力の源』の存在を取り上げた。

「タナシス、南の陸塊双方の管理する魔力の源が使用されていないにも関わらず、人間界縮退が続いていることについては、こちらも確認しています」

夏希の話を聞いたエミスト王女が、発言した。

「たしかに、夏希殿のお考えは筋が通っている。我々の知らぬところで、誰かが魔力を濫費しているとすれば、辻褄が合う」

オストノフ国王が、渋い声で同意する。

「我々は協力して、その魔力の源のありかを突き止め、管理下に置かねばならぬ。して夏希殿。貴殿はそれがどの辺りにあるとお考えかな？」

「北の陸塊であれば、辺境州の蛮族、あるいはどこかの自治州や公国が秘かに隠し持っている可能性はあると思います。南の陸塊であれば、海岸諸国の西群島や東群島がもつとも怪しいでしょう」

「おそらく、北の陸塊にはないでしょう。タナシスにいる巫女一族は、ひとつだけです。巫女の所在は全員つかんでいますから」

エミストが、言う。

「ただ単に隠し持つだけならば、タナシス国内にあっても不思議はないが、人間界縮退の様子からして、かなりの頻度で魔力が引き出

されているのは間違いない。いや、むしろ連続使用しているのだから。わが自治州や公国に巫女が存在しないことは、はっきりしている。蛮族ならば、巫女一族がいる可能性を否定できないが、居住域を考えると魔力を使用するとは思えない。自らの領域を狭めるだけなのだからな。だが、各辺境州と辺境軍に対し、魔力の源の搜索は命じよう」

オストノフ国王が、確約した。

「ありがとうございます、陛下。こちらも各国政府に対し、すでに注意喚起は行ってありますが、帰国後は速やかに魔力の源の搜索を正式要請します」

## 84 拓海の推測（後書き）

第八十四話をお届けします。

外交訪問団の行動に対する制約はほとんどなかったもので、夏希は暇を見つけては積極的にリスオン市内の観光に出かけた。お供には、表向き夏希の随員という肩書きを名乗っている拓海と、その直属の護衛であるリダ。そしてもちろん、アンヌツカも一緒だ。これに、タナシス側が用意してくれた護衛兼案内役の兵士が四人ないし五人付く。

「きれいで立派だが、やっぱり活気がないな」

石畳の街路を歩みながら、拓海が小声で言う。

「そうね。……なんか、映画のセットみたい」

「行ったことないが、ピョンヤンとかこんな感じなんだろうな」

「あー、そうかも」

真昼間だというのに、人通りはそれほど多くない。相変わらず、女性の姿はほとんど見かけなかった。誰もが急ぎ足で、そそくさと歩んでいる。軍人なのか、剣を吊っている人も多い。

「あ、すまんがあの店へ寄らせてくれ」

商店街へ入ったところで、拓海が一軒の店を指差した。

「いいけど、何の店？」

「薬屋だな」

「二日酔いや食べ過ぎなら、ユニちゃんにジュースもらえばいいのに」

「いや、どつちでもない」

「拓海様。お加減が悪いようでしたら、市井の薬種屋など利用なさらなくても、お申し付け下されば王宮の侍医を呼んで参りますが」  
やり取りを訊いていた護衛の若い士官が、遠慮がちに口を挟んでくる。

「ありがとう。だが、具合が悪いわけじゃないんだ。俺は薬マニアでね。ちょっと、タナシス王国の薬品事情を調べたいだけなんだ。」

夏希は適当に見物していきなさい」

拓海が、リダだけを伴って店の中に消える。すかさず、士官が二人の兵士に店の前での立哨を命じた。夏希は首をひねりながらも、アンヌツカとともに見学を続けた。様々な店に立ち寄り、商品を吟味する。

「これ、きれいなね」

夏希は服地屋らしい一軒で色とりどりに染められた絹の布……大ききさからすると、スカートとして使うのだろうか……を見つけた。

絞り染めの技法を使ったのか、白い朝顔のような模様が美しい。店主に値段を尋ねたが、かなり安価であった。ジンベルの通貨に換算すると、半オロットもしないようだ。

「女性陣へのお土産にしましょう。色違いで、八枚あればいいかな」  
夏希は指折り数えた。シフォネ、凜、ミュジーナ。それに、自分とアンヌツカ、エイラ、サーイエナ、リダの分。

「シフォネのイメージはピンクね。あのリボン、今でも使ってるし。凜はこの鮮やかな黄色かな。ミュジーナは、清楚な感じだから水色。アンヌツカは、真紅のイメージね」

「わたしにも買っていただけのですか？」

「もちろん。タナシス記念よ。リダはやっぱり濃い緑ね。サーイエナは、この明るい青緑。わたしは渋く紫でいいかな。問題は、エイラね」

夏希は迷った。エイラのイメージカラーは白だろう。しかし、それは絞り染め商品のラインナップには入っていない。

「これなど、お似合いではないでしょうか」

アンヌツカが、やや薄めの紺色をした布を引っ張り出す。

「なんか風呂敷っぽいけど……まあいいか。それ、採用」

夏希は外交団の会計から渡された貨幣で、支払いを済ませた。

「待たせたな」

背後から、拓海の声がかかる。

「で、何してたの？」

全員が合流し、歩み出したところで、夏希は小声で拓海に尋ねた。  
「キュイランスからの依頼だね。例のタナシスゾンビ兵の使ってる麻薬の正体を探ってくれと頼まれたんだ。薬屋の親父に話を聞いていくつかそれらしいサンプルを買った。キュイランスに渡せば、なにかつかめるだろう」  
「なるほど」

「いい天気なですう」

「同意します！」

コーカラットの触手にぶら下がったユニヘックヒューマが、ステッキをぶんぶんと振り回す。

二匹の魔物は空中散歩を楽しんでいた。例によって、ぽかんとした顔で見上げられたり、指差されたりはするが、はしゃいで手を振ってくれる人などは皆無だ。

「みなさん、魔物に慣れていらっしやらないのですねえ」

魔力の源の力が枯渴気味なので、当然巫女の仕事も少ない。そのような状況では、魔物を使い魔として使役できるほど能力の高い巫女は生まれにくいのであろう。

「お、コーちゃん、呼んでいるひとがいるのです！」

ユニヘックヒューマが、眼下の一点をステッキで指す。

とある裏路地から、こちらを手招いている青年がいた。漆黒に近い肌の、タナシス人ではない民族だ。

「お友達になりたいのでしょうか」

ユニヘックヒューマをぶら下げたまま、コーカラットはすーっと高度を落としていった。まだ屋根よりも高い位置で、ユニヘックヒューマがすくと飛び降りる。

「こんにちは！ あたいはユニヘックヒューマのなのです！」

ステッキを振りつつ、陽気に挨拶する。

「南の陸塊の巫女様の使い魔殿ですね」

「そうなのです！ 高原の蒼き巫女、サーイエナ様の使い魔なのです！」

「ゆえあつて名乗るわけには参りませんが、この手紙をお渡し下さい。ただし、このことはご内密に」

早口で青年が言つて、小さく折り畳んだ書状をユニヘックヒューマの手に押し付ける。

「お手紙ですかあ〜」

近寄つてきたコーカラットが、触手を揺らす。

「お願いします。では、失礼します」

一礼した青年が、そそくさと路地裏から出てゆく。

「サーイエナ様へのファンレターでしょうか？」

ユニヘックヒューマが、書状をドレスの中に突っ込んだ。

「でも、ご内密に、とおっしゃってましたねえ〜」

「なら、秘密のファンレターかもしれません！ コーちゃん、急いでサーイエナ様に届けるのです！」

興奮気味に、ユニヘックヒューマがステッキを振り回す。

「了解ですう〜」

「で、結局俺たちのところに持ってきたわけか」

拓海が、ユニヘックヒューマから渡された手紙をひっくり返す。

「内容が内容でしたから、お耳に入れる必要があると判断しました」  
サーイエナが、言った。

「たしかに、いろいろと危険な内容ね」

手紙の差出人は、クーグルト公国とカレイトン自治州の反タナシス王国組織の責任者と名乗っていた。中身は、要約すれば、『当組織が反タナシスの独立運動を激化させた場合、南の陸塊諸国はこれを援助してくれるか否か？』というものであった。

「ま、選択肢は少ないな。まずはこれが本物であるか偽物であるか。本物であれば、当然差出人も名乗っている通りの人物だろう。偽物

であるならば、その正体は二択。単なるいたずらか、こちらを陥れようとするタナシス王国の陰謀か。偽物ならば、いずれにせよ無視するしかない。本物だとしても、無視が最善だろうな。下手に断りの返事などすれば、反タナシス組織を公的存在として認めたことになり、内政干渉との謗りを免れない。ユニちゃんが途中でドブにでも落つことした、とでもしておこうや」

「いくらあたいても、そこまでどじっ子ではないのです!」

ユニヘックヒューマが、ぶんぶんとステッキを振って抗議する。

「渡してくれた人、肌が黒かったんでしょ?」

「そうなのです!」

「たしかに、カレイトン自治州とクーグルト公国は西部地域にあるし、あのあたりは西アフリカ系っぽい人種が主流の土地だと聞いている。……これが本物である可能性は、低くはないと思う」

拓海が、手紙をぴらぴらと振る。

「だが、今我々がなすべきことは、タナシス王国の国力を弱めることでもないし、政治的安定性を突き崩すことでもない。南の陸塊に手を出さないことが、タナシスの国益につながるという事実を理解させることだ。この手紙は、闇に葬り去るべきだね」

「燃やす?」

「それがいいな。だが、火種がないな」

「あたいにお任せ下さい!」

ユニヘックヒューマが、拓海の手から手紙を受け取った。そしてそれを、むしゃむしゃと食べ始める。

「山羊か、おまえは」

拓海が突っ込む。

「とにかく、この手紙のことはみんな忘れてしましましょう。サーイエナ、あなたの他に誰がこの手紙のことを知っているの?」

「エイラだけですわ。あとは、コーちゃんですね」

「二人には黙っているように伝えといて。ユニちゃんも、誰にも言っちゃだめよ」

「もちろんであります！」  
手紙を完食したユニヘックヒューマが、ステッキを突き上げて約束する。

南の陸塊では、ノノア川憲章条約締結に向けての準備が着々と進められていた。

障害は、少なかった。平原各国は、平原共同体を成功だと見ており、これを南の陸塊全体に拡大したかのようなノノア川憲章条約は、地域の発展と平原の影響力拡大に貢献するはずだと確信していた。高原諸族は、独自性を保ちつつ平原共同体に協力した結果、経済的・技術的、そして文化的に大いに好影響を得たことに気を良くしており、また人口の多さとその軍事面での貢献から同条約下では高原が高い地位を得られることを確信し、かつ人間界縮退問題に関する取り組みに海岸諸国の協力が得られることを期待して、締結には前向きであった。海岸諸国は、やはりタナシス王国の軍事的脅威を鑑み、域内集団安全保障体制であると同時に、域外国家……すなわちタナシス王国に対する軍事同盟の意味合いのある同条約の早期締結を望んでいた。

ルルト市に集められた各国代表が協議を重ね、条約条項の細部や下部組織の構成、予算負担と配分、各部署の規則、職員構成などについて決定してゆく。

民主主義国家の集合体であれば、これほど早い展開は望めなかったであろう。民意の形勢とその政治への反映、そして民主的な議会政治における政治的意思の統一には、時間がかかるのが常である。

こうして出来上がったノノア川憲章条約は、駿が起草したものと基本的には同じと言えた。ノノア川憲章条約総会、同事務局、同経済調整局、同人間界縮退対策本部、そして防衛隊本部が置かれる場所は、結局駿の予想通り、マリ・八に決定された。これは単に利便性だけでなく、南の陸塊諸国がその力を合わせてタナシス王国遠

征軍を打ち破った記念すべき地ということも考慮されての選定であった。

懸念されていた総会における議決権の扱いだが、結局理事国などは設置せず、原則的に一カ国一票に落ち着いた。小国の集まりである東群島と西群島は、合議の上各一票を行使するという形になった。ただし、地域バランスを考慮する例外的措置として、各国および氏族の中で一番人口が多いルルト王国と、同じく二番目に人口が多いオープア王国は、総会での議決に限り、二票を行使することができると定められた。これで、高原十票、平原十三票、海岸十票という配分となる。通常の議題は、総会の三分の二の賛成で議決されるが、憲章変更ないし新たな条項追加などの重要議題に限り、総会の五分の四の賛成が必要であるとも定められた。これならば、仮に平原諸国と高原諸族、あるいは平原諸国と海岸諸国が結託しても、総会の議決を自由に行うことができない。

条約内容に満足した各国代表は署名を行い、帰国の途に着いた。各国各氏族がこれを批准すれば、正式にノア川憲章条約が効力を持ち、各組織が発足する運びとなる。南の陸塊のすべての国家と氏族、そしてすべての人々が、緩やかにではあるが政治的に統合されるのだ。まさに画期的な一大政治変革であった。

外交団の王都リスオン滞在は、五日間に及んだ。タナシス側は終始友好的であり、関係改善を切に望んでいることをうかがわせた。しかしながら、ルルトおよび他の海岸諸国への補償問題に関しては、依然強硬な姿勢を崩してはいなかった。

「面子の問題と言うよりも、金がない、といった感じだな」  
出発を明日に控えた宿舎で、拓海がワインを手酌で飲みながら言う。

「経済状態が思わしくないのはなんでだろう？」

「そのあたり、突っ込んで調べはつかなかったが、噂では税込不足

らしい」

「こんなに人口の多い大国なの？」

夏希は眉根を寄せた。

「州によつて、税率がかなり異なるらしいんだ。正確な数字はつかめなかつたが、正規州、辺境州、自治州の順に安くなるらしい」

「公国は？」

「税収の一部を、中央に納めるといふ形だ。要するに、タナシス人が主流派でないところは安く、逆の場合は高いんだな」

「中央政府に反感を持たれないためかな？」

「その理由が一番大きいだろうな。タナシス王国の総人口のうち、タナシス人は過半数を超えてはいるが、六割は占めていないようだ。だから、タナシスは自治州や公国の離反をおそれている。金がないのに南の陸塊への侵攻作戦を強行したのも、人間界縮退が加速すれば社会的混乱が発生し、王国が崩壊しかねないと考えたせいかもしれない」

「じゃあ、あのユニちゃんを食べちゃった手紙は……」

「おそらく本物だろうな」

重々しく、拓海が言う。

「うーん。ねえ、拓海。タナシス王国つて、いい国かな？」

「……どうかな。生活水準は海岸諸国並みかそれ以上だし、征服王朝とは言え現状で他民族を迫害しているような節もないし、辺境蛮族と戦っているのは非難できないし、奴隷制度も……まあ、この社会水準では容認するしかない。総じて見れば、悪い国じゃないだろう。なにを考えてるんだ？ 南の陸塊に引き続き、タナシスでも大改革をやらかそう、なんて夢見てるんじゃないだろうな」

「夢……じゃないけど、召喚された以上、南の陸塊だけじゃなく北の陸塊の人々にも、なんらかの恩恵をもたらせてあげたいのよ」

「ちよつと待った。あんた、もしかしてすべての人々の生活水準向上のために尽力したい、とか考えているのか？」

拓海が、意外そうな表情で夏希を見据える。

「え。そのために、頑張ってるんじゃないの、わたしたち？」

「ちがうちがうちがう」

拓海が、激しく頭を振る。

「俺は、断じてそんなことを考えていないぞ。俺が頑張ってる色々と動いているのは、基本的にはすべてジンベル王国のためだ。生馬や駿もそうだろう。ジンベル王国が安定するためには、平原の安定が必須だから、平原共同体を作った。平原の安定のためには、南の陸塊の安定が必要だから、ノノア川憲章条約を作ろうとしている。イアラ族と戦ったのも、ワイコウと戦ったのも、タナシス遠征軍と戦ったのも、それらがジンベルの王国の敵にまわったからだ。召喚したのはエイラ。雇ったのはヴァオティ国王。だから、ジンベルのために力を尽くしているんだ」

「そうなんだ。てつきり、もっと凄い野望を抱いてるのかと思ってた」

「まあ、ここまで事態が大きくなっちゃった以上、ジンベルだけの利益を追求しても仕方がないがな。でも、俺の動機はいささかここいんだ。報酬と、ここで出会った人々……いわば、仲間といえる人々のために、動いてるだけだよ。ちつぽけな都市国家の王様と、その娘。白尽くめの巫女さんと、その愛想のいい使い魔。顔に傷のある美少女と、その兄貴。蒼い巫女さんと、元気のいい使い魔。そして、やたら背の高い戦国マニアと、シニカルな秀才君と、たまに毒を吐く料理上手な女の子と、竹竿振り回してる暴力女と……。こんな仲間たちのために、俺は努力してるんだ」

「仲間たちのため、か。いい言葉ね、それ」

しみじみとした口調で、夏希は言った。よくよく考えてみれば、夏希の動機もそんなものかも知れない。ジンベルの人々……これにはアンヌツカやシフォネ、エイラも含まれる……のため。サーイエナを始めとする、高原の民の知り合いのため。そして、他の四人の異世界人のため。

「柄にもないことを熱く語っちゃったな。少し酔ったみたいだな。」

もう寝るか」

拓海が、カップを傾けるとワインを飲み干した。

翌日朝、外交団一行は盛大な見送りとかなりの量の土産とともに、王都リスオンをあとにした。川下りゆえその速度は早く、一日目に早くもアノルチャ州内に入る。河口の港町アノルチャ市に到着したのは、二日目の午後早くであった。

翌日、夏希はアノルチャ市内をまわって様々なものを買い漁った。帰りの船は船倉に余裕があるので、かなりの貨物を積み込める。もちろん安い物にお金はかかるが、南の陸塊で手に入りにくい物を買えば、元はすぐ取れるはずだ。

毛織物と絹織物。それらで作られた衣類……もちろん古着である……を若干。牛や山羊の皮で作られた細工物。壺入りの蜂蜜。小麦と小麦粉。水分の少ない、固焼きのパン。トウモロコシ。リンゴ。チーズ。お酒類。雇った荷車にそれらを積み込んで、港まで何往復もする。

「食に関しては、こっちのほうが性に合ってるわね」

いったん宿舎にもどって昼食を採りながら、夏希は言った。

「わたしはどうも苦手です」

ラドームからの移入品である米を食べながら、アンヌツカが応ずる。

「そりゃ、生まれてこの方白いご飯で育ってれば、そうなるでしょうね」

「ただし、この果物は気に入りました」

アンヌツカが、籠に山盛りになっているリンゴを見やる。夏希が普段食べ慣れていた品種に比べれば果肉が硬めで、甘味も少なく、やや酸味が強かったが、なかなかの味である。

「とりあえずシフォネへのお土産も買ったし……ねえ、アンヌツカ。タナシス記念に、なにか買ってあげようか？」

「お気持ちだけいただきます、と言いたいところですが、ぜひお願いします」

にっこりと微笑んで、アンヌツカが応える。

「何がいい？ 服？ 細工物？」

「剣の一振りでも買っていただけないかと……」

「剣？ いいわよ」

苦笑しつつ、夏希は認めた。いかにも、アンヌツカらしいチョイスだ。多少値は張るだろうが、今までの献身を考えれば、安いものだ。

食休みをしてから出かけたふたりは、護衛兵士に尋ねて中古剣を扱っている店を訪れた。武器屋ではなく、古道具屋といった趣の店で、武器防具だけではなく、家具だの壺だの皿だのが、埃臭い店内に所狭しと押し込まれている。

「これが、気に入りました」

しばらく商品を物色していたアンヌツカが、小振りの短剣を夏希に手渡した。古ぼけた、どうということにない短剣に見えたが、彼女が選んだ以上それなりの理由があるのだろう。

「いいわ。買ってあげる」

夏希は上機嫌で店主に硬貨を支払った。

85 王都観光（後書き）

第八十五話をお届けします。

「ルルト王国は譲るつもりはないようです」

静かな声で、リュスメース王女は報告した。

「むっ」

オストノフ国王が、唸る。

タナシス王国の財政状況は、悪化の一途をたどっていた。もっとも国庫を圧迫していたのは、正規軍および辺境軍の維持費である。前者が定員四万、後者が二万。総人口二百万を越える大国とはいえ、政治的に信用の置ける生粋のタナシス人は半数程度である。人員の確保だけでも難事であり、その維持にも多額の費用が掛かった。

それに次いで王国の財布を軽くしていたのは、各公国と自治州に対するいわゆる『対策費』であった。すなわち、独立派に対する取締り、有力者に対する懐柔、市民に対する福祉政策、公共投資などである。いわば、公国と自治州をタナシス王国という枠内に留め置くための経費、と言えようか。先代のタナシス王は、軍事力の優位を活かして勢いに任せて北の陸塊を武力で統一したが、政治的統合には成功しなかったのだ。半ば力づくで性交におよび複数の情婦をつくった男が、女たちに逃げられるのをおそれて金品を分け与えるはめになる、というたとえ話は、すでにオストノフが即位する前から世間には流布していた。

ジレンマであった。軍縮すれば、国庫の負担は楽になるが、独立派が勢いを増すことになる。いっそのこと独立を許してしまえ、という案も以前にはあったが、そうなると各国は安全保障のために結びつき、反タナシス連合を組むに違いない。そうなれば、必然的にタナシス王国も軍拡に走らなければなくなり、軍事費は増大する。いずれにしろ、国庫はさらに窮することになる。

シエラエズ王女指揮による南の陸塊侵攻作戦は、一種の賭けであった。もちろん一時的には大出費となるが、魔力の源とともにルルト

ト王国から略奪した品を持ち帰れば、遠征費用くらいは十分賄えるはずだ。タナシスの目論見としては、最終的にはほとんど金を使わず、場合によっては儲けすら出しながら、魔力の源確保という安全保障上の課題も達成できる……はずであった。

ところが現実には厳しかった。遠征軍は予想だにできなかった固い結束を見せた南の陸塊各国の反撃の前に破れ、一万近い未帰還者と二万を超える捕虜を出した。海軍も大打撃を受け、民間の徴用船も多数が失われた。得られたのは、魔力の源ひとつだけ。そしてもちろん、ルルト王国を始めとする海岸諸国は、損害補償という名目の多額の賠償金を、タナシスからむしり取るうとしている。

「ペクトールの動きはどうだ？」

「依然活発です」

東部地域海岸のペクトール公国。ここも、以前より独立運動が活発なところである。ここは重要な公国であった。もしペクトールが独立を宣言するようなことがあれば、隣接するメリクラ自治州、バラ自治州、スルメ公国にも飛び火しかねない。四者が結ばば、人口五十数万の大国となる。正規軍四万では、対抗できぬだけの市民軍を動員できるだろう。

「なにかいい手はないかな」

気弱そうに言って、オストノフがリュスメースを見た。すでに時刻は深夜に近い。寝室に隣接する小さく居心地のいい居間には、従者すらおらず、父と娘二人きりだった。いわば、完全にオフの状態である。オストノフは雄々しく頼もしい武人国王という表向きの虚飾を脱ぎ捨て、リュスメースのことを愛する末娘として接していた。しかし、リュスメースの方はいまだ有能な秘書官としての仮面を被り続けていた。彼女がこの仮面を取るのには、いまや寝台の中だけである。いや、最近リュスメースが見る夢は、もっぱら自分が政務に勤んでいる姿ばかりであった。そのような意味では、寝台の中でさえ、彼女はその仮面を被り続けているのかもしれない。

「ひとつだけ、方法があります。絶対に採用できないやり方ですが」

「ほう。聞かせてもらおうか」

「ディディウニに一ヶ所、ディディリアにも一ヶ所、放棄された金鉱山があります。まだ鉱脈は掘りつくされてはいませんが、採掘コストが合わなくなったので、放棄されました。ここを、復活させれば、かなりの収入が見込めます」

務めて冷静な口調で、リクスメースは告げた。

オストノフの眼がすっと細まった。未っ子を愛でていた父親が、国王に様変わりする。

「なんと。魔力の源を使うつもりか！」

「わが国の巫女にも、その程度のことならできます。もつとも、これは準備するだけで実際には行いません。南の陸塊に、わが国が財政的に危機であり、海岸諸国が要求する補償をすべて支払うには、これしか方法がない、とリークするのです。うまくいけば、高原諸族が海岸諸国に圧力を掛け、補償金額を引き下げてくれるでしょう」

「むう。しかし、財政危機を外国にまで知れ渡らせるのは、体裁が悪いな」

「仕方ありません。事実ですから。幸い、知れたとしても実害はありません。南の陸塊諸国が、攻めて来るような事態は起こりえないでしょうし」

「確かに。ところで、八番目の魔力の源の搜索に関してだが……」

「各辺境州、辺境軍への通達を行いました、念のため、各州および各自治州、各公国に対しても注意喚起をしておきました。早く見つかればいいのですが」

懸念を含んだ口調で、リクスメースは報告した。彼女も、八番目の魔力の源が北の陸塊にあるとは思っていなかった。どこにあるにしろ、これを確保できれば人間界縮退問題は一応の解決を見る。蛮族の動きも沈静化し、辺境軍への負担も、減るだろう。

「おそらく、北の陸塊にはあるまい。だが、南の連中には協力的なところを見せておかないとな。ご苦労だった、リクスメース」

再び父親の顔に戻ったオストノフが、微笑んでリクスメースの肩

を叩いた。

アノルチャからラドームまでの航海は、何事もなく無事終了した。首都ゲルージオンで船を下りた夏希は、再び公王宮を訪れ、カミュエンナ公女王に丁寧に礼を述べた。タナシス王国との仲介や、立ち寄った際の宿の提供、さまざまな情報収集の協力、さらには和平会談と損害補償協議の場の提供など、ラドーム公国にはすっかり世話になった。

「そうですね。オストノフ陛下も、本心から友好を望んでいるのですね。ありがたいことです」

カミュエンナが、褐色の顔をほころばせる。

「気がかりなのは、損害補償に関する交渉の進展が見られないことです。早くタナシスが支払って、終わりにしてくれると嬉しいのですが……」

「どうも、支払うだけの力が、今のタナシスにはないようです」

夏希はそう応じた。カミュエンナが、うなづく。

「そうですね。かなり無理をしているとは、以前から聞いていましたが。近々、当地に置いてある正規軍守備隊の一部を、本土に戻す計画もあるようです。維持費削減のためでしょうね」

ゲルージオン出航二日目に、海が荒れた。夏希はさっそくユニヘックヒューマのジューズのお世話になった。夜半には風雨は収まり、翌日快晴となったルルト海港に、船団は滑り込んだ。

ルルト王宮で、外交団の解散式が執り行なわれる。それを終えた夏希らを待ち受けていたのは、久々に見るキュイランスであった。

「なんだ。そんなに麻薬のサンプルが欲しかったのか。残念だが、荷物の中に突っ込んであるから、これを解くまでは渡してやれない

よ」

拓海が、苦笑交じりに告げる。

「それはあとで結構です。こちらへは、仕事に来たのですから」

「秘書官としての仕事なの？」

「秘書官としてではありませんよ。そちらは失業しました」

「グリーンゲ殿に放り出されたのか？」

拓海が、訊く。

「いいえ。放り出されたのは叔父上ですよ。情勢が落ち着いたので、田舎の領地に逃げ隠れしていた貴族たちが王都に帰ってきて、叔父上も農務大臣の椅子を取り上げられたのです」

「それはひどいわね」

夏希は眉根を寄せた。

「もつともすぐに、駿様と生馬様が、ノア川憲章条約防衛隊海岸支隊の副司令官というポストを見つけてくれましたね。今はそこに収まっています」

「じゃ、元気なんだ。よかった」

「もちろんです」

キユイランスが、笑顔を見せる。

「で、あなたはどっしてるんだ？」

旅の疲れが出たのか、自分の腰を揉みながら、拓海がめんどくさそうに訊く。

「戦場では、わたしはあまり役に立ちませんからね。今は駿様の助手をやっています。いずれ憲章条約の下部組織が整ったら、経済調整局に面白い仕事を見つけてくれるそうです。今回の仕事は皆さんのお出迎えですよ。えー、皆さんを総会を始めとする主要機構が置かれるマリ・ハへとお連れします。今日の宿舎はもう確保しましたし、川船の手配も明日の朝までには終えておきます」

「かなりお土産を買い込んできたから、五隻は必要ね」

夏希は頭の中に購入品リストを思い浮かべながらそう告げた。

「了解しました。お任せ下さい」

「ははは。間に合わなかったな」

マリ・八の船着場で、出迎えてくれた生馬が豪快に笑う。

「間に合わなかったって？」

手を借りて川船を降りながら、夏希は訊いた。

「ノノア川憲章条約発足記念式典さ。昨日、盛大に行われたんだ。なかなかの見ものだったよ」

「じゃあ、順調に行ったんだな」

拓海が、確認する。

「ああ。すべての国と氏族がつつがなく批准した。組織の方も、まだ大雑把だが発足した。式典後には、第一回総会が開かれて、設立に尽力した人々に対する顕彰が満場一致で可決された。その筆頭に駿の名前があった。当然だがな」

「では、わたしはここで失礼します」

川船に便乗していたサーイエナが、言う。

「ハンジャーカイへ行くの？」

「いいえ。高原まで戻ろうと思います。長旅で、いささか疲れましたわ。エイラとも相談しましたが、人間界縮退対策本部は当面彼女に任せて、しばらく骨休めしたいです」

「そうね。それがいいわ」

夏希はそう言った。夏希自身も、ワイコウとの戦いが勃発して以来、ずーっと動き続けていたような気がする。ワイコウの降伏。ラドーム止まりだった、タナシス訪問の試み。タナシスによる侵略とその撃退。そして今度の、タナシス訪問。

「わたしも少しのんびりしたいわね」

「それがよろしいでしょう。夏希殿も、戦場に、外交にと八面六臂の活躍でしたから」

サーイエナが、微笑む。

「サーイエナ様。よろしければわたくしが川船の手配をしてみたいかしょうか」

キュイランスが、そう申し出る。

「そうね。まだ日も高いし、今日中に出発すれば、かなり旅程を稼げるでしょう。お願いしますわ」

「心得ました」

笑顔で一礼したキュイランスが、走り去る。

「ねえ、リダ。あなたはどうしますか？ 希望するなら、高原まで送り届けてさし上げますが」

サーイエナが、リダに水を向ける。

居合わせた全員の視線が、小柄な金髪の少女に集まった。

「わたしは……もしお許しが出るのであれば、このまま拓海殿のおそばでお仕えしたいです」

傷のある頬をやや紅潮させながら、リダがはっきりとした声で言う。

「でもなあ。外交団ならともかく、平時に個人的な護衛なんて必要ないし」

拓海が、頬を掻く。

「副官兼護衛でいいじゃないの。アンヌツカのような。そばにおいてあげなさいよ」

夏希は拓海を見下ろしてそう言った。やはり若い女性である。自分が恋愛対象として眼中にない男性のことを、好ましく思っている知り合いの年下女性がいれば、それを応援したくなるのは当然の心理である。

「ま、いいか」

諦め顔でつぶやくように言った拓海が、真顔になるとリダに手を差し出した。

「すまんが、しばらくのあいだ世話になるよ」

「はい、ありがとうございます、拓海殿」

リダが、その緑色の眼をきらめかせながら、拓海の手をそっと握った。

マリ・八市内は建築ラッシュであつた。至るところに製材や丸太、切石などが積み上げられ、大勢の職人が立ち働いている。夏希はそこの中に、金色や赤茶色の髪をした高原の民や、褐色のウェーブした髪を持つ海岸諸国人が結構混じっていることに気付いた。人的、経済的な結びつきが、以前より格段に深まっているのだ。

「おかえりー」

生馬の案内で連れ込まれた真新しい建物で待ち受けていたのは、凜であつた。いきなり、夏希に向かって手を差し出す。予期していた夏希は、腰に吊つた小袋から布に包まれた握りこぶしほどの塊を取り出した。

「なに、これ」

受け取つた凜が、布を解く。

「チーズね」

凜が、指で押して硬さを確かめてから、チーズの塊に歯を立てた。「おいしい。味はエダムっぽいわね。他に、なに買ってきてくれたの？」

「色々だね。まずは一休みさせてよ。長旅だつたんだから」

「はいはい」

一行はそろそろと建物の廊下を進んだ。真新しい木の匂いと、樹脂の匂いが鼻をつく。夏希と拓海、それに生馬は小さな食堂に招じ入れられた。木製のテーブルと椅子が置いてあつたが、こちらは中古品らしくやけに古び、黒ずんでいた。エイラとアンヌツカ、リダ、それにコーカラットは、別室に通される。

「お茶淹れるから、待っててね」

凜が、隣室に消えた、入れ替わるように、食堂に駿が姿を見せる。「よお、駿。ついにやったな」

立ち上がった拓海が、満面の笑みで駿の手を握つた。

「ありがとう。まあ、憲章条約に関してはとりあえず枠組みを作つただけだからね。それを充実させ、成果を生み出すのはこれからの

仕事だ」

「おめでとぅ」

拓海に倣って立ち上がった夏希は、駿に抱きついた。五人の異世界人の中でもっとも役に立っているのは、間違いなく駿であろう。そして、大衆にもっとも恩恵を与えている人物でもある。

「ま、座ってくれ。いろいろと説明したいことがあるから」

夏希に抱きつかれたせいで、珍しくやや照れたような表情を浮かべた駿が、椅子を指し示す。

盆を持って現れた凜が、五人の異世界人各自の前に湯飲みを置いた。凜が座ったところで、駿が口を開く。

「まずは僕から説明しよう。もう知ってると思うが、昨日めでたくノア川憲章条約が正式に発足した。拓海と夏希は自分のポストが気になっていると思うが、拓海は憲章条約防衛隊本部副参謀長兼平原支隊参謀長だ。後者は留任だね。夏希は本部参謀兼条約事務局外交部外交委員だ。タナシス王国と有力なコネを築けたらしいから、これを利用しない手はないからね」

「文句なしのポストだな」

満足げに、拓海が言う。

「生馬は平原支隊突撃連隊長に留任し、本部参謀兼任だ。凜ちゃんも経済調整局副局長。僕は、いまのところ事務局顧問を名乗っている」

「曖昧な地位だな。なにを狙ってる？」

すかさず、拓海が質問を放つ。

「念願の、教育部門をいざれ立ち上げて、そのトップに座りたいのさ。とにかくもう少し経済レベルを上げて、児童労働を減らさないと、学校を作ってもうまく行かないからね。とりあえず下準備だよ」「うまく行くといいわね」

夏希は眼を細めた。駿は召喚当初から、教育の充実に腐心してきた。長い時間が掛かったが、ようやくこの段階までこぎつけたのだ。「マリ・八でのみんなの家は、まだ建設に取り掛かっていない。各

組織の建物、代表や職員宿舎などの建設が優先されているからね。とりあえずここに部屋だけ人数分は確保してある。狭いけどね」

「一人一部屋？ それは、ちょっとときどきするわね」

夏希はほくそ笑んだ。

「どうしたんだい？」

「生馬は知ってるけど、実はついさつき拓海がリダを正式に副官兼護衛として採用したのよ。相部屋となれば当然……」

「俺は自腹で泊まれるところを探すよ。その部屋には、リダを入れてやってくれ」

やや憤然として、拓海が言う。駿が、笑った。

「そうか。副官を連れていた者がいることを失念していた。なんとか、一部屋確保するよ。夏希の副官と一緒に、リダが泊まればいい」

「いや、それなら俺と拓海は平原共同軍……もとい、平原支隊の駐屯地へ引越すよ。あそこなら、一部屋くらい空いてるさ。なんなら大部屋に雑魚寝でもかまわんし」

のんびりとした口調で、生馬が言う。

「なに言ってるの、みんな。気が利かないわね」

凜が憤然として、指を振り立てる。

「ここはどうしても拓海とリダが同じ部屋で寝るはめになるように誘導しなきゃいけないシーンでしょ。とりあえずリダの着替えの最中に拓海が気付かないで入室、慌てる拓海にリダが『た、拓海殿になら見られても恥ずかしくありません！』って真っ赤になって言い放つとかいう状況を……」

「どこのハーレムアニメよ、それ」

夏希は呆れ顔で突っ込んだ。

結局、拓海と生馬は平原支隊のマリ・八駐屯地へ移っていった。

空いた二部屋のうち、ひとつは行き場がなかったエイラとコーカラツトに提供され、残るひとつにはリダとアンヌツカが泊まることになった。

「アンヌツカ。わかってると思っけど、リダに手を出しちゃだめよ」

夏希は釘を刺した。副官の性生活には口を出さないと決めている夏希だったが、リダがそっちの方に傾倒するのはまずい。

「承知しております。ですが、誘われた場合はいかがいたしましたでしょうか」

真顔で、アンヌツカが訊いてくる。

「その場合は……好きにきなさい」

諦め顔で、夏希は言った。

## 86 帰国（後書き）

第八十六話をお届けします。久し振りにポイントを入れていただきました。ありがとうございます。

## 87 小麦粉料理

マリ・八で二日を過ごし、長旅の疲れを癒した夏希と拓海は、引越しのためにハンジャーカイへと戻った。

「じゃ、以後は別行動ということだ」

「ああ。マリ・八でまた会おう」

船着場で拓海とリダと別れた夏希は、布袋を肩に担いだアンヌツカとともに自宅に向かった。シフォネが、心底嬉しそうな笑顔で出迎えてくれる。

「とりあえずお茶淹れてちょうだい、シフォネ。三人で引越しの相談でもしましょう」

食堂の椅子に落ち着いた夏希は、ややうんざり顔でそう言った。

前回……ジンベルからハンジャーカイへと引越した時の手間を思い出したのだ。ジンベル時代より重要な役職を任せられたし、交友関係も広がったので、私物は格段に増えている。

「はい、夏希様。ですが引越しに関しては、凜様のご指示ですすでに荷物をまとめておきました」

「ほんと？」

「はい。どうぞ、他の部屋もご覧下さい」

夏希はアンヌツカを伴い、すべての部屋をまわって見た。どこを見ても、きれいに片付けられ、小物や衣類の類は木箱や麻袋、網袋などに詰め込まれていた。手付かずなのは、シフォネの衣類とわずかな食器類、調理用具程度だ。

「でかしたわ、シフォネ。これなら、明日にでも引越せそうね」  
食堂に戻ってきた夏希は、小柄な侍女を褒めた。シフォネが、頬を染める。

「でも、まだ向こうに家がないのよね。だから、当面あなたはここで待っていてもらうことになるわね。ちゃんとした家を確保したら、すぐに来てもらうから」

「そうですね。残念です」

シフォネが、悄然とした面持ちになる。

「まあ、こっちでも色々やることがあるから、三日くらいは滞在することになるわ。そのあいだは、よろしくね。久しぶりにあなたの作ったご飯が食べられると思うと、嬉しいわ」

「ありがとうございます、夏希様」

恥ずかしげに、シフォネがぺこりと頭を下げる。

「そうそう、お土産持ってきたわよ」

夏希はアンヌツカに向けうなずいた。アンヌツカが、床に置いた布袋から、いくつかの品物を取り出す。

「タナシス土産よ。この壺が、蜂蜜。柔らかい樹脂みたいだけど、甘い食べ物よ。これが、チーズ。石鹸みたいだけど、これも食べ物。こっちが、革のポーチ。可愛いでしょ。それと、絹のスカーフ。ピンク色は、あなたに似合うと思って」

「こんなにたくさん……。ありがとうございます、夏希様！」

感激をあらわにしたシフォネが、ぺこぺこ礼を繰り返す。

翌日から、夏希は忙しく動き回った。まずは憲章条約防衛隊平原支隊本部……。元平原共同軍参謀部の建物……。顔を出し、諸手続きを済ませる。ちなみに、参謀部そのものは、機構と人員のほとんどがそっくりそのまま生馬と駿によって引き抜かれ、憲章条約防衛隊参謀部としてマリ・八に移転することがすでに決定されていた。

旧人間界対策本部へも、夏希は出向いた。こちらも、憲章条約人間界縮退対策本部に機構と人員が移ることになっている。夏希は本部長補佐の辞任手続きをした。さすがに、三つの役職の掛け持ちはきついで、エイラとサーイエナに相談の結果やめることにしたのだ。

家具類などの、当面使用せず引越しても持っていけない財産の処分も行う。さらに、ハンジャーカイで知り合った知人への挨拶。

「ようやく終わった……」

二日目の昼過ぎ、夏希は重い足取りで自宅に戻ってきた。シフォネに昼食を用意してもらおうと、食堂に顔を出す。

「あら夏希様。お帰りとは気付かず失礼しました」

テーブルで昼食を採っていたシフォネが、慌てて立ち上がる。

「ただいま。お昼、もらえる？」

「はい。すぐにご用意しますわ」

シフォネが、足早に厨房に向かった。

夏希は椅子に腰掛けた。そこで、テーブルの上に蜂蜜の壺が置いてあることに気付く。

「おや。」

夏希はシフォネが食べていた皿に眼を向けた。白いご飯が盛りられており、それに黄色がかつた粘性の高い液体が掛かっている。

「まさか」

夏希は皿を引き寄せて匂いを嗅いだ。甘い香りが、ぷんと鼻をつく。

「……白米に対する冒瀆……とか言っても無駄か」

ミルク粥だのライスプディングなどの料理は普通にあるし、日本人でもご飯に砂糖を掛けて食べる人もいる。この程度で驚いてはいけないのだろう。

「ねえ、これ、おいしい？」

料理の皿を持って現れたシフォネに対し、夏希は蜂蜜ライスの皿を指差して訪ねた。

「おいしいです！ すっごく甘くて」

皿を置いたシフォネが、感激の面持ちで言う。

「なんでしたら、昼食はこれになさいますか？」

「いや。シフォネが作った料理の方が、おいしいから」

夏希は引き攣った顔でそう答えた。

タナシス派遣外交団団長夏希から提出された報告書、憲章条約人間界縮退対策本部長エイラ名で出された上申などを受けて、憲章条約総会は『八つめの魔力の源』搜索開始を満場一致で可決した。これにより、各国政府および各民族は、その領内における魔力の源探しと、巫女としての能力をもつ女性の搜索を行った。特に怪しいと思われた東群島と西群島には、それぞれ東部海岸諸国海軍とオープア海軍が艦艇を出勤させ、詳しい調査を行った。しかしながら、成果はゼロであった。

わずかな引越し荷物とともに、夏希とアンヌツカはマリ・八に戻った。

結構忙しい日々が続く。憲章条約防衛隊本部参謀の役職は、戦時でなければそれほど激職ではないし、拓海や生馬が状況に応じてフォローしてくれるからいいが、憲章条約事務局外交部外交委員という立場には慣れていない。タナシス王国への外交団長という役職は務めたが、それはあくまで友好目的の訪問団であり、責任は重かったもののそれほど難しい仕事ではなかった。しかし外交部外交委員という役職は、外交部のナンバー3という位置付けにもかかわらず、事実上タナシスに関する政治的折衝の窓口を統括するものであり、加えて発足当初ということで組織作りにも尽力せねばならぬ立場でもあった。すでに外交のベテランと化した駿からいろいろとアドバイスを受けたものの、経験不足から夏希の苦労は続いた。

「ようやく外交部も一段落ついたわ。職員も定数まで揃ったし」  
久しぶりに五人の異世界人が揃った食事会の席で、夏希はそう報告した。

「憲章条約防衛隊の編成も終わったよ。今、長槍から矛槍への切り替えを研究しているところだ」

生馬が言う。

「あの、ハルバードとかいうやつね」

夏希はいつぞや生馬に見せてもらった、槍と戦斧のあいのこのよ  
うな武器を思い出した。

「で、結局防衛隊はどの程度の規模になったんだい？」

駿が、訊く。

「海岸、平原、高原各支隊ともに、常備大隊が四百名×五個、定期  
的に訓練を受ける予備大隊が同じく四百名×五個の、四千名だ」  
簡潔に、拓海が答える。

「合計一万二千か。まあ、こんなものよね。……あれ、突撃連隊は  
どうなったの？」

夏希は生馬を見た。

「予算不足で解散されちゃったよ。本部付きで残そうと画策したん  
だがね」

生馬が無念そうに言う。

「域内で戦争になる可能性は低いし、タナシスと再戦する可能性も  
高くはない。ここは、軍事費を抑えて経済振興にまわすべきだ、と  
判断しただけだ。参謀部の方は組織を維持したから、動員研究その  
他は進めるし、鹵獲品を含め武器武具の類はきちんと整備しておく  
から、いざというときは大兵力を動員できる。問題はないよ。動員  
部の試算では、三日以内に四万、十日以内にさらに七万の市民軍を  
動員できる。これを打ち破るには、かつてのタナシス遠征軍以上の  
兵力が必要だ。そして現状では、それだけの大兵力を南の陸塊で運  
用できる勢力は存在しないんだ」

拓海が説明した。

「ところで、今日の凜ちゃんはなにを作ってくれるのかな？」

駿が、厨房に通じる戸口を見やる。

「小麦料理だろうな。ラーメンに一票だ」

生馬が、言う。

「なら、パスタに一票」

拓海が、応じた。

「では、ピザに一票だ。チーズが手に入ったんだからね」  
駿が、言う。

「おまたせ」

盆を手にした凜とミュージーナが現れる。すかさず、生馬が立ち上がって盆の中を覗き込んだ。

「やられた」

そう言って、おおげさに仰け反る。

「お好み焼きか！ たしかにやられたな、こりゃ」

凜とミュージーナが、皿をいくつも置いてゆく。平べったく焼き上げられた、溶いた小麦粉の塊。たしかに、お好み焼きだ。

「説明するわね。これが肉入り、これが海鮮、これが野菜だけ、これがチーズ入り。コテはないから、ナイフで切り分けてね」

いったん引込んだミュージーナが、いくつもの小鉢や壺、それに取り皿を盆に載せ、再び現れた。

「これが凜ちゃん特製お好みソースよ。三十種類の野菜とフルーツ、それにハーブ類と香辛料を混ぜてある力作よ。これがマヨネーズ、

川海苔は青海苔代わりね。色が悪いけどこれが紅生姜」

「削り節はないのか」

拓海が、注文をつける。

「そこは、我慢してちょうだい」

夏希はナイフでお好み焼きを切り始めた。関東風の、いわゆるケーキ切りだ。男三人がさつそく箸を伸ばし、それぞれ好みに応じてソースやマヨネーズをつけて、かぶりつく。

「旨い。懐かしい味だねえ」

拓海が、嬉しそうに言う。

「ソースが旨いな。凜ちゃん、これ傑作だよ」

生馬が、褒める。

夏希も一切れ取って、ソースを控えめに塗ってから、川海苔だけを掛けて食べてみた。濃厚なソースの味わいと、香ばしい生地。そ

れに、何種類も入っている野菜の触感と、ほのかな甘味。

「幸せ」

もともとパンなど小麦系は好きな食物である。夏希は瞬く間に肉入りを一切れ平らげた。ちよつと迷ってから、海鮮に箸を伸ばす。干した海老や貝柱の薄切り、細く割いた干し魚などが入っていて、ちよつと奇妙だがこれもおいしい。

「冷たいビールが欲しくなるな。拓海、タナシスにビールは無かったのか？」

「マヨネーズをぺたぺたと塗りたくりながら、生馬が訊く。

「あつたよ。試したが、美味いもんじゃなかった。ホップを使っていないせいか、苦味も切れもなくてね。温いせいもあつただろうけど。ここで冷たいビールを飲もうとすれば、魔術の手助けが必要だ。高原の民に殴られちまう」

拓海が、笑う。

「ところで、以前出たジンベル里帰り計画だけど」

あつという間に空になった皿を前に、駿が切り出す。

「ジンベルに手紙を出したら、歓迎するからいつでも来てくれ、という返事をもらったよ。宿の手配その他は任せてくれ、とのことだ」  
「あら。わたしと凜はエイラの実家に泊めてもらう許可をもらったんだけど」

「それは好きにすればいいさ。で、いつ行く？」

拓海が訊く。

「それはみんなの都合がつき次第だろう。みんなと一緒に行って、各人好きな時に帰ればいい。集団旅行じゃないんだから」

「俺は明日にでも行けるが」

生馬が言った。

「同じく」

拓海が言う。

「あたしは明日じゃ無理。明後日なら、OKよ」

空になった皿を集めながら、凜が言った。

「わたしも明日でも平気」

夏希はそう言った。今のところの懸案事項は、タナシスとの補償問題と、第八の魔力の源搜索問題の二つ。いずれも、夏希がマリ・ハにしようがいまいが進展には変わりない話だ。

「僕も、明日はきついな。じゃ、あさって出発でいいかな」

駿の言葉に、全員が同意した。

「船の手配は俺がやっておくよ」

拓海が、そう申し出る。

「あ、拓海。わたし、アンヌツカに久しぶりに里帰りさせてあげようと思うの。それと、ハンジャーカイでシフォネも乗せたいから、三人とカウントしてね」

「そうね。あたしもミュージーナにお休みあげようかしら。二人分カウントして」

手を止めた凜が、そう言う。

「そうか。俺もソリスのやつに休みをやるっ」

生馬が、ぼんと手を叩いた。

「なんだなんだ。異世界人五人で水入らずの休暇のはずが、ずいぶんと大人数になったな」

拓海が、顔をしかめた。

「拓海も、リダ連れてけばいいじゃない」

夏希はそう言って、揶揄するように拓海の腕をつんつんとつついた。

「わかったわかった。船は二隻手配しておくよ」

翌日、夏希はアンヌツカを連れて買い物に出かけた。

「今日は何をお買い求めになるのですか？」

「あなたが里帰りするのに手ぶらじゃまずいでしょ。」と両親に土産を持っていつてあげて」

「お気遣いありがとうございます。ですが、それでしたらわたしが自腹を……」

「遠慮しないで。わたしからの気持ちだから」

「そうですか。……夏希様、それでしたら、タナシスでお買い求めになった食べ物、少々分けてくださいませんか？」

「もちろんいいわよ」

夏希は苦笑いしながら許した。本当に、欲のないストイックな性格である。

「では、トウモロコシの酒をひとつと、蜂蜜をひとつ所望します」

「それだけでいいの？ チーズと小麦粉もつけようか？」

「いいえ。両方も口に合いませんでしたから。酒は父に、蜂蜜は母にあげようと思います。たぶん、気に入ってくれるでしょう」

微笑しながら、アンヌツカが言う。

「じゃ、シフォネに持って行ってもらうお土産を探しましょうか。なにがいいかなあ」

七隻のタナシス商船が、一隻のタナシス海軍軍船に先導され、グルージオン外港を出てゆく。

タナシス王国正規軍の、撤収船団であった。商船には、タナシス王国正規軍二個団千名が分乗している。

ラドーム公国に駐屯していた正規軍は、四個団二千名であった。通常、公国や自治州に駐屯する正規軍は、二個団一千名である。ラドームの場合、本土から海で隔てられた島であること、南の陸塊と勢力圏が接していることなどから、通常の倍の兵力が配置されていた。

その半数を、本土に戻そうというのである。国防関連予算切り詰め策の、一環であった。

表向き、公国や自治州に駐屯する正規軍の任務は、その地の防衛である。しかしながら、その本当の任務は……誰しもが承知してい

るが……反乱に対する抑止である。

ラドーム公国における反タナシス活動は、それほど活発ではない。しかし、国民に敬愛されていた国王シャハミを、やり手であるという理由から強制的に退位させ、公王にはまだ幼かった娘のカミュエーナを据えた、という経緯から、タナシスの支配に反感を持っている市民は多かつたし、シャハミ元国王の個人的な人気もいまだ高い。本来ならば、駐留正規軍の削減は避けたいところではあったが、島国ゆえ駐留経費は他の公国や自治州よりも高くつく。王国の財政事情を鑑みれば、致し方のないところであった。

## 88 ジンベルへの帰還（前書き）

【GL警告】今回はわずかですが百合臭があるお話です。苦手な方はご注意ください。

## 88 ジンベルへの帰還

夏希ら異世界人と、その関係者によるジンベルへの里帰り旅は、遅々として旅程が捗らなかつた。

道中通過する国家の王宮に、いちいち挨拶に立ち寄ったせいである。さらに、各人がそれぞれ短時間ながら友人知人のもとを訪ねたから、余計に遅くなる。結局、一日目の目的地であるハンジャーカイにたどり着いた頃には、日はとっぷりと暮れていた。

「こりゃ、王宮への挨拶は明日回しだな」

生馬が、ぼやくように言う。

「今日は疲れたわ。さっさと寝ましょ」

「骨休めに来たはずなのにね」

愚痴っぽい凧のセリフに、夏希は微笑んだ。

「で、今日の宿はどこだ？ 無いなら元平原共同軍の駐屯地がお勧めだぞ」

拓海が、駿に振る。

「一応、平原共同体の事務方の建物を押さえてあるよ。夏希はまだ自宅があるだろ？ 知り合いの家に行きたい者がいれば、自由にしてくれ。生馬あたりは、元部下と旧交を温めたいんじゃないのか？」「それもそうだな。よし、俺とソリスは駐屯地へ行こう。拓海、お前は どうする？」

「俺は遠慮しとくよ」

「あたしも友達のところへ行こうかな。夏希、ミュージーナお願いできるかしら？」

凧が、そう頼んでくる。

「別にいいけど」

「じゃ、頼むわね」

言い置いた凧が、そそくさと市街の方へと歩み去る。

「まさか、男のところじゃないだろうな」

小柄な後姿を見送りながら、拓海がぼそつと言った。

王宮へ赴いて国王に謁見。知り合いへの挨拶。

つい先日まで生活していた街だけに、友人知人の数も多く、早朝から動いたにも関わらず、出発は昼過ぎになった。

「まあ、今日の行程は短いからな」

言い訳がましく、拓海が言う。

シフォネを加えた一行は、ハンジャーカイの船着場を離れた。ほどなく、ノノア川に別れを告げた二隻の川船は、ジンベル川を遡り始めた。故郷が近付いてテンションが上がっているのか、シフォネとミュジーナの侍女コンビが、妙なノリではしゃぎ始める。

やがて夕日を浴びながら、一行は懐かしのジンベル王国に到着した。

夏希はさっそくアンツカとシフォネに暇を与えた。それぞれ実家への手土産を抱えた二人が、肩を並べて足早に船着場から立ち去る。ミュジーナとソリスも、同様に実家へと向かった。

「まずは陛下にご挨拶だな」

生馬が、先頭に立って王宮への道を歩み始めた。行き場の無いリダだけが、五人の異世界人のあとに続く。

「おお、夏希様だ」

「凜様も一緒だぞ」

「駿様と生馬様もいる」

「あれは拓海様じゃないのか？」

急速に暗さを増してゆく街路を歩んでいると、通りがかった人々から声があがった。

「やっぱり地元だねえ。顔が売れてる」

駿が、にやにやと笑う。

懐かしいジンベル王宮にたどり着いた異世界人五人は、すぐに謁見の間に通された。リダはもちろん、留守番である。

久しぶりに顔を見たヴァオティ国王は、相変わらず柔和そうな顔と小太り体型の、威厳のまったく感じられない中年男のままであった。挨拶が終わったところで、国王がにこやかに話を切り出す。

「契約延長の件、委細承知した。全員が、延長分の報酬を返上してくれたことを、嬉しく思う」

「契約内容は、ジンベルのために尽くす、というものでしたから」  
一番の古株として、夏希は五人を代表してそう答えた。

「現状では、ジンベルのみならず平原、さらには南の陸塊のために働いている状態です。たしかに間接的にはジンベルの利益にはなっているでしょうが、ジンベルから直接報酬をいただくわけには行かないと思います」

重々しくうなずいたヴァオティ国王が、相好を崩す。

「そうか。わたしはそなたたちを誇らしく思う。イファラ族の侵攻を撃退し、ニアンの野望を砕き、高原と平原の関係を改善させ、平原諸国を協調させ、ワイコウとの戦いを勝利に導き、タナシス王国の侵略も撃退し、和平も成立させた。そして、懸案であった人間界縮退対策も進みつつある。かようなことを成し遂げた五人は、わがジンベル王国が召喚した異世界人なのだ。誇らしい。実に、誇らしい。そなたたちはわたしだけではなく、すべてのジンベル人の誇りだ」

「ありがとうございます、陛下」

夏希は深々と頭を下げた。他の四人が、倣う。

「これからも、ジンベルのみならず平原のため、ノア川憲章条約諸国のため、ひいてはこの世界のすべての民の幸せのため、働いてくれ。頼んだぞ」

「で、いきなり生馬が行方不明なんだが」

王宮の通廊を歩みながら、拓海が言う。

「イブリス王女のところでしょ？ 久しぶりなんだから、邪魔しないであげましようよ」

夏希はそう応じた。

「今日はお泊りかな？」

凜が、くすくすと笑う。

生馬を除く一行は、下級役人の案内で宿舎に向かった。市街の外れにある、商人の邸宅の離れが、まるごと借り上げられていた。部屋数は五つ。うち一つは、かなり広い食堂であった。

「寝室は四つか。あたしと夏希が同室でいいわ。これで、ちょうどいいわね」

しれっとした表情で、凜が言い放つ。

「おい」

すかさず、拓海が突っ込みを入れた。

「しょうがないわね。リダはあたしが預かるわよ」

渋い表情で、凜が宣言した。

「生馬はどうするんだい？」

駿が、訊く。

「今日は王宮に泊まるんじゃないの？ もし帰ってきたとしても、

拓海か駿の部屋に転がり込むでしょう」

夏希はにやにやしながら言った。

「夏希の部屋だったりして」

凜が、ぼそつと言う。

翌日から、夏希はのんびりと挨拶回りを始めた。

エイラの実家にも、手土産持参で顔を出す。エイラは不在だったが、母親と家令が丁寧にもてなしてくれた。夏希は断りを言っ、一時期居候していた部屋を見せてもらった。窓からの景色は記憶にある通りだったが、部屋の様子が微妙に違っていた。しばらく考えて、夏希は違和感の原因に気付いた。魔術の明かりを入れる箱が撤去されていたのだ。魔術立国ジンベルが、魔術を封じるようになってから、もう久しい。

二日目に、夏希は昔の自宅を訪れてみた。すでにそこは中堅のお役人一家の住まいとなっていたが、その家の奥さんとまだ五歳くらいの子は夏希の訪問を大歓迎してくれた。元の住人が、すっかり有名になった『竹竿の君』だったことは、彼らにとって誇るに足ることだったらしい。出されたお茶を飲んでみると、噂を聞きつけた近所の人が続々と詰め掛けてきた。誰かが酒や料理の皿を持ち込んできたので、いつの間にか宴会モードへと突入する。夏希は適当なところで退散することにした。放って置いたら、夜中までつき合わされるに違いない。

その翌日、凜と連れ立った夏希は、南の城壁へと赴いた。第一次と第二次ジンベル南平原の戦い跡地を、見に行ったのである。

「跡形もないわね」

眼下を眺めながら、凜がぼそりと言う。

「まさに、『夏草や つわものどもが 夢の跡』ね」

西の城門前の馬出しはそのままだったが、ジンベル南平原は生い茂る草にびっしりと覆われていた。高原戦士が集団埋葬されたふたつの塚も、緑色の小山と化している。

夏希は市街地の方を見やった。かつて千名以上の高原戦士が倒れた『死の罾』となったキルゾーンはとつくに撤去され、そこには真新しい家々が建ち並んでいる。こちらにも、殺戮のあとは微塵も残っていないかった。

「現実だったのよね、あれは」

夏希は激しかった戦いに思いを馳せた。汗と埃、そして血の臭い。照りつける日差しと、高原戦士の雄叫び。悲鳴。

「平和になってよかった。もう、誰も安楽死処分させなくて済むんだから」

しみじみと、凜が言う。

「結構歩いたわね」

市街を歩みながら、夏希は手拭いで汗を拭った。南にあるうえ盆

地だから、ジンベルはマリ・ハよりも若干暑い。

「ねえ。お風呂寄ってかない？」

凜が唐突にそんなことを言い出す。

「あ、いいわね。行こう行こう」

夏希はすぐさま同意した。

「以前何回か通ったところに案内してあげる……で、どこどこ？」  
歩きながら、凜がさっそく方向音痴ぶりを発揮する。

「わたしが行ったことあるお風呂屋さんが近くにあるよ。そこにしよう」

「仕方ないわね」

凜が肩をすくめる。

夏希は郊外への道をたどった。すぐに、特徴的な目隠しの生垣に囲まれた風呂屋の前に出る。

凜を伴った夏希は管理棟に入り、料金を払って手拭いを受け取った。追加料金も払って、小さな石鹸も買い込む。もちろん、凜と夏希が共同開発し、大量生産にこぎつけたジンベル産石鹸である。

高床式の脱衣所に入ったふたりは、するすると着ているものを脱ぎ始めた。

「ここ、初めて来たお風呂屋さんなんだよね。エイラに連れてきてもらって……」

記憶をたどりながら喋っていた夏希だったが、そのときエイラに何をされたかを思い出し、口をつぐんだ。

時間が早いこともあり、蒸し風呂は空いていた。凜が、熱せられている石に柄杓で水を掛け、蒸気を充満させる。

「そういえば、凜と一緒にお風呂なんて、久しぶりね」

「修学旅行の時以来ね」

十分に汗をかいたふたりは、蒸し風呂を出ると、縁台の上に陣取った。濡らした手拭いに石鹸をこすり付ける。様々なハーブが混じった、青臭いが決して不快ではない香りが、ぱっと広がる。

「ねえ。エイラに連れてきてもらったとき、なんか妙なことされな

「かった？」

身体を洗いながら、凜が訊ねた。

「み、妙なこと？」

手拭いで脚を擦っていた夏希は、どきまぎして思わず手を止めた。

「そう。誘われなかった？」

しごく生真面目な表情で、凜が夏希を見つめる。

「まさか、あなたも……」

「やっぱりね」

凜が、ふっと視線を逸らす。

しばらく、気まずい沈黙が続いた。夏希は身体を洗いながら、横目で凜の様子をつかかった。小柄な友人は、黙々と手を動かしている。

「で、誘いに乗ったの？」

唐突に、凜が質問を発する。

「ばばば馬鹿なこと言わないですよ。わたしはその気はないわよ。凜だって、そうでしょ？」

動揺しつつ、夏希はそう答えて凜を見た。

え。

凜の頬が染まっているのは、蒸し風呂のせいではないことに気付く。

「ちょっと、まさか、凜」

「内緒よ」

顔を背けるようにして、凜がささやくように言う。

「……なんてこった。」

夏希は呆れた。エイラ、サーイエナ、アンヌツカ、シエラエズ、そして凜。この地の女性は、百合体質揃いなのか。

とそこで、夏希は自分が全裸であることに気付いた。凜が、視線をこちらに向けている。

まさか。

「いやあのね、凜。あなたとはいい友人でいたいし、わたし男の子

の方が好きだし、いやでもあなたに魅力がないとかそんなことはまったく思っていないし、凜は小柄だけど胸とか結構あるし、そんな関係になったりしたらあとあと問題だし……」

「あなたに興味は無いわよ」

わたわたと慌てる夏希を見て、凜がくすりと笑う。

「よかった。危うくこのまま押し倒されるのかと思った」

夏希は心底安堵した。

「でも、あなたにその気があるとは思わなかったわ。長い付き合いになるけど、そんなそぶりはまったく無かったじゃないの」

「あたしもそう思ってたんだけどね。でも、エイラの誘いに屈して一回試してみたら……」

言葉を切った凜が、恥ずかしそうに視線を逸らす。

「……えーと、あなたの性生活に干渉するつもりは無いし……これは純粹な好奇心から訊くんだけど……エイラと続いているの？」

「いいえ。試してみたけど、エイラとは合わなかったの。あの子、タチだから。あたしもタチの気が強いみたいでね」

「タチっていうと……いわゆる攻める方ですか」

「そう。可愛い女の子を弄るのが楽しいのよ」

なおも恥ずかしげに、凜が言う。

「大丈夫。節度を持って楽しんでるから。あなたに迷惑は掛けないわ」

「はいはい。こちらも異存はありません」

内心でため息をつきながら、夏希はそう応じた。

「悪いけど、僕は明日マリ・ハへ戻るよ。より正確に言えば、ススロンへ寄ってから戻るけどね」

夕食の席で、駿がそう切り出す。

「まだ五日しかのんびりしていないぞ」

生馬が、不満げに言う。

「みんなはゆつくりしていけばいいさ。ススロン貴族としては、やはりジンベルはいささか居心地が良くなってね」

冗談とはつきりわかる程度に微笑みながら、駿が言う。

「俺はもう少しのんびりさせてもらうぞ。駿のおかげで、当面戦争の危機はなくなったからな」

拓海が、芝居がかってだらけた姿勢を取りつつ言う。

「右に同じくだ。ということで、今日は男三人で飲むとするか」  
生馬が提案する。

「付き合うよ。女性陣もどうだい？」  
駿が、誘う。

「たまにはいいかもね。夏希、どうする？」  
誘いに乗った凜が、夏希を見た。

「一人だけ仲間外れはいやよ。付き合うわ」  
気乗りしないまま、夏希はうなずいた。

商人に仕える侍女や召使が、テーブルの上に料理や酒を並べてから引き下がる。

「さっそく始めるか」

拓海が米の酒が入った壺を傾け、駿と生馬のカップに中身を注いだ。

「ねえ、リダも呼んであげなさいよ」

凜のカップに果実酒を注いであげながら、夏希はそう言った。

「そうだそうだ。お前に酌してもらっても嬉しくないぞ」

同調した生馬が、拓海に文句をつける。

「いや、ここは異世界人同士で飲むや。いずれにしても、リダは下戸だしな」

真面目な表情で、拓海が反論する。

「それもそうだね。じゃ、乾杯しようか」

駿がカップを手に取った。残る四人も、自分のカップを手にする。十数秒が経過した。

「……早くしてよ」

凜が、夏希を見て眉をしかめる。

「え？」

「おいおい。乾杯の音頭といったら、先輩たるあんたが取ることになってるんだぞ」

拓海が呆れたように言う。

「そんなの、いつ決まったの？」

「この世の常識たる？」

生馬が、笑う。

「じゃ。えーと、五人の変わらぬ友情に。乾杯」

「とりあえず懸案は、第八の魔力の源と、タナシスとの関係改善だ」  
かなり速いペースで飲んだせいか、顔を真っ赤にした拓海が言う。  
「どこにあるのかしらね」

夏希は果実酒を啜りながら言った。弱いお酒を選んだし、ゆっくりと飲んでいるので、ほとんど酔いはない。

「案外、辺境域にあるのかもね。人間界縮退と魔力の源の関係がわからないまま、使用し続けているのかも知れない」

つまみの干し肉をかじりながら、凜が推測を述べた。

「ま、そいつはいずれ見つかるだろう。急務は、タナシス王国との関係だよ。頼んだぞ、外交委員」

生馬が、大きな手でぽんぽんと夏希の肩を叩いた。

「そのことだが、タナシスは本気で金に困っている様子なんだ。昨日届いた手紙によると、海岸諸国が要求する補償金額を全額支払うには、閉山している金鉱を再開せねばならない、と主張しているらしい」

渋い表情で、駿が言った。

「なら、再開させればいいじゃない」

「その金鉱は、魔術を使って掘っていた山なんだよ。つまり、減額しないと魔力の源を使わざるを得ないという、遠まわしな脅迫だね」

「汚いなあ。さすが、タナシスだ」

拓海が、笑う。

「ブラフだろう。辺境州が狭まれば、蛮族が暴れる。困るのは、タナシスだ」

生馬が指摘した。

「僕も、ブラフだと思う。だが、それだけタナシス王国は苦しんでいるという証左でもある。現状で、ノノア川憲章条約が為すべきことは、タナシス王国の安定を損なわないようにすることだと思う。ここは、手助けしてやるべきじゃないのかな」

「確かに。末期の旧ソ連みたいなもんだ。軍部が暴走したり、内戦状態に突入したり、経済破綻して周辺諸国を巻き込んで崩壊したりするよりは、このまま存続してもらった方がましだからな」

拓海が、言う。

「結局崩壊しちゃったけどね」

凜が、肩をすくめた。

「してみると、ソ連の崩壊というのはうまく行った方だな。経済は破綻寸前までいったが、世界恐慌が起きたわけでもないし。分裂もうまく行ったし」

生馬が、感慨深げに言う。

「限定的な地方分権と民族の棲み分け。軍の暴走を防ぐ政治システム。独裁者を生み出しにくい独特の権力分散システム。政治的プロパガンダに汚染されていたとしても、それなりに高度であった国民に対する教育システム。貧困層の少なさ。成功の原因は、そのあたりにあるんじゃないかな」

駿が、分析してみせる。

「極端な地方主義と主要民族への権力の集中。最初から暴走気味の軍。強力な中央集権型国家を望む国民性。不十分かつ欺瞞に満ちた教育制度。増大中の貧富の差。某大国が近い将来崩壊するとしたら、ソ連崩壊以上の大惨事になることは間違いないな」

拓海が、皮肉な笑みを浮かべる。

「まああの国は、ソ連よりは豊かになれそうだから、簡単には崩壊しないだろうけどな」

駿が、にやにやと笑う。

「で、話を戻すけど……僕としては、ノノア川憲章条約が幾許かをタナシス王国に融資する、という計画を提案したい」

「なんですつて?」

夏希は驚いた。

「なるほど。憲章条約がタナシスに金を貸す。タナシスがそれを海岸諸国に払う。海岸諸国が平原や高原に投資する。憲章条約諸国が潤う。いけるんじゃないか?」

拓海が、即座に賛意を示した。

「外交的にも、プラスね。タナシスに恩を売れるし、海岸諸国も納得するでしょう」

凜がうなずきながら言う。

「焦げ付いたりしないかしら?」

「一応担保は取るけどな。鉱山の採掘権あたりでいいだろう。もっとも、海の向こうだから回収しようがないが」

すっぱそうな表情で、駿が説明した。

「そういうわけで、マリ・八にもどつたら、総会にこの件を諮ろうと思う。賛成してくれるかな?」

「賛成だな。その金は憲章条約から直接海岸諸国に渡るわけだから、タナシスに悪用されるおそれはない。踏み倒されたとしても、あまり痛くないし」

拓海が言う。夏希も賛成した。生馬と凜も、異議を唱えない。

「よし、仕事の話はこれで終わりだ。今夜はじっくり飲もう」

生馬が豪快に言っつて、各人のカップに酒を注ぎ足した。

「もう一度乾杯するか。今度は、ノノア川憲章条約諸国とタナシス王国の恒久平和を願つてだ」

カップを挙げた拓海が、そう提案する。夏希はうなずいた。

「いいわね。では、ノノア川憲章条約諸国と、タナシス王国の恒久

平和を願って。もう二度と、悲惨な戦争が起こらないように。乾杯  
！」

五つのカップが、くつくつと鈍い音を立てて打ち合わされた。

## 88 ジンベルへの帰還（後書き）

第八十八話をお届けします。今週も評価ポイントを入れていただきました。ありがとうございます。本作は当話で第二章を終え、次回第八十九話より第三章に移行いたします。

## 89 魔界の賢者再び

実に十四日間に及んだ長い休暇を過ごした夏希ら四人の異世界人は、ようやくマリ・八に戻ってきた。駿が憲章条約総会に諮った『タナシス王国への貸付計画』は数日前に賛成多数で可決されており、同案をタナシス王国へ提案する使者は外交部より選抜され、すでにルルト市から出航していた。

第八の魔力の源に関する搜索の進展はいまだ皆無であった。人間界縮退対策本部の要請を受け、東部海岸諸国海軍とオープア海軍は、二回目の搜索活動を東群島と西群島で行ったが、こちらも成果はなかった。タナシス王国からも、新たな魔力の源の発見の報告はもたらされていない。

人間界は、相変わらず一日五キツホのペースで縮退を続けていた。

「駿、おめでとう。タナシスが憲章条約が提案した融資計画を受け入れたわ。これで、補償交渉も速やかに終結するはずよ」

事務局まで出向いて駿を探し出した夏希は、にこやかに告げた。

「ありがとう。担保は決まったのかな？」

「アノルチャ州内の銀山と、ディディリア州内の金山。融資額は、こちらが請求していた補償金額の半分。残りは、タナシスが直接物品で払うことになりそうよ。ジンベルも、これで一安心ね」

金と銀の産出で儲けている……昨今は異世界人が発明した商品もかなりの額を稼いでいるが……ジンベルにとって、南の陸塊に大量の金が流入することは死活問題である。言うまでもなく、物品の価値はその流通量に左右されるからだ。この世界の金はハードカレンシー代わりに使われているが、その安定性は夏希らがいた世界ほど保障されていない。

「となると、残る懸案は第八の魔力の源か。これさえ押さえれば、

人間界縮退は治まるはずなんだが」

駿が、笑顔を消して深刻な表情になる。

「見つからないんじゃ、手の打ちようがないわよね」

夏希は肩をすくめた。

「ひとつ提案なんだが……魔物の力を借りることはできないだろうか」

「魔物？」

「以前に君と拓海が会った、ニヨキハンに接触してみてはどうだろう？ なにか新しい情報をつかんでいるかもしれない。彼を通じて、他の魔物に協力を求めることも可能じゃないかな」

「魔物ねえ」

魔物は人間同士の争いには不介入だが、人間界縮退を歓迎しているわけではない。確かに、協力を求められれば拒むことはないだろう。しかし、先日エイラとサーイエナが魔力の源をニヨキハンに借りに行った時には、人間界縮退に関する新たな情報は得られなかったはずだ。だが……。

「そうね。少しでも可能性があるのならば、試してみる価値はあるわね」

現状は手詰まり状態なのだ。補償交渉が軌道に乗れば、外交部も暇になる。

「エイラとコーちゃんに相談してみましよう」

夏希の話聞いたエイラが、即座に魔界訪問に賛成する。コーカラットも、協力を快諾してくれる。

夏希は高原にいるサーイエナに対し、協力を依頼する書状を書き送った。次いで、同行者の人選に入る。

すぐに名乗りを上げたのは拓海であった。

「暇なの？」

「憲章条約防衛隊の編成は終わったし、訓練は生馬に任せておけば

いいからな。高原の民にも顔つなぎしておかないと。凜ちゃんは行かないのか？」

「駿と凜は忙しくて無理。となると、わたしとアンヌツカ、エイラとコーちゃん、拓海と……もちろんリダも行くでしょ？ なんだか拉致された時の面子に近いわね」

夏希はくすくすと笑った。

「ところで話は変わるが……」

訝しげな表情で切り出した拓海が、夏希の顔をじっと見つめる。

「あんた、背伸びてないか？」

「え。マジで？」

「マジだ。俺が縮んだのでない限り、あんたが伸びてる」

「ただでさえもう少し小さい方がいいと思ってるのに……」

夏希は落ち込んだ。

「たぶん、百七十五は越えたな。俺と凜ちゃんに少し分けてくれよ」  
にやにやしながら、拓海が言う。

船頭ごと借り上げた川船が、ノノア川を遡る。

「こんなことなら、ジンベルで休暇取ってるあいだに、高原に顔出しとけばよかつたかな」

「いや、休暇は必要だよ。人も国家も、走り続けていてはろくなことにならない。足を止めて内省する時もなきやいかん」

夏希のぼやきを聞きつけた拓海が、言う。

「そういうもんなの？」

「そういうもんだ。日本がいい例だろ。十八世紀の末ごろからの外国船来航。開国をめぐるごたごた。幕末の諸騒動と、戊辰戦争。明治の諸改革と、大日本帝国成立。日清戦争に日露戦争。日韓併合。第一次世界大戦。シベリア出兵。中国内戦への介入。満州事変と国際連盟脱退。百五十年ほど、日本は全力疾走しちまったんだよ。どこかで一回立ち止まって、走ってきた道筋を再確認し、進むべき道

をしつかり吟味していれば、もう少し国際社会で賢く立ち回る事ができたはずなんだがな」

「外交は苦手だからねえ」

夏希は苦笑いした。歴史に詳しくない彼女でも、日本の外交下手ぶりは理解している。

「日本の外交下手は伝統だからな。中国の各王朝と仲良くやっていれば、侵略されることもなく文化や技術を取り入れることができたんだから、経験値が上がりがりようがない。朝鮮は無視できる土地だったしな」

旅の二日目、夏希らが乗る川船はジンベルを素通りして、高原へと通じるジンベル川をさらに遡っていった。

ジンベル王国以南のジンベル川は、以前と比べて様変わりしていた。平原と高原を結ぶ交通路として、さかんに使われていたのだ。様々な物品や人を乗せた川船が、十数分に一隻ほどのペースで夏希らの船とすれ違う。

「賑やかになったわねえ。ついこのあいだまでは、秘境ムードたっぷりだったのに、いまじゃ交易路状態じゃない」

「いいことだ。ジンベルにも、だいぶ金が落ちているはずだしな」  
満足げに、拓海が言う。

密林地帯を抜け、高原地帯に入る。ほどなく、川沿いに新しくできた小さな集落が現れた。差し掛け小屋を寄せ集めたような、粗末なものだ。

「なに、あれ」

「水路掘削工事用労働者の宿舎だ。あそこから東の方へと、川船が通れるだけの水路を掘ってる」

夏希の質問に、拓海が答えてくれる。

「水路？ どこへ繋がるの？」

「鉱山さ。スロンとエボダを中心に、平原の数力国が出資して、共同事業体が立ち上がってる。第一弾が、鉄鉱石の採掘だ。荷車で

川まで運ぶよりも、あらかじめ水路を掘っておく方が、長い眼で見ればコストを抑えられるからな」

「ふうん。いつの間にかやら開発が進んでいたのね」

午後半ばに、川船はイファラ族の居住地に到着した。サーイエナが、出迎えてくれる。

「あれ、ユニちゃんは？」

夏希はあたりをきよるきよると見回したが、いつも元気で騒がしい魔物の姿が見当たらない。

「時間を節約しようと思ひまして、ユニちゃんには一足先に魔界に行ってもらいました」

サーイエナが、説明する。

「ニヨキハン殿に話を通し、明日の朝に人間界との境界までお連れするように指示してあります」

「さすがですな」

拓海の褒め言葉に、サーイエナが優雅に微笑んで応える。

一行はサーイエナに案内され、宿舎に向かった。途中で、拓海がリダの任を解く。

「平原にもどるまで、休暇だ。自由にしていよいよ」

「しかし、拓海殿」

「高原で護衛は必要ないだろう。たまには、兄上と水入らず、というのも楽しいぞ」

拓海がそう言って、親密そうにリダの肩を抱く。……ベンデイスの思惑通り、仲は順調に進展しているようだ。

翌早朝、夏希、拓海、エイラ、サーイエナの四人は、二本の触手を座席モードに変形させたコーカラットに乗って、魔界との境界を目指した。夏希はアンヌツカも連れてゆきたかったが、さしものコーカラットも一度に五人となるとバランスを取るのに苦労するらしい。

快適な速度で、コーカラットが飛ばす。二時間ほどで、前方に黒

い壁のようなものが見えてきた。

魔界である。

コーカラットが速度を緩め、魔界との境界から三百メートルほど離れたところに立っている一群のテントの前で停止した。すぐに中から数名の高原の民が出てきて、降り立ったサーイエナに挨拶する。「調査部の方々です」

サーイエナが、そう紹介してくれる。

「で、ユニちゃんは？」

「まだ来ていないようですね」

「急ぐことはない。冷たいものでも飲んで、待っていようや」

拓海がそう言って、コーカラットを見る。

「お任せ下さいい」

早速コーカラットが、水差し状にした触手を顎下に入れた。調査部の面々にも、コーちゃんジュースが振舞われる。

ほどなく、魔界の闇の中からひよっこりと大小ふたつの影が現れた。言うまでもなく、ニヨキハンとユニヘックヒューマだ。

「ご指示どおり、ニヨキハン殿をお連れしたのであります！」

ユニヘックヒューマが、ステッキをぶんぶん振り回してサーイエナに報告する。

「急な頼みを聞き入れてくださって、ありがとうございます、ニヨキハン殿。ユニちゃんからすでにお聞き及びとは思いますが、知恵をお貸しいただきたいのです」

「うん。諸君らも、元気そうだなによりなんだな」

ニヨキハンが、被っていた麦藁帽子をひょいと持ち上げて挨拶する。魔物の賢者は、相変わらずのユニークな姿であった。短い手足と、小太りの体型。全身を覆う白い柔毛と、魔物特有の単純な顔の造作。

「魔力の源が七つではなく、八つだったというのは驚きなんだな。

この世は広く、ボクの知らないこともまだまだ多いんだな。だからこそ、知識を探求するのは極めて興味深いことなんだな」

「どうでしょう、八つめの魔力の源の位置に関して、なにか情報をお持ちではないでしょうか」

エイラが、遠慮がちに尋ねる。

「まったく知らないんだな。諸君らの役には立てそうにないんだな」  
「そうですか」

サーイエナが、唇を噛む。

「ただ、ひとつだけ推測を言わせてもらえば、八つめの魔力の源は、おそらく北の陸塊にあると思うんだな」

「その根拠は为什么呢」

すかさず、拓海が訊く。

「ボクのコレクションで、いま貸してある魔力の源は、もともと南の陸塊にあったものなんだな。バランスを考慮すれば、南の陸塊に四個、北の陸塊に四個でちょうどいいんだな」

「九つ目の魔力の源が存在する可能性は、あるのでしょうか」

夏希は以前から危惧していた質問をぶつけてみた。

「ボクの推測では、たぶんないと思うんだな」

「なぜかはわからないが、左の脇腹をぼりぼりと掻きながら、ニョキハンが答える。

「やはり北の陸塊ですか」

エイラが、眉根を寄せて考え込む。

「魔術を使い続けているにもかかわらず、その場所をつかめない。やっぱり、辺境域なのかしらね」

夏希も考え込んだ。大国タナシスは一枚岩ではないし、辺境州やその外側で行われていることすべてを掴んでいるわけではない。どこかの蛮族がひっそりと使用しているだけならば、見付け出すのは難しいだろう。

「結局、大した成果は挙げられなかったわね」

コーカラットの触手座席に座った夏希は、前に座るエイラにそう

話しかけた。

「そうですね。タナシスの搜索活動に期待するしかないようです」  
「焦っても仕方ないな。タナシスとの関係改善に尽力し、彼らが魔力の源搜索に心置きなく掛かれるような状況を作り上げてやるしかないだろう。例えば、搜索予算に関しては無担保無利子で貸し付けてやるとか」

前方の触手座席に座った拓海が、言う。

「積極的に動けないのは、辛いわね」

夏希は横を向いた。快調に低空飛行するコーカラットの脇を、肩にステッキを担いだユニヘックヒューマが並走している。ステッキの先の座席に座っているのは、もちろんサーイエナだ。その向こう側には、いかにも高原地帯らしい雄大な景色……延々と続く大草原……が広がっている。

「で、これからどうする？」

エイラの肩越しに、夏希は拓海に向かってそう問いかけた。

「マリ・八に戻るしかないだろ。八番目の魔力の源の行方を気にしつつ、憲章条約諸国の改革を進めてゆくだけだ。凜ちゃんが経済改革。駿が教育改革。生馬が軍事面の改革」

「拓海は何をするの？」

「交通網の整備でも始めるかな。物流にしる人の動きにしる、これから増大するのは間違いない。そろそろ自由競争に任せるのはやめて、各国に出資させて公共交通機関を立ち上げる頃合いかもしれん」  
「赤字垂れ流しにならない？」  
「かもな。しかし交通や通信関連はある程度国家が成熟するまでは官主導でやるべきことだからだな。そのあたり、駿と相談してみるか。で、あんたは何をやるんだ？」

「外交委員としての仕事に集中するしかないわね」

夏希は言った。タナシス王国との良好な関係を維持し続けること。これが、夏希に課せられた最重要命題である。

マリ・八に戻った夏希は、すぐにタナシス王国に送付する書簡を作成した。もつとも、いまだこちらの言語の読み書きはできないから、外交部の事務方に口述を筆記させ、さらに清書させただけではあるが。

内容は、もちろん第八の魔力の源に関してである。南の陸塊では徹底した捜索にもかかわらず未だ発見に至っていないこと。魔界の賢者と接触し、その意見では北の陸塊に存在する可能性が高いこと、などを書き綴つてある。

書き上がった書簡は、マリ・八駐在のルルト外交官に託された。マリ・八からルルト、ラドーム、アノルチャ経由で、王都リスオンへと運ばれることになる。

「早いところ、外交官を常駐させるようにしたほうがいいかもね」

地図を眺めながら、夏希はつぶやいた。表層的なお付き合いに務めるつもりだから、領事館などには必要ないが、ある程度の権限を付与された外交官……いわば特命全権大使に近い立場の者……をお互いの中心都市や沿岸部……つまりはマリ・八とリスオン、それにルルトとアノルチャ……に置くべきだ、という案は以前からあるが、いまだ実現していない。

「外交特権の問題とか、いろいろ整備しないとイケないからねえ。ま、これも駿に相談してみますか」

夏希が出した書簡が、ラドーム公国グルージオン市でルルト商人からタナシス外交官へ手交された頃……。

そのグルージオン市で行われていた、海岸諸国とタナシス王国の補償交渉は暗礁に乗り上げていた。海岸諸国側が、物品での補償額を支払いに難色を示したのである。

問題は、物品の価値の算定基準にあった。言うまでもなく、北の陸塊の特産品……例えば絹布は、北の陸塊と南の陸塊ではその実売

価格は大幅に異なる。

タナシス側は、少しでも補償金額を安く上げようと南の陸塊物価基準で算定しようとする。当然、海岸諸国側は少しでも多くむしり取ろうとタナシス王国内の物価基準での算定を主張する。

双方とも妥協点を見いだせないまま、交渉は続けられた。

89 魔界の賢者再び（後書き）

第八十九話をお届けします。当話より本作は最終章である第三部に突入いたします。

ただならぬ物音に、ラドーム公国のカミュエンナ公王女は目覚めた。

まだ夜明け前だというのに、遠くから喧騒が聞こえてくる。さながら年に一度の島神の祭りでも始まったかのようなのだが、今はそんな時期ではない。公王宮内でも、人々が走りまわるような気配があった。……市街地で大火でも生じたのだろうか。

「何事ですか」

身を起こしたカミュエンナは、控えの間に向け、鋭く問いかけた。「お目覚めでございますか、殿下」

すつと扉が開き、二人の侍女が燭台を手に入ってきた。一人が、カミュエンナの細い肩にシヨールを巻きつける。

「殿下、ご報告申し上げます」

護衛官の一人が、控えの間から声を掛けてくる。

「続けなさい」

侍女の一人に手振りで水を所望しながら、カミュエンナは促した。「はつ。どうやら、タナシス軍部隊の駐屯地が、襲撃されている模様です」

「なんですって」

カミュエンナは寝台から降りた。水を持ってきた侍女を無視し、北側の窓へと歩み寄る。彼女の意図を先読みした侍女が、窓にはめ込まれていた防水紙を張った木枠を取り外す。

グルージオン市北部郊外、タナシス正規軍駐屯地のあたりに、数百もの松明の明かりがまたたいている。市街地に通じる道のあたりにも、松明は列を作ってまたたいており、その光る帯は大河の流れを思わせるゆっくりした速度で、駐屯地の方へと近づいて行っている。

「これは……」

暗くてよくわからないが、駐屯地を取り囲んでいるのは普通のブルージオン市民ではあるまい。単なる示威行動なら、夜間に行う必要はない。となれば、彼らの正体は間違いなく武装集団だ。

二千名の定員だったラドーム公国駐屯タナシス正規軍が、半数の千名に削減されたのはつい先日のこと。駐屯軍弱体化を待って、武装集団が蜂起したに違いない。そして、このラドームでそのような戦力を調えられる勢力と言ったら、ひとつしかない。

すなわち、ラドーム王国復活を願う人々。

カミュエンナの父、シャハミは優秀な国王であり、国民にも人気があった。そのシャハミは、タナシス王国から併合の打診……遠まわしな脅迫……に対し、武力による抵抗をあつさり諦め、ラドームがタナシス王国内の公国となる道を選んだ。そして、乗り込んできたタナシス人は、シャハミの能力と人気を警戒し、彼を強制的に退位させ、まだ幼かった娘のカミュエンナを初代公王の座に就けた。これらの一連の処置、そしてそれ以降のタナシス王国による横暴とも言える要求の数々……特にラドームの若者に対する边境軍兵士としての強制徴募……は、ラドーム人の反感を増大させた。表面上、彼ら反タナシス派の市民は大人しくしているが、裏では組織化を進めたり、武器を密かに集めたりしている、との噂も流れている。

それが、一拳に吹き出したに違いない。

カミュエンナは、窓から首を突き出して東の空を眺めた。水平線から上は、ほのかに白んでいる。とすると、夜明けまではまだ時間がある。

窓から身を引いたカミュエンナは、控えの間へと歩み寄った。夜着であるにもかかわらず、護衛官の前に出る。

「ムーリア。すぐに公国軍団に非常呼集を。公王宮の警備も固めるように」

「はっ」

深々と礼をした護衛官が、去る。

「困った人たちだわ」

侍女から水を受け取ったカミュエンナは、それを一気に飲み干した。次いで、侍女に向かい着替えを持つように命ずる。

動きやすい服を選んだカミュエンナは、侍女に着付けてもらいながら頭の中で計画を整理した。いまここで、タナシス王国と事を構える訳にはいかない。王国復活派はタナシスが南の陸塊諸国との戦いで疲弊したことを好機とみて蜂起したのだから、相手は様々な問題を抱えているとはいえ大国である。小さな島国であるラドーム……人口は五万人ちよつとしかない……では、長期間の紛争には耐えられない。武力衝突となれば、まず勝ち目はないだろう。ラドーム公国は、ラドーム自治州に、いや、下手をすれば自治さえ許されない辺境州にされてしまいかねない。

ラドーム公国の正規兵力である公国軍団は、四個二千名からなるグルージオン市防衛の一個団ならば、朝までには集まるのは確実だ。一千のタナシス駐屯軍に対抗しようと集まった武装集団なら、その数は最低でも二千名以上のはず。しかし、カミュエンナ自らが一個団五百名を率いて向かい、説得を行えば、抵抗せずに解散してくれるだろう。

着替え終わったカミュエンナは、侍女に食事の用意を命じた。空腹のままでは、兵士を率いることはできない。

と、通路に通じる扉の外が急に騒がしくなった。どたどたと、人が駆けまわる音が響く。

残っていた侍女が、カミュエンナを守ろうとするかのように前に出る。

ばん、と扉が勢い良く開いた。長身の中年男が、のっそりと入ってくる。

「お父様！」

カミュエンナは思わず叫んだ。

現れたのは、最後のラドーム国王、シャハミだった。

「夜分にすまんな、カミュエンナ」

歩み寄ったシャハミが、腰を屈めるとあっけに取られているカミ

ユエンナの褐色の頬に、そつと唇を寄せる。

「ではあれは、お父様の差し金ですか？」

カミュエンナは、北の窓を指差した。

「差し金、と言うのは適切な表現ではないな。わたしが命じたわけではないのだから。彼らの目的が、ラドーム王国復活とわたしの復位だということは、確かだが」

身を引いたシャハミが、にこやかに言う。

カミュエンナは実父を見据えた。実に、二年ぶりの再会である。

シャハミはラドーム島北部の離宮に軟禁状態に置かれていたし、国政に関与させないために実子であるカミュエンナと合うことすら、タナシス側の『要請』で数年に一回に制限されていたのだ。

「お父様、すぐに止めさせてください。今ここで我が国がタナシスと事を構えるのは、危険です」

カミュエンナは、強い口調でそう要求した。シャハミが、穏やかに微笑む。

「賭けではあるが、十分に勝ち目のある賭けなのだよ」

「勝ち目？ そんなもの、どこにあると言うのですか？」

語気鋭く、カミュエンナは尋ねた。

「ラドーム王国には、力強い友人がいるのだ。大丈夫。わたしが国民を悲しませることをする国王でないことを、お前はよく知っているはずだ。さあ、公国軍を率いてタナシス正規軍駐屯地を包囲し、武装解除を迫るのだ。大丈夫。きっと上手く行く」

シャハミがにやりと笑って、その大きな手をカミュエンナの肩に掛けた。

タナシス正規軍ラドーム駐屯部隊の士気が持ったのは、その日の昼までであった。

五千を超える武装市民と、二千名のラドーム公国軍に完全包囲された駐屯部隊一千名。数回の小競り合いでラドーム側が本気であることを悟ったタナシス部隊指揮官は、タナシス本土への早期送還を

確約したカミュエンナとシャハミの言葉を信用し、武装解除に応じた。日暮れ前に、公王宮においてラドーム王国復活が宣言される。玉座には、もちろんシャハミ前国王が復位した。

「寝耳に水、とはこのことだな」

拓海が、ぼやく。

五人の異世界人は、新築の夏希の家に集っていた。引越しもすでに済んでおり、シフォネも一緒に暮らしている。そのシフォネが、皆の前にお茶の入ったカップを置いてゆく。

ラドーム騒乱の知らせがマリ・ハにもたらされたのは、今日の昼頃であった。すぐさまノア川憲章条約総会が開かれ、対応が協議される。

とりあえず全会一致で採択されたのは、『ラドーム問題の静観』決議であった。ノア川憲章では、ラドーム島以北は『タナシスの勢力圏』であることをはっきりと認めており、『タナシス王国の内政問題に介入しない』ことを謳っている。前国王によって独立宣言がなされたとしても、それは外交的に見ればあくまで『タナシス王国の内政』問題である以上、我関せずの姿勢を貫くことが筋であるし、ノア川憲章条約諸国の利益にも繋がる。

「でも、なんで武装蜂起の上独立宣言、なんて馬鹿なことやっちゃったのかしら。カミュエンナは、賢い子だと思ってたのに」

夏希はそう言った。正規軍、海軍ともに南の陸塊侵攻失敗で大損害を受けたとはいえ、いまだタナシス王国は強力な軍備を保有している。その気になれば、ラドームくらい簡単にひねり潰せるだろう。「軍事専門家としては、どう見るの？」

凜が、拓海に振る。

「タナシスが動員できる船舶数が不明だが……まあかき集めれば三十隻くらいは余裕だろう。一隻あたり陸戦兵力二百五十名だとして、総兵力七千五百名。ラドーム公国軍……今は何と名乗っているかは

知らないが……が四個団二千名。市民軍が、無理してかき集めて八千から一万。一見するといい勝負だが、ラドーム側には兵力増援の手立てがない。まず、ラドームに勝ち目はないな」

「なんで蜂起したのかしら。カミュエンナ・パパは聡明な君主だったはずでしょ？」

「あのー、カミュエンナの父親はシャハミって名前なんですけど」

夏希は、凜の言葉をやんわりと訂正した。

「支持者に担がれて仕方なく蜂起したのかもしれないね。リーダーのカリスマが時間の経過とともに失われ、最後にはお飾りになるというのはよくある話だし」

駿が、口を挟む。

「隠居生活が長引いて、カミュエンナ・パパが惚けちまったんじゃないのか？」

「こつ言つのは、生馬。」

「ま、カミュエンナ・パパのお手並み拝見、というところだな。タナシスの内政問題に、手はもちろん口も出すべきじゃない。成り行きに任せるしかない」

拓海がそう言つて、お茶を口に含む。

「いや、口くらい挟んでおいたほうがいいよ。タナシスに恩を売れるからね。不介入宣言やカミュエンナ・パパに対する非難決議くらい、すぐに出せるはずだし」

駿が、言う。

「言葉だけなら、安いもんだしね」

凜が、肩をすくめた。

「そうになると、カミュエンナがかわいそうね」

夏希は肩を落とした。褐色の肌の、感じの良い美少女。タナシス側は、寛大に扱ってくれるだろうか。

「そうだな。おい、駿。もし仮に敗れたカミュエンナ・パパとカミュエンナが亡命を求めてきたりしたら、どうするんだ？」

拓海が、訊いた。

「政治亡命か。そいつは、やつかいだね」  
駿が、顔をしかめる。

「どの国に亡命を求めて来たとしても、人道的見地からは受け入れざるを得ない。ノア川憲章の精神にも合致するしね。しかし、今回の武装蜂起はタナシスの国内法では明白に犯罪行為になるだろう。それに、純粹政治犯罪とは見做されないから……。犯罪人の引渡しは相互主義に基づくものだし、おそらくはタナシス王国と南の陸塊諸国間で犯罪者の引渡しが行われた例は過去にないと思うから、あくまで人道に基づく、として引渡しを突っぱねることはできるんじゃないかな。平原や海岸諸国間では、どのような前例があるのか、調べてみる必要があるそうだね」

「カミュエンナだけでも、助けてあげたいわね」

「ああ。あの姫さんには世話になったしな」

夏希のつぶやきに、拓海が賛同する。

「こ、国家承認ですって？」

「はい、外交委員。ルルト王国、オープア王国、ラクトアス王国、チユイ王国、ニガタキ王国の海岸五力国が、連名でシャハミ国王を元首とするラドーム王国を、国家承認すると発表しました」

外交部職員が、早口で説明する。

「誰か、駿を見つけてきて。早く！」

夏希は慌てて数名の職員を使いに出した。

「国家の成立要件は、簡単に言えば国民、領土、政府、そして外交能力の四つだ。その要件が揃えば、たとえ外国が国家承認してくれなくとも、国際法上は主体性のある国家として扱われることになる。だが、今回の場合はちよつと複雑だ」

言葉を切った駿が、溜息をつく。

「タナシス王国は、当然ラドームの独立を認めず、その領土はタナ

シス王国の領域であり、住民もいまだ王国民だと見做しているはずだ。そのような状況で、カミュエンナ・パパのラドーム王国を国家承認することは、内政干渉と言われても仕方ない」

「じゃ、ノノア川憲章条約違反じゃない」

「そうなんだが……それにもかかわらず、海岸主要国がラドームを国家承認したということは……」

言葉を切った駿が、洪面を作る。

「どうやら、カミュエンナ・パパに一杯喰わされているかもしれないね、僕たちは」

「ノノア川憲章条約諸国も、混乱しているようだな」

他人事のように、オストノフ国王が言った。

タナシス王宮の執務室である。広い机と、椅子。それに書記が控えている小さな机があるだけの、さほど広くない部屋だ。装飾のたぐいはほとんど無く、良く言えば質実剛健、悪く言えば殺風景で面白みに欠ける一室である。

「やはりこの反乱、裏で海岸諸国が動いていたようですね」

机の前に立ったりリュスメース王女は、あまり感情のこもらぬ声音で言った。

ラドーム公国内に放ってあった諜報員は、反乱の予兆をまったく捉えることが出来なかったため、駐屯部隊は完全に不意を衝かれ、降伏を余儀なくされた。捕虜となった約一千名は、いまだラドーム島内で拘束中だ。シャハ三元国王……タナシスはラドーム王国復活を認めていないので、当然この肩書となる……は捕虜の送還を確約しているが、引き換えにラドームの独立承認を要求してきている。もちろん、それに応ずるつもりはオストノフにもリュスメースにもなかった。ラドーム独立を許せば、他の公国や自治州にも同様の動きが出てくるだろう。それだけは、絶対に避けねばならない。

「で、反乱鎮圧計画は？」

「軍船四隻、民間船舶三十二隻を使用すると、陸戦兵力八千名が三日分の物資と共に輸送できます。ペクトール、カレイトン、バラから公国軍および自治州軍合計六個団三千。リスオン、デイディリベート、アノルチャ、デイディリア各州から正規軍十個団五千。総指揮は、アンタイク將軍でいかがでしょうか」

「うむ。それだけあれば、十分だろう。海岸諸国が動かなければなおストノフが言つて、嘆息した。

無謀とも思える今回のラドーム反乱。そして素早い海岸諸国による国家承認。

どう考えても、シャハ三元国王の裏には、海岸諸国がいるはずだ。したがって、このまま鎮圧部隊を送り込めば、タナシス王国と海岸諸国の交戦に発展しかねない。むろん国力と兵力はタナシス王国のほうが上だが、現状では海軍力は海岸諸国のほうが圧倒的に優っている。対決の場がラドーム島であれば、不利は否めない。

そしてもちろん、今のタナシス王国には、八千の兵力をラドーム島で長期にわたって戦闘させるだけの余裕は、ない。

「マリ・ハに使者を送りましょう。ノア川憲章条約総会を味方に付けるべきです。先日届けられた外交委員ナツキ殿の書簡にもある通り、彼らは第八の魔力の源が北の陸塊にあると確信しています。今回の紛争でその搜索活動に支障をきたしている、と主張すれば、高原諸族はわがタナシスの味方に付くでしょう。平原も、対立よりは共存を選ぶはずです。海岸諸国に圧力を加え、介入を阻止できる可能性が高いです」

リクスメースは、そう分析した。

「同意する。だが、単に使者を送り込んだだけでは、海岸諸国に追い返されてしまうぞ」

「無視できないほど高位の使者を送りましょう」

「例えば？」

「ロンドリー殿ならば、問題ないでしょう」

「外務大臣か。いや、もう少しインパクトが欲しいな。シエラエズ

にしよう」

「お姉さまを……」

「王族となれば、海岸諸国も無碍に扱えまい。ラドームを経由せず、直接ルルトへ乗り付けるのだ。リユスメース、シエラエズとよく相談し、いかにしてノノア川憲章条約国家を説得するか策を練るのだ。よいな」

「御意」

90 リドーム騒乱(後書き)

第九十話をお届けします。

## 91 シェラエズの雄弁

予想通りではあったが、ノノア川憲章条約総会は、荒れた。

憲章条約には、タナシス王国への内政干渉を禁ずる項目が存在する。これに基づき、高原諸族は海岸諸国が行ったラドーム王国に対する国家承認は、憲章条約違反であるとしてワイコウを除く海岸諸国を激しく非難した。これに対し、海岸諸国はラドーム公国がタナシス王国から独立した以上、ラドーム王国との外交問題は内政干渉に当たらず、という主張を繰り返した。

その後高原諸族が合同で提出した『ラドーム問題に対する不介入宣言』採択は、ワイコウを除く海岸諸国の棄権があったものの、高原諸族、平原諸国すべての賛成票を集め可決された。しかしながら、これはあくまでノノア川憲章条約総会の形式的な宣言であり、参加各国の外交姿勢を縛るものではなかった。

「まいったねえ。タナシス王国以外の国家が突如出現するのは想定外だったよ」

駿が、頭を掻く。

「どうするんだ？ このままだと、ノノア川憲章条約が瓦解しかねないぞ」

生馬が、唸る。

「海岸諸国は本気なのかしら？」

夏希はそう疑問を呈した。ラドームを無理やり独立させれば、タナシス王国との対立を招くし、平原や高原との関係も悪化するの素人でもわかる。

「補償交渉がまとまらないので、実力行使に出た、ということころだろうね。経済的には損失だが、ラドームとの独占貿易で多少は取り返せるだろう。軍事的に見ても、ラドームに親海岸諸国政権が出来れば安全保障上のメリットは計り知れないだろうし」

「だな」

駿の説明を、拓海が肯定する。

「ただ単に南の陸塊諸国がラドームを併合しただけなら、防衛のための駐留経費その他が掛かってメリットは少ない。しかし、ラドーム自体がタナシスを敵に回してくれば、国防に手を貸すという名目で駐留経費の大半をラドーム王国に負担させることも可能だろう。海岸諸国の連中も、考えもなしにカミュエンナ・パパに手を貸したわけじゃあるまい」

「ノノア川憲章自体を改正するべきね。締約国は新興国家を個別に国家承認すべきではない、とか」

凜が、意見を述べる。

「ワイコウを除く海岸諸国が九票握ってるからな。条項追加には二十七票必要だ。しばらくは無理だな」

拓海が首を振る。

「とりあえず、対策はあるのか？」

生馬が、駿に振った。

「落とし所が見つからないんだ。タナシス王国がラドームを諦めるはずがない。独立を認めたら、他の公国や自治州が黙っていないだろうからね。もちろん、カミュエンヌ・パパと結託して周到に準備したであろう海岸諸国があっさり手を引くこともないだろう。難しいね」

「ラドームの完全中立化とかは無理かしら」

夏希はそう言ってみた。

「タナシスが一方的に譲歩する形になるね。海岸諸国が補償請求を放棄。ラドーム王国は完全独立の上事実上の非武装中立化。いかなる国家も勢力もラドーム国内に兵力を置くことを禁ずる。タナシス王国の政治的統一の維持に、ノノア川憲章条約諸国は協力する……。うーん、うまく行きそうにないな」

拓海が、唸った。

「とりあえず、僕は海岸諸国に行ってみるよ。海岸諸国の思惑を探

って、自制するように働きかけてみる」

駿が、言った。

「頼むぞ。ここでノア川憲章条約が機能停止に陥れば、俺たちの今までの苦勞が水の泡だ」

拓海が、真剣な面持ちで言う。

タナシスのシエラエズ王女がマリ・ハを訪れたのは、駿が旅立った翌日であった。

「久しぶりですな、夏希殿」

外交委員として出迎えた夏希に向け、シエラエズが妖艶な笑みを見せる。

「ようこそマリ・ハへ。とりあえず迎賓館にご案内します」

「宿泊は夏希殿の自宅がいいのだが」

「殿下……」

「冗談だ。宿所へ向かう前に、総会で意見表明をする機会を与えてもらいたい」

「えーと……」

夏希は口ごもった。部外者たるシエラエズを総会で喋らせるのは、憲章条約の条項に違反することはないだろうか？

「条文を詳しく読んだが、総会で非加盟国の者が発言することを禁じている項目はない。タナシスは友好国であり、わたしはそこから派遣された国王の特使だ。問題はないはずだが」

余裕の笑みを浮かべながら、シエラエズが言う。

総会でシエラエズ王女が述べた意見は、要約すれば次のとおりであった。

総会において意見表明の機会を与えてくれたことに感謝する。  
相互主義に基づき、今後憲章条約外交官がタナシス王国閣議など

で意見表明する要望があれば、これを受け入れるとともに歓迎する。タナシス王国は、多様な文化と長い歴史を持つ南の陸塊諸国が、短期間でノア川憲章条約のような優れた組織を立ち上げ、これにこぞって参加したことを高く評価するとともに、参加各国に敬意を表するものである。

タナシス王国は、ノア川憲章の精神に共鳴し、これからも友好国としてその発展に協力を惜しまないつもりである。

しかしながら、ラドーム公国における『非合法武装組織の蜂起』に対し、『ごく一部』の憲章条約諸国が憲章条約の理念に反する外交活動を行ったことは、甚だ遺憾である。非合法武装組織の主張に正当性はなく、したがって国家としての体裁も整っていない以上、一部の国家による国家承認は明白にタナシス王国に対する内政干渉である。

さらに、この一部の国家の行動は休戦条約にも違反する行為である。速やかにこれら国家はラドーム王国を名乗る武装組織に対する誤った姿勢を正していただきたい。

タナシス王国はラドーム島を占拠した武装組織を討伐する準備を進めている。これを妨害することは、休戦条約に違反するのみならず、憲章条約の精神にも反する行為である。もし一部の憲章条約諸国が武装組織を支持する姿勢を見せれば、タナシス王国としてはそれら諸国を敵と見做すしかない。我が国としては、ノア川憲章条約諸国家の理性的かつ平和志向の判断を期待するものである。

すでに、憲章条約総会は、今回のラドームの問題に関して不介入宣言を賛成多数で可決している。したがって、もし一部の国家がこのままタナシスに対する内政干渉を継続、あるいは拡大すれば、憲章条約自体が有名無実化しかねない。友好国としては、それを望まない。決議通り、各国は不干渉を貫いていただきたい。

静聴を感謝すると共に、憲章条約各国とタナシス王国との友誼を再確認して、意見表明を締めくくりたい。

「すばらしい意見表明でした、殿下」

迎賓館の一室でシエラエズと相対しながら、夏希は心からそう言った。

「ありがとう、夏希殿。まあ、書いたのはリクスメースだがな」

「そうでしたか」

「で、海岸諸国はどう出るかな」

座るように促しながら、シエラエズが問う。

「わたしには、分かりかねます」

夏希は正直にそう言った。

「平原諸国は、海岸諸国の行動を苦々しく思っているのだろうか？ わたしとしても、なるべくなら正規軍を動かさずに、流血を伴うことなく事態の收拾を図りたいと考えている。この件で、憲章条約と我が国は利害が一致していると思う。どうだろう、憲章条約側で外交的手段を使い、ラドームの武装組織と話をつけてもらえないだろうか？」

「それは、タナシス王国からの正式の要請ということですか？」

夏希は確認した。勝手に外交使節を送れば、憲章条約がラドームの『武装組織』を国家に準ずる存在として認めたことになり、結果的にはタナシスに対する内政干渉になるはずだが。

「そうだ。タナシス王国の国王名代として、明日総会で正式に宣言しても良いぞ。タナシス国内での紛争を、平和裡に解決するため、憲章条約事務局外交部に仲介を依頼した、という形ならば、国家承認にはなるまい。交渉相手は、あくまで『ラドーム王国』を僭称するタナシス王国内の武装組織、なのだから」

「……意図は理解しましたが、落とし所はどこですか？」

「武装勢力の武装解除、ラドーム公国の復活。憲章条約諸国の内政干渉の禁止明示。わが方としては、旧態に復した上で二度と同様の事態が起こらなければ、それでいいのだ」

「首謀者の処罰などは？」

「原則的には行わない。シャハミはタナシス本国で丁重に預かる形になるだろうな。カミュエンナは責任不問で公女王に復帰させる。これならば、問題あるまい」

「ラドーム王国……いえ、武装組織側が納得する条件とは思えませんが」

「だが、現状でタナシス王国がラドーム討伐を強行すれば、海岸諸国がラドーム派兵を強行しかねない。夏希殿も、タナシスと南の陸塊諸国がふたたび争うのは見たくあるまい」

「おっしゃる通りです」

「第三者的立場で仲介できるのは、憲章条約事務局外交部だけだと思ふ。期待しているぞ」

「こつちに下駄を預けてきたか。やるな、あの色気過剰王女は」  
にまにまと、拓海が笑う。

「で、どうしたいの、夏希は？」

凜が、訊く。

「外交部長とも相談したけど、他に方策もないから、応じるつもりよ。明日総会に諮って、正式な外交団を結成する予定。団長は、わたしになるでしょうね。ちょっと、不安だけど」

「憲章条約の正式な外交官を悪し様に扱うようなことはしないだろう。カミュエンナ・パパがそれほど愚かな男には思えんし。心配なら、コーちゃんにでも付いて行ってもらえばいいんじゃないか？」

なんなら、俺のところの腕利きを山ほど付けてやるが」

生馬が、そう提案する。

「ありがとう。でも、身の危険を感じているわけじゃないわ。危惧しているのは、交渉が失敗に終わることよ。カミュエンナ・パパの思惑に乗せられて、政治ショーをやらされるだけに終わるかもしれない。少しでも事態解決に寄与できればいいけど、対立を煽る結果になったら本末転倒だわ」

「本番前に、お膳立てが必要だな。いい考えがある。夏希、駿に手紙を書け。一足先に、ラドームに行ってもらうんだ。そこでカミュ・エンナ・パパの意向を確かめ、あんたの訪問が茶番にならないように準備するんだ」

拓海がそう提案した。

「いい案ね。駿なら、きつとうまくやってくれるはずだわ」

翌日の総会で、カミュ・エンナ王女が正式に憲章条約外交部による『武装組織』に対する説得と交渉仲介を依頼する。高原諸族と平原各国は、これを積極的に歓迎した。海岸諸国も、これをタナシス側の弱気、あるいは譲歩を受け取り、基本的に賛意を示す。

外交部のオブザーバーとして出席した夏希は、その場で駿のラドーム派遣に関して事後承諾を取り付けた。これで、駿は身分的にも外交部特別参与として、ラドームに赴ける。

その日のうちに、夏希はルルトへ向かう川船に乗り込んだ。同行するのは、アンヌツカ、外交部の書記二名、生馬が手配してくれた護衛が四名、それにエイラに頼んで貸してもらったコーカラットだけである。

極めて小所帯の外交団は、夜通しでノア川を下った。交通量の増大を受けて、平原と海岸諸国が共同出資して川の整備を進めていたから、危険な浅瀬や川面に突き出した岩などには標識が取り付けられていた。白い塗料を混ぜ込んだ樹脂を塗った木製の杭を立てたり、直接塗ったりしたものだ。夜目にも目立つので、経験ある船頭がいれば夜間でもさほどの危険はない。

ルルトに到着した夏希は、そこで待機した。駿のお膳立てが整うまでは、ラドームに向かうわけにはいかない。時間のあるうちに動きまわり、海岸諸国の思惑を調べておく。憲章条約事務局外交部外交委員の肩書きだから、大臣クラスならばアポ無しで訪れても話を聞いてもらえる。

「……強気ねえ、海岸諸国は」

アンヌツカを相手に昼食をしたためながら、夏希は愚痴った。

「戦争になるのでしょうか？」

「なるかもね。もし事態がこじれて、タナシス王国対海岸諸国の戦いになったら、平原と高原はノノア川憲章条約の瓦解を防ぐためにも海岸諸国の味方をしなきゃならなくなる。それがわかっているからこそ、海岸諸国が強気に出ているんだと思うけど」

「いっそのこと、平原もラドーム王国を承認してしまえばどうでしょう」

アンヌツカが、そう提案する。

「それも手だけどね。でもそうすると、第八の魔力の源対策がうやむやになってしまっわ。高原は、反発するでしょう。下手をすればタナシスと高原を同時に敵に回しかねない」

「では、タナシスと組んで海岸諸国を敵に回しましょうか」

今度は冗談だとわかる明らかに軽い口調で、アンヌツカが言う。

「泥沼の戦いになるでしょうね。やりたくはないわ」

「では、タナシスと海岸諸国が潰しあうのを高みの見物といきましょう」

「人間界縮退問題がなければ、本気でその手でもいい……と言いたるところだけど、タナシスが海岸諸国を占領しちゃうのもまずいし、反対にタナシスが大打撃を受けて瓦解しちゃうのも歓迎できないわ。現状では、南も北も陸塊の政治的安定が平原の利益だもの」

「難しいですね、外交は。戦場のほうがよほど単純でいいです。倒すべき敵がいるだけですから」

にこにこ微笑みながら、アンヌツカが言う。

「そうね。ゴールがはっきりと見えていれば、歩むべき方向もはっきりするからね。今は足元しか見えない状態で、とりあえず歩いているようなものだわ。下手をすると、ゴールから遠ざかっているかもしれないのに」

憤然とした口調で言った夏希は、いらだちを米とともに口に押し

込んだ。

タナシス王国王宮の警備は、三重構造となっている。

外郭を警備するのは、王都に駐屯する正規軍、リスオン市警備団と、公安の仕事である。内部の警備は、王宮護衛隊に任されている。約百名からなる精鋭部隊で、奴隷上がりの男性が大半だ。さらに中核部は、主に貴族階級の青年で構成されている近衛隊によって警備されている。王族の寝所を含む主要部に武装して入れるのは、王族と大臣、そして近衛隊士だけである。ここでは正規の役人や護衛官でも、ナイフ一本持ち込んだだけで死刑となる。いや、もっと正確に言うならば、捕縛される前に問答無用で近衛隊士に斬り殺されてしまう。

執務に飽いたリュスメースは、その嚴重に護られた王宮中核部を出た。庭を目指して、通路を歩く。中核部にも中庭があるが、それほど広くないので歩きまわるには物足りないのだ。

「なにかお役に立てますでしょうか、殿下」

護衛官控え室の前で立哨していたすらりと背の高い壮年の護衛隊の士官が、控えめに声を掛けてくる。

「東の庭で散策をしたいのです」

「では、人払いをしまししょう」

にこりと微笑んだ士官が、一礼すると小走りに去ってゆく。

「ありがとう、ズイラーヌ」

リュスメースは、その背中に微笑んで声を掛けた。彼女が物心ついたところから、護衛隊に配属されている古参の護衛官である。最初は平の護衛官であり、その出自も決して良くはなかったと聞くが、真面目な勤務ぶりと剣の腕前からじわじわと出世し、今では十名ほどの部下を率いるようになった苦勞人である。雰囲気や顔立ちが、なんとなくオストノフ国王を思わせるせいか、リュスメースは彼のことを結構気に入っていた。

東の庭は、樹木が多いタイプの庭園である。ラドームや南の陸塊の樹木も植えられており、それらは寒い時期には丁寧に覆いを掛けられて大切に育てられている。

リュスメースはその中へと足を踏み入れた。木漏れ日の下を歩きながら、ラドーム問題に思いを馳せる。

姉の……シエラエズのおかげで、憲章条約はタナシス王国の味方についてくれたようだ。今後、タナシス本土の他の反タナシス勢力を調子付かせないためにも、より一層憲章条約諸国との友好を深め、タナシス王国との親密さを演出し、他者に見せつけねばならない。

「……お父様に動いていただければ」

タナシス王国の国家元首自らのマリ・八訪問と、ノノア川憲章条約総会での演説。これに勝る宣伝はあるまい。

しかし、今は駄目だ。オストノフ国王が国を空ければ、好機と見た本土の反タナシス勢力が蜂起しかねない。エミスト王女はきわめて優秀だが、いまだオストノフほどの権威は持ちあわせていないのだ。

「情勢が落ち着くまで、連中がおとなしくしてくれればいいのだけれど」

リュスメースはため息をひとつ吐くと、足を速めた。体を動かして気分転換をはかり、溜まっている仕事を片付けねばならない。

91 シェラエズの雄弁（後書き）

第九十一話をお届けします。

## 92 加盟宣言

駿からのゴーサインが届いたのは、夏希がルルト市に入った三日後であった。

あらかじめ借り上げていた船に乗り込んだ夏希は、すぐに出港を指示した。時間は今のところ、敵と言える。事態の解決が遅れれば遅れるほど、状況は悪化する。

グルージオン市に到着すると、夏希はさっそく出迎えに来てくれた駿を船に呼び寄せ、密談に入った。

「カミュエンナ・パパは憲章条約の仲介に乗り気だよ。むろん、譲歩する気はさらさらないと思うけどね」

再会の挨拶もそこそこに、駿がそう報告する。

「カミュエンナ・パパはどんな人なの？」

「策謀家タイプだと思ってたが、そんなことはなかったよ。むしろ、感情がすぐ顔に出てしまうタイプだ。性格的には穏やかで、流血を好まないようだ。今回の武装蜂起も、極力暴力を行使しない形で行ったしね。タナシスとの直接対決をせずとも、海岸諸国の支持があれば完全独立を成し遂げることができる、と踏んで王国再建を決意したらしい」

「じゃ、こうして憲章条約が和平仲介に乗り出すのも、計算のうちだったわけ？」

「おそらくそうだろうね」

駿が、ちよつと苦い表情をする。自他共に認める智謀の人としては、実質的に嵌められたことが悔しいのだろう。

「で、現実的な落とし所は、どのあたりにあると思う？」

「カミュエンナ・パパとしては、完全独立を諦めたとしても、武装蜂起に対する免責ないし不問、外交権の獲得、タナシス王国と憲章条約による安全保障は譲れないだろうね。この条件をタナシスに飲ませるには、海岸諸国の損害補償放棄、内政干渉に対する謝罪程度

じやすまないだろう。なにかもつと、タナシスが潰された面子を回復できるような事柄を与えてやれないと」

「まあ、国土の一部が勝手に独立宣言して、一部の外国がそれをさつさと認めちゃう、つてのは、国家としては面目丸潰れだものねえ。日本に例えれば、沖縄が独立しちゃうようなもんかな？」

「で、いきなり北京が国家承認してしまうのか。洒落にならないな、それは」

駿が、にやにやと笑う。

「いずれにしても、軍事力を行使して武装組織を叩き潰す、と同じようなカタルシスを得ないと、タナシスは納得しないだろう。他の公国や自治州への手前もあるしね」

「ラドーム王国へようこそ。歓迎いたしますぞ、外交委員夏希殿」  
カミュエンナ・パパ……シャハミは、ハンサムな男であった。年齢は四十代半ばくらいか。あまり上背はないが、がっちりとした体躯だ。肌の色は褐色のカミュエンナよりも若干薄めで、顔立ちもあまり似ていない。

「失礼ながら、殿下。ノノア川憲章条約総会は、ラドームに先ごろ出現し、殿下が率いておられる政治組織を国家として認めておりません。この場では、『ラドーム王国』という政治的に曖昧な呼称を用いることを、お控えくださいますようお願い申し上げます」

慇懃に、夏希は釘を刺した。こちらの立場はあくまで中立である。ここはうまく立ち回らないと、後々面倒なことになりかねない。

「そうでしたな。言い換えましょう。ラドーム島によるこそ。歓迎いたします」

シャハミが、苦笑交じりに言い直す。

「すでに御存知の通り、わたしはシェラエズ王女を通じ、タナシス王国国王オストノフ陛下より、正式に当組織との和平交渉を任されております」

「もちろん承知していますよ。では、さっそく本題に入りましょうか……」

「だめだわ、こりゃ」

ラドーム側から与えられた宿舎で夕食を摂りながら、夏希はぼやいた。

シャハミとの会談は夕方まで続いたが、成果らしいものは皆無だった。ラドーム王国を、完全な独立国とすることに、シャハミが固執したせいである。

これはタナシス側としては、絶対に譲れない条件だろう。ラドームが名目上でもいいからタナシス王国の版図に留まってくれれば、他の部分は大幅譲歩したとしても、タナシスの面子はある程度守られる。しかし、完全独立となれば、タナシスの面子は丸潰れだし、他の公国や自治州への影響も多大だろう。

「……ラドーム分割って手は、どうかな。いや、もちろん冗談だが」  
駿が、笑う。

「キプロス島みたいになるの？」

「タナシス王国に属する北ラドーム自治州と、海岸諸国に支援されて存続する南ラドーム王国。……なんか、爆弾テロとか起きそうだね」

「とにかく、完全な独立化だけは諦めてくれないと。どうやって説得しようか？」

「僕の見たところ、カミュエンナ・パパは民を慈しむ指導者だと思う。完全独立によって、大衆が苦しむと説けば、なんとかなるんじゃないかな。それと、彼の最大の弱点に、僕は気づいたよ」

「弱点？ どこよ、それ」

「カミュエンナさ。彼は娘のことを溺愛している。このままではカミュエンナに害が及ぶ、とか脅かせば、心を動かされると思う。カミュエンナには、悪いけどね」

駿のアドバイスを受けながら、夏希はシャハミに対する説得工作を続けた。しかしながら、シャハミの姿勢は強硬であった。カミュエンナ王女にも会ってみたが、シャハミは彼女のことを守ろうとしたいらしく、娘を政治的な事柄に全くタッチさせていないという。カミュエンナは穏健派であり、ラドーム人によるラドーム島の自治を望んではいたが、今回の独立派の動き自体を支持しているわけではない、と断言した。

周辺の事態推移も、強硬姿勢を貫くシャハミに有利に働いていた。タナシス王国は、依然ラドーム武力奪還の姿勢を崩してはいなかったものの、予算不足からか兵力の集中や民間船舶の借り上げを行っていないかった。海岸諸国は、憲章条約総会における高原諸族の非難を躲しながら、『ラドーム王国』に対する外交関係を樹立させ、さらに民間商人に交易権を付与するなどのいわば『既成事実作り』を開始していた。

夏希と駿の努力にもかかわらず、ラドーム問題はさらにこじれ始めていた。

だが、この厄介なラドーム問題がかすむほどの大事件が、発生する。

その報せがもたらされたのは、朝食時だった。

あまりの驚きに、夏希は文字通りテーブルに突っ伏した。食べていた朝粥の浅鉢に、顔面がめり込む。金属製のスプーンが飛び、ちやりんという音を立てて床に転がった。

「大丈夫ですか、夏希様」

助け起こしてくれたアンヌツカが、急いで手拭いで顔を拭いてくれる。

「その話、本当なんでしょうね？」

夏希は、幼児のようにおとなしくアンヌツカに顔を拭かれながら、  
報せを持ってきた部下の一人に語気鋭く問うた。

「嘘とは思えません。市内はその噂で持ちきりですし、シャハミ元  
国王派の役人も、正式に広報していましたから」

「どう思う、駿？」

夏希は、隣のテーブルで箸を握ったまま硬直している仲間問い  
かけた。

「……これは、驚きだね。ラドーム問題は、一時的に棚上げせざる  
を得ないだろう。この事態に対する、タナシス王国のリアクション  
がどうなるか見極めないと……。いや、これはまいったな……」

さしもの駿も、この展開は読めなかったのだろう。言葉にいつも  
の明解さが無い。

「ともかく、マリ・ハへ戻ったほうがいいわね。シュズラ、あなた  
は港へ行って船に出港準備をさせて。わたしは、着替えたらすぐに  
カミュエンナ・パパに会って交渉中断を申し出るわ。駿、出発準備  
は任せるわよ。アンヌツカ、駿を手伝ってあげて」

なんとか驚きから立ち直った夏希は、矢継ぎ早に指示を出した。

食堂を出た夏希は、急いで自室に戻ると着替えを済ませた。護衛  
二人を引き連れ、シャハミ派本部……元の公王宮である……に向か  
う支度をしているところで、ふわふわと漂ってきたコーカラットと  
出くわす。

「お早うございますう。なんだか皆さん慌てていらっしやるよう  
ですが、なにかあったのでしょうか」

相変わらず焦りや興奮とは無縁な口調で、コーカラットが尋ねて  
くる。

「タナシス本土から驚きの報せがもたらされたのよ。西部地域のカ  
レイトン自治州とクーグルト公国が、同時にタナシス王国からの独  
立宣言を行って、武装蜂起したの。すでに、内戦状態に突入したそ  
うよ」

「それは、大変なのですう」

さしものコーカラットも多少は慌てたのだろう。口調は相変わらずのんびりしたものだったが、触手を激しく振り回して反応する。

シャハミ元国王は、夏希の申し出た交渉仲介中断の申し入れを、快く承諾してくれた。

「殿下はこのような事態を想定しておられたのですか？」

ややきつい口調で、夏希は問いかけた。

「タナシス王国の強権支配に対し、わが島以外の公国や自治州でも反発が高まっていたことは、夏希殿もご存知でしょう。ラドーム問題をきっかけにして、それが吹き出しただけでしょうか？」

シャハミが、質問をはぐらかす。

「すでに、カレイトンとクーグルトでは、かなりの規模の戦闘が生起し、一般市民にも被害が出ているようです。このことについて、どうお考えですか？」

「その質問に答えることは、タナシス王国に対する内政干渉になりかねませんな」

苦い表情で、シャハミが応じる。

ルルトに戻った夏希と駿を出迎えてくれたのは、なんと凜と生馬と拓海であった。

「三人揃って、どうしたの？」

「残念な報せが、オープア経由で届いたんだ。正確に言えば、カレイトンとクーグルトの外交官が来て、伝えたんだがな」

いまひとつ覇気のない口調で、拓海が告げる。

「外交官か。やるのが早いね。で、その内容は？」

やや警戒気味に、駿が訊く。

「自称カレイトン王国と、同じく自称クーグルト王国が、ノノア川憲章条約に加盟したと正式に表明したんだ」

「……な、なんでまた。そんな勝手な表明、意味無いでしょ」

夏希は半ば叫ぶように言った。

「やられた。国家が増えることを想定していなかったから、条文に加盟や脱退、除名に関する項目を作ってなかったんだよ」

駿が、頭を抱える。

「外交官が持参した、両国の国王連名の加盟宣言書からの抜粋よ」  
紙片を取り出した凜が、それを読み上げ始める。

「カレイトン王国人民と、クーグルト王国人民は、ノノア川憲章条約の民族自決主義と国家間の平等主義に共鳴し、独自の文化、独自の歴史を持つ民族国家として独立を宣言し、同時にノノア川憲章条約への加盟を行った。現在両国はタナシス王国と戦争状態にあり、憲章条約諸国家の物心両面での支援を求めている……」

「勝手なことを……」

夏希はうめいた。

「さあどうする、駿。この両国を受け入れるか、見捨てるか」

生馬が、迫る。

「基本的には見捨てるべきだろうが、情報が少なすぎるよ。とりあえず火の粉を被らないように、総会に両国の加入無効宣言を出させないと。それと、新たに加い、脱退、除名に関する条項も作らないと。急いで、マリ・八に戻る必要があるね」

「それは駿に任せちゃっていいだろう。俺たちは、しばらくルルトに留まって、西部地域情勢に関して情報を集めてみるよ。場合によっては、タナシスに行ってもいい」

拓海が、言う。

「そうだな。情報の収集は任せるよ。夏希はどうする？」

駿が、訊く。

「外交委員としては、マリ・八に戻っても役に立たないわね。部下に報告書だけ持たせるから、一緒に連れ帰ってくれる？」

「それくらいなら、お安い御用だ」

駿がうなずいた。

カレイトン自治州の人口は、約十三万。クーグルト公国の人口は、約九万。それぞれが保有する自治州軍および公国軍は、いずれも六個団三千名ずつ。動員可能な市民軍を考慮すれば、総兵力は最大で五万名近くに上るだろう。

両国の独立宣言に対し、タナシス王国は即座にこれを無効とする旨を表明し、正規軍による討伐をちらつかせて宣言の撤回を要求したが、カレイトン、クーグルト両国の同盟……通称『西部同盟』はこれを拒否し、代わりに完全なる独立の承認と対等な外交関係の樹立、そして相互不可侵を主眼とする平和条約の締結を求めてくる。

タナシス王国としては、早期に事態の解決を図りたかったが、西部同盟の兵力を考慮すればこちらも大規模な討伐軍を編成しなければ勝利はおぼつかないと思われた。そしてもちろん、それには莫大な予算を要する。加えて、下手に東部から兵力を引き抜けば、メリクラ自治州やペクトール公国などの東部諸国が蜂起する可能性もある。

タナシス王国は窮地に立たされた。

駿の手配によって、ノノア川憲章条約総会が、『クーグルト公国およびカレイトン自治州を現状で実効支配している政治組織によるノノア川憲章条約加盟宣言』が無効であることを、全会一致で宣言する。ただしその理由は、憲章条約自体が、明記されていないものの南の陸塊諸国を加盟国とすることを前提にして作成されたものであり、北の陸塊に存在する国家並びにそれに準ずる政治組織をこれに加えることは、現状では認められない、というやや苦しい言い訳じみたものであった。

同時に、雑則を集めた第四章に加盟、脱退、除名の規則や手続きに関する条項が新たに付け加えられる。新規加盟には、当事者が国家として成立していること、加盟国すべてが国家承認を行っている

こと、総会で五分の四が加盟に賛成すること、というかなり厳しめの条件が必要となった。ただし、憲章条約はすべての国家に対し加盟の門戸を開く、という一文が付け加えられたので、事実上北の陸塊国家に対しても、加盟を受け入れる態勢となった。

脱退に関しては、脱退を総会で表明すれば自動的にそれを承認する、という規則となった。ただし、脱退が政治的な脅しに使えないように、再加盟には新規加盟と同様の手続きが必要とされる。除名は、憲章条約の条項に明白に違反した加盟国に対し、総会で五分の四の賛成が得られた場合に限り、行えることと決定された。

92 加盟宣言（後書き）

第九十二話をお届けします。

### 93 西部同盟と東部同盟

「とりあえず、今までに集まった情報を整理して報告する。だが、その前に地理のおさらいだ」

拓海が、テーブルの上に手書きの地図を広げる。夏希は、自分の飲んでいたお茶のカップを慌てて片付けた。

「見ての通り、北の陸塊……タナシス本土の地図だ。言うまでもなく、ここには公国が三、自治州も三ある。今回武装蜂起したカレイトン自治州と、クーグルト公国は、西部地域でも西側にある。カレイトンが海岸沿い、クーグルトがその北だな。両国の東にあるタラガン州およびディレイリベート州を経由すれば、王都リスオンを窺える位置だ」

指でいちいち指し示しながら、拓海が説明する。

「東部地域でタナシスに反旗を翻しそうなのは、東部地域の海岸国、ペクトール公国と、その北にある内陸のメリクラ自治州だ。穏健派と目されるバラ自治州とスルメ公国は、中部地域に属してはいるが、それぞれペクトール、メリクラの西隣にある。この二公国二自治州の人口を合わせると、実に五十四万に達する。もし仮に『東部同盟』など結ばれて蜂起されれば、タナシス王国は典型的な二正面作戦を強いられることになる」

「東部の連中は、仲いいのか？」

生馬が、訊く。

「ペクトールとメリクラは人種的にも似ているし、関係は良好だ。バラ自治州はお隣りのペクトール公国と仲がいい。面白いのはスルメ公国だ」

「名前も面白いけどね」

凜が、気のない様子で突っ込む。

「公王がカートウールという老人なんだが、妙に市民に人気が高いんだ。自国だけでなく、周辺地域でもね。もし彼が音頭を取ったら、

「二公国二自治州が一気に政治的に結びつく可能性もある」

「うーん。どうもスケールのイメージが湧かないのよね。タナシス王国って、南の陸塊より大きいんだっけ？」

地図に目を落とし、夏希はつぶやくように言った。

「あー、駿の推定では、南の陸塊も北の陸塊も同じくらいの大さらしい。二十万平方キロメートル程度だな。ただし、南の陸塊で人間が住んでいるのはノア川流域と南部の高原地帯、それに西群島と東群島、両群島のあいだの海岸線だけだ。他は未開拓地。たぶん密林に覆われているだけなんだろうな。タナシス王国の領域はそれよりも広いが、北の陸塊もカレイトン自治州の西とペクトール公国の東は未開拓地になっている。聞いた話では、山岳が海に迫っていて平地に乏しく、大きな河川もないので開拓の旨みがないそうだ」

「北も南も陸塊は二十万平方キロメートルか。本州より、ひとまわり小さいくらいか」

生馬が、言う。

「ちなみに、駿の推定では人間界は直径千六百キロメートルの円形となっている。総面積約二百一十萬平方キロメートルだな」

「ほとんど海じゃない」

意外そうな表情で、凜が言う。

「そうだな。でもまあ、今必要なのは北の陸塊の地理に関する知識だ。えー、タナシス王国で最も西にあるカレイトン自治州の西の端から、東にあるペクトール公国の東端まで、おおよそ六百キロメートルほどだと思われる。これを、強引に日本に当てはめてみよう。東京・大阪間が、おおよそ五百キロメートルだから、本州をちよつと東に傾けて……」

拓海が、北の陸塊の地図に本州の海岸線を描き入れはじめた。太平洋岸を北の陸塊の海岸線に沿わせるように、すらすらと描いてゆく。

「多少の間違いは勘弁してくれ。だいたい、こんな感じだな」

夏希は地図を見つめた。東部地域沿岸のペクトール公国が千葉と

東京、その北の茨城にメリクラ自治州、福島あたりがデイディナラ辺境州。中部地域のバラ自治州が神奈川と静岡東部、山梨あたりにスルメ公国。アノルチャ州が伊勢湾と愛知、静岡西部。リスオン州が岐阜南部と滋賀。デイディリア州が飛騨あたり。デイディサク州が長野北部。ストラウド辺境州が新潟と佐渡ケ島。デイディウニ州が石川から富山。メジャレーニエ辺境州が能登半島の西の日本海上西部地域のタラガン州が三重と奈良、カレイトン自治州が和歌山と紀伊水道。クーグルト公国は兵庫南部と淡路島あたり。デイディリベート州が京都と若狭。エルフルール辺境州が、兵庫北部と鳥取東部、そしてその沖合い、といったところか。

「ふん。そうすると、王都リスオンは関ヶ原あたりか」

「もうちよい西だな。彦根あたりだろう」

生馬の見解を、拓海が修正する。

「広いわねえ。ねえ、拓海。もしタナシス本土の公国と自治州が同盟を組んで武装蜂起したら、タナシス王国は持つの？」

夏希はそう尋ねた。

「持つか持たないか、と問われれば、持つと答えるしかないな。人口だけで見れば、ラドームを含めても反タナシス側は八十万ちょっと。タナシス側は、辺境州の住民や奴隷を含めれば百四十万以上。経済力も同程度の比率だろう。反タナシス勢力を一気に叩き潰せるだけの力はないが、反タナシス側も攻勢に出てタナシス野戦軍を叩くだけの度胸はないだろう。下手をすれば、虎の子の正規軍部隊を消耗させて、分断の上各個撃破のチャンスに与えてしまっただけだからな」

「手詰まりのまま、政治的解決を図るしかなくなるわけだな」

生馬が、うなづく。

「ま、国を二分しての内戦なんてそんなもんだ。外国勢力の軍事介入でもない限り、だからだと続くのが普通だからな」

「そして人口が減り、経済が混乱し、社会が疲弊し、モラルが低下する。アフリカの内戦国家のように、負のスパイラルに陥るのよね」

凜が、辛辣に言い添える。

「タナシス本土が疲弊するのはごめんだわ。第八の魔力の源も見つかっていないのに」

夏希は口を尖らせ気味にして、そう指摘した。

「もちろんだ。騒乱は早期に終結させる必要があるし、現状ではタナシス王国に協力するしかあるまい。もちろん、反タナシス派を敵に回さない程度にはあるが」

「具体的に言くと、ラドームと同じように、和平の仲介か？」

生馬が、訊く。拓海がうなずいた。

「まだ正式には、タナシスから話は持ち込まれていないが、手遅れになる前に動いたほうがいいと思う。夏希、駿に手紙を書いてくれるか？ 総会で、タナシス王国を外交的に支援するという名目で、和平仲介団を派遣できるように決議させるんだ。反タナシス派の連中も、憲章条約諸国を敵に回してまで軍事力で抵抗するよりも、適当なところで妥協し矛を収めることを選択してくれるだろう」

「そうね。急いで書くわ」

夏希は確約した。

タナシス本土中部地域海岸部の東側……アノルチャ州の東隣にあるバラ自治州最大の港町、サマトス。先ほどの拓海の地図で言えば、西伊豆あたりの位置になるうか。

海岸沿いの通りから路地を一本隔てた裏通り……安っぽい飲み屋や船員相手の小商い、さらには売春宿などが立ち並ぶ一郭に、古びた宿屋があった。入り口は狭く、看板なども出ていないので、一見すると単なる民家のようにも見える。

その奥まった一室で、中年の男女が密会を果たしていた。もちろん、不倫カップルなどではない。

男の名はイムサーン。カレイトン自治州出身者と、タナシス人の混血なので、顔立ちはきわめて東洋的だが肌は濃い褐色をしている。

男性としては細身で華奢だ。面長の顔に目尻の下がった悲しげな目付きをしており、やや陰気臭い空気をまとわりつかせている。

相対する女性の名はマリンス。ペクトール公国の出身で、褐色の長い髪と白い肌の持ち主だ。顔の彫りはやや浅く、鼻が大きい。異世界で言えば、スラブ人に近い風貌である。こちらはイムサーンと对象的に、さながら大輪の花のように、常に愛嬌を振りまいているかのような雰囲気だ。

一見平凡な二人ではあったが……実際、表向きの肩書きは、雇われ水夫と専業主婦である……、実は両人とも反タナシス勢力の外交部門に属する幹部だった。

すでに十数年前から、タナシス王国からの独立を目指す地下組織……カレイトン自治州とクーグルト公国の『西部同盟』と、ペクトール公国とメリクラ自治州の『東部同盟』は、水面下で緊密に連携を取っていた。イムサーンは、西部同盟の外交代表。マリンスは、東部同盟の外交代表である。二人は定期的にアノルチャ州内やバラ自治州内で会合を持ち、情報交換や他の幹部の会合のお膳立て、あるいは援助資金の受け渡しなどを長年続けていた。

今回の西部同盟の蜂起も、実は東部同盟合意のもとに行われたものであった。タナシス正規軍主力が西部地域に集結したところを見計らい、東部同盟も蜂起する。スルメ公国とバラ自治州に圧力を掛けてこれも蜂起させ、アノルチャ川東岸を完全制圧し、タナシス王国に対し完全なる独立を認めさせる。これが、両同盟が描いていたシナリオであった。

だが、タナシス王国は一向に兵力の集中を行おうとしていない。期待していたノア川憲章条約諸国の援助も、まったく得られていない。それどころか、噂では憲章条約はタナシス王国に同情的であるらしい。

両同盟の計画は危殆に瀕していた。初期段階で一気にタナシス王国に圧力を掛け、政治的優勢を得られねば、地力で劣る両同盟はいずれ押しつぶされてしまうだろう。スルメ公国、バラ自治州の支持

を得るためにも、早急に成果を挙げる必要がある。

「で、提案とは？」

イムサーンが、ぼそりと問う。

「リスオンの王宮に、こちらの手の者が入り込んでいます。彼をうまく使えば、この苦境から抜け出せるかもしれませんが」

持ち前の愛嬌をやや消して、しごく真面目な表情になったマリンススが、低い声で言った。

「王宮には、西部同盟も間諜を送り込んであるが……貴重な情報源をどう使う？」

「彼はすでに十年以上にわたって王宮にいます。信用も十分得てある。極端な話、オストノフ国王暗殺以外なら、やろうと思えばなんでも可能、という立場です」

「使い捨てるつもりか？」

「このままでは、西部同盟は瓦解してしまうでしょう。思い切った手を打つべきです」

「同感だ。しかし、たった一人に何ができる？」

「同調者とまでは行きませんが、何人か手足のように使える部下は確保してあるそうです。そちらの間諜が協力してくれるのならば、かなりのことはできるでしょう」

「王宮でできることといえば、暗殺、誘拐、放火くらいしかないだろう。なにか策はあるのか？」

眉根を寄せて、イムサーンが問う。

「タナシス王国とノア川憲章条約の関係を悪化させ、後者をこちらの味方に付けることは可能でしょう。まだ噂の段階ですが、憲章条約総会が新たに外交団をリスオンに送りこむ計画があるそうです。これを、上手く利用すれば……」

マリンススが、愛嬌たつぷりの笑顔を見せた。

「シエラエズ王女殿下から書簡がまいりました」

一礼したりユスメースは、蠟で封緘された書状を差し出した。

「うむ、ご苦労」

うなずいたオストノフ国王が、目線で書記を呼ぶ。書状をリュスメースから恭しく受け取った書記が、丁寧に封蠟を剥がした。書状の文面に視線を向けられないように留意しながら、開いてオストノフに差し出す。受け取ったオストノフが、すばやく内容に目を通した。その表情が、みるみる明るくなる。

「朗報ですか」

「朗報だ。憲章条約総会が、西部の叛徒どもとわが方の和平仲介に乗り出したいと正式に申し出てくれた。これを受け入れれば、南の陸塊が叛徒どもに力を貸す可能性は皆無となるだろう」

「左様ですね。ですが、事後に見返りを求めてくるでしょう」

「憲章条約が求めてくるのは、第八の魔力の源の発見と、さらなる友好くらいなものだ。あとは、海岸諸国との補償交渉の早期処理と、ラドーム問題。双方とも、大幅に譲歩してしまえばよい。条約を結んで、タナシス本土で二度と武装蜂起が起きないように憲章条約諸国が協力してくれる状況を作れるのならば、安い代価だ」

「おっしゃる通りです。では、早急に返書を」

「それには及ばん。すでに、マリ・八にいるシエラエズが自分の権限で総会の申し出を受け入れた。わたしはこれを閣議に諮って事後承諾する。この手紙が書かれた時点は、外交団編成のあとだ。数日後には、アノルチャに船が着くだろう」

言葉を切ったオストノフが、リュスメースを見据えた。

「外交団の団長は例の竹竿の君だそうだ。リュスメース、お前に対応は任せる。主眼は、我が国と憲章条約諸国の親密さを喧伝することだ。いいな。彼らがタナシスを支持してくれる限り、叛徒どもに勝ち目はないのだ」

「十二分に承知しております。して、叛徒との交渉の落とし所は？」

「多少自治権を拡大してやってもかまわん。カレイトンを公国に格上げし、旧王族を公王に据えるのもかまわん。首謀者の処罰もなし。

ただし、独立だけは許さん」

「今回の交渉、まとまらなければ憲章条約の顔に泥を塗ることになりかねないと愚考致しますが」

リュスメースは、慎重に釘を刺した。オストノフが、破顔する。

「だからこそ、お前に対応を任せただ。幸い、我が国と憲章条約の利害は一致している。彼らが叛徒に提示する条件を、なるべく我が国の利益に沿うように誘導するのだ。さすれば、仲介が不調に終わったとしても、非は叛徒どもにあることになる。憲章条約の面子は潰れず、我が国との関係は深まる。運良く叛徒どもが条件を受け入れて停戦となれば、すべてが丸く収まる。期待しているぞ、リュスメース」

憲章条約外交団を乗せたオープア船が、タナシス本土のアノルチャ港に滑り込んでゆく。

今回の訪問は、きわめて少人数で済んだラドーム行きと違って、実に大人数であった。団長は相変わらず夏希だが、総会から委任されたという形で、高原、平原、海岸の代表も含まれていたのだ。いずれも、かつてラドーム島でタナシス王国との和平交渉に臨み、シエラエズ王女と舌鋒激しくやりあったメンバーであった。すなわち、ユーロアン氏族の氏族長アフムツ、ススロン王国の王子ビアスコ、ルルト王国の王子ハルントリーである。

三人の代表の随員。生馬が出し惜しみせずにつけてくれた護衛。夏希の部下。そしてもちろんアンヌツカと、エイラから借りっぱなしのコーカラット、さらに情報収集の為と称して同行を申し出た拓海とリダを含め、実に百人近い外交団であった。

一行は例によってアノルチャで川船に乗り換えると、王都リスオンへと向かった。夏希はタナシス側が用意してくれた服の上から、さらに上着を羽織った。前回訪問した時よりも、気温は低くなっている。たぶん、冬が近いのだろう。

無事にリスオンに到着した一行は、宿舎に案内された。一休みしてから、主要な者だけが王宮に向かうことになる。

「夏希。アンヌツカだけじゃ不安だ。コーちゃん連れていけ」

王宮訪問向けにドレスに着替えた夏希に対し、拓海がそうアドバイスする。

「コーちゃんまで？ 嫌な予感でもするの？ タナシス側の警備は十分すぎるほどだと思うけど」

河港から宿舎までの移動でも、五十人以上の兵士が付き添ってくれたし、今も宿舎の周囲には多数の兵士が張り付いている。

「兵士の数が多いのが気に入らん。前回訪問時より三倍はいるだろう。こちらの護衛もいるのだから、移動に五十人も付ける必然性はないはずだ。市内で治安が悪化しているようにも見えないから、おそらくは何らかのトラブルを防止するための措置だろう」

「何らかのトラブル？」

「憲章条約の和平仲介を歓迎していない勢力の妨害を危惧しているのかもしれない」

「誰がそんなことを……」

「どの世界にもタカ派はいるさ。戦争で利益を得る者もいる。東部地域のペクトール公国やメリクラ自治州あたりも、西部同盟が大人しく和平のテーブルに着くのを嫌うだろうな。ちょこちょこっとタナシス兵に話を聞いてみたが、かなり神経質になっているようだ。」

王宮内部は安全だと思いが、街中では気を付けたほうがいい」

「わかったわ。おすすめ通りにコーちゃんに付き合ってもらおう。でも、宿舎の方は大丈夫なの？」

夏希にそう問われ、拓海が苦笑して肩をすくめる。

「生馬が腕利きを付けてくれたし、随員を殺傷しても和平仲介は潰れないよ。危ないのはあんたや代表たちだ」

「それもそうね。ご忠告ありがとう。気をつけるわ」

93 西部同盟と東部同盟（後書き）

第九十三話をお届けします。

## 94 外交団、西へ

「よくぞいらして下さった。夏希殿、ハルントリー殿下、ピアスコ殿下、アフムツ殿。友人として、歓迎いたします」

謁見の間に四人を迎えて、にこやかにオストノフ国王が言う。ちなみに、謁見の間であるにも関わらず、オストノフは夏希らを立たたままで出迎えていた。これは、相手に王子が含まれているとはいえ、大国の国王としては破格の対応と言えるだろう。

「お久しぶりです、陛下」

外交団長として真っ先に挨拶を返した夏希は、丁寧に他の三人を紹介した。

「長旅でお疲れのところ申し訳ないが、時間は我々の共通の敵であると認識している。さつそくだが、今回の和平交渉を担当する者を紹介しよう。わたしの娘、リュスメースだ」

オストノフの言葉に従って、やや小柄な女性が進み出てくる。夏希には見覚えのある姿だった。前回のリスオン訪問の際、歓迎の宴で見かけた地味な王女である。顔立ちは決して悪くはないのだが、始終むすつとした機嫌の悪そうな表情をしており、姉たちに似ず愛嬌がない王女だな、と思ったことを、夏希は鮮明に覚えていた。

「リュスメースです。わがタナシス王国の国内問題のために、友邦たるノア川憲章条約の皆さんが遠路はるばるおいで下さったこと、まことに感謝に堪えません。平和のため、そして憲章条約諸国と我が国との友情のため、ともに働けることを嬉しく思います」

とことごと前に出たリュスメース王女が、ぺこりと頭を下げる。夏希は深々と礼を返した。

タナシス王宮の一室が、和平仲介外交団とリュスメース王女の協議の場として提供される。

さして広くもない部屋だったが、見た目はなかなか豪勢だった。

中央には、余裕で十人は掛けられる分厚い天板のテーブル。壁の羽目板は丁寧に磨き上げられており、顔を近づければ化粧直しに使えるほどだ。

「……って、最近化粧してないなあ」

夏希は頬を撫でた。この世界にある化粧品は鉱物質の染料を使った口紅程度で、一般の人々はみなすつぴんである。夏希はまだ十代だし、平原は常に湿度が高いので肌が荒れたりすることはないが、北の陸塊は乾燥気味なので肌もややかさつき気味だ。

「少し冷えますな。火を入れてもらいましょうか」

ピアスコ王子が両手をこすり合わせながら、壁に造り付けになっている石造りの暖炉を見やる。すでに何本か薪が置かれてあり、火さえ点ければいい状態のようだ。

「いいですね。いかがでしょう、夏希殿」

ハルントリー王子が、夏希を見る。

「そうですね。お願いしましょうか」

夏希は同意した。内心、まったく寒いとは感じていなかったが、冬季には普通に氷点下の気温を体験している彼女と、生まれた時から三十度超の暑さに慣れ親しんできた彼らとでは、寒さに対する耐性が違うはずである。

ピアスコ王子に指示されて部屋を出ていった書記が、すぐに王宮の庶務係を連れて戻ってきた。持参した金属製の筒の中から焚き付けと火種を取り出した庶務係の手によって、すぐに暖炉から小さな炎が上がる。細めの薪にしっかりと火が移ってから、庶務係がその上に太めの薪を載せた。長さ一メートルほどの鉄製らしい火かき棒を手にし、燃え上がった薪の位置を微調整する。

「お待たせいたしました、みなさん」

リュスメースが、自分の書記を連れて入ってくる。その後から、お茶のセットを持った侍女二人が続いた。

「クーグルト公国とカレイトン自治州の独立を認めない、というタ

ナシスの意向には、我々も賛成いたします」

リュスメースが述べたタナシス王国側の和平条件を拝聴した夏希は、外交団を代表してそう明言した。

「いつその事、連合王国化するのはいかがでしょうか。すべての公国、自治州を王国に戻し、タナシス王国を盟主としてひとつの国としてまとまるのです」

ハルントリー王子が、そう提案する。

「失礼ながら、それは非現実的なご提案ですね、殿下」

やや皮肉めいた笑みを浮かべながら、リュスメースが答える。

「その中でひとつでも連合王国から離脱する国が現れれば、他の国々も雪崩を打って完全独立してしまうでしょう」

「殿下、雪崩とは何でしょうか？」

まだ若いビアスコ王子が、首をひねりつつ訊く。ハルントリー王子もアフムツ族長も、怪訝そうな表情だ。

夏希はぷつと吹き出した。おそらく、『雪崩を打つ』という言葉の回しは、ここの言葉も日本語も用法と意味合いが同じなのだろう。

雪が積もったところどころか降っているのを見たこともない南の陸塊の三人が、雪崩という単語を知らぬのも無理はない。

リュスメース王女との協議を終え、宿舎に戻った夏希は、夕食を摂りながら協議の内容を拓海に話して聞かせた。

「じゃ、西部同盟への提案条件は決定したんだな」

平べったい無発酵パンに、柔らかいチーズを塗りつけながら、拓海が訊く。

「うん。独立は認めず。タナシス王国の一部に留まるのであれば、自治権の拡大は可。今回の武装蜂起に関しては、首謀者のみ処罰。ただし、死刑は適用しない。公国軍と自治州軍へのお咎めはなし」

「鞭は最小限だが飴も少ないな。この条件で、西部同盟が納得するかな？」

「納得させるしかないわね。いろいろと余裕のないタナシス王国がこれ以上譲るとは思えないし」

忙しく箸を使いながら、夏希はそう答えた。

「で、いつあっちに向かうんだ？」

「明日の朝。すでに西部同盟側も和平仲介には原則的に合意してるから、受け入れには問題ないはずよ。陸路を西にデイイリベート州まで行って、そこからテマヨ川を下ってカレイトン自治州まで行くの。川沿いのムータールという小さな都市が会談場所に指定されているわ」

「向こうの代表者は？」

「西部同盟臨時代表、ササウ氏。クーグルトの貴族だそうよ。詳しい情報はリクスメースもつかないようだけど、お飾りでなければかなりの実力者でしょうね」

「言うまでもないが、コーちゃん連れていけよ。生馬の部下も、十分に。俺たちは、ここに籠ってる限り安全だからな」

深刻そうな表情で、拓海がそう言ってくるわ。

「ありがとう。気を付けて行ってくるわ」

王都リスオンからデイイリベート州の州都クオーンまでの陸路を旅するために、タナシス王国側が用意してくれたのは、一種の人力車であった。

かご型の車体に、座席がふたつ横に並んで取り付けられており、下部にはなかなか立派な金属製のスポーク付き車輪が四つついている。乗り心地を良くするためだろう、車輪のリム部分には、曲げ木がはめ込んであった。前部には、T字型の木製の棒がカブトムシの角のように突き出ており、二人の車夫が横棒を握って歩けるようになってる。

「なんか、昔の乳母車っぽいわね」

夏希は、タナシス側が付けてくれた護衛隊の隊長に促されるまま

に、人力車の座席に座った。提供されたのは二台だけだったので、その隣にはアフムツ氏族長が座る。もう一台には、ハルントリーとピアスコの二人の王子が、仲良く座った。他の者……代表随員、夏希の部下、自前の護衛、タナシス側が提供してくれた護衛、それにアンヌツカは、当然徒歩となる。コーカラットは、もちろんいつもの飛行形態だ。

人力車の乗り心地は、懸念したほど悪くはなかった。徒歩の者に合わせているために速度はゆっくりしていたし、座席も柔らかい詰め物をしてあるようで揺れは苦にならない。街道も幅広くはなかったが、よく整備されているようで凹凸も少なく、埃避けなのか砂や細かい石……砕石ではなく河原に転がっているような滑らかな小石……を薄く敷き詰めてある。……雨が降るとたちまち泥濘と化す平原の二線級街道とは、比べ物にならない。このあたり、さすが大国というところか。街道だけではなく、橋や堤防、河港などのインフラ整備も、かなりの高水準と言える。

一日目の行程を終え、街道沿いの小さな街で一泊した一行は、翌朝デイレイリベート州の州都クォーンへの陸路の旅を再開した。出立してほどなく、街道が急に下り勾配となった。三回ほどつづら折りの道を下ってゆくと、風が急に冷たさを失って暖かなものに変わる。高原地帯を抜け、テマヨ川が形作った西部地域の平野部に入ったのだ。夏希は厚い上着を脱ぐと、軽いものを羽織った。

一行は街道沿いでもう一度宿泊し、旅は三日目に入った。一度雨に降られたが、それ以外は大したトラブルもなく、夕方前にデイレイリベート州の州都クォーンに到着する。宿舎に案内された外交団は、振舞われた夕食を摂ると早々に寢床に引っ込んだ。

翌日、クォーン市の河港で船に分乗した外交団は、テマヨ川を下った。午後遅くになって、最終目的地であるムータール市にようやくたどり着く。

会談は、翌日から開始された。何らかの役所と思われる大きな建物の一室に案内された夏希らの前に、いかにも西部諸国人らしい黒

い肌の中年男性が現れる。

「西部同盟臨時代表、ササウです。暫定的にはありますが、クーグルト王国およびカレイトン王国の外交部門を統括担当しています。おいでを歓迎いたします、夏希殿、ハルントリー殿下、ピアスコ殿下、アフムツ殿」

「ササウ殿、当外交団は中立的立場を貫きたいと思っております。したがって、現在西部同盟を名乗っている組織との交渉は喜んで行わせていただきますが、その母体であるクーグルト公国とカレイトン自治州を王国と呼称することは、現状では中立的ではないと思われれます。よろしいでしょうか」

「ややうんざりとしながら……しかしそれを顔に表さずに、夏希は言った。」

「もつともな主張ですな。以後、留意します」

「ややひょうきんなしぐさで肩をすくめたササウが、にこりと微笑む。」

夏希は文書化した和平提案……リクスメースと合意したものをササウに手交した。一読したササウが、再びひょうきんなしぐさで肩をすくめる。

「かなりタナシスは譲歩したようですね。しかし、独立は認められないという。こちらとしては、宣言した独立をタナシスに認めさせること、が最低目標です。これは、受け入れられませんね」

「ノノア川憲章条約総会としては、今回の和平仲介に並々ならぬ意気込みで臨んでいます」

少しばかり脅しつけるような口調で、夏希は言った。

「もし仮に当外交団がなんら成果を挙げずに帰国することになれば、憲章条約諸国と北の陸塊との友情にひびが入りかねませんよ」

「なぜ、あなた方はタナシスに肩入れするのですか？」

口調を改めて、ササウが訊いてくる。

「それは……憲章条約諸国は平和を常に希求し、紛争や戦争は抑止

すべきだと考えているからです。タナシス王国とは平和裡に条約を結び、北の陸塊全域が同国の領土であることを認めています。現状では、タナシス王国は条約諸国の友邦なのです」

「つい先ごろ、あなた方はタナシス王国に侵略されたではないですか。特に、ハルントリー殿下。殿下の国は、占領されて市民が辛酸を嘗めさせられたはず。そのような非道な国の肩を、なぜ持つのですか？」

夏希の右隣に座るハルントリーに視線を当てて、ササウが問う。

「その当時、クーゲルトもカレイトンもタナシス王国の一部であり、侵略に加担したはずですがね。……いや、今のは失言ですな。今現在も、両地域はタナシス王国の一部です」

ハルントリー王子が、やや辛辣に言い返す。

「我々の独立は、憲章条約の精神にも合致するはずです。憲章条約諸国が手を組むべきなのは、タナシス王国ではなく、我々なのではないですか？ あなた方が味方に付いてくれれば、東部のメリクラ自治州とペクトール公国も独立するでしょう。積極的に働きかければ、中部のスルメ公国とバラ自治州もまず確実に独立を宣言します。タナシス王国の力を削いだうえに、ラドームを含めれば七カ国もの信頼できる友邦を得られるのですよ？」

熱心な口調で、ササウが説く。

「ササウ殿。わたしたちはつい先日、リスオンを発つたのです。タナシス側の担当者であるリュスメース王女とは長時間にわたって話し合いましたし、オストノフ陛下の意向も確認しました。もし憲章条約諸国があなた方の独立に手を貸したら、タナシスとの全面戦争に発展しかねません。たしかに、憲章条約は民族自決主義や国家間の平等主義を謳ってはいますが、それよりも大切なのは平和と市民の命です。今回の紛争、今までは人命の損失は最小限で済んでいると聞きます。これ以上、人命を損なわずに、平和的に事態の解決を図るべきではないでしょうか」

夏希も、熱のこもった口調で反論した。

「ササウ殿。西部同盟側の和平条件を、お聞かせ願えないだろうか」  
場が熱くなつたことを察したピアスコ王子が、ことさらに穏やかな調子で尋ねた。

「独立、です。タナシス王国は、クーゲルト王国とカレイトン王国を完全なる独立国家として承認する。その上で、相互不可侵の条約を結ぶ。両王国とも、平和を尊ぶ国家であり、タナシス王国への領土的野心は持ち合わせていません。公国および自治州時代にあつたことは、すべて水に流してタナシス王国と友好的関係を築くつもりです。可能であれば、ノノア川憲章条約に加盟したいですが、タナシスがそれを望まないのであれば諦めてもいい。国の安全が、憲章条約諸国によつて保証されるのであれば、軍を解散してもいい。武装蜂起を咎めたいのであれば、わたしを含めた指導者層を全員処刑しても構いません。独立と、その後の安全さえ得られれば、どのような犠牲でも払うつもりです」

ササウが、自信ありげな表情で、きつぱりと言い切る。

「タナシスは我々の独立を認めるつもりはないようだ。そして、憲章条約もそれに同調している。残念ながら、彼らは味方ではないと、結論せざるを得ない」

ため息混じりに、ササウは言った。

憲章条約外交団との協議は、二日目を終わっても全く進展がなかった。どちらも、絶対条件である『独立』について譲らなかつたためだ。いわゆる平行線という状況である。

「では、やはり東部同盟が提案した計画を実行するしかありませんね」

向い合つて座っている悲しげな目付きの中年男が、小さくうなずいた。東洋系の顔立ちに濃い褐色の肌。西部同盟の外交担当幹部、イムサーンである。

「具体的に、何をやる気なのだ、東部同盟は？」

「それは、ササウ殿がお知りになる必要はありません」

右手を立て、拒絶のしぐさをしつつ、イムサーンが答えた。

「実を申せばわたしも詳細は知りません。ただし、この計画を効果的に行うには、西部同盟と憲章条約が友好関係を結んだことを強く印象付ける必要があります」

「友好関係？ それは、難しい注文だな」

ササウが、皮肉げに微笑む。

「密約を結ぶのもよろしいでしょう。例えば、今回の紛争は憲章条約が提示した和平案をすべて呑む。それと同時に秘密裏に西部同盟はノノア川憲章条約に加盟し、将来的には憲章条約の支援を受けてタナシス王国から独立する、というのはどうでしょう」

「……夏希殿が受け入れるだろうか？」

「東部同盟の計画を成功させるには、我々と外交団の関係をきわめて親密にしたうえで、彼らをリスオンに送り返すしかありません。

明日の交渉で、大幅譲歩をお願いします」

相変わらず悲しげな目で、イムサーンが訴えた。

94 外交団、西へ（後書き）

第九十四話をお届けします。

## 95 劇的讓歩

「夏希殿には負けました。西部同盟、つまりいわゆるクーゲルト王国およびカレイトン王国は、独立宣言を撤回する用意があります」

三日目の交渉冒頭で、ササウがいきなり大幅讓歩の姿勢を見せる。「用意だけですか？」

ハルントリー王子が、わざとらしく気のない素振りで見訊く。

「用意だけです。ひとつだけ条件を呑んでいただければ、独立は諦めます。武装蜂起に対する咎めも甘んじて受けましょう」

「で、その条件とは？」

夏希は内心の喜色を押し隠して尋ねた。……外交の仕事をするようになってから、どうもポーカーフェイスが上達したような気がする。

「ノア川憲章条約を改定し、国家以外に自治権のある地域も加盟できるようにしていただきたい。具体的に言えば、クーゲルト公国とカレイトン自治州を、憲章条約に加えていただきたいのです」

「それは無理ですね」

夏希はあえて拒絶した。

「ノア川憲章条約は、独立国家による地域的国際機構です。自治権を持つ地域では、加盟国として主体的な行動を取ることが難しいでしょう。各加盟国が、責任ある立場で憲章条約に基づくさまざまな責務をこなさねばならないのです。そうでなければ、国際機構は成り立ちません」

「だからこそ、改定をお願いしているのです。正式な加盟国でなくとも、憲章条約に加わることができれば、タナシス王国との紛争抑止にもつながります。地域の安定と平和にも寄与するはずです。憲章条約の精神にも合致するでしょう」

「だいたい、そのような行為はタナシス王国への内政干渉にあたるでしょう。それら自治地域が、タナシス王国内にしか存在しない以

上、憲章条約の改定だけでも、露骨に内政干渉だと受け取られかねない」

ピアスコ王子が、指摘する。

「我々は、もつと憲章条約諸国と交流を深めたいのです。タナシス王国の版図に留まっても、自治権を拡大し、あなた方と貿易ができれば、市民は富みます。そちらの利益も大きいはずだ。この案、リスオンに持ち帰ってタナシス側と検討してはいただけぬだろうか」

「……タナシスが受け入れるとは思えません」

夏希は正直にそう言った。独立宣言を撤回させても、西部同盟がノア川憲章条約に加盟してしまったら、タナシス王国の面子は丸潰れだろう。

「では、タナシス王国も憲章条約に加盟させるという案はいかがでしょう」

ササウが、提案する。

「なんですって?」

「タナシス国内の四公国三自治州、それにタナシス本国がすべてノア川憲章条約に加盟するのです。上手くいけば、恒久的平和が訪れるはずです」

「それは、事実上のタナシス王国解体になります。受け入れられませんかよ」

夏希はこれも拒絶した。

「では、タナシス王国を憲章条約に加盟させてください。そうすれば、各自治州や公国に対する姿勢を改善できるでしょう。総会は、加盟国が憲章条約に反した場合、強制力を持つてこれを制することができます。タナシスの暴走を、抑止してください」

「うーん」

夏希は唸った。たしかに、タナシス王国が憲章条約に加盟してしまえば、いろいろとメリットは大きい。とにもかくにも平和は訪れるし、外交もやりやすくなるだろう。しかしまた、デメリットも大きいはずだ。地域的国際機構が有効に機能する絶対条件のひとつと

して、加盟国内に超大国が存在しない、というものがある。超大国がいれば、国際機構はその国の意向に引っ張られることになるからだ。EUやASEANが『奇跡的』と形容されるほどうまく機能しているのも、相対的に傑出した国力を持つ国家が存在しないからである。

今は経済的に困窮しているとは言え、タナシス王国の人口と総合的国力は、現在のノア川憲章条約諸国の合計を上回っている。例えて言えば、ASEANにいきなり中国が加わるようなものか。混乱は必至であろう。

「ともかく、これが我々にできる最大限の譲歩です。この条件で、タナシス側を説得していただきたい。では、失礼します」  
すっと立ち上がったササウが、深々と一礼した。

「お見事です、ササウ殿」

イムサーンが、笑みを見せる。

「さっそく、東部同盟とリスオンの駐在員に連絡を取ります。これで、計画の第一段階は終了です」

「これからどうなるのかな？」

いささか疲れたような表情で、ササウが訊いた。

「噂を広めるのですよ。リスオンには、我々の息のかかった者が大勢潜入していますからな。まず広めるのは、西部同盟と憲章条約は内容は詳らかではないが密約を結んだ、というものです。タナシス人に疑心暗鬼を植えつけるのが、その目的ですな。次に、憲章条約はタナシス王国を加盟国に引き入れた上で、各公国及び自治州にも準加盟の権利を与え、実質的にタナシス王国を解体するつもりだ、と続けます。憲章条約とタナシスとの仲を引き裂くのが、東部同盟の思惑ですから」

「噂だけでは、関係悪化にならぬと思うが」

「もちろん、東部同盟はもう一段踏み込んだ、思い切った行動に出

ることになっています。すべてうまく行けば、タナシスと憲章条約の関係は修復不可能なまでにこじれ、憲章条約諸国は自動的に我々の味方となるはずです。では、失礼します。アノルチャに行かねばなりませんので」

イムサーンが立ち上がる。

「アノルチャで、東部同盟の者に会うのかね？」

「いいえ。アノルチャ行きは、今後に備えてのことです。今回の企てを有効に利用するには、一時的に南の陸塊との正規な情報伝達ルートを切断する必要がありますですよ。こちらの思惑通りの情報を憲章条約外交団に先んじてマリ・八につかませ、これを操作しなければならぬのです。詳しくは、ご説明するわけにはいきませんがね」

ざっくりと説明したイムサーンが、そそくさと部屋を出てゆく。

その後ろ姿を見送りながら、ササウが小さくため息をつく。

「これでいいのだろうか……これで」  
祖国クーグルトの完全独立と、公王の地位に甘んじている元国王の復位。これはもちろん、クーグルト貴族であるササウの悲願だ。だが、イムサーンの口ぶりから察するに、東部同盟が画策している計画は、多分に流血を伴うものである。クーグルトの民九万の幸せのために、他所の民の血が流されることを、許容するべきなのだろうか？

ムータール市から王都リスオンへの帰途は、五日かかった。

市街に入ったのは午後遅くだったが、夏希は帰還したとの報告を部下に持たせて王宮に派遣しただけで、リュスメースに会うのは旅の疲労を表向きの理由に、明日に回すことにした。西部同盟の驚くべき提案……タナシス王国のノノア川憲章同盟加入案……について、拓海の見聞をじっくりと聞いておきたかったからだ。

「そりゃまた、突飛な提案だな」

夏希の話聞いた拓海が、呆れたように首を振る。

「意見を聞かせて」

「問題を整理しよう。まずはタナシス王国が憲章条約に加盟した場合の影響だ。現行の憲章条約は、建前上はすべての国家に対し門戸を開くように改正されたから、タナシス王国の加盟は可能だ。正統性のある国家だし、加盟国すべてが国家として認めている。総会で五分の四の承認が得られれば、即座に正式加盟だ。では総会で無事承認され、タナシスが加盟したと仮定してシミュレートしてみよう」  
「いったん言葉を切った拓海が、考えをまとめるかのように視線を宙にさまよわせた。」

「まず問題なのは総会での議決権だ。人口だけで旧加盟国の総計を凌駕するんだからな。ルルトやオープアと同じ二票というわけにはいかない。旧ソ連の国連総会での議決権を参考にして、仮に各公国と自治州に一票ずつ与えると……本国二票として合計九票か。三票にすると十票。それでも足りんな」

「え、ソ連って何票も議決権持ってたの？」

「ああ。独立前のウクライナとベロルシアが、一票ずつ持ってたんだ。東西間のバランスを取るため、とか言われてるがね」

「でもそれだと、タナシス王国の崩壊につながりかねないわね」

「そうだ。まずまず旧ソ連に似てきたな。ともかくシミュレートを続けよう。仮にタナシス王国が、自由になる十票を手に入れたとして。通常の議案は賛成三分の二で可決されるから、南の陸塊諸国が結託すれば、タナシスが反対する決議も自動的に可決されることになる。逆に、五分の四の賛成が必要な重要決議に関しては、タナシスが事実上の拒否権を持つことになる」

「もし、公国票と自治州票が離反したら……」

「そうだな。いかなる決議も、タナシス王国は止められなくなる。いや、まずいなこれは。タナシス王国の憲章条約加盟は、政治的自殺行為だよ。だからといって、タナシスに憲章条約内で特別な地位を与えたら、国家間の平等主義を謳う憲章条約の精神に反する。そのうえ、タナシス王国の暴走を止められなかったら、憲章条約の組

織そのものが有名無実化されかねない。こちらも、組織としての自殺行為に近いね。各公国と自治州が、タナシス本国と友好関係を確立した上で完全独立し、憲章条約に加盟するのであれば、タナシスに五票くらい与えてやれば、それなりにバランスは取れるだろうが、いずれにせよ、タナシス解体を前提にした話を、リクスメース王女が聞いてくれるとは思えんな」

「とりあえず西部同盟の提案はリクスメースに伝えるけど、外交団としてはこの案に賛成しない、つてところが、公式な意見になるかな？」

「そんなところだな。ところで……」

言葉を切った拓海が、上目遣いに夏希を見る。

「なによ、急に変な目付きになつて」

「あんだ、西部同盟と密約を交わした、なんてことはないだろうな？」

「密約う？ なによ、それ」

「いや、数日前から、そんな噂がリスオンで流れてるんだ。憲章条約外交団がカレイトンへ行ったのは、和平仲介が目的ではなく、西部同盟との反タナシス連合結成のためだとか、すでに密約が交わされて、東部のメリクラ自治州とペクトール公国が独立宣言すると同時に、憲章条約が新国家すべての国家承認と憲章条約加盟を認めるとか。あと、憲章条約軍の艦隊がアノルチャ州沖合いで漁船に目撃された、なんてのもあつたぞ」

「根も葉もない噂ね」

「火のないところに煙は立たず、だ。こんな噂が流れるには、下地があるということだな。タナシス人が内心では憲章条約を警戒している証拠でもあるだろう。この警戒心を解いてやらないと、今後タナシスとの交渉はやりにくいまままで終わるだろうな」

「リクスメースとは、うまくやれそうなんだけどねえ」

打ち解けたわけではないし、王女の方もガードを下げてはいないが、夏希の見たところリクスメースは基本的に誠実なタイプに思え

た。いささか無愛想で愛嬌に欠けるのも、根が真面目だからこそで、性格が嫉れているというわけではないらしい。

「ま、明日からの協議で上手く立ちまわってみる。ご意見、ありがとうね、拓海。ところで……あなた太ったんじゃないの？」

夏希はややむくんだように見える拓海の顔を覗き込みつつ、そう言った。

「ばれたか」

指摘された拓海が、苦笑する。

「宿舎にこもって美味しいものばかり食ってたからな」

「たまには外へ出て運動しなさいよ」

「そうしたいのは山々だが、警備の連中からあまり街に出ないでくれ、と要請されていてね」

「要請？ なにかあったの？」

「変な噂のせいかな、このところわが外交団の株は下がりはなしだね。反感を持っているリスオン市民が多いらしいんだ。警備の人数もさらに増えた。まあ、用心しているだけだと思うが」

「ふうん。じゃあ、食事を減らしなさいな」

「いやいや、結構寒くなってきたから、暖かいものが美味しいんだよ。昨夜の羊肉鍋は旨かったぞ。唐辛子系のピリ辛たれを付けて食らうんだが、これが酒によく合うんだ」

「お酒も控えなさいよ。カロリー高いんだから」

「体の心配までしてくれるのか。嬉しいねえ。まるで古女房じゃないか」

拓海が嬉しそうに笑った。

翌日、王宮へ赴く支度を終えた夏希のところへ、拓海が慌てた様子でやってきた。

「どうも様子がおかしい。タナシスの警備がぴりぴりしている」

「ぴりぴり？ いつものことじゃないの？」

「いや。いつも以上に警戒している。士官にそれとなく尋ねてみたが、口を濁されてしまったよ。念のため、生馬の部下に街の様子を探ってくるように頼んでおいたが」

「じゃ、待っていますよ」

夏希は拓海を伴って部屋を出た。待機していたアンヌツカも合流し、三人で宿舎の玄関ホールへ出る。そこにはすでに外交団の護衛数名が支度を整えて待ち受けていた。夏希の姿を見て、一斉に居住まいを正す。

「みなさん、楽しんで」

夏希はいつものようにその言葉を掛けた。人間の集中力の持続には限界があるから、本当に必要なとき以外は護衛にはリラックスしていてもらうべき、ということをし、夏希はアンヌツカとの長い付き合いで学んでいた。

しばらく待っていると、拓海が送り出した生馬の部下二名が戻ってきた。夏希は、拓海と並んでその報告に耳を傾けた。彼らによれば、妙な噂が市内に流布しているという。

「なんでも、憲章条約諸国が、タナシスをノア川憲章条約に無理やり加盟させようと画策している、という話です。そして将来的には、国内の公国と自治州をすべて独立させ、タナシス王国解体を狙っているとか」

年嵩……といっても、まだ二十代後半だが……の剣士が、臆せず報告する。生馬の教育のおかげか、目上の者に対しても、直截的な物言いをするよう、習慣付けられているのだ。

「ほう、それで？」

眉根を寄せた夏希と目を見交した拓海が、続きを促した。

「はい。その噂ゆえ、一部の市民が憲章条約に対し敵意を持ったと、警備陣は判断しているようです。これも噂ですが、憲章条約との断交を訴えている有力市民もいるとか」

「なるほど。暴力沙汰に発展することを、危惧しているのね」

「左様と思われませす」

「ご苦労だった。休んでくれ」

手短にねぎらった拓海が、二人を解放した。

夏希はアンヌツカと拓海を伴って、足早に自室へと戻った。アンヌツカに扉の前での警備を頼むと、拓海を招じ入れる。

「どういうこと？ 西部同盟との協議内容は、まだリュスメースにすら伝えていないのよ？」

「単なるデマかも知れんが、それにしてもタイミングが良すぎるな。こんな噂は昨日まではなかったし」

拓海が、首を捻る。

「じゃ、どこからか情報漏れが？」

「だろうな。誰が知ってる？」

「わたし、書記を含む部下。ハルントリー、ビアスコの両王子。アフムツ氏族長。彼らの側近。外交団では、そのくらいね。アンヌツカにも、話していないし」

「……いや、発信源は外交団じゃないな。いくら何でも、一晩で街中に情報が広まるとも思えない。その前から、水面下で囁かれていたにちがいない」

「じゃあ、西部同盟側が漏らしたと言うの？」

「おそらく。それも、意図的だろう。ここまでまつすぐ帰ってきたあんたらより、早く情報が伝わった可能性が高いからな。ロコミの噂の伝達速度は、最速の交通機関と同じだと言われている。それよりも早かったのだから、まず間違いなく、意図的な情報操作だろう」

「西部同盟の提案内容を、西部同盟がわざと漏洩する。目的は、なにかしら？」

「西部同盟の意図が、この提案……タナシス王国のノノア川憲章条約加盟を本気で推進しようとしているのか、それともこれは何らかのフェイクなので、話は違ってくる。本気ならば、あらかじめ提案をタナシス国民に周知させることによって、受け入れを促すという一定の効果はあるだろう。ただし、今回は却って反感を生んでしまったようだが。フェイクだとすると……離間工作か。タナシス王

国の憲章条約加盟は、タナシス王国解体につながるという噂を流し、両者の仲を裂く。タナシス王国と憲章条約が対立すれば、利益を得るのは……現在タナシス王国と事実上の交戦状態にある西部同盟だ。辻褄は合ってくるぞ」

「……十二日も費やしたのに、西部同盟に乗せられただけなの？」  
夏希はがつくりと肩を落とした。長旅もササウとのしんどい協議も、すべて無駄に終わったということだろうか。

「確証はないが、西部同盟は油断のならない悪党だ、とわかっただけでもめっけもんだ。その前から流れていた、密約うんぬんの噂も、タナシスと憲章条約の仲を悪化させようという西部同盟の情報操作の可能性もある。夏希、このあたりの推測を包み隠さずリュスメースに話してやれ。離間工作など無駄だと知れば、西部同盟も軟化するかも知れん」

リスオン市内の空気は、夏希にも感じ取れるほどぎすぎすとしていた。

「なんか……いつもより人が多いわね」

周囲を取り巻いているタナシス護衛兵士の頭越しにあたりを眺めながら、夏希はそう口にした。

「歩いている人が少ない。足を止め、こちらを注視している人が多いです。これは、良くない兆候でしょう」

やや緊張した声音で、アンヌツカが言う。

「睨まれてるわね、どう見ても」

夏希は苦い笑みを浮かべた。もともとタナシス人は目が細めで、目尻が吊り上がっている人が多く、ただでさえきつい目付きに見えるてしまうのだが、今朝の市民の視線はあからさまに敵意を含んだものが多いように思える。

幸い何事もなく、夏希と三代表は王宮の正門をくぐる事ができた。コーカラットが付いてきてくれる以上、危ない目に会うことは

ないと確信していた夏希だったが、それでも敷地内に入って見覚えのある王宮護衛隊士官に出迎えられると、ほっと安堵の息をついた。その士官の先導で、いつもの協議部屋に向かう。警護は、途中で近衛隊に引き継がれた。ここから先、王宮の中核部は王宮護衛隊の隊士ですら立ち入ることのできない区画である。外国の賓客といえども、武器の持ち込みは禁止だ。ハルントリーとビアスコ両王子が、実戦的とは言えぬ装飾の多い短い帯剣を王宮護衛隊隊士に渡す。アフムツ氏族長も、愛用の鉈を隊士に預けた。アンヌツカとコーカラツトも、ここで留め置かれる。

協議部屋には、すでにリクスメースが待ち受けていた。儀礼的な挨拶を交わしてから、外交団は椅子に座った。席順は、中央に夏希、右にハルントリー王子とビアスコ王子。左にアフムツ氏族長と、夏希の部下である書記。夏希の正面に、リクスメース。少し離れて、タナシス側の書記というものだ。

暖炉に火が入っているので、室内は結構暖かだった。夏希は断りを言って、上着を脱いだ。

95 劇的讓歩（後書き）

第九十五話をお届けします。

## 96 リュスメースの勇氣

協議が始まると、夏希はさっそく西部同盟側の提案をリュスメース王女に披瀝した。

「外交団長として公的な見解を申し上げます。西部同盟のこの提案は、非現実的です。当外交団は、この提案をタナシス政府が拒否されることを期待するものではありません」

「それは……厳密に言えば、中立的立場とは言い難いのでは？」  
うつすらと笑みを浮かべたリュスメースが、問う。

「そうですね。しかしながら、当外交団は憲章条約諸国の利益も考慮せねばなりません。現状で、タナシス王国が憲章条約に加盟しても、得られるものはきわめて少ないでしょう。憲章条約とタナシス王国の友好維持のためにも、この提案は考慮に値しないと思います」

「それは、同感ですね」

リュスメースが、うなずいた。

「ところで殿下。今朝から流れている街の噂をご存知ですか？」

「憲章条約が我が国を強引に加盟国にする云々、との噂ですか？」

「左様です。その根も葉もない噂です」

「面白いタイミングで流布しましたね。公安に調べさせましたが、どうやら意図的な流布のようです」

軽くうなずきながら、リュスメースが応じる。

「やはりそうですね。これはきわめて私的な見解ですが、流したのには西部同盟関係者ではないか、とわたしは見えております」

「根拠をうかがってよろしいでしょうか」

「外交団から漏れた情報でないことは確かです。もしそうであれば、これほど早く市民に広まるとは思えません。自然発生した噂と見るのも、不自然です。この情報を知っており、なおかつ流布させられるだけの能力があり、貴国と憲章条約との関係悪化を願っている組

織は、ひとつしか思い当たりません」

「ようやくわかっていただけましたか。西部同盟と我が政府。どちらが正直で、主張に正当性があり、悪意がないことを。どうでしょう。これを機に中立的立場を捨て、我が国と同調して西部同盟に圧力を掛け、紛争終結に至る手伝いをしていただけませんかでしょうか？」

リュスメースが、期待を込めた眼差しを夏希に向ける。

「中立的立場を捨てるのはご勘弁願いたいです。一度中立を謳った以上、それを貫かねば外交団としての立場がありません」

……それに、この情報操作がタナシス側の手の込んだ工作だという可能性はゼロではないし。

夏希はそう内心で付け加えた。もし西部同盟上層部にタナシスの間諜が潜り込んでいれば、ササウの提案内容を事前に知ることでもきただろう。憲章条約とタナシスの関係を悪化させるような噂をわざと流し、その罪を西部同盟になすりつけ、憲章条約を味方に付ける、という策謀だった、ということも、ありえない話ではない。

「ともあれ、タナシス王国としては、この西部同盟の提案は正式に拒否いたします。立場も主張も、従来と何ら変わることはありません」

きつぱりと、リュスメースが言う。

と、閉じられていた扉が突然勢い良く開いた。

室内にいた全員の視線が、戸口に注がれる。

乱入してきたのは、三人の王宮護衛隊士だった。いや、先頭のひとは士官だ。さきほど王宮の正門で出迎えてくれた、背の高い壮年の男である。三人とも血相を変え、抜き身の片手剣を手にしている。

夏希は腰を浮かした。ここは王宮護衛隊立ち入り禁止区域である。そこへ、武器を手にした護衛隊士が現れたということは。

敵襲。

それしか考えられない。危険が迫っているので、護衛隊士が規則を破って助けに来てくれたのだ。急いで、逃げ出さねば。

「どうしたのです？」

リュスメースが、甲高い声で問う。

隊士たちは答えずに、足早に室内に踏み込んできた。座っていた全員が、立ち上がる。

いきなり、先頭に行く士官が剣を一閃させた。一番下手にいた夏希の部下……ラクトアス出身の書記が、鮮血を撒き散らしながら倒れる。

「何をするか！」

ハルトリー王子が、憤怒の形相で一喝した。

夏希は硬直した。

王宮内部なのに。王宮護衛隊なのに。顔を見知っている士官なのに。

剣を振るった。書記を斬り捨てた。夏希の部下なのに。

「夏希殿！」

ピアスコ王子が、夏希を守るかのように数歩前に出る。

三人の剣士が、一斉に走りだした。二人の隊士がハルトリーとアフムツに、そして士官がピアスコに斬りかかる。

夏希は焦って得物を探した。机上には、紙やペンしか置いていない。

椅子だ。

夏希は掛けていた椅子を持ち上げた。背もたれ付きの木製で、かなりの重量がある。

男性の悲鳴が聞こえる。

悲鳴を上げたのはピアスコだった。脇腹を深く切り裂かれ、膝をついている。

ピアスコに止めを刺そうとしている士官に向け、夏希は椅子を突き出した。士官が、飛び退いてこれを躲す。

夏希はなおも椅子を突き出し続けた。剣と椅子では、もちろん剣

のほうが有利である。間合いを取られ、体勢を整えた上で斬り掛かれれば、まず負ける。このまま勢いに任せて攻勢に出て、敵の動きを封じる以外に、身を守るすべはない。

夏希の視野の端に、周囲の状況が映った。すでに、ハルントリー王子とアフムツ氏族長は床に倒れ伏していた。タナシス側の書記は、彼女と同様椅子を手にして、隊士の一人とやりあっている。リュスメースは、驚きに目を見開いたまま硬直しているようだ。もう一人の隊士は、どこにも見えなかった。

嫌な予感に襲われた夏希は、手にした椅子を士官に向け放り投げると、身を沈めつつくりと振り向いた。

間一髪であった。突き出された片手剣の切っ先が、左頬の側をかすめる。身を沈めていなければ、心臓を貫かれていたかもしれぬ位置だ。

夏希は急いで後退しつつ、新たな椅子に手を伸ばそうとした。だが、一足早く回りこんだ士官が、剣を手にしたままテーブルと夏希の間に立ちほだかる。

……得物がないと、確実に殺られる。

心底びびりながらも、夏希は必死に打開策を探った。戦場慣れしているせいか、こんな状況でも頭が冴えきっているのがわかる。刺客の動きも、なんだかゆっくりしている様にも感じる。……ひよつとして、死期が迫っているのだろうか。

背中に、温みを感じる。

そうか、暖炉だ。

視線で隊士を牽制しつつ、夏希は暖炉から火かき棒を掴み取った。打ち込んできた隊士の剣を、危うい所で打ち返す。

……武器は手に入った、だが、二対一では勝ち目はなし。

夏希はそう計算した。アンヌツカや生馬に手ほどきを受けたとは言え、夏希の剣の腕前は並以下だ。エリートたるタナシス王宮護衛隊相手に、敵うわけがない。

夏希の視野から、士官が消えた。背後に回ったのだ。

もはや、夏希に逃げ場は残されていないかった。火かき棒一本を頼りに、凄腕剣士二人と戦わねばならない。一秒でも長く時間を稼いで、生き延びねば。いずれ、近衛隊やまともな王宮護衛隊、アンヌツカにコーカラットが、駆けつけてくれるはず。

正面の隊士が、斬り込んでくる。

夏希は火かき棒でこれを受けた。

隊士が、笑みを浮かべる。

背後に、殺気にも似た濃厚な気配。

夏希は動けなかった。もう間に合わないことを、悟ったのだ。奇跡でも起きぬ限り、一太刀浴びせられるのは確実だろう。致命傷にならぬことを、願うしかない。

押し殺したような悲鳴が、響いた。

隊士の注意が逸れた。

夏希は攻勢に出た。二度ほど激しく火かき棒を振るい、隊士に後退を強いる。少しばかり余裕ができた夏希は、立ち位置を変えて背後を確認した。

リュスメースが、腹部を押さえてうずくまっている。その前には、呆然とした表情の王宮護衛隊士官。

夏希を守るために、リュスメースがその身を盾にしてくれたのだ。

「……剣を引きなさい、ズイラーヌ」

食いしばった歯の間から搾り出すように、リュスメースが言った。「で、殿下。殿下の御身を傷つけるつもりは……」

おろおろと、士官が言い訳する。

二人目の隊士も駆け寄ってきたが、腹部を赤く染めているリュスメースを目にし、蒼白になる。

「なぜこんなことを……。憲章条約との友情が、タナシスの生命線なのに……」

絞り出すように、リュスメースが口走る。

夏希は躊躇した。リュスメースの止血をしてやりたいが、刺客三

人はいまだ剣を下ろしてはいない。少しでも隙を見せれば、ばつさりとやられてしまうだろう。

隊士二人が、横目で士官の様子をうかがう。士官が、呆然とした表情のまま小さくうなずいた。

視線を夏希に据えた二人が、一步前に入る。夏希は火かき棒を構え直した。

隊士たちが踏み込もうとした刹那、リュスメースがゆらりと立ち上がった。刺客二人が、思わず動きを止める。リュスメースは、腹部を抑えたままおぼつかない足取りで、夏希の前に出た。

「わたくしの命に替えても、夏希殿はお守りします」

怪我人とは思えぬしつかりとした口調で、リュスメースが宣言する。その言葉を強調するかのように、リュスメースが血まみれの両手を腹部から離し、大きく腕を開いた。夏希の鼻に、鮮血の匂いが届く。

隊士が躊躇する。

「どけっ」

士官が、ためらっている隊士二人を押しつけるように前に出た。

「リュスメース！」

低い男性の声が、響き渡る。

声の主は、オストノフ国王だった。数名の近衛隊士を引き連れ、部屋に駆け込んでくる。

「貴様らあ！ 何をしておるか！」

状況を一瞬にして見て取ったオストノフが、憤怒の表情で愛剣を抜き放った。年齢を感じさせない足さばきで素早く接近し、驚きの表情を浮かべている護衛隊士の一人に斬りつける。

鮮血とともに、護衛隊士の首が床に転がった。

「陛下、殺さず捕えてください！」

夏希は慌てて声を掛けた。テロリストは殺してはいけない。生きのまま捕えて尋問し、背後関係を暴かねばならないのだ。

「剣を捨てる！」

なおも憤怒の表情で、オストノフが迫る。

残る護衛隊士が剣を捨てた。だが、士官の方は剣を手放さなかった。それどころか、左手を刀身に添え、首筋に近付ける。

自害する気だ。

「やめなさい！」

夏希は無駄と知りつつ一喝した。

「タナシス王国に栄光あれ！ オストノフ陛下万歳！」

強張った表情で言い放った士官が、剣を手前に引いた。刀身が首筋を滑り、おびただしい量の鮮血が吹き出す。夏希は思わず顔をそむけた。

駆け寄ってきた近衛隊士が、生き残った刺客を拘束する。

いきなり、リュスメースの身体が崩れ、夏希にしなだれかかってきた。火かき棒を手放した夏希は、急いでその身体を支えた。

「リュスメース！」

愛剣を収めたオストノフ国王が、愛娘の身体を夏希から奪い取るようにして抱きかかえる。

「陛下、殿下の傷を診させて下さい」

緊張状態が急激に解けたことによる身体が冷えるような感覚を味わいながら、夏希はそう願い出た。

「頼む」

さきほどの憤怒の表情はどこへやら、今は気弱な父親の顔になってしまったオストノフが、許可を与える。夏希はまず腹部の傷を検めた。突かれたただけのようで、傷口は小さかったが、出血の具合からして相当深そうだ。呼吸は浅く、脈拍は早い。素人目にも、かなり危険な状態と思われた。

「陛下、殿下をここへお載せになって下さい」

駆けつけてきた宮廷侍医らしい初老の男性が、その声を掛けてくる。夏希は、リュスメースをテーブルの上に横たえようとするオストノフを手伝った。すかさず、侍医が手当を始める。夏希は邪魔にならぬように身を引いた。

いつの間にか、部屋の中は人でいっぱいになっていた。ほとんどが、近衛隊士だ。

夏希はあたりを見回して、他の者の生死を確かめた。アフムツ氏族長と、ビアスコ王子は絶命していた。二人の書記も、死んでいるようだ。

夏希の目に、涙が浮かんだ。寡黙だが、信頼できたアフムツ。最後に、男らしく夏希を守る姿勢を見せて死んでいったビアスコ。

ハルントリー王子は、かろうじて息があつた。近衛隊士が二人がかりで、止血に務めている。すでに、意識はないようだ。夏希は歩み寄つた。

「どうですか？」

「残念ですが、手の施しようがありません」

止血を続けながら、隊士の一人が答える。

……これ以上、死人は出したくない。

夏希は指で涙を拭くと、テーブルの上に横たわる愛娘の手を握っているオストノフのところへ歩んだ。リュスメースの容態もかなり悪いようだ。治療を続けている宮廷侍医の表情も冴えないし、リュスメースの顔面も蒼白を通り越して青白くなつてきている。出血が、止まらないのだろう。

「陛下、お願いがあります」

「夏希殿、今は忙しいのだ」

「外交団に、魔物が一匹属しております。彼女は高度な医療技術の持ち主です。タナシス王国の医学水準を愚弄するつもりは毛頭ありませんが、彼女に任せれば殿下もあるいは……」

オストノフが、涙の溜まった目を夏希に向けた。

「許可する。一刻も早く、その魔物をここへ連れてきてくれ」

絹糸。清潔で乾燥した布。清浄な水とお湯。

さすがに大国の王宮である。コーカラットが要求した品々はあつ

という間に揃えられた。

手をコーカラットの黄色いジュースで消毒した夏希は、宮廷侍医とともにコーカラットの手術を手伝った。テーブルの上にリュスマースとハルトリーの二人を並んで横たえての、同時手術である。傍らでは、オストノフ国王と、エミスト王女が見守っている。

傷口をコーちゃんジュースで洗って、きれいにする。触手で開いた傷口に、縫合用触手を突っ込んで、血管や腸壁、腹膜などを縫い合わせる。後日抜糸の必要があるので、皮膚は軽く縫い合わせる。手術そのものは、一時間足らずで終わった。

「お二人とも、かなり血液を失っていますので、危険な状態ですねえ。これは輸血が必要ですよ。」

コーカラットが、触手の先をリュスマースの腹部につけ、わずかに血液を付着させた。それを、口の中につっ込む。

「リュスマース殿下は、Rh+のAB型なですよ。」

「舐めてわかるの?」

「魔物ですからあ。」

ハルトリーの血液型は、Rh+のO型だった。夏希は、オストノフに近衛隊士を集めるように要請した。同時に、輸血について簡単な説明を行う。あとで『娘の血に男の血を混ぜるとは何事か!』などと切れられないための用心である。オストノフは怪訝そうな表情をしたものの、輸血には同意してくれた。手術を見学し、どうやら愛娘が助かりそうだと知って、コーカラットの治療を信頼したのだろう。

居並んだ近衛隊士たちに、コーカラットが鋭く尖った触手の先端を突き刺し、血液型を調べてゆく。Rh+ABとOを三人ずつ選び出したコーカラットは、それぞれの患者の横に血液提供者を一人横たえると、先端を尖らせた触手を腕に突き刺した。別な触手をリュスマースとハルトリーにも突き刺し、自分のボディを媒介にして輸血を開始する。

「夏希殿。話がある。」

オストノフが、部屋の隅へと手招く。

「なんでしよう、陛下」

「どうやら娘は命を取り留めそうだ。礼を言う」

「礼を言わねばならぬのはこちらです、陛下」

夏希は、オストノフが部下を率いて突入してくる寸前の出来事を物語った。

「リユスメース殿下は、わたしの身代わりとなって負傷されたのです。殿下の勇氣ある行動がなければ、わたしは死んでいました」

「そうか。あの小さな身体に、そのような勇氣があったとはな」

オストノフが、慈愛のこもった視線を、横たわる愛娘に向ける。

「夏希殿。謝罪もさせてもらうぞ。事情はどうあれ、ここはわが王宮内。しかも、外交団を襲った刺客はわたしの配下の者だ。今回の件、心よりお詫び申し上げる。いかなる賠償にも、応じるつもりだ」

「それよりも、一刻も早く背後関係をつかんで下さい。刺客のリーダーは、あの自害した士官でしょうが、彼が独断で行った犯行とは思えません。命じた者を探し出し、その意図を知らねば、また同じようなことが起こるでしょう。それは、絶対に防がねばなりません」  
「もつともだ。必ずや首謀者を探し出し、償いをさせよう」

96 リュスメースの勇氣（後書き）

第九十六話をお届けします。

## 97 噂との競争

リクスメース王女とハルトリー王子の治療役としてコーカラットを残し、夏希は王宮を辞去した。今回の一件に関し、早急に詳細な報告書を書き上げ、マリ・八に送らねばならない。

多数の護衛……夏希が怪我ひとつしていいことを知って嬉し泣きしたアンヌツカを含む……に守られて宿舎に戻ると、さっそく拓海が駆け寄ってきた。

「おお、無事だったか。噂じゃ、あんたも死んだことになってたが」「なによ、それ」

「憂国の士が憲章条約外交団団長を含む四人を殺害、という話だったからな」

「亡くなったのは、確かに四人だけだね」

夏希は、事件の詳細を拓海に話して聞かせた。

「……その場に俺がいたら、間違いなく殺られてたな」

「でしょうね。で、黒幕はやっぱり西部同盟かしら？」

「ま、茶でも飲みながら推理しようや」

拓海が、テーブルに夏希を座らせた。リダが、お茶のセットを運んできてくれる。

「ありがとう」

夏希は、礼を言っただけでカップを受け取った。そこで、自分の手が小刻みに震えていることに気づく。

「……今頃になって。おかしなものね。火かき棒振り回していた時や、コーちゃん手伝って手術していた時はすっかりしていたのに」

「よくあることだ。人間、便利にできてるんだよ。肝心な時は、精神が肉体をむりやり制御しちまう。ある種のオーヴァーライド状態になっちまってるんだ。気にするな。で、刺客の正体だが、おそらくは西部同盟のスリーパーだろうな。つまりは、休眠工作員だ」

「何食わぬ顔で何年も前から王宮勤めをして、機会をうかがってい

たわけね」

「そうだ。個人が勝手に動いたにしては、タイミングが良すぎる。リュスメースを殺傷する意図がなかったこと、自害の前にタナシス王国とオストノフ国王を賞賛したことから見ても、犯行をタナシス愛国者が憲章条約外交団を襲った、という形にしたかったに違いない。事前に流布していた噂も、今回の黒幕と同じ奴が流した可能性が高いな」

「憲章条約はタナシス王国を加盟国とすることで、その解体を図るつもりだ。だから愛国者がそれを阻止するために、外交団を襲った、ということね」

「そうだ。タナシス王宮での不祥事となれば、タナシス王国と憲章条約の外交問題に発展するからな。両者の仲がこじれば、もっとも利益を得るのは西部同盟。まず間違いなく、黒幕は西部同盟の連中だ。こうなると、ササウの和平提案も、怪しいな。おそらく、一枚噛んでいるに違いない」

「ならば、その意図を挫くためにも、タナシスとの関係を悪化させないようにはしないと」

夏希はそう言った。拓海が、大きくうなづく。

「リュスメースが負傷してくれたのは、気の毒だが使えるな。外交団長の命を身を挺して救い、自らは瀕死の重傷を負った王女様。そして、その救命に尽力した外交団所属で、団長の個人的な友人でもある魔物。このあたりをうまくアピールすれば、災い転じて福をなす、という芸当も可能だろう」

「わかった。そのあたりも盛り込んで、報告書を書くわ」

お茶を飲み干した夏希は腰を上げた。

「頼む。俺はもう少し街の噂を調べてみるよ。敵の出方をつかめるかもしれない」

自室にこもり、アンヌツカに口述を筆記させて、報告書をまとめ始めた夏希だったが、三分の一も進まないところで邪魔が入る。

「夏希、旅支度だ」

部屋に頭だけ突っ込んできた拓海が、ぶっきらぼうに告げる。

「どうしたっての？」

「宣伝戦でこちらは三步くらい遅れてるぞ。街の噂で刺客のリーダー……例の自害した士官の詳しい経歴まで出回り始めている。清廉潔白。低い身分からの立身出世。愛国の憂士。犯行理由はタナシス王国解体を目論む憲章条約の陰謀を打ち砕くため、だそうだ。自宅から遺書兼檄文も見つかったらしい。内容は、どうせ愛国の情と憲章条約に対する弾劾を綴ったものだろうな。よくあるパターンだ」

「でたらめもいとこじゃない」

「だから宣伝戦なんだ。真実からどれほどかけ離れていようが、信じてもらったほうが勝ちなんだよ、宣伝戦は」

「わかった。で、旅支度つて、どこへ行かせようと言うの？」

口述をあきらめて立ち上がった夏希は、ため息混じりに訊いた。

「もちろん、マリ・ハだ。報告書じゃだめだ。あんたが直接総会へ乗り込んで説明しないと、收拾がつかなくなる」

「そりゃ、団長として代表二人が死亡、一人が重傷なんだから、説明責任はあると思うけど、現状ではリスオンに留まって、タナシス王国との関係悪化を防ぐほうが大事じゃないの？」

「その意見には賛成だが、事態は急激に悪化しそうなんだ。襲撃の模様について、噂がひとり歩きしている。リュスメースが負傷したのは、外交団長が刺客に向け突き飛ばしたからだ、とかね」

「……信じられない」

一瞬だが、夏希の血が怒りで沸き立った。リュスメースは、自らの命を危険に晒してまで、夏希の身を守ってくれたのだ。このような根も葉もない噂、夏希はもちろんリュスメースの必死の気持ちさえ踏みにじることになるぞ。

「それと、結構詳細な襲撃に付いての情報も漏れ出している。あんなの説明と、多少食い違ふところもあるがね」

「それが、事態の悪化につながるの？」

「ああ。急がないと、噂のほうが先にマリ・八に着くおそれがある。そうなれば、総会でタナシス王国非難決議が出されちまう。血の気の多い奴なら、タナシス王国に対する報復を唱えかねないしな。その前に総会で、この一件は西部同盟の陰謀だと当事者でもある外交団長のアンタが説明し、各国に納得させる必要がある。それと、噂が先に高原に到達するのは絶対に避けねばならない」

「高原に？ そりゃ、氏族長が暗殺されたんだから、高原じゃ大騒ぎになるでしょうけど」

「大騒ぎどころじゃ済まないんだな、これが」

拓海が、ため息をつく。

「高原通として言わせてもらうが、高原戦士にとっても屈辱的なのは、鉦すら持っていない状態で惨殺されることなんだ。今回は、相手が異国人、場所が外国、殺害されたのが氏族長、しかも憲章条約総会で指名された正式な外交官で、高原代表の肩書き。さらに、絶対安全と思われた王宮内でのだまし討ち。おまけに鉦どころか、ナイフ一本、棒切れ一本さえ持たぬ完全な丸腰。麻雀で言ったら、三倍満くらいだな。ユーロアン氏族だけじゃない、高原の全氏族が激怒し、復讐を誓うだろう。彼らに火が点いたら、止めようがなくなっちまう」

「よくわかったわ。確かに、報告書書いてる場合じゃないわね」

「船の手配は俺がやっておく。タナシス王国との折衝も、あなたの部下と俺で何とかするよ。アンヌツカと一緒に、一刻も早くマリ・八に戻るんだ」

港町アノルチャ目指し、夜間も止まらずに川船を走らせる。

アンヌツカと二人の部下、それにわずかな護衛とともに川船に乗り込んだ夏希は、この時点では噂との競争をかなり楽観視していた。今のところ、南の陸塊と北の陸塊の民間交流は不活発である。貿易は行われているものの、そのほとんどはラドーム経由だ。しかも、

ラドーム問題の影響でタナシス本国・ラドーム間の交通は以前よりも激減している。このような状態で噂が南の陸塊まで広まるには、何日も掛かるだろう。

河港で船を降りた夏希は、部下と護衛を引き連れて海港へと文字通り駆けつけた。船頭ごと小舟を借り、内港内に停泊しているオーブア船に乗り付け、緊急出港を指示する。

「それが、団長様。今朝方から船長の姿が見えないんです」  
恐縮して頭を掻きながら、中年の水夫長が言う。

「……どうせどこかの売春宿にでも潜り込んでるのでしょう。誰かやっつて、連れてきなさい」

鼻にしわを寄せて、夏希は命じた。男の生理というものは頭では理解しているが、売春がらみとなるとどうしても嫌悪感が先に立つてしまう。

「いえ、心当たりの場所はくまなく探したんですが、それでも見つからないんです」

さらに恐縮し、揉み手をしながら、水夫長が答える。

「なら仕方ないわね。船長は置いてゆきましょう。副長は、どこ？」

「それが、副長も航海長も、朝から行方不明で……」

「なんですって？　ねえ、そんなこと、しょっちゅうあるの？」

なんとなくいやな予感に襲われた夏希は、語気鋭くそう訊ねた。「いえいえ。初めてのことです。あつしはかれこれ十年近くこの船に乗り組んでますが、あの酒好き船長ならともかく、愛妻家の副長や真面目な航海長が行方をくまらずなんて、初めてですわ」

腕をぶんぶん振り回して否定の仕草をしつつ、水夫長が言う。

「……これも、西部同盟の差し金か。」

ありえない話ではないだろう。拓海の推理が正しければ、自害した壮年の士官は、若い頃から正体……潜伏工作員であることを押し隠し、何食わぬ顔で王宮で精勤を続けていたのだ。西部同盟の工作部門は、時間的にも規模的にもスケールの大きい物に違いない。そのいわば『闇の力』がここアノルチャまで及んでいたとしても、な

んら不思議はないだろう。今頃、船長と副長と航海長は、どこかで簀巻きにされて監禁されているのか。いや、場合によっては重しに石でもくくりつけられて、アノルチャの湾内に沈んでいるのかもしれない。

「あなたでは、船を動かすのは無理かしら？」

ため息混じりに、夏希は訊ねた。

「動かすだけならできますが、航海士がいないことには外洋の航海は無理です」

「そう。じゃ、一緒に来て」

「どうなさるおつもりで？」

「まずアノルチャ市当局に船長以下行方不明乗組員のことを届けます。その次に、船を探すわ。ラドームまで行ってくれる船をね」

ラドーム行きを承諾してくれる船は、なかなか見つからなかった。いまだラドーム問題は片付いておらず、下手にタナシス本国の船が近づけば、『ラドーム王国』によって拿捕抑留されるおそれがあるためだ。

仕方なく夏希は、作戦をアノルチャ・ラドーム間の航海に慣れている航海士探しに切り替えた。こちらは、すぐに見つかった。船長経験者を含め、多数が名乗り出る。経験を積んでいそうな七名を即座に雇い入れた夏希は、彼らを率いてオープア船に戻った。急ぎ船員たちに引き合わせ、船長代理を指名し、出港準備を行わせる。

「半日無駄にしたわ」

アンヌツカ相手に、夏希は愚痴った。

「まだ噂には先行していますよ。ここまで届いていないようですし」  
アンヌツカが、言う。夏希はうなずいた。『憲章条約がタナシス王国の解体を目論んでいる』などという噂がここまで届いていれば、オープア船に雇われようというタナシス人航海士など、誰一人乗りに出てくれなかったはずだ。

幸いなことに、出港準備は順調に進んだ。夕日で帆をオレンジ色

に染めながら、オープア船は静かにアノルチャを出港した。

ラドーム島のグルージオン港に、期待していた南の陸塊所属船舶の姿はなかった。

夏希は仕方なく、アンヌツカを伴って小舟で市街へと上陸した。なんとかして、ルルトまで船を導ける航海士を探さねばならない。アノルチャで雇った航海士たちの腕は良かったが、南の陸塊まで航海した経験がある者はいなかったのだ。闇雲に南へ向け航海すれば、いずれ南の陸塊に行き当たるだろうが、目的地はあくまでルルト港である。ピンポイントでたどり着かねば、かえって時間のロスとなる。

……あるいは、ここでラドーム船を借り上げたほうが早い。それとも、カミュエンナ王女に相談し、手を貸してもらうべきか。

悩みながらとりあえず航海士がたむろしていそうな酒場を探し始めた夏希だったが、いきなり通行人から声を掛けられて驚く。

「夏希様ではありませんか。このような通りにおいてとは、お珍しい」

ぺこぺこ頭を下げつつ近づいて来た中年のラドーム人には、確かに見覚えがあった。ルルト市街地包囲戦のときに、オープア海軍司令官のランクトウアン王子と一緒に訪ねてきた、ラドーム人の船長だ。

「えーと、イエスパ船長？」

夏希は記憶の隅からようやく名前を引っ張り出した。

「お元気そうでなによりです。ご活躍は、聞き及んでおります」

イエスパが、にこやかに言う。

……これは僥倖。

たしか、ランクトウアン王子の話では、この船長はラドーム・オープア間の貿易を長年にわたって続けていたはず。当然、航海士としての腕は確かだろうし、顔も広いに違いない。

「突然で申し訳ありませんが、ここからルルトまで船を動かせる腕のいい航海士を紹介していただけませんか？ 急いで、ルルトに戻らねばならないのです」

「はあ。心当たりはありますが……なんでまた」

「詳しくお話したいのはやまやまですが、憲章条約外交部の公務なので」

夏希は口を濁した。説明の暇はないし、下手に口を滑らしたら協力を拒否されるかもしれない。イエスパ船長の政治的立場や心情がよくわからぬ……ランクトウアンに協力している以上、反タナシスなのだろうが……以上、危ない橋は渡れない。

「それほどお急ぎなら、うちの船の航海士をお貸ししましょう。ただ若いが、腕は確かだし、ルルトまで航海した経験もあります」

少しばかり怪訝な表情ながら、イエスパがそう申し出てくれる。

「ありがとうございます。お礼ははずませていただきます」

「よしてください夏希様。ランクトウアン殿下と親しい女性から、お礼など受け取るわけには行きませんよ。航海士に、世間並みの手当を支払って頂くだけで結構です。船を教えてくださいれば、直接乗り付けさせますよ」

「感謝します、イエスパ船長」

夏希はぺこりと頭を下げた。どうやら、ラドームでのタイムロスは最小限に抑えられそうだ。

朝日を浴びつつ、オープア船がルルト外港へと滑り込んでゆく。

錨……形状はよく知られた『錨型』であるが、金属製ではなく、石と硬木を組み合わせたもの……が降ろされると、夏希はすぐに小舟に乗り込み、アンヌツカと二人の部下を伴って上陸した。一人の部下には川船の手配を命じ、もう一人にはルルトにある憲章条約外交部の出先機関へ向かうように指示し、乗ってきたオープア船に関する処理と、異世界人の所在確認を命ずる。今回のテロとその影響

および対策について、他の異世界人……特に駿の見解と助言を聞いておきたい。

夏希自身は、アンヌツカを連れてルルト王宮へと赴いた。ルルト国王に拝謁し、息子……ハルントリー王子に関して報告を入れつつ、対タナシス政策を激化させないように説得しなければならぬ。やはり憲章条約随一の国力を持つ国である。ないがしろにはできなかつた。

早朝のうえアポ無しなので多少は待たされるかと危惧していたが、夏希はいともあっさりと言見の間に案内された。ルルト国王と会話を始めた夏希は、すぐにおかしいことに気付いた。理由は定かでないが、なぜかすでに国王はハルントリー王子が重傷を負ったことを知っていたのだ。

「陛下、ではこの一件について、すでにお聞き及びぬのですか？」

「ああ。昨日西部同盟の外交団が当市に上陸してな。拝謁を願い出た外交官が申しておつた」

ハルントリーに似ていなくもない初老の国王が、重々しくうなずく。

……しまった。

夏希はほぞを噛んだ。噂には先行したが、西部同盟の宣伝工作には遅れを取ってしまったのだ。おそらくは、足の速い船を仕立てて待機していたに違いない。王都リスオンから報告が来た直後に、出港したのだろう。そうでなければ、アノルチャで半日ロスしたものの、リスオンからまっすぐルルト市を目指した夏希に一日先行することは不可能だ。

そしてこの事実、西部同盟がタナシス王宮でのテロを予見していた、という確実な状況証拠でもあろう。つまり、テロ自体が西部同盟の差し金、いや、統制下に置かれた作戦だった、ということだ。夏希はそうそうに王宮を辞去し、船着場に向かった。待ち受けていたのは、借り上げられた川船と、凜であった。

「事情は彼から聞いたわ。船の中で話しましょう」

船を手配した夏希の部下を指し示しながら、凜が言う。夏希はア  
ンヌツカと共に乗り込んだ。

「まずはノア川憲章条約が西部同盟と手を組んだかのような噂を  
流す。次いで、憲章条約がタナシス王国の解体を目論んでいるとの  
噂を広める。そしてタナシス愛国者を装って、憲章条約外交団を襲  
わせる。これによって、タナシス王国と憲章条約の関係を悪化させ  
る。なるほど。乱暴だけどそれなりに効果的な陰謀ね」

夏希の話を聴き終えた凜が、そうまとめながらこくこくとうなず  
く。

「ルルト王宮を訪れた外交団は、平原に向かったそうよ。目指すは、  
マリ・ハとススロンでしょうね。総会でタナシスへの反感を煽り、  
ススロン王国ではビアスコ王子の死を大げさに伝える……。もちろ  
ん、平原へも行くでしょうね」

オレンジをもぐもぐと食べながら、夏希は言った。気の利く凜が、  
道中で食事のために停船しなくてもいいように、数日分の食料を買  
い込んで川船に積んでおいてくれたのだ。

「まあ、このまま先行されて煽られても、あなたが総会で正確な報  
告を行い、すべてが西部同盟の陰謀らしいことを告げれば、事態は  
収まるんじゃないの？」

夏希に付き合うようにブドウをつまみながら、凜が問う。

「だといいんだけど」

状況証拠は、テロが西部同盟の計画的犯行であつたことを指し示  
している。だが、決定的な証拠はない。実行犯の士官は自害したし、  
捕らえられた隊士は自害の素振りも見せなかったところから見て、  
士官に命じられて犯行を手伝っただけの小物であろう。いくら尋問  
しても、黒幕の正体など知らぬに違いない。タナシス側が徹底した  
調査を行ったとしても、西部同盟の関与をうかがわせる証拠はたぶ  
ん挙げられまい。

「ところで、駿と生馬はどこにいるの？」

「駿は事務局に張り付きっぱなしよ。生馬は、五日ほど前に集めた情報を手土産に、マリ・八に戻ったわ。あたしだけ、あなたと拓海のバックアップのために、ルルトに残ってたの」

「じゃあ、西部同盟の外交団がマリ・八に行っても、あの二人がうまく扱ってくれるかもしれないわね」

「うん。駿なら、何らかの理屈をつけて足止めして、高原へ行かせないようにはしてくれたかも。期待しましょう」

そう言った凜が、いささか下品なやり方で、口中のブドウの種を川面に向けて吐き飛ばした。

97 噂との競争（後書き）

第九十七話をお届けします。

夏希と凜が乗る川船がマリ・八に到着したのは、真夜中のことであった。

とりあえず二人はアンヌツカを伴い、駿の自宅へと向かった。戸をがんと叩いて、駿と侍女を起こす。

「わかったわかった。とりあえず話を聞くよ。だから、生馬も連れてきてくれ」

麻の浴衣にしか見えない夜着をまとった駿が、あくび混じりに言う。

夏希と凜は隣の生馬の自宅に向かった。こちらも遠慮なく戸を叩いて起こす。

「おー、帰ってきたか。今着替えるから、待ってる」  
見事に腹筋の割れた裸体を腰高窓から突き出し、生馬が告げた。

駿と生馬に、テロ事件の概要とその後の出来事、拓海の推測などを話して聞かせる。

「拓海の見解に賛成だね。これは完全に、西部同盟の陰謀だ」  
駿が、断言する。

「同感だな。とんでもない連中だ。夏希の命まで狙おうとするとは興奮したのか、生馬が椅子を立てて部屋の中を歩きまわり始める。」「で、西部同盟の外交団はどこにいるの？ 総会の状況は？」

「時系列で説明するよ。外交団が到着したのが、今朝早く……というか、昨日の朝だ。海岸諸国や事務局出先機関からの事前連絡が一切なかったし、前回……カレイトンとクーゲルトの外交官が、憲章条約加盟を一方的に通告してきた件が頭にあつたから、警戒したんだが、連中も上手だね。テロ事件のことなどおくびにも出さずに、総会で短いスピーチをしたいと申し出て来たんだ。僕は内容を事前チェックするように進言したんだが、総会は外交団の自由な発言を

許した。そこで、爆弾発言さ。タナシス王宮でのテロ事件。ビアス  
コ王子とアフムツ氏族長の殺害。それによって生じた、タナシス王  
国に対する憲章条約外交団の反発。総会は大騒ぎになって、休会と  
なった。午後になって再開された総会で、僕は憲章条約外交団およ  
びタナシス王国から正式な報告ないし通告がない以上、軽々に動く  
べきではないと主張して、なんとかタナシスに関して非難決議など  
が出ることは防いだかね」

「情報に関しては、ただ漏れだ」と  
凜が、顔をしかめる。

「ああ。止めようがないよ。すでに、高原の一部にまで広がったと  
みていいだろう。明日にはユーロアン氏族がアフムツの死を知るこ  
とになるだろうね」

「ねえ、明日も総会は開かれるの？」

夏希はそう訊いた。西部同盟外交団の情報操作に対抗するために  
も、なるべく早く総会で正式な報告を行いたい。

「予定はないが、君が帰国した以上、正式な報告をしたいと申し出  
れば開催できるよ」

「そこで真相を詳しく述べて、各国の自制を促すしかないわね」  
「下手をすると、西部同盟の外交団を敵にまわすことになるな」  
立ったまま、生馬が指摘する。

「仕方ないわね。こんな卑劣な手を使う連中とは、組めないもの。  
ノノア川憲章条約は、タナシス王国の味方よ。リクスメースは、自  
分の命を賭けてまでわたしのことを守ってくれたのよ。タナシスと、  
憲章条約の関係を保つためにね。その想いには、報わなくちゃ」

「熱く盛り上がっているところ悪いんだが、最悪の状況も考慮して  
おいてくれよ」

駿が、小声で告げる。

「なに、最悪の状況って？」

「西部同盟が悪だ、という点については、僕も同意する。だが、僕  
たちがやっていることは国際政治だ。こいつは、一定のルールはあ

るが、審判のいないフィールドで行われるゲームなんだ。そこには、世間一般で言う正邪は存在しない。観客が声援を送るのは、強い者、共感できる者、そして、自分たちに利益をもたらしてくれる者だけだ」

「つまり、なんなのよ」

「総会で反タナシスの姿勢が鮮明になった場合、僕たちもそれに同調しなければならぬ、ということだ。僕らはあくまで憲章条約各組織の所屬であり、総会に隷屬する立場なんだ。それを、忘れないでくれ」

「それは、承知しているわ。総会で、代表たちを納得させればいいんでしょ」

夏希は不満気に言い放った。なにしろ西部同盟の放った刺客に殺されかけたのだ。彼らと手を組むなど、考えただけで吐き気がする。

「なあ、駿。西部諸国外交団の口を封じることが無理なのか？ 何か理由をつけて追い返すとか、できないものかな？」

生馬が、訊く。

「難しいねえ。一応、総会が正式な国家の外交代表に準ずる地位を認めてしまったからね。訪問目的が憲章条約との交渉、ということなので、やろうと思えば高原行きは阻止できるだろうが、なるべくやりたくはないね。外交官の行動を制限すると、あとあと厄介なことになりかねない。外交は、相互主義が基本だからね。今後、こちらの外交官が西部同盟に赴いたときに、色々と横槍が入りかねない」

「とにかく、明日の総会でのわたしの報告いかに、事態が変わってくるわね。駿、眠いところ悪いんだけど、報告内容まとめるの手伝ってくれない？」

「いいよ。凜ちゃん、悪いけど眠気覚ましのお茶を淹れるように侍女に申し付けてくれないか？ 生馬、君は寝てくれよ。昨日は忙しかったんだろ？」

「まあな」

「何かあったの？」

夏希は長身の青年に視線を向けた。

「警備体制を見直したんだ。西部同盟外交団がもたらしたニユースで、反タナシス感情が一気にもりあがっちゃったからな。特に、シエラエズ王女に対する警備を強化した。ススロン王国、ルルト王国、それにユーロアン氏族出身の者には、休暇を与えたよ。下手をするとか、『殿下の仇！』とか言って馬鹿な事をしでかす奴が出てこないとも限らんしな」

「それは、厄介ね。テロ合戦になったら、最悪だわ」

夏希はしかめっ面で言った。憎しみをぶつけ合うだけの報復ほど、非生産的なものはない。きちんとした政治的目標や大義名分のある戦争の方が。まだしも前向きかつ生産的というものだろう。

「そう言えば、駿はススロン貴族だったよね。ビアスコ王子とは仲良かったの？」

「まさか。相手は王位継承権第三位だよ。こっちは名前だけの下っ端貴族だ。面識は、あったがね。聡明な人物だったし、むろん痛ましいとは思っているが、それ以上の感情はないね」

駿が、肩をすくめる。

「外交部外交委員、夏希です。総会の決議に基づき、タナシス王国に派遣された外交団の団長を務めております。当外交団に課せられた使命はいまだ果たせてはおりませんが、皆様すでに御存知のように外交団に不幸な出来事があり、また情勢の変化もあり、急遽帰国し、この場で各国および各氏族の代表の皆様にご報告申し上げる次第です。まず始めに、今回タナシス王宮で不幸にもお亡くなりになられたススロン王国のビアスコ王子と、ユーロアン氏族のアフムツ氏族長を悼み、哀悼の言葉を捧げたいと思います」

駿と共同で書いた草稿を参照しながら、夏希は総会での報告をそのように始めた。

その後、時系列にしたがって、外交団の行動を詳細に述べてゆく。

王都リスオンへの到着。リュスメースとの協議。西部同盟への和平提案。ムータールへの移動。ササウとの協議。西部同盟側の提案内容。リスオンへの帰還。留守中の街の噂や、タナシス側の警備の強化にも言及し、すでにテロ事件の以前から『憲章条約とタナシス王国の関係を悪化させようとする謎の勢力』が暗躍していたことを印象付ける。

総会代表たちがもつとも興味を示すであろうテロの詳細は、淡々とした語り終始した。熱っぽく語れば、高原の代表あたりが興奮して鉈を抜きかねない。ただし、リュスメース王女が夏希の盾になつてくれたあたりは、意図的に感情を込めて喋った。

事件後のオストノフ国王の反応。さらに、帰国時の様子……オプア船の船長以下枢要な船員が行方不明となつた件も含めて……も、詳細に報告する。

「以上が、本日に至るまでの経過です。状況から見ても、外交団を襲つた刺客は、何らかの大きな組織に操られていた可能性が高い。そしてその組織は、わがノア川憲章条約とタナシス王国の外交関係を悪化させようと狙っている組織であることは明白です。各国代表、ならびに各氏族代表の皆様。この陰謀に乗せられることのないよう、お願い申し上げます。謎の組織の思惑通りタナシス王国との関係を疎遠にすれば、ビアスコ王子とアフムツ氏族長の死は無駄となりません」

「外交委員。その謎の組織とは、西部同盟のことなのかね？」

金茶色の髪をした、どこかの高原氏族代表……夏希は総会代表すべての顔を覚えているわけではないし、テーブルの上に置いてある所属を表す木片の文字も未だに読めないの、人種的特徴と服装からして平原や海岸諸国の代表ではない、としかわからない……が、訊いてくる。

「その組織の正体は、情報不足によりいまだつかめてはおりません」夏希は慎重な物言いをした。ここは総会である。下手なことを言えば、責任問題に発展するどころか、夏希のような高位の者で

さえ逮捕投獄の危険性すらある。

「しかしながら、その組織の目的が憲章条約とタナシス王国の関係を悪化させることにあり、そしてその行為が結果として西部同盟を利することになる、というのは確実でしょう」

「外交委員、タナシスは信頼できるのかね？」

夏希が顔を覚えている、エボダ王国の代表が問う。

「信頼に足る国家だと認識しています」

「しかし、いまだ第八の魔力の源を見つけ出していないではないか。今回の一件も、ひよつとしてタナシスの陰謀ではないのかね？」

海岸諸国代表の一人が、口を挟んだ。

「その可能性は僅少だと思われませぬ。我々を怒らせて、タナシスが得るものではありません」

「西部同盟に襲撃の罪を着せようとしたのでは？ もし仮に、すべてがタナシス王国の芝居だとすれば、貴殿はまんまとそれに乗せられたことになりませぬ」

「それは……仮にそうだとしても、憲章条約の基本姿勢は変わらな  
いわけで……」

「わがユーロアン氏族は、この一件を企てたのが西部同盟であれタナシス王国であれ、他の組織であれ、必ず報復することを、代表の皆様を証人に、ここに誓うものとする」

いきなり立ち上がったユーロアン氏族代表が、唐突に愛用の鉈を鞘ごと高々と掲げ、そう宣言した。

「同じ高原の民として、わが氏族も報復に参加させていただきますぞ！」

「オリオール氏族も同様です！」

「我々もだ！」

呆気にとられている夏希の眼前で、十名すべての氏族代表が愛鉈を掲げた。大声で、誓いの言葉を述べ合い、大騒ぎとなる。中には、感極まって泣き出す代表まで出る始末だ。

……やばい展開になっちゃった。

夏希は内心で肩を落とした。これで、どちらに転んでも、流血沙汰は避けられない。

議長が静粛を求め、ようやく高原の民たちの興奮も収まる。頃合いをみて、夏希は再び口を開いた。

「現状で、高原の皆様の報復対象を特定することは難しいでしょう。タナシス王国には、まだわたしの部下がおり、事実関係を調査中です。タナシス政府からの、公式な調査発表もまだありません。総会が本件に関する方針を打ち出すのは、いまだ時期尚早と思われます。ですから……」

「報告ご苦労様でした、外交委員」

議長が、夏希の発言を遮って、退席を促す。

「嫌な流れになっちゃったわね」

夏希の話聞いた凜が、諦め顔で言う。

「総会も、結局は各国、各氏族の思惑に流されるからな。国王や氏族長がどう考えるか。そして、国民や氏族戦士たちがそれを支持するかどうか」

生馬も凜同様、諦め顔だ。

「西部同盟が悪だと言うのはわかりきってるのに」

夏希は苦い思いを噛み締めた。

「ともかく、拓海からの追加報告と、タナシス王国からの公式な調査結果が来るまで、重要な決議がなされないように総会を押さえしておくよ」

うなずきながら、駿が言った。

「西部同盟がぼろを出してくれると、助かるんだがな」

生馬が、夏希を見やりながら言う。

「拓海に期待しましょう。わたしはシエラエズのところ顔を出してくるわ。何かいいアイデア持つてるかもしれないし」

「よく来てくださった、夏希殿。まずはわがタナシス王宮での不祥事、王族の一員として深くお詫び申し上げます」

再会の挨拶もそこそこに、シエラエズが真剣な面差しで詫びを入れてくる。

「わたしも、殿下にお礼申し上げます。妹君様に、命を救っていただきました」

「リクスメースにあのような勇気があったとはな。わたしの知らぬ間に、ずいぶんと大人になったようだ」

シエラエズが、目を細めて微笑む。

「夏希殿。すでにご存知と思うが、我が国と憲章条約の関係はこじれつつある」

お互い向かい合わせでテーブルについたところで、シエラエズが改まった口調で言った。

「これは危険なことだ。タナシス王国は、一度南の陸塊に侵攻し、撃退された。その後和解に漕ぎつけたとはいえ、いまだ悪感情は払拭されてはいない。それら双方の友好の妨げとなるいわば夾雑物が、西部同盟の暗躍で一気に吹き出してきたようだ。このような場合こそ、双方が冷静になり、どの道が平和共存に至る道なのかを見極める必要があると思う」

「おっしゃる通りです。ここで道を誤るわけにはいきません」

夏希は力強くうなずいた。

「そこで提案だが、総会ではつきりと西部同盟に加担しない、と宣言していただきたいのだ。彼らが陰險な工作に走るのは、タナシスと憲章条約の仲を裂けば、憲章条約が自分たちの味方になると見越してのことであろう。いくら手を尽くしても、憲章条約が手を貸してくれないと知れば、無駄な工作は止めるはずだ」

「ご意見はもつともですが、総会での議決は各国、各氏族の代表の意見に左右されます。わたしには、どうしようもありません」

「合議制の厄介な点だな」

シエラエズが苦笑しつつ、小さく首を振る。

外が騒がしい。

訝しく思った拓海は、自室を出ると宿舍の玄関ホールへと向かった。窓から外の様子をうかがっていた数名の護衛が拓海に気付き、姿勢を正す。

「何かあったのかい？」

「街路に、市民が集まっています。数百人規模でしょうか」

護衛の一人が答え、窓から離れた。拓海は歩み寄って、窓から外を眺めた。

「おうっ」

思わず声が漏れる。

低い垣根越しに、数多くの人の頭が見えた。確かに、数百人はいそうだ。なにか叫んでいる者も多いが、声が混じり合ってしまったので、何を言っているのかは聞き取れない。

「デモか。標的は、どうやら俺たちらしいな」

おそらくは、反憲章条約派の市民による示威行動なのだろう。

「外の警備陣の様子は？」

「警備団本部に、増援を要請したそうです。王宮にも、伝令を走らせたとか」

「しかし……原始的なデモだな」

拓海はつぶやいた。シユプレヒコールもなし。プラカードもなし。横断幕も旗もなし。ただ単に、人が大勢集まってがやがやと騒いでいるだけである。それゆえ、示威行動にも関わらず、何を目的としているかが判然としない。……少数人数でも主義主張がはっきりと伝わり、宣伝効果の高い現代の洗練されたものに比べれば、非効率極まりないデモである。

「ま、人数が多いうえに非暴力が徹底していないから、こちらのほうが怖いといえば怖いな」

タナシス人はこの世界では先進国民であり、暴力的性向は少ない。地方はともかく、王都リスオンは大都市にも関わらず犯罪も少ないと聞く。だが、このようなデモ隊にいったん火が点けば、たちまち暴徒と化すだろう。

「いまのうちに、外交団の人員を減らしておくか」

拓海は窓際から離れると、腕を組んだ。いまだ王宮で療養中……栄養のほとんどはコーちゃんジュースに頼ってはいるが、かなり回復してきた……のハルントリー王子の随員はともかく、ピアスコ王子とアフムツ氏族長の随員は全員帰してしまっても問題ないだろう。夏希の部下も、減らすべきだ。護衛の数はさほど多くない。なにかトラブルが起きた場合、守るべき人数が少ないほうが、より安全である。

「まずい、始まったぞ！」

窓に張り付いていた護衛が、叫んだ。

拓海は窓に駆け寄った。

デモ隊に変化が起きていた。怒号と悲鳴が、錯綜する。

一部が、暴徒化したのだ。

見守るうちに、何ヶ所かで垣根が倒された。それを乗り越え、宿舎の敷地に何十人も市民がなだれ込んでくる。すぐさま警備していたリスオン市警備団の兵士が駆け寄り、押し戻そうとする。

「全員を一カ所に集めろ！ 奥の大広間がいい。護衛は半数をつける。あとの半数はここに。時間を稼ぐぞ」

拓海は矢継ぎ早に指示を飛ばした。

「拓海様！」

リダが駆け寄ってくる。

「お下がり下さい、ここは危険です」

「いいや、引かないよ、リダ」

拓海は渋い表情で答えた。

「夏希から、後を託されてるからな。誰一人、怪我をさせるわけにはいかない」

結局、拓海の素早い指示は無駄に終わった。敷地内警備の兵士が奮闘し、侵入した暴徒を押し戻す。駆けつけてきた増援が、暴れている市民を追い散らした。暴徒化しなかったデモ参加市民も、強制的に解散させられる。

が……。

「最悪だ」

拓海は呻いた。

宿舍敷地内には、倒れ伏す数名の市民の姿があった。兵士が二人がかりで抱え、運ばれてゆくその姿に、生気は微塵もない。数で劣る警備兵が暴徒の建物内突入を防ごうと奮闘しすぎた結果であった。悪いのは暴徒化した市民であり、殺害はリスオン市警備団……つまりタナシス王国正規軍によるものだが、他の市民たちは責任は憲章条約にあると受け取るだろう。さらなる反発は、必至である。市民レベルで反憲章条約の気運が盛り上がれば、オストノフ国王でも制御しきれなくなるおそれがある。

「打つ手なしだな」

王宮でのテロに関し、西部同盟の関与を証明するような証拠はいまだ見出されていない。第八の魔力の源に関しても、進展はない。

「頼むぞ、夏希」

拓海は窓から、南の空を振り仰いだ。仮にタナシス王国が完全に反憲章条約の政策を打ち出しても、憲章条約側が冷静であれば、衝突は回避できるだろう。二大勢力が正面切つて軍事力を行使するとなれば、それは長く凄惨な戦いになるはずだ。死者は数万では済まないだろう。絶対に、避けねばならない。

98 報復の誓い（後書き）

第九十八話をお届けします。

「これはこれはエミスト殿下あゝ。ようこそおいでくださいましたあゝ」

コーカラットが、ペこりとボディを前に傾ける。

「妹に会ってもよろしいですか、魔物殿」

エミスト王女は丁寧な口調で訊ねた。すでに王宮内でのコーカラットの評価は、『リュスメース王女の命を救った魔物』として名高く、一部では貴族に叙せられるべき、との声も上がっているほどである。

「もちろんですうゝ。今お食事中ですが、姉君様がお顔を見せてくだされば喜ばれるはずですよゝ」

そう言ったコーカラットが、触手で扉を開けた。別の触手が、入室を誘うかのように振られる。

「リュスメース。具合はどうです？」

「姉上」

寝台の上で上体を起こし、積み重ねたクッションにもたれていたりユスメースの表情が、エミストを目にしてぱつと輝く。

「だいぶいいようですな」

寝台の脇に立ち、妹を見下ろしながら、エミストは微笑んだ。やはりやつれた感じだが、顔色はかなり良くなったし、目にも生氣がある。

「少しお話したいのだけれども、よろしい？」

「はい、大丈夫です」

リュスメースが、小さくうなずく。

「魔物殿。濟まないけれど席を外していただけますか？」

エミストは、傍らに浮かんでこちらを注視しているコーカラットにそう呼びかけた。

「これは気が利きませんでしたあゝ。内密のお話だったのですねえ

）。では、失礼いたしますですう」

コーカラットが、ふわふわと部屋の外に出ていった。触手が、静かに扉を閉める。

それを見届けたエミストは、腰掛けに腰を下ろした。

「リュスメース。知恵を貸して欲しいの」

エミストは、昨今の情勢を物語った。大衆の反憲章条約気運の高まり。外交団宿舎での騒動。シエラエズ王女が報告してきた、憲章条約総会の模様と南の陸塊主要国の動き。

「お父様は何度も声明を発表し、憲章条約との友好の維持を訴えています。効果があまり上がっていません」

いささか疲れたような表情で、エミストは言った。いや、実際彼女は疲れていた。シエラエズ王女は長い間王都を留守にしているし、有能かつ働き者だったリュスメースはこうして療養中。三人で分担していた責務が、エミスト一人にのしかかって来ているのだ。

「市民には、全般的状況が見えていないのでしょうか」

張りのない声で、リュスメースが言った。

「これだけ国内が乱れている中で、憲章条約を敵に回したら、勝てるはずがありません」

「その通りなんですけど、我が国は、長年市民を騙してきましたからね」

エミストは、無念そうに言った。

タナシス王国は、征服王朝である。

その母体となった国家は、山間の地であるデイデイウニにある中堅国家であった。オストノフから三代前の国王が、山を超えて隣国のリスオンに攻め込み、これを併合したのが、大国化の嚆矢である。あとを受けた先々代の国王は、いわゆる『大タナシス主義』……すべてのタナシス人は一つの国家にまとまるべし、との理想を掲げて、周辺諸国との合併や併合、征服を繰り返し、北の陸塊に存在するタナシス人居住地をまとめ上げ、国名を民族名と同じタナシスとし、王都をリスオンに定めた。先代の国王はその軍事力を周辺民族国家

にも向け、ついに北の陸塊すべてをタナシス王国の版図に組み入れることに成功する。

そして、オストノフの代になってからの、ラドーム島の併合。これら一連の軍事行動を正当化し、かつ国民の支持を得るための方策のひとつが、意図的に誇張された宣伝であつた。『もつとも人口の多いタナシス人だからこそ他の民族の守護者たるべき』『文化中心者たるタナシス人には他の民族を教え導く責務がある』『タナシス王国による北の陸塊統一は、歴史的必然である』『タナシス正規軍は精強かつ無敵である』などなど。

これら宣伝文句を盲信し、タナシス人であり、タナシス国民であることに誇りを持って、兵役や納税に唯々諾々と従つてきた市民たちが、昨今の祖国の無様な姿……財政の窮乏、南の陸塊遠征作戦の失敗、西部同盟の蜂起とそれに対する腰の引けた対応、大国とは思えぬ憲章条約との交渉ぶり……を目にして、幻滅したとしても不思議はない。そして、流布された憲章条約のタナシス解体陰謀説を信じ、祖国に対する憤りを反憲章条約運動に転嫁させるのも当然の成り行きと言えよう。

「なにかよい解決策はありませんか？」

エミストは問うた。妹の聡明さは承知している。彼女であれば、優れた方策を見いだせるかもしれない。

「軍事行動しか思いつきません。西部同盟に対し、短期間でよいから激烈な攻撃を仕掛けるのです。市民の怒りの矛先を、西部同盟に向けさせるのです。今のタナシスは、水を溜めすぎた貯水池のようなものです。堰が決壊するのを防ぐには、あえて堰に切れ目を入れて水を逃してやるのが良策かと」

「賭けですね。下手をすると、切れ目から堰が決壊しかねない」

「そうです。絶対に失敗しない、いえ、失敗の許されない軍事行動にならざるを得ません」

妹の言葉に、エミストは深くうなずいた。

「シエラエズを呼び戻す必要がありそうですね」

「それはおやめ下さい、姉様。シエラエズ姉様は、憲章条約と確かな人脈を築いておいでです。外交上互いに疑心暗鬼になっていて、今、なによりも必要なのは人と人との信頼関係です。シエラエズ姉様は、一人だけですが信頼できる人物をお持ちです」

「竹竿の君ね」

「はい。わたくしも、交渉を通じてナツキ殿と言葉を交わし、信頼できる人物という確証を得ました。彼女とのパイプを潰してはいけません。いずれ、彼女の存在は貴重なものになるでしょう。姉様もできれば、ナツキ殿と親しく交わって、互いの信頼度を深めていたきたい……」

言葉を切ったリュスメースが、けほけほと咳き込んだ。エミストは立ち上がると、サイドテーブルの水差しの中身を木製のカップに注いだ。水でも茶でもない、なにやら黄色い液体が入ったカップを、リュスメースの手に押し付ける。

「ありがとうございます、姉様」

リュスメースが、カップを口元に運んだ。二口ほど飲み下し、安堵の表情になる。

「なにかしら、この飲み物は？ 果汁？」

水差しの中を覗き込みつつ、エミストは訊いた。

「魔物が出してくれた飲み物です。わたしの食事は、これなんですよ」

微笑みつつ、リュスメースが言った。

「魔物が出したって……まさか、あの……」

エミストは、リュスメースの手術の様子を思い出した。たしか、魔物が黄色い液体を出して、様々なことに使っていたはずだが、この水差しの中身と同一だというのだろうか。

「おいしいですよ。一口、いかがですか」

リュスメースが、カップを差し出す。

「遠慮しておきます。ところで、なにか入り用なものはありませんか？」

「特には。あ、でも……」

リュスメースが、歯切れ悪く口ごもる。

「あなたらしくないわね。なんでも言っただけじゃない」

「では、遠慮なく。また来ていただけませんか？ 姉様とふたりきりでお話したのは久しぶりですが、とつても楽しいですから」

少しばかりはにかんだように、リュスメースが言う。

「お互い忙しい身でしたからね」

微笑んだエミストは、中腰になると衝動的に妹を抱きすくめた。

「姉様……」

「ごめんなさいね、リュスメース。最近、姉らしいことをしてあげられなくて」

エミストは、リュスメースの黒髪を撫でた。……こんなことをするのは、何年ぶりだろうか。常に人目……女官や侍女、書記に近衛隊士などの視線にさらされているので、王位継承権一位の人物としての威厳を保たねばならない必要性から、リュスメースとのスキンシップは大人になってからは皆無だったのだ。

「構いせんわ、姉様。姉様は、いずれタナシス王国の女王となる身でいらつしやる。わたくしは、妹としてそれを支える立場です」

抱きすくめられたまま、リュスメースが言う。その声音に喜色が混じっていることに、エミストは気付いた。常に気丈に振舞っている妹も、いまだ少女といえる年齢なのだ。未だ恋人を……むろん同性であるが……を持たぬ身としては、姉との肉体的接触が嬉しいのだろう。

「情勢が落ち着いたら、シエラエズも交えて水入らずでしばらく過ごしたいわね」

「いいですわね。楽しみですわ、姉様」

「殿下。その……女性と『なに』をされるのをお控え下さい」

歯切れ悪く、夏希はそう申し入れた。

マリ・八市街地の外れにある、シエラエズの宿舎の居間である。  
「警備の都合とやらで、ろくに外出もさせてもらえぬのだ。あれも、運動の一種であろう。健康に、良いぞ」

シエラエズが、妖艶な笑みを見せて夏希に流し目を送る。

「だからと言って、身元の不確かな女性を連れ込んでお遊びになるのは、本末転倒です。万が一のこともあります。お控え下さい」

いささか強い調子で、夏希は諫言した。すでに、タナシスの王都リスオンで外交団宿舎が襲撃されたとの情報は、ここマリ・八にも届いていた。以前に比べれば、一般市民の対タナシス感情はかなり悪化している。スロン王国関係者が、ビアスコ王子の仇討ちと称して、シエラエズ王女の命を狙っているという不穏な情報も、夏希の耳に入っていた。ここでシエラエズの身に何かあれば、憲章条約とタナシス王国の関係は回復不可能なまでにこじれてしまうだろう。「それならば、夏希殿が相手してくれればよいのだ」

澄ました顔で、シエラエズが言っただけのける。

「そなたならば身元は確か。わたしも安心して楽しめること請け合  
いじゃ」

「殿下……」

「なんなら、そなたが連れ歩いている副官でもよいぞ。けっこう美しい顔立ちをしているし、体つきもなかなかそそのものがある」

「彼女には数日暇を出してあります。長旅に付きあわせたりして、かなり負担を掛けましたから」

夏希はため息混じりに応じた。しばらくマリ・八を動く予定はないし、今後タナシス王国との関係改善を進めようとすればさらに忙しくなるのは確実なので、今のうちに骨休めをしておいてもらおうと、まとめて休みを取らせたのだ。

「そうか。それは残念だ。というのは冗談じゃが、最近退屈しているのは事実じゃ。今日はもう少し遊んでいってくれぬか？ そうじゃ、昼食をご一緒しよう。構わぬかな？」

「それくらいでしたら、お付き合いしますわ」

暇を持て余しているわけではないが、その程度の時間なら捻出できる。これも、憲章条約とタナシス王国の友好に役立つだろう。

食堂の隅に置かれた小さなテーブルに座っていた中年女性が立ち上がり、入ってきたシエラエズと夏希に深々と頭を下げる。身なりからして侍女でも料理人でも護衛でもないようだ。

「どなたですか？」

「毒見役だそうだ」

軽い口調で答えたシエラエズが、白い麻のテーブルクロスが掛かった大きな食卓の上座にさっさと座る。夏希もその対面に座った。

すぐに、中年男性の料理人と侍女が木製のワゴンを押して現れた。料理人のワゴンには、鍋や水差し、壺などが並んでいる。一方、侍女のワゴンには皿や鉢などの食器類が積み重ねられていた。

侍女からスープ皿を受け取った料理人が、そこに鍋から冷製らしいスープを少量注ぎ、中年女性の座る小テーブルに置いた。すかさず女性がスプーンを取り上げ、スープを一匙掬った。じっくりと目で観察してから、鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。おもむろに口にスプーンを突っ込み、吟味する。

中年女性が、小さくうなずいた。うなずき返した料理人が、スープ皿に鍋の中身を注ぎ入れる。侍女が、それをシエラエズと夏希の前に置いた。

……なんか、食欲失せそうね。

夏希は内心でぼやいた。

昼食のメニューは、シエラエズの好みに合わせたのであろう、きわめて北の陸塊臭の強いものであった。ポタージュのような、多種の野菜を煮蕩けさせた冷たいスープ。冷肉の薄切り果汁系ソース掛け。根菜と肉の炊合せ。塩と香辛料を効かせた焼き野菜。ピーナッツ豆腐のような味と食感の煮凝りのようなもの。輸入物の小麦粉を使ったパン。

これらすべての料理と食物は、毒見役の検査を受けてから食卓に

供された。パンなどは、いちいちナイフを入れて一片を切り取り、食べてから許可を出すという念の入れようである。

デザートは、淡いピンク色の胡瓜のようなフルーツだった。これは皮ごと食べられるもので、味はキウイにちよつと酸味を足したような感じである。

毒見役がナイフで半分にしたそのフルーツを、夏希はさらにナイフで小さく切つて、口に運んだ。先に食べ終わったシエラエズが、侍女にお代りを所望する。

「北の陸塊にはない果物だからな。南の良いところのひとつは、多彩でおいしい果物が豊富にあることだ」

言い訳するかのように言ったシエラエズが、夏希を見て微笑む。

「それには同意しますわ」

夏希は最後の一切れを口に押し込んだ。それとほぼ同時に、厨房へとつながる扉が、荒々しく引き開けられた。

数名の男性が、食堂に乱入してくる。いずれもが、抜き身の長剣を手にしていた。

思わず腰を浮かせた夏希の脳裏に、つい先日のタナシス王宮でのテロの様子が蘇った。

……ここマリ・八で、同じような状況に出くわすとは。

夏希はおのれの不運を呪った。

「何者か！」

すつくと立ち上がったシエラエズが、張りのある声で一喝する。

「スロン貴族バンドと申す。シエラエズ王女。殿下の仇、取らせていただく」

三十前後くらいのも、なかなか精悍な顔つきの男性が、手にした長剣の切っ先をシエラエズに向けまっすぐに突き出した。その背後には、部下らしい若者が五人ほど付き従っている。

立ち上がった夏希は必死に状況を分析した。自身は武装していないし、シエラエズも丸腰だ。一方敵は全員が長剣を手にしている。

毒見役のおばさんは硬直しているし、料理人は腰を抜かしたらしく床に這いつくばっている。侍女は蒼白な顔で、口元に手を当てて突っ立っているだけ。この三人は、当てにしないほうがいいだろう。幸い、廊下につながる扉からは誰も入ってきていない。うまく時間を稼ぎ、隙を衝けばそこから逃げ出すことも可能だろう。しかし……警護の連中は何をやっているのか？ 生馬の部下たちなら、刺客の六人くらい、あっさりと阻止できそうなものだが。

「バンダとやら。ひとつ訊こう。なぜわたしの命を奪うことがピアスコ殿下の仇討ちになるのか？」

嘲りの色さえ見せて、シエラエズが高飛車に問う。

「ピアスコ殿下を殺害したのはわたしではない。わが王家でもない。タナシス王国でもないのだぞ？ 逆恨みにも、ほどがあるな」

夏希はシエラエズの胆力に感心しながら、その言葉を聞いていた。丸腰で、刺客相手にこれほどまで豪胆になれるとは……。刺客が繰り出した剣の前に身を投げ出したリュスメースの勇気も見上げたものだったが、シエラエズのこの度胸もたいしたものである。王家の血ゆえなのだろうか。

「黙られよ。お命、いただく」

バンダが、剣を構え直した。

「ちよつと待ちなさい。今ここで王女を殺害したら、大変なことになるわよ」

夏希は慌てて口を挟んだ。

「夏希殿には危害を加えるつもりはありません。ここは下がっててください」

バンダが、血走った目を夏希に向けた。

「そうはいかないわよ。わたしは、ピアスコ殿下と共にタナシスへ赴いたのよ」

どうやら殺されることはないと判断した夏希は、少しばかり安堵しながら言葉を継いだ。

「殿下のお考えは、憲章条約とタナシス王国の友好促進だった。お

亡くなりになる直前まで、そうだったのよ。だから、ここでシエラエズ王女を殺害し、憲章条約とタナシス王国の関係を悪化させれば、殿下の遺志に背くことになるわ。それでも、いいの？」

「構いません。殿下が亡くなったことで、情勢は変化したのです。」

タナシス王国は、我らの敵だ」

バンダが、言い切る。

シエラエズが動いたのは、その時だった。

シエラエズが、一挙動で手前にテーブルクロスをさっと引き抜いた。刺客たちが明白な反応を示せないうちに、それをぱっと空中に投げ出す。

白く大きな麻布が、刺客たちの視線を遮りつつ、彼らの方へとふわりと広がりながら迫る。

「夏希殿！」

叫びながら、シエラエズが廊下へ通じる扉にぶち当たった。扉が開き、転がるようにしてシエラエズが飛び出してゆく。数瞬遅れて、夏希も廊下に駆け出した。走ってゆくシエラエズのあとを、必死に追い掛ける。

シエラエズが一室へと飛び込む。夏希も、続いた。

シエラエズが逃げ込んだのは、どうやら寝室のようだった。大きな寝台が、結構広い部屋の中央にでんと置かれている。シエラエズが四つん這いになって、その下に腕を突っ込んでいた。三振りほどの長剣を、そこから引っ張り出す。

「夏希殿は、こちらの方が扱い易からう」

次いで手槍を引っ張り出したシエラエズが、左手で鞘付きの長剣を一振りつかむと立ち上がった。右手の手槍を、夏希に押し付ける。長さ一メートル二十センチくらい、小ぶりの槍だった。確かに、夏希にとっては剣よりも扱い易い得物だ。

「殿下、しかし……」

「迷っている暇はないぞ」

シエラエズが言って、長剣の鞘を払った。

戸口から、刺客が突っ込んでくる。

夏希は慌てて手槍の鞘を外した。

先頭を切って突っ込んできた刺客……バンダではなく、若い男……に、シエラエズが斬り込んだ。刺客が、それを剣で受ける。

夏希は二人目の刺客の腹を目掛け、鋭い突きを繰り出した。刺客が、飛び退いて避ける。だが、その動きは失敗だった。続いて突っ込もうとした三人目の刺客に、もろにぶつかってしまう。

二人目と三人目の刺客の姿勢が、大きく崩れた。

夏希は突きを矢継ぎ早に繰り出した。このような場合狙うべきは腰から下である。上体ならば、身体を反らせたり捻ったりして躲すことが可能だが、腰から下は足さばきで躲す以外に方法はない。そして、いったん姿勢を崩した状態で、きれいな足さばきを行うのは難しい。

三回目の突きが、刺客の左太ももに突き刺さった。

刺客が悲鳴を上げ、膝を付く。三人目の刺客が、前に出ようとす

る。若干の余裕を得た夏希は、槍の穂先を左に向けた。打ち合っているシエラエズと一人目の刺客の様子は、先程から横目で確認している。

夏希は一人目の刺客に向け突きを繰り出した。刺客が身を捻ってこれを躲す。

生じた隙に、シエラエズが乗じた。剣先が、刺客の左手首を切り裂く。鮮血が飛び散り、刺客が長剣を取り落とす。

すかさず、四人目の刺客が前に出た。三人目の刺客も、膝を付いている二人目を押しつけるようにして前に出る。

夏希は視線を刺客たちに固定したまま一歩下がった。シエラエズも、下がる。

「さすが、竹竿の君だな。見事な腕前だ」

笑みの混じった声で、シエラエズが言う。

「殿下もお見事です」

夏希はそう返した。声に喜色が混じっていることに気付き、当惑する。絶体絶命の危機なのに、それを楽しんでいるかのような自分に、啞然としてしまう。

「死にたいのですか、夏希殿。これ以上抵抗すると、あなたでも容赦しませんぞ」

五人目の刺客を従えて、悠然とバンダが現れた。

「剣を引きなさい、バンダ。ピアスコ王子が亡くなる直前に、何をしたか知ってる？」

いつでも突き出せるように手槍を構えながら、夏希は言った。

「王子はね、わたしを庇ってくれたのよ。丸腰だったのにな。あなたは、その王子が庇った女性を、そしてその女性を命がけで救った女性の姉を殺そうとしているのよ。わかってる？」

「問答無用！」

バンダが一声応え、長剣を振りかざしてシエラエズに挑み掛かった。五人目の刺客も、続く。

夏希には、三人目と四人目が迫った。

夏希は部屋の隅に退いた。相手は二人である。開けた所で戦えば、背後に回られて死ぬことになる。コーナーに追い詰められたボクサーのごとく、とりあえず手数だけを稼いで、カウンターを喰らわないようにしなければならぬ。

……アンヌツカに暇を出さねばよかった。

夏希は心底悔やんだ。彼女がいてくれれば、刺客の二人くらい余裕で引き受けてくれたらう。

汗で滑りやすくなった手槍を、夏希は必死で操り続けた。

「ぎゃーああっ！」

いきなり、複数の悲鳴が響いた。

悲鳴の主は、バンダと五人目の刺客だった。長剣を取り落とし、もがき苦しんでいる。そのまわりに、白く薄い煙のようなものが立ち込めている。

戸口には、料理人と侍女の姿があった。手には、大きな鍋を下げ

ている。

お湯だ。

鍋に沸かした熱湯を、バンダと五人目の刺客にぶっ掛けたにちがない。……いかにも料理人らしい攻撃方法だ。

残る二人の刺客が、浮き足立つ。

シエラエズが、すかさず前進し、バンダと五人目の刺客に一太刀ずつ浴びせた。そしてそのまま、突っ立っている料理人と侍女を守るかのように、二人の前に立ちはだかる。

「剣をお捨てなさい。バンダに命じられて付いてきただけなら、寛大な処分で済むはずよ」

夏希は無理やり声を張って、残る二人の刺客に通告した。精神的にも肉体的にもかなり参っていたが、ここで弱気を見せるわけにはいかない。

刺客二人がためらいを見せた。お互い目を見交わし合う。

……もう一息。

「すぐに剣を置けば、命は助けてあげましょう。約束します」

刺客二人が、うなずきあった。剣を手にしたまま、窓に駆け寄る窓枠を乗り越え、庭へと逃げ出す二人を、夏希は手出しせずに見送った。下手に阻止しようとすれば、死に物狂いの抵抗をされて返り討ちにあうおそれが強い。ここで最優先すべきは、シエラエズと自分の身の安全である。

「殿下。お怪我はありませんか？」

夏希は手槍を携えたまま、シエラエズに駆け寄った。

「無傷、とはいかなかったな」

シエラエズが、痛そうに顔をしかめた。顎先から、鮮血が滴っている。

夏希は手槍を床に突き刺すと、懐から手拭いを取り出した。折り畳みであるそれを、シエラエズの顎先に当てがう。

「警備の者と医者を呼んできてちょうだい」

夏希は、依然呆けたように突っ立っている料理人と侍女に命じた。

「警備の者なら、毒見役殿が呼びに行っています。わたしは、医者  
を呼んできます」

呼びかけられて我に返ったのか、急いた口調で料理人が言った。

「傷のお薬があったはずです。それ、取ってきます！」

侍女も言つて、きびすを返そうとする。

「あ、その前に」

夏希は二人を呼び止めた。

「二人とも、実にいいところで駆けつけてきてくれたわ。礼を言  
います。あとで、正式に報奨を得られるように取り計らうから。大手  
柄よ。タナシス王国の王女様を救ったんだから」

99 増幅（後書き）

第九十九話をお届けします。

「王女に毒を盛られることは警戒していたが、まさか警護の連中が一服盛られるとはな……」

生馬が、悔しそうに言う。

憲章条約事務局の一室である。すでに日は傾き、開け放した窓から浅い角度で入ってくるオレンジ色に近くなった日差しを浴びながら、四人の異世界人は反省会じみたものを開いていた。

シエラエズ王女暗殺を企てたスロン貴族バンダの手口は、なかなか鮮やかなものであった。警備の兵士やほとんどの使用人の食事は、シエラエズ王女の食事を作るのと同じ料理人が、手伝いの女性や侍女とともに調理するが、それが供されるのは通常の食事時間よりもかなり前である。もちろん、シエラエズ王女に適切な時間に出来立ての料理を食べてもらうための配慮だ。

バンダの一味は、あらかじめ食材……たぶん水……に大量の麻痺毒を仕込んでおいた。そして警備陣は、その水を使った昼食を食べ、ほどなく毒に当って身動きが取れなくなったのだろう。バンダらは倒れ伏して呻いている警備兵を尻目に、堂々と正面から乗り込んできたというわけだ。料理人と給仕役の侍女、そして毒見役はシエラエズの食事が終わってから余り物で昼食を摂る決まりだったから、毒には当たらずに済んだ。そしてシエラエズの食事に使われる水は、通常の水道の水ではなく、特別に樽詰め毎日運ばれてくるよりおいしい鉱泉水だったので、昼食を食べたにも関わらず夏希もシエラエズも倒れずに済んだのである。

「まあ、警備に死人が出なかっただけでも、よしとしないと」

夏希はそう言って生馬を慰めた。大量の水で薄められたせいか、かなり強い植物毒だったにも関わらず、一服盛られた兵士たちの中で死亡した者はいなかったし、重篤患者も一人も出なかったのだ。

「だが、こちらの面子は丸潰れだ。襲撃を防げなかったうえに、シ

エラエズに怪我をさせちまったからな。襲撃を警戒して、俺自ら警備の見直しを行った矢先の出来事だし」

生馬がなおも悔しげに言い募る。シエラエズの怪我は、顎の骨まで達するほどの深い傷であった。むろん命に関わるようなものではないが、縫い合わせた傷跡は一生残るであろう。美しい王女の顎に残る、醜い傷跡。これを目にしたタナシス市民がどのような感情を抱くのかを想像して、夏希はぶるっと身を震わせた。

「王女に公式な声明を出してもらおうしかないね」

駿が、言った。

「今回の事件は不幸な出来事ではあるが、きわめて個人的な犯行であり、スロン王国はもちろん憲章条約を非難するつもりはないこと。この事件は憲章条約とタナシス王国の関係を損ねるようなものではないこと。この二点を骨子とする声明だ」

「そうね、賛成だわ。下手に帰国して、市民にあの傷を見せるより、声明だけで済ませたほうが傷が少なくて済みそうだし」

「とにかく、悪い流れを断ち切る必要があるわよ。ねえ、駿。各国の反応はどうなの？」

凜が、訊く。

「スロンは平謝りだ。バンダはビアスコ王子と個人的な友人でもあるほどの、高位の貴族だったからね。明日、国王自らが見舞いと名目でマリ・ハを訪れ、シエラエズに謝罪するそうだ。他の諸国は……当惑しているようだね。当然と言えば当然だが。高原や海岸諸国の反応は、まだ入ってきていないよ」

「夏希。シエラエズの方は頼んだぞ。あの姐さんを本気で怒らせたら、開戦必至だからな」

生馬が、長身を折って夏希を拝むように言う。

「とりあえず、怒ってはいないわよ。内心はどうだかわからないけど、表面上はね」

施術院から駆けつけた医者……コーちゃんがいれば任せるのだが、あいにくとまだまだタナシス王国滞在中である……による治療を終え

たシエラエズと話し合ったが、王女は夏希が意外に思うほど冷静であった。その場で非公式にはあるが、この件に関しススロン王国や憲章条約を非難するつもりはないと、くぐもった声で……顎の傷を気遣って口を大きく開けないので、どうしても不明瞭な発音になる……明言してくれたほどである。

「まあ、外交的な立場をわかまえている、ということでしょうね。ところで、逃げた刺客の行方は？」

凜が、訊いた。

「杳として知れず、だ。まあ、名前もわからず、目撃者が顔もろくに覚えていない状況では、探しだすのは無理だろうな」

「悪かったわね」

夏希は顔をしかめた。いろいろ慌てていて、刺客の顔を覚えるところまで気が回らなかったのだ。ちなみに、他の刺客はバンドを含め全員存命で、施術院で治療を受けたのちに拘束されている。

「しかし……どうしようもないね、この状況は」

駿が、困り顔で頭を振った。

「今回の件は偶発的なものだと思うが、西部同盟側は南の陸塊で反タナシスの動きが出ることを期待して外交団を送り込んできたはずだ。向こうはタナシス本国での扇動や情報操作の準備を、おそらくはオストノフの先代の王の頃から嘗々と進めていたのだろう。それに対し、こちらはタナシスの内情などごく最近知ったに過ぎない。勝負にならないよ、これは」

「同じ土俵で戦えない以上、退くのも手だがな」

生馬が、言った。

「退くって……どうするの？」

「タナシスとの外交関係を凍結しちまうんだ。一切手を退くのだ。もちろん、西部同盟との関係も切る。勝手に潰し合いをさせる。そうすれば、西部同盟もこちらにちよっかいは出さないだろう」

「……第八の魔力の源がなければ、それでもいいんだけどね」

「結局行き着くところはそれよね」

夏希のため息混じりの言葉に同調するように、凜が肩をすくめる。  
「実際問題として、長期的視野に立てば北の陸塊の混乱は憲章条約  
にとって安全保障の面では危険なだけだね」

駿が、言う。

「どうして？ 酷な言い方だけど、北の陸塊が疲弊すれば、攻めて  
くることもないんじゃないの？」

夏希はそう訊ねた。

「短期的に見ればね。だが、古代中国みたいに長引く戦乱で人口が  
十分の一に減る、などという事態を別にすれば、多少の政治的混乱  
や期間限定の内戦によって生ずるのは、他国の視線に立てば外交政  
策の変更や軍事ドクトリンの変化くらいなものだ。つまりは、友好  
国が一時的な混乱を経て敵国になりかねない、とうことだね」  
「なるほど」

「北の陸塊は人口も多く、文化程度も高い。ここに反憲章条約を掲  
げる強国が存在することは、絶対に避けねばならない。紆余曲折あ  
ったが、いまのところタナシス王国は我々の友好国だ。だが、この  
状態が永続するという保証はどこにもない。手を退いた途端に、反  
憲章条約勢力が北の陸塊を統一する、なんてことはありえないだろ  
うが、何十年後かにそのような国家が生じる可能性はある。憲章条  
約としては、常に北の陸塊を監視し、場合によっては積極的に干渉  
しつつ、反憲章条約勢力の台頭を抑制する、というのが賢い選択だ  
と思うね。さしずめ、今のアメリカ合衆国がユーラシアに干渉し続  
けて、反米勢力の拡大抑制に務めているようなものだね」

「社会主義国家の増殖防止、ソビエト連邦の崩壊。反米イスラム国  
家への圧力。中華人民共和国への警戒。……日本に対する過度の干  
渉も、同じ文脈だな」

皮肉げに、生馬が言う。

「もはや市民を押さえておくのは無理だ。なにか積極的な手を打た

ねば、わたしは玉座から引きずり降ろされてしまつぞ」

リュスメースの寝台の傍らで、オストノフ国王が愚痴る。

シエラエズ王女に対するススロン貴族の襲撃事件が報じられて以来、タナシス本土における反憲章条約感情はさらなる高まりを見せていた。オストノフ国王は何度も国民向けに声明を発表し、タナシス王国がノア川憲章条約へ加盟しないことを確約し、憲章条約に関する悪意ある噂を否定し、さらにタナシス王国と憲章条約間の友誼は不変であり、堅持されるべきものだということを強調していたが、あまり効果はなかった。今では、有力貴族の間はまだ憲章条約との間の各種取り決めを見なおそうと主張している者が出てくる始末である。

「憲章条約の動きはどうなのですか？」

横たわつたまま、リュスメースは訊ねた。

「シエラエズが、総会で西部同盟への支援禁止宣言を出させようと骨折っているところだ。襲撃事件で、条約諸国はシエラエズに引け目を感じているところだからな。うまくいくかも知れん」

「ひとつ、献策があるのですが」

「言ってくれ」

「憲章条約と、新たな条約を結ぶのです。双方の軍事力を融通させるような」

「融通？」

「ある種の相互防衛条約です。共通の敵が現れた場合、兵力を派遣しあえるような条約です」

「それはまずかるう。西部同盟を自動的に敵にまわすような条約、南の陸塊が承知するとは思えぬ」

懐疑的な表情で、オストノフが小さく首を振る。

「対象地域に、西部地域を含めなければよろしいかと。南の陸塊、西部地域を除く北の陸塊、ラドーム島を含む大海において、憲章条約加盟国およびタナシス王国を脅かす軍事的脅威が現れた場合、憲章条約とタナシス王国は協力して軍事行動を行うものとする、とい

った内容にするのです」

「……なるほど。憲章条約の軍事力を、東部地域への抑えにするわけか」

タナシス本土東部地域にあるペクトール公国とメリクラ自治州。最近この両者の反タナシス派の動きは活発であり、西部同盟に倣って武装蜂起する可能性も囁かれている。オストノフが西部同盟に対し積極的な軍事行動を開始できない最大の理由が、これである。正規軍兵力を西部地域に集中すれば、東部での武装蜂起を促すことになりかねないのだ。

「しかし……その条約では、憲章条約側にメリットはほとんど無いな。ただで結んでもらえるとは思えん。こちらが差し出せるものは、なにも無いと思うが」

「ひとつだけあります」

「なんだ？」

「ラドームです。あの島を、憲章条約に売却するのです」

「それは愚策だ」

オストノフが、語気荒く言った。

「ただでさえ、わたしは憲章条約相手に譲歩しすぎているという批判を浴びているのだ。ここで領土割譲などしたら、致命的打撃となる。それに、ラドームが独立し、王国が復活すれば、他の公国や自治領を刺激することになる」

「だからこそ、譲渡でも割譲でも贈与でもなく、売却するのです」

正確に言えば、ラドーム島は王家の財産でも政府の所有物でもありませんから、領土としての権利を憲章条約に移し、その対価を得るという形になります。姉様に調べていただきましたが、幸いなことに有力貴族の中にラドームに広い領地を有している方は一人もいません。売却自体も、憲章条約から購入の申し入れがあった、というにすれば、批判を最小限に抑えることができるでしょう。おそらく憲章条約はラドームを独立させるでしょうから、ラドーム人はこれを歓迎するはず。憲章条約側も、ラドームを勢力圏に組

み入れることは安全保障上からも利点が多い。タナシスには売却益が入りますから、財政の立て直しが可能です。さらに、見返りに相互防衛条約を結べれば、東部地域をほぼ完全に押さえ込めます。彼らが武装蜂起すれば、こちらは憲章条約軍の派兵を正式に要請できるのですから。財政に余裕が生じ、なおかつ西部同盟に憲章条約が加担しない状況を作り出せば、こちらの制圧も速やかに行えるでしょう。島ひとつと、多少の面子を失うだけで、事態は劇的に改善されるはずです」

「なるほどな。大胆すぎるが、どうやら良案のようだ。さっそく、閣議に諮ろう」

「……という提案を、シエラエズから持ちかけられたのだけど」

異世界人三人に向け、夏希はタナシス王国によるラドーム島売却提案を説明した。

「突飛な案だな、こりゃ」

生馬が、驚く。

「いくつか問題があるね。まずは価格だ。売却価格が安ければ対内的に非難を浴びるだろうし、高ければこちらが応じるのは無理だ。次に財源。安かったとしても、事務局の予算でまかなえる額じゃないだろう。ラドーム住民の意向、公王家の扱い、今後の安全保障……下手をすると、とんでもない高い買い物になりかねない」

「むしろ本命は、相互防衛条約の方でしょう」

凜が、指摘する。

「そうだな。憲章条約の軍事力をあてにして、東部地域の独立運動を牽制する。そのあいだに、西部同盟を潰そうという魂胆だろう」

生馬が、うなずいた。

「ラドームの人たちは、このことをどう思っているのかしら」

夏希は腕を組んだ。自分たちが住む島が、いわば手の届かないところで勝手に取り引きされるとするのは、さぞかし気分が悪いこと

に違いない。

「カミュエンナ・パパの意向次第じゃないかな。彼が売却に同意すれば、住民も納得するだろう。完全独立と王国復活、ノノア川憲章条約への加盟を条件にすれば、カミュエンナ・パパも反対はしないだろうし」

「最大の問題は、オストノフ国王の面子よ」

夏希はそう指摘した。拓海からの報告では、国王の威信は著しく低下しているらしい。ラドーム売却と相互防衛条約締結が、憲章条約に対する弱腰の外交姿勢だと批判されれば、さらに威信の低下を招くだろう。

「シエラエズは、ラドーム島購入と相互防衛条約の締結をこちらから持ちかける形にして欲しい、と言ってるんだな？」

生馬が、確認する。夏希はうなずいた。

「これもまた茶番よね」

凜が、呆れたように言う。

「まあ、政治にパフォーマンスは付きものだし」

駿が、笑った。

「で、みんなこの提案を前向きに検討することに賛成かしら？」

「とりあえず俺は賛成するよ。他に妙案もなさそうだし」

夏希の問いかけに、生馬が消極的に賛意を示す。

「わたしも原則賛成ね。悪い話じゃないと思う」

凜も、賛成票を投じる。

「駿は？」

「ラドーム島購入はともかく、相互防衛条約はちょっと引つ掛かるね。場合によっては、タナシス内戦に否応なしに巻き込まれる。かなり逃げ道を作つとかないと」

「ふむ。具体的には？」

生馬が、訊く。

「投入兵力の上限。経費の負担配分。期間の限定。指揮統制権の所在。そのあたりで縛りを作っておいて、タナシス側が簡単には派兵

を要請できないようにするんだ」

「悪く無いわね、それ」

タナシス側の狙いは、あくまで東部地域における独立の動きを牽制するものであるから、具体的かつ細かい条項に関しては、こちらの言い分を呑んでくれるはずだ。

「じゃ、決まりだね。次の問題は、どうやってこの二件を憲章条約がタナシスに持ちかけた、という形にするかだが……」

「根回しは、駿の得意技でしょ？　なんとかならないの？」

夏希はそう訊いた。

「ラドームを金で買う、という発想はこちらからは出ないからねえ。まずはタナシスがほのめかしてくれないと。とりあえず、シエラエズ王女に総会で演説してもらおうか。憲章条約が望めばラドーム島を売却する、ということと、相互防衛条約を締結する用意がある、ということを表明してもらうんだ。そうすれば、うまく根回ししてこちらから正式提案、という形にできると思う。時間は掛かるけどね」

「それならなんとかなりそうね。じゃあ、わたしはシエラエズに話をつけてくるわ」

「了解だ。僕は明日の総会で、シエラエズに発言の場を設けるように手続きしてくるよ」

100 領土売却（後書き）

第百話をお届けします。ついに三桁の話数に到達いたしました。ここまで至ることができたのも読者の皆様がいてくださったおかげであります。まことにありがとうございます。これ以降もよろしくお願いいたします。

ノノア川憲章条約総会でシエラエズ王女によりほのめかされた『ラドーム島売却案』と、『憲章条約・タナシス王国相互防衛条約案』は、南の陸塊諸国に少なからぬ混乱を引き起こした。

ラドーム島の『購入』に関しては、海岸諸国が真つ先に賛意を表明した。先のタナシス王国遠征軍の侵攻で多大な被害を被つたルルトを始めとする各国にしてみれば、いわばタナシス本国に対する盾としてラドーム島が機能するならば、安全保障上のメリットは計り知れない。

その一方、もっとも無関心であつたのが高原諸族であつた。南の陸塊最奥部に位置する彼らからしてみれば、タナシス王国遠征軍との戦いも参戦はしたものの所詮『他所での戦い』であつたし、内陸の民ゆえ氏族長クラスの知識人でも、海洋戦略というものに対し理解が乏しい。

残る平原諸国は、二つに割れた。シエラエズ王女襲撃事件でタナシス王国に対し引け目を感じていたススロン王国が積極支持を打ち出すと、盟友エボダとシーキンカイがこれに賛同。他の諸国は様子見ながら消極的姿勢を取つた。

相互防衛条約締結に対しては、ほとんどの国家が条件付きながら締結には前向きな姿勢を見せる。やはりタナシス王国の安定は、憲章条約諸国家の利益につながる、と看做してのことである。

リュスメース王女のプランは上手く行くか……に見えた。

西側にアノルチャ州、東側にペクトール公国と境を接するバラ自治州。

港町サマトスの裏通りに建つ古びた宿屋の一室に、中年の男女の姿があつた。

陰気臭い雰囲気のもと、笑い皺が目立つ女性。西部同盟幹部イムサーンと、東部同盟幹部マリンススのふたりである。

「まずは朗報を。あの御方が、ついに東部同盟と手を組むことに同意なされました」

微笑みながら、マリンススが告げた。

「それは素晴らしい」

イムサーンが、喜ぶ。もともと、声の調子に喜色が混じっただけで、表情は相変わらず陰気なままである。

あの御方とは、スルメ公国カートのことである。もともとスルメ王国は北の陸塊南東部のほぼ全域を占める大国であった。しかし内乱から分裂、有力貴族領は王国を名乗ってこぞって独立し、しばらくのあいだ混乱状態が続く。最終的にスルメ王国領は四つの国家……新生スルメ王国、メリクラ王国、バラ王国、ペクトール王国に分かれ、それぞれ独自国家としての道を歩み始めるが、のちに四方国とも大国化したタナシス王国の侵攻を受け、公国と自治州としてその版図に組み入れられてしまう。

そのような経緯から、メリクラ、バラ両自治州の有力貴族の中には未だにスルメ公王の血筋……もちろん元を辿ればスルメ王国歴代国王につながっている……に対し畏敬の念を抱いている者が多いし、ペクトール公王家に至ってはスルメ公王家とは親戚筋ですらある。大衆も同様に、スルメ公王家を敬愛している者がほとんどであり、特に好々爺然とした現公王カートの人気は高い。

そのカートウル公王が、いよいよ本格的に東部同盟……ペクトール公国とメリクラ自治州の反タナシス組織と手を組む運びとなったのである。スルメ公国が東部同盟に加われば、残るバラ自治州が参加するのも時間の問題であろう。

「近日中に、スルメ公国内で秘密会談が行われる予定です。そこで、東部同盟は発展的解消を遂げ、新たにペクトール、メリクラ、スルメ三地域の反タナシス派が結集した同盟が結ばれる予定です。盟主はもちろん、カートウル公王に就任していただきます。その後、

時期を見て武装蜂起。独立宣言。バラ自治州の取り込み、という運びとなります。西部同盟はこれに呼応して、武装闘争を活発化させていたきたい」

「心得ました」

マリンススの説明を受け、イムサーンがうなずく。

「問題は、憲章条約の動きです」

やや声を低めて、マリンススが続けた。

「すでにお聞き及びと思いますが、タナシスはラドーム島を憲章条約に売り渡し、代償として相互防衛条約を結びたがっているとか。

この条約は、明白に我々に対向する方策のひとつでしょう。この締結は絶対に阻止しなければなりません」

「同感だ」

「そこで、今王都リスオンに潜入させてある工作員に、ある工作の準備をさせています。これを行えば、タナシス王国と憲章条約の関係はいつそう悪化するでしょう」

「憲章条約使節に対する暴動の扇動ですか」

「どうやら、そちらも当方の工作準備を察知しておられるようですね」

マリンススが、笑い皺の多い顔を歪め、苦笑した。

「支えきれんな、こりゃ」

拓海はぼやいた。

凄まじい数の市民であった。ざっと見ただけで、千人は軽く超えるだろう。宿舎裏手や近くの路地などにも人が溢れているようだから、それを加えれば二千から三千、というところか。

対するリスオン警備団の兵士たちの数は、以前より増員されていたものの、二百人程度に過ぎない。むろん、暴徒の殺害を厭わずに槍や剣を振るえば撃退は可能だが、そんな事態になれば大量虐殺となってしまう。いまのところ、市民たちの怒りの矛先は憲章条約と

その使節団に向けられているが、兵士たちが実力行使に出ればリスオン警備団が矢面に立つことになるだろう。そしてその怒りのエネルギーは、速やかにタナシス王家にも向けられるはずだ。下手をすれば、全市をあげての反王家暴動に発展しかねない。

現状ではオストノフ国王は憲章条約使節の安全を保証してくれているが、いざ自分に火の粉が降りかかりそうになれば、拓海らが見捨てられる可能性も高い。この場合は、自力で切り抜けるしかあるまい。

「よし、最後の手段だ。全員、屋根裏に登らせろ」

「は？ 屋根裏ですか？ 隠れるには中途半端な場所ですし、逃げ道を塞がれたらひとたまりもありませんよ」

護衛隊長が、怪訝な顔をする。

「隠れるわけじゃないよ。すぐに屋根に飛び出せる準備をしておくんだ。こうなったら、彼女に頼るしかない」

拓海はそつと頭を突き出すと、周囲をぐるりと見渡した。

すでに宿舎の板葺き屋根には、護衛の者の手によって穴が開けられていた。マンホールよりも一回り大きく、痩せた人ならば三人いっぺんに屋根に抜け出せるほどの穴である。

デモ隊の一部はすでに暴徒化していた。石畳を剥がして作られた石礫が、宿舎の壁や屋根に当たって鈍い音を立てている。棒や刃物などの物騒な物を手に、敷地内に入り込んだ市民も相当いるようだ。リスオン警備団の兵士は暴徒との本格的衝突を回避しようと、消極的対応に務めているらしく、騒動の勢いを止めるには至っていない。「まずいな」

拓海は舌打ちした。群衆の中に、松明を掲げた者が複数いることを見て取ったのだ。宿舎に火を放たれたら、対応のしようがない。

「早いとこ来てくれないと、本気でやばいぞ」

拓海はタナシス王宮の方角を見やった。助けは、その方向から来るはずである。

さらに多くの市民が、宿舎敷地内になだれ込んでくる。どこから調達したのか、本格的な長槍を携えた者まで数名確認できた。石礫も激しくなり、拓海の周辺の屋根にも幾つかが当たり始める。火が放たれたらしく、木材が燃焼するときを生ずる特徴的な臭いも漂ってくる。

と。  
拓海の目が、空中を猛スピードで飛んでくる物体を見つけた。それが、見る間に大きくなる。

「遅れて申し訳ないのですう」

急制動を掛けつつ、コーカラットが謝る。

どん。

ブレーキが間に合わなかったのか、それともこれも計算のうちなのか、コーカラットのボディが勢い余って屋根にめり込んだ。もちろん怪我などなく、生じた窪みからすぐに身を引き剥がし、拓海の前に浮かぶ。

「二十二人いる。早速だが、安全な場所まで連れていってくれ」

「わたくし結構な力持ちですが、二十二人ものお方を一度に運ぶのは無理ですう」

コーカラットが、拒絶するかのように顔の前で一本の触手を左右に振る。

「何人なら運べる？」

「六人くらいでしょうか」

「よし、四組に分けよう」

拓海は夏希の部下を主に、六人を指名した。戦力にならない文官から非難させるのが、セオリーであろう。

「ですがその前に、多少時間稼ぎを行った方がいいと思いますですう」。拓海様のお許しを頂きたいのですう」

コーカラットが、許可を求めてくる。

すでに、多くの暴徒がコーカラットの飛来に気づいていた。無謀にも、コーカラット目掛けて石礫を投げつけてくる暴徒もいる。も

つとも、当たりそうな石礫はすべてコーカラットの触手によって弾き飛ばされていたが。

「よし、やってくれ」

拓海は即座に許可を与えた。

「では、始めますですう」

ひゅん。

いきなり、コーカラットの触手数本が四方八方に素早く伸ばされた。その先端が、飛んできた石礫を次々とキャッチする。

次の瞬間、触手がしなった。捕らえられていた石礫が、猛烈なスピードで投げ返される。

すべての石礫が、投げた者に正確に投げ返され、ことごとく命中した。あちこちで、血しぶきやら悲鳴やらがあがる。

コーカラットや拓海らの周辺で、投石が一斉に止んだ。驚いた何人かの暴徒が、急に逃げ腰になる。

「では次に移りますですう」

触手を引っ込めたコーカラットが、今度は高速回転を始めた。すぐに、ボディの下部から白い煙のようなものを吹き出し始める。それはたちまちのうちに広がって、拓海らの周囲を霧のように覆い、見通しを悪くした。

「コーちゃんジューズか？」

拓海は鼻をうごめかした。微かに甘い匂いがする。

コーカラットが作り出した霧はかなり濃いものであった。視程はせいぜい二メートルといったところだろう。これでは、暴徒もうつに動けまい。

「では、最初の組を運びますですう」

その霧の中からゆつと現れたコーカラットが、触手を伸ばしてきた。拓海は屋根に上がると、控えていた六人が屋根に登るのを手伝った。コーカラットが六人全員に触手を巻きつけ、すうつと霧の中に消える。

拓海はいったん穴の中に戻った。霧のおかげで暴徒はかなり大人

しくなったようだが、投石ははまだ続いている。用心に越したことはない。

続いて、拓海は二組目の六人を指名した。

「リダ。悪いが君は俺と一緒に四組目だ」

「望むところですよ」

腰に吊った愛用の鉈に手を掛けたリダが、不敵に笑う。

……遅くなったな。

不意に、拓海はそう思った。瀕死の重傷を負って倒れていたのを偶然見つけた時も、それなりに遅しい少女ではあったが、鈍感な拓海が気づかないうちに心身ともに急速に成長を遂げたようだ。頬の傷も、以前は美しい顔を汚す無粋な醜い線であったが、こうして遅しく成長した状態で改めて見れば、ある種の戦化粧のようにすら思える。

スルメ公国の地方都市、レムコ。

アノルチャ川の一支流のほとりにある、古い都市である。人口は三千程度。農産物の集散地として、重要な都市であった。

その郊外にある、とある古びた屋敷の一室で、初老の男性が一枚の紙に自分の名を綴っていた。カートウール、と。

体つきはがっちりとしており、体型はやや太め。赤ら顔で、髪も豊かな髭も真っ白である。クリスマスシーズンの異世界ならば、衣装を着替えるだけでサンタ役が務まりそうな風貌だ。

同じ紙に、次々と署名が書き加えられてゆく。東部同盟の指導者たち。バラ自治州の反タナシス主義者。辺境地域から来た、抵抗組織のリーダー。

すべての代表が署名を終えたところで、カートウールが口を開いた。

「諸君。ここにレムコ同盟の成立を宣言する」

一斉に、拍手が巻き起こった。それが静まるのを待ってから、カ

ートゥールが続ける。

「レムコ同盟の目的は、現在北の陸塊においてタナシス王国の圧政と抑圧、搾取、迫害などに苦しめられているすべての人々を、その首枷より解放することにある。その高邁なる目的を達成するために、当レムコ同盟はいかなる国家、団体、組織、そして個人とも力を合わせる用意がある。レムコ同盟は当面の敵をタナシス王国に定めることを表明するが、真の敵は人種差別的史観と虚偽に彩られた大タナシス主義と、それを抛り所にして北の陸塊で侵略行為を継続してきたタナシス王家である。レムコ同盟は、人種による差別を否定し、タナシス人が優越民族であると主張する大タナシス主義も当然のごとく否定する。したがって、大タナシス主義を受け入れぬタナシス人は、我々の敵ではない。そして、大タナシス主義を否定し、レムコ同盟の主義主張に賛同するタナシス人は、我々の友人である。当レムコ同盟は、喜んで彼らを同志として迎え入れるつもりである。このことは、強調しておきたい。以上だ」

拓海が『レムコ同盟』成立の噂を聞いたのは、アノルチャ市でのことであった。

コーカラットによつて炎上する外交団宿舎から救出された憲章条約外交団は、いったん王宮に避難保護されたが、これ以上リスオンに留まるのは危険であると判断、多数の兵士に護衛されてリスオン市を脱出した。これには、王宮内襲撃事件で重傷を負って療養中だったが、ようやく歩けるまでに回復したハルントリー王子と、付き添っていた人々も同行していた。川船でリスオン川を下り、アノルチャ市まで至った一行は、アノルチャ州政府が用意してくれた船に乗り込み、出港準備を整えていたところであった

「これからどうなりますかな、拓海殿」

船室で椅子に掛けたハルントリー王子が、訊く。

「タナシスは危機な立場に置かれましたね。戦略的ニ正面作戦を採

らざるを得なくなりましたから」

「腹背に敵がおる状態、ということですか」

「左様です、殿下。戦力の集中は、戦略、戦術双方に通用する軍事的優位を得るための普遍的原則です。これが難しくなる状況は、悪夢に等しい」

「しかし、レムコ同盟とやらの戦力は、タナシス正規軍よりも劣るでしょう。本格的動員を開始すれば、タナシスの兵力はもっと増大するはず。優秀な軍人も、タナシスには多いと聞く。二正面作戦とは、敵にとっても戦力の集中が不可能な状況でしょう。案外簡単に、タナシスが勝利を収めるかもしれませんぞ」

「軍事的勝利は可能かもしれませんが、政治的に勝利できるかどうか。まだ噂の段階ですが、レムコ同盟側はタナシス王国の打倒を目指しているわけではないようです。敵はあくまでタナシス王家。そして、大タナシス主義に対してのいわば聖戦を唱えている」

「聖戦？ 聞きなれない言葉ですか」

ハルントリーが、首を傾げる。

「失礼しました、殿下。絶対的正義に基づく崇高なる使命としての戦い、とでも解釈して下さい」

「なるほど。大タナシス主義に真っ向から立ち向かい、非タナシス人の力を結集し、タナシス王国からの解放を目指すいわば正義の戦い、と言うことですか」

理解したらしいハルントリーが、うなずく。

「まず間違いなく、レムコ同盟と西部同盟は連名で憲章条約に対し、援助や協力を求めてくるでしょう。彼らの主張は、民族自決主義を取る憲章条約の意向とも合致しますから。そしてもちろん、タナシス王国も友邦としてわが方に援助を求めてくるはずですよ」

「憲章条約 - タナシス王国相互防衛条約案が成立する前に、レムコ同盟が動きましたからな。で、拓海殿は憲章条約がどのような外交姿勢を見せるのが得策とお考えですか？」

「言うまでもなく選択肢は三つです。従来通りタナシスに味方する。

タナシスを裏切って、レムコ同盟と西部同盟を支援する。中立を保つ。第三の選択肢は論外です。中立では、タナシスと反タナシス派双方に深く恨まれるだけです。今後どちらが政治的に勝利するにしても、北の陸塊に憲章条約を憎む大国がひとつ、生まれることになる。安全保障上、これは許容できません。で、どちらに付けば得策か、ですが……」

「タナシス王国を裏切る選択肢もある、ということかね？」

「レムコ同盟の成立で、タナシス王国が敗北する可能性が高まりましたからね。もっとも重視すべきは、憲章条約諸国の結束と、諸国民の安全です。負ける方に味方するのは愚かなことです。過去のしがらみは未来の為に無視せざるを得ません。いまのところ、どちらが勝利するのかわかりません。まあ、方針を変えずにタナシス王国の味方をした方が、見栄えがいいということはありますが。重要なのは、最終的に勝利する方を早期に見定め、そちらに早めに味方してやることです。そしてできれば、戦争の行く末を左右できる立場に、憲章条約を置きたい。十年後、二十年後を見据え、北の陸塊の政治的動向を上手にコントロールできるような地位を、憲章条約が占めることができれば、しばらくは平和が続くでしょう。平和が続けば、市民の生活水準を向上させたり、経済をより活性化させたりするような方策が取りやすくなります」

「もっともなことだ」

「ですが、これら方策を決定するのはあくまで総会です。わたしは、助言できる立場にすぎません」

「拓海殿のご意見、しかと承りましたぞ。帰国したら、さっそくルルトの代表に書簡を送りましょう。オープアを始めとする海岸諸国にも、働きかけるつもりです」

「恐縮です、殿下」

拓海は深々と頭を下げた。

101 レムロ同盟(後書き)

第百十一話をお届けします。

レムコ同盟成立直後から、タナシス王国西部地域において西部同盟軍……西部同盟の自称では『解放軍』、タナシス王国側の呼称では『叛徒』……の軍事行動が活発化する。

レムコ同盟も自称『義勇軍』を組織し、東部地域のタナシス王国軍駐屯地などへの襲撃を開始した。スルメ公国、メリクラ自治州、ペクトール公国などの公国軍、自治州軍などは、その人員の大半がそっくりそのまま義勇軍に加わったので、一時的にせよ東部地域の兵力バランスはレムコ同盟側に大きく傾くことになった。

「鍵は宣伝にあります」

オストノフ国王を前に、リュスメースはそう主張した。

「カートウル元公王はすでに、真の敵は大タナシス主義とタナシス王家にある、と明言しました。そして、大タナシス主義に共鳴しないタナシス人は、友人であるとも。つまりこれは、タナシス王家およびタナシス政府と、タナシス人および独立を求めぬ他の民族との離間工作と思われます。我が方はこれに対し、激烈なる宣伝戦を仕掛けねばなりません」

「具体的方策を聞こうか」

執務机から身を乗り出すようにして、オストノフが訊く。

「承知いたしました、陛下」

リュスメースは説明を始める前に少しばかり間を置き、息を整えた。負傷はすでに癒えているが、寝たきりの生活が長期間続いたので体力は未だ回復していない。

「まず、レムコ同盟の主張が虚偽であり、その真の目的は叛徒民族によるタナシス人を含む多民族支配の構造を削り上げることだ、という見解を広めます。タナシス王国が崩壊すれば、全タナシス人は

奴隸も同然の立場に置かれるだろう、との噂も流します」

「レムコ同盟は否定するだろうな。奴らが求めているのは独立と自治だ。そこまでやるとは思えぬ」

「宣伝はすなわち誇張です」

涼しい顔で、リクスメースは言い切った。

「まあ、我が国は追い詰められている。選択の余地はないな」

愛娘の身も蓋もない言い方に、オストノフが苦笑いを浮かべる。

「攻撃的な宣伝としては、レムコ同盟主カートウル元公王への個人攻撃を開始します。大衆に人気のある人物ではありませんが、決して高潔な人物ではありません。その人格を貶めるような情報はすでに幾つか掴んでいます。しかしながら、若い愛人の存在を暴露したとしても、彼の人気は落ちるようなことはないでしょう。なにしろ、あの性格ですから」

「だろうな」

つかみ所のない、飄々たる性格が、カートウルのトレードマークでもあるのだ。愛人発覚くらいなら本人は笑い飛ばすだろうし、大衆もむしろ『あの年で若い愛人とはさすがだ』とむしろ賞賛に近い反応を示すに違いない。

「狙い目は、スルメ王国です。武装蜂起の目的は、解放などではなくかつてのスルメ王国を復活させることだ、と反タナシス主義の大衆に信じこませるのです。カートウルの目指すものは、スルメ、バラ、メリクラ、ペクトールにまたがる大国を再興し、さらに周辺諸地域を侵略、最終的に北の陸塊全土を征服するものだ、との噂を広めます。カートウルは好人物であると大衆には評価されていますが、野心と無縁な人物ではありません。これによって、レムコ同盟と東部同盟の離反、レムコ同盟内の足並みの乱れ、大衆の支持低下などを狙います」

「うむ。その手はわしも考えていた。……外交面はどうだ？ ノノア川憲章条約に助力を求めるときだろうか？」

「もちろん求めるべきです。現状での彼らとの関係を考慮すれば、

まず確実に拒絶されるでしょうが。しかしながら、不介入の言質をもらっただけでも成功と言えるでしょう。シエラエズ王女からの書簡では、むしろタナシスを見限ってレムコ同盟を援助すべし、と唱えている者も一部には居るようですから」

「うむ。憲章条約が叛徒どもを支援することになったら、まずわが方に勝ち目はなくなるからな。現状では、不介入を確約してもらえただけでもありがたいと思わねば」

「陛下のおっしゃる通りです。わが方に味方せず、不介入を貫いたとしても、憲章条約には感謝せねばなりません」

「で、どっちが勝つんだ？」

マリ・八に帰着したばかりの拓海に、生馬がいきなりそう尋ねる。

「おいおい。這々の体でリスオンから脱出してきたというのに、開口一番これか？」

拓海が、芝居がかって驚いてみせる。

「ここにおいては北の陸塊の情報は集まりにくいからな。現地の新鮮な情報を聞かせて欲しいね」

拓海に椅子を進めながら、駿が言う。

「ま、道中情勢分析はしてきたがね。あー、凜ちゃん。美味いお茶頼むよ。夏希は北の陸塊の地図頼む。いつぞや駿が描いてくれた大きいやつだ」

「はいはい」

夏希は嫌そうに立ち上がった。巻いてあった地図を手に取り、テーブルの上に広げる。生馬と駿が、そのあたりにあったインク瓶や空のカップなどを、四隅に載せてくれる。

「全般的な情勢は理解しているな？ ではまず西部地域からいこう。西部同盟の兵力は、元カレイトン自治州軍三千、元クーグルト公国軍三千、市民軍二万前後で約二万六千。対するタナシス側は、正規軍二十五個団一万二千五百、奴隷軍が五個団前後、それに辺境軍か

らの増援若干、合計一万六千程度だ。続いて東部地域だが、レムコ同盟兵力は元メリクラ自治州軍三千、元ペクトール公国軍三千、元スルメ公国軍三千、元バラ自治州軍約一千、市民軍約三万、合計四万ほど。タナシス軍は正規軍が三十個団一万五千、奴隷軍が十個団程度で、合計二万五千。こんなところだな」

指でいちいち地域を指し示しながら、拓海が説明する。

「タナシスは、ずいぶん兵力を出し渋っているのね」

夏希はそう言った。タナシス正規軍の定員は、八十個団四万名。

南の陸塊への遠征で三千名以上の損害を受けたが、その後人員補充を行なつて質はともかく数だけは回復したと聞いている。

「予備としてリスオン州とアノルチャ州にかなりの数を控置しているようだ。奴隷軍も完全動員していないし、市民軍も動員準備を終えただけだ」

「市民軍はどの程度まで動員できるの？」

「短期なら二十万はいけるだろう。長期なら、その半分だな」

夏希の問いに、拓海が即答する。

「兵力では、やはりタナシスが有利なのね」

緑茶のカップを各人の前に置きながら、凜が口を挟む。

「動員すれば、な。タナシスの経済状況を考えると、長期に渡る市民軍の動員は財政破綻を招きかねない。いずれにせよ、タナシス王国は厳しい立場に置かれているよ」

拓海が、渋い表情で続けた。

「双方の戦略はどうなの？」

夏希は訊ねた。

「西部同盟はデイデイリベート州方面で盛んに活動中だ。エルフルール辺境州の反タナシス勢力と手を組みたがっているという噂もある。見ての通り、デイデイリベート州を通過すれば西方から王都リスオンを伺えるからな。タナシス王国の政治的状况……オストノフ国王およびタナシス王家の権力、国内の有力貴族の動向、経済的重心、一般国民の心情などを総合的に考慮すれば、反タナシス側の究

極の地理的攻撃目標は、王都リスオンにならざるを得ない」

「となると、タナシスは地理的には有利だな。反タナシス側の最大兵力たるレムコ同盟軍がリスオンに至るには、南西方向に向かつてデイデイリア、アノルチャ両州を制圧してからリスオン川沿いに北上するか、デイデイリア、デイデイサク両州を制圧してから山越えをして、デイデイウニ盆地を攻略し、その上で改めて南下して北からリスオンを襲うしかない。どちらも時間、兵力ともに相当消費せざるを得ないだろう」

生馬が、地図を指し示しながら意見を述べる。拓海が、うなずいた。

「完全に同意するよ」

「どちらも決め手に欠けるわね」

地図を睨みながら、夏希は腕を組んだ。兵力で劣る反タナシス側としては、完全なる勝利は望んでもいないし、目指してもいないのであろう。タナシス王国の国力を削ぎ、時間を稼ぎつつ、事実上の独立状態を維持できれば、いずれタナシス側も折れると踏んで、武装蜂起に踏み切ったに違いない。

「ねえ、拓海だったらどんな作戦を採るの？」

呑気そうにお茶をすすりながら、凜が問う。

「反タナシス側は兵力の損耗を避ける意味でも、決戦回避に終始するだろうな。タナシス軍は短期でいいから攻勢に出て、野戦で大兵力を拘束し、殲滅させるという選択肢しかない。もし俺がタナシス軍を任されたら、まずはアノルチャ州に兵力を集中し、その後兵站線を構築しやすいアノルチャ川沿いに遡らせてスルメ公国を狙う。レムコ同盟にすれば、盟主カートウルのお膝元であり、象徴的な地でもあるレムコ市があるスルメ公国を落とされるのは我慢ならんだろう。タナシスが決戦を強要できるだけの戦略目標は、そこしかあるまい」

「ミッドウェイ海戦みたいなものだな。敵主力をおびき寄せ、殲滅させるために、敵が無視できないほど重要な戦略目標を占領する構

えを見せるわけだ」

生馬が、何度もうなずきながら言う。

「まああれは、アメリカの罨みたいなものだったがな。そこへまんまと日本海軍は罨り込んでいつちまったわけだ。もつとも、獲物自体は場合によつては罨を引きちぎり、獵師の喉笛を噛み砕けるほどの猛獣だったわけだが」

なぜか嬉しそうな表情で、拓海が言った。

「じゃ、反タナシス側だったら、どうするの？」

続けて、凜が訊く。

「うーん。兵力不足である以上、積極的な手は打てそうにないねえ。時間稼ぎに徹しつつ、レムコ同盟軍を動かして農業地域であるディセイサク州あたりを占領するかな。実利は少ないが、オストノフ国王の権威を削ぐことはできるだろう。消極的な抵抗は持続によつて敵の損害……この損害には、兵力の損耗以外の経済的損失や国民を含む士気の低下、指導層の厭戦気分が増大などが含まれるわけだが……を増やし、政治的戦争目的を戦争行為と釣り合わないものにしてしまう、というのは、弱者の戦争のセオリーだからな」

「じゃあ、このまま睨み合いが続きそうなんだね」

駿が、確かめた。

「たぶんね。やな言い方だが、憲章条約が手を貸したほうが、勝利するだろうな」

「じゃ、タナシス王国の勝ちじゃない」

夏希はそう指摘した。いまのところ、憲章条約がタナシス王国を見限つて、レムコ同盟に手を貸す可能性は少ないはずだ。

「そうなるな、と言いたいが……総会の模様はどうなんだ？」

拓海が、駿に確かめる。

「とりあえず様子見、というところだね。北の連中には勝手に殺し合いをさせておけ、などと裏で言い放っている代表もいるくらいだし」

「情勢を見極めてから動くのは構わないが、様子見が長引いた結果

完全不介入となつてしまつと厄介だぞ」

拓海が、渋い表情で言う。

マリ・八に先に着いたのは、盟主カートウールの書簡を携えたレムコ同盟の使者であつた。

書簡の中でカートウールは、スルメ公国、ペクトール公国、メリクラ自治州、バラ自治州が正式に独立宣言を行い、独立国家として機能していることを述べた上で、ノノア川憲章条約加盟各国、各氏族に対し、四ヶ国の国家承認を行うように求めていた。さらに、国家承認と同時に、四ヶ国がノノア川憲章条約に加盟する用意があることも書き記されていた。

これを受けて、憲章条約総会は紛糾した。国家承認を行えば、レムコ同盟を『叛徒』と定義するタナシス王国の姿勢に真つ向から反することになる。しかしながら、レムコ同盟の掲げる諸政策は、民族自決を標榜する憲章条約の精神に合致する。

その翌日にマリ・八に到着したタナシス王国の使者は、同様にオストノフ国王の書簡を携えていた。主たる内容は、タナシス王国と憲章条約との友誼を最確認するとともに、内戦に関して援助を希求するが、もし不可能であるならば不介入の宣言を行なつて欲しい、というものであつた。

総会では、激論が続いた。多くの代表が、当面の不介入策を支持する。

結局、総会が採択したのはタナシス王国、レムコ同盟双方に阿たような妥協案であつた。平和を希求する憲章条約は、友好国タナシス王国の内戦を深く憂慮し、その平和裡な終結を強く望むとともに、そのための助力は惜しまないつもりである。この戦いはあくまで内戦であり、憲章条約各国は、レムコ同盟加盟各国、西部同盟加盟各国の国家承認は行わないが、両同盟を外交交渉相手として認定する。これは内戦状態終結を目的としたもので、決してタナシス王国への

内政干渉ではない。タナシス王国、レムコ同盟双方が望むのであれば、憲章条約は喜んで和平仲介に尽力するつもりである……。

「本国でわたしの軍事的才能を欲しているそうだ。残念だが、帰国せねばならない」

心底無念そうな表情で、シエラエズ王女が告げた。

「それは残念です。殿下の才能が発揮されるような事態にならないことを、願っていたのですが」

夏希は淡々とした口調で言った。南の陸塊への遠征では敗軍の将となったとは言え、シエラエズの野戦指揮官としての才能は、拓海や生馬でさえ一目置くほどのものだったのだ。その彼女を呼び戻したということは、タナシス内戦がこれから激化することの証左でもある。あろう。

「わたしは勘のいい方でな。なんとなく、貴殿と次に出会うのは戦場のような気がする」

ややさみしげな笑みを浮かべて、シエラエズが言う。

「そうですね。総会が方針を変えて、積極介入を決めれば、派遣軍が編成されるでしょう。自賛ではありませんが、実績と殿下との関係を鑑みれば、わたしがその指揮の一端を担うことは十分に考えられます……」

「いや、そうではない。わたしの勘は、夏希殿を敵として、戦場で相まみえることになる、と告げているのだ」

「まさか、そんな」

「そなたとは戦いたくないな。聡明で、度胸もある。一軍を率いるだけの度量もある。夏希殿はまさに名將の器じゃ。正面から戦ったら、勝つ自信はない」

「殿下……」

夏希は言葉を失った。常に勝気で自信とユーモアに溢れ、きらきらと輝いていたようなシエラエズが、急に萎んでしまったように見

えたからだ。若さすら、失われているように思える。まるで、生活に追われて疲れきった三十路女のような横顔だ。

「夏希殿。ひとつだけ約束して欲しい。もしわたしの最後に立ち会うことがあったなら……美しいままで死なせてくれ。頼む」

「なにをおっしゃるのですか、殿下。わたしはそのような……」  
「頼む」

向き直ったシエラエズが、夏希の顔を見据える。不意に、夏希はシエラエズが以前よりも痩せていたことに気付いた。南の陸塊の食事が身体に合わなかったのだろうか。あるいは、心労ゆえか。大きな血走った黒い目が、強い意志を滲ませながら、夏希の目を覗き込んでくる。

「……わかりました。殿下の最後に立ち会うことがあれば、殿下が美しいままでいられるように善処します」

シエラエズの迫力に耐え切れず、夏希は不承不承そう約束した。

「ありがとう」

シエラエズが、目を閉じた。まるで疲れきったかのように身を引き、椅子の背にもたれかかる。

プレッシャーか。

夏希は理解した。マリ・ハという外交の最前線で、大国タナシスの事実上の特命全権大使という大役を長期にわたってこなしてきたのだ。母国は深刻な内戦状態。対応を一步誤れば、国が滅びかねないという立場。シエラエズのような有能かつ豪胆な女性でも、その心理的圧迫は凄まじいものがあったのだろう。

ぐう。

聞こえてきた異音に、夏希は思わず微笑んだ。どうやらシエラエズは、そのまま寝入ってしまったようだ。緊張から解放されて、おもわず眠気を催してしまったのだろうか。

夏希は音を立てないように立ち上がると、周囲を見回した。隅の椅子の上に、シヨールのような薄布が掛けてある。それを取り上げた夏希は、眠りこけているシエラエズの上にそっと掛けてやった。

シエラエズの寝顔は安らかだった。さきほどの疲れたような感じは微塵もなく、まるで母親の腕の中の幼女のような安らかさだ。夏希は思わず手を伸ばし、シエラエズの艶やかな黒髪にそっと触れた。

……おやすみなさい、殿下。長い間、ご苦労様でした。

足音を忍ばせながら、夏希は静かに部屋をあとにした。

102 玉虫色外交（後書き）

第一百二話をお届けします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0563j/>

---

白き巫女と蒼き巫女

2011年11月26日19時59分発行